憑依とか転生とか召喚されるお話

Vier

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
憑依とか転生とか召喚されるお話

【Ｎコード】
Ｎ５１１７Ｋ

【作者名】
Ｖｉｅｒ

【あらすじ】
ある青年は一般人だったのにも拘らず根源に至った。
その力は流れを見る力と読む力の二つのみ。
青年は至った瞬間、世界の修正力に殺される。
その後、その力に導かれ、青年は別世界へと誘われる。

仲間と駆け抜け、自分の目的を果たさんとする恋姫の物語。
幼き主人に仕え、世界に取り込まれまいとする運命の物語。
神に抗う者達と出会い、自身と向き合わんとする楽園の物語。

紅き翼の一翼となり、世界を救わんとする英雄の物語。
救いを求める声によって、悲劇を変えんとする発端の物語。
そして、未だ語られぬ物語。

これは、憑依とか転生とか召喚されるだけの、唯それだけのお話。

※更新はかなり不定期です。原作が好きな人は見ない方がいいかもしれません。

読む前の注意書き（前書き）

まあ、今更だけれど書いておこうかな……と。

読む前の注意書き

この小説は、真・恋姫†無双、Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ、Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！、魔法先生ネギま！の二次創作小説です。

その他にも他作品のネタ、設定、登場人物がクロスしていたりします。

時々Ｖｉｅｒの書いた下手な挿絵が有ったり、中二病があったりもします。

因みに挿絵とはこれの事です←

＞ｉ２９７１０―２４７７＜

タイトルを付けるならば、Ｆａｔｅ風なＶｉｅｒ（笑）

自虐的なモノですのでスルーして下さいな。

他にもオリジナルな設定、人物、独自解釈なども含まれていますので、容認できかねる方はブラウザの戻るをクリックする事をオススメします。

むしろどんと来い！という方はそのまま、次の話＞＞をクリックして本編へどうぞ。

読む前の注意書き（後書き）

まあ、絵に関しては8~9割ほど美化されてるんでスルーして下さい。

序章一・恋姫†無双　朱然義封（前書き）

初めましてＶｉｅｒです。
この作品が処女作で文節が未熟ですが皆さんの暇潰しくらいにはなれるよう努力していきたいです。
かなり不定期な更新になると思いますがよろしくお願いします。

序章一・恋姫†無双　朱然義封

俺は死んだ。
死んだら無に還って何も無くなると思っていた。
でも、こうして意識がある。
ああ、そういえば空の境界の四章の伽藍の洞で両儀式が漂っていたのはこんな場所だったな……。
そんなことをぼんやりと考えながら漂っていた。
落ちているはずなのに浮いていく。
浮いているのに落ちていく。
そして、俺はいつしか真っ白な世界に辿りついた。

「起きよ」

その声に俺は起きる。
だが、誰もいない。

「お前は一度、辿りついた」

辿りついたってどこに？

「根源、原初の記憶、世界の始まり、未来の可能性、神の領域、時空の支配者」

根源？
やっぱりここは根源なのか？
で、アンタは誰なんだ？

「我が名は無い」

名が無い？
神様とかじゃないのか？

「それは便宜上の名でしかない」

わかったよ。
これからは名も無き者って呼ばせてもらう。

「然り」

俺はこれからどうなる？

「お前は一度、魔術師の身で無いにも拘らず根源へと至った。　故にお前は元の世界では異端。
元の世界は異端を嫌い、お前という異物を排除した」

なら、異世界に転生とか移動とかするのか？

「然り」

俺はこれからどうしたらいい？

「お前の好きにすればよい」

ふぅん、好きにねぇ。
何をすればいいのかわからんけど、まあ、なるようになるか……。
ところで俺は根源に至ったって言ったが、何で根源に至ったんだ？
元の世界じゃこれと言って頭はあんまり良かった訳でもなかったし、怪しげな家系に生まれたり、魔法を習得したり、変な修行とか

はしてない筈だけど？

「否、お前は知っているはずだ……お前の異端を……」

異端？

俺にそんなもんある訳が……あ。

「気付いたようだな」

もしかして物事の流れを見たり、読む事に異常に良かったことか？

「然り」

でも、あんなので根源に至れるもんなのか？

「然り、全ては根源と繋がっている。　故におまえの流れを見る力、読む力もまた根源へと至るもの」

ふーん、そんなもんなんだ……。

「然り、次の世界でお前は明確な力を得る」

明確な力ね……。

なら、行ってみるのも悪くないな。

今度は護りたいな……。

「行くがよい、根源へ至りし者よ」

こうして俺は意識が途絶えた。

序章一・恋姫†無双　朱然義封（後書き）

最初の世界は魔法のない真・恋姫†無双の世界です。

第一章　恋姫・朱然（前書き）

前回書いた通り、最初の世界は真・恋姫†無双の世界で気とか武術とか経験とかを主人公が積む感じです。

第一章　恋姫・朱然

崖から落ちた。

朦朧とする意識の中で家の者達がそう騒いでいる。

「俺は……転生、いや憑依したのか？」

全身の痛みを堪えながら一言。

だが、またすぐ意識を失った。

それから数日後、俺はやっと意識を取り戻した。

ここはギャルゲ三国志、恋姫†無双の世界のようだ。

だって、名前が施然義封、真名が水仙。

普通の世界の三国志に真名なんて風習なかった筈だ。

この施家の話を聞くと、どうやら俺は生まれてから表情を表に出さない人形の様な性格だったらしい。

いきなり性格が変わると面倒なことになりそうだったので、人形のようにこれからを過ごそう思った。

それから数日後、父に呼び出された。

「然よ、崖から落ちてすぐこんなことをお前に言うのは酷だが、母の実妹の朱治に子が無いのは知っているな？」

「はい」

俺は無表情で返事をする。

「もう察しているかも知れんが、お前には朱家に養子に行ってもらう。
これはもう決まったことで孫策様が仲立ちしてくれるそうだ。
失礼の無いようにな」

俺には興味もないようで、投げやりにいう父。

「わかりました」

なるほど、人形の様で使えない俺を厄介払いする気か……まあいいや、その朱家に行ったら普通にしよう。

こうして俺は孫策様の仲立ちで朱家の養子となった。
それからは朱然義封として過ごす事となる。
朱家は建業でもそれなりに有名な家らしく、礼儀作法等が色々と厳しかった。
だが、この世界で必要な事はすぐに覚えていった。
特に文字は本を読む上でかなり大切なので、一番最初に覚えた。
そして、有名な家の者達が学ぶ私塾で、俺は彼女と出会った。

「貴方、ちょっといいかしら?」

「はい、私に何のご用でしょうか?」

俺が振り向くとそこには孫策様に似た人が居た。

「ッ！　貴方が朱家の者かしら?」

一瞬、驚いた顔をしたが、何もなかったように俺に確認を取る。

この人は多分、容姿と年齢的に孫策様の妹にあたる孫権様だと推測した。

「はい、そうです。　姓は朱、名は然、字は義封と申します。　失礼ですが、貴女は孫権様では？」

「えっ！？　ええ、そうよ。　姓は孫、名は権、字は仲謀よ。　よくわかったわね？」

「ええ、過去に一度、孫策様にお会いしたことがありましたので。その時の孫策様と容姿がよく似ておられたので、すぐにわかりました」

「そう……」

少し俯く孫権様。

表情がというか、雰囲気が暗くなった所を見るに、孫策様にコンプレックスの様なものを持っているのかも。

「あの、ところで私に何かご用でしょうか？」

「あ、そうだったわ。　雪蓮姉様に貴方の事を聞いたのよ」

「私の事をですか？」

「ええ、私と同い年で、とても優秀な者がいるから今の内に仲良くなっておけって」

「そうですか……孫策様がそのような事を……」

「ええ……」

「「……」」

特にこれと言って話すことも無くなったというか、会話の流れをブッチ切ったので沈黙が流れる。

「「あの！」」

「「ッ、……」」

見事にダブった。

気まずい沈黙が流れる。

が、どちらともつかずに吹きだした。

「「ぷっ……あはははは！！」」

「失礼、気が合うようですね？」

「ええ、貴方とは仲良くなれそう」

「そうだ、私の真名を受け取ってもらえませんか？」

「えっ！？　いいの？」

また、驚く孫権様。

「ええ、水仙とお呼びください」

「なら、私も蓮華と呼んで頂戴。　後、真名を預け合ったのだから敬語も要らないわ」

「わかった。　これからは俺も普通の口調で話すよ」

「俺？　女ならそんな粗野な口調はやめて、お淑やかにした方がいいわよ水仙？」

「は？　俺は男だけど？」

「えっ？！　だって、どう見たって女にしか見えないわよ？　真名だって女らしい水仙なんて言うものだからてっきり……」

「確かに容姿や真名も女っぽいかもしれないけど、れっきとした男だよ？」

確かに紫の長髪を束ね、顔も女顔で、声も高いまま、加えて女物の服を着ていればそう思われても仕方ないけど。

むぅっと不貞腐れる俺。

「そうして拗ねている所も普通の女の子より女の子らしいわよ？」

そう言って笑う蓮華。

「何なら服でも脱いで確認してみる？」

お返しとばかりに服に手をかけながら言う。

「えっ！？　そ、そんなこと」

蓮華の顔がみるみる赤くなっていく。

仕返し成功。

「冗談だよ。　ちょっと期待した？」

「もう！　そこは普通、本気にしたか？と聞く所ではないの？
その聞き方だと、わ、私が貴方の裸を見てみたいように聞こえるじゃない！」

「違うの？」

「そ、それは……ちょっと、見てみたいけれど」

頬を染めながら言う蓮華。

「残念でした。　さすがに知り合ってすぐの女の子に裸なんて見せないよ？　蓮華は真面目だねぇ。
少し肩の力を抜くことを覚えた方がいいと思うよ？」

「はあ、水仙はどこか雪蓮姉様に似ている気がするわ……」

そんな他愛のない邂逅をして、俺と蓮華は友となった。

それから俺と蓮華は助け合いながら私塾で学び、その一年後、そろそろ黄布党が現れる予兆が出始めていた。

俺は朱家を出て、世の中を見て、見聞を広めていきたいと思い始め、朱治義母様にお伺いを立ててみたのだが、この義母、子供ができなかった事でかなり過保護で、俺の容姿を見てからは頻繁に女物の服を着せ変えて遊ぶような人だ。

そんな人なので、家では女の格好がデフォルトに……この時代？というか、恋姫の世界って女物の服はズボンとかのパンツモノが少ないから、ほぼ常にスカート状態なんだよね。

でもスパッツはあるってどうなんだろう？

ちなみにズボンは穿かせてもらえない。

でも、スパッツは良いって……話がズレた。

このままこの話をするとキリが無いので話を戻すが、朱治義母さんが過保護なので「旅に出るのなんてもっての外です！」の一点張り。

俺は家出同然で旅に出る決意をしました。

それから旅の路銀を稼ぐ為、服のデザインと新たな調味料の開発などをして、顔馴染みの服屋と調味料屋に置いてもらってみるとこれが大当たり。

デザインした服とか、味噌とか、醤油などは飛ぶように売れ、朱家の収入が今までの何倍も増え、その収入の一部は俺の懐に凄い勢いで増えていった。

朱治義母さんと義父さんは大喜び。

因みに義父さんは普通の人でとても優しい人でした。

この世界に来て憑依したこの身体は身体能力がとても高く、様々な武器を扱う才を持っていた様で、そんな俺を朱家は徹底的に鍛えてくれた。

元々、身体を動かすのは好きだったし、鍛練していて何時しか気が使えるようになり、流れを見る力と相まって、かなりの腕になっていた。

そして、普通の武器では満足できなくなり、専用の武器を幾つか

自分で作ることにした。

まず、一つ目の絶対折れないクラ〇ドの様な、七つに分かれはしないが、三つに分かれる大剣で刀身より少し短い位の長さの柄と、絶対折れない刀身と同じ材質の頑丈な長い長い鎖付きの大剣、大牙。

二つ目は、何でも切り裂く切れ味を持つ、二つの刃とその刃を畳む携帯性に主点を置いた両刀の大鎌、天翼。

三つ目の槍は、突く事に特化させ、貫通力に主点を置いた管槍の様なスライドする持ち手に、刃の部分が西洋の円錐型の刃を持つ槍と組み合わせた長槍、大渦。

四つ目は、千切れない強度で一対多を目的に数百本単位で作った鋼糸の無影。

最後の弓は、連射、射程距離、高精度に特化した槍も撃てる程の大弓、大樹。

全部、馬鹿で、無茶で、無謀な形の武器だが、きちんと形になった。

武器が完成した次の日の朝。

俺は蓮華に手紙を書いて、蓮華が住んでいる建業の城の衛兵に渡し、自分の金で買ったとても大きな黒い馬（名前を麒麟）に跨り、建業の地を後にした。

第一章　恋姫・朱然（後書き）

最後の方にセリフ少なっΣ！！とか思った今日この頃。
夢中で書いたら夜が明けた……。

主人公設定（前書き）

とりあえず朱然さんのステータスを表示。

主人公設定

名前　姓は朱、名は然、字は義封、真名は水仙
容姿　Ｆａｔｅの第五次ライダーさんの男バージョンで眼が紫色、髪を首のあたりで縛っている。
身長　１７２センチ
体重　５７キロ
属性　混沌・善
筋力　Ｂ
魔力　Ｂ
耐久　Ｂ
俊敏　Ｂ
幸運　Ｃ
宝具　―
イメージカラー　紫・黒・白
特技　武器作成、速読、流れを見る、気
好きなもの　甘いもの、自由、暇、静かな所＆人
苦手なもの　辛いもの、自己中、ナルシスト、天才、騒がしい所＆人
主武装　鍛え抜かれた拳、あえて魔眼、または自作武器

保有スキル

流見の魔眼Ｃ（Ａ＋）
あらゆる流れを見れる魔眼。
本人は無意識に使っているためＣランク。
時々、無意識にＡ＋になる。
その時は瞳が紫水晶の様に輝く。
魔力とか気とか武器の軌道とか未来線とかの流れを読む。

矢除けの加護Ｂ
視界内からの飛び道具への対処能力。
風切り音と流見の魔眼で投擲武器の軌道を読む。

千里眼Ｃ
純粋な視力の良さ。
遠距離や動体視力の向上。
高いランクの同技能は透視・未来視すら可能にするという。

心眼（真）Ｄ
修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。
この世界に来て鍛錬はしたが経験が圧倒的にないためＤランク。

気Ｃ
身体能力を１ランクアップさせる。
また、気弾などの技を使える。

武器・道具作成Ｂ（Ａ）
流見の魔眼のおかげで自分が至るべき手順を見てほぼ自分の目指す物を作れる。
材料、技術的限界をなんとかできれば宝具すら作れるかも知れない技能。

説明　根源に至った瞬間、世界の修正力もしくは抑止力に即、殺された青年。
ビブリオマニア予備軍、いろいろ読んでるうちに漫画やらラノベやらギャルゲも読むようになってしまった。
勘というか流れを見る能力が他の人より優れていた。

そのおかげ?で何の間違いか根源に至っちゃったお茶目さん。
本人はもうどうしたらよいのやらわからない。
とりあえずイケるとこまで逝ってやるさの精神でいろんな世界を回る予定。
恋姫の世界に移動したことによって身体能力が上昇した。
更に気の使い方を覚えたので筋力、耐久、俊敏が更に上がる。
流見の魔眼を封じられると保有スキル、流見の魔眼、矢除けの加護、千里眼、武器作成が封じられてしまう。
でも、滅多なことじゃ封じられません（笑）

主人公設定（後書き）

こんな感じでしょうか？
何か気になる点があればコメントをください。

保有スキル言霊を削除しました。

第二章　家出の朱然（前書き）

何度も書いては消し、書いては消しを繰り返してます。
今まで読む側だったので書き続けるのはかなり大変です。
何かこのまま続けていけるか先行き不安です・・・・・。

第二章　家出の朱然

「さて、そろそろ国境の村が見えるはず……」

俺は目を凝らすと煙が上がっていた。

チッ、賊に襲われたのか?!

急いで馬を走らせる。

そこには家を焼かれ、蹂躙される村人達の姿があった。

襲っている賊は皆、黄色の布を巻いている。

俺はすぐ馬を下り、大牙を担いで賊に近寄った。

そして――――――

長大な大剣が賊を袈裟掛けに切り捨てる。

「ギャァアァァッ!!」

問答無用で斬られた賊の断末魔が響き、周りの賊が集まってきた。

「テメェ！　どこの――――――」

言い終わる前に大牙を振るう。

「ギィィィッ?!」

「どうでもいい……名乗る名も無い。　お前らは今ここで、誰一人として逃がさず、殺し尽くす！　ハァァァッ!!」

俺は問答無用で大牙を振い、何度も斬っていった。
十から先は、もう数えなかった。
賊達はものの数分で、もの言わぬ骸に変わった。
俺の姿は今、返り血で大牙もろとも真っ赤に染まっている。
その修羅の如き姿の俺に話しかける者がいた。

「お若いの、助けてくれたことに感謝させてもらうぞい」

優しそうなお爺さんだった。

「いえ、このような惨状を見て見ぬ振りなどできませんでした。
俺がもっと早くこの村に着いていれば、もっと……助けられたと思います」

「いやいや、過ぎたことは変えられん。
死んでしまった者達は帰っては来ぬが、お前さんが来たお陰で生き残った者がおるのじゃ。
本当にありがとうのぅ」

「……」

俺は拳をきつく握り締めていた。
自分で初めて人を殺した。
この世界に来てから、人の死はとても身近にあったが、とても遠かった。
この惨状を見ても、吐いたりはしなかった。
むしろ……ッ――――――

周りを見れば、村人と賊の死体。
こんなにも簡単に罪も無い人は死んでいくのかと、俺の前の世界は平和すぎたのだろうかと、そればかりが頭の中をグルグルと回り続ける。

「お主の格好は酷い。　すぐそこに小川があるでの。　体を洗ってくるとええ」

「はい……」

俺は体と衣服を洗って村に戻り、死体の燃えない物を全て剥ぎ取り、一ヶ所に集め燃やした。

このままにしておいたり、土葬したりすると病気が蔓延するからな。
死体処理が終わった後、老人の家に泊めてもらった。
次の日の朝、俺は村を後にした。

建業を離れてしばらく、村や町を転々としたが、賊の被害は深刻なものだった。
間に合った時もあれば間に合わなかった時もあった。
間に合った時は礼を言われ、間に合わなかった時は自身の無力を思い知った。
そんなことを繰り返し、また街に着いたのだが、運の悪い事に黒煙が上がっていた。
俺は祈りながら馬を走らせた。

間に合ってくれ……ッ！！

街には出来のいい防護柵があり、賊達は攻めあぐねいているのが見て取れた。

だが、一ヶ所だけ弱い部分があったのか、賊が集中的に攻めているのがわかる。

「一ヶ所に集まっているなら大渦の出番か……」

俺は馬から降り、大渦を構え突撃した。

大渦の丸い刃は、敵を切り裂くことはできないが、貫く事に特化している。

そのまま、気で強化した身体能力で賊の中心まで走った。

一人、二人と大渦に刺さっていく。

中心まで来た所で、大渦を前に突き出し、刺さっていた六人の賊を勢いを利用して抜き、大渦を垂直に地面に勢い良く刺して、その柄に飛び乗った。

そして、持ってきていたもう一つ武器である鋼糸を手足の様に操り、賊どもへ向ける。

ヒュンッ！という風切り音と共に漆黒の糸が繰られ続けた。

周りの賊や、遠くで籠城している街人には何も持っていないように見えるだろう。

だが、俺の気と流れを見る力で操った鋼糸は、鎧すら簡単に切断する。

俺は踊るように鋼糸を操る。

その死の舞で、瞬く間に数百人単位の人間を切り刻んでいった。

この近辺以外の賊は街の義勇軍が倒した様で静寂が俺を包み込んだ。
やがて賊は居なくなり、大渦から降りた所で街から三人の女の子が近づいてきた。

「すみませーん！」

気の抜けた声が聞こえた。

「おい、沙和！」

「沙和、自分緊張感無しやな……」

二人の少女が俺に呼びかけた少女を窘める。

「貴方様のお陰で私達の街は助かりました。　お礼を言わせてください」

「ありがとうなの！」

「助かったわ、礼を言うで！」

真面目そうな少女が礼を言い、二人も続けて礼を言う。

って楽進と李典と于禁じゃないか。

驚きを隠しつつ話を聞くことにした。

「いや、気にしないでくれ。　所で、被害の方はどうなった？」

「幸い、防護柵のお陰で死人は出ませんでしたが、負傷者が十数人出てしまいました」

「そうか……でも、死人が出なかったのは良かった」

「貴女が来てくれなければ危なかったと思います」

「そう言ってもらえるとこちらとしても助けた甲斐があったよ」

そう言った俺は大渦を担ぎ、指笛を吹いた。
すると、どこからともなく麒麟が走って来る。

うむ、良い子だ。

大渦を麒麟に括り付けた所で砂塵が見えた。

「賊の新手でしょうか？」

「もう防護柵は保たんで？」

「いや、あれは官軍だな……曹の旗が見えるが……」

俺の千里眼で官軍を確認した。

夏候姉妹と曹操かな？

「見えるのですか？」

「ああ」

そんなやり取りをしている内に官軍が俺達の所まで辿りついた。

「これはどういうことだ！」

夏候淵が驚く。

やっぱり、夏候淵か……夏候惇の方は居ないでほしいなぁ。
だって騒がしいし。

俺達の足元には夥しい数の賊の死体。
その中心にいる俺達。

「そこの者達！　こ奴らは……賊達だな？」

「ええ、そうです」

俺が代表して答える。

「お前の名は？」

「はい、姓は朱、名は然、字は義封と申します」

「私は姓は楽、名は進、字は文謙と申します」

「ウチは姓は李、名は典、字は曼成や」

「沙和は姓は于、名は禁、字は文則なの」

「うむ、私は陳留の曹操軍が将、夏候淵だ。　一体この惨状はどういうことだ？」

「これは……」

うーむ、一人で倒したとか言うと面倒な事になりそうな気がするぞ。

そう思い俺が口ごもるとおっとり少女が口を開いた。

「この朱然さんが一人でやっつけてくれたの～」

空気を読んでくれ天然少女……。

「一人でこの数を、だと？」

夏候淵が聞き返した時、金髪のお嬢様必殺の縦ロール少女、曹操が現れた。

「秋蘭、状況はわかった？」

「華琳様、今詳しく聞こうとしていた所です。
話によると、この数の賊をそこの朱然と申す者が一人で倒したらしいのです」

「へぇ、一人でね」

上から下までじっくり見られた。
何故か悪寒が止まらない。
貞操の危機かコレ？

「貴女……見た所、旅の者のようね？」

「はい、見聞を広める為、旅をしておりました」

俺は何もやましい事は無いので、すぐ答える。

「なるほど、ところで幾つか聞きたいのだけれど？」

「はい、何でしょう？」

「建業で新しい調味料や服の意匠をした者も確か……朱然だったと思うのだけれど、それは貴女かしら？」

「はい、それは私の事かと思いま――――――」

「ええーーッ？！　むぐッ！？」

「――――――思います」

突然の大声にびっくりしたが、平静を装って答える。

やっぱり有名になっているかー。

于禁は何を騒いでいるんだか……あ、于禁は確か、阿蘇阿蘇読んでたから服のデザインしたっていう俺を知ってたって事か……まあ、すぐに楽進と李典に取り押さえられたが。

「更に、その建業からこの近くまでの街や村を無償で救っている者も朱然という名前だと聞いているのだけれど、それも貴女？」

「ええ、恐らく」

「貴女、私の……曹猛徳のものになりなさい」

イキナリ何ヲ言ッテイルノデスカ？

「話が見えないのですが……」

「貴女の美貌とその武、そして新しい食料や衣服の意匠……その才とても惜しいわ」

「いや、その……謹んでお断りします」

「貴様、華琳様の誘いを断るのか？」

夏候淵さんが静かだが、重圧をかけてくる。

美人が凄むと迫力が違うなぁ。

「はい、私はまだまだ未熟です。人の上に立つような才は持ち合わせておりませんので、遅かれ早かれどなたかに仕えるつもりですが、今の所、私が仕えて良いと思ったのは一人だけですので……」

「この曹猛徳が仕えるに値しないとでも？」

曹操の殺気が俺に突きささる。

怖ぇよぅ……。

「いえ、そこまでは言っておりませんが、私は自分の目で見たものしか信じません。

なので、どんなに優れた御方であろうとも今さっき会った方に仕える事はできません」

「そう……ならば、しばらく私の客将として私を知り、仕えるに値すると思うのなら私に仕えなさい」

物言わぬプレッシャーが俺にかかる。

まあ、いいか。

朱然だからって呉に使えなきゃいけないって事でもないし。

「わかりました。その代わり、と言っては何ですが、この三人を仕官させてもらえませんか？

一緒には戦っていませんが、遠目から見た所、一角の将になれると思うのですが？

それならば少しの間、客将としてこの地に留まりましょう」

「「「私が（ウチが）（沙和が）？！」」」

「わかったわ。所で何故貴女は男物の服を着ているのかしら？

口調も男の様な喋り方だけれど」

「ああ、やはりそうきましたか……別に深い意味はありませんよ。

単に私が男だというだけで」

「「「「「なんだってぇ（ですって）（だと）（やてぇ）？！」」」」」

「そんなに驚くことかなぁ……」

ああ、俺の目の縁に涙が光る。

「あ、あり得ないわよ！　嘘を言っているのではないの？」

「正真正銘、男です」

「ま、まあこれ程の美貌なら……男でも……」

曹操は葛藤した！
しかし納得した！

そんなこんなで俺は曹操に客将となった。

第二章　家出の朱然（後書き）

こんな訳で魏に接触。
ちなみに作者は無印の恋姫†無双と真・恋姫†無双、ウィキペディア、恋姫公式サイトとか何かで調べて書いてますが違和感が無いか不安です……できる限りは似せていこうと思いますがなんかキャラぶれしそうで怖い。
そんなこんなで書き進めるつもりです。

第三章　春蘭と朱然（前書き）

この処女作を掲載して２４時間経ってないのに何と１００００ＰＶ＆１５００ユニーク達成！
アレ？これ処女作デスヨネ？
恋姫やＦａｔｅのネームバリューは伊達じゃないですねぇ～。
今更、恐ろしく思えてきました。
しかしながらこの作品を読んでくださってありがとうございます！

第三章　春蘭と朱然

自室にて惰眠を貪っていた俺は、二人の侵入者に叩き起こされた。
しかもドアを壊された。

「起きろ――――――ッ！」

「姉者……それは……」

「俺の眠りを妨げる者は許さん……」

俺は瞬時に跳躍。
天井を蹴って、春蘭に襲いかかる。

「何ッ！」

迎撃に入る春蘭にあきれる秋蘭。
脳天に踵落とし。
春蘭は頭上で腕をクロスしガード。
俺は受け止められた足を起点に回転し、もう片方の足で胴蹴りを放った。

「ぐはッ……きゅぅ」

春蘭は壁に叩きつけられ、俺は足をつかず、宙返りをしてベットに着地。
布団を被り直し寝る。
秋蘭は唖然としていたが、俺に言葉を投げかける。

「……はッ？！　朱然、起きてくれ」

「何？」

この俺、朱然は寝起きがそこそこ悪い。

「微妙に性格が違わないか？」

「気にするな。　もう少し寝かせて……」

頭までシーツを被って瞼を閉じる。

「いや、姉者が戦いたいと五月蠅くてな……」

「決着は今さっきついただろー？」

「私や他の者も戦いたいらしい」

「知るかよぅ……」

布団の中でイヤイヤと首を振る。

「華琳様のご命令なのだ」

「はぁ、それを早く言ってくれ。　客将だし、華琳の言う事なら聞くよ……」

「そうか、助かる」

秋蘭はほっと胸を撫で下ろす。

それからすぐ起き、身支度を整え調練場へ。

あ、ちなみに真名で呼んだのは「一時とはいえ私の将になるのだから、教えるのは当然でしょう？」と華琳が言ったから全員の真名を預からせてもらった。

更に言えば、俺が朱然のままなのは華琳に「貴方が使えるに相応しいと判断した時、仕えると共に真名を預けなさい」と言ったから。

そこには華琳、目を覚ました春蘭、秋蘭、凪、真桜、沙和、季衣の七人がいた。

「で、来たんだけど……華琳さん？」

「単純に言えば朱然、貴方の本気の実力が知りたいわ。　だから、春蘭や他の者と戦ってもらうの。

拒否はできないわよ？」

ソウデスカ……。

「わかったよ。　というか、全員対俺？」

「まさか、さすがに数百人を一人で倒せるといっても、それは雑兵や賊だけでしょう？

この中から一人選んで戦いなさい。　因みに凪、真桜、沙和は三人で一人よ」

「ん～……それでは春蘭でお願いします」

俺の指名に春蘭が了承し、春蘭と対峙する。

今、俺の手には鎖付きの巨大な両刃の大剣、大牙。

対する春蘭の手には黒い大剣の七星餓狼。

華琳が開始の合図をする。

「では、始めッ！」

「「ハァァァッ！！」」

俺の大剣と春蘭の大剣がぶつかり合う。

俺の元々の身体能力と気での強化、加えて武器重量で押し勝っていく。

「ぐ、ぅぅッ！　なんてッ、重さだッ！」

「ォォォォオオッ！」

そのまま押し潰そうと力を更に込めた所で受け流された。

轟音と共に地面に大剣がめり込み、隙ができる。

そこに春蘭の胴薙ぎが叩き込まれる。

「貰ったぁぁぁぁッ！」

俺は地面にめり込んだ大剣を地面ごと斬り上げた。

刀身と刀身がぶつかり合い、礫が春蘭に襲いかかるが、すぐさま春蘭は距離を離す。

そこから俺はクラ○ドのように剣身の側面を背中にくっつけるように担ぎ追撃。

追いついた所で頭上で回転、遠心力を加えての上段からの斬り下ろす。

だが、またしても轟音が響き、かわされる。

どうやら春蘭は最初の力比べで不利と思ったか、受けずに避ける

つもりのようだ。
斬り上げ、一回転して胴薙ぎ、袈裟斬り。
春蘭は大剣を巧みに操り、かわしてゆく。
そこから春蘭は袈裟斬りで地面にめり込んだ大牙を無視し、水平に斬りかかった。
俺は咄嗟に身を沈め、脇をすり抜けると同時に大牙の剣身から普通の長さの曲剣・牙と短剣・爪を分離させ、二刀流の様に構える。

「仕込み剣かッ！　小賢しい真似をッ！」

「やっぱり大牙だけじゃ、力はあっても対抗できなさそうだからなッ！」

春蘭は真正面からの幹竹割り。
俺は左の爪で春蘭が降り下ろす大剣に正面からぶつかる寸前、大剣の後ろに回り込むようにして円を意識しながら振り抜いた。

――――――シャォォン……！

透き通るような独特の残響音が響き、春蘭の大剣は左に逸れていた。
否、俺が逸らした。
これこそ流れを見る事ができるが故に、漫画を基に編み出した左手の爪のみで繰り出す奥義が一つ、届かざる左の護剣（マンゴーシュ）！
春蘭はさぞ奇妙な感覚に囚われているだろう。
朱家の武術の先生や朱治義母さんにも言われた美しい残響を残す、奇妙であり、鉄壁の防御技。
何せ、全力で振り抜いているのにも拘らず、決して当たることはないのだから……。

Ｓｉｄｅ春蘭

奇妙な感覚だ。
初めは弾かれただけかと思ったが、私は間違いなく自分の力で振りぬいた……。
勢いはそのままに……何故、軌道だけが逸らされる?!

「くッ！　何故だッ!?　何故当らんのだッ?!」

奴は答えない。
その代わりに金属の擦れる奇妙な音が響き渡る。
この透き通るような独特の残響音。
それはさながら一種の楽器の音の様だ。
私は目を凝らす。
そこで気がついた。
私の剣に合流して――――――剣の軌道だけを書き換えたのかッ！

「くッ！」

魏武の大剣と謳われたこの私がッ！

「後れを取るわけにはいくまいッ！」

何度も、何度も、あらゆる角度から斬ろうとするが、左手の短剣に防がれる！
まるで次の手が見えているかのように……！
私は頭に血が上っていた。
だからだろう……。

少し動作が遅れた。

「誰も左手は防御だけだとは言っていないよッ！」

――――ヒュンッ！

その言葉と共に左手が閃いた。

私は咄嗟に防御する。

何とか防御できたが、嫌な汗が噴き出すのを感じる。

その斬撃の重さは軽いが……その分、早いッ！

「くッ！」

――――キャキャキャキャキャキャッ！

短剣の連撃が、防御している大剣に凄まじい勢いで襲いかかる。

くッ！

私は奴の武に対して嫉妬して熱くなりすぎた……？

そんなことを戦いの最中に考えてしまい、少し柄を持つ力が弱まってしまった。

更に先程の冷や汗。

汗で柄が滑って……ッ！

そう思った時には大剣は私の手を離れ……。

右の曲剣が迫っていた。

――――やけにゆっくりと。

私と奴の違いは何だ？！

武の違いか？

武器の違いか？

――――振り下ろされて。

私が未熟だっただけか……。

――――瞼を閉じた。

Ｓｉｄｅ春蘭ｏｕｔ

春蘭は覚悟を決めたように目を瞑った。

俺は右の牙を振り下ろす所で牙を放し、その手はデコピンを形作る。

そして、解放する！

――――ピシィンッ！

「にゃあッ？！」

額を抑えて蹲る春蘭。

「それまでッ！　勝者、朱然ッ！」

華琳の勝利宣言が響いた。

華琳は称賛を送り、春蘭は未だ額を抑え、秋蘭は感心し、季衣、凪、真桜、沙和はすごいと俺の周りに集まった。

「春蘭を倒すなんてやるじゃない朱然。　ますます欲しくなったわ」

「そ、そうですか……でも遠慮しておきます」

華琳は笑っているが……目が笑ってないヨ？

「あら残念……でも、いつか手に入れるまで諦めないんだから」

そう言って華琳は春蘭、秋蘭を引き連れて行ってしまった。

周りの四人達はお祝いだと言って、俺を連れて町へ繰り出すのだった。

第三章　春蘭と朱然（後書き）

春蘭と朱然の戦闘をお送りしました。
きちんとした戦闘パートを書いたつもりですがどうだったでしょうか？
皆様に満足頂ければ幸いです。
ではこれからもよろしくお願いします。

ｚｉｐｐｅｒ１２３４様より、両刃の剣を担ぐのと踏むという表現は如何なものか？とのご指摘があったので、違和感のない様に若干修正しました。

第四章　暗黒のトラウマと朱然（前書き）

恋姫のアニメの三期やるみたいですがどうなる事やら・・・・・・。
アニメの恋姫は結構はっちゃけてましてますよね？
それはさておいて第四章です。
普通パートですがどうでしょうか？

第四章　暗黒のトラウマと朱然

何故、俺は此処にいるのだろう？
目が覚めるとボロボロになった春蘭と悠然と進む華琳、それに追随する秋蘭。
俺は春蘭に担がれている。
体を縄でグルグル巻きにされ猿ぐつわをされていて身動きが取れないし喋れない。
俺は布団で寝ていた筈だ。
こんな事になった理由の推理を始めようとすると春蘭が止まった。
目の前の店の名は女物専門の服屋。
それはトラウマの宝庫。
嫌な予感しかしないぞッ☆
そのまま、服屋に入って行く華琳様御一行。
ジタバタ暴れだす俺。

「むッ？　華琳様、朱然が起きたようです」

「意外と速かったわね……気絶させなさい」

「もがっ（何故に）？！」

何故にΣ？！

「許せ朱然、ふッ！　何ッ？！　一撃では無理だとッ？！　三連撃！」

「もがっ、もが、もごッ（んまっ、つぁ、ちょぎ）？！」

よく漫画やアニメでやる首チョップで意識が暗転した。

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・・

・・・・・・

・・・・・

・・・

・

うっ……何なんだ一体？

ん？

何か騒がしい？

「……きゃ……こん……食べ……わぁ……！」

知らない人の声がする……何か食べてんのか？

「……秋蘭……次……スカー……着せ……」

華琳の声……スカーの後はトか？

秋蘭に着せてもらっているのか？

ん？

下がスースーする気がする。

「……では……どうで……フリル……リボン……」

春蘭は華琳にフリルとかリボンとか着せるつもりか？

まあ、華琳なら似合いそうではあるけどな。

アレ？

頭に何か付いている？

「……下着……着せ……様……？」

むっ？

下着まで着させる気か華琳？

そのくらい自分でやろうよ……。

おや？

何か下半身が開放感溢れてきた？

次は胸のあたりが締め付けられている感覚が……。

何だろう？

「……仕上げ……化粧……可愛……仕立てな……」

化粧？

最近の女性専門の服屋は化粧までするのか？

凝ってるなぁ～。

顔に何か塗りたくられているような……。

「う、う～ん……何だ？　動きずらい……？！」

「これは……予想以上の出来だわ……。　でも、女として自信をなくしそうね……」

「ええ、これは……女であればそこらの者が放っておかないでしょう」

「どこからどう見ても女のようですね！　華琳様！」

喜びとも苦悩ともつかない表情の華琳。

感嘆する秋蘭。
満足げな春蘭。
鏡に飛び込んできた俺の姿。
それは暗黒の時代の再来。
女装し、化粧し、偽の胸を装着し、感覚からして女物の下着（下も）を装備した俺。

「イィィヤァァァ――――――ッ！！」

叫んだが逃げ出せない。
此処から出れば多くの人の目の触れる所になるだろう！
それは避けなければならない！
俺はすぐさま着替えようとしたが春蘭が俺を羽交い絞めにして身動きが取れない。
→
本気を出せば何とかなるが、売り物を着ているので全力を出すと破けるから全力を出せない難儀な律義さ。

「華琳！　客将にも拘らずこの仕打ち！　何の恨みがあってこんなことをっ？！」

「あら、その者に似合う服を着せているだけよ？　いいじゃない、似合っているのだから」

「男がこんな格好で似合っていると言われても嬉しかないわぁっ！！」

抵抗したが結局、様々な服を着せかえられた。
途中で知らないお姉さんや女の子、たまたま来た凪、真桜、沙和達まで加わってそこは混沌と化した。

沙和は阿蘇阿蘇を読んでいたので俺が自分でデザインした服とかも着せられました……ｏｒｚ

朱然は何か大事なものをなくした！

この後、無理やり連れ出され、警邏の兵や町民達は女装朱然の可憐さに心を奪われたとか奪われなかったとか……。

何だよぅ、見るなよぅ！

第四章　暗黒のトラウマと朱然（後書き）

短かったでしょうか？
曹操さんのSっけとかムズイです・・・・・・。
早くもキャラブレの予感・・・・・・。
次は桂花とのエンカウント話を入れてから黄巾党討伐の話を経て反董卓連合へ続く・・・・・・予定？
次回へ続く！

第五章　ネコミミ軍師と朱然（前書き）

総合ＰＶ３００００＆ユニーク４０００超えました。
まだまだ拙い文節ですがこれからもよろしくお願いします！
今回は取り敢えずオリジナルの設定を入れてみたお話しを。

第五章　ネコミミ軍師と朱然

「ちょっとそこのアンタ！」

彼女とのエンカウントはその一言から始まった。

「何？」

振り向けばそこには、荀？こと桂花さんがいらっしゃった。

「アンタが華琳様取り入っ……た？」

ポカンとした顔でこちらを見る桂花。
一体どうしたんだ？

「お」

「お？」

「女？」

はい、わかってました。
初対面の人には、ほぼ必ず言われます。

「違う。　俺はれっきとした男だ」

むぅ、と拗ねる俺。

「！　近寄らない……で？　なんで？　嫌悪感が……ない？」

桂花が不思議そうに顔を傾げる。

「どうした？」

「ちょっとアンタ、そこから動かないで」

「？　別に良いけど」

恐る恐る桂花が近づいてくる。
一メートル、五十センチと距離を詰めてから腕を伸ばす。
俺の手の甲に人差し指が当り、すぐ引っ込める。
それを何回か繰り返す。
なんかネコミミフードを被っているせいかネコのようだ。

「何で？」

「何が？」

「何でアンタには男なのに嫌悪が出ないの？」

凄く不思議そうに俺を見る桂花。

「いや、俺に言われても……」

知ったことじゃない。
俺と桂花が困惑していると、華琳が廊下向こうからやってきた。

「あら？　桂花と朱然じゃない。　こんな所でどうしたの？」

「さあ？　俺にはわからない」

「華琳様……分からないんです……」

泣きそうな……でもそうでないような表情で華琳に疑問をぶつける。

「分からない？　それだけでは幾ら私でも何なのかわからないわ」

「コイツ……朱然に嫌悪感が出ないんです……」

「何ですって？」

華琳は俺を見る。

「それは朱然の容姿があまりにも女の様に見えてしまうからではないの？」

「以前、華琳様に仕える前にも男なのに女の様な容姿を持つ者に会いましたが嫌悪感は出ました」

「そう、でも理由はどうあれよかったじゃない。　桂花の男嫌いが直るかもしれないのだし」

華琳がふと何かを思いついたのか、嫌な笑い方をしている。

その後、俺と桂花は一つの部屋に閉じ込められた。

沈黙がとても気まずい。

「ねぇ」

「何だ？」

「アンタどうして華琳様に仕えないの？　春蘭に勝ったんだから、華琳様には仕えるように言われたんでしょ？」

当然の問いだな。

俺は未来を知っているからこそ、俺という異端者一人でどのように変わるのかを知りたい。

何せ俺は、流れを見る者なのだから。

「俺は見極めたい。　この大陸の流れを……その行く末を……」

「傍観者にでもなりたいの？」

「いや、いずれはどこかの勢力に仕官するつもりだが……」

第一候補は三国志の史実の通りに呉、原作で死ぬかもしれない孫策と周瑜と黄蓋を救いたい。

第二候補は魏、理由は特には無い、強いて言えばフィーリング。

第三候補は蜀、あの和気藹々とした雰囲気は悪いとは言わないが、劉備の甘い考えが気に入らないので矯正したい。

後は論外だな……。

袁紹と袁術は引っかき回す分には面白そうだから良いんだけど、我がまま&馬鹿すぎる。

公孫賛は……地味。

近隣諸国は私腹を肥やすのに大忙し＝論外。

「何？　問題でもあるの？」

「俺が仕えるべき最善の人間が誰なのかというのを探してる」

「華琳様は当然入っているのよね？」

「ああ、華琳、孫策様、そして……候補としてもう一人」

「もう一人？　誰よ？」

「さてね……。　いずれにしても、これから群雄割拠の時代になる」

話しをはぐらかし、これからの話にすり替える。

「そんな事、今の情勢を見れば並みの軍師でも大体は予想がつくわよ」

「そりゃそうか……ところで何で男が嫌いなんだ？」

当り障りなく聞けたと思う……もしくは、多分、恐らく。

「……のよ」

「何？　声が小さくて聞こえない。　取り敢えず言えば楽になることもあるぞ？」

「わ、私が四歳の時、私と宦官唐衡の息子と婚約があったのよ。
その息子と一度だけ会ったわ。　その時、部屋で犯されそうになったのよ！
四歳の私は物心がついてすぐだった。
そんな私が婚儀を取り決められる訳がないじゃない……唐衡の荀家への圧力よ。
その圧力への楯にしたのよあの父親は！」

なるほど、過去の男の汚い面を幼い頃に見てしまったが故のトラウマか……。
桂花は俺にトラウマとも言うべきことを話した。
なら俺も話すか……俺にはトラウマって程ではないけどね。

「なるほど……。　惹かれあったのは必然だったのかもな……」

「どうゆう事よ？」

「要は桂花が俺と似てるってことさ」

「似てる？」

「俺は養子なんだ。　元の姓は施。　建業じゃ、私腹を肥やすことだけ考えてる父親。
こんな容姿だ。　父親の取引の道具として、知らん爺に犯されそうになったよ。
朱家に養子に行く前の日に……もちろん返り討ちにしてやったが（笑）」

冗談めかしに言う。
憑依して朱家に養子に行く前の日の話だ。
ハァッ！ハァッ！ってキモイったらなかった。
思い出しただけで鳥肌が！
ボッコボコにしてやったがね。

「そうなの……似た者同士なのね……」

「そうだ。　桂花が嫌悪を抱かないのは多分、必然だったんだ。

桂花……俺はいずれ華琳の元を離れるだろう。
それまでの間、俺の事は水仙と呼んでくれて構わない」

「水仙？」

「俺の真名だ」

「えっ？！　でも華琳様に仕える事にした時に預けるはずなのに……」

「気にするな。　華琳の部下に仕えてからじゃないと真名は呼んではいけない、なんて聞いた覚えは無いからな」

俺は桂花に笑いかける。

「まったく、可笑しな奴。　でも、ぷくくっ！
真名まで水仙なんて女みたいな名前なんて、可笑しい！」

桂花が笑いだす。

「笑うなっ！　割と気にしてるんだよ」

またもむぅ、と拗ねる俺。

「全く……ホントに可笑しな奴」

そう言って桂花は満面の笑みを作った。
その笑みを見て、不覚にもドキッとしてしまった。
これは、そんなネコミミ軍師との初邂逅。

第五章　ネコミミ軍師と朱然（後書き）

どうでしたでしょうか？
桂花は素直に笑えれば結構可愛いと思うんですよね～。
恋姫のキャラはもちろん全員魅力的ですけどね（笑）
次回は黄巾党滅亡まで一気に行きます。
ここはあまり弄らずにテンプレに朱然さんの存在を入れる予定で書きますので今日中にはまた更新する予定。

第七章　黄巾党と朱然（前書き）

前回書いた通り、これで黄巾党滅亡です。
あっさりしすぎたでしょうか？

第七章　黄巾党と朱然

黄巾党が次第に猛威を振いつつある日。
官軍が黄巾党に押されている場面。
官軍の指揮官からの連絡文を春蘭が一蹴し、部隊を展開。
春蘭、季衣が中央、その両脇を俺が鋼糸、凪が気弾でフォローし、蹴散らしていく。
凪が華雄に接触したようだ。

ん？
華雄達は撤退するのか……って、春蘭の部隊が黄巾党を追っていった？！
このままじゃ袁術の領土に引き込まれるぞ！

俺はすぐさま麒麟を飛ばし、後を追った。

「都合の良いことを言ってるわねぇ……まずはこちらの問いに答えなさいよ」

あー、この声は……孫策様に捕まったか？

俺は更に急いで、春蘭達と対面している部隊の間に割り込んだ。

「ちょっと待ったーーーーー！」

俺の大声が響きわたる。

「「朱然（じゃない）！」」

春蘭と孫策様の声が被る。

「む？」

「へぇ？」

二人が殺気混じりに睨み合う。

「睨み合わない！　春蘭、少し黙っててくれ！」

「なんだとっ！？」

春蘭が暴れそうになるが、季衣が留める。

「朱然、あなた大陸を見て回って見聞を広めると言って家を出たんじゃないの？」

「そうですよ、とある御縁で曹操様の所で客将をしています。　その内、また旅に出ますが」

「そう、手紙だけ残して居なくなったから蓮華が心配してたわよ？」

「そうですか……よろしくお伝えください。　で、今回は私の顔に免じて、この者達を見逃してはもらえませんか孫策様？」

「何？！　孫策だと？！」

「ええ、私は孫策伯符よ。　本来なら許されないことだけど、まあいいわ。

朱然の顔と此処が私の領土でない事を踏まえて見逃してあげる」

「策殿。　こちらの準備、整ったぞ。　むっ？　この者は？」

「朱家の者よ、祭」

「ああ、策殿が仲立ちした者か？」

「そうよ」

「今は曹操様の客将ですけどね」

「そうかじゃったのか……朱治は息災か？」

「ええ、旅に出る前は元気でしたよ」

「そうか！」

心なしか黄蓋さんの顔が嬉しそうに見える。

「で、黄巾党の行方知りたくない？」

「ええ、知りたいですね」

こうして、図らずも共同戦線を張ることになった。

結果は言わずもがな。

陳留に引き上げた後、俺が華琳に事の顛末を報告をする。

「……という訳で、無駄で大きな借りを孫策様に作ったまま帰ってきた訳ですよ」

「……呆れた。　朱然、我が部下が迷惑をかけたこと詫びさせてもらうわ。　後で何か望みがあれば、それに沿えるようなものを送るわ」

「わかった」

「だが、賊退治を手伝ったのだそれで帳尻はあって――――――」

「ないわよ。　逃げ込まれる前に倒してしまえば借りも作らなかったじゃない」

「――――――……ハイ」

「す、すみません、自分は官軍の撤退の支援をしていたもので……」

凪は俯きながら言う。

「凪は自分の仕事をしていただけだから悪くないぞー。　で、今回の問題点だが、黄巾党は指揮官を得たということだな。
まあ、その将はきっちり討ち取ったのが幸いだったが……」

「ええ、黄巾党は焼き討ちして一時的に少なくなっていたのだけれど、また大きくなってきているわ。
これからは苦戦する事になるでしょうね……以後、奴らの相手は気を引き締めるように。
特に春蘭と季衣、いいわね！」

「はっ！」

「はい！」

「それから朱然。　その孫策という人物。　どんな人物か教えてくれるかしら？」

「いいですよ。　まず、孫策様の今の状況からですが……。
そもそも孫家が納めていた土地は、孫策様の母である孫堅様が納めていたのですが、孫堅様が亡くなってからすぐ、袁術にその土地を掠め取られました。
それから少しして、孫家に仕える武将達は別々の街に隔離され、今は食客に甘んじている、といったところですね」

「なるほど……今は、ね。それで？」

「孫策様の人柄と言えば……。　風格は他を圧倒し、器は強大。
特に戦で発揮される孫策様の勘は、下手な軍師よりも当てになると聞いた事がありますよ。
それを踏まえて、華琳と同等と言っても過言ではないと思う。
遅かれ早かれ、袁術を潰すか追い出すかしてのし上がってくるね、間違いなく。
そして、一番最初に仕えてもいいと思わせた人物だ」

「そう、孫策が……で、貴方と孫策の関係は？」

「俺は呉……亡き孫堅様が納めていた頃、今の朱家に養子に出された時に仲立ちしてもらったのさ。
実際に会ったのはその時だけで、実際の交流していたのはその妹の孫権様だよ。　私塾で一緒だったからね」

「ふ～ん」

華琳が嫌な笑みを浮かべる。
その他、二、三華琳が言うべきことを言って軍議は終わった。
それから数日後。
凪をからかいながら森を進む。
森もそろそろ中間に差し掛かった頃。

「「ッ！！」」

敵の気配に気が付き、俺は大牙を投げ、凪は気弾でそれぞれの背後の敵を気絶させる。

「敵襲――――――！　戦闘態勢を取れ！！」

俺は大牙を鎖で引き寄せながら指示を飛ばす。

「そこッ！」

また、大牙を投げ、刀身の側面で胴を叩く。
これで最後だったようだ。

「周囲を警戒！　転がっている黄巾党の奴らを縛っておけ！」

兵が気絶している黄巾党を縛っている時に何か落ちた。

「これは手紙か？　なになに……集会所の連絡？　ってことは連絡兵かこいつら？」

ご丁寧に地図までである。
いよいよ面倒になってきたな……。

で、その情報を持ちかえり、その場所を偵察させると敵の本隊を見つけたとの報告を受けた。
どうやら、ライブをしているらしい。

呑気なもんだな全く……さて、決戦だ。

まず、周りに奇襲。
戦力を分散させるために撹乱を。
てか凄い混乱してるけど……見てて哀れに見えるよ。
本隊と合流しようとしたところで季衣と真桜がやってきた。
本格的な攻撃を俺達は開始した。

「さあ！　ここが正念場だ！　これより、本体と合流ののち本体左翼として攻撃を続ける！
だたし、張三姉妹は生け捕りにしろ！　総員、思う存分暴れよ！」

「「「「「応っ！！」」」」」

「全軍突撃――――――っ！」

俺は麒麟に跨り大渦を持って突撃、中心部まで来たところで鋼糸を使い、数十人単位で黄巾党を討っていく。

殺してはいません。
行動不能にしただけですよ？

良い感じに目減りしたところで俺は指揮を凪に任せ、麒麟で移動した。
その先で盛り上がっている女の子三人組がいた。
俺は問答無用で鋼糸で縛りあげる。

「なにこれー?!」

「何すんのよーっ!!」

「捕まった?!」

「あー、張三姉妹に警告だ。　抵抗するとその糸は喰いこんで切れるから動かない方が身のためだぞー?
　こちらの要求は無条件投降して、大人しく主の元までついて来て貰う事なんだが?」

「大人しくついて行かなければ?」

　クール系眼鏡っ娘が質問をする。

「ん~、手足と永遠にさよなら?」

「いやぁぁぁ!!」

　張角が悲鳴を上げる。

「大丈夫、戦場で腕の一本無くなった奴は数え切れないほどいるしね?」

　こともなげに俺は言う。

「大丈夫じゃな~い!!」

　そんなやり取りをしていると、何処からか沸いてきた黄巾党。

だが……！

俺の鋼糸が煌めき、黄巾党を切り裂いていく。
だが、殺してはいない。
これぞ俺様クオリティー。
それを見た張三姉妹は青ざめる。

「な……何あれ、何あれッ！　糸で鉄の鎧が切れたわよ！　意味分かんないーっ！」

俺の鋼糸が鎧を斬り裂くのを見て、プチパニックを起こす張宝。

「……諦めましょう、姉さん。
こうして鉄を糸で斬ってしまう者にもう捕まってしまっているのだから、断ればさっきの様に斬られてしまうわ。
……いきなり殺しはしないのよね？」

恐る恐る張梁が聞く。

「俺の今の主人はそう言ってたよ」

「ならいいわ。　投降します」

で本陣。
華琳が張三姉妹に質問をしていく。
どうやら、太平要術をファンから差し入れされ、書かれていた方法で有名になったらしい。
太平要術は奇襲の時の火で燃えたと思うと言っていた。
国境を強固に警戒させ、またファン達も張三姉妹の人物像を言わ

なかったため、黙っている代わりに人を集める才覚を私の為に使えと半ば脅迫の様な取引を持ちかけた。
活動資金は出し、華琳の領内を自由に回れる通行書付き。
しかも、これから大陸を統一する為に動く華琳。
領はどんどん広がり、移動できる範囲も広がる。

ある意味、命を落としかけて思わぬスポンサーに拾われたって所か……ま、断ったら処刑だけどね。

陳留に帰ってからゆっくり休めると思っていたが、朝廷から呂布、陳宮、張遼が現れ、華琳に西園八校尉の一人に任命するとか何とか。
張遼は真桜に感じが似てるな、陳宮は子犬の様で五月蠅そう。
最強の武将と名高い呂布は……寝むそうだ。
三人が帰った後、華琳はかなり機嫌が悪かった。
いやホント、すこぶる悪かった。
話しかけたら、そのまま殺されそうなくらいに。
まあ、春蘭と秋蘭を自分の閨に連れて行き、朝まで飲み明かすらしい。
俺達も存分にハメを外して良いと言われた。
それからは朝までドンチャン騒ぎだった。
どんな状況だったかは聞かないでくれ。
ただ、混沌だったとだけ言っておこう。
黄巾の乱も終わった事だし、また旅に出るか……それから三日後、俺は華琳に旅に出る事を伝えた。
魏の全員に個人差はあれど、嫌味やら罵倒やら肉体言語で虐められた。
でも皆、最後には笑って送り出してくれた。
次に向かうのは洛陽だ！
俺はそう思いつつ麒麟を走らせる。

第七章　黄巾党と朱然（後書き）

さて、次回は朱然さんが洛陽に行きます。
反董卓連合では朱然さんは各諸侯の敵として立ち塞がる予定です。
何かご意見・ご感想があれば適当に書いても書かなくてもＯＫです。
ではではこれにて次回を待て！

第八章　行き倒れ朱然（前書き）

董卓軍に就職？するお話です。
投稿するたびに沢山の人達に見てもらえて感激です！

第八章　行き倒れ朱然

「……」

朱然は洛陽の町で行き倒れた！
唯の屍のようだ……。
紅い毛並みの大型犬が、俺を引きずっていく。
麒麟はその後をついて来る。

って、痛い痛い痛い！
顔が地面に擦れて痛いよ！
麒麟助けてッ？！
いや、ブルルッ、じゃなくて！
うぅ……でも、お腹が減って力が出ない……。

引きずられる事しばらく。
何か、デカイ御屋敷に着きました。

「セキト？」

「どうしたのです？　恋殿？　これは人ですか？」

「起きる」

つんつんと俺を突く呂布さん。

「う、ううう……」

「さっさと起きるです！」

そう言って陳宮は、うつ伏せになっている俺の背をグリグリ踏む。

「痛……ッ、やめ……ハラヘッタ……」

「ちんきゅ、ごはん」

「いいのですか恋殿？」

「いい」

「わかったです！」

しばらくして、俺は出された飯を食い尽した。

「生き返った――――――！！　ありがとう！　お礼に一つ俺のできる範囲でお礼するよ！」

「お前、強い……私と戦う」

「いいよー」

「やめとくです！　怪我じゃ、すまないです！」

「大丈夫だよ」

そう言って陳宮の頭に手を置く、が振り払われた。

で、屋敷の中庭。

「はじめる」

呂布が方天画戟を振りかぶり、距離を詰める。
対する俺は、翠色の金属の棒の先に変な物を付けている天翼を構える。
戟が胴を薙ぐ。
俺は流れを見てかわす。
その速度は流れを見ていなければ、かわせなかった。

「お前、面白い」

「ありがとう」

「続き」

そう言って戟を打つ打つ打つ！
かわすかわすかわす！
見えてるが微妙に霞んで見えるからかわし難いったらッ！
かわすのも程々にして反撃しますかね……。

「はぁぁぁぁッ！」

俺は天翼を振り抜く。
だが、呂布はこともなげに方天画戟を振い、弾いていく。
打つ打つ打つ打つ打つ！
その数、三十打。
それだけ打って、呂布は時に武器で防ぎ、かわす。

「やるね……流石、飛将軍呂布、と言ったところか？」

「お前、本気じゃない」

「なるほど……本能で感じ取ったのか……？」

「うん」

俺は天翼を弄り、収納された両刃を展開させる。

「斬閃！」

気を刃状に圧縮し、打ちだす技。

名前とかは謀鋼殻の天剣授受者の人の技を参考にパクッた。

まあ、名前に限らず、技そのものだけどさ。

「倒す！」

本気で戦ったが、結局、決着はつかなかった。

今は屋敷で、また飯を食っている。

「驚きですぞ！　恋殿と戦って引き分けるとは！」

「朱然、強い」

「普通だよ」

「恋殿と引き分ける者が普通のはずないです！」

飯を食い終わった。
仕事探さないとなぁ。

「それは置いといて仕事探ししないと……」

「恋といっしょ」

「なんですとー!?　恋殿！　こ奴を武官にするですと?!」

「そう」

よくそれだけで会話成立するな……。

「やったー！　ありがとう呂布」

俺は呂布に抱きつく。

「恋でいい。　ちんきゅも」

「なんですとー?!　真名までお許しになるですと?!　ううん、恋殿が認めるのなら……仕方ないです。
私の真名は音々音です！」

「わかったよ恋。　それにねねね？　俺の事は水仙と呼んでくれ」

「ねねは音・音・音！　の音々音ですッ！」

「はいはい、ねねちゃんだね」

ねねの頭に手を置く、が振り払われる。

董卓軍に就・職☆
やったー。
でも、アレ？
死亡フラグが立ったような……？
恋とねねは用事があるとか一緒に行けないらしく、董卓の城へは呂布の紹介状を持って俺一人で行った。
それから玉座に通され、自己紹介。

「俺の名は朱然だ」

「私は華雄だ」

「ウチは張遼や」

「あたしは賈駆よ、ところでアンタ恋の推薦で雇ってあげるけど、本当に強いの？」

賈駆はこちらをいぶかしんでくる。

「まあ、そこらの雑将には負けないよ」

ふふん、と不敵に言う。

「ならウチと勝負や！」

「いや、私と勝負だ！」

張遼と華雄が早速、言い合いを始めた。
賈駆は呆れた。

「ああ、もう！　朱然とか言ったわね！　アンタが選んだ方とやりなさい！」

「わかったよ。　ん～じゃ、どちらを選んでも角が立つ、なら俺は両方で」

「ほう、我々二人を同時に相手にすると？」

「ウチこんなコケにされたの久しぶりや」

言い合っていた二人が、こちらに殺気を出してくる。

「はいはい、やるなら外でやって！」

賈駆に促されその場全員が調練場に移動した。
それぞれ得物を持って相対する。
俺は大牙と鋼糸。
華雄は金剛爆斧。
張遼は飛龍偃月刀。

「では、始めっ！」

賈駆の声に三人が一斉に動き出す。

まずは神速に恥じぬ速さで張遼が飛竜偃月刀を薙いで来る。
俺は大牙でいなすが、その間に華雄が上段から金剛爆斧を振り降してきた。
俺は当然のようにかわす。

「恋に気に入られたっちゅうのはホントっぽいやん！」

「あの体勢からかわすとは思わなかったぞ！」

「それなりに修羅場を潜ってきたからね」

俺は華雄に突っ込んでいった。

華雄が迎撃しようとした瞬間に、フック付きの鋼糸を向かって来ていた張遼に投擲、偃月刀に巻きつける。

「鋼糸か！」

張遼の動きか一瞬、止まる。

その隙に空いた右手に牙を取り、斧でこちらを潰しにきた華雄の一撃を牙で受け止めようとする。

「私の金剛爆斧を片手で防げると思うなッ！」

華雄は金剛爆斧を振りおろし、殺ったと思っただろう。

だが、この大牙は言うに及ばず、牙と爪も頑丈さに主眼を置いた剣だし、気で牙と身体を強化しているので片手でも受けきる事はできる！

衝撃と轟音が鳴り、地面が陥没したが、この程度では折るどころか歪ませることすらできない。

自分の一撃を受け止められ、呆然としている華雄を気を込めた蹴りで華雄を飛ばした。

「飛べッ！！」

「ぐあぁぁぁぁ！！」

華雄は叫び声を上げながらすっ飛んで行く。

「華雄！」

「次は張遼、アンタの番だ！」

「何ゆうとんねん！」

ワイヤーを引き千切り、張遼はこちらに向かって突きを繰り出す。
まだ俺は体制を崩したままだが、牙を大牙に戻し、空いた右手で
この前作った黒い死神さん愛用の音叉ナイフにワイヤーを取り付け、
城壁の隙間にナイフを投擲。
命中した瞬間、ワイヤーを巻き戻しを利用し突きをかわした。

「なっ！？　ウチの神速の突きをかわした！？」

「その程度の速さじゃ、まだまだ神速とは言えないよ？」

「まだや！」

張遼はすぐさまこちらに追撃をかけようと突っ込んでくる。
俺は音叉ナイフを捨て、大牙で極大の気の斬撃を放った。

「断閃！」

「！！　ソコや！」

張遼は偃月刀を振りかぶった僅かな反動でかわした。

「これで終わりやッ！」

そのまま、技後硬直中の俺に突っ込んでくる。
俺は手放した大牙からまた牙を取り出し、気を巡らせる。
そして、俺は見る。
俺の辿るべき剣筋、動きを……。
牙はあくまで曲剣であって刀ではないし、あの刀の様に長くもないが、この目がある限り、やってやれないことは……ないッ！
俺の紫の目が紫水晶の様に輝き、その技は未完成ながら発動した。

「秘剣……燕、返しッ！」

瞬間、一刀から全く同時の斬撃が繰り出された。

「なあッ？！」

アサシン……佐々木小次郎の秘技の再現。

多重次元屈折現象（キシュアゼルレッチ）

練習はしたが、気の強化とこの目を使って尚、未完成なので、その斬撃は二つまでしか出なかった。
だが、神速の二つ名を持つ彼女にはこれで十分だろう。

この技は……神速すら超えるのだから――――――！

その斬撃を偃月刀で受け止めた後、張遼は武器を置いた。

「ウチの負けや……最後の斬撃の速度、どうやったか知らんけど、

全く同じ間で衝撃があった。
神速言われとるウチでも真似できん。　せやから朱然……ウチはアンタを認める」

「じゃあ……」

俺が賈駆に視線を送る。
賈駆は頷き、宣言した。

「勝者、朱然ッ！」

こうして俺は、董卓軍に正式な将として加入した。

第八章　行き倒れ朱然（後書き）

次回はいよいよ反董卓連合が動き出します。
何かご意見・ご感想・誤字脱字があれば気軽に書き込んでください。
ではではまた次回！

第九章　死亡フラグと朱然（前書き）

どもども作者です。
ちょくちょく見ているので分かるのですが凄い勢いで総合ＰＶとユニークが上がっています。
感謝感謝ですね！
今回はお話合いで死亡フラグがあった人物を助けるのが目的？です！
では本編をどうぞ！

第九章　死亡フラグと朱然

董卓軍の武将となってすぐ、皆（華雄除く）の真名を貰い初めての兵の調練をした。
俺が任されたのは五百人の兵。
最初は馬鹿にされ、舐められていたが調きょ……ゲフンゲフンッ！
穏便にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩをしたので、皆お友達になりました（華雄、霞、詠、ねね含む）。
月はへぅと言って頬を赤らめて、素敵ですと言った。
可愛いなぁもぅ！
恋は動物的本能？で知っていたようだ。
最初に簡単に準備運動、筋トレ、体の効果的な動かし方を知る事。
二つ目に決められた数種類の陣を即座に構築しての攻撃、防御。
三つ目に休憩を入れてから、十人一組で俺と模擬戦。
四つ目に十人一組でチームを作り、一組ずつで模擬戦。
最後に適当に半分に分けての模擬戦。
を繰り返した。
そして、何進が暗殺され、月に原作通りに濡れ衣が着せられた。
何でも即位したばかりの帝を裏で操り、己の私欲の為に何進を暗殺し洛陽で暴虐の限りを尽くしているとか。
実際の月を見ればそんなことする様な娘じゃないと思えるんだけど、主に袁紹とか袁術とかが、帝の権力を握ってる月の事が気に入らないんだろう。
裏から十常侍が糸を引いていると詠が前に言っていた。
反董卓連合が発足されたのは、その一月後だった。
この間に何とか俺の部隊も形になってきた。

「よーし！　今日はこれまでだ！　解散！」

「「「「「ありがとうございました！！」」」」」

兵達が解散していく。
一人の兵がこちらに伝令を持ってきた。

「朱然様！」

「どうした？」

「賈駆様より召集です！　至急、玉座の間へ来られたしとのことです！」

「ご苦労、すぐ行くと詠に言っておいてくれ」

「了解しました！」

さて、反董卓連合が進軍を開始したか？
すぐに玉座の間に向かった。
そこには既に恋、ねね、霞、華雄、詠が集まっていた。
月は部屋で休んでいるらしい。

「反董卓連合が進軍を開始したわ」

その言葉に場の空気が重くなる。

「で、どうする？　策はあるのか詠？」

俺が聞く。

「十常侍の方は私が何とかしてみる。　でも、時間が足りないの…

…だから……」

「反董卓連合の方の時間を稼げっちゅうことやな？」

「ええ、霞の言う通りよ……」

詠が俯く。

「どのくらい時間を稼げばいい？」

「少なくとも二月は……」

「分かった。　じゃあ、シ水関は俺、恋、霞の三人で守り――――――」

「ちょっと待て！」

俺の提案の途中で華雄が異議を唱える。

「――――――何だ？　華雄？」

やっぱり、反応してきたか……。

「私もシ水関に行く――――――」

「却下」

「――――――何故だッ？！」

「こちらは詠が十常侍を何とかする為に籠城で時間を稼ぐのが主な

仕事だ。
華雄……恐らくだが、反董卓連合には袁術の食客である孫家の者も出て来るだろう」
「何だとッ？！　我が武を愚弄した孫の者が居るだ――――――」
「だからッ！！」
「――――――ッ？！」
俺の突然の大声に恋以外がビクッ！っと身を竦ませる。
「だから華雄、お前は孫家の者に挑発されれば籠城をしなければならないにも関わらず、前門を開けて突撃を行い、軍は瓦解するだろう！
だから、ここで華雄は月の護衛をしていてくれ」
「だがッ！」
「はっきり言ってほしいか？」
俺は華雄に対して冷酷に言う。
「言ってみろ！」
「お前は籠城する上で足手まといなだけだッ！」
「なん……だと……？」
華雄は一時呆然とした後、殴りかかってきた。

俺は半身を動かしかわした所で、気を込めた蹴りを華雄の顎に見舞った。
華雄が意識を刈り取られて倒れた。

「華雄を頼んだ」

そう言って恋に任せる。
恋は頷き、部屋に華雄を連れていった。

「ごめんなさい」

詠が謝った。

「気にするなよ。　誰かが言わなきゃならなかったことだし」

「しっかし、水仙はキッツイなぁ～」

俺の肩に肘を置いて言う霞。

「さっきも言ったけど、華雄の猪ぶりは攻撃する分にはいいけど、守りに徹するには不向きすぎる。
だから、恨まれても止めるんだよ」

無印とかだと華雄は討ち取られてしまうし、救えるなら救いたい。

「そっかぁ～、優しいなぁ水仙は……思わず惚れてしまいそうや」

霞はそんなことを言って笑う。

「はいはい、今は反董卓連合をどうにかすることだけ考えてね～」

「イケズやな、水仙……」

半目で霞が見てくるが、華麗にスルー。

さて、いよいよシ水関での籠城戦だ！

第九章　死亡フラグと朱然（後書き）

強引に華雄を止めた朱然。
シ水関を攻略するべく集まった諸侯達！
さあ、パーリィーの始まりだッ！
すみません調子に乗りました・・・・・・。
次回はシ水関前哨戦です。
次回を活目して待て！

第十章　策と朱然（前書き）

早くも十章。
今回のコンセプトは策を弄する朱然さんです。

無理があるのではないか？とのご指摘を受けたのでその部分を修正・編集をしました。
これで無理を何とか正当化できた・・・・・・はず？

第十章　策と朱然

さて、俺の千里眼で砂塵が見えてきた。
周りにはまだ見えないだろう。

「恋、見えてる？」

「見える」

何が、とは聞かない。
でも、やっぱり見えてんのかー……飛将軍の名は伊達じゃないな。
呂布って、武とか、武器の方天画戟とか、赤兎馬が有名だけど、弓の腕もかなり良かったらしいし。
恋は恋用の弓を構え、その隣で俺は恋より巨大で大小二つの弦がある複合弓、大樹を構える。
今いる兵士達には俺達の弓を引ける物はいないだろう。

反董卓連合の諸侯達よ。

ここから俺と恋の弓を使って、超長距離からアドバンテージを取らせてもらうぞッ！

俺達は合図や呼吸を合わせた訳ではないが、同時に矢を離した。
そして、次々に矢を射ていく。
隣に控えている兵達が空になった腰の矢筒に矢を補充していく。
ちなみに恋は見えてはいるけど、俺の様に必ず当たる流れを見て

確実に当てる事は出来ないので、適当に射てもらってる。
連合軍が止まった。
浮足立っているようだ。
そこを更に俺と恋が狙い打ってゆく。

朱義封、目標を狙い打つってね……ッ！

連合軍からはどこから弓を射ているのか分からないので、一時後退していった。

「よし……ッ、作戦一は成功だな。　恋、しばらくこのまま弓で牽制して時間を稼ぐぞ」

恋はコクッと頷いた。
俺は恋の頭を撫でる。
恋はくすぐったそうに身動ぎした。
第一射目からもう一度進行してきたが、俺と恋の弓にまたも阻まれた。
当然、七割ほどの兵が楯を使ってきた。
楯を持っている分、動きは鈍い。
木製の楯を俺は気でコーティングした矢で貫通力を増して楯ごと貫いた。
鉄製の楯に関しては、まだ俺の気で貫通できないので、隙間を狙っていく。
恋は俺の射撃を掻い潜って、シ水関近くに来た兵を中心に楯の僅かな隙間などを狙っていく。
恋曰く、この距離くらいなら隙間を狙えるらしい。
更に近づいてきた者は、一般兵が霞の合図で一斉に矢を射て討ち取る。
取り敢えず此処までで三週間は稼いだ。

そして今、三度目の進行が始まった。
袁紹の黄金兵が突撃してくる。
大方、何をやっているんですの!?　さっさと突撃してシ水関を落としておしまい!とか言って、周りの諸侯（主に華琳）とかの口車に乗せられて、袁紹が自分の兵で突撃してきている、といった所だろう。
その後ろから華琳の黒兵、孫策様の赤兵、劉備の緑兵、その他の兵がついて来る。
どうやら犠牲覚悟で向かって来るみたいだな。
てか、黄金の無駄使いだなぁ……そう思いながら弓を引く。
そろそろ矢が半分くらいになった。
距離は少し遠いが、アレを射るには十分だな……さて、俺の秘密兵器を出しますか。

「言っておいたモノの用意はできたなッ?!」

「はいッ!」

俺の横に山積みになった物。
それは余っている槍や長物、木を削っただけの槍だ。
短槍、普通の槍、騎乗槍、長槍、戟、棒、物干し竿など様々だ。

「さあ、更なる混乱に見舞われるがいいッ!」

そう眼下に迫る反董卓連合に呟きつつ、俺は槍や長物を射始める。
周りの兵も相手の兵に同情しているようだ。
唯でさえ重い長物が、長距離から放物線を描き、正確無比な軌道で襲いかかってくるのだ。
俺の腕力で引くのと落下速度、気でのコーティングを得れば鎧どころか大木さえも貫通する威力を持つ。

それはかなりの脅威だろう。
案の定、敵兵は大混乱。
どうやら撤退する様だな。
少し早いが第二段階を開始するか……三度防衛したので、そろそろ華琳や周瑜様、諸葛亮が策を弄してきそうな気がする。
それで？水関を落とされるより、こちらで条件を掲示してその条件で勝つことができれば兵の消耗を防ぎつつ一月の時間を稼げる。
綱渡りだが月の為に……詠の策の為に必ず、成功させて見せるッ！
矢文を兵に用意させ後退する袁紹、華琳、袁術、孫策、劉備、高孫賛のすぐ近くと一般兵にも読める様に適当な所に矢文をばら撒くように射る。
ちなみに袁紹、袁術はオマケに普通の矢で縫いつけるように十五本射てやった。
クックック、袁紹は腰を抜かしてる。
袁術は……漏らしてるし……見なかったことにしよう……さて、それぞれの諸侯に送った矢文の文面はこうだ。

一つ、これよりこちらの武将である三名、呂布、張遼、朱然と各諸侯ら全てから代表する最強の将を三名選出し、三対三で戦うこと。

二つ、その間は何人たりとも手出ししない事。

三つ、我々三人を全て殺すか、捕獲した場合、このシ水関を部下の兵達に放棄させ、虎狼関に移動させることを誓う。

四つ、我々を殺さずに捕獲した場合、最初に捕獲した将の勢力に所属し、一生をかけて仕える事を誓う。

五つ、我々が一人でも生き残れば、一月の猶予を空けて攻撃をす

ることを誓ってもらう。

六つ、この上記の五つを我等の真名と武に誓い、守る事を約束する。

ちなみに先の超長距離射撃は俺こと朱然と呂布によるもので、槍を降らせたのは朱然個人である。

最強の将・呂奉先、神速の将・張文遠、最優の将・朱義封より

というものだ。

最優の将というのは、Ｆａｔｅでバーサーカーが最強、ランサーがちょっと違うけど最速、セイバーが最優だったから残った最優に決めた。

袁紹と袁術は馬鹿だから無視して突っ込んできそうだったので、挑発の文を書き足しといた。

この勝負逃げないよな？腰抜け、とかね。

確かに権力も欲しいだろうが、俺達を知る者は欲しがるくらいには強い筈だし、このルールで殺されることも低くなる。

それにこれを受けて約束を破ればかなりの悪い風評が流れる。

華琳や周瑜様、諸葛亮などは、この矢文で俺達が時間稼ぎをしているのを察するだろう。

はてさて、十中八九乗って来るとは思うが……どうなるかな？

Ｓｉｄｅ華琳

全く、非常識な事をするわね朱然……二度の進行に対して一里（４キロ）先の距離から矢を射て、ほぼ一矢一殺（ほぼなのは恋の矢が混じっているのと、恋の弓の腕を知らないから）を行ない。

三度目に至っては槍等の長物を射て、兵達が予想以上に混乱した……挙句の果てに、私の顔のすぐ横に矢文を射る精度、見事だわ。

でも覚えていなさいよ……朱然？

ニタリと嫌な笑いをする華琳。

しかしながら、その矢文の内容……うまくすれば正式に良将を三人も手に入れられる。

問題は袁紹と袁術が暴走して勝手に攻撃をすることだけれど……朱然があの二人を壁に貼り付けにしたことから、文にも挑発が書き足されているのでしょう。

この策、効果は中々のものだわ。

策の真意は時間稼ぎ。

ここで二十一日も費やしてしまうとは予想外だったわ……超長距離攻撃、予想外の射物、最後に勝てば難関であるシ水関を素道りできる可能性と自らを餌にした決闘。

恐らく、このまま無視して攻めればシ水関攻略はできる。

だが、次は虎狼関が待ち構えている。

兵の消耗は押さえたい。

それに朱然を捕まえられれば……フ、フフフ……。

この時、朱然は悪寒を感じた！

閑話休題。

一般兵にまで矢文を射たので内容は噂となって広がり、この勝負を受けた時に無視して数で押し潰そうとすれば悪評が立つ用意周到さ。

捕縛すれば最強の呂布、最優の朱然、神速の張遼を自らの陣営に加える事が出来るが、多くの勢力は自らの陣営に引き入れようとする為に殺される確率もかなり下がるわ。

本当によくできた策……考えたのは三人の中では朱然かしら？

武は春蘭に勝てるほどに秀で、智は並みの軍師を圧倒し、容姿は女と見紛う淡麗さ、統率能力も賊退治では並々成らぬ事は確認済み、他にも調味料の開発、服の意匠、武器の作成、他にも見ぬ才に溢れているであろう人物。

最優の将とはよく言ったものね。

本当にこの三人はいずれ劣らぬ英傑達……是非とも欲しいわ。

でも勝てなくては意味がない。

恐らく袁紹と袁術の二人が強引に捻じ込んでくるはずだから、三度目の様に言いくるめて春蘭、黒髪の山賊狩りで名を馳せた関羽、最後に呉の宿将と言われた黄蓋の三人にしましょうか。

この茶番だと思った反董卓連合、上手くすれば予想外の収穫も得られそうね。

Ｓｉｄｅ朱然

しばらく待っていると一人だけ？水関に近づき、一本の矢文を射てきた。

内容は簡単に訳すと、その決闘を受けるので首を洗って待ってい

ろだった。

「さて、後は勝ち残るだけだな……頼むぞ、恋、霞？」

「がんばる」

「よっしゃ！　水仙の策が上手く嵌ったな！　雑魚と斬り合うよか、コッチの方が何倍も楽しめるっちゅう話や！
最強の呂布、神速のウチ、最優の水仙、上手いこと書いたやん！
ウチら三人集まれば無敵や！
策とはいえ、最高の見せ場をくれた事、礼を言うで水仙！」

バシバシと俺の背中を叩く霞。

さあ、数十倍の数の前で決闘だッ！

第十章　策と朱然（後書き）

無い頭を使って捻りだした策はどうでしたでしょうか？
次回は三対十二の戦闘を書くつもりです。
お楽しみに！

ご指摘のあった五度も進行妨害できないだろ？
いきなり決闘というカードと切る不自然さはどうなんだ？
他にも諸侯いるんじゃね？
という意見を何とかできた・・・・・かどうかはわかりませんが
苦しい苦しいと何度も思いながら精一杯直したつもりです。
どうぞこの作品を見捨てないでやってください。

第十一章　シ水関と朱然（前書き）

十一章です。
作者はその場のノリで書いて投稿するのですが他の皆さんはどうなんだろう？

第十一章　シ水関と朱然

シ水関を背に俺、恋、霞の三人がそれぞれの武器を持って佇む。
それに相対するのは関羽、春蘭、黄蓋。

「この小石が落ちたら、始めさせてもらう」

俺は小石を上に弾いた。

その小石がゆっくりと――――――落ちた。

それを合図に、それぞれが弾かれたように動き出した。

俺は大牙を左手に持ち、背負って天翼を右手に持って右へ。

呂布は方天画戟を構え、真っ直ぐ走った。

張遼は飛龍偃月刀を振りかぶり、左へ。

関羽は青龍偃月刀を恋へと向けた。

春蘭は七星餓狼を携え、霞の方へ走った。

黄蓋は多幻双弓に二本の矢を番え、俺に射かける。

俺に飛んできた二つの矢をすぐにかわした。

「また会いましたね黄蓋様？」

「そうじゃのぅ、朱然よ」

俺達は睨み合う。

「お主の狙撃は見事なものじゃったが普通の矢で楯を貫通させる方法なぞ、弓使いとして見たことも聞いたことも無いぞ？」

「そうですか？　気で自らの得物を包み込んで強化するのですが……」

「ほう、気か……残念じゃが儂は気を扱ったことがなくての」

「そうです、かッ！」

そう言って俺は天翼で突きを繰り出した。

黄蓋は最小の動きでかわし、三対六本の矢を撃ち出す。

俺は大牙を楯にして弾く。

その僅かな隙に黄蓋は接近し、逆手持ちで左腰の剣を抜きつつ斬りかかる。

それを俺は天翼で受け止める。

「むぅ、儂の必殺の一撃を受け止めるとは……やるの？」

「いえいえ、黄蓋様こそ……逆手持ちでの神速の居合斬りは中々の威力をお持ちで……」

「お主、本気では無いな？」

黄蓋が目をスッと細める。

「本気といえば本気なんですけど？」

嘘ではない。

流れを見て動く俺は“ほぼ”本気だ。

「武人として本気のお前と勝負したいのじゃが？」

その言葉と共に空気が重くなった気がした。

目の前には歴戦の武人。

「……分かりました」

その空気に俺は……大牙と天翼を地面に刺し、拳を握った。

「それがお主の本気か？」

「先程も答えましたがアレも本気ですよ？　唯、一番使えるのが自分の身体だった……それだけですよ」

ブラブラと掌を振りながら、こともなげに言ってみる。

「では……行くぞッ！」

黄蓋は弓を持ったまま片手で斬りかかる。

俺は自然体で佇むのみ。

そこを黄蓋は容赦なく斬った。

黄蓋はそう思っただろう……しかし、その一撃は空振りに終わった。

「ぬッ?!　何故、剣が逸れる?!」

今のは爪専用の技の一つ届かざる左の護剣を素手用に改良したもの。

強いて名を付けるとすれば届かざる守護拳、と言ったところかな?

その速度は気の強化でほぼ視認不可能の域に達している。

その速度を以て、拳を穿つッ!

「これぞ素手で放つ技の一つ見えざる早き拳圧!」

「ぐあぁぁぁッ!!」

某デスメガネとほぼ同じ拳圧を連射し、黄蓋は全身に拳圧を受けて崩れ落ちた。

さて、他はどうなった……?

視線を向けるとまだ戦っているようだ。

恋は余裕そうだが、霞が春蘭に押されているようだ。

Ｓｉｄｅ霞

どうやら水仙は終わったようやな……くッ！

夏候惇の七星餓狼が飛龍偃月刀とぶつかり、鍔迫り合いになる。

流石は魏武の大剣と言われとるだけあるわッ！

大剣を弾いた所で夏候惇の攻撃が来た。

頭は悪そうだが、斬撃の一撃一撃が重いッ！

「神速とはその程度か張遼ッ？！」

「うるっさいわッ！」

偃月刀で滑らせ、更に大剣をいなしていく。

こんなん一々受けてられんわッ！

水仙と何度も戦ってウチは更に強くなった。

ウチの武器は速さや。

それを生かして誰よりも……あの時の水仙より早くなるッ！

偃月刀の無数の突きが春蘭に襲いかかる。

「てぇりゃぁぁッ！！」

「く、うぅぅッ！　だが、この程度の突きでは私は倒せんぞッ！」

やっぱり、この程度じゃ勝てんか……。

両者の距離が離れた。

お互いが間合いを取り合う。
ウチは上段に構える。
夏候惇は正眼に構える。
そして、動いた。
ウチは水仙からある技を教わった。
夏候惇にはウチの偃月刀がブレて見えるハズやッ！
それを今、使わせてもらうでッ！
「何ッ？！」
「顎（アギト）ッ！」
ウチの偃月刀を見て、水仙が教えてくれた技。
上下の顎を閉じるように同時に喰らいつく上下の超高速連撃やッ！
夏候惇はその連撃を大剣で受けた。
しかし、あの速度での衝撃は測り知れない。
その衝撃で夏候惇は気を失った。
Ｓｉｄｅ恋

「はぁぁぁぁッ！」

関羽が青龍偃月刀を振ってくる。

私は何も考えず、体の赴くままにさせる。
私は方天画戟を振る。

「ぐぁぁぁッ！」

それだけで事足りる。
本能が目の前の敵はそれで十分だと教えている。
今までは全ての敵がそうだと思っていた。
彼が来るまでは……。

「強いッ！　最強と言われるだけの事はあるなッ！？」

彼は私と戦って、唯一倒せなかった。
水仙。
不思議な人。
一緒に居るだけで心が温かくなる。
一緒に居たくなる。
彼が欲しい。
いつしか、私はそう思うようになった。
だから、私は戟を振る。

「あぁぁぁッ！」

関羽が向かってくる。

私は水仙と、月と、詠と、ちんきゅと、霞と、華雄の為に勝つ！

目の前にいる敵を倒すッ！
恋が戟を振う。
その思いの籠った一撃は、何より重い一撃になった。
「ぐぁぁぁッ！」
関羽は倒れ、敵は居なくなった。

Ｓｉｄｅ朱然

「恋、よく頑張ったな」
俺は恋の頭を撫でる。
「水仙！　あの技、ごっつええ感じやったで！」
「それは教えた甲斐があったよ」
霞が嬉しそうに近づいてきた。
さて、勝利宣言だ。
「見ての通りだッ！　我々は一人も欠ける事無く、勝ち残ったッ！
文の誓いを守り、一月の間を空けてから進行を再開してもらうぞッ！
これを破った時は、反董卓連合は卑怯者の集まりだと知れ渡るで

あろうッ！
それを恐れぬならば攻めて来るいいッ！」

一人も欠けずに勝ち残る事ができた。
綱渡りの策だったが、上出来なくらいに良くできた。
袁紹や袁術が癇癪を起さなければ問題無く一月待つことができるだろう。
一ヶ月が過ぎたとして残りは約十日。
その位なら問題なく時間稼ぎできるだろう。
後は詠の策が成功するのを待つばかりだ……頼むぞ詠！

第十一章　シ水関と朱然（後書き）

う～む、かなり悩んだ割に短かったような気がするのは気の所為でしょうか？
何かあればご一報ください！

第十二章　待ち人朱然（前書き）

風邪を引きました。
皆さん体調には気をつけましょうということで・・・・・・。
鼻が詰まって呼吸困難に・・・・・・プリーズ酸素！

第十二章　待ち人朱然

反董卓連合は約束を守り、一月後に攻略を開始した。

俺達は適度に敵を攻撃した後、すぐにシ水関を放棄して後退しながら全ての矢を使いきる勢いで射続けた。

それでも尚、敵は向かってくる。

一月も焦らされた所為で袁紹と袁術は痺れを切らしていたようで……何かもの凄い勢いで追撃してくるんですけど……怖ッ！

この時点で三日を使った。

俺達は矢が尽きた所で、急ぎ虎狼関に入城の後、籠城戦を開始。

シ水関を捨てる前に早馬を出して、矢や長物を用意させていたのさッ！

弓兵達と一緒に槍や長物を気でコーティングし、射る。

しかし、連合も黙ってはいない。

華琳達は鉄を何重にも重ね、そのまた更に大木を取り付けた馬車の様なものを用意していた。

周瑜様の方は、上手く袁術を楯にしている。

袁術の軍を削って、反董卓連合が終わってから独立する為だろう。

劉備軍やその他は最早、勝手に袁紹が楯になっている状態に……

馬鹿すぎるぞ袁紹……。

そんな相手に呆れつつやはり籠城を選択し、そうしている間に華雄が詠から文を届けに来た。

虎狼関の一室にて、その文を受け取る。

「詠から水仙への文だ。　受け取れ」

華雄が俺に文を渡し、フンッ！と言われた。

どうやら前の足手纏い発言で、かなり嫌われたようだ。

「まあまあ、華雄。　そう水仙を嫌うこと無いで～♪」

霞がニヤニヤしながら華雄に近づき、耳打ちをする。

それを聞き終わった華雄はボンッ！と赤くなり、こちらをチラチラ見たと思うと近づいてきた。

「わ、私は別に感謝などしていないんだからなッ！」

そう言って、部屋を出て行ってしまった。

ツンデレか？

俺はそんなことを思いながら文を見る。

ゴメンなさい。

この一言で分かったと思うけれど……本当にごめんなさい。

私の策は失敗したわ。

人質に取られていた月の両親は何とかできたけど……十常侍はどうにもできなかったわ。

私達は隙を見つけられたら洛陽を出るつもり。

貴方達もすぐに逃げて頂戴。

最後に、私達に協力してくれて本当にありがとう。

文には皺と滲んだ跡があった。

恐らく詠が文を抑える手で皺を作り、堪え切れなかった涙を零しながら書いたのだろう。

そうか……時間があってもどうにもできなかったか……なら、後にすることは董卓である月を討ち取るまで終わる事が無いこの茶番劇を一刻も早く収めることだ。

不幸中の幸いにも月はほとんど軟禁状態で容姿は知られていないし、詠も月に付きっきりだったので同じようなものだろう。

できる限り被害を食い止め、穏便に納める事がベターな選択だ。

取り敢えず、月達には皆仲良くを掲げる劉備の所に行ってもらおう。

よし、虎狼関は恋と霞に任せて、俺は月と詠達の所に向かうとしよう。

そう思った矢先に、とんでもない報告が入った。

「も、申し上げます！」

「どうした？」

「華雄将軍が敵の挑発を受け、出撃をしましたッ！」

「ハァァッ？！」

俺は絶句した。

せっかく華雄の死亡フラグを無くしたと思ったのにッ！

華雄がここに来た時点で気が付かなかった俺の落ち度だッ！

手紙を受け取った後に華雄をすぐ追い返すべきだったのだ。

俺は自分の部隊に逃げるように伝えたが、ついて行くと全員がついてきた。

馬鹿ばっかだよコイツら……。

俺は近くにあった大渦を掴み、部隊を引き連れ城門を駆け抜けた。

そこはもう、対等な戦場ではなく負け戦だった。

華雄は既に関羽と張飛に敗れ、敗走。

霞は春蘭と再戦後、負けて捕縛。

恋は部隊と共に戦ってはいるが、数の暴力に徐々に押され始めている。

「クソッ！　どけどけどけぇぇぇッ！！　命が惜しい物は引けぇッ！」

俺達の部隊は突撃陣形で一点突破し、恋のところまで一気に突き進んだ。

恋のいる場所に来たところで、密集隊形を取る。

「恋！」

「水仙……」

「ここは俺が殿を受け持つ！　恋は部隊を連れてどこか遠くに逃げろッ！　生きていれば、また会えるからッ！」

俺の願いに恋はコクッと深く頷くと部隊を引き連れ、引いて行った。

恋が引いたのに安心して気が緩んだのだろう。

微かに、でもはっきりと鈴の音が聞こえた。

俺が振り向いた瞬間、死角からの一撃で昏倒させられてしまったのだった。

第十二章　待ち人朱然（後書き）

長かったので切りの良い所で切ったら短くなりました。
次回の更新は明日します。
風邪でおかしな事を書いていたらご意見を。

第ＥＸ・１章　作者とこれからと朱然さん（前書き）

今更ですみません。
ネタ思いつかなかったので・・・・・・

第ＥＸ・１章　作者とこれからと朱然さん

祝！　総合ＰＶ１００００００＆ユニーク１００００００人超え！

朱然「作者～」

作者「何よ？」

朱然「とっくに超えてたの気付いてたよね？」

作者「うむ、気付いてました」

朱然「微妙に偉そうに言うな！」

作者「まあそれは置いといて現実がリアルに大変な事が起こったり、実家に帰ってて更新できなかったり、携帯で書こうと思ったけど面倒そうだったのでやめたりしたよ」

朱然「ふ～ん、現実がリアルに大変ってのは？」

作者「自分で振っといて何だけど聞くな……ただ俺の人生で本気と書いてマジと呼べるほどに左右する出来事だとだけ言っておくよ」

朱然「凄い気になるんだけど？　そこまで言うなら聞かないよ」

作者「そうしてくれ……」

朱然「で、今後の展開だけど今日更新した小説の最後に誰にやられたかは予想付くよね？」

作者「若い頃にワンパクだったフントシ愛用の鈴の人です」

朱然「もういい、わかった。　で、恋姫編はどこまで書くんだよ？」

作者「色々と今後の世界についての大まかな予定は立ててるんだけど恋姫編はラノベ版呉アフターまで書いて天寿を全うしてもらいます」

朱然「は？　天寿全うってこれで終わり？　憑依とか転生とか召喚されるとか書いてんのに？」

作者「いえいえ、まだ続きますよ？」

朱然「ん？　ホント何言ってんの？　頭、大丈夫？」

作者「ふっふっふ、次の世界はＦａｔｅ編ですから……死んでも問題なし」

朱然「ま、まさか？！　わかったぞッ！　何となくどうなるかがッ！」

作者「さーて、恋姫編がきちんと書き終わるかどうかも分からないのにプロローグくらいは書いておこうかな？」

朱然「頼むからまずは恋姫を完結させることを目標にしてくれ！」

作者「ＯＫ！　今の風邪を直したらなるべく時間がある日にいっぱい書きます。　ストックとか作るよ」

朱然「ホント頼むよ……唯でさえストック作んないでノリで投稿してたんだし……しかし、次がＦａｔｅ編かーこういう盛り上がりそうなのはもうチョイあとじゃない？」

作者「そうなんだけど、完結してない作品に介入すると碌な話にならなそうなんだもん」

朱然「それはなんとなくわかるよ。　途中にぶった切るかオリジナルエンディングとかね」

作者「作者はこの作品が処女作です。　ぶっちゃけオリジナルエンドとか自信がありません」

朱然「まあ、作者のどうでもいい話はこれぐらいにしておくとして、次回！隠密朱然」

作者「お楽しみにッ！」

第ＥＸ・１章　作者とこれからと朱然さん（後書き）

という訳です。
まずは恋姫編を完結させる事を目標に頑張ります！

第十三章　隠密朱然（前書き）

十二章から切った後半です。

第十三章　隠密朱然

俺は気がついた。
体は縄でグルグル巻きにされている。
あの鈴の音は甘寧か……。
それを確認した所で孫策様と周瑜様が入ってきた。
どうやら孫策様達に捕まったらしいな……。
「目が覚めた？」
「ええ」
「自分の立場はわかっているな？」
「ええ、ところで俺の部隊は？」
「貴方が捕まったところで全員大人しくなったわ」
「そうですか……」
俺はホッと胸を撫で下ろす。
話を聞くに俺は甘寧に捕まり、部隊の皆も多少の怪我はあったが死人は何とか出なかったようだ。
華雄は関羽と張飛に負け敗走し行方不明。

霞は華琳に捕縛。
恋は無事逃げ遂せた様だ。

せっかく介入したのにこれじゃあ、原作と変わらないじゃないかッ！

しかし、それほどまでに世界の修正力は強力だったか……俺は少し甘く見ていたのかもしれない……。

そんなことを思いつつ説明を受ける。
今はもう洛陽が見える目と鼻の先に来ているらしく各諸侯が牽制し合い膠着状態だという。
ちなみに麒麟は勝手に俺の居る孫策の陣に来たらしい。
後、俺の武器は全て部下達が回収していたらしい。

ってらしいばっかだな……。

俺は先程の事を実行する為に取引を試みる事にする。

「取引がしたい」

「そんな事がまかり通るとでも？」

周瑜様がニヤリと言う。

「俺の取引を受けてくれるのならば今この時より正式に貴君、孫策様に仕える事を己の真名に誓います」

「それだけでは……」

周瑜様がそこまで言ったところで孫策様が手で制す。

「ここまで言うなら良いんじゃない？　冥琳？」

「ふむ、正直物足りない気もするが、最優の将が自ら言うのだ内容によっては聞いても良いかもしれん。
で、その内容とは？」

さっきは人の悪い笑みを浮かべたくせに今度はしれッと聞く。

「俺に洛陽へ単独で偵察をさせてくれ。
もちろん、これから先に重要になってくるであろう物の場所も大体把握しているので回収して来ようと思うのですが？」

唯、真っ直ぐに孫策様を見る。
孫策様も俺を真っ直ぐに見る。

そして――――――

「わかったわ、その条件呑ませてもらう。　そうした方が良い事ありそうな気がするから」

「また、例の勘？」

「そうよ」

こともなげに言う孫策様。

「ありがとう」

孫策様は礼を言った俺の縄を斬った。

「行ってくるといいわ」

「はい……私の事はこれから真名……水仙とお呼びください。　ではッ！」

俺は気で体を強化し、鋼糸を操り洛陽に侵入した。
この時、俺は黒い死神さんの仮面と黒コートをつけている。
まずは今後重要な品である正確な地図を二組と台帳を手に入れてから二人を探す。

お、月と詠を見っけ。
護衛は一人もいないのか……。

俺はすかさず二人の前に現れる。

「だ、誰ッ？！」

警戒する詠。

ま、当然だよねー。

俺は仮面を外す。

「「水仙（さん）！」」

「今、洛陽の外は各諸侯が牽制し合っているが、我先にと洛陽に群がってくるのは目に見えてる。
時間が無いから俺達がシ水関に向かった後の事情は話さなくていい。

取り敢えず、劉備の所に二人を送るから二人共しっかり捕まってくれ！」

そう言って仮面をつけ直し詠を脇に抱え、月に首に掴まってもらった。

「え？　ちょっと？！　どこ触ってッ、きゃあぁぁぁッ！！？」

「へぅ～～～～！！？」

二人を抱え鋼糸で動きをサポートしながら跳躍。
城壁もフック付き鋼糸で難無く登ってすぐさま、洛陽を脱出。
劉備の陣へコソコソと侵入。
劉備の天幕に何とか辿りつきなるべく音をたてないように入った。
そこには軍議中だったのか劉備、関羽、張飛、諸葛亮、鳳統、趙雲が居た。

「失礼する」

「「何奴ッ？！」」

「誰なのだッ？！」

突然の俺のあいさつに関羽と趙雲、張飛がそれぞれの武器を俺に向ける。
それに月と詠が怯える。

「アンタ何考えてんのよッ！」

詠がジタバタ暴れるので月含め地面にそっと降ろしながら詠に耳

打ちをする。

「暴れるな、後、今は仮面って呼んでくれるか？」

ここで名前呼ばれると正体バレるし。

というか髪でバレるか……？

「で、貴殿等何者だ？　事と次第によっては……」

関羽が凄む。

何だろう？

この時代は仮面を付けると認識阻害魔法でも掛かるのか？

「俺の名は仮面」

「仮面って……」

ジト目で呆れる詠。

「で、その仮面さんは一体何の用なんですか？」

真面目な顔で劉備が聞く。

「このお二人を保護して頂きたい」

「誰なのだ？」

張飛が次に聞く。

「董卓様と賈駆様だ。　諸葛亮様に鳳統様はもう知っているでしょうが十常侍に傀儡となっていたのです」

詠が、敵に正体を明かすなんて何考えてるのよ?!とか騒ぎ出すがスルー。

「我々に何の見返りがあるのだ?」

趙雲がもっともな事を言う。

「見返りは少ないとは思うが先程洛陽の中で手に入れたこの地図と劉備様に俺個人から今出せる金、全額だ。
はした金だが好きに使ってくれて構わない」

そう言って、正確な地図の束と俺の財布ごと渡す。
金は今までの儲けでそれ相応とはいかないがそれなりの金額を渡せたはずだ。
それを広げ諸葛亮と鳳統が驚きマジマジ見つめる。

「はわわ！　これは貴重で正確な地図でしッ！　是非とも欲しいでしゅッ！」

「あわわ！　これがあれば戦略を立てやすくなりましゅッ！」

此処まで噛むとは……最早、特技の域だなぁ。

「「これだけでも凄い金額のお金だよ（なのだ）ッ！」」

「確かに金があればこの先随分と楽になる」

渡した金額に劉備と張飛、趙雲が感心する。
俺はそれを無視して話を進める。

「このままでは罪も無い董卓様と賈駆様が処刑されてしまうのです。それでどうでしょうか？」

「うん、いいんじゃないかな？」

軽ッ！
話し進めてるの俺だけど、かなり心配になる軽さだ……。

「しかし、匿えば事が露見した時に大変な事になるのではないか？」

「そ、そうです桃香様！」

当然のことを趙雲が言い関羽が同意する。

俺は趙雲用の秘密兵器があるのだ！

懐からそっと秘密兵器を趙雲にチラつかせる。

「む……ッ？！　それはッ、噂に聞いた幻の絶品メンマ料理書だとッ！？」

「差し上げますよ？」

「ほ、本当かッ！？」

「私が作者ですから中身は私の頭に入っています。　続編も書いたら趙雲様宛にお送りしますが？」

「な、なんとッ？！　お主が彼の有名な鉄人料理人、劉昴星（リュウマオシン）先生か！！」

仮面越しに趙雲を見る。
趙雲がふむ、と頷き一言。

「良いのではないでしょうか？」

「星ッ！　そんなものに釣られてどうするッ？！」

関羽が趙雲を睨みながら言う。

「そんな物とは何だ愛沙ッ？！　至高のメンマを更なる高みへ導く物のだぞッ？！」

やいのやいのと関羽と趙雲が言い合いを始める。

てかどんだけメンマ関係が好きなんだ？
吃驚です。
えっ？
何でこんな物を書いたかって？
だって、この時代やる事あんまり無いんだもん。

「あちらは放っておいて、これから董卓様と賈駆様に真名以外を捨てていただき、死んだことにしていただけば良いかと。
そうすれば勘の良い諸侯以外はほぼ騙せると思いますが？」

「そ、そうですね。　そうすれば何とかなりそうです」

「確かに曹操さんや周瑜さんはあたりは気付きそうですが、確実な証拠も無いことですし指摘はできないかと……」

「じゃあ決まりッ！」

「では匿ってもらうということでよろしいか？」

俺は最終確認を兼ね聞き返す。

「うん、安心して任せてくださいッ！」

自信満々に笑顔で言う劉備。

この後、俺は孫策様の陣へ戻り、孫策様と周瑜様に地図と台帳、玉璽の在処を教えた。

これで何とかなったかな？

第十三章　隠密朱然（後書き）

未だ風邪が治らないのでこれを投稿したら寝る予定。
次回からは呉ルートに入って孫策と周瑜を助けられるような感じにしていく予定。

第十四章　玉璽と朱然（前書き）

やっと風邪が治った。
という訳で十四章投稿です。

第十四章　玉璽と朱然

「では改めまして。　建業の朱家、朱治の息子、朱然です。　水仙とお呼びください。
これから孫策様……いえ、呉に仕えさせていただきます」

洛陽から地図と台帳を回収した後、呉の武将全員に自己紹介することになったのだ。

「二度会っているけど改めて自己紹介するわ。　孫伯符よ。　よろしくね水仙、期待してるわよ？
あ、それと私の事は雪蓮って呼んでね？　様とかさんとかはちゃんとする時以外は付けなくていいわ」

ウインクを飛ばす雪蓮。

早くもからかわれる予感……。

「雪蓮、それでは部下達に示しがつかないだろう？　と言っても聞かないのが雪蓮か……もう知っているとは思うが周公瑾だ。
私の事は冥琳と呼んでくれ。　先の単独潜入の際、地図と台帳を手に入れた事、感謝する」

雪蓮を窘め、クールに自己紹介する冥琳。

格好いいなぁ～。

「あは♪　貴方がかの有名な朱然さんですねぇ～。　じっくり色々聞きたいことがいっぱいです～。

私は陸伯言です～。　穏と呼んでください」

スローモーな口調で言う穏。

てか、じっくり色々って何だよ？

「穏よ、趣味も程々にせぬか。　黄蓋公覆じゃ。　シ水関では世話になったの？　儂の事は祭と呼べ」

今度は穏を祭が窘めた。

絶対、再戦申し込んできそうだ。

「姓は甘、名は寧、字は興覇、真名は思春だ」

何というブリザード！

単純完結な自己紹介だな。

視線だけで殺されそうだ……。

「周幼平ですッ！　よろしくお願いしますね水仙さん！」

元気いっぱいだな明命は。

実史で朱然は周泰の部下になるはずだけど、そこら辺はどうなるんだろ？

「まあ、自己紹介はこんな所かしらね？」

「そうだな……では、今後の方針を決めるぞ。

最初に地図と台帳を手に入れようと思っていたのだが、水仙が先だって調達してきたからな。

それで、次なる目標は玉璽を見つける事なのだが……本当なのだろうな水仙？」

疑問の視線を向ける冥琳と雪蓮、話を聞いていないので首を傾げる二人以外。

「本当だ。　玉璽の場所はほぼ間違いなくあの場所にある」

俺は断言する。

何所にあるかは間諜が居るかもしれないので今は言わない。

実際に行って確かめたしね。

「じゃあ、決まりね」

「ふむ……ではまず責任者と話し合い、復興の準備をした後、部隊を二つに分けそれぞれの役を果たしてもらう。

雪蓮、私、明命、思春、水仙は玉璽回収。　穏、祭殿はそのまま街の復興をしてくれ。

資材の出し惜しみはしなくていい」

冥琳がそこまで言った所で伝令兵が走ってきた。

「袁紹軍並びに袁術軍がぶつかり合いながら洛陽に入城しました！

それに続き、各諸侯も曹操軍、高孫賛軍、劉備軍を除く軍が殺到しています！」

「わかった。　我々も洛陽に入城する！　しかし！　乱暴狼藉を行った者は斬首だ！

孫呉の正規軍の誇りを忘れるな！」

こうして、俺達呉は洛陽に入城した。

中は酷いものだった。

黄巾党の残党が洛陽を荒らしまわったからだ。

雪蓮はいつか根絶やしにしてやると鼻を鳴らす。

すぐに兵達に指示し、炊き出し、治安巡回、仮設天幕の設置、長老との会談を行った。

しばらく街の復興作業をする為に留まるらしい。

蓮華と祭に計画のズレがどうとか言っていたが、恐らく袁術からの独立する計画の事だろう。

雪蓮と冥琳と俺の三人が残った。

「まったく、戦争の爪痕は弱い者達ばかりに皺寄せがいくわね……」

雪蓮がギリッ！っと唇を噛む。

「弱音は言うな。　雪蓮の優しさは誰よりも知っているつもりだが、天下を取るならばその甘さが時に覇業の妨げになることもある」

「そうね。　もう、人前では言わないわ」

「わかっているならいい」

「……」

俺は黙っているしかなかった。

「それにこうして頼れるの者も我が軍に入ったのだ。　事後の事は次の世代……蓮華や水仙に託さないと……」

「……仕えてすぐそんなことは言うなよ。　俺は絶対に二人を……呉の皆を……俺は守りきって見せるよ」

「フッ、頼もしい事を言ってくれるな？」

「フフ、期待しちゃうわよ水仙？」

今度こそ、世界の抑止力を超えて三人の死亡フラグをへし折ってみせる！

自然と拳を握る力に力が入った。

さあ、玉璽を取りに行きますかね。

「そろそろ、玉璽を取りに行こう」

「む、そうだな」

そして、町はずれの井戸に着くと井戸は輝き、龍が天へ登っていた。

「な、何だこの光は……」

「玉璽はこの中だから、ちょっと入って取って来るよ」

こともなげに俺が言う。

「だ、大丈夫なんですかッ?!」

明命が驚く。

「大丈夫だよ、体に異常とかが出る訳でも、呪いが掛かる訳じゃないから」

俺は井戸に入った。

中の水は枯れていたので巾着に入った玉璽はすぐ見つかった。

「よっと！　はい、これ玉璽ね」

井戸の底から跳躍し、雪蓮に巾着を渡す。

雪蓮が俺から受け取った巾着から玉璽を取り出した。

「へぇ～、これが玉璽か～」

「ふむ、本当だったのか……」

えぇー、本当だったのかって信用してなかったんですか冥琳さん?

いや、確かに敵対しましたけども！

「冥琳、孫策様は天より玉璽を授かった徳のある人と噂を流そう」

「ああ、私も同じことを考えていた。　明命、兵を何人か民に偽装させ先程、水仙が言った噂を流せ」

「了解であります！」

明命はそう答えると風の様に走っていった。

「さて、これからは徳ある王として演技してもらわないといけないね？」

「私の言いたい事をこと如く先に言ってくれる……まあ、頼もしいとでも思っておこう。

肩身の狭い思いをするが我慢しろよ雪蓮？」

「うぇぇ……面倒くさいなぁ、もう……しかも冥琳が二人いるみたいよー……？」

ウンザリといった顔をする雪蓮。

「はいはい、愚痴は俺が聞いてあげるから」

「わかったわ。　今のはちょっと本音を漏らしただけ。　水仙、前言撤回は認めないわよ？」

「前言撤回なんて言わないよ」

「あぁ、そこは冥琳と違って水仙は優しいわぁー。　さっすが、最優の将ね！」

「いや、それは言葉のアヤというか！　自称みたいで意外と恥ずかしいんだけど……」

矢文を出した後に自称最優の将って書いたのが結構、恥ずかしかったので悶えたのだ。

でも最強の将と神速の将と来て、唯の朱然じゃ明らかに収まりが

悪いというか、違和感がするし……。

「いいじゃない減るものじゃないし、これからは最優の将って名乗っときなさい」

「まあ、恥ずかしいけど了解～」

「二人共、行くわよ」

俺達はその後、洛陽復興を続けた。
祭は何やらやる事があるとかで蓮華の所に行った。
他には曹操、劉備の軍が復興を行った。
他の諸侯達は無駄な事とせせら笑って自らの領地へ帰っていった。
だが、確実に洛陽の民達には笑顔が戻っていった。
それだけは自信を持って言える。

第十四章　玉璽と朱然（後書き）

しばらくは呉ルートを行く予定。
では次回、第十五章　合流と朱然。
期待せずに待っててください！

第十五章　合流と朱然（前書き）

ゆっくりと更新していきたいと思います。
応援してくれる皆さんに感謝を！

第十五章　合流と朱然

玉璽を天から賜った徳の人と噂を流した事によって、雪蓮の元には様々な人材、資材、資金が集まっていった。
そうして援助が援助を呼び好循環となって俺達は洛陽を復興していった。

それから早二ヵ月が過ぎた。
董卓は暗殺されたとか逃げたとか様々な噂が流れた。
劉備は約束を守ってくれたようだな……華琳は洛陽入城時に少帝を保護したらしいが、政治利用するつもりはないようだ。
袁紹は権威を手に入れられなかったからか諸国に戦を仕掛け領土拡大をしているらしい。
高孫賛は地味に袁紹に領地を奪われ、劉備の所まで逃げた様だ。
劉備は徐州の州牧になったが、どうやら華琳あたりが裏で糸を引いているっぽい。
一体、華琳は何を考えてるのやら。
で、我が主である雪蓮と袁術の仲が日増しにギクシャクし始めている。
袁術は最近人気のある雪蓮が気に入らないらしい。
まったく、あのお子ちゃまめ……また泣かしてやろうか？
今日も今日とで雪蓮は袁術に呼び出されていた。
どうやら街単位で民達が一揆をするという情報を得たらしい。
まあ、その一揆とやらはこちらの策だが、雪蓮にその一揆を起こした暴徒達を鎮圧をしろと命令をしてきたのだ。
江東から十万の暴徒が押し寄せてくるという設定だし、袁術の兵

の質では太刀打ちできないからね。

「って、皮肉言ったんだけど、それでも気付かないのよねぇ～」

「馬鹿だな」

「元から馬鹿でしょ？」

「お馬鹿さんですねぇ～」

上から冥琳、俺、穏の順。

「しかし、やりやすいのは確かだ」

「でも～」

雪蓮は詰まらないといった態度をとる。

「はいはい、楽できるなら楽しとこうねぇ～主様～」

俺は伏目がちになって言う。

ここ最近、雪蓮の愚痴を聴いていた為にずっと伏目がちだ。

「水仙……最近、私に対して敬意が無いんじゃない？」

む～、と俺にいう雪蓮。

「敬意と忠誠は別という事で」

「何か引っ掛かる言い方だけど、まあいいわ。　さあ、始めるわよ

！　私達の戦いを！」

「ああ」

「応！」

「はい～」

返事をした所で思春と明命が走ってきた。
すかさず冥琳が確認と指示を出す。

「興覇、幼平、移動準備は？」

「問題ありません！」

「完了しました！」

二人共淀みなく答える。

「穏は兵糧を頼む」

「頼まれましたぁ～」

こうして俺達は江東へ一揆として偽装していた民兵を率いる蓮華と合流する為に粛々と兵を進めた。

蓮華とは一年ぶりくらいか……。

「前方に軍勢を確認！　黄の旗と孫の牙門旗、黄蓋様と孫権様です！」

明命が報告する。
考え事をしていて見逃してしまったらしい。

「さて、三姉妹久しぶりの再会ね……」

「俺も一年ぶりに会うなぁ……ここ一年は手紙一枚と伝言一言だったから真面目な蓮華は会った瞬間に怒鳴られそうで……」

「ご愁傷様、自分の所為よ水仙？」

「大人しく説教を受けますよ……」

傍から見た俺の姿はさぞ小さく見える事だろう。

そして、合流。
三姉妹が戯れ合う。
雪蓮が苦笑し、蓮華が呆れ、孫尚香が笑う。
と、蓮華が俺を見つけた。
何か地響きが聞こえてきそうな足取りでこちらに向かってくる。

怖ッ！

「水仙！！
貴方、私に手紙一枚残して消えてみたり、無償で近隣の村や街を助けて曹操の所で客将をしたと思ったら反董卓連合の時には祭と一騎打ちをする！！
噂を聞いた時、私とても心配したのよ？！」

「蓮華さん、取り敢えず落ち着きましょう」

取り敢えず宥めてみる。

「貴方は初めて会ったときからどこか飄々としていて掴み所が無いように見えたけど、どこか危なっかしいのよ！」

「いや、危なっかしいって――――――」

「黙って聞く！」

「――――――……ハイ」

無理だ……俺には抑えきれない。

「まったく、どれだけ私が貴方の事を心配したのかと思って――――」

「そこまでよ蓮華」

「――――――雪蓮姉様！」

助かった……このまま、説教地獄が続くかと思ったよ……。

「邪魔をしないでくださいお姉様！」

「今は我慢しなさい、全部終わったら存分に説教してあげなればいいでしょ？」

全然助かって無かった……。

「わかりました……覚悟してなさい水仙……」

蓮華が怖いよぉ！？

「ねえねえ！　この人が朱然？」

「そうだ、俺の事は水仙と呼んでくれて構わないよ」

「そう？　じゃ、シャオの事は小蓮って真名なんだけど、シャオって呼んでいいよ！」

「わかった。　シャオ、これからよろしくな」

「うん、よろしくしてあげるー水仙♪」

シャオが満面の笑みを浮かべた所で蓮華が切り出した。

「お姉様に会わせたい者が居ます。　さあ、呂蒙」

「は、はい！　姓は呂、名は蒙、字は子明、真名は亞莎です。　孫策様のお噂はかねてより聞き及んでいます！」

「そう……ありがと、私の事は雪蓮でいいわ。　真名を呼んで良いかしら？」

「こ、光栄です！」

「亜莎は今回の策を計画し実行した者です」

「ほう、この者が……私は周瑜、冥琳と呼んでくれ」

「よろしくお願いします！」

「俺は朱然だよろしく」

「あ、貴方がシ水関でその名を轟かせた最優の将さんですかッ！」

「そうだけど……ちょっと落ち着こうよ」

他の人に言われるとやっぱり恥ずかしいぞ。

そんな感じで亜莎が呉の仲間達に自己紹介をした。

「じゃあ、軍を反転させて一気に袁術を討ち取るわよ！」

いよいよ、呉の再建だ。

第十五章　合流と朱然（後書き）

ルートに沿った話でした。
普通すぎて拍子抜けでしょうか？

感想を書いて頂いたＰＨＡＮＴＯＭ様、ナオーキ様、ヨッシィ～♪♪様、感想版にてお返事を書かせて頂きましたが、今更アレ？気付かないんじゃね？
と思ったので改めて返事をさせて頂きます。
ありがとうございました！

次回で取り敢えず一段落です。
次回！　再建と朱然！　お楽しみに！

第十六章　再建と朱然（前書き）

ネタが・・・ネタが欲しい・・・。

第十六章　再建と朱然

「進め、進めェェ――――ッ！」

号令が響く。

只今、袁術軍を攻撃中です。
袁術軍は次々と倒されていきます。
兵の質悪ッ！
ああ、早くも場内に引いて行った。

「よし！　すぐに城門へ接近――――――！」

「蓮華待った！」

「どうして止めるの水仙！？」

「城壁を良く見てくれ」

「えっ？」

城壁の上には弓を構える敵兵の姿。

「あっ……」

「確かに追撃はできるけど、さっき指揮しているのは張勲しかいなかっただろ？
中で袁術が指揮をしている。　そのまま追撃すれば多くの兵が矢で射抜かれるよ？」

「ごめんなさい、止めてくれてありがとう」

頭を下げようとする蓮華。

「待った！　蓮華、俺は呉の将で君は呉の王族なんだ。　そうでなくても今の君は総大将だ。
礼は言っても頭は簡単に下げてはいけないよ？」

「ッ……本当にありがとう水仙、これからは気を付けるわ」

また礼を言う蓮華。
少し離れた位置では雪蓮と冥琳がこちらを見て話していた。

「ふぅ、蓮華を水仙が止めてくれたみたいね？」

「水仙は蓮華様の友というだけあってちゃんと見てくれる。　あれは最優の将と名乗るだけあって軍師としても中々のものだ」

「あら、冥琳が褒めるなんて珍しい」

「私だって褒められる者は褒めるさ。　蓮華と水仙か……我々の後ろ姿を見ているようではないか？」

「フフッ、役割的にはそうかもしれないけど、性格は逆ね？」

「そうだな……これからもあのように支え合って行くのだろうな……」

「そうね……」

雪蓮と蓮華は居なくなってしまうかのように遠い物を見るように目を細めた。
そして、二人は前の二人の元へ歩き出す。

「蓮華、引き続き総大将を頼むわね？」

「はい！」

「水仙、蓮華様を上手く補佐してやるんだぞ？」

「わかってますよ冥琳、袁術軍を撃破したら雪蓮自身が袁術の頸を取るんでしょ？」

「ええ、その通りよ。　まったく、あんなのに良いように使われていたなんて涙が出るわ……」

「まあまあ、泣くのは今日で終わりだよ。　明日からは大手を振って呉を再建できるんだから」

俺が雪蓮を励ます。

「そうだな……悔しいのはわかるがもう少しだ」

「でも、歯ごたえが無いわ……」

「姉様！　不謹慎です！」

「蓮華、落ち着いてよ……雪蓮、このままいけばいずれ曹操とか他の英傑達と戦うことになるんだから、早く袁術を討ち取って準備を

することを勧めるよ？」

「水仙の言う通りだ」

冥琳がそう言った所で祭が現れた。

「策殿。　城攻めの下知をくれい！」

「祭、蓮華にさっき言ったけど袁術軍からもう一波来るわよ？」

「何じゃ！　それならばさっさと来い袁術！　儂が叩き潰してやろう！」

祭が息巻く。

血の気多いなぁ～……高血圧で倒れないか心配だ。

今まで工作活動とかやってたらしいからストレス溜まってるんだろうなぁ～。

そんなことを思っていると城門が開き、袁と張の旗が現れた。

先方は祭なのだが、すごい嬉しそうにしてる……。

「じゃあ、蓮華号令を」

「わかったわ、聞け呉の将兵達よ！　この戦こそ、これからの呉の第一歩であり始まりだ！

皆の力を今一度、私に貸してくれ！　そして、皆で勝ち取ろう！

皆が平和で笑顔溢れる未来を！

誇れる郷土を！　自由を！」

「「「「「おおぉぉ――――――――――ッ！！」」」」」

凄い音量だ。

「さあ、今までの袁術の仕打ちを袁術自身に利子をつけて返す時だ！　袁術の喉元を喰い千切れ！　その体を剣で斬り裂け！　己の持つ槍で突き穿て！」

「「「「「応ッ！！」」」」」

「城門を突破し、一気に城を落とす！　己の全てをもって進め――――ッ！」

「「「「「応――――――――――ッ！」」」」」

呉軍と袁術軍がぶつかり合った。

兵数は袁術軍の方が幾分勝っているが、質では圧倒的にこちらが有利だ。

勝負は程なくして終わった。

結果は……俺達の勝ちだ！

「我々の勝利だッ！　皆、勝鬨をあげよッ！」

「「「「「おおおぉぉぉ――――――――――！」」」」」

で、城内。

お、早くも発見。

「七乃、妾は負けてしまったのかのぅ？」

「はい～、それはもうバッチリ負けちゃいました～」

「七乃七乃、妾は蜂蜜水が飲みたいぞ！」

「ムリですよぉ美羽様～。　それよりも早く逃げないと怖い怖い孫策さんがやってきますよ～」

俺は腕を一振りし、鋼糸を投擲。

二人を縛り上げる。

「な、何じゃーっ？！」

「これは鋼の糸と書いて鋼糸ですねぇ～。　珍しい武器ですよ美羽様～？」

「そんな事を言っている場合ではないぞ七乃っ！」

「慌てふためく美羽様、とっても可愛いゾ☆」

「漫才はさておいて、もういいかしら？」

雪蓮と俺が現れる。

「「出た（のじゃ）――――――ッ！」」

ガクガクと震える二人。

「人を化け物のように……」

「やあ、久しぶり～、シ水関では愉快な姿を見させてもらった朱然です」

「あれはお主の所為かッ！」

袁術が俺の自己紹介に反応するがスルー。

「で、袁術ちゃんには今までこき使ってくれたお礼をしたいのよ」

そう言って雪蓮が剣を鞘から抜く。

「ひ――――――ッ、妾を殺すのか?!」

「当然じゃない」

袁術達が足の引っ張り合い?という名の漫才を始める。

雪蓮は一歩、二歩とゆっくり近づいていく。

「さあ、終わりよ袁術ちゃん?」

「あぅあぅあぅあぅ～～～～……」

袁術が泣き始め、それに連れて張勲まで泣き始める。

袁術は命乞いを始め、張勲が自らの命と引き換えに袁術を助けてくれるように頼む。

しかし、雪蓮はそれを一蹴した。

そして、雪蓮は剣を掲げ――――――
――――――振り下さなかった。

「「ほえ？」」

「別に今更、貴方達の命を貰ってもいらないしね～」

雪蓮は剣を鞘に戻しヒラヒラと手を振る。
俺も鋼糸を外した。
袁術と張勲は雪蓮に二度とこの国に近づかないと約束させ追放することにしたらしい。

破ったら即、斬首とか……て、早ッ！
凄い勢いで逃げていったな……。

それと入れ違いに蓮華と亜莎と明命がやってきて城内制圧の完了を報告しにきた。
思春は宝物庫と食料庫の確保に向かったらしい。

「さて、これからは城下の治安回復と統治活動かぁー」

俺が愚痴を零す。

「その通りだ。　水仙、お前の統治能力も見たい。　どんどん働いてもらうからな？」

げっ、冥琳が現れた。
しかも仕事が増えた！

俺は頭を抱えた！

「もちろん誰か助けてくれるんですよね？　幾らなんでも俺一人ではまわりませんよ？」

「うむ、それもそうか……そうだな、水仙は蓮華様と同じ私塾に通っていたから統治能力はそれほど悪くは無い筈だな？
文官の指導も兼任してもらうとしよう」

ギャ――――――！
更に要らん仕事が増えたッ！

こうして袁術は雪蓮に討ち取られたという情報がもたらされ（まあ、実際は原作通りに逃がしたけど）、街ではお祭り騒ぎになった。

これで先ずは呉という明確な土台が手に入った。
次は雪蓮を守りきることと冥琳の病気を治す為に華佗を見つけなければ。
てか、華佗フラフラしてるからどうやって見つければいいんだ？

こんなことを考えながら俺はこの一時を見届けるのだった。

第十六章　再建と朱然（後書き）

呉再建編でした。
この小説はあくまで作者の暇潰しと読者様への暇潰しの為に書いた趣味程度のものなのでランキング外&検索除外に変更したのですが、もし解除した方がいいという方が居た場合は解除しますのでご一報ください。

第十七章　暗黒の再来と朱然（前書き）

今回はかなり短いです。

第十七章　暗黒の再来と朱然

呉が再建してから数日後。
孫策……雪蓮様に呼ばれ部屋に言った所までは覚えていた。
部屋に入った途端後頭部に衝撃が走り、意識を失った。
一生の不覚だ。
目を覚ますとそこにはゴスロリ女装をした俺（化粧済み＆フリルカチューチャ装備）。
しかも何故か服が脱げない！
脱ごうとするとどこからともなく、これは呪われている外せない！とか聞こえる。
ド○クエかよッ！
隠密行動しながら井戸へ行き化粧だけでも落とす為に顔を洗うが、化粧は呪われている消せない！とか聞こえた。
何それッ！？
てか呪いの化粧とか聞いたこと無いってのッ！
今度は強引に服を引き千切ろうとしたが、朱然は呪われている自分では着替えられない！と聞こえ服も破れず脱げなかった。
俺が呪われているってなんだよ……もはやツッコミたくもない……。

仕方なく元凶の雪蓮様を探すべくス○ークばりのスニーキングで時には段ボールを被り、時には音を鳴らして兵を誘導し道を進んだ。
しかし、見つからない。
突き当たりを右に曲がった瞬間、蓮華とエンカウントした。
こちらを認識した瞬間、確保し近かった蓮華の部屋に飛び込む。
蓮華は目を逸らし、顔を赤く染めながら突っ込んだ。

「あの……その格好は――――――」

「聞くなッ！」

「……」

蓮華の疑問を遮る。

見ないでくれ……。

「でも……やっぱり気にな――――――」

「聞かないでくれ……」

「……」

またもや遮る。

こんな汚れた俺を見ないでくれよぅ……。

「朱然……苦労してるのね……でも、とっても似合ってるわよ？」

わかってる蓮華に悪気は無いのはわかっているわかってはいるんだ。

フォローしようとしているのもわかる。

でもッ！

それとこれとは話が別なんだッ！

俺は壁に向かって行き両手で顔を覆い蹲りプルプルと震え始める。

泣いてはいないがこんな姿を一番の友に見られて平常ではいられない！

しかし、それを見ていた蓮華は別の事を考えていたらしい。
蓮華はおもむろに一着の服（女物）を衣装入れから取り出した。
そして今だ震えている朱然の肩を叩く。
振り返る俺。
そこにいたのは裏切り者の姿。

「そういえば黙っていなくなった時の説教をしていなかったわね？」

「みゃ――――――？！」

俺の最後の叫びを残し一日中着せ替えを楽しまれた……何なんだよぅ……。

追伸

呪いは呉の宝物庫にあった変なステッキが原因らしい。
雪蓮に制裁を加えた後、そのステッキを壊すべく部屋に行ったが跡形もなく消えていた。
その為か呪いは解けた。

何だろう？
謀マジカルな紅い宝石の人の持っていた杖が脳裏を過ぎる。
まあ、二度はないだろう……。

第十七章　暗黒の再来と朱然（後書き）

ＥＸ章で次はＦａｔｅ編とか書いたんですけど、シナリオを思い出す為に押入れから出そうとしたら落としたはずみでパッケージごと踏み砕いてしまったＯＴＺ

なのでＦａｔｅ編は書くとしたら後の方にして恋姫が完結した後は別の世界にしたいと思います。

勝手ながらすみません・・・・・・。

第十八章　特別演習と朱然（前書き）

また、書いていたら夜が明けてしまった・・・・・・。
読んでくださる皆さんありがとうございます！

第十八章　特別演習と朱然

俺は今、森にいる。
何故かと言われればいつぞやに言ったと思うが、朱然は実史で周泰の部下になったのだ。
この世界でも明命の部下にするという案が出たのだが、俺の能力的に俺の方が上官でもいいのでは？という二点で特別演習をして実際に一緒に戦い、明命自身が認めれば上官になるという流れになったのだ。

演習内容は俺と明命で獲物を全員狩るという単純な物。
場所は森。
獲物は祭の訓練した呉の兵、三十人。
指揮するのは祭と穏、亜莎の三人。
襲撃が始ってから森を一人でも出たら俺と明命の負け。

俺の今の格好は黒い死神さんの鎖帷子入りコートに仮面、音叉ナイフ、フック、鋼糸に洗ってもしばらく落ちない墨を入れた墨壺と毛筆。
明命はいつもの格好に鞘の先にキャスターの付いている野太刀の魂切を背負い、俺と同じく洗ってもしばらく落ちない墨の入った墨壺と毛筆。
俺達はお互いに頷き合い期を窺う。
目下には森を警戒しながら進む軍勢。

さて、そろそろ動くとしようか……。

俺は鋼糸を操り、最後尾の兵の胴を捉えて木の上まで引っ張り上げる。

その過程で落書きを書いて前方にその兵を放置した。

残り三十二人。

祭達は気付かない内にやられた事に少なからず動揺したようだ。
その混乱に乗じて俺と明命は兵達の死角を突き、三人を倒す。
勿論、落書きを忘れない。

残り二十九人。

流石に警戒し始めたのか、中々隙を見せてくれなくなった。

「流石に隙が無くなりましたね……」

「ああ」

木の上で枝に座る明命とヤンキー座りをしている仮面をつけた俺が小声で話し合う。

傍から見れば木の上で女の子と話し合う仮面の不審者……シュールだ……。

「水仙さんはこの場合どうしますか？」

「う～ん、隙が無いなら隙を作る為の仕掛けをする、かな？」

「ですね！」

うんうんと明命は笑う。
明命と連携して落とし穴などの古典的なトラップを仕掛けて行っ

た。
兵達は次々に掛かっていく。
というか幾ら偽装してるからって十一人も掛かるとは思わなかった。
仕掛けたコッチが吃驚ですよ……訓練厳しくしようかな……。
残り十八人。
さて、いい感じに減ってきたな。
そう思いながら様子を窺う。
どうやら祭達は兵を五人三組に分ける様だ。
「ここで分けますか～」
「誰を狙う？」
「ここは一気に削った方が良いですね」
「よし、祭の隊は俺が減らしてくる」
「では私は穏さんの所にいってきます！　巨乳許すまじ……」
一瞬、明命の目からハイライトが消えた様な？
「み、明命さん？」
「はい？　なんですか？」

気の所為ダヨネ？

俺は明命に一抹の不安を覚えながらも祭の方へ鋼糸を使い移動をする。

この世界には高い建物が少ないが、森や城などはかなり使い勝手がいい。

お目当ての祭の隊が森の入口近くに見えたので木の上で止まる。

鋼糸を六本同時に操る。

今までは二十五本が限界だったが鍛練を続けてきた為、今では百本の鋼糸を同時に操れるようになった。

だけど今は六本で十分だ。

しかし、祭はすんでのでかわし、矢を二矢射てきた。

なので俺は冷静に音叉ナイフで矢を斬り落とす。

むぅ、少し殺気が漏れたか？

いや……当然殺す気はまったくないんだが……隠密の修行をしようかな？

取り敢えず、祭以外を釣り上げ行動不能にしていく。

祭は来た道を警戒しながら戻っていった。

残り十三人。

俺は亜莎の方に向かった。

亜莎の方も別の入口近くにいたので祭達の様に亜莎にも鋼糸を放ったのだが、気配を最小限にしたにもかかわらずかわされた。

流れも見ながら放ったにもかかわらず、だ。

あ、そういえば目が悪いから気配を読んで攻撃するとか言ってたしなぁ……でも、殺さないようにしてるとはいえ流れを読みながら

放ったのに……正面から戦う限り、まず負けないと思う。
シ水関で思春にやられたのだって油断もあったし、視界外からの攻撃だったからだ。
思春や明命と訓練した時、どうも死角からの攻撃は対応が遅れる場合が多い。
今回の事も含め、やっぱり隠密の修行しよう。

そう思いながら五人を気絶させた。

残り八人。

そう思った所で明命が音も無く現れた。

「首尾はどうでしたか？」

「俺の方は祭と亜莎を逃がしたよ」

「私の方も穏さんに逃げられました。　まったく、祭さんも穏さんもあんな乳持ってるくせに素早いッ！」

残り三人。

って……ヒィッ！？
見間違いじゃなかったッ？！
明命が管理局の白い魔王様の様にＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ時の目にッ？！

「早ク始末シニ行カナイト……」

言葉がカタコトに……ヤバいよ！

胸に関してすごい嫉妬してるしッ！
怖い怖い怖いッ！
なんかもういろいろ末期っぽいよッ？！

「サア、早ク行キマショウ？」

「明命さん？　何故、カタコトなのデスカ？」

つられてカタコトになってしまった。

「巨乳ハ敵、巨乳ハ敵、巨乳ハ敵」

もう頭がそれで一杯になってる！？
逃げたいぞッ？！
否定する人はいないと思う……というか皆考えてもみてくれ！
薄暗い森の中にヤンデレ（微妙に病み末期）と二人っきりだぞッ！
ナイナイナイナイ！
これはないって！
明命さん手を引っ張らないで？！

俺は明命に手を引かれ祭達の元に向かった。

三人で集まっている。

はッ、早く何とかしないと俺の手がッ！
痛いッ！
あ、握力が！
握られた手が万力に挟まれた様にス、スゴイんですけど！

俺は何とか明命の手を気で全力強化した事によって放せた。

あ、痣になってる……アレ？
明命がいない……ってもう三人の近くにいる！？
俺もすぐ後を追う。
「儂らだけになってしまったのう」
「はい～、どうしましょう～」
「お二人共、一度も姿を見る事ができませんでした」
――――――ガサッ！
「「「！！」」」
音のなった方に注目した瞬間、穏は顔に凄い事を書かれて倒れていた。
明命よ……俺も似た様な事を書いてきたが年頃の女の子がこんなこと書くんじゃありません！
と思いつつ、同じ隙に亜莎を優しく気絶させ、目に○と頬に×を書いて離脱。
「くっ！　明命はわかっておったが、水仙すら見えんとは……」
ガサッ！とワザと音を立てる。
「同じ手に二度は掛からんぞッ！」

祭は音のした方以外を警戒した。
が、俺と明命は音の場所から近づき倒した。

「不覚……」

意識が途絶える前にそれだけを言った。

残り零人。

明命が凄い事を書きこんでいく。

む、惨い事を……。

合掌。

俺と明命は悠々とラクガキを書かれた祭、穏、亜莎、三十人の兵はションボリしながら城に帰った。

俺は明命の上官になりました。

後、明命に俺の修行を手伝ってもらって死角の攻撃の遅れが改善された。

第十八章　特別演習と朱然（後書き）

次回で一応ギャグ回を終わらせてシリアスになると思います。
うーむ、Ｆａｔｅを踏み砕いて後回し発言をしてしまったけど、恋姫から続けるとしてやっぱりここはＦａｔｅの方がしっくり来るような気がしてならない・・・・・・。
しかし、そんな先の事をグダグダ考えるよりも先にこの作品を完結させなければとそんな事を思っている作者です。

ガルディアさん誤字の指摘ありがとうございます！
すぐさま修正。

第十九章　本と朱然（前書き）

これにてギャグ回終了です。

第十九章　本と朱然

「おじさーん！」

「何でしょう朱然様？」

「アレとコレとソレとアッチとコッチにーーーーー」

俺はアレコレと指をさして三十冊程本を買う。

暇な日は趣味の本を読むのだが、いかんせん速読をするのであっという間に読み終わってしまう。

なのでこのくらい無いと読んだ気にならないのだ。

お金は副業でたくさん稼いでるから特に心配はいらない……って誰に行ってるんだろう？

まあ、さておいてそういえば今日は古本市だったな……掘り出し物があるかもしれないし行ってみよう。

やってきました古本市。

ここはかぐわしいインクの香り……と言いたいところだけどインクなんてありません。

墨の匂いです。

ちょっと気持ち悪くなりました……とか言っていると穏を発見。

だが、近づきたくない……無性に他人の振りをして通り過ぎたい……何故かって頬を染めるだけならまだいいんだ。

クネクネ動いてるんだよ！？

見ててキモイよ！

軟体動物みたいだもん！

「あ～、水仙さん発見～」

ゲッ、見つかった！

穏は近づいて来ると俺の腕を取った。

腕に規格外の胸の感触が……ってイカンイカン！

1、3、7、11、13、17、19……。

「何のつもりだ穏？」

「いいえ～、本を読みたいんですぅ～」

「読めばいいじゃないか」

「冥琳様に禁止されたのですぅ～」

禁止って……ああ、本を読むと性的に興奮するんだっけ？

憑依してから割と時間が経ってるので原作の内容忘れてきた。

「そうか……では、俺は城に帰る」

ガシッ！とまるで万力のような力で肩を掴まれた。

「待ってくださいよぅ～」

涙を目に溜め上目使いで見上げる穏。

フッ……俺はその程度では動揺しないことも無い！

って凄い動揺してるよ俺！

びー、くーるだ俺……。

「というか、俺にどうしろと？」

「他人の見ている本を見る事は禁止されていません！」

「それは詭弁だろ……」

「軍師は例え不利でも策を使って状況を打開する者なのです～」

断言する穏。

頭痛くなってきた……。

「なので水仙さんの読んでいる横で読ませてもらうのです～」

「俺じゃなくてもいいだろ……」

「だって他の文官は自分の仕事で精一杯、真面目な蓮華様は読ませてくれないでしょうし、雪蓮様、小蓮様、祭さん、思春さん、明命さんは本を読みませんし、亜莎ちゃんは冥琳様に付きっきりで教えてもらってますし、冥琳様は論外です～……唯一の突破口は水仙さんッ、貴方だけなんですよぉ～」

一呼吸で言いきって俺の両肩に手を置いてダーッと涙を流す穏。

「別に見てない所でこっそりと見るとか……」

「私は堂々と見たいんですよぉ～」

「横で見るのは堂々とは言わないのでは？」

「いいんですよそれは～」

いいんかい！

「いや、多分俺の横じゃ無理だと思うけど？」

「何故ですかぁ～！？　水仙さんを信じていたのにぃ～！」

また、涙をダーッと流す穏。

「だって俺、速読して読むから」

「ほえ？　そくどく？　聞いたことの無い言葉ですねぇ～？」

さっきまで泣いていたのに今は興味津津だ。

「速く読むと書いて速読。　その行の通りに文字を読まなくても本を捲るだけで文字が読めるんだよ」

「それは凄い特技ですね～。　では、この本を速読してみてくれませんか～？」

そう言って、古本を取り俺に渡した。

俺はパラパラと読んでいく。

よし、読み終わった。

「終わったよ」

「本当に速いですけど読めてるんですかぁ～？」

疑惑の目を向ける穏。

「なら、その本の適当に開いた所を聞いてくれ」

俺の言う通りに穏はページを開く。

「では第三章はどんなお話でしたか？」

俺は簡単に穏に説明した。

しかし、穏は一回では信じず幾つか聞かれ俺は答えて行った事で信じてもらえた。

「水仙さんに凄い特技があるのはわかりましたけど、普通にも読めるんですよね？」

「まあ一応は」

「なら無問題ですよぉ～」

「いやいや、あるだろ問題が……」

「さあさあ、早くすぐに部屋まで行きましょう～」

穏が俺の腕を掴み、強引に引っ張って行かれた。

俺は穏に対しての認識を甘く見ていたらしい。

部屋まで連行され読書大会をする羽目になった。

最初は普通だったんだけど……。

次第に穏が顔を赤らめ、呼吸が乱れた。

ん?まさか?と思った所で穏はモジモジからクネクネし始めた。

まさかの逆セクハラか?!そう思った時には既に手遅れで……どういう事になったかはご想像にお任せするよ……うう、兎に角思い出したくない忘れたい……。

今後は穏とは本を読まないと誓った朱然だった。

第十九章　本と朱然（後書き）

次はやっと孫策暗殺編に突入です。

前話の後書きに追加で書きましたが改めましてガルディア様、誤字の指摘ありがとうございました。

他にも何か気になる事がありましたら気軽に書いてください。

これからもよろしくお願いします！

第二十章　可能性と朱然（前書き）

最近は何をするにもこの小説の展開を考えてしまいます。
それによって色々と閃いてもパソコンの前に座るとド忘れするという意味の無さ・・・・・・。
凹みます・・・・・・。
いつも見てくださっている皆さんありがとうございます！

第二十章　可能性と朱然

対峙するは黄泉路へ誘う鈴の音、甘寧こと思春。
俺達は互いの武器を向け合い隙を窺う。

さて、何故こうなったのかというと……なんてことはない。
蓮華と思春が中庭で訓練をしていたので眺めていると思春の方から手合わせをしろと言ってきたのだ。

「貴様とはもう一度戦いたいと思っていた」

「そうか」

思春はポーカーフェイス、俺は呆れ顔で言う。

「いくぞッ！」

思春がそう言った瞬間に視界から消えた様に見えた。
俺は持っていた武器、大渦を右手一本で背負うように背中にまわした。

重い金属音が響いた。

「見える」

「フン！　貴様……本気を出せ！」

そう、流れは見えている。

俺の瞳が紫水晶に光り輝く。

今まで魔眼の制御、つまり自分の意思で見たい流れを完全に見ることができるようにする事。

それをずっと修行していたのだ。

しかし、まだ未完成というか未熟というか……この目を自分の意思で使うには視覚以外の五感を二つ封じ無くてはならない。

触覚は絶対必要だ。

感触無いと感覚ズレるし、聴覚も必要だ。

つまりは戦闘にあまり使わない味覚と嗅覚を封じているんだけどね。

「そこそこ本気ですけど？」

「そこそこなど本気とは言わん！」

鈴音を構え、またもや消えた。

俺は見る。

ただ見るのは相手ではなく、ましてや俺ですらなく、この世界の全ての流れだ。

俺の辿るべき武器や体の流れ、相手の動きの流れ、相手が動く事で動く空気の流れを見る。

いずれは相手の思考の流れから、因果、未来の流れすら見てやるつもりだ。

次に取るべき流れは……。

振りむきざまに大渦で左後方への右手だけで間合いを伸ばし、管槍のしごきを使った連続突き。

ちなみに管槍を知らない人に説明をするならば突くと同時に持ち手が滑って動く手動パイルバンカー式連続突きかな？

連続して金属のぶつかる音が響き渡る。

うーむ、書くと軽い音の様に聞こえるなぁ……て書くって何だ書くって？

それは置いておいて普通の人なら多分、反動が半端じゃないので大渦が吹っ飛ぶと思う。

その攻撃によって思春は攻撃できずに後方に弾かれた。

「くッ？！」

「？水関では油断してしまったが、今回は一対一で油断も慢心もしないしする要素もない、お前に、俺は、倒せない」

言ってから後悔した。

ＭＧＳ３ＳＳで見れる動画のセリフをつい言ってしまった……このセリフかなりイタいかも……。

「その奢り、その身を以って味わえ！」

俺はそう言って向かってきた思春に一回転しながらの遠心力を使った薙ぎ払い。

それをしゃがんで、当然のようにかわす思春。

「温いぞ水仙！」

俺が振りかぶり終わった所を鈴音を振り上げて斬りかかって来る。

「浅はか也」

またネタに走ってしまった……最近、疲れているのかもしれぬ。

「何ッ？！」

俺はその言葉と共に振りかぶった筈の大渦を巻き戻すかのように薙いだ。

「何故だ？　その重量の武器ならば、その軌道で振るには更に時間が掛かる筈だ」

そうだな。

気で強化しているとはいえ、かなりの大きさを誇る大渦を確かに片手で振った場合そう思うだろう。

だが、俺は止まった大渦を左回し蹴りで振う方向へ強引に蹴ったのだ。

足は腕の三倍の力を持つと言われているだけあって、振る速度を零から百に強引に到達させるその威力は洒落にならない。

その攻撃もかわされた。

しかし、後ろに来た所でサッカーのヒールリフトだったっけ？

要するに踵で大渦を蹴り上げ振り下して地面へめり込んだ。

続けて地面に刃先をめり込ませていた大渦を蹴り上げる。

「ガァッ！」

当った思春は吹き飛び木に激突した。

ううう、威力は洒落にならんけど蹴った方の足が痛い……おおそうだ！

今度は手甲と脚甲を作ろう！

そんな事を思って思春を介抱した。

「うぅ……」

「大丈夫、思春？」

「大丈夫だよ、そこそこ本気でやったけど怪我をさせるほど無茶させた訳じゃないし」

「くッ！」

強引に起き上がろうとする思春。

俺は思春をお姫様抱っこした。

「「！！」」

二人が驚愕する。

「放せッ！　一人で歩けるッ！」

暴れようとするが暴れられない思春。

「蓮華、思春を部屋まで運ぶから案内してくれ」

「……ッ、わかったわ」

俺は蓮華の後ろをついて行く。

その背中は何故か怒っているように見えた。

はて、何故だろう？とは言わない。

どこぞのギャルゲやアニメの主人公じゃないんだ。

俺に鈍感スキルは無いからな。

薄々、今までの反応で好意を持たれていたのはある程度知っていた。

はぐらかしていたが数回程、告白紛いの事はされたしな。

俺も満更でもない、とは思うのだが……ふと思うのだ。

俺は運命、世界の抑止力から逃れられるのか？と。

本来、原作で活躍すらしていなかった朱然に俺が憑依するというイレギュラー。

それは世界の抑止力を今まで憑依という形で誤魔化していたから無事だったのだと思う。

だが、俺が曲げようとした華雄の死亡フラグと時間が足りなかった為、弄せなかった詠の策を時間稼ぎをして事の成否が出るまでなんとかしてみたのだが……。

反董卓連合の時の結末が偶然によって良くも悪くもほぼ同じような結末になってしまった。

まあ、抑止力を危惧して俺自身がなるべく原作に沿うようにしたのだが……この世界の抑止力は何となくだけど他の世界より強い様な気がする……恐らく今の状況は本郷一刀がいない可能性と俺、もしくは違う誰かが一刀の代役になり呉ルートに進んだ可能性。

そして、その先に待つ可能性は……それは、魏ルートで華琳を助けた一刀が実史を曲げた事によって抑止力に消された、もしくは元の時間に戻されたと仮定するならば、俺も雪蓮と冥琳を助けた事によって、また消されるか殺されるかする可能性がかなり高まる事に

なるな……そんな中で蓮華に危害が及ぶ可能性を危惧している俺としては巻き込みたくはないという思いが自然と沸き出るのだ。

「着いたわ」

その蓮華の言葉に俺は思考を一時中断する。

「ああ」

俺は思春を布団にそっと降ろし、蓮華が思春を看病するというので原因の俺は調理場で手料理を二人に振舞うことにした。

俺は調理場で鍋を振るいながら思考を再開する。

蓮華の気持ちには少なくとも原作が終わるまでは返事を軽々しくすることはできない。

そう少なくとも原作が終わるまではと暫定の結論付け、出来上がった三人分の料理を運ぶのだった。

だが甘かった。

世界は思ったよりも狡猾で残酷にできているのだと思い知るのはそれからしばらくしてからだった……。

第二十章　可能性と朱然（後書き）

次の更新は今日中にしたいと思います。

さて、この先どうなるのやら・・・・・・。

何か気になる事がありましたらお気軽に感想をどうぞ！

第二十一章　嵐の前と朱然（前書き）

長かったので半分に区切りました。
楽しんで頂けると嬉しいです！

第二十一章　嵐の前と朱然

「という訳で揚州全土の石高及び生産量と人工でしたぁ～」

穏の報告が終わる。

今は呉再建後初めての会議だ。

「早速、台帳が役に立ってるわね」

うんうんと雪蓮が頷く。

「台帳は政の根底を支える物。　台帳が手に入っただけでも反董卓連合なんていう茶番劇に参加した甲斐はあったというものだ」

フフンと言う冥琳。

「それに他国の人口とかも載ってるから内政以外にも、戦略を決定する上でもおおいに役立つ」

当然、と俺が言う。

「いい物を手に入れたわ～」

「これあるを見越していたからな」

「さっすが名軍師～！」

「ホントホント」

「水仙、お前もそれを見越していたのだろう？」

冥琳の眼鏡がキュピーンッ！と光ったように見えた。

「いやいや、俺は敵だったし……」

「だが、取引にその台帳と地図を持ってきた」

「それは並みの軍師でも考え付くでしょうに……まあ、その話は置いといてこれからは富国強兵して他諸侯達との勝ち抜き戦な訳ですよ、雪蓮サマ！」

「そこで私に振るの？！　えー、あー、今月の内政担当を決めましょう！」

（（（（（話を逸らした！？））））））

「じゃ、じゃあ、さっき言った富国強兵を基本方針にして税収増加と軍備拡張の比率を調整しなければなぁ～」

強引に話を振ってしまった手前、俺は援護射撃をする。

「その通りだ。　その天秤を調整しなくては民の心に不満の種が撒かれるだろう」

「そうですねぇ～」

「頭の痛い命題ですな」

あー、本当に頭痛い。

「まったくよ。　でも、戦場が武官の活躍の場ならば内政は文官の功名の場なのよ？」

「あの、ふと思ったのですが……俺は文官武官どちらなのでせう？」

取り敢えず一日交替で両方の仕事をしているのだが……。

「それは……」

「なあ……？」

雪蓮と冥琳が呼吸を合わせ何を言っているんだという調子で言う。

「えっ？」

「「両方」」

「ああ、はい、わかってました」

聞いた俺がバカでした。

「なら聞くな」

「では今までの様に一日交替で両方やります」

「うむ」

こうして俺は文武官？になった。

「そうだな……穏には軍略と内政、水仙には柔軟な思考と武術、それに加えて才を伸ばしてもらえ」

「は、はい！　でも、水仙さんに教えてもらうものというのは……？」

「言葉通りだ。　水仙は何というか才に溢れている。　その中には他人の才を伸ばす才もあるのだ」

「ええっ？！　そうなんですかっ！？」

こちらに尊敬の視線を向ける亜莎。

俺には別に才能がある訳じゃない。

これは目の恩恵と現代の知識の応用とかだ。

文官なら個人に合った作業の効率化の流れや個人に適した役割の流れなどを読み、武官なら個人に適した体術の動きの流れや個人に適した武器軌道の流れなどを読む。

人は皆、時間をかけてそれを学んでいくのだが、俺はその時間を早急に縮めるのだ……流見の魔眼によって……。

ちなみに俺の部隊は遊撃隊。

何故かって？

それはそれぞれにそれぞれの長所、体術、武器を教え与えたら特徴的過ぎて他の隊との連携が取れなくなった。

武器は勿論、俺のお手製だ。

「ああ、最優の将というだけあってな。　このように国で最高と謳われる者達を師と呼べるのだぞ？　しっかり学べ、亜莎」

ククッと笑う冥琳。

「きょ、恐縮です！」

照れる亜莎。

「あ～ん、可愛いわぁ。　蓮華と小蓮に見習ってもらいたいものだわ」

「シャオは始めからかわゆいもん！」

「確かに私は可愛げは無いかもしれないですけど……悪かったですね……」

雪蓮の言葉に方向性は違うとはいえ、同じく拗ねる二人。

雪蓮がふざけて俺に抱きつき、更に二人は怒る。

いや、嫉妬だな……あ、蓮華が亜莎を連れて行ってしまった。

やれやれ、可愛いものだなぁ。

そんなことを思って蓮華の背中を見送るのだが、抱きついてきた雪蓮が耳元に口を近づけてきた。

「そういえば気が付いているんでしょ？　蓮華の気持ちの事……」

「ああ、そうだね……」

「何で答えてあげないの？」

抑止力の事を話した所でわかる訳が無い。

俺は真実を混ぜた嘘を答える事をした。

「全ての懸念が晴れるまで、救いたいと思う者を全て救う為、かな？」

俺はこの世界に来てからできる限り、某正義の味方の様に人を救ってきたが、奴とは違って俺は大事な人の為なら油断無く躊躇無く、一片の慈悲も与えずに敵を鏖殺する強さを手に入れた。

一を救い九を殺す覚悟を選ぶ事が……できる。

「ふーん、まだ何かあるような気がするけど……蓮華を泣かせないでね？　何故か酷く……酷く嫌な感じがするのよ」

「そうか……」

「ちょっと付き合ってくれない？」

「どこ行くの？」

「ちょっとね……」

雪蓮は原作通りに俺を誘う。

「さて、酷いで済めばいいけど……」

俺は雪蓮と玉座の間を出る。

最後の呟きは誰にも届きはしなかった。

第二十一章　嵐の前と朱然（後書き）

どうだったでしょうか？
暗殺編終わったらそのまま呉に残るかそれとも蜀に使者として赴くかで悩んでいます。
どっちが良いでしょうか？
と取り敢えず後書きに書いてみる。
本当にどっちにしよう・・・・・。
次も半分に区切ったところの調整をしてなるべくすぐに投稿します！

第二十二章　暗殺と朱然（前書き）

予告通りに投稿しました！
これからもよろしくお願いします！

第二十二章　暗殺と朱然

「ここよ……」

雪蓮に連れられてきたのはやはり、孫文台の墓だった。
周りは木々に囲まれ、近くに小川が流れていて落ち着く場所だった。
雪蓮が墓石に水をかけては磨いてゆく。
俺は何も聞かずに手伝った。
雑草を抜き、落ち葉を払って周囲も掃除をした。
磨き終わった後、墓石の前に俺達は佇む。

「ついに呉を取り戻したわよ。　やっと……やっとここまで来たわ」

「……」

「時間をかけ過ぎだ馬鹿者！って怒ってるかもしれないかもね……」

雪蓮が墓石の前に跪く。

「母さん……貴方のその志半ばで止まってしまったその時を、郷土を私達はまた取り戻したの。
また、その志が動き出すのよ？」

「天下統一？」

「ううん、天下は呉にとって確かに大事かもしれないけど、私が本当に目指したのは呉の民達の平穏と笑顔よ……」

「そっか……」

今までを戦い抜いて、それがどれほど大変なのか……それは骨身に染みて分かっているつもりだ。

「一つの勢力が天下を取って大陸を納めれば戦も権力争いも殆どは無くなって庶人に対して平和を与えられるでしょ？って言わなくても水仙には解ってるか……」

「ああ、戦いで負ければ今までのものがすべて無くなってしまう。唯、待っていてもいずれは奪われてしまう……だから、恐れず勝ち取っていかなくちゃいけない、か……」

とても矛盾した話だ。

でも、それは確かに必要な事なのだから……。

「朱義封は改めてここに誓う。　俺は呉の皆を持てる全てを振い支えて行く、と」

「ふふっ、嬉しい事言ってくれるじゃない」

俺は孫堅様に会った事は無いけど、此処でもう一度誓った方が良いような気がしたんだ。

「私も本気で狙っちゃおうかなぁ～」

「もし本当だったらお手柔らかに頼むよ……」

俺は冷や汗を感じながら後ずさった。

「ああ～！　その反応は傷つくわよ～？　なら……ていっ！」

雪蓮が俺に抱きついてきた。

「抱きつくなよ……」

「帰るまでは放さないわよ？」

と言いつつ、墓石の前に腕を組んだまま跪く。

「あ、その前に……母様、そろそろ行くわ。　今度は長丁場になりそうだから、しばらく来れそうにないわ。
でも、今度来る時は天下を土産として持ってくるわ。　だから――――」

そこまで言った所で不意に茂みが風ではなく、確かに何者かによって茂みが揺れた。
俺は反射的に左腕で雪蓮を突き飛ばす。

「きゃっ！」

その刹那、雪蓮が先程いた所に矢が刺さった。
間を置かず、第二射が倒れた雪蓮に襲いかかる！

チィッ！
原作じゃ一本だけだったってのにッ！

正に矢継ぎ早に射かけられる矢。
数は十二本。
かわすのは効果が半減しているとはいえ、矢避けの加護を持つ俺

には容易いが、視界に捉えられない茂みからの狙撃、尚且つ体制を崩した雪蓮を守りながらかわす事は実質不可能。
すぐに俺は矢の迎撃に移行。
現在の装備は鋼糸と音叉ナイフ。
俺は雪蓮の元に走り、音叉ナイフで十一本を斬り落とした。
が、やはり雪蓮を庇ったまま捌き切るには無理があったらしい。

「グッ！」

迎撃し損なった最後の矢が俺の左肩に突き刺さった。
思わず跪いた俺は、片手で扱える鋼糸をありったけ周囲に張り巡らし、襲撃者が鋼糸に触れた瞬間に切り刻んだ。

くそっ！
怪我の所為で鋼糸の操作が甘いッ！

十二人いた襲撃者は八人がバラバラになり、三人が腕を斬り落とされ、一人は無傷のまま逃げだしていった。

「すい……せん……？　水仙ッ！」

一瞬、呆然とした雪蓮が我に返り、剣を抜きながら俺に近づく。

「誰だッ？！」

「雪蓮……大丈夫、賊は逃げて行ったみたいだ……」

「逃がさないわッ！」

雪蓮が賊を追おうとする。

「待てッ！　賊の半数以上は討った！　みすみす危険に飛び込むなッ！」

俺の怒声に足を止める雪蓮。

「ぐッ、うぅ……ッ！」

俺は矢を引き抜き、すぐに毒を吸い出して血と一緒に吐き捨てた。

そして、俺は平気な事を教える為に立ちあがろうとして――――――

――――――崩れ落ちた。

雪蓮は剣を捨て、俺を抱き止める。

「水仙ッ！？」

くそっ、傷口の血を吸って吐いただけじゃまだ毒が残ってるのか……。

俺は気合で音叉ナイフを傷口に刺し、傷を抉り取り取る為に力を込める。

「がァァ……ッ！」

痛覚を消してしまえば、危険な場所まで抉ってしまう危険がある為に消せない。

その肉と肉を引き裂き、かき分ける異物感と、それ以上の激痛に苦悶の声を上げながら右手に握る音叉ナイフに力を込め、捻る。

「ぐッ、ヅァ……あ〝ァ……ッ！！」

グチュリという水っぽい音と共に左肩の肉が削がれ、血に転がった。

「何をしているのよ？！」

「はぁ……くっ、毒矢だ……」

音叉ナイフを地面に投げ捨て、気を纏わせた右手で服の袖を引き裂き、左肩にきつく巻き付け、縛る。

「えっ？」

また呆ける雪蓮。

「大丈夫、すぐに矢を抜いて毒を吸い出し傷を抉り取った。　毒は殆ど残って無いと思う……。

こうして応急処置もしたしな……」

「そう……」

ホッする雪蓮。

「たくっ、支えるって誓った瞬間、はいさようならとかは……願い下げだっての……」

軽口を叩く俺。

これも抑止力の所為かなぁ？と思っていると瞼が重くなってきた。

かなり強い毒だったのか、ほぼ抉り取ったのにも拘らず意識が朦朧としてきた……。

「姉様っ！　城で緊急事態が……！」

「蓮華！」

「水仙ッ？！　どうしたのですかッ？！」

蓮華がこちらに来たようだ。

「よう、蓮華……ちょっと油断した……ははは……」

「刺客からの矢から私を庇ったのよ……」

「でも、傷が肩だけなら死にませんよね？！」

蓮華が縋る様に雪蓮に尋ねる。

「毒矢だったが、すぐに応急処置もしたし大丈夫だ……死にはしないさ……」

「クッ！　すぐに犯人を見つけ出し、八つ裂きにしてやるッ！！」

「待ちなさい！　半分以上は水仙自身が殺したわ」

激昂した蓮華を雪蓮が止める。

「蓮華、今は緊急事態を先に言いなさい」

蓮華は緊急事態を言った。

原作通り、曹操が仕掛けてきたらしい。

どうせ原作通りなら矢も一本でやめとけよ……伝令は一人を残し、捕殺されたそうだ。

雪蓮は蓮華に先に行って出陣準備を整えるよう言う。。

「で、でも！　水仙の治療を――――――！」

「孫仲謀！　他国の侵略を受けているのに、たかが一介の将如きに時間を無駄にするなッ！

ただの矢傷だ……大したことない……行けッ！」

先程の雪蓮の時と同じように、最後の気力を振り絞って蓮華へ怒鳴る。

「ッ――――――！　わかったわ……絶対に死なないで水仙」

そう言って蓮華は行ってしまった。

「世話をかけるわね……水仙……」

「ははっ……親友だからな……」

「傷の具合はどう……？」

「ああ、思ったより強い毒だったみたいでなぁ……生きるか死ぬかは五分五分って所かな……？」

さっきから体が高熱に掛かったみたいに熱い。

「大丈夫よ……水仙は強いんだから……」

泣き始める雪蓮。

オイオイ、これ俺が死ぬフラグじゃね？

「精々、自分の強運を信じるさ……華佗がたまたま通りかかって治療してくれるとかな……」

「この戦が終わったらすぐに華佗を探させるわよ。　水仙は絶対に死なせないわ……」

クソ……ッ、意識が一気に無くなって……き……た……。

こうして俺の意識は途切れた。

第二十二章　暗殺と朱然（後書き）

さあ、死亡フラグ？が立った朱然は死んでしまうのか？！
次回に続きます！

第二十三章　一回休みと朱然（前書き）

タイトルの通り、朱然さんは一回休みです。

第二十三章　一回休みと朱然

Ｓｉｄｅ華琳

「展開が遅すぎるな……」

曹操こと華琳は、ふと一言漏らした。
袁術の城を獲ったという知らせを受け、私はすぐに軍を動かした。
江東の小覇王と言われる孫策……。
英雄と謳われる者との戦いに心が躍る。
さあ、早く出てきなさい孫策……。

「確かに遅すぎますね……」

郭嘉こと凛が眼鏡をクイッと持ち上げ言う。

「何か予期せぬ事が起こったのでは？」

眠そうな声で言うのは程?こと風。

「何かって何よ？」

荀イクこと桂花が聞く。

「私達に聞かれてもわかりませんよ～」

ヤレヤレという風。

「英雄同士の戦いに随分と天は無粋な事をしてくれる……だが、それも自然の結果なれば天命というもの……」

呉を打倒した暁には反董卓連合の時、色々とやってくれた朱然を侍らせてやるわ……フ、フフ、フフフフフフ……。

「皆、正々堂々誇りを持って呉を打倒しなさい！」

「「「「「御意！」」」」」

私は城門を抜ける。

そこには城の全面を埋め尽くす曹操軍と城を守る為に部隊を展開する我が兵達。

「姉様ッ！　水仙は？！」

「落ち着きなさい……水仙は城の兵に預けてきたわ……」

「そうですか……」

「さあ、曹操が命じたのか……そうでなかったのか……それはどうあれ、暗殺という形を取ってしまった以上……いいえ、違うわね……我が将が受けた礼、しっかりお礼をしなきゃね……」

そう言って私は部隊の先頭に立ち、剣を抜き放つ。
そして、曹操軍に突き付け、舌戦を始める！

「呉の将兵よッ！　我が友よッ！　愚かにも曹操は軍を我等の郷土に進軍してきたのだッ！
思い知らせよッ！　曹操の軍には何一つ渡すものは無いという事をッ！
卑怯にも曹操は刺客を放ち、我が命を奪い、亡き者にしようとしたのだッ！
幸いにも私は無傷だ！　だが、それは私を我等の将、朱然が庇ったからだッ！
奴らは我等の家族を傷つけたのだッ！　刺客の矢には毒が塗られ、朱然は今も生と死の狭間を彷徨っているッ！
孫呉の将兵よッ！　この戦いで敵の叫びをッ！　悲鳴を響かせよッ！
その断末魔の声で、この孫伯符を庇った最優の将を黄泉路から帰る為の道標とせよッ！
全軍、突撃――――――ッ！！」

Ｓｉｄｅ華琳

「何だ……何なのだこれは……誰が孫策の暗殺を命じたッ？！」

凛と桂花が走ってこちらに来る。

「華琳様！　原因が判明いたしました！」

「どうやら呉群より許昌に流れ着いた一団、何でも許貢という人間に仕えていた者達が呉の名のある将を討ち取った者には千金の褒美を取らすという触れを聞き、先走ったようです！」

「くッ！　新兵の訓練を怠った私の落ち度かッ！　状況はわかった！　その者達の頸を刎ね、全軍撤退せよ！」

「華琳様！　お言葉ですが、今撤退すれば我々は――――――！」

「わかっている！　だが、下衆どもに穢されたこの聖戦に意味は無くなった！
　このような戦いに勝っても曹孟徳の覇道に泥を塗るだけだッ！
今はただ被害を最小限にして撤退する事を考えよッ！」

「「「「「御意！」」」」」

くっ！

孫策との……英雄との聖戦を邪魔されたばかりか、朱然までも死の淵に瀕してしまうとは……ッ！！
　天よ……本当に、無粋な事をしてくれるッ！！

「走れ！　曹操軍を喰い千切れ！　この地に敵の屍を積み上げよッ！　ハァァッ！！」

雄叫びをあげながら、雪蓮が己の姿を血で汚していく。

「進め！　進め！　進め！　進め！　誰一人として逃がすなッ！　奴らの全てを八つ裂きにするまで進めーーーッ！」

蓮華が涙を堪えながら怒鳴る。

「予想外だったな……だが、雪蓮が無事だったのは不幸中の幸いと言うべきか……。

しかし今、水仙が居なくなるのは呉にとって多大な損失だ。　水仙の才は惜しいからな……」

クイッと眼鏡を押す。

眼鏡には光が反射し、表情は読めない。

「まだ、儂は再戦もしとらんのに勝手に死ぬなど許さんぞ水仙ッ！　さあ！　お前ら！　敵を射尽くせッ！」

祭は矢を番えながら指示を飛ばす。

「殺せ！　殺せ！　殺せ！　我が主、我が友に刃を向けた事を後悔させよッ！　獣共の腸をブチまけろッ！　その血を孫呉の大地に染み渡らせろッ！」

鈴の音を響かせて、思春は敵を黄泉路へ誘う。

「逃げる人も、降伏する人も、全て殺してくださいッ！　私の、私の上官が死にかけてる……ッ！
絶対の絶対に許しはしませんッ！」

明命は瞳の縁に涙を溜め、しかし涙は流さずに一振りの剣となって敵を屠り続ける。

「ううっ！　ひっく！　水仙師匠が死ぬなんてこと……ある訳がありません！　今は敵を倒す時です！
皆さんお願いします！」

涙を流しながら亜莎は自ら先頭に立ち、戦いながらも兵に号令を送る。

「許しませんよぉ～。　本も大事ですが、作者さんも大事なんですよぉ～。
水仙さんが居なくなったら、水仙さんの本の続きが読めなくなるじゃないですかぁ～」

穏が珍しく?怒って武器を振り回す。

そうして魏は一度の反撃もせずに撤退していった。

数多くの骸を残して……。

第二十三章　一回休みと朱然（後書き）

前から朱然を強くさせていますが、更に強くしていく予定。
じゃないと次の世界でサーヴァントに勝てないので・・・・・・。
完結するのか、書くかどうかすらわからないのに・・・・・・。
一応、恋姫の世界でも原作の武将が朱然と一対多（三人以上）で戦うと流石に負けます。
能力が未だ未完成なので・・・・・・。

第二十四章　魔力と朱然

俺が意識を失ってから三日後の昨日に布団の中で目を覚ました。
あの後、華琳は反撃せず撤退していったと聞かされた。
呉の皆は殆ど被害を受けなかった。

当然だけど……。

俺は部屋の布団に大の字に寝転がる。

え？
死亡フラグ？
そんなの無視ですよ？
こんな中途半端な所で死ねる訳ないじゃないか！
実際は俺の言った通り、華佗が通りかかって解毒してもらったんだけどさ。
運が良かった……何か別の能力でも発言したか？

そう思い、魔眼で調べるが特に変わった所も能力も無い。
その代わりに魔力？を見つけた。
気はもう使えるし、これが恐らく魔力なのだと思う。

魔力保有量的にはう～ん……どうなんだろ？
いや、他の人と比べた事無いしわかんないよ。
まあ、試してみるか……？
確か刹那がランとか言って火をつけてたなぁ。

「えーっと、ラン！」

刹那がやったように人差指と中指だけを立てて魔力を流し込みつつ、火出ろ～火出ろ～……と念じてみる。
すると、指先から火柱が上がった。
「おわーッ!?　火加減間違ったーッ!?　熱ゥ――――――ッ!?」
俺は慌てて魔力を切って火を納める。
「危ねぇ……城燃やしたら雪蓮達に殺されるよ……」
俺はそれから火炎とか凍結とか言って、しばらく魔法で遊んだ。
単純な魔法なら魔眼で魔力の流れを見て、こう……変形させるみたいな感じ?で使えるようになった。
一応、雷の暴風!!とか開けた窓の外に手をかざして言ってみたが出なかった。
沈黙がイタかった。
てか、出たら出たで大騒ぎだろうけど。
Ｆａｔｅの魔術とかも使えるかもしれんけど、魔術回路無いかもしれんし、もしあったとして切り替える為のスイッチ作って無いから最悪、脳が破裂して死ぬような気がするぞ……あんな体験は一度で十分だ。
ドパーンッ!
わーい、汚い花火だー!
嫌過ぎる……士朗とかどんだけ危険なことしてんだよ。
まあ、それなら実戦で確実かつ、強力な魔法が使えるようになるまで使わない方がいい。
覚えるのはＦａｔｅの魔術ではなくて、ネギま!とかテイルズと

かＦＦとかの魔法にしよう！
何か呪文とか唱えるのカッコイイし！
うん、そうしよう！
さて、他にも色々試行錯誤してみようかなぁ～、手札は多いに越したことは無いし。
イレギュラーはイレギュラーにしか片づけられないからな。

「しっかし、俺の運も捨てたもんじゃないな……ま、なけなしの運を全部使い切ったとか、そんなとこかなぁ～。
後々面倒に巻き込まれるとかはゴメンだわー」

そう言った所で戸をノックする音が聞こえた。

「開いてるよー」

返事するとドアが開いた。

「おお、起きたか！」

「お邪魔するわ」

「……」

「失礼するぞ」

入ってきたのは祭、蓮華、思春、華佗の四人。

てか、思春さん無言ですか……。

「具合はどう水仙？」

「ああ、もう殆ど問題ないよ」

「良かった……」

蓮華がホッした表情を浮かべた。

「む？　天井が焦げているようだが？」

思春さんが気付いた！？
何とか誤魔化さなければッ！

「え、えっとこれは……そこの蝋燭で……」

「蝋燭の火力でああは焦げないと思うが？」

ジーッと視線のブリザート。

「すみません私がやりました……」

即座に土下座。

無理です。
誤魔化せません。

「しかし、蝋燭以外に火など無いのにどうやってやったのじゃ？」

「まほ、じゃなくて妖術で……」

「本当に何でもできるわね水仙……？」

祭と蓮華もジト目で見てくる。

「そんな事はどうでもいい！　朱然、怪我はしていないなッ？」

うおッ！？

流石は医者王、暑苦しい……。

「大丈夫だ。　毒も抜けたし、怪我もしてない」

俺がそう言うと華佗が引き下がった。

「治ったら儂と再戦してもらわねばならんからな！　はっはっは！」

バシバシと俺の背中を叩く祭。

痛てぇ……。

「祭！　一応まだ病人なのだからそろそろ行くわよ！」

「む、そうじゃの」

「……」

「俺は一応、診察をしてから出て行くことにする」

「わかった」

丁度いい。

華佗には話があったからな……。

三人は部屋を出て行き華佗と二人っきりになった。

「では、診させてもらう！」

「華佗、それは良いんだが、俺の他にも見てもらいたい者がいるんだが……。　診察だけ先に済ませよう」

「む？　わかった……では！」

そうして診察が終わった。

第二十四章　魔力と朱然（後書き）

次回、病魔と五斗米道と朱然！

再編集して言霊部分を削除しました。

第二十五章　病魔と五斗米道と朱然（前書き）

これでひとまず呉のルートでの将死亡フラグは無くなった・・・・・・はず？

第二十五章　病魔と五斗米道と朱然

「で、誰を見てほしいんだ？」

「冥琳……周公瑾だ」

「何？　どういう事だ？」

「最近、調子悪い様に見えたんだ……取り敢えず騙されたと思って見てやってくれ！　頼む！」

周瑜の生体としての流れが歪んでいるのがわかるし、朱家では一般的な医学も学んだのだが、まじかで診なければどうにもならない。何かにつけて診ようと思ったのだが……冥琳にこと如くはぐらかされてしまったからな。

だから俺は……俺は他人の為に初めて土下座をした。

「そ、そこまで言うなら見てみるが……」

で周瑜の部屋へ行った。

「断る。　どこも悪くないのに医者に必要はないだろう？」

こともなげに言う冥琳。

「頼む！　診察を受けてくれ！
受けてくれれば今度の冥琳の仕事も手伝うし、この前ぼやいていた労働力不足の件の解決策を思いついて作った草案を教えるから。

で、もしどこか悪かったら治療してもらう！」

「何ッ？！　労働不足の解決策があるのか？！　是非とも教えてもらおう。　そして、仕事も手伝ってもらうぞ？　して、何日だ？」

さすがワーカーホリックなだけはある。

仕事の事になると凄い喰い付きようだ……。

「み、三日？」

えっ？

何でそんなに少ないかって？

だって冥琳の仕事量おかしいもん！

某、うたわれるジャック○ウアーな人並みだよ！？

あり得ないよあの量は！

死ぬってあんなの……終わった先から仕事が増えるんだ！！

「話にならんな……二週間」

「五日！」

「一週間と五日だ」

「一週間で！」

「ふむ、それで折れてやろう……しっかと手伝えよ？」

冥琳が助かるならそれくらいやってやるさ！

俺ができる範囲でな！

そして、診察を始める華佗。

「む……ッ？　何だこれはッ！？　クッ！？　此処まで複雑に蔓延（はびこ）っているだとッ？！
いや、今ならまだ間に合う！」

「華佗？」

「この時期に見つかって幸いだった！　これ以上進行したら俺でも手がつけられなかった所だ！」

「冥琳？　自分が病気だと知って黙っていたのか？　それとも知らなかったのか？」

「知っていたさ……医者にも行ったが無理と言われていた……もう、長くなかったことは……」

「なら！」

「言う訳ないだろう？　別段、騒ぎ立てる事でもなかったからな。
呉には私の代わりとなる穏と亜莎、それにお前がいるからな」

「ふざけるなよッ！」

俺は気が付けば怒鳴っていた。

「騒ぎ立てる事でもなかった？　お前が死んだら少なくとも九人は悲しむんだ！　みすみす悲しませるようなことするなよッ！」

「それはお前の持論だろう？　私の弟子達が後を呉を継いでいく。

私がいなくとも回ってゆく。
もう、心残りはないのだからな……」

「勝手に諦めるなよ。　華佗、治るんだろ？」

「ギリギリだが何とかなると思うぞ！　何より俺は諦めはしない！」

「だそうだ。　治療は強制的に受けてもらう！　さっき約束したからな！」

「よし！　早速始めるぞ！」

こうして治療が始まった。
冥琳は麻酔で眠っている。

「我が身、我が針と一つに成りて病魔を滅さん！　病魔覆滅、一撃必中、元気に、なるェェェ――――ッ！」

光り輝く針をツボに差し込もうとするが、体の直前で刺さらない。

「クッ！　何という強固さだ！　せめて……せめて、二つの核の他にある二つの弱点に針をさせればッ！
しかし、手が足りない！」

俺は味覚と臭覚を封じて魔眼を発動し、華佗が何を診ているのかを見る。

五斗米道（ゴットヴェイドー）が俺にも見える！

「華佗！　針をくれ！　俺がやる！」

「何ッ?!　だが、病魔の弱点に的確に針を刺さなければならないのだぞ！　修行もしていない君にそんな事はできないはずだ！」

「大丈夫だ！　俺には見えるんだ信じてくれ！」

俺は華佗の鞄から針を取り出して紫水晶の瞳で患部を見る。

これは……酷い。

冥琳の体に黒い根の様なものが両方の肺から根を張っている。

「病魔の弱点は左腹部と右肩だろッ？」

「……ッ、本当に見えているのか……そうだ！　そこに俺と同時に針を刺してくれ！　いくぞッ！」

「「我が身、我が針と一つに成りて病魔を滅さん！　病魔覆滅、一撃必中、元気に、なるェェェ――――――ッ！」」

俺と華佗の叫びがシンクロする！

そして、病魔は――――――

――――滅された。

冥琳は麻酔から目を覚ますと、憑物が落ちたと言ってまた眠ってしまった。
所変わって俺の部屋。
「修行をせずに病魔を見る事が出来るとは……素質があるのかもしれないな。しかし、助かったぞ朱然」
「ああ、俺も華佗から五斗米道の技を盗ませてもらった。俺の事は水仙と呼んでくれ」
「俺は訳あって真名は言えない、が代わりにこの五斗米道の針を送ろう！」
「ありがとう華佗！」
「何、気にするな水仙！」
こうして華佗に簡単な五斗米道の技を教えてもらった。
う～む……ごとべいどーではない！ゴットヴェイドーだッ！とか言った方が良いのだろうか？
それに相手の流れを見る事で能力の流れを真似る事が出来る様だ。
思ったよりも色々できるな……魔眼を全力で使って、尚且つその個人の能力発動の瞬間を見れれば俺の能力の上限内で劣化再現できるようだ。
まあ、時間をかければ余程特殊な技でない限り普通に覚えられると思うけど……思わぬ収穫になったな……。

ちなみに五斗米道は余程特殊な技に分類されてるみたいで全ては覚えられなかった。

取り敢えず食当り、腹痛、頭痛、風邪、咳を治せるようになった。

第二十五章　病魔と五斗米道と朱然（後書き）

次は日常編を挟みます。

第二十六章　鍛冶と一時の平穏と朱然（前書き）

短かったので二話分合体させましたが、これでも短い・・・・・・。

第二十六章　鍛冶と一時の平穏と朱然

日も登らない時刻、灼熱の炉の前で俺は熱した金属を一心不乱に叩いていく。
熱した金属が金槌によって、小気味の良いリズムで音を響かせながら形を変える。

「……」

それから数刻後。

「できた……」

出来上がったのは手甲と脚甲。
早速、装着してみる。
そこそこの重さで両手を思いっきり打ち合わせてみる。
するとガキィンッ！と金属を打ち合わせた音が聞こえた。

拳に痛みは……無い。

緩衝材が入っているからだ。

「うん、いい出来だ」

新しく作った手脚甲の守殻（しゅかく）の他にも造った。
打撃に主眼を置いた双鞭、禍津（まがつ）。
防衛戦用の鏡面加工した大盾、無境（むきょう）。

なんで作ったかって？
だって俺の他の武器って思い返してみると大牙と天翼、大渦は重量が有り過ぎるし、大樹は弓で、鋼糸は万が一操作を間違えると殺傷能力が高すぎる。
なので適度な重さで刃の無い武器である双鞭と防御用の盾が丁度いいと思ったのだ。

「作った武具が増えすぎた……麒麟にはあれ以上武器を付けるとまともに走れなくなるな……」

何とかならないものか……うーむ、むむむむむ。
ダメだ。
いっそのこと王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）みたいなものを作れないだろうか……無理だな。
アレはこの世全てのを手に入れたという伝説というか、概念というか、象徴が宝具化したものだったはずだ。
王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）や十二の試練（ゴットハンド）などの形の無い伝承が元の宝具はそもそも造れないだろうし……いや、待てよ？
英雄王は蔵を開くのに小さな鍵剣を使っているとか書いてあった気がする。
本気の魔眼で見て、鍵剣を作る流れを見れば王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）もどきを造れるかもしれない。
いや、いっそ奪うか……でもやっぱり英雄王以外使えないのだろうか？
無い物ねだりをしても仕方がない。
今は無理はせずその都度、目的に合った武器を選別して持っていくか……？
もしくは部下の馬とか武器専用の馬をもう一頭連れていこう。

「さて、腹が減った……」

俺は炉がある小屋を出ると丁度、日が昇ってきた所だった。

ああ、朝焼けが目に染みる……でも、その前に小屋の裏にある小川で水浴びしよう。

炉の前にいたから汗だくで髪もボサボサだしな……。

水浴び後、俺は街に来ていた。

すると明命と亜莎を見つけた。

「あ、水仙さんです！」

「おはようございます。　水仙師匠」

「おはよう、二人共。　亜莎、人前で師匠は控えてくれると嬉しいな？」

俺が微笑すると亜莎が両手で顔を隠す。

どうやら照れ隠しの様だ。

「こんな時間に出歩いているという事は今日は二人共休みか？」

「「はい！」」

「なら、一緒に朝餉に行かないか？　もちろん、俺の奢りだ」

「本当ですか！」

「い、いいのでしょうか？」

対称的な反応を返す二人。

「亜莎はこういう時、明命を見習った方が良いぞ？　気にするな、俺は食費と日用品や趣味くらいしか使わないからな」

俺は行きつけの店に二人を案内して注文をして出てきた料理を食べ始めた。

うむ、美味い！

その様子を二人がジーッと観察する。

「？　どうした？　食べないのか？」

「綺麗です……」

「いえ、食べるお姿もどことなく気品の様なものが漂っていたので、つい見惚れてしまいました」

「ああ、俺の家は建業で名家として通っているからさ。　小さい頃から色々教え込まれたんだ」

前にも言ったと思うが、朱家は名家なのでその名に恥じないように様々な習い事をやらされた。

武術、語学、医学、兵法、統治、政、礼儀作法、その他諸々。

そのおかげで色々できるようになったけどね。

「「へぇ～」」

感心する二人。

「さあ、そんな話より食べよう。　折角の料理が冷める」

「水仙さん！　こっちの料理美味しいですよ！」

そう言って明命はレンゲにすくった料理を俺に向ける。

あー……これは俗に言う、あーんって奴じゃなかろうか？

明命がニッコリと笑う。

逃げ場はないようだ……。

「あーん」

俺は食べた。

は、恥ずかしい……ん？

この料理は……マーボー？！

「むぐ？！　ううぅぅ、辛い……水をくれ」

「どうしたのですか師匠？」

「俺は辛い物が苦手なんだよぅぅぅ……」

水を飲み終わった俺は、テーブルに顎を乗せ辛さで涙が滲んだ目で二人を見る。

恥ずかしさで料理を良く見なかったからつい食べてしまった……。

本場のマーボーは普通の辛さでも辛いんだよ？

「何でもできると思っていた水仙さんの意外な弱点を見つけました！」

「師匠は唯でさえ容姿は美しいのに可愛らしい仕草まで……女としての自信が無くなりそうです……」

またもや対称的な反応をする二人。

「明命、俺も人間だから弱点くらいあるよ。　亜莎、俺は男だからどんなに頑張っても女にはなれんから自信は無くさなくてもいい」

俺は微笑みながら言う。

ああ、平和だなぁ～。

そんな日常の一幕。

第二十六章　鍛冶と一時の平穏と朱然（後書き）

次は蜀が進行してきます。
でも劉備は出てきません。
が、これから朱然が劉備の理想をチクチクイジメたりする予定。
朱然さんも賊退治やら戦やらで己の信念的な物を手に入れたみたいな？
そんな感じです。

言霊系の武器を普通の武装に変えました。

第二十七章　関羽と朱然（前書き）

うぅ・・・・・・。

過去の話を見てみたら似たような言い回しばかり使っていた自分のボキャブラリーの無さにウンザリだ・・・・・・。

そして、スランプかもしれぬ・・・・・・。

誰か助けて～～～～。

第二十七章　関羽と朱然

疲弊した魏に袁紹はここぞとばかりに戦を仕掛けたが、こと如く撃退された。
流石はアホだ。
蜀と呂布軍が兵や兵糧を集めて不穏な雰囲気を募らせていた。
そして、呉はというと本拠を建業に移した所だった。

「水仙よ、傷はもうよいのか？」

「ああ、冥琳こそもう大丈夫なの？」

「うむ、助からぬと思ったこの命、更に呉に尽くす為に使おうと思う」

「そうか」

俺は約束通りに冥琳の仕事を手伝っている。
文官武官両方の仕事をしている為、文官の仕事も半分程なのだが、冥琳は軍師兼文官且つ、更に文官を束ねている立場なので仕事の量が半端じゃない。
てか、これがもし俺の仕事だったかも知れない思うと軽く死ねる。
いやマジ死ぬ。

「「……」」

会話が進まない……。

そう思った所で兵が慌ただしく入ってきた。

「申し上げます！　蜀が進軍してきました！」

「「何だとッ？！」」

俺達は急いで玉座の間に向かった。

どうやら呉に攻めてきたのは、こちらの一方的な追撃だったにも関わらず呉の兵数より魏の兵数の方がまだ多かったからだろう。

こちらは人的被害がほぼなかった為に、その分の兵糧がかなり無くなったからな……軍を率いているのは旗から関羽、鳳統、趙雲、張飛、馬超、厳顔の六人らしい。

どうやら、劉備と他の将は呂布軍の進行を危惧してお留守番のようだ……一国の主が戦に出てこないのはいかがなものか……。

呉は雪蓮、蓮華、亜莎、俺、明命、思春、穏の七人で行く事に。

俺は蓮華に止められたが、俺自身の意思と、一緒に行く雪蓮、亜莎、明命の三人の後押しで行く事となった。

代わりに蓮華が不機嫌になり、それに伴って思春の機嫌も悪くなったけどね！

蓮華は不機嫌になりつつも、思春がついて行くならと言ってくれた。

祭も行くと言ったが冥琳に却下され、臍を曲げて街へ飲みへ出かけてしまう。

そして、俺達は国境にて相まみえた。

今回の軍師は亜莎だ。

「では、蓮華様と私は本陣。　思春さんが右翼、明命さんが左翼、

雪蓮様、穏師匠と水仙師匠が中央をお願いします！」

亜莎が配置を決めた。

「雪蓮は中央だからって前に出過ぎないでね？」

俺はニッコリと良い笑顔で予め釘を刺しておく。

「ええ～！　折角、関羽もいるのに～！」

「ダメと言ったらダメです」

「そうです姉様！　兵達を不安がらせる様な事を言わないでください！」

蓮華も俺と一緒に釘を刺し、思春は頷く。

「わかった」

「了解です！」

「心得た！」

「わかったわ」

「じゃあ、動くわよッ！」

それぞれがそれぞれの持ち場に着いた。

敵中央の武将は関羽か……まあ、妥当だな。

それから少しして軍が動き始めた。
俺は麒麟に跨り無影を操る。

「ハアァァッ！」

鋼糸を両手で操る。
瞳は既に二つの感覚を封じた事で紫水晶に輝いている。
その魔眼を以って四百本の無影を操った。
俺の率いる中央の兵達に襲いかかろうとする敵を斬り刻む。
千里眼を使って戦場を見ると、後方で雪蓮を抑えている穏の姿が見えた。

蓮華と釘刺したのに……確かに中央だからってハシャギ過ぎ、少しは自重しようよ雪蓮……。

内心溜息をついた所で関羽が現れた。

「私は関雲長！　？水関で直接は戦っておらんが世話になったな朱然！」

「え？　別に？水関で世話したつもりはないけど？」

そう言ったら青龍偃月刀を即座に振り下してきた。
俺は麒麟から飛び降り、すぐさま背中に背負っていた禍津を交差させて受け止める。

「麒麟！　本陣まで下がっていろ！」

麒麟は嘶くと本陣へ走っていった。

再度、斬りかかってきた関羽の偃月刀を双鞭で滑らせ、金属同士の不協和音を響かせて逸らす。

「……ちょっと、短気すぎやしないか？」

「くっ！　よくもッ！」

一撃、二撃、三撃……次々に偃月刀の斬撃が俺に叩きこまれ、俺の禍津が斬線の流れを辿って弾いてゆく。

「朱然……貴様、孫策を庇って毒矢を受けたと聞いたが？」

「すぐに矢を抜いて毒を吸い出し、矢傷を抉り取ったので治った」

「なんと……そのような事をいとも簡単に行うとは……」

「簡単ではないさ……あんな所で殺される訳にはいかないんでねッ！」

そう言って俺は攻撃に転じる。

関羽は偃月刀で弾いていく。

更に俺は禍津で突き、薙ぎ、振り下して関羽の動きを制限していく。

「くっ、凄まじい技量だな！？」

偃月刀が俺の禍津を掻い潜り、右肩に掠りそうになる。

「別に驚くことじゃない。　自分より強い者なんて幾らでもいるだろ？」

俺は平静を装って答え、左の鞭を偃月刀に巻き込むように手首を返し逸らした。
外側に逸れた瞬間、すかさず右の鞭を叩きこむ。
「それでも負けられない……負ける訳にはいかないんだッ！」
その一撃を弾かれた反動に逆らわず、身を任せてかわされた。
「何の為にお前は戦う？」
そのまま禍津の連撃で追撃をかけながら、劉備の理想をわかっていて敢えて聞く。
「桃華様の理想の為だッ！」
即座に答え、石突きで禍津の打点をズラしてゆく。
「全ての人が仲良く笑顔に、か？」
俺は流れが途切れたので、仕切り直す為にバックステップし距離を離す。
「そうだッ！」
関羽は最短の距離から片腕だけでの突き。
「へえ、じゃあ劉備は相当に歪んだ性格か、相当な偽善者だな？」
俺は着地した瞬間、すぐさま仰向けになるように飛んだ。

先程、首のあった所に偃月刀の突きが通ってゆく。

「何ッ?!　貴様ッ！　桃華様を侮辱するかッ?!」

仰向けに飛んでいた体を限界まで逸らして禍津を握ったまま大地に手をつき、偃月刀を蹴り上げて着地する。

そこで一旦、俺達は攻撃の手を止める。

「嘘じゃないだろう？　少なくとも俺はその理想に似た理想を掲げる者の末路を一人知っている」

架空の人物……紅い弓兵の事だけどね。

「何だと?」

関羽はいぶかしむが攻撃を再開した。

俺は関羽の攻撃を両手の禍津で届かざる左の護剣(マンゴーシュ)を織り交ぜながら逸らしてゆく。

短剣ではないというリーチ上の問題と剣ではなく硬鞭という太い棒状の武器なので完全な受け流しと澄んだ音は出ないが、音にこだわりがある訳ではないので今はいなす事だけに全神経を集中させる！

「その者は正義の味方に成りたいと言っていた。

助けた人間に裏切られ、濡れ衣を着せらながらもな……そして死後、他人に恐れられながらも英雄と言われた……忌むべき対象としてなッ！」

うろ覚えだがそんな感じだったはず?

憑依してからもう、かれこれ十年以上過ぎてるから違ってるかもツッコミは無しでお願いします……ぶっちゃけ朱家の養子になってか

ら覚えていることを書こうと思ったけど、習い事が多すぎて面倒になったんだ！

仕方ないじゃないか！

逆ギレしてごめんなさいすみませんッ！

「……」

関羽が黙りこむ。

だが、お互い攻撃の手は止めない。

「さて関羽、一つ問いがある。　先程の者が正義の味方になり、真実を知った後にその者が言った問いだが答えられるか？」

ちょっと違うけど、過去の自分とか言っても信じなさそうだしね。

「お前の主は理想を抱いて溺死する覚悟があるのか？とね。

お前は己の主の理想に惹かれ、共感して義姉妹の契りを結んだらしいが、君の主はその覚悟があるのかな？」

少なくとも英霊エミヤは自ら起こした要因の原因を受ける覚悟があった……と思う。

衛宮士朗の方は劉備に賛同しそうだけど。

アーチャー（悪）は劉備が過去の自分ではないから殺しはしないけど、反発はしそうだ。

「別にその者の話を信じなくてもいいさ。　でも、君の主は魏との戦で疲弊した呉を侵略した。

自国の民の幸せの為に他国の民の笑顔を奪うことを選択した。

皆仲良く笑顔で、を理想に掲げる劉備の理想に矛盾が生じたけどこれはどういうことだ？

是非とも説明して欲しいな？」

ニッコリと笑う俺。

うわ、今の俺ものすごい性格悪い奴だと思われるな……。

俺が鞭を振う度に関羽の手数は減り、俺の攻撃が増えていく。

まあ、さっきの問いも影響しているのだと思うけど。

「……」

「答えられない、か……フッ！」

関羽の喉元に鞭を突き付ける。

「ッ――――――！！」

「確かに最強の域に辿りつけるだけの才を持っているようだな……殺しはしないが、捕縛させてもらうぞ！」

「そう簡単に捕まってたまるか！」

関羽は鞭を偃月刀で払ってからバックステップして距離を放した。

「ハァァァッ！」

そこから偃月刀の突き。

対する俺は……。

「迅雷ッ！」

体に纏う気を圧縮し、体表を流れる静電気を増幅して纏う技。
俺の体に電気が帯電し始め、圧縮した気を解放し、雷の如き轟音と雷の鎧を纏い突撃する！

「がァァ……ッ！？　今のは……一体……」

二つの武器が当った瞬間、衝撃と電気の二段構え。
紙一重で偃月刀をかわし、その直後に交差した双鞭の衝撃で青龍偃月刀は横へ弾かれ、右の鞭を叩きこんだ事で電気に変換された気が関羽を襲ったのだ。
関羽は崩れ落ち、俺の頬には一筋の血が伝う。

最後の突き……武器の軌跡の流れを見きって避けた筈なのに一瞬、ブレた。

そう、燕返しの様にはいかなかったが、確かに俺の見ている流れを越えて斬ったのだ。
双鞭が後少し遅かったら殺られていたかもしれない。

「流石は関羽、と言っておこうかな……？」

そして何より、あの衝撃を受け、気絶して尚、青龍偃月刀を放さなかったのは二重に褒めるべきであろう。

「敵将、関羽！　呉が最優の将、朱然が生け捕ったり！」

俺が名乗りを上げると中央の敵は陣形が崩れた。

そこから呉の本隊が突撃した事と五虎将と言われた関羽が捕えられた事で恐怖が広がり、大混乱に陥った。
蜀は関羽を助ける事が出来ずに撤退していった。

関羽を無影でグルグルに縛って肩に担ぎ、本陣に引き返しながら考える。
平和ボケした世界で幸福とは言えないまでもグダグダ生きていた俺が、この世界で殺し殺される立場になって全てを救うなんて理想は言うだけ簡単ではなく、実現など無理だと思い知った。
それに、この戦乱の世で戦ってきてそんな理想論を掲げられても、俺は賛同できない。

貧しさの為に何日も食べていない子供が食料を盗む。
人の物を盗んではいけませんと食料を取り上げるのか？
仮にその子供に手持ちの食料を渡した所で別の誰かが食料を欲しがるだろう。
有限である食料を来る者来る者全てに与えるのか？

人を殺すことに快楽を覚えてしまった殺人鬼もいるだろう。
そんな殺人鬼に人を殺さないで暮らしてくださいと言って対峙するのか？
少なくとも人を殺す事に快楽を覚えた者は殺すか殺されるかするだけだろう。

家族、恋人、親友を殺され憎しみを持て余す人もいる。
殺した人を無罪放免にして許してくださいというのか？
中には許す者もいるだろうが多くの者は許すことはないだろう。

結局、そんな理想を言った所で拒絶され、恨まれるだけだ。
少なくとも、俺は大切な誰かを殺されて平静でいられる自信は無

い。
殺した奴を考え付く限りの拷問を加えてから殺す。
正義の味方になるつもりも無いし、どんな犠牲を出しても大切な人だけは守って見せる。
全てを救おうなんて、おこがましいことは言わない。
余裕があれば助けられる者を助ける。
でも、基本的に俺は自分と自分の手が届く範囲を守る。
周りから蔑まれても、憎まれても、これだけは譲れない。
後悔もしないし、立ち止まらない。
そんなことしたら今まで殺してきた者達は無駄に死んでいった事になるから……。
初めて人を殺した時、あの時は明確に思った訳ではなかったが、反董卓連合の少し後の時にはもうその信念は持っていたと思う。
だから、そんな理想に呑まれて矛盾を抱えている劉備とは普通に接する事ができても根幹の部分で相容れない。
だから、試させてもらうよ劉備。
前に会った時は抑止力を危惧して原作に沿うようにすれば月と詠を助けられると思い二人を預けた。
確かめさせてもらう……あの時の選択が正しいかったのか……己の理想と無慈悲な現実どちらの流れを選ぶのかを……。

第二十七章　関羽と朱然（後書き）

気が付いたら５０００文字超えていた事実。
劉備の理想を問いただす事で関羽に精神攻撃をかける朱然。
理想といえばアーチャーだと思ったので・・・・・・。
まあ、アーチャーと朱然の理想論を融合していると思っていただければ・・・・・・。
ダメ？
完全記憶能力とか持っていない朱然は十年以上過ぎた記憶じゃこれが限界かなーと思ったんですけどもどうなんだろ？
→
見苦しい良い訳ですが見逃してつかーさい！

感想とか色々待ってまーす！
あ、でも、荒らしたりしないでね☆
ダメだテンションがおかしい・・・・・・。

第二十八章　恋と朱然（前書き）

なんだかんだでもう三十話目・・・・・・きちんと完結させたいです。

第二十八章　恋と朱然

関羽がまだ目を覚まさぬ内にそれは来た。

「伝令――――――！」

「どうした？！」

蓮華が伝令に聞く。

俺達が関羽達を撃退している間に劉備達を無視した恋達が国境を突破し、呉に進行してきたらしい。

だが、今は建業の守りが薄く籠城中らしい。

それを聞いた蓮華が指示を出す。

「国境には穏が残り、兵達をまとめよ！」

「はい～」

「水仙、思春、明命の三名は早急に自らの隊を率いて建業へ先行せよ！　指揮は水仙に任せる！」

「「「ハッ！」」」

俺達はそれぞれの馬に跨り、走らせた。

「水仙隊、準備は良いなッ？！」

「「「「「応ッ！！」」」」」

「思春と明命の隊はどうだ？」

「問題無い」

「完了しました！」

「よし！　これより我々は建業へ向かう！　遅れた者は置いていくので後からついてこい！　出発！」

こうして、俺達は建業へ向かった。

それから俺は麒麟を飛ばしてひた走った。
俺の隊はともかく思春、明命の隊も誰一人遅れる事無く建業の近くまでついてきた。

「よし！　今日はここで飯だッ！　存分に食べて英気を養え！」

丁度いい場所を見繕い、指示を出す。
すぐに近くの湾に送るように言っておいた兵糧を受け取り、炊き出しの支度をする兵達。
俺はエプロンを付け、髪を上げて料理を作る。

小休止を挟んでの強行軍だったんだが、流石だなと俺は思った。
そんなエプロン姿の俺にときめく兵もいるとかいないとか……。
話がズレた。

炊き出しが終わった所で本隊が到着した。
蓮華の「水仙は何所かッ？」という声が聞こえた。

飯を食べていた兵の「あちらで料理を作っていらっしゃいます！」とハモった声が聞こえた。
そして、蓮華がこちらに気づき……。
頬を染め、固まった。

え？
何でそこで固まる？

「蓮華ー？　戻って来ーい」

「……ッ？！」

「大丈夫か？」

「え、ええ……大丈夫よ。　で、建業の方はどのようになっていたの？」

「状況はまだわからないが、俺の隊の者が偵察に行っている」

「そう……」

「大丈夫だよ。　冥琳と祭は十分に耐えてくれてるはずだ。　信じろよ蓮華。　それはそうと俺の料理を食べてくれ。　食べてないんだろ？」

「ええ」

「じゃあ、ほら。　これを食べて備えてくれ。　俺はここを抜けられないから悪いけど別の誰かと食べてくれ」

「わかったわ。　じゃあ、頑張って」

そう言って蓮華は踵を返していった。

俺は料理を再会する。

他の兵達に作った料理が瞬く間に無くなってゆく。

さて、もう一息だな。

恋、会ったら止まってくれるかな……戦わずに済むならそれで良いんだけど……。

建業が見える丘の上から千里眼を発動させると、軍勢に囲まれているのが良く見えた。

流石は冥琳と祭だな……。

少数の兵をよく使って恋の兵達を凌いでいる。

「陳宮に……恋……」

先に見えるは深紅の呂旗と陳の旗。

「建業は目の前だ！　敵は呂布だが、圧倒的な数には勝てん！　最強の将を討つ絶好の好機だ！

全軍、進めェェェ――――――ッ！」

蓮華の号令に全軍が進みだした。

俺も大牙を肩に担いで麒麟に跨り、恋の所に向かっていく。

麒麟は猛然と突き進み、呉の兵達を追い抜き、恋の兵達を突き崩した。

何で来たんだ恋……。

気付けば、大牙の柄を強く握り締めた。

俺は恋の近くまで来る事が出来た。

「恋ッ！　武器を置いて投降してくれ！」

俺は声を張り上げて恋に言う。

「……迎えに来た」

「は？　それはどういう？」

俺の頭の上にクエスチョンマークが並ぶ。

何がどうなってそういう話に？？

「えーっと、恋さん？　詳しく、とても詳しく教えてくれ」

コクッと頷くと周りが戦っているにも関わらず、のんびりと話し始めた。

反董卓連合の時、俺と別れた後に彼方此方を転々としていたのだそうな。

その時、呉に捕まったという噂や呉の武将となり活躍している噂。

ついには毒矢を受け生死の境を彷徨ったという噂を聞きいて、いてもたってもいられなくなったとか。

恋の軍の兵達は恋の為ならばとついて来てくれたとか……てか、それだけで来る恋も恋なら、呂布の配下達も配下達だなおいッ！

いやまあ、恋に心配させた俺にも責任はあるんだけれどさ……。

「しかし、恋さん。　何故に戦っているんだ？　少なからず人が死んだんだぞッ！？」

俺は怒りながら聞く。

「水仙……私が守る……」

「俺は自分の身くらい自分で守れる。　それは前に戦った時にわかっただろう？」

険悪な雰囲気になり始め、自然と睨み合う形になる俺と恋。

「水仙……傷つくの見たくない……聞きたくない……」

「そんな理由で……流す必要のない血が流れのか？　俺は……そんなお前を受け入れられない！　許せない！」

俺は大牙を構える。

「……連れていく！」

そう言って恋が奉天画戟を構える。

恋は純粋過ぎるが故に……俺という理由を以て、建業襲撃を行ってしまったのか……。

恐らく陳宮が煽ったりしたのだろう。

俺の為ではなく恋を王にする為に……。

「恋、一騎討ちだ！　負けたら素直に投降しろ！　俺は……お前に守られる程、弱くはない！」

「……いく！」

最強と最優がぶつかり合う。

その気迫に周囲の兵達と武将達は戦を止めた。

それほどまでに……俺と恋の気迫は凄まじいものだった。

かたや自分に寄せる思いで流される事の無かった血が流れしまった重責の為。

かたや自分の思いを拒絶されながら、それでも成し遂げようとする為。

――――――俺達は戦う！

先に動いたのは俺。

大牙を担いで接近、上段から斬る！

恋は唯、戟を片手で水平に掲げただけで受け止めた。

大牙を受け止めた衝撃で地面が陥没する。

「おぉぉぉぉッ！！」

「……ッ！」

力を込めていくと恋の表情が動いた。
そう思った瞬間には大牙をズラされていた。
地面に大牙がめり込み、もう一段地面が陥没した。
恋が俺の右側面から薙いだ。

軽く放っているつもりでも喰らえば致命的か！！
何より、魔眼で見える流れが酷く細い！

俺はすかさず爪を抜き、目を凝らして届かざる左の護剣（マンゴーシュ）で逸らす！

戦場に似つかわしくない澄んだ金属音が響き渡る。
一撃を逸らした所で牙を取り出し一閃。
恋はその一撃を手首のスナップだけで戟をスライドさせ、柄で受け止めた。

「くっ！　あの時は本気じゃなかったのか……」

距離を取る為にバックステップするが、恋は追って来ない。
牙と爪を大牙に戻して鎖を引っ張り、ブ〇ーチの斬月の様に回転、投擲する。
恋は動じず、避け、弾いた。

これもダメか……。

大牙を普通に持ち、気を圧縮。

「閃断！」

巨大な気の斬撃が恋へ飛ぶが、それすら戟を振るだけで弾いてし

まう。

気も使ってないのに弾くとは……一体どうやっているんだ？

牙と爪をまた取り出してから大牙をその場に刺した。

俺は再度、恋へ走りだす。

一撃、爪による鋤（ポイントプフルーク）の切先。

剣を正眼に、しかし腕を左に寄せ、右足を前にした構えての高速刺突。

恋は武器も使わず爪をかわす。

二撃、牙の愚者（ブレードアルバー）の剣身。

左足を下げ、右足を前に、腕を左に下ろし、切っ先を正面下に下げた構えを取る。

一見ノーガードに見えるので、勢い込んで恋が攻撃してくる時に、切っ先を上に向け下腹を突く。

だが、恋は体を捻ってかわしながら俺の爪を蹴り飛ばした。

三撃、牙の愚者（エッジアルバー）の刃。

恋がかわしている間に愚者（ブレードアルバー）の剣身から派生した構えを取る。

ノーガードに見せるべく、切っ先は地面に降ろして剣を垂直に立て、左手は柄頭の上に重ねる。

右手を軸に左手で柄頭を押し下げると、テコの応用で剣先は持ち上げるよりも早く上を向く。

その不意打ちを察知した恋は戟を使って大牙と同じく折れない様、頑丈に作った筈の牙をへし折った。

四撃、無手による見えざる早き拳圧（ファントランジ）。

見えざる拳圧が恋に殺到する。

見えない筈の一撃をどうやって感知しているのか戟と左手を使って弾かれた。

終撃、蹴撃、返しの二柄（ヴォルテヒルト）。

恋が踏み込んできた時、拳は相手の移動線上においたまま体を捻って恋の突きをかわす。

かわした恋が大きく踏み込んで戟の薙ぎ。

俺はかわしながら逆立ちし、恋の体に左足を叩きこむ。

それと同時に右手は後ろから前へと体ごと回転させ、右足に巻き付けていた鎖を操り、大牙を恋に飛ばす。

その一撃は大牙が当る前に鎖を掴まれ、ひっぱり落とされた。

俺はそこで衝撃を受けた。

「ガッ？！」

恋の戟の石突きが俺の鳩尾に吸い込まれたからだった。

俺は恋に負けた。

何故負けた？

敗因は？

魔眼に頼り過ぎていた？

関羽に勝って増長していたのか？

そんな思考が俺の頭を駆け巡り、意識は闇に落ちていった。

第二十八章　恋と朱然（後書き）

という訳で呂布ＶＳ朱然の行方は呂布の勝ちでした。
朱然さんの高くなった鼻をへし折った形にしたつもりです。
最強の壁はまだ高いですよーという事で。
強引だったかなぁ～？と思いましたが。

感想、指摘、誤字脱字、待ってます。

第ＥＸ・２章　実家と皆と朱然さん（前書き）

２０万アクセス＆２５０００ユニーク達成しました。
まあ、ネタ回という事で見なくとも大丈夫な回ですが、見てくれると嬉しいです！

第ＥＸ・２章　実家と皆と朱然さん

建業に本拠を構えた呉には様々な文が届く。
それは要望であったり、嘆願であったり、苦情が大半である。
その中には当然、普通の文も入っている。
そして、俺にも文が届いた。
短い文だ。

水仙へ

呉の本拠が建業に移ったのにどうして顔を出してくれないのかしら？
文では書く事があり過ぎるので単刀直入に書きます。
帰ってきなさい。
早急にです。
家出した事もキッチリ話を聞かせてもらいますからねッ！
それと貴方の同僚やお友達を絶対に連れてきなさい。

母より

あー、家出してから全く文を出してなかった……やべぇ……。
ダラダラと冷や汗が湧き出してくる。
これはすぐ行ってご機嫌取りをしなければなるまい。

てか、しないと母さんが暴れる！
孫堅様の代ではかなりの武官だったらしい、と祭から聞いた事がある。

こうして俺は実家に向かう為の準備を進めた。
呉の皆に実家に行くので休むと言ったら皆ついてきた。

仕事はいいのか？

で、朱家の門前。

俺のテンションはすこぶる低い……。

連れてきた後ろ連中は俺とは対称的にワクワクしているというかテンションが高い。

「水仙の家は仲立ちした時以来ねぇ～」

懐かしがる雪蓮。

「これが水仙の家……城ほどではないけれど中々の大きさね」

蓮華は家を見上げながら言う。
その後ろには思春さんが定位置にいる。
相変わらずのブリザードっぷりだ。

「蓮華様、朱家は建業でも名の通った名家なんですよぉ～。　書庫に行きたいですねぇ～、じゅるり！」

穏が俺の家の蔵書を狙っている！？
じゅるりとか怖ッ！

「ふむ、急激に成長した朱家……とても興味がある」

クイッと眼鏡を上げながら言う。

「此処が水仙隊長のお家なんですね！」

相変わらず元気いっぱいですね明命さん！

「わーい！　水仙のお家っておっきいね～！」

俺の腕にしがみつく小蓮。

「師匠の家師匠の家師匠の家」

亜莎よ！
何故テンパっているのか俺にはわからないよ？！

「酒があればよいのじゃが酒は出るのかの？」

祭さんはお酒ばっかりですね！
そんな国のお偉い方が来る場所でもないのに……。

「取り敢えず変な遠慮はいらないのでどうぞ」

俺達は門を潜った。

そして、俺が玄関の戸を開けると紫の弾丸×三が俺の腹部に直撃

した！

「ウボァァァァッ！！」

某皇帝の様な悲鳴を上げ吹っ飛んだ。

後ろの皆は何気に避けているのは流石と言うべきか……。

俺は起き上がりながら腹部の弾丸を引き剥がし、まとめて掴み持ち上げて立ち上がり、地面に紫の弾丸×三をおろした。

「水仙ちゃん！　寂しかったのよ～ぅ！」

「「よ～ぅ！」」

また、俺に抱きつく紫の弾丸×三。

「えっと、水仙……この子達は？」

「俺の妹で三つ子、俺が養子に来た三年後に生まれたんだよ。　蓮華は知ってるでしょ？」

「そういえば塾で水仙に会って少し後に言っていたわね」

そう、紫の弾丸×三は妹だった。

紫の長髪でストレート、ポニーテール、ツインテール、顔は従妹にあたるだけあってよく似ている三人だった。

「整列！　番号！」

「一！」「二！」「三！」

この時、他の皆はこう思った。

（（（（（ちょ、調教されている?!）））））

「えーと、一番目から自己紹介すると統括の得意な釣り目の朱才、武術が得意な泣き黒子の朱紀、策謀が得意なタレ目の朱緯です」

「真名はどうする？　預けるか？」

「水仙ちゃんに任せます！」

「「ます！」」

「じゃあ、皆に預けなさい」

「「「了解であります！」」」

ビシィッ！と敬礼する三人。

「朱才が鈴蘭、朱紀が黄蘭、朱緯が蒼蘭だ、呼んでやってくれ」

俺が気軽に言い、皆もそれぞれに自己紹介をした。

「水仙ちゃん！　お母さんが呼んでるよ！　着替えてから来てくれって言ってたよー。

着替えは水仙ちゃんの部屋に置いてあるのを着てくるようにって」

「わかった。　すぐ行くからお前達は皆をおもてなししなさい」

「「「はーい！」」」

三人は見事にハモッて皆を連れていった。

ちなみに言うが、家自体はデカイけど清貧を主旨としているので結構中は質素です。

俺は久しぶりに自分の部屋に入った。

一、二年使ってなかったのに随分懐かしい感じだ……。

そして、布団の上に鎮座している服。

はぁ……アレを着るのか……相変わらず、この家の中では俺の服は女物なんだな……。

俺は渋々着替え始める。

うぅ……このスースー感が懐かしいと思えるのは末期症状なのだろうか？

俺は着替え終わり、皆の居るであろう居間へ向かい扉を開いた。

――――――……一瞬の静寂。

その瞬間、居間には沈黙が流れた。

それはそうだろう！
今の俺はメイドさんなのだからッ！
自分で言ってて鬱になってきた……。

「水仙、扉の所で固まってないで入りなさい」

叔母にあたるので三つ子と同じくよく似ている。
髪型は俺と同じく首の後ろで縛っている。

あ、母さんと三つ子の瞳は魔眼ではないので黒です。

「わかりました蘭お母様、ではお茶とお菓子を準備します」

俺は音も無く移動し、人数分を用意してセッティングしていった。

「皆様、どうぞおくつろぎください」

皆の信じられないという視線が痛いッ！

「雪蓮様、蓮華様、冥琳様、祭はお久しぶりです。　初めての人もいる様なので自己紹介をしたいと思います。
姓は朱、名は治、字は君理、真名は蘭、先代の孫堅様に仕えさせて頂いた者でございます。
今は現役を退いて隠居の身です。　どうぞ、皆さん真名でお呼びください」

「久しぶりじゃの朱治！　酒は無いのかの？」

「相変わらずですね祭？」

変わらない世間話をする我が母達。
で、一段落した所でメイドに従事する事で視線を感じないようにしていた俺に母さんが話しかける。

「ところで水仙……あれ程、旅には反対したにも関わらず旅に出ましたね？」

「それがどうかしたのですか？」

「どうしたかではありません！　一体どれだけ心配したと思っていたのですか？　貴方は養子とはいえ、朱家の長男なのですよ？」

「ならばこそ、戦場で名を得るのは当然でしょう？　現に私は最優の将という名を得ました」

「……わかりました。　水仙、貴方は確かに才に富み朱家に多大な益をもたらしました。
ですが、死んでしまえばそこで終りなのです。　そうですね……少なくとも子供ができたのならば多少の無茶は目を瞑りましょう。
この中で嫁を貰うのも良いかもしれないわ」

母さんのその発言で蓮華、明命、亜莎の三人がブフゥーッと茶を吹いた。
雪蓮、冥琳、祭は苦笑、思春は無表情、穏はニコニコしたまま、小蓮は頬を染めた。

「あら？　反応した人がいると言う事は……これは以外にも早く孫の顔が見れるかもしれないわね？
いなかったら連れてきた女の子と無理やりくっつけ様と思ったの

だけれど……」

クスクスと笑う母さん。

「……」

俺は澄まし顔でスルー。

だって、同僚連れて来いとか狙ってるとしか思えなかったし。

「話はそれで終わりですかお義母様？」

「あ～ん、水仙ちゃん！　お義母様だなんて他人事のように言わないでぇ～」

途端にフニャッとなる母さん。

機嫌は直ったか……。

暴れなくてよかった。

「母さん……」

連れて来といて皆が空気だが、まあ、さっきまで真面目なやり取りしてたしなぁ。

そんなこんなで俺はメイドとして夕食の料理をご馳走したりした。

その間に母さんが俺の恥ずかしい過去を色々吹き込んでいった。

母さん……本人にワザと聞こえるようにそういう事言うのやめて

くれるかな？

こうして、ドタバタな実家帰りは終わった。

第ＥＸ・２章　実家と皆と朱然さん（後書き）

という事でネタ回でした。
楽しんで頂けたのなら幸いです。

ご意見・ご感想をお待ちしてます！

第二十九章　蜀との邂逅と朱然（前書き）

眠いでござる。
てか、もう寝ます。

第二十九章　蜀との邂逅と朱然

「うぅ……」

目を覚ますとそこは知らない天井だった。

てか、どこだ？

俺は過去を思い出し始める。

――――――俺は……お前に守られる程、弱くない！

うだ――――――ッ！！

ガバッと頭を抱える。

恥ずかしすぎるッ！

何様だ俺はッ！

どこぞの金ピカ英雄王でもあるまいし！

油断すれば倒される……そんな事分かり切っていた筈なのに！

ゴロゴロと布団の上で転げまわっていると見知った人物が入ってきた。

「えーっと、目が覚めたみたいですねっ！」

「あのお兄ちゃん何やってるのだ？」

「鈴々よ、見てはいかんぞ？」

「あはは……そうですね」

何故か現れたのは蜀の面々。

詳しく言えば劉備、張飛、趙雲、諸葛亮の四人。

「何故貴様がいる？　俺は恋……呂布に負けた。　本来、死ぬか呂布に捕まっているはずだ」

俺は布団に座り直して問う。

「えっと、それはですね～、朱里ちゃんお願い！」

いきなり丸投げかよッ！

「簡単に説明すると朱然さんが呂布さんに捕まった後、呂布達が本拠に戻りました。

ですが、呂布軍は無理な強行軍で国境を越えた事と兵糧の確保が難しかったらしく、そこを呉へ行かなかった残りの軍で強襲したんです」

「それにしたって、どれだけ数を揃えても呂布はたやすく、とまでは言わないけど打ち破るだろ？」

「それはお主の所為だ」

「ああ……今ので分かった」

「そうですか……」

張飛と劉備は首を捻った。

つまりは気絶している俺という荷物を持っている恋は身動きが取れずに捕まったと……。

面白くも無い事だ。

「で、関羽を捕まえた俺を拷問でもするか？」

「そんなことしません！」

俺の嫌味な問いに劉備は即答した。

「つくづく甘いな、劉備？」

その言葉に張飛と趙雲が何所からか取り出した蛇矛と龍牙が俺の喉元につきつけられた。

「お姉ちゃんを馬鹿にするななのだッ！」

「少し自分の立場をわきまえるがよい」

「やめて二人共！」

劉備が止めに入る。

「やれやれ、その程度の挑発で武器を使うとは……先が思いやられるな？」

「朱然さん！」

悲鳴のような声で名前を呼ばれた。

「詫びるつもりはないよ？　事実を言ったまでだからな……。　関羽はまあ、呉で殺されてはいないだろう。

大方、お前ら蜀は俺と関羽を交換するつもりだろう？」

「その通りです」

俺は二つの得物に狙われながらも堂々と答え、諸葛亮が肯定する。

「で、呂布はどうなった？」

「朱然さんに危害を加えない限り敵対しないという事で特に拘束等はしていません」

「そうか、俺の処遇はどうなる？」

「敵対しなければ特になにも……」

「本当、つくづく甘い……俺の持ち物は？」

「そこの机に置いてあります。　武器の方はこちらで預かっていますし、ついてきた馬は馬小屋です」

俺は立ち上がり持ち物を知らべる。

お、あったあった。

黒さん仮面に携帯死神コート、財布、着ていた服と服に縫い込ま

れた無影が三十本、携帯食、万能ツール諸々。
あ、音叉ナイフは流石に取り上げられたか……。

「そういえば詠と月は？」

「二人とも元気ですよ」

「そうか……それについては約束を守ってくれた事には感謝する」

「約束？　約束って何ですか？」

俺を捕まえたて持ち物を検査をしたのは誰だよ……武器だけ取り上げて安心したのか？
どうなんだそれは？

俺はそう思いながら荷物の中から仮面を取り出し装着して劉備達に向き直る。

「それはこういう事だ」

「貴方は仮面さん！」

「仮面の人なのだっ！」

「メンマ同志？！」

「地図をくれた仮面の人でしっ！」

四者四様に驚く。

てか趙雲よ……俺は別に特別メンマが好きな訳じゃないぞ……ホント、この世界は仮面を付けると認識阻害魔法でも自動発動するのか？

まあ、それはどうでもいい。

一先ずは……ていッ！

俺の服のいたる所に仕込んである無影を部屋中に張り巡らせ、張飛、趙雲の武器を絡め取る。

「油断大敵、だな？」

「貴様ッ？！　メンマの同志とはいえ許さんぞッ！」

「お姉ちゃんは逃げるのだッ！」

逃げると言っても全ての出入り口は無影で封鎖しているのだっ！

「まあ、待て」

右手で制する。

「私達をどうするつもりですか？」

「別に？　俺は劉備、お前に少しばかり話がある」

「何ですか？」

警戒しながら聞く劉備。

「お前の理想について、だ。　俺は関羽と戦っている時に指摘した

が答える事は出来なかった。
その内容はお前の理想についてだ劉備。　お前は……理想を抱いて溺死する覚悟があるのか？　とね」

「えっ？　それはどういうことですか？」

わからないと首を捻る劉備。

「簡単に言えばお前の理想……皆、仲良く笑顔にという理想の矛盾についてだ」

「……」

押し黙る劉備。
俺は構わず話を続ける。

「お前の理想はこの戦乱の世において必ず受け入れられない者が出るという事だ」

「そんなことありません！　きっと……きっと皆とよく話せば受け入れてくれるはずです！
現に賛同してくれている人もいます！」

「フッ、笑わせないでくれ劉備。　何日も食べられない子供が食べ物を盗んだのをたまたま見つけた時、お前はどうする？」

「それは叱ってから……盗んでしまった所に謝りに行って私が食べ物を分けます」

「予想通りの答えか……ならば、それを見ていた他の子供達がお前

に助けを求めたらどうだ？」

「その子達にも食べ物を渡します」

「ならば、それを見ていた大人達が来たら？　お前は当然、大人達にも食べ物を別け与えるんだろう？」

「そうです！」

予想通り過ぎる展開だな。

「お前の食べる物が無くなってもお前は続けるのか？　そんな事をすれば国の食料が無くなるのに？

食べ物が無い状態で他国が侵攻してきたら？」

「それは……そう！

他の人達に呼びかけるとか、田畑から食料を作っているので少なくなる事はあっても無くなる事は無いと思います！

だから負ける事も無いと思います！」

逃げ道を見つけたな？

ならば次だ。

「では、次の質問……呉に進行したのはなんでかな？」

「それは……」

「それはこれからの事を大局的に見て私が提案したまでです！」

諸葛亮が劉備に代わって答える。

「例え諸葛亮が提案したとしても決定したのは王である劉備だろ？
なら、結局は劉備の所為じゃないか？
魏と呉が戦って兵の少なかった呉を攻めたのは理に適っているが……皆、笑顔にと言いながら他国の人間の笑顔を奪う訳だ」

「そ、そんな事！」

「思っていなかった？
なら俺に納得のいく説明をくれよ……それともその戦いで死んだ兵を……俺の部下を生き返らせてくれるのか？」

俺は嫌味ったらしく言う。

「……」

「答えられないから押し黙るのか？　ああ、図星を突かれたから黙り込んだのか……。
お前は自分の抱いた結果を受け止められるのか？　自身の理想を追い求めた先がもし絶望だけしかないと知って尚、突き進む覚悟があるのか？
何より、その全てを救うという理想を……そんな幻想を抱いて死ぬ覚悟を持っているのかと聞いているんだよ劉備」

「……」

「全く……少なくとも、魏の曹操や呉の孫策は民の平和を願いながらも犠牲にする覚悟を持っているぞ？」

「犠牲にする覚悟なんて……持てるはずありません！」

「だったら始めから王になるなッ！！」

「「「「ッ！！」」」」

俺の罵声に身を竦める四人。

「周りも周りだッ！！　王になるならばその矛盾した覚悟を持って然るべきなのに何故、誰も指摘してやらなかったッ！！
もし、そのふざけた幻想を抱き続けるなら幻想を抱いて溺死しろ！」

ああ、ダメだ……頭に血が上り過ぎて感情のままに怒鳴ってしまった。
だが、しかし！
このセリフは忘れないッ！
でも、アーチャーみたいな八つ当たり……最低過ぎるなぁ。

「わ、私は……覚悟が、足りなかったかもしれません……でも！
後悔は絶対にしません！」

劉備は泣きながら答えた。

ふうん、一応そう言えるだけの覚悟はあるのか……ま、始めはこんなもんか。

「……それならいい」

「えっ？」

俺の呟きに劉備が反応する。

「後悔しないならそれでいい。　納得はできなくとも後悔しないという覚悟はできるんだろ？」

「それは……そうですけど」

「だったらいいと言ったんだ。　これからお前は迷うだろうが、自分の選択に後悔しないなら王としては及第点だろう。

もし、また同じことを言うのなら、その時は……俺の手で引導を渡してやるよ」

俺は無影を戻しながら言う。

「もっとも俺は百の民と一の大切な者のどちらかしか助けられず、誰も助けも得られない状況の時は迷わず一を取る。

そして、自分の命と大切な者でも同様に大切な者を取る。　自分の命と百の民だった場合は自分が危険にならない程度には助ける。

助けられなかった分の怨嗟の声は甘んじて受けるつもりだ。　だが、大切な者を守る為に俺は死んでやるつもりはない。

もし、大切な者を守れて尚、余裕があるのなら助けられる者は助けるそれが俺の覚悟だ」

「「「「……」」」」

再び重い空気が場を支配する。

「私は……私はそんな覚悟は持てません……それでも救える人は全員救いたいです！

皆、笑顔にするっていう私の理想は……夢はッ、抱き続けます！

例え困難でも皆と協力して乗り越えて見せます！
だって蜀の皆は私の理想について来てくれたから……私が諦める訳にはいかないんです！」

はぁ……さっきは何も言えなかったくせに、もう覚悟を持ってるじゃないかよ。

「そうか……まあ、俺は言いたい事は言ったから寝る」

俺は布団を被り、劉備達は部屋から出て行った。
そう思った所で扉がまた微妙に開き、劉備が顔だけ部屋の中に入れていた。

「何か？」

寝返りをうって扉を見る。

「私は朱然さんをさっきの事でちょっと好きになったので桃華と真名で呼んでください」

エッ？
いきなり告白？
劉備ってMだっけ？

「そうか……俺は水仙と呼んでくれ」

「解りました水仙さん……さっきは好きって言いましたけどそれ以上に根本的な所で朱然さんが大嫌いですッ、べー！！」

劉備は微妙に好き発言の後のあっかんべーと大嫌いの発言を捨て

台詞に去っていった。

「……ッ！！！」

今、俺の額の隅には怒りマークを付けているだろう！

言ってくれるじゃないか！

俺は瞼を閉じるとすぐに夢の中に沈んでいった。

第二十九章　蜀との邂逅と朱然（後書き）

はい、やっぱり嫌われましたー。
時々、女の子って笑顔でこういう事言うから怖いですよね～。
そう思っているのは自分だけか・・・・・・。
しくしく・・・・・・。
恋姫編も終わりが見えてきたのでしょうか？
よし、がんばろ～う！
次回！　その回っきりかもしれない意外な人物が現れるかもしれないかもしれないかも？な、話！
お楽しみに～！

ご意見・ご感想お待ちしています。

第三十章　華蝶と仙人と朱然（前書き）

ゴールデンウィーク、それは忙しいだけの日々・・・・・・。
最近、真面目に炊飯器が漏電していて二回も感電した作者です。
不覚にも「みぎゃー」と叫び声をあげてしまった。
その所為で思いついたネタの記憶が飛んでしまった・・・・・・。

第三十章　華蝶と仙人と朱然

俺が望まずして蜀に来てから三日程経った。
外出も認められた。
更に敵であるにも拘らず、蜀の人達が真名を預けてくれた。
劉備こと桃華とも普通に話す事は出来るが、やっぱり嫌われてるっぽい。
で、今は何をしているかというと……。

「ハァァァッ！」

「りゃァァァッ！」

何故か魏延こと焔耶と、馬岱こと蒲公英の二人と模擬戦をしていた。
勝敗は俺が二人の攻撃をかわし続け、本を読み切ったら俺の勝ち。
焔耶と蒲公英の二人の攻撃が俺に当ったら俺の負け。
俺からの反撃は無し。
ちなみに二人とも己の得意な武器、金棒の様な鈍砕骨、鎌付き槍の様な影閃を俺に全力で振ってくる。
が、俺は本を普通に読みながらノラリクラリとかわしていた。
もっとも、挟まれない様に片方を壁にして、もう片方に攻撃できないように誘導してますけどね。

「「なんで当たらない（の）？！」」

「……ふぁ」

おっと、つい欠伸が……。

「此処までコケにされたのは初めてだッ！」

「くやしぃ～～～ッ！」

「後、二十頁だぞ～。

焔耶は殺気だだ漏れ、獲物の都合とはいえ大振りし過ぎで体中に力が入り過ぎ、蒲公英は言動は嘘だらけの癖に実際の攻撃は素直すぎで虚が少ない、得物に振り回されて重心軸が不安定だよ。

だから攻撃の来る瞬間、此処に来ますよーって言っているようなものなのだよ」

結局、俺の勝ちでした。

「見事だのぅ水仙……焔耶、お前は修行のやり直しが必要の様だな」

「鍛錬が足てないぞ蒲公英」

「さってと……次の本を見よう。　で、次はどっちかが相手？　それなら武器で戦るけど？」

「なら私だな！」

「いいや、アタシだ！」

喧嘩を始める厳顔こと桔梗と馬超こと翠。

「面倒だから後一人だけにしてくださいねー」

俺は椅子に座って山の様に積まれている本を速読し始める。

「水仙殿……私と戦ってもらえますかな？」

現れたのは趙雲こと星だった。

「じゃ、星とやりますかね」

「「何だって（じゃと）――――――ッ？！」」

俺は守殻を纏い、星は龍牙を構える。

「行きます！　ハイッハイッハイ――――――ッ！」

星の連続突きが俺に襲いかかるが、俺は届かざる左（マンゴーシュ）の守護拳を使い、逸らしてゆく。

流石に早いな……。

「見えざる早き拳圧（ファントランジ）！」

「ぬっ？！」

俺の拳圧を星は僅かな風圧を読んでかわしていった。

うーむ、未完成というか改良がいるってことか……祭には効いたのになぁ……。

「中々の技ですが、私には通じませんぞ」

「なら、わかっていてもかわせない攻撃か射程外から攻撃をするま

でだ」

即座に距離をあけて見える気弾と見えない拳圧を連射してみた。
だが、これもかわされた。

しかし、これは次への布石なのだッ！

「これで終わりですかな？」

「さて、それはどうかな？」

「特に何かされた訳でも攻撃が当たった訳でもないようですが？」

「はっはっはー、ていっ！」

棒読みな笑い声と共に軽く右手でジャブを出してみる。すると星の足がバシンッ！という音を立てて弾かれ、膝を着く。

「な……に……？」

星が分からないといった顔をする。
外野の翠、桔梗、焔耶、蒲公英も同様の様だ。

「よっ！　ほっ！　はっ！　やっ！」

俺は軽い掛け声と共に一人でこれまた軽いパンチやキックをする。
それに合わせるかのように星の体が衝撃を受ける。

「クッ？！　ッ！？　ナッ！？　ッ！？」

「降参する？」

「い、え……まだまだ行けますぞ」

俺は力を込めパンチを繰り出し星の龍牙を弾き飛ばした。

「はい、おしまい」

俺はそう言うと読書に戻った。

はぁ……これでも恋には届かないんだよなぁ……もっと創意工夫をするか、それともっと別の……。

「ねえねえ、水仙さん！　さっきのは何やったの？」

蒲公英が俺に問いかけてくる。

「そうですな……喰らった私が全く理解できなかった」

俺は星達に視線を向けまた本へ戻して喋り始めた。

「あれも気を使った技だよ。　名前は蛇流（だりゅう）、とでも言っておこうかな。

簡単に言うと、もの凄く細長ーくした自分の気を相手に幾つも括り付けて、その場所に自分の動きを相手に伝えることができる技。

殴ればその衝撃が相手に付けた気の糸の先へ伝わり目に見えない攻撃に見える。

思いついて編み出したんだけど五本までしか糸が出せないからまだまだ実戦には向かないかな？」

「へぇー！」

「「ほぉー」」

「……」

感心する三人に無言一人。

「さて、この三日間で読んでいない本はあらかた読んだし、本屋にでも行こうっと……あ、負けた焔耶と蒲公英は城の書庫にこの本を戻しておいてねー」

俺はそう言って城門へ歩き出した。

そして、街に出ると目の前には町民を人質にするチンピラが十人。
相対するは仮面連者。
もとい星と恋と朱里の三人。

さっき城にいたのに早いな星……てか、服や武器がまったく変わっていないのに……やっぱり一部以外バレないのか……。

「人質とは卑怯だぞ！」

「黙れ変態仮面共！　それ以上近付くんじゃねぇ！」

あ、今の発言で朱里が凄い泣きそう。
そして、これは手が出せなくてピンチか？
ならば行くしかあるまい！

――――――デュワッ！

黒い死神さん仮面（蝶が左側に描かれている）とコンパクト黒コートを着て屋根へ登った。
無影を投擲し人質を捕まえているチンピラを捕まえる。

「「だ、誰だ！」」

星達とチンピラ達が同時にこちらに向く。

「我が名は華蝶仮面が影の仲間、影華蝶」

「おお、新たなる同志が！」

「……水仙？」

「水仙さん……」

朱里に恋、真名言わないで！
おおぅ、朱里の瞳のハイライトが消えて諦めたような顔に……。

俺はそう思いながら無影で全員グルグル巻きにして戦闘不能にした。
そこへ街の警邏達が現れる。

「逃げるぞ！　恋華蝶、朱華蝶、影華蝶！」

最後のポーズとかは時間が無くて省略か……。

「はいッ！」

「……」

コクッと頷く恋とやっと仮面が外せるからか朱里は嬉しそうだ。
俺は無影を操り、空を駆けて路地裏へ着地、仮面とコートをしまっていると背中から衝撃があった。

「いったーいのー！」

黒フリルのパンツを丸見せしている女の子が一人。
髪はショートカットの金髪、瞳も金色で肌はまるで陶器の様な白さだった。

スタイルは蓮華に似ているかもしれぬ……。

そして、黒のゴスロリドレスを着ていた。

何故、ゴスロリ？

「もう、いきなりなんてことなんだのー……でも、このしちゅえーしょんはですてぃにーの予感だのー？
ふーむ、ぶつかったのは中々いい男じゃな――――」

「どこですかぁ～、出てこないと怒りますよ～」

癒し系な女の子の声が聞こえて来た。

「――――まずい、追手が来たんだのー！」

シチュエーションにデスティニー？
何故、英語？

そう思った時にはその追手とやらに追われた少女は行ってしまった。

謝る暇さえなかったな……む？

何か落ちている？

拾い上げてみると布に何か書かれている。

これは……図形？

中国の陰陽のマークを中心にしてその外側に二つの四角形が重なり言うなれば八紡星となり、その八紡星を円が取り囲み、その円と更に大きな円の間に十五の区切りがある。

その更に外側に四つの角が上下左右に三角形ある。

最後に八角形が囲む形になっている。

内側の八紡星のそれぞれの角には上から時計回りに四神と四霊の頭文字だと思われる玄、応、青、麒、朱、鳳、白、霊。

十六の欄には多分、龍生九子と瑞獣の頭文字の貔、蚣、贔、負、？、睚、？、？、鸞、？、嘲、蒲、望、囚、？、椒。

十六の欄の外の上下左右の三角形には上から四凶の窮、檮、混、饕。

最後の大外の八角形は八卦でこれは坎、坤、震、巽、離、艮、兌、乾。

よく見ると陰陽のマーク以外の図形の線は細かい文字の行でできていた。

なんじゃこりゃ？

よく見てみると布の端の方に名前らしきものが書いてある。

“たいきょくず　こんろんさんどーし　たいこうぼう”

ブフゥーッと吹き出した。

た、太極図って……宝貝のアレか？

それでもって、さっきぶつかったのは太公望？！

あ、ありえねぇー……てか、周の建国とか封神計画を成し遂げといてまだ道士なのか……取り敢えず宝貝なんて滅多に見れないし流れだけ見ておこう。

俺は魔眼を発動し宝貝の流れを見て理解しておく。

むー……本当に宝貝の様だ……これどうしよう……。

そう思った時、彼女はまた現れ太極図を素早く俺の手から取って懐に入れた。

「危ない危ない……これ無くしたら元始天尊の狸ババァに半殺しにされるからのー。

せーふ、せーふ……拾ってくれたそこの美しいおにーさん、お礼にみーとお茶しな――――――」

「もう！　私の苦労もわかってくださいよぅ！　さもないと二回残している変身を使っちゃいますからね――――――ッ！」」

俺を逆ナンしようとしてきた太公望は、さっきの癒し系な声の主の怒ったように聞こえない怒り声を聞いて猛ダッシュ走っていく。

「――――――不味い！　スープーちゃんが本気もーどになったんだのーッ！　しーゆー美しいおにーさん！　チュッ！」

そう言って太公望は投げキッスと胡散臭い英語を織り交ぜて嵐の

如く帰っていった。

「あんなのが太公望……世も末だな……」

俺は見なかった事にして散歩を再開した。

この出来事で理想像が粉々に爆砕してしまったのは言うまでも無い。

第三十章　華蝶と仙人と朱然（後書き）

はい、太公望さんと微妙に四不象が現れました。
オリキャラですが、壊れてる感のあるキャラ設定は軽く流してくれると嬉しいです。
というかこの憑依とか転生とか召喚されるお話、つまらなかったら鼻で笑ってスルーして頂けると幸いです。
所詮、暇潰しに書いているモノで尚且つ読者様の暇潰し程度になれば良いなーくらいのモノですので・・・・・・。
しかしながら此処まで読んでくださった読者様に感謝を。

ご意見・ご感想・誤字脱字の指摘お待ちしてまーす。

第三十一章　同盟と朱然（前書き）

短いです。
あと、割と文面も乱れ気味？

第三十一章　同盟と朱然

太公望事件から少しして呉から使者が来た。
内容は呉を襲撃した呂布と捕まっている朱然を返せというものだった。
返事はもちろんＮＯ。
ただし、関羽と交換ならば朱然は返すという話だった。
で、お互いの将を交換した後、戦闘をするとの事だ。
恋はついて来ると言ったけど呉であんなことしたので結局、蜀に残る事になった。
桔梗とか星とかは余計な荷物だとか言っていたけど。
で、蜀は呉と河を挟んで対峙。
俺と関羽がそれぞれ距離を置いてすれ違い、それぞれの陣営に帰った。

「水仙！」

「蓮華！」

俺達は抱きしめあう。

周りの目が好奇や嫉妬とかその他諸々な感じになったが気にしなーい。
恥ずかしがったり気にしたら負けですよという事です。

「ごほんッ！」

「ッ！」

蓮華は誰かの咳で俺から離れる。
そして、蜀は動き出す気配が無いので進撃。
河を渡り始める。
水深は腰よりちょっと上。
流れは足を取られれば流されそうなくらい早い。
俺は大渦を手にとって蓮華の隣に戻る。

何故って大牙を使いたかったが、牙をへし折られちゃったから。
後は魔眼を発動する。
本来、渡河の時は矢で狙うにはうってつけなのだが……攻めてこない？
原作の記憶に何かあった気がするのだが……何だったっけ？
ぶっちゃけ後、呉ルートって赤壁の戦いくらいしか覚えてないんだけど。

「蓮華、おかしい」

「水仙？」

「何故、劉備軍は攻めてこない？　兵力は呉が勝っていて俺達は無防備に河を渡っている。　絶好の機会だろう？
しかし、見ての通り、近づいてこない……ならば近づかなくともこちらの兵力を削る方法があるという事だ。
周りは平地で遮蔽物が無く伏兵がいる筈も無い。　考えられるのは……」

「「水攻め！！」」

俺と蓮華の声がダブる。
蓮華はすぐに指示を出すのだが、兵が多いという事は身動きが取

りにくいという事だ。
足首までしかなかった水位が今や脛の辺りまで増えている。
既に上流の方から、大きな地鳴りのような音が聞こえてきている。

来たッ！

「急げ――――――ッ！」

俺は声を張り上げるが、多くの兵が水に呑まれた。
幸いにも主力と武将達は無事だった。
俺達は残った兵達に指示を出す。
もう既に劉備軍は動き出しているのだから。
やっと陣形が整った所で戦闘が始まった。
先程の水計で動揺しているからか、数は押しているにも拘らず逆に押されている。
流石に恋は出てこないが、捕まっていた分、関羽が暴れているのが見て取れる。

こりゃ、また俺が行った方が手っ取り早いか？
今度こそ死ぬかもしれんけど、守りに徹すれば死にはしないだろうし、倒せないにしても時間稼ぎくらいは出来る筈だ。

俺は関羽の所まで向かおうとした時だった。

「申し上げま――――――すッ！」

突然、伝令の一人がこちらに声を張り上げ、向かってきた。
蜀の方も兵の動きが止まった。

「どうしたッ？！」

蓮華が聞く。

「ここより、北方五十里の所まで曹操軍が向かって来ております！」

「国境の兵は何をしていた！」

「曹操の軍に全て殺されたようで……」

「わかった！　蓮華、一先ず劉備軍に停戦を求めるんだ！　そして、同盟を組むんだ！
このままじゃ、呉蜀が曹操に各個撃破されて成す術が無くなる！
最悪、曹操と劉備が手を組む可能性もある！」

「わ、わかったわ！」

「俺と冥琳が行く」

「どうして水仙が行かなければならないの！？」

蓮華が馬を近づけ乗り出して言うって、近い近い近い！！
顔近いよ蓮華！

「捕虜とはいえ蜀にいたんだ。　話もしやすいからだよ」

「……わかったわ。　どうせ貴方の事だから止めても行くんでしょう？」

「ああ、行って来る」

蓮華は冥琳を呼び出し、俺達はすぐに劉備へと送った。
俺と冥琳は蜀の兵に話をして劉備達の所に行く。

「一つだけ方法があります。　それは……」

朱里の声が聞こえた。
俺はすかさず朱里の言葉に続ける。

「蜀の皆さっき振り。　朱里のその唯一つの方法である呉との同盟をこちらからも提案しにきたよっと」

「貴様は朱然！」

俺に偃月刀を向ける関羽。

「水仙……」

冥琳は呆れてものも言えないという感じでいう。

「それはさておき……この提案、受けるかい？」

「曹操とは相容れず、ですか……半ば同意、半ば疑惑と言ったところでしょうか」

「慎重だな諸葛亮」

「単純な話、領土に拘らなければ天下を一つにする意義なんてないんだよ。
相互不可侵と同盟を組みそれぞれを独立した国とする。　言うなれば天下二分の計。

曹操がもしこれに同意すれば天下三分の計になる。　これで皆、仲よし仲よしだろ？」

「なるほど……言い方はアレですが、その様な考えがあったんですね」

感心する朱里。

てか、アレっていうなアレって。

「そうだ、考えてくれ。　我々についた時と曹操についた時にどちらが劉備の理想の邪魔にならないかを……」

冥琳の言葉に桃華と朱里は考える。

「曹操は桃華達を受け入れはするけど。
結局は自身の理想の駒として扱うと思うが、こちらと組めば少なくとも対等な立場で意見できるがどうする？」

俺は畳みかけるように言う。

「同盟を受けましょう桃華様」

「うん、そうだね」

これにて同盟成立！
やったね☆
さて、後は赤壁の戦いだけだっけ？

そんな事を思っていると冥琳が主語を抜いたその話を切り出した。

大軍に効果的な火計の話を始める。

「ふむ、では決めた通りに」

「はい、そうですね」

相談は終わったようだ。

不敵に笑い合う二人の軍師達。

「じゃ、俺達はこれで帰るよ。　それじゃあね」

そう言った俺と冥琳は蜀の陣を後にした。

第三十一章　同盟と朱然（後書き）

呉蜀同盟成立。
急いで書いたので内容が微妙かもしれませんが許してください。

ｆｉｅ様の朱然が造った武器全部持ってってるのですか？
という問いに関しては朱然の馬の麒麟に取りつけてあります。
一章から董卓連合編までは麒麟は荷物運びみたいな感じになっていて戦になると麒麟から武装を取って逃がし、気で強化した自分の足で向かって行きました。
最近は拠点に置いておく、もしくは部下の馬に取りつけてもらってます。
標準装備は守殻と無影と音叉ナイフで戦闘に合わせて武器を変えています。
大剣、弓は麒麟で持って行き、鎌、槍は攻める時用、双鞭、楯は守る時用で部下の馬に取り付けてあります。

真田信幸様の変換できない漢字はカタカナ表示で良いのでは？
という問いですが、検討してみます。
他にも漢字変換できない方がいらっしゃった場合は変換できない漢字を教えて頂ければご一報を頂ければ幸いです。
なるべく早めにカタカナに直してみます。

次回は赤壁の戦い開戦直前までの裏切りと朱然です！
期待しないでお待ちください！

第三十二章　裏切りと朱然（前書き）

今更ＰＳ３を買いました。
でもテレビが小さいので高画質なのか解らない・・・・・・。

第三十二章　裏切りと朱然

俺達呉は一旦建業へ戻り、準備を整えて劉備との合流地点である長江に向かった。

全軍、最大戦力を投入した形だ。

曹操軍は約四十万。

対する呉蜀同盟は呉八万、蜀七万の合わせて十五万。

数が圧倒的に少ないのだが、海上戦なら呉が有利なのと火計で何とか互角に持っていけると思う。

このまま、イレギュラーが来なければそれで良し。

兎に角、この戦いに勝ち残る事、それだけを考えよう。

劉備との軍議中に祭と冥琳の言い争いが始まり、軍議が混乱してしまった。

俺も祭に乗っかり冥琳に口答えをした。

祭は文官と武官の確執的な事で、俺は筋が通ってそうで穴がある策を提案して否定された事を中心に今までの不満を言った。

祭と俺には鞭打ちの刑という形で一応の収束はした。

尻がメチャメチャ痛かったとだけ言っておこう。

それから呉の本陣にて祭と俺の二人は別の閨に隔離され、俺の閨に蓮華が訪れて二人っきりになった。

「どうしてこんな事に……どうしてあんなことを言ったのよ水仙！いつもの貴方らしくないわ！」

蓮華の表情が悲しみに染まる。

「蓮華、大丈夫だよ」

「どうしてそんな事が言えるの？」

「今は言えない……でも信じてくれ俺達、呉の絆を」

「それは信じてる……でも、不安なのよ……とても不安で震えが止まらないの……」

蓮華が自分を抱きしめる。
その体は震えている。
俺は蓮華を抱きしめて言う。

「大丈夫だ、俺達は負けない……」

抱きしめても蓮華の震えは止まらない。
俺は蓮華を抱きしめる手を少し緩め、唇にキスをした。
したことも無いのに自然とそうしていた。
蓮華は目を見開き驚いたが目を閉じ受け入れた。
唇を合わせたまま長い時間キスを続けた。
照れや恥ずかしさは全くなかった。
蓮華の震えが止まった時にやっと唇を離した。

「水仙？」

ボーッとした表情で名前を呼んだ。

……初めてのキス。
俺は今までキスなんぞしたことも無かった。
ええ、した事ありませんでしたよ！

悪かったですね！

今更ながら自分の顔が真っ赤になっているのがわかる。

「と、とにかく、大丈夫だ！」

「わかったわ、貴方を信じる。　何があっても。　ふふ、あの水仙が照れてるの？　案外、照れやなのね？」

さっきまで震えていたくせに笑顔で言ってくる。

予想外の事が起こると案外、女の子の方が逞しいのかも知れない。

「しようがないだろう？　こ、こんな事初めてだったんだからな！」

不味い、何故か俺がツンデレにッ？！

こういうのは蓮華の方だろう？！

「でも、ふふ。　これで一歩抜きんでたわ」

え？

何それ？

「抜きんでたって何でせう？」

「乙女同盟の秘密よ」

乙女同盟？

俺はクエスチョンマークを頭の上に浮かべている隙に蓮華は閨を出ていってしまった。

それから俺は腑に落ちない気持ちを抱えながら悶々していると祭が現れた。

「水仙よ、元気かの」

「鞭打ちでお尻が痛いのなんのって……」

未だにヒリヒリする。

「それだけ喋れれば大丈夫のようじゃのぅ。　お前は儂と冥琳が仕組んだ即興のアレに割り込んできたんじゃ、一緒に行くんじゃろう？」

「ああ、蓮華は何があっても信じてくれるってさ」

「何じゃ、やっとくっついたのか？」

「その話は全部終わった後だ。　そろそろ動かないと見つかるだろう？」

「そうじゃったの」

俺達はス〇ークばりのスニーキングをして脱走をする兵と共に船に乗り込み、明かりを付けずに出発した。

追撃に来たのは先頭から冥琳、穏、思春、亜莎、明命。

おーおー、矢がどんどん飛んでくるぜ。

こっちも反撃をしないとな。

取り敢えず十本ほど槍を拝借しておいたから、派手にやってやりますか！

俺は魔眼を発動し、大樹に槍を番え、気を装填、追ってきた船の前方の水面を狙う！

撃ち出すとドパァンッ！！という大砲の着弾の様な一撃が起こる。

「水仙！　ちょっとやり過ぎではないかのッ？！」

「大丈夫大丈夫！　やり過ぎたくらいが丁度いいんだよ！」

「それもそうじゃの、これくらいで死ぬようではこの戦でもすぐに死ぬじゃろうしな！」

そんなやり取りをしながら曹操軍のテリトリーに入った所で護衛船に守られながら陣に入っていった。

それに伴って呉の皆は引き返していった。

見事な引き際、流石だね冥琳。

第一段階は一先ず成功だ。

第二段階は華琳の説得だな。

さて、どうなるか……。

俺達の前に現れたのは秋蘭だった。

「や、久しぶりだね秋蘭」

「お前は朱然？！　お前も脱走したのか？！」

「急いでて俺の旗なんて準備できなかったんだよ……」

「そうか……」

微妙な空気が流れる。

「取り敢えず、華琳の所まで案内してくれないか？」

「ああ、わかった。　ついて来てくれ」

俺は華琳の元へ向かった。

「華琳様、黄蓋殿と……朱然殿をお連れしました」

「何ですって？　そんな報告受けていないわよ？」

「急いで出て来た為、旗を用意できなかったらしいです」

「……」

おおぅ、華琳が面白い顔をしている。

「久しぶり」

「朱然、間諜からの報告で黄蓋と共に鞭打ちの刑になったというのは聞いていたのだけれど、何故脱走したのかしら？」

「俺は反董卓連合の時、不意を突かれて捕まって呉に忠誠を誓うのなら生かしておくと言われたから、死ぬより武勲を立てて行こうと思ってね……ま、これも天命かなと呉に仕えていたんだ。

実家も呉にあったから人質にされるのも恐れたっていうのもあるけど。　でも、この仕えてみれば今回の仕打ちだ。

呉を裏切るのは華琳がこの戦いに勝って終わった時、大陸は統一されて実家も無事になる絶好の時期だったからと前に一時期、仕えた華琳なら俺をもっと効果的に使ってくれると思ったから。
今回の件で意見の合った祭さんと一緒に呉を抜けようという流れになったんだ」

「その通りじゃ。　あの武を軽んじる周公瑾にはほとほと呆れ果てたのでな。
我が武を堂々と誇れる死に場所を求め下ったのじゃ」

華琳が俺達をじっと見つる。
俺と祭も華琳を見返す。
しばらく沈黙。

「わかったわ、朱然、黄蓋は最前線に配置させてもらう。　存分にその武を振いなさい」

「ほぅ、早速最前線か……腕が鳴るわい！　曹孟徳にあっと驚く活躍を見せて見せよう！」

「ああ、存分に振わせてもらうよ華琳」

「この戦いに生き残れば正式に魏の武将として取り立ててあげるわ。
凛、二人を連れて行きなさい」

「はっ！」

俺は郭嘉こと凛さんについて行った。
歩きながら俺は罪悪感に苛まれていた。

――――――痛い。

でも、これも守るべきものの為だと、そう割り切った。

此処には本来いない筈の雪蓮と此処で死ぬはずの冥琳がいる。

そうさ、誰も欠けないでこれからも歴史を刻んでいくんだ。

ずっとずっと……俺はこのまま、この場所で……呉の一員としてこの時代を生きていきたい。

雪蓮と笑い合い、冥琳と話し合い、祭と酒を飲み交わし、明命と猫を追いかけ、亜莎に様々な事を教え、穏と本について談義したり、思春と無言で模擬戦したり、蓮華と穏かな時間を過ごしたりしたい。

例え、ゲームの世界であっても俺が此処にいるのは紛れもない真実で、此処に存在する人はやっぱり生きているのだから。

今夜の策を成功させて、俺は……。

第三十二章　裏切りと朱然（後書き）

微妙に蓮華と仲が深まりました。
まあ、これからどうなるのかは大まかにしか決めていないので変な方向に行きそうですが、どうか見捨てないでやってください！

第三十三章　開戦と黒幕と朱然（前書き）

取り敢えず、オリジナルなエンディングを書く事にしました。
あまり期待せずに読んでくださると幸いです。

第三十三章　開戦と黒幕と朱然

「黄蓋様、朱然様、準備完了しました！」

「よし、やれ！」

祭の合図と共に炎が上がる。
俺の方も大樹を構える。
もう片方の空いている手には敵から奪った槍が番えられている。

燃えやすいように先端の剣先より少し下には乾燥した布を巻いてある。
傍に控えている兵に火を点け……射る！

今回は威力より火をつける事に専念するのでメインマストや船倉への長距離射撃を敢行する。
それをひたすら機械的に繰り返した。
その度に華琳の……曹操軍に打撃を与えていく。
見知った者に死を送っていく。
相手の犠牲を肯定する。

割り切っていても、やっぱり気持ちの良い物ではないな……。

そうこうしている内に船は進み、呉の皆と合流できた。

「ただいま、蓮華」

「お帰りなさい、水仙」

そのやり取りだけで蓮華が俺を信じていてくれた事を確信した。

「ご苦労だった。　祭、水仙」

「ふっ、この老躯の賭け所、間違いではなかったのぅ」

「無問題、やるべき事をやっただけだよ」

俺は先程の知っている者の死を肯定する作業の所為で少し機嫌が悪くなっているのかも……いや、かもじゃないな……唯、気分が悪い。

だからこんなにも……止そう。

俺は無理をしない程度に派手に暴れ回る単独での遊撃をする事になった。

そして、現れた武将を足止めするというもの。

精々、派手に暴れ回って死なない程度に足止めをしますか！

気分を一新して無影を使い次々に船から船に飛び移っていった。

「フハハハハハッ！！」

俺は某魔王様の様な笑い声を上げながら――――――

守殻をつけた腕を地面を砕くが如く振り上げ、曹操軍の船を落下速度と気を込めた掌が当たった瞬間に技を出す。

剛力徹破（ごうりきてっぱ）・咬牙（こうが）。

外面と内面を同時に破壊する為の技。
それだけで船は沈む。
沈む船を無影を使って離脱し、別の船のマストの上に着地。

我ながら無茶苦茶だと思うけどね。
今の装備は守殻を纏い、無影を操り、背中には大樹を背負っている。
無影で宙を飛んだ姿を見た者は背負った大樹がまるで細長い四つの羽を背負っているように見えるかもしれない。

そんな事を考えながら大樹を構えて、海面を漂っていた槍を無影で吊り上げて装填。
更に気で強化。
気で光る槍を射出する。

――――轟音

雷鳴のような音と共に船底まで貫通する槍弾。
船には大穴が空き、徐々に船体が傾き沈んでいく。
それを見送った時だった。
風切り音と気が迫って来ているのを感じ、無影を使い移動する。
移動している間にも矢と気弾は絶え間なく襲いかかって来る。

「この攻撃は……秋蘭と凪か！」

千里眼ですぐさま、位置を確認。
こちらも大樹を構え、矢筒から矢を二本抜き、気での強化、射出の工程を即座に行い連射する。

矢除けの加護を持つ俺には飛んでくる矢は視界に納めている限り当たる事は無いが、凪の気弾は加護には適用されないので流れを見て気で強化した拳や大樹で弾き、かわす。
大樹で矢を弾きながら無影を投擲、別の船に飛ぶ間に空中で慣性に身を任せながら矢を連射。
秋蘭の矢を相殺するどころか弾いて秋蘭に突き進むのだが、その矢を弓でうまく弾いているのが見て取れる。
凪の方は気で強化した四肢で正面から矢を潰していく。

これじゃ、いつまで経っても決着つかないな。

そう思い、本隊を見た所で気になる事ができた。

二人の武将を足止めしているというのはいうのは良い事だが、呉の本隊が全く進んでいない？
おかしいぞ？

蜀は突出した船団の足止めをして、曹操本隊には呉の武将達が向かった筈なのに全く進まないことなど在り得ない。
少なくとも魏の武将の誰かが現れたら誰かに足止めを頼んで進めばいいのだから。

となると考えられるのは一つ……。

「今になってイレギュラーが来たのか？！」

そう思った時には無意識に水面をたゆたっていた迎撃用の長い槍を無影で手元まで引き寄せ番えていた。

「降り注げ！　雷槍雨襲ッ！」

俺は秋蘭達ではなく天に向けて槍を穿った。
秋蘭と凪には当たらない流れを見て射たので死ぬ事はないだろう。
槍は天へと昇り、勢いが止まると秋蘭達の乗る船の上空から落下を始める。
だが、それだけではない。
その技の名の通り、雷の槍が雨の如く落下に伴って雷を宿した小さな針状にバラけて雨の様に降り注ぐ技だ。
雷槍を撃ち出した瞬間、踵を返して大樹を背負い、それこそ縮地を使い、無影を使い、道無き道を最短距離で飛ぶ。
背後から轟雷の爆ぜる音が追ってきた。
その後、すぐに飛んで来た気弾は避けれたが、秋蘭の矢が数本、俺の肩や腕や足を掠っていった。

あの雷雨の中で……見事だ秋蘭に凪。

賛辞を送りながら、俺は呉の本隊に辿りついた。
そこには足が縫いつけられたかのように動けずにいた皆の姿があった。

そして、そこで本隊を足止めしていたのは――――――

――――――俺の血の繋がった父親だった。

「ここは俺が引き受ける。　蓮華達は曹操の所に行ってくれ」

その言葉と俺の尋常じゃない雰囲気に何も言わず蓮華達は先を急ぎ、父親も蓮華達の邪魔をしなかった。

蓮華達がいなくなると周りの死んでいる筈の魏兵がユラユラと立ち上がって周りを囲んだ。

「久しいな然」

「何でここにアンタがいる？」

「随分じゃないか？　実の父親に向かって」

「アンタなんて、もう父親でも何でもないだろ？　あんな事をしておいて……」

※第五章参照。

「しかし、見れば見る程、あの人形に成り下がった然とは思えんな。魂は崖に落とした前の日に贄として捧げたのだが……」

「何だと？！」

そういうことか……この野郎、自分の息子の魂を何かに喰らわせやがったな？！

空っぽの体に俺という魂が入って憑依したのはその所為だったのかッ！

その後、後始末に事故に見せかけて崖から落として殺そうとしたが、生き残ってしまったので養子に出したといったところか。

「ああ、よく見れば魂の形が然とは違うな？　化生の類でも憑依しているのか？　とても興味深い……」

「おい、幾つか聞きたい事がある」

「何だ？」

「お前は俺が朱家に行くまで私腹を肥やすことに執着するだけの腐った奴だと思っていたんだが？」

「ああ、施家の繁栄の為に色々やっていたぞ？　それこそ妖術などどいうモノまで手を出してな……。
私には武の才は欠片も無かったが、その妖術の才は並々ならなかったようでなぁ！」

クツクツと笑う。

「自分の息子の魂を何に喰わせた？」

「神だよ！」

「神だと？！」

「そう神だ！　そして、魂を喰われた息子は肉体という器だけになったのだよ」

「人間一人程度に神をどうこうする事なんてできないと思うんだが？」

「これを見れば解るんじゃないか？」

父親が懐から取り出したのは失われた筈の太平要術?!
どういう事だ?!

「それは!　何故それがある?!　黄布党と共に失われた筈なのに?!」

「アレは私が張角達に与えた妖術で複製した模造品よ!」

「つまり、それが本物という事か……」

「そういう事だ。　全く、偶然とはいえ良い物を手に入れたよ!
いや、これは私の元に来るという必然!
そんな私には尋常ではない程の妖力があってなぁ。
養子に出した人形のお前が活躍しているという噂を聞き付けて、
お前にちょっかいを仕掛けてやったのだよ。
孫策の暗殺に周瑜の病魔と言ったモノを!」

「全て……全てお前の所為だったのかぁッ?!」

俺はつい叫んでしまった。

「その通り、袁紹に反董卓連合を作るよう唆したのも俺だがな。
しかし、お前に全て阻まれてしまった。　だが、今度はの演目はお前達では阻めない」

「何をした?!」

「なぁに五胡の兵、五十万をこちらに向かわせたのよ!　この数はお前にはどうにもならんだろう?」

「お前はこの国を潰したいのかッ？！」

「先程も言っただろう？　私は神を呼び出し、同化する！　私が神になるのだ！

だが、今は時期ではない……もし、生き残れたならば自らの手でお前を殺してやろう！

ハハハッハッハハハハッハハハーーーッ！！」

狂った笑い声を残し、父親は消えた。

まさか父親がラスボスだったとは……。

俺の胸中は殺意に満ちていた。

だが、今することは五十万の兵を持つ五胡を何とかしなければならない。

その為には魏呉蜀が手を組まなければ到底太刀打ちできる数ではない。

俺は全ての将が集う場所へ急いだ。

第三十三章　開戦と黒幕と朱然（後書き）

黒幕はまさかの朱然パパにしました。
意表を突いたつもりですがどうでしょうか？

そんなこんなで悪戦苦闘しながら執筆をしていますが、これでいいのか悪いのか・・・・・・。
本当に自信がありませんが頑張ります！
読んでくださる皆様に感謝を！

第三十四章　天下三分と朱然（前書き）

今回はかなり短いです。

第三十四章　天下三分と朱然

俺は走っていた。
俺の憑依した朱然義封という身体の父親がこの世界でのイレギュラーとして現れた。
いや、元から来る事を解っていて世界が用意していたと言った方が正しいのかもしれない。

いやいや、父親が魂を神に喰わせるというイレギュラーを起こしたからこそ俺が憑依してしまったのか？
例によって例の如く、自らの願望の為に周りを犠牲にする事に何の痛みも感じない屑。
その願望は自身を神にするというもの。
手始めに五胡の兵、約五十万人を三国に送り込んだという。
その話は俺と父親しか知らない。
今の兵力は魏が火計によって約二十万まで減少し、呉が約七万、蜀が約六万の合わせて約三十三万。
もし、魏の兵力が無ければ約三十七万。
約四倍の敵。

――――圧倒的。

その言葉が自然と思い浮かぶ。
この戦況を覆すには三国の同盟が不可欠なるだろう。
その為に俺は道を急ぐ。

やっと、三者が対峙している所が見えてきた。
お互いに武器を向け合っている。
このままでは俺が着く前に両者が激突してしまう。

俺は縮地で飛んだ後更に虚空瞬動を使い、一段と高く跳躍し大樹を構え、調達しておいた槍を番え、蓮華達の真上に射った。

「白雷光！」

雷槍雨襲の応用で雷を宿した槍をスタングレネードのように光と音で無効化させる技。

それが炸裂した。

周りは昼の如く照らされ、聴覚が若干麻痺しているだろう。

俺は急いでその場に向かった。

「ちょっと待ったァァァッ！！」

何とか白雷光の効果が無くなり始めた所に到着出来た様だ。

そう思いながら両者の間に入り制止をする。

「「水仙？！」」

「あら、裏切り者の水仙じゃない？」

ヒィッ？！

華琳の目がヤバイッ！？

「華琳、嫌味は後で言ってくれ」

平静を装って俺は言う。

「五胡が動き出した。　兵数は約五十万、ここで争っていると国自体が無くなるぞッ！」

「「「「「何ッ？！」」」」」

華琳以外が驚く。

取り敢えず、華琳以外は信じてくれたようだ。

「その証拠は？」

「生憎、俺を信じてくれとしか言えない。　俺の命を賭けてもいい。だから、信じてくれ」

俺は華琳に向かって土下座をした。

「仮に本当だとして見返りは？」

「俺に出来る事ならば」

「ふぅん……そこまで言うのなら信じてあげても良いわ」

てか、華琳さん……貴女は今、かーなーり劣勢というか絶体絶命の筈なのに何故に上から目線？

「じゃあ朱然――――私のモノになりなさい」

「……何ですと？」

「何ですって？！」

蓮華が凄い反応した。

「先程、自分にできる事ならばと言ったのではなくて？」

「言ったけど……」

口ごもる俺。

「なら、問題無いでしょう？」

「問題大有りよ！」

突然、大声を出す蓮華。

「先程から孫権、貴方は何なのかしら？」

「わ、私はッ！　その水仙と……ゴニョゴニョ」

え？

何？

聞こえないんですが？

なんて言ったのか凄い気になる所なんですけど。

「やれやれね……まあ、その話は五胡を倒してゆっくりと話し合いましょうか……」

ええッ？！

よくわからん内に承諾？

蓮華何言ったの？！

てか、聞こえたの？！

「孫策、劉備、これから三国で協力して五胡を殲滅させるわ。いいわね？」

「あら、言ってくれるじゃない？」

「もちろんです！　力を合わせて頑張りましょう！」

さっきの棘々しい雰囲気は何所へやら、早くも協力の態勢になったのは良い事なのだろうか？

まあ、良いんだろうけど。

でも、俺を置いて行かないでッ？！

それから俺達は混乱する兵を華琳、雪蓮、桃華の三人を頂点にまとめ上げた。

軍師達が的確かつ迅速に指示を出し、策を練り、五胡の兵力にの差を何とかしようと悪戦苦闘をした。

武官達は軍師達の指示を見事に達成させ、休みも碌に取れないにも拘わらず敵を殲滅していった。

こうして、五胡の脅威は三国の同盟の元、去ったのだった。

唯一、父親という主犯を除いて……。

第三十四章　天下三分と朱然（後書き）

多分、次の話しはちょっと長いかもしれません。
それに強引かもしれませんが、後二、三話で恋姫編が終わるかも・・・・・。
ラノベ版くらいまでは書きたいと書いたのですが、展開上これで終わりにした方がいいかなと思ったので・・・・・・。
次の更新はなるべく早めにしたいと思います。

第三十五章　神と調律師と朱然（前書き）

えーっと、次で最終話です。

第三十五章　神と調律師と朱然

俺達は何とか五胡の脅威から逃れたと歓喜した。
だがそれもつかの間、俺の父親が……いや、朱然の父親が蓮華をさらい平原へと俺達を呼び出した。
そして、俺は居ても立ってもいられず、先に麒麟と新しく買った？豸（カイチ）に全ての武器を乗せ、一人だけで向かった。
目的地に着いた所で守殻を纏い、武器を全て大地に置き、麒麟と？豸を逃がした。

巻き込んだら可哀想だからね。

「来たようだな……あー……何と呼べばいいのだろうな？」

「好きに呼べばいい」

「では、今まで通りに然と」

「蓮華はどこだ？」

「安心しろ、何もしてはいない」

「いや、まさか、あの数を打ち倒すとは思ってもいなかったよ」

一々仰々しい動きがムカつくな。

「ふん、残念だったな……三国が壊せなくて」

「いいや？　計画通だ！」

両手を広げ天を仰ぎ、言う。

「目的は三国を壊す事でも、特定の誰かを殺す事でも、ましてや然、お前を殺す事でもない……私が神になることッ！

その為には幾千幾万の血、肉、精神、魂が必要だった。　そして、その対価は支払い終えたッ！

この私の妖力量をもってすれば神は降臨し、融合することは可能だ！　もうコレも必要ないッ！」

太平要術を懐から取り出し、俺の足元に投げ捨てる。

俺はそれを拾い、懐にしまった。

まあ、取っておけば後々役立ちそうだし。

「さあ！！　神よッ！　私と一つにッ！！」

そう言った瞬間、ソレは時空を超えて現れた。

そして、父親はその現れたモノに喰われた。

その姿は巨大な朱髪の人面蛇。

顔は父親が喰われてから父親の物になった。

――――――ＧＹＷＧＯＳＮＦＬＮＤＵＯＳＮＧＦＬＤＮＤＳＮＯＧＦＮＥＯ！

やっぱり、人としての自我が保てなかったか……ま、当然だな……仮にも神なんて呼ばれるモノに人一人程度の自我が打ち勝てる訳も無い。

そう思った所で、こちらに気付いたのかこちらを向いた。

あー、そういえば先ず最初に自分の手で殺してやるとかほざいてたっけ？
そんな事だけ覚えるとかいい迷惑だ。
てか、デカイ人の顔がこんなにも気持ちの悪い物だとは……いや、父親の顔だからか……？
神の殺気ってのはなかなかのもんだわ。

その時、遠くから砂塵が見えた。
皆が来たようだ。
すぐさま軍の弓兵達が、神に矢を放つが全く歯が立っていない。
俺はそう思いながら大樹を構える。
既に長槍が番えられている。
対する神も口を開いて、何かしら吐き出しそうだ。
俺はかなり多めに気を込め――――――

「雷神槍！！」

俺が巨大な雷の槍を打ち出してすぐ、神の攻撃が来た。
いや、攻撃ではなく行動だった。
なんて事はない。
只の息吹。
されど、それだけで周りは嵐になった。
俺の槍は嵐によって遥か彼方へ飛んで行った。

自分で勝てないとは思っていたが、只の息吹で嵐を起こすとは……。

そんな感心している場合でもなかった。

俺自身も巻き上げられ、地に叩き付けられた。
五体は満足だが、肋骨が数本、腎臓が一つ破裂したっぽい。
軍の方はかなりの被害が出たようだ。

何か巨大な物が軋み、悲鳴を上げているかのような音が世界に鳴り響いた。

何だ？
この耳障りな音は？
聞こえてきたのは何か巨大なモノ……そう、まるでアクション映画で橋が崩れてきている様な音がする。
何が起きてる？

凄まじい音が聞こえて来るその音源を探し、視線を巡らせ、俺は見つけた。

空が……軋んでいるのか……規模が……違い過ぎる……。

「は、ははは……有り得ないだろ……」

俺は気付けば膝をついていた。
今までは自分の手で変えられるものを変えてきた。
しかし、それはあくまで人の起した事象だったから変えられた。
でも、自身というイレギュラーがこんなとんでもないモノを呼び出した。

圧倒的な力。

超えられない壁。

絶対不変の法則。

物語の主人公達は神をいとも簡単に屠っていくが、実際はどうだ。
俺はたった一度の行動である、息吹だけで天を崩す力に絶望しか感じられない。

どうすればいいというのだろう？
俺は所詮、流れを見る程度の力しか持っていないというのに……
こんな奴どうすればいい？！

――――考えろ考えろ考えろ！

負ければ傷ついた三国の兵達が、将達が殺される。

――――退く訳には……いかないッ！

俺にあるのは魔眼と今まで作った武器だけ……魔眼は死にかけてるから全開。
武器は八種全て持ってきた。
なら、できる事は……皆を守る為にはッ！
死力を尽くしてクソジジイを殺すだけだッ！
全開の魔眼を更に感覚を二つ封じながら、限界を超えた魔眼を使う――――！

「行くぞッ！」

その言葉と共に俺は走り出す。

「オォォォォッ！」

纏っている守殻と右手に牙が無い大牙を、左手に天翼を持ち、神へと向かう。

「爆刺孔ッ！！」

突き刺した大牙の剣先から気の指向性爆発が起こった。

それと同時に絶対に折れないようにと作った筈の大牙が気に耐えきれず砕け散った。

だが、神はすぐに回復する。

――――――力が足りないッ！

一旦着地し、跳躍。

俺は天翼の刃を展開し、体ごと回転を始める。

「餓蛇ッ！！」

天翼を体ごと回転させ、遠心力での切断を行った。

切り裂く事に念頭を置いた刃が刺さるが、折れてしまった。

だが、神はその傷もすぐに回復する。

――――――技が足りないッ！

神の息吹がまた迫る。
落ちていた無境を拾い、防御をする。

「金剛頸ッ！！」

息吹に飛ばされる事はなかったが、次に来た尾の一撃で砕け、吹っ飛ばされた。

――――――守りが足りないッ！

禍津を空いている手に持ち、尾の一撃を掻い潜りながら突き進む。

「迅雷ッ！！」

一筋の雷になって突き進み雷と共に当たった衝撃で禍津が折れた。
そして、神の雷迅で負った火傷はすぐに回復された。

――――――速さが足りないッ！！

すぐに離れ、大渦を手に取り突撃をする。

「点破ッ！！！」

至近距離の突きからの高速気弾を撃ったが、気弾は弾かれ刺さった大渦も折れた。
だが、神の刺し傷はすぐに回復した。

――――気が足りないッ！！

神の息吹でまた飛ばされた。
大樹を拾い、また長槍を番え天に穿った。

「雷神槍雨襲ッ！！」

長槍は天から落下し、普通サイズの槍になって降り注いだ。
撃った後すぐ、尾の一撃で大樹をバラバラにされた。
雷の雨で負った傷も神は回復して見せた。

――――火力が足りないッ！！

俺は拳を握り、走った。

「剛力徹破・咬牙ッ！！」

内外同時破壊の技も結局、通じなかった。
気を受けきれなかった守殻は次々に壊れ、外れてしまった。

――――武器が足りないッ！！

最後に無影を大地に打ち込み、糸の結界を作りだした。

「繰弦曲・崩落ッ！！」

結界によって衝撃の方向を漏らさず内側に向けて放った。
無影は衝撃の為、全て千切れてしまった。
やはり、神には一切の攻撃を瞬く間に回復してしまった。

――――――全てが、足りないッ！！！

満身創痍。
今の俺にはこの言葉がとても似合うだろう。
体中がボロボロだ。

せめて……せめて宝具並みの攻撃があれば何とかなるかもしれないのに……その為に必要な流れは……こいつに勝つ為の流れは……見えない……ッ！！

俺は考える。

何か……本当に何かないか？！

懐にはクソジジィの太平要術。
俺はすぐ太平要術を速読で読んでいった。
その内容は俺に関する力の使い方。
それを読んだ事で無駄な力を無くした事で味覚と嗅覚を封じなくても使えるようになった。
だが、書いてあったのはあくまで魔眼の使い方。
それと同時に起こった頭痛の痛みまでは抑えられない。

「ガ、アァァァッ！！」

俺はあまりの痛さに悲鳴をあげる。

脳が流れの情報に耐えられない――――――！

痛い痛い痛い

山の周りには幾千の道士と仙人達が現れた。
その中で俺に近づいて来る影があった。

「はろー！　美人のおにーさんまた会ったのー。　こんなの相手によく無事だったのー！」

「無事じゃ、ない……ぞ、太公望……」

「ほわっと？　何でみーの名前を知っているんだのー？」

「太極図に書いてあったわ！　ぐぅぅッ！！」

ボケかますからついツッコミしてしまった。
超痛ぇ。

「おおぅ、みーとした事がそんなみすをするなんてのー」

やる気なさそうな顔で言ってくる太公望。

さっきの絶望を返……さなくていいや、もう……。

「で、何しに来たんだ？」

「ふっふっふ、みー達は云わば外史を終わらせる為のちゅーなーなんだのー」

「それって、貂蝉みたいな？」

「アレとはまた違うんだけど、似たもんかのー」

「……所でアレを何とか出来るのか？」

「こっちとしてもあんなのが出てくるのは計算違いだったんだのー。
だから、この外史とは似ている様で似ていない封神演義という他の外史の姿を借りた戦力で倒しにきたんだのー」

ジャ○プの封○演義のキャラを使ってんのか……？

そんな呑気な話をしている内に神は攻撃を始めた。
その攻撃は水を圧縮した球体による爆発だった。
大きさも規模も息吹の比じゃない。
それを仙人、道士達は掻い潜り、それぞれの貝宝で攻撃をする。
その中でも、スーパー宝貝の攻撃は凄まじいの一言だった。

金の龍が飲み込む。

漆黒の鞭が打ち据る。

轟雷が落ちる。

誘惑の香りが自我を狂わせる。

重力が押し潰す。

漆黒の布が魂魄を貪る。

神の再生速度を上回る速度で神の体が崩壊していく。

「みーも太極図で加勢しないとのー、太極図ッ！！」

太公望の足元に巨大な太極図が描かれる。

「チューナーはアレを殺せるんだけど、そうするとこの世界に何かしらの不具合を残すんだのー！
だから、この世界の住人の力を借りなくてはいけないんだのー！
協力するんだのー！
足りない分はみーが補強するからのー！」

「あ、ああ、俺に出来るんなら」

俺は太公望の言うとおりに太公望の打神鞭に触れた。

ぐぉぉぉぉッ？！
残っていたなけなしの体力がありったけ吸い取られていく……。

「さあ、周りの力を吸い取って自分の力を解放するんだのー！」

さっきまで力が抜かれていたのに……今度は溢れてくる？！

太公望と打神鞭を振りかぶり、叫んだ。

「斬ッ！！」

今までの使っていた閃断の数十倍の大きさの斬撃が神に向かい、
既にボロボロだった神は左右に別れ死んだ。

あ、呆気ねぇー。

そして、蓮華が何もない空間から現れた。

「蓮華！」

俺は蓮華を抱き止めた。

「水仙？」

これで全部終わった。

結局、俺は殆ど何もしていないけど、まあ、これで一応は決着がついた。

そう思って蓮華を更に強く抱きしめたのだった。

第三十五章　神と調律師と朱然（後書き）

呆気なく仙人達と太極図を使った朱然さんに神はやられてしまいました。
あっさりしすぎたような気がしますがご勘弁を。
次で恋姫編が終わります。
一段落です。
初めてで何とか此処まで書けて良かったです。

最終章　朱然義封（前書き）

最終話です。

地味かもしれませんが、お許しを・・・・・・。

最終章　朱然義封

俺は神を倒した事で注意を怠った。
抱きしめていた蓮華の瞳に光が無い。
抱きしめたまま離さないのだ。

俺はハッとして背中越しに神を見ると、徐々に灰に成りながらもこちらを見ながらニヤニヤしてやがった！
仙人達も気付いていない！

尻尾の棘の部分が迫ってくる。

このままじゃ、二人とも串刺しだな……折角助けたのに、それじゃあダメだろ……。

棘が迫ってきた数刻で答えを出し、蓮華を引き剥がして突き飛ばした。
俺は……蓮華へ向けて微笑んでいた。

そして――――――

Ｓｉｄｅ蓮華

赤壁の時の妖術使いが部屋に現れてから意識が無かった。
次に気がついた時、彼は微笑んで私を突き飛ばした所だった。
浮かんだのは何故か？という疑問。
そう思ったところで、何で水仙が私のことを突き飛ばしたかを理解した。

――――――押された衝撃を受けて水仙を見る

なん……で？

――――――水仙の背中から胸にかけて

どう……して？

――――――自分の腕よりも太い棘が胸を貫いてた。

貫かれて……いるの？

「ゴブッ！」

水仙が血を吐いた。
その血が私の頬に掛かった。

血？　誰の？

何で？　水仙の？　貫かれたから？

どこを？

心臓を？　　助かる？
この出血は助からない？
もう水仙に会えない？

そんなの嫌！
絶対に嫌ぁッ！

倒れてくる水仙を受け止め、静かに地面に下ろす。

「水仙――――――ッ！！」

Ｓｉｄｅ朱然

ああ、元に戻ったんだな蓮華……。

血を大量に口から吐いた事で血の匂いに蒸せてまともに喋れない。
霞む視線の先には蓮華の顔でいっぱいだ。
でも、耳は嫌にはっきり聞こえる。

「水仙！　しっかりして！　何で？！　血が、血が止まらない！
どうして止まらないのよぉ？！」

蓮華は俺の胸の傷を必死で抑えているが、止まる筈も無い。

もう、いいよ蓮華。

「もう、無駄だと思うんだのー……心臓が貫かれているから人間である限り、死ぬしかないんだのー……」

あぁ、心臓が貫かれてって刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）かよ……いかん……ツッコミにキレが無い……。

「どうにかならないの？！」

「……無い事も無いんだのー」

……マジッすか？！

「お願い！　教えて！」

「復活の玉を使うんだのー。　それは死者を生き返らせる事のできる玉なんだのー。

でも仙人にしか使った事が無いあいてむで尚且つ、まだ完全に死んでいないし、ましておにーさんは仙人や道士ではないんだのー。

だから、おにーさんには普通の人間でも仙人になる方法と復活の玉の力で強引に生き返ってもらうんだのー。

それには何より、確固たる「生きたい」という意思がなければならないんだのー。

そうでないと生き返らないし、唯、成功して生き返ったとしても尸解仙……つまり思いの力で死を乗り越えた実体のある幽霊みたいなものになるんだのー。

そして、その死を乗り越える程の思いが無くなった時、おにーさんはまた死ぬんだのー……」

あったなー、そんな事。

思いの力で仙人になるとか、アリス〇チックネタが入ってないか？

「……私は、私はそれでも、水仙に生きていてほしい……他の、戦場で亡くなった多くの人や失った人に恨まれても……だって、私は水仙が好きで……愛しているから……」

蓮華……そこまで俺の事を……普通ならここで顔が真っ赤になるのだけど、生憎、出血で蒼白です……てか、やっべー、マジ、体が寒くなってきた……。

「わかったんだのー」

太公望は四不象を呼び、復活の玉を割った。
すると、眩い光が俺を包み込んだ。

てか、空軋んでたけど大丈夫なのか？

そう思った所で意識が一旦、途絶えた。
意識が戻ると白い空間に唯一人取り残されているかのような、そんな空間に俺は居た。

俺は強く、強く願う！！

呉の皆と一緒に生きたい！！

この次元で、この世界で、この時代で、この場所で！！

雪蓮、冥琳、祭、明命、亜莎、思春、穏、小蓮、呉の皆、魏の皆、蜀の皆、そして何よりッ！！

蓮華と、生きたいんだ……ッ！！！

そして、俺は――――――

――――――生き返った。

だけど、その命は呉の皆がいなくなる、その日までの期限付き。

それでも、俺はこの呉で皆が居なくなるまで生き続ける。

最終章　朱然義封（後書き）

これにて、恋姫編は終わりになります。

何故、朱然さんを仙人にしたかというと変わらない傍観者として、自分のもたらした結果を最後まで見届けさせる為と、これからの物語で、自分の行動の結末を最後まで見届けさせるという意味を込めたからです。

あと、不老にはなっても致命傷を終えば死にます。

リスクないと物語はつまらないですから。

と言いつつ、かなりのご都合主義になって生き残らせると思いますが・・・・・・。

それに不死では死なないので転生できないですし、他の世界に行くには次元を超える能力とかそういう能力を持った人に助けてもらわないといけなくなりますし、不死になったらやりたい放題すぎてまたカオスな展開になったりしそうなんで・・・・・・。

保有スキルに仙人が追加されますが、サーヴァントも歳とらないので特に意味がありませんがお気になさらずにいて頂けると助かります。

ただし、復活の玉の効果でパラメータがCからC＋というように微妙に強化されました。

この後にはＦａｔｅ編が待ち構えている予定です。

新しく作らずに次話投稿という形で追加していく予定です。

Ｆａｔｅ編は友人と相談しながら書こうと思っているので、更新が不定期というか、今回の再編集の様にならないよう大まかな流れを作ってかつストックもたくさん書いてから投稿するつもりです。

期待せずにいてください。

再編集については本当にご迷惑をおかけしました。

晄様、改めて感想ありがとうございました。

初投稿の作品で、尚且つ、暇潰しに書き始めたものですが、ここまで読んでくださった皆様に最大限の感謝を！

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ２・Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ

まず始めに、この小説は作者の暇潰し、趣味等で書いています。
皆さんの暇潰しくらいになれば良いなくらいの気持ちで投稿しているので、気に入らない事等があった場合は鼻で笑ってスルーしてくださると幸いです。
原作が好きな人は見ない方がいいかもしれません。
それでも読んでくださる人には感謝を

取り敢えずという事でプロローグと朱然さんことイレギュラーのステータスを投稿します。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ２・Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ ｎｉｇｈｔ Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ

俺は恋姫の世界で消えた。
胸を貫かれて一度死んで、尸解仙になって、不老になり呉の皆が逝くのを見ました。
不死ではなかったよ？
殺されたりしなければ死なないらしいけどね。
太公望が言ってた。
後、軋んだ空とかは調律者である仙人の方々が直していった。
仙人達が居なくなった後、不老の身になって生き返った俺は普通に暮らした。
皆と老いという時間を共に過ごせなかったのがとても辛かった。
でも、きちんと皆を見届けたから後悔はない。
あ、今の無し！
一個だけ後悔があった。
それは、蓮華と俺の子供が生まれなかった事。
原因は俺が仙人になったから。
人間と仙人との子供のできる確率は百万分の一パーセントしかなかったから。
これも太公望から聞いた。
自分の子を抱けなかったのが心残りだ。
凄く心残りだ。
最後に一番長生きした蓮華の最後を看取って自分の身体が光になりながら消えていく所で意識が途絶えた。

気が付くとまた、名も無き者の場所にいた。
話をしようと口を開き始めた所で足元に召喚陣が現れる。
何だ？

今度は召喚か？

「然り」

今度は何所に飛ばされるんだ？

「お前は前の世界で英雄となった」

いやいや、確かに色々武勲立てたしそれなりに有名になったけども、英雄なんぞ言われた事も聞いた事も無いぞ？

てか、それとこの召喚陣と何な関係が？

「お前の居た時代の先、未来で三国の英雄と称えられた」

はぁ？

「三国最優の将、朱然義封と後世に語り継がれた」

ブフゥーッ！！

あのハッタリがそのままに……ぐぉぉぉぉッ、恥ずかしすぎる！！

頭を抱え悶える俺。

「そのお前に興味を持った世界がある」

なんですと？

興味を持った世界？

英雄になった俺に興味を持つ世界……まさか英霊とか、魔術師とか、聖杯とかが関係してたり――――――

「その世界がお前を英霊の座に引き込もうとしている」

してた――――ッ！！

ヤバイヤバイヤバイッ！！

英霊の座とかに捕まったら俺みたいな信仰薄いのは守護者になって掃除屋にされてしまう！！

アーチャーの二の舞は嫌だ！！

心とか精神的とか色んなモノが摩耗する程の殲滅戦を繰り返すだけとかどんな拷問だ？！

本気でどうすれば回避できるんだッ！？

俺、宝具なんて一個も持ってないぞッ？！

あんな化け物共がひしめく地になんて行きたくないッ！

物語として見る分にはＦａｔｅは楽しいし別に良いよ？！

でも、自分自身の存在が賭かっているバトルロワイヤルは遠慮したい！

精神年齢９０代は伊達じゃないんだぞ！？

老人を労れ！！

「行くがよい、根源へ至りし者よ」

ちょッ、アドバイス無しッ？！

薄情者――――ッ？！

召喚される途中に知識が流れ込んでくる。

５回目の聖杯戦争の開始、マスター、サーヴァント、剣士、弓兵、槍兵、騎乗兵、魔術師、暗殺者、狂戦士。

それに加えて、俺のクラス、異端者（イレギュラー）のクラススキルと俺自身のパラメータ、保有スキルと宝具の情報。

よ、よかった……一応、宝具あった……でも、セイバーとか金ピ

カに勝てねぇ……でもってクラススキルが対魔力Cだけって……下手したら遠坂凛の宝石魔法で木端微塵ですか？

てか、クラス名はもうちょっと捻ろうぜ？！と思わずツッコミを入れたのは言うまでも無い。

そして、最後に送られてきた情報の中に英霊の座に捕まらない方法があった。

それはこの聖杯戦争に参加し、本編最後まで見届ける事。

こうして――――――俺は自分の意思とは全く不本意に召喚された。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ２・Ｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔ　Ｉｒｒｅｇｕｌａｒ

宝具とか割と適当に作ったので突っ込まないでくださると幸いです。
というか、批評されるかもという気持ちでドキドキしっぱなしです。

イレギュラー・ステータス（前書き）

前回書いた通りステータスです。

イレギュラー・ステータス

名前　朱然義封
クラス　異端者　イレギュラー
性別　男
身長体重　１７２ｃｍ　６２ｋｇ
属性　混沌・善
特技　速読　道具作成　隠密　気　武術全般　五感制御
好き　読書　武具観賞　暇　自由　静寂　甘い物
苦手　辛い物　ナルシスト　天才　融通のきかない石頭
天敵　ギルガメッシュ　セイバー　衛宮士郎　イリヤ　父親
筋力　Ｂ＋
魔力　Ｂ＋
耐久　Ｂ＋
俊敏　Ｂ＋
幸運　Ｃ
宝具　Ｂ＋

詳細

真・恋姫†夢想の世界の朱然義封に憑依し、多大に影響を及す。
自らを最優の将と名乗り、文武共に並々ならない功績を上げた。
一度死んでおり、思いの力で死を乗り越え尸解仙として復活。
その後、背ひれ尾ひれの付いた伝承？で宝具とかを手に入れサーヴァントとして召喚された。
だが、あくまで英霊の座からではなく根源から召喚された者。
扱い的にはアサシンこと佐々木小次郎と似て非なる存在。
Ｆａｔｅの世界での朱然義封の殻を被った並列世界の英霊という

感じ？
本人は認めたくはないが、父親からの遺伝で魔力があった。

クラススキル

対魔力：C
第二節以下のの詠唱による魔術を無効化する。
大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。

保有スキル

流見の魔眼：A＋

あらゆる流れを見れる魔眼。
発動時は瞳が紫水晶の様に輝く。
太平要術を読んだ事と復活の玉のお陰で頭痛なく全力解放出来る。
主に魔力とか気とか武器の軌道とか未来線とかの流れを読む。
全力解放に伴って目を潰しても魔眼を封じた事にはならず、魔眼という概念を封じなくては完全に封じた事にはならない。
それでも目を潰される等をされれば矢除けの加護、千里眼、心眼（真）、武具・宝具・道具作成＆改造のランクが1ランクダウン。
魔眼を完全に封じられた場合は2ランクダウンする。

矢除けの加護：B

視界内からの飛び道具への対処能力。
殺気と風切り音、流見の魔眼で投擲武器の軌道をより確実に読む。

千里眼：C

純粋な視力の良さ。
遠距離や動体視力の向上。
魔眼解放に伴って、視力が更によくなった。
更に高いランクは透視・未来視すら可能にするという。

心眼（真）：B

修行・鍛錬において養われた戦闘を有利に進めるための洞察力。
戦闘経験はエミヤに届かないものの魔眼解放によって同等まで底上げされている。

気：B

身体能力を1ランクアップさせる。
オーソドックスな気の技のみならず、応用した技も使える。

魔法：D

魔法が使える。
でも今はまだ初級止まり。

仙人：C
尸解仙になった事により、不老になった。
不死ではないので直接的な攻撃で普通の人間と同じように殺す事は可能。

武具・宝貝・道具作成＆改造：Ｂ（Ａ＋）
流見の魔眼のおかげで自分が至るべき手順を見てほぼ自分の目指す物を作れる。
また、武器の改造が可能。
材料、技術的限界をなんとかできれば宝具・宝貝すら作れるかも知れない技能。

宝具

八卦八武装（せんてんはっけ）
ランク：Ｃ＋
種別：対人、対軍
レンジ：１～４０
最大補足：５０

朱然が使っていた八つの武器に背ひれ尾ひれがついて宝具になった物。
色もそれに伴って変化している。
一つ一つに別の概念が付与され、概念を任意に付与でき、込めた魔力の量に応じてその効力も強くなる。
あくまで八つ一組の宝具になっており、敢えて個別のランクをつけるならばＣ
組み合わせて使うことも可能なのでＣ＋
魔力消費も自己で調節できる汎用性・組み合わせて使う多様性のある宝具となった。
八種の武装の装飾と概念は以下の通り。

大牙　不変

天翼　分断
大渦　収束
大樹　増殖
禍津　拡散
無境　反転
守殻　肯定
無影　否定

伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）
ランク：Ａ＋
種別：対城
レンジ：１～５０
最大補足４００

朱然の最終兵器。
八卦八武装の全ての武器を合体させ、概念を収束・増幅し放つ事で力を得る剣。
その一撃は神を一刀両断する力を持つ、かも？
でも、約束された勝利の剣と真名解放して打ち合えばちょっとは拮抗できるが、そのままやられてしまう。
乖離剣エアと撃ち合いをやると拮抗も出来ずに殺されます。
というか勝てる訳が無い。
でも騎英の手綱となら何とか互角くらい。
バーサーカーに使ったら一発で２回は殺せるかも？

１ｓｔ　ｎｉｇｈｔ　雪の妖精と大英雄と異端者（前書き）

戦々恐々と投稿です。
Ｆａｔｅ編なのでソレっぽく書きたいなーと思ったのですが、作者がヘボいので無理でした。
すみません。
しかも、半ば原作を忘れかけてます。
やっぱり原作好きな方には批判受けるかも・・・・・・。
スルーしてくれればいいなぁ・・・・・・。

１ｓｔ　ｎｉｇｈｔ　雪の妖精と大英雄と異端者

知識の海から目が覚めるとそこは、白銀の世界だった。
大地に広がるは一面の雪原、見上げればどんよりとした曇天から微かに蒼穹が覗いている。
周りには葉が全て抜け落ちた無数の朽ちた木が立ち並ぶ。

目の前には近づけば崩れてしまいそうな雪の妖精と、それとは正反対に近づけば異質さによって浮き上がっていくが如き巨大な鉛の巨人。

朽ちた木々の間から、狼が唸りながら獲物を囲む輪を狭めていく。

大英雄が斧剣を現した。

「■■■■■――――――！」

そして、全てを畏怖させる咆哮を上げる。

俺も無影を取り出し、舞う様に逆方向の狼を斬り刻んでいく。

「フッ！！」

その光景は正に、鉛色のの暴風と紫の鎌鼬が吹き荒れたような蹂躙だった。
数で言えば多勢に無勢。
しかし、数は最早意味を成さない。
程無くして、狼達は二種類に別れた。

生物の奥底に刻み込まれている恐怖という本能に身を任せ、逃げ出した臆病で賢い狼と――――

己の臓物を撒き散らし、血を垂れ流し、脂肪がこびり付いて黄色掛かっている骨が彼方此方に突き出し、醜い肉体に成り下がり、物言わぬ骸に成り下がった愚かな狼だ。

それを蹂躙によって舞った血に身を濡らしながら、雪の妖精は感情の見えない、血を流しこんだ様な深紅の瞳で見つめていた。

その光景はまるで絵の様だった。

美しくも寂しい白銀の世界を描いた絵に、触れずに弾いて落とした様に付き足された、紅、赤、朱の絵具が大いに目を引くそんな絵。

その中心にはやっと感情を露わにし、鉛の巨人を見上げる雪の妖精と、霞んでしまいそうな少女を守るが如く見下ろす鉛の巨人の姿。

その身を濡らす血が雪の妖精の陶磁器の様な白い肌を伝ってゆく。

鉛の巨人は血に濡れて、肉片がこびり付いた斧剣を携え、先程の暴風を起こしたのが嘘の様に、静かに少女に向かい合う。

俺は武器を虚空へ消して少女と巨人の聖域（テリトリー）を侵犯する。

所々に咲く赤い血の花も三人と白銀の世界を引き立たせる為のコントラストの様だ。

――――――問おう、君が俺のマスターか？

これが召喚されたＦａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔの世界でサーヴァントとして投げかけた一言目。

――――――うん。

その一言の言葉と共に雪の妖精から凄まじい量の魔力が流れ込んでくる。

生前の俺より多いぞコレ……。

「サーヴァント・イレギュラー、此処に参上した。　これより我が武は君の楯と成り、矛と成ろう。
此処に契約は完了した。　よろしくマスター？」

「私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン。　助けてくれてありがとう」

冬の少女、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンと大英雄、ヘラクレスとの邂逅だった。

「いや、礼を言う必要はないよ。　君は俺達のマスターだし、マスターを守るのはサーヴァントとして当然だからな」

その間、バーサーカーは直立不動。
そこにいるだけでかなりの圧迫感を感じる。
今まで相対してきたどの武将達よりも圧倒している。

流石は大英雄と言うだけの事はある。

「そう、なら、私を最後まで守ってくれる？」

「それがマスターの願いならどんな結末になろうとも俺は……いや、俺達はマスターを守ろう」

「ありがとう。　貴方達とは仲良くなれそう」

血に濡れた顔で満面の笑みを浮かべるイリヤ。

内心不安でした！

この世界でサーヴァントとして参加する。

それは別に良い。

決定事項だ。

戦う為の力も宝具も手に入れた。

陣営はバーサーカー。

マスターであるイリヤは魔術師として最強の部類。

相棒となってマスターを守るのは最強の狂戦士、大英雄ヘラクレス。

ある意味、鬼に金棒な強さを誇る陣営。

でも、この勢力であっても負ける要素はこの世界の事だ。

多分にして用意されているだろう。

もっとも俺自身が殺されてＢＡＤ　ＥＮＤとかだろうけど……まあ、幸先の良いスタートを切れたと思っておこう。

問題はこれからだ。

俺の知っているルートに分岐するのであればギルガメッシュ、黒

桜の二人がラスボスになりうる。
それを何とかできれば最後まで生き残れる……ハズ？
てっきり、衛宮士朗とか遠坂凛とかキャス子さんとかに呼ばれると思ってたんだけど……。

衛宮士朗、未熟ながら、自身の犠牲を厭わない自己犠牲と無謀っぷり発揮するから死んで魔力切れＥＮＤ

遠坂凛、腕は一級でもたまにうっかり炸裂とか、衛宮士朗との同盟とかで一歩間違えると死ぬ、バーサーカーの足止めＥＮＤ？

キャスター、アサシンを召喚する時に俺、参上！とかいきそうな気がした、未完成ながら燕返ししたしね……でも、金ピカに殺されるＥＮＤ？

みたいに難易度高めで来ると思ってたから予想外だった。
他の可能性としては……。

バゼットさんＤＥＩＤ（詳しくは仮死状態だけど）後、言峰に使役されるが、そもそも満足に戦えずＢＡＤ　ＥＮＤ

間桐桜に召喚→ワカメに使われる→エクスカリバー！！→ギャアァァァッ！？ＥＮＤ
もしくは間桐桜に召喚→ワカメに使われる→俺、キレでワカメ殴っ血ＫＩＬＬ→魔力切れＥＮＤ

みたいな？
ワカメにいいように使われるのはゴメンだ。
このバーサーカー勢力も問題あるけどね。

ギルガメッシュ襲来→イリヤの心臓ブチ抜かれる→魔力切れ→ＥＮＤ

になってしまう可能性がある。

魔力切れＥＮＤは他のマスターと契約すれば何とかなるかもしれないけど。

まあ、聖杯戦争まで二ヶ月あるし、その間にどう打破するかを決めとこう。

他のマスターに情報でもバラ撒くか？

真名とか、宝具とか、戦い方だとか。

でも、戦い方は生で見ないと何とも言えないか……？

多少はそれで何か起こるだろ。

というか決着が早く付くならその方がいい。

こんな物騒な世界に居たくも無いし、英霊の座にも逝きたかないわ！（逝くは誤字にあらず）

後、イリヤに衛宮切嗣の事とか話した方がいいのかなぁ。

でも、Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏはある都合で読めなかったから登場キャラの情報とイリヤを助けられなかった理由くらいしか知らないから……。

一応は教えておくか……でも、衛宮士朗と組まれると俺の死ぬ可能性が高まる気がするなぁ。

主に遠坂凛が敵に回りそう。

このままでも敵だけど。

最後の詰めの部分に発動するうっかりは致命的だけど腕は一級だしね。

早速、宝具の確認したいし……この世界の魔術品を見せてもらったりしてみよう。

道具作成スキルが役に立つかもしれぬ。

場面上、シリアスな絵とシーンなのだが、内心こんな事を思って

いるイレギュラーこと朱然だった。

何はともあれ、ここに契約は結ばれた。
さあ、例えどんな結末を迎えようとも、見届けよう。
この聖杯戦争の行く末を……。

１ｓｔ　ｎｉｇｈｔ　雪の妖精と大英雄と異端者（後書き）

りていく・わん

知識の海から目が覚めるとそこは、白銀の世界だった。
周りには朽ちた木。

目の前には雪の妖精が居た。

目の前にいるのはイリヤスフィール？

周りには狼の群れ。

「■■■■■■――――――！」

「ギャァァァッ？！」

――――――グチャッ

後ろからバーサーカーの声が聞こえた瞬間、凄まじい重量が俺の骨を砕いた。

どうやら俺は狼の群れに突撃中のバーサーカーの進行上に召喚され、文殺されてしまった様だ。

冷静な分析をしながら俺は世界を呪った。

ＢＡＤ　ＥＮＤ　Ｎｏ．１
召喚されてすぐバーサーカーに踏み殺されるＥＮＤ

バーサーカー陣営になりました。
何となく最後はこうしたいな～なんていう大まかな感じは決めたのでそれに辿りつけるように頑張っていきたいと思います。
何となく後書きにＢＡＤ　ＥＮＤを書きましたけど２や３があるかはわかりません（笑）
書いてほしいという人がいたらなるべく面白おかしいモノかシリアスなＢＡＤ　ＥＮＤを考えてチマチマ書きたいと思います。
では、また次回にて。

２ｎｄ　ｎｉｇｈｔ　妖精の覚悟と異端者（前書き）

何というか、自分で書いてて合ってるのか？と疑心暗鬼。
Ｆａｔｅに入ったけど書くのが難しい・・・・・・。
色々設定やらを探して書いてますけどそれも合っているのかイマイチ自信が・・・・・・。
他の人は良く書けるなぁと尊敬します。
本当に。

2nd night　妖精の覚悟と異端者

「これが俺の知りうる真実だ」

俺は衛宮切嗣の真実を、俺の存在の事を……知っている事全て話した。

「そうなんだ……」

俯くイリヤ。

「信じても信じなくても良い」

「ううん、信じるわ」

「そうか……なら、これからどうする？　衛宮士郎……弟と協力するか？」

「いいえ、私はアインツベルンだもん。　もう、戻れない……遅かったのよ」

「そう、か……」

それがお前の選んだ道なのか、イリヤ。

「決めたわ」

イリヤは顔を上げた。

「私が最後のアインツベルンになる。　穢れた聖杯も私が壊す、徹底的に……完膚無きまでに！　一片も残さずに！」

その目は覚悟を決めた者の目だった。

「わかった。　俺はマスターに付いていく行く。　それだけだ」

その後、イリヤと共にイリヤの祖父、ユーブスタクハイト・フォン・アインツベルンを殺した。

イリヤから聞かれた衛宮切嗣の真実を肯定し、言い訳も無く、黙して死んだのは称賛に値するだろう。

こうして、イリヤはアインツベルン最後の当主になった。

それからアハト候を埋葬し、城をくまなく整理した。

整理に一ヶ月は掛かった。

気が遠くなる作業だった……。

そして、その数日後。

俺はアイツベルンとしてのイリヤを唯のイリヤとして解放したくて話をする事にした。

確かに早く聖杯戦争を終らせたいが、あの選択をしたイリヤがあまりに報われない。

年齢的には成熟していたとしても、アインツベルンという重みを背負って欲しくない。

もっと自由に生きても良いんじゃないか？

そう思ったからこそ、己の存在を賭けたこの戦いとは別にイリヤに自由を贈りたい。

呉の皆が聞いたらお人よしと呆れられそうだな……。

俺は早速、イリヤの部屋に向かった。

「マスター、聖杯戦争で賭けをしないか？」

唐突に話を切り出す。

「えっ？　どういうこと？」

困惑するイリヤ。

「俺かバーサーカーのどちらかが倒された後、倒した相手が衛宮士郎だったならイリヤスフィール・フォン・アインツベルンから衛宮イリヤとして生きてくれないか？」

「イレギュラー？　私は決めたのよ？　士郎が敵対するのなら倒す、一人の魔術師として……。
私は魔術師として生きることを決めたの」

寂しそうに言うイリヤ。

あーッ、もうッ！！
何でこう思い詰めると皆、頑固なんだ！！

「ふざけるなッ！　何が魔術師としてだ！　そんな寂しそうな顔で言われても説得力なんて全くないってーのッ！」

「だからッ！　私は普通の人として聖杯になるまでの間生きるか、魔術師として生きるかを天秤にかけて選んだのッ！」

俺とイリヤの間にピリピリした空気が流れる。

「ならッ！　両方選べばいいだろ?!」

「選べないわッ！」

「どうしてッ!?」

「私には時間が無い、人造人間（ホムンクルス）だって言うだけで寿命が短いのに、お母様のお腹の中に居た時から魔術的な処置を受けて成長も止まって、寿命ももっと短くなった！　何より、私は聖杯の器なのよ？　聖杯戦争では私は聖杯そのものになってしまうなら・・・・・・」

「それなら尚更だろ?!　勝ち残って、聖杯を何とかして、それでこれから生きる道を模索すればいい！」

「聖杯になったら私の意思はほぼ無くなるの。　勝ち残っても死んでしまう。　でも、サーヴァントの魂を取り込んで満たされ、穢れた聖杯は私が壊す。　負けたらそのまま拘束されるか、殺されて心臓を抜かれるかするでしょうね。　どの道、平穏に生きる可能性が低いのなら、士郎には黙ったまま敵を演じ続けるわ。　そして、勝ち残って完成した聖杯を壊す。　しかもこの聖杯戦争自体を無くすくらいに粉々にね。　もし魔術師として士朗と戦う事になったら殺す事も……厭わない」

「それでどうする?!　そんな事をしたって後に残るものは一つも

無いだろ?!
何所かの勢力に協力を仰げば他にやりようもあるかもしれないじゃないか!」

「無いかもしれないわ」

「それなら俺は……衛宮士朗に全てを話して協力するように促す。
衛宮士郎の性格なら助けに来る筈だ」

俺の案に対して、イリヤの纏う空気が変わった。

「させないわ」

熱くなっていた空気が一気に氷点下まで下がったかの様に。
その空気は鋭利な刃物の如き鋭さとなり、俺を包み込んだ。

「令呪を以て命じる。　私の許可が出ない限り今の話題とそれに準ずる話を衛宮士郎に伝える事を固く禁じる!」

実際に音が鳴った訳ではない。
だが確かに令呪は俺を縛る。

クソ……ッ、令呪を使われた!
これじゃあどうする事も出来ないじゃないかッ!

「ッ……そこまで……イリヤ……もう、この話は俺からはしない。
でも、よく考えておいてくれ。　その天秤にかけたものを選んだ事で何が変わって、何が変わらないのか。
そして、忘れないでくれ……失ってから気付く事もあるけど、それじゃあ遅すぎたと嘆く事もある……。

後悔を残さないようにしてくれ。　何より俺は、イリヤの味方でいるという事を……忘れないでくれ」

俺はイリヤに背を向け、部屋を出た。

扉を閉める時、イリヤは俺に聞こえない程の声で何かを呟いたが俺の耳には届かなかった。

立ち止まって、まだ賭けの事を聞いていなかった事を思い出した。

「論点がズレて賭けの返事を聞いてなかったが、どうする？」

「大人げなく令呪まで使っちゃったから、その賭けは受けるわ。でも、内容を少し変えさせてもらう。

士郎に負けて、士郎が私を連れて行く事にしたら大人しく士郎の近くで過ごす。

その接する態度も姉としてではなく、アインツベルン当主、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンとして接するわ」

「そう、か……今回の事は俺の一時の気の迷いだった事にしておいてくれ」

「わかったわ」

俺は部屋を出た。

本当に……もう、振りかえらないつもりなんだなイリヤ……。

気が付けば強く拳に力を入れていた。

姉としてではなく、アインツベルン当主として、か……その覚悟しかと受け止めた。

その事に後悔をしないのなら、俺はもう何も言わない……そして、最後まで守り続ける事を改めて誓おう。

マスターの、イリヤのその思いを貫く為に……。

２ｎｄ　ｎｉｇｈｔ　妖精の覚悟と異端者（後書き）

真実を知り、頑なに拒むイリヤな話？もっとも、これからのルート展開は敢えて教えてはいません。
多分・・・・・。聖杯の状況とかイリヤは知ってるんだっけ？とかなりあやふやです。
アハト候はキャラを知らないので適当に・・・・・・。
取り敢えず、朱然さんはアハト候を殺して少ししてイリヤを救いたいと思いなおしたけど、結局、イリヤの頑なさというか、その在り方、覚悟を知って、今一度、イリヤについて行こうと思ったみたいな話を書いたつもりです。
そういう風に書けていたら嬉しいなぁ・・・・・・。
此処からどう持っていくか、それが問題です。本当にどうしよう・・・・？

早速、誤字があったとの報告があったので修正。
衛宮士朗→衛宮士郎
登場人物の名前間違えたとかｏｒｚ

３ｒｄ　ｎｉｇｈｔ　騎兵と異端者（前書き）

Ｆａｔｅ書くのが難しい・・・・・・。
そして、最近凄く忙しいので執筆速度が上がらない・・・・・・。

3rd night　騎兵と異端者

ついにやってきたぜ冬木！
此処が彼の有名な冬木市かぁ。

さっそく俺はイリヤから予てより命じられていた偵察をする事にした。
流れ的にはこんな感じで、俺の一時の迷いよりちょっと前の事だ。

「俺の正体は中国に出てくる三国志の武将、性は朱、名は然、字は義封……それが俺の真名だ」

「ふーん、あんまり有名じゃないみたいね？　バーサーカーとは大違い」

そうですね！
てか、大英雄と一緒にしないでください！

「フッフッフ、そう思うのは無理も無いが、俺はこの世界の英霊ではないのだ！
並列世界の英霊でこの世界の朱義封より活躍したのさ！」

「ステータスを見た感じ、並みって所が妥当だと思うんだけれど？」

「その認識、改めさせて見せよう。　何せ、呼んだのは最強のマスターなんだ。　その俺が弱い筈がないだろう？」

アーチャーっぽくクールに言ってみる。

てか、勝ち抜かないと守護者にされちゃうから嫌でも必死になるけどね！！

「確かにその通りね。　早速だけど冬木に着いたらすぐに偵察に行って来なさいイレギュラー」

「偵察？　何所に？」

「マキリよ」

「マキリ？っていうとこっちに来る前に話していた今は間桐と名を変えたアインツベルン、遠坂とこの聖杯戦争を作った魔術師の家でしょ？」

「そうよ。　ただし、殺せそうだからって殺しちゃダメよ？」

「何で？　倒せる時に倒した方が楽なのに」

「だって、すぐ殺しちゃったらつまらないもの。　後、宣戦布告も忘れないでね？」

こういう娘なんです。

時々、凄い怖い事をサラッと言うんです。

まあ、ライダーと正面から戦えば互角くらいには持っていけると思うけど、倒せはしないと思うなぁ……。

「まあ、了解。　じゃあ、真名と宝具の情報くらいは手に入れてくるよ」

もっとも元から知っているから戦闘しなくとも姿がわかればすぐ

にわかるけど。

「楽しみにしてるわ」

という流れになった。

まあ、冬木のアインツベルン城に着いてから少し変わって、殺せるなら殺せと言われてるけど。

場所がわからないので、洋風の住宅街を適当に歩き回った。

言うの忘れてたけど今は聖杯戦争開始の一日前、二月一日の夜。

その住宅街の一角でライダーに出会い対峙した。

ゲームで見た背景の通りの豪邸でした。

こんな家に住んでみて―。

あ、でも地下は要らないや。

だって、蟲の苗床とか嫌過ぎる。

「「……」」

で、早速ライダーさんとエンカウントしてしまった。

ジャストタイミングで鉢合わせましたよ！

これは予想外でした！

もっとこう、屋根の上から……。

「よう、マキリのマスター」

「だ、誰だ?!」

慌てふためくワカメこと間桐慎二。

「俺はイレギュラー、アインツベルンのサーヴァントだ。　お前の命を頂く！」

「な、何だって?!　何でいきなりこんな七騎以外のサーヴァントが来るんだよ?!
と、とにかくアイツを殺せッ！　ライダーッ！」

慎二の背後に幽鬼の如く現れ、俺の一つ隣の家の屋根に跳躍。

聖杯戦争直前にライダーと激突!!
みたいな感じを予想というか、妄想というか、想像してたんだけどなぁ～……。

沈黙が……痛いなぁ……。

ちなみに初めて会った瞬間、クールな筈のライダーさんがズシャアッ!!っと即座に戦闘態勢に入りました。
普通のサーヴァントだけならそれほどでもなかったんだろうけど、多分、容姿が似てるからだろうなぁ……黒い死神なりきりセットは使わないで来たからなぁ……嫌いな項目に鏡ってあった気がするし。

これからどうしようと思った所でライダーは無銘・短剣を投擲してきた。

俺はすぐさま大牙を使って弾いた。

「おっと、残念。　ライダーさん、ちょっといきなり過ぎやしませんかね？」

「私と容姿が瓜二つとは……まるで鏡を見ているかのようですね？
……殺意を覚えます。
もっとも真名まで同じ、と言う訳ではないようですね」

「うん、真名は全く違うよ。　因みに言ってなかったが、俺のマスターはアインツベルンだ」

「とても興味がありますね。　特に真名の方が。　言うのと言わされるのどちらがお好みですか？」

怖ぇ――――――ッ！！

「やれやれ、せっかちなのは嫌われるよゴルゴン三姉妹の末女メデューサさん？」

真名を言った瞬間、またもや無銘・短剣が襲いかかってきた。
再度、大牙で無銘・短剣を弾く。

「どうやって私の真名を知ったのですか？」

「言うとでも？」

今度は平静を装って答える。

「そうですね……貴方は痛みも感じない程、迅速に殺して上げまし

ょう」

優しくじゃないんですねッ！？

「それはご遠慮願いたいね！」

俺はそう言って大げさな仕草で踵を返した。

「逃がすとでも思っているのですか？」

おわ――――――ッ、追ってきた！

背中を向けながら肩越しに答える。

「逃がさないと？」

「真名を知っていた事。　それだけで逃がす理由がありません」

「そうか……だが、此処はちと目立ちすぎる。　早々に君を倒して帰えらせてもらう事にするよッ！」

俺はすぐさま無影を投擲。

そのまま引き寄せ体が中に浮く。

民家の屋根に飛び乗ろうとした所で無影が無銘・短剣によって断ち切られはしなかったものの、軌道がズラされる。

チッ！

このままだと壁に激突する！

すかさず別の無影を投擲。

別の屋根に登った。

「危ない危ない……」

「……」

すぐ後ろにはライダーがいた。

マジ怖ぇぇ。

眼帯をしているのに凄い殺気だ。

「ふぅん、あくまで命令には忠実に、か……」

「……」

無言のライダー。

「君の本当のマスター、間桐桜はどうしている？」

「！！」

「フンッ、気に入らないな……マキリは……俺は蟲は嫌いでね。迅速にこの戦争を終結させる事とマスターの望みを叶える事を最上位に行動しているんだけど、ついでに出来るならば害虫駆除もしておこうかな、とも思っている」

恐らく、間桐桜が黒桜になることは多分、恐らく無いと思う。

だって、そんなことになったら勝ち残るどうこう以前にサーヴァントの俺は問答無用に吸収されちゃうし。

最後まで生き残る事が英霊の座に捕まらない為の唯一の方法なの

だから、まとも……とも言い難いが、聖杯戦争をまともにやったのはＦａｔｅルートかＵＢＷルート。
ＨＦルートは黒いクラゲモドキがサーヴァントを片っ端から吸収するから生き残る所の話じゃなくなる。
だとすれば、Ｆａｔｅ、ＵＢＷ、どちらかのルートになるのか、俺の介入で違う様相を呈してくるのかのどれかだと俺は推察する。
ならば、間桐桜を救う事も出来るかもしれないと思ったのだ。

「まあ、無駄話はそれでおしまいだ。　さあ、お互い全力で戦い、潰し合おう。　いざ、参るッ！」

こうして、正式な七騎のサーヴァントがそろわないまま、戦闘が始まった。
俺は無影を操り、住宅街の屋根から屋根、電柱から電柱へ飛び移る。
その速度は気で強化しただけで、瞬動や縮地を使っていないにも拘らず、普通の人間には何とか視認できる程の速度を出していた。
それはライダーも同じ事。
双子と見紛う容姿の二人が、住宅街の空に舞い、駆け、ぶつかり合う。
真夜中に耳障りな鎖の音が鳴り響き、ライダーの無銘・短剣が俺の急所目掛け、的確に投擲してくる。
俺も袖に仕込んである無影に音叉ナイフ付け、風を切るが如き速度で投擲する。
両者の中間でぶつかった音叉ナイフと杭に見える短剣が、その投擲速度によって生じる威力に火花を散らしながら大きく弾かれた。
俺とライダーはその音が聞こえる前に二撃目を投擲していた。
また、火花が散る。
俺は更に音叉ナイフ付きの無影を投げる。

一投、二投、三投、四投、五投、六投――――――ッ！！

ライダーの武器、無銘・短剣は刀身が二つしかない、つまりは二投が限界だ。

三投目まで時間が掛かる。

それだってコンマ数秒の時間だ。

人間相手ならばそれでも間に合う。

だが、サーヴァントとの戦いにはそのコンマでさえ命取りになるのだ――――――！！

無影は今使っている本数に慣れる毎に倍々に扱う数を増やしていった。

そして、俺の消えた日までに扱えるようになったその数は――――

――――万を超える。

その圧倒的な数の暴力で圧殺させてもらうッ！！

連続投擲で防御を余儀なくされているライダーに万を超える無影が上下左右前後から取り囲むように一斉に襲い掛かる。

その時、ライダーの取った行動は……身を貫かれる前に自ら無影

に飛びこむ事だった。
その選択はある意味、正しい。
俺の意表を突く事もあるが、今回の俺の攻撃は無影に音叉ナイフをつけた言わば点の全面攻撃。
完全な面の攻撃ではない。
そこを頭から突っ込む形で急所だけを防御し、一点突破する。
最高速度まで到達していない事、音叉ナイフが本来、剣破壊に分類される物であった事が突破される要因になった。
もし、俺が点による全方位攻撃ではなく、線による何重にも重なった網状の全方位攻撃だったなら、仮にも無影は宝具だ、千切れずに宝具を使う間もなくライダーは切り刻まれていただろう。
ライダーは腕や足に刺さった音叉ナイフを即座に抜き捨て、離脱した。

「逃がしたか……反しているとはいえ、英雄と言われるだけの事はある。　でも、これで少しは希望が見えたか？」

俺の技量で何所までサーヴァントと渡り合えるかと不安に思っていたが、宝具の撃ち合いにならなければ何とか渡り合える……かもしれない事がわかった。
イリヤの魔力の後押しが有ってこそかもしれないが……この事は収穫としては悪くない。
俺は、神と対峙した時、己の無力を呪った。
あの時、全てが終わってしまうのかと思った。
だから俺は、己の消えるその日まで、武を磨き続けた。
借り物ではなく、俺自身の技を生み出す為に。
そんな日が来なければと思い、願いながら。
また一から作った八つの武器を極める為に修練を積んだ。
気の扱いを一から学び直し、洗練した。
完全解放された魔眼を使いこなす為、様々な流れを見るようにな

った。
そして、今、俺は此処に居る。
英雄達が殺し合う戦争の中に。
今回はライダーが油断していたからこその結果だろう。
まともにぶつかり合えばこんな一方的な結果にはならなかった筈だ。
油断すれば宝具を使われ、圧倒的不利になる。

セイバーは魔力供給が出来ないとはいえ、直感や魔力放出で出鱈目な強さに加え、約束された勝利の剣（エクスカリバー）がある。

アーチャーは弓の腕も去る事ながら、心眼や投影魔術による狙撃、固有結界、無限の剣製（アンリミテッド・ブレイド・ワークス）が脅威的。

ランサーは圧倒的な速度、致命傷ですら戦う事ができる戦闘続行能力、何より因果逆転の魔槍、刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）が厄介だ。

ライダーは白兵戦では負けないとは思うが、天馬を呼ばれて騎英（ベル）の手綱（レフォーン）使われたら手がつけられないし、石化の魔眼（キュベレイ）を使われたら即、石になりかねない。

キャスターは圧倒的な火力で来られたら対魔力の低い俺ではハチの巣にされるし、破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）でイリヤとの契約を消される訳にはいかない。

アサシンはセイバーに迫る勢いの刀の使い手、もし、燕返しを使われたら、俺に逃げ場はない。

仮にバーサーカーと戦りあったら十二の試練（ゴットハンド）で勝てる気がしない。

ギルガメッシュとかどうやって勝てと？
王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）による原典宝具の乱射に乖離剣エアの天地乖離す開闢の星（ユ）とか……喰らったら消されるよ？
俺の宝具は何とか騎英の手綱（ベルレフォーン）に匹敵する位。
セイバーとギルガメッシュには宝具を出させたら負ける事は必至だ。
希望なんてありません。
むしろ絶望しか無くね？

こうして俺はライダー撃退という戦果を上げながらも肩を落として無影を操り、アインツベルン城へ向かった。

イリヤにライダーの真名を教えると、ふーん……そうなんだ……バーサーカーなら簡単に殺せるね、で終わった。
軽ッ！
確か、ペルセウスとアンドロメダの間に生まれた子供の内の一人がヘラクレスの祖先の筈で、ヘラクレスであるバーサーカーと戦う事になればなんかしらあるんじゃね？
と思ったけど、確かにバーサーカーなら宝具使われても問題なく倒しちゃいそうだなぁ～。
確かにイリヤにとってはふ～んで済まされるような話だったね。
俺と違ってバーサーカーは出鱈目に強いもんね！

そんな事を思う今日この頃。

3rd night 騎兵と異端者（後書き）

ライダーが一方的にやられているのは慎二がマスターだからです。
桜がマスターになるとこんなに簡単にはいきません。
という言い訳です。
ライダーファンの方スミマセン。

４ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　蒼き槍兵と異端者（前書き）

ああ、くじけそうだ・・・・・・。
色々と・・・・・・。

４ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　蒼き槍兵と異端者

二月二日夜。
イリヤに命じられてまた、情報収集。

はい、アーチャーとランサーの一騎打ちがある日です。
衛宮士朗が一回死ぬ日でもあります。
俺は穂群原学園全体がよく見えそうな場所を探して彷徨っていた。
でも、小高い丘にあるので見下ろせる場所が無い。

そうこうしている内に屋上から人影が落ちてきたのが見えた。
俺はすぐさま屋上に跳躍。
屋上からグラウンドを見下ろす事にした。

攻めのランサーに対し、守りのアーチャー。
紅の魔槍が美しい紅の閃光がどれも致命的な速度を以て、致命的な急所を狙い放たれる。
その軌跡は美しく、鋭く、洗練された武。
それは正に天賦の才がある者が辿り着く一つの領域だ。
ランサーだけが手にする事を許されたランサーだけの槍撃。
それがランサーの槍の印象。
対してアーチャーは黒と白の一対で一組の中華剣で捌いてゆく。
速度では明らかにランサーの方が押しているが、凌いでいる。
その白と黒の剣撃に美しさは一切無く。
言うなれば……そう、無骨という言葉が当て嵌る。
才能がある者が極めた武は純粋故に魅せられる物となる。
才能の無い物が努力をする武はその経験の積み重ね故に機能美を見出す事が出来るだろう。
だが、アーチャーの剣は圧倒的な経験から得られる機能美さえも

取り除かれた無骨という名が必然的に当て嵌まる剣だ。
美しさなど微塵も感じ得ない。
美しくある必要も無い。
唯、必要だったから必然的に鍛え、鍛えられてきた剣。
それが俺が直に見て思ったアーチャーの剣撃の感想だ。

最初は拮抗していたが、その後から徐々にだがアーチャーが押され始めてた。
否、ワザと隙を見せる事によって攻めの選択肢を狭めている。

ランサーの突きは先が霞む程の速度で迫ってくる。
常人には霞む所か、見る事すら適わない突きの連撃。
俺が相対した槍使いでもこの域に届いた者は誰も居ない。
それをアーチャーは己の命を賭け金に捌いていく。
故に一手間違えれば即、死に繋がる。
その剣は段違いの相手を想定している剣ではなく、桁違いの相手を想定している剣でもある。
段違いの相手との戦いならば身を犠牲にする覚悟があれば届くかもしれない。
だが、桁違いの相手ならばそれでも足りず、必然的に己の全てを賭けなければ届く筈も無いという結論に至ったのだろう。

そして、ついにアーチャーの莫耶が弾かれ――――――

ランサーの槍がアーチャーの首を抉ら――――――

――――――なかった。

アーチャーの手には弾かれた莫耶が再度握られている。
それはあまりにも不可思議で、異質で、不気味だった。
ランサーは驚きを飲み込んで攻撃の手を緩めない。
その後もランサーはアーチャーの干将・莫耶を弾き飛ばし続けた。

その数――――二十七。

中国に伝わる二振りで一つの宝剣、干将・莫耶。
その伝承は調べればすぐ出てくるだろう。
剣としての性能も高いが、巫術、式典用の魔術兵装としての側面を持ち、揃えて持っていれば対魔術と対物理が向上するという物。

宝具だったらお互いを引き合う性質で今見ている光景のように戻ってくるのではなかろうか？
実際は投影魔術を使って、新たに創りだしているんだろうが……。
傍から見ていても弾かれてまた手元に戻ってくる様は宝具自体の能力の様に見える。
上手い偽装だ。
それも踏まえてアーチャーはこの剣を使っているのだろうか？

そんな考察をしていた時だった。

「誰だッ！？」

ランサーの兄貴が鋭く叫んだ。
恐らく、衛宮士朗が見つかったのだろう。

一目散に逃げる士朗と追うランサー。
あっという間に校内に入って行ってしまった。
残ったのはアーチャーと遠坂凛。
アーチャーの手にはもう干将・莫耶は握られていない。
遠坂がアーチャーにランサーを追うように言ったのか、アーチャーが先行し、遠坂凛が遅れて入っていった。
そうして、入れ違いにランサーが出てきた。

――――――戦ってみるか？

つい、先程の攻防を見て思ってしまった。

自分の武を試してみたい。

何処まで通用するのかを己の力量の許すままにぶつけてみたい……そんな風に……。

そして、走り始めようとした所で踏み止まり、不意にこちらを向いた。

チッ、気付かれた！
微かな殺気に気がついたのか？！

そう思った時にはもう跳躍して来ていた。

「テメェ、ライダーだったか？　覗き見たぁ、いい趣味だな？」

赤い瞳が俺を捉えて離さない。

「俺はライダーじゃない」
「あん？」
いぶかしむランサー。
因みにこの世界に来てからの俺の服は紫のパオを動きやすくなるように改造された物で丈が短い。
そして、黒のラインに白い蓮の刺繍が入っている。
俺の趣味じゃないぞ？
こっちに来たら勝手にこうなってたんだ。
「こう言った方がいいか？　俺の名はイレギュラー、エクストラクラスのサーヴァント。
始めまして、アイルランドの光の御子、クー・フーリン」
その瞬間、ランサーから獰猛で全てを喰らい尽すかの様な濃密な殺気が俺に放たれた。
「イレギュラーのサーヴァントだ？　一体何処の英霊だかは知らんが……知ってるからには早々に死んでもらうぜ？」
そう言って、紅の魔槍を構える。
魔力を吸って禍々しい雰囲気を醸し出し始める。
だが、俺は何も構えない。
「別に進んで戦いたい訳じゃないんだ」
「何だと？」

ランサーは構えたまま聞く。

「俺と俺のマスター以外の真名を教えるから、それで今回は俺の命を見逃してくれないかな？」

「それが本当だって証拠はねぇだろ？　もし仮に、それが本当だったとしてもだ、まだセイバーも出てきてねぇのに何で知ってやがる？」

「そういう能力を持っているから」

嘘です。

そんな便利な能力持っていません。

「ほう……」

少しランサーが目を閉じ、考え、目を開ける。

「取り敢えず、話を聞いてからだ」

「わかった」

俺はライダー、キャスター、アサシンの真名を教えた。

「セイバーはともかくアーチャーとバーサーカーはどうした？」

「アーチャーは過去の英霊ではない事位しかわからない。　バーサーカーは俺の仲間なので情報は渡せない」

「アーチャーが過去の英霊じゃねぇってことはつまりだ」

「そう、現代もしくは未来の英霊」

俺はランサーが至ったであろう答えを言う。

「なるほど、俺を納得させるくらいには良い情報だったぜ。メデューサに佐々木小次郎、メディアか……このメンツだと、ちと、物足んねぇな」

「そう？　アーチャーは？」

「ハッ！　奴はの宝具は弓に関する何かだろ？　まともに戦り合うタイプでも無かった、そう感じたぜ？」

「アーチャーだからと言って弓だけとは限らないでしょ？　大体、ランサーの仲間にも第四次聖杯戦争のアーチャーが居るでしょ？」

「何だと？！」

驚くランサー。

アレ？

ランサーこの時点でギルガメッシュの事知らないんだっけ？

うーわ、ミスった……話題を逸らさねば……。

「それはさて置いて、バーサーカーには手を出さない方が身の為だ。あいつは今までの聖杯戦争で類をみないほどの強さを持ってる。ランサーなら満足しそうではあるけど、勝つ事は出来ないと思うなぁ～」

俺の強引な話題逸らしにランサーは気付きながら敢えて乗ってきた。

「前回のアーチャーについてもっと聞きたい所だが、まあ、その様子だと教える気はなさそうだな？
無理やり吐かせてもいいんだが……バーサーカーに興味が沸いた。勝てねぇってのは……いや、こう聞いた方が早いか？　どんな野郎だ？」

「真名は教えられないが、まあ、ヒントくらいなら良いかな……？
というかランサーよ、狂戦士のクラスで理性を失っているのにどんな野郎だって聞くのはどうなんだ？
人間性なんて聞いた所で狂化してるからどんな性格かなんてわかんないよ？」

「う、うるせぇ！　ちっと間違えただけだろうがッ！」

俺に指摘されると逆ギレされた。

理不尽だ！

「人相で言えば……デカイおっさん？
戦ってる雰囲気というか、イメージとしては暴れ出すと暴風みたいに周りを薙ぎ倒していくみたいな感じ。
戦りあえば満足して逝ける相手じゃないかな。
かなりの有名人だし、少なくともかなりの奴が知っている筈、というか聖杯からの情報でサーヴァントなら知らない奴っていないんじゃないか？」

大英雄って言われる程の有名人？だし。

「チッ！　令呪が忌々しいぜ！」

本当に忌々しそうに言うランサー。

戦いたいのかランサーよ。

俺は自殺願望がある訳でも、どこぞの戦闘民族な方々とは違うから戦わなくてもいい相手は絶対に避けるけどなぁ。

「キャスターならその令呪、何とかなるかもしれないよ？」

「はぁ、もうテメェから何聞いても驚かねぇぜ……」

呆れるランサー。

「裏切りの魔女メディアなら令呪を無効にする宝具を持っているかもしれないからな」

「そうかよ……だが、覚えておくぜ」

ランサーは背を向けた。

サービスしたから見逃してくれるっぽいな。

「見逃してくれるのか？」

一応、聞いてみる。

「アーチャーと違って何となくだが、信用は出来そうだしな。　そ

れに用事も出来た」

恐らく士朗が生き返ったのを感じ取ったか、フェンス越しに見たかしたんだろう。

「こんな事が無ければアンタと酒でも飲み交わしたいと思ってたんだ」

兄貴とは一度、酒を飲みたいと思っていた。

だって格好良いじゃん？

何か噛ませ犬的なポジションになっちゃってたけど。

「お前、俺の事知ってんのか？」

「さーてね」

惚けてみる。

「……まあいい、俺も久しぶりに酒が飲みたいぜ。　次に会ったら敵か味方か……どっちにしろお前とも戦り合いたいぜ？　お前、中々強いだろ？」

「殺されるのは勘弁願いたいが、戦う時は全力で戦るさ。　俺には負けられない理由があるからね」

「理由ね……良い目をしてやがる。　期待してんぜ？」

そう言ってランサーは屋上から飛び降りて行った。

さて、もう一人の相手もしないといけないな……。

４ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　蒼き槍兵と異端者（後書き）

ランサーとの話をするだけの回でした。
未定ですが、ランサーと言峰の契約を無くしてキャスターに寝返らせてみようかと画策してます。
期待しないで頂けると気が楽に・・・・・・。
では、また次回。

5th night 赤き弓兵と異端者（前書き）

左人差指の先の古傷が痛む今日この頃・・・・・・。
タイピングする度にドアに挟まれで三針縫った傷で肉と肉の間がズレている感覚が気持ち悪いです。

5th night 赤き弓兵と異端者

「出てきたらどうだ、アーチャー？」

「気付いていたか……」

給水塔の影からアーチャーが現れる。

「貴様・・・・・・何者だ？　見た所、ライダーではない様だが？」

「改めまして、俺はアインツベルンのマスターに召喚されたエクストラクラス、イレギュラー」

俺は恭しく礼をする。

「イレギュラーだと？　何とも捻りの無いクラス名だな？」

アーチャーは慣れ合う気はないとばかりにシニカルな笑みと共に、早速皮肉を俺に向ける。

五月蠅いな、ほっとけっ！

「アーチャー……いや、エミヤシロウ。　お前はこの聖杯戦争で何を望む？」

「！！　貴様ッ！！」

鷹の目と書かれていた様に眼光が鋭い、幾多の戦場を越えてきただけあって殺気も段違いだ。

ランサーの殺気にも引けを取らない鋭さ。
ランクが一つ下がるけど、見た宝具を投影魔術で再現して、尚且つ真名解放できるとか……確かに剣の才能とか、魔術の才能とか二流かもしれないけど、十分だと思うけどねー。
それでも、この世界だと紅い月を筆頭に、真祖の姫とか、そのお付とか、それ以外の死徒二十七祖とか、直死の魔眼とか、執行者とか、魔法使いとか、サーヴァントみたいなトンデモ存在がウジャウジャ出てくるからそれでも足りんのだろうなぁ～……それでも宝具投影は破格の力なんだろうけど……。

「自分で自分を殺すのか？」

「答えろ、貴様は何者だ？」

有無を言わさない問い。

「俺は並列世界の武将、朱然」

「並列世界だと？」

「詳しく言えば、更に別の世界で暮らしていた。元々の名前は■■■■。
俺は魔術師等と言った類の人間でもないにも拘らす、偶然にも根源に至ってしまった」

「何だとッ？！」

まあ、魔術師としては当然の反応だな。
未だに五人しか届いていないのに一般人が偶然で至ってしまうなんて、魔術師にしてみれば到底認める事など出来ないだろうし、悪

い冗談にしか聞こえないだろうしね。

「根源へ至った俺は世界に殺された。　死因は言った所で意味は無いし、興味も無いだろうから省くけど。

ま、それはともかく世界には異物だと思われた訳だ。　それで終わりだと思っていた。　だが、■■■■の人生には続きがあった。

それは三国志に出てくる呉の武将、朱然の魂をある人物が神の供物に捧げた事によって、身体という器が空になった。

そこに俺という魂が入り込んだという第二の人生だった。

それから現代の知識を生かし、死すべき者を救い、三国を天下三分の計を成し遂げ、百万からなる五胡の兵を倒し、俺はいつしか三国英雄と呼ばれる程になったらしい。

もっとも見知っていて且つ、死んでしまう運命の者を救う為に、見知らぬ誰かを犠牲にしたけどね」

「……」

多少の脚色はご愛敬という事で……だってエロゲの世界に～とか言うと……わかるだろ？

わかってください、察してください、お願いします！

まあ、この世界も分類的にはエロゲなんだけどさ……。

「俺はその世界で死んでまた根源へ戻った。　その直後、並列世界で英雄と後世に呼ばれた俺に興味を持った世界があった。

それがこの世界だ。　この戦いに最後まで勝ち抜かないと俺は英霊の座へ捕まるらしいから、どうしても勝ち残らなくちゃならないんだけど……」

「到底信じられん話だな。　その証拠はあるのか？」

「■■■■の時にはこの世界はゲームの中の物語だったんだ。　その登場人物であるお前達の真名や宝具はほぼ全て知っている。
もちろん、アーチャーの固有結界から第四次聖杯戦争のアーチャーの正体までね。　だが、俺が此処に来てからイリヤに衛宮切嗣の真実を……ッ？！
イリヤの令呪が……そうか……アーチャーも確かにエミヤシロウだった」

つい、うっかり話してはいけない事を言ってしまいそうになった。

しまったしまったー。

「どうした？」

「イリヤからの令呪でね……ある事をエミヤシロウに教える事を固く禁じられてるんだよ」

「何だと？」

「気にしなくてもいい事だ。　忘れてくれ。
でだ、アーチャーとして召喚されたお前は、これからの大まかな展開は予想が付いているんだろう？」

「……」

「沈黙は肯定と言った様なものだぞエミヤ？」

沈黙は続く。

「まあ、ダンマリするのは良いけどね。　遠坂凛にも不完全な召喚

の所為で記憶が思い出せない～、とか言っているんだろ？」

アーチャーの眉がピクリと動いた。

「……そうだ。　だが、大まかな記憶が無いのもまた事実だ。もっとも、セイバーと出会い、聖剣によって聖杯を破壊したあの聖杯戦争の記憶だけは、はっきりと覚えている。今まで召喚された聖杯戦争の中では貴様という存在は一回たりとも見た事がない」

Ｆａｔｅルート後の衛宮士郎なのかな？

「だからこそ俺はイレギュラーなんだろうさ……で、お前は今回のこの戦いどうするつもりだ？」

「無論、今まで通り……私は自らの手で衛宮士郎を殺す。　死すべき運命にあった百人を救う為に世界と契約し、契約後も人を救い続けられるのならばと思っていた。

だが、結局待っていたのは全て手遅れの世界に呼ばれ、自意識はあるが自我は無く、この手で原因となった者達を殺し続ける掃除屋としての日々だ。

勝手に動く身体、止めろと叫び続ける意識の中でそれでも尚、救いたかった者達を殺していく。

その感覚も、返り血も、記憶も……覚えきれぬ程、繰り返された。

英霊の座に帰る瞬間のみ自我も戻り、何度も何度も罪の意識に苛まれる。

何時しか正義の味方になりたい等という願望は摩耗し、漸く己の歪んだ願いに気がついた。

衛宮切嗣の私を救った時に見たあの顔を、子供の頃に聖杯戦争で他人を押し退けて救われてしまったという罪悪感を、他人から貰っ

た借り物の願望を、決して届く筈も無く、決してなる事の出来ない偽りの夢を……私は幾万、幾億の戦場を経て、ようやく気がついたのだ。

私は待ち続けた。　聖杯戦争のアーチャーとして呼び出されるその日を……そして、その無限とも言える可能性の中で、俺は自分を殺し続けてきた。

今更、貴様が居る等という些細な違いなぞ、どうでもいい。　今回も私は衛宮士郎を殺す」

「そうか、ならば俺達は敵同士だ。　俺は今の時点では敵対していない、衛宮士郎を殺させる訳にはいかないからな。

衛宮士郎が遠坂凛と協力しようがしまいが、それは勝手だ。　別にそれはどうでもいい、唯、俺のマスターに敵対するのならば……衛宮士郎は俺が殺す」

今殺されると、どのサーヴァントが何処に現れるのかという大まかな情報がわからなくなるし。

もう、変わってるかもしれんけど。

「フンッ、出来るものなら、な」

俺達はお互いに背を向け、屋上から身を翻し、跳躍した。

５ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　赤き弓兵と異端者（後書き）

アーチャー（悪）の過去と敵対するぜな話。
どうなんだろうなぁと色々サイトを周って書いてたらこんな感じの過去になりました。
Ｆａｔｅルートを進んで、正義の味方になって、理想が摩耗して、ＵＢＷルートにならないで、未だ答えを得ず、いくつもの並列世界の自分を殺している？な感じです。
朱然さんの本名は伏せ時です。
特に意味はありません。
伏線とかでもありません。
佐藤さんとか田中さんとか変哲もない名前だとでも思ってください。

６ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　紅の魔槍と剣士と異端者（前書き）

視力がものすごい落ちました。
物が見えにくい事がこれほどまでに不便だとは・・・・・・。

6th night 紅の魔槍と剣士と異端者

学校での邂逅後、俺は衛宮の屋敷に向かった。

セイバーの剣技とランサーの宝具を見ておきたいからね。

無影と気のお陰で何とか士郎がランサーに蹴り飛ばされる場面には間に合った。

と言っても1キロ程離れているけど……アーチャー達はまだ遠い。

よって、俺は静かに静観するのみだ。

士郎が蔵に入って一分程経った。

すると蔵から光が漏れ出し、ランサーが庭へ弾き飛ばされて来た。

それから更に少し遅れて金髪翠眼、青と銀の甲冑を纏った少女が蔵から凄まじい速度でランサーに迫った。

これが魔力放出って奴か……魔力が多くないとすぐガス欠になるスキルだなぁ～。

それはともかく、原作に沿ってセイバーが召喚されたか。

何もない筈の虚空を諸手で握り締めランサーに斬りかかる。

傍から見れば滑稽に見えるのだが、ランサーは殺気を感じ取ったのか不可視の剣による斬撃を受けるのではなくかわした。

直後にランサーは反撃。

セイバーは不可視の聖剣で穂先が霞む程の一閃を難無く受け止めた。

次撃、紅き魔槍と不可視の聖剣が一旦離れ、またぶつかり合うが、体格的に劣っている筈のセイバーが魔力放出のスキルという少女の細腕でも剛剣に変える力でランサーを弾き飛ばした。

ランサーは直ぐに態勢を立て直し、紅き魔槍は喰らい付く様な突きの連打を放つ。

だが、直感を頼りにセイバーがその突きを紙一重にかわしてゆく。
そして不可視の聖剣は舞う様に軽く扱い、同時に比べ物にならない程の重い斬撃で迎え撃った。
剛剣をいなし、ランサーが更に赤き魔槍のリーチを生かした刺突は一息に五連を放った。
セイバーは己の直感を存分に使い、刺突を避け、時には剣で弾く。
俺は全身の血が沸き立つ様な感覚に支配された。

これがアーサー王とクランの猛犬クー・フーリンの戦い・・・・・・。

お互いがお互いに全ての技量を以って倒すべき敵を打倒する為に武器を振るう。
ランサーは魔槍の穂先で地面を抉る様な構えを見せる。
セイバーは絵で見たときと同じ左から振り抜くような構えを取る。

紅き魔槍が鳴いているかの様に禍々しい気配を出し始め――――――

――――――喰らい付くような一撃が穿たれた。

まさしく地面ギリギリから掬い上げる軌道を取った魔槍をセイバーが斬り伏せる為に大上段から、から竹割りをしようと振り下そうとした瞬間、セイバーは左足で地面を強引に蹴って飛んだ。
そして、紅き魔槍は掬い上げる程度だと思われた軌道を九十度に

近い角度で曲がり、その深紅に染まった軌道はセイバーの心臓のあった場所を貫いた。

――――――鮮血が宙を舞う。

セイバーは左胸を抑え、後ろによろめいた。
必殺の一撃をかわされたランサーは視線で人が殺せるのではないかという眼光でセイバーを睨みつけ、セイバーが真名を言った瞬間にヤレヤレを頭を振って構えを解いた。

恐らく、まさか一日の内、二人に真名がバレるとはな……今日は厄日か？とか、これで引き分けって事にしねぇか？とでも言っているんだろう。

セイバーは血で染まりながらも聖剣を構え、戦う気だ。
そこに蔵の近くで見ていた衛宮士郎が水を差したが、セイバーは聞く耳持たずに斬りかかった。
宝具の一撃を喰らったからか攻撃にキレが無いが、手負いの獣の様な底力でランサーに向かって行く。

ランサーはすぐ撤退するんじゃなかったのか？

「仕方ないな」

俺は弦が二つあり身の丈もある大弓、大樹を構える。
手には何も握られていない。

――――――増えろ。

そう思うだけで木製矢が増える。
それがこの大樹に備わった概念だ。
俺は弓に番え、流れを見る。

「余計なお節介かもしれないけどッ！」

小さい方の弦に木矢を番え、セイバーの足元に二射撃ち込んだ。
セイバーが怯んだ隙に、ランサーは塀を飛び越え撤退し、丁度、入れ違いでアーチャー&遠坂が衛宮邸に到着し、セイバーが反応。
塀を跳躍し、アーチャーと遠坂に迫る。
俺は気を流し込んだ矢を打ち込みセイバーの動きを牽制し、その間に士郎が令呪でセイバーを止めた。
遠坂もアーチャーを霊体で待機させつつ、士郎と話をする。

俺の矢による攻撃はまあ、アーチャーがもう攻撃してこないとか言ったんだろう。
警戒していないようだ。
今の時点で衛宮士郎を攻撃しないと話したし、確かに射る気も無いけどさ。
てか、セイバーさん……暴れん坊過ぎやしませんかね？

その後、少しして士郎、遠坂、黄色の雨合羽を着たセイバーが言峰教会へ向かった。

黄色の雨合羽とか目立たないようにする為に着せる物じゃないだろ！
寧ろ異様さが際立つっての！
何所の変質者だよ！
とツッコミを入れたのは言うまでも無い。

そんなこんなで俺は身を跳躍し、衛宮邸を後にした。

６ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　紅の魔槍と剣士と異端者（後書き）

朱然は見た！聖杯戦争始りの瞬間！みたいなお話。
まあ、原作とあまり変わらずな感じで書きました。
あくまで朱然さん視点ですが・・・・・・。

なるべく読み返して誤字脱字を無くしているつもりですが、あったら教えて頂ければすぐに修正しますのでご連絡を

7th night 敵対と異端者（前書き）

最近、リアルに現実が忙しいのでチグハグになったかも・・・・・・。

でも、なるべく更新はするようにしたいです。

7th night　敵対と異端者

メルセデス・ベンツェ３００ＳＬクーペを商店街のパーキングに止めていたイリヤと合流した。

「何か変わった事はなかったかしら？」

「ああ、大きなイレギュラーは特に無し。　アーチャー、ランサーとちょっとした話をした。

士郎はランサーに一旦殺されたが、遅れてきた遠坂に治され、帰宅後セイバーを召喚した」

「そう……いいわ、行きましょう。　教会へ」

そう言った後、バーサーカーが現れイリヤを肩に乗せる。

俺達は教会への道を歩く。

途中で違法駐車のフロントガラスに俺達の姿が写った。

紫のパオを着た女……の様に見える男に2メートルを軽く超える鉛色の巨人、その肩に座っている少女。

この構図から導き出される答えは……唯の不審者だッ？！

職質されたら一発アウトだよ？！

頭を抱えたくなる光景を考えないようにしながらも俺達は進む。

そして、俺達は教会へ続く坂を下る一行と邂逅した。

未だ未熟で強化すら失敗し、歪んでいて、それでも尚、正義の味方を目指す、衛宮士郎。

遠坂の当主、宝石魔術の使い手、アベレージワン、一流の魔術師、遠坂凛。

ブリテンの赤き竜、騎士王、最強の聖剣の使い手、アーサー・ペンドラゴン。

雪の妖精、最後のアインツベルン、聖杯、イリヤスフィール・フォン・アインツベルン。

十二の試練を乗り越えた大英雄、最強のサーヴァント、理性を失った巨人、ヘラクレス。

異端者、並列世界のサーヴァント、根源へ至りし一般人、流れ見る魔眼を持つ者、朱然。

「始めまして凛にお兄ちゃん。　私はイリヤスフィール・フォン・アインツベルン」

華麗に礼をするイリヤ。

やっぱり士郎にはお兄ちゃんと呼ぶのか……。

「君は?!」

驚く士郎。

「ヤバイ！　後ろの大きい方、桁違いだわ！」

遠坂さん……俺は無視ですか、そうですか……傷ついてなんて無

いんだからなッ？！

「そこのサーヴァントはセイバーかしら？」

イリヤさんフォロー無しですか……。

「そこに居る紫色のはどなたかしら？　サーヴァントの様に見えるけれど？」

遠坂がイリヤの問いに答えず、逆に訊いてくる。

おお！

ついに反応がッ！

「ああ、こっち？　こっちも私のサーヴァント、エクストラクラスのイレギュラー」

「イレギュラーですって？！　七騎以外のサーヴァントなんｔ「あり得ない訳ではないでしょう？」くッ！」

遠坂の言葉を遮るイリヤ。

「もっとも、イレギュラーはバーサーカーを呼んだ時に勝手についてきただけなんだけど。

令呪も聖杯から分配されているわよ？　バグでも出てるのかしらね？

そうだわ、私は一人で二体のサーヴァントを使役してる訳だし、ハンデとして真名を教えてあげてもいいわ」

そんな事を言うイリヤ。

勝手についてきたって……別に来きたくて来たわけじゃないんだけどなぁ……。

令呪もこの世界に取り込む為に、聖杯の何かしらを影響させて都合したのだろうか？

「へぇ～、真名を教えても余裕って訳？　それなら教えてもらいましょうか？」

「こっちの大きい方がギリシャの大英雄ヘラクレス」

「「なッ？！」」

セイバー、遠坂から驚きの声が漏れる。

士郎は名前は知っているが、どのくらい脅威なのかはわかっていないのか、目を見開いてはいるがそれだけだ。

さあ、次は俺の紹介だ。

どんな反応をするのか楽しみだ。

「オマケについてきたこっちは中国の三国志時代の呉の武将、朱義封」

――――――静。

おい――――――ッ！！

何故、そこで静まり返るッ？！

無反応は酷過ぎだろォッ？！

「誰か反応してくれよ……」

耐えかねてこんな事を言ってしまった。

「わ、私は一応知ってるわよ？　中国じゃ、割と有名な武将だもの……」

「な、中々の強さの様です。　立ち居振る舞いが並みではない事が見て取れます」

「えーっと、元気出してくれ？」

敵に同情された。

――――――悲しくなった。

特に士郎！

何だよその二人がフォローしたから取り敢えず同情してみよう的な言葉は？！

そういうの、かなり傷つくんだからな？

「そうそう、言い忘れていたけど、イレギュラーは並列世界のサーヴァントだから」

イリヤがワザとらしく言う。

「「なッ？！」」

また、セイバーと遠坂が驚く。

驚くのはそっちですか……しくしく。
士郎よ、魔術師としてあんまり驚かないのはどうなんだ？

「これでいいかしら？」

遠坂の驚く顔を見れて満足そうなイリヤ。

「ええ、今後の参考にさせてもらうわ」

対照的にかなり神妙な顔をする遠坂。

「それで、凛は私と敵対するのは当然としてお兄ちゃんはどうする？」

「お、俺は――――――」

「大人しくセイバーを殺させてくれる？」

「――――――なッ？！　そんな事出来る訳ないだろ？！」

即座に否定する士郎。

「そう」

イリヤは少し悲しそうな顔をする。

「それなら仕方ないわね……やっちゃえバーサーカー！！」

戦闘が始まった。

方や最優のサーヴァント、方や最強のサーヴァント。
セイバーが嵐の様なら、バーサーカーは暴風。
だが、セイバーのマスターは衛宮士郎だ。
如何せん、今回のバーサーカーの相手は流石に荷が重い。
俺はアーチャーを警戒して待機だ。

「■■■■■■――――――!!」

雄叫びと共に斧剣でセイバーを追い詰めてゆくバーサーカー。
余波で塀や道のアスファルトが削られ、粉砕されてゆく。

誰が直すんだコレ？

そう思った時だった。
戦場で嫌というほど聞いた風切り音と共に矢が俺に向かって飛んできた。

アーチャーか……ッ！

俺は既に発動していた魔眼で流れを見る。

すべて急所に当たる軌道を描いている……が、俺には矢除けの加護がある！

俺も大樹を取り出し、最初の矢を弾いた。
それと同時に矢を増殖、射始める。

５射中５射が空中で正面からぶつかり合い、俺とアーチャーの間で地面へと落ちる。
それを二十程繰り返した所で矢が止んだ。

む？
移動したか？

魔眼で流れを辿ろうとした所で突然、セイバーが墓地の方に走り出し、バーサーカーが追う。

既に遠坂、士郎は墓地の方に行ったみたいだ。

墓地に着いてからセイバーは墓石を使ってバーサーカーの動きを上手く制限している。

それでも微々たるものだが。
それから少ししして……魔力が集中している場所を感じた。

俺のいる墓地から８００メートル程離れた屋根の上にアーチャーの姿があった。
黒塗りの弓を構え、ドリルの様な剣を番えている。

アレはヤバイッ！！

「セイバー避けなさい！」

遠坂の叫び声が聞こえたのと同時に、俺は虚空から大牙を手に取り、地面に突き刺した。
イリヤを左手で抱きしめ、大牙にかなり多めに魔力を流し、不変の概念を込め、大牙を強化する。

――――――偽・螺旋剣（カラドボルグ？）

アーチャーが真名を唱え、カラドボルグ？を射た。

――――――硬い稲光という意味を持つフェルグス・マクローイが所持していたとされるの魔剣。

アーチャーの改造した宝具、本物がどのような形をしているのか、それは俺にもわからないが、番えられているその形は何所までも貫き通す様な螺旋を描いる。

――――――約束された勝利の剣（エクスカリバー）の原型の一つとされる剣。

その魔剣がまさに巨大な竜巻の如き螺旋を描いて、空間を削り取りながら目標へ向かう――――――！

――――――曰く、王の頭の代わりに三つの丘の頂を切り落としたという。

そこでアーチャーの偽・螺旋剣（カラドボルグ？）がバーサーカーの心臓に着弾、爆発、バーサーカーの周囲がクレーターの様に抉れた。
壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）も使ってくれやがったので、バーサーカーは一回死亡してしまった。
こちらもその爆発の衝撃で身動きが取れない。
直撃しなくとも空間ごと抉り取る代物だから洒落にならない威力に加え、念を入れて壊れた幻想（ブロークン・ファンタズム）まで使ってきた。
その結果、瞬間破壊力がAに匹敵する破壊力を叩き出したのだ。

本当に洒落にならんな、おい！！
俺が喰らったら一撃死するぞ？！

そして、死んだはずのバーサーカーが復活を始める。

「そん、な……？！」

「馬鹿なッ？！　あの威力の攻撃を喰らって生きているなどッ？！」

遠坂、セイバーの驚愕の声が聞こえた。

「このヘラクレスの十二の苦行を凛も知っているでしょう？
神々が十二の苦行を乗り越えたヘラクレスに、乗り越えた苦行の分だけ死なない呪いをかけた、それがヘラクレスの宝具……十二の試練（ゴット・ハンド）って言うんだよ。
まだ、バーサーカーには十二回分の命があるの」

イリヤは俺の影から姿を現し、悠々と言う。

「命のストック……蘇生魔術の重ね掛け……！！」

イリヤの説明を受け、更に驚愕する遠坂、セイバー、士郎。

「でも、まさかバーサーカーをこんなに早く一回殺すとは思わなかったわ。　そのご褒美に今回は私達の方から引かせてもらうわ。行くわよ、バーサーカー、イレギュラー」

俺達は踵を返す。

四人は背中を向けているにも拘らず、こちらには攻撃をしてこなかった。

イリヤは思い出したように振り返り――――――

「それでは御機嫌よう」

イリヤが礼をして俺達は城へ帰ったのだった。

7th night 敵対と異端者（後書き）

結局、テンプレ回に・・・・・・。
次回は士郎があかいあくまと校内鬼ごっこする日なので、朱然さんの平和な一日を書く予定です。

セイバーさんは英霊予備軍なので聖杯からの情報は受けられないと某サイトにあったので修正しました。
それとルビがきちんとなっていなかったのでそれも修正しました。

８ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　夕方の一時と異端者（前書き）

アクセス解析を久しぶりに見たら１００万ＰＶ＆９万ユニーク越えていた・・・・・。
飲んでいたコーヒー牛乳を吹きそうになりました。
吃驚です。

8th night 夕方の一時と異端者

「イレギュラー」

「何でしょうかマスター？」

「今日のお菓子はどんなお菓子なの？」

「今日のお菓子はブルーベリータルトですよ～」

「じゃあ、私は部屋で待ってるわ」

今日は特に何もないのでまったりだ。
で、ただいまお菓子を調理中。

ポニーテールでフリルの付いたメイド服を着て……。

俺の趣味じゃないんだからな？！
イリヤの命令なんだ仕方ないだろう？！

……ゲフンッ！

取り乱してしまった。
見た目は確かに若い女に見えるだろう。
何せライダーにそっくりなんだから。
俺自身、それを生前からかわれたりしたけど、髪を切る気にはならなかった。
だって一回切ったけど落ち着かないんだもん、頭が軽すぎて……
俺にとっては猫の髭みたいな？

それが無いと何かしっくりこないのだ。
話がズレた。
女装の事だが、考えてもみてくれ、俺はある意味精神年齢が爺の域まで生きたんだぞ？
爺にメイド服着せて何が楽しいんだ？
もういいや、この話。
この話は横に置いて作業を始めよう。

さて、まずはタルトの生地を作って冷蔵庫入れる。

冷やす間にアーモンドクリームを作る。

冷蔵庫から生地を取り出し、アーモンドクリームを流し込む。

オーブンに生地を入れ、１８０度で２０分焼く。

その間にカスタードクリームを作る。

ふやかしたゼラチンとブルーベリーを弱火でゼラチンが溶けるまで熱する。

焼きあがった生地を取り出て、生地を常温で冷まし、カスタードクリームを敷く。

ブルーベリーの熱が冷めてとろみがついたら、生地の真ん中にブルーベリーを乗せる。

生クリームをタルトの淵とブルーベリーの間を囲むように乗せ、冷蔵庫で冷ます。

一時間冷ませば完成だ。

まあ、さっきの話題はこれ以上この事を議論してもどうにもならないので出来あがったタルトと紅茶の準備をしてイリヤの部屋へ。

皆で一緒に食べる。

席は時計回りにイリヤ、セラ、俺、リーゼリットの順。

俺はタルトを切り分け、紅茶を入れる。

「それではどうぞ」

その言葉と共にイリヤ達が食べ始める。

未だ誰からも言葉は発していない。

俺も自分のタルトの焼き上がった生地にフォークを差し込む。

するとサクッという音と共に食欲を誘う良い香りが鼻孔をくすぐった。

それぞれが一口食べ、咀嚼する。

ぱぁぁっ！とイリヤ達に幸せ空間が展開された。

しかし、声は出さない。

「頂きます」

ブルーベリーの酸味と二種類のクリームがバランスの良い風味をだしている。

うん、我ながらいい出来だ。

俺は窓の外を見る。

そろそろ夕方か……今頃、士郎はあかいあくまに追いかけ回されてるのだろうか？

あはははは、衛宮くぅ～～～ん、待ちなさ～い？

満面の笑みを浮かべながら手を銃の形にして士郎を狙う遠坂。

しかもパキュンパキュンッ！という効果音付き。

あはははは、無理に決まってるじゃないか～、強化（トレース・オン）開始。

笑ってはいるが、内心必死で鞄や上着を強化して楯にする士郎。

シュールだ。

実際はもっと緊迫した空気の中で学内鬼ごっこをしているんだろう。

その後、裏の林の中でライダーの武器、無名・短剣の杭で腕を貫かれたり、アーチャーに後ろから斬りかかられたりしているのかなぁ？

ま、士郎が選択肢をミスらなければ今日は死なないか……アーチャーに斬り殺される、なんてことは遠坂が止めると思うから無いと思うし。

死んだら死んだでまあ、イリヤがちょっと悲しむけど、どうとでもなるし。

Ｆａｔｅの世界と言っても、結局俺の視点で進む訳で……でも、そうするとギルガメッシュに対抗できなくなるのか？

う～む、それは問題だ。

てか、まだギルガメッシュの攻略法を考えてなかった。

あまり時間も無いし、考えなくては……まず、王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）は手持ち

の武器で弾いていけば何とかなるか？
問題は乖離剣エアの方だが……あのランクＥＸの破壊力は余程の物じゃないと拮抗する事すら難しい。
俺のは汎用性がある分、決定打に欠けるんだよなぁ。
どうしたものか……やっぱり、慢心した所を一気に強襲し、一撃必殺を心掛けないと勝てそうにないか……？
一例としては――――

「フンッ、我には向かうとは愚かな事をしたな雑種？」

「くッ！」

倒れ伏す士郎。
俺はギルガメッシュの背後に近寄り――――

「伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）ッ！！」

「甘いわ！　その程度の奇襲、防げぬとでも思ったか？！　天地乖離す開闢（エヌマ・エリシュ）の星ッ！！」

「ギャアァァッ？！」

アレッ？！
脳内で勝てる一例を挙げたつもりが殺られたッ？！
恐るべし慢心王……例ですら勝てんとは……本気と書いてマジと読むくらいに打開策を考えないと、ムムムムム。
それにしてもタルトうめぇなぁ。

そんなまったりとしながらも脳内で自分の死に様を繰り返す夕方。

って嫌過ぎるわ、自分が死ぬとかッ！

８ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　夕方の一時と異端者（後書き）

本当にギルガメッシュどうやって倒そうかなぁ・・・・・・。
あの反則的な存在をＵＢＷや全て遠き理想郷（アヴァロン）というジョーカー無しで倒す、という難題が・・・・・・。
ＧＯＢは常時発動型の宝具以外は真名解放できないらしいので何とか弾く事は出来ると思うのですが、エアを撃たれたらどうにもできないのでどうしよう？という話です。
ホント、どうしよう？

ルビ修正しました。

9th night　裏切りの槍と求める者達と異端者

今夜は確か柳洞寺にセイバーさんが殴り込みをする日だったと記憶していたので、俺は衛宮邸を遠くから張っていた。
すると、士郎が夢遊病の様にフラフラと衛宮邸から出て柳洞寺に向かって行ってしまった。

「これは……キャスターの仕業かねぇ？」

つい、独り言を漏らす。
俺はすぐに士郎の後を着いて行く事にした。
ストーキングすることしばらく、やはり柳洞寺の門を潜って行った。

正面からではアサシンの相手をしないといけないからな……。

強引に森を抜けていく事にした。
無影を使い飛ぶように柳洞寺の境内へ向かう。

「くッ、サーヴァントには鬼門だとか何とか言ってたけどこれは……」

身体を維持する為の魔力が急激に増加しているのがわかる。

さっさとこの森を抜けた方がいいな……。

境内に近づいてきた所で音が聞こえてきた。

「戦闘……？　この鎖の音はライダー、爆音はキャスターの魔力弾

として……もう一つは誰の音だ？」

普通に考えればアサシンだが、この音は長物の音だ。

俺は向かう足を速める。

そして――――――

そこではライダーと戦うキャスターとランサーの姿があった。

キャスターに寝返ったかのか……ま、俺だって言峰がマスターになるくらいだったらキャスターを選ぶけどさ。

士郎は山門を背に佇んでいる。

俺は大渦を出し、ランサーの方へ突撃した。

「ハァァァッ！！」

「？！　テメェはイレギュラーッ！！」

とっさに防御するランサー。

「はてさて……士郎を追って来てみれば、これは一体どういう状況？」

取り敢えずライダーに加勢してしまったが、どうするべきだろう？

「あら、八騎目のサーヴァントが来るなんて……とんだ予想外だわ」

フードに隠れて表情がはっきりと見れないながらも残念そうなキ

ャスター。
俺とライダーの容姿の酷似については何も言ってこない所を見るに、ランサーから聞いたか、それとも使い魔で覗き見してたんだろう。

「貴方は……」

戦闘で疲弊しているのか、反応の薄いライダー。

「やっとまともに戦り合えそうなのが来たな」

嬉しそうなランサー。

「衛宮士郎を渡してもらおうか？」

「あの坊やと手を組んだから助けに来た、といったところかしら？」

「違う、俺と士郎は敵対関係だ。
唯、あいつには利用価値があるので此処で死なせる訳にはいかないんだよキャスター」

イリヤとの賭けができなくなるからね。

「そう、利用価値ね……それがどんなものかは知らないけれど、私はセイバーを手に入れる為に囮として足を運んでもらっただけよ」

「別に俺はそのあたりどうでもいいんだが、何故ライダーが此処に居る？」

「……」

何も話さないライダー。

大方、桜が慎二に嘆願して士郎を助けに来たか、偵察中に見つかり戦闘になったかのどちらかか？

まあ、後者の方が可能性としてはありうるかも。

「さて、2対2になったんだ。　キャスター、俺との契約を守ってもらうぜ」

「好きになさい」

契約？

「契約って何だ？」

俺は思ったままに聞く。

「テメェが教えてくれた情報を元にキャスターに問いただして、好きな時に暴れられる事を条件に令呪を無効化して再契約するっつう契約だ」

「なるほどね……納得」

「んじゃ、まあ……質問が終わった所で戦り合おうぜイレギュラーッ！」

そう言ってランサーは槍を構え、地面を蹴った！

そこから神速の連続突き。

俺は大渦の丸い刀身を巧みに使い、コロの原理を使って衝撃を流

していく。

「ランサーである俺に槍で勝てると思ってんのかッ?!」

「流石は……ッ!!」

俺は防戦になってしまい、そのまま境内の奥の方へ押されていく。

前回のアーチャーとの戦いで見た時より、数段速くなってる!?

言峰の令呪の縛りが無くなったからか!?

そう思った所で――――――

右手の大渦が弾き飛ばされてしまった。

その衝撃で大きく仰け反る形になる。

「貰ったッ!」

槍が俺の腹を目掛け、迫ってくる

俺はすぐさま左手に大牙を逆手持ちで取り出し、大牙の重量を利用して回転、防御した。

「テメェ……」

ランサーが射殺さんばかりの殺気をぶつけてくる。

「どうしたランサー?」

対する俺は、試すようにランサーを見る。

「アーチャーといい、テメェといい、幾つ武器を持ってやがんだ？」

どうやら、前回アーチャーと戦って際限なく戻ってきた（というより投影で創ったか？）武器に対して警戒しているようだ。

俺の八卦八武装（せんてんはっけ）も八つで一つの宝具という括りになっているので、弾かれれば自動的に手元に戻ってくる便利機能付きなのだ。

アーチャーの様に取り出すまでのタイムラグが無い訳ではないけどね。

でも、この機能は便利よ～？

「それを教えるとでも？」

「違えねぇ」

クツクツと笑うランサー。

「だが、テメェの槍が大剣になったとこを見るとアーチャーとは違って無限に出てくるって訳じゃなさそうだな」

「確かに無限ではないね」

「まあいい、無限じゃねえんなら……その全て、槍で弾き飛ばす！」

ランサーが距離を詰め、穂先が霞む速さで突きこんでくる。

俺は爪を取り出し、流れを見て防戦に徹する。

「そらそらそらそらッ！」

この速度じゃ、合わせるのが困難で届かざる左の護剣（マンゴーシュ）が使えない！

「くッ！？」

「どうしたどうしたッ！」

この速度に対抗する術は……ある！

ランサーの突きをする為に戻す一瞬の隙に瞬動で後方へ移動した。

このまま瞬動を使っての高速戦闘で削り取る！

「何ッ？！　その移動は……あん？」

ランサーが驚いた時だった。

キャスター達の方で動きがあったようで、ランサーが動きを止める。

「チッ、いいとこだったのによ」

「あれは……アーチャーか」

そこには撤退していくライダーの姿と深紅の聖骸布のコートをはためかせ、キャスターの魔力弾の雨を士郎を背負いながら掻い潜るアーチャーの姿だった。

「野郎も坊主を助けに来たみたいだな」

「あいつのマスターの命令だろうな……アーチャーのマスターと衛宮士郎は手を組んだらしい。

因みにセイバーは彼の騎士王、アーサー・ペンドラゴンらしい」

本名はアルトリア・ペンドラゴンだが、別にそれは教えなくても良い情報だしな。

「ほう、そりゃ是非、手合わせしたいもんだ……しっかし、便利だな？　その能力ってのは……で、いいのか？」

「別に対価は要らない、と言いたいんだけど……どうしても倒せない奴がいてね……」

「あん？　誰だそりゃ？　セイバーか？」

わからないという表情を見せるランサー。

「お前の2人目のマスターと協力しているサーヴァント、九騎目のイレギュラーだよ」

「前にテメェが言ってた、第四次聖杯戦争のアーチャーか？」

「そ、あれは反則だ。
それこそ正面から宝具の撃ち合いにでもなったら、この聖杯戦争のサーヴァントが束になっても勝つのは難しい」

「そんなのが居やがるのか？」

「世界最古の英雄王ギルガメッシュ……それが真名だ。　情報と引き換えにそいつを倒す手伝いをしてくれないかな？
それで俺とあんたが生き残ってたら存分に死合おう」

取引を持ちかける。

「いいぜ、前のマスターはいけすかねぇし、最初のマスターの仇打ちのついでだ。　お前さんにゃ情報の借りもあるしな……」

「あんがと、俺の事は朱然と呼んでくれ。　俺の真名だ」

契約成立！

それに伴って俺は真名を教える事にした。

「おいおい、自分から名乗るか普通？」

「商談は成立、俺がアンタの真名を一方的に知ってるのは不公平だし、アンタには名前を覚えてて欲しいくらいには気に入ってるんだ」

「男に気に入られても気持ち悪ぃだけだが、お前みたいなやつは嫌いじゃねぇ」

「アイルランドの英雄に気に入られるとは光栄だね」

そんな事を話しながら、向こうの様子を観戦する俺達。

アーチャーが突然、担いでいた士郎を山門の方へ蹴り飛ばした。

お、アーチャーが重圧（アトラス）に捕まった。

士郎が目を覚ましたっぽい。

おーおー、固まっとる固まっとる。

既に干将・莫耶が投擲され、かなり遠回りにキャスターの方へ飛んでゆく。

直前まで気がつかなかったキャスターが何とか避ける。
その瞬間、アーチャーにかけた重圧(アトラス)が解かれた。
すぐさまアーチャーは黒塗りの弓を跪いた格好で、上空に居るキャスター目掛け構える。
番えるのはバーサーカーを一度殺した螺旋の剣、偽・螺旋剣(カラドボルグ?)。
キャスターはそれに気が付き、空間転移を試みる。
キャスターの姿が消えた所で偽・螺旋剣(カラドボルグ?)が放たれた。

そして、傷つきながらも現れるキャスター。
アーチャーと士郎に何か話している。

勧誘でもしてるのだろうな……。

士郎がアーチャーに向かって何か言ってる。

理があれば従うとか言ったアーチャーに反発したんだろう。

「さて、俺達もそろそろあっちに行こうか」

「そうだな。　今更やる気も起きねぇし」

俺達はキャスター達の所に向かう。

「そっちは終わったのかしら?」

キャスターが訊く。

「今回は痛み分けって事で帰らせてもらうよ」

俺は飄々と言う。

「させると思って？」

魔術師とは思えない殺気が向けられてきた。

「今の君に俺を倒せるとでも？」

俺も殺気をキャスターに送り、緊迫した空気が流れる。

「はぁ……いいわ、行きなさい」

キャスターは根負けしたかのように言う。

「言われなくても」

俺は踵を返す。

その後ろ少し離れて士郎が続き、最後にアーチャーが続く。

俺が山門を潜り抜けようとした所で――――――鈍い音が響いた。

その直後、士郎が吹っ飛び、階段を転げ落ちそうになった。

俺は士郎を反射的に助けていた。

階段下にはアサシンと戦っているセイバーの姿があった。

「シロウ！　おのれッ！」

アサシンを無視し、俺に飛びかかってくるセイバー。

って、待て待て待てッ！！

「ッ！　止めろッ！　セイバーッ！」

「何故ですかシロウ！」

突然の制止に反論するセイバー。

「今のはイレギュラーじゃない、アーチャーだ」

「何ですって?!」

階段の上から冷酷な視線を向けるアーチャー。

「何をするのですかアーチャー！」

セイバーが叫ぶ。

アサシンはいつの間にか消えていた。

「……」

何も答えないアーチャーは森へと消えていった。

「遠坂に後で聞いてみよう」

「ええ、それでシロウ、一体何があったのですか?」

「ええと……俺にも何が何だか」

困惑する士郎。

仕方がない、俺が説明するか……。

俺は衛宮邸を張っていた所から話し始め、今まで見た事を話した。

ランサーに真名をバラした事とかは話してないデスヨ？

そんなこと言ったら斬られそうだし。

「そんな事が……シロウ、もう少し気をつけてください！　貴方はマスターとしての自覚が足りません！」

「すまない、セイバー」

セイバーが注意し、士郎はすぐに謝った。

「あー、じゃあ俺は帰る」

「その前に一つ聞かせてください」

「何？」

帰ろうとした俺に問いかけるセイバー。

「貴方は何故、シロウを助けたのですか？」

「そんな敵対関係にある者を助ける理由なんて限られてるだろう？

利用価値があるからだよ。

最も優れた者が選ばれる可能性が高いセイバーのクラスのサーヴァントが未熟な魔術師との主従関係によって十二分に戦えないんだ。

マスターを殺してまともな魔術師と契約されるより何倍もやりやすい。

他にもちょっとした理由があるけど、大部分はさっきも言った通

りお前が倒しやすいからだよ。
これでいいかな？　じゃ、今度こそ本当に帰らせてもらうよ」
本当はオマケの賭けの方が大事なんだけど。

俺が階段を下りて行こうとした所で――――――

「ありがとう、イレギュラー！」

「何で礼を言うんだ？　さっきも言った通り、利用価値があるから助けたに過ぎないんだけど？」

「例え打算があって助けてくれたとしても、助けてくれたことには変わりはないだろ？
だったら、礼を言うのが当たり前のことじゃないか」

どんだけお人よしなんだコイツ……昔の劉備を見ているようでイライラする。
帰る前にちょっと説教しよう。
しないと俺の精神衛生上良くない。
因みに生前まで劉備こと桃華とは、笑いながら嫌味を言い合うくらいに仲が悪かった。

「俺はお前が嫌いだ。　その甘い考えも、覚悟も、信念も……昔の劉備の様だ」

「それはどういう意味だイレギュラー？」

「そのままの意味だ。　お前の過ぎた自己犠牲は人間として壊れている。
お前自身が本当に抱いた信念を持たない限り、お前の存在は周囲にとって……いや、世界にとって悪になる」

「その口振り……貴方はシロウを知っているのですか？」

「ああ、知っているとも、衛宮士郎の事、正義の味方になる事、そして……並列世界で知ったその理想の結末の一端を……」

「何だってッ！？」

まあ、お前の未来を知っているとか言われたら吃驚するよね。

「だけど、それを俺はお前に教えない。　それにセイバー、俺はお前が聖杯に望む事も知っている」

「ッ！　なら貴方は私の真名も知っているのですか？」

俺はセイバーのふざけた願いにも忠告する事にした。
王に仕えた者として、王になった者として、そんなふざけた願いは断固却下だ。

「ああ、知っているとも。　二人には忠告しておく、この世界は狡猾だ。
絶望を抱く者の前に希望や救済という餌をチラつかせ、取り込もうとするからな。
それとセイバーに断言してやる」

――――この聖杯戦争の聖杯では絶対に、望みは叶わない。

「?!　どういう事ですッ！　イレギュラーッ！」

剣を構えるセイバー。

「王に一度仕えた者として忠告する。　過去のやり直しなんて、馬鹿のする事だ。
お前の導いた民達を裏切る行為だ。　王として最低の選択だ。
起きた出来事は変えられない……例えやり直しても、同じ数の別の誰かが死に、別の誰かが生き、お前の国は滅亡する運命にあるだろう。
それでも尚、愚かにやり直しを選択し、お前が勝ち残っても……お前の望みは二重の意味で叶う事はない。
願いは叶わないし、叶えたとしても世界の修正で、ほぼ変わらない結末が待っているだろうさ。
そして、それ以前に、俺のマスターが聖杯を壊す」

「「……」」

黙り込む二人を背に、俺は柳洞寺を下っていったのだった。

9th night 裏切りの槍と求める者達と異端者（後書き）

ランサーとの裏取引？とセイバー、士郎に説教するな話です。
どうだったでしょうか？

因みに作者は士郎の真っ直ぐな所は好きですが、度を超えた自己犠牲とお人好しな性格は嫌いです。

10th night 愚者と異端者（前書き）

次話で少し原作とは違う流れにしてみようかと思っています。
ツッコミ所が多い展開になりそうですが、ご容赦を

１０ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　愚者と異端者

取り敢えず学園を監視中。
何故かというと他者封印・鮮血神殿（ブラッドフォート・アンドロメダ）が発動中なのですよ。
オドロオドロしい鮮血を満たしたような色と雰囲気のいけすかない結界だ。
何せ、結界内の他者の魔力を絞り取って最終的には溶かすんだから。
肉の一片まで魔力に変換するとはエグ過ぎる。
それを躊躇ってか、進んでかは知らないが、発動させた間桐慎二は許されるものじゃない。
ま、殺さんけどさ。
間桐慎二は性格悪かったが、聖杯戦争で身の丈を読み違えたから、Ｆａｔｅルートではあんな結末を迎えたんだろう。
それはさて置き、さあ、介入といこうか。

俺は躊躇いなく結界の中へ入った。
そこで士郎が落ちてきた。
ライダーに蹴り落とされたのだろう。
俺は無影をネットの様になるよう投擲し、士郎をグラウンド落下死体になる前に助ける事ができた。

「お前は……ッ！！」

「よう、衛宮士郎」

気軽に挨拶する俺。

「何でお前がッ！　まさか俺を殺しｎ「阿呆め、これから殺す奴を

助ける馬鹿が何所に居るんだ？」じゃあッ！」

「今回のこの結界は俺の倫理的にも頂けない代物なんでね。　これを壊すのを手伝ってやろうと思ってな」

「……わかった、手伝ってくれ」

士郎は少し考える様に目を閉じ、結界破壊の手伝いを了承する。

「了解！　じゃあ、ショートカットだ！」

その言葉と共に俺は士郎の落ちてきた窓から侵入、士郎を無影で釣り上げる。

「フィーッシュ、ってね！」

「わァァァアアアアッ？！」

ドサッと廊下に落とす。

「即席、逆バンジー体験はどうだった？」

「ふざけるなッ！　死ぬかと思ったぞ！」

「まあ、気にするな。　今は、結界の方が先だｒ「何だよお前？」ん？」

慎二が俺の言葉を遮った。

「何だってのは何を指して言っているんだ？」

「お前、サーヴァントだろ？　何で僕のライダーと同じ顔なんだって訊いてるんだ！」

威勢が良いなワカメ。

「俺は元からこの顔だ。　唯の他人の空似だよ」

「コイツが衛宮のサーヴァントって訳？」

余裕の表情を見せる慎二。

俺は答える気も無いし、士郎はこの状況に焦ってるのか、同じく訂正しない。

「例え同じ顔でも、僕のライダーの方が強いに決まってる！　アイツを倒せッ！　ライダーッ！」

その言葉にライダーは従う。

「あんなマスターによく従っているな？」

「それが彼女を守る、唯一の方法だからです」

「それがお前の選択か？」

「そうです」

静かに言うライダー。

向こうも向こうで士郎が慎二を追って行った。

ライダーは鎖の音を響かせ、無名・短剣の杭を持って俺に突撃す

る。
俺は天翼を出し、杭を受け止める。
そこからライダーは足払い。
俺はその場で飛び、天翼を払う事によって距離を開けた。
ライダーが杭を投擲。
俺は最小の動きで掻い潜る。
ライダーは壁を蹴り、逆さになった所で天井を蹴って俺の頭上から体重を乗せた杭の一撃を見まう。
俺はそのまま加速、ライダーを通り過ぎ、音叉ナイフ付きの無影を袖口から投擲。
俺が狙ったのは背を向けて逃げている慎二。
このままいけば胴体と頭がさようならするところだったのだが、それに気がついたライダーは残っている杭を投擲して弾いた。

「ヒィッ！　何やってるんだよライダーッ！　そんな奴にも勝てないのかよッ！」

「間桐慎二だったか？　さっさとこの胸糞悪い結界を止めろ」

「お前ッ！　何、僕に命令してんだよッ！？」

振り返って俺に反論した所で、士郎に捕まり壁に叩きつけられる。

「慎二ッ！　結界を止めろッ！」

「くッ！　そんな事する訳ないｄ「慎二ッ！！」ぐッ！！　ライダーッ！　ブ、結界（ブラットフォート）を止めろッ！！」

反抗したが、士郎に締めあげられ、結界を解く様に指示する慎二。
ライダーは俺の事を警戒して動かない。

「な、何してるんだライダーッ！　さっさと止めろッ！」

慎二が苦しげに言う。

「俺は邪魔しない」

俺がそう言うと、ライダーは構えを解き、佇む。

数秒後、赤に染め上げられていた学校は元の日常の色に戻った。

「ほら、止めたんだから首から腕を退けろよッ！」

「慎二、マスターを辞めろ」

「何言ってるんだッ！　そんなこと出来る訳、ぐ……ッ！」

首を締め上げていく士郎。

「わ、わかったから腕を……ッ」

そう言った所で士郎は腕を放した。

その一瞬の隙をライダーは見逃さず、士郎を蹴り飛ばそうとした。

俺がそれをさせる筈も無く、ライダーの蹴りを受け止めていた。

「ッ？！　助かった、イレギュラー」

「衛宮士郎、お前はだから甘いって言っているんだッ！」

俺はライダーを弾き飛ばしながら言う。

「それは、慎二が了承して――――」

「したように見せかけただけだ、このお人好し馬鹿！」

士郎へと俺は怒鳴った。

「――――なッ！？」

俺は士郎に怒鳴りながら、無影で慎二を無影で拘束する。

これだから……この、お人好しは……。

「どうする？　このままだとこのマスターを殺す事になるけど？」

「どうすれば放してもらえるのですか？」

「慎二をどうする気だイレギュラー――――」

「お前は黙ってろ！」

これ以上話の腰骨を折られないように再度、怒鳴っておく。

「――――……ッ！」

俺の一括で黙る士郎。

「お前ッ！　僕にこんなことしてどうなるかわかって――――」

「ワカメもちょっと黙れ！」

たくッ、どいつもこいつも……ッ！！

「――――――ぐぅッ？！」

騒ぎ出したワカメをきつく締めあげ黙らせる。

「ライダー、俺達の勢力に来ないか？」

「それは出来ません。　貴方は理由を知っているのでしょう？」

間桐桜が、間桐臓硯の手中にある、か……だが間桐臓硯は肉体を捨て、蟲を介して干渉する霊体だ。

魂を直接壊してしまえば、存在できない。

その手段を俺はもう持っている。

「なら、その理由を俺が何とかできるとしたら？」

「ッ？！　それは本当ですか？」

「ああ、俺の宝具ならそもそもの原因を殺せる」

「……信じてもいいのですか？」

「俺の真名、朱然の名に誓って」

俺は真摯にライダーを見る。

「……」

俺の提案に対して、考えるジェスチャーをするライダー。

そして――――

「わかりました。　貴方を信じましょう」

「なら、コイツは没収だな」

俺は慎二の偽臣の書を慎二から取り上げる。

「やめろッ！　それはッ！　それが無いと僕はッ！」

無影に身を切られながらもがく慎二。

そこまでしてマスターに拘るのか……愚かな……。

そして、天翼の刃を展開、偽臣の書を地面に放り捨て、刃を突き立てた。

すると偽臣の書は燃え始め、灰になった。

「あ、ああ……僕の、僕の礼呪が……燃えちまう……」

俺は無影を解くと慎二は覚束(おぼつか)ない足取りで偽臣の書が燃え尽きた場所に四つん這いに成り、灰を集め始める。

そんな事をしても無駄なのにも拘らず……。

「慎二……」

それを見た士郎が呟く。

「士郎、早めにそのお人好しを直しておけ。　じゃないと、お前の

周りが知らない内に死ぬかも知れないぞ？」

「それは……どういう？」

「やる事ができたから俺は行く。　精々生き残って見せろよ、正義の味方？」

俺は窓から飛びだし、ライダーが続いた。

さあ、害虫駆除だ！

10th night 愚者と異端者（後書き）

慎二っぽかったですかね・・・・・・？
ちょっとうろ覚え気味です。

次の展開的に悩み所が多すぎて、大変だどうしよう?と焦っているというかテンパっている作者です。
でも、書くからには頑張りたいです。

紅鎖様より、朱然さんが士郎に協力を申し出たシーンで、前回朱然さんが去り際に言った事だけで同族嫌悪のあるアーチャー、潜在的嫌悪のある言峰ならともかく、最初から士郎が「信用できない」と拒むのは士郎の性格的に違和感を感じる。
とのご指摘を受けました。
作者も何度か読み返し、同じ違和感を感じた事から、朱然さんの協力を申し出た後、少し迷うけど、手伝ってもらう。
という感じに修正しました。
紅鎖様、ご指摘ありがとうございました。

11th night 消える元凶と突然の強襲と異端者（前書き）

今回は今までより長く書いたのですが、自信がありません。

11th night　消える元凶と突然の強襲と異端者

――――ピーンポーン。

俺はインターホンを押す。

……ガチャッ。

玄関から間桐桜が出てきた。

ライダーが一応、桜の味方だという説明をして、俺は間桐邸に通された。

中の家具はアンティークで揃えられている。

金掛かってそうだなぁ……おっと、桜が困惑している。

「ライダー、この人は？」

「私が彼の勢力に与すれば、桜を助けてくれるらしいのです」

「そんな！？」

驚きを露わにする桜。

「君は衛宮士郎にマスターだという事を知られたくなくて、兄に令呪を渡したんだろ？」

「そう、ですけど……」

俯く桜。

く、暗いなぁ……。

「別に士郎に教える気はないよ。害虫駆除をしたらライダーを俺のマスターと再契約してもらうだけだし」

「ライダーは良いの？」

「私は桜が救えるのならそれで構いません」

淀みなく答えるライダー。

「まずは地下に行って駆除しないと……地下に行く階段の場所を教えてくれないか？」

「わかりました」

桜は大人しく階段の場所を教えてくれた。

そして、俺は地下に降りる。

勝手に此処まで来てしまったが、イリヤはどの道、間桐……マキリを潰すつもりなので、問題ないだろう。

桜は魔術師として未熟だし、野心も無いと思うので殺す必要もないだろうし。

慎二の方は知識はあっても魔術回路はないので大したことは出来ないだろうから、こっちも殺す必要はない。

殺すのは唯一人。

間桐臓硯だ。

「居るんだろう？　出て来いよ」

「何じゃ？　勝手に他人の家に入って来おって、更に儂を呼び出す不逞の輩め……」

「お前を殺しに来たぞ老獪」

「おお、隠居しとる年寄りに何と恐ろしい事を……」

この爺ィ……。

俺はすぐさま守殻を纏う。

「怖い怖い、すぐに殺されてしまいそうじゃ！　カカカカカ！」

俺は守殻で頭を殴る。

臓硯の頸が？げ、地面に落ちる。

今のは？！

驚いたのはあまりに手応えが無かった事だ。

大方、身体が腐って限界がきていたんだろう。

魂が時間の蓄積と共に劣化して、乗り換えてる身体がすぐ腐るらしいからな。

「おお、何という事を」

そう言った所で、頸が数匹の蟲に変わり、のたくり始めた。

うげぇ、キモい。

よく見ると周りの穴から続々と蟲が湧き出してきた。
その種類は様々で、芋虫の様なモノからカブト虫、蝶、バッタなど際限が無い。
俺は無影を取り出し、全力で切断していった。
蟲に集られて死ぬのはご免被る！

「流石はサーヴァント、と言った所かのぅ。　じゃが、儂を殺す事は出来んよ、カカカ！」

蟲が集まり、一時的に臓硯を形作り言う。

本体をどうにかしないと死なないと思って自信満々に言いやがる！
まるでこの身体の父だった者を見ているかのようだ。
見てやがれよ臓硯。
他人を喰いものにするお前の在り方、この俺が地獄に送ってやる。

俺は今までと同じように蟲の塊である臓硯を寸断した。

地下の蟲共はこれで駆除したな……後は本体だけだ。

俺は階段を登り、居間に行った。

「どうでしたか？」

「一応は駆除した」

「一応？」

ライダーが俺に向けて殺気を出し始める。

「待て待て！　落ち付け！　臓硯の本体は桜嬢に寄生して心臓と一体化しているんだ」

「ッ？！　では助けられないのですか？！」

更に殺気を出すライダー。

「ホントに待てっての！　俺の宝具を使えば恐らく何とかなる筈だ！」

そう言うとライダーは殺気を一応、抑えてくれた。

「桜嬢はそのまま立っていてくれ。　すぐ終わる」

桜は俺の言った通り、俺の正面の少し離れた所に立っている。
俺は天翼を取り出し、刃を展開し、魔力を流し込む。
天翼に込められた概念。
それは分断。
分断する物を明確に知らなくてはならない。

流石に魂レベルで寄生しているとどうなるかわからないが、見た所、魂までは融合してないので何とかなりそうだ。
まあ、魂まで融合したら自我が混ざって違う存在とかになりそうだからしないんだろうが……不幸中の幸いと言った所か……。

間桐桜という存在と、間桐臓硯が寄生している刻印蟲という存在を分断する。

その概念を以て、蟲を概念的に桜から分断、排出する！

「ハァッ！！」

気合いと共に天翼を振り下す。
そこから斬撃が飛び、桜の身体をすり抜けた。

そして――――

桜の後ろに、粘液をこびり付けている全ての刻印蟲が飛び出した。
こちらものた打ち回ってる。
俺は無影を取り出し、蟲達を繭の様に包む。
無影の概念は否定。

間桐臓硯は蟲を介した霊体。
ならばその存在……間桐臓硯という魂が此処に存在するという事を否定する。
概念武装の理念、魂魄としての重みで対象を打倒するというのを地で行うのだ。

俺は魔力を込めていく。

この世界に来る前に宝具になったので、この冬木市に来る前にちょっと試した。
この宝具は俺が前の世界で生きたという実感を与えてくれる。
あそこが存在して、彼女達も、俺もあそこにいたという確固たる証だと思った。
始めて使った時、俺の武器だったという事もあるが、違和感なく使えた。
恐らく、英霊の中には自分の生前使っていた武器がこの様に宝具

化している者もいるのではないだろうか？
話がズレてきた。
結局、何が言いたいのかというと、魂の否定は魔力をかなり消費する。
現在の魔力量は八割程、劣化している魂でも恐らく半分は持っていかれるだろう。
それは他の八卦八武装（せんてんはっけ）にも言えるのだが、物体とか、液体とか、固体なら魔力消費はそれほどでもない。
だが、同じ概念的なものに分類される魂、精神や同じ概念武装、魔術等はそれ以上の効果を発揮させる為の魔力を消費しなければ効果を発揮できない。
更に、時間や因果、空間、死への介入に等の効果を発揮させるには、それ以上の魔力を消費する。
疑似直死の魔眼とか出来なくはないけど、今の魔力の都合上、出来て一、二回が限界。
尚且つ、八卦八武装（せんてんはっけ）が無いと出来ない＋魔眼の全力解放＋要、集中の為動けない＝戦闘に使えない。
ある意味、二回死んで根源に行った事と、それによってあらゆる流れを知覚できるから出来るんだと思うけど……いや、ある意味、俺の本体は根源にあると言った方がいいのか？
それは置いておいて、俺には直死の才能？は無いと思う。
万物の一撃死効果で対不死戦にとても重宝出来る技能だけど、ちょっとでも線がズレると効果出ないし、常に移動するような戦闘で使うにはハイリスクハイリターン過ぎる。
あんなん戦闘に使える式さんとか志貴さんは異常だね、うん。
また話がズレた。
因果な話だが、俺にはあの父親から遺伝した魔力を持っている。
今まで使っていなかったものを使い始めたので、消える前まで成長して魔力ランクはＢ＋止まりだが、あの父親は数百万人の生贄があったとはいえ、神なんて言われる代物を呼び出せるくらいだ。

この体の魔力資質はそれほど悪くはないと踏んでいる。
サーヴァントである限り、ステータスは変動しないけどさ。

「何じゃこれはッ？！」

蟲から臓硯の声色で驚愕の声が聞こえる。

声帯なんて蟲にはないだろうにどうやって話しているんだか……
ま、興味もないが。

「この鋼糸は否定の概念を込める事の出来る宝具、無影。
これでお前も終わりだ。己の魂が否定され、消えていくのを感じながら地獄へ行け、マキリの老獪」

魔力が注がれ、否定の概念が臓硯の魂を否定していく。

「やめるんじゃッ！　桜、おお、桜よ！　早くライダーでそ奴を殺せッ！」

臓硯の命令、いや、嘆願に桜が答える筈も無く――――――

「あ、ああ、消えてゆく……儂は……ユスティーツァ……」

それが臓硯の最後に発した言葉だった。
後には何も残らなかった。

あんな奴が居るから……いや、やめよう……。

「これで終わった。　もう、君達兄妹を捕えているものは無くなった。　今更だけど、桜嬢、君は自由に生きればいいと思うよ」

「……私は、自由に生きていいんですか？」

探る様な、望む様な……それでいて祈る様に問う桜。

「それは君が決める事だよ。　さっき俺が言った様にね。
衛宮士郎の傍に居る事も、恋人になる事も、距離を置いて見守る事も、皆の前から姿を消すのも、君の選択次第だ」

「じゃあ、ライダーはこのまま俺のマスターと再契約してもらうから、令呪を使い切ってくれ」

「……わかりました。　ライダー、こんなマスターでごめんなさい」

ライダーに謝る桜。

「いいえ、貴女は私に似ていた。　守りたい者を殺す危険を背負っていた。
その呪縛から、貴女は逃れられ、マスターとしての宿命も無くなった。　なら、私は満足です」

二人は笑い合う。

「ライダー」

「桜」

笑い合った二人は互いに名前を呼び合い。

「「今までありがとう」」

礼を言った。

そして、令呪を使い切った桜はマスター権を無くし、ライダーはマスターを失った。

その後、俺とライダーはアインツベルン城へ向った。

アインツベルン城に到着。

だが、そこに待っていたのは――――――

「何がッ……ライダーは待っていてくれ」

「わかりました」

ライダーは了承すると森に溶けるように消えた。

俺は城に入っていく。

入口の広間には天の鎖（エルキドゥ）で拘束され、無数の宝具に貫かれているバーサーカーの後ろ姿だった。

「バーサーカーッ！？」

傷の具合からしばらく回復できないだろう。

こんな芸当ができるのは二人しかいない。

片方が衛宮士朗と手を組んだ遠坂のサーヴァントで此処に攻めてくる理由が無い以上、此処に現れるのは残った可能性――――

俺はバーサーカーの脇を抜け、バーサーカーで見えなかった階段の上部を見上げた。

そこには――――

「何だ？　まだ鼠が残っていたか……」

「貴様はッ！？」

気を失ったイリヤを物の様に持つ黒い服を着たギルガメッシュの

姿だった。

「貴様だと？　お前こそ何様だ雑種？　王の前だぞ、そこのバーサーカーの様に跪くのが礼儀であろうッ！」

「ふざけるなッ！　イリヤを離せッ！　ギルガメッシュッ！」

真名を読んだ瞬間、赤い瞳に殺気が生まれた。

「雑種……何故、我（オレ）の名を知っている？　それ以前に、王の名を呼び捨てるとは何事かッ？！」

その怒声と共に、ギルガメッシュの背後の空間から宝具達が現れ始める。

神と対峙した時に似た重圧（プレッシャー）。

何とかなるかなんて思い込み、消し飛んだ。

アレらは全て、必殺の威力を秘めている。

真名解放が出来なくとも、あの原典達は俺を殺すには十分過ぎる。

理性で考えるより、本能が理解した。

「王（ゲート・オブ）の……財宝（バビロン）……」

思わず俺は呟いてしまう。

「ほう……我の名だけでなく、我の蔵の名まで知っているとは……雑種、お前は何者だ？」

ギルガメッシュが問う。

だが、恐れていたら……守れる者も……守れないだろう――――！

俺は魔眼を発動させ、武器達を呼ぶ。

「俺の名は朱然！　並列世界に生き、根源に至り、世界に呼ばれし、異端者だッ！」

俺は守殻を纏い、周りには残りの武器達が俺を守護するように滞空する。

「ほう……この我が財を見て尚、向かってくるか……愚かな。しかし、ランクは低いがこれは……それに並列世界の宝具、その輝く紫水晶（アメジスト）の魔眼……面白いぞ雑種ッ！
その宝具と両目の魔眼を抉り出し、我に献上するがいいッ！」

「何ッ？！」

いきなり何を言い出しやがるんだコイツはッ！？

「そんな事、する訳が無いだろう！？」

「喜べよ雑種、我が特別に我が財に入れてやると言うのだ。　疾く献上するのが礼であろうッ！」

話が噛み合わねぇ――――――ッ！！

「断固、断るッ！」

「何？　ならば直々に我がその宝具を奪い、魔眼を抉り出して我が財の一部としてやろう――――――ッ！」

高らかに英雄王が言う。

「この魔眼と宝具は俺の生きた証ッ！　死してもお前に奪わせわせはしないッ！　イリヤを置いて……此処から失せろッ！」

俺はギルガメッシュに向かって走り出す。

「吠えたなッ！　雑種ぅーッ！！」

一斉に宝具が俺に殺到する。

聖剣、魔剣、聖槍、魔槍、妖刀、鎌、独鈷、それらに収まらない宝具達。

俺はそれらをかわし、逸らし、防ぎ、弾き、身を削りながら英雄王（ギルガメッシュ）に肉薄していく。

エアを出されなければ、まだ勝機は在る筈ッ！！

「雑種如きが、図に乗るなッ！」

「ぐぅ……ッ？！」

もう少しでイリヤに届きそうな所で、バーサーカーが居る所まで引き戻された。

俺を引き戻した物の正体は、天の鎖（エルキドゥ）。

「バーサーカーの我が宝具を受けて尚、向かってくる蛮勇と新しき財を見つけた、故に興が乗った。

特別に見せてやろう……精々死ぬなよ雑種？」

まさか・・・・・・乖離剣エアを出すつもりか？！

――――――起きろ……エア

現れたのは古代メソポタミアで天地を切り裂き、世界を創造したとされる、剣としての機能があるかも怪しいが、先程の宝具の軍勢よりも禍々しい重圧（プレッシャー）を叩きつけてくる偽・螺旋剣（カラドボルグ？）とはまた違う、ドリルの様な形状の剣。

「クソッ！　外れやがれッ！」

俺はもがく。

こんな所で殺されてたまるかよッ！

「天地乖離す（エヌマ）――――――」

余波でさえ、普通の人間ならば吹き飛ぶような赤い嵐。

終わるのか？

助ける事も出来ずに、このまま世界の奴隷となるのか？

「――――――開闢の星（エリシュ）ッ！！」

紅き閃光と共に向かってくるのは擬似的な時空の断層を引き起こす一撃。

それを耐えられる者など存在しないだろう。

俺は目を閉じなかった。

あの時と……神と対峙した時と同じじゃないか！

結局、俺一人じゃ、あの規格外を倒す事も出来ないのか……？

そう、思った時だった。

俺の目の前に巨体が立ち塞がる。

「バーサーカーッ？！」

バーサーカーの身体は未だ拘束されているにも関わらずに……。

「何でッ？！」

「■■■■■■――――――ッ！！」

バーサーカーは俺に向かって咆哮する。

俺には「お前は諦めるのか？」と訊かれているようだった。

俺は……俺は、諦めたくないッ！！

「俺はッ！　イリヤを守りたいッ！」

俺はバーサーカーに叫ぶ。

「■■■■■――――――ッ！！」

すると、またバーサーカーが咆哮した。
そこで、何かの流れが流れ込んできた。

これは――――――

そう思った時だった。

一条の光がアインツベルン城の外壁をブチ抜き、俺を拘束している天の鎖（エルキドゥ）を引き千切った。

そして――――――

「手を――――――ッ！！」

俺は差し出された手を咄嗟に掴み、そのまま凄まじい速度で天井を貫き、空へと舞い上がった。
差し出された手の主、ライダーが天馬を駆り、俺と共に星の瞬く夜空へ消えたのだった。

「イリヤァァァァ――――――ッ！！」

俺の叫びを残して……。

１１ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　消える元凶と突然の強襲と異端者（後書き）

という訳で、間桐臓硯が殺せないとたかを括っている内に朱然さんが魂消滅という手段で殺しました。
そして、突然のギルガメッシュの強襲、という展開に・・・・・・。
バーサーカーの犠牲と、ライダーの機転で事なきを得た朱然さんは次回、言峰教会に行くという展開にする予定です。
そこで戦う相手とは・・・・・・と書けば、恐らく原作を知っている人は誰と戦うのか見当がつくかと思います。
思ったよりも早くＦａｔｅ編が終わってしまうかも。
原作を思い返すと日数的に一カ月経ってないんですよね、確か。
とにかく、楽しく読んで頂けたなら幸いです。
趣味で書いている物ですが、おかしな所があったら修正していくつもりです。
まあ、ツッコミ所満載でしょうけど・・・・・・。
では、次回にて

12th night 答えへの道標と異端者（前書き）

アーチャー回です。
二つに分けようかと思ったのですが、一気に読めた方が良いかなと思い、そのまま投稿する事にしました。

12th night 答えへの道標と異端者

「くッ！」

ライダーが呻き、天馬が森の入口手前に降りる。

「おい、どうしたライダー！」

「このままでは……」

消えるってのか？

「魔力が底を尽きつつあります」

ライダーの手が透け始めている。

マズイ、どうすれば?!

「そうだ、俺と契約はできないか？」

「?!　そんな事が出来るのですか？」

驚くライダー。

「いや、キャスターがアサシン呼んだし、出来るかなぁと」

魔力回路はないけど、冬木市に来る前にアインツベルン城で術式は見た。

後は魔眼でそこに至るまでの流れを強引にでも手繰り寄せる！
俺が此処に居ること自体が異常なんだッ、だったら俺にもキャスターの様にマスター権を寄こしやがれッ！！

「……不確かですが、可能性があるのならやってみましょう」

取り敢えず了承。

「ではッ！」

“――――――告げる”

“汝の身は我の下に、我が命運は汝の騎馬に、聖杯のよるべに従い、この意、この理に従うのなら――――――我に従え　ならばこの命運、汝が騎馬に預けよう・・・・・・”

「ライダーの名の元に、誓いを受けます。　貴方を我が主として認めましょう。　イレギュラーのサーヴァント、朱義封」

「……」

「どうだライダー？」

「魔力が流れ込んできています。　貴女の手の甲にある令呪が成功の証でしょう」

「そうか……よかった」

俺はサーヴァント化に伴って、魔力を生成できない。

つまり、ライダーに魔力供給するには俺に供給される魔力を経由して供給するという二度手間を経ている。

それはつまり、イリヤは殺されていない。

イリヤが死ぬ時＝俺とライダーが死ぬという事だ。

恐らく、俺の宝具と魔眼を財に入れる為に、ギルガメッシュが殺さなかった事。

今イリヤを殺してその心臓を抜いても、埋め込む魔術師が確保されていなかった事が理由か？

だが、それも時間の問題だ。

早くイリヤを助け出さないと！

その為にはなりふり構っていられない、セイバーに協力を求めよう。

「ライダー、衛宮邸に行こう」

「そうですね、私達だけではあのサーヴァントを倒す可能性は０に等しい」

「ああ、宝具の大群は身を削る覚悟をすれば何とかなる事がわかった。

問題はあの剣、エアだ」

「エア……あの凄まじい威力の宝具ですか……」

考えるジェスチャーをするライダー。

「アレのランクはＥＸ、俺の宝具はＡ＋だ」

「私の宝具ランクもＡ＋です」

「もし、俺達の宝具の出力を合わせてもＥＸには届かない。
ライダーの宝具に俺の宝具を補助として付けても恐らくＡ＋＋が限界だ。
アレと打ち合っても瞬間的に拮抗できたとして、すぐに呑まれて死ぬだろうな……」

俺はライダーとの考察を終え、衛宮邸に移動した。
が、そこには衛宮士郎、遠坂凛、セイバー、アーチャーの姿はなく、庭には多数との戦闘の後があった。

「チッ！　間が悪い！」

「何があったのでしょうか？」

残った勢力、キャスター陣営が攻めて来た、と言った所か……この展開はＵＢＷのセイバー誘拐……？
なら場所は言峰教会。
キャスターは言峰を殺し、小聖杯を手に入れる。
士郎はマスターじゃ無くなり、遠坂のアーチャーは展開的に裏切っている可能性が極めて高い！
クソッ！
最悪の展開だ！

「ライダー、言峰教会に行くぞ！」

「わかりました！」

俺達は屋根から屋根へ飛び移っていく。

俺の行動の所為で、聖杯戦争の予定が早まっている。

それがこんな裏目に出るなんて！

そして――――――

言峰教会でランサーとアーチャーが肩を並べ、士郎と遠坂が対峙していた。

一触即発の緊迫した空気が流れている。

俺とライダーは跳躍。

士郎と遠坂の前に着地した。

「イレギュラーにライダーッ？！」

「何でアンタ達が？！」

「……」

「来やがったな」

四者四様の反応を見せる。

「衛宮士郎、遠坂凛、お前達に協力する」

「助か「待ちなさい衛宮君！」ッ！」

遠坂が待ったをかける。

「何が狙いかしら？　衛宮君の話だとライダーはアインツベルンの

サーヴァントになったらしいけど。
戦力的に劣っている私達に加勢するメリットがアインツベルンにとって低すぎるわ」

「俺のマスターが九騎目のサーヴァントにさらわれた。
奴を倒す為にはセイバーの宝具か、アーチャーの本当の宝具、もしくは衛宮士郎の……いや、未だ使えないのだから衛宮士郎は勘定に入れない方がいいか……。
ともかく奴に拮抗する為の力が俺達には足りない。だから、今助ける代わりに後の戦力を寄こせという事だ。
キャスターに仕えているアーチャーは論外、ならば残っている方と共闘するのは正論だろ？」

遠坂は考え、すぐに答えを出す。

「そう……そういう事なら今だけ協力されてあげる。行くわよ、衛宮君」

「あ、ああ」

二人は教会の内部へ走っていった。

「奴が現れたのか？」

アーチャーが俺にそう問いかけ、干将・莫耶を構え、ランサーも深紅の魔槍を構える。

「ああ」

俺も答え、大牙を取り出し、ライダーも構えを取る。

「まあ、それもどうでもいい、私は衛宮士郎をこの手で殺せれば、な」

「キャスターに寝返った時の契約で衛宮士郎を殺す事でも約束させたか？」

「……」

アーチャーは答えない。

図星か……。

「始めようか」

「そうだな……」

俺達は駆けだした。

俺はアーチャーの方へ走り、ライダーはランサーの方へ向かった。

お互いが、お互いの相手と戦り合う前に俺は思い出した。

ランサー対ライダーでは、ルーンの加護、怪物退治の経験が豊富なランサーの方に軍配が上がることに。

俺はその瞬間叫んでいた。

「ライダー、ランサーとの戦いは絶対に生き延びろッ！」

――――瞬間、腕にある令呪が弾けた！

俺の手の甲にある令呪の一画が無くなった。

「了解しました。　必ずこの戦い生き残りますッ、マスター！」

そして、俺達は激突した。

俺は大牙で斬りかかるが、アーチャーの双剣に阻まれる。

「貴様がこの戦いを変えてしまった。　一度たりともこの様に展開が早まった事は無かった」

そこから俺は持ち前の力押しをする。

「そうだな……俺が変えてしまった。　だからこそ、奴を倒す。お前は獅子身中の蟲を演じているのか？」

アーチャーは巧みに俺の大牙をいなしていく。

「そんなこと決まっている、私の目的は衛宮士郎（じぶんじしん）を殺す事だ」

答えるアーチャーの眼光は鋭く、冷たい。

「前に言ったよな？　衛宮士郎を殺させる訳にはいかないと」

アーチャーの鉄壁の防御に隙が生まれ始める。

「……」

アーチャーは答えない。

俺はその首に出来た隙をわざと狙う。

すかさずカウンターの剣撃が俺の首に突き込まれた。
首を傾げるようにして莫耶をかわす。

「イリヤと賭けをしていた。　もし、バーサーカーか俺が衛宮士郎に敗れた場合、士郎の近くで過ごす事を……」

莫耶が翻り、袈裟掛けに斬り込まれる。
俺はバックステップすると同時に爪を持ち、届かざる左の護剣（マンゴーシュ）。

澄んだ金属音が響き、アーチャーの剣の軌道を書き換える。

「それがどうした……今の私にとって、その程度の事は些細で瑣末な出来事に過ぎない……何の関係も無い」

俺はすかさずアーチャーの左肩の隙に斬り込む。
だが、やはり防がれた。
そこで一旦、距離が開く。

「手を……貸してはくれないか？」

「イリヤには悪いが、これが私の選択した道だ」

「お前は他人を踏みつけてでも、その願いを貫くのか？」

「守護者として……掃除屋として、この愚かな存在を自らの手で抹消する。
それが今まで殺してきた守りたかった者達への、私の贖罪だ」

未だ救いを得られず、自分を殺し続けるしかないと思い込んでいるのなら……俺が可能性を与えてやる！

そう思いながら、俺はアーチャーに突撃しつつ、大牙から手を放し、抜刀する。
狙いは足への薙ぎ。

「いつかはわからない……だけど、必ずどこかの並列世界の衛宮士郎がその贖罪をいつか砕く」

アーチャーは側転。
足薙ぎの一撃をかわしながら、干将の空竹割り。
それを俺はその斬撃も再度、澄んだ金属音と共に書き換える。

「だから、どうだというのだ?!　例えそうなったとしても、私は……ッ！」

また、アーチャーに右太腿に致命的な隙が出来る。
俺はその隙を狙わず、瞬動で懐に入り、胸へ爪を突き込む。
その一撃も莫耶に弾き上げられ、一度目よりも更に距離が空く。
アーチャーの手には既に干将・莫耶は無く、黒塗りの弓と漆黒の牙や爪を強引に巻き付けた、喰らい付き、食い千切る様な印象を持たせる矢を番えている。
対する俺は無境を取り出していた。
お互いが己の宝具に魔力を込めていく。

十秒……二十秒……三十秒……四十秒！

「……私は、もう戻れないッ！！」

我が骨子は捻じれ狂う

――――――I am the bone of my sword.

――――――赤原猟犬（フルンディング）

例え弾かれようとも、射手が狙い続ける限り、何所までも目標に喰らい付く赤き猟犬の名を持つ魔剣の矢が、赤き閃光を纏って俺に迫る。

――――――その紅き魔弾は猟犬の如く喰らい付く！

俺はそのアーチャーの宝具を知っていたからこそ、大牙の不変での防御ではなく、無境の反転を選んだ。

反転の概念……即ち、あらゆるものを反転させる。

訊くだけならばとても便利に思うだろう。

だが、それにはまず反転させる為に受ける攻撃より勝る魔力を込め、数秒を耐えなくてはならない。

今、アーチャーの使った赤原猟犬（フルンディング）は四十秒を掛け、持てる魔力を注いだ。

俺もその間、無境に魔力を込める時間があった。

故に、アーチャーがその四十秒という間にどれだけ魔力を込めたのかが勝負の分かれ目になる――――――！！

無境に攻撃が届いた。

尚も俺は無境に魔力を通し続ける――――――

「グゥッ、ゥウゥオオオ――――――ッ！！」

そして――――――

反転は――――――成った。

目標を反転された赤原猟犬（フルンディング）は、射手であるアーチャーに向かい、心臓に喰らいつく寸前、消えた。

反転したとはいえ、射手はアーチャー。

そのアーチャーが狙うのをやめれば赤原猟犬（フルンディング）も狙うのをやめるのは道理だ。

血潮は鉄で　心は硝子

――――――Ｓｔｅｅｌ ｉｓ ｍｙ ｂｏｄｙ, ａｎｄ ｆｉｒｅ ｉｓ ｍｙ ｂｌｏｏｄ.

赤原猟犬（フルンディング）と入れ違いに干将と莫耶が回転し、俺の方へ飛来する。
俺は禍津を取り出し、弾くのではなく、地面に叩きつけ、アーチャーの方へ蹴りつける。

幾たびの戦場を越えて不敗
――――――I have created over a thousand blades.

その直後、干将・莫耶が爆発。
もう一組みの干将・莫耶が左右から投擲されてきた。

ただの一度も敗走はなく
――――――Unknown to Death.

ただの一度も理解されない
――――――Nor known to Life.

俺は先程と同じく対処する。
すると煙を掻き分け、アーチャーがオーバーエッジ状態の干将・莫耶で斬りかかってきた。
俺は受けるのは危険と判断し、禍津で流す。
その直後、強化に耐えきれなくなったのかガラスの様に砕け散った。
アーチャーは未だ立ち込めている煙に紛れ、姿を隠す。

彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う
――――Ｈａｖｅ ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ ｐａｉｎ ｔｏ ｃｒｅａｔｅ ｍａｎｙ ｗｅａｐｏｎｓ.

俺は禍津を消し、大牙を団扇（うちわ）の様に使い、煙を散らす。

故に、生涯に意味はなく
――――Ｙｅｔ, ｔｈｏｓｅ ｈａｎｄｓ ｗｉｌｌ ｎｅｖｅｒ ｈｏｌｄ ａｎｙｔｈｉｎｇ.

煙が晴れ、アーチャーは目を閉じ、俺の正面に佇んでいる。

その体は、きっと剣で出来ていた

――――――Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，　ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｂｌａｄｅ　ｗｏｒｋｓ．

最後の呪文を唱えた瞬間、アーチャーの後ろから囲むように炎の壁が形成されていく。

炎に囲まれ、目を開けていられなくなる程のものに成り、俺は目を閉じる。

目を開くとそこには――――――

境界に揺らめく炎の色が、曇天に映し出されていた。

空から火の粉が降り、舞い散っていた。

宙に浮かぶ巨大な歯車が、天空で重く回っていた。

そして何より目を引くのは――――――

――――――無限の剣が墓標の様に突き立てられた荒野だった。

「貴様が挑むのは無限の剣、果たして貴様に……」

――――――私の剣(ねがい)を折る事が出来るか？

やってやるさ。

それが必要な事ならば、どんな事でも……例え憎まれ、疎まれようとも俺はやって見せる！

俺は言葉にせず、八卦八武装(せんてんはっけ)を発現させる。

俺を中心にして、俺が作り、生涯共にあった八の武装が滞空する。

「来るか……行くぞ、異端者（イレギュラー）お前の覚悟は十分か？」

ゲームの中でのセリフが、自分に向けて発せられている。

それは、とても憧れたシーンの一つ。

でも、俺に問われたのは武器の貯蔵でも、命の貯蔵でもない。

それは覚悟。

そんなの疾うの昔に決まっている。

後は俺の力を示すだけの事だろう――――――！！

俺はアーチャーに疾駆する。
アーチャーは右手を上げる。
それだけで剣達が地面から引き抜かれる。

少しでも前へ……。

アーチャーが右手を勢いよく右手を振り降ろす。
剣達が弾丸となって俺に殺到する。

もっと前へ。

俺は全ての武装を使い弾き、いなす。

更に前へ！

俺は剣の雨を恐れず、アーチャーに迫る。

剣の雨に恐怖する意味は無い。

俺は既に一度、この攻撃を受けたのだから。

辿りついた俺は大牙を手に取り、大上段から振り下す！
凄まじい金属と金属のぶつかり合う轟音が響き渡る。
そこにあったのは俺の剣、大牙。
だが、アーチャーの周りには、俺とは違って残りの武装が滞空していない。

「貴様の宝具、複製させてもらった」

俺は確信する。
アーチャーは完全には俺の宝具を複製出来ていない。
俺の八卦八武装（せんてんはっけ）は八つで一つの宝具。
それを大牙しか複製できていないからだ。
俺とアーチャーは鏡写しの様に剣をぶつけ合う。

一合、二合、三合、四合、五合――――――！！

同じ動きを続ける限り、決着は着かない。

「貴様の覚悟は所詮、その程度か……」

アーチャーは剣撃を止め、距離を空ける。

「時間も有限ではない、そろそろ幕としよう」

アーチャーは大牙を捨て、すぐ脇の剣を手に取る。
その剣はこのエミヤシロウにとって、とても思い入れのある剣。
その名は約束された勝利の剣（エクスカリバー）。
恐らく、Ｆａｔｅルートを進んだと思われるこのエミヤシロウにとって己が理想であり、目標であった剣。
それを大上段に構える。

「完全ではないが、真に迫る事は出来た」

魔力が込められ、贋作であるにも拘らず、見る者を圧倒する黄金の輝きを放ち始める。

「お前に私の剣（ねがい）を折る事は叶わない！」

黄金の輝きは極光へと変わる。

「約束（エクス）されし――――――」

その極光は俺に向かって――――――

「――――――勝利（カリバー）の剣！！」

――――――振り下された。

俺は、大牙を両手を持ち、頭上に掲げる。
すると、残りの八卦八武装（せんてんはっけ）が大牙の周りに滞空し始める。

「俺はここに誓おう！　己が行いに後悔しないという事を――――――！！」

その声に答えるかのように、大牙に残りの武装が吸収されていく。
大牙は変質し、白と黒の螺旋が揺らめく、剣先の中央から二股に分かれている剣へと変わった。
そして、魔力を注ぎ、真名を告げる。

「伏羲（ふっきの）八卦次序――――――」

「――――――太極剣（たいけん）！！」

白と黒の螺旋が渦となり、極光と衝突する！
その二つの力は拮抗し、俺の方が押し始めた。

いや、アーチャーの方が力負けし始めたのだ。
アーチャーの投影する宝具は1ランクダウンする。
即ち、B＋＋に下がる事になる。
瞬間的に俺に勝っていても、最終的にAランクとBランク出力ではAの俺が勝つ。
このエミヤシロウがFateルートではなく、全て遠き理想郷（アヴァロン）を身に宿していたならば、ランクは下がらなかったかもしれない。
だが、このエミヤシロウは鞘を返してしまった。
故に、俺のこの一撃を押し返す事が出来ない。

そして――――――

――――――俺の一撃は約束された勝利の剣（エクスカリバー）を……エミヤシロウの剣（ねがい）を砕いた。

「その衛宮士郎のいる世界で、お前は……答えを得る事ができるだろう」

俺は続きを話した。

「答え、だと？」

アーチャーが血を流しながら訊く。

「そうだ。　それにエミヤシロウ……お前は基本的に間違っている。
未来で過去は変えられない。
過去だけが未来を変えられるんだ。　そして、お前は……答えを得るんだ、その世界で」

アーチャーの身体が透け始める。

「……オレは救われるのか？」

後ろに撫でつけた白髪が元の髪型に戻っている。

「それはわからない」

俺は見えた気がした。

「……オレは答えを見つけられるのか？」

肌も、髪も、瞳の色も……。

「ああ、それは断言できる」

元に戻った衛宮士郎を……。

「そうか……オレは……救われるかはわからないけど、いつか答えを……得る日が来るのか……」

その眼差しは鋭くも、冷たくもなく、唯、明日を見つめていた。

「ならば……私は待つとしよう……その日が来るまで……」

最後に皮肉な表情と口調で言い、英霊の座に帰っていった。

――――――世界に罅が入り始める。

俺はエミヤシロウに、希望を渡す事が出来たんだろうか？

――――――それは徐々に広がっていく。

それはあのエミヤシロウ自身にしかわからない。

――――――そして、唯一人の主を無くしたこの世界は……。

だが、いつか救われると信じよう。

――――――砕け散った。

12th night 答えへの道標と異端者（後書き）

どうだったでしょうか？
一気に書いたので変な所があるかもしれませんので・・・・・・自信が無いですが・・・・・・。

１３ｔｈ　ｎｉｇｈｔ　最終決戦目前と朱然（前書き）

一気に書いたらラストまで書き切ったのでぶった切って投稿します。
次は０：００分を過ぎたら投稿したいと思います。

13th night 最終決戦目前と朱然

「やれやれだぜ、まったく……」

ランサーとライダーが距離を取ったままこちらに近づいてくる。

「ライダー、無事だったか？」

「ええ、令呪のお陰で防戦でしたが、生き残る事が出来ました」

微笑を浮かべ、ライダーが答える。

「あの野郎は逝ったのか？」

「ああ、道は示したつもりだけど、後は本人次第かな……？」

「そうかよ……」

ランサーは不満らしく、舌打ちをした。

まあ、犬猿の仲だったしなぁ。

「士郎達の所へ行くか」

「そうですね」

「二対一でも負ける気はさらさらねぇが、監視の目を維持する余裕も無くなってきた見てぇだし、行くなら勝手に行きな。

俺も一応、マスターに加勢しに行くけどな」

結局、敵対していた筈なのに教会の地下まで一緒に歩いて行った。

そこには……。

「か、はッ！！」

「今の魔術師は、武術も必修科目よ！」

胸を押さえて呻くキャスターと、中国拳法の突きの型で止まった遠坂の姿と……干将・莫邪を投影し、蛇の構えをとる葛木と対峙する士郎の姿だった。

アーチャーの無限の剣製（アンリミテッドブレイドワークス）と約束された勝利の剣（エクスカリバー）で今まで貯めに貯めた魔力が無くなったか？

「おいおい、嬢ちゃんのは殴り合いもできるのか？
いいねぇ、俺のマスターもあの嬢ちゃんだったら、やる気も出たんだがなぁ……ありゃ良い女になるぜ？
けどよ、それより気になるのが、坊主の使ってる剣だ。
アーチャーと違って、砕け散ってるが、また戻って来てるアレはアーチャーと同じもん、だよな？」

「そうだよ。　アーチャーに比べれば強度も、密度も、遠く及ばない粗悪な模造品だ」

俺はランサーの問いに肯定する。

「て事はあの野郎は坊主の……」

「そういう事だと思うよ？」

主語が無いのに俺は肯定する。

「全く、“あれ”が何で“ああ”なるんだ？」

「人生の荒波に揉まれて来たんだよ……特に厳しいのにね」

「そうかよ……本当にお前さんは何でも知ってるな、今回のサーヴァントの情報然り、キャスターの宝具然り、アーチャーの事然り……」

頭を押さえるランサー。

フッ、そういう風に言われたら――――――

「何でもは知らないよ、知ってる事だけ」

――――――と答えよう。

ハイ、某ネコで眼鏡な委員長ちゃんさんですね。

「ん？　ちょっと待てよ？　テメェ前にアーチャーの正体は知らねぇって言ったよな？」

「言ったね～」

「テメェ！　知ってて黙ってやがったな？！」

ランサーが掴みかかって俺の頭をシェイクする。

俺は口笛を吹きながらどこ吹く風だ。

ランサーは暖簾に腕押しだと気がついたのか、シェイクをやめて問いかける。

「さて、俺はこれからキャスターに手を貸しに行くが、お前らはどうするんだ？」

「まあ、役割的に俺がお前と戦って、キャスターとライダー、士郎と葛木、遠坂がセイバーを救出って感じかねぇ」

俺達は互いに向かおうとした時だった。

――――――剣が、槍が、矢が、不可思議な形状の物が雨のように振り注いだ。

宝具の雨が士郎、遠坂、キャスター、葛木に飛来した。

俺、ライダー、ランサーは即座にそれぞれが守る者の方へ跳躍、宝具の雨を迎撃する。

因みに士郎はライダー、遠坂は俺、葛木はキャスターとランサーが守った。

そこに現れたのは、先程の宝具の雨の間にいつの間にか確保したセイバーを、お姫様抱っこしているギルガメッシュだった。

「魔術師のサーヴァント風情が我の物を盗む、それだけで万死に値

する！」

「セイバー？！」

士郎が声を上げる。

その姿はアインツベルン城で見た時と変わらない。

「ギルガメッシュッ！！　イリヤは何所だ！？」

「「「ギルガメッシュですって（だと）？！」」」

遠坂、キャスター、ランサーが驚きの声をあげる。

だが、ギルガメッシュは意に介さず、俺に気付いた。

「ん？　お前は……これは都合が良い！　セイバーを手に入れるついでにお前の宝具と魔眼も抉り出してやろう！」

「まだそんな戯言を言っているのかッ！　何様だ、お前はッ！！」

「フンッ！　決まっているではないか……我は王だ。

すなわちこの世の物全ては我の物、なればこそ俺が献上せよと言えば疾く献上し、消えろと言えば疾く自害するのが常であろう？」

なんなのこのジャイアニズム思想……。

「そんな事はどうでもいいッ！　イリヤを返せッ！」

俺は怒鳴る。

「威勢が良いな雑種！　案ずるな聖杯は柳洞寺の地下洞窟にある。

今日ここに我が来たのはセイバーを迎える為だ」

柳洞寺の地下洞窟……大聖杯のあるあの場所か！

「が、先も言ったが、薄汚い魔術師風情がセイバーを手に入れよう等とは片腹痛い。　お前はマスター共々、疾く死ね、魔術師」

ギルガメッシュがパチンッと指を鳴らすと王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）が開き、宝具の軍勢が控え、射出された。

宝具の雨が、キャスターに降り注ぐ。

俺とライダーは士郎と遠坂を守っている為に動けない。

「チィッ！！」

ランサーが最前列で矢除けの加護の効果を存分に発揮し、宝具を弾いていくが、数が数だけに完全には防げず、身体を宝具が掠めていく。

「くッ！！」

キャスターはその後ろで葛木を守る為に障壁を作るが、宝具に勝る強度の障壁など維持し続けられる筈も無く、宝具は突破していく。

そして――――――

ランサーより先にキャスターの障壁が破れ、葛木に宝具が殺到した。
キャスターは新しく障壁を張り直す時間が無いと悟ったのか、身を挺して宝具に串刺しにされてしまった。

「宗一郎様……無事、ですか？」

ローブのフードが外れ、キャスターの素顔が露わになったのだが、その顔には血が滴っている。
いや、顔と言わず、全身に剣が刺さり、即死していてもおかしくはない量の血が流れていた。
キャスターは葛木の頬に血で染まった手を添え、言った。

「貴方が無事で……よかった……」

「ああ、助かった」

キャスターはその言葉を聞いた後、消えた。

そして――――――

キャスターと共に串刺しになっていた葛木も絶命した。
そこで宝具の雨が止まった。

「くッ！」

士郎はギルガメッシュを睨みつけ、拳を固く握る。

「クソがッ！」

ランサーはまたマスターを失い、殺気を込めた視線をギルガメッシュに向ける。

「ふむ、良い余興を思いついたぞ雑種。
それ程、セイバーと聖杯を取り戻したいのなら、聖杯が出来上がるまでの間、我はセイバーに何もしない事にするとしよう」

愉快そうに笑うギルガメッシュ。

「だが、不完全な聖杯が完成したならば、そこから溢れ出す泥を少しずつセイバーに浴びせるつもりだ」

「イリヤはどうなるッ！？　その為にはイリヤから心臓を取り出し、寄り代に埋め込む必要があるだろう！？」

俺が反応する。

「それならば準備はもうできている」

「何ッ？！」

「あの聖杯から核である心臓を抜いてしまえばお前の持っている宝具と魔眼が失われてしまう。

故に我が財の中にある、一方の物をもう一方に疑似的に与える物……今回は聖杯の心臓を疑似的に贄の心臓に与えた。

その者が与える物を持っていた時は与えられる方に上書きという形で与える。

疑似的と言っても概念から構造まで完全に同じで、機能はする。

聖杯だった方は目を覚まさず、寄り代の方は醜い肉の塊に成り下がったがな！　フハハハハッ！！」

そんな都合の良い物があるのか？！

いや、この世の全てを手に入れたとされるぐらいだ、そんな物があってもおかしくは無いか……どの道、こいつの狙いは不完全な聖杯だ。

泥が手に入れば、どうでもいいのだろう。

だが、やはりそれには寄り代が必要だ。

何所でそんな……まさかッ？！

ＵＢＷで聖杯を埋め込まれたのは間桐慎二だ。
今回もその可能性は無くはない！

「士郎！　間桐慎二はどうした？！」

「えッ？！　どうしｔ「いいから答えろ」ッ！　お前がライダーと消えてからフラフラと何所かに消えたんだ。
一応、この教会に行けば保護してくれる事を伝えておいたけど……」

恐らくそれを訊いた慎二は教会に行き、言峰に保護。
キャスターが現れ、言峰を殺害。
それに気がついたギルガメッシュが慎二を連れて何所かに監禁していた、といった経緯になったのか？

「ギルガメッシュ、その寄り代の名前は間桐慎二だなッ！？」

「「何だって（ですって）？！」」

二人が驚愕する。

「雑種の名など、我がいちいち覚える筈が無いであろう？　だが、大空洞に放り込んだ時にそのような名を呟いていたな……」

クソッ！
妙な仏心で生かしたのが、仇になった！
やる事が殆ど裏目に出てるじゃないか！

「では、我は待っているぞ？　精々足掻いて我を楽しませろよ、道化共。　貴様にはその宝具と魔眼を一時、預けておくぞ雑種？」

そう言ってギルガメッシュは去っていった。
残ったのは士郎、遠坂、俺、ライダー、ランサーの五人だ。

「野郎……必ず殺してやる」

「そいつは同感だぜ」

「私はマスターについていくだけです」

俺の言葉に同意するランサーと同行の意を示すライダー。

「で、そこの二人はどうする？」

俺は向き直り、二人に問いかける。

「俺は行くぞ！　俺は……セイバーを助けたい」

「私も同感、マスターとしてもこの地の管理者（セカンドオーナー）としても退くつもりはないわ」

やる気満々な二人。

「はっきり言って、足手纏い……何だけど、遠坂さーん」

「な、何よ」

いきなり猫撫で声で名前を呼ばれて、いぶかしんでくる遠坂。

「足手纏いなマスター来てもらいたくない……で、ものは相談なん

だけど」

――――――ランサーと再契約しない？

「「はぁッ？！」」

遠坂とランサーが同時に声を上げる。

「いーじゃん、ランサーもさっき遠坂がマスターならやる気出るって言ってたじゃん」

「そ、そりゃ言ったがよ……」

「まあ、ランサーが良いって言うんなら良いんじゃない？」

何故か躊躇するランラーとあっけらかんと言う遠坂。

バゼット、言峰、キャスターと来て遠坂とマスターを渡り歩く事に抵抗を受けているのかもしれぬ。

「まあ、嬢ちゃんが良いんなら俺もいいけどよ……」

結局、ランサーも了承する。

そして、二人は再契約し、俺達は言峰教会を後にした。

13th night 最終決戦目前と朱然（後書き）

ご都合なギルガメッシュのアイテムが次回登場しますが、まあ、この世全てを手に入れたとか豪語してるくらいだからそんなのもあるかも?と大目に見て頂ければ幸いです。
ストーリーの展開もツッコミ所がたくさんあるでしょうが、こちらも大目に見て頂ければ・・・・・大雑把な作者ですみません。
次は何所の世界に行かせようかと考察中です。
もし、こんな所が良いというのがあれば感想の一言欄にでも書き込んでみて頂けて且つ、作者の知っている作品だった場合は候補として考えるかもしれません。
唯、朱然さんが引っかき回して終わる感じになるでしょうけど、それでも良い方にかぎりますが・・・・・・。
では0：00分にまた会いましょう。
ではでは

Ｌａｓｔ　ｎｉｇｈｔ　異端者のサーヴァント・イレギュラー（前書き）

これにてＦａｔｅ編終了です。
かなり駆け足で来たのであっという間でしたね。

Ｌａｓｔ　ｎｉｇｈｔ　異端者のサーヴァント・イレギュラー

柳洞寺地下の地下大空洞。
遠坂の案内で柳洞寺への階段の途中から脇道に入り、巨大な岩に偽装された洞窟の入り口を開き洞窟内へ侵入した次第だ。
暗いのだが、何所かから光が入り、懐中電灯を使わずに進む事が出来た。
俺達はそのまま大聖杯のある場所まで進んだ。
そこにはすり鉢状の岩肌に刻まれた、製作途中で半径５０メートル以上、完成時では直径１キロメートルの多重層刻印があるらしい。
そして、その中心にはアインツベルンのユスティーツァ・リズライヒ・フォン・アインツベルンが納まっているとか。

「王を待たせるとは何事か雑種！」

高慢不遜に俺達を見下し、言い放つギルガメッシュ。

って、待つって言ったのお前だろ！！

心の中でツッコミを入れる。
その後ろで醜い肉塊が蠢き、その中心にはイリヤとセイバーがガラスの棺に寝かされていた。

「その棺から助け出せればイリヤを助けられるのか？」

「そうだ。　雑種共、我を少しは楽しませて見せろよ？」

ギルガメッシュは腕を組んだまま、宝具達を露わにする。

魔力の弾より、実体……しかも刃物の方が、心理的恐怖を引き立てやすい。

それが一本や二本ならば何とでもなるのだろうが、まともな人間には耐え難いものだろう。

現に士郎と遠坂が顔を引き攣らせている。

それはまあ、置いておいて此処に来る前に作戦を立てた。

それにはギルガメッシュの注意をこちらに引き付け、士郎と遠坂がその間にイリヤとセイバーを助けるという、作戦でもない作戦だ。

寧ろ、ギルガメッシュを倒す方が本当の作戦だ。

これはマスター陣に内緒にした。

だって、遠坂のうっかりスキルが怖いから……とは言えないのではぐらかした。

言ったら、あかいあくまが降臨して、ギルガメッシュと戦る前に半殺しにされそうだもん。

俺の対魔力はCだから遠坂の攻撃も頑張ればダメージがあるのだ。

ていうか、なまじ対魔力がある分、手加減しないんじゃなくて、手加減できないんだ。

何と恐ろしいのだろう……まあ、阿呆な事考えてないで、ギルガメッシュ注意をこちらに向けることが先決だ。

未だ余裕を見せ、背後に剣の軍勢を控えさせているギルガメッシュ。

対するは八種の武装を滞空させる俺、赤き魔槍を構えるランサー、無名・短剣を構えるライダー。

「さて、それじゃあ英雄王を軽く倒して、イリヤ達を助けますかね

ッ！」

俺はすぐに大樹を構え、槍を装填、気を込める。

「雷神槍ッ！」

巨大な雷を纏った木槍がギルガメッシュ目掛け閃る！

「ハッ！　派手な合図だなッ！　イレギュラーッ！」

「始まりの合図はその方が良いだろうッ？！」

「同感だぜッ！！」

「呆れた人達ですね……」

俺とランサー、ライダーが突っ込む。

だがギルガメッシュは腕を組んだまま宝具の弾幕を射出する。

それによって雷神槍はヤドリギの矢に砕かれ、俺達はそれを気にせず掻い潜り、ギルガメッシュへ迫る。

「ほう？　妙な手品を使う……だが、その程度で我を傷つける事など、出来んぞ！」

その顔に高慢な笑みを浮かべるギルガメッシュによって更に苛烈に射出される宝具。

だが、俺はかわしてゆく。

それは早さを武器に戦うランサーとライダーも同じだ。

「フンッ、動いて当たらぬのなら止めてしまえばいいだけの事！

天の鎖よ！」

「予想通りッ！　させないよっとッ！」

俺は鎖が現れた瞬間、無影を操った。

一人の時には剣軍が俺に集中し過ぎる為に使えなかったが、三人にそれぞれバラけた事によって使う時間が出来た。

天の鎖を無影で絡め、使えなくする。

「くッ！」

やっと宝具の雨を抜け、接近戦に持ち込む事が出来た。

数ある宝具を所有していたとしても、三人のサーヴァントを相手にするのは骨だぞッ！

「どうしたどうしたッ！」

「……」

「破ッ！」

ギルガメッシュは背後から次々と宝具を取り出しながらの攻撃で捌いていく。

「ぬぅぅッ！　この様な……この様な事がッ！　許さぬぞッ！　この非礼の数々、死して尚余りある！」

真上から巨大な剣達が落ち、壁の様にそそり立った。

ギルガメッシュはその隙に後退する。

そして、背後からついに現れた。

「来たなッ?!」

俺達もすぐさま距離を取る。

「宝具も、魔眼も貴様を殺し、ゆっくりと手に入れよう。　そこの犬と蛇もまとめて殺してやろう！」

ギルガメッシュがエアを構え、魔力を込め始める。

エアの回転と共に空間が歪む様な魔力の渦が圧縮され始める。

俺達もそれに対抗する為の準備を始める。

まず、最初に――――――

斬ッ!!と、ライダーが自らの首を無名・短剣によって斬る。

その際に飛び散った血が集まり、蜘蛛の様な禍々しい魔法陣がライダーの正面に展開され、魔法陣から目玉が現れる。

そこから現れたのはポセイドンとメデューサの間から生まれたとされる天馬。

神代から存在し続け、既に幻獣の域に達している。

こと護りに関しては竜種を上回っているという別格の強さを誇る。

その最高速度は５００ｋｍ／ｈに届く出鱈目さ。

それにランサーがライダーと一緒に乗り込む。

それと同時に俺は八卦八武装（せんてんはっけ）をまとめ上げる。

「俺はここに誓おう！　己が行いに後悔しないという事を――――――！！！」

「天地乖離す（エヌマ）――――――」

「騎英（ベルレ）の――――――」

「伏羲八卦次序（ふっきの）――――――」

英雄王のあらゆる死の国の原典という剣の概念を超えた剣。

騎英が持っていた手綱と鞭これにより、天馬のリミッターが外される。

異端者が作り、もっとも信頼を持ちうる八の武装を織り交ぜた“楯”。

「――――開闢（エリシュ）の星！！」

「――――手綱（フォーン）！！」

「――――太極楯（たいけん）！！」

三つの宝具が開放される――――――！！

巨大な魔力の本流が紅き竜巻となり、次元断層を生み出し向かう。

天馬が一条の光となり、流星の如く疾駆する。

剣と言いながら楯という矛盾。

だが、それはどんな形状をしても真名は変わらない、故に楯（けん）で合っているのだ。

太極の楯へと変わり、天馬の正面へと移動し、守りを発動させる。

俺の考えた作戦は簡単だ。
セイバーオルタの約束された勝利の剣（エクスカリバー）を打倒した作戦。
それを使い、打倒する。
唯、天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）の威力が約束された勝利の剣（エクスカリバー）を越えて、こちらを圧倒している。
その点が最大の問題点だ。

「フハハハハッ！　所詮、貴様等はその程度よッ！！　塵芥が集まった所で、それ以上にはならぬッ！！
まとめてあの世へ送ってやろう――――――ッ！！」

例え、完全な熾天覆う七つの天輪（ロー・アイアス）でも守りきれるかわからない。
こちらの守りは俺の伏義八卦次序太極楯（ふっきのたいけん）。
その堅固さは投擲武器以外にも、あらゆるものに対して発揮され、熾天覆う七つの天輪（ロー・アイアス）と同じく城塞にも匹敵するだろう。
しかし、その数は１つなのだ。
それでは天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）を相殺するどころか圧倒されてしまう。

だが、それを打倒する手段を俺は彼から貰った！

「守護す百頭（ナインライブス）！！」

狂化して尚、俺を庇った大英雄。

そう……ヘラクレスから問われたと思った時、俺はイリヤを守りたいと答えた。

これはその時にヘラクレスから継承した技で俺の中に流れ込んできたもの。

形のある宝具は持ち主が権利の移譲をしなければ真名解放が出来ない。

だが、これはヘラクレスのもっとも信頼する技が宝具まで昇華した変幻自在の宝具。

燕返しを不完全とはいえ再現できるこの魔眼があって、更にヘラクレスから正式に移譲された宝具。

これなら俺も完全に使いこなせる。

よって、それを俺は倒す為ではなく、守る為に行使した。

変幻自在の宝具に偽りはなく、守る為の九の守護へと形を変える

――――――

それが今、自らの手を離れて再現された――――――!!

ライダーの前にあった楯（けん）が瞬間的に９つに増える。

――――――唯の一瞬で７つ破壊された。

技であるが故に、常には効果は現さない。

――――――残りは２つ、その１つに罅が入り始める。

だが、耐えきる一瞬のみで良い。

――――――罅の入った1つが限界を迎え、砕け散る。

「何故……未だ倒せぬ……？！」

――――――最後の一つに罅が入る。

「ぐぅぅあァァァ――――――ッ！！」

――――――俺は持てる魔力を込たが、最後の１つも呆気なく砕け散った。

だが――――――

「まだだッ、令呪を以て命じる！　その一撃を突破しろッ！　ライダァァァァッ！！」

左腕に刻まれた令呪が白熱し、超圧縮された魔力が解放される――――――ッ！！

「ええッ！！　必ず突破して見せます！」

令呪でライダーへと爆発的に供給される魔力が天馬を更に強化させ、天地乖離す開闢の星（エヌマ・エリシュ）を突破した――――――

が、そこで宝具の効力が消えてしまう。

最後の仕上げだッ！！

「頼むッ！！　ランサァァァ――――――ッ！！」

最後の詰め。

真名と共に心臓を貫けば必ず心臓を穿ち、完全に破壊され、再生は不可能となるその槍に最後を託す。

――――――俺の声と同時に、天馬から蒼き槍兵が技後硬直して動けない英雄王に迫る。

「任せときなッ！　その心臓、貰い受けるッ！！」

――――――紅き魔槍が魔力を喰らい、禍々しい気配を放ち始める。

「雑種、如きにィィィ――――――ッ！！」

――――――紅き魔槍の穂先は空中にて、在らぬ方向を向いている。

「刺（ゲイ）し穿つ――――――」

それを気にせず、ランサーは魔槍を突き穿つ――――――！！

＞ｉ３００２４―２４７７＜

「――――――死棘（ボルク）の槍！！」

――――――魔槍の突きは軌道が九十度を超える角度で曲がり、英雄王の心臓に穿たれた。

「ガァァァッ？！」

英雄王の心臓は完全に破壊された。

「この様な所で……我が死ぬ、とは……」

「慢心しているからお前は負けたんだよ、英雄王」

「慢心せずして……何が、王か……」

やられる間際にもそんな事をのたまう慢心王。

「朱然……クー・フーリン……メドゥーサ……。　貴様等の名前、覚えておこう……我が覚えてやるのだ……光栄に、思えよ……」

そんな事を言ってギルガメッシュは消えた。

聖杯の合った所からイリヤとセイバー、そして、真っ裸の慎二を担いでこちらに近づいて来る士郎と遠坂が近づいてきた。

「さて、野郎も倒して助ける奴も助けた事だしよ。　約束通り、戦り合おうぜ朱然？」

「ああ、そんな約束してたなぁ……でも俺の宝具は砕けたから戦えないんだけど……」

「そんなもんなくても拳があんだろ？」

拳を握るランサー。

「わかったよ」

俺もファイティングポーズを取り、殴り合いを始めた。
そこには技も何も無い、純粋な殴り合いだった。
ライダーは士郎と遠坂に事情を説明し、観戦モードになり。
俺とランサーの殴り合いはダブルノックアウトという結末になった。

「あー痛ぇ……最初はシケた戦いだと思ったがよ……悪くなかったぜ」

「俺はやる事が裏目に出過ぎて焦りっぱなしだったよ……ッ！！口が切れてる……」

俺達はどちらともなく大笑いをした。

「馬鹿な殴り合いは終わったみたいね？」

「本当に、目を覚ましたらこんな状況だもの」

「はは……」

遠坂と目を覚ましたイリヤの冷たい言葉と苦笑いする士郎。

「今回は殆ど何も出来ませんでした……」

セイバーが項垂れる。

いいや、セイバーには最後の大仕事が待っている。

「セイバー、聖杯を破壊してくれないか？」

「?!　何を言うのです?!」

即座に拒否するセイバー。

「イリヤ、全てを話してもいいか?」

「見た所、もう朱然じゃ聖杯は壊せない位に疲弊しているみたいだし、この聖杯戦争自体が無意味だった様だから、あの事以外は言っていいわ」

「了解した」

俺は仰向けに倒れながら、この聖杯の真実を告げた。

この世界がゲームだった事も、衛宮切嗣が何故、前回セイバーに壊させたのかも丁寧にね。

でも、イリヤの言った士郎とイリヤの関係は話さない。

「そう、だったのですか……やっと、貴方が前に言っていた意味がわかりました……。

聖杯は穢れ、破壊しか生みださないのですね……。

切嗣もそれを知って、私に聖杯を壊させた……なら、貴方に代わり、聖杯の破壊の任、代役として勤めて見せましょう」

セイバーが醜い不完全な聖杯に向き直る。

そして――――――

セイバーの聖剣によって、大聖杯もろとも破壊された。

これで……俺の役割は終わった。

俺はまた、根源へ帰るだろう。

もう身体が透け始めてきた。

まず、ランサーと話す。

「朱然、今回はお前のおかげでこの戦い、悪くなかったぜ」

「そうか……そりゃ、よかった。　そうそう最後に取っておきの情報を教えてやるよ」

「あん？」

「バゼットは仮死状態で生きてるよ。　エーデルフェルトの双子館のどっちかに居る筈だから」

「マジか？」

「マジです」

「ハァ……この聖杯戦争、一番喰えねぇのはテメェだったみてぇだな？　だが心残りは無くなった。　礼を言うぜ朱然」

次にライダー。

「朱然、貴方のお陰で彼女を救う事が出来ました。　ありがとうございます」

「ついでだよ」

「そうですか……」

「ああ」

「お元気で」

「先に消えるが、お前はそのまま消えるのか、それとも誰かと再契約するのかは訊かない。　どっちにしても達者でな」

「はい」

次にセイバー。

「聖杯の真実と私の理想について諭して頂いた事には感謝します」

「やっと、解放されるんだろ？」

「貴方はそんなことまで知っているのですね」

「さっきも言ったけど、物語として知っているからな」

「貴方は二度、死という物を体験したのでしたね？」

「ああ」

「死後の世界はどのような所なのでしょうか？」

「うーん、一概には言えないなぁ……ま、俺の場合は不可思議で流れに身を任せて漂ってるだけだったけど」

「そうですか……少し、不安になってきました……」

次は遠坂凛。

「アンタ、根源に至ったんでしょ？」

「うん」

「どんな場所なのかしら？　ヒントくらいもらえない？」

「本当に訊きたいのか？」

「訊いてみたいけど……やっぱり自分で行って確かめるわ」

「うんうん、遠坂凛はこうでないと」

「何よそれ？」

「さてね？　そうそう、俺の知っている遠坂凛は宝石剣を作る事が出来たから、頑張れば作れんじゃない？」

「簡単に言ってくれるわね……」

次は衛宮士郎。

「言う事無し！」

「何だよそれッ！」

「お前は馬鹿だ、いずれアーチャーにみたいになるかもしれない、だから大事な者を守りたければ性格を直せ。
それに大切な者を守るのも正義の味方として当然の義務だろ？」

「そりゃ、そうだけど……」

「ま、要は自分を鍛え続けろと言いたい。　それまで遠坂とかにポンコツとかへっぽこことか言われ続けるがいい。
フハハハハ――――――ッ！」

「お前、俺の事嫌いだろ！」

最後にイリヤ。

「マスターとして、何も出来なかったけど、此処まで頑張ってくれてありがとう、朱然」

「いいや、どうせ俺の我がままと自分勝手の結果だし」

「そう……」

「そういえば衛宮士郎にバーサーカーも俺も倒されなかったし、故郷も無いけどどうするんだ？
　士郎の家にでも泊まるのか？」

「そうね……しばらくは凛の家に下宿させてもらうわ。　その後は旅に出ようかしら？」

「そうか……まあ、色々と物騒だけど気を付けてくれ」

「朱然もね」

「そうだ、俺の真名を最後に贈るよ」

「真名って朱然じゃなかったの？」

「それはこの世界の真名、俺の居た並列世界にはその他に、気を許した相手にしか贈らない真名があるんだ」

「へぇ～」

――――――俺の真名は水仙って言うんだ。

――――――スイセン……うん、私、ずっと忘れない！

――――――じゃ、元気でな……イリヤ。

――――うん、バイバイ、私の――――

――――こうして俺は消えた。

――――それはもしかしたら在りあたかもしれない物語。

――――短くも長い聖杯戦争の一つの結末。

――――英雄達の戦いの再現を……。

Ｌａｓｔ　ｎｉｇｈｔ　異端者のサーヴァント・イレギュラー（後書き）

という訳で、また根源へ行って別の世界へ旅立ちます。
Ｆａｔｅは書くのが難しかった――――。
次は、意見とかが無ければリリなの無印＆Ａ's編かテイルズのヴェスペリアかなぁ～と・・・・・？
では、期待せずに待っていてください。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ３　Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ　特別顧問（前書き）

取り敢えず、基本どの世界に行っても名前は朱然義封で本当に親しい人に水仙という名を教えるみたいな感じにしたいと思います。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ３　Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ　特別顧問

「はッ？！」

俺は目を覚ました。

視界に入ってきたのは月明かりの綺麗な夜の空だった。

「ここは……何所だ？」

周りを警戒する。

そこは巨大な建物が並んでいた。

そう、これはまるで学校という規模を通り越して、学園クラスの――――――

俺の思考と闇夜を切り裂く破裂音が鳴り響いた。

銃声だと？！

俺の警戒レベルがイエローからレッドに跳ね上がった。

俺が今いる場所は屋上なので、グラウンドを屋上から見る。

そこにあったのは学園に似ても似つかない銃撃戦という光景だった。

白銀の髪の娘を多数の男女が銃撃する。

おいおい、どこのバトル◯ワイアルだよ……。

だが白銀の髪の少女にあたる寸前に見えない壁……というかディスト―◯ョンフィールドの様な力場で銃弾が逸れていった。

この光景を俺は見た事がある。
根源に行く前に今度はこの世界に捕まったようだ。

「今度の世界は……Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓの世界か……」

俺は新たな戦場へ向かうべく、屋上から跳躍する。

さて……途中までしか知らないが、なるようになってみますかねッ！！

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ３　Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ　特別顧問（後書き）

Ｆａｔｅ編で殆どギャグがなかったのでシリアスもありギャグもある、Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓに決定しましたー。
刃の下に心在り様、ご意見ありがとうございます！

Episode1 Encounter and Special Advis

戦線メンバーがどんな感じで増えてったとかやって無かった筈なので、適当にでっち上げました。

Episode1 Encounter and Special Advi

俺はまず、死んだ世界戦線のリーダーであるゆりを探した。

まあ、すぐ居たけども。

「貴方、見ない顔ね？　こっちに話しかけてくるって事は此処に来たばかり？」

ゆりがベレッタ　M92FS　Inoxを撃ちながら訊く。

「そうだよ、死んだと思ったら此処に居た。　で、何でいきなり銃撃戦？」

「アレは天使、私達の敵だからよ！」

当然の質問に対して、彼女は当然の様に返した。

「アレが敵ねぇ……人間の女の子にしか見えないんだけど？」

天使が未だ本当に天使なのか、それとも今後味方になるのかは知らないし……。

「ハァッ？！　銃の弾が勝手に弾かれる人間が何所に居るって言うの？！　アンタ馬鹿なの？！　頭おかしいの？！　一回死んだら？！　これはこの死ねない世界のジョークよ……笑えるかしら？」

つまんない。

「つまんない」

おっと、思考と言葉が直結してしまった。

「そう……で、今更だけど、私たちの仲間にならない？」

本当に今更です。

「いーよ」

「そっか……やっぱり断るわよね、って良いのかよッ！」

ゆりから鋭いツッコミが入った。

「断った方がよかった？」

まあ、此処で仲間になった方が色々やりやすそうだし。

「いいえ、新人勧誘がこんなにスムーズにいったのは初めてだから、つい……」

呑気に話していると、名もなきモブ生徒がこちらに走ってきた。

「ゆりっぺ！　此処はもう持たない！　後退しよう！」

「何言っているのよッ！　ここで踏み留まらないと……」

「留まらないと？」

何かあるのか？

「折角、ギルドから送られてきた物資が壊されるわッ！　でも仕方が無い、か……物資は破か――――――」

「ちょっと待った」

ゆりの言葉を遮ると、罵声が飛んで来た。

「――――――何よ、今忙しいから後にして！」

ギルドって何じゃろ？と疑問が頭を過ったので記憶の検索で思い出し、ゆりの言葉を遮る。

「天使を足止めする。　その間に物資を運び込んでくれ」

「何言ってるのよ！　アンタ程度で足止めできれば苦労しないわよ！」

俺は歩き出す。

「ちょっと待ちなさい！」

ゆりが制止させようとするが、俺は進む。

俺は右腕を水平に上げる。

砕けちまったけど、そんなヤワじゃないよな？

来てくれ俺の武器、八卦八武装（せんてんはっけ）！

その右手には大牙が握られていた。

「なッ？！　天使と同じ力ッ？！」

ゆりが突然現れた俺の大剣に驚く。

俺は魔眼を発動し、気で身体と大牙を強化、突撃する！

「りゃあァァァ――――――ッ！！」

裂帛の気合と共に大上段からの唐竹割り。

それを天使はハンドソニックを両腕に展開、頭上でクロスさせ受け止めた。

だが地面が陥没し、天使を中心に二メートル程がクレーターになった。

「貴方、何者？」

俺の馬鹿力を受け止めているにも関わらず、表情を変えない天使。

「俺の名前は朱然だ」

「そう……Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｄｅｌａｙ」

そう言った瞬間、天使の姿が光と共にブレ、俺の左側面へ移動した。

俺は天使がいなくなった場所を大牙で更に陥没させながら勢いを殺さず前転。

俺の居た場所にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを突き立てた天使の姿があった。

そこへ再度、横に一回転して大牙を叩き込む。

それもまたブレてかわされた。

人の範疇の動きに慣れ過ぎてイマイチ流れが読みずらいな……なら！

「ハァァァッ！！」

俺は大牙をまた上段から振り下す。

それを天使はブレて右にかわし、Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで俺の胸を刺す――――直前で止まった。

その理由は俺がギルガメッシュの近接戦を参考にして、さっき思いついた何もない空間から大渦を取り出し、右腕の下から大渦を持った左腕を強引にクロスする形で天使の胸を刺したからだ。

「こふっ」

天使が血を吐き倒れた。

「アナタッ！　物資搬入は終わったわ！　撤収するからついてきなさ……まさか……？

天使を一人で倒したっていうの？」

呆然とするゆりを俺は現実に引き戻し、俺はゆりの指示に従い、天使を置き去りにして、校長室へ向かったのだった。

で、一段落した校長室。

「で、貴方何者？」

また訊かれた。

ＳＳＳの音無の他にまだ居ないらしい野田、大山、藤巻以外のメンバーに見つめられる。

「姓は朱、名は然、字は義封だ」

「三国志に出てくる武将の朱然？　ふざけてるの？」

ゆりに睨まれた。

「本当の話だ」

「それなら彼女には三国志好きの両親がいる事になりますね」

クイッと眼鏡をあげて言う高松。

「いやいや親がいくら三国志好きでも、そんなマイナーな武将の名前つけねぇよ。

てか、普通武将の名前を子供につけるか？」

日向がツッコミを入れる。

「中国だと割と有名な武将だぞ？　それ以前にどう見てもヨーロッパとかそっち系の人種だと思うが？」

松下五段が言う。

「浅はか也……」

椎名が何に対してなのか一言、発する。

「で、あの大きな剣は何な――――――」

「邪魔するよ」

ゆりからの質問が岩沢の登場で遮られる。

「――――――何かしら？　今、大事な話中なんだけど？」

岩沢が二人の標準制服を着た男を連れてきた。

というか藤巻と野田だった。

「新人を連れてきた」

「そう……歓迎するわ。　ようこそ、死んだ世界戦線へ」

「てかよぉ、死後の世界とかマジなのかよ？　さっきまで銃とか撃ってたしよぉ……」

「貴様がリーダーか！？　女がリーダーだったなど訊いていないぞッ！？」

藤巻は未だ半信半疑で野田は阿呆というか何というか……。

「あー！　もう！　ちっとも話が訊けないじゃない！　ちょっと、アンタ達黙ってて！」

「何だと?!」

野田がゆりに掴みかかろうとした瞬間、野田はゆりによって投げられていた。

「ガッ?!」

野田は気を失った。

見事な一本背負いだった。

スカートなのに中が見えなかったのは絶対領域のおかげだろう。

藤巻は呆然、その他メンバーは慣れているらしくスルー。

「静かになった所でアナタのその独力で天使を打倒するその戦闘力。

天使と同じく武器を呼ぶ力の説明をしなさい。

これはこの戦線に入る上で必要な事。　つまりは強制よ」

「嫌だと言ったら?」

その瞬間、ゆりはニィッと口の両端を釣り上げ、満面の笑みで―

――――

「言うのと言わされるの、どっちがお好みかしら?」

と問われた。

天使を打倒する俺の力を目の当たりにして尚、彼女は俺に選択を掲示した。

お前に天使を打倒する力があっても、こちらにはお前をどうにかする方法くらいはあるんだぞ、と。

「……わかった」

「馬鹿じゃないみたいね？」

その言葉に俺以外の戦線メンバーは首をかしげる。

今のやりとりを聞いた戦線メンバーは、ゆりの性格上そういう事を言うのが当たり前だと思っているのだろうが、それは違う。

いや、性格的にも確かに言うが、ゆりは想像以上にかなり頭がキレる。

そして、俺の返答で俺の頭もキレる事をゆりも理解した。

だからこそ、俺は朱然義封として生きた第二の生涯を自ら語る事を選択した。

まあ、ぼかすとこはぼかしたけどね・・・・・武将がほぼ全員女だったとか。

後、Ｆａｔｅの世界の事も伏せた。

「つまり、一回死んだら三国志の世界の朱然に憑依して、また死んだら此処に居たって訳？

で、その世界では漫画とかでよく見る気とか、伝説の武器みたいな物があったと……って、んな事ッ、信じられるかぁぁぁ――――――ッ！！

はぁ、はぁ、はぁ……でも、実際に見たし、信じるほかはない、か……」

何か一人で騒いで一人で納得してる。

一応、納得してもらった所で、俺は野田の看病を申しつけられた。

そして、あだ名を付けられた。

その名も……特別顧問。

基本、顧問と呼ぶらしい。
何でも、別世界とはいえ、戦場を生き抜いてきた事と天使を倒す力を持っているからだとか何とか。

「じゃ、これが戦線メンバーが基本着る制服ね」

ぽん、と俺の両腕に制服が置かれた。

“女用”の制服が……。

何故かと言うと、俺の今の格好が女用の基本制服なんですよ。
ええ、スカートですよ、スパッツ穿いてますよ。
この世界の茶目っ気か知らねぇけど、初めから女の制服を着てたんだよ。
何でその表象がされなかったかって？
絶対に突っ込むだろ？
もしくは、ああ、また女装してんのかw、とか思われるから考えないようにしてたんだよ。
さっきから日向とか、藤巻とか、すげぇガン見してくるんだ。
ライダーの容姿だからそりゃ美人だろうさ。
髪も切ると落ち着かないって理由で、面倒だから結局切ってないし。
まあ、ずっと思考している訳にもいかないし、暴露しますかね……。

「ごめん、俺、男なんだ」

「「「「「……ハァァッ？！」」」」」

戦線メンバー大絶叫。

「マジかよ?!　やっと俺にも春が来たとか思ったのに何で男なんだよ?!　てか、何で女の標準制服着てんだよ!
紛らわし過ぎだろ!?」

俺は悪くないぞ日向。
勘違いしたお前が悪いんだ。
後、この制服を着せたこの世界。

「あまりの予想外さに、この私が眼鏡を落として踏み砕いてしまうなど……まあ、スペアをすぐに装着しましたが……むぅ、これ以上濃い人物が来ると私の個性が消えてしまう……」

スペア眼鏡をクイッと上げて言う高松。

お前は眼鏡を一々クイッと上げんと喋れんのか?
お前の持ってる眼鏡を全部叩き割ったら喋らなくなるのか?
機会があったら試してみよう……。

「う〜む、ヒトデを茹でると中にある卵が食えるくらいの驚きだ」

五段よ、何故アンタがそこまで浜辺の生物に掻き立てられるのかを俺は聞きたい。

「クソッ!　この戦線に同じタイミングだっつって仲良くなろうと思った矢先にこれかよ……トキメキ損じゃねぇか……」

藤巻よ、お前はそんな事を考えてたのか?
冗談はそのヤクザの下っ端みたいな喋り方だけにしてくれ。

「浅はか也……」

椎名さん、それは何に対して言ってるんですか？
てか、さっきからガクガクして動揺し過ぎでは？

「むッ？　俺が気を失っている間に何か衝撃的な事が起ったような気がするぞ？　一体、何があったのぐぺッ？！」

お前が起きると収集つかんから寝てろ。
俺は余計な混乱を避ける為、野田の意識を再度刈り取った。

「声も高い……ハスキーボイスの女だと思えばわからないし、良い声してる。　これならバンドのメンバーにしてもいいかも……」

岩沢さん、貴女はバンドの事しか考えてないんですね。
まあ、下心有りまくりの男連中よりマシだから別にいいけど。

「クッ、この私が騙されるなんてッ！？　これも顧問の特殊能力だというの？！」

ゆりさん、何悔しがってんですか？
俺にはそんな特殊能力は無ぇ！
てか、既に幼少の頃から朱治義母さんとかその他諸々に女装されまくって、隠し保有スキルに女装Cとか有りそうなんでマジやめて！

「クソッ！　こうなったら本当に男なのか一緒に着替える所を実際に見て確かめてやる！」

日向が俺を引っ張り、別の教室にて着替えを強要された。
別にどうでもよかったのでその場で生着替えをしてやった。

どうせならと無駄にエロい脱ぎ方をして日向を赤面させた後、男の証拠を見せた。
何を見せたのかは御想像にお任せする。
日向はそれを見た瞬間、うわぁ――――――ん！！とすごい勢いで逃げて行った。
ちなみに男用のＳＳＳの制服は二着しか在庫が無いとかで藤巻、野田に支給され、俺は女用の戦線制服を一時的に着る事になった。
そうしたら、ゆりが、似合ってるし、女装キャラはそうそう現れないだろうから、と俺の服を女用の制服に限定された。
その後、男用の制服を調達しようとすると戦線メンバーが邪魔してくる様になった。
主にゆりからの指示とトラウマを植え付けた日向の画策らしい。

理不尽だ！

そんな感じでこの世界に始めてやってきた俺の一日は騒がしく過ぎていくのだった。

Episode1 Encounter and Special Advis

という訳で、朱然さんは死んだ世界戦線の特別顧問という役職ではなく。
あだ名を付けられました。
とにかく、音無に突っ込まれる様なボケとか、朱然さんの■■■■の時の重い話でも入れてみる予定です。
後付けですけどね。
現時点では、天使の方が弱いですが、天使も朱然さんが現れた事でガードスキルが凶悪になっていくかも。
てか、宝具使ったらマジで殺れちゃいそうなので真名解放とかはしません。
それと朱然さんは天使と音無が敵対している所位までしか見ていないという設定ですが、結構アバウトです。
ではではー。

Episode2 Nursing and Teacher and Spe

原作も残す所最終話のみですね。
作者、黒幕はクライストだと思ってたんですけど、全く関係ないキャラが出てきて肩透かしを喰らいました。

Episode2 Nursing and Teacher and Sp

俺は今、保健室にいる。
野田の看病中だ。
まあ、俺が意識を刈り取ったんだけどさ……。

そんな事を思っていた所で、ムクリと野田が身体を起こし、こちらを見て一言。

「ここは何処だァァァ――――――ッ？！」

俺はあまりの声量に両手で耳を抑えた。

コイツ……さては昨日の事を忘れてるのか？

「うっさいから黙れ」

俺が野田の喋れなくなるツボを押した。
華佗にツボを教わっておいてよかった。

「……ッ、……ッ？！」

「お前はさっき、戦線のボスであるゆりの一本背負いをきめられて意識を失っていた」

野田が、俺に向かって殴りかかってきたので受け止める。

「……！！」

「で、ゆりからお前の看病を言いつけられた朱然特別顧問だ。　顧問とでも呼んでくれ」

俺は野田の拳を握っていく。
野田の顔が苦悶に変わる。

「一々騒ぐな。　わかったなら頷け」

俺の言葉に不満げではあるが頷く。
それを確認して俺はツボを押し、喋れるようにした。

「貴様、あの女は何処だ?!」

「ゆりか?　ゆりなら校長室だろ。　決闘でもするつもりか?　今のお前程度じゃ、技量的にゆりには勝てないぞ?
ま、やるって言うなら止めはしないけど」

野田はベットから起き上がり、校長室の方へ向かった。

「あら、目が覚めた様ね」

「貴様が好きだァァァ――――――ッ!!」

野田がいきなり、ゆりに告白した。

「うるっさいわねッ!　顧問、いきなり何を言ってるのコレは?」

「さあ?」

俺にはまったく理解できない展開だ。

出会い頭に一本背負いされて告白とか、何がどうなってそういう結論に至ったのかを知りたい。
いや、俺には理解できないか……だって、野田は阿呆だから！

「で、どうするんだゆり？」

「弱い男は嫌い――――――」

「ぐおッ？！」

「うるさい男も嫌い――――――」

「ぬおッ？！」

「馬鹿な男も嫌い――――――」

「ぐふッ？！」

「よって私はアンタと付き合う気はさらさら無いわ」

「がはぁッ！！？」

「――――――これでいいかしら？」

野田に満面の笑みを浮かべたゆりの言葉が突き刺さっていく。
最後の突き合う気はない宣言で野田は崩れ落ちた。

容赦ないね……。
合掌。

そういえば蓮華とゆりって中の人が同じなんだよな～。
声が同じでも、性格が違いすぎて結びつかなかった。
いかん、メタ発言はいかんな、うん。

脳内で納得した。

「用件はそれだけ？　なら私は忙しいから出て行ってくれるかしら？」

「失礼しましたー」

俺は野田を引き摺って校長室を後にした。
で、屋上へ行く。
途中で買った二つの内の一つのｋｅｙコーヒーを開けて飲む。
そして、もう一本を野田に投げる。

「何だこれは？」

「失恋オメデトウのお祝いだ」

「貴様！」

野田が喰って掛ろうとした所で、黙りこむ。

「……」

さっき、ゆりに言われた事を気にしてるみたいだな。

「鍛えてやろうか？」

「何？」

驚きを露わにする野田。

「俺がお前を鍛えてやろうって言ったんだよ。　少なくとも今よりは強くはなれる」

「そうか……貴様は強いのか？」

「来たばっかりだけど、戦線メンバーよりは強いつもりだ」

何せ、俺一人で戦闘機一機分の戦力だ。

「お前を倒せれば俺は強いと言ってもいいのか？」

「さあ？」

そんな事聞かれても、自分自身が納得しない限り、俺には答えようがない。

「俺を鍛えてくれ」

野田は俺と向かい合い――――――

「わかった」

俺は野田と向かい合う――――

こうして野田は俺の弟子になった。

ま、朱然隊の時みたいに鍛えますかね。

阿呆だが、目的に突き進む阿呆は嫌いじゃないしね。

「武器は何を使うんだ？」

まあ、ハルバートなんだろうけど。

「武器……何でもいい」

「無ければ無いで良いし、あるならさっさと決めてくれ」

「わかった、貴様……いや、先生？　教官？　うーむ、しっくり来るものが無い」

「顧問でいいだろ」

「武芸を習うのだ、顧問だとしっくりこないだろう」

なら先ず、口調を直せ口調を。

「じゃ、師匠とか？」

「おお！　それはしっくり来るぞ！」

野田は飲み終わったｋｅｙコーヒーを置いて屋上を降りて行った。

それから三日後、野田はギルドの迷宮エリアの宝箱からハルバートを拾ってきたので、身体の基本的な使い方を叩き込み始めた。
何か運動をしていたのか、筋が良いのですぐに基礎を身につけていった。
その翌日、古参のメンバーの筈なのに居なかった大山が現れた。
何の特徴も無いと皆に言われ、涙目になった。
慰めたら懐かれた。
抱きつかれたので男だと暴露したら「へ、変態なの?!」と言われたのでサバ折りした。

俺は校内を散策する。
音楽室に辿りついた。
そこにはガルデモが練習をしていた。
さて、散策に戻ろうかと思った所で――――

「ん?　おお、顧問じゃないか」

岩沢に見つかった。

「興味ある?」

「ない」

俺ははっきり答える。

「顧問はギター弾ける?」

その問いに詰まった。
魔眼を使えば弾けてしまうからだ。
それを見逃すことなく岩沢はたたみかける様に手を引き、ギターを持たせた。

「ちょっと、待って――――――」

「ほら、何でも良いから」

周りを見れば、期待の目で俺を見ている。

「――――――はぁ……」

俺は溜息を洩らす。
他のメンバーも興味深々で弾かないと放してくれなさそうだ。
俺は緊張しながらもギターを構える。

そして――――――

ガルデモがさっきまで弾いていたものと寸分違わない演奏をした。
寸分違わないのは当たり前。
さっきまで弾いていた岩沢の流れをそのまま辿っただけなんだから。
俺は唯、流れ通りに、機械的に弾いていく。
弾き終わった。
俺はギターを岩沢に返した。
演奏を聞いたメンバーは呆然としている。

「ま、こんなもんか」

俺はつまらなさそうに言う。

他人の動きをそのままなぞってもつまらない。
他人のゲームデータでゲームをやる様な物だからだ。
他人の動きを取り込むのはいい。
それを自分で使うのならば、やはり自分の流れになるまで改良し、発展させなければ意味が無いのだ。
今まで使ってきた他の技も、流れを見ても完全に使えなかった技は自分用に改良して殆ど自分の物に出来るまで反復練習をしてきたしな。
それも魔眼で大分簡単にいったけどさ。

「こんなもんって、凄いじゃないか！」

それを知らず、ガルデモのメンバーは素直に称賛を贈る。
その称賛を聞いた途端に思考が冷めていくのを感じる。

「所詮、コピーはコピーに過ぎないよ。　それじゃ、機械と変わらない」

俺の様子に気がついたのか岩沢が俺に対し訊く。

「でも私の演奏をコピー出来るなんて、自分で言うのもなんだけど、簡単に出来る訳ない。
もっと、誇っていいんじゃないか？」

「……」

俺は音楽室のドアまであるき、背中越しに言う。

「最初はそれでもいいと思った。　でも、それで称賛を受けると、お前は機械だねって言われてるみたいでね……」

俺は苦笑しながら出ていった。

あーあ、■■■■の時の事を思い出しちまった。

ホント、くだらない。

この死後の世界に来て、楽器に触れた事で感傷的になったみたいだ。

俺はまた校内をブラブラ散策したのだった。

Episode2 Nursing and Teacher and Sp

野田を弟子にしました。
理由は何となくです。
ガルデモに朱然さんは入るかどうかはまだ決めてません。
岩沢さんが消えた後にガルデモに入れるとしても、ゆいボーカル、ギター朱然さんになるかも?
でも対天使の戦力的にゆりが止めそうな気がする・・・・・・。
まあ、決まっていない事を書いてもどうにもならないのでこの話は此処で終わりにします。
で、今後は戦線メンバーとの絡みやら何やらを書いてから、本編を開始する予定。
原作通りに事を進めるか、それとも朱然さん用のイレギュラーを入れるのか・・・・・・。
大いに悩みます。
ではでは。

野田のハルバートがギルドが出来る前の地下で手に入れたとウィキペディアに記載されていたので修正。
同じく、大山が古参メンバーとの記載があったので、アニメ本編とはちょっと差異のあるという設定に変更しました。

Episode3 Rematch and Tornado and Spe

天使との再戦と初トルネードの話です。

Episode3 Rematch and Tornado and Spe

河原

俺が此処に来てから五日目。
野田と行動を共にする事が最近多い。
てか、男である事を暴露した時、コイツの意識を刈り取ったから
未だに俺の事を女だと思っている気がする。

「野田よ」

「ふんッ！　ハァッ！　へェェィッ！！」

河原で上半身裸のハルバートを持つ野田が、キメポーズというか
何かあんまり意味の無い事をやっていた。

「聞いてるか？」

「ん？　師匠ではないか！」

「何をやっているんだ？」

「鍛練だが？」

「……」

頭が痛くなった。

「まあ、いいや。　お前は頭を使わない分、体で覚えた方が良い。

しかもこの世界は死んでも生き返る。
よって、基礎トレではなく、実戦的にすることにする」

「師匠よ」

「何だ？」

「話が難しくてさっぱりだ！　簡単に言ってくれ！」

「……」

俺の教えた弟子の内でも最も武術の飲み込みが早い分、もっとも阿呆な弟子だコイツは……。

「つまり、本気で俺と戦っていればお前は強くなる」

「おお！　それだけでいいのか！　ではッ！」

野田が構えを取る。

こういう阿呆なタイプはグダグダ型の練習等をさせるより、さっきも言ったが体で覚えさせた方が伸びが良い。
昔の武術家は基礎トレの要らない位に実戦的稽古をしていたので質は良いのだが、怪我をする人も多かった為、量的には少なかったと本に書いてあった。
だが、此処は死んでも生き返る。
多少の無茶をしても治るしね。
それに死んだ時の痛みは感じるが、それも痛みに耐える、痛みに慣れる訓練だと思えばいい。
実戦で精神が弱い者がいきなり殺されたら、発狂しかねないし。

今回は練習なので、気の強化はしない。

「ハァァァッ！！」

野田の突き。
俺は禍津を取り出し、左の鞭で弾く。
残った右の鞭で野田を叩く。
野田は気付いて咄嗟に右に飛び込みの様に避けた。
俺は当然、追撃。
双鞭を叩きつけた。
野田は咄嗟に起き上がり、また避ける。

「くッ！」

野田が不格好な態勢でハルバートを振り上げる。
俺は最小の動きでかわし、右の鞭を野田の喉へ突き入れた。

「ごぁッ？！」

野田の喉から絞り出すような声が聞こえた。
鞭を持つ手に嫌な手触りが伝わった。

野田の喉が潰れたのだ。
双鞭の性質上、殺す事が出来る部位は限られている。
だから、喉を潰す。
野田は崩れ落ちた。
この世界では寸止めをして、「お前は今、一度死んだ」とかをやらない。
本当の死を以て、思い知らせる。

厳しいようだが、短期間で鍛えるならその位しなくてはならない。
ノーリスクでハイリターンなんて美味い話なんてある訳がないからだ。
十分後、野田は目を覚まし、また構えを取る。
また、俺が喉を潰し、殺す。
また生き返る。
殺す。
それを繰り返した。
普通なら、一度殺されれば恐怖するものだが、野田は何度も殺されては向かってくる。
強くなりたいと思う気持ちは本物だからだろう。
だから俺は手を抜かない。
気で強化しなくても、魔眼を使わなくても、俺は本気で対峙する。
それを日が暮れるまで続けた。

校長室

「これより、オペレーション・トルネードを開始するわ」

「「オペレーション・トルネード?!」」

藤巻と大山がその作戦名を聞いて音無と同じように阿呆な想像でもしているんだろう。

「あら、顧問と野田君は驚かないのね？」

「年季が違うからね。　後、野田はわかってないだけだ」

原作を知っているとは言わない。

言ったら袋叩きされそうだもん。

「？？」

野田は首を傾げる。

そもそもトルネードという単語の意味すら理解しているか怪しい。

「あの～、それでそのトルネードって何するの？」

大山が問いかける。

「浅はか也……」

椎名が呟く。

いや、初めての奴が知る訳ないでしょうに……。

「単純な話、学食の食券を巻き上げるんだよ」

日向が作戦内容を答える。

「ハァ？！　てめぇら、んなことすんのかよ？　カツアゲじゃねぇか！」

藤巻が言う。

「何、他人事みたいに言っているんだ？　お前らも参加するんだぞ？」

「五段の言うとおりです」

高松が肯定する。

で、俺は此処に来てから気になっていた事を聞く事にした。

「誰も突っ込まないから突っ込むけど、さっきからそこで踊っているのは誰？」

戦線メンバーが注目する。

「Ｏｈ！　Ｌｅｔ's　ｄａｎｃｉｎｇ！」

「いや、踊らねぇよ」

俺の方に近づいてきてそんな事をのたまうので、反射的に返した。

そこには戦線メンバーで一番胡散臭く、謎の多い男ＴＫがいたのだった。

てか、さっきから踊ってるのを見て何故誰も突っ込まない？！

「彼は……誰だっけ？」

ゆりが高松に問いかける。

「新しく戦線メンバーに加わった……名前は？」

クイッと眼鏡を上げ言う高松。

「Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　ＴＫダヨ！」

何故、カタコト？

似非外国人？

てか、名前聞かないで仲間にしたのか？

「おっと、そろそろ時間ね。

配置はこのスクリーンの通り、大山君、ＴＫ、藤巻君、野田君は初めてだから自分の配置位置に天使が現れたらすぐに応援を呼びなさい。

顧問は応援要請が来たらすぐに向かって、足止めをして頂戴」

足止めをしてくれと言われたら、あのセリフを言いたくなるだろ？

「フッ、足止めは構わんが、別にアレを倒してしまっても構わんのだろう？」

その言葉に戦線メンバーが息を呑む。

アレ？

本気にした？

「男らしいぜ特別顧問！　女みたいだけど」

日向が言う。

「そうだね！　格好良いよね特別顧問！　女の子みたいだけど」

大山が続く。

「ああ！　頼もしいぜ特別顧問！　女みてぇだけどよ」

藤巻が更に続く。

「当たり前だ！　師匠は天使なんぞに遅れは取らん！　というか貴様等、師匠は女だろう？」

野田が最後に言う。

「き～さ～ま～るァァァ、辞世の句はそれで十分か？　後でまとめてＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだ！」

俺はキレた、後悔はしていない。

「浅はか也……」

椎名さんがボソッと言った。

所変わって食堂前。

俺は正面に立っている。

ガルデモの曲が流れ始めた。
そして、一曲目が終わった所で現れた。
正面から堂々と。

「ゆり、天使が現れた。　正面から堂々とな」

「そう、なら予定通り、顧問は足止めをお願い。　倒せるなら倒してもいいわ」

「了解」

俺は大牙を携えて対峙する。

「よう」

天使が俺に気付き立ち止まる。

「大目に見て帰ってくれないか天使さん？」

「それは出来ない」

「なら、終わるまで足止めさせてもらうッ！」

大牙で俺は斬りかかった。
袈裟掛けに振り下したが――――

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」

大牙の一撃を片手で止められた。

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・ＤｅｌａｙＶｅｒ．２」

「何ッ？！」

奏がブレて俺の後ろに回り込む。

ブレる所までは同じだ。

だが、ブレてから残像が２つに増え、現れるまでの機動が読みにくい！

しかも、ブレる瞬間に発行して目が眩む！

それに加えて、以前より早さが段違いだ。

その異常な加速によって繰り出されたＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを大牙で受け止めた。

その衝撃で俺の身体が真横に吹っ飛ぶ。

この斬撃の重さは何だ？

下手すりゃ、バーサーカー並みの重さだろうこれはッ！

そんな事を思っていると奏が回転し始める。

竜巻のような斬撃の嵐が俺を襲う――――――！！

くッ……早いな！？

即座に大牙を捨て、牙と爪を取り出し防御に徹する。

高松と大山がライフルで狙っている筈だが、この早さじゃ狙えな

いか！
攻撃速度もランサーに引けは取らないぞこれは！
流石に援護が無いとキツいぞ。
俺の体に攻撃が当たり始める。
次々に斬り傷が増え――――
取りこぼしたッ！？
「ガッ？！」
そう思った瞬間、俺の右腕が肩から断ち切られた。
「顧問！　退けッ！」
その言葉に俺は即座に離脱。
それと同時に集まって来た戦線メンバーが銃撃を始める。
空薬莢が次々に吐き出され、硝煙の臭いが濃くなってゆく。
「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ」
到底、避けられない銃弾の乱射が、その言葉を言った瞬間から逸れていく。
俺は日向の隣で右肩を抑えながら跪いた。

「クッ、助かったぞ日向」
「良いってことよ！」
日向が言いながらＲＰＫ７４を撃つ。
「前回は天使を独力で倒したのではないのか？」
五段が俺に問いかける。
「ああ、だが侮っていた。　どうやら俺という新たな脅威にガードスキルの強化をしてきてるようだ」
「パワーアップしている、と？」
高松が言う。
「間違いない……パワー、スピード、ガードスキルの性能、主に近接戦の技能が俺よりも強くなっていた。
これから苦労して倒しても、また強くなって戻ってくる可能性がある」
「それじゃあ、意味無いじゃねぇかよ！」
日向が俺に言う。
そこで紙吹雪が降ってきた。
どうやら作戦は成功したようだ。
俺は腕と適当に紙を拾って撤退した。
因みにＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩは不覚にも助けられたのでやらなかった。

腕は斬られた方をくっつけるように近付かせるとくっついた。
制服がボロボロになったので男物の制服を調達しようとしたら、
それとこれとは話が別だァァァ！！とかいって日向が邪魔してきた。

やっぱり後でＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩだ！
で、未だに女子の制服のままだ。
いつかこの状況を打開せねば……。

Episode3 Rematch and Tornado and Spe

何か大切な事を書こうとしていたのだが、ド忘れしてしまった・・・・・。

思い出せない・・・・・・？

何故だ？　何故思い出せないんだ?!

はッ?!　これはまさか・・・・・・痴呆症?!

とまあ、それは置いておいて本当に何かを忘れてしまった・・・・・・。

思い出したら後書きなり、前書きなりに書きこみたいと思いますので。

ではでは～

Episode4 Training and Special Advisor

ちょっとしたお遊び訓練みたいな回です。

Episode4 Training and Special Advise

「全体、整列！　休め！」

ただいまグラウンドを無断使用しています。
ええ、それは良いんです。
今の服装を除けばね！

「何でメイド服？」

ゆりに訊く。

「あんなデカイ口きいておいて、天使に腕一本持って行かれた罰よ！」

「さいですか……で、具体的に何をするんだ？」

メイド服は割と着ていたから違和感はない……って、本格的に女装に違和感を感じなくなってきてる？！

「そうね……考えてなかったわ。　アンタ達、何かソレっぽい事を考えなさい」

えぇー……考えてなかったのか？

「はいはい！　野球やろうぜ！」

日向が訓練だって言ってるのにアホな提案をする。

「アホか！」

ゆりの踵落としが決まり、日向の頭からゴッ！という鈍い音がした。

「ンガハァ――――――ッ？！」

脳天を抑えてのた打ち回る日向。

「柔道はどうだ！」

「うーん、折角グラウンドに来た意味が無いわね、却下」

五段の提案が却下された。

「射撃訓練等は如何でしょう？」

クイッと眼鏡を上げて高松が提案する。

「それも却下、手頃な的が無いわ……それとも、ジャンケンか何かで決めた鬼を皆で狙う？」

満面の笑みを浮かべ提案するゆり。

「「「「「却下でお願いしますッ！！」」」」」

戦線メンバーの心が一つになった。

皆、的になって狙われるのは嫌なのだ。

勿論、俺も嫌だ。

「特別顧問、何か良い案は無い？」

此処で俺に振りますか……。

「つってもなぁ……」

グラウンドで出来る訓練て実際、何かあるか？

「もう、グラウンド関係ないけど、俺が学園内全体を見渡せるあの校舎の屋上から俺が狙撃するからそれをかわすとか？」

ぶっちゃけ適当に言ってみる。

てか、これじゃあ高松の案と大して変わらんか……。

「そんな事が出来るの？　遮蔽物多いわよ？」

「やってやれなくはないよ、ただし、当たったら死ぬかもね」

気で強化すればコンクリ位どころか鉄骨すら貫通させる自信がある。

鍛練は怠らなかったので気の練度もかなり上がったし。

それでも腕一本持って行かれたのは不意を突かれただけだからなッ！？

「……いいわ、どんな手段でやるのか興味があるし、何より面ｓ、ゴホンッ！　死ぬという緊迫感もあって訓練には成りそうね。

私は顧問の横でそれを見させてもらうわ。　じゃ、今回は狙撃への回避と対応の訓練とするわ。

制限時間は一時間あれば良いかしら？　校内は原則として隠れるの禁止ね。
狙撃されたら死亡扱いで死んでる事、以上解散！」
戦線メンバーがぶちぶち言いながら散っていく。
「結局、的にされるんだね……」
「ぼやくんじゃねぇよ」
「ふむ、何所に行きましょうかね……」
「まだ、脳天が痛いぜ」
「うーむ、隠れ場所か……」
「浅はかなり……」
「物陰に隠れるＨｉｄｅ　ａｎｄ　Ｓｅｅｋ……」
「何を言っているのだ貴様は？」
で、五分後。

「さーて、此処からじゃ望遠鏡が無いと見えないわｎ「見えるぞ？」
ええッ？！　だって学内とはいえキロ単位よ？」

「俺の視力は……測った事無いや……取り敢えず、四キロは見える」

「ハァッ？！　出鱈目過ぎるじゃない？！」

「出来るものは出来るとしか言えないね……っと、発見！」

俺は大樹を構える。

というか散った筈なのにグループ移動してるし、やる気あるのか？

「そのバカデカイ弓はどっから出したの？　というか、貴方の武器って何所から出てくるの？」

「俺もよくわかんない。　何所かの次元にでも収納されてんじゃない？」

もしくは魂に登録されてるとか。

俺は適当に答えると増殖を使って鏃が吸盤型になっている木製の矢を番えた。

「狙撃銃を使う物だと思っていたんだけど、そもそも弓で当たるの？」

「簡単簡単ー」

屋上で巨大な弓を引き絞る外見美人なメイドさんｐシュールだ。

そんな事を思いながら俺は射た。
ゆりが望遠鏡を使って射た先を見る。

「あ。　ホントに当たってる……」

額に吸盤型の丸い痣を残して、白眼になって倒れている藤巻がいた。

「さーて、次はその隣であたふたしている大山だッ」

寸分違わない精度で着弾。
藤巻の隣に大山も倒れた。

おーおー、全員が慌てふためいている。
案外面白いかも……。

Ｓｉｄｅ日向

「で、散った筈なのに何で全員集まってんだよ」

「だって、僕まだ学内把握してないし……」

「別に良いじゃねぇか。　気にすんなよ」

日向の問いに大山、藤巻が答える。

「しかし、今回の訓練は簡単ですね。　あの校舎から狙うとしても銃ならば当たる確率も相当低い筈です」

確かに高松の言う通りだ。

唯の狙撃銃のスコープでもキロ単位なら、それこそオリンピックの選手でもない限り当てる事すら難しい。

実際、俺が狙撃銃で狙っても当てる自信が無いし、詳しい事は知らないどな。

「そうだな、スコープの性能云々を除いたとしても的である俺達は相当に小さい筈だ」

「いや、五段。　アンタは十分デカイ的だろ……」

「師匠は基本、銃は使っていなかった筈だぞ」

「浅はか也……」

てか、椎名が戦闘以外で喋ってる所見たことねぇけど、普通の会話で喋れんのか？

そう思った時だった。

「むっ？　来るぞッ！！」

椎名が大声を上げた。

その瞬間――――――

――――スッカーンッ!!という凄く良い音を響かせて藤巻が吹っ飛んだ。

「臨戦態勢!」

「Ｂｌｏｗ　ｈｉｔｔｉｎｇ　ｔｈｅ　ｔａｒｇｅｔ!」

俺は素早く指示を出し、全員遮蔽物に身を隠すが、大山は慌てふためき、逃げ遅れた。
てか、ＴＫは何言ってんだ?

――――やはりスッカーンッ!!という快音と共に大山が藤巻と同じように吹っ飛んだ。

その命中した何かがこちらに転がってきた。

「こりゃあ……」

吸盤みたいな鏃を含め、全部が木製の矢だった。

おいおい、顧問は弓で狙ってやがんのか?
出鱈目な視力に、出鱈目な腕力がねぇとこんな事できねぇだろ!
ますます、人外だな……。

「アレを見ろ」

椎名に言われ、倒れた二人に目を向けると二人の額の中心にくっきりと赤い丸が浮き上がっていた。

「ありえねぇpどんな命中精度だよ……」

そう思った所で、椎名に引っ張られ地面に押し倒された。

――――――轟音。

俺の身体を隠していた木に木製の槍が刺さっていた――――――って槍ィ!?

「おいおいおいおい!!　槍とかどうやって此処まで投げてんだよ!　吃驚人間過ぎだろ!
てか、今の当たってたら俺の頭が潰れたトマトみたいになってたぞ?!」

木に木製の槍が刺さるとかもう何て言ったらいいんだよ……。

こうしてあり得ないとか、デタラメとかそんな言葉が何十回も続き、次々に戦線メンバーは一人、また一人と額の中心を射抜かれていった。

「全く……この程度で全滅だなんて……アンタ達だらしないわよ?」

「その言い草はないだろ?!　何で木製の矢がキロ単位で離れてたのに当たるんだよ?!
しかも俺には槍だぞ槍！　胸貫かれた時、マジで死んだと思ったわ!!　マジ死んだけどな!!」

全員、射抜きました。
日向を狙おうとして矢を番えた時、ゆりが「阿呆な事言った奴には手加減無用よ?」とニッコリ言うからつい槍で頭を狙ってしまったんだ。
決して制服入手の邪魔をされた仕返しではない。
本当の本当だぞ☆
で、日向以外は普通の矢で射ていった。
特に椎名と野田、ＴＫがちょっと狙いづらかった。
椎名はひらりひらりとかわしたけどマフラーを縫いつけて動けなくしてから仕留めて、野田はハルバートで弾くからハルバートを手から弾いて射た。
ＴＫはブレイクダンスを良く知らない俺からすれば不規則&予想外の動きでかわしたので、真上から射てやったら丁度ヘッドスピンをしていたので当たった。
因みに五段は木の陰からメチャメチャはみ出してたので狙い打ち。
高松は眼鏡を射ぬいて動きを止めようと思ったら、懐からスペアを二十程出して装着してきたので全部弾いてから射抜いてやった。
不覚にも、２０弾いてまだあるとはな……何者だ?と呟いたら、ゆりに遊んでないでさっさと仕留めろ!とグーで殴られた。
日向は槍で逃げ道を塞いでから心臓を槍で一貫きだった。
もちろん掛け声は刺し穿つ死翔の槍（ゲイボルク）と叫んだ。
ゆりに、ドン引きね……と、蔑む視線とセットで引かれた。
悲しくなった……。

「ま、今回の事を反省して訓練を真面目にやりなさい」

こうしてあまりにも適当でデンジャラスな訓練は終わったのだった。

因みにこの訓練は時々やる事になった。

クジでハズレた人が槍で狙われるルールが追加された。

この訓練で頻繁に学園を破壊しているとやはりというか、当たり前に奏が注意しに現れるのだが、この訓練のお陰か全員の逃げ足が速くなった。

まあ、訓練になっているようで何より……なのか？

Episode4 Training and Special Advis

次は本編で言っていた天使エリア侵入一回目の話です。

Episode5 Angel area and Cooking and

天使エリア突入一回目です。
でも、収穫は無いと言っていたのでサラっとしか触れません。

Episode5 Angel area and Cooking and

「今日は天使エリアに侵入するわ」

校長室にて突然、ゆりがそんな事を言いだした。

その言葉に緊迫した空気が流れる。

「突入部隊は？」

日向が訊く。

「私、特別顧問、日向君、野田君、松下五段、椎名さんで行くわ」

名前を呼ばれたメンバーはそれぞれ了承の返事を返す。

「残りは陽動部隊のバックアップよ。　じゃあ、役割分担もわかった所で作戦概要を改めて説明するわ」

ゆりがそう言った所で証明が落ち、背後にスライドが降りてくる。

「今回のミッションは天使エリアの潜入、及び情報収集よ。　突入部隊はその名の通り、陽動部隊はガルデモに歌ってもらうわ。　派手に動いて頂戴」

「わかった」

岩沢が答える。

「作戦開始時刻はこれより一時間後の夕食時よ！　各自、準備は抜

かりなくやっておきなさい！」

全員が気合の入った返答をする。

一時間後・女子寮。

「扉を開くわ」

ゆりは俺が授業中に寮の管理人室に忍び込んで拝借した鍵を懐から取り出し、鍵を開く。

「よし、行くわよ！」

俺達は音も立てずに中に入る。

用心の為、部屋の電気は点けない。

中は至って普通の女の子の部屋といった所だろう。

ゆりは迷わず机のパソコンを起動する。

カタカタという音が響き、立ち上がった。

部屋にはパソコンの液晶の光が反射し、部屋を照らす。

「どうだ？」

「ちょっと黙ってて！　立ち上がったばっかりなんだから何も出来てないわよ！」

ゆりが日向に怒鳴る。
画面にはパスワードの画面が表示された。
「やっぱりロックされてるか……」
ゆりが爪を噛みながら言う。
「何か適当に入れてみたらどうだ？」
「そうね……ダメでもともと……」
五段の提案にゆりは合意し、慣れたタイピングで適当なパスワードを入れていく。
だが、ハズレていた為、弾かれた。
「やっぱり駄目ね……何かないか……？」
ゆりは部屋を見渡す。
俺達も部屋に手がかりが無いかを探し始める。
「ん～、エンジェルは？」
「※※※※※」
弾かれる。
「天使の学籍番号はどうだ？」
「※※※※※※」

弾かれる。

「ダメね……流石に何桁かもわからないのは厳しいわ」

流石の俺もパスワードまでは知らないから何も出来ない。

俺達は部屋中をなるべく荒らさない様に手がかりを探し回った。

だが――――――

［ゆりっぺさん、陽動が限界です。　天使が戻り始めました］

ゆりの通信器から漏れ聞こえる。

「仕方ない……今回は撤収よ！」

俺達は意気消沈としながら女子寮を後にしたのだった。

作戦後・校長室。

「という訳で、今回の作戦は失敗したわ」

「そうか……」

陽動メンバーも意気消沈する。

「はぁ、晩飯を犠牲にして収穫無しかよ、釣りあわねぇぜ……」

「確かに……最近、トルネードしてないからね……」

「腹が減っては何とやらって言うもんな」

一部の男共から溜息が洩れる。

「そういや、顧問と野田は何所行ったんだ？」

戦線メンバーがあたりを見渡す。

フッフッフ、俺は晩飯を犠牲にした作戦だという事を考慮した為、鍵を拝借するついでに食堂へ食材を拝借し、家庭科室でカレーを作っておいたのだ！

野田は電子ジャーを五つ程持たせている。

「こんな事もあろうかと！」

俺は制服の上にエプロンをしてミトンを装着し、巨大な寸胴を持って校長室に現れた。

「この匂いは……カレー？」

ゆりが鼻をひくつかせ寸胴の中身を言い当てる。

「その通り、今日の晩飯は悪いが俺の手作りカレーで我慢しくれ」

メンバー全員にカレーを配った。

「では、頂きます」

「「「「「頂きます！」」」」」

俺の号令の後、誰もカレーに口をつけない。

「で、貰ったは良いが、料理出来たのか顧問？」

日向が早速警戒し始める。

「おい、誰か喰ってみろよ！」

「貴方が食べればいいでしょう？」

藤巻が早速生贄を押しつけ、高松が言う。

「浅はか也……」

椎名さんはいつも通り。

「うどんは無いのか？」

「ありません」

「そうか……」

五段はションボリした。

ゆりも警戒している。

大山は匂いを嗅いでいる。

「口に広がるＨａｒｍｏｎｙ！」

そんな中でＴＫだけがカレーを掻き込んでいた。

「「「「「「ＴＫ？！」」」」」」

その後に俺も普通に食べ始める。

野田もそれを見て、ものすごい速さで喰っていく。

それを見たメンバーは恐る恐る一口。

「「「「「「美味ァァァァ――――――？！」」」」」」

うむうむ、そうだろう。

「別段特別な食材を使っている訳でもないのにこの美味さ……いや待て……隠し味がある筈だ……」

日向が料理解説みたいな事を始めた。

「ホント美味し……」

ゆりがボソリと言う。

こうして作戦失敗を払拭する程度には俺の料理が気に入って頂けた様だ。

うん、料理人としてはまずまずの結果で嬉しい事だ。

こうして夜は更けていく……。

Episode5 Angel area and Cooking and

やっと、前々回?に書いた忘れていた事を思い出したので書きます。
と言ってもどうでもいい事ですが、何かご意見があった時は過去の話の事でもいいので気軽に一言の欄にでも書いてくださいな、という話でした。
こんな事をド忘れしていた事にｏｒｚ

Episode6 Beginning and Special Advisor

やっと音無登場です。

Episode6 Beginning and Special Advi

校長室

「てかさ、死んだ世界戦線って死んだ事を認める事になるんじゃね？」

いきなり日向がそんな事をのたまった。

「いきなり何よ？」

「だからさぁ、もっとこう……グッと来るような名前に変えないか？」

「意味がわかりませんね」

日向の提案に高松が眼鏡をクイッと上げて言う。

「確かに……死んだ事を認める事になるかもしれないわね……」

「だろ？　だからこの際、戦線の名称を変えようぜッ！」

言い切ったみたいな顔で言う日向。

「じゃあ、言いだしっぺのてめぇが言ってみろよ」

「ん～、ゆりっぺと愉快な仲間達とか？」

うわぁ、無いわ～。

「無いわね」

「無いですね」

「無ぇな」

「無いよね」

「無いな」

「浅はか也……」

「Ｉｔ'ｓ　ｕｓｅｌｅｓｓ　ｕｓｅｌｅｓｓ……」

「俺は良いと思うが……」

野田以外の視線が日向に突き刺さる。

「何だよ……？　そんな目で俺を見るなよぉ……」

ゆりは無視して話を進める。

「他は何かある？」

「反乱戦線なんてどう？」

「微妙だから却下」

大山の特徴の無い提案は即座にゆりに却下された。

「反天使連合！」

「どこら辺が連合なのかわからないので却下よ！」

ゆりがイライラし始めた。

「だぁ、もう！　アンタ達、今日の作戦までに何か考えておきなさい。
で、日向君のせいで無駄な時間を過ごしたけど本題に入るわ」

簡単に言うと夜に奏が巡回するという情報を手に入れた。
それに伴い、俺達はこちらから攻める事にしたとの事だ。
決行は明日の夜だそうだ。
で、名称は生きた心地がしない戦線になった。
因みに今までの作戦で奏と三度戦ったが、引き分けになった。

まあ、お互いに不意を突かれた敗北以外は結局どちらも殺し、殺せなかった訳だ。
と言っても、俺は防御に徹していたのだが……。

ともあれ、俺は作戦の夜に備えた。

次の夜・屋上

それぞれがそれぞれの配置に着き、奏を狙っていた。

生きた心地がしない戦線はゆりによって死んで堪るか戦線になった。
現在の俺は屋上から大樹で狙いをつけているのだが、一向にゆりから攻撃開始の合図が来ない。
俺は一旦構えを解き、ゆりの方を見るといつの間にか現れた赤い髪の少年と話していた。
あれは……音無だな……多分。
ＲＰＫ７４を持った日向がゆりに近づく。
「うわぁぁぁ！　新人勧誘に失敗した――――――！？」
ゆりの叫び声が聞こえた。
やっと本編が始まったらしい。
音無は階段を下り、奏に近づいていく。
音無は奏と話した所で――――――
心臓を一突きにされた。
音無は倒れ、血溜まりが広がっていく。
奏は自分の制服が汚れるのも構わず音無を担ぎ、保健室の方へ消えていった。
俺は無影を使ってゆりの横に降り立った。
「ゆり、天使が行っちまったけどいいのか？」
「まあ、この世界に居ればチャンスは幾らでもあるわ。　顧問は天使を張っていて頂戴」

「了解だ。　てか、メイド服脱いで良い？」

「ダメよ、後三日は着ていてもらうわ」

ああ、そうですか……主人公に突っ込まれるんだろうなぁ～。

俺はそれから天使を監視した。

特に変わった所は無い。

日付が変わって朝になった。

暇だ。

凄く暇だ。

アレ？

てかコレってストーカーじゃね？

生徒会長をつけ回すメイド服を着た男……唯の変態だ！？

いや、考えないようにしよう……。

「顧問、召集よ。　ついでにこの前野田君が仕掛けた校長室のトラップに誰か掛かったから拾って来てくれない？」

「了解ー」

俺は音無を拾って校長室に入り、ソファーに寝かせた。
紅茶を入れる為に隣の給湯室に行った。

「早まるな！　ゆりっぱァァッ？！」

何か野田の叫び声が聞こえたが、大方自分の仕掛けたトラップに引っ掛かったんだろう。

そんな事を思いながら――――

「神も天使も仏も無し」

俺は合い言葉を言って中に入った。
どうやら自己紹介をしている場面の様だ。

「メイドさん？！　何でメイドさんが此処に居るんだ？！」

「私達の特別顧問を紹介するわ」

俺はゆりに紅茶を出す。

「俺のツッコミ無視？！　しかも特別顧問？！」

この時、音無の頭の中には厳ついサングラスをかけたオッサンの姿が思い浮かべられていた。

「このメイドの格好をしているのが私達の特別顧問、朱然よ」

「ハァッ?!　特別顧問って、このメイドさんが?!　てか、明らかにヨーロッパ系の外人メイドさんじゃん?!
しかも、何で中国の三国時代の武将の名前?!　意味不明過ぎないか?!」

おお……流石突っ込み役、一息で言い切った……。

「元気がいいなぁ、音無君。　何か良い事でもあったのかい?」

「そんなものは無い!ってアレ?　つい口調が荒くなった様な……?　てか、日本語で突っ込まれた?!」

阿良々木君の口調になった?
面白そうで、弄りがいがありそうだな、クククク!

「俺の名前は朱然、このＳＳＳでの肩書きは特別顧問だ。　皆は顧問と呼ぶ」

「あ、ああ、よろしく」

「因みに男だから、そこの所よろしく」

「……は?　よく、聞こえなかった。　もう一度言ってくれないか?」

「私はお・と・こ・よん☆」

バチコーンミ☆と音無にウインクをした。

ついでにワザとセクスィーなポーズと声で音無に言った。

「変態だァァァァ?!」

日向達は腹を抱えて笑いだした。

これからの訓練の厳しさを三倍程引き上げよう……。

「因みに女装は俺の趣味じゃねぇ、ゆりと日向の画策とこの前の天使戦で不覚を取った罰だったんだけど、未だに許してもらえないから仕方なくメイドさんをやってるんだよ。

信じられないか?」

「まあ、外見的に信じがたいけど……」

「なんなら日向みたいに俺を無理やり脱がして、舐めまわすように俺の肢体を見るか?」

「日向……コレなのか?」

ホモ疑惑が早速、浮上する日向。

「違げぇよ!」

フッ、笑った罰だ。

こうして物語は動き出した。

Episode6 Beginning and Special Advi

しばらくは無難に書きますので微妙かも・・・・・。
後、英語ですが、翻訳サイトでやっているのでかなりデタラメだと
思いますが大目に見てください。

Episode7 Operation Tornado and Special

最近、一週間に一回は徹夜をするし、睡眠時間も碌に取れない・・・・・。
一週間ぐらい、ぐうたらしていたいと切に願う今日この頃・・・・・・。

Episode7　Operation　Tornado　and　Spec

「じゃあ、久しぶりにオペレーショントルネード、行くわよ」

音無が入ってすぐのオペレーションはトルネードだったな……。

周りがどよめく。

音無の頭の中では竜巻のイメージが浮かんでいるのだろう。

「そのオペレーションは何をするんだ？」

「生徒達から食券を巻き上げる！」

ゆりがガッツポーズをして断言する。

「その巻き上げるかよ！！」

流石、主人公……キレが違うぜ。

「なんだよそれ！　イジメかよ！　失望したぜ！　武器や頭数だけ揃えやがってよ！」

「貴様！　それはゆりっぺに対する侮辱発言だ、撤回してもらおう！」

ハルバートを突き付ける野田。

俺は無言で野田の後頭部を殴った。

「全く……軽々しく人に武器を向けてはいけませんって修行の前に

何回も言ったのに……ッたく」

気絶した野田を邪魔にならない端の方に引き摺って壁にもたれ掛けておく。

「我等フジツボ絶滅保護戦線は数や力で一般生徒を脅かす真似など決してしない！」

「あれって絶滅するの？」

「いつかはするだろ」

「でも巻き上げるって言っただろ！」

「あー、取り敢えずやってみれば解るよ」

俺はポンッと肩に手を置きながら言う。

そんな感じで音無初参加のオペレーションは始まったのだった。

夜　食堂前

俺は正面の警護だ。

お、ガルデモの演奏が始まった。

しばらく俺は目を瞑って訊き入る。

そして――――

音無の方から銃声が聞こえてきた。
即座に俺は移動した。

二発目。

ハンドソニックで弾かれたか。

三発目。

皆集まってきた様だ。
それぞれが銃を撃つのだが――――

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌ・Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ」

銃弾が逸れていく。

不謹慎かもしれないが、夜見ると逸れていく銃弾がちょっと綺麗だ。

椎名が食堂裏から食堂を迂回せず乗り越えて現れ、手裏剣を投擲。
それをＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで弾いた所で五段がＦＦＶ　ＡＴ４を撃つ。
銃の弾が無くなり弾幕が薄くなる。
俺は大樹を構え、槍を射た。
狙った足に直撃するかに見えたが、Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで斬られた。
俺はすぐに大牙に持ち替えた。

「閃断！」

巨大な斬撃の形になった気が奏の方に向かっていくが、それすらＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで弾かれた。

俺は即座に接近。

大牙を振りかぶり横一線。

奏は重量で吹っ飛ばそうとしたにも拘らず、Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで凌いだ。

「残念、そこで受けるのは不正解だ、蝕壊！」

Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで受ける事を見越して武器破壊の気を込めておいたのだ！

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」

破壊したと思ったら、もう一度起動すれば元通りか……！

すぐさま俺に向かって斬りかかってくる。

袈裟切り一閃。

態勢を崩した今の状態では回避不能。

大牙で受ける事を選択。

前の戦闘を考慮し、更に補強する。

俺は大牙に魔力を込め、不変の概念を強化。

バーサーカー並みのパワーとランサー並みの攻撃速度を大牙を楯にして衝撃に備える。

斬撃の重さに俺は体を吹き飛ばされそうになりながらも、気で強化した足を踏ん張り耐えた。

視界の隅には銃のリロードを終え、構えているメンバー。

それを見た俺はすぐに距離を取った。

そこでまた銃撃が始まる。
それから少しして紙吹雪が舞って来た。

作戦成功か！

俺達は食券を拾い、一時撤退したのだった。

食堂

俺は拾った食券をさっそく使う。
ＮＰＣのおばちゃんがミートソーススパゲティを出す。
俺は受け取り、音無の隣に座った。

「や、どうだった？　初のトルネードの感想は？」

「ええと、顧問……で良いんだよな？」

「うむ」

「何ていうか……これだけの統率力と力があって、何でもやりたい放題出来るのにこんなにせせこましく飯食ってんのが、何か……すごいなって思ってさ……」

「ま、これもゆりのリーダーシップのおかげかな？」

スパゲティを一口食べ租借、飲み込む。

「それより、いつまでメイド服を着てるんだ？」

「後、二日は着てないとダメらしい……それにゆりと日向を何とかしないと普通の格好が出来ない」

「は？　どういうことだ？」

俺は音無にこの世界に来てから女装することになった経緯を話した。

「つまり、顧問はメイド服を脱いでも女物の制服を着なきゃならないのか？」

「ああ……この負の連鎖を止めてくれ」

「あ～、日向は何とかなりそうだが、ゆりは俺には荷が重そうだから……ハハハ……」

笑って誤魔化された……クッ！

どうすればいいんだ？！

……そうだッ！

「音無君よ、君の予備の制服を俺にくれ」

「？　ああ……なるほど、わかった今度貰ったら渡すよ」

どうやら俺の考えを察してくれたようだ。

音無は此処に来たばかりで俺に男物の制服を入手する邪魔はしないから。

音無に支給される制服を俺が着れば万事解決なのだ！

「今度、特別に特製手作りケーキを作って来て、喰わせてやろう」

「何というか、そういう言動をしていると女にしか見えないよな…

…って、そういえば顧問！

さっきの戦闘の時、何処からともなく大きな剣とか、弓とか取り出して槍を射たり、何か剣から衝撃波出してなかったか？！」

アレ？

音無に説明してなかったのか、ゆりは？

まあ、ゆりに説明してもらおう。

二度手間は面倒だ。

「あー、説明するのが面倒なのでゆりに言ってあるからゆりに聞いてくれ」

「出来る事は否定しないんだな？」

ジーッと見てくる音無。

「出来るもんは出来る、唯それだけの事だよ」

俺はそう言ってニヤリと笑い、食べ終えた食器を片づける為にトレイを持って席を立った。

Episode7 Operation Tornado and Special

一話完！と言ったところですね。
前書きに書いた通りなので、少し更新が途切れるかも・・・・・・
と言いつつ書くかもしれません。
どっちなのかはその日になってみなければわかりません。
なるべくは書くつもりですけど（笑）

Episode8 Trap and Special Advisor（前書

一週間ぶりの投稿ですがよろしくお願いします。

弾薬の備蓄が無い。
それが今日の議題だった。

で。

「今夜、ギルド降下作戦をするわ」

という事らしい。
前に一度だけ入ったが、トラップが解除されていたのでまあ、呑気なもんだった。
ゆりがギルドへ連絡を取り、夕方に行く事になった。

ギルド連絡通路Ｂ１

音無がキョロキョロと見ていた。
俺も初めて来た時は物珍しくて似た様な反応をした。

「おい！　誰かいるぜ！」

藤巻が声を上げ、懐中電灯がその人物を照らす。
その光にハルバートが反射して禍々しさを強調している。

「フッ」

というか野田だった。

「うわぁー、馬鹿がいた」

メンバーの今思ったであろう心の声を日向が代弁した。

「音無と言ったか？　俺はまだお前を認めていない」

「わざわざ、こんなとこで待ち構えてる意味がわかんないよな？」

「野田君はシチュエーションを重視するようだよ」

「意味不明ね」

我が弟子ながら阿呆な事この上ない……。

「別に、お前に認められたくも無い」

「貴様……今度はッ？！　千回死なせたはぁぁぁッ！！？」

野田が校長室入口にしかけたのと同じようなハンマートラップが今度はッ？！の所で発動し、スウェーでかわしたのだが、続きを話し始めた所でアニメに無かった二つ目のハンマーの餌食になった。

何かスローモーションになってエンディングの幻聴が聞こえた気がしたが気のせいだろう。
野田に合掌。

「警戒態勢！」

「トラップが解除されてねぇのか？！」

即座に周囲を警戒し始めるメンバー。

てか野田め……修行してるのに回避しきれんとは……後で修行の見直しをした方が良いのだろうか？
いや、寧ろ俺との殺し合い的修行で対人の殺気に慣れ過ぎたか？
何にせよ修行のやり直しだな。

「どうやら、ギルドが独断でトラップを再起動させたみたいね……」

ゆりの言葉に黙りこむメンバー。

「トラップの再起動は天使の襲来によるギルドの独断って所かねぇ」

俺は呑気に言う。

「何はともあれ、ギルドに向かうのは決定事項よ！」

こうして俺達は警戒をしながら道を進んだのだが……。

「む?!　来るぞ!!」

椎名の声がした途端、後方から通路目一杯のデカさの鉄球が転がってきた。

また、ベタなトラップが来たなぁ……イ○ディトラップか?

全員が叫び声を上げながら脇道までひた走る。

椎名、ゆり、藤巻、ＴＫ、大山、五段の順に脇道に入った。

高松、日向、音無が間に合わない!

俺は鉄球の方に振り向いて守殻を装備し、気も纏って――――

「どっせぇぇぃッ!!」

守殻から火花が散りつつ、何とか鉄球を止める事に成功した。

「何という馬鹿力……」

「相変わらずの常識外れだな!」

「顧問って人外か何かなのか?」

眼鏡をクイッと上げる高松、サムズアップする日向、引き攣った顔をする音無が順に言いたい事を言う。

「失礼な奴らめ……ちょっとイラっと来たので……ゆりさんや、今

回のトラップで脱落した奴らは俺の特別カリキュラムを受けさせるけど良いか？」

「その呼び方は止めなさい。　何か私が歳を取ってるみたいで嫌！　でも特別カリキュラムか……ふむ……この程度のトラップも回避できないなら鍛え直すのも……許可！」

「「「「「？！」」」」」

メンバーに戦慄が走る！

「なあ、日向……特別カリキュラムって何なんだ？」

「音無……俺にはこれしか言えねぇ……絶対に死ぬな」

「ええッ？！　何それ？！　凄く気になるし不安になるんだけど？！」

困惑する音無を置いて俺達は進む。

次は何所かの研究所とかの通路みたいな所に入った瞬間、閉じ込められた。

「しまった！　忘れてたよ！　此処のトラップは閉じ込められるんだった！」

んな大事な事、忘れんなよ！！

「そんな大事な事、忘れるなよ！！」

音無と俺の思考がシンクロした。

壁の両脇の小さな機械がこちらに向かって進んできた。

「伏せろッ！」

藤巻の声に俺達は全員伏せやり過ごし、椎名が煙球を投げた。

そこには目に見えなかった赤い光が……。

「アレに触れるとどうなるんだ？」

「最高の切れ味で胴体を真っ二つにしてくれるぜ？」

誰だッ、こんなバイオ〇ザードみたいなトラップ仕掛けたのは？！

「第２射来るぞ！」

２本に増えたレーザーカッターが迫り来るが、何とか皆かわした。

「第３射来るぞ！」

「第３射、何だっけ？」

「エックスだッ！！」

今度はエックスが追加され、迫り来る。

何とか皆避けていったと思ったんだけど……。

「うごぁぁぁあァァぶッ！！？」

松下五段がお亡くなりになった……合掌。

藤巻が扉を開き、雪崩れ込む様に通路を出た。

「うおぇぇぇッ！！」

大山が吐いた。

人が目の前でサイコロステーキになればそりゃ吐くわ。

俺達は更に進む。

今度はちょっと開けた場所に出た。

梯子を全員が降りた所で上から天井が落ちてきた。

「忘れてたよ！　此処のトラップは天井が落ちてくるんだった！」

だから忘れんなよ大山！

「だから忘れるなよ！」

またもや音無とシンクロした。

いかんせん距離があって全員が間に合わない。

潰されると思った所で――――

「フンッ！！」

「「「「「TK？！」」」」」

「Ｈａｒｒｙ　ｕｐ！　今ナラ間ニ合ウ！　Ｏｏｏｈ……飛ンデ行ッテ抱キシメタレェ……」

で、メンバーの反応は――――

「ありがとう」↑ゆり

「達者でなー」↑日向

「じゃなー」↑藤巻

「「「……」」」↑黙々と進む高松、大山、椎名

「えーっと……ガンバッ？」↑俺

「……ソーリー」↑音無

俺達が辿りついた所でＴＫは潰れた。

ＴＫに合掌。

「尊い犠牲だった……南無」

「ＴＫまで犠牲に……」

手を合わせる俺。

「したんだろ？　お前らが」

「ダイジョブだって、時間が経てば元に戻る」

次は両端に柱のある通路に差し掛かった所で今度は床が崩れた。

「忘れてたよ！　今度は床が崩れるんだったぁぁぁぁ……」

ドップラー効果を効かせながら落ちていく……俺は助けなかった。

いい加減、お前は忘れ過ぎだ！

だから、お仕置きとして助けん！

特別カリキュラムでその若年性痴呆症を荒療治という名の制裁でシャッキリと治してやろう！

で、上から椎名、藤巻、高松、ゆり、日向、音無、俺の順になった。

ゆりからさっさとよじ登れと言われたので登り始める。

「よッ、ほッ、とッ……うーむ、これはなかなかの絶景だ」

音無、日向の身体は簡単によじ登ったんだが……俺の眼前には逆三角形のリボンの付いた淡いピンクの布が……。

全ての男子の憧れる絶対領域によって守られている理想郷がそこにはあった。

「ピンクのリボン付きか……意外と可愛い趣味をしてるな」

「ちょっと?!　何所見てんのよ!」

ゆりが反撃しようとするが、両手は塞がっているし、両足は日向達がぶら下がっているので実質やりたい放題だ。

「ちょ、暴れんな!　落ちる!」

日向が声を上げる。

「はっはっはー、愉快なりー」

まあ、しないけど……あ、そうだ。

俺はある事を閃いた。

「ゆりさん」

「何よ？」

俺は真面目な顔でゆりの名前を呼ぶと、ゆりは凄まじい眼力を俺に向ける。

「此処でやりたい放題されるのと、男用の制服を用意するのどっちがいい？」

「やりたい放題って、何するつもりよッ！」

「決まっているだろう？　さあ、今から言う単語を組み合わせてどんな結果があるのかを予想&妄想してくれたまえ。

君の下着、脱げる、日向……この三つの単語が組み合わさった時の答えは……わかるだろう？」

意地の悪い笑みを浮かべる俺。

「クッ……！！」

ゆりが苦悶の表情に変わる。

「ちょっと待て！　何でその二つの単語の後に俺の名前を加えるんだよ！？」

日向反論。

ああ、聞いちゃうんですね日向さん。
自ら墓穴を掘るとは……。

「じゃあ質問だ日向。
崖から落ちて偶々、そう偶々今の俺達と同じ状況の様にスカートを穿いた女子にお前がぶら下がっていて、その女子がノーパンだったらお前はどうする？」

「見るッッッ！！」

「うむ、予想を裏切らない力強い回答をありがとう」

問を即答か……流石は日向だ。

「お前ら全員落ちろ……ッ！！」

ゆりが激しく暴れ出す。

「うわぁぁぁぁ、落ちる落ちる！！」

「うわぁぁぁぁ、やめろゆり！！」

「何を馬鹿な事をしているのですか！！」

「うぉぉッ、てめぇらさっさと登りやがれ！」

「浅はか也……」

上から日向、音無、高松、藤巻、椎名。
椎名はちょっと頬が赤い。

てか椎名の下着もこの位置からだと見えるな。
シンプルな薄紫か……ちらちらと見える上の方はサラシか。
下はフンドシかと思ったら普通派か、ちょっと意外。

「で、ゆりさんどうする？」

「……背に腹は代えられないわ、飲むわよその条件……後で覚えときなさいよ？」

ゆりが凄むが今の俺には通じない。

やっと……やっとだ！

この負の連鎖から俺は開放され――――

――――ツルッという間抜けな音が聞こえた気がした。

ゆりの手が滑ったらしく落ちていく。

因みに俺は壁を蹴って上の足場に着地。

「ホントに後で覚えてなさいよぉぉぉッ？！」

「「巻き添えかよぉぉぉッ？！」」

やれやれ……まあ、言質は取ったんだ。

俺は無影を投擲。

ゆりと音無の胴体に巻き付け、反対側を椎名のいる足場に巻きつける。

日向はまあ、ご愁傷様というか此処で落ちた方がまだ良いと思ったので助けなかったのだが、椎名がロープで俺と同じように巻き付け助けた。

で。

「……準備は出来てるかしら？」

――――――笑みを浮かべた般若がいた。

「ッ、言質は取った、明日から男物の制服を着させてもらう」

表情を取り繕って俺は言う。

「何を言っているのかしら？
貴方はさっき“男物の制服を用意する事”と言っただけで着ても良いか？なんて一言も言っていないじゃない？」

「なん……だと……？」

俺はｏｒｚと膝を着いてゆりを見上げる。

「貴方がこれからずっと、私の着せ替え人形になるのなら今回の事は許してあげなくもないわ」

満面の笑みをキープしながら言う。

「くッ、卑怯な――――――――？！」

「というか断ったら落とすわ」

無表情だった。

「スミマセンでした……ッ！！」

全力で謝った。

そして、全力で土下座した。

そこには立場の逆転した、というか元に戻った権力者と奴隷の姿があった。

だって目が本気だと物語ってるんだもんッ！！

悲しいかな、恐怖という遺伝子に刻みつけられた根源的、動物的本能には逆らえんのですよ。

「そうそう……日向君はまだぶら下がったままだったわね……」

ゆりがおもむろに日向のロープに近づき――――――

「ゆりっぺ、いやゆり様？！　一体何を――――――ッ？！」

俺と同じく恐怖を感じたらしい日向が焦り始める。

「アンタが私の下に居るからこういう事になったのよ……」

ゆりの顔の上半分程が影になって日向以外に表情は見えない。

日向にはさぞ恐ろしい表情をしているんだろうなぁ……。

「それは音無も同じ、ってか八つ当たり！？」

日向が音無も同罪と言って罪の軽減を図ろうとした所でロープがゆりのナイフによって切られた。

「うぁッ、うわぁぁぁぁッ顧問の馬鹿ぁぁぁ……」

許せ日向よ……合掌。

「……」

音無が微妙な表情で奈落を見ていた……。

そこで藤巻が音無に向けて、おもむろに喋り出す。

「ヘッ、よくもまあ、新入りのてめぇが生き残ったな……次はてめぇの番だぜ」

で。

死亡フラグを立てた藤巻と高松は水攻めで水死体になった。

合掌。

流石に泳げない奴をどうこうは俺には出来ない。

高松は原作で此処まで生き残っていなかったのだが、結局は死ぬ運命だったらしい。

というかおぼれた藤巻が高松にしがみついたというのもあるんだけども……お気の毒に……。

で、下の出口を通って、水から上がり……。

――――――キュンキュンキュンキュン……ッ、という音が聞こえて来た。

玩具か？

誰も引っ掛かる訳――――――

「あぁぁぁッ！！　子犬が流されているぅぅぅぅッ！！」

引っ掛かった――――――？！

「あ、ちょっと待て！」

俺の制止も聞かず川に飛び込み、玩具の子犬を助け――――――

「不覚！！　ヌイグルミだったぁぁぁぁ……」

――――――落ちていった。

「阿呆だろ……」

俺は呟いた。

「椎名さんもトラップの犠牲に……」

「アレも天使用トラップなのかッ？！」

「可愛いものに対する認識の甘さが彼女の弱点よ……」

ゆりが顔を伏せながら言った。

「意外な一面を見た気がする……」

「何だかなぁ～……」

あー、意外な面を見たんだけど……まあ一応、合掌。

「残ったのはたった三人か……軍隊だったら壊滅じゃない……」

「まあまあ、今度特別カリキュラムで鍛えておくから大丈夫だよ…
…多分、恐らく……」

今回の事でちょっと自信が無くなった。

「ちょっと、休憩しないか？」

俺達は休憩をする事になったのだった。

Episode8 Trap and Special Advisor（後書き）

ギルド降下作戦前半でした。
どうだったでしょうか？

Episode9 Historical truth and Guild

自分で書いてて訳ワカメな感じになった気がする・・・・・・。

「所で、何でゆりと顧問は死んだんだ？」

音無がいきなりそんな事を言いだした。

で、ゆりが自分の過去を話し始めた。

原作通りの内容だった。

当然、俺の話もしなきゃならない空気になった。

俺は話す事にした。

この二人だから……。

■■■■という名前を持った者の過去の“記録”を……。

生前の俺は当然、魔眼を持っていなくて、特別頭がよかったとか、特別運動が得意だった訳でもない。

本好きの唯の一般人だった。

普通のツマラナイ人生を生きていくんだと思っていた。

家族構成は父、母、姉、俺の四人家族。

両親は表面的には仲が良かったが、家庭内別居をしているような家だった。

俗に言う仮面家族（で合ってるっけ？）と言うやつだ。

ご近所や親戚等、外に対しては仲の良い家族。

誰も見ていない家の中ならさっきも言った状況。

姉が何とか仲を取り持とうと奮闘するのが痛々しかった。
そんな姉をこのツマラナイ人生から救い出したいと幼い頃から思っていた。

ある日、俺は寝ぼけて家の階段から落ちた。
それからぼんやりとだが、勘というか流れの様な物を見る様になった。
その流れを真似るとその流れに沿った動きが出来た。
それを使ってテレビの人物の流れを真似た、ほぼ完璧に真似できた。
すると周りが興味を持ち始め、期待されるようになった。
周りから様々なものに手を出させられた。
いつしか俺は模倣する事が当たり前になっていた。

まるで機械だと評されるほどに……。

テレビが取材しに来ると家族は仲の良い理想の家族を演じた。
姉が喜んだ。
学校に入学してもあまり行く事は無かったし、友達もいなかった。
それでいいと思った。
それから姉は俺の存在を家族を繋ぐ為に必要不可欠なものとして依存した。

少しして事故にあった。

両親が死んだ。
残ったのは俺と姉の二人だけ。
姉は無傷、俺は頭部に衝撃を受けた以外は奇跡的に無事だった。
俺達姉弟は才能を持った悲劇的な俺とそれを支える姉として更に騒がれた。
原因は対向車線の車が猛スピードで突っ込んできた事だった。
日本の警察は優秀だったが、犯人は捕まらなかった。
話を聞くと、その犯人は某有名大学の大学生だったらしい。

両親を失ってからの姉は徐々に生きる気力を失っているかの様に自分では行動をしなくなった。
俺がいるのに、あんなに依存したのに……詰まる所、姉は俺を見ていなかったのだろう。
姉が見ていたのは家族というモノだったのだ。
最近、模倣が上手くいかない。
勘や流れの様な物が見えずらくなった。

今なら解る。
階段から落ちた事によって微妙に噛みあわなかったチャンネルがズレた。

そのズレは事故によって発現していなかった魔眼が本格的に開く為のチャンネル合ってしまった。
見辛くなったのは使っていなかった物が急に開き過ぎてしまった為だったのだろう。
目が悪くなって眼鏡を買ったが、ちょっと度が強すぎたみたいな感じだろうか？

それから俺は、唯一の家族である姉を養う為に頑張った。

だが、しくじった。

始めは身体に染みついた動きをするだけで良かった。
だが、すぐにボロが出た。
たった一度のミスが徐々に増え。
周りは失望していった。
世間なんて飽きやすいものだ。
結局、最後に残ったのは自分自身と姉、幾ばくかのお金だけだった。
周りの物は親戚と名乗る者達が両親が死んだ時に奪っていった。
親との会話も無ければ遺産相続の手続きなんかもわからない訳で、絶好のカモだった訳だ。

俺は現実から逃げる様に姉の世話とバイトと本を読む事に没頭した。
架空の物語、学術書、哲学、神話、宗教、科学……適当に、乱雑に本を読み漁った。

俺は模倣を忘れる事にした。
模倣なんてしなくても生きれる事を理解したし、適当に仕事をして、日銭を稼ぎ、慎ましくしていれば二人くらい何とかなると思った。
唯一の家族である姉を守って行こうと思った。
俺を育ててくれたのはあの両親じゃなくて姉だったから。

そう思った所で俺の魔眼は完成してしまった。

初めて完全に魔眼を発動した時、何の訓練もしていない凡人が制御できる訳も無く暴走した。
魔眼の力が弱ければ、階段から落ちなければ、事故が無ければそもそも至りはしなかったのかもしれない。
しかし、俺は阿頼耶識《普遍的無意識領域》の流れを辿ってしまった。
その表層を超え、深層に潜り、人の原型（アーキタイプ）という人の原初を超えても止まれずに至り続けた。
その更に先、魔術師にすら見る事が叶う者はほぼいない根源に到達してしまった。
故に根源に至ったという事実が確立され、俺みたいな素人が偶然に至ってしまってが故に異世界、並列世界を含む世界の過去、現在、未来、あらゆる膨大な情報量が逆流してきたのだ。

根源から情報の津波に押し戻され、俺を起点にして人類全体を膨大な情報という水でパンクさせるという脅威と世界に認識された。

当然、阿頼耶識による抑止力が発動した。

インターホンが鳴った。

部屋で膨大な情報による頭痛を耐えながら玄関に向かって扉を開けた。

そこに居たのは轢き逃げをした大学生だった。

その発動した抑止力の結末は、俺をひき逃げした大学生が経歴に傷がついたと逆恨みをして、俺をめった刺しにして殺すというツマラナイものだった。

その時の痛みは覚えている。

――――――お前さえいなければッ、お前が有名じゃなければッ！

そう叫びながら、果物ナイフで刺され続けた。
体中に穴が無いくらいに刺された。
だが、俺は根源に至ってしまったが故に生命としての理を超え、
己が生き続ける業を背負ってしまった。
所謂、不死だ。
穴があいてもずっとずっと生きている。

こんな地獄の何所がいいのだ?

物語の主人公は神様に不死を願う事がある。
でも、こんな痛みを受けて尚、生きていなくてはならない。
常人なら痛みで狂う。
いや、狂わなければ生きられない。

大学生が姉の部屋に向かっていった。

――――――待テ。

姉が髪を掴まれてこちらまで引っ張られてきた。

――――――何ヲスルツモリダ。

俺も不死の肉体を得てはいても唯の人間だ。

――――止メロ。

果物ナイフが姉の首に突き立った。

止メテクレ――――――ッ！！

その瞬間、自分の傷の痛みと姉を失った事で俺はやっと壊れる事が出来た。

意識が反転して真っ暗になった。

理不尽だ！　そんな拷問嫌だ！
痛い痛い痛い！　どけ！
消えたい！　ヤメテ！　身体が
変だ！
何でこんな事に！　触れるな！
こんな痛みから逃げたい！　キモ
チワルイ！
助けてくれ！　苦しい！
何時まで続く！　死ぬ！
どうして！　もう嫌だ！
血
が止まらない！

目が覚めると俺の体からは致死量の血が出て、血溜まりになっていた。
死んだと思ったのか、大学生は出ていった後だった。
頭が情報で一杯になって痛い。

今はそんな事はどうでもいい。
俺は動かない身体を動かし、眼球だけを巡らせた。

そして、視界に捉えてしまった。

姉さんは――――――

血溜まりには姉さん“だった”モノが横たわっていた。

それを見た時、膨大な情報に耐えきれなくなった脳髄が破裂した。
その情報の所為か魔眼を起点に魂が二つに別れた。
不死なのに死んだのは不死殺しの情報、概念も含まれていたから。
結局、俺の守りたかった姉は守れなかった。

元の体が死んで魂も片方が死んだ。
残った魂の方は別れた残響でバグを起こし、変質した。
その所為か不死も無くなった。
別れたと言っても分裂した訳ではなく、パソコンでいうところのコピーと同じようなモノだ。
殆ど変りは無い。
そう“殆ど”は……不死性の削除、朱然としての容姿の上書き、魔眼の完成前までの退行、■■■■の記憶を記録としてしか見れないという自己意識の改竄。

魔眼が最初に不完全だったのはこの所為だ。

これが憑依し、転生し、召喚される事により旅をする異端の存在になった発端、原初、始まり。
そして、これからも旅をする者。
■■■■の別れた魂が情報で押し戻された道を再度辿りながら、自分の死を知覚した存在。
浮いているようで沈んでいて、沈んでいるようで浮いていたあの空間は多分、原型（アーキタイプ）と根源の間、だったんだろう。
そこを漂い、流れ、行きついた先がまた根源だった。

■■■■という名は正確には俺のものであって、俺のものではない。
だって俺は■■■■のコピーだから。
だから俺は、■■■■とは名のらない。
次に手に入れた朱然という名を名乗る。
もう■■■■というオリジナルは存在しない。
姉を守れなかった■■■■という存在はもう居ない。
だが、記憶も、経験も、感触も、感性も、認識も、魂に記録され

ている。
コピーでもそれは変わらない。
人間は周りの環境によって性格、人格が決定されていくし、変化もしていく。
別れた魂でも同じ事が言えるだろう。
故に俺は変化もするし、変化しない所もある。
あの過去を持つからこそ、大切な者を失った事を知っているからこそ、俺は失いたくない。
そして、俺はこれからも自分のしたい様に生きていく。

蓮華や呉の皆と駆け抜けた戦乱の三国志。

七人の英雄と魔術師が殺し合う、気高きマスターに仕えた聖杯戦争。

理不尽な死を経て辿りついた楽園を永遠にする為の聖戦。

これから行くであろう未だ見ぬ世界へ、俺は戦い続ける。

これが■■■■というものから発生した物語の発端。
■■■■という自分の元となった者の過去だ。
自分であって自分でない記憶。
他人事のように客観的に見れて、少なからずその記憶に縛られた特異な存在。
■■■■の記憶を引き継いだ■■■■という同姓同名の人物、というのが適切な表現だと思う。
これもある意味、転生と言うのかもしれないな……根源の意味も、地球上の人類全てを敵に回した事も、数え切れないほどの人間を殺

した事も、神というモノと対峙した事も、聖杯戦争の事も・・・・・・。

包み隠さず二人に教えた。

「これが、俺の本当の過去だ」

「「……」」

あまりに突拍子の無い話について行けなかったか？

「ちょっと待って、三国志の世界で神と対峙したって事は神を見たのよね？」

「ああ、あのデカイ蛇モドキが本当に神だと言うんならね」

「その、蛇モドキは神じゃないのか？」

「俺のこの身体での父親が呼び出して喰われ、融合した時に神じゃなくなったと思うがね……実際の所、その父親が神と言ったから便宜上そう言っただけだけど」

「どういう事かしら？」

ゆりが問う。

「何となくだけど俺はこう思うんだ。
世界を作れるほどの力のある神や全てを知る神等は感情とかが乏いというか殆ど無いに等しくて神は世界にとってシステム的じゃないのかな～と」

「つまり、能動的ではいけないって事？」

「意志があるのならそれは神では無くなるとかか？」

二人が同時に俺の考えに答える。

「そう、俺の会った根源と呼ばれるモノは神か？と聞いた時、便宜上はと言っていた。
会話が成立している、と思っていたが、イマイチ感情が見えない感じがした」

あの短い時間の間で感じた感想。

「今まで読んだ神話の話だと神は意識を持っているみたいに書かれてるが、さっきも言った通り、大多数はゆりが言った受動的？みたいな感じが多いんじゃないかな？
人格があるのは力の弱い神とかなんだと思う。多分、人間との円滑なコミュニケーションをとる為なんじゃない？
それでも神と言われるだけあって強大な力を持っているんだろうけど……人間に想像できてしまうという点では最高神と表記されているゼウスもその実、下級神だという可能性もあるんじゃないの？
ピンキリ、というか下の上位みたいな？　そもそも神というモノに名前はあるのか？
もしかしたら名称なんかなくて表記出来ないとかあるかもしれな

いし。
　それとは別にしてもう一つ……そもそも何時だったかゆりが言っていたけど、神という言葉と存在を生み出したのは人間だ」

「なら、どんな形であれ神は居るんじゃないの？」

「あくまで俺の今までの経験やら知識やらでの考察なんだけど、それだって本当かも知れないし、間違えているかもしれない……絶対ではないだろうね。
　矛盾だらけの存在、それが神なんだろうさ。　その姿、形すら俺達は知らないし、わからない。
　俺の見たデカイ蛇みたいなのから、人、動物、無機物、龍等の架空の獣、概念、思念体、果てはこの空間そのものとかかもしれない。
　で、少し戻って、そこに神はいるのか？という疑問には結局の所、居るかも知れないが、ほんの一握りすらない特例以外では会う事は出来ない、俺はそう思っている。
　俺の会った根源というか名も無き者みたいにね。　で、その天使の事なんだけど……」

「その居るかどうかもわからない神が使わす者……本当にあの子が天使なのか否か……」

　ゆりが言う。

　当然、この疑問が浮かび上がる。

「そう、それ。　実際の所、この戦線の前提条件、天使というか神からこの世界を手に入れる事。
　天使を倒せば世界を手に入れられるってのは何所からの情報なんだ？

もし違った場合、この世界を手に入れる為の手掛かりが完全に無くなる」

俺のこの考えは間違えてはいない筈だ。

「天使は本当に天使なのか？」

「わからない」

「天使を倒せば世界を手に入れられるのか？」

「わからない」

「そもそも、もし天使が本当の天使ではなかった場合、天使は何所から力を得ているのか？」

「わからない」

俺の問いにゆりはわからないと答え続ける。

「わからないわからないわからない。　そう、俺達は天使の事を知らない、知らな過ぎるんだ。

まず、天使を知らなくてはこの世界を手に入れる手がかりすらわからない、そうだろう？」

「そう、ね」

ゆりは考え事を始めた。

音無は無言。

「さて、思ったより時間を過ぎた。　今はその天使がギルドに辿りつくのを阻止しなくてはならない。
それを終わらせてからでも遅くは無い筈だ。　何せ、この世界は今の所、永遠を保っているからね」

俺はそう言って立ち上がる。
二人も立ち上がった。
俺達は進み始めた。

地下最深部　ギルド入口

「やっと着いた～」

俺達は洞窟を抜け、広い場所に着いた。
ゆりが足元のハッチを開き降り始める。

「おお！　よくあのトラップの中を潜り抜けてきたな！」

ギルドの職人達が俺達を称賛してくれる。
が、そこで振動がギルドを襲う。

「また、掛かった！」

「近かったぞ！」

職人達が騒ぎ出す。

その様子を見ていたゆりが口を開く。

「現時刻を以てギルドを破棄、オールドギルドへ移る！」

職人達が反射的に反論を始めるが、髭モジャのギルドリーダーのチャーさんが一喝し職人達が爆破の為の発破を仕掛け始める。

てか、本当に高校生なのか？

見ようによっては三十のおっさんに見える……それは置いておいて、俺とゆりは梯子を登り、遅れて音無が登ってきた。

「あら、貴方も来たのね」

「ああ」

「御出でなすった……」

爆炎からゆっくりと歩みを進める天使……奏を視界に捕える。

両手には既にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃが出されている。

ゆりが跪いてベレッタ　Ｍ９２ＦＳ　Ｉｎｏｘを撃った。

その弾丸はジャイロ回転をしながら奏の左足に命中したのだが、弾が勝手に出てきて傷が塞がった。

回復力が並みじゃないなッ！？

「回復した？！」

「対応が早すぎる！」

ゆりと音無が驚愕の声を上げる。

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｄｉｓｔｏｒｔｉｏｎ」

奏に不可視のバリアが展開される。

俺は禍津を取り出し構える。

今回は時間稼ぎだ。

ならば、防御に優れた双鞭が良いと思ったので禍津を選んだ。

気で強化、先制攻撃をさせてもらうぞ！

「迅雷！」

奏に電気を纏わせた双鞭を雷ばりの早さで叩き込んだ。

奏はＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃで受け止めていたが、迅雷の威力にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃが折れ、身体に電気が流れたらしく制服などが焦げていた。

「ッ、Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・ＤｅｌａｙＶｅｒ．２」

目眩ましかッ！？

俺は堪らず距離を離す。

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ．２」

奏のＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃが長く、そして薄い刃に変わった。

俺は禍津を正面に交差させて防御の構えをとる。

奏が跳躍。

上段から俺に向かってＨａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ．２を振り降ろそうと頭上に刃を振りかぶった。

「音無君！」

「わかってる！」

二人の銃撃の援護が来た。

俺も大樹を取り出し射る！

銃弾はＤｉｓｔｏｒｔｉｏｎによって逸らされた。

俺は一息に５射。

頭と両腕と右足を狙った矢はＨａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ．２で弾かれたが、左足の矢が奏に命中し、地上に撃ち落とされた。

だが、やはり傷がすぐ治ってしまう。

立ち上がった瞬間に奏が真横に跳躍。

たったの一歩でゆりが刺せる位置まで移動した。

俺は即座に無影を投擲。

右足に何とか無影を巻きつける事が出来たが、Ｈａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ．２は刃が長いのでまだ届く！

音無が体当たりをして状態を崩す。

奏が強引に右腕を伸ばし、ゆりの胸に収ま――――――

――――らなかった。

ゆり自身が持っていたコンバットナイフで、自らＨａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ．２を逸らす事に成功。

左肩を掠るに留まった。

俺はすぐさま力の限り引っ張り、一本背負いの要領でギルドの入口の梯子の反対側へ叩きつけた。

そこでギルドの梯子のある奥の方から何か馬鹿デカイ砲台がせり上がってきた。

「三人共！　防空壕に避難しろッ！」

チャーさんの声が聞こえ、俺達は即座に防空壕に避難。

砲台が弾を発射した。

と、思ったら自爆した。

ギルド職人達が爆発に巻き込まれ、呻き声を漏らしている。

その中で砲台の指揮を執っていた職人が独り言を呟き始めた。

「うぅ……やっぱり、記憶に無いもんは適当には創れないな――――」

「「適当に創るなッ！！」」

俺とゆりは突っ込みと共に職人の鳩尾へ肘鉄を叩き込んだ。

「――――――ゲフォアッ！！？」

俺とゆりがその職人の腹に体重を乗せた肘を叩き込んだ。

防空壕の奥からチャーさんが古い手榴弾、確か通称ポテトマッシャーだったかを使って何とかしろと指示を出す。

職人達がピンを抜き投擲。

爆発が奏を襲う。

いくらディストー〇ョンフィールドを張っていても何所かの一方通行の様にベクトル操作をしている訳ではないので爆風までは防げない。

奏が爆風の傷を癒している内にギルドに仕掛けた発破を起爆装置で爆破。

奏ごとギルドを埋めた。

1人に対してギルド丸々一つを潰すとは随分と気前の良い話なぁ～。

そんな事を思いながら俺達はオールドギルドへ移動したのだった。

Episode9 Historical truth and Guild

これで二話終了ですね。
朱然さんの死因が明らかになりましたけど、まあ、後付けなのでおかしな所があると思います。
ですのでちょくちょく修正する予定です。

Episode10 Practice and Special Advi

取り敢えずこんな感じでどうでしょう？
駄目？

「何故新曲がバラード？」

「いけない？」

岩沢がアコギで弾いた曲にゆりが駄目だしをする。

やり取りの最中に音無が手を上げ質問する。

「そのー、陽動ってのは何なんだ？」

「トルネードの時、聞いてなかったの？」

音無の問いにメンバーが答えていく。

確かにそこいらのバンドより群を抜いて上手いし、迫力もある。

色んなバンドのコピーをしたが、学際レベルとかじゃ比較にならないな。

そんな事を思っていると天使エリアに再突入する作戦をゆりが提案した。

ギルドで俺が言った事も少なからず影響しているのかもしれない。

「その作戦ですか……ですが、前回は」

そう、前回はパスワードがあって調べられなかった。

俺もパソコンとかの電子系は人並み程度の知識しかなかったからな。

高松の会話をゆりは手で制した。

「今回は彼が作戦に同行する」

ゆりが座っている椅子を回転させ、脇に避けるとそこには奴がいた。

「よろしく」

ずっと後ろに隠れてたのか？

本名、竹山クライスト。

それにハンドルネームに本名は使わない方が良いんじゃ？って、そういう問題でもないか。

「椅子の後ろからッ？！」

「眼鏡被り……」

大山が驚き、高松が眼鏡キャラとしての存在を危惧するかのように警戒を始めた。

まあ、俺の様に女装キャラはそうそう現れんだろうから大丈夫だろう……って、自分で最早女装キャラだと思ってしまっているだと？！

これは由々しき事態だ。

何とかせねば……。

「ゆりっぺ、何の冗談だ？」

「そんな青瓢箪が使いもんになんのかよぉ？」

相変わらずメイドをしている俺が驚愕していた所で、野田と藤巻

が竹山の外見を見て難色を示す。

「まあまあ、そう言わないでくれる？」

ゆりが場を収めようとした所で竹山が正面に立ち、俺達に指を突き付けた。

「僕の事はクライストとお呼びください」

そう言った瞬間――――――

「ハァ！　なら、試してやろう！」

野田がハルバートを野田に突き付けて啖呵を切った。

「お前、友達いないだろ」

音無のブリザードな突っ込みを頂きました。

で、野田に対して竹山が取った行動は――――――

「フッ、3．１４１５９２６５３５８９７９３２３８４６２６４３３８３２７９５０２８８……」

円周率を数える事だった。

「ふぉあッ？！」

野田がハルバートを落とし、膝をつき、最後に両手で耳を塞ぎながら地面をのたうち始めた。

「やめろォォォ！　やめてくれェェェッ！　はっあァァァァ！！」

野田……そこまでアホだったのか……。

「まさか！　円周率だとォォォ？！」

「眼鏡被り……」

「止めてあげてッ！！　その人はアホなんだッ！」

五段が驚愕し、高松が己の存在を脅かそうとする新たな眼鏡キャラに警戒し、大山が嘆願する！

「そう、私達の弱点はアホな事！」

「自分で言うなよ……」

「リーダーが言うなよ……」

音無と俺の力の無い突っ込みが入ったが、ゆりは気にせず話を続ける。

おわッ？！

野田が白眼を剥き始めた？！

俺は野田を仰向けにして心臓の辺りに耳を当て心音を聞く。

心音停止だと？！

円周率で心停止って……って呑気に言ってる場合じゃねぇ？！

俺は即座に心臓マッサージを始めた。
野田の心臓が動き出した時にはミーティングは終わっていた。

俺は未だ気絶している野田を校長室に放置し、校内をブラブラした。
そして、音楽室に通りかかった所でガルデモが休憩をしていた。
俺は廊下に腰を下していた岩沢に近づいた。

「調子はどうだ？」

「顧問じゃないか！　練習を見に来てくれたのか？　それとも弾きに来た？」

「前の様にブラブラと散策中、でも……また弾いてみるのも良いかもね」

「そっか、ならこっちに……」

岩沢が俺を案内しようとした所で――――――！！」

「いっただきィ――――――！！」

俺のメイド服のスカートをガルデモのベース担当の関根に思いっきり捲られた。

邪気が無かったのでされるがままにしたんだけど、今時スカート

捲りって……。

「……あり？　無反応？」

「しおりん……駄目だよぉ……」

「だって気になるじゃん、みゆきち！
この学内本格パーフェクトメイドさんこと顧問さんって、男だって話なんだから本当かどうか確かめたいんだもん！」

「このお馬鹿ッ！」

ひさ子が関根の頭を殴った。
入江はオドオドしている。

スカート捲りの際に岩沢が腰を上げかけて、丁度俺の……何と言うか、その……股間あたりに顔が来た所でやられた訳で……。

スパッツを着用しているとはいえアレの膨らみが見えてしまう訳で、ソレを見た岩沢はフリーズした。

「……あー、すまない顧問、関根があんな事を……」

「気にしていない、直接見られた訳でもないしな」

「そ、そうか、それならよかった……」

岩沢が安堵する。

「ほらほらひさ子さん！　顧問さんだってああ言ってますし！　い

い加減離してくださいよ～」

ニヘヘーと笑う関根。

それを聞いたひさ子が更にヘッドロックしている腕に力を込める。

「ひさ子ざん！　ぐるぢい……」

俺は悪びれない関根にお仕置きをしようとひさ子の方に近づく。

「ひさ子さん、関根さんが俺に興味深々らしいから……ゴニョゴニョゴニョ」

「？　ふ～ん？」

俺は関根を捕まえていたひさ子に耳打ちして、それを聞いたひさ子はニヤリと笑った。

「……じゃ、後は頼んだ」

ひさ子が解放した関根を俺は荷物の様に肩に担つぐ。

「この可憐な乙女に対してこんな持ち方嫌――――――ッ！　せめて！　せめてお姫様抱っこを所望します！」

ジタバタと関根が暴れ始めるが俺はスルー。

空き教室に入りる。

それを見送るメンバー。

――――――えッ？！　何で鍵をかけるんですか？　ちょっと！

いきなり服を脱いで何を?!　というかナニをするつもりですか?!

そして――――――

――――――えッ?!　ちょっと!?　う、嘘でしょ?!　さっきの事は謝るから!!　こっちに来ニャアァァァァ!?

関根の悲鳴が木霊した。
入江はその声にビクゥッ!!と反応してひさ子の影に隠れた。
それから声が全く聞こえて来なくなった。

「しおりん……」

「あー、流石にあの悲鳴を聞くと気の毒かも……」

「どんなに罰をさせても反省しなかった関根があんな悲鳴を……顧問は一体何をしているんだ?」

数分後。

ガチャリという鍵の開く音を聞いた3人はビクゥッ!!と慄くガ

ルデモメンバー。
まず俺が教室から出て、真っ白になった関根を手を引きながらガルデモメンバーの元へ戻って来た。

「「「……」」」

「関根……次に何かをしたら……分かるよね？」

俺はニッコリと笑ってポンッと関根の肩に手を置いて耳元で囁いた。

「ピィッ？！」

（何をしたんだ？！）

（これからは顧問を怒らせないようにしとくか……）

（しおりぃぃぃぃん……）

今日この時から関根の悪戯が激減した。
で、使いものにならなくなった（ならなくした）関根の代わりにガルデモの練習に付き合った。
ベースもコピーして弾いたら驚かれた。
練習は日が沈むまで続いた。
関根は真っ白になったままだった。

はっはっは、私は関根ちゃんには完全ノータッチですよ？
何をしたかは内緒ですけどね、クックック……。

俺は暗くなった校内を散策する。

何か、夜の学校ってドキドキするよね！

そこで校内のガルデモのポスターを剥がしている天使こと奏がいた。

こんな時間にご苦労な事だな……。

「立華　かなでか」

「その格好は校則違反」

早速、何というか可愛らしい声をしているのに、淡々と話す所為で色々と勿体ない声で注意された。

「あー、これは俺の趣味とかではなくてだな……」

「違うの？」

奏は首を傾げて言う。

完全に俺の趣味だと思われている？！

というか、彼女は俺の事を何処まで知っているのだろう？

俺はそんな疑問をそのまま聞くことにした。

「俺の事は何処まで知っているんだ？」

「基本的なパーソナルデータ、今までの戦闘経験から推察できる戦闘力」

「性別知っててさっきの問いを俺に投げかけたのｋ「女装が趣味、最近のお気に入りはメイド服」ちょーっと待ってみようか？」

俺は即座にストップをかけたのだが――――

「それが個人の性癖なら仕方ない」

「ちょっと待て！　本当に何でそんなしかたないみたいな話にッ？！」

俺は驚愕した。

「あー、まあ、それは誤解だ。　俺にそんな趣味はねぇ！」

「無いの？」

いやいや、チョコンと首を傾げて、上目使いというそんな可愛らしい仕草で見られると抱きしめたくなる気がしないでもないというか問答無用で抱きしめたいのだが自重だここで理性に負けてはいけない自重自重、よし！

「無い。　で、こっちから聞きたいんだが、君は……面倒だから奏と呼ばせてもらうけど、奏は天使なのか？」

「違うわ。　私は生徒会長」

動揺も何も無いか……。

「奏はこの世界の事は何処まで知っているんだ？」

「知らない」

即答する奏。

「奏はどうしてここにいる？」

「それは……」

言葉を詰まらせる奏。

「言えないのか？」

「お礼を言う為」

「お礼？　誰に？」

「私に……命をくれた人」

どういうことだ？

奏は天使というかＮＰＣではないと常々思っていたが……。

「そうか……それは誰だ？」

「名前は知らない」

「なら、奏の知っている情報を俺にくれ。　そうしたなら俺も探すのを手伝うよ」

「どうして？」

また首を傾げて問う奏。

「確かに俺と奏は敵同士だが、だからと言って手伝っちゃいけない、なんて事は無いだろう？
でも、今はまだ仲間の方が俺にとっては重いけどな」

俺はニヤリと笑う。

「いいわ」

「その返事は……ニュアンス的に断わってるんだよな？」

「ええ」

「俺が敵だから？」

「貴方はこの学校の生徒で敵じゃないわ」

当然の様に言う。

「なら、もう見つけたのか？」

俺のこの問いにコクッと頷く奏。

「そっか、よかったな」

俺は笑った。

「ええ」

奏も始めて笑った。

とても可愛らしかった。

「じゃあ、困った事があったら俺に言ってくれ。　出来る範囲で手伝ってやるよ。　お互いに殺し合う様な間柄だけどな」

「覚えておくわ」

そう言った奏のお腹から可愛らしい音が鳴った。

「？」

「えーっと、腹減ってるのか？」

奏は答えない。

「何かあったっけか？」

俺はガサゴソとポケットの中を調べる。

お、何かあった。

俺はポケットにあった物を取り出した。

麻婆豆腐３００円。

おおぅ、よりによってコレかい……。

学食ではあまりの辛さに誰も頼まない麻婆豆腐の食券だった。

何故、辛い物が嫌いな俺がこんなものを持っているのかというと、日向がフザけて食券の券売機でボタンを押す所でコレを押しやがったんだ。

いつかこれを罰ゲームとして日向に喰わせる為にポケットに入れっぱなしにしていたのだ。

因みに日向には後で鉄拳制裁した。

「すまん、麻婆豆腐の食券しかないや……」

俺は奏に謝ったのだが……。

ジ――――――ッ。

メチャメチャ視線が食券に釘付けです。

何度が食券をアッチやコッチに動かすと餌を待つ子犬の様に視線がそっちに向いて、何か罪悪感がｐ。

「いる？」

コクッ

「どうぞ」

「ありがとう」

俺は奏に背を向けて帰ろうとした所で――――

俺のスカートの先を掴んでいる奏がいた。

「奏さん？　そろそろ私めは帰ろうと思ったのですが……」

「食券を貰ったお礼に私も何かを……」

俺はそこで奏の会話を止める。

「なら、俺が困った時に助けてくれ」

「わかったわ」

ん？

これは俗に言う餌付け？

取り敢えず今回の収穫は――――

奏は天使ではなく、ＮＰＣではない。

にも拘らず、模範生的に生活していると消えるのに残っている。

消えるのは模範生的な学生生活をする事、自分が納得してしまった時。

だが、強い願いがあれば消えない？かもしれない。

そして、まさかの激辛麻婆豆腐が好物。

一応、困った時に助けてくれるかも？

こうして俺は奏と別れ、寮に帰った。

Episode10 Practice and Special Advice

今回はクライスト参入、ガルデモメンバー関根にトラウマを植え付ける、天使に餌付けの三本でお送りしました。
関根とか入江の口調なんて覚えてないのででっち上げです。
本編でも二言三言喋った、のか？と忘却の彼方へ行ってしまいました。

次回は一話、間を入れて三話後半を書こうと思います。
ではではー

Episode11 Instructor and Special Adv

今度はきちんとものを教える朱然さんという話を書いたつもりです。

Episode11 Instructor and Special Adv

「訓練を開始する！」

俺の声が校庭に木霊する。

何か某悪魔の出てくるブラックスミスが鍛練を始めそうな掛け声だがスルーしてくれ。

不法占拠したグラウンドには戦線メンバーがいた。

ゆり、五段、藤巻はやる事があるらしく欠席。

「特別訓練って何をするんだ？」

手を上げた音無が言う。

「特別訓練ってのは顧問がそれぞれに適した動きやら戦闘スタイルやらを指摘して教えてくれんだ。

受けといて損は無いぜ？」

日向が俺の代わりに説明した。

「へぇ～」

「それぞれ鍛えたい事を勝手にやるように！」

「ちょっと待てッ！」

音無の突っ込みを華麗にスルーしてやりたい事を始めるメンバー達。

「ん？　どうした？」

「こういうのって普通、基礎トレとか、皆共通のメニューをやったりするんじゃないのか？！」

確かに普通ならそうだろう……だが……。

「それだと非効率だ、今参加している数でそれは寧ろ悪い。　やりたい事を伸ばしてやる方がコイツらにとっては効率が良い」

「それにしたってＴＫとか踊ってるだけだぞ！？」

「Ｔｕｒｎｉｎｇ　ａｒｏｕｎｄ，　ｂｒｅａｋ　ｄａｎｃｅ！」

ＴＫが逆さになって、頭だけ地面について物凄いスピードで回転をしていた。

頭の下にはご丁寧にマットが置いてある。

何か見てるとギュルギュルと音がしそうなスピードだな……。

「あー、ＴＫはよくわからんからアレでいい。　何気に身軽だし、戦闘のセンスもあるんだ……あんなんでもな」

――――ギュルギュルギュル！

本当に聞こえてきた。

ＴＫの頭皮がちょっと心配。

「ホントか？！」

何気に野田と椎名の次くらいの実力があるんだＴＫ。
いや、ホントに。

強さ表的には――――――

俺＝奏＜常人には越えられない壁＜椎名＝ゆり＝野田＝ＴＫ＜五段＜高松＝藤巻＜日向＝大山＜音無＆他＝クライスト

と言った所だろうか……まあ、一概には言えないけどね。

「で、俺は何をしたらいいのかが分からないんだが……」

「じゃ、接近戦の指南でもしようか」

「わかったよ……」

音無が素直に了承する。

「んじゃ、まずは立ち方かなぁ」

「立ち方？　そんなのが接近戦とどう関係があるんだ？」

「武道とかに役に立つ。　人間って動物としては結構、異常なんだぞ？
二足歩行ってのは高度な姿勢制御を持っているという事だし、本来二足歩行というのは不安定なものなんだ」

「へぇ～、自動車と自転車みたいな感じか？」

「そうそう、じゃあ音無君、電車の中でしっかりと立ってみてくれと言われたらどう立つ？」

「は？　こうか？」

音無は身体に力を入れて踏ん張った格好になった。
俺は音無に近づいて人差指で背中を軽く押した。
すると、音無の身体が簡単にグラついた。

「おわッ！？」

「まあ、こうなる訳だ。　実際、足を踏ん張って身体を固くすれば固くする程揺さぶりに弱くなってしまうのだよ」

「へぇ～」

音無が感心した声を上げる。

「じゃ、俺を押してみたりしてくれ」

音無が俺を押すが、態勢は崩れない。

「無駄に力を入れない事が立つ事の基礎の基礎の基礎だ。
日本や中国の古い武術……古武術なんかはまず、真っ直ぐ立つ事を教えるんだ。
中国の太極拳だと立身中正（りっしんちゅうせい）……まあ、さっきから言ってる真っ直ぐ立つことを練習する」

「よくそんな事知ってるな」

「使えるものは何でも使う、使わなければ生き残れない世界を回ってきたからな」

「前の世界か……」

「ホント、よく生き残れたと思うぜ」

俺は明後日の方向を向いた。

頬に流れているのは汗ですよ？

「あー、苦労してんだな……」

「まあ、それは置いておいて、音無は姿勢は良くも無く悪くも無い。でも、ちょっと猫背だから真っ直ぐ前を見て耳が肩の上に来る位まで顎を引いてくれ、首が楽になる位置がある筈だ」

「ホントだ」

「それだけでも身体のバランスが格段に良くなる。で、次は肩幅に足を開いて立って足の裏をぴったりと地面につける事、それで自分は空を飛べるっていうイメージをする」

「イメージ？」

頭にクエスチョンマークが浮かぶ音無。

「その上で更に足の裏にくっついた地球を持ちあげる様に上に身体を伸ばしていけばいい」

「イメージって言ってもな……」

音無が困惑する。

まあ、いきなりイメージしろって言われても出来ないよなー。

「あんまり好きじゃないんだけど……」

俺はそう言って四つん這いになる。

「？　何やってるんだ？」

「俺に座れ」

「は？　顧問……そんな趣味が？」

「違うッ！　これはさっき言った自分は空を飛べるっていうイメージを体感する為のものだ！
断じて俺の趣味じゃない！」

俺は立ち上がってまくし立てる。

流石にM疑惑まで浮上するのは頂けない！

で、改めて四つん這いになる。

「じゃあ、遠慮なく」

音無が俺に跨った。

「だァァァッ！！」

俺は気を使って身体を瞬間的に強化して立ち上がった。
音無が後ろに勢いよく吹っ飛んだ。

「お前が座れって言ったんだろ？！」

音無が起き上がって後頭部を抑えながら抗議をする。

「誰が跨れと言った、座れと言ったんだ！」

「紛らわしい言い方をするなよ！　だったら始めから椅子みたいに座れって言えば良いだろ！」

「そんな事はどうでもいいからさっさと座れ」

「わかったよ」

音無が俺に座る。

「で？　これからどうするんだ？」

「膝を上に上げてみろ」

音無が俺の言った通りにするが、殆ど膝は上がらない。

「あんまり上がらないぞ？」

「丁度、その感覚に似ているんだ。　その感覚を立ったままでやれ」

「あ、ああ」

半信半疑で音無は言われた通りにする。

「太腿とか腹に力が入る……」

「うむ、それが正しく立つという事だ。　後は自分で復習でもしてくれ」

「……」

音無が無言でこちらを見る。

「何だ？」

「いや、唯のメイド服を着た変態じゃなかったんだな、と……」

「一回地獄巡りにでも旅立つかワカメ？」

「ヒィッ？！　って、何故か一瞬卑屈になった様な……？　でも、地獄巡りは勘弁してください！」

結局、十分に卑屈だった。

「師匠！」

「前の再戦だ」

音無の指導が終わった所で野田と椎名が立ちはだかった。
野田はハルバートを持ち、椎名は小太刀二本を持って対峙する。

「ふむ、今回は何かハンデつけるか？」

「いらん！」

「無用だ」

「じゃあ、今回はやっと特注していた俺の銃達が出来たのでお披露目だ」

フッフッフ、やっと出来たぜ俺の銃達……。

「んじゃ……いざ尋常に……」

俺は腕を勢いよく振り下してから正面で腕を突き出す。
すると両方の袖口からスリーブガン化したＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍが飛び出す。

あ、Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍってのはブラック◯グーンに出てくるこの銃の持ち主のファビ◯ラのＦね。
ＭＡＧ－７って連射出来ないらしいのだが、上記の人物が漫画とかアニメで連射していたので出来るようにしたって事でＦ－Ｃｕｓｔｏｍ。
他にもたくさん特注銃を作ってもらっている。

ギルドに漫画のカスタム銃を作る事に命を掛けるショット田中というのが居て、頼んだら喜んで引き受けてくれた。
変態双子の銃とか、Ｓカトラスとか、同じメイド繋がりの銃とかね……八卦八武装（せんてんはっけ）も改造してみようかな？
手始めに大渦を扱きの部分をパイルバンカー化してみたりとか…
…後は概念とか魔法を込めた弾薬でも創ってみるか？
うーむ、久しぶりに創作意欲が沸き上がってくるぞ～。
何はともあれまずは模擬戦をしますかねッ！

「「勝負（だ）ッ！！」」

俺達は走り出す。
まず、椎名の手裏剣が投擲される。
俺はＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍをガンカタ弾く。
その隙に至近距離まで距離を詰められる。
俺は発砲。
発射された散弾は魔眼を使っていない為、大きく回避され掠りもしなかった。
背後から気配を隠す気の無い野田がハルバートを振りかぶり上段からの一撃。
ＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍを頭上でクロスさせ受け止めると同時に膝を曲げ、しゃがみ込む。
そこから右足を起点に左足だけの足払い。
野田は足払いに掛かり態勢を崩す。
そこをＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍで乱射する。
野田は即座にハルバートを捨て、腕をバネに銃撃を避ける。
そこで正面から小太刀が俺の頭を鋏の様に三等分にする軌道で襲いかかる。
即座に後ろに倒れ込みながら両手を着いて、バク転しながら二本の小太刀を上へ弾き飛ばした。

倒立の状態になった所で魔眼を発動し、左腕のＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍを未だ小太刀を弾かれた衝撃で万歳している格好の椎名に掠る軌道で発砲。

命中。

椎名は左太腿を抉られ、血が舞う。

それを見届ける間もなく、野田が未だ倒立している俺に拾ったハルバートで横薙ぎ振る被って来る。

即座に足を着き、右手のＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍを野田の顔面に投げ捨てる。

野田はＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍをハルバートの柄で弾いた所で無手になった右手で野田の首を確保。

そのまま地面に後頭部を叩きつけ、左手のＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍを突き付ける。

「はい、終ー了ー」

「クッ！！」

「無念……」

「前より若干連携が取れてきたな。　でも、未だに自分の武器に居着いているな？」

居着いているというのは拘っているという意味。

「別にいけないと言う訳ではないけど、意識はしておくように」

「わかったぞ師匠！」

「覚えておこう」

二人は離れていった。

そんな感じで――――――

――――ギュルギュルギュル！

「Ｈａｈａｈａ！」

何かＴＫがどこぞの通販外国人のアテレコみたいな笑い方をしながら高速回転していたのを見ながら、やっぱり、あんな速度で回転する事によって起こる摩擦にＴＫの頭皮が心配だ。

ＴＫの心配をしながら訓練は過ぎていった。

Episode11 Instructor and Special Adv

次は三話後半の話です。

この様ないつも批判に怯えながらビクビクと書いている小説をお気に入りしてくれた８２０人の皆様と目を通してくださる読者様に感謝を。

ではこれにて失礼！

Episode12 Her sing song and Special

三話のラストです。

Episode12 Her sing song and Special

体育館　舞台袖

ついに天使エリアに再侵入する日がやってきた。
俺はガルデモのバックアップに動く事になった。

［オペレーション・スタート！］

通信機からゆりの合図が来た。
俺はガルデモの舞台袖に居る。
遊佐さんが淡々と指示を出している。

「顧問！」

「どうした岩沢？」

岩沢がこちらに寄って来た。

「ファンが待ってるぞ？」

「何て言うのかな……言わなきゃいけない気がしたんだ」

岩沢が変な事を言う。

「何を？」

俺は原作を知っている。

だから、だろうか……。

「頼んだ」

たった一言。

それは一体、何に対しての“頼んだ”なのかｐ。

「頼まれた」

その一言を聞いた俺は反射的に答えていた。

それを聞いた岩沢はニッと笑って舞台へ上がった。

「さて、まずはこのライブを邪魔する奴らの排除か……」

［こちら突入部隊、これより突入する］

ライブが幕を上げ、演奏が始まった。

客入りは少ない。

食堂のゲリラライブの半分程でもない。

大概はもう寮に居る時間だ。

それに業を煮やしたのか岩沢がＡｌｃｈｅｍｙを引き始める。

メンバーはすぐに追いつき引き始めた。

そこで入口のドアが開けられ、教師ＮＰＣが現れた。

「コラ！　お前達！　何してる?!」

「大人しく寮に帰れ！」

それに対してファンのＮＰＣが反抗をする。

「やだよッ！！　ぜってぇ見てぇもん！」

「そうよ！　お前らこそ帰れッ！」

「そうだそうだ！」

俺が無影で教師ＮＰＣを拘束しようとした所で奏が現れた。

「奏……邪魔するのか？」

「いいえ、私ではなく先生達が止めるわ」

「その先生を俺は妨害させてもらう」

「それなら私は貴方を止める」

「なら俺は手を出さない……だから、この演奏が終わるまでは手を出さないでくれ」

俺は頭を下げた。

それを見た奏は了承した。

「……わかったわ。　私は何もしない……でも、先生達に止められるわよ？」

観客の波を掻き分け教師達が壇上に辿りついた。

ガルデモメンバーと舞台袖の遊佐さんとモブ戦線メンバーが拘束される。

「捕まった、か……だが、俺が動かない事で最大の障害であるお前を止められてる」

「そう……」

［データを今コピーしてるわ！　もうちょっと時間を稼いで！］

遊佐から聞いたのか、インカムからゆりの指示が聞こえてきた。

無茶を言ってくれるな……演奏が止められてるんだぞ？

「私の出番は無くなったみたい」

奏が踵を返した。

「待てよ……まだ終わってない。　どんな形であれ、一度来たんなら最後まで聞いていけよ……」

「？」

俺は呼び止めた所で、教師の一人が岩沢の大事にしていたアコギを持ちあげる。

「……るな……それに、触るなぁぁぁぁぁ――――――ッ！！」

岩沢は教師を振り切ってアコギを引っ手繰り、構える。

体育館入口の俺達にまで岩沢の叫びが木霊する。

ひさ子が不意を突いて抜け出し、放送室へ駆けだす。

校内のスピーカー全ての電源をひさ子がオンにした。

そして――――岩沢は歌いだした。

三日前に校長室で聞いたあのバラードだ。

曲名は……Ｍｙ　Ｓｏｎｇ

それが彼女の歌いたかった歌。

帰りかけた奏も振り返って聞き始める。

そして、最後のフレーズに入る。

さっきまで熱狂的だったファンも、止めに来た教師も動かず、その曲を聞く。

俺はステージ上の岩沢を見る。

今の岩沢の姿は、とても輝いて見えた。

岩沢も俺を見た。

お互いの視線が交差する。

岩沢が一瞬だが、こちらに微笑んだ気がした。

――――ありがとう

瞬きをした一瞬の内に岩沢が消え、アコギが音を立てて落ちた。

そこに岩沢は居なかった。

消えてしまったんだ……。

「……」

奏は踵を返して帰っていき、俺は止めなかった。
俺は未だに消えた岩沢の場所から……目を逸らせなかった。

翌日　校長室

「分かった事をまとめてくれ、ゆりっぺ」

日向がゆりに言う。

「天使は自分の能力を自分で開発してた。　それは奇しくも私達が武器を創る方法と同じだったのよ」

ゆりは考え事をしている時の癖なのかウロウロと歩き回る。

「それってどういう事？」

「確信が無いの……今はまだ言えない……」

「何でだよ水臭ぇぜ、ゆりっぺ」

ゆりは窓の外を見てから席に座った。

「では、もう一つの案件です。　岩沢さんは何所に消えてしまったのか？」

高松が校長室の真ん中に岩沢のアコギを置きながら言う。

「天使に消されたんじゃないのか？」

野田が思いついた事をそのまま言う。

「ライブ中だぞ？」

日向が野田の発言に反論する。

「じゃあ、何が起きたっていうんだ？」

野田が喧嘩腰に日向に言う。

「誰が一体、岩沢さんを……？」

大山が俯いたまま呟く。

沈黙が続いた所で俺は口を開いた。

「アイツが……岩沢が……歌いたかった歌を歌った。　そして……満足して消えた。　それが岩沢の消えた真相だろう」

その言葉に校長室のピリピリしていた空気が幾分かマシになった。

「では、今日は此処で解散！」

ゆりの言葉にメンバーがぞろぞろと出ていった。
俺とゆり以外が居なくなった所で俺はゆりに言う。
「天使は天使ではなかったか？」
「考察中よ」
「彼女はそもそもＮＰＣじゃないと俺は思ってる。というか、彼女はＮＰＣじゃないぞ？」
「何ですって……？　何故断言できるの？」
バンッと机を叩いてゆりが立ち上がる。
「直接会って話を聞いた」
「なら、今回の作戦の意味が無かったって事？」
「今回の作戦で収穫はあっただろう？　天使は自らの能力を開発していた。
何故そんな事をしなくてはならないのか？　天使ならば神から能力を授かるんじゃないのか？
今回の事で天使が天使で無い事を裏付ける事が出来ないが、もし天使が天使じゃなかった場合……」

――――この世界には神は存在しないという最悪の答えに辿りついてしまうと考え至ったんじゃないか？

「……ッ！！」

考えを見透かされているかのように言う俺に対し、俺を睨みつけながらゆりが言う。

「そうよ……当然その答えに辿りついた。　次は天使に揺さ振りをかけていくプランを考えてた。
揺さ振りをかければＮＰＣもしくは天使じゃなければ何かしらのアクションをすると思ったから……でも、今の顧問の言葉でそれをする意味が無くなったかもしれない」

「だが、やるんだろ？」

「ええ、やるわ。　でもその前に……ッ！」

ゆりがベレッタＭ９２ＦＳ　Ｉｎｏｘを抜き、俺を狙う。
そのままゆりが俺に近づき、心臓の位置にベレッタＭ９２ＦＳ　Ｉｎｏｘを突き付ける。

「貴方が天使と会って重要な情報を黙っていた事。　それによって実行しなくてもよかったかもしれない今回の作戦の事。
更にそれによって消えてしまった岩沢さんの事。　そして何より、私の思考を見透かした様な言動が気に入らないわ」

「……撃つのか？」

俺のその言葉にゆりはキッと顔を上げ、左腕で地面に引き倒されマウントを取られる。

少しの沈黙の後、ゆりは口を開いた。

「貴方がさっきの情報を言っていれば岩沢さんは消えなかったかもしれないわ。

消えてしまった人はもう戻らない……それを今更言っても仕方ないからもう言わないけれど……同じような事を次にやって、消えなくても良かった誰かが消えてしまったら……こんな程度じゃ済まさないわ」

ゆりはそう言って校長室から出ていった。

「後頭部が痛ってぇ……まあ、黙ってた俺も俺だしなぁ……今回の事は自業自得か……」

俺は倒れたまま痛みが治まるのを待ち、治ってからもしばらく倒れたままでいたのだった。

Episode12 Her sing song and Special

頼んだ言われてんのに朱然何もしてねぇ！
自分で書いてるのに自分で突っ込んでしまった・・・・・。

更にゆりに余計なこと言うから銃突き付けられたりと今回ちょっとダメダメな朱然さんでした。
まあ、ゆりに情報を隠してたんだから書いた通り自業自得なんですけどね・・・・・・。

うーん、どうした物か・・・・・。
このゆりとの亀裂が広がって朱然さんを戦線メンバーを離脱させるか、それともその亀裂を乗り越えて戦線メンバーといるかで迷い中・・・・・。
離脱した場合だと天使と合流して、生徒会に入るとか、一人でゲリラ戦になるかも・・・・・・。
本当に迷うなぁ～という感じですね。
因みに朱然用のイレギュラーをこの世界に投入予定です。

何にせよ、書いている以上は書き切りたいと思っているので更新は不定期ですが投稿は止めないつもりです。
というか、魔法世界に行きたい・・・・・・主にネギまとリリなの辺りは。
何かご意見等があったら気軽にコメントの一言の欄に書いてください。

Episode13 Newcomer and Baseball and

あんまり代わり映えが無い回になったので、四話丸々一気に書き切りました。

Episode13 Newcomer and Baseball and

「コイツが岩沢の替わりだと？」

「在り得ぇねぇ」

相変わらず野田と藤巻は否定から入るな……。

「ユイって言います！　よろしくお願いしまっす！」

はい、４話ですね～。

相変わらず俺はメイドさんです。

頼んでいた銃もほぼ全て完成したので、寮の部屋に隠してあります。

そして絶賛、銃火器装備中です。

ちょっと重い……。

「誰コイツ？」

今日集まってからずっとボーッとしている日向がユイに気が付き、突っ込みを入れた。

「お前、何も聞いてなかったのか？　ガルデモのニューボーカル候補だよ」

音無が日向に今の状況を簡素に伝える。

「良いですか？　ガールズデットモンスターはロックバンドですよ？」

「アイドルユニットにでもするつもりか？」

高松と五段もユイがガルデモに入るのは乗り気ではない様だ。

「ッ、ちゃんと歌えますから！　どうか聞いてから判断してください！」

ユイがＧｉｂｓｏｎ　ＳＧを構える。

「形だけは様になってるな……」

野田は相変わらず懐疑的というか何というか……因みに俺はストリートライブをしているのをよく見かけるので何気に知っていたりする。

地道に努力しているのがわかる演奏だった。

そうこうしている内にユイの演奏が始まった。

曲目はＭｙ　Ｓｏｕｌ，Ｙｏｕｒ　Ｂｅａｔｓ！

順調に歌い始め、いよいよ終盤に入ってきた。

此処まで聞いて、歌とギター演奏のどちらかに集中するあまり少し荒くなる所はあるが、光る物があると思う。

が、ガルデモのイメージではない、というのが俺の考えだ。

「イエーイ！　皆ー！　今日は着てくれてありがとぉう！　ィヤッハーッ！！　グェッ？！」

終わった所でマイクパフォーマンスのつもりかマイクスタンドを蹴り上げた所で天井にスタンドの足が突き刺さって嵌り、マイクの

コードが首に巻き付いてセルフ首吊りを見る事となった。

アホだな……。

「「「「「うわッ?!」」」」」

その光景に戦線メンバーがどよめく。

というか、ドン引き?

「何かのパフォーマンスですか?」

「デスメタルだったのか……」

「何というか……随分だなぁ～」

「Ｃｒａｚｙｉｎｇ　ｂａｂｙ……」

だが、その本人はと言うと――――――

「し、死ぬ……」

死にかけていた。

「いや、事故の様だぞ?」

音無よ、冷静に突っ込みをするのなら助けてやれ。

だが、近付きたくないのか戦線メンバーは動かない。

仕方がない、助けるのか……。

俺が降ろしてやると、ユイはうつ伏せに突っ伏した。

「とんでもないお転婆娘ね、クールビューティだった岩沢さんとは正反対」

ヤレヤレといった感じで言うゆり。

「ガールズデットモンスターのリードボーカルとしては如何なものかと」

相変わらずクイッと眼鏡を押してから言う高松。

「別の者を探さないか？」

五段が提案をする。

「そーするか」

日向が同意をした所でユイの頭に怒りマークが浮かんで、生まれたての小鹿の様に足をガクガクさせながら四つん這いになる。

「コラー！　ちゃんと歌えてただろ！？　これでも岩沢さんの大ファンで全曲歌えるんだからなッ？！」

そして、ちゃんと二足歩行ができる姿勢になって、ユイが体全体を使ってキレた。

「心に訴えるもんが無かったよなー」

「ありませんね」

「無ぇな」

メンバー容赦ないなー。

辛辣な言葉にユイが更にキレる。

「コラー！　そんな曖昧な感性で若い芽を摘み取りにかかるなァーッ！！　お前らそれでも先輩かァーッ？！」

「やれやれ……ギター借りるよ」

「えッ？　あ、はい、どうぞ」

俺は困惑するユイのギターを借りて、構える。

「何するをするつもりかしら？」

ゆりが俺に問う。

「一応、岩沢の演奏はコピーしてる。
岩沢にあのライブの前に頼むって言われたからな……教えるのもやぶさかじゃない」

それが岩沢を見殺しにした俺にできる事だと思ったからだ。

「コピーって……」

「てか、そもそもギター弾けるのか顧問？」

戦線メンバーには一度もそんなそぶりを見せた事も無いから疑う無理も無いな。

「曲はさっきのＭｙ　Ｓｏｕｌ，Ｙｏｕｒ　Ｂｅａｔｓ！を弾くよ」

俺はラジカセの再生を押して曲が流れだす。

それに合わせて弾き出す。

昔のテレビの時の様に寸分違わないコピーを強要されているの訳ではないので、とある有名なギタリストの技術を使って自分なりのアレンジも加える。

だが、岩沢の気持ちまでは込められない。

なので、俺がこの曲を聞いて、素直に感じた思いを乗せて歌う。

「……ふぅ」

つい、歌った後に溜息をついてしまう癖が残っているなぁ。

そう思った時だった。

「や、やべぇ、鳥肌立ったぜ」

「う、うん、ゾクゾクしたよ」

「まさか此処までとは……」

戦線メンバーの評判は上々の様だ。

魔眼様々って所だろうな……。

「あ、貴女の、いいえ！　貴女様のお名前を是非是非、教えてください！」

ユイが物凄い目をキラキラさせて俺に詰め寄ってきた。

「しゅ、朱然だ。　戦線のメンバーには特別顧問とか顧問と呼ばれている」

か、顔が近ぇ！

「朱然さんですねッ！　私、今の演奏を聞いてファンになりましたッ！」

「岩沢のファンなのでは？」

「確かに岩沢さんのファンでもあります！　ファンは一人にだけでなくてはいけないという法律もありません！」

「あ、ありがとう」

たじろぎながら礼を言った。

「で、顧問？　何で黙ってたのかしら？」

ゆりが良い笑顔で俺に聞く。

「言っただろ音無とゆりには」

「ああ、あの時の……別の事ですっかり頭から抜け落ちてたわ……」

「俺も?!ってギルド降下作戦の時か……確か、色んなものを即座にコピー出来きてテレビにも出たとかって言ってたあの事だよな?」

「「「「「テレビ?!」」」」」

神様に会ったって所で俺だった者の過去を、すっかり忘れてやがったなゆりの奴。

「あー、うん、生前……三国志の世界に行く前の普通の現代の時の話。

他人の演奏とかを一度見れば同じようにコピー出来るっていうのが話題になって何度か……有名なギタリストの人の技術を盗ませてもらった」

「それにしては気持ちもきちんと伝わってきましたが?」

クイッと眼鏡を上げて言う高松。

「俺は岩沢じゃないから、この曲を聞いて純粋に感じた気持ちをそのままに歌っただけだ」

まあ、コピーとはいえやっぱり練習しないとできない訳で……主にさっき言った気持ちを込めるとか、指使いとか、有名な人にレッスンして貰ったんだ。

「侮れねぇぜ顧問」

「流石、師匠だ」

「ああ、これでボーカルは顧問に決まりだ！って言いたい所だが、顧問は男だしなぁ。流石に女の格好が似合うからってバンドに入れても大丈夫なもんか？」

日向の言う通りだな。

「お、男ッ？！」

日向の男発言でユイが即座に俺からズザザザッ！！と後ずさって距離を取った。

「ああ」

ズビシッ！とメイド服を指差すユイ。

「メイド服を着て似合っているのに？」

「ああ」

ズビシッ！と次に顔を指差す。

「そんな顔なのに？」

「ああ」

バッ！と天を仰ぐジェスチャーをするユイ。

「そんな素敵ハスキーボイスなのに？」

「ああ」

最後に両手で自分の顔を覆い――――――

「私！　朱然さんに弄ばれましたッ！！」

なんて言ってくれやがった。

断じて俺のせいではない。

「その言い草はちょっと酷いだろ」

案の定な反応だったので、投げ槍な反応で返す。

「で、ゆり、どうするんだ？　顧問をガルデモに入れるのか？」

音無がゆりに聞く。

「駄目よ、天使との戦闘では顧問の戦力が無くなるのは正直厳しいわ」

「じゃあ、どうするの？」

「この娘をガルデモメンバーに会わせて大丈夫であれば、顧問が超スパルタで彼女に技術を叩き込んでもらう」

「駄目な時は？」

「ガルデモの無期限活動停止よ、残念ながらね……」

その意見に反対意見は出なかった。
おかしいバンドになるよりはそれが賢明な判断だろう。

「じゃあ、この話はガルデモのメンバーに任せるからこれで終わり。
少々時間を喰ったけど、球技大会が近づいているわ」

「参加はしないんだろ？　したら消えるんだろうし」

音無がそんな事を言うが、ゆりがそんなイベントをみすみすスルーする事はない。

「ゲリラ参加よ！　それなら消えないわ。　それぞれチームを作りなさい。
一般生徒に劣る様な戦績だったチームには死よりも恐ろしい罰ゲームよ」

ニヤリと笑うゆり。

解散した後、俺は屋上で流れる雲を眺めていた。

「球技大会とか面倒くさー」

そんなイベントはスルーするに限る。
で、しばらく屋上に居て太陽光で溶けていると日向達がやってきた。

「ごめんなー」

さっそくモブ戦線メンバーに振られたメンバーは日向、音無、ユイ、椎名、野田の五人だった。

そそくさと逃げ出そうと動いた所で――――――

「むッ、そこだッ！」

椎名の手裏剣で磔にされかけたので避けたら日向達の前に出てきてしまった。

「顧問！　いやぁ～探したぜ！」

日向が馴れ馴れしく俺の肩に肘を置いてきた。

いや、明らかに偶然だろ。

後、肘乗せんな。

「俺は忙しい、サラバだ」

屋上の柵に近づき、無影を使って降りようとした所で日向が回り込む。

「顧問は何所かのチームに入ったのか？」

「入ってない、この手の行事は面倒だからパスする事にしてる」

気とか、魔眼使えばファインプレーとホームランの大盤振る舞い

だし。
　正直、つまらんのさー。
「参加しないとあのゆりっぺの恐ろしい罰ゲームだぞ？」
「そんなん受けた所で俺がどうにかなるとでも？」
　内心、怖ぇがサーヴァントにまでなった事のある俺にどうこうなんて事……ゆりなら在り得そうだ……。
「それはそうだが……頼むよぉ～」
　日向に泣きが入り始め、腰の辺りにしがみ付いてきた。
　男が泣いてしがみ付いて、更に涙目で見上げてくるのはキモイだけだな……。
「傍から見るとメイドさんのバイトをしていた彼女に捨てられて、捨てられない様に必死にしがみつく変態オタクに見えますね……」
「あー、そう言われるとそう見えなくもないな……」
「浅はか也……」
　ユイの的確な指摘が入り、音無が顎の下に手を添えて言い、椎名がお決まりのセリフをボソリと呟く。
「見苦しいし、鬱陶しいな……なら等価交換だ。　俺はお前のチームに参加して何か俺にメリットがあるのか？」

「それは……あー、この全員に対して一度だけ絶対命令できるとかで何とか！」

手を合わせて言う日向。

「貴様！　何を勝手に！」

「お前の脳味噌、トロトロに発酵してんの、かッ？！」

ユイが日向にハイキックを繰り出す。

「ゴッ？！　くぉぉぉぉッ」

日向悶絶。

「浅はか也……」

チームメンバーから批判轟々。

ホント浅はかだな日向。

う〜む、絶対命令権か……ちと、足りん気もするけど、いつか役に立つ時があるかもしれんからまあ、いいか。

「仕様が無い、今回はそれで手伝ってやろう」

「やったぜぇ〜！　これで勝利に一歩前進だ！」

一人舞い上がる日向。

「アホですね……」

「ホントにな……」

ユイについつい同意してしまう俺だった。

結局、参加かー、面倒だなー。
というか何で椎名は竹箒を立ててんだ？
あ、集中力が足んないからだっけ？
よく覚えてないから曖昧だなー。

グラウンド

俺が仲間に入った後、ユイのファンを加え、何とか最低限の数を揃えて試合に割り込んだ。
俺が一番で入って一つ打順がズレた感じだ。

「さーて、適当にやりますかねー」

気で身体を強化、バットにも気を込め……溜めて、溜めて、溜めて……今！

左足で踏ん張り――――――

踏ん張って地面が沈んだ音がグラウンドに木霊する！

――――――捻りこむ様に、打つべしッ！！

快音と共にボールはホームランの柵どころか、校舎向こうの山に消えていった。
チームメンバー並びに相手チーム唖然。
「ホームラン！」
「流石師匠だ！」
やれやれ……。
次に二番の音無が一塁と二塁の間にいい当たりを打ったのだが、野田が何故がしゃしゃり出てきてバットとハルバートでボールの打ち合いが始まった。
俺はアホな弟子にお仕置きの意味を込めて、野田に気弾を撃ち込んだ。
野田は吹っ飛んでベンチに収まり、沈黙した。
「キャーッ、力技でアホを黙らせる所に憧れるー！」
ユイが騒いだ。
「アホだな……」
日向が呟いた。
場は騒然となった。
その後、日向が出塁。
四番の野田が逆手持ちでバットを振ってホームランを叩き出した。

攻守交代。

何故かピッチャーは音無で、これまた何故か音無がサイドスローでボールを投げた。

意外と運動神経良いな音無……。

で、ストライクを取った所でキャッチャーの野田がマスクを地面に叩きつけ、音無とボールの投げ合いを始めた。

俺は静かに近付き、野田に拳骨を落とした。

2塁、3塁間にヒットを打たれた所を椎名が竹箒を立てたまま飛び込んでファインプレー。

すげぇ、バランス感覚だな……俺？

当然、俺にも出来ますよ？

俺達はそんな感じで快勝していった。

俺は毎打席ホームランを連発するから野田と一緒に敬遠された。

いい感じで勝ち進んだ所で、ついに奏が現れた。

出場登録されてないとか何とか言ってきたが、日向は参加する事に意義があると言った。

「生徒会副会長の直井です。　我々は生徒会メンバーを発足しました」

てか、生徒会チームを発足しましたとか言ってるが、野球部のレギュラーメンバーじゃん。

まあ、打てれば負ける気しないがね。

そんなこんなでさっそく当たってしまった高松、竹山チームが生徒会チームに惨敗していく。

そして、生徒会チームが俺達とぶつかった。

「頭洗って待ってろよォ――――ッ！！」

「それを言うなら首だろッ！　頭は衛生上の身嗜みだッ！」

日向がアホな事を言ったユイにコブラツイストをかける。

「痛い！　痛い！　痛い〝でずッ！！」

で、俺達のチームは善戦した。

だが、如何せん外野がザル過ぎる。

因みに言い忘れていたが、俺の守備位置はファースト。

だから外野に援護に行けないのだ。

人選ミスだと思うんだがなー。

まあ、積極的に言うつもりもないし良いんだけどさ。

日向が外野を見て、俺もつられて見ると五段がうどんを喰っていた。

オイ、何故いる五段。
お前は竹山チームだっただろ……肉うどんか？
肉うどんなのか？！

「お前かよぉぉぉ！！」

日向が音無に向かって歓喜の声を上げた後、ユイに関節技をかける。

「ギブ！　ギブ！　ギブッ！　後でゴロ　ズッ！！」

最終回、ツーアウト一、三塁。
セカンドフライが上がった。
日向が捕球をしようとして音無が日向の名前を呼びながら日向の方に走る。

――――――そして、ボールが日向にのグローブに吸い込まれ

「隙ありィィィ――――――ッ！！」

――――無かった。

ユイが日向をエビ反りにして跨り、更に反らせる為に顎を極めていた。

「ウゴァァァァ――――――ッ！！？」

「さっきまでの関節技の恨みィ――――ッ！！」

日向が態勢を入れ替えて、日向がユイをヘッドロックし始める。

「お前、ざけんなよッ？！」

「ううう、ぐるじぃでずッ！　づぎはごらえまずッ！　ギブギブッ！」

どうやら日向がアレを取っていたら消えたらしい。

すっかり忘れてた。

取り敢えずユイ、ナイス！

そんな感じで球技大会は幕を閉じた。

Episode13 Newcomer and Baseball and

次回はテスト回です。
朱然さんも推進エンジンで飛ぶかも・・・・・・。

言い回しがおかしな所があったのでちょっと修正しました。

Episode14 Test and Special Advisor（前

テスト回です。
こちらも一話丸々書きました。

Episode14 Test and Special Advisor

「天使の猛攻が始まるわ……」

岩沢が消えて一月が過ぎた。

そんなある日の開口一番、そんな物騒な話題から今日は始まった。

「それはどういう事なんだ？」

音無が天変地異の中、無数の天使達と戦う妄想をしながらゆりに問う。

「期末テストだからよ！」

「期末テスト？　あー、因みにそれは……何故？」

音無の妄想は砕け散った。

「テストで良い点を採らせるのも生徒会長である天使の役目です」

クイッと眼鏡を押し上げて当然という風に言う高松。

「本当に天使かどうか……天使に揺さ振りをかけるわ！」

「何をどうするんだゆりっぺ？」

日向が聞く。

「天使のテストに細工するわ」

「意味なんてあんのかよぉゆりっぺ？　相手は無表情、無感情のあの天使だぜ？」

「大丈夫よ、意思が無くても周りは変わるわ。　何かしらのアクションくらいは起こすでしょ」

まあ、そうだろうな……更に言えば、前回のミッションで得た能力の自己開発、俺のもたらした奏はＮＰＣでは無いという情報を確かめたいのだろう。

「なら、メンバーはどうする？」

五段が聞く。

「フンッ、そんな事は女々しい奴のする事だ」

野田はそう言って出て行ってしまった。

「今回の作戦には……音無君、日向君、高松君、大山君、竹山君、顧問で行くわ！
そのテストを受ける根回しは済んでいるわ。　では、解散！」

試験教室

「テストの席順は最初のクジで決まるわ。　何としても天使の前の席を引き当てるのよッ！」

「いや、んな無茶言われてもクジって運じゃん……じゃ、俺からｐ6、流石幸運ステータスC、引きが悪いｐ」

メンバーもクジを引いていく。

「よっと……20、外れた～……」

額に手を当てる日向。

「11、天使からは遠いですね……」

落胆する高松。

「33、ハハ……全然ダメだ……」

力の無い笑みの大山。

「俺か……25、俺も遠いな……」

天使を見て言う音無。

「きゃーッ！　1番よーッて、何よッ！　このッこのッこのッ！」

引いたクジにあたるゆり。

「近くに居ないの?!　横でも前でも良いからッ！」

「一つ前です」

そんな中で竹山が一つ前を引いた。

「よっしゃあッ！！」

何というか、はしたないから全力でガッツポーズはやめてほしいp。

で細工の内容は、2枚の答案用紙を取ってアホな答えを書き、入れ替えて提出するというものだった。

「じゃあ、日向君！
答案用紙をすり替えるタイミングを見計らって、何かこの教室の全員が注目するアクションを起こしなさい！」

ビッ！と人差し指を日向に突きつけて言うゆり。

「んな無茶な……」

「貴方を何の為に入れたと思ってるの?」

「ええっ?!　そんな道化師役とは……ハァ」

日向は諦めた様に溜息を吐いた。

「想定外の事が起こっても慌てず、皆でフォローするのよ?」

メンバーが日向以外頷く。
そこで一つの問題が起こった。
「名前の欄には何て書けばいいんです？」
竹山が言う。
「天使」
「アホか」
高松が反射的に言った事に日向が反射的にダメ出しする。
「生徒会長で通るんじゃね？」
今度は日向が適当な事を言う。
「そうだよね～。　どうせ馬鹿な回答をするんだしそれでも通るよね～」
頭を掻きながら言う大山。
「いやいや、自分の名前すら書けないってアホ過ぎるだろ！　つーか、お前らが全員名前を知らないのが驚きだよ！」
音無が流石に庇う。
「知る機会なんて無かったもの」
「よくなかったなッ？！」

音無が突っ込みを終えた所で俺が口を開く。

「立華かなで」

「えっ？」

音無が声を洩らす。

「立華かなでだよ」

「何で顧問は知ってるんだ？」

「知らん方が可笑しいだろ？」

俺は音無の疑問に当然といった表情で返した。

そこで視線を感じ、ゆりに視線を向けるとこちらを睨むように見ていた。

何だ？

いや、この視線には覚えがある。

探っている目だ。

さては奏との関係を疑ってるな……いや、むしろかなでを疑っていて、自分で能力を開発している事を知ったから、能力を開発していないのに能力っぽい物を持ってる俺を疑っているのか……他人の過去なんて知る方法が無い以上、俺の過去が口から出まかせの可能性もある事を考慮すれば、寧ろ俺の方が胡散臭いかもしれん。

前回にゆりに銃を向けられた時、なまじ中途半端に原作を見ているが故に思考を見透かしている様な物言いをしてしまったのにも胡散臭さに拍車をかけてるし……何はともあれ、なるようになれ、だ

な。

テストが始まった。

真面目にテストを受けると消えるらしいので、普通に解きながらドイツ語で回答しておいた。

で、テストが終わった。

日向が意を決した様に立ち上がった。

「pクッ！　何じゃありゃ――――――ッ！！　グラウンドに超巨大なタケノコがキョキキョキと――――――ッ！！」

日向の声に全く興味を示さないＮＰＣ達。

「……うぅッ」

日向が力無く席に座る。

「アホ日向」

「馬鹿め……」

「たくッ、しょうが無いわね……」

――――――ポチッ。

「うぁッ？！」

ゆりが机の下で何かを操作した瞬間、日向の椅子の裏から推進エンジンが始動し、天井に激突した。

スローモーションになって、エンディングが聞こえた気がしたが気のせいだろう。

「ガハァッ？！」

そして墜ちる。

「はぁぁ……！！」

日向の悶絶の声が響く。

で

「貴方がミスした時の為に椅子の下に推進エンジンを積んでおいたのよ？　どうだった？　ちょっとした宇宙飛行士気分は？」

ゆりが凄く良い笑顔で悪びれた様子もなく言う。

「一瞬で天井に激突して落下したよッ！　つか、推進エンジンなんてよく作れたなッ？！」

「技術提供ｂｙ俺」

「顧問かよッ！」

「いやぁ……つい」

アイテム作成・改造のスキルの試しに……因みに前に言っていた大渦はパイルバンカーに改造した。

概念的にも遜色無い。

某カレー司祭の例もあるし、この際他のも改造しようかなと思ってるのだ。

ああ……改造がこんなにも楽しいなんてッ！！

「フォローしてあげたんだから感謝なさいよ」

未だ脳にダメージがあるのか、それとも怒りからか、ゆりと俺を往復しながら指差している指がカクカクしている。

ちょっと、面白い。

「作戦成功ね竹山君？」

「抜かりありません。　後、クライスト――――――」

「じゃあ、次は高松君！」

相変わらず、本名を呼んでもらえないんだな……。

「……」

「ッ！　私が何か？」

嫌な予感を感じているのかどもる高松。

「皆の気を引く役目ね？」

当然の様にゆりが言う。

「そ、それは日向さんの役割では？」

眼鏡を抑えたままで日向を生贄に捧げようと確認する。

その表情は眼鏡の光の反射で見えないが、相当焦っている。

「狼少年の話、知ってる？」

「繰り返される嘘は信憑性を失って行く――――――」

「そういう訳」

「ま、まさかその為に頭数をッ？！」

真意に気付いた高松がテンパる。

「さあ？」

白々しく明後日の方向を向くゆり。

「辞退をッ！」

「ふふん……やるのよ」

目は笑ってるが口元は全く笑ってない。

「諦めて飛べ、そして天井に激突しろ」

道連れにする為にポンッと高松の肩に手を置く日向。

「絶対に全員が注目する何かを考え出さなくてはッ！」

いつものクールキャラを取り繕う暇無く頭を抱えて思考に没頭し出した。

竹山が次の解答をどういう風に回答するかを聞く。

日向は飛ばなくていい事を指摘されると竹山が逆ギレした。

高松が変わってくれと嘆願するが、竹山は断った。

それを日向に指摘されると更にキレるのだった。

ゆりが大声で納めると、奏がこちらに来ようとするが、音無の機転で事無きを得た。

その代わり、奏に日向が０点疑惑が浮上した。

テストが始まった。

今度も普通に解きながらフランス語で回答しておいた。

で、テストが終わった。

「はい、じゃあ、後ろから集めてー」

世界史の先生が回収を促す。

高松は神妙そうな顔を上げ、行動を開始する。
ゆっくりと立ち上がる。

「あら、どうしたの君？」

突然立ち上がった高松に疑問を持った教師が問う。

「先生……実は私……着痩せするタイプなんです！」

右足を机に乗せ、バッと鍛え上げた上半身を曝け出した。

筋肉は素晴らしいが、ああなったら寧ろ俺的には負けだと思っている。
マッチョなライダーの容姿を持つ俺とか嫌過ぎるし。
ああ、元からマッチョっぽい征服王の事が嫌だと言っているのではないよ？

「どうですか？」

「分かったから座りなさい」

先生無表情。

「はい……ングッ！？」

先程とは違い、高松は回転を加えながら天井へと激突した。

「ドゥアッ！！」

そして落下。

「カハッ……」

その後、上半身裸のままゆりに呆れられた。

そして次は――――――

「立華さん！　こんな時に場所も選ばずごめんなさい！　貴女の事がずっと好きでした！　僕と付き合ってください！」

大山がヤケクソ気味に言う。

「じゃあ、時と場所を選んで」

一刀両断……大山に今度何か奢ってやろう……。

「そこ、座りなさい」

「はい……」

「あーあ、やっちまったなッ？！」

ミスをしたのは大山の筈なのに日向が、高松の時とは比べ物にならない回転で飛び、天井へダーツの様に天井に突き刺さった。

そして、昼休みを挟んでついに来てしまった。

「じゃあ、次は顧問の番ね」

「ああ、やっぱり巻き込まれるのか……」

やれやれと首を振る。

「あんまり驚いていない様ですね」

「秘策でもあるのか？」

慌てふためく姿を想像していたのか高松と音無が疑問をぶつける。

「強がってんだよ、流石に顧問でもこればっかりはどうにもなんないだろ。　顧問も一緒に飛ぼうぜ！」

俺は良い笑顔の日向をスルーしてゆりに聞く。

「ゆり、注目をさせられれば何をしても良いんだよな？」

「大概の事は許可するけど過激なのは無しよ」

「ああ、分かってる。　まあ、過激と言えば過激だが、害はほぼ無い」

俺は自信たっぷりに言った。

で。

「よし、鉛筆を置いて後ろから解答用紙を集めろー」

さて、時間だな……。

「フッ！」

俺は何となく造った釣り針を装着した無影を出して投擲した。

丁度、釣り上げる様な真上の角度から教室に居る奏を除く女子達に向かってね……。

手応えを感じた所で思いっきり引っ張った。

（フィーッシュッ！！）

俺の強化された腕力に釣りあげられないものなど……無いッ！！

その瞬間、強力な力に引っ張られ、座っていられない程の（主に上に引っ張っている）力に負けた女生徒達が一斉に立ち上がり、前後左右の四方向から同時に釣りあげられたスカート（スカート）と全男子の理想郷が全開で開放された。

そこには捲りめく、あ、字違った……ゴホンッ、めくりめく理想郷があった。

白、黒、赤、青、黄色、緑、ピンク、オレンジ、水色、その他のカラフルな色。

ストライプ、水玉、花柄、果てはバックプリント等の模様達。
フリル、レース、リボン、花等、シースルーの装飾。

それらが一斉に乱舞する――――――ッ！！

流石にノーパンの大人な人は居なかった。

居たら流石の俺も……いや、過程の話は止そう……。

「「「「「きゃあぁぁぁぁッ！！」」」」」

必死にスカートを戻そうとする女子達。
しかし、それは出来ない。

俺の約百年研鑽した気の練りを甘く見るなッ！
高々三十に満たない数で俺の強化された腕力に敵う筈がない！

「「「「「うおぉぉぉぉッ！！」」」」」

突然の理想郷全開によって雄叫びを上げ、感涙する男達。

ＮＰＣとはいえ男は男よ……。

流石に奏もこの状況には注目する。

因みに戦線メンバーはというと――――――

「ブフゥーッ？！」

吹き出す音無。

「うおぉぉぉぉッ！！」

ＮＰＣ達と変わらない反応の日向。

「「……」」

高松は不動だが、鼻から鼻血が出てる。

大山は顔を両手で押さえているが、指の隙間からチラチラ見ている。

ムッツリスケベめ……。

竹山は細工に必死で見ていない。

そして、ゆりは――――――

推進エンジンのボタンを持ってこちらを見て微笑んでいた。

スカートが釣りあげられ、絶対領域に守られていた（薄緑のリボン付きの）聖域が全開のまま――――――

俺、一瞬天国、即絶望。

――――ポチッ。

開いていた窓から推進エンジンによって窓から空の彼方へ飛び立った。

「手元が狂ったんダァァァァ――――――ッ！？」

俺の言い訳の悲鳴を残して……。

放課後、日向にも師匠と呼ばれるようになった。
だが、そんな師匠は嫌なので丁重にお断りした。

それから、奏の全教科０点の噂は広がった。
奏は生徒会長を辞任したと全校集会で話された。

本当の所は辞めさせられたんだろうな……。

その日の夜、トルネードを決行した。
ガルデモのライブ中に奏は現れたが、戦う事は無く食堂の激辛麻婆豆腐の食券を買うのも見えた。

やはり、この作戦は意味の無い事だったんだ。
少なくとも、俺にとっては……奏は人間だ。

音無が奏の激辛麻婆豆腐を頼んでいた。

「ハフッ、うおッ！？　一口で激辛ァッ？！　お、でも美味いぞ？
日向も喰ってみろよ」

汗をダラダラとかいて言う音無。

「え、嘘だろッ？　じゃあ……一口だけ」

麻婆豆腐を日向が口に運んだ瞬間――――――

「ふぉあァァァッ?!　辛いッ！　痛いッ！　辛いッ！　痛いッ！」

ダンッダンッ！と机を叩きながら言う日向。

「んん?　でも、この後から来るこの風味は何だ……?　確かに味わい深いかもしれない……!?」

意外と当たりメニューかもと盛り上がる日向と音無。

ゆりの方を見るとゆりは心此処に在らずといった風でカツ定食を食べていた。

日向達が五月蠅かったのか、ゆりが考えるのを一旦止め、音無にその麻婆豆腐が奏の買った物だと伝えた。

そして、またゆりは考え始めた。

今、神への糸口すら見つけられていなかったとでも思っているのかもしれない。

そんな事を推察している時だった。

ふいに音無が口を開いた。

「もしかしたら……今の天使なら、俺達の仲間になれるんじゃないのか?」

その呟きに藤巻や他の戦線メンバーが反対してその話題はお開きになった。

俺が食べ終わった所で、生徒会が食堂に押し入ってきた。

俺の覚えている原作知識は此処までだ。
これからどうなるのかは分からない。
もともと、俺が居なくとも最終回という物があるのだから此処で別れるのも手ではないだろうか？
ユイには超スパルタで技術は教えたから、もう一人でも大丈夫だろうし……。

俺はそのまま、されるがままに連行された。
中でも俺は天使と同格の戦闘能力を持っているからか、凄まじく頑丈な牢獄にぶち込まれた。
扉が閉まった後、扉の覗き窓から直井が覗きこみながら問いかけてきた。

「貴方は何者だ？」

「唯の不良生徒だけど？」

「貴方は僕が来たこの数年の間に居なかった人間だ。
生徒会長は……ああ、今は辞任したのでしたね……で、その立華さんと同格の戦闘能力を来た時から持っていた」

「そういうお前はＮＰＣじゃないな？　ＮＰＣはそんな事を聞かない」

俺達はお互いの問いを無視する形で話を進めていく。

「僕はこう考える……貴方こそがこの世界で神を決める為の選定者じゃないのかと」

直井の目が赤に輝く。

「さあ、教えてください」

「……」

「？　効いていないのか？」

直井が焦る。

「そんな程度の催眠暗示、俺には効かんよ。　唯、いつまでも聞かれ続けるのは面倒だ。
お前の問いに二つだけ答えてやろう」

俺の言葉を信じたのか直井が問いかける。

「なら、貴方は神の選定者か否か？」

「答えは否、俺は選定者なんて大した者じゃない。　朱然というれっきとした人間だ」

「では次の質問だ。　神に会った事はあるか？」

「答えは在るとも言えるし、無いとも言える」

「どういう事だ？」

素直な疑問が俺に投げかけられる。

「二つだけと言ったが、特別に答えてやる。　そもそも神の定義は

なんだ？」

「神の定義？　そんな物は決まっている。　僕が神だ」

そんな事を言う直井に以前、ゆりと音無にギルド到達前に話した神の考察を話してやった。

「そもそもお前、自分で神とか言ってるくせに神に会った事があるのかとか質問がアホだろ……」

「違う！　前任の神と会ったのかと聞いている」

「ああ、そういう事か……」

その必死な表情が失笑を誘う。

「滑稽だな……？　まるで虚構の王座にしがみ付く愚者の様じゃないか？」

クックックと俺は笑う。

「くッ！　とんだ見当違いだったな……そこで捕まっていると良い。全てが終わった後には僕が神に成っている」

直井はそう言って居なくなった。

Episode14 Test and Special Advisor（終）

朱然さんがエロキャラになってきた気がしますが、ギャグだとでも思ってスルーしてください。
書いているといつの間にかそんな感じになってしまうんですもの～。

今回に朱然さん用のイレギュラーを入れる予定だったんですけど次回に持ち越しする事にしました。

次回には意外な人物が登場します。
その人物を目前に言い知れぬ不安を感じる朱然さん。
この世界を調べ、浮かび上がる意外な人物達の名前・・・・・・。
朱然さんはこの世界の真実に辿りつく事が出来るのか!?
斯うご期待ッ!
みたいな展開になる予定です。
ではではー

Episode15 Suspicion and Avenger and

やっと書けた・・・・・。
先まで書いてみたらボロボロとおかしな所が・・・・・。
オリジナルの展開は難しい！
そんな訳でおかしい所は随時直していく予定です。

Episode15 Suspicion and Avenger and

あれからしばらく……恐らく一日か二日くらい経ったと思うのだが、備え付けられたベットで寝転がっていると気配を感じた。

「よぉ、愉快に捕まってるみたいだな？　兄弟？」

「誰だ？」

「オレだよ、オレ」

「ああ、お前か！」

「そうそう、そのオレだよ」

「成程、ってオレオレ詐欺かよッ！！　つか、つい乗ったけど誰だよ？」

つい乗ってしまったんだ。

悪気は……ちょっとあったけどさ……。

「復讐者のサーヴァントって言えばわかるよなぁ？」

俺はベットから飛び起きた。

「アヴェンジャーだと？！」

何でこんな所にサーヴァントが居やがる？！

戦闘力的には第四次聖杯戦争ですぐ敗退した事とｈｏｌｌｏｗでの描写からそんなでも無いと推察する。
宝具も自身の負っている傷を一度だけ相手に写し、自分と同じ状態に出来る物だから油断しなければそれほど危険ではない筈。
が、その存在していない存在がこの世界に居る事自体が既に危険だ。
俺も含めだがね。

「何でこんな所に、いや、この世界にお前が居る?!　お前は聖杯の破壊と共に消え去った筈だろ！」

「その程度でこのオレ様が消えるとでも思ってんのか?　ま、聖剣の一撃が当たって、消え去ったはずだったんだけどな……ちょっとした事情と私的理由っての?
そんなこんなで正確にはセイバーの宝具が大聖杯をぶっ壊す直前で止まってる所だ。　かの騎士王様の様にな……」

また面倒なのが……最初の恋姫の世界からイレギュラーが居ないから終わりだと思ってたのに！

俺は頭を抱えながらさっきの問いを聞く。

「だからって何でこんなとこに居る?」

「だから、ちょっとした事情と私的理由だっての」

さっきから同じ事ばっかりで話が進まん！

「じゃあ、そのちょっとした事情と私的理由ってのは何だ?」

「じゃあ、私的理由の方から教えてやるよ。
まずはお前のお陰でバゼットが助かった、だから繰り返しの四日間が再現されなかった。
つまり俺はお役御免となった訳だが、俺としてはバゼットをからかえなくなったのは頂けねぇし、イジれなくなったのも気にいらねぇ。
だからちょっとだけ嫌がらせしに来たんだよ」

「……」

俺は口を開かない。

てか、ホントに私的な理由だなッ！
唯の嫌がらせとか……。

「事情の方は……あー、何つーのかなー……聖杯に入ってた所為なのかねぇ……願われたってのがしっくり来んのか？」

疑問形でいうアヴェンジャーもといアンリマユ。

「願われた？」

聖杯に取り込まれていたが為に、この世全ての悪（アンリマユ）が誰かの願いに触発されてこの世界に来た？
誰の……？
そもそもこんなのを呼んでどうなる？
唯、呼ばれてしまっただけか？
でも何だ？
嫌な予感がする……。

「そうだ、俺のこの身体の、な……この世界だと存在してるのが中々に面倒だ……干渉して俺の意識を保ってられんのもここ等辺が限界か……時間がかかり過ぎたってのもあんのかねぇ……物語もいい具合に中盤から後半になってきてるみたいだしな。

じゃあな、精々真実を知って、俺を追い掛けながら苦しめよ？

じゃないと待ち続けた甲斐が無いからな……異端者！」

「ッ！　待てッ！」

俺は扉に近づく。

――――――近ヅクナ。

その姿を確かめる為に……。

――――――ソレヲ見レバ。

扉には覗き窓から見える目の部分くらいしか見れないからだ。

――――――必ズ後悔スルゾ。

俺は覗き窓からアヴェンジャーの姿を見る為に覗き込む。
だが、まるで煙の様に、幻だったかの様に、復讐者のサーヴァントの姿は無かった。

「何だったんだ……？　この言い知れない不安は……？」

だが、知らない訳にはいかない。
そうしなければならない気がする。
情報は少ないが、探すしかないか……わかっている特徴は声から男で覗き込んだ瞳の色と前髪の色から黄色人種、おそらく日本人。
ｈｏｌｌｏｗでは衛宮士郎の殻を被っていたが、この世界では別の……ＮＰＣの殻でも被っているのか？
いや、願われたって事は人間の筈だ。
となると戦線メンバー？
アイツの口調から言って、今までなりを潜めてただけ？
それにこの世界では存在を保つのが困難？
干渉というのはどういう事だ？
その願った人間の殻を被れないのか？
情報が少なすぎる……この世界は死なない世界、俺の苦しむ真実、願いによって呼ばれた復讐者、言い知れない不安、俺の元の名を知っている事。
わからない……それを知る為に、まずは此処を、出るッ！！

考察をやめた俺は扉を力尽くで破り、アヴェンジャーを探す為に戦線からも姿を消したのだった。

Ｓｉｄｅゆり

私達が直井君の襲撃を受けて次の日。
音無君の説得で直井君は一応仲間になった。
襲撃の時、顧問の通信用インカムに何度もコールしたのだが、繋がらなかった。
それが気になっていた。
あの顧問が、私達を無視する程の用事があの時点であったとは考えられないからだ。
直井君が顧問を最初に連行した時から監禁していたという事を聞き、今、私達（私、音無君、日向君、直井君）はその牢獄に向かっていった。
何でも天使を閉じ込める為に考案し、数年を掛けて創りだしたらしい。
全く、用意周到だわ……流石の顧問も救援に来られない筈だ。

「この階の一番奥です！　音無さん！」

「お前、相当性格歪んでるよな……」

「何だと貴様……？」

日向と直井がお互いに牽制し合う。

「止めろよ直井、日向も」

音無が止める。

そこで私達は牢獄“だった”場所に着いた。

「そんなッ?!　会長を閉じ込める事を想定して創ったんだぞッ?!」

直井が驚愕する。

「確かに、正攻法なら奏でも歯が立たなかったが、これは……」

「マジで洒落にならねぇな……何があったんだ?」

そこには扉部分どころか、扉周りの分厚い金属製の壁すら巻き込んで、放射状にブチ抜かれた跡があった。

「顧問がやったのかしら……?」

「催眠術が通じなかった事、そしてこの力……まさかあの話は嘘だったのか?　だとしたら……」

直井がそんな独り言を呟く。

「あの話とは何の事か教えてもらえないかしら?」

「何故、貴様に命令されなくてはならない?」

「お前の上司だからだよッ!」

スパーンッ！と音無が直井の頭を叩いた。

「い、痛いですよ音無さ――――――」

「で、その話ってのは？」

「――――――それはですね音無さん、僕は彼を此処に捕まえた時、聞いたんです。

貴方がこの世界で神を決める選定者なのではないのか、と。

本人はすぐに否定しましたが、会長の様に能力を自己開発していない事が、そうだと思ったそもそもの原因です。

あの戦闘力は異質過ぎますし、僕の催眠術も効かなかったですから」

「催眠術が効かない？」

「ええ」

「確かに……顧問の存在はあまりにもこの世界には不釣り合いすぎるし、異質だったわ……」

「で、でも、顧問は俺達の仲間だっただろ？！」

「確かに仲間だった、でもそれも演技だったとしたら？　過去も出まかせだったら？

今まで顧問の様な別の世界に行ってからもずっと人格を失わずに記憶を持って、且つあんな武器を持った者は居なかった。

その神を決める選定の為に私達の近い位置に居たのだとしたら？

そもそも、ギルド降下作戦の時に神の定義を解いていて、神は空間とかかもしれないと言っていたけど根源とかいう場所が神だった、

とは考えられないかしら？」

私の言葉に静まり返る。

「取り敢えず、この話は戦線メンバーを集めてからにしないか？」

音無が提案する。

「そうね……」

私達はその言葉を最後に牢獄を出た。

校長室

「という訳……もしかすると、顧問と戦う事になるかもしれないわ。気をつけなさい」

牢獄の時の考察を話をしてから最後に言う。

その言葉に戦線メンバーは動揺した。

「信じられないけどな……」

「朱然さんが裏切っても、私はファンで在り続けます！」

「くそッ、顧問の野郎ぉ……」

「眼鏡の恨み……」

「そんな……嘘でしょ……？」

「肉うどんをよく回してくれたんだが……戦るしかないのか……」

「結局、クライスト――――」

「師匠が裏切り者だと……！？」

「Ｍｅｍｏｒｙ　ｏｆ　Ｂｅｔｒａｙａｌ，ｔｈｅ　Ａｍｂｅｒ　Ｓｍｉｌｅ……」

「浅はか也……」

当然ね……彼の天使に匹敵する戦闘能力からくる期待度、的確な助言は少なくとも私では出来ない事だった。

でも、顧問の先を見透かした様な言動、戦闘力……それこそ、直井君の言っていた神に繋がっていた証拠に他ならないんじゃないか？

天使が天使で無かった為に見失った最後の糸口かもしれない……

もし顧問が敵になっても躊躇はしない。

あんな結末を用意した神を……決して許さないわ……その為なら、私は……。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１５　Ｓｕｓｐｉｃｉｏｎ　ａｎｄ　Ａｖｅｎｇｅｒ　ａｎｄ

はい、Ｆａｔｅ&ｈｏｌｌｏｗでお馴染み？
復讐者のサーヴァント・アヴェンジャーさんの登場でーす。
しかも唯の嫌がらせの為に来ただけだったり・・・・・。
実際のイレギュラー？はアンリさんが干渉しているその人物ですがね・・・・・・。

それはさて置いて、一旦朱然さんは戦線を離れます。
その間に戦線メンバーに募る朱然さんへの不信感。

無事ハッピーエンドを迎えられるのか？！

と言ったところでしょうか？
何かカオスになってグダグダな話になりそうだなぁと、ちょっと不安ですが・・・・・・。

１８０万ＰＶをいつの間にか超えていて驚きました。
読んでくださる読者様に感謝を。
ではではノシ

Episode16 Chance meeting and Special

アンリさんを呼んだ人物発覚！

そして、オリ設定ばかりで突っ込まれそう・・・・・。

Episode16 Chance meeting and Special

俺は職員室の生徒名簿録を見ていた。

邪魔をする教師は一瞬で気絶させ転がしてある。

ＮＰＣは変わらないし、歳も取らない。

つまり、ずっと此処に居る。

それはゆりから聞いた事だ。

逆を言えばアヴェンジャーを呼んだ身体の持ち主が居るのなら、

名簿に名前が増えるなりしている筈だ。

願うのは何時だって人間の筈なのだから……。

「結構いるな……」

速読を使って、情報を遡っていく。

どうやらこの世界は創られてから百年は経っていない。

一番古い表紙の年代を見る限り六十年と意外に最近だ。

その中での転校生として処理されているのが人間だろう。

転校とされているのが消えた人間らしい。

一番新しい欄に岩沢の名前があった。

今は懐かしがっている暇は無い。

俺は岩沢の名前を思考の外に追い出し、調べ物に戻った。

転校生の数は今を含め５９７名。

で５９７名の内、日本人は５８７名。

更に男子は４３５名。

その中で未だこの名簿に居る男の戦線メンバーは４８人、ギルドのメンバーが４０人だ。

読み進める内に可笑しな事に気が付いた。

この世界にやってきた人間が必ず戦線メンバーに入る訳ではないのでそれはいいのだが、三十年ほど前から数年に一度位の頻度で空白期があるのだ。
そして、その中で俺が最も見覚えのある人物が十年前から存在し続けているのを見つけた。

「何で……これ……」

思わず左手で口を覆う。

今まで居続ける転校生の数は男女合わせて２０８名。
消えずに残っているのなら、戦線はもっと賑やかになっていてもいい筈だし、目にも付く筈だ。
人間とＮＰＣが限りなく近いと言っても、やはり長くいれば違いが分かってくる。
分かってしまえば大概の人間は気になり、自分以外の人間とコミュニティを作るだろう。
何物にも例外はいると思うが……現に今は死んだ世界戦線というコミュニティが存在している。
今まで居続け、転校生として存在する２０８名の内、男が１４４名。
更にその内、今戦線メンバーになっていない者が５６名もいる。

俺はそのリストを作り、職員室を後にした。

十年前の見覚えのある名前の人物……その名は――――――

――――――■■■■だった。

「もう一つの魂は消滅したと思っていたが、必然だったのか……そ

れとも――――――」

俺の思考は加速する。
同じ年の数日前に■■■■の姉が転校生として在籍していた。
そして、半年後、彼女は転校扱いになっていた。

まさか、それが原因でアヴェンジャーを呼んだ？
まずはリストの転校生を探そう……。

俺は歩を進める。

リストの新しい順から探していき、全員がＮＰＣだった。

いや、ＮＰＣ化していたと言った方がいいのか？

最後に■■■■のいる教室へ向かい、戸を開ける。

すぐにわかった。

窓際の真ん中の席。
窓の外をつまらなそうに眺めている。
自分の片割れを……見た瞬間判った。

コイツはもう、ＮＰＣなのだと。

魔眼を通して見れば魂はある。

だが……魂の流れが止まっている？

どんなものでも時間が進む様に魂も俺の様な例外以外は流れがあ

る。

だが、全てのＮＰＣ化している者達は止められている感じがする。

何なんだ……？

何なんだよこれは……ッ！？

この世界は一体何なんだ？

ＮＰＣ化は三十年前からなのか？

気が付くと俺は走っていた。

俺は校長室に向かうが、誰も居なかった。

こんな時にどうして誰も居ないッ？！

俺は走る。

走る走る走る。

校内を探し回ってもゆり達は見つからない。

俺は千里眼で探そうと屋上へ辿りついた所でそのまま倒れ、気を失った。

肉体的には疲労は少ないが、精神的に疲労していたらしい。

起きると、もう日が落ちていた。

意識を一度無くした為か幾分か落ち着いた。

下で戦線メンバーがヴォル〇ノスみたいなのを一般生徒に振舞っていた。
殆ど振舞い終えたのか、頭以外はもう骨だけだが……しかし、キモいなヴォ〇ガノス……。

そこで視線を巡らせると俺の目があるものを捕えた。
第一連絡橋でゆりがかなでに襲われていた。
俺はすぐに跳躍してその場に向かった。
着地すると同時に無影を投擲。
かなでを拘束するが、引き千切られた。

宝具である無影が引き千切られるだと?!

「くッ!?　顧問?!」

「その傷じゃ足手纏いだ!　引けッ!」

ゆりは口を開きかけ、何も言わずにグラウンドの方へ向かったのだった。

「かなで・・・・・じゃないなッ?!」

俺はすぐさま距離を詰め、大牙で斬りかかる。
轟音と共に受け止められたが、そこから大渦を取り出しトリガーを引く――――パイルバンカーになった大渦から、杭が打ち出される。

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｄｅｌａｙ」

光と共に側面に移動され、刺突が俺の脇腹に突き出される。

大渦の側面を使って防御し、靴の踵に仕込んであるナイフを出しての足撃。
それを偽かなではその場でジャンプしかわす。
俺は右腕の大牙を横に思い切り投げ捨て、偽かなでの方に腕を向ける。
袖口からインベル　Ｍ９１１が飛び出し、俺は大まかな標準を付け、引き金を引きまくる！
偽かなでは大きくバックステップして、当たりそうになる銃弾だけハンドソニックで兆弾させ、離れた所に着地して頭上でハンドソニックを合わせる。

「何をするつもりだ？」

俺は隙だらけの偽かなでに向かって距離を詰める為に動き出した所で――――――

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈｏｗｌｉｎｇ」

新しいスキル？！

「グァッ？！」

あまりの音に耳を塞いで、跪づいてしまった。

不味い！

ゆっくりと偽奏が近づいてくる。

ここで手を放せば三半規管がマヒするどころか気絶する！

その瞬間、俺の胸にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃが突き立てられ、俺の意識は途切れたのだった。

それから数時間後、目を覚ました俺はもう一度、■■■■の元へ向かおうと思った。
あの中でアヴェンジャーが居るとしたら■■■■だと思ったから。
俺は一旦、寮へ帰り、■■■■の部屋に押し入ったのだが居なかった。

次の日の朝。

俺は■■■■の教室へ向かった。
やはり、そこに■■■■の姿は無かった。
何で見つけた時に■■■■を締め上げなかったのかと後悔だけが過ぎる。
だが、その机の上には手紙が置いてあった。
ご丁寧に“御同類へ”と書かれていた。
一々ムカつくが、どうやらアタリだった様だ。

意外と早く見つかったなぁ？
オメデトウってか？
そう、俺はお前の片割れを借りてる。
とても愉快だろ？
話は変わるが、昨日から少し愉快な事が起こってる。
お前も知っての通り、怖い怖い元生徒会長様が増えてギルドに向かった。
オレ様は先にその一番奥に居る事にする。
辿り着けたら教えてやらないでもないぜ？
この世界の真実とか、この身体が此処に来てからの生活とか、神様とやらの事とかな！
そうそう、お前の仲間が先に辿りついたり、一緒に来た場合はひっじょ――――――に残念だが、俺の使える最後の力を使ってこの身体を消滅させる事にするわ。
早くしないと真相は闇の中、なんて事になるぜ？

俺は手紙を握り潰し、教室を出た。
一旦、寮へ帰り、準備をする。

戦線はまだ、ギルドへ降りてはいない。
俺は戦線と一緒には行けない。
行ったら真相が分からなくなる。
■■■■■の別れてからの記憶……それは今更だし、別にどうでもいい。
気になるのは姉のその後だ。
転校と言う事は消えたという事。
消えたという事は満足して消えたのか、それとも模範的に過ごして消えたのかという二択だろう。

幾ら他人の様に見てしまうという自己意識の改竄があったとしても、姉の事は知っておきたい。

何かを守るという呪縛を俺に与えたのもまた、姉さんだから……それにまだ、何かある気がする。

根本的な事を見逃している様な……それに、この程度の事でアヴェンジャーが言っていた俺への嫌がらせが到底達成できている気がしない。

そんな風に疑ってしまうが、少なくとも■■■■は姉と過ごしている可能性が高い以上、姉の事は分かる筈。

何故かそんな確信がある。

俺は思考を続けながら、ギルド爆破跡地へ向かう準備を黙々と進めた。

Episode16 Chance meeting and Special

という訳で過去にアンリさんを呼んだのは別れたもう一人の■■■■。

その事実に気が動転する朱然さん。

ゆり達を探しますが、間の悪い事にモンスターストリーム中で誰も居ませんでした。

本当に間の悪い・・・・・・。

何か川の主がヴォルガ○スに見えたのは作者だけでしょうか？

■■■■を探す為のオリ設定として、この世界に来た人を転校生、消えてしまった人を転校という扱いにしました。

ウィキペディアにＮＰＣになってしまった高松はあの後元に戻って成仏したらしいので、魂の流れ？というか時間的なものが止められてしまっているという設定に・・・・・・。

大渦がパイルバンカーに改造されました。

きちんと概念も使えます。

某カレー司祭さんの例もありますし。

主人公は自分の記憶というより、護れなかった姉の事が気になっています。

それとアンリさんはこの世界で起こっている事は大体把握しています。

なので、今後は色々と引っかき回していく感じになっていくと思います・・・・・・多分。

Episode17 Reaching and Misunderstand

約百年の研鑽を甘く見るな！の回です。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７　Ｒｅａｃｈｉｎｇ　ａｎｄ　Ｍｉｓｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ

ギルド連絡通路　Ｂ４

前に通ってそのままになっているトラップを無視し、少し歩いた所で偽かなでが現れた。

「通してもらうぞ」

アヴェンジャーと■■■■の所為で、今の俺に余裕は無い。

「させないわＧｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」

偽かなでの両腕にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃが現れる。

飽くまで邪魔する気か……形振(なりふ)り構っていられない状況なんでな……。

「本気で殺らせてもらう……右手に気、左手に魔力、合成――――咸卦法」

俺は魔眼を使って、死を体験して己が無に成る事を体験して尚、覚えるのに五年を要した超高等技法。

気と魔力の配合バランス、出力、構成、それらを行いながら己を無にするという無理を要求される技術。

本当に苦労した……これを魔眼無しで覚えようとしたら倍の十年は覚悟しなくてはならなかった。

咸卦法を纏い、俺は八卦八武装を使わず、自然体に立っていて構えない。

唯、只管に、咸卦法の気と魔力の密度を鋭く研ぎ澄ましていく。

武器に振り回されるのが三流、武器を扱えて二流、武器を選んで一流。

そして、武器を選ばないのが超一流。

そこまでの域に辿りつければ、得物が短ければ短い方が強い。

短いという事は振り回す為の遠心力による到達速度や重さによるタイムラグが無くなるからだ。

ならば、武器すら取る必要もない。

構えすら要らない。

何せ、気や魔力を使えば間合いも関係ないからな。

八卦八武装は確かに強力な概念武装だし、伏羲八卦次序太極剣も放てば大概の敵は肉片すら残らないだろうが、真名解放の時や魔力を込めて概念の効果が出るまでにどうしても隙が出来る。

銃も確かに普通ならば避けきる事など出来ないが、当たる場所によっては致命傷に成りにくい。

かなでに全力で当たれば、更に強化されて手に負えなくなるんだから当然手加減するだろう？

前にも言ったが、伊達に約百年気を研鑽してきた訳ではないのだ。

宝具の概念攻撃と真名解放は時間の掛かる最終兵器だが、スペックを最大限に強化する咸卦法とタイムラグの無い無手無構えは切り札だ。

それに、この咸卦法があればサーヴァントだった時のステータスを更に跳ね上げ、スペック面では圧倒的優位に立つ事が出来る。

例えランサー並みの早さとバーサーカー並みの力を持っているとしてもだ。

何より地下で宝具をぶっ放す訳にもいかない、かといって普通に戦っていて時間をかければ戦線メンバーに先を越される可能性があ

るのでそれこそ意味が無い。
だから先を急ぐ為に、形振(なりふ)り構っていないからこそ此処で切り札を二枚同時に切る。

偽かなでが一息で間合いを詰める。

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｄｅｌａｙ」

俺がまだアクションを起こさない事に違和感を覚えたのか、偽かなではＤｅｌａｙを発動させる。
目は既に紫水晶(アメジスト)に輝いている。

確かにＧｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｄｅｌａｙは近接攻撃をかわし、隙を作る為に効果的だ。
現に今まで、戦線の誰の攻撃も当たらなかった。
が、それは今までならばの話だ。
物理法則を無視して移動し、近接攻撃をかわすとは言っても所詮自衛用のもの・・・・・。
行動の先の流れを辿る俺の魔眼、咸卦法のスペック向上による能力差、無手無構えによる己自身という最強の得物とそれによって自身が今使える最高の技。

なにより――――――

――――お前は俺に技を見せ過ぎた。

俺はひたすらに自然体。
偽かなでの一撃が俺に届くその瞬間、右手を一閃した。
その一閃の速度は偽かなでの視界に捉えられる事は無かった。
偽かなでがＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを俺の居た場所で突き出した姿勢のままで止まった。

確認するまでも無い。

俺は歩き出す。
後ろで偽かなでの首から上が手刀によって綺麗に切断され、首から大量の血が吹き出し倒れた。
落ちた頭に胴体から吹き出した血が掛かった。

俺はそれを見ず、新たに現れ続け、行く手を阻む偽物のかなでを

――――――

――――――己が目的の為に屠って屠って屠り続けた。

Ｓｉｄｅ戦線メンバー

「よし、前のトラップはそのまま放置されてるな……ラッキー！」

日向が弾んだ声を上げる。

「あの、こんな所で天使に出くわしたらどの道、漏れそうなんですけど……」

ユイが不安そうに言う。

「構わん」

「構ってくださいよッ！」

日向とユイの漫才が始まりかけた瞬間、ゆりが立ち止まった。

「ひぃッ！！」

前方を見たユイが悲鳴を漏らす。

そこには天使だったものが転がっていた。

そしてソレは胴体から首が綺麗に切断されていた。

その更に奥には心臓の位置に大穴の空いた天使が倒れている。

「おいおい、何なんだこりゃ……？」

「天使が二人居る事にも驚きだが、どちらも倒されているだと……？」

日向と五段が言う。

「この戦闘力……顧問か……？」

爪を噛みながら言うゆり。

「そ、そんな！　だって顧問は今まで天使と同じ位の戦闘力だったんでしょ？」

「そうだぜゆりっぺ！　顧問と言えど天使二人を相手にして勝てる訳がねぇ」

今までの戦闘を見て来た為に信じられない大山と藤巻が否定する。

「天使は能力を自己開発する……現に最初に顧問は天使に勝ち、次に戦った時天使がパワーアップして負けかけた」

「天使がこれ以上強くならない様に手加減していた、と？」

高松が眼鏡をクイッと上げて言う。

「可能性は低くないでしょうね……」

ゆりのその言葉にメンバーは沈黙する。

「でも、何で顧問は俺達に接触してこないんだ？　今まで仲間だった筈なのに……」

「それは前に直井君が言っていた事が意外にも的を射ていたのかもしれない……」

それとも接触できない事情があるか……？

ゆりにはもう一つの可能性が脳裏に浮かぶが、すぐに打ち消す。

「フッ、神である僕の前にひれ伏すが良い……もちろん、音無さんは王ですからひれ伏さなくても大丈夫ですが！」

直井のその言葉に場の空気が微妙に悪くなる。

「それは置いておいてだ。天使が複数居るのは何故だ？　ゆりが元に戻るプログラムを追加したんだろ？」

「確かにそうだよな……」

「全く、愚かだな貴様達は――――」

「何だとッ？！」

「――――これだがら貴様等は馬鹿なのだ……もちろん、音無さんは天才ですよ！」

野田が五段に抑え込まれ、ジタバタともがく。

日向は突っ込んでもキリが無いと思ったのかこめかみに怒りマークをつけるに留める。

「で、直井はどういう事かわかったのか？」

「はい！　音無さん！　僕の事は文人と呼んでくださ――――」

「いいから先を話せ」

「――――わかりました……釣れないですね音無さん……で、話の続きですけど、問題点は二つです。
一つ目は何人分身が居るのかという事。
二つ目はその元に戻るプログラム追加前に分身がｈａｒｍｏｎｉｃｓを使って分身を大量生産していたとしたら……」

「そいつは……ッ！」

直井の問題点で日向が驚愕の声を上げる。

「そして、僕達が此処に乗り込んでくる事を知っている天使が分身を量産、地下に配置しているとしたら……」

「Ｔｒａｐ……」

「そう、罠だ」

ＴＫが呟き、それを直井は頷き肯定する。

「この天使達は今は死んでいるかも知れんが、いずれ復活するだろう……どうする？
今、此処で引けば助かるが、進めば天使はウヨウヨしているだろうし、退路も断たれ絶対絶命だ」

「私は行くわ。　貴方達はどうする？」

ゆりがそう言うと戦線メンバーは全員同行の意を示した。

「ガフッ？！」

「天使が復活しやがった！？」

突然、胸に風穴が空いていた天使が立ち上がり、一番近かった野田を背後から偽かなでが心臓を貫こうとしたが、野田は殺気に反応した為、心臓ではなく左肺を貫かれた。
朱然の訓練のおかげか一先ず即死は免れた。

「なん……だと……？！」

ハルバートが手から滑り落ち、血を吐きながら言う野田。
野田はそのまま背後から自分の心臓に突き込まれているＨａｎｄＳｏｎｉｃを両手で力一杯掴んだ。
掴んだ両手の掌から血が滴り落ちる。

「ゆりっペッ……今の……内にッ！！」

「あそこの扉に逃げ込むッ！　遅れたら置いてくから全員、急ぎなさいッ！　野田君……頑張って……」

そうゆりが言って、扉の奥へ消えた。
そこで野田はＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを手放し、天使から距離を取る。

「……丁度、いい……ハン、デだ……」

野田はハルバートを拾う。

「……来いッ！！」

野田はそう言って天使を迎え撃つ！

その後、戦線メンバーは天使一人につきメンバー一人を犠牲を出しながらギルド跡地に向かうのだった。
因みに最後のセリフはこちら←

「行けェ！　俺の意識のある内に行けェェェ――――――ッ！！」↑五段

「Ｉｔ' ｓ　ｍｙ　Ｔｕｒｎ.　Ｉｔ' ｓ　ｃｈａｎｃｅ　ａｎｄ　ｌｏｏｋ.　Ｆｕｕｕｕｕ！！」↑ＴＫ

「この肉体……見せる時が来たようですね……」↑高松

「ヘッ、へヘッ！　ビビってられっかよぉ！」↑藤巻

「浅はか也……浅はか也ィィィ――――――ッ！！」↑椎名

「わぁ、いっけない！　本当だぁ！　あぁ、僕が笑わせてあｇ」↑大山（催眠）

「……」↑直井

「おわわわわッ！！」↑日向

「ふぇッ？！　みぎゃッ！？」↑ユイ

ギルド跡地

「やっと来たかよ？」

「これでも急いで来た。　さあ、話してもらおうかアヴェンジャー？」

「そうだな……まず、お前は何所まで知ってる？」

「俺に関係する事はもう一人の俺が約十年前にこの世界に来た事、その数日前に姉が来た事、その半年後に姉が消えた事。
この世界に関係する事はもう一人の俺を始め、人間がＮＰＣになっている事、それに数年おきに妙な空白期がある事くらいだ」

俺は知っている事を教える。

「まあ、そんなもんか……さて、呼んでおいて何だが、生徒会長様が続々と俺達を取り囲んで居やがるんだが……」

「テメェ……さては何も考えてないなッ！？」

「お前とオレ……この魂と身体は元々お前のもんだ。　つー訳でまた一つに戻れば記憶も継承される」

ジリジリと包囲の輪を狭めてくる偽かなで。

「なら、さっさとそれをやりやがれッ！」

偽かなで達が俺達に飛びかかって来た。

「だが断るッ！　しかもなーんと、俺は怖い元会長様に協力してお前を誘き寄せたっつー新事実！

残念でした！　お前、ちょっと平和ボケし過ぎたんじゃねーか？　生きて出られたらまた会おうぜ！って、この世界じゃ死なねぇーんだっだな……ま、こっちはこっちで適当に引っかき回すぜ」

そう言って、アヴェンジャーは瞬きの内に消えやがった。

「あの野郎ッ！　見つけたら必ず一回は殺してやる！」

俺は悪態を吐きながら、すぐさま咸卦法を使い身体を強化する。

偽かなでは十二体。

咸卦法を使えば流石に倒し切れると思うが……アイツを追うのは無理か……。

偽かなでが一斉に両手を大上段に構えた。

俺は全方向に向けて無数の見えざる早き拳圧（ファントランジ）を放つ。

「「「「「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」」」」」

一斉に俺に殺到した偽かなでは吹き飛ばされ、全てのＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃが砕かれる。

俺は瞬動で一体の偽かなでに追いつく。

「天翼の型・一閃」

咸卦法を使っている時のみ使う事が出来る八卦八武装（せんてんはっけ）の武器の名前を冠した戦闘技法。

概念の効果は流石に無いが、それでも咸卦法という強力な強化により、余程の強さの奴が出て来ないなら十分な強さだ。

天翼の型とは即ち切断を中心に使う型だ。

その技の一つ、一閃とは閃断を自分なりに改良した技。

唯、纏っている咸卦法の力を極限まで圧縮し、薄く薄く研ぎ澄ましたその右腕の一撃で偽かなでの首が切断される。

鮮血が舞い、俺の頬に血飛沫がつく。

それに気を払う暇も無く、背後にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを再度、顕わした偽物が三人。

振り返って迎撃するまでに、この身を貫かれるだろう。

「無影の型・陽炎」

無影の型、それは回避の型、俺の魔眼の力、咸卦法、虚空瞬動を応用した回避法。

ある意味、かなでの使っているＤｅｌａｙに似ている。

もっとも、こちらはその場で残像のできる程に身体強化をしてかわし続けるものだが……。

それにより俺の姿は、ほぼ動いていない様に見える。

だが、実の所ブレてＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃは残像にばかり当たり、俺自身には掠りもしない。

そこから振り返り、強化した拳を繰り出す。

「大樹の型・三葉」

大樹の型、それは数の型だ。

その中でも、秘剣・燕返しに因んで一つの打撃を疑似的に増やす技。

結局、約百年の研鑽を以てしても今の技は三つまでが限界だった。

これ以上になると俺自身の身体が持たない。

三人は一斉に衝撃を受け、ギルド爆破後に地面に突き立つ金属パイプの等に突き刺さり身動きを取れなくなった。

着地と共に瞬動。

近い偽かなでに肉薄。

「禍津の型・爆烈」

偽かなでの心臓あたりに手を当てての内部への通頸。

禍津の型、それは衝撃を自在に操る型。

技の名の通り、内部から内臓がぐちゃぐちゃになり、偽かなでは血を大量に口だけではなく鼻からも吐きうつ伏せに倒れた。

「「「「「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈｏｗｌｉｎｇ」」」」」

偽かなで達は前回、効いた技を俺に使用する。

俺は意に介さず、両手が使えない偽かなで達を殺していき、残った一人の首を締め上げる。

「な……ぜ……？」

「此処に来る前、一番最初のお前達に言ったが……お前達は俺に対して技を見せ過ぎた。
お前のそのハウリングとやらは俺にとっては一度見ただけで対抗策を思いつけるよ。
前回は……ちょっと不意を突かれただけでな。　俺は五感を自分の意思で遮断できる。
即ち、一時的に聴覚を遮断する事がもっとも簡単な対処法だ」

俺はそのまま、偽かなでの首を絞める腕に力を入れる。
偽かなでは呻き、口から唾液を流しながらもがくが次第に力が抜けていき脱力した。

「動くなッ！」

窒息死した偽かなでを放した所で、いつの間にか此処に辿り着いたゆりと音無が俺に銃を突きつけたのだった。

アレ？
俺悪役っぽいフラグ立った？

Ｅｐｉｓｏｄｅ１７　Ｒｅａｃｈｉｎｇ　ａｎｄ　Ｍｉｓｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ

やられたら十倍返し。
そんな朱然さんでした。

Ｆａｔｅ編では咸卦法を発動するまでが隙になるので使わなかったという事で・・・・・・。
ちょっと、強すぎたかなぁ～と思ったけど結局これで投稿してしまいました。

オリジナル展開というより、原作を表、朱然さんが裏で動いてる感じになってきてる様な・・・・・・？
最終的にはオリ設定でのこの世界の正体的な物を考えていますが、読者様に納得できるようなものが出来るかは作者がヘボいので、保証出来かねますが、頑張ってソレっぽくまとめるつもりです。

それとエンジェルビーツ編ですが、多分、最終話まで五話前後で書き終わると思います。

更に更に、読者様には微妙な情報ですが、そろそろ２００万ＰＶに届きそうな勢いです。
読んでくださった皆さん、本当にありがとうございます！

Episode18 Junction and Special Advisor

これで天使増殖事件は一応の解決はしたが・・・・・。な話です。

「ゆりに音無……一体何の真似だ？　冗談にしては笑えないぞ？」

本気で戦った所為でテンションがハイになって少し荒っぽく話してしまう。

「顧問、何故貴方が此処に居るのかしら？」

「それは……」

俺は口ごもった。

騙されて此処に来ましたとかアホ過ぎるしなぁ……。

「まあ良いわ、音無君は彼女に例のスキルを使わせて頂戴。　私は顧問と話をするから」

「わかった」

音無は銃を持ったまま、本物のかなでの方へ向かっていった。

「で、顧問……答えてくれないかしら？　貴方は神の選定者なのかしら？」

「直井に同じ事を聞かれたが断じて違う」

「なら、数多くの天使を打倒できるさっきの力は何かしら？」

「見てたんなら手伝ってくれ……敵対していた天使をこれ以上強くしない為に手加減をしていた。
アレが俺の本気の本気だ」

Ｆａｔｅの世界では咸卦法をする時間が隙になるから使えんかったんだ……。

「そう……何故、何も言わずに戦線から姿を消したのかしら？」

「個人的な理由だ……俺はこの世界でやる事が出来た。　お前達の邪魔はしないが、俺の邪魔もしないでくれ」

俺自身の記憶を手に入れる為、というのもあるが、一番怖いのはアンリマユとゆり達が接触した事によって起こるイレギュラーな事態だ。
恋姫の時の様なモノが現れたら宝具こそあるが対抗できるか怪しいし、不要なリスクは避けなければならないからだ。

「そう……なら、一つ聞かせて」

「何だ？」

「もし、顧問のやる事に戦線が立ちはだかったらどうするのかしら？」

「そうなった場合……残念だが、全力で排除させてもらう」

言える訳が無い。
ゆり達には過去を全て話したが、それを知って尚、俺に選定者なのかと聞いた事からも察せる。

過去が出鱈目のものだと疑問を持たれ、明らかに不信感と疑惑を俺に感じている。
俺が理由を言わないのも原因だが、理由を話したらこの世界の事を知っていると言っていたアヴェンジャーを探し出すと言い出しかねないし、それによって起こるイレギュラーが計り知れない以上、話す訳にもいかない。

そうすると――――

仲間なのに探す邪魔をする↓アヴェンジャーと仲間・協力関係なのでは？↓戦線内部で疑心暗鬼。

という悪循環が生まれる。
疑心暗鬼に探り合いをする様な関係より、此処で別れた方が仲間では無いという認識で対応される方が、此方としては明確な邪魔を出来るし、向こうも俺が何をしているのかを知らない以上、アヴェンジャーを探す事はしないだろう。
だから、俺が戦線に戻らない事がお互いの為になるのだと思う。

「理解されるとは思ってないし、疑心暗鬼の種になる者は居ない方がいいだろ？」

「……本気で言ってるのかしら？」

「ああ、少なくとも俺個人の問題に戦線は巻き込めないしな……」

「もう良い、わかった。　それだけわかれば十分よ……」

ゆりは一言だけ言って引き金に掛けている指の力を入れていく。
俺も咸卦法の密度を上げる。

そして――――――

ゆりは突き付けた銃の引き金を引いた。
俺は大渦の型による一点集中の技、入口に出てきたもう一人の偽かなでの胸に風穴を開けた技でもある刺点を放った。

――――――お互いの背後に向かって

ゆりの背後に迫っていた偽かなでが崩れ落ち、俺の背後に迫っていた偽かなでは足を撃ち抜かれ膝を突いた。
それと同時に俺とゆりは背中合わせになった。
俺達を取り囲むように更に増えた偽かなでが取り囲む。

「でも！」

「まずは！」

「「コイツら（天使）を何とかしてからだ（よ）ッ！！」」

俺達は決別の意を認め合い。

最後になるかもしれない共闘をする――――――

一方、ゆりと朱然が死の舞踏を演じている頃。

音無は本物のかなでの元へ辿りついていた。

「かなでッ！　おい！？　大丈夫か？！」

「……ぅん？」

かなでが眠たげに目を覚ます。

「よかった……無理をさせて悪いんだが、ｈａｒｍｏｎｉｃｓのスキルを使って欲しいんだ。　そうすれば皆が助かる。　出来るか？」

「……わかったわ」

かなでは起きたばかりにも拘らず、スキルを発動させる。

するとかなでの上に偽かなでが現れた。

―――――10

音無が偽かなでに警戒して銃を向けるが、特に襲いかかってくる様子は無いので銃を降ろす。

―――――9

「いいのかしら？　分身にだって意識はあるのよ？」

―――――8

偽かなでが不意に言う。

―――――7

「？　何の事だ？」

―――――6

「戦意のある私達が一斉に本体に戻ったらどうなるか……」

―――――5

音無がその言葉の真意に気付く。

―――――4

「ま、まさか……」

―――――3

「気付いた様ね？」

―――――2

偽かなでがニヤリと笑う。

―――――1

「待ってくれッ！」

―――――0

「きゃあァァァァァァァァァァァァァァァァアッ！？」

一斉に冷酷な偽かなでの意思が還っていく。
その衝撃にかなでの身体が跳ね、のたうつ。
それを見た音無がかなでを抱締めた。

「耐えてくれッ！　かなでッ！」

程無くしてかなでの意識はまた失われ、偽かなでは消えた。
ギルド跡から地上まで音無がかなでを背負って保健室に運び、地上へ戻った戦線メンバーは校長室へ集まった。
だが、そこには顧問の姿は依然として無かった。

「天使はこのまま目を覚まさないのでしょうか？」

高松が眼鏡をクイッと押して言う。

「それこそイレギュラーな事態よ。　目覚めるわ……いつか目覚めて、唯、寝過ぎたというだけという結果に変わる」

「その時の彼女はどの彼女なんだ？」

椎名が壁に寄り掛かって腕を組みながら言う。

……。

「「「「「うぉッ？！　椎名（さん）が喋ったァァァッ？！」」」」」

高松、日向、大山、音無、野田までもがあまりの珍しさに叫んだ。

「その位、重要な事という事だよ？！」

大山が興奮しながら言う。

「正にそう、それが問題よ」

ゆりが言う。

かなでがどちらで起きるのかを討論するメンバー達。

「所で話が変わるが、顧問はどうだったんだ？　ギルドに居たんだろ？」

日向がゆりに問う。

「やっぱり、裏切ったのかよ？」

藤巻が日本刀を弄びながら言う。

「師匠が俺とゆりっぺを裏切る筈が無いッ！！」

野田が反論する。

「顧問は……戦線には戻らない」

「な、何でなの！？」

ゆりの言葉に大山が反応する。

他のメンバーも声こそ出さないが、驚きを露わにしている。

「この世界で個人的にやる事が出来たらしいわ。　こちらが顧問の邪魔をしないなら何もしない。

でも、こちらの行動が彼の邪魔をするという判断をされた場合……私達を排除するらしいわ」

「何だよそれッ！　ゆりっぺ、顧問のやる事ってのを聞いてなかったのか？」

「聞いても答えてくれそうになかったから聞かなかったわ。　当然、顧問が敵対してきたなら、こちらも変な遠慮は要らないわ。　迷わず攻撃しなさい……それが彼の選んだ道でもある。　話す事はこれで全部の様だし、今日は解散！」

戦線メンバーが出て言った後、ゆりは椅子から立ち上がる。

（顧問……彼は一体、何を見つけた？　果たして神は、誰の味方なのか……？）

窓を見ながらゆりは思った。

Episode18 Junction and Special Advi

お互いの為に別れを決意する朱然さん、それを薄々ながら気付き、
認めるゆり。
このまま孤独を貫き、誰にも知られず真実を胸に一人で消えるのか、
それとも戦線メンバーとの溝を乗り越え、その先の絆と共に卒業し
ていくのか・・・・・・。

それは作者のその時のひらめきとノリだけが知っている・・・・・・
のか？

Episode19 Dissonance and Propose and

影現る！の回です。

Episode19 Dissonance and Propose and

夜、俺は月明かりと消火栓の赤い光を便りに校内を探していた。
あのギルドで会ってから、もう一週間が経っていた。
奴は不気味に感じる程に姿を現さない。

三年の教室を探し終え、二年生の教室がある廊下を歩っていると奥の暗がりから人の気配を感じ、俺は身構えた。
アヴェンジャーかと思ったが、その暗がりから出てきたのはゆりだった。

「また、会ったわね……」

「ああ」

「用事は捗ってるかしら？」

「全くと言っていいほど進展が無い」

そう答えた所で、態々鳴らしている様な足音がゆりの背後から聞こえてきた。
ゆりは振り向く。
するとそこには■■■■が立っていた。

「ＮＰＣ？　何でこんな時間帯に学校に……？」

ゆりが疑問を口にした所で窓から入ってくる月明かりが、絶妙な具合に■■■■だけ届かなくなり、闇に包み込んだ。
その瞬間に■■■■の雰囲気がガラリと変わる。

クソ……ッ！
いきなり接触させてしまった！
ゆりをこの場から離さなければ……。

「よう、今日も懸命に生きてるか？」

「よくも、俺の前に堂々と姿を見せられたな？　ゆり、此処から退いてくれ」

俺は無意識の内にアヴェンジャーに殺気を叩きつけていた。
ゆりがその殺気に身体を強張らせ、動けずにいる。

「おー、怖ッ！　そこのアンタはどう思うよ？」

そんなゆりにアヴェンジャーがワザとゆりに話を振る。

「ゆり、早く此処から――――――」

「……ッ、貴方……何者？」

「――――――ゆりッ！」

「俺は俺さ、何者でも無く、何者でもある」

「話をはぐらかさないで！」

ゆりは銃を向ける。

「短気な女は嫌いじゃねえが、それは頂けねぇな？　何だったら殺

っちまうぜ？」

そう言って歪な剣破壊の双剣（ソードブレイカー）、右歯噛咬（ザリチェ）と左歯噛咬（タルウィ）を顕わす。

「？！　顧問と同じッ？！」

ゆりの状態を見るに此処から離れるつもりは無い様だ。

アヴェンジャーめ、俺に嫌がらせさせる為というだけあって此方の事情なんて無視かよ！

ゆりを連れて此処を離れるにしても、此処でアヴェンジャーを逃がしたら次は戦線全員の前に現れかねないな……なら、いっその事、ゆりが聞いても問題無い事だけを聞いた方が得策か……アヴェンジャーの身体が何故、■■■■のものなのか？という事は聞けないとして、聞けるとしたらやはり世界の事、神が居るのかという辺りか……だが、やはりゆりに聞かせずに聞くのがベストだな。

「アヴェンジャー。　お前は前に言っていた事を吐かされるのと喋らされるのとどっちかを選ぶ権利をやろう」

俺も大牙を構えながら問う。

「どっちもお断りだね。　俺はドMじゃねぇんだ。　お前、主語を抜かして聞いて来る辺り、この女に知られないようにしてやがるな？」

悟った様にニヤリと嫌な笑みを浮かべる。

元の自分の顔での歪んだ笑みがこれ程の嫌悪を催すモノだとは……。

「なら、素直に教えろ」

「……嫌なこった」

「決裂、だな。　お前が余計な事を口走る前に返してもらう！」

俺は一直線にアヴェンジャーに斬りかかる。

「おっと！　ほれほれ！　俺は最弱だが、その程度じゃあお喋りは止められないぜぇ？！

そこの女も聞きたいんだろ？　この世界の事を！　たった３０分で大事なものを無くしたお前さんはなぁ？」

アヴェンジャーはそれを難なくかわし、右歯噛咬（ザリチェ）で切り裂いてきた。

その刃を潜り抜け、大牙をアヴェンジャーに斬ろうとした所で――

ゆりが発砲し、俺とアヴェンジャーの中間に割り込んだ。

俺とアヴェンジャーはお互いに距離を空けた。

「邪魔すんじゃねぇよ、このアマ！」

「邪魔するな、ゆり！」

「お断りよ！　教えてもらうわ、私の過去を知っている事、そしてこの“世界”というのを！」

ゆりが銃口をアヴェンジャーの方に向けて言う。

「ゆり、これ以上此処に居るな！　それでも此処に居るなら、お前を殺してでも邪魔をさせてもらう！」

俺はゆりに大牙を向ける。
その様子にアヴェンジャーがやれやれとジェスチャーした。

「クックック、いい取り乱し方じゃないか？　……一つだけだ」

「何？」

「この物語はもうすぐ終わるぜ？」

そう言ってアヴェンジャーは右歯噛咬（ザリチェ）と左歯噛咬（タルウィ）を仕舞い、廊下の暗がりへと踵を向ける。

「待て！　どういう意味！？」

「待ちやがれッ！」

俺とゆりの制止の声も聞かず、アヴェンジャーは暗がりに消えていった。

「顧問……アイツが貴方のする事かしら？」

「……アイツには近づくな、崩れるぞ」

俺はそう言い残し、ゆりの問いに答えず、その場を後にした。

Ｓｉｄｅゆり

顧問が暗がりに消えても私は立ち尽くしていた。
何時までも此処に居てもしようがないので、寮に引き上げる事にする。
歩きながら私は考える。

あのＮＰＣから人間？に成った人物が顧問の個人的な用事……顧問と同じく何もない所から武器を取り出す者……去り際に二人が言った物語という単語……アヴェンジャー……復讐者？
確か、顧問の言っていた過去に周った三国志の世界と聖杯戦争というのが起こった世界もゲームの話だと言っていた筈だ。
物語……それがこの世界の事を指すのなら……私達は差し詰め登場人物といった所か……でも、私達はちゃんと生きている。
例え誰かに書かれた物語の登場人物だったとしても生きているんだ。
あんな残酷な過去を用意されたものだったなんて信じたくも無い。
それこそ私の過去……大切な妹や弟達が３０分で奪われた事が物語の一部だったなんて認める訳にはいかないじゃない……それにしても物語が終わる、とは……認めたくないが、私達のこの生活が終わりを迎えようとしているのかもしれない。
そして、崩れる、とは物語が崩れるという意味か？
あのアヴェンジャーと接触する事で予期せぬトラブルが起こる事を危惧しているのだろうか？
元々、この世界に居る筈の無い人物だから？
なら、そのアヴェンジャーと同じ何もない所から武器を取り出す顧問もこの世界に現れる筈の無いイレギュラーな人物なのか……あのアヴェンジャーという人物、ＮＰＣから人間？の様に変わった様

に見えた所も気になるが、何かしら世界の事を知っている様だ。
それを顧問が追っている。
でも、それだけだろうか？
それだけなら顧問が戦線を離れる理由として弱い気がする。
いずれにしても未だ情報が足りない以上、これより先は推測にしか成りえないわね……。

こうして校内に人影は無くなった。

次の日、俺はかなでに会う事にした。
恐らく、ゆりよりも昔から居る人間は奏だし、かなではガードスキルをどうやって覚えた？のかが気になったからだ。
気で強化された俺に肉薄できるだけの強化をしてのけるＯｖｅｒｄｒｉｖｅ。
自在に出し入れできるＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ。
銃弾を無力化させるＤｉｓｔｏｒｔｉｏｎ。
物理法則を無視した回避ができるＤｅｌａｙ。
凄まじい音によって相手を昏倒させるＨｏｗｌｉｎｇ。
そして、自分の分身を作るｈａｒｍｏｎｉｃｓ。
自身の能力としては異常すぎるし、俺の様に他の世界を周る様な異端な存在がホイホイ居るのも異常だし、アヴェンジャーがギルドで言っていた偽かなでと協力していたというのが更に気になっていたからだ。

しばらく、俺は校内を探し回った。

で、音楽室に差し掛かった所で音無とギターを抱えているかなでが音楽室の中を覗き込んでいるのを見つけた。

「アタシが言いたいのはッ！
やっぱ、バンドはボーカルがギター背負って歌うのが一番絵づら的にシビレるでしょって話じゃゴラァァァッ！！」

「うわッ！？　コイツ、ひさ子さんにキレた！？」

「やっぱ、ギター取り返してくるッ！」

「ッ、おい！　ユイ！」

そんなじゃじゃ馬娘と関根、ひさ子の声が聞こえ飛び出してきた。

「ッ、やばッ！　来るぞッ！」

音無がそう言った途端に音無が反対に走っていき、ユイのギターを抱き抱えていたかなでがそのまま俺を通り過ぎ、走り去っていった。

それをユイが追いかけていった。
ユイは俺の横を通っていったにも拘らず、スルーされた。
ちょっと落ち込んだ……で、かなでに用がある俺はかなでを追い掛けたのだった。

無影を使って俺は中庭に降りた所でかなでが茂みに隠れているのを見つけた。

「おい、かなで」

「？　貴女は……」

かなでに呼び掛けるとこちらを向いて考え込み始めた。

「何故、考え込む？」

「……朱然？」

「思い出しはした様だが、何故疑問形？」

「男装？」

「ちょーっと、待ってみようか？」

「違うの？」

こいつ……女の格好をしていた所為で、いつの間にか男の俺を女だと思い込んでいやがった？！

「俺は元々男だ」

「そう……」

「かなでに聞きたい事が……って何所に行く？」

かなでが向かったのは中庭と校庭の間の木の陰。

話を聞くにどうやらユイを成仏させるつもりらしい。

ユイを成仏させる事は俺にとってはどうでもいい事ではないが、アヴェンジャーが居る以上、イレギュラーが起こる前にこの世界から転校出来ればある意味安全だと考え、手伝いをする事にした。

それに、さっさと話を聞く為にはこの手伝いとやらをするのが近道っぽいしな……。

で。

ユイがジャーマンスープレックスを練習し、音無が技の練習台にされていた。
その後、スリーカウントを取って終わりかと思いきや、まだ続くらしい。

次はサッカーで五人抜きゴールを決めるらしい。
ユイの身体能力的に無理なので、援護するらしい。
しばらくすると、音無が日向、野田、藤巻、ＴＫを連れてきた。
そして、ユイを見つけた。
ユイがボールを蹴り始めた。

「わかった！　手紙の主はアイツだッ！　きっと、普段から不甲斐ない俺達に苛立ちを覚えていたんだッ！
それでこんな真似をッ！　よぉーしッ！　ゴールを守れッ！　この戦い負けらんねぇッ！
この戦い俺達、男が勝つッ！」

音無が愉快なテンションで捲し立てた。

何というか……。

少しの沈黙の後。

「よくわからんが……わかったァァッ！」

「舐めんじゃねぇぞ、コラァッ！！」

「Ｉ　ｋｉｓｓ　ｙｏｕ！」

「日向！　キーパー！」

「応よッ！」

そして、アホ五人衆がそれぞれ動き始める。

まず、野田。

「フッ、下手クソなドリブルを！」

スライディングをした野田をユイにぶつかる直前にかなでが禍々しい悪魔の爪みたいなＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃにゴム紐を取り付けたスリングショットで小石を発射した。

直撃した野田は弾き飛ばされ、その隙にユイは突破した。

野田本人は何が起こったのか訳が分からなかったのかキョロキョロしている。

「何やってんだ野田ァァッ！」

次に来たのは藤巻だった。

俺は小石をネ○まの褐色巫女ガンスリンガーが使っていた羅漢銭の様に小石を藤巻に発射した。

「貴様こそ何をやっているのだッ！？」

藤巻の両足に直撃、野田が藤巻に怒声を浴びせる。
その隙にユイが突破。

「頼むＴＫ！　音無！」

次に現れたのはいつも予想外な行動を取るＴＫと主犯の音無。

「Ｅａｓｙ　ｃａｍｅ．　ｅａｓｙ　ｇｏ！」

「任せろッ！」

「三人目ェーッ！」

そこでまた俺がＴＫに発射したのだが、相変わらずカクカクと俺の魔眼を以てしても当たらない。

本当にコイツは何者だ？！

「Ｈａａａ！」

ＴＫがボールを奪ってしまった。

「よっしゃあ！」

「Ｆｕｕｕ！　Ｈｅｒｅ　ｗｅ――――」

「うわッ！　悪ィッ！！」

「――――――ｇｏｏｏｏｏ?!」

藤巻が喜んだのも束の間、音無がワザとＴＫに体当たりした。

「テメェどっちの味方だ?!」

ＹＫがボールを零し、吹っ飛んでいった。

「ハッ、最後は……テメェか！　殺してでもゴールを奪うッ！」

ビッ！と日向に指を突き付けるユイ。

「お前、スポーツマンシップは何所行った?!」

「んな事知るかァァァ！　覚悟ッ！　必殺、殺人ギロチンシュート!!」

「俺を殺したいのかゴールを決めたいのかどっちなのか突っ込み所が多いシュートが来やがったァァァッ?!」

日向が両手を前に突き出し、構えながら叫ぶ。

おお!?

ドリブルが貧弱だったのにも拘らず、予想外の凄まじい威力のシュートだな……。

「うわッ、奇跡だッ!?」

「「日向ァァァッ!!」」

だが、真正面で取られるぞ！？

かなではユイの蹴ったボールを狙って当てた事で軌道を変える事に成功し、俺は藤巻と同じく日向の足の爪先に直撃させジャンプの勢いを殺し、ボールは無事に入ったのだった。

やれやれ、いつまで続くんだコレ……？

で。

ユイの最後の願いは野球でホームランを打つ事らしいので、やっとかなでと話す事が出来た。

「かなで、お前は■■■■を知っているか？」

「知っているわ。　でも、何故そんな事を聞くの？」

「■■■■は今何所に居るかわかるか？」

「私は知らないわ。　彼と話した事は一度しかないもの」

一度は接触したのか……だが、何所に居るかもわからないって事は完全に手詰まりかよ……。

俺は次の日、また奏と一緒に居た。

グラウンドではユイと音無がホームランを打つべく練習していた。
だが、届かない。
何時しか日が暮れ始め、微かに聞こえる声からユイが諦めてしまったらしい。
そして、何かを音無に言った所で音無が目を見開き、黙り込む。

だが、そこで――――――

「俺が結婚してやんよッ！」

日向が現れプロポーズし始めた。

「どんなハンデでもっつったろ！」

ヤバい……青くてこっちが恥ずかしくなる位のプロポーズを大声で叫んでいる。
聞いてるこっちが赤面物のプロポーズだ。
口から砂糖がッ？！

そして――――――

――――瞬きをした瞬間にユイは消えた。

俺とかなではその場を後にした。
そして、正面昇降口に入った所で変な影が二体現れた。
「?!　何だコイツはッ?!　かなで、知ってるか?!」
「私は知らない……Ｈａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ５」
奏がＨａｎｄ　ＳｏｎｉｃＶｅｒ５を使って切り裂いた。
俺も大牙を呼び出し、叩き斬った。
俺達の攻撃を受けた影は一瞬の内に霧散してしまった。
「何だったんだ……?」
俺は呟いた。
そして、今まで聞いていなかった事を聞いた。
「そう言えはかなで、お前は何所でガードスキルを手に入れたんだ?」
俺は今まですっかり忘れていた事を聞いた。
「■■■■からａｎｇｅｌ　ｐｌａｙｅｒというパソコンのソフトを貰ったの」
このソフトをパソコンにインストールして使う事でマテリアルに干渉して能力を開発していたらしい。
「そう来たか……」
俺は頭を抱えた。

はぁ……これでより一層、アヴェンジャーを探し出さなければならなくなった様だな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１９　Ｄｉｓｓｏｎａｎｃｅ　ａｎｄ　Ｐｒｏｐｏｓｅ　ａｎｄ

微妙に日数がおかしいですが、朱然さんとアンリさんが現れた事でのズレと言う事で・・・・・・。

日向のユイへ向けたプロポーズは外せんかなぁ～と思い、強引に関わらせました。

何とａｎｇｅｌ　ｐｌａｙｅｒを渡したのはアヴェンジャー？！理由も考えてあります。

次回は影増殖と戦線と戦うシーンを入れられれば入れたいと思います。

最近忙しくて書くモチベーションが上がらない・・・・・・。
夏の日差しが暑いですねぇ。
とーけーるー。
暑さで可笑しな事を書くかもしれませんのでおかしかったら気軽に指摘して頂ければすぐ修正します。

Episode20 Irregular real and Special

影☆増☆殖☆の回です。
星に意味はありません。

そして、戦線メンバーとの戦いを入れる事が出来ました。
強引だったかもしれないかもしれないのでおかしい所があるかもしれませんが・・・・・。

Episode20 Irregular real and Special

これからどうすべきか？と考えるポーズをした所で校内放送が流れる。

「生徒会長の立華かなでさん、今すぐ生徒会室まで来てください。繰り返します。生徒会長の立華かなでさん、今すぐ生徒会室まで来てください。」

放送が終わった。

俺はそれを聞いて生徒会室に行こうとも思ったが、ギルドであああ言ってしまった手前、顔を出しても聞く事は出来ないだろうと思い、校内でアヴェンジャーを探す事にした。

探索の為に屋上に登った所で銃声が聞こえ、グラウンド側の柵に走って近づく。

そこには影の大群に囲まれた戦線メンバーの姿があった。

大した手掛かりも持っていないし、放って置くのも気分が悪いが、あの位なら自分たちで何とかなるだろうと思い背を向けようとして、戦線に近づく者が見えた。

俺は即座に走り出す。

Ｓｉｄｅ戦線メンバー

「一体何なのだコイツ等はッ？！」

「Ｂｕｒｎｉｎｇ　ｄｅｅｐｌｙ　ｉｎ　ｍｙ　ｄａｎｃｉｎｇ！」

「喋ってないで手を動かしなさい！」

戦線メンバーは影を屠り続ける。

そして、影の殆どを屠り終えた所で、ゆりの視界にある人物がこちらに近づいてくるのを捉えた。

「アレは……アヴェンジャー？！」

「どうしたゆりッ？！」

音無がゆりに聞き返した所で――――――

「ヒャーハハハハハッ！！」

狂った様な笑い声を上げたアヴェンジャーがこちらに斬り込んできた。

「？！　何だコイツはッ？！」

「コイツは敵よッ！　各人、集中砲火！」

ゆりの突然の指示にメンバーは従う。

「良い害意だ……だが、効かねぇぜ！」

アヴェンジャーがそう言った所で、弾がアヴェンジャーから逸れていく。

「これは天使と同じッ？！」

「人間である限りオレには勝てねぇ！　何せオレ様はこの世全ての悪（ユ）、この世全ての悪なるものを肯定する者なんだからなァ！
人間じゃ傷をつける事すら出来ないんだよ！　お前ら人間がオレをそういうものにしてくれやがったんだからなァァッ！！」

この世全ての悪なるものを肯定し、その役割を人間から一身に背負わされ、延々と蔑まれ、疎まれ続けそういうものになってしまった普通の人間。
故にそもそも敵対すること自体が、アヴェンジャーと対峙する人間にとって致命的だ。
敵対すればどんなに超人的でも人間である限り、アヴェンジャーを害する事が出来ないのだから。

戦線メンバーは動揺しながらも銃の引き金を引く。

俺は戦線の下へ辿りついた。
すぐに大牙を構え、アヴェンジャーの頭上から叩き斬る様に振り下した。

「やっと来やがったかッ！」

「アヴェンジャァァァッ！！」

俺は数合斬り結び離れる。

……。

「ん？　何だ……？」

戦線メンバーの視線が俺に集まる。

「「「「「誰？」」」」」

ユイからスルーされた次の日からアレ？もうメイド服着る意味無くね？と思い、普通の男子生徒の服を来ていたのだ！

だが、何だこの扱い？！

「お前ら……十六の肉片に解体にしてやろうか？！」

「だから、誰だというのだ貴さｍ」

野田が近づいてそんな事をのたまったので――――

取り敢えず、殴った。

悪いのは俺の顔を忘れた野田だ。

「お前は師匠の顔も忘れたのか？」

「顧問なのかッ？！」

「メイド服じゃなかったから一瞬、誰だかわからなかった……」

日向が驚き、音無までボケて来た。

お前ら……俺の事は今までメイド服で判断してたのか？

ちょっと前まで仲間だったのにメイド服＝俺で覚えられていたなんて……。

戦線から離脱して寂しかったと思った気持ちが若干、和らいだ。

俺は八卦八武装（せんてんはっけ）を全て周りに滞空させ、禍津を取り構える。

「よぉ。　オレ様もこのイカレたパーティーに参加させてもらうぜ！」

そう言って右歯噛咬（ザリチェ）と左歯噛咬（タルウィ）を構える。

「何がパーティーだ！」

「この状況に決まってんだろぉがよ？」

「そこまでよッ！！」

ゆりの突然の大声に俺とアヴェンジャーは次撃のタイミングを逃す。

「五月蠅ぇ女だなぁ？　犯すぞこのアｍ」

「チッ！」

アヴェンジャーに向けて撃たれた銃弾は逸れていき、アヴェンジャーは舌打ちをして黙った。

「私達を無視して話を進めないでくれるかしら？」

良い笑顔のゆり。

「で、邪魔してくれたこのアマ様は何を聞きたいんだ？　聞かれても教えてやらないけどなッ！」

「この状況は貴方の所為かしら？」

「さーてな？　それより、よそ見をしてて良いのか？」

そう言った瞬間、また影が溢れてきた。

「キリが無いぞッ！？」

「またかよッ！」

直井と日向がボヤく。

戦線メンバーが新たな影の軍勢に気を取られた瞬間にアヴェンジャーが俺に斬りかかってきた。

影達も攻撃を開始する。

「ヒャハハハハハッ！　パーティーの始まりだァッ！！」

アヴェンジャーは俺を斬るついでに影も斬っていた。

「このイレギュラーがッ！！」

俺は攻撃を受け止める。

コイツ……ッ！

「ハンッ！　どっちがッ！」

俺達は激しく斬り結ぶ。

その余波で影が屠られていく。

「クソッ！　誰なんだよアイツはッ！」

「アレが顧問の個人的な、やる事らしいわッ！」

音無の問いにゆりが答える。

「一つ聞くッ！

この影共はお前の……あの繰り返しの四日間に出てきた無限の残骸（アンリミテッド・レイズ・デッド）の一部達なのかッ！？」

「そんな事はどぉでもいいだろぉがよォォォッ！！」

「答えやがれェェェッ！？」

俺は大きくアヴェンジャーを弾き飛ばした。

「もっとこの状況を楽しもうぜ、兄弟？」

「ふざけんなッ！」

再び集まった影は戦線メンバー、かなで、俺とアヴェンジャーの余波によって殆どが消滅した。

「良いねぇ。　そうでなくっちゃツマラナイ。　じゃあ、聞きたがりのお前に一つだけ教えてやる。
コイツ等は俺とは関係無ぇ。　コイツ等に呑まれると……ホレ、来た。　後はアイツに聞きな！
朱然、今度会う時は最終回だ！　その時に勝てば、お前のこの身体と記憶を返してやるよッ！」

アヴェンジャーはそう言って跳躍して消えた。

「ぉーい！　おーい！　高松が……高松がやられちまった！」

藤巻が血相を変えて来たのだった。

アヴェンジャーの言葉の真意を確かめる為、俺達はその場に向かった。
そこには高松が決して外さなかった眼鏡が落ちていた。
レンズは割れてしまっていた。

それから次の日、俺は戦線メンバーにグラウンドに呼び出された。

「何の用だ？　俺はこの世界について何も知らないぞ？」

まあ、自分の片割れが居るとか、妙な空白期があるとか調べたけど、この世界の核心じゃない訳だし。

「顧問、貴方は何を隠してるのかしら？」

「言うとでも？」

「やっぱりそうよね……提案よ」

「聞くだけなら」

どんな提案だか……ゆりの事だからとんでもない提案されそう。

「提案の前に一つ聞かせて。　貴方は私達より自分を優先した。それは何故？」

「それは言えな――――――」

「言えないなんて言っていられる状況じゃないでしょ？」

「……」

確かにそうだ、そういう状況はとうに過ぎた。

アヴェンジャーの言う終わりはこのＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓが最終回に近づいているという事でもある。

「……言えない？　なら、言ってあげましょうか？」

「何？」

ゆりにはもう検討がついているとでも言うのか？

「まず、貴方がこの戦線を抜けた事について。　それは昨日のアイツ、アヴェンジャーが去り際に言っていたお前の身体と記憶を返すという言葉で確信したわ。

貴方はギルド効果作戦の時に過去を話した。

その一番最初の過去、貴方が■■■■として死んだ時、魂が別れたと言っていたわね？

なら、もう一つの身体がこの世界に来ていても不思議じゃないわ。

その身体をあのアヴェンジャーが操っている状態で貴方は自分のもう一つの身体を取り返そうとしている。

貴方の過去を話していた内容から言って、貴方が取り返したがっているとすれば自身の身体より、記憶の方ね？」

「……そうだ」

渋々肯定する。

俺とアヴェンジャーの話からそこまで……ゆりを侮っていた様だ。

「次にこの世界の事について、この世界と神の事についてはまだ分からない。

わかっている事は貴方が話してくれた過去に含まれていたわ。

貴方が今まで周った三国志の世界ともう一つの世界がゲームの世界だった事。

そして、アヴェンジャーの言っていた物語が、この世界を舞台にした物語だというのなら、私達は小説、ドラマ、アニメ、ゲーム等の物語何じゃないかしら？

更に言えばこの世界が終るというのはその最終回、もしくは最終

話が迫ってきているんじゃないのかしら？
どう？　間違えているかしら？」

「……本当に……俺はゆりを侮っていたようだ……そう、この世界は俺にとってはアニメの世界。
俺はこのＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓというタイトルのアニメを途中まで見て知っていた。
まあ、多少の誤差はあったがな。　だが、俺のする事は変わらない。
戦線を一度抜けた以上、戻れると思っていない……」

俺がグラウンドを後にしようとした所で戦線メンバーが俺を包囲する。

「何のつもりだ？」

即座に俺は気で身体を強化し、魔眼を発動させる。

「消えなくてもいい人が消えてしまったら、あんな程度で許さないって言ったわよね？
貴方が私達にその事を言えば、高松君がＮＰＣに成らなかったかもしれない……責任を取ってもらうわ」

ゆりが言う。

「俺達の記憶が例え用意されていたものだとしても、俺達は確かに此処に居る。
生きていたんだ……俺達はどんなに酷い一生だったとしても生きていた筈なんだ！
俺達は物語の登場人物なんかじゃない！」

音無が叫ぶ様に言う。
他の戦線メンバーの顔を見るが、ほぼ同じ意見の様だ。
それに対して、俺は言う。

「ああ、それは肯定してやろう。
別に俺はお前らを物語の人物だと断言するつもりもないが、物語の登場人物として知っているのもまた事実だ」

音無の意見を肯定しながら、それでも物語の可能性をも肯定する。

「最初に出会った仲間達はその物語の世界でも自分の国為、自分の意志を示す為に人生を必死に生きていた」

物語でも、蓮華や呉の皆、三国の仲間達は生き抜く為に努力をしてきた。

「次に出会った、たった一人の小さなご主人様は己の誇りを以て、戦い続ける決意をした」

物語でも、イリヤは誇り高く、己の生まれを呪わず生きる事を決めた。

「それに物語は大まかには変わらないが、それでも変える事は出来る」

今までの様に、俺が知っていたからこそ、そうする事が出来た訳じゃない。
誰だって、人は努力すれば変えていける可能性を持っている筈なんだ。

「そして、この物語に俺とアヴェンジャーは存在しない。　居るだけで物語が変わってゆく。
　特に今回は俺個人の事情でこの物語が悪い方へ歪んでしまっている」

　だが、変える事が全て良い事なのかと訊かれれば、それは否と答えなければならない。

「今更ながらに俺は思ったんだ……なら、俺はお前達とは居ない方がいい……」

　当然、それによって死ななくてもいい者が死ぬ可能性が出来る事もある。
　俺は変える事によって起こる全ての事に責任を取れるとは言わないが、今回の事は別れた者とはいえやはり俺だ。
　ならば、責任は俺が取るべきだ。

「そう……なら……」

　ゆりが手を上げる。
　戦線メンバーがそれぞれの武器を俺に向ける。

「……」

　俺は武器を取らず、構えない。
　常に自然体で立つ。
　ゆりが手を振り下す。
　一斉に銃撃が俺に向かって放たれた。

もう、そこに言葉は要らない。
俺は唯、俺の事情で歪んでしまった物語から護る為に敵(なかま)を倒す！
踊る様なステップを踏みながら、即座に両腕を振り降ろし、左右に向ける。
そこからSカトラスが飛び出し、俺は円舞(ワルツ)の如く身体を回転させて銃弾を紙一重でかわしながら発砲する。
魔眼によって正確無比な精度で銃だけを撃ち抜く。

「きゃあッ？！」

「うわッ！？」

ゆりのベレッタ　Ｍ９２ＦＳ　Ｉｎｏｘ、音無のグロック　１７　２ｎｄ、日向のＳ＆ａｍｐ；Ｗ　Ｍ６４５、大山のシグザウアー　Ｐ２２６、藤巻のＵＳＳＲ　ＰＰＳｈ４１、直井のＨＫ　ＵＳＰが一斉に弾かれる。
ＴＫは例の如く俺の魔眼を物ともせず、そのままダンスを踊る様に接近。
それに続き、椎名、野田が距離を詰める。
俺とＴＫの右足の蹴りが鏡写しの様に胸の高さで交差する。
俺はＴＫの蹴りが接触した所で左足を地面から離し、右足が弾かれた所でそのまま平行に回転。
地上一メートルの空中で回転する視界には地面と空が代わる代わるに飛び込んでくる。
三回転した所で地面に着地、ＴＫを逸早く態勢を立て直したゆりの方に蹴り飛ばした。
それによってゆりはＴＫを避ける為に態勢を崩す事は無かったが、隙が出来た。

「オォォォォッ！！」

その直後、大上段から跳躍した野田のハルバートの唐竹割りと這う様に近づいた椎名の首を狙った小太刀の一撃が俺に襲いかかる。

即座にSカトラスを捨て、届かざる守護拳（マンゴーシュ）で逸らす。

野田とハルバートを椎名の方へ振り下す様に誘導し、椎名の小太刀を野田の方へ斬り上げる様に誘導する軌道でだ。

野田は身を捩らせて、椎名はもう一つの小太刀で受け流した。

その隙に見えざる早き拳圧（ファントランジ）で吹き飛ばす。

だが、野田は見えざる早き拳圧（ファントランジ）を避けずにアバラが圧し折れるのを覚悟で、強引に受け流されたハルバートを俺に叩きつけてきた。

俺は当然かわしたが、同じく椎名が見えざる早き拳圧（ファントランジ）によって右腕が可笑しな方向に曲がっているにも拘らず、俺の左足をしがみ付く様に捕まえられて動きを制限された。

そこにゆりがコンバットナイフを吹き放ちながら接近。

日向、音無も俺に接近。

俺はしがみ付いていた椎名をぶつけるには近すぎる為、日向の方へ蹴り飛ばす。

日向は椎名を抱き止める様にして倒れた。

その間に音無が左腕にしがみ付く。

同じくしてゆりがクロスレンジに接近、音無を何とかする時間が無いので放置。

ゆりのコンバットナイフを右腕だけで弾いた。

「今更よッ！　貴方が居なくなった程度でどうにかなるなんて思い上がりよッ！

それに、そんな事で私達が貴方を攻める訳無いじゃないッ！　見くびらないでッ！」

ゆりは拳を握り、殴った。

「ガッ?!」

俺はもんどりうって倒れた。

音無はヒットした瞬間に絶妙なタイミングで俺の腕を放したので巻き込まれなかった。

メチャメチャ痛てぇ！

女の腕力じゃねぇぞ、この威力……それに今の戦闘……ゆりだけじゃなく、戦線メンバーの事も見くびっていたようだ。

咸卦法を使っていなかったといっても、気と魔眼を使って負けてりゃ世話ないぜ……。

「で、さっきの提案よ」

「何を御所望で?」

「それは――――――」

その提案とは戦線から離れる理由も無くなったのなら戻って来いというものと、黙って消えた事によるケジメとして戦線メンバーから一人一発づつ殴らせろというものだった。

一度戦線を離れた身として、戦線には復帰しなかった。

だが、前に使っていたインカムを使って、情報は共有できるようにする約束をゆりに結ばされた。

で、その後、戦線メンバーに袋叩きされた。

次の日、高松が見つかったらしい。
俺はメンバーと共に高松を見に行った。
そこにはＮＰＣ化した高松の姿があった。

これが……ＮＰＣ化の秘密か……なら、今回のこの影はイレギュラーなんかじゃなく、正常な事だったのか？
いや、それならこの世界が創られた瞬間からＮＰＣ化がある筈だ。
三十年前に始まる意味が無いな……だが、数年毎にあった空白の期間はこの影でのＮＰＣ化が原因だったのだとやっとわかった。
少しずつだが、この世界を構成する謎のピースが集まり、形を成そうとしている。
これも原作通りだとしたら、最後はどんな最後を迎えるのか……
そもそも、この世界は何なんだ？
凄惨な過去の者達を誘い込み、満足すれば消えるというルール。
輪郭が分かっても、核の部分が分からなければ意味を読み解けないなｐ取り敢えず、ＮＰＣ化の事はゆりにも伝えた。

その日の夜、俺は焼却炉に呼び出された。
そこにはゆり、音無、奏、日向、直井。
今後についての話し合いになった。
そこでゆりの奏は天使じゃない発言。
音無は取り乱した。
で、落ち着いた後、ゆりはこれからどうするかを言った。
一人でこの世界の秘密を探る為に進むつもりらしい。

「また、会えたら会いましょう」

「ゆりっぺ！」

「酷い仇名……でも、そのお陰で皆に慕われたのかもね……ありがと」

そう言ってゆりは去っていった。

「顧問はどうするんだ？」

「俺は……アイツからもう一人の俺を取り戻さなくちゃならない。それを取り返すまで消える訳にはいかない。それが手に入れば……俺は……」

「消えるのか？」

音無が俺に聞く。

「いや、消えはしないと思う。　少なくとも、この物語が終わるまではな……」

「物語、か……」

「俺の記憶を取り戻せれば、この世界の事を知る事が出来ると思う。生き残ったら教えてやるよ……だから、お前ら……必ず生き残れよ？」

俺はゆりに続いて夜の闇に紛れたのだった。

Episode20 Irregular real and Special

アンリさんの設定はオリ設定です。
公式設定ではありません。
まあ、人間の攻撃では傷すらつけられないという感じにしてみたり・・・・・。
朱然さんは尸解仙という死を乗り越えた仙人という設定なのでアンリさんに傷を負わせられます。
次回にはアヴェンジャーと戦うのですが、一筋縄ではいかない様な感じにしたいなぁと思ってます。
でも、作者はヘボいので出来ない可能性大ですが・・・・・・。

朱然さんはまあ、相変わらずの慢心っぷりを披露しました。
恋姫編の恋戦の時みたいな?
そして、微妙に和解という形に落ち着きました。

楽しんで頂けたかなぁ?とちょっと不安ですが・・・・・・。

次回は上で書いた通り、アヴェンジャーとの戦いと決着を書きたいと思います。
期待せずにお待ちください。

Episode21 Life after death and Special

ｚｚｚ・・・・・ハッΣ?!
意識が飛んでいただとぅ?!

ヤバイ！　ぬらりひょんの孫のＯＰを見てたら、つららが可愛すぎる！

今日、友達にお前の「絶対零度の時の眼って鷹の眼みたいだな」と言われ、アーチャーを想像し、アーチャーのコスプレをした自分を複製し、全ての工程を凌駕し尽くし、此処に幻想を結び吹き出しました。
何せ似合わなすぎるし、身長差あり過ぎ・・・・・唯、ひたすらにイタい。
更に別の友達曰く、お前はあらゆる眼鏡との相性が最低で眼鏡を掛けると怪しく見えるらしいです。

で、作者のどうでもいい話はさて置いて、アヴェンジャーとの戦いは一筋縄にいかなくはなかった・・・・・。
ホントごめんなさい。

Episode21 Life after death and Special

昼、俺とアヴェンジャーは屋上にて向かい合っていた。
眼下には既に数多くの影達がひしめき合ってる。

「Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒをかなでに渡したのが、お前だと言うのは聞いた。　詳しく、聞かせてもらおうか……？」

「それはそのＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒの開発に俺が関わっているからだ。
　いや、お前の片割れ……■■■■が、と言った方がいいか？　そして、この世界の事も気にならないか？」

アヴェンジャーは素直に話し、更に世界の事まで自分から話を振る。

「この世界の事だと？」

「そう、俺はそれを知っている。　俺を倒したら教えてやるよ……さあ、存分に殺し合おうぜ？
　俺を瀕死まで傷を負わせば自動的にお前に身体と記憶は還る」

「ああ、お前を殺してその身体と記憶、返してもらう！」

　俺達は八卦八武装（せんてんはっけ）を滞空させ、魔眼を発動させた。
更に俺は咸卦法を発動させる。

「まあ、俺の身体を使っているから、まさかとは思ったが……魔眼を使えるのか……それに八卦八武装（せんてんはっけ）まで……」

俺の目が紫水晶（アメジスト）に輝くのに対し、奴の方は黄水晶（シトリン）に輝いていた。
そして、八卦八武装（せんてんはっけ）は色が黒と紅を基調として、随分と攻撃的に改造されていた。
禍津が右歯噛咬（ザリチェ）と左歯噛咬（タルウィ）になっているとか、他が禍々しい感じになってる。

「お前の殻を被っているんなら出来ない事だ、借りてるからこそ出来る芸当だぜ？
こっちの武器はお前がこの世界に来た時にコピーしたパチもんだ。概念なんて使えねぇが良く出来てるし、この方が面白そうだろァッ！」

そう言って大牙？で斬りかかってきた。
即座に身を引いてかわした。
そのまま俺達はお互いの流れを見て、辿るべき流れを辿ってゆく。

大牙と大牙？がぶつかり合う――――――！

鈍い金属音が響く。
更に武器を変えながら攻撃を仕掛ける。
俺の次撃を守殻？で受け、そこを禍津の打撃、無境で滑らせるように流され、そこからアヴェンジャーは空の手から大渦を突き出し、禍津で弾く。
アヴェンジャーはそのまま距離を空け、大樹？で射撃、俺は無影で絡め取り、そのまま取り囲むように糸の結界を形成、収束した。
アヴェンジャーに当たる直前、天翼？の両刃を展開して回転、無境を切り裂いた。

「チッ！　面倒な……なら！」

「俺は楽しいぜ？　何せ最弱の俺がマシに戦える最後の機会だからなッ！」

俺は大牙を上段水平に構える――――――

この技は彼の大英雄から受け継いだ流派・射殺す百頭（ラインナイブズ）とも言える宝具にまで昇華した技。

その技は任意または相手に合わせ、変化する変幻自在の技だ。

唯のコピーに防げる程、甘くは無い――――――！！

「やってみなッ！」

アヴェンジャーは八卦八武装・レプリカを周囲に滞空させる。

――――――斬殺す百頭（ナインライブス）ッ！！

神速の九連撃がアヴェンジャーに迫る――――――！

その対人に変わった斬殺す百頭（ナインライブス）はアヴェンジャーの八卦八武装（せんてんはっけ）・レプリカを一瞬で破壊し、最後の一撃がアヴェンジャーを袈裟掛けに切り裂かれる。

だが、アヴェンジャーがそれを終わらない！

――――――偽り写し記す万象（ヴェルグ・アヴェスター）ァァッ！！

――――――それは報復という原初の呪い

自分の傷を、傷を負わせた相手の魂に写し共有する――――――！

「一緒に苦しめクソッタレッ！！」

アヴェンジャーの胸から鮮血が吹き出し、外相が無いにも拘らず、自分の胸に致命傷クラスの激痛が走った。

「ぐぅッ！？　仕留め損ねた、か……」

俺達は鏡に映し出した様に同じ痛みを負う。

「これで満足かよ……アヴェンジャー？」

「詰まんねぇ……詰まんねぇ詰まんねぇ詰まんねぇッ！！　俺はまだ暴れたりねぇんだよ！」

「死にかけだろお互いに……」

「チッ、これで終わりかよ……此処でバゼットが居りゃあ……」

俺達は同時に倒れた。

「あー、そろそろこの身体ともお別れか……それに関しては清々するぜ……」

そして、■■■■の身体が吸い込まれる様に俺に重なった。

■■■■の居た場所には黒い霧の様な靄が漂っている。

あれがアヴェンジャーの本体か？

「まあいい、消える前に教えといてやるよ……この世界の事をな……可笑しいとは思わないか？

死んでも生き返る身体、成長もしない、飢え、病気すら無い……まるで楽園じゃないか？

だからこそ、俺も存在しにくいんだが……」

「この世は波風が立ち難いし、平和だからこの世全(アンリマユ)ての悪としての存在意義が揺らいで此処に居にくかったとでも？」

「それもある……だが根本じゃない。　で、話を戻すが……あー、何だっけ？

ああ、この世界は異常だって話だな……そこでお前に質問だ。

この世界がどんな所かっつー前に、何所にあんのかって話なんだが分かるか？」

「この世界の場所……？」

それは考えてもみなかった。

突然、世界の場所と言われてもピンと来ない。

空間の何所か？
次元の何所か？
それとも別の場所？
そんな簡単な訳が無い、それを敢えて問うという事はそこに何かがある、という事だ。
まずは考えよう……俺は何所からこの世界に来た？
思い出せ、思い出せ、思い出せー。

「まず、Ｆａｔｅの世界から根源に戻って……ない？！　なら、まさかそういう事なのかアヴェンジャー？」

「そう、この世界は数ある並列世界と根源の中間点。　お前のよーっく、知ってる場所だ」

「根源への中間点、凄惨な死を体験した人間が辿りつける場所、死んだ後の道……阿頼耶識なのか？」

「そ、の、とーり！　お前を殺したものの一部なんだよ、この世界はなァ！
正確に言えば阿頼耶識のもうちょっと先、人の原型と阿頼耶識の中間地点。　英霊の座より深いんだぜ？　此処は」

「いやいや、あり得んだろ。　世界の英霊やら反英霊やらを英霊の座を保管、記録をする場所よりも深い場所って……」

「実際に此処が存在している事自体がその証明だぜ？　だから英霊の座よりも深い場所にあるこの世界に俺は居にくいって訳だ。
テメェらは死んでるから大丈夫だがな。
そして、肝心のカミサマだが……この世界にクソッタレな神は居ねぇ！　オレ様が断言してやる！

何せこの世界は全人類が無意識的にこの世界が必要だっつー願いが一定量を超えた事で発生した世界だからな！
この世界はカミサマが創ったんじゃねぇ！　人の願いが寄り集まって偶発的に創られた世界なんだよ！
いやァ、人の思いの業の深いこって……！」

それが、この世界の真実か……戦線の目的である神への反逆だが、そもそもこの世界に居ないものだった、それは何たる皮肉か……。

「そうだったのか……で、まだＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒの事を話してないだろ？」

「ああ、それね……それはお前の記憶の中にあるぜ、真実を知って愉快にのた打ち回りな！」

そう言ってアヴェンジャーは霧散して消えた。
それに合わせるかの様に傷の所為もあってか意識が暗転してしまった。

何時しか俺は照明の落ちた古い映画館の座席に座っていた。
カラカラカラと古い映写機の音が聞こえてくる。

何と古典的な回想シーンか……。

この世界が出来てすぐ、やはり凄惨な最後を迎えた男女がこの世

界に現れました。
男女は周りの異常さに気がつき、必然的に一緒に行動した。
そこで愛が芽生えた……そこは過ごしてみれば、歳も取らない、飢えもしない、此処は永遠の楽園になる筈だった。
聖書にあるアダムとイブの様に……。

ある時、あろう事か女の方が、この世界に残る事を選択した男にまた再会を約束し成仏してしまいました。
その約束を信じ、男は待ち続けた……だがとうとう彼女は現れず、男は待つ事に疲れ果ててしまった。
男は今更成仏する事も納得がいかなかったのか……それとも自我があるから疲れ果てたと思ったからか、自らＮＰＣとなる事を思いついた。
まず、男はこの世界の土くれから道具作成する方法に目を付け、自らの存在に干渉する術を見つける事にした。
思いついたその方法は、この世界のマテリアルを解析し、変革するというものだった。
男はマテリアルの解析から始めた。
しかし、数年の月日を重ねても一向に捗らなかった。
そこにあらゆる流れを見る魔眼を持つ俺が現れ、男の口車に乗せられて愚かにも魔眼を使いマテリアル構造の流れをデータとして変換、書き出してしまった。
そこからは一気にその男はＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒを完成させ、自分の存在の記録を抹消、自身がＮＰＣになろうとした矢先に消えた女の去り際の言葉の意味を理解させられた。

俺の姉に……。

この場所は卒業する為の場所なんだと。
結局、それに伴い男は愛を検知したらＡｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒを使い周りのＮＰＣを変革、人間をＮＰＣに造り変え、全てをリセットするというプログラム内包したＮＰＣを創った。
俺が現れて半年後、そのリセットが始まり、平穏を手にしたと思っていた俺は戦った。
それこそ魔眼を使い、Ａｎｇｅｌ　Ｐｌａｙｅｒを使い、あの時の様に限界を超えた魔眼の使用によって起こった暴走で、この世界を理解してしまった。

俺は願った。
願ったんだよ。
俺達を殺した世界に！
呪う様に願った！
俺の姉さんだけは助けてくれと！

そんな願いがアヴェンジャーを此処に呼び出し、■■■■はある交換条件を提示し嘆願した。
姉を別の世界に強制転送し、ＮＰＣに成った■■■■の身体をアヴェンジャーが自由に使える条件で……その願いが叶えられた所でＮＰＣになった。
己の招いた結果が自分に還ってきた様なものであり、この世界を歪ませた原因の一人だ。

それが……もう一人の俺に起こった、事の顛末だった。

映写機の映像が途切れ、フィルムの最後の方がカランカランと音を鳴らし続けた。

段々と音が遠ざかっていく……。

俺は目を覚ました。
日は既に傾いていた。
不意に俺の顔にはニヤリと笑みが浮かぶ。

「……忘れたかアヴェンジャー？　世界は続いているんだぞ？
瀕死寸前であろうが、断末魔にのたうちまわろうが、今もこうして俺達は生きている。
それを――――絶望しかないと、おまえは笑うかアヴェンジャー？」

俺は改めて紫水晶（アメジスト）の魔眼を発動させる。

「もう一人の俺はお前を呼ぶ程に世界を呪ったかもしれない！　この世界を混乱に陥れてしまったのかもしれない！
だが、それ以前に姉を守る事を選択していた！」

手を天に翳すと、八卦八武装（せんてんはっけ）が俺の周りに滞空する。

「至った時、救えなかった姉を今度は救う事が出来た！」

右でに気、左手に魔力……合成！

「少なくとも、此処ではない何所かの世界で姉は生きている！」

眼下には影と戦う戦線メンバーの姿。

「今はそれだけで十分だッ！！　こんなに愉快な事はない――――――！」

俺は大樹を構える。

――――――それは大英雄の技の本来の姿

――――――今、本編で使われる事のなかった技が放たれる！

――――――射殺す百頭（ナインライブス）ッ！

龍の様な形のビームが九つに別れ、戦線メンバーを囲んでいた影

に襲いかかった。

戦線メンバーはその隙に第一連絡橋の方へ走っていく。

俺は虚空瞬動を使い、高く高く空に身を躍らせ、最後の戦いに加わる為に戦線メンバーのもとへと向かう――――――！

Ｅｐｉｓｏｄｅ２１　Ｌｉｆｅ　ａｆｔｅｒ　ｄｅａｔｈ　ａｎｄ　Ｓｐｅｃｉ

という話でした。

アッサリ所の話ではなかった……。

後、二、三話でＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ編が終わる予定でござる。

久しぶりにホロゥをやったらアベンジャーの宝具は同じ傷を与えるのではなく、痛みを共有させるみたいな感じだと感じたので修正しました。

Episode22 Fellow and Special Advisor

夢中で書いていたら書き終わったので次の最終話もすぐ投稿します。

Episode22 Fellow and Special Advisor

Ｓｉｄｅ戦線メンバー

音無達が、校長室がある建物の玄関を抜けるとそこには影が犇めいていた。
夕陽の所為か、影がより一層、その存在を明確にしているかの様に色濃くさせる。

「何だこの数は?!」

あまりの数に直井が驚愕する。

「どうなってんだよ……？　ＮＰＣは?!」

「もうこの辺じゃ、コイツらしか居ないんじゃ?」

直井の指摘通り、辺りにはもうＮＰＣの姿等一人も居ない。

「俺達のやろうとしてる事、わかってんじゃないだろうな?」

音無がグロック　１７　２ｎｄを撃ちながら言った所で影達が一斉に音無達に飛び掛かってきた。
その瞬間、ハルバートを持った人影が校長室屋上から跳躍した。
ハルバートの一撃が影を一撃の下に切り捨て、その人物がの正体が露わになる。

「フンッ！　下衆が!」

野田は影共に向かって吐き捨てる様に言う。

「野田？！」

「流石だぜ、野田ッ！」

「俺達の為に戦ってくれるのか？！」

「ッ！　馬鹿な事を言うなッ！　俺が動くのはゆりっぺの助けになる時と師匠の頼みがあった時だけだッ！」

影をまた一体屠りながら野田が断言する。

「へぇッ！　成程、とことん一途な奴だなッ！？」

その問いに対して軽口を言った日向の背後に影が迫る。
一発のライフルの銃撃音が響き、その影は霧散した。
その発射された場所には、校長室二階の窓からスコープを除き、空の薬莢を排出した大山の姿があった。

「大山ッ！」

日向が名前を呼ぶ。

「何の取り柄も無い僕だけど、此処で活躍できたら神様も吃驚仰天かなって！」

もう一発撃ちながら言い、薬莢を排出をする。

「ああ！　見返してやれ！」

音無が大山の方を向いて言った所で正面から影が迫る。
すぐに気付き撃とうとするが、間に合わない。

「フッ！　てりゃァッ！！」

藤巻が現れ、左手にＵＳＳＲ　ＰＰＳｈ４１を持ち、二射して怯んだ影に左手の日本刀でトドメを刺した。

「俺も忘れてもらっちゃ困るぜ……このまま居なくなっても、誰も気付かなそうだからなぁッ！！」

流石に自覚していたのか、如何にも噛ませ犬的なポジションの藤巻が言う。

「最後に――――――」

「Ｆｏｏｏｏｏ！！」

「――――――……」

藤巻が何かを言おうとした所で、ＴＫの声が聞こえてきた。

「Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｎ　Ｃｏｍｅ　ｏｏｏｏｏｏｎ！！」

いつぞやの訓練と時の如く、凄まじい逆さ回転をしながら影を蹴り殺し、ＴＫが現れた。

「Ｋｎｏｃｋｉｎ'　ｏｎ　ｈｅａｖｅｎ'ｓ　ｄｏｏｒ」

そんな事をのたまって銃を撃つ。

「それ、ボブ・ディランだぜ？」

アーティストの名前を挙げる日向。

「だが、今まさに相応しい」

意外にも何故か知っている野田。

「なんて意味だ？」

意味を知らない藤巻が訊き――――――

「さあッ！？」

大山が少し遠いので大声で答える。

「こいつは役者がそろってきたなぁ……」

音無が撃ちながら言った所で――――――

「とりゃァァァッ！　せいッ！　そぉぉぉいッ！」

掛け声と共に影が校長室脇から投げ飛ばされてきた。

「とぅぅあッ！！」

と言って音無達の近くに着地した人物が一人。

「何だこの世界は？　何が起きたっていうんだ？」

そんな疑問を投げかける物凄く痩せた松下五段。

それに対して戦線メンバーの反応は――――――

……。

「ていうか、お前に何が起こったんだよ？」

至極、当然な突っ込みだった。

「誰だお前ッ？」

藤巻は誰だかわかっていない様で、五段に日本刀を突き付け問う。

「うむ、暫く山籠りしていたんだが、食いもんが少なくてな」

「お、お前、松下五段かよッ？！」

やっと気がついた藤巻が驚く。

「Ｔａｓｔｙ　ｃａｎｄｙ！」

直訳すると美味しいお菓子？と意味不明な事を言うＴＫ。

「身体、大丈夫か？」

音無が背後に迫った影を見ずに銃を撃ち倒しながら言う。

「応！　寧ろキレが良い！　もしかしたら、今なら百人組手も出来るかもしれねぇぜッ！」

同じく背後に迫ってきた影を裏拳で倒しながら言う五段。

「それ空手じゃねぇか……まあ、何にせよ助かるぜ。　何せこれだけの手勢だ」

かなりの数を倒した筈なのに未だに減る気配の無い影の軍勢。

「無事に去って行こうぜぇ……メンバー全員でよぉ」

「ああ！」

「Ｇｏｏｄｂｙｅ……ｗｉｌｄ　ｈｅａｖｅｎ……」

「よしッ、突破するぞッ！！」

音無の号令で一点突破を図り、グラウンドまで行くが、影に囲まれた。

「く……ッ、このままだと弾が先に尽きるぞッ！」

「どうすればいい?!」

打開の策を音無が考えていた時だった。
突如、九つのビームの様な物が飛来し、戦線メンバーの周りの影が一掃された。

「何だ今の?!」

「Ｈｅａｖｅｎ　ｈｅｌｐ　ｙｏｕ?」

「馬鹿なこと言ってねぇで今の内に行くぞッ!」

藤巻に言われ、戦線メンバーは先を急ぐ。
音無はビームの飛来した方を目を細めて見る。
その場所は屋上。
そこには転落防止用の柵に足をかけて身の丈を超える巨大な弓を弾き終えたメイド服の人物の姿が見えた気がした。
だが、瞬きをした瞬間に幻だったかのようにそこには誰も居なかった。

音無は気になりながらも、そのまま第一連絡橋まで走った。
第一連絡橋に辿りついた所でまた取り囲まれた。

「クソッ!　キリが無い!」

「音無さん、下を見てください!」

音無は直井促されるまま橋の下を覗き込む。
そこには黒一面の川が出来ていた。

「どんどん増えていきやがる……――――――」

「後ろッ！」

「――――――ッ！？」

日向の声が聞こえ、振り返った所でまた影が迫ってきていた。

二つの斬撃が影達を纏めて三分割にした。

そこに現れたのは小太刀を二つ持ち、背中合わせの様に音無の背後に現れた椎名だった。

「百人だ」

「えっ？　何が？」

「百人、戦力が増えたと思え」

「えっ？！」

「わからないのか？　お前の意思は引き継ぐ、行けッ！」

「椎名……」

椎名に任せて行こうとした時だった。

更なる大群で群がる影が正面に現れる。

「流石にこいつぁ……」

日向の背中に冷や汗が流れる。

――――――全員伏せろ、泣き言は聞かん

自信に満ちた、あのメイド服の特別顧問の声が音無に届いた。
あの顧問が伏せろと言ったのだから伏せなければ大変な事になる、という思考を通り越し、反射の域で音無が怒鳴っていた。

「全員伏せろォォォッ！！」

俺は音無達が目指しているであろうギルドへの洞窟前へ移動していた。
その視線の先には連絡橋があり、音無達が影に取り囲まれ、身動きが取れない様だ。

「俺は此処に誓おう！　己が行いに後悔しないという事を――――――！！！」

八卦八武装（せんてんはっけ）が一つに練り合わさっていき、白と黒の絡みあった剣が現れる。

大盤振る舞いだッ！！

――――――全員伏せろ、泣き言は聞かん

その声が届いたのか全員が地に伏せた瞬間、俺は水平に薙ぎ払った。

「伏羲八卦次序（ふっきのはっけじじょ）――――――」

「――――――太極剣（たいけん）！！」

白と黒の螺旋が絡みあったその一撃は連絡橋の手摺りと影を纏めて消し飛ばした。

その後、すぐに音無達が近づいて来る。

「何だよ今の？！　あんなんあるなら最初から使ってくれよッ！！」

「貴様は何所の決戦兵器だ？！」

日向と直井が俺に詰め寄ってきた。

「五月蠅い、切り札をそうホイホイ使えるか。　威力があり過ぎて使い所が難しいし、疲れるんだよ……」

「これからどうする？」

音無が言う。

「俺はゆりを助けに行く」

「俺も行くぞ」

「音無だけ行かせる訳にゃいかねぇな！」

「僕も音無さんに着いて行きます！」

どうやら、この三人が俺に着いて来るらしい。
で、いざギルドに入ろうとした所で、かなでが現れた。
学内のＮＰＣが全て影になったらしい。
それともう一つ。

「聞こえたの……彼女の声が……」

どうやらゆりの声が聞こえたらしい。

これで五人か……なら、残りのメンバーは此処の死守を頼みたいと思った所で、大山が口を開く。

「帰り道なら気にしないで！」

次に刀を担いだ藤巻が大山に続き言う。

「俺達が死守してやっからよぉ！」

更に五段が自信に満ちた声で言う。

「ああ、生まれ変わった俺の力を試す良い機会だ！」

「Ｌｅａｖｅ　ｉｔ　ｔｏ　ｍｅ　ｉｎ　ｈｅｒｅ！」

落ち着きなく踊るＴＫがまともな事を言う。

「あの程度の影、幾ら居ても負ける気はしない」

何時になく饒舌に言う椎名。

「師匠が行くのなら、俺は此処で活路を開き続けるまでッ！」

少し前までなら、俺も着いて行くと聞かなかったのに……成長したなぁ野田。

「よし！　行くぞッ！」

その言葉と共に俺達は突き進む。

だが、すぐにある事に気付く。

「って、この広大なギルドの中からどうやってゆりを探しに行くんだ？」

「それは……超能力？」

アホな提案をする日向。

「馬鹿か貴様は？」

「何だと？！」

早速、いがみ合う日向と直井。

「で、実際問題どうすｒ」

俺がそこまで言った所で、かなでが俺のスカートの端を引っ張った。

「どうしたかなで？」

「あっち」

「あっち？」

俺はかなでの指さす方向を見る。

「あっちって言うと……」

「オールドギルドがある方だよな？」

音無が俺が答える前に答えを言う。

「どちらにしろ、俺達に探す術がない以上、かなでを信じてみるのもいいんじゃないか？」

「そうだな」

俺達はいがみ合っている日向と直井を置いて先に進んだ。

「待ってくれよ音無！」

「待ってくださいよ音無さん！」

「「……ッ！！」」

そしてまた、いがみ合う二人。

仲が良いこって……。

オールドギルド

「あ、ああ……」

そこには影に呑まれかけているゆりの姿があった。

「ゆりッ！！」

「ゆりっぺ！！」

俺達は即座に走り出し、周りの影を駆逐する。

「閃断！」

気を斬撃に乗せ、放つ――――――！！

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ・Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」

かえでも両手にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを出現させ、両手を振るう。

「ゆりに当てるなよッ？！」

「わかってらァ！」

「勿論です音無さん！」

殲滅した所で、ゆりを助けようとするが、もう地面に呑み込まれかけ、ゆりの右手だけが地面に生えている状態だ。

「ゆり！　手を伸ばせ！」

地面に呑み込まれかけ、何とか僅差で手を掴む事に成功し強く握る。

「く、ぅぉおおおッ！！」

一気にゆりを地面から引っ張り出すことに成功した。

「顧問ッ、ゆりは？！」

「何とか間に合った」

「そうか……よかった」

言葉には出さないがかなでと日向も安堵の息を漏らす。

直井は明後日の方向を向いているが……。

「ぅん……」

ゆりが目を覚ました様だ……。

「……顧問？　それに……音無君達もｐ」

「あー、ゆりさん……起きて寝ぼけている所悪いが、服装を整える事を勧めるよ？」

「えっ……？」

ゆりが自分の服装を確認する。

すると寝ぼけていた眼が見開かれ――――――

「わぁぁぁぁッ！！？」

後ろを向いて神速とも言える速度で服装を整えた。

「で、何で此処がわかったの？」

ゆりが当然の事を聞いて来る。

「かなでが聞いたらしいんだ。　ゆりの声を」

音無が言う。

「広大なギルドを探すのは流石に無謀すぎるからなぁ～」

「非科学的にも程があるがな――――――」

「お前、ＫＹだろ？」

「何だと貴様！　使い捨ての割り箸の有用性に気付かせてやろうか――――――」

「いい加減にしろ直井」

「――――――はい、音無さん！」

直井……とことん相手への対応の落差の激しい奴だ……。

「ともかく、かなでがお前を見つけたんだ。　礼を言ってもいいんじゃないか？」

「ええ、そうね……あ、ありがとう」

頬を染めながら言う。

「さて地上じゃ皆が頑張ってるんだ。　さあ、ラスボス退治に行くとしようか！」

俺達は歩を進める。
最深部のギルド跡地よりも少し上の階層。
俺達はそこを歩いていた。
そして、その視線の先。
そこには影の軍勢が一塊りになって行く手を遮っていた。

「どうする？」

音無は振り返って言う。

「そんなの簡単ですよ音無さん！　貴様！　連絡橋で使ったあの攻撃を使え。　あの爆撃機並みの火力があれば一瞬でカタがつく」

何か直井に命令された。

「うわ、コイツ顧問に命令しやがった……」

日向が慄く。

「顧問、アレを何とか出来る攻撃が出来るの？」

伏義八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）を見ていないゆりが問う。

「問題は無いが、皆仲良く生き埋めになる」

洞窟内で使えば天井が崩れてセルフ土葬だ。

嫌だなぁ～、セルフ土葬……。

「ふんッ、使えん奴だ」

直井を物凄く殴りたい……でも、そんな場合でも無いのでスルー。

そこに、影の方へとかなでが歩き出す。

「かなで？」

俺もかなでに並ぶ。

「顧問？」

そして、俺達は同時に影に跳躍した。

「なッ？！　死ぬつもりかッ？！」

音無の驚愕の声を背に俺とかなでは影に覆われる。

俺の視界を埋め尽くす影、影、影。

その微かな視界の中、かなでが両腕にＨａｎｄ　Ｓｏｎｉｃを装備し、回転を始める。

一方の俺も禍津に魔力を込め、気を圧縮し、一気に開放させる――――！

黒い影の塊は内部から爆発するように霧散した。

「最早、人間の域を超えてるぜ……」

「奴らの攻撃は爆撃機並みか……？」

「あー、もう何が何だか……」

「呆れた威力ね……」

四人が此方を見てゲンナリしていた。

そして、その先には岩盤に埋め込まれる様にしてドアが作ってあ

った。
ご丁寧に第2コンピュータ室とプレートに書かれていた。
「ふん、馬鹿にしてくれるじゃない……」
ゆりが不快そうな顔をする。
「おい！　また沸いて来てるぜ?!」
「あそこには私が行く、皆は此処で影を喰い止めて」
「危険だ、ゆり！　どんな奴が居るのかわからない」
俺はゆりの腕を掴む。
ゆりは掴んだ手に自らの手を重ね、外す。
「大丈夫よ……私は絶対にやられないし、消されるつもりも毛頭無いわ」
そう言ってゆりは行ってしまった。
「顧問！　かなでだけじゃ厳しくなってきた！」
音無が言う。
俺達は己の武器を携え、影が霧散するように消えるまで屠り続けた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　Ｌａｓｔ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ａｄｖｉｓｏｒ（前書き）

これにてａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓ編終了でござる。

Ｅｐｉｓｏｄｅ　Ｌａｓｔ　Ｓｐｅｃｉａｌ　Ａｄｖｉｓｏｒ

全ての影が消え去って俺達は第２コンピュータ室の中で壊れたパソコンの山に囲まれ、倒れているゆりを見つけた。
見た所の外傷は無し。
敵も居ないという事でゆりを閉鎖中の医務局のベットに寝かせ、俺達も身体を休めた。
次の日、俺と戦線メンバーは卒業式をする為の準備をした。
と言っても俺、ゆり、音無、かなで、日向、直井、野田、大山、松下、藤巻、椎名、ＴＫ、そして、復活した高松の計１３人だけの卒業式だ。
どうやら思いの強さで戻れるようになっていたらしい。
皆、賑やかに準備を進め、１１時位にはセッティングを終える事が出来た。
そして、音無達がゆりを起こしに行った。

しばらくしてゆりが連れられて来て、卒業式が始まった。
今から始めるという事にゆりが驚きながらも式を進めていく。

開会式の次にかなでオリジナルの戦歌斉唱
日向が微妙にキレてゆりの影に隠れるかなでが可愛かった。

卒業証書授与。

「一番の年長者という事で、俺が卒業証書授与をする！」

ふざけたヅラとチョビ髭が用意してあったが、断じて断った。
そして、俺は一人一人の名前を読み上げていく。

「椎名　枝里」

「はい」

「直井　文人」

「はい！」

「日向　秀樹」

「はい！」

「立華　かなで」

「はい」

「中村　ゆり」

「はい！」

「音無　結弦」

「はい！」

「よし、これで戦線全員だな……」

俺がステージから降りようとした所で――――

「ちょっと待った！」

音無に呼びとめられた。

「顧問の分もあるんだ！」

「俺は戦線を抜けたんだ。　この式に居られるだけでも十分さ」

そう言ったら戦線のメンバーから怒られた。

「朱然義封！」

「はい」

■■■■としての記憶も手に入ったが、やっぱり俺は朱然だからな……。

その名前で卒業証書を貰った。

次は卒業生答辞だった。

もっとも卒業生答辞という名の暴露大会らしいが……。

「えっと……僕が最初、だよね……僕は、ずっと歯牙にもかけられずにずっと無個性で生きてきて、そして交通事故で死んだんだ……でもこの戦線で、無個性でも皆仲良くしてくれたし、楽しく過ごせて凄く嬉しかった。

皆、ありがとう」

「次は私ですか……目が覚めたらいきなり卒業式というのも可笑しな状況ですね……私の人生はエリート意識の強い家に生まれ、出来の良い兄達に嘲笑される毎日を過ごす人生でした。

死んだ理由は忘れましたが……此処での生活は気負いせずに過ご

せて、とても楽しかったです」

「次は俺だな……過去の事など、とうの昔に忘れた。　覚えているのは山の中、飢えて彷徨っていただけだ。
　ゆりっぺ、俺はお前が好きだッ！　付き合ってくれ！」

「全く脈絡なく告白しやがったァ？！」

「ごめんなさい」

「速攻フラれたァ？！」

「外野がうるせぇが、俺は極道の家に生まれてよぉ……家の抗争に巻き込まれて死んだ。
　普通の生活なんて過ごせねぇと思ってたが、存外楽しいもんだったぜ……」

「次は俺の様だな。　俺は柔道の試合会場へ向かう途中でバスの横転事故にあってな……そのまま此処に来た。
　最初は無念に思ったが、此処での戦いの日々も悪くはなかった……いや、寧ろ楽しいものだった」

「私の家は古い古武術……特に小太刀を扱う家でな……後継ぎが女の私しか居らず、厳しい修行を叩き込まれていて生傷が絶えなかった。
　死んだのは修行中の当たり所が悪くてな……此処での生活は可愛い物が沢山あって至福の場所だった」

「Ｉｔ' ｓ　ｍｙ　ｔｕｒｎ……オレ、ダンスで稼ぐＳｔｒｅｅｔ ｃｈｉｌｄｒｅｎ.　此処のＬｉｆｅ、心に残るＨａｖｅ　ｎｅ

ｖｅｒ　ｆｏｒｇｏｔｔｅｎ　ｍｅｍｏｒｉｅｓ」

日向、直井、かなで、音無、ゆり、俺も過去を語っていく。
かなでの心臓が音無のものだった事は皆を驚かせた。
それぞれがそれぞれのの過去を暴露し終えた。

そして、俺はこのタイミングでこの世界の事を話す事にした。

この世界は結局の所、神が創った訳ではない。
此処は人の思いが集まる場所。
偶発的に創られた――――というより一定の条件が重なって発生した世界だ。
特定の環境下に於いて発生した、指向性をもった人間の思考――――この場合、理不尽な人生によって青春を送れなかったが故にそれを再現させるという場所。
人の思考が集まれば文化に成るのと同じだ。
理不尽な人生を送った思考が集まり、この世界が創造された。
この世界の創造条件はその思考が一定の値を超えた瞬間に創られる事。
より上位の集団思想が集まった場所。
そう……俺も一度そこを通った事がある。
此処はカール・グスタフ・ユングが提唱した集合的無意識によって発生した場所、阿頼耶識の一部だ。
だから無意識的な無念を解消すれば消えるんだ。
模範的に過ごして消えるのも恐らく普通に過ごす内に無意識の無念が薄れていくから消える。
振りでも消えるのは無意識下のモノだから……意識していてもどうにもならないから。

本当に歌いたかった歌を歌った岩沢。

願いを叶えてもらったゆい。
それぞれがそれぞれの戦いを生き残った戦線メンバーの皆。
最後は影やらアヴェンジャーが現れてまともな青春とは言い難かったけどね。

仰げば尊しを歌い。
一悶着もあったが歌いきる。

最後に閉式の言葉。

「これで卒業式を閉会します！」

音無が胸を張って言った。

その瞬間、世界に罅が入った。

「な、何だ?!」

五段が言う。

「これで……この世界の役目が終わった」

俺は言う。

「どう言う事だよ?!」

音無が俺に詰め寄る。

「この世界は思いの世界だ……なら、この場所が必要とされなくなったら壊れるに決まってるだろ?」

「そんなッ?!　じゃあ、俺達はどうなるんだ?!」

地鳴りと共に地面が崩れ始める。

「此処に居れば魂が消滅……なんて事になるかもな」

「だったら、早く逃げないと!」

「Ｒｕｎ　ｉｎｔｏ　ｔｈｅ　ｎｅｘｔ　ｗｏｒｌｄ!」

俺達は体育館の出口を出てグラウンドに集まる。

そして、音無達が校門へと走り出そうとして最後尾の音無が、俺が一緒に着いて来ない事に気がつき振り返る。

「何やってんだ顧問!　呑み込まれるぞッ!?」

「俺は行けない……」

「何言ってやがんだ顧問!?」

藤巻が叫び、音無が俺の所まで戻って腕を掴む。

だが俺は一向に動かない。

「音無……俺とお前達の行くべき場所は違うと思うんだ……」

周りはほぼ崩れ、虚無の空間が広がる。

「お前等はお前等の人生をまた歩け、俺はまた別の世界に旅をする」

俺は音無を校門へ下っていく道の方を向かせる。

その視線の先には戦線のメンバーが振り向いている。

「でも！　俺達と来れば顧問だって普通の人生を――――――」

「生きられたとしても……一度死ねば別の世界へ旅をするだけだ。

それに普通に生きられない気がするしな……」

「でも……それでも！！」

音無の他にも戦線の皆が泣いている。

「何だよ……泣いてるのか？」

「当たり前だろ……ッ！」

「俺の事は気にするな……余計な、御世話だ……音無、お前はかなでの事だけを考えてればそれでいい」

「……ッ」

音無は答えない。

「お前等ッ！！　強く願えば、お前達はきっとまた会える！　再会出来る！
強く願え！！　お互いがお互いの事を忘れていたとしても！　魂に刻みつけた絆は断ち切れない筈だッ！！
俺達はこのまま真っ直ぐ走り出すッ！！　俺は俺の道をッ、お前等はお前等の道をだ……ッ！！
俺は一緒に行けないから……今から俺の真の名前、本当の信頼した仲間にしか託さない名前をお前らに預ける！
俺の真名は水仙だ……ッ、お前等と過ごしたこの世界、楽しかったッ！！」

俺は叫ぶ。

「合図をしたら振り返らずに走り出せ！　脇目も振らず……一直線に校門まで駆け抜けろ！」

俺達は走る為に身構える。
不意に……近かった音無、ゆり、かなでが口を開いた。

――――――貴方が居なかったら色々と危なかったわ　ありがとう水仙。

――――――水仙、今までありがとう……アンタは俺達にとって、最高の特別顧問だったよ。

――――ありがとう水仙……貴方が手伝ってくれるって言ってくれて、とてもうれしかった。

「行けッ！！」

俺の声で同時に走り出す。

――――皆は次の人生が待っている世界に

――――――俺は根源へと至る道へ

――――――脇目も振らず、振り返らず

――――――唯、一直線に自らの進むべき場所に

――――――胸を張って、ひた走る。

Ｅｐｉｓｏｄｅ Ｌａｓｔ Ｓｐｅｃｉａｌ Ａｄｖｉｓｏｒ（後書き）

こうして朱然は戦線と別れ、新たな世界へ旅立ちます。
他の戦線メンバーの過去はでっち上げです。
公式設定ではございませんので（ｒｙ

という訳で、憑依とか転生とか召喚されるお話・Ａｎｇｅｌ Ｂｅａｔｓ編終了です。
此処までお付き合い頂き本当にありがとうございます！
しかしながら、朱然さんの旅はまだ終わりません。
今後も皆様の暇潰し程度になれる様に、なるべく原作設定から逸脱しない様気をつけながら書いて行きたいです。
いつ更新が途絶えるかもわかりませんが、よろしくお願いします。

此処まで読んで頂いた読者様に無類の感謝を

第ＥＸ・３章　世界の選択（予告編）（前書き）

という訳で、この世界に行ったらこうしたいなぁ～と思い浮かんだ事を書き連ねてみたり・・・・・。

この中からお気に召した内のどれか、もしくは別の魔法に関連する世界に票を投じてくださると嬉しいです。
投票は感想欄の一言に書き込んでくだされればそれでＯＫです！
お気軽に投票をしてくださいねぇ～☆ミ
この中の三つ、もしくは別の魔法関連の世界で一番票の多かった世界に朱然さんを送る予定。
投票は今日の２６時までです。
一秒でも遅れた場合は無効とさせていただきますので悪しからず。
それと前にフライングで投票した人でやっぱり違う世界にしたいと思った場合は訂正したいと書いてくださいなー。

第ＥＸ・３章　世界の選択（予告編）

魔法少女リリカルなのは（無印）　～

「何だッ？！　引っ張られる？！」

「そんな？！　なら、アルハザードの正体はッ！？」

「そうです」

「誰だッ？！」

「なら、この身体はなんなんだ？」

「貴方の身体は魂だけという稀有な存在でしたのでナノマシンの群体で実体を形作りました」

「ナノマシン体専用のデバイスです。
武装の即時生成、用途に合わせ最適化する戦闘形態の移行するシ

ステム等を使用する為、演算能力は他のデバイスよりも群を抜いていたのですが、プログラムが完成出来なかった為、私は廃棄処分扱いになっていました」

「その問題ってａｎｇｅｌ　ｐｌａｙｅｒ使えばその場で何とかなるんじゃね？　マテリアルに干渉して変化させるソフトなんだけどさ」

「興味深いソフトです……」

「ぐあァァァッ？！」

「「誰？！」」

「双方、今は引け！　そこの管理局の小僧もだ！」

「不味い！　ジュエルシードが暴走を始めた？！　フェイト！」

「シトリン！」

「わかっています！」

「貴女は？」

「私はリンディ・ハラオウン、人に名前を尋ねる時は自分からと言わないかしら？」

「俺は朱然」

「シューゼン、でいいのかしら？」

シューゼン……否定しなくていいかな？
面倒だし。
うーむ……取り敢えず、今は唯のシューゼンとでも名乗っておくか……。

「ああ、シューゼンだ……」

「貴方は何故、ジュエルシードを狙うのかしら？」

「それが見つかったからこの事件が起こった……なら、そんな物壊してしまえばいい」

「モードシフト・マジックシューター！　マジックアロースタンバイ！！」

紫の魔力光を放つ無数の矢が朱然の前面に滞空する。

「何！？　この数……ッ！？」

「インジェクション！」

矢が一斉に目標へ殺到する――――――！

「私は行くのよ！！　アルハザードへ！！」

「無駄だッ！！　アルハザードでそんな事出来やしない！！　死人は……お前の娘は生き返らないッ！！」

魔法先生ネギま！　紅き翼編　～

「此処は……？」

「此処はヘラス帝国の孤児院ですよ」

「何で……この子達が死ななきゃならなかったんだッ！？　アンタは子供を守ってるんじゃなかったのかよ？！」

「孤児は居なくなっても誰も不審に思われにくいですからねぇ……貴方は我々［完全なる世界］にとって、とても珍しい実験体だ！」

「ふざ、けるなァァァァ――――ッ！！」

「さーて、目的地はこの近くの孤児院の筈だな――――――」

「アァァァァ――――――ッ！！」

「――――――ッ？！　何だコイツ？！」

「ナギ！！」

「こっち来んな詠春ッ！　半端じゃねぇくらい強ぇアルもだ！　コイツ、帝国の人間か？！」

「千の雷（キーリプル・アストラペー）！！」

「反射す百頭（ナインライブズ）！！」

「馬鹿な？！　ナギの千の雷を返しただと？！」

「あり得ません！　魔法の反転など……術式的にもあり得ませんし、ましてやナギの馬鹿魔力を返すなど！？」

「ワシも長い年月を生きているが、あんな事が出来る者は見た事も無いぞ？！」

「お食事中しっつれーい！」

「「食べ物を粗末にする奴は……斬る！」」

「はーっはっはっはっは！　貴様等、赤き翼用にコスト度外視で用意した魔法無効化陣だ！

気すら使えまい！　そして、このヘラス帝国魔法騎士団精鋭一個大隊の包囲だ！

幾ら赤き翼といえど魔法や気が使えなければ唯の人よ！」

俺は無影を使って、洗練した技のみで魔法騎士団を殺さない程度に倒していく。

「何故だァァァァ――――――ッ！？」

「たかだか気と魔力を封じたくらいで俺達を倒せると思うな」

「まあ、魔力と気を使わない戦いなら赤き翼じゃ上位だからなぁ～水仙は」

「ですねぇ～」

「だな、そもそも俺達に喧嘩吹っ掛けること自体が自殺行為だぜ」

「来たか……世界の調律者よ」

「世界の調律？　何それ？　それに何だ？　この赤い粒々……地面から湧き出してる？」

「それは異常に発生しているエアルだ」

「マナとは別物みたいだな」

「その紫水晶（アメジスト）の様な瞳……アメジストというのはどうだ？」

「あー、じゃあ少し弄って始祖の隷長（エンテレケイア）としての名前はアメジスとでも名乗るよ……」

「えーっと、この街の隊長さん？　俺はアメジス……通りすがりの傭兵なんだけど……どう？
　こう見えて俺、結構強いんだけど。　雇わない？　今なら格安で雇われるよ？」

「うーむ、今は猫の手も借りてぇ……見た所此処には着いたばかりの様だし、一緒に詰め所に来てくれぃ」

「毎度ー♪」

「で、何で女の制服？」

「似合うじゃねぇか！」

「ぶはははは！　何だその格好！　似合いすぎだろ？！」

「笑ったら失礼だよ、ユーリ……ッ」

「今、男の騎士団員の服が不足しているのよ」

「だから、我慢して頂戴」

「此処でもなのかァァァッ！？」

「僕は関係ないって言ったろ！」

「アレ、止めなくていいの？」

「「放っておけばいいのよあんな馬鹿二人」」

「二人ともいいから手ェ出せっつってんだよ！」

「俺はもう、動けねぇんだ……ユーリ、持ってけ！　フレン、後は頼んだぞ！」

「じゃあな！　短い間だったけど楽しかったぜ！　それに俺は此処でやる事があるんでな……」

「隊長！　アメジス！」

「さて、始祖の隷長（エンテレケイア）としての務めを果たしますかね……ハァァァァッ！！」

「こりゃあ……アメジス、お前さんは一体……」

「アメジス？！　隊長と一緒にあの遺跡で死んだんじゃ？！」

「よぉ、ラピード！　元気だったか？　随分でかくなったな！」

「ワォーン！」

「よぉーし、よしよし！」

「戯れてねぇで答えろよ……ッ！」

「まあまあ、これからゆっくりと教えてやるよ」

「どちら様です？」

第ＥＸ・３章　世界の選択（予告編）（後書き）

リリなの編では宝具の使用が出来なくなる予定。

ネギま！編ではそのままで更に朱然さんがカスタムされていく予定。

ヴェスペリアでも宝具の使用が出来なくなる予定。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ４　魔法先生ネギま！　紫の麗人（前書き）

結果発表～！！

えー、タイトルの通り、ネギま！になりました！

因みに数で表すなら――――

ネギま！　１３票

リリなの　８票

ヴェスペリア　６票

伝説の勇者の伝説　１票

となりました～。

投票して頂きました皆様方、ご協力ありがとうございました！

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ４　魔法先生ネギま！　紫の麗人

俺はまた漂う。
浮いているようでいて、沈んでいる。
沈んでいるようでいて、浮いている。

戻ってきたか……。

「然り」

戦線の奴らは今度こそ幸せな人生を送ってほしい。
そして、また巡り合ってほしい。
願わくば、俺の名前も思い出してくれたら嬉しいな……名も無き者、次は何所に行くんだ？

俺は問う。
だが名も無き者は答えず、訳の分からない事を言う。

「来るぞ」

何が？

そう言った瞬間、俺は根源から遠ざかる。

な、何だ?!
流される?!

「お前の行く次の世界はもう一つの世界がある場所」

俺はそのまま流された。

世界がもう一つある世界？
何所だよそれは？！

「魔なる力を使う、仮初で創られた魔法世界」

魔法世界！？
まさか次は……。

「お前はその世界で、正義と悪を知るだろう」

正義と悪なんて、エミヤシロウとの問答だけで十分だ！

「お前はその世界で、魔法を知るだろう」

魔法は確かに魅力的だが……。

「お前は新たな悲しみを知るだろう」

悲しみ？

「お前は愛する者を得るだろう」

いやいや、中身そろそろ１００越える爺なんだが……。

「行くがよい、根源へ至りし者よ」

オイ、名も無き者！
その愛する者の所を詳しギャアァァァァッ？！

俺は意識を失った。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ４　魔法先生ネギま！　紫の麗人（後書き）

開票して五分ほどで書いたのでかなり短いですが、次話から赤き翼の大戦の話になる予定です。

言うなれば、魔法世界の八英雄～赤き翼の大戦記～みたいな感じですかね～（笑）

第1翼　一時の平穏、慟哭する紫の麗人（前書き）

朱然さんが更に強化されたりしてみたり・・・・・・。

第1翼　一時の平穏、慟哭する紫の麗人

「ぅ……此処は……？」

目を覚ますとそこは……知らない天井だった……。

「此処はヘラス帝国の孤児院ですよ」

人の良さそうな顔をしている若い神父だった。

身体に力が入らないな……。

「おや、どうされました？」

「あー、別に……」

俺ははぐらかした。

いきなり会った奴は信用しない。

コレ常識。

「そうですか……しかし、倒れている者を放っておく事など、神の名を借りる者として出来る筈もありません」

そう、神父が言って十字を切る。

「「「「「神父様ー！」」」」」

五人の子供達の声が聞こえて来た。

「皆さんは部屋入らない様にと言ったではないですか……」

「だってー！」

「今は帝国の国境が騒がしいのですから」

「この人誰？」

子供の一人が拾ったらしい木の枝でグリグリと刺し……痛いよ、やめッ、マジ刺さっとるって！

「こら！　人を傷つけてはいけないと言ったでしょう？」

「ゴメンなさい……」

しゅんと項垂れる子供Ａ

「此処の子供達は……？」

「私が預かっている戦争孤児達ですよ……私はその子供達を守る事に生き甲斐を感じていますよ」

神父が子供達を抱締めながら言う。

「そういえば名を名乗っていませんでしたね。　私の名はジョシュア。　見ての通りの神父です。　さあ、皆さん、この方に自己紹介を」

子供達が神父に促され、名乗り始める。

「ディーだぜ！」

俺にグリグリした生意気そうな虎耳の男の子が言う。

「……ウィン」

眼鏡をかけた内気そうな……水色髪の精霊っぽい男の子。

「私はクルスよ！」

ツンデレっぽい金髪でセミロングの美幼女。

この子も何か精霊っぽい。

「僕はヤオ」

此方は黒髪で東洋人っぽくて背が一番高く、クールっぽい此方も精霊。

「私はルーデシア、よろしくね？」

銀髪のウェーブした長髪が可愛いのだが、何所かイリヤを彷彿とさせる……腹黒？

腰の辺りにちっちゃい悪魔羽が付いている。

子供達が自己紹介を終える。

視線がこちらに集まる。

「ああ、俺の番か……俺の名は朱然だ」

「自己紹介が終わった所で、お身体にも障りますし、そろそろ日が暮れます。　貴方も身体をゆっくりと休めるとよいでしょう。
さあ、今日の夕食の準備をしますから、お手伝いをしてください。
ああ、ディーとクルスとルーデシアは大人しく待っていてください」

ウィンとヤオは頷き、残りの三人は抗議の声を上げながら部屋を出て言った。
どうやら、ディーは落ち次が無いという理由、女の子二人はバイオ兵器を製造するとか何とかで手伝いをさせないらしい。

特に行く所も無かったので、俺はこの孤児院にしばらく居る事にしたのだ。
俺が拾われてから一週間後。
今は１９８１年の８月になった。

この世界は魔法先生ネギま！の魔法世界の方らしい。
そして、この年はヘラス帝国とメセンブリーナ連合が大分烈戦争を開戦した年。
確かナギは１３歳でメセンブリーナ連合の側に付いた筈だ。
俺は積極的に物語に関わる事に抵抗を覚えていた。
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓの世界で物語を歪めてしまったから……
それに、この孤児院の子供たちと過ごす事がとても穏やかで……そんな孤児院には更に二人の子供が増えた竜種の男の子、ファヴニルと地精霊の女の子、ノーラという。

騒がしくも楽しい時間が過ぎていった。

蓮華との子が出来なかったから、自分に子供が出来た様でとても嬉しい。

自分の孤児院を作って暮らすのも悪くないかもなぁ～。

唯、容姿の所為でお母さんと呼ばれるのはちょっと勘弁してもらいたい……。

だが、その時はすぐ近くまで迫ってきていた。

いや、気がつかなかった俺の落ち度だったのだろう。

この時が平和すぎて、魔眼を使わなかったという事もあったが…

…此処に来る孤児達に人間の子供が含まれていなかったのか。

確かに此処は魔法世界のヘラス帝国で獣人、亜人等が多いといっても、人間が一人も居ないのはおかしいと気が付くべきだったのだ。

不意に目を覚ますと、見知らぬ石造りの部屋に居た。

俺は起き上がろうとするが、両手両足が横たわっている台に固定されていて動けない。

即座に気で身体を強化し枷を壊した。

「……ッ、手首が枷で擦れて血が……何日も眠らされて捕まっていたのか？」

俺は扉を潜り抜ける。

幾ら平和ボケしていても襲われれば気が付く筈だが……魔法、もしくは無味無臭の薬の類か？

そこには独房が並んでいたが、中には誰も居ない。
俺は歩を進めるが、壁に突き当たってしまった。
何かないかと魔眼を発動する。

風がこの壁の向こうから微かに流れている？

俺は壁を調べ、一ヶ所だけ押し込める所があったので押し込むと壁が動き出した。

隠し扉……孤児院の礼拝堂？　何でこんな所に……。

「おや、目を放した隙に……」

「ジョシュア？　あの趣味の悪い部屋は何だ？」

普段から見ていた人のよさそうな顔が歪み、悪辣な表情にとって代わる。

「ク、ククク、失礼、いや、未だに家族ごっこから目の覚めない君が滑稽でね……」

「滑稽、だと？」

「不可思議な魔力を感じ、何かに使えるかと思って拾ってみれば思わぬ拾い物だった。
私は以前は医者でね……調べて分かった事だが、君の体は純粋な

魔力で形作られていたんだよ。
その存在を保つ為に空気中の魔力を吸収してね」

「だからどうした？」

その事は魔眼で見てすぐに気が付いた。
サーヴァントみたいなものだとは思っていたし、特に異常も無いから気にしなかったのだが……。

「今、君の体がどうなっているかわかるかい？」

ジョシュアの言葉に魔眼を使い身体を見る。

「……ッ、何だ？　実体がある……だと……？　そんな、待て……何で俺の身体の中に子供達の流れが……？！」

「長かった……ッ！！　こんな僻地でひたすらに完成の目途が見えない実験を繰り返している人生などまっぴらだったのだ！
偶然の産物とはいえ、組織でも研究を諦め、廃棄された研究を今ッ！　この私がその完成に限りなく近い実験体を完成させた！
その君を連れて行けば、私も［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］幹部になれる筈だ！！！」

［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］だと？！
くそッ！？
そんなのの場所に居たのかよ？！

だが今、優先すべきは――――――！

「答えろジョシュア！　子供達がどうなったのかをッ！！」

「私の研究……それはこの世界の者達、主に精霊や獣人、亜人の複数複合による多様性の獲得……その犠牲になってもらった。
いやはや……魔力で構成されている君の存在は他に類を見ない……他者との適合率も魔力の塊ならば拒否反応どころか最高値に限りなく近い数値を出してくれたよ！！
子供達は君の身体の中で仲良く一つになったんだ……つまり子供達の命は君の命と同化している。
失われた吸血鬼化の秘法の断片を探し出し、その断片を元に応用して作った儀式魔法で君は子供達を取り込んだのだ！！」

「つまり……ッ、それは……ッ！！」

俺の強く握られた拳から血が滴り落ちる。

「ああ、はっきり言ってほしいのか……この孤児院の子供は一人残らず君の中だよ。
大丈夫……子供達は文字通り、身も心も君の中に完全融合した。
つまりは死んだんだよ。
誤算だったのは君が人格を残したままだった事だねぇ」

冷酷な視線を向け、ジョシュアは言う。

「何で……この子達が死ななきゃならなかったんだッ！？　アンタは子供を守ってるんじゃなかったのかよ？！」

俺はジョシュアに叫ぶ。

「孤児は居なくなっても誰も不審に思われにくいですからねぇｐ貴方は我々［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］にとって、とても珍しい実験体だ！」

「ふざ……けるなァァァァ――――――ッ！！」

俺は気で強化し、瞬動を使ってジョシュアに殴りかかった。

「べらべらと話していたのは時間稼ぎですよ。　取り込んだ種族の特性を使える君の体は厄介ですし、魔力は常人のそれを上回っていますからねぇ」

俺は地面から現れた魔法陣に拘束される。

「グ、ガ……ッ！！」

「このまま、大人しくしているがいい」

ジョシュアの声が響く。

何で……何でだッ！！

今度こそ姉さんを助けられた、守れたと思った矢先に……ッ！！

一週間とはいえ、自分の子供の様に可愛がった子達を……ッ！！

またッ、俺の存在の所為で殺してしまったって言うのかよぉ……ッ！！

――――――その瞬間、意識が途絶えた。

「アアアァァァァ――――――ッ！？」

朱然の頬に血の涙が伝う。
それと同時に、俺を拘束していた五重の捕縛結界に罅が入り始める。

「何ッ？！　五重の捕縛結界に罅が？！」

1枚イィィィ――――――！

「そんな……下級とはいえ竜種すら捕縛する特別製の術式を組み込んだ結界だぞ……ッ！？」

慄くジョシュア。

2枚イィィィ――――――ッ！

「ヒィッ！！　在り得ないッ？！」

3枚イィィィ――――――！

「私の理論が間違っている筈が無い……ッ！！」

4枚イィィィ――――――！

「こんな……ッ！　こんな所で死んで堪るかァァァァ――――――ッ！！」

5枚イィィィ――――――！

ジョシュアの結界がバラバラに砕け散り、その衝撃で地面を二度バウンドしながら転がった。

「ク……ッ、お笑い草だ……こんな化け物を造り出してしまうなんて――――――」

死ネェェェ――――――ッ！

ショシュアの右の掌を踏み砕く。

「アアアッァアァアア――――――ッ！！！？」

――――――許シヲ乞ウ程ノ苦痛ヲ以テ死ネ！！

朱然はジョシュアの四肢を潰し、死なない程度に骨を踏み砕き、喉を踏む。

「――、――――――、――――――」

ジョシュアの口から微かに漏れる声を朱然は聞き取る。

――――――何ヲ言ッテイル？

耳を近づける。

「だずげ、で……ごろ、じで……」

ナラバ、望ミ通リ、殺シテヤロウ――――――！！

ゾブリと一息に心臓を腕に貫かれた神父の身体は何度か痙攣して、息絶えた。

その貫いたままの腕を一気に引き抜き、獣の様に唸る。

「ア゛ア゛アアァァァァ――――――ッ！！」

また……守るべき者を己の存在が切っ掛けとなった所為で失った朱然の慟哭の叫びが木霊する。

第1翼　一時の平穏、慟哭する紫の麗人（後書き）

強すぎるかなぁ～と思いながら勢いで書いてみたり。
強すぎだろ！と突っ込みを受けたらもうちょっと大人しく再編集するつもりです。
朱然さんが仙人という人間と人外の中間から完全に人外化してしまった。
七人の子供達よ成仏してくれ……。
そして、朱然さんの治ったかと思われたトラウマ復☆活！

朱然さんは獣人（虎）、悪魔、龍族、水・地・闇・光の精霊の特性を手に入れました。
それでも赤き翼御一行に勝てない気がする……。

次はナギさん御一行が現れて仲間になる予定。

第2翼　邂逅、嘆き苦しむ紫の麗人（前書き）

暴走錯乱中の朱然さんＶＳチート筆頭ナギ・スプリングフィールド回です。
地味ですが……。

第2翼　邂逅、嘆き苦しむ紫の麗人

ヘラス帝国国境近く……ナギ達、赤き翼はメセンブリーナ連合より孤児達を人体実験に使っているという孤児院へ向かっていた。

「さーて、目的地はこの近くの孤児院の筈だな――――」

「アァァァァ――――――ッ！！」

「――――――ッ？！　何だコイツ？！」

突然、慟哭し血の涙を流す朱然がナギに攻撃を仕掛けた。
ナギは咄嗟に瞬動を使い難無く回避する。

「ナギ！！」

「こっち来んな詠春ッ！　半端じゃねぇくらい強ぇ……アルもだ！
コイツ、帝国の人間か？！」

ナギは襲撃者を眺める。
敵の数は一人、顔が女みたいな男で紫色の長い髪が更に女の様に見紛わせる。
特に特徴的なのは紫水晶（アメジスト）に輝いている瞳。
あの瞳は多分、魔眼だ。
それも面倒そうな効力を持つと感が告げている。

「お前が子供達をォォォォォ――――――ッ！！」

「ナギ……ッ、その人物は貴方程ではありませんが、かなりの魔力量保持者の様です！！」

アルがナギに離れた場所から忠告する。

「わかってるっての……ッ！」

ナギが動き出す。

「久しぶりに骨のありそうな相手だぜッ！！　見たトコ錯乱してるみてぇだが、ぶっ飛ばせば正気に戻んだろ……オラァッ！」

ナギは魔力で強化した拳を朱然の腹を目掛け振り抜いた。
だが、それを朱然は当然の様にかわす。
そのまま、空いた左手で顔面を狙う様に殴る。
それすらもかわされる。

「何だコイツ！？　まるでこっちの攻撃を読んでる見てぇだ！　しかも、攻撃するのと同時にもうかわす軌道に居やがるッ！！」

朱然がナギに追い付き、拳の乱打を叩き込む。

「チィ……ッ！」

ナギは両腕でガードしながら後方へ下がり、空中へ跳躍してアンチョコを取り出し、詠唱を始める。

「来れ雷精　風の精ッ！　雷を纏いて吹きすさべ　南洋の嵐ッ！
ウェニアント・スピーリトゥス・フルグリエンテス・ティエッルグラティーヌレット・テンペスタースアウストリーナ
ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス
雷の暴風ッ！！」

ナギの突き出した拳から雷の暴風が放たれ、朱然の居た場所に着弾。
ミサイルが爆発したかのような惨状がナギの目に写った。
「っし！！」
ナギがガッツポーズを決めた。
「おい……ナギッ！！　お前はいつもいつもッ、ちょっとは周りを考えて戦えッ！！」
雷の暴風の惨状に両手を口に添えて詠春がキレる。
「詠春は口五月蠅ぇなー……相手が意外と強くて手加減できなかった――――――」
「よそ見をするな馬鹿者ッ！」
「――――――ガアッ？！」
ゼクトの突然の警告も空しく、ナギの顔に朱然の拳が叩き込まれた。
「「「ナギッ！？」」」
三人の声が重なる。
「ぺ……ッ、まさか無敵の俺様に一撃入れてくるとは思わなかったぜ……」

空中でもんどりうった態勢をすぐに整え、ナギは血反吐を吐き出し言う。

「なら、今度は全力で戦ってやるぜぇ……ッ！！　千の雷（キーリプル・アストラペー）ッ！！」

ナギから広範囲殲滅用でおおよそ対個人へ向かって放つ呪文ではない無数の雷――――千の雷が朱然に殺到する！

だが、錯乱しているとはいえ、それをむざむざ受ける朱然でも無い。

朱然は何所からともなく無境を取り出し、構えた。

そして――――

「反射す百頭（ナインライブズ）！！」

ナギは驚いていた。

鏡の様な楯が現れ、奴が構えたかと思うとその鏡の楯は構えている盾の周りに8枚の同じ盾が滞空し、千の雷のそのこと如くを全て反転させていく。

「俺の魔法がッ？！」

「馬鹿な……ナギの千の雷を返しただと？！」

「あり得ません！　魔法の反転など、術式的にもあり得ませんし、ましてやナギの馬鹿魔力を返すなど！？」

「ワシも長い年月を生きているが……あんな事が出来る者は見た事

も無いぞ?!」

長年考えられ断念された幻と言ってもいい代物だ……問題は多数ある。

呪文の構成術式、その他技術的障害、その術式維持の魔力量、その術式を補助する為のマジックアイテム、膨大すぎる費用、費用対効果、その他諸々。

「面白れぇ!!　アーティファクトごと押し切ってやらァ……ッ!!　もう、いっぱァーつッ、千の雷(キーリプル・アストラペー)ッ!!」

ミシリと、朱然の9枚に増えた無境に一斉に罅が入った。

反射す百頭(ナインライブズ)の効果は一瞬、その効果が薄れていき、無境が一つに戻る。

一枚では到底返しきれない千の雷が朱然を呑みこんだ。

「ナギッ!!　お前にはいつもいつも言っているが、周りを気にしながら戦えッ!

幸いにもこの近くには一般人は居なかったから良かったようなものの、千の雷なんて――――」

詠春がナギに説教をかまし続け、ゼクトとアルはあの馬鹿魔力で無傷とはいかないものの、傷つき、火傷を負った朱然を介抱していた。

「よし、これでこの者の傷は完治じゃ」

「ええ……ですが先程の魔法反射は一体……？」

「この者の出したあの鏡の様な楯のアーティファクトの効力かのう？」

二人は考察をするが、はっきりとした事はわからない。

「アルッ！　お師匠ッ！　何かわかったか？！」

二人を押し退け、朱然を覗き込む。

「うむ、傷は完治させた。　少しすれば目を覚ますじゃろ」

「……ぅ、あ？」

「目を覚ました様ですね？」

「……ぅ、あ？」

目を覚ますと同時にそんな声が漏れる。

「目を覚ました様ですね？」

「俺、は……？」

周りをゆっくりと頭だけを動かして見まわす。

「錯乱して襲いかかってきた貴方は、このメセンブリーナ連合の問題児、ナギ・スプリングフィールドにノされたんですよ」

フフフフと胡散臭く笑いながら、アルビレオ・イマが言った。

って、アルビレオ・イマにナギ・スプリングフィールドだと？！ゼクトと近衛詠春も居るし……。

「そう、なのか……」

俺はジョシュアから聞かされた子供達の事を思い出し、俯いた。

「おや、どうしたのです？」

「所で貴方達はこんな国境に何をしに来たんだ？」

「私達はメセンブリーナ連合からの依頼でこの先の孤児院の子供の保護と施設の破壊に来たのですよ」

「で、向かっている途中でお前が俺に襲いかかってきたんだぜ？」

へへッ！と鼻の下を擦りながらナギが言う。

「そうか……」

俺は更に俯いた。

情けない……何て、無様なんだ……。

どよ～ん、と俺の周りに陰気な気が立ち込める。

「そんな気にすんなよッ！」

バシバシと俺の背中を叩くナギ。

「所で君は？」

説教から戻ってきたのか詠春がいつの間にか近くに来て問うてくる。

「俺の名前は……朱然だ」

「シューゼン？　ふむ、旧世界出身かの？」

「微妙に発音が違いますけど……それはこの際置いておきます。俺は旅をしていました。

そして、貴方達が探していると思われる孤児院に一週間ほど身を寄せていて……」

「お、ラッキー！！　案内してもらおうぜ詠春！」

ナギが詠春に振り向きながら言う。

「そうだな」

それに同意する詠春。

「残念ながら、もうその孤児院はありません」

「それはどうしてです？」

「俺が全て壊した……微かに残る意識の中で……子供達は死に、私の身体と融合してしまっている。

あの孤児院の責任者、ジョシュアという神父が吸血鬼化の儀式魔法の応用で、俺と子供達を……許さないッ！

俺は奴らを……［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］を……ッ！！」

噛んだ唇から血が滴る。

「何という惨い事を……」

「外道が……」

「フン……ッ」

アル、詠春、ゼクトがそれぞれの反応を返す。

そんな中でナギが口を開く。

「ソイツらがどんなもんかは知らねえが……シューゼン、俺達と来ねぇか？」

ナギは手を差し伸べる。

俺はその手を掴んで立ち上がる。

「名前の発音が違う……でも、よろしく頼む……ッ」

俺は頭を下げながら言う。

「仲間となった印に、俺の真名を預ける」

当然の如く真名とは何かを聞かれ、故郷の風習だと言う風に言っておいた。

こうして俺は図らずも紅き翼の一員となり、後に様々な異名……紫の麗人、無数の姿、謎のアーティファクト使い、俺の魔法がそのまま戻ってくんだけどズルくね？等となる第一歩となったのだった。

第2翼　邂逅、嘆き苦しむ紫の麗人（後書き）

と、単純な火力押しでやられました朱然さんでした。
そして、十年後に自身もチートに数えられる事に（笑）

次回もなるべく早めに更新しますノシ

第3翼　千の刃、敗北する紫の麗人（前書き）

ＶＳラカン戦です。
ナギ戦より、二週間ほどが経過して、自分の体の特性を魔眼で把握してすぐさま使いこなしています。
魔法もゼクトとアルに見せてもらい覚えました。
が、相手はあのラカンですし・・・・・結果は言わずもがな。
今回はその特性の一端を入れる為に八卦八武装はお休みです。

第3翼　千の刃、敗北する紫の麗人

とある森の中、俺達はから少し離れた所で鍋の準備をしていた。

「んっふっふ～、こいつが旧世界で噂の日本の鍋料理ってやつかぁ～……じゃ、早速肉を～♪」

ナギが鍋に肉をいきなり投入する。

「あっ、ナギ！　おまッ、何んで肉を先に鍋に入れてるんだ?!あーッ!!　馬鹿ッ?!」

鍋奉行の詠春が切り分けた野菜やキノコを入れたボウルを持ちながら注意する。

そして、ナギの暴挙によって鍋が肉オンリーになる。

俺は近くに在った豆腐としらたきを即座に投入して肉オンリーの状況を打開する。

「ちょ?!　何で水仙まで豆腐としらたきを入れる?!」

「そこに豆腐としらたきがあったから――――――」

「どこぞの登山家みたいな事をッ!?」

「――――――はい、これで投入完了」

「何というッ!?　ク……ッ!!」

詠春が悔み始める。

「トカゲの肉でも旨いのかのう？」

「いや、ゼクト……トカゲの肉は流石にどうかと思うが……」

ゼクトの的外れな質問に俺は答える。

そして、ナギによって更に投入される肉、肉、肉。

「ば、馬鹿っ！　火の通る時間差を考えて、まず野菜から投入するのが――――――」

「うっせ、うっせぇーぞ詠春！」

「――――――あーッ！？　肉が全て鍋にッ？！」

「フフ……詠春、知っていますよ？　貴方の事を古来、旧世界の日本人達は鍋将軍、と呼び習わすのでしょう？」

その瞬間、ゼクトとナギに衝撃が走った！

「つ、強そうじゃな？」

「ああ、お師匠、尋常じゃねぇ強さに違いねぇぜ……わかったよ詠春、俺の負けだ。　今日からお前が鍋将軍だ」

「全てを任す、好きにするが良い」

そう言って、ナギとゼクトが大人しくなる。

「鍋奉行の間違いじゃ……？　しかもあまり嬉しくない……」

数十分後。

「おお、何じゃこのソースは？　美味いぞ？」

「おおッ！？　ホントに美味ぇ？！」

醤油の美味さに騒ぐ二人。

「これこそが日本の誇る醤油だよ――――――」

「それに大根おろしですね」

「――――――というかナギは日本に来た時、寿司喰っただろ」

胸を張る詠春と会話に割り込み、そう付け加えるアル。

「俺はポン酢の方がスキー」

「おお……ッ！？　こっちも美味ぇ？！」

ナギが俺のポン酢に肉を付けて喰う。

「意地汚いぞー？」

「気にすんなってッ、姫子ちゃんにも食わしてやりてぇなぁ……」

ナギが遠くに視線を向ける。

「姫子ちゃんって？」

俺は原作は知っているが、知らない事になっているので一応聞く。

「オスティアの姫御子の事じゃよ」

「ああ……」

俺は思い出した様に言う。

「まあ……戦が終われば彼女を自由にする機会も掴めるやも、です」

「だが、その戦も何所か不自然に思えてならん……」

椎茸を頬張りながら言う詠春。

ナギが肉を食べたまま口を開く。

「何が？」

「水仙の言っていた［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］が裏で糸を引いているんじゃないかと私は言いたい訳で……って聞いているのか鳥頭？」

詠春がそう言った所で――――

大牙並みの大剣が鍋に直撃し、鍋の中身が飛び散った。

逸早く気付いたナギ、アル、ゼクト、俺は即座に肉だけを自分の皿にキャプチャーする。
遅れた詠春は座ったまま鍋を被っている。

「お食事中しっつれーい！」

そこに現れたのはラカンだった。

「俺は放浪の傭兵剣士ジャック・ラカン！！　いっちょやろうぜッ！！」

戦う気満々のジャックに対し此方は食事で忙しかった。

「何じゃ、あの馬鹿は？　んぐ」

「帝国のって訳じゃなさそーだな……もぐもぐ」

「こらこら、食べながら話すんじゃありません……まぐまぐ」

「そういう貴方も食べながら話しているではないですか……もぐもぐ」

立ち食い&食べながら話す四人。

「詠しゅ、むお……ッ？！」

ぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷるぷる――――――――！！

「フ、フフフフ……」

詠春が頭に鍋を被ったままプルプルしている。

「よし、食べた食べた……が、今の挨拶は頂けないなァ……」

俺はラカンの方へ向き直る。

「どーしたー！　来ねーのかぁー？！　来ねーならこっちから……」

ラカンが剣をぺしぺしと弄びながら言う。

「「食べ物を粗末にする奴は……斬る！」」

俺の天翼と詠春の夕凪がラカンの得物を斬る。

「おほ……ッ、タンマタンマ！！　あんたらマジ強ぇーな？！　ちょい待たね？」

「ふざけるなッ！　やる気なら本気を出せッ！」

「本気は出さんで良いよ……面倒臭いからな」

「どっちだよ！？」

俺と詠春の正反対の意見にラカンが突っ込みを入れる。

「まあ、いいや……流石の俺様も5対1じゃ本気だす訳にゃいかねー、ってな事で事前にもらった情報でやらせてもらうぜッ！」

ラカンが言い終わりに此方に向かってカプセルを投げつけた。

そこから現れたのは呪文とかで使う使役精霊を使って作られた娯

楽用というか、金持ちの娯楽用簡易精霊。
ご丁寧に、火、風、地のナイスバディに加え、保険のつもりか水のロリボディの簡易精霊達が詠春に纏わりつく。

「情報その1、生真面目剣士はお色気に弱い」

「く……ッ、卑劣な……ッ！　だが、これしき心頭滅却すれば――――」

「へぶッ?!」

胸に顔を挟まれ隙を見せた隙に何故がタヌキの置物が詠春の頭に直撃し、詠春は気絶した。

「ホイ、一丁上がり」

ニヤリというラカン。
精霊達が俺の方へ来るが、俺は完全スルー。

「は、完全スルーかよ?」

「生憎と俺は子は居なかったが、嫁やら何やらが居たんでね」

「ハーレムかよ?　うらやましいねぇ……アンタは新顔か?
写真と情報にゃ、４人だった筈だし……紫の女みてぇな兄ちゃんは居なかったハズ……」

「つい最近、仲間になったんでね……」

俺は天翼を手放し四肢を地面に突ける。

ディー、俺と一緒に戦ってくれ……。

「虎族獣化！！」

俺の身体が、メキメキと音を響かせながら、足と手の爪が鋭くなり、虎耳とシマシマ尻尾が生える。

さて、バグキャラ相手に何所まで通じるか……。

「むっ？　人間だと思ってたが……」

「虎爪斬痕」

俺は虎の鋭い爪に気を纏わせ、ラカンの身体に爪痕を刻む。

まるで某ドラキュラの名前を逆さ読みする吸血姫の様な攻撃を繰り出していく。

「中々の切れ味だが、子猫に引っかかれる様なもんだぜッ！！」

よく目を凝らせば、ラカンの皮膚には白い線しか刻まれていなかった。

「残念だが、後ろに三人問えてるんでやられてくれや……何となく左アッパァァァ――――――ッ！！」

腕の長さ的に届かない筈なのに尋常ならざる気の量と質を以て、不可視の巨大な腕のアッパーが俺に迫る。

「くッ！」

クルス……。

「光精霊化！！」

俺の身体が元の人型に戻って発光し、光の速さで攻撃をかわす。

「オイオイ……虎族かと思ったら今度は光の精霊……お前さんは一体、何者だ？」

「教えてやる義理は無い……光速瞬動！」

光の速さ……つまりは光速、ネギの雷速瞬動も光速の１５０Ｋｍ／Ｓ。

光化している自分も同じ速度は出せる。

ネギの闇の魔法風に言えば「術式兵装・乾為天」とでも言うべき光を纏う、速さのみに一点特化した兵装になるだろう。

ネギは闇の魔法での千の雷・二重装填で常に雷化する常時雷化、思考加速、身体機動加速を得て、更に接近戦をする事で先行放電への弱点を無くした。

原作じゃ、雷化したネギを相手に何となく落ちる場所がわかるとか言っていたが、光には先行放電（ストリーマー）なんてものは無い！

「ぐお？！　ぬ？　ご！？　が？！」

初めてネギに雷速瞬動を使われた様にラカンを滅多打ちにする。

だが、相手はあのバグキャラ、ラカンである。

「むん……ッ！！」

何と光になっている筈の俺を左手で捕まえた。

ちょっと待てぇーいッ?!

「やられっぱなしってのは、流石に気分の良いもんじゃねぇな……コハァ～」

何かコハァ～とか言ってる……何か怖ぇ！

でも、その前に！

「光の速さをどうやって感知して掴みやがったこの生けるバグキャラ?!　しかも何で光を素手で掴める?!」

「最初はチカチカしてたが、目とかその他諸々が慣れたッ!!」

ど――――ん!!と背景に音が書かれてそうな事を平然と言いなさる。

慣れたとか……てか、あり得ないよねッ!?

光ですよ?

粒子ですよ?!

波ですよ?!

００ガン〇ムの量子化した、あんな感じですよ!!?

掴める訳無いじゃんッ!?

「てな訳で今度こそやられなッ!!」

ラカンの五指が俺の腹に刺さり――――

「羅漢破裏剣掌ッ!!」

「ガ……ッ！？」

接触状態からの純粋物理攻撃を精霊化して受ける筈ないにも拘らず喰らい、回転しながら崖へと吹き飛ばされた。

攻撃が当たる前にゼクト、アルの魔法の術式構成を把握しコピーした耐圧障壁を緊急展開。

更に当たった瞬間に耐圧障壁を突き破って尚、必殺の威力を秘めた衝撃を化勁で拡散させ、乗用車に生身で跳ねられる程度までに衝撃を減衰させる事に成功し、地面を何度もバウンドしてようやく止まった。

「む、手応えがイマイチだったな……が、これで残り三人、ぬん……ッ！！」

突然、ラカンの居た場所が爆発し、ラカンは当然の様に避けた。

「おう、出たな？　情報その４、赤毛の魔法使いは弱点無し、特徴無敵」

「てめぇら、手ぇ出すなよ……ッ？」

そこまで見た所で俺の意識は途絶えた。

１３時間後

目を覚ませばそこは焦土と化していた。
傷はアルとゼクトが治してくれた。
で、ナギとラカンの方はというと、お互い満身創痍で膝を突きながらお互いをライバル認定していた。
その後も何かと勝負を吹っ掛けてくるラカンをナギがその度に戦い、辺りを焦土と化して、毎回毎回引き分けだった。
そんでもって最近になって、アルが口八丁手八丁ラカンに何かを吹き込んだりしていた。
その所為?もあってかラカン自身もお前等と居れば面白そう、何か気が合うし、という理由でラカンが仲間になった。

第3翼　千の刃、敗北する紫の麗人（後書き）

突然の強さ表～。
という訳でこんなパワーバランスで赤き翼、特にナギとラカンは自力の数値でこんなもんだと・・・・・気を使えば更に＋５０００とかいきそうな勢い。
朱然さんは通常の気での強化の数値で、＋αは＋宝具やら咸卦法やら足す感じ？
原作に載っていない人の所はこんなとこかな～と

強さ表

ナギ&ラカン	１２０００＋α	ＳＡ
ゼクト	１１０００＋α	
朱然	１００００＋α	
詠春&アル&ガトウ	９０００＋α	
エヴァ	９０００＋α？	Ｓ
リョウメンスクナノカミ	８０００	
フェイト	３２００＋α	ＡＡＡ
カゲタロウ	３０００	
鬼神兵（大戦期）	２８００	
闇の魔法・術式兵装ネギ	２２００	
タカミチ（手加減）	２０００	
フェイトの仲間の魔導師	２０００？	
イージス艦	１５００	
月詠	１５００？	
闇ネギ	１１００	
新ネギ（自力）	７００	ＡＡ
竜種（非魔法）	６５０	
旧ネギ	５００	

真帆良の魔法先生	300	A
戦車	200	B
魔法学校卒業生	100	C
旧世界達人（気未使用）	30~50	D
魔法使い（平均的魔法世界人）	2	
長谷川千雨	1	
ネコ	0.5	

第４翼　真の敵、四番目の紫の麗人（前書き）

まあ、エヴァも人工生命体とか言っていたので、こんな感じで作られたんじゃね？的な意味で……。

ある意味今後の伏線になるかも？

で赤き翼編はイマイチ、オリジナルの話が思い浮かばなかったので、原作で語られた部分のみでお送りします。

第４翼　真の敵、四番目の紫の麗人

ラカンが仲間になって三カ月後。
グレート＝ブリッジ奪還作戦の活躍で俺達、紅き翼の名が一気に有名になった。
そして、ナギが十四歳になった頃には連合から千の呪文の男、帝国からは連合の赤毛の悪魔と呼ばれるようになる。
ラカンは千の刃、俺の方は紫の麗人とか、子供達の力を使っている内に無数の姿とか言われるようになった。
名前も朱然なのに、シューゼンとよく間違われる。
容姿もヨーロッパ系なので、殊更間違われる為、面倒になってシューゼンでいいやと修正すらしなくなった。
近しい人間にはキチンと修正を入れるけど。
能力を頻繁に使っている理由は、派手に能力を使っていれば「完全なる世界（ズモエンテレケイア）」が寄って来ると思ったから。
だが、一向に奴らは現れない。
その数カ月後、連合の奪還した巨大要塞グレート＝ブリッジが幾度の失敗をものともせず続けられてきた大規模転移魔法によってついに陥落を余儀なくされた。

「はーっはっはっはっは！　貴様等、紅き翼用にコスト度外視で用意した魔法無効化陣だ！
気すら使えまい！　そして、このヘラス帝国魔法騎士団精鋭一個大隊の包囲だ！

幾ら紅き翼といえど魔法や気が使えなければ唯の人よ！」

それに対して俺は無影を使って、洗練した技のみで魔法騎士団を殺さない程度に倒していく。

殺しては居ませんよ？

その精鋭達の対魔法甲冑を無影でバラバラにしただけだ。

対魔法という名の如く魔法に関してはかなりの防御力を誇るのだが、物理攻撃に対する防御力は普通の甲冑と変わらないし。

「何故だァァァァ――――――ッ！？」

パンツのみとなったその部隊長が騒ぎ出す。

「たかだか気と魔力を封じたくらいで俺達を倒せると思うな」

俺は冷たく言い放つ。

「まあ、魔力と気を使わない戦いなら紅き翼じゃ上位だからなぁ～スイセンは」

「ですねぇ～」

「だな、そもそも俺達に喧嘩吹っ掛けること自体が自殺行為だぜ」

お気楽なナギの言にアルが同意し、ラカンも呆れたように言う。

そんな出来事の後、紅き翼はアルギュレーの辺境に身をひそめた。
しばらくジリ貧の戦線を維持していたが、業を煮やした連合は一大決戦を決意し、紅き翼が先頭に立ち戦況を引っくり返した。
数多くの犠牲を払って……。
もう見たくないと思っても巻き込まれた者達が死んでいく。
特に子供の亡骸を見ると泣いてしまいそうになる。
その子供達へ向けて、俺は鎮魂歌（レクイエム）を歌った。
そうして俺達は無数の屍を築き上げながら戦い続けた。
戦線を押し戻す少し前にガトウとタカミチが紅き翼に加わった。
新しい仲間を加えた紅き翼はグレート＝ブリッジ二度目の奪還を成功させ、朝焼けを眺めながら終わる事の無い戦争に疑問を感じていた。
このまま帝国を滅ぼすのか？
そんな事は無意味な事だ。
まるで見えない誰かが、裏で世界を破滅させようとしているように……。
そんな話になってきた時、ガトウとタカミチが現れ、「完全なる世界（コズモエンテレケイア）」が帝国、連合の中枢に入り込んでいる事を伝えてくれた。
俺達は本国に呼ばれ、ウェスペルタティア王国の王女、アリカ姫と会う事になる。

その後も何かと［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］の影が主要各国に限らず、いたる所に見え隠れしていて、俺達は驚きを隠せなかった。
紅き翼は休暇中に［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］の内偵を開始。
俺も内偵に参加したのだが、原作ではかなり端折られている事も有り、特に成果を上げる事が出来なかった。
で、別行動をしていたナギが奇襲を受け、その腹いせにアリカ姫を連れ回しながら奴らの拠点を潰してきたので詠春がキレまくったが、ナギがその潰した拠点で、メガロメセンブリアの執政官が［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］にテロを依頼するメッセージカードを見つけ、マクギル元老院議員にガトウが報告。
俺達はマクギル元老院議員に会う為に彼の部屋に訪れた。

「待ちな、あんたマクギル議員じゃねぇな……何者だ？」

突然、ナギがマクギル議員の頭を燃やした。
これにはガトウは当然としても、ラカンまで唖然としていた。
中々にレアな光景だ。
俺はこのシーンを覚えているのでノーリアクション。

「ちょ――――――っ？！　ナギ、おまっ、何やってんだよッ！？」

「おーおー、まるでマッチの様に……」

「スイセン！　お前、何を呑気に！？　水系得意なんだから消火を――――」

「昇華？」

「字がちっがーうッ！！」

ガトウに渾身のボケをかましたら怒鳴られました……いつも余裕のあるガトウがこれほどまでに取り乱すのもレアな光景だ……。

「バーカ、良く見てみな、おっさん」

ナギが顎でマクギルの方を示す。

そこには人影が此方に悠然と歩を進めていた。

「……よくわかったね？　千の呪文の男……こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究が必要なようだ」

燃え盛る炎をものともせず、余裕の笑みを浮かべ言う1番目。

「本物のマクギル元老院議員は残念ながら、既にメガロ湾の水底だよ」

1番目は偸生の符のプロトタイプ？を弄びながら言う。

「テメェ！」

ナギが飛びかかろうとした所で従者らしき男達が現れ、邪魔をする。

桁外れの業火と激流が殺到し、ナギを押し返した。

「強ぇぞ奴ら！」

「ハッハ、だが、生身の敵だ！　政治家だ何だとガチで相手出来ない敵に比べりゃ、万倍！！　戦いやすいぜッ！！」

ラカンがアーティファクトで身の丈二倍程の両刃剣を構える。
そこで1番目が変声魔法を使い、マクギル元老院議員に成り済まし、救援を呼ばれた。
俺達は即座に奴を倒す為に動き始める。

「君達は少々やり過ぎた。　悪いけど早々に退場してもらうよ」

その瞬間に石の槍が建物ごとナギ達を吹き飛ばした。
だが、俺だけ吹き飛ばされずに残った。
見た所、何故か俺だけをワザと残した様だ。

「君、巷で噂の紫の麗人だね？」

「自分から名乗った事は無いけどな……何故、俺だけを残した？」

「ワザと残した事に気が付いている、か……中々の洞察力だね。
この世界はもう駄目さ……一度壊した方がいい。
君は僕達と同じ人形だろう？　君には僕達の仲間になる資格はある筈だよ。　僕達と一緒に来ないか？」

1番目（プリームム）が俺を誘う。

ああ、何と無くは察していた……確かに、この身体になった俺は原作のお前を知っているからこそ、そんな気がしていたよ……。
ジョシュアが言っていた記憶が無いと言っていた事、3番目のフェイトが大地を詠唱無しに自在に操った事から察するに、恐らく土の精霊の子供を数人もしくは数十人掛け合わせたのが、地のアーウェルンクスなのだろう。
同じ属性の精霊どうしなら適合する者が多いだろうしな……。

俺はその発展型、異種族の混合の人形なのだろう。

「一つ聞かせろ、お前は1番目（プリームム）の人形だな？」

「……知っているのなら話は早い。　僕も君の事は聞いているよ。
人の手で造られし紛い物。
僕のバックアップである造物主様が造った3番目の他に、最近とある孤児院から連絡のあった、人工量産出来ないかと研究が始まり、頓挫した筈の研究で偶発的に完成したという他種族混合型……バックアップの2番目（セクンドゥム）と3番目（テルティウム）の次に偶然にも完成した4番目（クゥアルトゥム）にあたる僕の兄弟。
いや、この場合は番外（エクストラ）と言うべきかな？」

やはりか……。

「それを聞いて更に決意が深まった――――――」

「なら」

1番目（プリームム）は手を差し出す。

もちろん……。

「――――――断らせてもらうッ！！」

「……参考までに理由を聞こうか」

「あの子供達の命を取り込んだ俺が言える事じゃないが、あの子達を殺した［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］を許す事は出来ないッ！
一時でも俺の事を親だと言ってくれた子供達を殺したお前達の仲

間になる義理も無いッ！！

俺の願いは唯一つッ！　お前等［完全なる世界（コズモエンテレケイア）］を潰す事だ！」

「そう、それは残念だ……仲間にならないのなら、兄弟とはいえ退場してもらう事にするよ」

1番目（プリームム）が詠唱を始めた所で、俺はその滅茶苦茶になって崩れた壁を乗り越え、ナギ達の方へ跳躍した。

その日から、紅き翼は帝国、連合を陥れたというレッテルを貼られ、指名手配になった。

第４翼　真の敵、四番目の紫の麗人（後書き）

という感じでした。

ノリでこの世界で愛する者を～とかプロローグに書いたけど、誰にするかどんな形にするのかを全く考えてないんですよね～（笑）
→笑い事じゃないか……。

赤き翼編はそんなに時間を掛けずに本編スタートまで進める予定です。
原作の今後の展開によってはこの小説の展開もコロコロ変わる可能性がありますので・・・・・・。

原作のネギま！はそろそろ終わるのだろうか・・・・・・？

第5翼　救出から最終決戦直前へ、妥協する紫の麗人（前書き）

当たり障りの無い話なので、ツマラナイかも知れませんがお許しを・・・・・・。

第5翼　救出から最終決戦直前へ、妥協する紫の麗人

1番目に嵌められ、早幾月……紅き翼は帝国、連合の追跡を撹乱しつつ辺境を転戦した。

そして、1番目に嵌められた時に囚われたアリカ姫の居場所を掴んだ。

その場所こそ、原作でも語られていた古代遺跡の立ち並ぶ夜の迷宮（ノクティス・ラビリントゥス）。

俺達はアリカ姫を助ける為に夜の迷宮（ノクティス・ラビリントゥス）へ向かったのだった。

「むっ？　おい、貴様等何者――――――」

「てい……ッ！」

「――――――ぷろッ？！」

見張りは一瞬の内に気絶させられ、昏倒した。

「見張りは？」

「この通り、バッチリ」

俺と詠春が頷き合い、合図をするとナギ達がやって来る。

「あー、まだるっこしい……ッ！　えーしゅん、スイセン……正面

から叩き潰しちまおうぜー？」

「だな！」

「この鳥頭共め……援軍が居ないのだから、隠密するのが当然の兵法だ」

「見つかるのは面倒なので勘弁だ」

ナギとラカンはチマチマしているのが性に合わないらしく、詠春と俺に言ってくるが、詠春が憮然と、俺はダウナー気味に詠春に続いて言った。

「貴様等ッ、何者だッ！？」

敵に見つかった。

「あー、見つかった」

「くッ！」

「うーし！　もう、暴れてもいいだろ？　オラァッ！！」

ラカンが右腕を振るい気弾を穿つ。

詠唱を破棄した雷の暴風が吹き荒れる。

「雷の暴風ッ！！」（ヨウィス・テンペスターズ・フルグリエンス）

という、見つかった途端に暴れ始める鳥頭’ｓ。

「生き生きしていますねぇ～」

「さて、あ奴らが勝手に囮になっているのじゃ、さっさと姫達を助け出そうかの」

相変わらずの胡散臭さで言うアルと何気に酷いゼクト。

「お、此処っぽいぞ」

「入口は――――――」

「ブチ抜きゃ良いだけだろ！」

「――――――馬鹿ッ！　近くに姫達がいたらどうするッ！？」

いつの間にか現れたナギが壁を壊す。

「よお……来たぜ、姫さん」

「遅いぞ、我が騎士」

無表情にアリカ姫が言う。

うーむ、思春を思い出すなぁ～。

「君がテオドラ・バシレイア・ヘラス・デ・ヴェスペリスジミア第三皇女様かな？」

俺はテオドラに目線を合わせながら言う。

「何じゃ貴様は？」

「俺は紅き翼の朱然だよ――――――」

「何と！？　あの無数の姿、紫の麗人と言われている！？」

「――――――自分で名乗った事は一度も無いんだけど……まあ、その朱然さんです」

テオドラがジロジロと俺の顔を見てくる。

「うむ、確かに美しい容姿じゃなッ！　気に入ったぞ！」

テオドラに気に入られた。

で

「千の雷（キーリプル・アストラペー）ッ！！」

「ラカンッ、インッパクトォォォッ！！」

「禍津・龍の型、爆龍ッ！！」

俺は半龍化して咸卦法を発動し、気と魔力を内包した爆弾の様な巨大な龍を目標に向けて発射する。

「真・雷光剣……ッ！！」

「フフフフ……」↑重力魔法

「やれやれ、結局派手になったな……」↑と言いつつ剛殺居合拳

「毎度、お主等の余波を防ぐのにワシの防御呪文を使わされるとはのう……」↑最強防護（クラティステー・アイギス）

紅き翼の総攻撃が夜の迷宮（ノクティス・ラビリントゥス）に向かって飛び――――――

音は聞こえなかった……ただ光っただけだった。
そこは閃光の後には夜の迷宮（ノクティス・ラビリントゥス）の廃墟だけが残った。

その後……そこから南東へひたすら進む事、４日。
タルシス大陸極西部・オリンポス山の赤き翼の隠れ家に着いた。

「何じゃ……これが噂の紅き翼の秘密基地か！？　どんな所かと期待して来て見れば唯の掘立小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してんだ、このジャリはよ……」

ラカンのこめかみに青筋が浮き出る。

「何じゃと?!　貴様、この私を誰だと心得ておるのだ?!」

「唯のじゃじゃ馬じゃねーか！　言っとくが……ヘラスの皇族にゃ、貸しはあっても借りはねーんでな！」

テオドラと同レベルの口喧嘩を始めるラカン。

「ラカンは今日の晩飯抜きね」

あまりにも大人げないので力で敵わない分、食でねじ伏せる事を選びました。

紅き翼の内で料理できるの詠春、アル、俺の三人しかいないし、最近はもっぱら俺の仕事なのだ。

詠春は料理のレパートリーが少ないし、アルはゲテモノ料理とかの一癖ある料理を作るのだ。

なので結局、レパートリー&味の保証できる俺に白羽の矢が立つのだ。

「ムッ!?　いきなり何で俺の飯が抜かれなきゃなんねーんだ?」

「子供を苛めた罰だ」

俺は半眼でラカンを見ながら言う。

「妾は子供ではないッ！」

俺の子供発言に突っ込んでくるテオドラ。

「そう言ってる事自体が子供だZ「ラカン、明日の朝飯抜きね」何いッ？！」

更なる飯抜き発言に対してラカンが慄く。

「やーいやーい！　筋肉ダルマは遠くで妾達の食事を見ているが良い！」

「にゃ……ッ？！」

俺はテオドラに軽くデコピンをした。

「何をするシューゼン！」

両手で額を抑え、即座に俺に抗議するテオドラ。

「テオドラ第三皇女様は調子に乗り過ぎ。　子供ではないというのなら人を貶める様な発言は控えなさいな。後、シューゼンじゃなくて朱然ね」

テオドラの頭を優しく撫でながら言う。

「うう、わかったのじゃシューゼン」

「……」

渋々と俺の問いに答える。

「何というか、母親みてぇだなスイセン？」

「ラカン、明日の昼飯抜きね」

「ヤベ、今度は地雷ワードかよ……」

「……シューゼンよ、妾の事はテオドラと名前を呼び捨てる事を許す。　今度からそう呼ぶが良い」

「ふむ、なら俺の事も真名を預けよう。　俺の真名は水仙、この真の名は他人が勝手に呼べば殺されても文句は言えない大事な名で、俺の故郷の風習の様なものだ。
改めてよろしくなテオドラ？」

「うむ！　ではこれよりスイセンと呼ばせてもらうぞ！」

嬉々とした表情で俺の手を取り、ナギ達の方へ引っ張る。
ラカンも俺達に続く。

「じゃが、主と主の紅き翼は無敵なのじゃろ？　世界の全てが敵……良いではないか。
此方の兵はたった８人だが……最強の８人じゃ。
ならば我等が世界を救おうッ、我が騎士ナギよ……我が盾となり、剣となれ」

アリカ姫が言う。

ナギの答えは――――――

「……へっ、やれやれ、相変わらずおっかねぇ姫さんだぜ……いいぜ、俺の杖と翼、あんたに預けよう」

こうして、俺達は完全なる世界（コズモエンテレケイア）に対して反撃を開始した。

あの誓いから6ヵ月後、ついに俺達は敵の本拠地である墓守り人の宮殿に行き当たった。

そこは世界最古の都、オスティア空中王宮最深部だった。

「不気味なくらい静かだな……奴ら……」

珍しくナギが弱気な事を言う。

「舐めてんだろ？　悪の組織なんてそんなもんだ」

ラカンが気楽に言う。

確かに悪の組織は往々にしてそんな輩が多い。

「ナギ殿！　帝国・連合アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

そう言って現れたのは学術都市アリアドネーの戦乙女騎士団の衣装に身を包んだセラスが現れた。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれてりゃ俺達が本丸に突入できる……頼んだぜ」

「ハッ、それで……あの……ナギ殿とシューゼン殿……」

「……ん？」

「朱然なんだけど……何？」

セラスが何所からともなく、サインペンとサイン色紙を二枚取り出した。

「す、すみませんシュゼン殿……サ、サインをお願い出来ませんでしょうか？」

「いいぜ」

「いーよ」

俺とナギは色紙を受け取りサインを書いた。

「そ、尊敬していました！！」

恥ずかしそうに頬を染めながら言う。

ふと、俺にもサインを何故欲しがったのかが気になった。

「ナギはまあ、わかるとして何で俺も？」

「シュゼン殿は“終戦に歌う紫姫”と言う二つ名を訊いた事がありますか？」

「いや、聞いた事無いな……何それ？」

俺は特に聞いた事も無いので、聞き返す。

「最近になって広まった貴方の二つ名なのですよ？　朱然殿が戦いの終りに、亡くなった者達へ向けて歌っている事に因んだ二つ名です。

この前にその歌を聴いてファンになりました！」

「……ああ」

前にも少し触れたが、戦場では力があれば子供も駆り出される。

その子供達が死ぬのを見ると俺と融合してしまった子供達を思い出してしまい、鎮魂歌（レクイエム）を弔いの為に歌っているのだ。

それが終戦に歌う紫姫の由来だろう……男なのに姫とか……そんな事を思っているとガトウから長距離念話が来た。

どうやら連合の正規軍上層部に居る石頭共の説得に時間が掛かるらしい。

「決戦を遅らせる事は出来ないか？」

「無理、ですね……私達でやるしかないでしょう」

「既にタイムリミットだ」

ガトウの問いに対し、アルと詠春が答える。

「彼らはもう、世界を無に帰す儀式を始めているでしょう……世界の鍵、黄昏の姫御子は今、彼らの手の内にあるのですから……」

「ああ……スイセン、お前は此処に残って、間に合わねぇ戦力の変わりに部隊を手助けしてやってくれ」

突然、ナギがそんな事を言い出す。

「ちょっと待てナギ！　俺は奴らを倒す為に……！」

そうだ、俺は奴ら……完全なる世界（コズモエンテレケイア）に子供達の仇を取る為に此処まで来たんだ！

今更、此処に残るなんて出来る筈ないだろ！

「こんな事、任せられんのはお前しかいねぇんだ」

ナギは真っ直ぐに俺を見る。

ナギとラカン、ゼクトは紅き翼の中でもトップクラスの使い手で突入部隊の中核だからしょうがない。

アルと詠春は戦闘と部隊の指示を同時に出来る程、器用じゃない。

それが出来るガトウは此処に居ない。

この中じゃ、俺が適任なのはわかってるが、それでも仇を取るという思いを割り切れるものじゃない。

「……わかった。　割り切れはしない……でも、納得はする……」

でも、俺一人の我儘で全てが台無しになってしまうのはもっと駄目だ。

それは恋姫の時に一人の将として嫌という程、身に染みている。

だから現実的、客観的に頭を冷やして考え、なけなしの理性を使って、自分自身を無理やり納得させる。

「悪いな、スイセン……」

「謝る位なら、俺の分まで……犠牲になってしまった俺の子供達の

仇を取ってくれ」

「ああ、その願い、確かに俺が受け取った」

ナギはそう言って俺に背を向け――――

「よぉし……ッ！　行くぜッ！　野郎共ッ！！」

こうして最後の戦いの火蓋が切って落とされた。

第5翼　救出から最終決戦直前へ、妥協する紫の麗人（後書き）

戦場の歌姫は他の小説で使っているとの事ですので修正しました。

第６翼　最終決戦決着、驚愕する紫の麗人（前書き）

１０００人以上の方がお気に入り登録してくれたという嬉しい事が！
それに加え、２５０万ＰＶ＆もうちょっとで２０万ユニークです。
読んでくださっている皆様、本当にありがとうございます！

今回は、造物主を倒す所までです。

第６翼　最終決戦決着、驚愕する紫の麗人

「ナギ！　まずはお前等の道を開く！　全部隊！　俺の正面から退避しろ！」

その指示の通りに部隊が退避する。

「俺は此処に誓おう！　己が行いに後悔しないという事を――――――！！」

俺はいつもの様に己の戒めを誓い、八つの宝具が掛け合わさり、白と黒の螺旋が絡まり合った槍が出来上がる。

「伏義（ふっきの）八卦次序――――――」

彼のアイルランドの光の御子の様に限界まで上体を逸らし――――

「太極槍（たいけん）ッ！！」

投擲する――――――！！

投げられた色の無い純粋な魔力を纏った伏羲八卦次序太極槍が突き進む！！

視界を埋め尽くす程の悪魔人形の群れが強大な魔力を纏った太極の槍が投擲され、墓守り人の宮殿の入口まで一直線に貫かれる。

「サンキュッ、スイセン！　オラオラ行くぜェェェッ！！」

「オイオイ、何だ今の？　スゲー、アーティファクトだな？！」

「興味を惹かれますね……貴方の人生に、フフフフ……」

「今のは一体……だが、道は開けた！」

「うーむ、強引に周囲の魔力を収束させたが、やはり見た事も無い効果じゃのう？」

この世界に来て、真名解放は紅き翼のメンバーにさえ見せていなかったからなぁ……。

真名解放したのは大渦の伏羲八卦次序太極槍、その形は何故か前の槍型のままだ。

大渦の収束という概念を発動させ、空気中の魔力を収束して一気に貫くという単純なものだ。

今回は墓守り人の宮殿の入口までの空間に居た敵を全て巻き込む

ようにして貫いた。

単純な分、魔力消費は軽いのだが。

今の俺の魔力量はちょっとした物だ。

皮肉な事に子供達を取り込んでから魔力量が半端なくなってしまったんだけど……それでも今一歩、ナギには届かんけどさ……でも、それに加えてゼクトやアルの術式構成、魔力運用も魔眼でコピーしたので、チート化が物凄い勢いで進んでいく……。

そして、ナギ達は墓守り人の宮殿に侵入していった。

俺はその背中を見送り、伏義八卦次序太極槍（ふっきのたいけん）を解除して無影を構えつつ闇の精霊になる。

「さあ、このまま殲滅させてもらうぞッ！！　全部隊、攻撃を開始！　援軍が来るまでに此方で殲滅する勢いで攻勢を掛けるぞ！」

俺は万を超える無影を一斉に操り、3割を攻撃に、残り7割の部隊の援護をする。

瞬間、無数の斬線が閃いた――――――

無影の一本一本に影の精霊を纏わせ、更に細分化した操作が可能となったのだ。

その精度を以て更に多彩になった攻撃と防御を自在に行う。

「2番から4番隊、防衛ラインを維持してる11番隊後方まで下が

れッ！！　６番隊！　尻込みしてると落とされるぞッ！！」

後退する２番、３番、４番隊の追撃をする召喚魔と自動人形と六番隊の進路上にいる召喚魔と自動人形を、ほぼ同時に寸断する。

ひたすらに、唯ひたすらに脳の処理能力をフル動員する為に集中に集中を重ね、周囲の色がモノトーンへと変わるまで集中する。

その集中力は考える速度を超え、反射の域まで上り詰める。

その反射を以て――――――斬って斬って斬り裂き続ける――――――！！

「なんてデタラメなんだ?!」

「闇の精霊なのか彼は……?!」

「本当にこの数をたった一人で……ッ?!　人間の限界を超えてるぞ?!」

後方の広域念話からそんな声が聞こえてくる。

フンッ、好きで人外になった訳じゃねーよ……。

内心で毒づきながら寸断を続け、此方の数が召喚魔と自動人形を上回った所で、セラスちゃんから念話が来た。

「此方、アリアドネー乙女騎士団部隊長セラスです！　シュゼン殿

の支援により彼我戦力は充分、此方が上回りましたッ！！　ナギ殿達の援護へ……ッ！！」

「わかった……ありがとうッ！！」

俺はそう言って光の精霊に変わり、光速長距離瞬動で即座に墓守り人の宮殿へ突入した。

「御武運を……」

セラスが突入していった朱然を見送りながらそう呟く。

俺は墓守り人の宮殿を進むと、回廊からナギが1番目（プリームム）の首を掴み、何かを話していた。

不味い……！

俺は光の速度でナギの場所へ飛ぶが、1番目（プリームム）と共にナギが貫かれた。

そして、造物主が現れた。

瞬間、アレは人間ではない、人外の範疇に収まるものでもない。

アレはいつか見た神と同レベルのものだと、理解したのではない。

――――――理解させられた。

なん、だ……アレは……？！

魔眼で見える流れが酷く細い……本当に人間か？

それだけなら、まだ俺より強い人外くらいのものだと思えたが…
…そもそもこいつは――――――やべぇ！？
次の攻撃が来る？！

「「「スイセン？！」」」

俺はやった事も無い水と土の混合精霊化……二重精霊化をリスク無視で使い、目の前に圧縮した水と岩の壁を即座に構成した。
だが造物主の攻撃は魔法世界屈指の者達が張った防御、防壁をいとも簡単に粉砕し、たった一撃で此方を瀕死の重体に追い込んだ。
その造物主はそのまま奥の方へ消えていった。
まるで俺達を路傍の石の様に気にする様子も無く、だ。
たまたま……そう、たまたま進行上に俺達が居たから唯、石を蹴るように俺達を蹴散らした。
造物主にとっては唯、それだけの事だったのだろう。

「ぐッ……待てコラてめぇッ！！」

両手の無いラカンが地に伏したまま言う。

「任せなジャック」

そう言って立ち上がったのはナギだ。
俺は視線を巡らせる。
全員が満身創痍。
特にラカンが一番の重傷だ。
次がナギ、詠春、俺、アル、ゼクトの順だな……。

「い、いけませんナギ！　その体では！？」

「くそ……ッ、バグキャラの紅き翼でこれか……造物主は規格外、世界のシステムを超えたキャラかよ……」

てか、原作だとアレを倒すんだよな、ナギの奴は……俺のように別世界の理を知らないのに……信じられん。

「んな事はどーでもいーんだよ！　アル、お前の残りの魔力で俺の傷を治せ」

「し、しかし！　そんな無茶な治癒ではッ！」

「３０分持てば十分だ」

杖を呼び出しながら言うナギ。

「ですがッ！」

「ふふ、よかろう……ワシも行くぞ、ナギ……ワシが一番傷も浅い」

ゼクトもそう言って立ち上がった。

「お師匠……」

「ゼクト！　たった二人では無理――――」

「二人じゃないぞアル、二人の言う通りにしよう」

俺は立ち上がりつつアルに言う。

「水仙！」

俺はアルの言葉を遮り、立ち上がる。
今の俺は構成もへったくれもなく出鱈目に二重精霊化なんて事をしでかしたが、何とか戦えない事もない。

「死ぬぞ！　ありゃヤバイ！　むざむざ死にに行く様なもんだろ！」

戦いに行く俺達にラカンまで反対する。

「じゃが、此処でワシらがどうにかせねば世界は無に帰す事になるのじゃ。　無理でも行くしか無かろう」

「退くなんて選択肢を選択したら間違いなく間に合わなくなる。
何より俺は子供たちの仇の為に戦ってきた」

「……わかりました」

俺の言にアルは渋々ながら同意した。

全身の細胞が悲鳴を上げ、骨と筋肉が自分の意志とは無関係に蠢く不快感が駆け抜ける。

「くぅぅぅぅッ！！」

「ぬぅっ！！」

「ぐ、ぅッ！！」

アルの治癒魔法によってナギとゼクト、俺の身体の傷がたちまち塞がる。

今回は力にものをいわせた回復をした。
本来なら肉体の自然治癒能力を促進させ傷を癒すのが治癒魔法なのだが、あまりの強引な回復であまり長くは戦えないだろう。
言うなればダ〇の大冒険のベホマ拳を喰らったみたいな感じになりかけている状態だ。

「うむ、では行ってくるぞ」

「じゃ、詠春とラカンの応急処置も頼んだ！」

「俺を誰だと思ってる？　俺は千の呪文の男だぜ？　俺は勝つ！！任せとけ！！」

そう言って、ゼクトと共に造物主の下へ向かった。

原作の真帆良学園深部の様な場所。
そこには造物主が背を向けていた。

「よくぞ此処まで……と言っておこうか……」

造物主とゼクトが同時に喋り始め、ゼクトが造物主に近づき、一体化する。

「な？！　お師匠？！」

「……ゼクト、アンタが黒幕の正体だったのか？」

驚きを露わにするナギに対し、俺はゼクトに問いかける。

「私が造物主だ」

造物主が振り返る。

「お師匠！！　何でッ！　どうしてこんなッ！！」

「私は最初にして最古の魔法使い。　それを知った者達は私を恐怖し、迫害した。

私は絶望を抱きながら放浪した……長く、終わりの無い流浪の旅だ……そんな私に問いかける声があった。

その声の主はこの世界そのものだった」

「世界だと？！」

今度は俺は驚愕した。

それはＦａｔｅの世界の設定。

世界、それはこの地球という星と言ってもいいモノ。

感情は無く、何よりも異端、矛盾を嫌い、常に正しく、美しくあろうとするモノ。

自身を脅かすものを粛正するモノ。

Ｆａｔｅの世界では触覚として精霊、真祖を生み出し、抑止力としてガイアの怪物、霊長の殺戮者、人類に対する絶対的な殺害権利を持つというデタラメな死徒二十七祖の第一位、プライミッツ・マーダーを抑止力として持っているというモノの名。

ネギま！の世界ではどうだか知らないが、世界そのものと聞けば俺には悪い印象しか持たない。

特に世界との契約、それは世界に隷属するという無限地獄。

造物主の場合は触覚にさせられた、というのが正しいのか？

「そう……その世界と契約したのだ。　この世界を……星を守る一部となる事を選んだ。　だが、それは間違いだった。

私は世界との契約して、造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）を手に入れた。

その力を以て、星に害なす人を殺し続けた。　だが、その行為は唯、虚しかった。

人は争いをやめず、いがみ合い、憎しみ合い……その余波によって星は傷つき、私は人を殺し、人は私を憎悪し、私に憎しみを抱いた。

私は星の干渉（めいれい）により、人を殺し続け、私は世界を敵に回した。

絶対の命令。

気付いた時にはもう……世界の誰も私を認めはせず、星の干渉（めいれい）は覆せない。

人が平和に暮していれば星は害されず、私もこの様に憎まれる事も無かったかもしれない。

その板挟みに疲れ果てた私は、世界からの干渉（めいれい）の届かないもう一つの世界を契約の対価として授かった造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）で創造した。

幼き日に聞いた御伽話の様な魔法世界を造ったのだ……少しでも争いの無い場所を……新たな世界、新たな人を作り、新たな生命たる亜人間を作り、魔法を広めた。

だがそれも失敗だった……新しい世界を作って尚、星の干渉（めいれい）は止まらなかった。

それどころか作った亜人間達と人間は争い始めた。

その争いに対して星の干渉（めいれい）は……魔法世界を潰し合わせる事、世界の人を殺し尽くす事。

私はまた星の干渉（めいれい）から逃げる為に、意識をティリウスという身体を作り、移した。

その後、名をティリウスからゼクトに変え、魔法世界を放浪するようになった。

対して、残った本体は星の干渉（めいれい）を唯こなす人形となり果てた。
これが真相だ。
星の干渉は強まり、本来の意識を持つゼクトという人格は星の意思に動くこの身体に取り込まれ、唯の人形だったこの身体は今、話しているように意識を取り戻した。
星の守護者としての人格を……本来の力を取り戻した」

「ゼクトはお前の……星に食い潰される事を知っていたのか？」

「知らなかったのではないか？
私は星の意思、ゼクトという一体の人形に収まる程度の意識など、疾うに星の意思に呑まれた。
そして、仮初の人間と世界はこの儀式によって消え去り、死という永遠を手に入れる」

その言葉にナギは瞬動で間合いを詰め、一撃を叩き込んでいた。

「つまり、てめぇは敵って事なんだろ！？　俺は難しい事はわからなかったし、ごちゃごちゃ考えんのも苦手だッ！！
でも、お師匠ならこう言うッ！！　てめぇを倒せッてな！！」

そう言って、次々に攻撃を繰り出すナギ。
それに対して俺は動けずにいた。

この世界は魔法の普及したらという仮定の世界なのか？

その疑問が頭を過ぎる。
今の話を聞くに、Ｆａｔｅの世界とそれほど変わらない。
魔術、概念ではなく、魔法が根幹にあったらという仮定の世界。
原作とも違う……ネギま！と違うかもしれない世界。

「スイセン！　ボーッとしてんな！　殺られんぞ！？」

ナギの怒鳴り声を聞いてハッと目を覚まし、俺も戦闘を開始する。

例え、原作と違った世界であったとしても、俺が此処に居るのならそれは現実なんだ。

それはつまり……俺の子供達を殺したのも、あの造物主に他ならない！

「なら、殺さないとなァァァァ――――――ッ！！」

俺は吠えつつ咸卦法を編み、すぐに未だ強引な二重精霊化を行使する！

闇と光、相反する精霊の力。

クルス、ヤオ……俺に力を……ッ！！

「オァァァ――――――ーッ！！」

俺は咸卦法で強化した身体で、何とか精霊化に耐える事ができた。

それに加え――――――

「俺は此処に誓おう！　己が行いに後悔しないという事を――――――！！」

八つの武器が掛け合わさり、太極の文様が施された簡素な手脚甲が装着される。

そこから俺は光の速度を以ての連撃を叩き込む！

その衝撃が一斉に造物主へと殺到する――――――！！

そして、連撃が当たった瞬間に、造物主の魔力を闇の精霊化の付随効果で吸収する。

そこで怯んだ所にナギが掌底を叩き込んだ。

「……クックッ！！　フ、フフ、ハハハハはははッ！！」

突然に笑い始める造物主の背後に巨大な魔法陣が現れる。

「私を倒すか人間、それもよかろうッ！！　私を倒し、英雄となれッ！！　羊達の慰めともなろうッ！！

だが、ゆめ忘れるなッ！！　全てを満たす解等無いッ！！　いずれ彼等にも、絶望の帳が下るッ！！

貴様等も例外ではないッ！！」

造物主から、Ｆａｔｅの五次キャスターの撃つ、黒いヘカティック・グライアーの様な収束砲が乱射された。

ナギは力押しで弾き、俺は光の速度でかわし、距離を詰める。

「グダッ、グダッ、五月蠅ェェェェッ！！」

「たかだか星の分際で、囀るなッ！！」

ナギの雷付与の拳と、俺の咸卦法と光と闇の纏う拳が叩き込まれ、吹っ飛ぶ造物主。

「たとえッ、明日世界が滅ぶと知ろうともッ！！」

「貴様は俺の子供達を殺したッ！！」

「諦めねぇのが、人間だろうがァァァァッ！！」

「俺は俺の為に……子供の仇を討つッ！！　理由はそれで十分なんだよ！！」

俺とナギの連撃によって、造物主のローブはボロボロになり、ナギは自らの杖を気と雷を凝縮した槍へと変え、俺は守殻に魔力を込める。

「クックク……貴様等もいずれ、私の語る“永遠”こそが“全て”の“魂”を救い得る唯一の次善解だと知るだろう」

「人間をッ、なめんじゃねえぇぇぇぇッ！！」

「だったらまずはッ、お前がくたばれぇぇぇぇッ！！」

ナギの槍が造物主を貫き、俺の伏義八卦次序太極甲（ふっきのたいけん）を真名解放し、ほぼ全ての魔力を消費し、空間という触れていて、触れられないものを肯定して殴り、空間破砕を実現させる。

その空間破砕は連鎖的に造物主に迫り、空間破砕に呑み込まれてローブが無くなり、ゼクトが残った。

そこで儀式が始まった。

「武の英雄と復讐の英雄に未来を作る事はできぬ。　貴様等には結局、何も変えられまいよ。

だが、果たして……自らに問うがよい。　ヒトとは身を捨ててまで救うに足るものか？　復讐で何かを生み出せるか？

……人間は度し難い。　英雄達よ、貴様等も我が２６００年の絶望を知れ……さらばだ……」

そう言って、儀式の光に呑まれ消えた。

「ぬっ、グ……お、お師匠……師匠ッ、師匠ォおおおぉおぉ――――ッ！！」

ク……ッ、魔力があればまだ無境で反転して持ちこたえられたかもしれないが……。

俺がそう思った時だった。

続々と味方が集まり、大規模反転封印術式が展開され、世界の危機は一応の決着がついたのだった。

その後、紅き翼はオスティアの離宮にて開かれた帝国、連合の停戦条約を結んだ記念式典で表彰された。

アルは上がり症でして、フフフフ……と言って逃げて居なかった。

でもって、俺の歌っていた鎮魂歌（レクイエム）を毎年式典で歌う事になった……マジかよ……。

第６翼　最終決戦決着、驚愕する紫の麗人（後書き）

造物主が結局何なのか？という所をＦａｔｅの設定を織り交ぜる事にしました。
造物主の正体とかが原作に出るまで皆さんを待たせるのも気が引けたので、思い切ってこれで行こうと決断しました。

造物主の鍵で作った物も星の一部として認定されるみたいな事で・・・・・。
この設定は後々、原作によっては大変な事になりそうですけど、何とか頑張っていきたいです。

こんな駄目な作者でスミマセン・・・・・・ｍ（＿＿）ｍ

二番目を一番目に変更しました。

第７翼　堕ちる王都、駆け付ける紫の麗人（前書き）

ちょっとふざけてみた・・・・・・反省はしているが、後悔はしていない・・・・・・訳でも無かったり・・・・・・。

ま、変身魔法の変形とでも思ってください。

第7翼　堕ちる王都、駆け付ける紫の麗人

オスティア滅亡。
そのニュースは魔法世界全土に驚愕を与えた。
俺はオスティアが滅亡し、アリカ女王が拘束された後、紅き翼を離れ、学術都市アリアドネーで孤児院を経営しながら臨時講師をしていた。

「「「「「お母さーん！！」」」」」

ワラワラと集まって来る孤児院の子供達。

「えーっと……私は男なのでお父さん……更に言えば院長先生で」
「今日はお母さんだよー」

「「ねー」」

はい、そうなんです。
今は大人バージョンのルーデシアの容姿を借りています。
巨乳になってます。
走ると凄い揺れますよ、触ったら柔らかかったです。
ある意味、新鮮でした。
でも、いざ自分の一部だと思うと興味が薄れていきました。
持たざるからこそ、興味を持つものなのだろう……バストとはッ！！
ゲフンゲフン……ッ！！
二重精霊化をしてから、取り込んでしまった子供達の容姿になれるようになってしまったんです……ヤオ、ウィンは容姿だけ。

クルス、ルーデシア、ノーラは容姿・性別まで変われるようになってしまった……しかし、他の容姿に代わると魔眼が全く使えなくなるというデメリットがある事がわかった。

まあでも……リアル女になるとは夢にも思わなかったよ！？

神（作者）の気まぐれかッ？！

しかも口調が女言葉に強制変更されるんですけど？！

更に不可解な事なのだが、ディーになる時だけ虎耳&トラ尻尾が付き、ファヴニルになる時は角と龍翼が付くだけなんだけど……何故？

因みにクルスの大人時は胸が残念なままだった。

本人が生きていたら、さぞルーデシアを恨んだだろう……持たざる者として……俺の名誉の為に言っておくが、そもそも女の格好は時々しかしないよ、本当ダヨ？

孤児院の時や買い出しの時だけだ。

赤き翼で顔が有名になり過ぎたしね……その他では基本、元の容姿で過ごしている。

唯、周りにバレて大変な事になった場合は誰かの容姿を借りて即、逃げるけどね。

この孤児院はテオドラが資金援助をして後押ししてくれているし、臨時講師はセラスが斡旋してくれた。

紅き翼というネームバリューがあるから即採用だったが……テオドラに世話になりっぱなしも悪いし、俺も多少ながら働く事にしたんだ。

アルみたいに、ニートはイカンぜよ……臨時講師でも特別待遇扱いなので、かなりの収入が入っている。

そのお陰で孤児院の経営は安定している。

テオドラとセラスも何度かお忍びで来たりした。

そういえば、クルスになっていた時に現れたテオドラに「この泥棒猫がッ！！」と突っ込まれたなぁ～。

ちゃんと誤解は解いたが、妾と会う時は初めて会った時の姿にな

れ、と言われた。
そんな騒がしい中でアリカの話は一切出なかった。
そして、二年の月日が経ったある日、ナギから手紙が届いた。
内容は一言で言えばこうだ……“手伝ってくれ”。
俺はすぐに支度をして年長の子供達に下の子達の面倒を任せ、仲間の元へ向かったのだった。

数日後、アリカ女王の処刑が執り行われようとしていた。
アリカが自ら歩き――――――
――――――飛び降りた。
そして、ケラベラス渓谷の底に蠢く魔獣群へと落ちていった。

「よぉーっし、こんなモンだろ♪」

呆気なく魔獣の群れに呑まれた事にざわめくメガロメセンブリアの騎士と魔法使い、監査員の中から場にそぐわない声が聞こえてくる。

「撮れたか？　ちゃんと撮れたか～？　よぉーし、ご苦労ッ♪　お～い、おっさん。　これ生中継とかねぇよな？」

「な……無礼者！　何者だ貴様！　名を……」

偉そうなローブの男の頭部をむんずとラカンは掴んだ。

「おっさん、録画は此処で終わりだ……で、今から此処で起こった事はなかった事になる……わかるな？」

デカイ騎士がお偉いさんの頭を掴んだままグリグリして言いながら着ている甲冑を気合で吹っ飛ばす。

「お、お前はッ！！　せ、千の刃の……ジャ、ジャック・ラカン――――ッ！！？」

その叫びと共に詠春とアル、ガトウが現れる。

「紅き翼ッ……馬鹿なッ！！　では、谷底の女王は……馬鹿なッ！いかな千の呪文の男といえ、あの谷底から生きては……ッ！！」

「それはどうかな？　俺達には魔法が無くても十分強ぇのが一人居るんだよ」

「まさか……ッ、此処に居ない、あの紫の麗人が！？」

お偉いさんに対してラカンは答えず、ニヤリと笑うのだった。

「流石だなスイセン！！」

「こいつ等、外皮が見た目以上に硬い……さっさと此処を抜けるぞ

ッ！」

俺は無影を操りながら言う。

「ナ……ギ……？　え……あれっ？　何故、お主が地獄に……？」

あまりの状況に混乱するアリカ。

「バーカ、アンタを助けに来たんだよ、アリカ」

「俺も居るぞッ！？」

くそぅ……この魔獣犇めく中で桃色フィールドを展開するとは……ッ！！

そんな事を思いながらも、避け、舞い、操り、斬るを繰り返す。

大分数を減らした所で、フック付きの無影を投擲し、ナギの手を取り、渓谷を脱出する。

「ナギ……ッ！　ちゃっちゃと言う事、言っちまえ！！」

もう、ヤケクソだぜッ！？

「うっせ！　でも、サンキューな、水仙！！」

渓谷を出た瞬間にナギ達を空中へ放り投げる。

ナギはそのまま杖を呼んで乗り、アリカをお姫様抱っこしたまま夫婦漫才を始めた。

俺はナギ達の邪魔をしない様にラカン達の方へ向う。

そして、背後で――――――

「俺が、あんたをッ！　好きだからに決まってんだろぉが……ッ！！」

日向並みの恥ずかしい告白を叫ぶ、ナギの声が聞こえてきた。

「ああ、そうじゃ！　この二年間、一日たりとも主の事を考えぬ日は無かったわッ！！　それがどうした悪いかッ！？」

俺は背を向けたまま、背中越しに二人の方を見た。

そこには夜明けと共に杖に乗って空を飛びながらキスをした二人の姿があった。

それを見た後、俺はメガロメセンブリアの騎士団を死なない程度に叩き潰した。

その後、俺達紅き翼は事件のほとぼりを冷ますのと、ナギとアリカの新婚旅行で旧世界は日本の京都まで来ていたのだった。

てか、タカミチが異常に成長していた……怖ぇーよ、タカミチ。

「詠春は京都の出身だったんだっけ？」

「ああ、神鳴流の道場があるから後で案内する」

そう言って歩き出そうとした時だった。

「詠春様〜！」

詠春を呼ぶ声が聞こえてきた。

「……ッ、この声はッ？！」

平静だった詠春が一瞬にして周囲を警戒して、キョロキョロと周りを見渡し始めた。

「何だ何だぁ〜？　詠春にもコレが居んのかよ？」

ラカンがムフフと小指を立てて詠春に言う。

「違……ッ、そんな下世話なものではッ！？」

そう言っている内に、京美人が詠春をガッチリホールドした。

「詠春様〜、やっと帰って来てくれはったんですか〜。　ウチとっても寂しかったんよ〜」

「こ、木乃葉さん？！　人が見ているのでこういう事は――――――」

「ウチの事嫌いなん？」

「――――――ッ！！　そんな訳では？！」

上目使いで目を潤ませた木乃葉さんに対し、テンパりまくる詠春。

「あー、何ていうか……その人はどちら様？」

俺はいい加減に気になったので訊く。

因みに今の俺は俺と融合してしまった子供の一人であるヤオの容姿を借りている。

勿論、大人バージョン。

「あらあら、みっともない所見せてもうたわぁ～。　私は近衛木乃葉、言います～」

ああ、やっぱりか……正に大人版木乃香って感じだし。

「お、俺の婚約者だ……ッ！！　悪かったなッ！！」

最早、開き直った詠春がヤケクソ気味に言う。

「いえいえ、良い事ではないですか」

「居ねぇよか、ずっと良いんじゃね？」

「何だよえーしゅん！　嫁さん居たのかよ？」

「うむ……良い事じゃ」

「オメデトー」

「めでたい事じゃないか、詠春」

「おめでとうございます！　詠春さん！」

赤き翼の面々（ガトウは仕事で居ない）＋アリカ＆アスナがお祝いの言葉を掛ける。

プクク……ッ、詠春が顔を真っ赤にして明後日の方向を見てる…面白い！

そんなこんなで京都を観光し、木乃葉さんに言われるがままに関西呪術教会へ向かった。

だが……。

「人の気配が酷く稀有な気がするんだけど……？」

俺がそう言うと紅き翼の面々は気配を探り始める。

「確かに可笑しいな……木乃葉さん、今日は何か家の者達が出払う用事はありましたか？」

「いいえ～、今日は詠春様達がいらっしゃると、ご連絡を頂いてはったんでそんな事は無いと思うんやけど～」

腕を組んで顎に人差指を付けてう～んと首を傾げる木乃葉さん。

ヤベ、この仕草が素で似合うとか、何て破壊力なんだ……後で詠春の恥ずかしい過去を吹き込んでおこう。

「確かに、人気がねぇな……」

ラカンも俺と同じ様に人の気配を感じ取ったらしい。

――――――オォォォォッ！！

そこで山の向こうから巨大な雄叫びの様な物が聞こえた。

「な?!　今のはなんじゃ?!」

「オバケー?」

ナギがアリカとアスナに京都にはお化けが沢山いる、と散々飛行機の中で脅かしてたからなぁ～。

そういえば飛行機の中も中々に面白かったなぁ～。

慌てふためくアリカが、て、鉄の塊が本当に飛ぶのか?!とか言ってプチパニックになってたし……慣れたら慣れたで、うーむ、何と面妖な……とか言いながら窓に釘付けだった。

アスナ、ラカンは、オソラタカイ、とか、何もしなくても浮くたぁ、旧世界の人間もすげぇな!!と言ってアリカと同じく窓に釘付けだった。

ナギはさっきも言った通り、二人にある事無い事を吹き込んだらさっさと爆睡した。

アルは相変わらず、おお、この離陸時の独特の浮遊感は癖になりそうですね、フフフフ……と言って始終、胡散臭い笑みを浮かべていた。

俺と詠春、タカミチは普通に歓談してたけどね。

で、話を戻すが、恐らくリョウメンスクナノカミが復活したんだろう……。

「あちらの方角は湖のある方ですえ～」

木乃葉さんがおっとりと言う。

「折角の旅行なんだぜ？　さっさと片付けて、明日の観光を楽しもうぜ！」

ナギがお気楽に言う。

「ああ、でもって京料理ってのをたらふく喰おうぜ！！　スシにテンプラもまだ喰ってないしなッ！！」

「舞妓さん遊びというのもやってみたいですしねぇ～、フフフフフ……」

「全く……臨時講師の休暇を取って、旅行に来ていても戦いか……子供達、元気かなぁ～。

あ、お土産買っていかないと……テオドラとセラスにも送る分を買わないとなぁ～……」

「お前等……私と木乃葉さんの実家の危機を……」

「マイコサンッテナニ？」

「わからんが何所か怪しくも破廉恥な感じがするのじゃが……」

「ふ、二人はまだ知らなくて良いんですよッ」

何時までもマイペースでこれからの観光に心躍らせるナギ、ラカン、アル。

孤児院の子供達への心配とお土産の心配をする俺。

ぷるぷると震える詠春とほんわかとした笑みを浮かべる木乃葉さん。

アルの舞妓さんに反応するアスナとアリカ。

何故か知っているタカミチがワタワタしだす。
俺達はマイペースのまま池まで移動した。

そこには巨大な二面四腕の大鬼神。
リョウメンスクナノカミが今、まさに顕現し終わった所だった。

「西洋かぶれの魔法使いが、歴史ある我等の本拠の土を踏む事まかりならん！！」

「我等、関西呪術教会は貴様等を認める訳にはいかん！！」

「この鬼神の角を媒体に２５０人の魔力の共同召喚で召喚したリョウメンスクナノカミによって消し飛ぶがいい！！」

偉そうな馬鹿達がそんな事をのたまった時だった。
リョウメンスクナノカミが一つの腕でその呪術師達を叩き潰した。
幸い死んではいない様だ。

「何か自爆してるぜ？」

「制御の為の術式がメチャクチャだからねぇ……後は制御の為の魔力が如何せん足りなさすぎる」

俺は魔眼で術式を見たんだけどさ……呼び出す術式はしっかり組まれてるんだけど、制御の術式がチグハグになっているから魔力の運用効率がガクッと下がって、それによって到底制御できそうもな

いのだ。
スクナが暴れ始め、四方八方に口からビームや雷を放ったりし始めた。

「うーし！　いっちょ派手にやろうぜッ！！」

「だな！！　俺の雷とどっちが強ぇーか勝負だッ！！」

「本当に私の実家の危機なんてどうでもいいと思っているな？！」

「フフフフ……」

「お土産何にしよう……八つ橋はありきたりかなぁ……？」

俺達は一斉に飛び出し、スクナと戦った。

戦闘省略。

その後、スクナは封印され、俺達は京都の観光を存分に楽しんだのだった。

第7翼　堕ちる王都、駆け付ける紫の麗人（後書き）

半分はオリ話でしたが、どうだったでしょうか？

次回はエヴァが登場の予定。

当然、ナギフラグをブレイクするつもりでござー

第8翼　ぶらり旅、幼女を助ける紫の麗人（前書き）

当たり障りなくエンカウント&フラグブレイクです。

第8翼　ぶらり旅、幼女を助ける紫の麗人

京都でリョウメンスクナノカミを封印して観光を楽しんだ後、魔法世界はメガロメセンブリアに戻ってきた。
ラカンはさっさと帰っていき、その入れ違いにガトウの仕事が一段落して合流してきた。
そのメガロ湾の防波堤の上で、ガトウがタカミチに咸卦法を教えていた。
俺はそれを横で見ている。

「いいかー？　左手に魔力、右手に気……」

ガトウがいとも簡単そうに咸卦法を纏う。

「左手に魔力……右手に……うわッ？！」

タカミチもガトウに習って咸卦法を行使するが、一朝一夕で出来るようになるほど甘い術ではない為に両腕にそれぞれ纏っていた気と魔力が相反して弾かれた。

「駄目だ駄目だ。　いいかタカミチ？　自分を無にしろ、でないと5年は掛かるぞ？」

「ハ、ハイ！　朱然さんも咸卦法が使えるんですよね？」

「ん？　ああ、使えるよ……俺には教えてくれる人も居なかったから5年掛かったけど……」

「ええッ？！　朱然さんでもそんなに？！」

タカミチが驚く。

「だが、今は俺よりも上の使い手だぞ？」

「俺は一度死んでコツを掴んだがなッ！」

「……」

タカミチが唖然としていた所でナギ達がやってきた。

アリカは宿で休んでいるらしい。

その後、アスナが簡単に咸卦法を簡単に使ってタカミチはガックリと膝を突いた。

でもって、ガトウの冗談に対してアスナが真面目？に答えて皆、大爆笑した。

そして、二日後、紅き翼＋αはそれぞれの居るべき場所に帰った。

まあ、ナギ、アリカ、俺、ラカン、アルは行方を眩ませたってのが適切な表現だけど……ガトウ、タカミチ、アスナはメガロメセンブリアで暮らしている。

流石に小さな体で放浪生活は厳しいだろうという事で、街もいい感じに発展してる場所＋面倒見の良い人＝ガトウなら面倒見いいから良いんじゃね？的な意味で預けられた。

俺でも良いんじゃ？という意見もあったが、俺は時々放浪するつもりだったので断った。

俺は一度、孤児院に戻り臨時講師をしながらゆっくりと過ごした。

三年後、その時々放浪を旧世界でしているナギと一緒に放浪して

いる時だった。

「キャアッ?!」

崖の崩れる音と共に幼い少女の悲鳴が聞こえてきた。

む!?

金髪の幼女もとい、子供が危ない!?

俺は反射的に動き出す。

幼女の手を左手で掴み、右手でフック付きの無影を投擲し、巻き戻す。

「ふう、間に合った……」

はて?

この恐ろしい悪寒はなんじゃろ?

俺は幼女の顔を見る。

そこには彼の悪名高き、闇の福音、人形使い、不死の魔法使いのエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん（約６００才）がいらっしゃった。

で

「うっし焼けた！　ほら食えよ」

ナギがエヴァに焼けた魚を押しつける。
俺は俯きながら魚の調理に没頭する。

「むぐむぐ」

「相変わらずスイセンの飯はうめーなぁー！」

ナギは空気も読まずに俺の横で魚を喰い続け、エヴァは焼き魚を食べながら此方をジーッと見ている。

スルーだ……答えてはいけない……視線を合わせてもいけない……。

「おい、そこの紫の方……おい、お前だ」

ダラダラと嫌な冷や汗が背中を伝う。

「なんでござる？」

あまりの迫力に話してしまった……動揺など、全くこれっぽっちもしていないでござるよ？

「何故、私を助けた？」

エヴァは俺の語尾に全く反応しなかった。

此処は当たり障りの無い答えで切り抜けよう……そうだ、某最後の物語の九番目の主人公の様に当たり障りなく答えよう！

「誰かを助けるのに理由がいるのかい？」

「……」

うむ、これで無難に切り抜ける事が――――――

それからエヴァは俺達に付きまとう様になった。

「おい、そこの紫の長髪の貴様、私のモノにならんか？」

――――――出来ないよなぁ……。

「イエイエ、ツツシンデ、ゴエンリョ、サセテイタダクデゴザルヨ？」

ギギギと振り返りながら言う。

エヴァのナギフラグを思いっきりブレイクしちゃったよ？！

これは色んな意味で不味くないでしょうか？

1ヵ月後。

結局、ヨーロッパから日本まで付いて来ちゃったよ。
仕方ない、此処は原作に忠実に――――――

怪奇、麻帆良永遠の女子中学生!?

――――――として封じさせてもらうとしよう。

「と、言う訳でナギさんどうぞッ!!」

あのドーゾドーゾといったジェスチャーを落とし穴の方へ向ける。

「えーと、良いのかコレ?」

「ガボガボッ!!　ヒィィッ?!　私の嫌いなネギとニンニクがご丁寧に微塵切りにされて口の中に……ッ?!」

「ケケケ、御主人ガ取リ乱シテルゼ」

まあ、一旦俺が行方を眩ませて、ナギが俺の掘った落とし穴の前まで誘導して、今に至るみたいな?

「お、おい!　何故、私を拒む無数の姿?!　お前は私と同族ではないのかッ!?」

「残念だけど、吸血鬼ではないんだよエヴァ……」

「だが貴様は全く歳を取らんという噂が――――――」

「登校地獄(インフェルヌス・スコラスティクス)!!」

「――――――うわぁあぁぁぁ？！　この魔力馬鹿がぁぁぁぁぁッ！？」

こうしてエヴァは原作通りに麻帆良女子中学校に編入する事になった。

そして、原作とは違って、俺に好意を寄せる様になってしまった……どうしよう……？

その後、少し離れた所で学園長の爺とナギが大爆笑されていた。

「こ、殺す……ッ！！」

ぷるぷると震えるエヴァの頭に手を置いて頭を撫でる。

で、大爆笑をしている二人から少し離れてエヴァと話をする。

「まーまー、俺はいずれ此処に来るから、それまで人間の中で暮らしてみるのもいいんじゃない？

ちゃんと此処に来る予定だから……」

「……本当に此処に来るんだな？」

「うん」

俺は頷く。

結構待たせるんだけどね……手紙くらいは出すつもりだよ？

「なら一つ聞かせろ。　お前は……吸血鬼でなければ長命種族なのか？
だが無数の姿という異名を持っている様にお前は龍族や虎族、果ては精霊族なんてものもあるが……」
まさか、他種族の子供を取り込んでるなんて夢にも思わないだろうし。
「残念……その答えは３０点だね。　俺は確かに不老であり、ある意味不死だけど……吸血鬼みたいに不死身じゃない。
殺されれば死ねる体だよ」
「なんだその中途半端な体は？」
ジト目で見られた。
完全な不老不死の真祖の吸血鬼から見れば確かに中途半端な体だろうな。
「エヴァは太陰道にも通じているんだろう？　なら、中国に伝わる仙人の話も聞いた事があるんじゃないか？」
「確かに……神仙の類なら殺されなければとてつもない寿命と殺されなければ不死という身体を得られるらしいが……無数の姿は一体……それも変化の術というのがあったな……」
「ま、俺の正体を知っても７０点くらいだな。　俺の根幹ではないからな」
全ての始まりである根源なんてものに至って、異なる世界を旅す

る存在なんて及びもつかないだろうしなぁ……。

「根……幹……？」

「ま、そういう訳で俺は一旦、魔法世界に帰ります」

「……わかった……絶対に帰ってこい」

「ん、了解」

こうして俺はナギと別れ、魔法世界の孤児院へ帰った。

それから三年後、孤児院で暮らしている所に、ガトウが死んだという知らせがタカミチから届いた。

確かにガトウが死ぬ事は知っていた。

だが、それが何時だったのか……それを俺は知らなかったから……いや、良い訳だな……本気で止めたかったらガトウに付きっきりになってれば良かったんだ……。

こうして俺は新たな出会いを経て、俺は古き友の一人を失った。

と、思いきやガトウから手紙が来ていて、タカミチには悪いがメガロメセンブリアの調査の為に一旦身を隠す為の偽装だったのだという。

場所は言えないが、ある場所に身を隠しているらしい。

タカミチには内緒にしておいてくれと書かれていた。

全く、吃驚させてくれるよ……あ、エヴァに手紙書かなきゃな……。

第8翼　ぶらり旅、幼女を助ける紫の麗人（後書き）

とまあ、エヴァフラグが立ちましたよー。
他にも幾つかフラグを立てる予定はあります。
あくまで予定ですが・・・・・・。
作者的にはあんまりフラグ建築しても回収できない可能性がありますが、まあ何とかなる・・・・・・のだろうか？
綺麗に纏める自信がない・・・・・・。

次回は奴が襲来する予定。
奴が誰なのかは・・・・・・まあ、次回を見て頂ければ・・・・・・。

フハハハハ、伏線とか難しくてボクわかんなーい。
何それ美味しいの？
不味い・・・・・・テンションがおかしい・・・・・・。

何時も読んでくださる皆様、ありがとうございます！

第9翼　ささやかなイレギュラー、憤怒する紫の麗人（前書き）

奴の登場回。
この出会いで今後どう絡むかは全く考えていないッ！！

そして、ネギの故郷でナギと会うつもりが原作に無かったイレギュラーが現れたりして会えないみたいな？
しかも、戦わないという残念回。

第9翼　ささやかなイレギュラー、憤怒する紫の麗人

ナギが死んだという噂が流れた後、俺は孤児院で意外な人物と出会ってしまう事になる。

慣れというのは恐ろしい……マジで隠し保有スキル・女装Bになってしまった感が……女の格好をするを通り越して女に成ってしまい且つ、その口調で喋る……色々末期な気がするんだ……目からぼれ落ちているものなんて無い！

無いったら無いんだからな……ッ？！

もし、Aになってしまったら、もうそれは呪いの域に達し、女の格好で過ごすのがデフォルトになるのだろうか……絶対にならないけどなッ！！

で、ルーデシアの格好で洗い物をしていた時だった。

「お母さーん」

「お客さんだよー」

「だから、院長先生と言いなさいと……」

そこで奴が現れた。

「お邪魔するよ」

「貴方はフェイト・アーウェルンクスッ！！」

俺は子供達の前に立ち塞がり、守りながら構える。

「おや？　貴女に会った事は無かった筈だけど……？」

俺の敵意をものともせず、悠然と佇むフェイト。

「今日はこの子を預けに来たんだ。　此処で戦うのは子供達の為にも、君と僕の為にもならないと思うけど？」

そう言ってフェイトの後ろから茶髪犬耳の女の子が怯えた目で此方を覗いていた。

「……わかったわ。
此処では確かに誰の為になりそうもないようだし、その娘は責任を持ってこの孤児院が預からせてもらいましょう」

「わかってくれたようで何よりだよ。　でも、話がありそうだね？」

「外で話ましょう……皆はこの娘と遊んでいてね？」

俺はにっこりと微笑みながら言う。

「「「「「はーい！」」」」」

子供たちの返事を背に俺とフェイトは孤児院を出た。
院の門前には焔と調と呼ばれていたフェイトの従者が待機していた。

「フェイト様、そちらは？」

「さあ？　僕の事を知っている様だけど？」

その瞬間に焔の方が目を見開き、炎の精霊を操って俺を丸焼きにしようとしてきたので、俺はそれを避ける。

「こら、焔……いきなりそういう事は褒められない行為だよ？」

「ですが……ッ！　フェイト様を知っているこいつは敵に成りえます！」

「いきなり人を焼き殺そうとしておいて勝手に口論しないで頂けるかしら？」

俺は怒りマークを額に付けながら冷たい笑みを浮かべる。

「「！？」」

調と焔が俺の放つ殺気に息を飲む。

「さて、邪魔者が黙った所で聞かせてもらうわよ3番目（テルティウム）？」

「……君は一体何者なのかな？」

3番目と呼ばれた事でフェイトも殺気を俺に放つ。

「私は4番目になり損ねることすら出来なかった紛い物よ……1番目（プリー）には番外（ムム）なんて呼ばれてたわね（エクストラ）」

俺は言う。

「そう……気が付かなかったよ……紫の麗人、謎のアーティファクト使い、終戦に歌う紫姫……無数の姿のシューゼン、だったかな？仲間からは確か……スイセン、と呼ばれていたか――――」

「許した者以外にその名を呼ぶ者は例外無く殺す事にしているの……早々に訂正すれば一度は見逃してあげるわ。それとシューゼンではなく、朱然よ」

フェイトの周りを八卦八武装（せんてんはっけ）が取り囲む。
その一つ一つが急所を狙っている。

「わかった……訂正しよう」

その言葉と共に俺は八卦八武装（せんてんはっけ）を納める。

「貴様……ッ！！」

焔が炎を纏い、調がアーティファクトを構える。

「大戦の英雄ですか……この場で倒してしまいますか？」

「いや……彼は話し合いの出来る人物だ。　さっきのは僕の落ち度だよ……二人とも」

その諌める言葉一つで緊迫した空気が解ける。

「3番目……貴方はこの先、造物主の願いを叶える為に行動するのかしら？」

「さあ……どうだろうね？　それと3番目って呼ばれるのは好きじゃないんだ。　フェイトと呼んでくれないかな？」

惚けるフェイト。

「そろそろガタが来ているのでしょう？　この魔法世界自体が……」

「知っているのなら話は早い……なら僕達の仲間にならないか？君もこの孤児院の子供達を救いたいだろう？」

「数多くの死という悲劇が起こるのなら、創造されてしまった人々を始めから無かったかのように消してしまえばいい、とでも思っているのかしら？」

「なら悲劇を傍観し、数多くの死と共に絶望を見るのが正しい選択だとでも言うのかい？」

お互いがお互いを見る。

「……貴方の誘いの返答をしていませんでしたね？」

「断るのかい？」

「……保留を」

「ふぅん……何故か僕達の計画を知っていて尚、敵対するとも、味方になるとも言わないなんてね……意外だったよ」

「別に私は聖人君子になったつもりも、英雄になったつもりも無いわ……唯、自分のしたい事をしてきた。

その行いに後悔をしない事を誓ったの……私は私が正しいと思う事をする　それが私が私である理由であり、存在意義よ」

俺はそう言って背を向ける。

「逆に言えば……君が間違っていると思えばそれは敵対もするという事、だろう？」

「ええ、でも貴方が孤児達を趣味で助けている事は知っていたわ……だから、今は少しだけ私にとって貴方には正しい事をしていると思っているわ。

これからどうなるかはわからないけれど……」

こうして意外な人物との接触は終わったように思えたが、しばらくして戦災孤児達を連れてくるようになり、その子供達は大きくなるとアリアドネーの魔法学校へ通うようになった。

１９９６年、俺はネギの居る村へ来ていた。

冬目前からしばらく、この村で過ごしていた。

ネギとは接触していない。

理由は面倒そうだったからと俺の目的は悪魔が襲来をするのを待つ、それだけだから……そして、フェイトから一つ気になる事を聞いたのだ。

メガロメセンブリアの暗部が何やらキナ臭い事をしていると。

そして、約1ヵ月後、悪魔共はやってきた。

イレギュラーに連れられて。

村人達が対抗して悪魔達と戦うが、如何せん村と呼ばれるだけあって悪魔よりも数、質共に戦力が少なすぎる。
俺はルーデシアの悪魔状態になり、悪魔達を悪魔の力で還していく。

「滅魔斬ッ！！」

詠春の神鳴流を魔眼で見て覚えた。
悪魔の力と破魔の剣技を咸卦法の様に融合させ、大牙の牙で次々に放っていく。
そこにイレギュラーは現れた。
俺は普通に戻り、魔眼で見た時にすぐわかった。
その見た対象は風の精霊族の女の子だった。
悪魔達を使役している。
それだけなら別に何ともなかった。
唯、彼女の中に俺やフェイトと同じく、何人もの子供達の流れが見えたのだ。
この襲撃をしたのはメガロメセンブリア元老院。
フェイトの話では、奴らは僕達の研究所を漁っていた、という事も聞いていた。
つまり……そういう事なのか……俺はその風の少女の元へ向かい、対峙する。

「？　貴女は誰？」

首を傾げ聞いて来る。
その仕草は更に幼さを際立てる。

「君の名前は？」

「私の名前は……ない」

俯きながら答えるイレギュラー。

「何故、悪魔達を従えている？」

「私を作った人がそう言ったから」

人形の様に答える少女を見て、俺は拳を握る。

「作ったのはメガロメセンブリアだな？」

「あァァァァァァッ？！！」

突然、悲鳴を上げ、両手で頭を押さえて、のた打ち回り始めた。

「何……ッ？　何が起きた？！」

俺は周りを見渡すと、ナギ？が全ての悪魔を消した所だった。

だが、それが引き金になった訳ではない様だ。

魔眼で彼女の流れを見ると、何かしらの術式が彼女を苦しめている。

このままにしておけば、この娘は恐らく術式から見て■■■■の時の様に脳髄が爆発して死んでしまう。

大方、メガロメセンブリアの口封じと言った所だろう。

が、数々の子供を束ねて生まれたという業を持っていたとしても、死なせる訳にはいかない。

俺と同じ業を持つ無垢なる者を……救わずに身過ごせる筈が無い……ッ！

俺はすぐさま魔眼を全開にして集中を重ねる。

表層じゃない……もっと、もっと奥だ……！

頭の中、奥の奥、その中枢に進む。

見えた……ッ！！

俺がやろうとしていたのは魔眼で術式の流れを見ての解体作業だ。

見えた瞬間に凄まじい頭痛が俺を襲うが、気にせずに少女を苦しめる術式だけを解体する。

俺は自分の鼻血が自分の服の前面を真っ赤に染め上げている事に初めて気が付いた。

その事に気が付かない程の集中力を要したのだ。

少しでも間違えば頭が可哀想な人になるからな……だがそれを気にしない程に、俺は同じ業を持つ少女の命を救えた事がとても嬉しかった。

そして、もう一つ……メガロメセンブリアは俺の逆鱗に触れた。

いつか必ず、メガロメセンブリア元老院を叩き潰す。

俺の胸には2つの気持ちが満たしていた。

自分と同じ境遇の子供を救えた幸福とこの醜悪な研究を復活させた憤怒を……。

それから一度、孤児院に戻ってその娘を預け、メガロメセンブリアを探る旅に出た。

今ではもう出て行っても良い歳の子達が孤児院を運営しているので、長く空けても大丈夫だろうしな。

第9翼　ささやかなイレギュラー、憤怒する紫の麗人（後書き）

イレギュラーといっても、戦ってばかりではない的な感じでしょうか……？
今後のこのイレギュラーちゃんの活躍は……多分無い。

展開をどうするべきか……それが問題だ……。

こんな行き当たりばったりな作品ですが、見捨てないで頂けるとうれしいです。

読み返してみたらルーデシアのセリフに違和感があったので修正しました。

第１０翼　本編開始、潜入する紫の麗人（前書き）

強引に本編開始です。

第１０翼　本編開始、潜入する紫の麗人

さて、どうしたものやら……道草をしていたら随分とというか、かなりの時間がかかってしまった。

というのも、あの悪魔の襲撃から次の年、メガロメセンブリア元老院は中々尻尾を出さないし、ガトウもそこら辺を探っていたらしい。

で、あまりにも尻尾を出さないので、潰すのは一先ずおいておいて、原作へ介入する為の準備に日本でうろうろしていた時だった。

浦島ひなた、というおばあさんが車に轢かれかけたのを助けて、今年東大を受験した後、教員免許でも取ろうかな～と思っていたけど、そういえば部屋も探してなかった、という事を話すと、ひなた荘という寮をやっているので助けられたのも何かの縁、特別に部屋を貸そうという話になったのだ。

原作を知っている方はご想像の通り、あのドタバタラブコメ展開で騒がしい生活と、時たま魔法世界に行って、メガロメセンブリアに探りを入れながら送った。

ある時は久しぶりの黒い死神セットを纏い、雷属性の応用魔法を使って電撃で気絶とかさせてみたり、ある時は姿を変え情報を探し、そのまたある時は見つけた拠点を叩き潰したり、そのまた更にある時は闘技大会でメガロメセンブリアに献金している屑の選手達を再起不能にしてみたりした。

そんな事をしながら、俺だけ東大に合格した時は気まずかった……で、単位もギリギリだったが、無事に卒業できた。

因みに素子と可奈子に師匠と呼ばれるようになった。

でもって、鶴子さんが来た時に裏の世界でも最強の部類だ、という事がひなた荘の住人にバレて大騒ぎになったりもしたし、素子と

景太郎との結婚フラグが、俺との結婚フラグになったりして大変だった。

鶴子はある意味、詠春と同レベルの強さだった……戦闘力とか多分、目が黒化したらスクナと同レベルの８０００とかいくんじゃなかろうか……？

そんなこんなで教員免許をきちんと取って来たんですよ……ラブひなの住人達については……いつか語られる時もあるかもしれない……因みに、あの景太郎のエロハプニングは完全にガードしてやったぜ！

しかし、思い返せば返す程、間の悪い奴と言うか……奴は何故か、俺が女になっている時に限って、しかもピンポイントで狙っているんじゃないのか？というタイミングで襲いかかって来るんだ！

マジで女だったらセクハラで訴えて、景太郎が逮捕されても文句言えない頻度だったぜ……奴にはエロハプニングの神が降りているんじゃなくて、常駐しているのではなかろうか？

気を取り直して、漆黒の外套をはためかせる東洋人の男が一人。

その名は朱然。

肉体の名前を言うのなら、姚鳳仙（ヤオフォンシィエン）。

今は人が寝静まり、宵闇が支配する丑三つの時。

にも拘らず、麻帆良の森は騒がしい。

少し小高い崖の上から見下ろす先には、次々と鬼を屠り返すサイドポニーの髪型に制服、スパッツを着用し、かつての仲間、青山……今は近衛だったな……その詠春の振った刀、夕凪を持つ桜咲刹那の姿があった。

その５００メートル後方の木の枝の上には、ライフルのスコープを覗く褐色ナイスバディ巫女スナイパー、龍宮真名の姿もある。

「よくやるなぁ～」

俺は蒼き槍兵の様にヤンキー座りをしながら見下ろし続け、それほど時を待たずして召喚された魑魅魍魎は全て返され、術者も捕まった。

今宵の見世物はこれにて終了、かな？

そう思い、背を向けようとして――――――

――――――闇夜を裂く銃声が響き渡った。

俺はすかさず首をかしげる。

その瞬間に銃弾が頭のあった部分を通り過ぎていく。

避けなければ、頭が潰れたトマトの様になっていただろう。

と、そんな事を考えていると、小さな影が疾駆してきて直刀の野太刀を振り下す。

すると足元の崖が斜めに斬り裂かれ、その鋭い切り口によって滑り落ちる。

俺はすかさず着地。

その着地の瞬間を狙いそこに再度、銃弾が撃ち込まれる。

上手いな！

俺は当然のように最小の動きで、マトリッ○スや某ゾンビゲームに出てくるウェ○カーの様にかわす。

「斬岩剣ッ！！」

更に避けた瞬間の空白に再度、必殺の意気を込めた技を放たれる。

「おっとッ！」

俺は振り下ろされた夕凪をかわしながら右手を振り下ろし、刹那の首へ向けた瞬間に袖口に仕込んでいたスリーブガンを突きつける。

今日の銃はSカトラスだ。

だが刹那はその銃を斬るべく、刃を返して斬り上げる。

俺は斬り上げる夕凪を届かざる守護拳（マンゴーシュ）によって逸らし、距離を開いた。

「貴様、何者だ？」

刹那が追撃せず、鋭い視線を向けながら俺に問いを投げかける。

「それを言うとでも？」

「貴様……人ではないな？」

ふむ、気付かれるか……。

「どうしてそう思うのかな？」

俺はあえて一言で問い返す。

刹那の眉間に皺が寄る。

「質問に質問で答えるな。　お前からは人ならざる者の気配を感じ

る。

私の流派は退魔の流派でこと魔に関しては敏感だ……ことさら私はなッ！」

あー、素子も同じ事、言ってたっけ……そう言うのに対する魔法具でも用意してくれれば良かったか？

「僕は人だよ。　少なくとも人の心は持っているつもりだ」

俺は自信を持って言う。

「嘘だな……貴様からは濃い血の匂いがするッ！！」

これも素子と同じ反応だなぁ～。

刹那はその言葉と共に俺に斬りかかってきた。

が、俺は動かずにいた。

その理由は――――――

「そこまでじゃッ！！」

麻帆良学園学園長、近衛近右衛門が刹那の後方から近くまで来ていたからだ。

「学園長？！　何故、この様な場所に？！　お下がりください、危険ですッ！！」

刹那が驚きながらも学園長の前に出て構える。

「大丈夫じゃよ、刹那君」

「ですがッ！！」

「落ち着け刹那。　雇い主が大丈夫だと言っているんだ。　素直に刀を納めるのは当然だろ？」

「だが、私たち二人を相手にして立ち回れる手練だぞ？！」

未だに刃を俺に向ける刹那。

「刹那君。　彼は敵ではない。　寧ろ心強い味方じゃ」

学園長が言う。

「ならば名を聞かせて頂けませんか？　私達をあしらう程ならば、余程名の通った者の筈です」

「言ってくれるね。　この姿の時はヤオ・ファンシィェンで通しているんだけど……」

「聞いた事の無い名だ……やはりッ！！」

そう言って、距離を詰めようとした所を学園長に手で制される。

「でも、こっちの本当の姿での名なら聞いた事があるんじゃないかな？」

俺は漆黒の外套で自分を包み込み、元の容姿に戻る。

ファサっと紫の長髪が落ち、紫の瞳と女と見紛う容姿に変わる。

「紫の麗人、無数の姿、終戦に歌う紫姫なんて大層な二つ名を頂いている、朱然という名なら、ね？」

ニヤリと笑って言ってやる。

「「なッ！？」」

刹那と真名は予想通り、とても驚いてくれた。

うんうん、人を驚かすのはいつ見ても面白いな。

「よく、来てくれたのぅ」

「何か、アンタの顔を見てると殴りたくなってくるという不思議」

何か殴りたくなってこない？

こないかー……。

「と、とにかくじゃ、今日からこの麻帆良学園では雑貨屋と夜の警備……それ以外にも、もう一つをしてもらう」

「もう一つって何？　夜の警備は今知ったからやらないよ？」

「な、なんでじゃ？！」

「いや、何で受ける事が前提になってるんだよ？　何で俺が夜の警備をしなきゃならない？　俺に何のメリットが？

俺にとってのメリットがあまりに皆無だよ。

もう一つの仕事って、あわよくばナギの息子と木乃香ちゃんのボ

ディーガードにしてしまおう、とでも思っていたんだろ？
方や英雄の息子、方や関西呪術教会の姫、その二人の桁違いの保有魔力量。　そして、同じクラスに居る面白い技能を持つもう一人の計三人」

「むぅぅ……」

学園長は唸る。

「ナギの息子だからって俺は特別扱いしないし？　もし、ナギの息子が死んで世界が平和になるんなら俺は喜んで殺すけど？」

「なッ？！　そんな事が許されるとでも思って――――――」

「あのメガロなら喜んでやるだろう？」

クツクツと嫌味な笑いを学園長へと向ける。

「――――――ならば尚の事ッ！！」

「そう、だからこそ、守る為にこの学園に呼び寄せ、貴方は裏から手をまわした。　卒業試験に手を加えてまで、ね……。
だが、此処の先生にする必要は無かった。　唯の一般生徒に留めておけば良かった。
いくら頭が良かろうと、わざわざ１０歳の子供にやらせる職業じゃないだろ。
それにさっきの問いで、俺は世界平和の為にナギの息子を殺せると言ったけど、お前さん等……自称・立派な魔法使い達もそんな状況になったら、我々の正義の為に死んでくれ、英雄の息子なんだから、とでも言って殺すだろ？

お前らの言う正義の名の下に」

「そんな事ある筈なかろう?!」

「じゃあ、アンタは世界を敵に回してもナギの息子を庇い続けるのか？　麻帆良学園が今まで以上に危険になるのを承知で？」

「……」

黙り込む学園長。

「英雄と言われている貴方の言とはいえ、その過程の話は極論……言い過ぎなんじゃないのかい？」

真名が学園長に助け船を出す。

「英雄なんて……俺は一度も自分から名乗った覚えは無い。　御立派な正義の魔法使い殿達が象徴として勝手に祭り上げたもんだ。　ま、さっきの問いはそこの龍宮真名君の言った通り極論だ。　でも、それなりに合理的だろう？」

「確かに合理的だ」

「おい龍宮！　お前はどっちの味方だ!?」

刹那が真名に喰ってかかる。

それを余裕の態度であしらうのは、流石と言えば流石か……柔軟な考えを持つ奴は嫌いじゃないな。

「龍宮君のその現実的な考え方は好感が持てる。　今度、学園長の言った通り、雑貨屋をやるんでね……特別に君には二割引きにしておこう。
色々取り揃えてるよ？　銃弾とか、新モデルとか色々と、ね？」
「む、それは助かるな」
真名が心なしか嬉しそうな表情を見せる。
「詠春から、お前さんの事も聞いてるよ？　生まれながらの禁忌なんだって？」
ホントは聞いてないけど。
「……ッ！！」
入った瞬間、俺の首筋に夕凪が突きつけられた。
「別に言いふらしたりはしない。　俺も似たようなもんだ。　人であり、人外でもある。　幾千万の人間を殺した者でもある。
だが幾ら力を持っていても、本当に守りたいと思っていても、誰でも死ぬもんは死ぬ。
木乃香ちゃんを守りたいのなら、その頑なな態度を早めに直しておけ。　傍に居ればそれだけ守りやすい。
そうそう、鶴子と素子がよろしく言っていたぞ？」
「な……ッ？！　姉様達がッ？！」
俺は驚いている刹那を意に介さずに背を向ける。

「学園長ー、さっきは問い詰めて悪かったな。
侘びとして夜の警備も報酬付きなら受けないでもないし、暇な時なら散歩がてらに広域指導員とかもやってやらないでもない」

「本当かの？」

疑わしそうな視線を向ける学園長。

「ダイジョーブ、嘘は吐くけど、約束は極力守るよ……極力はね……」

宵闇の邂逅は終わった。

次の日。

女子中等部エリアの学園長室

そこには俺、学園長、木乃香、明日菜、ネギがいた。

「こんなガキんちょが担任なんて！」

机をバンッ！と叩き威勢良く言う。

「それが真実なんじゃよ。　ネギ君も修行の為とはいえ、遠路遥々よく来てくれたのぅ」

「い、いえ！　これからよろしくお願いします！」

元気に言うネギ。

「なーなー、おじいちゃん？」

「なんじゃ木乃香？」

「こっちの娘は誰なん？」

木乃香がこちらを見ながら言う。

そこには腰まで届くウェーブ掛かった銀髪が特徴的な外人さんが真帆良女子中学校の制服を着ていた。

「おお、そうじゃった！　此方は木乃香のクラスの転校生で……何と言ったかのう？」

「私の名前はルーデシアよ？　ルーデシア・ルノー。

さっきこの子達が来る前に一度そう名乗った筈だけれど、早くもボケているのなら今、此処でアレとか、ソレとか、ある事無い事この子達にバラすわ。

わざわざ私のスリーサイズに合わせた制服を用意して、その制服を着て儂の学校に通ってくれと土下座で頼み込んできた事とか、ね？

他にも――――」

「す、すまんかったのう?!　この通りじゃ!!」

バッ!!っと机の上で土下座を始める学園長と、それを冷徹な視線で見つめる少女こと俺。

その光景を見ていた明日菜からはブリザード級のジト目、木乃香は「あははは」と笑っているが同じくブリザード。

ネギはネギで「わぁ！　これがジャパニーズ土下座ですね！」等と言って目を輝かせている。

ええ、俺です。

何でこんな事になったんでしょうか?

折角、この日の為に教員免許を東大に入学して取得したにも関わらず、何故グレードダウンして中学生の……しかも女子校の中学生なんぞにならねばならないのでしょうか?

俺の四年間は全くの無駄ですか?

そうですか……。

というのも――――――

「朱然君……一つ頼みがあるんじゃが……」

なんて言いながら、魔法で店を準備している時に学園長が現れた。

大方、俺を副担任にでもしようとか思って来たんだろうか？と思っていたんだが……。

「今、教員は十分過ぎる程おるしのう……その無数の姿という名が伊達ではないのなら、今から女子中学生に……」

と、のたまったので――――――

八卦八武装（せんてんはっけ）を使い、学園長を包囲した。

「この魑魅魍魎の主の祖父みたいな頭しやがって？　いきなり何、寝言言ってるのかな？

寝言って寝てから言う言葉ダッタヨネ？」

ジワリジワリと八卦八武装（せんてんはっけ）が突き付ける距離を縮めていく。

「その魑魅魍魎云々はわからんが、これもネギ君の為なんじゃ！

副担任なんておったら修行にならんじゃろ？！

ナギの息子なら、君の親友の息子、つまりは自分の子の様に思え――――――」

「思えねーよ！」

学園長の言葉を遮り、突っ込みを入れる。

なんだその暴論。
そもそも手助けすること自体が修行の弊害だろうが。

「駄目かのう？」

爺がチョコンと首を傾げる。

「その仕草がムカつくから断固拒否！」

両手で×のジェスチャーをしながら言う。

「なら、木乃香を嫁にする代わりに……というのはどうじゃ？！」

「自分の孫を何だと思ってやがる……最ッ低だな？　本人が俺を本気で好きになったって言うんなら付き合うのも吝かじゃないが」

無理矢理、お見合いさせる神経が信じられん。

「ならば最終手段じゃ！」

爺が懐から写真を取り出した！
そこに写っていたものとはッ！

授業中寝ているエヴァ、授業をサボっているエヴァ、何かを食べているエヴァ、紅茶を飲んでいるエヴァ。
詰まる所、エヴァの盗撮写真だった。

「こぉんの……ッ！　犯罪者がァァァァッ！！」

その後、ボコボコにして写真を没収したが、あまりのしぶとさに

了承してしまったんだ……まあ、それ相応の対価として学内の特権や報酬の上乗せ、マジックアイテムの仕入れの優先とかその他諸々を約束させたがね！

こうして、俺は続編が出た某女装潜入ロマンティックラブコメディーばりの生活が始まってしまったのだった。

お嬢様校とかではないので肩ひじ張らなくても良いのは良いんだが……って、良くない！？

女装というか女になって女子中に通うとか男としてどうなんだ？！

やべーよッ！

何かマジでランクAになりそうで怖ぇーよ！

エヴァの写真は子供達とかが写っているアルバムに厳重に保管した。

第１０翼　本編開始、潜入する紫の麗人（後書き）

朱然さんのステータスが更新されました。
隠し保有スキル、女装Ｂ→女装Ａ　みたいな？

それはさて置いて、メガロの陰謀とかが出てきたけど、ガン無視してしまった・・・・・・。
しかし、本編開始。
しかも朱然が副担任としてではなく、生徒として潜入。
教員免許取ってきたというフリに引っかかっかった人は居るのだろうか？とちょっと不安。

ラブひな編は・・・・・・いつか語られる事があるかもしれない・・・・・。

では、これにてノシ

早速の誤字報告を受けたので修正しました。
真帆良→麻帆良

読みにくかったのでちょっと行間やらを修正しました。

第１１翼　転校と再会、採まれる紫の麗人（前書き）

・・・・・・何か、どうなんだろ？この話・・・・・・。

第１１翼　転校と再会、採まれる紫の麗人

今はネギと明日菜の後ろを歩いていて、先頭にはしずな先生が先導している。
俺の横には木乃香が居るが、話しかけるなオーラを出しているので話かけられないでいる。

そんな時、明日菜が先に行くと言って行ってしまった。
木乃香もそれに続いて行ってしまう。

それから少し歩いた所で不意にしずな先生の歩みが止まった。

「此処が貴方達のクラスよ」

そう言って促し、促されたネギがドアの扉を開き、黒板消しトラップが発動した。
ネギの頭に落ちる瞬間に、常時展開していた障壁が受け止めた。

迂闊なッ！
障壁消しとけよ！
原作見てたけどこれは酷い。
ま、幾ら頭が良くても所詮１０歳のガキで、色んな自覚は元より、己の道徳すらまともに自覚し始めた頃なのに他人に教える事が出来るとは到底思えない。
それは置いておいて、今はあの黒板消しやらその他諸々を何とかしないとな。
→
この間、０．５秒

俺は即座に黒板消しを掴み、足元のロープを無影で切断。
ネギが驚いて此方を見たのに意を介さず、そのまま進む。
頭上から水入りバケツが落ちてきたが、難なくバケツを先に取り、水を受け止める。
そこから更に吸盤の付いた玩具の矢を空いた手で掴む。
教室が静まり返る。

が、次の瞬間には、スゲー！とか、全然見えなかった！とかいう歓声が聞こえる。

ネギはその光景に呆然とするのみだった。
しずな先生は動じることなく、場を収めてネギと俺に自己紹介を促した。

ネギは原作通りの自己紹介をしてクラクメイト達の反応もやれ可愛いだの言い出す。
突っ込みなんて殆ど無い。

学園全体に張り巡らしている大規模結界の副作用なのだろうか？
おっと、どうやら次は俺の番の様だ。
武闘派連中が此方を警戒しているな。

「皆さん始めまして……私の名前はルーデシア・ルノーと申します」

それだけの簡潔な自己紹介。
その中で朝倉和美がマイクを片手に距離を詰めてきた。

「えーっと、ルノーさん？　質問よろしいでしょうか？」

何故か敬語の朝倉。

「ええ、構わないわ……何を聞きたいのかしら？」

「じゃあ、基本的な情報から……フルネーム、身長、体重、スリーサイズ、出身国、彼氏の有無、趣味、特技、好き嫌いとかを」

隠す事でも無いので包み隠さず話してやろうと思ってみたり。

「随分と訊きたがるのね？　本名はさっき話した通り、ルーデシア・ルノー。

出身国はフランス、身長１６７センチ、体重は内緒。

趣味は広く浅く、強いてあげるなら読書に料理、色んなものを作る事。

特技は大体構造が分かって材料があれば色々作れる事、武術全般。

好きなものは子供、甘い物、暇、自由。

嫌いなものは辛い物、融通のきかない石頭、身の程を弁えない人間、アホな天才。

因みに嫌いな人物は学園長とネギ・スプリングフィールド、父親」

ええッ？！と驚くネギと、おおー、といきなりのネギ嫌い宣言に声を漏らすクラスメイト。

「ふむふむ、スリーサイズは？」

「上から９８、５８、８８」

「輸入モノ……ッ？！　私と身長同じでこの胸のサイズは反則過ぎだよ……流石、外国産……」

ギャラリーの視線が俺の胸元に集中する。

「彼氏とかは？」

「居ないわ。　作る気も無いし……でも、好きな人なら居たけど」

蓮華とかね。

「そのお相手の情報は？！」

スゲー喰いついてきたよ。

「居るじゃなく居た、という事から察しなさい。　人は誰しも踏み込まれたくない領分という物があるでしょう？」

冷たく言う。

「ヒィ……ッ？！　スミマセンッ！？」

朝倉が即座に謝るのは本能故か……。

「しかし、転校早々、何でネギ君を嫌うの？」

当然の話題だな。

「例え大学を卒業できる学力があろうと道徳的に完成していない子供が先生をする事自体が間違っているから。

現に今朝、そこの神楽坂明日菜さんにいきなり失恋の相が出ている等という様な無神経さには、ほとほと呆れるばかりよ。

その内、自分の授業で質問に答えられない人が居た時に、貴女は

英語苦手なんですねぇ～、なんて言い出すわよ？
学校で人にものを教えるという事は遊びじゃない……それをまず理解していないというのが問題なの」

「うぅ～」

俺の容赦の無い攻めに涙を浮かべるネギ。

うぜぇ……ウチの子達とは大違いだ。
子供には違いないが、何というか性格的に嫌いだし。

「この程度の事で泣くのなら始めから先生になるなんて思わない方が身の為よ。
例え修行の一環として決められていた事だとしても、それを今泣いて諦めるのなら教えられる側としても迷惑極まりないわ。
何より、住む場所が無いからって、女子寮に住むというのも全ての責任がネギ先生にある訳じゃないけれど、教師としては大問題よ」

俺は言い切る。

クラスメイトは沈黙。
ネギは泣きかけ。
明日菜と長谷川千雨がうんうんと頷いている。

「まあ私一人がグダグダと言って解決するのなら幾らでも言うのだけれど……ネギ・スプリングフィールド先生、貴方はどうするのかしら？
泣いたまま故郷のウェールズに帰る？　それとも今言った事を踏まえて教師を続ける？」

俺は問いかける。
さあ、お前はどちらを選択するネギ・スプリングフィールド？
「ぼ、僕は……僕は教師を続けますッ！！」
そう、涙を拭いながら答えた。
「なら教育実習生とはいえ、私を……此処に居る皆さんを失望させない様に努力する事をお勧めするわ」
言いながら、廊下側の空いている一番後ろの席に座る。
そう、エヴァの隣に。
その間、誰も俺に声を掛けなかった。
そして、授業が始まる。
「面白いな貴様」
エヴァが話しかけてきた。
「どういった意味でかしら？」
「先程の先生に対しての説教といい、トラップを見事に防いだ事といい、人外の気配といい、な……」
「あら、上手く隠したつもりだったのに……こんなに早くバレるだ

なんて」

俺は特に焦らずに言う。

「フッ、慌てん所を見るにバレるのは計算ずくか……何者だ？」

「久しぶりの再会なのに、全く気付いてもらえないのはとても悲しいのだけれど？

エヴァンジェリン・アナタシア・キティ・マクダウェルさん？」

「……ッ、貴様ッ？！　何故、私のフルネームを知っているッ？！」

小声で驚くという芸当を見事にしてくれたエヴァに対して俺は笑う。

「アルに聞いたの」

「アル？　アルビレオ・イマか……ッ？！　何故、知っている？！

答えろ……ッ！

奴め……今度見つけたら八つ裂き、いや、粉微塵にしてくれる！」

人を殺しかねない視線を俺に向ける。

「私の本当の名前は朱然よ」

「何？　朱然だと？　貴様、私をおちょくるのも大概に……ッ！」

俺はエヴァにエヴァから送られてきた手紙を見せる。

「ホントに……ホントにお前なのか……？」

エヴァは俺の方へ両手を伸ばし――――――

「ええ、後でエヴァの家か、私の家でゆっくりと話を聞くわ……ッ！？」

――――――俺の胸を鷲掴みした。

「何で貴様は女になっているッ？！　しかも何だこの無駄な脂肪の塊はッ？！」

エヴァがぐにぐにと胸を揉む。

その視線が胸と顔を高速往復する。

「何でこんな事に……ッ！！」

「ええ、ホントに何でこんな事になったのかしらね……」

エヴァに胸を揉まれながら、微妙な気持ちで説得を開始する。

「姿を変えているだけよ……何故、此処に転校生として潜り込んできたかというと……色々あったのよ、色々……後で説明するから一先ずというか、そろそろ胸を揉みしだいているその手を放してくれないかしら？」

「クッ……私だって幻術を使えば……」

エヴァが俯きながら自分の胸に手を当て、小声でぶちぶち言っていた声は聞き取れなかった。

第１１翼　転校と再会、採まれる紫の麗人（後書き）

これはガールズラブになるのだろうか・・・・・・。

ネギはもっと苛める予定。

ルーデシアは中学生バージョンです。
それでもしずな先生に迫る巨乳ですが、大人になるともうちょっと身長が伸びてしずな先生を超える巨乳に・・・・・・。

ルーデシアの名字と出身国はフランスの車の名前にルノールーテシアとかいうのがあったのでそれを使ってみたり。
ヤオの方は鳳仙花の花を無くして中国読みなだけ。

次回、朱然に新たなフラグが?!な予定。

第１２翼　歓迎会の片隅、会話する紫の麗人（前書き）

別に読まなくてもいいかもな回。

第１２翼　歓迎会の片隅、会話する紫の麗人

自己紹介が終わった後、明日菜が消しゴム爆弾をネギに叩きこんだり、エヴァが胸を揉みしだいたり、明日菜と委員長が喧嘩したりして、授業はほとんど進まずに終わった。
そこにタカミチがネギの様子を見に現れた。

「やあ、ネギ君。　初授業の方はどうだった？」

「そ、それが殆ど進まなくて……しかもいきなり教え子に説教を……わッ？！」

ネギが愚痴り始めた所で明日菜が割り込んできた。

「高畑先生！　授業の方は殆ど問題無かったですよッ！！　何か問題があっても私が付いてますし！」

その自信が何所からくるのかと言いたくなる。
恋は盲目というし、学園祭でフラれるまで俺はノータッチで行こう……でも、まずは久しぶりの再会と行きますかね。

「御機嫌よう、タカミチ・Ｔ・高畑先生」

スカートの両端をチョコンと上げて挨拶をする。

「ああ、おはよう……って！　何で貴方が此処に……ッ？！」

タカミチが驚く。

そう、タカミチは今朝学校に戻ってきた。
つまり、今俺がこのクラスに居る事を知らないのだ。
学園長に口止めしておいたしな。

「と、とりあえずこっちに……ッ！」

そう言って、タカミチが俺の腕を引いて人気の無い場所……階段の下のスペースまで移動する。

「何で貴方が此処に居るんですか?!　朱然さん！」

「タカミチ、今の姿の時はルーデシア・ルノーで通しているの。
それに私は生徒で貴方は先生よ？　なら、敬語なんて使わなくてもいいわ。
今夜、学園長から召集が掛かって集会が開かれるから詳しい事はそこで。
そうそう学園長の事だから、力を見たいとか言い出すと思うの。
相手は貴方ぐらいしか相手にならないでしょうし、もしも私に傷を付けられる位に成長していたなら、水仙と呼んでくれてもいいわ。
呪文詠唱出来ないハンデを背負っていても、その所為で立派な魔法使い(マギステ・ル・マギ)を名乗れなくても……紅き翼を代表して、認めてあげる」

俺はそう言い残し、階段を登った。

Ｓｉｄｅタカミチ

僕は歓喜していた。

紅き翼の中で僕とクルトだけが決して呼べなかった彼の真名。
その名を呼べない事で僕は何所か疎外感を感じていた。
でも今夜、彼に認められれば僕は本当の意味で紅き翼の仲間になれる。
紅き翼はあの救出劇の後に解散し、師匠が死んでから僕だけになってしまった。
所在不明となったメンバー達と会える機会などもはや無いに等しく、所在のわかる朱然さんは決して進んで戦う様な人ではなかったし、あの人の生活を見ていて戦ってくれなどと言う訳にもいかなかった。
だが、今夜……偶然にも戦う事が出来る。
彼との戦いで僕の力を……師匠から学んだこの力を、やっと見せる事が出来る。
そして、認められれば胸を張って彼らの仲間だと思える！

タカミチは師匠愛用の煙草に火を付けながら昇降口を出て、機嫌良く煙草を吸いながら今夜の戦いに心躍らせ、勝つ為のシミュレーションと勝つシチュエーションを夢想する。

時を少し戻って、二人の密談を聞いている者が居た。

Ｓｉｄｅ明日菜

突然、転校生のルノーさんが高畑先生に挨拶をした。
別段、可笑しい事でも無かった筈なのに、何故か高畑先生は驚き、彼女の腕を引っ張って行ってしまった。

「タカミチは何で驚いてたんだろう？　何か敬語使ってたし……」

このボケガキが考えるジェスチャーをする。

一体何なの？
確かに見た目はナイスバディで可愛いいけど、高畑先生と一体どんな関係なんだろう？
そうこうしている内にボケガキは何所かに行ってしまった。
私は気になるので二人を探す事にした。

その場所は階段下のスペース。
内緒話をする時に良く使う場所。

そこに二人の姿があった。
話声が微かに聞こえる。
普通の人より耳が良いんだけど、音がこもっているので聞き取りづらい。
その所為で少ししか聞こえてこない。

「タカミチ……私は生徒で貴方は先生……敬語なんて……いい……。

今夜……詳しい事は……今夜……だから……見たいとか言い出す……の……。

相手は貴方……しか……私に傷を付け……成長……、水仙と呼んで……。

……ハンデを背負って……、その所為で……名乗れなくても……認めて……」

ええとつまり……高畑先生を呼び捨てに出来る間柄で内容は――――

タカミチ、私は生徒で貴方は先生だけど、敬語なんて使わなくていい。

今夜、暇だから……わ、私の（自主規制よッ！）を見たいとか言い出すかと思ったの。

相手は貴方だけしか居ない……あの時、私に傷を付けて貴方は逃げた。

でも、あの時より成長したわ。私を水仙と呼んで……あの時の傷でハンデを背負って、その所為で周りに貴方の恋人と名乗れなくても、貴方には認めてほしいの……。

……って事ッ？！

な、何よこの会話！？

確か自己紹介で好きな人が居たってルノーさんが言ってたけど、そういう事だったの？！

そ、そんな……ッ！？

あのボケガキが失恋の相が出てるなんて言うから本当にそうなったかもしれないじゃない！！

自主規制は自主規制よッ！

放送コードは敵に回すには強大すぎるわ……。

「マズ……ッ！」

頭を抱えていると階段を登って来る足音がする。
私は可及的速やかに階段を登って、ルノーさんをやり過ごし、廊下の窓から外を見た。
そこには愛用の煙草を吸い、心なしか機嫌の良い高畑先生の姿があった。
その姿を見て、余計に落ち込んだ。

とても壮大なタカミチとの誤認フラグが立っているとも知らず、俺は残りの授業を消化して、歓迎会の中に居た。
隣ではエヴァがジュースをチビチビと飲んでいて、茶々丸が甲斐甲斐しく世話を焼いている。
休み時間の内に茶々丸とは自己紹介を済ませたのだー。

「おやおや珍しい……人を寄せ付けないエヴァにゃんが転校生のルノーさんと楽しげに会話してる……」

「エヴァちゃんもヨーロッパ系だから話が合うんじゃない？」

そんな話がちらほら聞こえる。
エヴァはこのクラスに溶け込んでいないからか近づいて来る者は少ない。

「フンッ、さっさと事情を聴きたいが、此処でそんな話をする訳にもいかんしな……」

エヴァはそう言って離れる。
そこに刹那、真名が寄ってきた。

「貴様……何者だ？」

刹那が敵意剥き出しで問いかける。

ま・た・か……ッ！

「あら、昨日の夜ぶりかしら？」

「昨日の夜だと？　まさか……ッ！？」

「全く……驚かせてくれる人だな……まさか、生徒としてこんな所に潜り込んで来るとは」

今の俺の言葉で察しがついたらしく、驚く刹那と感心する真名。

「不本意ながら、ね。　私は敵ではないわ。　親友の娘を狙うつもりもないし。
　此処でやり合う程、馬鹿ではないでしょう刹那さん？　真名さんもお金にならない事は極力しないでしょう？」

「フン、今夜の集会で貴様の化けの皮が剥がれなければいいがな……」

「店の2割引きの件、期待してるよ？」

二人は対照的な機嫌で俺から離れて行った。

次に現れたのは古と楓。

「転校生！　ワタシと勝負するアル！」

ビシッ！と指を突き付ける。

「拙者とも一戦交えて欲しいでござるなぁ～」

「近い内に武術系サークルに道場破りに行きますので、そこで勝負するわ」

「ほ、本気アルか？」

突拍子もない俺の言に古は目を白黒させる。

いきなりＯＫされるとは思わなかったのだろう。

「ええ……私、学園長からのお願いで、仕方なく広域指導員になるから、無用に戦うのは好きではないのだけれど……知名度を上げておけば戦わなくてもそこにいるだけで抑止力になるくらいには噂を流しておきたいの。

武術系サークルを全て倒しておけば、向かってくるお馬鹿さん以外……少なくともお利口な人は大人しくするでしょう？」

「わかったアル……その時は全力で戦るアルよ！　楽しみに待ってるアル～！」

意外にも不敵に笑い、古は大人しく帰っていった。

「で……甲賀中忍の長瀬楓さんも腕試し？」

「そうでござるが……どうやら、やめておいた方が身の為っぽいでござるなぁ～」

頭を掻きながら言う。

「あら、いいの？」

「この至近距離まで近付かなければ、わからない程の実力……拙者が逆立ちしても到底、勝てる気がせんでござるが……ルノー殿は何者でござる？

流派と実力を知っている事、底の見えない実力、鋼糸の腕前……」

「私は忍ではないわよ？　少し話は変わるけれど、裏を貴方は知っているかしら？」

「この学園に来てから何度か、化生を見た事があるでござる」

「そんなのが居る世界で、そこそこに名の通った一人よ。　学園長に此処の警備を頼まれて来たの」

「……嘘は付いていないでござるな？　その内、拙者に稽古等を付けてもらえると嬉しいでござるが……」

「気が向いたら、色々と見てあげるわ」

「……そうでござるか。　邪魔をしたでござる」

楓が去り、次々にクラスメイトが挨拶に来た。

その中で、最後に千雨が来た。

「あの……すみません」

「あら、何かしら長谷川千雨さん？」

「何と言うか貴女は、この学園ってオカシイと思いませんか？」

「ええ、子供が先生になる事に平気で許可を出す学園長とか、それを可愛いで済ます能天気なこのクラスとかね？」

「よかったぁ～、やっと話の通じる奴が来たぁ～」

何故か泣きながらガッツポーズをとる千雨。

というか地に戻ってるぞ？

「そんなに嬉しい事かしら？」

「それはそうです！　だって、このクラスだけでも幼稚園児みたいなのからモデル級の体型が勢揃いで、多国籍過ぎるでしょう？！　大財閥の令嬢、学園長の孫娘から始まって、忍者口調から、人を１０メートル単位で吹っ飛ばす中国拳法娘、マッドサイエンティスト、巫女、ピエロ、あげくにはロボまで居るんですよロボ！」

「はぁ……ちょっと、落ち着きませんか？　ちぅさん？」

「これが落ち着いていられますか！　学園だってそうです！　世界樹とか言われてるあのド○クエにしかない様な樹とか、ちょっとしたダンジョンみたいになってる図書館とかッ！！って、今……何て？」

ギギギと動きが面白くなった。

「ちょっと、落ち着きませんか？　ネットアイドルちぅさん？」

「なッ、なななななッ！？　何で知ってるゥ――――――ッ？！」

推進ロケットで初めて天井に激突した日向の様に、俺に向けている人差指がガクガクと震えている千雨。

「大丈夫、誰にも話したりはしないわ。
趣味は人それぞれだもの……フォトショップで加工したりとか、色んなコスプレ衣装を自作してるとか……」

「コイツも普通じゃねぇぇぇッ？！　しかもアタシ自ら地雷を踏んだぁッ？！」

ぐわぁぁぁ！！と頭を抱える千雨。

「折角、まともな奴が来たと思ったのに……しかも、秘密を知られた……」

今度はｏｒｚと膝を突く。

「私もまともな部類の人間ではないけれど、自覚しているだけマシじゃないかしら？」

「た、確かにそうかもしれねーが……」

「そっちが貴女の地の喋り方って事も知っているから、気にせず地で話してくれて結構よ？」

「はぁ……結局、まともな学園生活は無理なのか……」

「多分、この学園に居る限り無理じゃないかしら？」

「だよなぁ……」

「まあ、可能な限り貴女の日常を乱したりしない様にするわ」

「あ、ああ、出来るならそうしてくれ……」

その言葉が意外だったのかフラフラと立ち去って行った。

強く生きてくれ……まあ、結局巻き込まれるんだろうけどさ。

少しして、ネギと明日菜が出迎えられ、ネギがタカミチと明日菜の間を行ったり来たりして、ネギから何かを聞くたびにズッコケまくった。

そんな挙動の合間に、俺の事をチラチラと見ている様だ。

何か注意を引く様な事したっけ？と頭を捻っていると突然、明日菜は教室を飛び出していき、ネギはそれを追っていった。

遠目にそれを見ていた野次馬が後を追っていって、廊下から大騒ぎが聞こえてきた。

多分、ネギが明日菜フラグを立てたんだろう。

第１２翼　歓迎会の片隅、会話する紫の麗人（後書き）

今後、明日菜には恋敵的な風になるのだろうか・・・・・・？
なったらなったでエヴァ編までだと思いますけどね（笑）

で、武道四天王、千雨との会話回でした。
次回はＶＳタカミチ戦です。
でも、はてさてどうなるやら・・・・・・。

第１３翼　ＶＳタカミチ、認め笑う紫の麗人（前書き）

ちょっと普通の小説風に書いてみたり。

投稿前にアニメ版戦国ＢＡＳＡＲＡを見て豊臣秀吉のチートに吹いた。
拳で数十分、海の水を数キロ程干上がらせるというモーゼも真っ青な技から始まり、拳一つで平地から丘を築き、約３３３センチというアホみたいな長曾我部元親が作った大砲の弾を手で受け止めるとか・・・・・兵、要らなくね？
寧ろ一人で世界征服できるだろ！！と突っ込んだ。

第１３翼　ＶＳタカミチ、認め笑う紫の麗人

２３時丁度、世界樹広場前から普通の人の姿が完全に消えた。
そして、普通じゃない人間達が集まった。
そこには刹那や真名、本来ならば何時もサボるエヴァンジェリンの姿さえあった。

「えー、皆には黙っておったが、新しい魔法生徒の一人がこの麻帆良学園に転校という形で入ってきた。
本来ならば軽く自己紹介等をするだけで済ますんじゃが、そういう訳にもいかん人物での……」

学園長の独断発言に怪訝な表情を浮かべていた魔法先生、魔法生徒達が訳アリの人物に興味を持ち始める。
学園長がおいそれと流せない人物。
それ程の大物ならば、本国の若いエリートなのだろうかと、この広場に集まった者達の殆どがそう考え至る。
だが、それは更なる驚きに覆される事になる。

「では出てきていいぞい」

学園長に促され、月明かりが届かない影に隠れていた人物が姿を現す。
コツッ、コツッとやけにその人物の足音が鳴り響く。
この広場に集まった者全員がその人物の容姿に少なからず心を奪われた。

そこに現れたのは――――――

可愛らしい、美しい、というよりも何所か妖艶な娘だった。

月明かりを反射する灰銀のウェーブ掛かった髪。

陶磁の人形（ビスクドール）の様な白い肌。

何より目を引くのは……この闇の中で見るからか、覗き込めば何所までも深く深く沈んでいく様な深海を思わせる濃紺の瞳。

着ている服が真帆良学園中等部の制服なのが、余計にその容姿を引き立てる。

その目を引く容姿の人物の表情は何所か無邪気で楽しそうだった。

「こちらがその転入生じゃ」

自慢げに胸を張って言う学園長。

「学園長が威張る事ではないと思うのだけれど？」

その少女から軽く、それでいて澄んだ声が唇から洩れる。

「なら……ほれ、さっさと自己紹介じゃ」

「……わかったわ。　今の私の名前はルーデシア・ルノー……今夜は私の為に集まって頂き恐縮です」

スカートの両端を摘まんで礼をする。

その仕草も何故か可愛らしいというより先に何故か妖艶という言葉が脳裏に浮かぶ。

そんな中で集団から抜け出る者が居た。

タカミチ・T・高畑だ。

魔法に関わる者達の間で所在の知られている二人の内の一人。

今も戦場を駆け、戦い続ける紅き翼。

呪文詠唱が出来ないというハンデを背負い、それ故に立派な魔法使い(マギステル・マギ)を名乗れない人物。

この麻帆良学園で最強の一角。

その彼が転入生の少女に近づく。

「先程振り、というのも何所か変ですかね？」

その最強が、敬語を使った。

それはこの学園の……特に魔法に関わる人物ならば考えられない事だった。

「良いのではないかしらタカミチ？」

少女は可笑しそうにクスクス笑いながら、それがさも当然の様に呼び捨てる。

それを気に入らない者が声をあげた。

「ちょっと転入生の貴女！　高畑先生に対して少し馴れ馴れしいのではないかしら？」

その高圧的な女の声が聞こえ、その女……否、聖ウルスラ学院のシスター服を無理矢理、制服にした様なデザインを着た人物。

高音・D・グッドマンが従者の佐倉愛衣を連れて、歩み出してきた。

「貴女は高音・D・グッドマンさんに佐倉愛衣さんね？
タカミチとは旧知の間柄なのだから、馴れ馴れしいのは当然ではないかしら？」

涼しげに言う朱然。
それを聞いた高音は、少しだけ目の端を吊り上げる。

「親しき仲にも礼儀有り、という諺を御存じかしら？」

「ええ、知っているわ」

「ならば、貴女の様な者が大戦の英雄という最大の功労者に対して取る態度は……わかりますわね？」

右腕を朱然に向け、人差指を鼻先に突き付ける。
その発言には暗黙の了解だ、と示唆している様だ。
場の者達も少なからず、そういう気持ちがあるらしく特に諌める者も居ない。
朱然の正体を知っている学園長、エヴァ、真名、刹那は知っていて黙っている。

少しの静寂が場を支配する。

周りの者達も大概の者は内心そう思っていた。

少女は確かに人目を嫌でも引く容姿で美しかったがそれだけだ。

決してそれが大戦の英雄を呼び捨てにしていい免罪符にはならない。

旧知の仲と言っても外見上の年だけを見ればどんなに古くとも7、8年が限度だろう……そう思われても仕方が無い。

そう思っている者が多数だったのだから。

が、その静寂を破る者が居た。

「プッ、ククク……」

それは話題の中心人物であるタカミチ本人の吹き出した声だった。

「な、何が可笑しいんですの?!」

高音はタカミチの吹き出した意味が分からず、後ろの愛衣と一緒に困惑する。

当然だろう。

幼少から聞かされた紅き翼の英雄譚は彼女の目標である立派な魔法使い(マギステ・マギ)を目指す切っ掛けとなった一因でもあるからだ。

当時の紅き翼で、幼くしてその一員であったタカミチ・T・高畑は、正に高音・D・グッドマンの尊敬する人物の一人であり、目標

でもある人物だ。
己の尊敬できる人物を敬語で話させ、それを当然の様に受け止める姿勢。
更には尊敬する人物の名を呼び捨てにするという暴挙を見せた、見かけが自分よりも年下の少女に自分は注意をした。
幾ら旧知とはいえ、修行の為にこの麻帆良学園を訪れているナギ様の息子のネギ先生の様な特別な存在以外では考えられない。
その行為は褒められるものだと信じて疑わなかった。
だが、結果的に尊敬する人物に自分は笑われてしまっているという、よくわからない状況に陥っている訳だ。

「いや、彼女……彼は僕の一番古い仲間の一人なんだよ」

「高畑先生の一番古い仲間？　ですが、見た目は多少高く見積もっても、私と同じ位ではないですか！　というか彼？　男ですの？！」

高音の大声によってもたらされた情報によって周りが騒がしくなる。
彼女……彼？の容姿を見れば百人中百人が女だと言う容姿なのだが、というか実際、今の朱然は女だが――――それは確かに驚くだろう。

「静かにせんかい！」

しかし、そのざわめきも学園長の一喝によって、また場が静まり返る。

「黙って聞いとれば、ちっとも話が進まんわい……そろそろ本性を現してもいいんじゃないかのぅ？」

長い眉の影に隠れた目を朱然に一瞥させる。

「ええ、わかったわ……この姿の時は本当に女の身体だから男という訳ではないのだけれど……生まれた時の身体は確かに男だから性別的には男で正解なのかしら？」

と、朱然を知らない者が聞けば意味不明な自問自答をして朱然は黒の死神さん用のコンパクト外套を取り出し、自分を包んだ。

そして少し、ウネウネと動いた後にその外套が取り払われた。

そこには、2度目の衝撃がこの場に居る者達に降りかかった。

「美」

その一文字のみが頭に浮かぶ。

先程の可愛らしくも何所か妖艶な少女の容姿を超える美しさ。

完成した美しさ、とでも言うのだろうか？

それは人が美しいと思う偶像をそのまま形にした様な美しさだった。

腰の長さを超え、膝裏まで伸ばされ、うなじの辺りで一括りにされた紫の長髪。

自ら光を放っているかの様な白い肌。

スラリと伸びた肢体。

何故か服装も変わっており、何所にでもあるジーパンに黒のタートルネックを着たラフな格好。

そして、やはり一番目を引くのは瞳だ。

何所までも見透かされてしまうかの様な紫水晶（アメジスト）の瞳。

見る者を魅了せずにはいられない容姿。

その場に居てあった事も無い筈なのに、そのあまりにも知り過ぎている容姿と先程のタカミチの、一番古い仲間の一人、という情報と掛け合わさり、この場の者達の思考が一つの結果に行きついた。

「あ、あああ、あにゃッ、貴方様はッ？！」

「は、はわわわわッ？！　ホンモノ？！」

朱然に意見した一人と、そのとばっちりを食った可愛い従者が、慌てふためく。

何故なら、その人物はその少女にとって、尊敬する人物の一人だから。

「さて此処に現れたこの人物については皆もう予想が付いとると思うが、本人の口から宣言してもらおうかの？」

学園長に促され、朱然は口を開いた。

「一々言わなくても言うつもりだったよ……」

呆れた様に言う朱然。

その声は良く聞かなければ女の声だと思う程に高い声だ。

「ルーデシア・ルノー改め、タカミチとは旧知で仲間だった紅き翼の朱然だ。

今日から学園長の頼みでこの学園に世話になる……よろしくな？

身の程知らずの高音ちゃんにとばっちりを喰った愛衣ちゃん？」

悪戯が成功した悪ガキの様な無邪気な顔で言う朱然。

その直後、二人の頭はオーバーヒートして倒れ、その他の魔法使い達のリアクションは、多くの者が口をあんぐりと開けたままのノーリアクションを取るのみだった。

かくして所在不明と言われていた大戦の英雄の突然の登場とその英雄が女子中学校に通うという学園二度目の驚愕（一度目は超高額賞金首で悪の魔法使いの代名詞とも言えるエヴァの襲来）がこの場の者達を襲ったのだった。

その微妙な空気の後、学園長が二人を介抱するようにとモブ魔法使いに指示を出し、気を取り直して喋り出す。

「さて時間も押しとることじゃし、今夜のメインイベントをしたい

と思う。　朱然殿と高畑先生のエキシビジョンマッチじゃ！」

学園長は高らかに宣言した。
タカミチは嬉しそうな顔をして、朱然は不敵な表情を浮かべる。
既にギャラリー達は各自防護障壁を纏い、周囲を円形に取り囲んでおり、その中心には戦闘態勢を取っている二人の姿があった。

「2人とも用意はいいかの？」

学園長が視線を巡らせながら言う。

「ええ、いつでも」

タカミチの戦闘の構え、あくまで自然体にポケットに手を入れた構えを取り言う。

「こっちもＯＫだ」

対する朱然も鏡写しの様に、タカミチと同じポケットに手を入れた構えを取って言う。

そして、お互いが準備を終えた意を見た学園長が改めてルールを言う。

「ルールは単純じゃ……どちらかが戦闘不能、ギブアップで終わりでいいじゃろ。
武器の使用と魔法の使用、特に強力な技は使用禁止じゃ、では……始めッ！！」

学園長の鋭い声での開始の合図で2人の姿が文字通り消えた。

二人が対峙していた中心で何かがぶつかり合っている音だけが響く。

空気の弾ける様な音。

タカミチの師匠であるガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグが得意とした居合拳。

その応酬が、目にも止まらぬ程の速度で瞬動を行いながら繰り出されている。

瞬動、クイックムーブ、縮地など様々な呼び方があり、行うものの技量で速度もキレも変わるものだが、この二人の瞬動の練度は群を抜いていた。

それこそ最強の代名詞である紅き翼に所属しているだけあって、2人の瞬動は速さ、キレ、入り、抜き、全てがトップクラスに匹敵している。

未熟な魔法生徒には全く瞳に映る事無く、空気の弾ける音のみが耳に届く。

熟練した魔法先生達の眼ですら瞬動後のワンステップ時に辛うじて姿を見る事が出来る速さ。

その更に上の実力を持つ、真名、刹那、刀子、ガンドルフィーニ、瀬流彦、弐集院、明石教授、神多羅木、シャークティの9人はやっと目で追える速さだ。

学園最強クラスである学園長と封印されているとはいえ年季の違うエヴァンジェリンのみが戦闘の内容を完全に見れている。

戦況は朱然の有利であり、タカミチが何とか根性で耐えている、といった所。

そもそも、お互いが殺す気で行けばスペック、戦闘経験、武器、技、魔法で圧倒的に上回る朱然がタカミチを殺す。

何とか今の状況が保っていられるのは、ギャラリーが居て被害を考慮した朱然が本気を出せない事とタカミチと同じ土俵……つまり居合拳で戦っているからである。

全くどうでもよい場所、被害を気にしなくてもよい場所でなら既に周りには無数クレーターが大量生産され、所々に煙が上がっている事だろう。
手段を択ばなければ、もしかすれば最初の一撃でタカミチを倒してしまっているかもしれない。
だが朱然はそれをしない。
同じ技でタカミチを追い詰めてゆく。

「く……ッ！　やはり同じ技を使えるんですね！」

朱然の居合拳を自らの居合拳で相殺しながら言う。

「ああ……ガトウから見て盗んだ」

嘘である。
朱然のそれは知識として知っていたものを鍛錬によって覚えた物。
唯、身近に知識の元である無音拳のガトウという使い手が居て、知識が無ければ覚えなかったからそういう事にしている。

「当時のガトウと同等……いや、ガトウ以上くらいにはなれた様だな？」

「ええ！　正に死に物狂いで修行しましたから……ッ！」

タカミチが焦りにも似た表情をしているのに対し、朱然は静かで涼しげに言う。

「昔は貴方達の背中ばかりを見て来ましたよ……この歳になるまで死に物狂いで修行して、背中ぐらいは見えたかと思っていましたけど、ッ！

とんだ思い上がりだったみたいですね……ッ、貴方達の居る場所はッ、尚高く、険しく、それでいて……まだ、遠いッ！」

瞬動の早さも今一歩、朱然に及ばないタカミチは居合拳の限界射程距離である遠距離（ロングレンジ）より更に接近し、何とか近距離（ショートレンジ）と中距離（ミドルレンジ）の中間に喰らいついていた。

開始直後、タカミチは先手必勝とばかりに遠慮無く居合拳を放った。

倒せはしなくとも、もしかすれば隙くらいは出来るかと思っていたのだが……それは間違いだった。

同じ技の筈なのに朱然の居合拳が自分の居合拳を恐るべきスピードと静かさを以て弾き飛ばし、向かってきたのだ。

慌てながらも更に2発、その貫通してきた朱然の居合拳に居合拳を浴びせる事でやっと相殺する事が出来た。

その後も驚かされるばかりだった。

その直後、様子見は澄んだか？とでも言う様に、タカミチの3倍の強さの居合拳が自分の放てる居合拳のゆうに2倍を超える数で襲い掛かって来たのだ。

ポケットの隙間に余裕があるスラックスを穿いている自分でも、この数がこれで精一杯なのに、ジーパンという殆ど隙間のないポケットで繰り出している事が驚きに値する。

自分がもし、ジーパンで居合拳を使ったのなら拳を引っかけるか、ポケットを引き千切る事になるだろう。

しかも、そればかりではない。

タカミチの直線一辺倒の軌道とは違い、地形や居合拳同士をぶつけ合っての兆弾、障壁貫通付与の物や途中で弾け、バラける物。

あげくの果てには後から来た居合拳が先行していた居合拳と合わさり、更に強力になるというバリエーションの豊富さだ。

師匠でも此処まで器用に様々な特性を持つ居合拳を織り交ぜながら複雑な軌道を描かせるのは至難の技だろう。

何より舌を巻くのはその命中精度だ。
ギャラリーには一発たりとも誤射が無い。
まるで動きを読まれているか、もしくは自らの辿るべき流れが見えているかのように狙ってくる。
今はなんとか避け、相殺しながら辛うじて弾幕の少ない近距離（ショートレンジ）と中距離（ミドルレンジ）の間に追随している。
だが、このままいけばジリ貧だろう……そう考えたタカミチは遠くで捌く事に精一杯になるのならと自らの技を捨てて突っ込んだのだ。
だが、それすらも織り込み済みと言わんばかりに移動先に居合拳が叩き込まれた。
タカミチはそれを両手でガードし、長年エヴァのダイオラマ魔法球で鍛えた、もう一つの武器であるタフネスを武器に前へ進む。
何度も何度も弾き返されそうになりながら前に進み……至近距離（クロスレンジ）へ辿りついた。
それと同時に咸卦法が解けてしまう。
それでも唯、前へ……僅かな勇気を胸に秘め、踏み込んだ。

そして――――

「オオォォォォォッ！！」

タカミチの実力的にも、人柄的にも、最初で最後かもしれない雄叫びをあげながら、タカミチは朱然に気で強化した己の一撃を叩き込む事に成功した。

朱然はそんなタカミチに対して微笑む。

「見事……約束通り、俺の事は水仙と呼んでくれても構わない。それと、どんな姿であっても敬語なんかは使わなくていい。あの大戦で付いて回っていたチビッ子が、よく此処まで辿りついたな？」

広場の中央で朱然の腹部に拳を叩きつけている状態で二人の姿が現れた。

朱然の浮かべていたその微笑みは、かつての紅き翼の仲間達……ナギ、ラカン、詠春、アル、ゼクト等が対等の者へ向ける表情に変わっていた。

「やっと認めてもらえた気がするよ水仙。　僕は……やっと、貴方達の仲間に……」

この場に居た者達はこの状態を見て、タカミチが勝ったと思った事だろう。

だが――――――

タカミチはその状態から倒れ伏した。
己のタフネスを武器に被弾を覚悟で一撃を当てに来たタカミチには、計３８発の居合拳が全身に当っていた。
並みの魔法使いなら、喰らった事にすら気付かず一撃で昏倒させられる威力を喰らって、だ。
朱然は意識を持っているかも怪しいのにも拘らず、タカミチに言葉を投げかける。

「……タカミチ、お前は勘違いしてるよ……お前は仲間になったんじゃない。
確かに俺はお前に真名を呼ばせなかったとはいえ、お前は疾うの昔から俺達、紅き翼の仲間と認められていたんだからな……？」

朱然は倒れているタカミチを見つめる。
そして、学園長が口を開く。

「勝負あり！　勝者、朱然！」

勝者は朱然だった。
周りの者達は、派手な技の応酬などが無かった故に……殆どの者達が未熟だったから故に試合内容が殆どが理解できずにいた。
辛うじて試合内容を知る腕の立つ者達は、タカミチと同じ土俵で勝ってしまった朱然に対して畏怖を感じていた。
あのタカミチが同じ土俵で且つ、全力を以て一撃を当てる事に全ての力を擲(なげう)ったという事実にだ。
この学園の中で最強と言っていい実力を持つタカミチが全力を尽くして、たった一撃を当てるのが限界だったという事……しかも当たったにも拘らず、大してダメージを受けていないという事、最後

にあの化け物……バグとも言える強さを持つ大戦の英雄が本気になったのなら、どれ程の怪物になるのか、と。

完全に試合内容を見ていた2人は始めから知っていたからか、それ程騒ぎ立てる様な事でも無いと思ったのか口を噤んでいる。

しかし、大概の者はこう思っていた。

己達の最強と信じて疑わなかった英雄が、こうも簡単に倒されるとは……と。

その所為か、静けさだけがこの広場を支配していた。

第１３翼　ＶＳタカミチ、認め笑う紫の麗人（後書き）

頑張って書いてみました。
どうだったでしょうか？

最近、誤字を指摘される事が多いので気をつけてみたのですが・・・・・自信が無いでござる。

明日からちょっと実家に帰省するので短くとも2～3日は更新できません。
ご了承の程をノシ

第１４翼　説教と開店、ツンデレ縛り？な紫の麗人（前書き）

やっとこ、マイハウスに戻ってきた今日この頃。
文明の利器ってスバラシイ！
しかし、実家に帰る為に今週末全てバイトとか無いわぁ・・・・・・。
そんなこんなで次回も少し更新が遅れる可能性が・・・・・・申し訳ない・・・・・・。

第１４翼　説教と開店、ツンデレ縛り？な紫の麗人

タカミチとの戦いから一日明けて、俺はまた学校に登校していた。
その一時間目。
つつがなく授業が進んでいく。
因みにエヴァと茶々丸はサボり。

「Ｔｈｅ　ｆａｌｌ　ｏｒ　Ｊａｓｏｎ　ｔｈｅ　ｆｌｏｗｅｒ．
Ｓｐｒｉｎｇ　ｃａｍｅ．　Ｊａｓｏｎ　ｔｈｅ　ｆｌｏｗｅｒ
ｗａｓ　ｂｏｒｎ　ｏｎ　ａ　ｔａｌｌ　ｔｒｅｅ．
Ｈｕｎｄｒｅｄｓ　ｏｆ　ｆｌｏｗｅｒｓ　ｗｅｒｅ　ｂｏｒｎ
ｏｎ　ｔｈｅ　ｔｒｅｅ．　Ｔｈｅｙ　ｗｅｒｅ　ａｌｌ　ｆｒ
ｉｅｎｄｓ．」

淀みない発音で教科書を読むネギ。

まあ、当然と言えば当然だが。

「今の所を誰かに訳してもらおうかなぁ……えーっと……」

ネギが周りを見渡すが、視線を向けた先々で顔を背けられる。
その視線がこちらまで来て、俺と目があった。

「じゃあ、ルノーさん――――――じゃなくてアスナさん！」

「何で私に当てるのよッ！！　ルノーさんになりかけたじゃない？！」

某オカルトな学院の理事長並みの眼力で、俺を当てるなんていい

度胸だな？という感じで睨むと、ネギは急遽目標を変えた。

そんなんで良いのか？

それに対して明日菜はネギの胸倉を掴み掛けたが、委員長の挑発で渋々翻訳を始める。

しかし、記憶を封印している術式の所為か、幼少の頃に会った明晰さは薄れ、勉強が苦手になったというか、記憶力が若干落ちて人並み以下になってしまっている為にチグハグな翻訳になってしまう。

「アスナさん英語駄目なんで――――――」

ネギが言い終える前に俺は席を立っていた。

教室中の視線が俺に集まる。

そして、俺はその視線を無視し、教室を出て行く。

「ど、何所行くんですかッ？！」

ネギが慌てて俺に問いかける。

「貴方に教えてもらう事が無い、という事がわかったから出て行くのよ。　前にも言ったわよね？

その内、自分の授業で質問に答えられない人が居た時に、貴女は英語苦手なんですねぇ～、なんて言い出すって。

正に今、私がこうして話していなければ貴方はそう言っていた。

一生懸命にわからない事を答えようと努力した人に、あんまりの仕打ちじゃないかしら？

それとも弱い者イジメがしたいの？　そんな事、先生以前に人として恥ずかしいと思うのだけれど？」

俺はそう言い残し、教室を出た。
そのまま廊下を出た所でネギが飛び出してきた。
クラスメイトは空気を読んだか、ネギの自習してくれと言う事でも言われて大人しくそれを聞いているかしているからか、珍しく聞き耳を立てている者も居ない様だ。

「待ってくださッ？！」

ネギの呼び止める声が途切れる。
それもその筈、今のネギは某、吸血鬼を救うべく命を差し出した少年の様に口を閉じる事が出来ないし、喋れない。
逆に俺も俺で某蟹に行き遭った少女のように、左手にホッチキス、右手にカッターナイフを持ち、ネギの口の中に突っ込んでいる。
何故、文房具を仕込んでいるのか？と問われれば、学校で持っていてもそれほど不審に思われないからだ。

まあ、数が数だけに良い訳に一工夫必要だけど……殺傷能力に関しては気で強化すれば上がるから十分だろう。

「私に付き纏わないでくれるかしら？　別に私は大学卒業の資格は持っているから、そもそも学校に通う意味も無いの。
貴方のちっぽけな正義感やプライドや価値観を私に強要しないでくれるかしら？
私には貴方の修行なんて関係ないし、さっきの事を事前にピンポイントで警告したにも関わらず言った。
前に言ったわよ？　失望させない様に、と……心底失望したわ。
今後、貴方が関わる全ての授業とホームルームは全て欠席させてもらうわ。
貴方が自分自身の体裁が気になるというのならご心配なく。
学園長には私個人の事情で貴方の授業を休んでも問題無い様に許

可も貰ってあげる。
もし顔を合わせてしまっても私に対して沈黙と無関心を実践してね？」

俺は不敵に笑い、ネギが呆然としていた隙にホッチキスとカッターナイフを袖内にしまって、そのまま身を翻し、時間を潰す為に学校を出ようと階段を下りきった時だった。
パタパタと軽い足音が響いて、一階と二階の中間の場所に肩で息を切らしたネギが現れた。
俺は振り返る。

そのまんまなシチュエーションに俺は溜息を吐きたくなる。
違うのは学校の構造の違いと夕方ではない事、それに配置されている役者の違いだけだろう。

俺はそんな事を思いながら、それを呑み込んで今一度、問い返す。

「さっきのは警告のつもりだったのだけれど？」

わざと冷たく……それでいて怜悧な視線を向けてネギの心を威圧する。

「もう一度……もう一度、僕にチャンスをくれませんか？！」

その威圧を受けながらも懸命に言うネギ。

「断る、と言ったらどうするの？　たかが担任、という他人が私に干渉しないでくれるかしら？
ネギ・スプリングフィールド？」

今回はフルネームで……しかも呼び捨てで問いかけるという、ネギ個人に対する問いだ。

それと同時に、更に威圧する為、俺は何所からともなく取り出した無数の文房具で武装する。

唯の文房具の筈なのに、必要以上の数を一斉に両手に持つと、それは異様に映るものなのだ。

「貴方と私の意思は全く逆方向を向いている……つまり、敵対するという事で良いのかしら？

貴方が退けば、このまま何事も無く終わり。

でも飽くまで私の意思に反して、私に授業を受けさせたいのなら……戦争をする事になるわ。

たった二人っきりの戦争を」

階段の一段目を、わざと音をたてて片足を乗せる。

これもネギに心理的動揺を与える為の演出。

「……ッ！！　戦争はしません！」

短い悲鳴を漏らすネギ。

どうやら演出は上手く作用している様だ。

「しないの？」

わかっていてわざと訊く。

それに対し、ネギは俯いた。

「ルノーさんの言ってくれた様に、僕は子供です……僕みたいな子供に教えられるのは確かに得られる物も少ないかもしれません……」

俯いたままのネギの表情は影になっていて、よく見えない。

「なら――――――」

もう少しで折れるか？

そう思って、もうひと押しをする為に口を開いた所でネギがそれ以上の声で言った。

「それでも！　ルノーさんは僕の生徒ですッ！！　他人じゃありません！」

ネギは言い放つ……全く筋の通っていない事を。

「……まったく筋が通っていないわ。　生徒だから何？　貴方は私とは血の繋がりも何もない。

家族でも無い、夫婦でも無い、恋人でも無い、親友でも無い、今はもう貴方の生徒である事すら私は否定している。

今の貴方と私の関係を言い表すのなら……そうね、知り合いとか顔見知り以下。

日数で言えばたかだか２日程度、時間にしてみれば約１０時間にも満たない関係よ？」

ネギの論を真っ向から潰す。

「で、でも……ッ！！　学校は友達もできますし――――――」

「友達と遊びに来るのなら、さっき言った様にネギ・スプリングフィールドに関わる全ての授業に出ずに学校には来る、と言っているわ。
その中で適当に仲の良いお友達を見つけるわよ」
完膚無きまでに自信を削ぎ落す。
「でも、単位が足りなくなります――――」
「始めに言ったわ……私は頼まれてこの学校に来ているだけだって。そして、学園長自身にそれを認めさせる事はそれ程難しくもないの……私にとってはね？
ネギ・スプリングフィールドの受け持っている担当教科は英語でしょう？
私も特に語学に関しては得意で、メジャーなものは殆ど話せるマルチリンガルだから教えてもらう必要も無いわ。
テストを受ければ満点を取るのもそう難しい事じゃない……最後にもう一度だけ言うけれど、義務教育なんてものは昔に終わっているのよ、私にとっては……」
ネギが涙ぐみ始める。
「はぁ……だから言ったわ……泣くくらいなら始めから来ないで帰ればいいと」
その言葉でネギは精神的にボロボロだろう。
現に、今ネギは床に両手を着いて、ポロポロと涙を流しているのだから。

「……」

俺はその姿を静かに見る。
手を差し伸べるでもなく、ましてや励ましもしない。
五分程、そうしていただろうか？
俺はそろそろ立ち去ろうと玄関の方へ踵を向けた。

「……す」

そこで、ネギが何かを呟いた。

否、それは呟きではなく、俺に向けられた言葉だ。

「……お願いします」

「聞こえないわ」

「僕の授業に出てください、お願いします」

それはプライドも何もかなぐり捨てたお願いだった。

その願いを聞いて一番最初に思ったのは――――

……俺はおもし蟹じゃねーっての。

――――だった。

俺はそれを聞いて、もう一度チャンスを与える事にした。

なにせ俺は蟹でもなければ鬼でもないしね。

そして、文房具を全て瞬時に仕舞い、ネギを置いたまま教室に戻り、その更に数分後、両目を泣き腫らしたネギが現れ、黙々と授業をこなした。
教室の空気はすこぶる重く、委員長他数名のネギに好意を寄せている者達から敵意の視線を感じたが、当然スルーした。
別に嫌われてもどうでもいい事だし。

次の日、チャンスをあげたにも関わらず、その翌日に惚れ薬事件を起こすのだから救われない。
ネギに偶々偶然に遭遇して危うくフラッといきかけたが、一応の用心の為に小瓶に入れていた魔法薬をすぐ呑み込み、ネギの騒動には巻き込まれずに済んだ。
いつか倍返ししようと思う。
というか、早くもチャンスを潰したからネギの授業は全部サボる事にした。

アホめ……。

惚れ薬事件後は特筆して変わった事は無く過ぎ、俺は今日やっと開店できる自分の店を外から眺めていた。

看板には『Ｓｃａｒｌｅｔ』の文字。
朱然の朱を英語読みにして、そのまま持ってきただけだけどね。
紅という意味もあるが、紅き翼の朱と言う事にでもしておけば良いだろうし。
外観は前に入っていた店が書店だったらしく古い石造りで縦長な建物だ。
上は三階まであり、１階がカウンター。
２階は工房。
３階は寮に帰るのが面倒になったら泊まる為の部屋。
１階には本棚が多数配置されたままだったので、そのまま俺の蔵書を突っ込んだ。
本屋と間違えられそうだが、表向きは料金次第で何でも仕入れるし、作ったりもする雑貨屋。
でもって本棚の中でカウンター脇の小さな本棚に１冊だけ入っている魔導書を此方まで持ってくれば裏の店。
つまりは魔法関連のマジックアイテム、特注品等がある地下への入口にご招待といったシステムだ。
一般人が偶然に手に取らない様な認識阻害魔法を掛けておいたので無いとは思うが、それでも手に取る一般人が居るとしたらそれは……運命とでも思って魔法を教えるかもしれないけどね。
前の集会の時にそのシステムは言っておいたので追々客は来るだろう。
と、説明は此処までだ。

俺は中に入る。
内装は外観とそう変わらず石造り。
でもって、すごい怪しい雰囲気が漂っている。
黄昏時の放課後なんて余計だし、夜には夜でランプの火しか照らすモノが無い。
もっとも地下は魔法の光で満ち満ちているので、とても明るいが。

俺は入ってすぐ、カウンターに入りながらクルス大人バージョンに代わる。

背は１７５センチ程、身体はスレンダーボディィになり、髪は金髪のセミロング、釣り目で瞳も金色に変わる。

服もダメージの入ったジーパンとあまり高くないヒールのあるブーツ、黒のタンクトップに変化する。

雰囲気で言えば、何所か攻撃的な雰囲気を感じる容姿だ。

そのまま壁に掛かっているエプロンに手を伸ばして着用し、カウンターに座る。

それと同時に店の扉が開いて龍宮が現れた。

「こんにちわ、朱然さんは居るかい？」

カウンターに近づき、本棚から魔導書を引き抜き俺の前に置く。

「先程振り、朱然は私……付いて来なさい」

俺は素っ気なく言いながら魔導書を棚に戻し、地下への隠し階段を教える。

「何というか……完全に別人の様に見えるな」

「別にどうでもいいでしょ？　さ、着いたわ」

俺はそう言って先を促す。

おお、と驚き、目を見開きながら龍宮が銃関係のコーナーに進む。

「これは全て本物なのかな？」

「ええ、私が構造を解析して、それをそのままカスタムして作った一点物。
興味があるのなら此処の下に射撃場があるから試射してくればいいわ。
材料と料金さえ払ってくれるなら、客の要望通りにどんな物でも作ってみせる……この世の理を曲げる様な物以外はね」

「ほう……それは実に魅力的だな。早速、この銃を試射してみたいんだが……やっぱり金は掛かるのかい？」

チャキッ！と構えたのはＰＧＭ　ヘカートＩＩというアンチマテリアルライフルだった。
詳しく知りたい人は自分で調べてね☆

「別にいらないし、好きなだけ試射して良いわ。唯、勘違いしないで……開店記念で貴女が初めての客だからよ。
２回目の来店からは、きっちり2割引きの値段で払ってもらう」

「気前が良い所の話じゃないな？
私の事は真名と名前で呼んでくれ、しばらく世話になりそうな気がするし、何より二割引きのまま、と言うのも少し気が引けるからな」

俺達は更に１階降りて来た。
そこは唯の広い空間だ。

「何もない場所の様だけど？」

「魔法の試射とか、アーティファクトの効力発動とかの多目的用でもあるし、特に頑丈で広さも十二分に取ってある。
なにより――――あらゆる状況を作り出す、私特製のとっておきの空間よ」

俺が指パッチンをすると俺の思い描いた場所に変わる。
今回は市街地屋上。
ターゲットも臨場感を出す為に精霊を使って編んだ人型を4体と陰陽術の人型を3体放し、建物を縫う様に動き回っている。

「ほう……じゃあ、早速……」

真名は早速、ＰＧＭ　ヘカートＩＩを設置し、インサイトして一射。
引き金を引くと同時に凄まじい反動があるのだが、それをものともしていない。
精霊デコイを見事ヘッドショットし、ボルトアクションなので空薬莢を排出、次弾を装填。
今度は式紙にヘッドショット。

「うん、良い銃だ」

「そう……ならコッチの弾も試してみる？」

俺はそう言って、弾倉を渡す。

「これは……？」

それは特に変哲もない弾倉。

だが中身が違うのだよ……中身がね。

「魔法の弾が込めてある魔法弾。　撃てばその中に圧縮処理された術式が解凍、実行されて圧縮されている魔法が発射される。
この弾倉には色々詰めてみた。　安全は１００％保証済み」

「ふぅん……あの不格好で携帯に向かない魔法銃で特定の……それも低級からギリギリ中級までの魔法のみを撃つ、というのはあったけど……実銃はどんなに大口径な弾でも術式を書き込む為には弾丸自体が小さすぎる為とコスト、生成の手間暇の関係で出来なかったと聞いていたけど？」

「今は作る側の事なんてどうでもいい事。
使う側としては、お手頃な値段で性能が良いか悪いか、安全は保証されているかの三点ぐらいのものでしょ？
欲を言えば、その全てが揃っているのなら尚良し、とか？
とにかく撃ってみればわかる。　１発目は魔法の射手（サギタ・マギカ）の戒めの矢」

撃たれた銃弾は式紙に当り、捕縛の効果を与える。

「２発目は土属性の物理威力が上の下、巨岩の落石」

捕縛された式紙が銃身から生成された荒削りな岩石によって、捕縛していた近くにあるビルごと押し潰した。

「３発目は水属性の発動速度が中の上、水の飛剣」

水の斬撃が放たれ、最後の式紙が縦に断ち切られる。

「４発目は光属性の速さ、威力が上の中、輝の光芒」

一種類の属性による雷の暴風と同系統の魔法が、光芒の名の如く、尾を引く様に見える光の筋を残し、残りの二体を一直線にビルを貫いて直撃、消滅させた。

「流石……」

思わず、俺はそう漏らす。

初めての……しかも癖のあると言ってもいい魔法弾をほぼ完璧に使いこなしている。

「お褒めにあずかり光栄だ――――――」

ツンデレさーびーす。

「勘違いしないで、褒めたのは私の作った銃と弾丸の方よ……でも、少しはその腕も認めてあげなくもないわ」

「これは……巷で噂のツンデレと言うやつかな？」

思わず言ってしまった俺の言葉に、冷静に言う真名。

ちょっと、面白い反応を期待したがハズレた様だ……無念。

「取り敢えず、どうする？　買う？　買わない？」

「かなり気に入ったよ……魔法弾の方はもう少し時期を見て買おう。まずは銃本体の方を買いたい。　これ幾らだい？」

肩に担ぎながら言う真名。

「タダで良いわ」

「な?!　ほ、本当にそれで良いのかい?　所々カスタムしてある一点物なんだろ?」

驚く真名。

「勘違いしないでよ?　さっきも言ったけど開店1番目の客でそれから、これからも長い付き合いになるかも知れないからよ」

明後日の方を向きながら言う俺。

何故かこの姿になるとツンデレみたいな喋り方に……気にしたら負けか……。

「それと純粋な人間じゃない同士の交流程度の意味合いよ」

「……何所でそれを知ったんだい?　滅多に使わないし、最後に使ったのも5年程前だった筈だが?」

「私も特別良い魔眼を持っていて、それで知っただけ……あまり驚かないんだ、魔族のハーフさん?」

「フ……英雄とはいえ、貴方自身が言っただろう?　明確な敵ではないのに敵対しても意味は無い。

それに見た所、他人の秘密を喋る様な軽い口は持ってなさそうだし、何より金にならないからね。

じゃあ、この銃はありがたく使わせてもらうよ」

そう言って、真名はＰＧＭ　ヘカートＩＩを何所かへ仕舞って出て行った。

見た所、転移系魔法と空間干渉系魔法のオリジナル術式を用いた簡易倉庫か……ま、俺も使えるし目新しい術式でも無かったな。

今なら王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）の真似事が出来るぜ！

武器が刃だけが背後の空間に波紋を残す演出が、ネギま！の魔法陣に代わるけど。

というか必殺の威力を持っている宝具ないし、そんな必殺アーティファクトを作れても精々両手足の指の数程度しか作れないだろうから意味ないし、やらんけどね。

まあ、適当に作った刃物やらを突っ込んで物理的物量で押し切るみたいな感じで使うくらいだろうか？

適当に入れておけば良い牽制程度にはなるかもしれないけど、それも気を使えば似た様な事が出来てしまうし……本物の刃物の怖さを見せつけるだけ？

そもそも王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）は中身もセットじゃないとあまり使えない宝具だね！と思う今日この頃だった。

第１４翼　説教と開店、ツンデレ縛り？な紫の麗人（後書き）

と、今回は何となくツンデレ過多でお送りしました。
小説みたいに書いた方が良いのだろうか？
うーむ・・・・・まあ、気が乗った時で良いか！なんて思ってる作者です。
どうなんでしょうか？

原作のネギま！もそろそろクライマックスなのでしょうかねぇ～？
真名とザジが魔族だとは思いませんでした。
ザジ姉はなんか魔族のラスボスくらいには偉い人とか自分で言ってたけど、どうなんでしょうなぁ・・・・・・。
ネギのプランも気になるし・・・・・・。
この小説も原作と比較とか色々しながら書いて行く予定なので、余程ブッ飛んだ展開にはならないと思います。
作者が暴走して、あんまりにもあんまりな展開になったら指摘して頂ければ正気を取り戻す筈です。

さてさて、それは置いておいて、次回は一巻の寮の風呂の話が入る予定でござー。

こんなプロットも作らず、行き当たりばったり且つ、その場の勢いで書いている作品ですが、見捨てないでくださると嬉しいです。

第１５翼　弁解と風呂、測られる紫の麗人（前書き）

マズイマズイマズイ・・・・・・。
最近、全く執筆が進まない・・・・・・これは暑さの所為か？
それともスランプ？
まさかのマンネリ？

第１５翼　弁解と風呂、測られる紫の麗人

「あっはっはっはっは！」

エヴァ大爆笑。

「タカミチをお前が倒した後の奴らの顔が傑作だったんでなぁ！」

「ま、良い薬になったんじゃないの？」

今は普通の姿でエヴァと酒を飲みながら昔話をしたりしていて、ネタも尽きた所で昨日の夜のタカミチとの戦いの話しになったのだ。

茶々丸はオーバーホールだそうな。

普段なら茶々丸が止めるっぽいのだが、止める人……というかロボ？が居ないという事でエヴァが飲み過ぎた。

対面で座っていたはずが、いつの間にかジリジリと距離を詰められて首に腕を回され脱出不能状態だ。

その未発達な横乳が俺の左頬にグリグリと押しつけられてますよ？

でも俺は襲わない。

もうそんな年じゃないし……一度は結婚していた身だし。

「……」

不意にエヴァの笑いが止まった。

「で、詳しく聞いていなかったが何故あんな脂肪の塊満載で転校してくるんだ？　んん？」

「エヴァさん、く、首が締まってきてるんだけど？」

「答えなければこのまま締まっていくぞ？」

理不尽だ……横乳の感触が良い感じだなぁ……っとイカンイカン、煩悩退散煩悩退散。

人として転げ落ちてはいけない道に入りそうになった。

気を付けねば……むぅ、言い訳言い訳。

「全ては学園長の策略です」

取り敢えず、全ての責任をぬらりひょんの祖父になすりつける事にした。

嘘でも無いし。

「くッ！　お前も奴の所為で苦労したんだな……」

お前もって、登校地獄の呪いの事か？

……アレ？

俺の所為って気付いていないのか？

ナギの横で凄いドーゾドーゾとかやったのに？

「アイツを……あの狸爺を殺して自由を手に入れよう！！」

エヴァ様ご乱心？！

「あー……まあ、卒業くらいまで待とうよ」

「お前は爺の味方なのか……？」

エヴァが両手で俺の顔をロックする。

その瞳は悲しみに染まっている。

「ああ、いや、俺はエヴァの味方ですよ？」

「そうか！　そうだよなぁ！！　で、十五年もお預けを喰らった私は今から何をすると思う？」

そう言って俺を押し倒し始めるエヴァ。

え……お預け？

そんなまさか……いやいや、待て待て！？

イカンぞ？！

流石に年齢的には約６００歳と約１３０歳で何かもう色々とお互いに吹っ切れる様な歳だが、傍から見れば幼女ですよエヴァさん！？

俺はロリコンではないんだ！

確かにエヴァさんは美少……美幼女ではあるが！

「私が封印される前までお前の隣で寝てみたり、積極的にアプローチしていただろう？　私を襲いたくなってこないか？」

マウントを取りながらそんな事を言うエヴァ。

今の時点で襲っているのは貴女様なのですが……どうすれば諦める……そうだ！

何か諦めさせ、納得させられる理由を言えば！

「お、俺には子供こそ居なかったが、結婚していた！」

「お、おおぉぉぉ、お前ッ！？　この私をほったらかして他の女を襲うとは一体どういう了見だ？！
今すぐその女を八つ裂きにしてくれるッ！！」

言ったら物凄い目を吊り上げて激昂しなさった。

「あー、それは無理、もう亡くなってるから……」

自分で行って悲しくなった。

蓮華ぁ～、俺達良い夫婦だったよなぁ～！！

「なら問題は無い！！」

無いんですかッ？！

「そこは亡き妻に操をたてる事に納得するところ――――――」

「確かに他人が先に手を付けたのは気に入らんが、私は今更そんな些細な事は気にせん！」

「――――――俺はロリコンではない！」

魂の叫びだった。

「幻術を使っていればそれも解決だ！！」

ど、どうすれば？！

「さあ！　官能の支配する世界の扉を開こう！」

酒癖悪ッ？！

若干エヴァのキャラが壊れてる気がするぞ！

もう、絶対エヴァとは一緒に酒は飲まねぇ！！

ええい！！

なら――――――！

「確かに出合ってからエヴァは無防備だったし、襲うつもりならとっくに襲っていたさ！！」

「なら問題無いではないか！」

先程とはうって変わって、嬉々とした表情をするエヴァ。

「でも一点だけ！　そう……一点だけそうならない理由があったんだ！！」

これなら……成長できないからこそのコンプレックスを持っているエヴァにならこれで……！！

「ほう……言ってみろ」

「幻術を使っていない本物のエヴァの胸が無い」

――――――静寂

「……」

その事を言った瞬間、エヴァは沈黙した。

ん？

エヴァがプルプルと震えだしたぞ？

お？

何か効果あったっぽいし、これで何とか――――――

「おっ、おのれ、おのれというやつはァァァァッ！！？」

――――――ならなかった。

エヴァは凄まじい形相で俺をマウントしたまま、首を締めシェイクを始めた。

「ぐぅえぇぇえぇぇえぇッ！！」

死ぬ死ぬ死って！！

「乳か？！　やっぱり男は乳なのかッ？！　くそぅ、どいつもこいつもッ！！　うがぁぁぁぁぁッ！！」

あああああああああ、脳が揺れるぅぅぅぅぅ！！

「そもそも！

私のこの未成熟で未発達なこの無垢な体躯と魂を汚してやろうというドス黒い欲望や欲求は無いのか？！

そんな気概は無いのか貴様ぁぁぁぁぁッ！？

あんな無駄で、見かけだけの脂肪の飾りがそれほどまでに大事なのかぁぁぁぁぁッ！！？」

とエヴァが興奮していたのだが、いきなり糸の切れた人形の様に静かになり眠ってしまった。

「……ＺＺＺ」

恐らく過剰に摂取したアルコールが、さっきの大騒ぎでの運動で身体に回って睡魔が襲ったのだろう。

「……ストレス溜まってんのかな？」

そりゃ当然か……手紙を出していたとはいえ、十五年だもんなぁ……だが、流石に行為に及んではいかんだろう、と理性がねぇ……チキンだというのなら言うがいいさ！

俺は結婚もしたし、ハーレムみたいな状況になった事もあるし、経験も豊富なくらいにはあるがそれを何回もやれる程、図太くないんだいッ！

最近、全くご無沙汰だけどな！

……蓮華達には俺が中々一線を越えなかった所為で色々と迷惑をかけたし、説教も喰らった。

――――何をそんなに恐れているの？

――――別に……。

――――話してくれなくては何もわからないわ！

俺はそんなある日の蓮華との問答を思い出しかけ、頭を振って強引に記憶の戸の中に仕舞い込んだ。
そして、エヴァを起こさない様に静かに抱き上げ、お姫様抱っこしてベットへ寝かせてエヴァの家をそっと後にした。

その後、俺は寮の部屋で一人悠々と読書をしてクールダウンしていた。
ふと時計を見るとかなり遅い時間だったので準備をして大浴場へ向かった。
大浴場は寮の中にあるが、もう夜も遅い時間だったお陰で貸し切り状態だ。
俺は元の姿に戻って風呂を堪能する。

「ああ〜、極楽極楽ぅ〜」

それから十五分くらい経ったくらいだろうか。

「あっ！　やめっ、駄目です――――――！」

「何、恥ずかしがってんのよガキのくせ、にッ！」

その声が入口からいきなりしたと思ったら、入口に背を向けていた俺を飛び越え、そのまま俺の眼前にネギが落ちてきた。
俺は瞬時にルーデシアモードに変わってバスタオルを巻いた。

「あ、ルノーさん！　ゴメン！　今の時間に人が入ってるとは思わ

なくて」

「別に気にしていないわ……唯、思い込みで行動するのは危険じゃないかしら？」

「そ、そうね……ごめんなさい」

シュンとする明日菜。

「ガボガボ！！」

「あっ！　いっけない！　そのお風呂ってネギの身長じゃ顔を出すのがやっとの深さだった！」

「ふぅ……本当に考えなしな行動は慎んだ方が良いんじゃないかしら？」

「重ね重ねごめんなさい……」

俺は明日菜に注意をしながら、溺れかけているネギを助けようと近づいた所で――――――

――――――グニャ

思いっきり胸を掴まれた。

痛てててて！！

この野菜め！

パニックに陥った人間の馬鹿力＋魔法で身体能力を強化してやがるから１０歳のガキの握力じゃねぇ！

胸が潰れるわ！
もっと優しく掴め！
いや、やっぱり掴むな！
これは立派なセクハラだ！
因みに俺は女形態で胸を掴まれたからって変な声は出さないし、喘ぎもしないぞ？
言ったら……もう、戻れない様な気がするんだ……。

更に掴む物が見つかったからか、そのまま抱きついてきた。

コイツ……マジで今の内に殺しておいた方がいい気がしてきた……。

朱然はそのままネギを殺した！

麻帆良学園が敵に周ったが宝具で鎮圧した。

それから朱然は世界を敵に回し、地球を滅ぼしたのだった。

魔法先生ネギま！完！

は？！

なんかありえたかもしれない結末を見てしまった……でも、俺は殺さない……こっちの邪魔をしたら……。

仕方が無いので俺はそのままネギを抱きしめる形で湯船から出た。

「なッ！？」

その光景に明日菜が驚愕する。

それもその筈、溺れる者は藁にも縋るを実践したネギは俺の……正確にはルーデシアモードの時の巨乳の谷間に頭が挟まっている状態で出てきたのだ。

正に今のネギは精神的な天国と肉体的な地獄を高速往復しているだろう。

と、解説もそこそこにネギを放さねば、天国の様な地獄で窒息死してしまう。

幾ら嫌いでも主人公を殺してしまうのは頂けないので、俺はネギをポイッと放した。

「全く……仮にも英国紳士を気取るなら溺れてパニックになって居たとはいえ、女性の胸の谷間に顔を埋めるよりも死を選ぶ、くらい実践するのが紳士の嗜みでしょうに？」

「いや、流石にそれはどうかと思うわ……」

アホの子である明日菜に突っ込まれた。

で、これからもうちょっと風呂に入るか、それとも出るかを考えていた所で２－Ａの連中がやってきた。

「あら、ルノーさんじゃありませんの」

「こんばんわ、雪広さん」

まあ、もうちょっと風呂を楽しむとしますかね。

決してエロが目的ではないぞ？

因みに明日菜とネギはさっさと隠れた。

で、委員長がネギの相部屋の話をし始め、何故か胸の大きな人の部屋にネギが貰えるという話になり、胸の大きさを比べる事になった。

もちろん俺も参加する事に……俺の正体を知っている刹那、美空はタオルできっちりガードしていて、エヴァと真名は知っている筈なのにタオル未着用。

まあ所謂、乳比べ……男なのに乳比べとはこれいかに？

てかエヴァ、復活早いな……。

「何故、男の貴方がここにいるのですか？」

鋭い視線を向ける刹那。

「お風呂は広い方が気持ちが良いじゃない？　それに今はきちんと女よ」

「そういう問題では――――」

「まあ、いいじゃないか」

「――――龍宮！　お前は前を隠せ、前をッ！」

刹那が喰って掛ろうとした所で、刹那の肩に手を置き止める真名。

「ふん……っ、貴様は貴様で隠すだけの胸も無いだろうに」

「それは貴女だって同じでしょうッ？！」

エヴァの無い乳発言に反発する刹那。

気にしているのか刹那よ？

「フ、最近の世の中では貴様の様な中途半端な大きさより、私の胸の方が需要があると聞くぞ？」

エヴァが無い胸を張る。

でもって、クラス全体がそれぞれ胸の大きさを比べ合っている時、明日菜とネギが脱出に失敗し見つかり、委員長が明日菜の水着に掴みかかった。

取っ組み合いの喧嘩になりかけた時だった。

明日菜の胸がそこそこに巨大化した。

しかし、原作の様に破裂しなかった。

「「「「「デカッ！！」」」」」

この時、クラスの心が一つになった。

が――――――

「ちょっと待った――――――！！」

朝倉のちょっと待ったが掛かった。

「皆、忘れていない？　我がクラスに驚異的なバストを持っている人が来た事を――――――！！」

その問いに対して、場にいる者達の視線が俺に注がれる。
思わず、胸を隠すという乙女チックな行動を取ってしまうが、クラスメイト達には逆に胸を強調した形に見えてしまう。

「９８センチだって言っていたけど……」

「な……ッ！？　今まで頂点に君臨していた、ちづ姉を四センチも上回って？！」

「明らかに今の明日菜さんの胸と同等の大きさ？！」

クラスメイトの驚愕が漏れる。

「はいはーい、と言う訳で保健委員の和泉亜子さんに測ってもらいましょー！」

と言う訳で測られた。

「改めて……勝者、ルーデシア・ルノーさん！！　何とバストサイズを１サイズ小さく言っていた――――――！！」

「「「「「な、何だってェェェェッ？！」」」」」

と、クラスメイトが暴動に陥りそうな勢いになりつつあった所で、野菜が魔法の重ねがけをしたのか明日菜のバストが巨大化を再開し、破裂。
混乱の内にお開きとなったのだった。

マジ野菜殺しちゃおうかな？

しかし、おかしいな……ひなた荘の時に、訳あって今くらいの時のルーデシア形態の時、中身は男だし、という理由でブラしてないのを言ったら、サラシではどうにもならんし、景太郎は着替えにも突撃してくるから、女の時はブラを付けろと女性陣が強引にランジェリーショップに連れていかれて測った時は９８だったんだが……因みに下着一式買わされた。

何であんな面積の少ない布であんなに高いんだか……まあ、往々にして女性の衣服は高いもんだけどさ……ってああ、そっか！

ネギが入ってきた時に急いで変身したから、変身の調整がズレて少し大人に近いバージョンになってたのか！

ヤベーヤベー、今度からは気をつけねば……。

そんな教訓を思い知った朱然だった。

第１５翼　弁解と風呂、測られる紫の麗人（後書き）

前編の方はちょっとエヴァと怪しい仲になりかけてみたり、懐かしの恋姫編のエンディング後のちょっとした問答を入れたりしたり。
後編は女子風呂に堂々といる朱然さんが野菜君に巻き込まれてみたり。
そんな話でした。
因みにエヴァは前半は酒によって朱然さんとの会話を忘れています。

メインヒロインは・・・・・誰だろう？
やっぱりエヴァかなぁ・・・・・？
後は武闘四天王とか木乃香とか茶々丸とか千雨とかでしょうか？

前書きに書きましたけど、執筆の速度が亀並みに落ちております。
なるべくこれ以上は落ちない様に努力はするつもりです。
たぶん、原作三巻くらい辺りに突入すれば執筆速度も上がるかも・・・・・。
ではこれにて失礼ノシ

第１６翼　道場破り、畏怖される紫の麗人（前書き）

もう、意識が・・・・・・。

第１６翼　道場破り、畏怖される紫の麗人

２－Ａ最強バストの称号を得て次の日。
俺は普通に授業（ネギの授業以外）を受けてノーラバージョンで店番をしていた。

ノーラバージョンの容姿を簡単に説明するならば――――――

身長１６０センチの白人系。
瞳は茶で眼鏡装備。
髪型は茶髪ロングのお姫様カット。

と言ったところだろうか。

容姿の事は置いておこう。

そう思った所で店のドアが開いた。

「ゆえー此処ー？」

「そうですよ、のどか」

「へぇ～、本屋だったんだ此処」

図書館三人組がいらっしゃった。

そういえばバカレンジャーが居残り授業を受けるのは今日だった

な……補習終わりに寄って来た感じだろうか？

「いらっしゃいませ～、ようこそ雑貨屋Ｓｃａｒｌｅｔへ～」

俺は柔和な対応をする。

「雑貨屋、ですか？　でもこの本棚は……？」

「これは店主の収まりきらない蔵書の一部ですね～。　この店は基本的に雑貨屋なのですよ～」

店主ってのはまあ、俺自身なんだけどもさ。

「そ、そうなんですか～」

「ええ、そうなんですよ～」

のどかが恐る恐るそう言い、俺はにこやかに返す。

「雑貨って何を売ってるんですか？」

「お金をもらえれば大抵の物は何でも買えますよ～。　材料とかがあれば尚良し、ですね～」

「何でもって……画材とかも？」

「ええ、お金さえ頂ければ……存在しないとか、この世の理を曲げた物とか、架空の物でなければ何でも揃えてみせますよ～？」

俺はニッコリと笑う。

「へぇ～、面白そう……ユエー、のどかー何か頼んで……って、こっちの二人は蔵書に夢中か……」

「心ゆくまで読んで構いませんよ～という所なんですけど、今日の所はそろそろ閉店なのですよ～。
ですから、読むのなら明日の開店時にいらっしゃってくださいな～」

「こんなに早い時間なのにお店締めちゃうんですか？」

「ええ、今日は……」

ふわりと俺は微笑む。
その笑みは可憐にして拒絶の微笑み。
それをハルナに感じ取らせる。

「あ、あはは……そうですか……ユエ、のどか、帰るよ！」

「もう少しだけー」

「もうちょっと待つです」

本に没頭しながら夕映、のどかがハルナにそう返す。

「駄目駄目、店員さんがもう駄目って言ってるんだしさー」

そうハルナが言い、二人を引き擦る様にして三人はそのまま帰って行った。
それを見届けた俺は店仕舞いをする。

店仕舞いといってもエプロンを壁にかけて戸締りするだけだけど。
さーて……そろそろ武闘系サークルに道場破りしてきますかね…
…。

俺はルーデシアに変わり、店を出て鍵を掛ける。

「それじゃあ、行きましょうか……」

俺が最初に向かったのは中国武術研究会だ。
そこには皆さんご存知の古菲さんがいらっしゃった。

「お！　やっと来たアルネ？」

「お邪魔するわ」

俺は遠慮無く修練場に入った。

周りには男、男、男。
むさ苦しい事、この上ない。
そして、何より……周りからの視線が煩わしい。

「菲部長！　新入部員ですか？！」

「女の新入部員なんて超さん以来じゃね？」

「中学生だよな多分？」

「しっかし……ゴクリ」

「ああ……あのボリュームは……」

「アタックしてみるか？」

「中学生だぞ？　このロリコン！」

とか聞こえる。

まあ、慣れたがね。

「さあ！　勝負アル！」

「ええ」

俺達は当然の様に対峙した。

「フェ、菲部長？！　何故、戦闘態勢を取ってるのですか？」

ガタイの良い、兄ちゃんが敬語で恐る恐る古菲に問う。

「道場破りだからアル！」

「だ、誰がですか？！」

「最近転校してきた私のクラスメイトで、今向かい合ってるルーデ

シア・ルノーアル！」

「ほ、本当ですかい？！　譲ちゃん、やめときな！　菲部長は強さの桁が違うんだ！
俺達が束になっても敵わないくらいなんだぞ？！」

周りの男共が似た様な事を言う。

「ご心配無く、私は彼女よりも強いですから」

俺がそう言うと「そ、そうかい？」と引き下がった。

冗談ではないという事が何となく伝わったのか？

「構えるアル！」

古菲は同じ側の掌と足を前に出し、後ろ足にやや体重を乗せた構えをとった。

これは確か……形意拳の型だったかな？

「どうしたアル？　さっさと構えるアルよ！」

古菲は俺を急かす。

だが、俺は――――――

「何故、構えをとらなくてはならないのかしら？　今日中に全ての武術系サークルを潰しに行くので早くかかって来て欲しいのだけれど？」

俺は当然の様に言った。

「……わかったアル。　後悔しても遅いアルよ？　崩拳！」

古菲の崩拳が俺の胸に直撃した。
その光景に周りがざわめく。
それはそうだろう、当たれば人を数十メートル単位で吹っ飛ばす拳を無防備に喰らった様に見えているのだから。

「？　？！」

俺は飽くまで構えず、自然体。
古菲の崩拳は確かに俺に当った。
だが、俺は倒れないし、吹き飛ばない。
唯、俺の足元から凄い音がする。
そう、俺は古菲の攻撃の衝撃を中国拳法で言う「化」で地面へ受け流したのだ。
古菲は更に続けて炮拳、鑽拳、劈拳、横拳と形意拳の五行拳を打ち込む。

「何故アル？！　化しているアルか？！」

古菲は距離を一旦、放して構える。
その額には一筋の冷や汗が伝う。

今の一方的な攻めを受けて全く動じていない事に対し、ようやく俺の力量を知り始めた、といった所だろうか？

「ええ、その通り……ただの化よ？

私は自分より格上の相手や、手段を選んでいられない時以外はなるべく相手の土俵で戦って勝つという事をポリシーにしているの。
私の化でどう受け流されたか……貴女はわかっているかしら？」

「全く……どの方向に化されて地面に向かっているのかすらわからなかったアル……」

「私がさっき構えない、と言ったのは構える必要性を感じないから。だって、構えたら次にどんな攻撃が来るのか大体の予想がついてしまうし、何より技の出が遅くなってしまうもの」

事も無げに言ってみる。

「恐ろしい事を平然と言うアルな」

「別に……至ってしまえば、この程度の事は難無く出来る事よ。年齢に限らずに、ね？
古菲さん、貴女は並々ならない才能があるわ。常人には収まりきらない程の格闘センスが……でも、その程度……今のままの修行じゃ、精々世界では中堅レベル程度にしかなれないと思うわ」

「……それはちょっと、聞き捨てならないアル」

古菲の声のトーンが一段落ちた。

ふむ、怒らせてしまったようだ。
でも俺の言った事は事実だ。
気を無自覚に垂れ流して使用している今のままならば、魔法世界の拳闘士レベルで苦戦するだろうし。

「時間も迫っているから、次の私の攻撃で意識を刈り取らせてもらうわ……さようなら」

俺は古菲が瞬きをした瞬間を狙って、軽やかに、滑らかに、滑る様に一瞬で距離を詰めた。

瞬動や気は使っていない。

これは唯の歩法だ……どんな歩法かというと、地面を蹴らないという物。

例を出して言うのなら、プロ野球で１５０キロ以上のボールを打ち返せるのは、一瞬だけある力を込める瞬間と投球フォームからの予測があるが故だ。

しかし、この歩法はそれを逆手に取って、己の力を抜きながら相手が力を込めていないのに進むという脳の認識を一瞬だけ誤認させる事ができる。

つまり一瞬だけある力を込める瞬間を予測出来ない。

更に無構えが加わる事によって、構えによる次の一手を予想する事が困難になり、結果として古菲は対応できず、俺の接近を許してしまうのだ。

そこから、古菲の技と同様の崩拳、炮拳、鑽拳、劈拳、横拳の五連撃を放つ！

同じなのは、技の型のみで同質ではない……洗練された質に昇華させた技へと変質させたのだ。

「ぐッ！！？」

古菲は崩拳、炮拳、鑽拳、劈拳までをギリギリで防御したが、最後の横拳が当たり、膝を突く。

「い、今のは……私と同じ……」

「あの程度の技、一度見ればほぼ自分のモノに出来るわ。二度、見れば盤石よ。
貴女の敗因は、私の力量を甘く見ていた事、技を見せた事、そしてなにより……私と相対した事がそもそもの敗因ね。
でも褒めてあげる。常人なら知覚も出来ずに意識を刈り取られている速度だったのにも拘らず、意識を保っている事に、ね？」

俺は膝を突いたままの古菲に背を向ける。

そう言えば、挨拶をしてなかったなと思い出し、振り返って――

――

「それでは御機嫌よう」

俺は中武研を後にした。

古菲を倒す必要はない。
去年の学園大格闘大会のウルティマホラ優勝者に膝を突かせただけでも十分に噂になるし。

さてさて、この退屈な学園生活もそれなりに楽しみますかね……。

そして、俺は一日で武闘系サークルを壊滅させた恐怖の人物として、広く知られるようになった。
特にデスメガネ並みの危険人物として……安易に髪の色と胸から連想したのか、灰銀巨乳の女子中生とか言う仇名を付けられ、顔を見た瞬間に逃げて行く人が増えた。
頭の悪そうな連中を〆た時に聞いたのだが、麻帆良学園中等部の灰銀長髪で規格外の巨乳を持つ女には近づくなという噂が流れてい

る様だ。
なので、更に去り際にＳｃａｒｌｅｔのバイトしてると言っておいた。
そこの店員（まあ、俺の変装だが）も強い事を宣伝してみたのだ。
姿が違う時に一々絡まれるのは面倒だったしね。
で、店に道場破りというか中武研以降の看板を奪った為に、看板を取り戻しに来た奴らをノしたりしてみた。
あまりに可哀想だったので看板は返したが、Ｓｃａｒｌｅｔには近づくな……あそこの店員は美男美女しかいないが、ある意味魔窟だと噂され、一時期売り上げが低迷した。
だが、趣味でやっている雑貨屋なので特に気にしなかったが。

そんなこんなで――――

本来の姿時に『男でなければ完璧超人な店長』の称号を手に入れた。
ルーデシア時に『灰銀巨乳の女子中生』の称号を手に入れた。
クルス時に『（胸の）残念な金髪ツンデレ』の称号を手に入れた。
ヤオ時に『颯爽と助けてくれる紳士』の称号を手に入れた。
ノーラ時に『何故か勝てない眼鏡美人』の称号を手に入れた。
武闘系サークルの連中が襲いかかって来る様になった。
古菲が襲いかかって来る様になった。
アホな男共が女バージョンの時に告白しに来るようになった。
男バージョン時に助けた女の子達に告白される様になって、それを見たエヴァに首を絞められる様になった。

アレ?!　デメリットが凄い増えた?!

そんなデメリットの中で、何時の間にか高校生とのドッチボール勝負の日になり、俺はエヴァと茶々丸の横で茶を飲みながらまった

りしていた。

第１６翼　道場破り、畏怖される紫の麗人（後書き）

今回はそれ程でもない内容になったような気がしてならないかも・・・・・。

次回は微妙に図書館島な話と、デンジャラスな朱然さんの交友関係のお話を書きたいと思いますです。

それではお休みなさいませ、ご主人様方・・・・・・ＺＺＺ

第１７翼　図書館島、微妙に巻き込まれる紫の麗人（前書き）

アクセス解析を見てみたら３２０万ＰＶ＆２５万ユニークを越えていた・・・・・。
この作品をこんなに読んでくれる人達が居る事にとても嬉しく思います。
本当にありがとうございます！

第１７翼　図書館島、微妙に巻き込まれる紫の麗人

皆さんこんばんは、ルーデシア・ルノー改め朱然義封です。
ただいま私は、図書館島地下に来ています。
ええ、この説明で何となくわかってくれる人も居るかもしれませんが、運悪く途中で巻き込まれたんですよ……あの薬味野菜共に……付き合う気も更々ないので、途中で逸(はぐ)れるつもりだけどさ。

３月某日の週末に、そういえばアルにまだ会って無かったので殴り込みでもしてやろうと思い立ったのがいけなかった。
夜の７時くらいの人気が引いた時間位に図書館島に行ったのも更に自体を悪化させた。
そして、更に１７８観覧室辺りで少し休憩していたのが運の尽きだった。

ワイワイと賑やかな声が聞こえてきて野菜とバカレンジャーと木乃香にエンカウントしたんだ……。

「あー！　ルノーさん！」「ほんまやー」「どうして、こんな所にいるのー？」「一人で此処まで来たですか？！」「ニンニン♪」「ルーデシアは頼りになるアル！」とバカレンジャー＆木乃香が俺を取り囲み――――

「なら、一緒に行きましょう！」「「「「「「賛成ー！！」」」」」」」とネギの提案でこうなった……。

野菜死ねばいいのに……あー、説明したら鬱になってきた。
何でガキ共のお守と野菜の尻拭いをせねばならんのだろうか……
もう放っておいて、アルの所に行こう、そうしよう！

そう自己完結を果たしている内に、あのメルキセデクの書の場所に辿りついてしまった。

「あれは！　伝説のメルキセデクの書ですよ?!」

オイオイ、あの野菜……普通にメルキセデクの書とか言っちゃったぞ?

「一番乗りアルー！！」

「やったー！！」

「これで最下位脱出よー！！」

って、一直線にバカレンジャー共が無警戒に接近していっただと?!

コイツ等、ホントに馬鹿だろ?!

という訳で――――――

「フォッフォッフォ、この本が欲しくば……」

「ワシの質問に答えるのじゃー、フォッフォッフォ！」

と、アホ学園長が石像共を使ってそんな事をのたまい、ツイスタ

ーゲームが始まった。

もう駄目だ……付き合いきれない……。

ツイスターゲームに夢中のネギ達を置いて、さっさとアルの場所に行こうと思い、この広間にはいってきた穴ではなく、反対側にある扉に向かったら――――――

ガシャンッ！！という音と共に、鉄の格子が勢いよく落ちてきて出られなくなった……しかも、その衝撃で入ってきた穴も潰れた。

そうかいそうかい……それほどまでに俺を巻き込みたいか……確か、あの石像を動かしている術式は動かす為のタイムタグを無くす為に触覚をリンクする筈だったなァ、ぬらりひょん？

半ばキレ始めていると後方で岩を砕く音が響いた。

「アスナのおさる――――――ッ！！？」

振り返ってみると、どうやらいつの間にかツイスターゲームが終わったらしく、明日菜達は奈落……もとい麻帆良図書館島最深部へと落ちていった。

好都合だ……これで大手を振って殺れる。

「で、このぬらりひょんはどう死にたいのかしら？」

「フォ？！　いきなりワシ、死亡フラグかの？！」

学園長ｉｎゴーレム'　ｓは動きを揃えて、慌て始めた。

俺は問答無用にハンマーを持っていた方のゴーレムを無影でバラバラにした。

「フォ――――――ッ!?　ぜ、全身がバラバラにされる感覚に襲われるワシ!?」

ふはははは!
全身がほぼ同時にバラバラにされて生きているという稀有な体験でのた打ち回れ!

「ま、待つんじゃ!!」

「コー……ホー……」

「なんかフォースの暗黒面に墜ちたっぽい呼吸音に?!」

さぁて、もう一回だ。

俺は腕を振り上げて無影を投擲しようとした所で――――――

「おやおや、騒がしいと思えば水仙ではないですか……」

アルビレオ・イマが現れた。

「あら、アルじゃない?　お久しぶりね?　因みに今の身体の時はルーデシアと名乗っているわ」

「そうですか……私は最近、食っちゃ寝ばかりで、現代社会でニートと呼ばれている職業についていますよ。
副業で此処の司書もしていますが、今はそうですね……クウネル・

サンダースとでも呼んでください」

司書が本業じゃないんですね……？！

ニートが本業とか……まあいいや、どうせアルだし……古本だし。

「久しぶりの再会の前に貴方の雇い主を殺ってしまおうと思うのだけれど、どうかしら？」

「相変わらず自分本意な人ですね貴方は？　それは良いのですが、貴女の人生を収集させて頂けませんか？」

フフフフ……と久しぶりに胡散臭さ全開なアル。

てか、学園長を殺っちゃう事は良いんですかそうですか。

「残念だけどお断りよ」

俺はきっぱりと断る。

自分の人生を覗き見られるのはゾッしないからな。

でも、アルのイノチノシヘンで記憶を見たらどうなるんだろ？

ちょっと気になる。

「それに随分とナギの息子であるネギ君の事が嫌いの様ですね？」

ハイ！

とっても大嫌いＤＥＡＴＨ☆

おっと、赤いマーダー死神の語尾が……自重自重。

「普通の女の子として暮らせるようになったアスナを巻き込むつもりよ？

詠春も木乃香ちゃんを魔法とは無関係な生活を送らせたいと言っていたわ。

ネギはあまりにも魔法に対して警戒心が薄いし、魔法がある日常が当たり前という生活を送っていた。

周りの人間達は英雄の息子として接し、性格が歪んだのでしょうね？

この時ネギに必要だったのはナギの事を教える事でも、持て囃す事でもなく、普通の子供として接する事だったのよ。

そして、ウェールズの学園長はネギの修行と未来のパートナーを決めさせる為、此処のぬらりひょんは孫を魔法の世界に引きづり込む為にネギの修行内容に細工をして呼び寄せた。

違う？　アスナはガトウの願い、木乃香は詠春の願い。　私は仲間内の願いを守れる限りは守るし、なるべく裏切らないわ。

その願いを愚かにも乱す者達が居れば誰だろうと容赦はしないし、いい加減ネギの行動は目に余るの。

周りはそれを大目に見過ぎるし、特別視し過ぎる……だから、その元凶であり、願いの妨げになる貴方は……即刻、死んでくれないかしら学園長？」

俺は怜悧にして、冷徹にして、冷酷な視線を学園長に向ける。

「……ワシは死んでやる訳にはいかん。　じゃが、ネギ君も紅き翼のナギの息子じゃ。

ならばネギ君を守るのも、君のその願いとやらに入るはずじゃないかのぅ？」

俺の言葉は傍から聞けば、そう聞こえるだろう。

だがあまりにもネギは歪み過ぎている。

いや……歪ませられてしまっている。

ならばその歪みを取り除かねば、いつかその歪みはネギ自身どこ

ろか、周りをも破滅させるだろう。
直接、ナギやアリカに頼まれたならいざ知らず、そんな奴を守るのは俺的にはアウトだ。
時限爆弾を守れと言われている様なものだからな。

何より一番気に入らないのは――――

「その上、エヴァをネギの踏み台にしようとしているわね？　エヴァを預けた者として断固そんな事はさせないわ」

「……」

学園長は無言。

図星だからだろう。

「私は貴方の様な目的の為に何でもする人間を軽蔑はしない……寧ろ好きな部類の人間よ。
情に訴える人間よりもわかりやすいし、目的が合致しているなら信用も出来るから。
貴方は他人を利用する……それは良い、でも貴方自身にリスクが無さ過ぎるのは頂けない。
人を殺していいのは殺される覚悟を決めた者だけ……つまり、貴方にも平等にリスクが無ければフェアではないし、許されない」

「物騒な考えじゃの？
他人を利用し、孫の為に魔法に関わるように画策し、ネギ君の為に色々と無理を押し通し、他にも色々と裏で動いておる。
故にワシは真っ当な最後を迎えられるとは思っとらん。　じゃが、これは必要な事じゃ。

木乃香、明日菜君、ネギ君は元より、そのクラスメイト達は皆、裏に携わる者や魔法の素質を持った者達じゃ。

いずれ時間が過ぎ、ネギ君と彼女達を呑み込むじゃろぅて……それが分かっているからこそ、お互いがお互いを助け合い、力を持たねば危険なのじゃよ。

ならばこそワシは恨まれようと譲れんのじゃ。　特にネギ君と明日菜君は出自の関係も相まっておるからのぅ……」

……どうやら本気の様だな。

「……わかったわ。　その覚悟に免じて此処は私が折れましょう……でも、努々(ゆめゆめ)忘れない事ね。

私は私の目的の為に行動し、立ち塞がる者がいるのであれば例え誰であろうと躊躇わないわ。

それが守るべき者であっても……これ以上、此処に居る意味は無くなったから帰るわ」

俺は未だ鉄格子がある扉に近づき、左手を鉄格子に沿え、気で吹き飛ばした。

俺は学園長入りゴーレム？とアルを残したまま図書館島を後にしたのだった。

それから休みを挟んで三日後。

期末試験が始まった。
バカレンジャー＋図書館組が遅刻し、別の教室で試験を受けさせられた。
その更に翌日、２－Ａがテストで学年トップになった。
学園長が全身包帯で現れたが、誰も突っ込まなかった。
因みに俺は全教科１００点を当然取った。
何せ大学を出て、中学生の問題だから当然だ。
ケアレスミスも無かったようで良かった。
そういえば最近、色んな手紙が来ていた。

テオドラ

久しぶりじゃな！
妾も猫を被りながら公務を頑張っておる。
春休み位には戻ってこられるのか？
春休みが無理でも夏休みには戻って来るのじゃ！
もし、こっちに戻ってきたら絶対の絶対に妾の所へ顔を出すのじゃぞ！
顔を出さなかったら承知せんからなッ！
っと、不味い！
侍女共が戻ってきおった！

テオドラ様、休憩終了のお時間で御座います。

ちょ、ちょっと待つのじゃ！
兎に角、帰るのか帰らんのか早急に返事を送るのじゃ！

真面目に仕事してる様で関心感心……あー、春休みどうしよう？
帰るべきか帰らざるべきか、それが問題だ……帰るのは夏休みかなぁ。

浦島景太郎

やあ、久しぶり！
僕は今、南アフリカの遺跡で発掘作業をしてるんだ！
此処にはパララケルス島にあった古代カメ王朝の壁画によく似たものを見つけたんだ！
でもドジって閉じ込められたり、巨大な岩が転がってきたり、閉じ込められて上から棘の付いた天井が迫ってきたり、落とし穴に落ちかけたりしたよ。
いやー、発掘してると新しい発見があって楽しいよ。
そういえば、中々帰れなくてなると喧嘩しちゃったんだよねー。
何か妙案とか無いかなー？
やっぱり、この前発掘した土偶とかをプレゼントしてみた方がいいのかな？

あー、今南アフリカに居るのか景太郎は……なるとは相変わらずな様で何よりだな……だが、女は土偶貰っても喜ばんぞ？

サラとかは喜びそうだがな。
てか、ものの見事にイ〇ディトラップにハマってんのか？
しかも手紙の筆跡がスゲーブレて読みにくいんだが……まあ、あのエヴァも驚く不死身と頑丈さとギャグ補正で死なんだろ。
それに最近、裏の話に日本人で白衣と眼鏡を装備した不死身の人物が、スコップ片手にアフリカを根城にしていた巨大魔法盗掘団を潰したとかいう噂が耳に入ったのだが、明らかにお前だろ！

フェイト・アーウェルンクス

やあ、今麻帆良学園に居るらしいね。
僕は相変わらず戦場を回って孤児達を君の孤児院に預けているよ。
僕の従者達も五人に増えた。
あまり僕の都合に巻き込みたくは無いんだけれど……しかし、君も大変だね？
麻帆良学園なんていう極東の島国でナギ・スプリングフィールドの息子のお守なんて。
近い内に僕も日本に行く予定が出来そうだから、会うかもね。
もし会ったら、敵対しない事を祈るよ。

敵地に手紙寄こすなよ……修学旅行編の為に日本に来るのだろうか？
まあ、いいか……こっちもこっちで相変わらず、戦災孤児を助けてんのか。
それだけ聞けば良い奴なんだがなぁ～。
まあ、世界滅ぼさん程度に暗躍してくれ……。

青山素子

師匠、お久しぶりです。
念願の東大に合格する事ができました！
武術の腕も衰えておりません。
近い内に刹那の様子も見に行きたいと思っています。
姉様も来るらしいです。
此方で起こった周りの反対は姉様が鎮圧したそうですので問題はありません。
では、春休み辺りに行きますので……。

……な、何だとぅ！！？
来るのか？！
マジ来ちゃうのか？！
嫌な予感しかしねーよ！
ぜって―碌でもない目に遭うんだ。
特に俺とか俺とか俺とかなッ！！
鶴子が来るのも余計に面倒が増える気がするし！

浦島可奈子

こんにちは師匠。
私はただいま祖母から離れ、一人で世界各国を回っています。
そろそろ２０ヶ国になりますか……私の変装も中々のモノになりつつあると自負していますが、未だに師匠の様にはいかない様です。
何やら兄さんとなるさんの仲が不仲になっている予感がするので、そのまま兄さんを手に入れる為に日本に帰るつもりです。
もしかしたら、そちらにお邪魔するかもしれません。

な、なんなんだ？！
何故、この時期にひなた荘の住人がこっちに来るんだ？！
い、いや……かもと書いてあるから来るとは限らないぞ……落ち付け……落ち着くんだ俺……こっちもこっちで来たら一波乱ある事を覚悟しておこう……しっかし、相変わらずのブラコンだな……それに予感て……女の勘は侮れんもんがあるし。
そっち関連は特に俺に被害はこないから、略奪愛でも禁断の愛でも勝手にやってくれ……。

ガトウ・カグラ・ヴァンテンヴァーグ

ワレ　センニュウニ　セイコウセリ。
ショウコ　イマダ　ハッケンデキズ。
ヒキツヅキ　センニュウヲ　ゾッコウスル。
ダンボールハ　トテモベンリダ。
コノマエ　オクラレテキタ　ステルスメイサイハ　ツカッテイナ

イ。
アレハ　ジャドウダ。
オトコハ　ダンボールデジュウブンダ。
……いやいやいや、何故に……いや、突っ込まないでおこう……
色々と突っ込みたいが、敢えて突っ込まないでおこう。
突っ込んだらキリが無いし、疲れるだろうし、負けた気がする。
うん、そうしよう……あははは、はぁ～……。

と、まあ……中々に色んな意味でデンジャラスなメンツが手紙をくれた訳だ。
魔法世界の大国ヘラスのじゃじゃ馬王女、最近旧世界で裏にも首を突っ込んでるらしい考古学者、過去に世界を滅ぼしかけた組織の構成員にして俺の義理兄？な人物、裏で名の通った神鳴流の東大生師範代、居ると必ず場を掻き乱す変態ブラコン変装名人、死んだ事になっているが、今尚潜入捜査している英雄兼仲間と……。
俺の交友関係は変人ばっかりだ？！

そんなこんなで時は流れ、三学期が終了した。
ネギが正式に教員になった。
学園長の包帯が取れていた。
俺は相変わらず授業をサボっている。

学年トップおめでとうパーティーが開催され、強引に連れ出され

た。

ネギと視線が合ったら、まるで小動物の様に震え出した。

順調に俺への恐怖心が増大している様だ、クックック……。

千雨が野菜のくしゃみの所為でバニーの格好から強制公開ストリップショーの被害に遭った。

強く生きて欲しい。

薬味野菜が飲もうとしていたコーラにそれとなくメ○トスを投擲して飲めない様に邪魔をした。

ちょっと気が晴れた。

第１７翼　図書館島、微妙に巻き込まれる紫の麗人（後書き）

次回は素子と鶴子襲来の話を入れる予定です。
可奈子はどうしよう・・・・・学園祭にでも登場させるか？と画策中。
もしかしたら麻帆良武道会に素子、可奈子、景太郎、瀬田さんとかが乱入するかも？
何気に原作の麻帆良武道会でネギが予選で笑われていたコマの端に瀬田さんが居た様な気がしますけどね（笑）

いつも感想を書いてくださったお歴々、本当にありがとうございます！
とてもやる気が出ます！
それと作者の体調を気遣ってくださる感想を送って頂いた皆々様には本当に心配をおかけして申し訳ないです。
ですが、趣味の範囲で書いているので特に無理をしているとは感じていないので大丈夫なのですよ～。
もし本当に体調が悪い時はきちんと休みますので・・・・・。

感想や誤字の指摘等は大歓迎ですので、お気軽にお書きください。

あと二話で１００話ですが、特別編とかを入れた方がいいのでしょうか？

第１８翼　春休み始め、景品にされる紫の麗人（前書き）

ついに青山姉妹がやって来る、な話です。

第１８翼　春休み始め、景品にされる紫の麗人

何故こうなった……。

朱然の心中でこの言葉が反芻する。

今、朱然の居る場所はエヴァの別荘の中で、朱然の目の前には幻術で大人バージョンになって際どい服を着ているエヴァ。

それに相対している目の色が反転してエヴァと相対している青山鶴子。

朱然は少し離れた所でチャチャゼロを頭に乗せて座り、隣には疾風を肩に乗せた素子が座っている。

その二人に茶々丸がメイド服を着て、お茶を入れていた。

「ケケケ、俺モ混ザリタイゼ！」

「止めなくて良いのでしょうか？」

茶々丸が茶を淹れる手を動かしながら言う。

その動きは正確で淀みない。

流石はガイノイドと言える手際だった。

「本人達が合意の下でやってる事だし、良いんだよ。　ああいうのは止めた方に被害が来るんだ」

朱然はやれやれをと首を振り、茶々丸はイマイチピンと来ないらしく首を傾げた。

「しかし、真祖の吸血鬼とは……」

素子は滅多に見れない真祖の吸血鬼であるエヴァをマジマジと見つめる。

そして、エヴァＶＳ鶴子の戦いの幕が切って落とされた。

因みに何故、こんな状況になっていたのかというと、前に届いた手紙の内容の通り、素子と鶴子が春休みにマジで来ちゃった事が発端だった。

朱然は麻帆良学園都市の入り口とも言える駅で待っていた。

この麻帆良学園は街丸々一つ分が学園都市となっている場所で、電車の駅もそれなりにあるのだが、外部から一番近い場所にあるこの駅の方が都合が良いと思ったのだ。

思ったのだが……最近、歩きまわらない為にすっかり、ある問題を朱然は忘れていたのだ。

その問題とは簡単に言えば……ナンパがウゼェという事である。

今までの割合をざっと分けると男が５、女が３、芸能・モデル関係のスカウトが２の割合だ。

麻帆良学園に通っている時はルーデシアになってる事が多いのだが、今日は本来の姿をとっている。

でもって服装はテキトーに決めた物だ。

人間にも溶け込める容姿という理由で旧世界だと――――本当の姿、ルーデシア、クルス、ノーラ、ヤオ、ウィンの６つの容姿を多用し、そのどの容姿も人目を引く美男美女のそれなのだが、本当の姿の場合は別格なのだ。

何せ、この容姿は正に人間（主に男）の理想願望がそのまま投影

された容姿のゴルゴン三姉妹の末女、メデューサのものと瓜二つなのである。

それはもう、ひっきりなしなのだ。

この駅の改札前に着いたのは約束の時間のおよそ３０分前位で、向けられる視線にもいい加減ウンザリしている。

なら別の容姿になれば良いだろうと思うだろうし、言われても仕方が無いのだが、何故そうしないかと問われれば、彼女達と顔を合わせる時は大抵この容姿だったからだ。

と、そんな事を誰に説明しているのだろう？と思っていた所で、朱然の待ち人はそこそこに几帳面な性格であり、待ち時間に少し余裕をもってやって来た。

相変わらず巫女衣装で烈風を肩に乗せている鶴子と今時の若者風な格好をして、やはり肩に疾風を乗せている素子が改札を抜け、改札向かいに居た朱然をすぐに見つけ、駆け寄って来た。

「お久しぶりです師匠！」

「ほんまに……お久しぶりですね朱然はん？」

「お久しぶり、素子に鶴子」

何故、朱然が二人を呼び捨てにしているかと言うと、既に歳を教えているのと、詠春のかつての仲間という事で、呼び捨てにしてくれとの事だった。

更に鶴子は、素子の婚約者なんやから家族も同然やし、とか去り際に言っていたし、素子は素子で、師匠にはそう呼んでもらいたい、と言っていたのだが、鶴子の冗談だと思いたいと切に思う朱然であった。

傍から見ても明らかに別格の容姿を持つ三人が話しこんでいると、チャラい男三人組が声を掛けてきた。

「ねぇねぇ、君たち綺麗だねぇ～」

「俺達と遊びに行かない？」

「そうそう、後悔させないからさぁ～」

と馴れ馴れしく腕を掴んでみたり、肩に手を置いて来る。

この時、朱然達は即座に行動を起こした。

「あらあら、ウチは既婚ですえ」

「貴様等の様な軽薄な輩に興味など微塵も沸かん」

「俺はこんな顔だが男だ……顔を洗って出直せ」

その言葉と共にチャラ男×３は三者三様に１０メートル程離れた駅の改札まで吹き飛ばされた。

怪我が無いのは投げた三人の技量が達人クラスだったからだろう。

「注目を集めてしまいましたし、場所を移しませんか？」

素子が提案する。

それは全く当然で真っ当な意見だ。

「ああ、賛成……待ってるだけで有象無象が寄って来るからいい加減、静かな場所に移動したいと思ってたんだ」

「相変わらずの様で何よりやなぁ、朱然はんは」

そんなやり取りをしながら先程の光景に唖然としていた観衆を置き去りにして駅を後にした朱然達だった。

まず朱然と青山姉妹が向かったのは麻帆良学園にある剣道場だった。

窓と戸は開け放たれ、中から一組の竹刀の打つ音と踏み込みの音だけが聞こえてくる。

「刹那はんは元気やろか？」

「俺に噛みついてくる位には元気だぞ」

「そうですか……最初に会った時の私達にも刹那は良く噛みついてきたものですよ」

「ふぅん……まあ、嫌われたままよりかは仲良くしたいと思うんだけどさぁ……」

そんな会話をしながら、中に入った。

「ハァァァァッ！！」

「打った後の戻りが遅いッ！！」

中では刹那が葛葉女史に稽古をつけてもらっていた。

葛葉女史は気付いた様だが、刹那は集中し過ぎているのか此方に気付いていない。
刹那は俺達が来た事に気配を感じ、葛葉女史に出来た一瞬の隙に打ち込もうと打ち込んだ竹刀を戻して再度、身体に打ち込もうとした所で胴をきめられ、吹き飛んだ。
刹那は即座に猫の様に空中で態勢を整え、綺麗な受け身を取った所で入口にいる来客に気がついた。
その人物を視界に収めた瞬間、刹那はガタガタと震えだした。
刹那にとって青山姉妹……特に鶴子の方は恐怖の代名詞と言っても過言ではない人物なのだ。
そんな刹那を尻目に葛葉女史が鶴子に近づいた。

「久しぶりですね鶴子」

「刀子はん、お久しゅう。　折角、周囲の反対を押し切って結婚しはったのに離婚しはったなんて……心中お察しするわぁ」

口元を手で押さえ、ホホホという感じで言う鶴子。

「……貴女は相変わらず、良い性格してるわね？」

鶴子に言われた瞬間に怒りマークの付く麻帆良学園の女性教師で罵られたい女性ナンバーワンの葛葉女史。

何やらバチバチと笑顔の鶴子と、こめかみに血管を浮かべた葛葉女史の間に火花が散っていた。
呼び捨てで呼び合っている所が気になったので後で聞いたのだが、実はこの二人、何気に同級生らしいのだ。
中学からの同級生で歳も同じ、神鳴流で習っていた時期も同じという間柄だったらしい。

確か鶴子の誕生日が１９７１年の９月１２日だったから刀子も…
…大体、３２歳位だっだはず……。

「朱然はん……？」

「朱然さん……？」

「「私達の歳を他人に言ったら……わかりますね？」」

朱然の不穏な気配を感じ取ったのか鶴子と葛葉女史の目の色が反転していた。

いつの間にか標的が朱然にすり替わり、得物が握られ、洒落にならない気が流し込まれ強化されている。

「わかってますわかってますって歳の事は言いませんから先程から痛い位に叩きつけてくるような殺気を抑えてその刀に込めている気も鎮めてついでに刀も鞘に納めてくれると嬉しいんですけど！？」

朱然は何故か思考を読まれた事に対して焦り、弁解を一気に捲し立てた。

閑話休題。

何とか二人がO☆HA☆NA☆SHIという名の肉体言語というか、拷問を行使する前に二人の怒りを鎮める事に成功した朱然は４人を引き連れて近くのカフェで普通のお話をする事になった。
当然、朱然持ちであったのは言うまでも無い。
朱然の経済的には雀の涙程もない出費だったので特に反論もしなかった。
したらしたでイビられるのが目に見えていたし、こういう場で男は格好を付けたがる生き物で女に支払わせる程、朱然自身は落ちぶれてはいないつもりだと自負しているからでもあった。

「刹那、お嬢様の護衛はきちんとやってはるの？」

「もちろんです！」

刹那は淀みなく答えた。

だが――――――

「嘘ですね？　貴女の瞳には未だ迷いが見え隠れしていはるようです」

鶴子は一瞬にして刹那の嘘を見抜いた。
それは刹那の根幹の問題。
烏族のハーフにして白き翼を持つ禁忌の存在。
幼き日に溺れた木乃香を守れなかったが故に影から守るという誓いを立て、木乃香を避けるという護衛としては十全と言えない事をしているという事を鶴子は詳細も聞かず、見抜いたのだ。
それに伴って葛葉女史がその詳細を鶴子達に教えてくれた。

「このままでは安全面が不十分ですね……いっその事、師匠にもお嬢様の護衛をしてもらう方向で詠春様に打診しますか姉様？」

素子が考えるポーズをとって言う。

「それもしかたなし、という他ありませんね？」

「そんな……ッ！？　護衛は私一人で十分です！！」

鶴子の言葉を聞いて、刹那は勢い良く立ち上がる。

「護衛対象を避ける護衛に何の意味があるんだ？　初めて会った時に俺は言ったぞ？　早めに木乃香との仲を改善しろとな」

朱然は刹那に問題を突き付ける。

「貴方に……貴方に何がわかるッ！？」

刹那は朱然を怒鳴りつけ、竹刀袋に入れた夕凪を肩に背負い走り去ってしまった。

「やれやれ……刹那には剣の修行以前に精神修行の方に重点を置いた方がよかったようですね……」

そう言って、葛葉女史は溜息を漏らした。

「それで、どうしますか姉様？」

「ふむ……ああは言いましたが、この問題はウチらが口を出すより、自分で気付かないと意味がありまへん。

でも、導く者がいた方が良いのもまた事実……という訳で……」

鶴子は此方に視線を向ける。

「はいはい、わかった。　俺がその役目を引き受けさせてもらいますですよ～」

朱然はそう言った後に、大きなため息を吐いたのだった。

「では、そろそろ私も用事がありますのでこれで……」

葛葉女史が席を立つ。

「久しぶりに話が出来てよかったわぁ」

「私は離婚の事と新しい彼の事を根掘り葉掘り笑顔で穿り返してくる貴女にウンザリしましたよ……」

そう言って葛葉女史は振り返らず去っていった。

そんな時だった。

朱然にとっての爆弾足り得る人物が通りかかってしまった。

「ん？　何をしているんだ貴様？」

「こんにちは、朱然さん」

ゴスロリ服を着たエヴァとメイド服の茶々丸が通りかかったのだ。

「誰です？　この人ではない金髪のお人形の様な可愛らしい娘は？」

朱然に軽い殺気がビシバシと叩きつけられる。

「おい……誰だこの嫌な感じを纏った女共は？」

しかも二方向から。

そんな朱然は内心、敵と認識しているのは鶴子とエヴァのお互い同士な筈なのに……ああそうですか……世の理不尽ってこういう事なんですね、と悟りを開きまくっていた。

というか嫌な感じって……それ多分、神鳴流で退魔の仕事沢山してるからかな？てか、そろそろ殺気が他の客に迷惑になって来ている気がするなぁ～と、結構……というか割と他人事な朱然。

二人の問いかけに対して、そんな朱然が取った選択は――――――

「……」

――――――沈黙する事だった。

下手に良い訳をすると、大変な目に会う事を知っていたからこその判断だろう。

客には悪いが誰だって自分の命は惜しいのだ。

そして、選択をした朱然は己が不幸な巡り合わせをもたらした運命と神をアヴェンジャーを使って呪い殺したいと思っていたりした。

そんな中、鶴子が席を立ち上がってエヴァに向かい合い口を開いた。

「ウチの妹の婚約者に何か用でもあるのですか？」

朱然は内心驚いていた。

それ本気だったのかよ?!その話は昔に決着はついたよね?!と。

「ほう……私の所有物に手を出すかガキ?」

更に朱然は驚き、頭を抱えた。

何時何時(いつなんどき)、自身はエヴァの所有物になったのか、と。

正に火に油な状況。

鶴子とエヴァの間で本日二度目の火花を見る事となった。

因みに素子は、鶴子の朱然婚約者発言が満更でもない様で――――

「そ、そんなッ！　婚約だなんてッ！?」

――――と頬を赤らめ、その頬を抑える様に両手を沿えて使いものにならなくなっていた。

誰か……誰か俺の味方はおらんのか……と朱然は絶望する。

「ウチの妹の大切な（パートナーとして）人を奪われる訳にはいかへんなぁ～?」

「私の（性的な意味で）男を横から掠め取られるのは気に入らんなァ?」

微妙に内容が噛み合っている様でいて凄まじくニュアンスが合っていないこの状況は、最悪を通り越して地獄に転げ落ちてしまいそうな勢いだ。

そんな訳で――――――

此処では周りに迷惑が掛りますね。
私の家に丁度良い場所があるついて来い。
ルールはどうしますか？
そんなもの決まっているだろう？
勝った方が朱然はんをもらえるんですねわかりますという、景品となってしまった朱然の意志を完全無視して話はどんどん進み、冒頭へ戻るのだ。
と、話している内に決着がついた。

あちらこちらから吹き荒れる絶対零度の吹雪と全てを呑みこむ雷の激突。

エヴァンジェリンＶＳ青山鶴子の決着は開始４８分、こおるせかいと真・雷光剣の打ち合いによる両者ダブルノックダウンにより、朱然の保有権は一時保留と相成ったのだった。
その後、エヴァと鶴子を観戦メンバーで介抱し、エヴァの家で朱然が腕を振って作った夕食を食べて鶴子は朱然を手に入れる為、エヴァにリベンジ宣言を残し、青山姉妹は帰って行った。
まるで台風の為すがままにされ、自然に恐怖する人間の様な心境だった朱然はこの日、生きた心地がしなかったと証言している。

第１８翼　春休み始め、景品にされる紫の麗人（後書き）

次で百話目……時が過ぎるのは早いもので、この二次小説を書き始めてもう五ヶ月になるのですねぇ……。
何所か感慨深いです。

次回は百話記念の話を入れようかとも思いましたが、特にこれだ！というネタが閃かなかったので、更なる春休み編を書く予定です。
もう出番が無いと作者自身が思っていたキャラを引っ張り出しての一波乱があるかも？

見返してみたら気になる場所がちらほらあったので微修正しました。

第１９翼　春休み中盤、誤解される紫の麗人（前書き）

百話目だー！！

第１９翼　春休み中盤、誤解される紫の麗人

お昼頃、寮の部屋から出てロビーを歩いている時だった。

「あ、ルノーさんだ。　結構……というか久しぶりに会った気がするね」

「うんうん」

「そうだねぇ」

と、３－Ａの面々がそれぞれにたむろしていた。

何とも暇人な奴らだなぁ～。

「ただいまー」

「お帰りー、早かったねぇ」

「あー……うん、予定してた場所があんまりにも込んでて諦めてきた」

と、運動部四人組が帰って来て裕奈がハルナに言う。

「あ、ルノーさんいるー？」

「え……っ？」

いきなり名前を呼ばれて、つい声をあげてしまった。

「何かしら明石さん？」

すぐに何事も無かったかのように言う。

「えっとね……街に繰り出して駅に着いた時、私達より年下位の娘に道を聞かれたんだけど……多分、小学生くらいかなー？」

「別に私に関係がありそうな話ではなさそうだけれど？」

「ルーデシアさんの事を訊かれたのよ」

「私の？」

俺は眉をひそめる。

「そうそう、女の子でかなりの美人さんでさぁ～」

「翡翠色の瞳が綺麗だったよねー」

「うん」

「肌も真っ白やったし」

裕奈の言葉にまき絵、アキラ、亜子がそれぞれに続いた。

「そう……教えてくれてありがとう」

そう言った時だった。

寮の玄関から爆弾を抱えた人物が朱然めがけ突貫してきた。
正確に言うのなら俺にのみに威力を発揮する爆弾を抱えた、俺のよく知る人物が、爆弾をバラ撒きながら抱きついてきた、の方が表現としてはとても正しい。

行動を表すのなら――――

「ママ――――――ッ！！　会いたかったよぉ――――――ッ！！」

＞ｉ２９９００―２４７７＜

という声と共に俺をロックオンし、玄関を潜り、ロビーを駆け抜け、俺に抱きついて、ルーデシア時の下乳に丁度よく頭を押し付けながら、グリグリと俺の鳩尾辺りに押し付けている頭を凄い勢いで擦り付けた。

＞ｉ２９９０１―２４７７＜

当然、ロビーに居たクラスメイト達が固まったのは言うまでもないし、固まらなかった者達で飲み物を飲んでいた者は噴き出し、飲み物を飲んでいなかった者達は目を見開いた。
何せ、明らかにそれっぽい幼女が、これまた中学生っぽくない中学生の容姿を持つ、ミステリアスな雰囲気を漂わせているルーデシア・ルノーにママと言って抱きついたのだ。
これは色々ともう想像を掻き立てるに違いないだろう。

「ス、スクープッ?!　ルノーさん！　詳しく！　とても詳しく私に詳細を教えて?!」

「断固拒否させてもらいます」

パパラッチが早速、カメラを構えてシャッターを押して詰め寄ってくるが、一刀両断する。

コイツ……肖像権の侵害で訴えてやろうか？

「ママ～」

相変わらずグリグリと頬ズリをやめない幼女。

……まずはこっちの幼女をなんとかせねばなるまい。

「えーっと、お話を聞かせてもらえるかなぁ～？」

俺が答えないと諦めたのか、朝倉は幼女の方にターゲットを変更した。

「いーよッ！」

元気良く手を上げながら言う幼女。

そろそろ、この幼女の正体を――――――

「貴女のお母さんはこの人？」

「ルクレツィアのママは――――――ムグッ?!」

――――言おうと思ったが、余計な事を言う前に口を塞いだ。

この幼女の名はルクレツィアと言って俺が――――――

「レティ？　ママはダメって言ったはずよ――――――」

「やあ、ルーデシアは居るかい？」

「パパ――――――！！」

「――――――……」

――――場が凍った。

タカミチが現れ、ルクレツィアがタカミチに抱きついた。

更に深まる誤解。

俺はタカミチに近づき、ルクレツィアをタカミチから優しく引き剥がした。

でもって――――――

「この……ちょっとは空気を読みなさいッ」

タカミチに平手を張った。

八つ当たりだが、俺は間違っていない筈だ！

「もろ　。ッ？！」

特に気を纏っていたつもりはないのだが、純粋な腕力で以てタカミチは清々しい快音と共に、玄関から外へもんどりうって吹っ飛んだ。

「痛ぅ……いきなり何をするんだいルーデシア？」

気弱な笑みを浮かべ、右頬に赤い紅葉を張り付けて問うてくるタカミチ。

「高畑先生を、い、今……パ、パパって言ったよね？！　あああ、あの娘？！」

「ええ……ッ？！　隠し子？！」

「これは……まさしく特ダネだねッ！」

クラスメイト達が玄関の扉から窺う様に此方を見ながら囁き合う。

あー……タカミチが来て、更にはレティがあんな事を言うから要らん誤解が蔓延したぞ……。

も、何が何だか訳ワカメな状況の方も居ると思うので説明するが、ルクレツィアはネギの村を襲撃した風の少女だ。

それでもってルクレツィアを造ったメガロメセンブリアの暗部が俺やフェイトの造り方を以て造った人造の風の魔法を操るという点に特化した人造魔法使い。

実力は一時期、力の制御をする為、俺が特訓を付けたので今のネギを軽く挽肉に出来る位の実力は持っている。
ただし、完全なる世界で正規に造られた1番目とフェイトや特殊な俺達とは違い、断片的且つ、不完全な手法を用いて造られたルクレツィアは成長が止まったままという欠陥がある。
なので実際の年齢はネギより、ちょっと年上だ。
俺がこの子に出来た事はメガロメセンブリアの施した枷を壊し、力の制御の為と身を守る為の術を教える事。
何も写さない心を他の子供達のように……同じように接し、過ごさせる事で、普通の子供のような自我を芽生えさせる事だけだった。
そして、普通の子供の心を得てからはこのように物怖じしない活発な性格で日々を過ごしている。
所で何故、タカミチがパパ等と呼ばれているのかと言うと、ネギにタカミチが戦い方を教えた1ヵ月後。
俺の孤児院にタカミチが仕事のついでといって訪れ、先程の言動から察してもらえると思うが、いつの間にかルクレツィアはタカミチをパパと呼ぶようになってしまったのだ。
因みに俺の方がママなのは孤児院の子供達がそう呼んでいたから、そういうものだ、と認識された為。
だが、これをそのままクラスメイト達に言う訳にもいかないので、そうなったテキトーに理由をでっち上げた。

俺はルノー家の出資している孤児院で特に仲の良かったのがルクレツィアで、たまたま遊んでいる時、NGO団体、悠久の風の仕事で来ていたタカミチと会ったのもその頃。
タカミチと俺がルクレツィアと一緒によく遊んだのは当然の流れで、とても短い時間だったが、ルクレツィアにとっては両親といるかの様な時間だった為、気がつけばそういう風に呼ばれるようになっていたと説明した。
流石にタカミチも事情が事情だったので、うんうん、そうだね、

と話を合わせた。
その間、ルクレツィアには飴を与えて余計な事を話さない様にした。

「と、いう事よ」

「へぇ～、そうだったんだ～」

「良い話だねぇ～」

「ルノーさん家もお金持なのかー」

どうやらその説明で納得したらしく、口々に感想が漏れる。

……やれやれ、今回はこのクラスの能天気さに感謝せねばなるまい。

そうして俺は能天気なクラスと遊ぶルクレツィアを眺めるのだった。

「ママ、お腹空いたよ～」

「全く、仕方が無いわねレティは」

俺はレティの頭を一度撫でてから手を繋いだ。

「じゃあ、久しぶりの再会とさっきのお詫びに案内がてら此処に来た理由でも話して、夕食でも食べにいかないかい？」

「ええ、良い案ね。　じゃあ、行きましょうかレティ？」

「うん！！」

そう言って、レティは空いている手でタカミチの手を取った。

その姿はまるで本当の家族の様だった。

「所で気になってたんだけど聞いていいかな？」

「何かしら？」

「その姿の時の下着とかって女物なのかい？」

俺は答えぬまま、問答無用で平手でセクハラオヤジを吹っ飛ばした。

因みに前に書いたが、朱然さんは女モードの時は下着も女物である。

だが男の姿の時に、女の姿へ緊急的変身をした時はヴァルハラコンビと呼ばれている片割れで猿の少女のとある疑惑とか、人を超の付く程の毒舌で精神的に追い詰めるシスターとかが戦闘時に着る衣装の様に穿いていなかったり、もしくは着けていない事もしばしばだったり……するかもしれない事は内緒である。

最早、女装スキルAは女体化スキルAに変化していそうだが、それは言わないお約束だ。

で、麻帆良学園を案内し、夕食を食べ、空港までルクレツィアを送り出した。

案内中にタカミチが俺を訪ねて来たのは明日から急に紛争地帯に行く指令が来たので、夜の警備のシフトを俺に頼みたいという話だ

った。
特に断る事でも無かったので受けてやった。

そして、肝心のルクレツィアが何故こっちに一人で来たのかと言うと、あまりに孤児院に帰って来ないから寂しくなって来てしまったのだそうだ。
ゲートとかは風で光の屈折率を変えて忍び込み、風を操って飛んで来たらしい。

中々にワンパクでデンジャラスな行動を突発的にやってくれたものだ……。

ルクレツィアには何とか帰る様に解き伏せる事に成功した。
荷物は普通にパスポートを持って来ていたので、帰りの飛行機等を手配しておいた。
一人で帰る事……それは特に心配してはいない。
それ程やわな鍛え方はしていないので大丈夫だろうし、本人は本人で、ちょっと、ヨーロッパ辺りを観光してから帰るよーッ！と元気いっぱいだった。

ホント、逞しく育ったなぁ……。

夕食時はセクハラしたオヤジに対して無駄に高い物を遠慮無く頼んだりして地味な嫌がらせをしたのは言うまでも無い。
そして、次の日からタカミチとルーデシアの格好の俺に根も葉もない噂が流れ、好意を寄せていたらしい男共が血の涙を流して、俺の店に大挙して来た。

「デスメガネと子持ちというのは本当なんですか？！」

「認めないッ！！　俺達は断固として認めないぞ……ッ！！」

「あんなオッサンより、俺と結婚してくださいルーデシアさんッ！！」

俺はあまりにこいつ等がウザかったので、タカミチを倒したら付き合ってやると言っておいた。

前々から女バージョンの時に自分と戦って勝ったら付き合ってくれとかいう輩が多かったので何となく、私を倒して奪って見せろッ！！と、面白そうだったので言ってみたのだが、それに先程の条件を付け足した感じになるのだろう。

もし負けるとしたら今すぐこの星が荒廃し、自立移動する都市が闊歩する世界になる位に有り得る位の確率だ。

つまりはあり得ません。

残念だったな格闘サークルの諸君！

君達には永遠に届かないし、掴めはしないのだよ！！

そして、帰ってきたら事情もわからず狙われるがいいタカミチッ！！

ぶっちゃけ唯の八つ当たりの延長だがな……ッ！！

更に変な方向へ噂を広めている者共に対してはＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを実行した事を此処に記しておこう。

まあ、見ようによっては仕方が無かったとはいえ、俺的には不本意すぎる噂だったからな！

自分で噂を流したならともかく、他人からの噂は許容できないのさ！

てか、ホモフラグはきちんと圧し折らねば、俺の今後に多大なる被害をもたらすだろう！

百合疑惑なら別に良いが、ホモフラグ……それだけは避けねばな

らない！
だって俺は精神的には男だからなッ！！

更に偶々居なかった明日菜にクラスメイトが面白がって色々吹き込んだのは言うまでも無く、ルーデシア・ルノーという存在に対して前回に聞いた内緒話と相まり対抗意識を持ったのもある意味、当然だった。

それをそれとなく感じた朱然は、まあ……なるようになるだろ…弁解もいい加減面倒だしなー、と特に弁解もしなかったのだったとさ。

P.S

タカミチとの噂を聞いたエヴァと茶々丸が店に乗り込んできて、色々訊かれた。

誤解だったと分かるまで攻撃魔法を撃ちまくられた。

何とか誤解を解く事に成功し、お帰り頂いた。

何故だろう……未だ何か問題が起こりそうな予感がする……十分に気をつける事にしよう。

まあ……気をつけていても巻き込まれる時は、それはもう遠慮無く巻き込まれるものだから半分ほど諦めているが。

人生諦めが肝心だと言うのだが、なるべく俺に被害の無い問題であってほしいと切実に願いたい。

第１９翼　春休み中盤、誤解される紫の麗人（後書き）

次回で春休み編は終了の予定です。

吸血鬼編はエヴァＶＳネギではなく、朱然（ルーデシア）ＶＳネギになりそう。

でもって、エヴァと仮契約するかも……。

ついに念願でも無いですが百話目になりました。

まだまだ続く予定のこの作品、なるべく面白そうになる様に、完結できるように頑張って行きたいです！

これからもよろしくお願いします！

そして、五ヶ月もの間、読んで下さった皆様、感想を書いてくださる皆様、お気に入りや評価を書いてくださる皆々様に最上級の感謝を！

第２０翼　春休み終わり、奪われる紫の麗人（前書き）

ヤッベ……後半エロくなってしまった……。

全然関係ないけど、最近のアニメの黒執事の展開についていけない作者。

原作とは違う物として認識して見る分には面白いですけど（笑）

第２０翼　春休み終わり、奪われる紫の麗人

「邪魔をするぞ」

「失礼します」

そう言って店に入って来たのはエヴァンジェリンと茶々丸だった。

「いらっしゃい」

朱然はヤオバージョンで学術書を読みながら言い、エヴァは当然の様に本棚から魔導書を朱然に渡す。

それを朱然も当然の様に受け取り、魔導書を本棚へ戻してエヴァを促した。

「ほぅ……下には始めて来たが中々の物だな？」

エヴァは目の前に広がる数々の品を品定めし始める。

「どれもかなり高価な品のようです」

値札を見た茶々丸がエヴァに報告する。

「でも、その値段に見合った能力を保証するよ」

朱然がエヴァの後ろに立つ。

「いい加減落ち着かん……普通の姿に戻れ」

エヴァは俺の方に振り返り、少し強めに言った。

「了解」

たった一言を返し、一瞬でヤオから朱然に戻った。

「今日は何をお求めかな？」

「超が造った茶々丸専用砲撃銃に、この前言っていた魔法弾とやらを試してみようと思ってな」

「はい、その通りですマスター。　ところで朱然さん、こちらの品々は？　とても興味がそそられる武装なのですが？」

そう言って茶々丸が興味を示したのは、朱然がひなた荘で暮らした時に開発したカオラ・スゥの合作。

とあるゲームの秩序の名を冠するガイノイドの扱ったネタ武器だった。

ネタと言ってもきちんと実用できる本格仕様だが。

でもって今、カオラとメカタマ１６号の設計開発をメール＆電話で相談中だ。

何かＭＩＴの兄弟が愉快なＡＩを開発していたので、カオラがアポを取ってＡＩの構造を教わったらしい。

確か、茶々丸もそのＡＩを基盤として自我を持っているらしいので、その内、超を巻き込んでＫＯ〇一ＭＯＳ本体でも作ってみようか悩み中だ。

造るにしても邪神モッ〇ス様の二の舞にならないように最大限の努力をしようと思っているが、今は宝具やらを製作するのに忙しくて優先順位的には低い。

「こっちはF・GSHOTって名前の三連装式ガトリング砲で、こっちは格闘戦用のドラゴントゥース、超電磁砲（レールガン）にミサイルその他ビーム兵器とか、諸諸事情（動力とか、現技術力の限界とか）によって一恒星系を破壊する第三種兵装の相転移兵器は断念したけど他はバッチリさ！！」

俺はエヴァと茶々丸に向けてサムズアップする。

「何という物騒な物を造っとるんだお前はッ！？」

エヴァにスパーンッ！という小気味の良い音のする突っ込みを頭に貰った。

「興味が尽きない兵装です……マスター」

茶々丸が物欲しそうにエヴァを見る。

「物を欲しがるとは珍しいな茶々丸？」

「超の兵装も嫌いではありませんが、この兵装は何所か私の琴線に触れる物でしたので……つい」

「ふむ……まあ値段が値段だし、全部とは言わんが……一つだけなら買ってやらんでも無いぞ？」

その言葉に茶々丸が若干嬉しそうな顔をした。

「ではこのF・GSHOTという三連装式ガトリング砲で」

指を指して言った。

朱然からＦ・ＧＳＨＯＴを渡され、構える茶々丸の顔はやはり嬉しそうだった。

「で、魔法弾の方はどうする？　もう込めてある弾にする？　それとも自分で込める弾にする？」

俺の開発した魔法弾には主に二種類の弾がある。

一つは魔法を既に詰めてある弾。

もう一つは魔法を詰めていない空っぽでお好みのオリジナル魔法や特殊な魔法を込められる弾。

普通の弾と違い、撃った後の薬莢があればその分割引で俺が魔法を入れる事も出来る。

まあ、昔のドラ〇エの漫画で、ダ〇の大冒険の劇中に登場した魔法銃の参考に造ったのだけれども。

因みに前者は威力等によって値段が違い、後者は何も入っていない分、安いが朱然レベルが入れる魔法は文字通り威力が違うので無理をしても此方を買う者の方が多い。

Ｓｃａｒｌｅｔの客層は普通の客が３割、魔法関係者が７割と魔法関係者の方が需要が多い。

普通の客的には興味本位等での依頼が多く、香水とか、アロマ関係の物品、占いのタロット、小物、呪いの藁人形、お守り、お札などの特に害の無い物だ。

藁人形とかはある意味、物騒と言えば物騒だけれどさ……。

ギリギリ銃とかも表で手に入るのだが、流石にそういう物騒なものは売らない事にしている。

軍事研が凄まじく欲しがったが、表に限りなく近い裏の物品だし。

魔法関係は朱然の素性が素性なので依頼はそれなりといった所。

魔法具である杖や箒、護符、魔法薬とそれっぽい物を取りそろえているのだが、特に魔法弾は本来の使い方の他に氷爆等の爆発系を入れておいて、上手く起爆させられれば未熟な魔法使いでも強力な攻撃が出来、十分に戦力になるらしく好評だ。

最近の常連さん筆頭としてガンドルフィーニ先生が弾薬を使い切るとよく買いに来るので真名と同じく割引にしたらとても喜んでいた。

何でも銃使いは魔法世界でも少ないらしく、肩身が狭いが魔法弾のお陰で増えるかもしれないし、色々なバリエーションがあって戦術の幅も増えた、とも言っていた。

それとタカミチも捕縛系魔法弾を愛用するようになった。

魔法が使えなくて意識を刈り取るだけだったが、捕縛魔法が使えるのはとても助かるとの事だ。

その内、ソレっぽいフォルムで造り、各種系統の魔法を入れて魔法手榴弾とでも名付けて売り出そうと思っている。

後は弐集院先生が娘の誕生日が近いので、お祝いにとちょっと値の張る小さい子供でも安心設計、軽量、魔法力強化の効果付きの杖を買っていったりだろうか？

最近はネギの事を除けば色々と楽しくなっていると言うのが朱然の本音だった。

「ふむ……半々で５０発貰おう。　超から銃の口径を書いているメモを貰っているからそれを見て造ってくれ」

「此方です」

そう言って茶々丸の差し出したメモを受け取る。

「承った。　出来上がったら届けに行くよ。　お金は……知り合いだし、格安にしておくよ」

「む？　そうか？　ならそれで頼む」

エヴァはその後、品々を見周り、いくらかの品を買って店を後にした。

エヴァが帰って少し後、高音と愛衣が現れた。

「お、お邪魔しまーす」

「失礼しますわ！」

高音はそこそこに騒がしく、愛衣は恐る恐ると。

「いらっしゃいませ、身の程知らずな高音ちゃんととばっちりを喰った愛衣ちゃん？」

俺はワザとそう言ってみる。

「そ、それは……ッ！？」

「あぅぅ～、そんな呼ばれ方は嫌ですぅ～」

からかわれ、狼狽する高音と涙目になる愛衣。

「で、何の用？」

「謝罪をしようと思いまして……」

すまなそうに言われた。

「えぇー、今更ー？　あれから何日経ったと――――――」

「スミマセンスミマセン！」

「――――――いや、別に怒ってないから」

今更過ぎて微妙な反応をした朱然に対し、愛衣が何度も頭を下げた。

「何度も謝罪に来ようと思っていたのですが……その、知らなかったとはいえ恥ずかしくて……」

と、顔を真っ赤にする高音。

「まあ、それに関しては別にいいさ……で、どうする？　うちの商品でも見てく？」

「あ、はいー。　周りが使ってるのを見て興味あったんですよー」

愛衣が興味を示し、高音も無関心を装っていながらチラチラと視

線を向け、興味ありげだ。

「なら、こちらへ」

俺は高音達を地下へ通した。

「わぁぁぁぁぁ！！」

「こ、これは……！！」

愛衣がパァァっと目を輝かせ、高音が一品一品の精巧さ、技術に圧倒された。

「全部売り物なんですかッ？！」

「ッ、此処にあるのは全部売り物だね。　更に地下に俺専用の武器とかコレクションがあったりするけどって近い近い！！　顔近いよ愛衣ちゃん！？」

詰め寄ってきた愛衣の顔が数センチ近づけば、それこそキスが出来てしまう距離まで近づかれ、うろたえてしまう俺。

「そっちも見せてもらえませんか？！」

「あー、こういうのに興味あるの？」

圧倒したままの高音をスルーし、聞いてくる愛衣。

「はい！　とっても興味があります！！」

「分かった!!　見せるから!!　見せるからいい加減、詰め寄るのはやめない？」

「す、すみません……」

そう言って愛衣の肩を両手で押さえいた俺に対し、愛衣は今の状況を理解したのかものすごい勢いで後退し、またしても頭を下げた。

俺は今までに造った宝具、概念武装、宝具もどきの粗悪品（レプリカ）等を見せた。

粗悪品（レプリカ）の事はその内詳しく話す事もあると思うので、端折らせてもらう。

そして、上の階に在った品々が霞むような……それも伝説のアーティファクト級を造ってしまう朱然に高音がまたも圧倒され、愛衣はキャラが変わる位に興味を示して解説を強請った。

粗悪品（レプリカ）が複製品の意味では無く、粗悪品という意味だと朱然が話すと更に二人は驚くのだった。

数日後。

エヴァの注文の品が完成したので宅配をしに行ったのだが……。

「マスターはこちらの部屋におりますので」

と、茶々丸に通された特に何の変哲もない和室で座布団に座り、茶を飲んでいた。

この時、俺は気付くべきだったのだ。

魔眼を発動させるだけでも、この部屋に通された意味を考えるだけでもよかったのに……。

「ふむ、確かに……茶々丸、魔法弾は仕舞っておけ」

「了解しましたマスター」

出来たての魔法弾を茶々丸が持って部屋を出た所で――――――

ガコンッ!!という凄く重厚で物々しい音と共に部屋にある唯一の扉が施錠された。

「え〝ッ!?」

俺は異様な音に扉を見る。

入った時は特に気にしなかったが、明らかにおかしい部分を見つけた。

「ちょ、どうして外側にしか鍵がかけられないんですか?!　てか何に使ってたの?!　ねぇ!?」

俺はドアに縋りつき、ドアを叩く。

朱然、入獄。

そう、その部屋は外側からしか鍵が掛けられず、魔眼を通してみるに、この部屋は魔法や気が使用できない魔法無効化空間になっていた。

そして、エヴァが四つん這いになって、ネコの様に軽やかな足取りで距離を詰めてくる。

「そして、何故ジリジリと距離を詰めているのでせう……？」

何となく冷や汗を流しながら聞いてみる。

「そんなの決まっているだろう？」

分かっているのだろう？といった表情のエヴァ。

「ヘルプ！！　茶々丸ヘルプミー！！　何かいきなり貞操の危機の予感！！」

何か自分自身のキャラがブレている気がするが、今はそんな事を言っている場合ではないのだ！

「残念ですがマスターの御命令ですので……グッドラック！」

ギャグ漫画で時々見る、片目を閉じて舌を出してテヘッな表情を彷彿とさせる声で言われた。

「キャラ違くないッ！？」

その後、朱然はエヴァに押し倒され（力はこっちが上だが、合気柔術の応用で抑え込まれた）、あらかじめ床に施された魔法無効化

でも使えるように細工された仮契約の術式（技術提供は超）でキスをされた。
散々騒いだが実際はそんなに心配していない。
お互い歳が歳だし、仮契約の儀式でもあるので、一回軽くキスをすればエヴァも気も済むかなぁ～と思ったのだが……甘かった。
１５年のお預けはどうやら余程のものだった様で……。

「んむ　ゥッ？！」

唇と唇が触れ合うだけのキスでは無く、唇が触れた瞬間にエヴァの攻撃が始まった。
顔を背けようとするがエヴァが両手で俺の顔をホールドする。
そして、強引にエヴァの舌が俺の顎を強引にこじ開けようとする舌を舌で押し返そうとすると、俺の舌を押し退けてそのまま突き込まれた。
それからはエヴァの独壇場で、濃厚で、濃密で、綿密に、念入りにエヴァが俺の口内を蹂躙する。
こうなってはもう俺には抵抗も出来なかった。
人間は存外、外側の刺激よりも内側の刺激に弱い。

まあ、あれだ。
今の俺はある意味、偽物な物語で鬼畜なお兄ちゃんがおっきい方の妹に歯磨き勝負をしてあげた場面のおっきい妹みたいな感じだろうか？
強引なキスをされているのに、送られてくる刺激の所為で頭がボーッとして、おかしな気分になりそうになる。
というか現在進行形でボーッとしているけども。
俺的にはする方が主だったし、逆にこういうキスも初めてじゃないが、やっぱりなれないものなのだ。
てか、エヴァはキス自体は初めてっぽい感じがするなぁ……力任

せな所が特に。
何か……此処まで強引にやられると、色々汚された気分になるな……でも普通こういうのって男がする場面の方が殆どなのに……何か色々間違っているというか不本意な気が……。

お互いの唾液と唾液が淫靡な水音となる。
お互いの口と口の隙間から新鮮な空気を吸い込み、暑い吐息を漏らす。
お互いの声と声が鼻掛かった音で部屋に響く。

長い長い強引なキスの最中にそんな事をクッテリ（ネギま！原作のディープキスされた後の明日菜みたいな感じ？）して意識に靄が掛かっている状態で考えていたのだが、次第に意識が薄れて落ちた。

しばらくして俺は目を覚まし、従者の複製カードを茶々丸から受け取った。
エヴァは最初、普通のキスをするだけだったつもりの筈だったのだが、いざ目の前にした途端についやり過ぎてしまった為、気恥しくなった事と自己嫌悪で反省中なので部屋に閉じこもっているらしい。
抑え込まれていたとはいえ、あまり抵抗しなかった俺にも非はあるのだから気にする必要は無いという言伝を茶々丸に頼み、エヴァの家を後にした。

蓮華が生きてたら殺される……そう言えば名もなき者から聞いた愛する者ってのは、このままいけばエヴァになるのか？

俺はそんな事を考えながら寮へ帰る。

因みに仮契約内容は主がエヴァで従が朱然である。

このアーティファクトは時間制限を含めても自分にとっては応用が利きすぎて、ちょっとチートな気がするので、あまり使わないようにしようと思う朱然だった。

第２０翼　春休み終わり、奪われる紫の麗人（後書き）

何か書いていたらエヴァがとてもエロくなってしまった件。
反省はしている……だが、後悔はしていない！　以上！

書いていたら暴走してしまった……何所のエロ小説だよとツッコミが来そうですが、そこはまあ、それと言う事で。

次回はやっとこ吸血鬼編。
ネギへのフルボッコタイムの始まりかも？
でもって、吸血鬼編が終わるころには、ネギのファザコンやらがちょっとは改善される様に書きたいと思うけれども、果たしてそういう風に話を持っていけるのかが、ちょっぴり不安な作者です。

では今回の後書きはこれにて失礼。

アーティファクトの説明をネギま！のステータスに移しました。

第２１翼　新学期、召喚する紫の麗人（前書き）

やっちまった感が否めないぜ・・・・・・。

第２１翼　新学期、召喚する紫の麗人

新学期になりました。
私、朱然さんは相変わらず、野菜少年関係の授業をサボっている為、身体測定があろうともサボっています。
で、その夜。
ふと、アレ？　吸血鬼事件ってどうなるんだっけ？と思い、本来の姿で桜通りに行ってみたりした。

するとそこには――――――

「む？　す、水仙じゃないか」

仮契約の事を思い出したのか頬を染めたエヴァさんが、街灯の上に魔女っ娘の格好でいらっしゃった。

「エヴァは何してんの？」

見上げる様にして言う。

「見て分からんか？　吸血してるんだよ吸血。
本来、あんな小僧に用は無いのだが、登校地獄の呪いを解くには否応無く術者自身か血縁の血が大量に要るからな。
力の大多数を封印された私は奴の息子の生き血を吸い尽す為に、こうしてチマチマと力を蓄えねばならんという訳だ。
全く……忌々しい呪いだ」

「あー、そう言えばその呪いの話なんだけど……解けないにしても俺が少しはマシになる様に術式を弄ってみようと思うんだけど」

「何ッ?!　そんな事が出来るのか?!」

エヴァが驚く。

「まあ、あの馬鹿の馬鹿力で固結びになったり、綻んだりした術式を直して効力を真っ当にしてから術式に介入、改竄をして現状よりもマシになるくらいだったら出来なくもないと思う」

要はルクレツィアの枷の時と同じく魔眼を使っての術式操作だ。

後は、この前に造ったとある粗悪品(レプリカ)で起点を破壊できれば完全とはいかないものの吸血鬼化とは別に解呪出来ると思う。

更にはエヴァが万が一、人間に戻りたいと言った時様に吸血鬼化をどうにかして解呪出来ないかと根源へ至った時の記憶を掘り起こしている次第だ。

その内、きちんとした宝具を造りたいものである。

「やっと……やっと私は自由にッ――――――」

「なれないぞ?」

「――――――何だとッ!?」

エヴァが詰め寄って来る。

「だって術式自体を解くには、今の時点だと野菜少年の血が必要になるし」

最終手段としては天翼での呪いを断ち切る事だ。

だが今は教えずとも良いと思う。

変な期待はかけない方が良いと思うしね。

「やはり血は必要という訳か……む、獲物が来た様だ」

エヴァが獲物を見定める。

宮崎のどかか……ん？

そう言えば此処でそろそろ野菜が来る筈だったな……？

それに学園長の思惑にエヴァを巻き込むのも何かムカつくし……

ならやる事は一つだな！

「エヴァ、俺が宮崎を眠らせるから合図するまで待っててくれ」

「？　何でお前がそんな事をする？　私が直接やった方が早いだろう？」

「まあまあ、その方が色々と都合が良いんだよ」

「まあ、別にそれでも構わんが……」

釈然としない表情でエヴァは隠れた。

俺はルーデシアへと変わり、のどかが来たところで死角から近づき、首にチョップして気絶させた。

その直後、予定されていたかの様に案の定野菜が現れた。

『エヴァ、此処は私が何とかしておくからアリバイを作っておきなさい』

『ふざけるなッ、それではお前が疑われるだろうが！』

『まあまあ、落ち着きなさい……術式の解呪については私の方でも研究しているから、近い内に完全解呪出来る様にするわ。
それに……ちょっと野菜少年をイジメたいの』

『……まあいい、まずはその術式介入の事を後できっちりやってもらうからな！
それと完全解呪の方法も構想くらいは聞かせてもらうぞ！』

『はいはい』

念話での説得でエヴァが離脱した。

「待て――――――ッ！　僕の生徒に何をするんですか――――――ッ！！

ラス・テル　マ・スキル　マギステル！　風の妖精（ウンデキム・スピリトゥス・アエリアウィレンス）１１人　縛鎖となりて敵を捕まえろ（ルム・ファクティイミニクム・カプテント）　魔法の射手（サギタ・マギカ）・戒めの風矢（アエール・カプトゥーラエ）！」

野菜の風系捕縛用の魔法の射手・戒めの風矢を１１発、俺に向かって撃ってきた。
俺はすぐにのどかを放し、後退しながら呪文詠唱を開始する。

「ミルティー　メルティー　ブラッディー　来れ、虚無の闇　叩き割れ　闇の戦斧」

俺は雷の斧と同じ上位古代語魔法（ハイ・エンシェント）の一撃を横薙ぎに放ち、魔法の矢を弾き飛ばした。
因みに俺は別の姿の時は違う始動キーを使っている。
これはルーデシア用の始動キーで、正体がバレない様に注意を払ってこんな面倒な事をしている。
本来の姿の時はエグジグ　エグザグ　エグゼクトだ。

と、どうやらエヴァの方は気付かれないで逃げられた様だ。

「僕の魔法を吹き飛ばした？！」

「全く……警告直後にいきなり魔法の矢（サギタ・マギカ）とは恐れ入ったわ。　もし犯人が一般人だったらどうするつもりだったのかしら？
ああ、記憶を消す魔法を使うつもりだったのかしら？」

「あ、貴女は……ッ？！　ルーデシアさん？！」

ネギが驚きを露わにすると共に身体を強張らせた。
苦手意識は順調に刷り込まれている様だ。

「魔力量は超一流……でも術式構成が甘いし、まだまだ無駄も多いわね。　歳を考えればこれでも十分マシな方なのかしら？
それとやはり……注意力散漫。　これは４０点といった所か……大学だったら落第ね。　これでは到底ナギには届かない」

「と、父さんを知っているんですか？！」

ワザと言ってみたが、凄い喰いついてきたなこのファザコン。

「さあ？」

俺はネギの問いに答えない。

「同じ魔法使いなのに何故こんな事を！？」

「魔法使いだって人間よ？　強盗をする人間も居れば、悪い事をする魔法使いが居ても不思議は無いでしょう？　夜霧武装解除」

「そ、そんな事は――――――うわッ!?」

ネギは俺の闇系武装解除を受け、ネギの左肩までと宮崎の服全体が黒い霧となって霧散した。

「何よ今のはッ?!」

「あー、ネギ君やー!」

俺は武装解除の黒い霧に紛れ、そのまま空を飛んで、その場を後にした。

「ま、待てッ!!」

「ネギ君が吸血鬼やったんかー!?」

飛び去り際に、明日菜と木乃香の声が聞こえたが無視した。

そのまま飛んでいると、後ろから杖に跨って飛びながらネギが追ってきた。

「待ちなさーい! どうしてこんな事をするんですか! 先生としても許しませんよ!?」

「前に言ったわ……私は貴方の事を先生だと認めないと。 貴方の父親の事は……昔の事なら良く知っているわ。

でも、今の貴方には教える資格が無いから教えないけれど」

「なら! 捕まえて聞くまでです! ラス・テル マ・スキル マギステル! 風精召喚(エウォカーティオ・ウァルキュリヨラントルムベルナーリア)!! 剣を執る戦友(アゲ・カピアント)!! 捕まえて!!」

８体の風中位精霊で作った分身体が俺に迫る。

このまま俺を数で捕える気か……だが俺を捕まえたければその３０倍は持って来いッ！！

そう思いながら、気や武器での攻撃では無く、敢えて呪文詠唱で対応する。

俺が開発した新魔法の実験台になってもらおう。

「ミルティー　メルティー　ブラッディー　圧縮術式解放（アウラエグゼク）・解放キー（イェハール）、暗き闇（ディアボロス）を率いる悪魔　認証コード（オーヴィクルパーシェ）・８４１　顕現（オクタフェフノイ　トルム）せよ！」

俺は宣言した。

それと同時に俺の正面の空間に黒と紫色の二色で描かれた魔法陣が展開される。

人工精霊や精霊での複製が出来るのなら、その術式を変形させ、変質させ、改造させる事が出来れば、疑似的な召喚獣の様なものが造れるのではないか？と思ったのだ。

その試みは魔眼の力もあり、大凡予想通りに完成した。

――――――Ｇａａａａ！！

召喚陣から飛び出したのは、ギリシア語で悪魔の意を表す名を持つ、正に悪魔とも言える漆黒の体躯と翼を持った架空の存在、ディ

アボロスだった。
その見る者を圧倒する存在は咆哮を上げ、翼の一羽ばたきによって、ネギの風の分身体を全て叩き潰した。

「な?!　悪魔?!　いや、違う?!　これは……見た事も無い呪文詠唱と術式で作られた精霊?!」

ネギが驚きを露わにする。

「御明察……これは私が造り出した魔法教本や魔導書どころか世界中を探してもない魔法。
そして、今日はこれで御機嫌よう、ネギ・スプリングフィールド。
見果てぬ夢に何時までもしがみ付かないように……目を覚まさせる為の一撃を」

――――――重力の檻（ファウンティナ・シェラン）

俺の指示を受けたディアボロスは漆黒の翼をはためかせ、空に舞い上がり、右手を振り上げ、重力を集中させ始める。
天空へ向けた掌に何重にも圧縮された重力が集まり、重力球はより深い闇を作りだしていく。

深き闇は黒く、深く、そして、重く重く重く凝り固まってゆく。

ネギはそれを危険と感じ取ったのか杖に跨って全力で逃げ出した。

それは正しい判断だっただろう。
間違いではないだろう。

だが無慈悲にも完成した重力球はネギ目掛けて投じられ、直撃したネギが空中で重力球の外殻に沿って押し潰されてそのまま地面まで激突した。
そのあまりの威力に眼下にある石畳の筈の道は砕け、地面を抉り、重力球に呑み込まれ、物理的にも轢殺する威力を備えた一撃となった。
重力球を放ったディアボロスは己の維持に必要な力を使い果たし、霞む様に崩れ、霧散した。

……あー、何となく最近、思い付きで創ってみたのだが、その成果の軽い実験のつもりだったんだけど……まさかの威力にプチッと殺っちゃった？

俺の背に冷や汗が流れる。

「ま、まあ、最初に撃ってきたのは野菜少年だった訳だし……正当防衛になるのかしら？」

と、ちょっと自己弁護と共に思った所でネギがプチッといった場所を覗き込んでみると、障壁を咄嗟に全力展開したらしく、何とか半分埋まった状態で生きているネギの姿があった。

あれだけの威力を受けてこの程度なら僥倖だろう。
が、存外にしぶとかったな……。

その身体には石畳や小石等を巻き込んだ為に出来たのであろう切り傷と打撲が無数につけられていたが、ナギ譲りの馬鹿魔力をつぎ

込んだ所為か、骨折等の重傷には至っていなかった。

それも僥倖だろう。

「うーん、召喚獣の用途って、よくよく考えてみると私自身が戦えば殆ど問題が解決してしまうから利点が少ないし、もう少し何か改良が必要かしら――――」

「ウチの居候に何してんのよ――――ッ！？」

「――――あら？」

考え事をしていた俺は明日菜の飛び蹴りをかわし、新たな敵として認識して距離を放した。

魔法障壁に掠った蹴りによって障壁が打ち消されたので再展開する。

魔法完全無力化能力……掠っただけで破壊されるのは思った以上に厄介だな……明日菜の前には此方の防壁は障子紙一枚程度の役割も果たさないんだから。

「あ、あんたはウチのクラスの！？　というか何この惨状……一体、どういう事、ってネギ……ッ？！」

明日菜が地面に半ば埋まっているネギの方に駆け寄り、掘り起こしに掛かる。

「何でこんな事するのよッ？！　あんたが今回の事件の犯人なの？！　こんな子供相手になんて事するのよ！！

……答え様によってはタダじゃ済まさないわよ！」

と、ネギを掘り返す手を動かしながら言う。

「この子が私に向けていきなり魔法を撃ってきた。　つまり私に敵対してきた。　その後も私を明確な敵として魔法を行使し続けた。　なら私は正当防衛の為に遠慮をする理由が無いから反撃した……それだけの事よ」

うっかり殺人事件を引き起こしてしまう所だった事を棚に上げ、シレっと言ってみる。

「魔法って……あんたも魔法使いなの？！」

「そうかそうでないかで言えば……そうと言えるわね」

クラスで言えば拳闘士だろうか？
いや武器を使うから剣士？
魔法も使うし魔法剣士か？
でも強くなればなるほど分類なんて当てにならないらしいから別に無理して別けなくてもいいか。
強いてあげるならやっぱり魔法剣士だな、うん。

「そ、そうなんだ……でも、ネギがいきなり魔法を撃ってきたからって、こんなの過剰防衛も良いトコよッ！」

明日菜は怒りを顕わにする。

おーおー、ガキが嫌いと言う割に随分と心配するんだな。
まあ、自分の知り合いがこんな目に遭えば、今は一般人の明日菜はこういう反応だよな。

「この子が目を覚ましたら伝えてくれるかしら？　撃っていいのは撃たれる覚悟のある者だけよ、と。
もし仮にだけれど……貴女も此方側に首を突っ込む気なら貴女もこの言葉の意味を覚悟しておきなさい。
世界は覚悟の無い者に寛容ではないのだから……」

俺は某ギアスなシスコン皇帝の様に言い放って、これ以上の問答は意味をなさないと判断し、飛び去った。

世界はいつもとは言わないが結構残酷なものなのだよ。
でもって、この言葉って便利だよねぇ。
撃っていいのは撃たれる覚悟のある者だけだって。
実際はその通りだと思うし、因果応報でも可能だけれどさ。

「ま、待ちなさいよ――――――ッ！！」

明日菜は制止の声を上げるが勿論スルーした。
こうして吸血鬼事件はエヴァではなく、俺との対決になる事になったのかもしれないフラグが立ったのだった。

後日、学園長からジト目で、誰が直すと思っとるんじゃ？お小言を言われた。
なので、警告直後にいきなりネギが撃ってきたから反撃した、と言ったら沈黙した。
どうせ覗いてたから何も言えなかったんだろう。

学園長によれば俺の行動に対し、不満を持っている輩が不穏な動きをしているらしい。
まあ、武力なら武力で叩き潰せばいいだけの話だから特に気にし

なかった。
　というか寧ろ、相手が勝手に沸いてくるなら正当防衛にでっち上げて堂々と召喚獣の実験が出来るので寧ろ諸手を挙げて万々歳&大歓迎だ。
　と内心全く危機感を抱いていなかった。

　その数日後。
　ナギ贔屓の自称正義の魔法使い達が雄の息子であるネギをフルボッコにした為にこらえきれなくなったらしく闇打ちしてきたが、色々と創ってみた召喚獣を使って叩き潰した。
　その中には知っている原作キャラは含まれていなかった。
　原作キャラ達はどうやらネギをそれ程、贔屓目を使っていない様だった。

　で、肝心の召喚獣実験の結果、結局最後の物語の??番目みたいに乗り物に変形する機能を付けてみたりした。
　特に思いつかなかったし、前からちょっと乗り物とか欲しかったんだよねぇ～。
　これなら免許要らんしさー。
　唯、超必殺的なものを放つと存在維持の為に編んでいた精霊の大半を使い切ってしまうので霧散してしまうのが欠点だ。
　カーバンクルのような小型なら初級魔法程度。
　中型なら中級魔法位。
　大型なら上級魔法2、3発位、それよりも大型なら上級魔法5、6発分になる予定だ。

どうも構成・造形、自律行動、魔力消費抑制、必殺技、ドライビングモードで一杯一杯な感じに術式を詰め込んだ所為か、存在時間が少ない。

改良の余地あり、だな……それも俺自身が召喚獣に直に触れて構成精霊の補充をすれば維持できるから大した問題ではないけれども。

属性吸収はできないが、構成精霊と同じ魔法を使うとダメージは与えずらくなっている。

今は精々５～６メートル級の召喚獣が精々だが、いずれはエデンとかアークとかの１００～２００ｍ級の召喚獣を創ってみるつもりだ。

エデンとかアークは維持どころか召喚すらも難しく、思考錯誤中だ。

試しにやったら大爆発して吹っ飛ばされた（笑）

仮に召喚できたとしても制御に相当、気を配らないと大変厳しいと思うが、そこはこれから創意工夫をするという事で……さしあたってはアレクサンダー、リヴァイアサン、バハムート、フェニックス等の大型を創りたい。

大きい分、制御とかが難しそうだが、使える様になったら、それはもう帝国の龍樹とかとタメ張れるくらいには持っていきたい。

一度は根源に至って様々な知識を得たはずなのだが、なかなかどうして上手くいかないものである。

ネギに関しては……はっきり言って個人的に嫌いだが、丁度良い機会だし、そろそろ教師としての自覚を持ってもらう事と性格を治せれば治すような行動をとろうかな？

治せないにしても、治す切っ掛けくらいは作っておきたい。

切っ掛けすら作れなかったら、もうお手上げだな……そうなったらいっその事……周りが巻き込まれる前にネギを――――

――――――殺す。

そんな物騒な事を考えながら、俺は月と星がの煌めく夜空を飛ぶ。

第２１翼　新学期、召喚する紫の麗人（後書き）

ネギが意識不明の軽傷になりました。
不屈の闘志でネギはルーデシアに向かって行きます。
吸血鬼編のネギは嫌ーな感じの性格をしたネギになりそうですが、朱然さんの更生が上手く出来れば最近の原作のもう少しマシなネギになると思います。
多分、恐らく……自信無いけど……。

因みに朱然さんのディアボロス召喚時の詠唱はアル◯ネリコのヒュムノスサーバーにある単語をその文の意味に近そうなものを選んで、選んだ単語の読みを流用しました。

何かもう、朱然さんの強さの方向性が間違って来ている様な気がしないでもないですね……主に召喚獣とか召喚獣とか召喚獣とか。
でも、朱然さんが創った召喚獣の前には疑似と付くパチモン、バッタモンみたいなものですがね（笑）
朱然さんも趣味に走り始めてしまったんですよ多分。
別の世界に行ったら何かしら理由をアレコレ付けて強さを抑制すると思いますので。
先の話をしても、アレなのでけども。

これからも読んでくださる方々に感謝を。

第２２翼　封印解除、襲撃される紫の麗人

４月９日。

授業をサボり、エヴァの別荘に来ていた。

というか最近学校に行った記憶が無い……まあ、いざとなったら爺を脅すけど。

「どうだ？　何とかなりそうか？」

エヴァが恐る恐る聞いてくる。

「……見た感じ、これなら何とかなりそうだ……術式を直せば半分くらいは封印が解けると思う」

「そんなにか！？　精々１割や２割いけばいい方だと思っていたんだが……思わぬ収穫だな！」

エヴァが興奮気味に言う。

「じゃあ、早速やっとく？」

「ああ！！　すぐにでもやってくれ！」

エヴァが捲し立てる。

「んじゃ、目を閉じて静かにしていてくれ」

「わ、わかった……」

俺はエヴァの頭に手を置いて魔眼を発動させる。
そこからネギの村を襲撃した少女を救った様にエヴァが囚われている術式に介入を始める。

歪みのある場所が5箇所。
綻びがある場所が8箇所。
固結びになっている場所が7箇所。
こんなにも術式が無茶苦茶なのに本来よりも強力になって呪いが成立しているのは、あの馬鹿がある意味で言う天才で、奇跡のようなバランスを保ってしまったが故か……兎に角、術式を直しますかね……。

俺はそう思い、次々に術式を正常に戻していった。

次は術式の弱体化をっと……。

全てが終わった後、俺は魔眼を閉じた。

「ふう……終わった……」

そう言ってエヴァの頭から手を退ける。
それと同時にエヴァが目を開く。
だが、エヴァの目はそのまま更に驚きによって見開かれた。

「お、お前!!　どうしたんだその鼻血は?!」

「え?　嘘ッ?!」

俺は鼻の下を指でなぞり見てみる。

すると指には大量の鼻血がついていた。

どうも繊細な作業をすると鼻血が出るという締まらない事に……。

そう言って鼻下に付いている鼻血を拭き取った時だった。

「う〝ッッ?!」

突然、エヴァが胸を押さえて蹲った。

俺は当然、エヴァに駆け寄る。

何だ?

俺の頭の中にある意味の単語が締め始める。

――――失敗?

俺はしくじったのか?

いや、失敗はしていなかった筈だ……!

そんな風に思いながら、エヴァを顔を覗き込もうとして――――

――――物凄い力で押し倒された。

「エヴァ?!」

その瞳に理性は無く、猫の様な瞳孔に獣の思考が窺える。
エヴァは俺の驚きを無視して肩に顎を乗せる様に抱きつく。
首筋には苦しみと言うよりかは艶っぽいと感じさせる吐息が俺の首筋を擽った。
この体勢だとエヴァの表情を見る事はできないが、髪の隙間から覗く首や耳は朱に染まり、抱きつかれているので体温が伝わってくるのだが、幾らか熱っぽさを感じる。

「ぅくっ？！　んッ！　はぁぁ！」

何かに耐えているが、次第に我慢できなくなってきている様な…それに服の胸の辺りを掴んでいるエヴァの手に込められる力が次第に強くなってきている？
吸血鬼、ヴァンパイア、真祖、不死の生物、化物な物語、エナジードレイン、吸血行動。

そんな風に俺はエヴァに何が起こっているのかを考察してハッと思い至った時だった。

「ッ！」

痛みは無かったが、明らかに俺の首にエヴァの若干長くなった犬歯が突き立てられている感触が伝わってくる。
それはとても奇妙な感覚、本来なら痛みで絶叫しているかもしれない。
でも子供の頃に一度だけ受けた事のある手術で局部麻酔を打たれているような……自分の肉体が痛みを忘れ、弄られているような…
…そんな感覚。
更には自分の血が吸い出される軽い虚脱感。

やっぱり……吸血衝動を耐えていたのか？！
だがエヴァは吸血をしないはず……しても血とはエヴァにとって嗜好品に過ぎないはずだ。

驚きはしたが、特に痛みも無かったので取り敢えずエヴァを引き剥がしてから考察を再開しようと思い、それを実行し始めた時だった。

エヴァの両肩に両手を添えて引き剥がしかけていた腕に力が込められなくなった。

何故なら俺に途方も無い程の特定感覚が脳を破裂させられそうな位に注ぎこまれたから。

その感覚は……変態と言われそうでとても言い難いのだが、この際それはもう諦めて教えよう。

つまり俺の脳を埋め尽くすその感覚……それは――――――途方も無い程の快感だった。

それはくすぐったいとか、気持ちいいとかを通り越して、直接脳に訴えかける様な快感だ。

「……ッ！！　ッ！？　ッ！！！？」

俺は歯を食いしばり、両手で己の口を塞いで声を押し殺して自我を保とうとするのだが、快感には波があって大きな波が来る時に押し殺した声が漏れ、身体が勝手に跳ねてしまう。

痙攣してしまう。

格好が悪いくらいに反応してしまうのだ。

エヴァが吸うにつれて更に快感が増していく……身体の力が抜け

ていく、抵抗が出来なくなる。
今は何とか耐えられているが、このままだと自我を手放してしまいそうになる。
痛みならば、身体は防衛本能がある故に慣れておく事は出来る。
我慢できるし、耐えられる。
でも快感攻めは文字通り、快感だ。
防衛本能などはある訳が無く、寧ろ求めてしまうもので慣れられるものじゃない。
我慢するものでもなければ耐えるものでもじゃないし、結構もう色々とヤバい。

これはある意味、最強の拷問な気がするぅッ?!

る、の所で大きな波が押し寄せ、心の中の声が上擦ってしまうのと同時に弓なりに身体が反ってしまう。

くぅッ!?
心の声とはいえ、男の嬌声なんぞ聞きたくないだろうにぃッ?!
読者にとってもこれは拷問だってぇッ?!

また大きな波が来て、そろそろ思考もままならなくなって来た。

頭がおかしくなる……このまま続けられたら……もう……。

「んんッ……ゴクッ、んむッ!?」

そこでエヴァの驚きの声と共に俺の首から牙が引き抜かれ、エヴァは大きく離れた。

「わ、私は一体?!　オイ!　大丈夫か!?」

エヴァが額に手を当てて頭を振って意識をはっきりさせ、今度は俺の方にエヴァが駆け寄って来る。
朱然は自分の身体を抱きしめるようにして、快感に耐えていた。
その身体は快感を与えていた牙を抜かれてもピクンッ！ピクンッ！と小刻みに体が反応する。

エヴァの手が俺に触れる瞬間に――――――

「触れるにゃッ！！　ひッ？！」

呂律が回っておりません……というか誰か俺を今すぐ殺して？！
にゃッて言っちゃったんだよ！？
恥ずかし過ぎるよッ！！
穴があったら迷わず入って埋められてしまいたいッ！！
しかもその後にまた快感が全身に走って、ついに悲鳴みたいな声を漏らしてしまった……僕もうお嫁に……じゃないッ、お婿に行けないッ！！

吸血が終わって幾らかまともな思考が戻ってきた俺は反射的にエヴァに怒鳴っていた。

「ッ！！」

差し伸べられた手が強張り、動きを止めたエヴァに俺は呼吸を整えながらゆっくりと、だが慎重に口を開き、蚊の鳴く様な声でエヴァに弁解をする。

「ふぅぅぅ、ふ、ぅぅ……きらいになったわけじゃないんら……でも、いまはふれないで、くれ……いまふれられたらぁ……ほのまま、えう〝ぁをおひたおしてまいほうになる、からぁ……ひょっとらけ、はなれててくれ……」

……今程に自殺をしたいと思った事は無い……呂律とか回ってないのがこんなにも精神的にキツイとは思わなかった。

なんか、出来の悪いエロゲで攻められた後のヒロインみたいでもう、トラウマものだと思うんだ……なんかこう、駄目と言おうものならば、らめぇとか普通に言えると思うんだ……しかも本気で今、誰かに触れられたら不味い……それが異性だったら構わず押し倒して、相手が壊れてしまうまで欲望をぶつけてしまうと思う……それは、倫理的にも、お互いが両想いだったとしても色々と不味い。

「あ、ああ……そう、か……」

エヴァはさっきの怒鳴り声で嫌われたと思った様だが、怒鳴った理由を聞いて安心したらしく、胸を撫で下ろした。

「そ、その……すまなかった。お、収まったら呼びに来てくれ……」

自分の吸血行為で、そうなってしまった事にすまなそうな顔をしてそう言ったエヴァは、俺の痴態?に目を向けないようにしながら別荘の奥に引っ込んでいった。

今、エヴァが手を出せば既成事実の大安売り状態なのでやりたい放題だが、流石に今の状態の俺に手を出すのは憚られたのだろう……。

全てが収まるまで耐えていたのだが、まさかこの状態が1時間も続くとは思いもよらなかった……快感攻めとか神は一体何の恨みがあってこんな試練を俺に送りつけてくるんだろう……そんな神なんか色んな所もげてしまえばいいと思う。

正座して痺れた足を突かれた感じ、の快感バージョンみたいな？

ちょっとした身動ぎさえ快感に変換されるんだよ？

真祖の吸血行為侮れねぇ～。

下手な行為より、気持ち良いかもしれんぞこれは……いやいや、吸血プレイとかどんな変態だよッ？！

危ない危ない……新たな性癖に目覚めてしまう所だった。

そんな自問自答をした後、エヴァを呼びに行ったのだが、仮契約事件の二の舞いみたいな感じで、お互いにバツが悪くて変な空気になったが、次第にいつもの調子に戻った。

因みに何故あんな事になったのかと言うと、１５年も必要以上に封印され続けた反動がそもそもの原因で特に吸血鬼にとっての特性、吸血衝動が封印解除と鼻血とはいえ、血を見てしまった事に反応して暴走した、と言うのがエヴァと俺の見解だ。

まあ、それは複数の不幸が重なった故の事故と言う事で、今後お互い触れない事を誓った。

それはさて置き――――――予想通り半分の力が戻り、エヴァはとても喜んだ。

やっぱり可愛い娘には笑顔が似合うと俺は思った。

で、次の日。
学校に行ったら学園長にエヴァが呼び出されたらしい事を愚痴られた。
図書館島で学園長が知っている口ぶりからして、どうやら形式的にでもエヴァに釘を刺されたらしい。
俺は学校から帰ると工房に籠ってアイテムを制作と召喚獣の調整をしていた。
夢中になっていたら2日経っていた。

更にそれから次の日。
Ｓｃａｒｌｅｔから出て物品作成の素材が幾つか切れたので、麻帆良学園の人気の無い裏路地にある魔法の材料を扱う店に行こうとして誰かがつけているのを感じ、人気の無い袋小路に入った時だった。
好機と見たのかネギと明日菜が現れた。

「ルーデシアさん」

「あら、貴方達だったの……こんないたいけな女子中学生をストーキングして一体、何の用かしら？」

「吸血鬼事件の重要参考人として貴女を捕まえます。　そのついでに父さんの事も教えてもらいます！！」

「大人しくお縄につきなさい！」

「そうだそうだ！」

真っ直ぐに俺を見るネギ。

何気にカモが明日菜の肩に居る。

「……クスクスクス」

俺は口元を隠し笑う。

何故、笑ったのかというと、ネギの言い回しが可笑しかったから。

だって明らかにナギの事の方が気になって仕方が無い言い方だったからだ。

だから、ついつい笑ってしまった。

「な、何が可笑しいんですか？！」

「な、何が可笑しいのよッ！？」

「何が可笑しいんでぃ！？」

2人と1匹は困惑する。

俺は訂正してやる事にする。

ネギのトラウマを刺激する為に、そのトラウマを直す為に。

「ネギ・スプリングフィールド、順序が違うわよ？　貴方にとって吸血鬼事件の方がついでしょう？

そんな瑣末な事よりも貴方にとっての優先順位は村を焼き払った仇、サウザントマスターの事……最後に吸血鬼事件の順ではないかしら？」

「貴女は一体何所まで……ッ？！　貴女は何者なんですッ？！」

ネギが魔力を開放する。

俺は一般人達にバレない様に結界を発動させた。

「人払いもせず、いきなりそんな魔力を開放するなんて……これはいよいよ魔法使いとして底辺の底辺まで落ちたわね？」

「わぷッ？！　ちょっとネギ！？　どうしたのよッ？！」

「どうしたんだ兄貴？！」

呆れる俺と状況が飲み込めず、魔力解放による風にあおられる明日菜と明日菜にしがみ付くカモ。

「……」

俺はネギをからかう様な笑みを浮かべたまま、無言。

「知っているのか？」

ネギが敬語を使わなくなった。

「何をかしら？」

俺はネギの強大な魔力の圧力を受けても余裕を崩さない。

「村を襲った犯人を」

ネギの視線はもう生徒を見る視線ではない。
これはもう……敵に対して送る鋭い視線だった。

「君には知る資格は無いわ」

俺は気にすることなくネギに対して事実を突き付ける。
この程度の器では到底教える気にもならない。
よしんば教えても犬死にするか、メガロメセンブリアに取り込まれ、利用されるだけだろう。

「知っているんだな？」

有無を言わさない、問い詰める様な口調。

「ええ、私は襲った人物と襲うように言った者のどちらも知っているわ」

その瞬間、ネギの姿がブレた。

「「な……ッ？！」」

明日菜とカモが驚愕する。
何故なら明日菜が瞬きした瞬間に、ネギが俺の足元で己の腹部を抑え呻いていたのだから。
その一瞬の内に何があったのかと言うと、ネギが魔力暴走で突っ込みながら殴りかかって来たので足を掛けてつんのめさせ、殴ってきた手を取り、空中で一回転させて地面に叩きつけると同時にサッカーボールを蹴るように腹を蹴った。
それだけの事だった。

「別に貴方が嫌いだからと言うだけで教えない訳じゃないわ。
貴方が肉体的にも、精神的にも、弱く、脆く、脆弱過ぎて知ったら犬死にするだけだと思っているから教えないの。
そうね……貴方が２０歳になって私を倒す事が出来れば教えてあげなくもないわ」

俺がそう言って行こうとすると、ネギが俺の左足を掴んだ。

「……ぐッ……教え……ろ……」

「兄貴！　ホントにどうしちまったんだ?!」

髪から覗く目からは真実を教えない俺に対して敵意を越えて憎悪しか感じられない。

これは本格的且つ、根底から叩き直さないとどうしようもない、か。
さて、どうしたものか……手っ取り早く、ナギとのアーティファクトを使うか？

俺はその手を軽く蹴り外した。
そして、明日菜が涙を流し、ネギを介抱しながら言う。

「何でこんな事をするのよッ?!　知っているなら教えてあげなさいよ！」

その言葉に俺は足を止めた。
そして、振り返らずに口を開く。

「くれくれしろしろ、私は貴方達の母親になったつもりなんて無い

のだけれど？
それに何故、私が貴方達の要望を聞き入れなければならないの？
何故、真実を教えてくれないからと言って攻撃を受けなければならないの？
何故、真実を教える必要があるの？
知識、想い、記憶、真実、他にも色々あるけれど……でも本当にそれを知った時、幸福になれる保証も無い。
寧ろ、不幸になる事の方が大多数よ？
特にネギ・スプリングフィールドは特殊なの……真実を知るには“資格”が要るわ。
その資格は全てを守れる位に強い力、憎悪や何者にも囚われない意志と自分を見失わない信念が必要なの。
そして、最後の鍵として、その真実を知る者が揃って初めて真実に辿りつく……憎悪に身を任せて殴りかかって来る何てもっての外。
それ程までに知りたいのなら、そうね……今度の満月の夜に私を倒せたら、もう少しだけヒントをあげる」

本当はヒントすら与えるのもはばかられるのだけれど、と締めくくり、俺は結界を解いてＳｃａｒｌｅｔに戻ったのだった。

あ、材料買うの忘れた……。

４月１４日。

ネギがエヴァの下を訪れたらしい。
どうやらクラス名簿を見て頼って来たらしいが、エヴァは自分が吸血事件の犯人だった事を教え、ネギを家から叩き出したらしい（

笑）

でもって俺は学園長に呼ばれたので学園長室を訪れた。

「エヴァの封印が元に戻って弱まっているようじゃが？」

「俺が直した。　あの馬鹿が力任せに封印した所為で彼女は縛られ過ぎたからな。　卒業と共に俺は彼女の呪いを解いて連れて行くつもりだ。

その方法も既に持っている」

俺は平然と言う。

魔眼による術式解体がこれ以上出来ないので前に触れた粗悪品（レプリカ）とは魔法完全無効化能力の効果を込めた使い捨て宝具モドキ――――破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）・粗悪品（レプリカ）で解呪しようと思っている。

概念的ものは破戒どころか全く傷すら付けられはしないが、こと魔法という点に対しては十分に効果を発揮してくれるだろうし、本来では明日菜がエヴァに触れてもエヴァの吸血鬼化が解除されないのでエヴァがいきなり死ぬ事も無いと踏んでいる。

その特性上、エヴァの登校地獄の呪いは魔眼を使って、きちんとした登校地獄の呪いを形成している起点に突き立てないとあまり意味は無いんだけどさ。

それが無理だった場合なら天翼で断ち切る。

「……よかろう。　元々エヴァンジェリンはお主が預けて行ったからのう……」

学園長は髭をなぞりながら言う。

「自称・正義感の強い魔法使い（笑）共が反発しそうだが、そっちで押さえておけ。

この前、襲撃してきたアホ共は新しい魔法の実験の為に殺さなかったが、次は殺さない保証は無いからな？」

俺は鋭い視線を送る。

「言い含めておこう」

学園長は冷や汗を流しながら了承した。

「所で話は変わるのじゃが……満月の夜にネギ君と決闘をすると聞いたが本当かの？」

「事実だ。　エヴァを悪役にしてまでやる事じゃないと思ってね。代わりに俺が叩き潰してやろうと思ったまでさ。
パートナーを連れて来たのなら例え明日菜だろうと、木乃香だろうと、その他のクラスメイトだろうと、骨の一本でも折って目を覚まさせるつもりだ。
言葉で言っても首を突っ込む愚か者は身体に直接恐怖を刻みつける。　それが最も効率的だ」

「それはならんッ！！　お主自身が言ったではないかッ！！　明日菜君や木乃香を巻き込んだら承知しないと！」

学園長が激昂する。

「飽くまで俺の邪魔をしない事、敵に回らない事が前提の約束だ。敵対すれば俺は容赦しないという事を織り込み済みでの約束だと言ったぞ？
もう忘れたのか？　約束？　確かに約束はした。　だが自ら地雷原を突き進む奴らの為に地雷撤去をする義理なんて無い。

死ぬなら勝手に他人を巻き込まずに死ねばいい。　知り合い？
だからどうした？
今時ペットだって飼い主の言う事を良く聞くぞ？
そもそもの原因はこんな茶番を仕掛け、傍観していたお前の落ち度だよ学園長殿。
俺はそれに便乗しただけだ。
精々、自分の生徒や孫が厄災の女王の息子に巻き込まれないように祈れ」

俺は冷酷に言い、学園長室を後にした。

第２２翼　封印解除、襲撃される紫の麗人（後書き）

朱然さんが壊れた。
近かった人が随分と遠くに行ってしまった様な・・・・・・そんな感覚が・・・・・・。
何だろう？　書いていると、朱然さんの方が受けになってしまう。
最近、女体化スキルを手に入れた所為かも？
よくわからん方へと向かっている様な気がしてならない・・・・・・。

それはさて置いて、次回で吸血鬼編が終わる予定。
早ッ！？　という突っ込みは文の長さでカバーしたいと思います。
一話が大体４０００～５０００文字位なので、多分次回は１０００文字位になると思いますです。

第２３翼　吸血鬼事件終結、壊す紫の麗人（前書き）

お待たせしました。
ネギフルボッコの回です。
唯、四捨五入すれば１５０００文字。
作者の作品だと三話分位の長さなので、読みづらいかもしれない事と見直しはなるべくしたつもりですが、何所か変な所があるかもしれません。

第２３翼　吸血鬼事件終結、壊す紫の麗人

――――――カランカラン

夕暮れ時、Ｓｃａｒｌｅｔのドアが開いてベルが店内に鳴り響く。

「いらっしゃいませ～」

俺はノーラになっているので何所か柔らかい口調で間延びした、スローモーな挨拶を来店した客に対して送った。

「お、お邪魔しまーす」

そう言って入って恐る恐る入って来たのはネギ・スプリングフィールドだった。

「坊や、迷子～？」

奴を見るとついつい意地悪をしたくなる。
悪意をぶつけてみたくなる。
でもそれは今の所、悪意であって害意ではない。
傷つける気は毛頭無いのだが。

「ち、違います！　最近、ルーデシアさんが寮に帰っていなくて、バイト先にならいるかもしれないと聞いたものですから……」

迷子と間違われ、あたふたしたと思ったら、しゅんとなるネギ。
その仕草は可愛いものだと十人中八人は言うだろうが、生憎俺は二人の方で、寧ろ煩わしいと思う。

「ルーデシアなら此処に居ますよ～」

だが、今はルーデシアではなく、ノーラであり、ネギ・スプリングフィールドの敵ではない。

「ほ、ホントですか……ッ？！」

ネギがキョロキョロと警戒をする。

「今は用事で居ませんけど、最近は此処に泊まりきりですね～」

「ホッ、良かった……（アレ？　何か魔法の気配が……）」

ネギが胸に手を当て、一息ついた所で魔導書の方へ歩いて、引き抜く。

「あの、店員さん。　これは……？」

「はいはい～、ご案内～」

その行為は、この店のお決まりなので例え嫌いな相手でも魔導書を棚に戻し、ネギを押して地下へ案内する。

そして――――――

「うわぁ～！！」

数々の魔法具にネギは目を輝かせる。

「此処は魔法具専門店だったんですかお姉さん？！」

興奮した面持ちで振り返り言うネギ。

「こういう事なら俺っちも普通に喋れるってもんだぜ！」

いつの間にかネギの肩に乗って喋るカモ。

「此処は魔法具専門店ではありませんよ～。　店主の趣味で造られた品々を販売する店ですよ～」

「趣味ですか～。　あ、コレなんか凄いよカモ君！」

「おほ……ッ！　こんな上物、魔法世界にも稀にみるぜ！」

そんな風に品々が飾ってある棚の間を歩いて見て回るネギの足が杖のコーナーで止まった。

「これは……」

ネギの視線がその杖に釘付けになる。

「兄貴……？」

カモがネギを呼ぶがそれすら聞こえていない様だ。

「ああ、それですか～」

俺は合点がいった様に言う。

「これは……僕の、ううん」

ネギは何かを最後まで言いかけて、頭(かぶり)を振って中断し、また口を開いた。

「父さんと同じ形の……杖……」

呟きとも言える小ささで言うネギ。

俺は聞こえなかったふりをして、説明を始める。

「それは彼の英雄、千の呪文の男と謳われたナギ・スプリングフィールドとほぼ同一の杖ですね～。

此処、Ｓｃａｒｌｅｔの店主とその友人の合同オーダーメイド……一点物にしてナギ・スプリングフィールドに託された杖のプロトタイプです～。

この杖を更に改良し、彼に合わせてチューンした杖が当時、彼の持っていたとされる杖なのですよ～」

これはホントの話だ。

俺が作ったのだー。

「此処の店長さんのお名前は?!」

ネギが今の話でかなり興味を持った様だ。

「残念ですが、私達アルバイト共には一様に『店長』と呼ぶようにと言われていますので～……」

「そう、ですか……」

またもや、しゅんとするネギ。

「この杖にゃ、値札が付いてねーみてーだが？」

カモが何所からか取り出した煙草に火を付けながら言う。

「この杖に値段は付けられません。　店長が言うには持つべき者が来た時に託す杖、とのことですので～」

俺はやんわりと言い、カモの煙草を取り上げた。

一応、此処は禁煙なのでね。

そして、もし、この杖を使うとしたらそれは……。

「そろそろ閉店の時間となってしまいましたので、上へどうぞ～」

俺は半ば強引にネギを上へ押しやった。

「それではまたのお越しを～」

去って行くネギに対して礼をして送り出す。

ネギの姿が見えなくなってから、俺は店じまいをして工房の椅子に深く腰掛ける。

そして、去り際に、ル、ルーデシアさんに渡してください！と渡された物をしげしげと見てから取り出す。

その渡された物とは果たし状だった。

此方から売った喧嘩だと言うのに、向こうからも態々喧嘩を売りに来たのだろう。

内容は簡潔にして単純。

満月の夜……つまり今夜。
麻帆良学園中等部グラウンドにて待つ、との事だ。
場所指定は此方がしていなかったので別に良い。
恐らく指定した場所にはネギにとって、何らかのアドバンテージのある場所か細工した場所なのだろう。
俺はその程度で倒せるほど甘い相手じゃないぞ？

果たし状と書かれた紙をくしゃくしゃに丸めて、ごみ箱に投げ入れた。
丸められた果たし状は寸分違わぬ精度で吸い込まれた。

満月が浮かび、学園全体を明るく照らす夜。
麻帆良学園の電源が落ち、いつもよりも星の瞬きがはっきり見える。
だが、俺は空ではなく真っ直ぐに相対している者達を見る。
柔らかな風が吹き、ルーデシアの時によく着る蒼一色に染め上げられている下品にならない位にフリルの付いたドレスのスカートが揺れる。

「ルーデシアさん……来てくれてありがとうございます」

どうやら奇襲された日から時間を置いた為か頭が冷えたらしく、今は平静の様だ。

「別に……私から売った喧嘩だもの。　結局、来てしまったのね神

楽坂明日菜さん？」

「前みたいに、このガキんちょが怪我をするのを保護者として黙って見過ごせる訳ないじゃない！」

「そう……なら、容赦無く敵としてお相手しましょう。　開始のタイミングはそちらに任せるわ」

当然の様にネギ達に言う。

ネギ達は即座に行動に移った。

「吸血鬼事件はエヴァンジェリンさんの仕業でした。　その事は学園長に報告したので、事件解決です。

濡れ衣を着せてしまってごめんなさい」

ネギは素直に頭を下げる。

「でも、父さんの事と村を襲った犯人の事は話してもらいます！」

「その為に教え子に魔法を……他者を容易く傷つけ、殺せる力を向けると言うのかしら？」

当然の事を俺は問う。

「僕はどんな些細で小さな事でも知りたいんです！　６年前の事を！　父さんの事を！」

ネギはもうその事で頭が一杯のようで俺の問いには答えない。

俺はそう、と一言だけ言って臨戦態勢を取る。

「さあ、そろそろ始めましょう？　無意味な問答はこれまでよ……訊き出せるものならば死力を以て挑みなさい」

「では先程のお言葉に甘えて……行きますッ！！」

その瞬間に明日菜が一般人の範疇を越えた速さで此方に向かってきた。

どうやら契約執行をしない所を見ると、仮契約はまだの様だな……。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！！
闇夜切り裂く（ウーヌス・フルゴル）　一条の光（コンキデンス・ノクテム・メア・マヌー・エンス）　我が手に宿りて　敵を喰らえ（イニミークム・エダット）！！」

明日菜が飛び退くと同時にカモが飛び出し――――――

「オコジョフラーシュッ！！」

カモがマグネシウムにカモ自身が愛用しているジッポライターの火を近づけ、熱せられたマグネシウムは化学反応に従って目も眩む閃光を発する。

此方の目が眩んだ絶妙なタイミングでネギの魔法が完成した。
正に一条の白雷が俺に向かってくるのを肌で感じる。
即座にカモを叩き落とし、瞬動で安全圏まで距離を離した。
俺が居た場所に白き雷（フルグラティオー・アルビカンス）が通り過ぎて行った。
「白き雷ッ！！」
そこに明日菜が突っ込んでくる。
俺は即座に袖から文房具で武装し、削った鉛筆、筆、コンパス、

三色ボールペン、油性マジック、水性マジック、色鉛筆、万年筆、ペーパーナイフ、ソーイングセットの各種針、各種彫刻刀、シャープペンシル、三十センチ定規、筆を棒手裏剣の様に投擲し、分度器、三角定規を手裏剣の様に投げる。

しかし、明日菜は動体視力も常軌を逸しているらしく、驚きながらも次々と避けて距離を詰めて来る。

元が付くとはいえ、やはり魔法世界の住人か……侮れないポテンシャルだな。

「ゴメンッ！！」

明日菜の謝りながら放たれたデコピンを俺は左腕で弾き上げ、回転して即座に左手と右手の指の間にそれぞれ2本ずつ挟んだのり、修正液、各種絵具、アロンアルファ、ボンドを思い切り握り、中身を明日菜の眼へと向けて発射する。

至近距離から眼潰し目的で放たれたそれぞれの中身はバックステップと上体を逸らす事で避けられ、避けた事で体勢を崩した明日菜の足払いを掛ける。

きゃあッ！？という声と共に地面に倒れる明日菜の腹部に蹴撃を叩き込もうとした所で、ネギの魔法の矢・光の１１矢を放ってきた。

俺は即座に気を纏わせた教師用の三角定規で魔法の矢を叩き払ったが、その隙に明日菜が俺の両足を掴んで動けなくする。

今のネギは近接戦闘を覚えていないはずなのに風の魔法で強化しているネギの早さは常人ならば驚く程の速度で俺に肉薄してくる。

その真意は至近距離からの最大攻撃！

普通であればこれで決着するだろう。

明日菜が俺の足を掴んでいるという事は肉体を直接強化する事は

出来ても障壁は展開できない、という事なのだから。
更にこの時点でのネギが放てる呪文で高威力のものだとするのなら、それは即ち雷系上級の射程、威力重視魔法である雷の暴風だと推察できる。
その攻撃範囲は敢えて言うならば点だが、至近距離となれば面の攻撃と言っても過言ではない。
他の学校と比べ、広いグラウンドであるこの場所は校舎の方を向いていなければ、少し斜め上を狙って撃つ事で被害は皆無と言って良いだろう。
それに加え、至近距離から上半身を狙っているらしいので、足元の明日菜に当る事はほぼ無い。
よしんば当たったとしても明日菜には魔法完全無効化能力によって魔法が効かないのだ。
対して俺や他の魔法使いならば中級の魔法でさえ、障壁を使わなければ致命的なダメージを受ける可能性も低くはない。
いわゆる詰みだ。

そう――――俺が普通の魔法使いだったならばの話だが。

残念な事に、俺は普通ではなく、更にどちらかと言えば接近戦に特化している魔法剣士を基本としたスタイルだ。

この程度の殺意も無ければ殺気も無いぬるい攻撃、失笑に伏して乗り切れなければ今まで相手にしてきた猛者達に失礼だろうが――――!!

「チェックメイトです！　解放（エーミッタム）！　雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）！」

ネギが勝利の確信を得たかのような笑みと共に遅延呪文（ディレイスペル）を解放し、やはり雷の暴風を至近距離で撃ってきた。

先程も思った事だが、何の防御も無く雷の暴風を至近距離で受けるのは、俺でも不味かった。

故に即座に足元の明日菜の腕を掴み上げ、盾にした。

「きゃあああああッ！！」

明日菜の身体に命中した雷の暴風は打ち消された。

「明日菜さんッ？！」

「姐さんッ？！」

雷の暴風は一度放ったら軌道の変更は出来ない。

なので魔力完全無効化能力の明日菜を盾にした。

その盾の役目を終えた明日菜をネギに向かって思い切り投げ飛ばした。

「うわッ？！」

「きゃッ？！」

不意打ちだったにも拘わらず、受け止めようとしたネギは当然の様に明日菜に押し潰された。

「これで終わりなのかしら？」

詰まらなそうに……それでいて失望を表情を浮かべながら俺は言う。

――――――お前の本気は、お前の覚悟はこの程度なのかと

「まだです！　僕は……ッ！」

その表情にネギは反応し、敵意を剥き出しにしているが、カモと明日菜が咄嗟に押し留める。

「兄貴ッ！　仕方ねぇ、仕切り直しだ！」

「そうね！」

そう言って、明日菜はネギを肩に担いで猛スピードで走り去った。

やれやれ、今度は鬼ごっこか？

あの反応から言ってまだ手札を残している感じだな、バレバレな挙動だよ……。

俺は内心溜息を吐いて詠唱を始める。

「ミルティー　メルティー　ブラッディー　圧縮術式解放（アウラエグゼク）・解放キー（イェハール）、氷（シヴァ）を従える破壊神　認証コード・２８９　顕現（トルム）せよ！（オーヴィクルパーシェ　ジオクタネイ）」

白銀の魔法陣が俺の目の前に現れ、巨大な氷の柱が出来た所で砕け散った。

そして、青白い肌に美しい容姿を持つ女神、シヴァが向かい合う様に現れる。

「ドライビングモード！」

シヴァにそう命令を下すと跳躍してから仰向けになる様に倒れ込んで、バイクへと変わる。

俺の目の前には見方によって白や水色、青に見える色とそれを引き立てる金、光に反射した雪の様な白銀と透き通る氷の様な透明のボディを持つ、美しいフォルムをした形へと姿を変えたシヴァの姿があった。

うむ、まずまずの出来だ……徹夜して造形を考えただけの事はある。

さて自画自賛もここまでにして追いますかね。

スカートを上手く畳んでシヴァに跨り、エンジン？を吹かして走り出す。

そのバイクが走った後には路面が凍り、霜が出来た。

だがそのタイヤは滑る事は無く、着実にネギ達との距離を詰めて行く。

「ゲッ、バイクかよ？！　どっから出したんだ！？」

「嘘……ッ？！」

追い付いて来た俺に対して、カモと明日菜の驚愕の声が届く。

「明日菜さん！」

「わかった！」

追いつかれた事も作戦内だったのか平静を取り戻したネギは明日

菜の肩から飛び降り、空中で杖に跨って明日菜とは違う方向へ飛んでいった。
ネギは空、明日菜はバイクの入りにくい路地を経由して目的の場所へ向かっている様だ。
当然、俺はネギを追う。
そう考えるのが当たり前だ……だって標的は始めからネギなんだから。
ネギは川を辿って橋の方へ向かう様だ。

でもバイクは川を走れないし飛べない、これは真理だ。
認めよう……だが減点1だネギ・スプリングフィールド！
このバイクは氷の女神が成ったものだ。
川の水を空中に集めて路面作るなんて事、出来て当たり前だぞ！

俺はシヴァに跨ったまま階段に差し掛かった所でスピードを緩めず、更にスピードを上げて空中へと身を躍らせた。
それと同時に白銀の魔法陣が展開し、目下にある川から水を巻き上げて空中に氷の路を築き上げた。
ネギが飛んでいるのは川の真上。
路を作る為の材料は嫌という程、存在しているのだから。

「そ、そんなッ？！」

「在りえねぇ……何なんだあの姉さんは？！」

俺の滅茶苦茶な追撃に絶句する。

驚くのはまだ早い！

運転をシヴァに任せ、俺は両腕からSカトラスを取り出し、魔法

弾を連射した。
それこそありとあらゆる魔法がネギへと迫るが意外にも器用に杖を操り、回避をする。
それでも炎が、氷が、雷が、風がネギを傷つける。
ネギ自身へ、火傷、凍傷、裂傷などが刻まれていく。
更にシヴァが川の水を使って氷の弾丸をガトリングガンの如く乱射した。
圧倒的にネギが不利な形で川はいつしか河になり、吸血鬼編最後の舞台となった橋へと到達した。
俺はシヴァを普通形態に戻し、橋の上で対峙する。

「鬼ごっこはもう終わりかしら？」

俺はゆっくりとネギへ向けて歩く。

「本当に教えてくれないんですか？」

ネギの本当の狙いを知りながら。

「くどいわ……しつこい人は誰であれ嫌われるわよ？」

そして――――――

――――――予定通りに捕縛結界が俺とシヴァを拘束した。

「やったぁ！！　これで僕の勝ちですねッ！！　父さんの事と６年前の事を教えてもらいます！」

嬉々とした表情で喜ぶネギ。
遅れながら明日菜もやってきたようだ。

「やったのネギ?!」

「はい!」

「大勝利だぜ!!」

何と無邪気なのだろう……無邪気過ぎて、無防備過ぎて、それでいて……反吐が出そうだ。

俺とシヴァは原作のエヴァとは違って力押しで捕縛結界を壊した。

ネギ達の表情が固まり、真っ青に変わる。

「で?」

「ひッ」

思わず悲鳴を漏らすネギ。

「勝った? 何を言っているの? 私、捕まったら負けだって言ったかしら?」

「な、何言ってんのよ! そんなこと言ったら、後はもう……」

「そうよ……殺し合いになる。 当然よね? でも私は捕獲したら終わりなんて結末を望まない。

自分の過去を知りたいが為に貴方が見落としていた事の一つよネギ・スプリングフィールド?」

俺は淡々と言う。

さあ、問題だネギ・スプリングフィールド。
お前はどう行動して、どんな結末を選び取る？

「そ、そんな、事は――――――」

「そんな事できる筈ないじゃない！」

「――――――……」

「そうよね？　普通なら……でも私はそれが出来る人間で勝負を受けたのは貴方達。
降参なんて受け付けないわ……でもそうね、貴方達が助かる術を考えているわ」

まずは第一問だ。

「何よそれ？」

明日菜は俺を睨みつける。

「簡単よ……貴方達が殺し合いをして勝ち残った方を見逃してあげる」

お前は他人を踏みつけて自分を貫く事が出来るのか？

「ふざけんな！！　そんな事、出来る訳ねーだろッ！！」

カモが怒鳴る。

「もちろん景品は用意するわ。

ネギ君が神楽坂明日菜を殺して勝ったらヒントだけと言わず、６年前の村を襲撃した犯人と黒幕……そして、ナギ・スプリングフィールドの今の生死の情報を教えてあげる……どう？

逆に神楽坂明日菜がネギ・スプリングフィールドに殺されてしまった場合、そうね……タカミチ・Ｔ・高畑を殺すとしましょう。

神楽坂明日菜、貴方が勝てばタカミチ・Ｔ・高畑の命を見逃してあげる。

ああ……タカミチが私に負ける筈ないと思っているのなら大間違いよ？

タカミチが広域指導員で強いと言っても、私よりは数段劣るから十分に殺せるわ」

どちらも引けない理由を掲示したぞ？

「「な……ッ！？」」

俺は悪魔みたいな提案を提示する。

方や自らの過去を知る為。

方や初恋の人物の命を救う為。

さあ……お前達はどんな選択を選ぶ？

自分の為に他人を踏みつける選択か、どちらも助ける為に到底勝てない相手に協力し挑む選択か？

「因みに今回の趣旨通り、私を二人で協力して殺すという選択肢もあるわ。　さあ選びなさい。

私はどれをしても一向に構わない。　殺し合うか、それとも私を殺すか。

唯、逃げると言う選択肢をした時点で私は二人を殺すわ」

死刑宣告を突き付ける。
もし殺し合いを始めたらネギを殺し、明日菜の記憶を再封印するつもりだ。
そして、ネギに関わった全ての人物の記憶を俺が削除する。
自分の為に他人を犠牲にする選択肢を選ぶなら俺は迷いなく殺す。
逆に二人がそのまま俺に向かってくるのなら俺は気絶させるだけに留めるつもりだ。
だが、その二人が仮契約を結んだ場合はもう一芝居打つ事になる。
その時は痛い目を見てもらう。

「決まったかしら？」

「ぼ、僕は――――――」

「出来る訳ない！」

「――――明日菜さんッ？！」

「アンタは殺せる訳ない！」

明日菜は俺を睨みつけ、言う。

「ネギッ、仮契約よ！」

「え……ッ！？」

明日菜の提案に驚く。

「よく考えなさいネギ・スプリングフィールド。　一般人である神楽坂明日菜を巻き込むのかしら？　魔法は人を救う？

違うわ……魔法は所詮、手段でしかないの。
始めからこの世界で共通のものだったらまだしも、この世界で魔法は秘匿されている。
その意味を良く考えなさい。　私は今まで貴方を監視していたわ。
問題が無かったのならそれでもよかった。
でも貴方はトラブルを起こし過ぎた。　子供だからと言って見逃せない程に。
普通の魔法使いなら魔法使いである事がバレた時点でオコジョ決定なのにも拘わらず、貴方が何故オコジョにされなかったか知っているかしら？」

「し、知りません……」

「いいえ、貴方は良く知っているわ。　その理由を。
それは貴方が、いえ……貴方の父親であるサウザントマスターという英雄の息子だったからよ。
貴方は特別扱いされているからこそ、大目に見られているからこそ、今まで普通に生活していられた。
それだけではなく教師という人に道を示す立場であるにも拘らず、頭の良くなる魔法書に頼ろうとする。
授業中に野球拳をする。　堂々と混浴する。　異性と同じ部屋で生活する。
問題だらけで普通なら前代未聞の不祥事のオンパレード。
それもこれも結局の所、貴方は周りに甘えているだけ、これの何所が問題じゃないと言うの？
子供と言うだけでも許される事じゃない……サウザントマスターの息子だから許される訳じゃない。
周りの大人が勝手にした事だとしても許されない。
魔法使いとして必要最低限の事さえできない……無自覚に周りを巻き込んでいく事が何よりも許されない事よ」

俺は今までの鬱憤を晴らすかの様に問題を羅列していく。

「そ、それは――――――」

「あまつさえ生徒でもある私に大呪文を放つなんて、最低ね？　私じゃなければ死んでいたわ」

「――――――……」

「ネギ！　アンタは自信を持ちなさい！　自分の事を知りたいと思う事は悪い事なんかじゃないわ！
だから仮契約してアイツを倒せばそれで終わりよ！」

「そうだぜ！　あの姉さんを倒しちまえば殺さなくてもいいはずさ！」

「そうですよね！」

なるほど……そうだよな。
ネギだけが悪いんじゃない。
首を突っ込み、無責任な自信を与える明日菜と余計な入れ知恵をするアルベール・カモミールも悪い意味で居たからこそ、面倒な事になって行くんだよな……。

「善は急げだ……ッ！　兄貴！　姐さん！」

オコジョが魔法陣を書き、ネギと明日菜はキスをした。

「仮契約（パクティオー）！！」

仮契約をしてしまった。
させてしまったなッ、ネギ・スプリングフィールド！！
これでこのシナリオは……お前にとって最悪の展開に突入したぞッ！！

「降参してくださいルーデシアさん！
契約執行　１８０秒間！　ナギの従者『神楽坂明日菜』！
能力発動！　神楽坂明日菜！　ハマノツルギ！」

「そうだぜ！　仮契約は知ってんだろぉ！！？」

ネギ達が途端に強気になり、カモが勝ち誇ったように言う。

「は、ハリセン？！」

しかし、明日菜に現れたハマノツルギはスチールハリセンの形状を持っていて、明日菜は少しガックリ来た様だ。

「ああ、そう……ついに貴方は一般人を取り返し出来ない所にまで引き込んだわね？
もう、手加減する必要は無くなったわ」

言い終わった所で明日菜を連れて元居た場所に戻り、シヴァに持たせる。
シヴァは明日菜の能力で精霊がどんどん消費されている。
早く決着を着けないといけないな。

「な？！　いつの間に？！」

俺の明日菜捕獲の一連の行動が見えていない事に驚く。

「仮契約は確かに強力なアーティファクトを与え、従者を強くする事が出来る。　でも……結局、その程度よ。
過信は良くないわ……減点2よ」

「そ、そんな、嘘だ……大呪文だって覚えたし……魔法学校も首席で……立派な魔法使い見習いで……」

ネギはガクガクと震える。

「離しなさいよッ！　しっかりしなさいネギッ！　私は良いからコイツを――――――ア〝ア〝ァァァッ！！？」

明日菜の左足の脛が曲がる筈の無い方へ曲がり、絶叫が夜空に響き渡るが程なくして本人が気絶したので悲鳴は止まる。
余計な事を言ったので左足を蹴り折った。
骨折程度なら俺の治癒魔法で傷も無く治せる。

これも自己責任だアスナ。
この戦いが本当の殺し合いじゃなく、殺されないだけ幸運だと思え。

「まずは一本よ。　次は腕でも折ってみましょうか？」

「なんて事するんですかッ！！」

ネギが激昂する。

さあ……お待ちかねの第二問だ。
お前にとっての正義とは何だ？

「何をする？　何を言っているの？　唯、骨を折っただけでしょう？
貴方が巻き込んだから貴方が彼女を強く止められなかったから私は彼女を人質にした。
巻き込んだのは他でもない貴方自身よ。　自分の所為だと認めないのなら別に良いじゃないかしら？
所詮、自己責任よ。　彼女にも責任はあるのだし、言動から言って自分から首を突っ込んだのでしょう？
一人の立派な魔法使いとして魔法を漏らした貴方と関わろうとする彼女に……正義の名の下に貴方達を罰します」

「立派な魔法使い？！　正義？！　それの何所が立派な正義なんです？！　だからと言ってやり過ぎです！！
責任は僕にあるんですから僕を好きにすればいいでしょうッ！？」

だからだよ。
自分の痛みは耐えられたとしても同じ事を繰り返す可能性があるからこそ、この手段を取らせてもらった。
どうせ学園長が此方を見ているのは知っているし、そっちにも責任はあるんだ。
そもそも俺は原作を無視しても一向に構わないんだ。
唯、今まで戦い抜いて来て介入しなかった時の保険を掛けておきたかったから来ただけだった。
だが、お前はあまりにも自覚が無さ過ぎる。
力を持つ者はその力を自分自身に出来る事と出来ない事、周りに与える影響を自覚して行動しなくてはいけない。
だがネギ・スプリングフィールドはあまりにもお粗末過ぎた。
それが許せなかったから俺は今、此処に居て俺はお前の敵になっ

ている！

「無理ね。　私はやめないわ。　立派な魔法使いと正義の魔法使いは決して同義ではないわ」

「何故です……ッ？！　立派な……偉大な魔法使いになる事は正しい筈です！」

「偉大な魔法使いも正義も人それぞれが自分の価値観から見出すものよ。　そこに絶対的な正義はありはしないわ。
魔法に関わった物は記憶を消さなければならない……これは常識。
それを越えて尚、首を突っ込む者には命を以て思い知らせるのも止む負えない事。
それもまた魔法を秘匿する為の正義と言えるわ。　つまり口封じね？　まあ、これは極論だけれど。
容認しているわよ？　魔法世界の偉い人達はね？　さて、正義とか悪とか、そんな言葉遊びもそろそろ終わりにしましょう。
次は少しだけ……そう、ほんのちょっとだけ教えてあげるわ。
貴方の村の事を」

万が一にも勝ったらヒントとやると言ったが、仮契約をしてしまったからにはそれなりの情報を与え、お前のトラウマを刺激し、引き擦り出す為に少しだけ教えてやろう。
お前に思い知らせる為にな。
さあ……第3問、これが最終問題だ……次の問題でお前は何所まで取り乱す？

――――――6年前、雪の降る夜……私は一度、貴方の村に行った事があるわ。

「何だって……ッ？！」

「悪魔達が押し寄せ、村人達が次々に石に変えられていく様を私は良く知っている。　だって私もあの夜に村に居合わせたから」

一瞬の沈黙。
言葉は無い。
唯、その場には一時の沈黙だけ支配している。

「貴方が村を襲ったのか？」

短絡的な思考だ……余裕が無くなって満足な思考が出来ないだけか。

「違うわ……でも私は貴方の村を襲った犯人を知っているし、私はその襲撃の指揮を執っていた犯人を助けた」

「何故だッ！！」

ネギは自分の取り繕った仮面を取り払った。
周囲には魔力が溢れ出し、風が逆巻く。
今まで黙っていたカモが吹き飛ばされ、骨の折られて気絶した明

日菜も最早、眼中に無い様だ。

自分の事ばかりか。

なら、俺の取るべき行動は決まったよ。

愚かで……浅はかなお前には……もう、ためらう必要もない。

「だって彼女は操られていただけだったから」

そう……風の少女、ルクレツィアは命令されただけ。

それだけで事実が消える訳でも無ければ罪も咎も消えはしない。

「それでも！　僕の村を襲った事には変わりないじゃないか……ッ！！」

ああ、そうさ……真実は見る人によって様々だ。

彼女は知らぬ内に人を石化させ、一つの村を滅ぼしたという罪を背負い、身体的な欠陥を抱えたまま死ぬという咎を抱えて生きるだろう。

対価は既に支払われている。

「なら貴方がこの学園に来た所為で、巻き込んだ所為で神楽坂明日菜が左足を折ったのは違うと言うの？」

お前の所為で傷ついた明日菜を忘れるなよ。

それはお前の罪の一つで、これからも数え切れない罪が増え、お前に圧し掛かって行くんだぞ？

「そんなの貴方がやった事を棚に上げているだけだッ！！」

その通りだ。

俺が神楽坂明日菜の左足を折った事に変わりは無い。
俺の罪でもある。
だがそれも瑣末な事だよ。
忠告はした。
それを無視したのなら、それは俺の価値観の中で自業自得の事だと認識しているからだ。
罪を償う明確な行為がない以上、それは折り合いをつけて背負うしかないんだよ。
罪が、咎が許される事なんて、きっと……ない。

「いいえ、同じよ……貴方が居たから私は麻帆良学園に来た。　貴方が巻き込んだから今日はこうして彼女も戦った。
立派な魔法使いや英雄と言われるナギも同じよ。　戦争中、己の信念を貫いた事で殺した人は千や2千じゃ、きかないわ。
千の雷……ナギが得意としていた広域殲滅呪文の所為で何人の罪の無い人が巻き添えになったか知っているかしら？
結局、ナギも、紅き翼の他の仲間も、殺して殺して殺し続けて敵対する者が居なくなったから戦争が終わって……英雄に仕立て上げられて崇められた。
貴方はナギ・スプリングフィールドという人物を勘違いしているわ……英雄とは多くの犠牲を肯定する者であり、周りを巻き込んでいく者を指す言葉よ。
ましてや英雄はなるものではなく、祭り上げられ、押しつけられ、利用され、都合の良い生贄にされる者の称号よ。
そういった意味で言うならば貴方も近い未来、誰かに英雄という称号を与えられるでしょうね。
そして最後には英雄という称号によって恨まれ、妬まれ、押し潰されて……友達を、家族を、仲間を、巻き込んで自滅するわ」

それはかつて俺と出会い、そう在ったエミヤシロウの様に――――

「なら僕は全てを救って見せる！！」

それは衛宮士郎が語った愚かな理想の様に――――

「無理よ……だって貴方は現に私程度をどうにも出来ないじゃない。全てを救える？
思いあがらないでネギ・スプリングフィールド。　全てを救う事なんて、神様でも出来ない事よ。
それを成そうと本気で思っているのなら、それを成そうとこれから志す事を誓ったとしたら……きっと貴方は人間として壊れていくわ」

「なら壊れていてもいい！　壊れたとしても僕は！　僕は全部を守る！　父さんみたいになってみせるって誓ってッ！！」

――――ネギはその愚かな誓いを、道を、夢を、理想を肯定する。

「ならまずはその減らず口を叩く前に私を越えて証明してみなさい。
自分が正しいという事を。
さっきも言ったけれど所詮、善悪なんて言葉遊びに過ぎない。
人は自分の裁量で善悪を決めて行く。
真に公平な判断を持ったとしても、それは自分の大切な人も平等に犠牲にする覚悟がいる。
そもそも公平な人間なんてこの世には絶対に存在しない。
だったら人は自分が正しいと思ったものを信じる他にないじゃない。
貴方が本当にそれを成したいと思うのなら、明確に自分の立ち位置を決めて、信念を持って貫き通す決意をなさい。
それすらできないなら、貴方は6年前に失いかけたものを今度こそ全てを失うわ」

「嫌だッ！！　もう失うのは嫌だッ！！　僕はッ！！　僕は結局、何を目指してッ！？　あ、ああァァァァッ！！？」

ネギはついに自我を失い、魔力の暴走で強化した力で突っ込んでくる。
壊れた、か。

「今は唯、圧倒的な力には打ち倒されて打ちのめされるという事を覚えなさい。　力無き者には何も成せやしないのだから。
凍てつく冬の吹雪（クオルガ・ヒュフ・クイバーレ）」

その命令をシヴァは迅速に遂行した。
明日菜を離し、シヴァは己の口から吐息を漏らす。
それだけで圧倒的な吹雪がネギを包み、凍らせた。

その後、指を鳴らして敵（ネギ）を氷結粉砕する所で――――――

「シヴァ、此処までで良いわ」

――――――俺は停止を命令した。

次はネギに折り合いをつけるという事を教える必要が出来たな。

さて、まずは治癒魔法と回復薬かな。

そう思い視線を学園都市中心部に向けると、電力が回復した為に徐々に街の光が灯る幻想的な光景が目に映った。

こうして吸血鬼事件は一応の終幕となる。

俺はネギと明日菜を治療し、大急ぎで向かってきた学園長に治療を完了した状態で預けた。

学園長、タカミチ、その他の魔法先生達は俺に畏怖を感じたよう

だ。
そんな視線を感じる。
特にタカミチは俺の思惑を理解できていないようだった。
何せ本気で骨を折ったりしたり、この橋を完全凍結させてしまったし。
それは明日辺りに説明でもしに行こう。
取り敢えず、これでネギは自身の行いに責任を持つようになっただろうし、これからを進む為に力を蓄える筈だ。
明日菜の方も、もうちょっと自重する事を覚えただろう。
今回の件で手を引くという選択をするのならそれもまた良し。
ネギは最後の問答的に、このまま修行を積むだろう。
結局の所、ネギは衛宮士郎の一歩手前のようになっていたのだと思う。
Ｆａｔｅの世界でほんの数回だけだが会った事のある本物の衛宮士郎は異常ではなく、異質だと感じた。
ネギと会った時も少しだけそんな感じがしたから今回の問答を思いついたのだ。
２人は何所か境遇が似通い過ぎている。
幼き日に失って助けられ、父の姿を追い求めてしまった。
違うのは全てを失ったか、失わなかったかの違い。
衛宮士郎は極端に、ネギは中途半端に失ったという事。
ネギはその後も周りからの過保護で壊れる事も出来ず、周りからの期待によって普通になる事を許されなかった。
今回、俺の選択した事は普通になれないのならいっその事……一度、徹底的に壊してしまう事。
衛宮士郎は壊れたまま時間が立ち過ぎてもう直せなかったが、壊れたばかりのネギならば、全てを失っていないのならば、自覚を持ったのならば、その壊れた心を直す事は可能だと判断したから俺はネギの心を壊した。
これからはネギを直す。

それが壊した張本人である俺の責任でもあり、仕事なのだから。

第２３翼　吸血鬼事件終結、壊す紫の麗人（後書き）

という訳で、三話分のお話でした。
お疲れさまでした！

次回はちょっとした話を入れて、次次回修学旅行編へ突入します。
多分・・・・・・。

誤字修正しました。

第２４翼　微洗脳完了、結構アバウトな紫の麗人（前書き）

何とか書いてみた２４話・・・・・急いで書いたのでちょっと誤字脱字が心配です。

第２４翼　微洗脳完了、結構アバウトな紫の麗人

「ルノーさん居るー？！」

寮の部屋で仮眠を取っていると、ノックと共に明日菜の声が聞こえてきた。

インターホンも付いているのだが、最初に鳴った時に鬱陶しい思ったので電池を抜いたのだ。

あまりにも眠かったので無視しようと思ったのだが、ノックが少ししてドンドンと取りたて屋の様な勢いに変わって戸を乱打してくる。

俺は仕方なく起こされ、部屋の鍵を開けて、扉を開いた。

「「なッ？！」」

その瞬間、訪問者が驚きの声を上げた。

何故、声が２つ分あるのかというと、ネギも居たからだ。

「ちょ、ネギ見るんじゃないッ！って、自分から後ろを向くなんて偉いじゃない……」

明日菜がネギの取った行動を褒める。

ネギが即座に俺を見た瞬間に回れ右をしたからだろう。

今までのネギならば恐らく明日菜に殴り飛ばされるまで見続けていた筈だ。

そう言えばまだ俺の格好を教えていなかったな。

俺は今ルーデシアバージョンで、寝る時は全裸派だ。

すまない端折り過ぎた。

つまり昨日からの状況を含めて詳しく説明するならば、ルーデシアバージョンで徹夜をしていて、やっと作業も終わったので寝る為に寮に帰り、部屋の鍵を掛け、玄関から部屋まで歩く過程で服を脱ぎ散らかし、壁の殆どが本棚と化している以外にベットと電話、冷蔵庫だけしかないという事が目を引く部屋でそのままベットにダイブして寝ていた所に明日菜の声が聞こえ、そのままの格好で玄関を開けたという状況。

因みに服は男物と女物をクローゼットにまとめて突っ込んである。
来たのが明日菜だけだと思ったし、女子寮だから男は侵入できん筈だし、そのまま玄関を開けたんだが、ネギが居る事も考慮して然るべきだったな。
徹夜でちょっとボーッとしてたからなぁ～。
寝る時に服とかウザくない？
何か寝返りうった時に服とか下着が引っ掛かるし。

明日菜とネギが俺を呼びに来たのは何故かというと、学園長室に居て事情を聞かれていた時に俺を呼ぶ事になって、自分で呼びに行くと言ったらしい。
普通なら怖がるなりするだろうに……。

という訳で――――――

服を着た後、俺と明日菜、ネギは学園長室に居た。

ネギと明日菜は俺の姿を見ても特に臆病になった訳でも、恐怖している訳でもなさそうだ。
チラチラ見てくる視線が鬱陶しいが。

「あの事件から少し時間を置いた訳じゃが……ルーデシア・ルノー君、ネギ・スプリングフィールド君、神楽坂明日菜君。
学内での危険な上級魔法使用、器物損害等と色々此方でやった訳じゃが、今回は処々事情で不問とする」

ふん、ただ単に自分らの無能を隠したいから器物損壊とかを見逃してやるのでチャラにしろの間違いだろうに……。

「そして、次に神楽坂明日菜君についてじゃ……明日菜君、お主はこのまま魔法に関わるのかの？」

学園長が髭を撫でつけながら問う。

「そりゃ、足折られたのは痛かったし、許せないけど……知っちゃったし、コイツを放っておけないし……」

目を伏せながら言う明日菜。

「ふむ……どうじゃルーデシア君？」

俺に振るのかよ。

「別に？　勝手にすればいいのじゃないかしら？
骨を折られても諦めないとなると、それはもう死ぬ位じゃないと無理じゃないかしら？」

「何ですってー？！」

俺の冷淡な意見に明日菜が掴み掛かろうとしてくるのをかわしつつ俺がテキトーにあしらう、というのを数分続ける事になった。

こんな感じで――――――

「安心なさい。　私の知る限り、貴女よりもアホな人と知り合いだから」

野田とか野田とか野田とか。

円周率聞いて悶絶する程のアホを俺は他に知らない。

「私よりも馬鹿が居るんだ、良かったー……って全然嬉しくないわよッ！！」

「ごめんなさい、確かに失礼だったわね」

「う、良いわよ別に――――――」

「彼に」

「――――――やっぱりアンタ私を馬鹿にしてるわねッ？！」

奴は頭空っぽだったが、強かったし。

戦闘力的には今の明日菜より圧倒的に強いと思う。

「私に謝る所でしょ？！　それに高畑先生とはどういう関係なのよ？！」

ああ、そういえば俺とタカミチにそんな疑惑が浮上したんだったな。

「貴方に教える必要があるのかしら？」

態々教えるつもりも無い。

「その表情は私の事知ってて言ってるわね？！」

もちろんですとも（笑）

「ええ、そうよ？」

「私、アンタの事嫌いよ！」

俺を睨みつけるようにして言う。

「あら、奇遇ね。　私も貴女の事嫌いよ？」

根拠の無い自信を無責任にネギに与えてみたり、要らん事に首を突っ込む辺りが特にな。

「性格悪いわねホントにッ！」

「そんな今更の事を言わないでくれるかしら？」

「自覚している……ッ？！」

そういう風に思われる様に言ってるんだから自覚があるのは当然。

「全く、今時ツンしかないツンデレなんてイタイだけよ？」

現実的に見るなら回りくどいよねツンデレ。

ツンデレは嫌いではないけど、明日菜個人がねぇ……。

「アンタもツンしかないじゃないッ、このツンドラ！」

俺はガハラさん程完成していないからツンドラの称号は受け取れないぜー。

「ッ、褒めないでよ……」

と、いう訳で取り敢えず、頬を染めて恥じらいながら言ってみた。

「デレた？！　しかも褒めてないわよッ！？」

「そういえばタカミチと私の関係については……」

俺は勿体つける様に言い淀む。

「関係は……？」

明日菜はゴクリと喉を鳴らし、俺の答えを待つ。

「主人と奴隷？」

子供の頃から知っているし、多分余程無理のある頼み以外なら何でも言う事聞きそうだし。

「何よそのマニアックな関係はッ！？」

俺の答えに明日菜はガーッとあかいあくまバリに詰め寄って来る。

どうやらSとかMみたいな関係を想像したようだ。

この耳年増め……。

「もちろん私が主でタカミチが従よ。　ピンヒールで踏んでやろうかしら？」

面白そうだからそれっぽい事を言っておこう、うん。

「いやぁーッ？！　何かとても想像しやすい！？」

明日菜の目がぐるぐると周り、頭を抱えた。

フッ、勝った。

何と虚しい勝利なのだろうか……いや、勝利した事が虚しいのだろう……さて、からかうのも飽きて来たな……。

「偏差値チェック。　私、７５」

まあ、もうちょっとあるけど、それは明日菜には酷だろう。

「え？！　えっと……３６」

覚えていなかったのか、思いだすように言う明日菜。

てか低ッ！

流石バカレッド。

彼よりも低いのは驚きだッ！？

「四捨五入すれば0ね」

「えッ？！　なんでよッ？！」

どうやら彼ほど察してはくれない様だ。

まあ、明日菜にそんな突っ込みスキルを期待する方が間違っているのか。

残念だ……彼や音無君のキレの良い突っ込みが懐かしい……。

「それはですね明日菜さん。　十の位を四捨五入したんです――――」

「ああ、成程！って、私の偏差値になんて事するのよッ！？」

「――――――あはは……」

何ッ？！

明日菜がアホ過ぎて意味が分からないのを、空気になりかけていたネギが意味を察して教えただとぅ？！

今までには無いパターンだ！

俺は慄いた。

閑話休題。

俺の小粋なガハラさんギャグによって場の雰囲気は幾らか和らいだと思った所で話を戻すとしよう。

「で、話を戻すけれど、骨を折った事は謝らないわ。　そもそも事前警告はしていたはずだから」

「それは……もう良いわよ。　許した訳じゃないけど……」

「ふむ、関わってしまったもんはしゃーないしのー」

爺が微妙に嬉しそうなのがウゼー。

内心、明日菜が魔法に関わって、骨折られた時はキモ冷やしたけどラッキー、とか思ってるんだろう……。

「次はネギ君の事じゃが、今回の件は――――――」

「それは僕の責任です。　担任としても、魔法使いとしてもあまりに未熟過ぎました……」

「――――――待つんじゃネギ君」

学園長が反省して自己嫌悪気味に言うネギを留める。

「僕は、許されない事をしました。　もし今回の事が無ければ、この先も誰かを巻き込んでいったと思います。

この数日、僕は今までの事とこの先の事をなるべく客観的に想像してみました。　でも僕には先の事が想像できませんでした……これからは自分が周りにどんな影響を与えるのかを考えて行動する事にしたいと思います」

ふむ……まあ、自覚を持って、先の事に目を向ける事が出来る様になったならそれなりだな……悪くは無い。
まあ良くも無いけど。

「ですから僕はこの先に待つ過去の真実を知る為に、皆を守る為の力を得る為にルーデシアさんに弟子入りしたいと思っています！」

えぇー、何でそこに繋がるんですか？
目を輝かせてこっち見んな！
しかも何この真面目キャラ？
なんかキモい。
寧ろ真面目になった分、余計に鬱陶しくなったというか、暑苦しくなった気がするぞ？

「おお、それは妙案じゃ！！」

そして、この爺もいい加減にしやがれよ……。

「で、ネギ君を弟子に――――――」

「嫌よ」

「――――――何でじゃ？！」

学園長が畳みかけてくる前に一刀両断した。

「私に何のメリットがあるのかしら？
そもそも今回は正当防衛で事に当ったのだし、私は言わば被害者で上級呪文まで撃たれたのだから同程度の魔法を使っての自己防衛は成立するでしょう？

加害者を攻める事はあっても、何故その加害者に私が何かを教える立場にならなくてはいけないの？」

言い終わった所でネギと明日菜の表情が暗くなった。

俺に返り討ちにあった事は事実だが、先に手を出した事もまた事実で、そこら辺を思っての表情だろう。

「むぅ……」

学園長は思い通りにならなかった為に唸る。

別に弟子にしてもいいし、教えるのも得意だから良いんだけど、それってつまりは俺の正体をバラすって事でしょ？

バラさなくてもいずれはバレるって、そんなん。

今はバレた時のデメリットが多過ぎてバラす気は全く無い。

でもってバラすタイミングは少なくとも今じゃないと思っている。

いやまあ、ネギを更生させる為の切っ掛けを作ったのは俺だし、責任取るとか、俺の仕事だとか言ったけどさ。

直接的過ぎるとかえって悪化すると思うんだよね。

でも、これじゃ学園長が納得しないよなぁ……別にどうでも良いけど、後で変ないちゃもん付けられそうだし。

うーん、どうしよう……。

……。

……ハッ、思いついたッ！！

原作通りにエヴァの弟子にしてしまおう。

エヴァならなんだかんだで面倒見良いし、呪い解く為の血を授業料に貰えばいいとか言えば多分エヴァは受けてくれる……と思う。

俺の解呪の方法でも血が必要かもしれんし、必要じゃなかったとしても尋常じゃない魔力がある血だ。

保管しておくだけでも利用価値は十分にある。
更にネギもこれなら原作通りの強さを手に入れ、俺が手を加えて魔改造をすれば……クックック。

「学園長、妥協案として私がエヴァを説得させるから、彼女の弟子にしてもらって、私も時々時間を作って教える、といった具合なら良いわ」

「む？　それは……可能なのかのぅ？」

困惑し、恐る恐る訊いてくる学園長。

「私が説得するから多分大丈夫よ。　彼女なら恐らく余程怒らせなければきちんと育ててくれるわ。
それが嫌なら私はこの学園を出て行くわ」

エヴァは不器用そうに見えて面倒見良いしね。

「それは困る！」

学園長が身を乗り出して俺を引き止める。

「あら、私が居なくなって何か困る事でもあるのかしら？」

「むぅ」

学園長がまたも唸る。
この爺……俺を学園に取り込もうとか思ってるのかもしれぬ。

「まあ、引き止められようとられまいとに限らず、私はいずれ学園

を去るでしょうけれど」

「「ええッ！？」」

ネギと明日菜が驚くが今はスルー。

「何年後になるかは知らないけれど、私はいつまでも居るつもりはないし、とある私の情報網では約１０年後に魔法絡みで世界を巻き込む戦いが起こるかも……と、そういう噂も聞こえてきているわ」

原作知識だけどさ。

「何じゃとッ？！」

学園長に限らず、ネギ達も驚く。

「飽くまで、かもよ？　起こるかどうかはこれから行動する人々と世界次第。　回避できるかもしれないわ。

でも多分、私はその戦いが現実のものとなってしまったなら、否応無くその戦いに参加する事になる。

下手をすればこの子達も巻き込むかもしれない。　だから、なるべく私の方から距離を置くつもりよ。

きっとその時、私は自分の為に戦うから……敵となったら容赦無く殺させてもらうけれど」

イレギュラーである俺のこれからの動き次第でも、随分変わって来るだろうし。

敵になったら……残念だけどそれまでだ。

「「「……」」」

ある意味、第三次世界大戦に近い内容の話に学園長室に沈黙が支配する。

「まだ１０年はあると思って準備はしておきなさい。　エヴァの方には多少強引にでも話を通しておくわ。

多分、修学旅行が終わった後で、彼女の事だから弟子入り試験とか言いそうだけれど。

そこは貴方の努力次第ねネギ・スプリングフィールド。　これ以上失望をさせない様に気をつけなさい」

「はい！　皆を守る為に頑張ります！」

ネギが元気良く言う。

ホント、お前はネギという名の衛宮士郎か？と言いたくなる。

自分を勘定に入れているか微妙に怪しいぜ……衛宮士郎を引き合いに出したけど、本人来たりして……いや、無いな。

無いと思いたい。

決して振りではないぞ？

来たら来たで面白そうではあるが。

「ああ、そう言えば修学旅行先は京都だったわね？」

「そうじゃが？」

「ネギに特使とか言って、詠春の所に行かせる気でしょう？」

俺のあまりにもピンポイントな指摘にビクゥッ！！と反応する学園長。

「別に西との仲はそれ程膠着している訳ではないでしょう？
何せ、詠春は貴方の孫である近衛木乃香の父親ですもの。今でも電話で話をする位の仲でしょうに？
大体、目下の問題は？(たずな)を振り切った部下が勝手に騒ぎを大きくしているだけなのでしょう？
もし、次に茶番を仕掛けたら……私は本気で持てるすべてのコネと力を使って、この学園を潰しに掛かるわよ？」

俺はそう言って学園長室を出た。

ネギに今回の特使の事と木乃香の父の話を教えたのは、木乃香を巻き込んだら承知しないよ？という事と準備は怠るなよ？という事を暗に言ってみただけだ。
今のネギなら察しただろうし、恐らく何かしら準備位はしてくるだろ。
察してなかったら召喚獣の実験に使ってやる。
俺も準備はしておこう……フェイトも多分来るだろうしなぁ……。

そう言えばカモの話が出なかったが、橋でネギの魔力暴走が起こった際に端から落ち、自力で戻ってきた後、俺の対カモ用特製マジックアイテム（孫悟空の頭の輪っかみたいな効果の首輪）を付けておいた。
その首輪は俺の自意識の内にある善悪が装着者を見定め、悪だと判断された場合に首が締まっていくアイテムだ。
これで奴も懲りれば良いのだが……多分、無理っぽそうだなカモだし。

それとネギは数日後に控える修学旅行の後に明日菜達の部屋を出てアパートを借る様だ。

まあ、当然と言えば当然だな。

寮が空いてないのなら、賃貸マンションを借りれば良いだけの話だし。

授業の方も中々わかりやすく、先生っぽく振舞っているとエヴァが言っていた。

それと逆セクハラもなんとか注意するようになったのにはちょっと感心した。

このまま、まともに行動してほしいものだ。

タカミチには俺からきちんと話を聞かせた。

というか、ガトウの願いはどうなっとんねん！と問い詰めた。

そうしたら、じゃあ全力で叩きのめして本人の意思を無視するのはどうなんだと反論された。

まあ、タカミチにしてみれば本人の意思で行動した事で、俺から見れば学園長がネギを同じ部屋にした事で巻き込まれたと解釈しているから、意見がぶつかるのは当然と言えば当然だった。

そこら辺についてはタカミチに学園長の策略やらを踏まえて教え、今後は俺の敵に回らない事が条件で手助けをしてやらないでもない事を約束してやった。

敵に回れば潰す。

傲慢かもしれないが、それが俺のスタイルだ。

子供好きでもあるが、敵と認識すればその子供でも容赦はしない。

俺の子供達なら殺さない様に最大限の努力はするけど、知らん子供までは知ったこっちゃない。

だって俺は聖人君子でもなければ、正義の味方でもないし、偽善者を語るつもりも無いからだ。
俺は我儘な人間だからな。
自分の身近な人間が幸福であるなら、その他はどうでもいいと思える人間だから……。

で、今までとは違って、もう一つ別の問題も浮上した。
あの事件の後に寮に戻らず、エヴァの家に泊まったんだけど。
そこでエヴァが何を思ったか、寝ている俺の記憶を見る為に覗いたらしいのだが、薄桃色の髪と褐色の肌を持っている女に俺の中から叩き出されたらしく、とても不機嫌になってらっしゃった。
そして、当然の如くエヴァに問い詰められ、明らかに心当たりがありまくった俺は彼女の事を話した。
ぶっちゃけ俺の嫁の蓮華だと。
そうしたらエヴァは暴れに暴れ、俺に八つ当たりをした後に不貞寝をしてしまった。
何で俺の夢を覗いて蓮華が居て、エヴァを叩き出したのかがわからん……まさか、時々飯をたかりに来た太公望が蓮華に頼まれて変な術を掛けたのかもしれぬ。
何だろう？
いきなり嫁姑戦争勃発の予感？

第２４翼　微洗脳完了、結構アバウトな紫の麗人（後書き）

一応、エヴァの弟子にする予定ではあります。
唯、古老師の弟子にするかは未定。
もしかしたらエヴァに合気柔術を習うかもしれません。

士郎のはフリではない……と思いたい。
ノリで朱然さんの行ったＦａｔｅの衛宮士郎がイレギュラーとして来る可能性もあるかもしれませぬが……。

エヴァの方は朱然さんからまだ聞いていない前世とも言える記憶を見る為に原作のネギの様に覗こうとしましたが、朱然さんの推察通り、恋姫夢双の蓮華さん？によって阻止されました。
こちらは深く考えないで入れたのですが、よくよく見直してみれば何かの伏線とかに使えるかもしれないですね（笑）

前書きで書きましたけど、急いで書いたので時間が出来た時に軽くしか見直しをしていないので変な所があった場合は直そうと思っています。

第２５翼　修学旅行、観光する紫の麗人（前書き）

何と書けたので更新です。

変なテンションで書いたのでいろいろと（主に朱然さんが）壊れている気が・・・・・・。

第２５翼　修学旅行、観光する紫の麗人

「それでは点呼しまーす！　居ない人がいたら知らせてくださーい！」

学園長のとの話し合いから数日。
俺は麻帆良学園の外部に一番近い新幹線のホームに立っていた。

今回の修学旅行は親御さんが学費と共に払っている積立金とかを俺が払ってなかったから払うのも面倒なので、エヴァ＆茶々丸と学園で静かにダラダラと過ごそうと思ったのだが、学園長に護衛任務とか言って無理矢理参加させられる事になった。
というか、学園長の京都旅行に釣られたエヴァにというのが正しいのだが。
ネギの特使任務の妨害とかしちゃった所為で学園長が仕返ししてきやがったのだ……爺め、いつかの様にフルボッコにしてやる……ついでに詠春のトコとか鶴子に会いに行くのもいいかもしれん。
あ、やっぱし駄目だわ。
さっきも言ったが、今回の修学旅行に原作で不参加の筈だったエヴァが参加してるからな。
登校地獄の呪いが弱体化した為に、この修学旅行は課外授業の一環である、という紙に一日一回学園長が判子を押すだけで出れる様になったので参加する事になったのだ。
で鶴子と会ったら、第２回　朱然さん所有権争奪戦が始まって、京都が火の海になりかねない……それは流石に恐ろしいし、責任取れないというか取りたくない。
それとは別の問題もある。
やっぱり……フェイト来るっぽいんだよなぁ～。
どうしようかなぁ……木乃香の護衛って事は確実に巻き込まれる

って事が原作を知っている俺には決定事項みたいなものだから諦めるか……どっち道、エヴァ達に頼まれたら嫌とは言えん！

よし！

覚悟は決めたぞッ！！

いつでも来やがれッ！！

全部纏めて、みっくみっゲホゲホ！

ボッコボッコにしてやんよ！

何より、エヴァが上目使いで目を潤ませながら、私と京都に行ってくれないのか？と蚊の鳴く様なか細い声で言われたら行かない訳にはいかないだろう！？

茶々丸が行ってくれなくてはマスターも困りますが、私も困ります。と照れながらいう姿に抗えと言うのか？！

まあ、そういう経緯を経て参加する事にした。

別に俺が何かしなくても原作は基本的に進むものだから完全スルーしても問題無いと思うのだが、この主従に頼まれては断れないのだよ。

可愛いは正義だと思いますッ！

「では、時間になりましたので新幹線に乗ってくださーい！」

ネギの声が聞こえたので俺達の班も新幹線に乗る為に移動を始める。

その班のメンバーは俺、エヴァ、茶々丸、刹那、ザジの５人。

さよは学校から出られなのは不憫だろうと思ったが、お留守番だ。

何かお土産を買っていってあげようと思う。

「この班は純粋な人間が一人もいないのね」

俺はそう言って刹那とザジに目を向ける。

「む？　刹那とザジの二人は人間だろう？」

怪訝そうな顔をしてエヴァは俺の方を向かず、話題の二人の方を向いたまま言った。

「マスターの言うとおりだと思うのですが違うのですか？」

茶々丸は首をちょこんと傾け俺とエヴァに言う。

「ええ、ザジは魔族だし、刹那は烏族のハーフよ」

それを聞いたエヴァが目を細めザジと刹那をジーッと覗き込んでから「ふむ」と頷き、ニヤリと笑った。

「フ、成程な……確かに私達は元より、純粋な人間は一人もいないな」

俺達はカエル事件が控える新幹線に乗るのだった。

その時、車内の自動ドアのすぐ脇に居た刹那の横を通り過ぎようとした所で――――

「私の邪魔はしないでもらう」

「貴女程度でどうこうなる問題だったのならどうぞご勝手に」

刹那は鋭利に睨み、俺は不敵に失笑し言葉を投げかけてすれ違った。

京都旅行か……リョウメンスクナノカミを封印した時以来か……ま、行くのはもう覆しようの無い事だし、刹那の問題(こんてい)を直す事を視野に入れて動くとしますかね……。

で、早速カエル事件が起きたが、親書自体を持っていないネギに燕の式神が来る事も無く、ネギが原作と違ってもう少しマシに解決したらしい。

当のカエルは混乱を与える事だけが目的のだった様だ。

その時の俺は殺傷能力と危険度が低いと判断し、混乱の中でまどろみに身を任せて眠っていた。

次に目を覚ますと、俺の視界一杯に茶々丸の顔が飛び込んできた。

「な、何をしているのかしら?」

いきなりの事態に少しどもってしまった。

「いえ、寝顔を拝見していました」

無表情にいう茶々丸。

「そ、そう……」

「そろそろ着くそうですので……」

そう言って茶々丸が鞄を降ろす為に動いた。

「ええ、わかったわ」

ドキッとしてしまった……作られた造形が整い過ぎて美人だが、作られた故に表情に乏しいガイノイド。

だが、いずれ彼女も表情豊かになっていくだろう……。

そんな事を思いながら新幹線を降りた。

それからはクラス単位での観光になる。

俺はネギの視線を巧みにかわしてエヴァと茶々丸と談笑しながら清水寺を周り、恋占いの石に向かって落とし穴に嵌まったクラスメイトを眺め、音羽の滝で恋愛の水に群がり酔っぱらったクラスメイトを華麗にスルーした。

クラスメイトさえいなければ静かに、ゆったりと過ごせたのだが、それを言っても仕方が無いので置いておく。

それから流れる様に時は進み、俺はエヴァと露天風呂に入っていた。

「温泉は良いわね」

空には月が浮かび風流だ……熱燗があれば尚良しだが、流石に今は修学旅行なので自重している。

というかエヴァよ、俺は一応男なんだぜ？

タオルで少しは隠そうぜ……？

因みに茶々丸は、関節部が恥ずかしいですし、何よりロボなので……という理由で部屋でお留守番をすると言っていた。

「ああ、心が洗われるようだ……」

エヴァが俺の視線の先にある月を眺める。

「関西呪術教会がちょっかいを掛けてきている様だけれど、私達はどうするのが良いと思うかしら？」

一応、エヴァに確認をとってみる。

「そんなもん無視だ無視！　爺の頼み事なんぞ、一々構ってられるか」

エヴァは顔を顰めて、フンッと鼻を鳴らす。

そこで戸の開く音と共に刹那が現れた。

「む、貴様は朱ぜ――――――」

刹那は俺の姿を見た途端に顔をしかめた。

対する俺は、刹那が俺の本当の名前を言う前にネギに見えない角

度で刹那に大牙の爪を突き付けて黙らせる。

ネギがいる事は事前にわかっていた。

だが、俺とエヴァは露天風呂に入りたかったのでお構いなしに入ったのさ。

さっきからカモの首輪が凄い勢いで締まっているのが手に取る様にわかる（笑）

もっと苦しむがいい淫獣め……それは置いておいて、今ネギに俺の本当の名を知られるのは駄目だ。

今でも鬱陶しいのに、これ以上ウザくなるのは遠慮したい。

「ルーデシアよ」

俺は強めに言い聞かせる。

「何故、此処に居る？」

相変わらず俺には敵意を隠さないね、この娘は……調教してやろうか？

「露天風呂に入りたかったから入っているまでよ。　別に貴女に迷惑を掛ける行為でも無いでしょう？」

ヤレヤレと頭を振った。

「フン……」

刹那は俺達、いや……俺が居るからか踵を返し、露天風呂を去ろうとした時だった。

「何奴……ッ！！　斬岩剣！！」

ネギの身動ぎで起こった微かな水音に反応した刹那は、そう言って夕凪を抜き放ち、ネギの隠れていた岩を縦に叩き斬った。

「わわッ！？」

ネギが慌てて岩影から飛び出してくる。

「待ってくださいッ、桜咲さん！！」

刹那がネギへ向かって更に攻撃を加えようとした所で、ネギが大声を上げた。

「貴方はッ、ネギ先生？！　し、失礼しましたッ！！」

刹那が慌てて振り下しかけた夕凪を戻そうして異常に気付いた。

「？！　鋼糸だとッ、いつの間に……」

刹那はそれすら気に入らないらしく、相変わらず鋭い視線と敵意を俺に向けてくる。

単純に言えば、俺の無影が夕凪を絡め取って、それ以上振り抜けない様にしていたのだ。

いくら湯煙が立ち昇って、それっぽいシチュエーションだとしても、ドキッ！湯煙温泉　子供先生斬殺死体！を実現させると折角の旅行が台無しになってしまうしね。

と、そんな事を思っていると――――――

――――ひゃあああ～っ！！

気の抜ける様な悲鳴が聞こえてきた。

「この声はッ！！」

「木乃香さんッ？！」

刹那とネギは急いで脱衣所の方へ向かった。
そこでまたしても悲鳴があがり、木乃香がチビサル達に運ばれて来た。

「私は何もせんぞ」

「はいはい、わかっているわ。　エヴァはゆっくりと湯に浸かっていて頂戴」

俺は湯から上がり、左腕を一閃した。
その一振りでサルたちは一斉に無影によって切り裂かれ、バラバラになった紙型へと戻り、木乃香が投げ出された。

「お嬢様ッ！！」

刹那が叫び、近づいてくるが、間に合わない。
俺はすぐさま投げ出された木乃香をお姫様抱っこでキャッチした。

「え～と、なんかよーわからんけど、助けてくれたんやね……ルノーさん、ありがとな」

木乃香が俺に礼を言う。

俺は天ヶ崎千草を鋼糸で捕縛したかったが、木乃香で両手を塞がれていて出来なかった。

事前に問題を解決できたかもしれないが、特に気にせず俺は木乃香に視線を移した。

俺の視界に中学生相応のなだらかボディが飛び込んでくる。

木乃香は木乃香で俺の、というかルーデシアの豊かな胸を見て、ムムムと唸っている。

「「いつまで見ている？」」

俺の首に二つの凶器が突き付けられる。

１つ目は刹那の夕凪の刀身。

２つ目はエヴァの手刀の形の先の爪。

刹那の方はまだ空間があるので大丈夫だが、エヴァの方は先が刺さって血の雫がツーッと流れた。

流石に命は惜しいので、木乃香を降ろした。

「木乃香ーッ！！　大丈夫ッ！？」

遅れて明日菜がやってきた。

「ルノーさんとせっちゃんが助けてくれたんよー」

木乃香がにこやかに明日菜に言う。

「そ、そうなんだ……桜咲さんありがと！　あと……ルノーさんも一応、アリガト」

明日菜が一応という言葉通りに刹那とは違うありがとうを言ってくれた。

釈然としない気持ちで言われる位なら言われない方が気分が良いと思う。

「せっちゃん、ホントにありがとな」

木乃香が刹那に近寄って言った所で――――

「わ、私はこれでッ！！」

刹那は慌てて気を使い、物凄いスピートで去っていった。

「さて、さっきの話は終わってないぞ？　そろそろ風呂から上がって部屋でゆっくりじっくり時間を掛けて、さっきの事を聞かせてもらおうか？」

ああ……嫉妬ですか、そうですか……回避不能イベントなんですね……。

ガシッと俺の腕を掴むエヴァ。

恐らく肩を掴みたかったのだろうが、身長的に少し厳しいものがあった為に腕にしたのだろう……。

「え、エヴァ？　目が少し怖いわよ？　貴女は笑った方が似合って

―――――」

俺は言い終わらない内にエヴァに引っ張られ風呂場を後にさせられた。

なんか後方で「あの二人って付き合ってんのかなー」とか「あの2人のやり取りは付き合うとりそうやなぁ～」とか聞こえてきた。

ネギの方はというと、学園長から俺も護衛をちょっとだけ手伝う事を聞いていたらしく、サルを細切れにした所で危険は去ったと判断し、自分から風呂場を後にしたらしい。

調ｋｙげふんげふん……教育の成果が出ているようだ。

非常に良い事だ、うん。

その後、部屋に居たザジと茶々丸を部屋から追い出したエヴァが、朱然と二人で籠って、何事かと耳を近づけた茶々丸とザジの耳に朱然の悲鳴?が聞こえた後、ガチャリと空いたドアの隙間から、浴衣をかなり際どく着崩した朱然が布団の上で身体を痙攣させている所を目撃したのはまた別の話である。

第２５翼　修学旅行、観光する紫の麗人（後書き）

ネギが空気になっていますが気にしなーい。

おかしな所があれば訂正したいと思います。

第２６翼　誘拐、目をつけられる紫の麗人（前書き）

作者は今期アニメではとある魔術の禁書目録?が期待大です。

何か最近、リリなのの設定ばかりが頭を過ぎる……。

第２６翼　誘拐、目をつけられる紫の麗人

エヴァに嬲られた後、何とか復活した俺はエヴァと外の月を見ながら音羽の滝の酒を飲んでいた。
というかご機嫌をとっている。
後ろには茶々丸が控えて、ザジは就寝中。
すると、おサルに抱えられた気絶中の木乃香が目の前を通って行った。

「……」

俺は呑み込みかけた酒を呑み込み忘れた。
吹き出さなかっただけマシだと思う。

「近衛木乃香が攫われた様だな」

エヴァは興味無さげで、且つ動じることなく言う。

「先程の一瞬を再生します……ほぼ間違いなく近衛木乃香さんですね」

茶々丸が記憶ドライブをリプレイして確認したらしく駄目押しをしてくれた。

刹那と野菜め……ミスしやがったな？

「エヴァ、野暮用を片付けてくるわ」

「ああ、さっさと片付けて来い。　茶々丸、一緒に行って来い」

「了解しましたマスター」

エヴァは素っ気なく言い、茶々丸は俺の傍に控える。

「行ってくるわ」

「行ってきますマスター」

「フン……ッ」

振り向かないエヴァにそう言って、俺と茶々丸は部屋を後にした。

どうやらまだ機嫌が悪いらしい。

さっさとエヴァの言う通り終わらせて機嫌を取らねば……って、何でいつの間にか俺がエヴァを追う方に？

引かれると追ってしまうみたいな？

名も無き者の言う通りなら、愛する者を得るらしいが、それは一体誰なのか。

気になる。

気になるが……む、いかん。

大体、愛するにも色々あるだろ。

うん、そうだ。

きっと子供達に違いない！

「さて、行き先はわかっているから網を張りましょう」

「わかりました」

俺達は獲物が掛かる場所（えき）で静かに待つ。

その間に、俺は無理矢理そう納得して思考を止めようとする。

でも――――

だが、不意に考えてしまう。

俺は――――

考えてしまうんだ。

――――――また、誰かを好きになってもいいのか？

俺はそんな……そんな恐れを感じてしまう。

――――――誰かを、愛してもいいのか？と

遠い遠い昔。

初めて出会った蓮華に恋をして。

蓮華も俺に恋をして。

蓮華の気持ちを知りながら、その時の俺は自分の都合ばかり見ていて答えられなくて。

その都合が終わるまではと思っていたのに、震える彼女を見てい

られなくて。

俺と蓮華と結ばれた。

そして父親に蓮華を攫われて、俺は居ても立っても居られなくて。

今までの全てをぶつけて勝てなかった。

そこに正しく天の助けが現れ、九死に一生を得て、また殺された。

俺はその生涯を閉じる筈だった。

でも、蓮華の願いと俺の思いが奇跡を手繰り寄せ、俺は生き返った。

それからは忙しくも穏かな日々が流れる。

時には笑い、時にはぶつかり、時には泣いた。

歳を重ね、季節を重ね、時間を重ねて、仲間の死を見届けて。

俺達が育てた国を俺達が育てた国を支える者達に任せた。

皆で支えた国はもう、自分達が居なくとも進むだろう。

やり残した事も、後悔も無い。

最後に残ったのは、一番長く生きた蓮華と歳を全く取らない俺の二人だけ。

俺達は昔を懐かしむ様に過去を振り返りながら平穏を過ごす。

だが、ついに別れの時はやってきた。

看取った時の蓮華の顔は未だによく覚えている。

看取った時の自分の表情も鮮明に覚えている。

お互いに笑顔だった。

蓮華は微笑みを、俺は泣き笑いを。

王の部屋で横たわる歳老いた女王と、傍らで手を握る歳を取らぬ王。

互いが互いに笑みを向け合い。

その時が来て――――――

それほどまでに愛した人が居た俺は、また誰かを愛してもいいのか？

蓮華に失礼じゃないか？

あの愛は偽物に成り下がってしまうのではないか？

そう、思ってしまうのだ。

失って尚、蓮華へ向けた愛は変わらず持っている。

それが無くなってしまうのが――――――怖い。

それから俺と茶々丸は件（くだん）の駅で待ち伏せる事、２０分。

「喰らいなはれ！　三枚符術京都大文字焼き！！」

獲物が陰陽術を使い、ネギ、刹那、明日菜を足止めする。

「さて、今の内に……」

「残念だけれど、そこまでよ」

「誰やッ？！」

木乃香を背負った天ヶ崎千草が俺と茶々丸を視界に捉える。

「人避けの結界が効いてへんて事はや、嬢ちゃん達はこっち側の人

間やな？　怪我せん内に退き」

やれやれ、どうもこの世界の人間は自信過剰だな。

「お断りよ、その娘を置いて行くのなら幾らでも退かせてもらうわ」

さて、時間稼ぎもこんなもんで良いかな？

でもエヴァがさっさとって言ってたし、俺達が片づけた方が早いか……なら――――――

「風花　風塵乱舞（フランス　サルタティオ・ブルウェレア）！！」

ネギの魔法で炎が掻き消された。

「逃がしはしません！ってルノーさんッ？！」

驚きを露わにするネギ。

「あらあら、とんだ失敗ねネギ・スプリングフィールド、桜咲刹那とおまけさん？

これは怖い怖いオシオキが必要かしら？　それはともかく、手を出さないでくれると助かるわ。

貴方達程度が手をだすと私達の邪魔になるだけだから大人しくしていてくれる？」

「ひッ！？」

「くッ？！」

「誰がオマケよッ！？」

俺の言葉に短い悲鳴を漏らすネギと呻く刹那、そしてオマケ扱いに突っ込む明日菜。

さて、召喚獣の実験台は麻帆良に帰ってからするとして――――――

「時間稼ぎをして貴方達に押しつけて帰るだけのつもりだったのだけれど、あまりにも無様過ぎたわ。
貴方達はそこで見ていなさい。
さっさと近衛木乃香を救いだして――――――」

「お札さんお札さん、ウチを逃がしておくれや……ッ？！」

「せっかちね？」

俺は天ヶ崎が放ってきた前鬼と後鬼の呪符を無影で細切れにした。

「なあッ？！　ウチのお札が！？」

その時だった。

「ざんがんけーん！」

突如として現れた月詠が俺の方に跳躍してきて斬岩剣を放ってきた。

俺は即座に大牙を取り出し片手で受け止める。

「ほえー、ウチの斬岩剣が片手で受け止められるとは思っても見まへんでしたわぁ。　自己紹介が遅れましたー。
ウチの名前は月詠言いますー。　刹那先輩と同じで神鳴流ですー」

「こ、こんなのが神鳴流だとッ？！」

月詠の容姿や言動等が刹那の知っている神鳴流の誰にも似ていないので、違和感を感じるのだろう。

「月詠はん、足止め頼みますえ！」

そう言って、天ヶ崎が戦線を離脱しようとするが、茶々丸が回り込む。

「すみませんが此処は通せません」

「ああもうッ！！　なんなんや邪魔ばっかりッ！！」

茶々丸がＦ・ＧＳＨＯＴを構え、天ヶ崎が歯噛みをする。

向こうは茶々丸に任せておけばいいな……ネギ達よりも十分に使命を果たしてくれるだろう。

当のネギ達は半ば空気で棒立ち状態だが、はっきり言って足手纏いでしかないのでこのままの方が都合がいい。

「死合いましょう？　銀髪はん？」

月詠が二刀を弄び、構える。

「戦うのは好きではないのだけれど……」

俺は一瞬、文房具を出そうかと思ったが強度不足、断念。

神鳴流は飛び道具が効かないのはこの世界に来てよく知っている

ので銃も不可。
魔法は使えばこの場所を壊しやすく、周りを巻き込まないのが面倒。
よって、この世界の裏で名の知れた古流剣術士の流派、神鳴流に敢えて八卦八武装(せんてんはっけ)での近接格闘戦を選択する。
だが、恐れる事は無い。
この身は武王と祀られ、英霊へと誘(いざな)われ、特別顧問として認められ、英雄と謳われたのだから――――――
俺は左手に大牙を持つ。
大戦後に全ての八卦八武装(せんてんはっけ)をそれぞれ改造、改良をした。
つまり大牙も今までとは違う。
外観は全く変わっていないが、大牙本体、牙×2、爪×4の七つの仕込み剣を内包するようになった。
まあ、クラ○ドの分裂剣のパクリだけどさ。
というか使う使わないじゃない……開発&改造する事に意義がある！
おっと、つい熱くなってしまった。
いかんな、最近改造やら開発をしている所為でイケナイ道に足を踏み入れ始めている気がしてならない。
女になって女子中学校に通っている時点で色々と……いや、止そう……これ以上は自分自身へのダメージが大き過ぎる。
程々に、そう程々にするとしよう……。
他の新機能とか改造した八卦八武装(せんてんはっけ)の能力はいずれ語られ、使われる事もあるかもしれない・・・・・・かも？
で、今回の戦いでは大牙一本で十分だろう。
月詠から向けられる殺気弱いし。

月詠が瞬動で接近。

「ざんくーせーん！！」

俺は大牙の影に隠れる様にして斬空閃を弾いた。

「にとうれんげき、ざんがんけーん！」

二刀による斬岩剣が放たれるが、俺は意に介さずに大牙を月詠を射程内に収めての横薙ぎで斬る。

しかし月詠はスローモーな口調とは裏腹にキレの良い動きでかわした。

ふん、随分とまあ、手を抜いてるみたいだな。

動きの端々で自制をしているのを感じるぞ？

「砕ッ！！」

今は時間が惜しいんでな。

さっさとやられるなりしてくれ。

上段からの空竹割りを本気の速さで繰り出した。

月詠はその速さをかわすのが困難だと判断し、気を込めた二刀を頭上で交差し受け止める、が重量からして二刀よりも重く、宝具たる大牙の硬度は恐らくこの世界で最高クラスだ。

技ではなく唯の力技の一撃だったのだが、それですら気を込めた業物の刀程度で受けきれるものでは無い。

激しい金属同士のぶつかる音の後に、月詠の持っていた二刀の小太刀が折れてしまう。

「ウチの二刀がー」

月詠はションボリしながらぽっきりと折れた刀を即座に捨て、後方へと跳躍した。

「良い判断ね？」

スッと目を細め、月詠を視界に捉え続ける。

何故、自ら自制をしているのかは知らないが、月詠が本気になれば俺はともかくネギ達が即殺される事になるだろう。

多分だが、自分に見合った得物が無いから全力を出せないとか、そんな所だろう。

月詠にはもっと実戦的で使え、気の通りが良い特別製の刀の方が良いと打ち合っている間に感じた。

何はともあれ、今は俺に興味を持たせておいた方が被害が少なくて良い。

「ああん、その冷たい視線……ぞくぞくするわぁ～。

唯の護衛だと思ったのに先輩だけやなく、こんな上物の獲物に出合えるなんてぇ～。

もっと～、もっとウチと戦いましょうー？　じゃないと身体の疼きが収まらへん～」

頬を朱に染め上げ、身悶えする月詠。

あー、超の付く程のバトルマニアだな……そして、ドMっぽい。

いわゆる変態というやつですな。

「どうやら此方の目的は済んだようね」

俺がチラリと茶々丸の方を見ると、木乃香をお姫様抱っこしている。

「月詠はん、こないな化物供の相手は予想外や！　一旦引きますえ！」

「ええー、でもー」

上物（おれ）の獲物を前に渋る月詠。

いやいやをする月詠に天ヶ崎はキッと視線を向けると、本当に残念そうな表情をして口を開く。

「はぁぁ……本当に、ほんっっっとうに残念やけど、また次の機会に死合いましょうー？」

そう言って二人は逃げて行った。

階段の下の方で棒立ちだった三人が此方に駆け寄って来る。

「ちょっと！　なんで逃がすのよッ！」

「お嬢様ッ！！」

「木乃香さん！！」

茶々丸は木乃香を刹那に預ける。

ふむ、刹那は予想通りの反応。

ネギもあの敗北から学び、最優先事項をきちんとわかっているようだ。

まあ、もっとも親しいからというのもあるから、という方が大きいのだろうが……明日菜は相変わらずの猪突猛進。
今回の最優先事項は近衛木乃香の護衛であり、誘拐犯である天ヶ崎千草を倒す事ではない。
明日菜にも早々にどうにかしないといけないな。
首を突っ込むのなら力を付けさせるに越した事は無いし、何より明日菜の覚悟をはっきりとさせる事もしないといかんし、やる事が山積みだ。
あー、面倒だー。

「茶々丸、帰るわよ」

「了解です」

俺と茶々丸は四人に背を向ける。

「あ、あのッ！！」

そこでネギが大声を出した。

「木乃香さんを助けて下さってありがとうございます！」

そう言って頭を下げた。

「別に……唯の仕事だもの」

「マスターからの命令でしたので」

俺達はそれぞれ此処に来た理由を言う。
が、このまま何も言わないでいるとまた同じことを繰り返しそう

なので、言い含めるとしよう。

「この程度の事も出来ないのね。　ああ……私を失望させる才能だけは最高よ？

ある意味、私の天敵と言ってもいいかもしれないわね？

まあ、そんなネギ・スプリングフィールドには全く期待はしていなかったのだけれど、まさか此処まで無能だったなんて思わなかったわ」

絶対零度（れいとうビーム）の視線を放った。

「うぐっ……」

こうかは　ばつぐんだ。

「それと神楽坂明日菜、貴女は周りの状況を良く見なさい。　浮ついたままの気持ちで私達の側に首を突っ込み続ければ……死ぬわよ？」

本気の気迫を込めて無表情に淡々と事実を言う。

「うっ……」

此方も中々の威力が出た様だ。

最後に刹那だが、こっちも以前のネギの様に少しばかり自覚を植え付けるとしよう。

「桜咲刹那、私は貴女の事を近衛木乃香を守るならば手段を選ばず助けると思っていたのだけれど、この体たらくは何かしら？

修行不足ね。　いつまでまどろっこしい状態を維持し続けるのかしら？　今から言う事をよく考えなさい。
自分自身の正体と近衛木乃香の安全、それを秤にかけた時に今の貴女は自分自身の正体に比重を置いているに過ぎないわ。
詰まる所、自分が傷つきたくないからという良い訳に追放され、守る必要のない筈の一族の掟を理由にしているだけでしょう？
自分の核心に目を向けなさい桜咲刹那、貴女は近衛木乃香に嫌われたくない訳ではなく、自分が傷つきたくないのよ」

「貴様ッ、何所まで……ッ！」

刹那は怒りで拳が白くなるまで力を込めているが、核心を突かれた為に顔面は血の気が失せている。

「何でもは知らないわ。　知っている事だけ。　貴女の事は知っていた、唯、それだけの事よ……気にする事ではないわ。
人として、その判断はとても正しい。　自分よりも大切なモノを選べないのがツマラナイ人間よ。
ええ、貴女は誰よりもツマラナイ人間らしいわ。
近衛木乃香というのは貴女にとって親友とも言える他人だった、というだけの話でしょう？」

俺が言い終わる頃には刹那の拳から血が流れ、顔は蒼白。
身体の震えが止まらない様だ。

さて……言いたい事は言ったし、事実を言われた位で自分を見失うのなら、それもまた一つの結末だろう。
さあ、エヴァの所に戻るとしようか。

「では、御機嫌よう」

俺は茶々丸と共にホテル嵐山に戻り、エヴァに酒の酌をした。
エヴァの機嫌が少し直った。

第２６翼　誘拐、目をつけられる紫の麗人（後書き）

悩む朱然、刹那に説教する、月詠に目をつけられるな回でした。

チマチマ書いてやっと投稿出来た……。

次回もなるべく早くに投稿出来ればいいなぁと思います。

第２７翼　世界の現状、脅迫する紫の麗人（前書き）

ＰＶ４００万人＆もうちょっとで３５万人ユニーク達成です。
読者の皆さん、本当にありがとうございます！

何か吸血鬼事件からクドクド書き過ぎている気がするので、もうギャグを入れた話を書きたい今日この頃。

第２７翼　世界の現状、脅迫する紫の麗人

木乃香誘拐から次の日、班というか俺、エヴァ、茶々丸、ザジは神社仏閣仏像巡りだった。
刹那は部屋に戻ってこなかった。
あのお話が効いたのだろう。
過去はもう変えられない。
乗り越えられるかは刹那次第、といった所だ。
潰れたら潰れたで別に良いがってネギの時にも言ったな……ただ、ネギほど有害ではないので、アフターケア位はするつもりだがね。

俺達が帰って来るとネギがロビーで呆然としていた。
茶々丸とザジは先にネギに気がつかずに行ってしまうが、俺とエヴァが気付き足を止める。

「何をしとるんだ、あのガキは？」

「……やれやれね……先に戻っていて頂戴、エヴァ」

「世話焼きか？」

「違うわ」

エヴァは、そうか、と言って茶々丸達に追いついた。

「何をしているのかしら？」

「あ……ルーデシアさん……」

俺の問いに気付き、呟くように言うネギ。

「あの、相談してもいいですか？」

ネギがおずおずと聞いてくる。

「何かしら？」

十中八九、告白の事だろな。

「生徒から告白されたんです。僕は……どうすればいいんでしょうか？」

やっぱりか。

「人はね――――――」

「？」

「――――人は……他人に相談をする時にはもう答えは決まっているらしいわよ？」

「もう、答えは決まっている……」

「それに、得てして人間という生き物は同意を求めたがる生き物らしい、とも言われているわね。
でも教師と生徒が付き合うのも教師的には失格なのだけれど」

俺はそう言い残し、ロビーを後にした。

その後、風呂に入りたくなったので風呂に入っているとネギの奴が入ってきた。

む？
カモが居ない？
まあ、余計な茶々は入れられたくないしな。
そう言えば朝倉とかが来るシーンだったか？
うーむ……脅すか。
とか言ってる間に朝倉（しずな先生バージョン）がネギを脅し始めたので予定通り、脅迫をする事にしよう。
てな訳で、ていッ！！

俺は朝倉とネギの間にダイブした。

「ルノーさん！？」

「ゲ」

ネギが驚き、朝倉がバツの悪そうな顔になる。

「とても面白そうなお話をしているわね？」

俺は仮にも広域指導員だからな。

「さて、朝倉和美さん？　覚悟は良いかしら？」

「な、何を……？」

俺は朝倉のしずなマスクを剥ぎ取った。

「朝倉さんッ！？」

「ああッ、私のマスクがッ？！」

「早速、魔法がバレたようだけれど？」

「うっ……」

今度はネギがバツの悪そうな顔になる。

「い、今、魔法って言った！？　ルノーさん魔法知ってるの？！」

朝倉が俺に詰め寄ってきた。

「ええ、だって私も魔法使いだもの」

「ほ、ホント？！　世紀の大スクープパート２ッ？！」

俺がそう言うと、朝倉が愉快なテンションになり始めた。

さて脅迫タイムといきますか。

「さて、魔法使いとバレてしまったわ。　ネギ・スプリングフィールド？
魔法が一般人にバレた場合は即座に忘却魔法、もしくは目撃者の処理の二択だけれどどちらにするのかしら？」

ああ、処理って言うのは抹殺も含まれるわ、と付け加える。

「「ま、抹殺？！」」

二人が声をそろえ驚く。

「当たり前でしょう？　今まで魔法がバレなかったのは記憶を消したり、目撃者を処理して来たからよ？
目撃者は消す。　単純且つ、効率的よね。
そう言えばネギ・スプリングフィールド、貴方は満足に忘却魔法を使えなかった筈よね？
なら、そうね……朝倉さんには修学旅行の夜、外へ出たっきり戻らずに行方不明、なんて良いんじゃないかしら？
貴女自身がニュースで取り上げられればジャーナリストとして本望でしょう？
もっとも、１ヶ月もすれば世間では忘れられるでしょうけど。
ああ、御家族の事は心配しないで、貴女の居なくなったショックで貴女の記憶が無くなってしまった、という事にして記憶をしっかりと消しておくから誰も悲しまないわ。
もちろん……クラスメイト達にも」

「ひ……ッ！！？」

朝倉は物騒な内容を想像したのか悲鳴を上げる。
それはそうだろう、それは己の存在の完全抹消だ。
自分が存在したという記録さえ完全に消えてしまえば、元から居なかったのと同じなのだから。

「貴女が悪いのよ？　知らなければ……いえ、知らなかった事にすればそんな結末にならなかったのにね？」

三日月形に口を吊り上げる。

「ふ、ふふ、脅そうっての？　これが見えない？　このボタンを押せば全世界に情報が流出するよ？」

携帯のボタンに手を掛けて見える様に突き付けながら、怯えで出してしまう乾いた笑い声と共に俺とネギから距離を取り始める。

「そ、そんな……ッ！？」

ネギが慌て、杖を握り締める。

「だから何？」

情報流出？
何それ美味しいの？

「えっ？」

俺の反応に朝倉がまたもや驚く。

「情報を世界に配信した所で揉み消されるわよ？　何故、今まで魔法使いが世界に認知されていないか知っているかしら？
確かに、認識阻害魔法という便利なモノがあるのは否定しないわ。でも、飽くまで阻害よ。
完全ではないわ。
なら、どうしてあんな巨大な学園都市が今まで存在し続けていられたのか……ジャーナリズムを掲げる貴女なら当然、知っているわよね？」

「え、それは――――」

「国家規模の報道規制、報道操作よ」

「……」

「貴女も噂位は聞いた事はあるんじゃない？　麻帆良の都市伝説、困っていると魔法少女や魔法オヤジが助けてくれる。
それは正に今日運悪く目撃してしまった事によって本当の事だと思ったのではないかしら？
麻帆良学園という場所は魔法使いが数多く居るある意味、日本の拠点の一つよ？
そんなものが１００年以上も長い間、国に露見されずに居られるものかしら？　答えはノー。
日本にも陰陽術師という人種が居てね？　今はどうだか知らないけれど、日本警察には特殊資料整理室なんてところが在ったりしたの。
そこへ文明開化と共に新たな物が流れてきた。　それこそ西洋魔術師なんて人種すらも、ね。
つまり、昔から政治的取引をして居座っている訳。

日本の一部の偉い人も知っているし、それどころか国連にも魔法使いは居るし、有名な所だとＮＧＯの一部ボランティアグループも魔法使いで構成されているわ。

つまり魔法の存在は公にはされていないだけで、元からそこにあるの。

でも、そんな絵本の中の魔法（くうそう）なんて、それこそ多くの人間にとっては受け入れられない空想よ。

なら余計な混乱を避ける為に、隠すのは当然ではないかしら？

おっと……しまったわ。

ついうっかり口が滑って世界規模での秘密を知られてしまったー。

これはもう、忘却魔法では処理しきれないから死んでもらわないとー」

俺は最後の方をワザと棒読みして、ゆっくりと歩を進めながら腕を一閃、朝倉の携帯電話の丁度、折れ曲がる所を切断した。

無影を一本だけ投擲して斬った、それだけの事。

一般人どころか、ネギの眼にも写りはしまい。

「ヒッ？！　お、お願い！　クラスメイトでしょ？！　見なかった事にするから！！　い、命だけは助けてッ！？」

それを見た朝倉がへたり込み、今更命乞いを始める。

「今更無駄よ……貴女は知り過ぎた。　別に正義の為に死んでくれとは言わないわ。

私達、魔法使いの都合で世紀の大スクープと共にこの世界から存在ごと消えて頂戴？」

俺が何所からともなくＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍを一丁だけ取り出し、朝倉に構える。

「じゅ、銃ッ？！　何で？！　しかも何所から？！」

「そんな事はどうでも良い、でしょう？　さようなら、来世があったら今度は上手く世渡りした方が良いわよ？
死を以て教訓と成す、良いお勉強になったわね？」

俺は朝倉の額に銃口を押し付け、引き金に掛けた指の力を徐々に入れて――――――

「待ってくださいッ！！」

ネギが俺に意見をしてきた。

「邪魔をするつもりかしら？」

「やり過ぎです！　幾ら魔法がバレたからって、こ、殺す事無いじゃないですかッ！？」

俺は内心ほんの少しだけ嬉しく思った。
一度、徹底的に叩きのめされた相手に意見する事がそう簡単ではない事にだ。
が、今褒める程の事でもないし、褒めても逆効果だ。
俺はちょっとした嬉しさを無表情という名の仮面で覆い、残っている左腕にもう一丁のＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍを朝倉と同じく突き付ける。

「……ッ、こんな事されても、僕は意見を変えませんよ……！」

睨みつけるように言うネギ。

お前は俺から朝倉を救う事が出来るかな?

「変えなくとも、朝倉和美を殺すのはもう決定事項よ」

俺は冷たく言う。

「唯の銃で僕の魔法障壁を破れると思っているんですか?」

「逆に訊くわ。　貴方程度の術式で、私の銃を止め切れるのかしら?
この銃を見て一発づつ弾丸を発射する銃だと思う人も居るけれど、
この銃は散弾を発射するタイプの銃よ?
単発式の銃弾ならともかく、散弾を魔法障壁で受けるのは中々に
難度が高いわよ?
実戦経験が無いに等しい貴方の障壁がどこまで耐えられるかしら
?」

一発づつの銃弾が発射される攻撃が点のタイプならば、そのタイムラグで物理障壁の強度が元に戻るが、至近距離の散弾による限りなく面に近い点攻撃となると物理障壁の強度を格段に削っていく。
離れていればそれ程でもないのだが、至近距離の散弾は中々の威力を誇るのだ。
しかも今のネギが張っている風の障壁は基本的な物であるし、汎用性にも優れる物だが、如何せん下級の障壁だ。
障壁は複数の攻撃からも防御するという想定はされているが、やはり強度限度もあるのも事実で、至近距離の散弾を受けるのは避けた方が良いとも言われている。
時々、馬鹿力とか、何となくで何とかする筋肉達磨も居るが、そ

いつ等は例外中の例外だ。
もっともナギはゼクトという師匠から魔法障壁の術式を死ぬ程叩き込まれたし、ラカンも何となくと言いながら、今までの戦闘経験に頼った感覚で障壁を形成しているし、何より奴らは銃を撃たせる前に無力化するから障壁なんて障子紙並みの薄さでも十分なのだが。
ネギは強力な魔力を持っているとはいえ１０歳、戦場に出た事も無い子供が作った障壁程度ではすぐに貫かれて死ぬ。
犬神小太郎の気の込めた掌底程度で障壁を抜かれたのがいい例だ。
恐らく、ＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍに装填されている銃弾を全て発射する頃にはネギは肉塊に成り下がっているだろう。
とは言っても、２～３発位なら馬鹿魔力で耐えられるだろうが。

「退きなさいネギ・スプリングフィールド。　一度死に掛けて身の程を知ったばかりでしょう？」

「それでも僕は退きません！　生徒を守るのが先生の役目です！　それ以前にッ、僕の目の前では誰も殺させませんッ！」

「ネ、ネギ先生……」

朝倉がネギを呆然と見つめる。
心なしか目が潤み、頬に朱が指している気がする。

惚れたか？
まあ、いいや。

「私と貴方の間には少しだけ距離があるわ。　走れば一秒も掛からない距離が。
でも、貴方が朝倉和美を助けるその一秒の間でも引き金を引ける。
そして、貴方は瞬動すら覚えていない。

よしんば覚えていたとしても、格闘術を経験した事も無い素人の子供が私を一瞬で組み敷く事は不可能よ。
勿論、魔法の詠唱よりも此方の方が早いわ。
無詠唱も出来るでしょうが、私も障壁は張っているし、私の魔法障壁を貫通させるのなら大呪文を撃つくらいしか手は無いけれど、朝倉さんも消し飛ぶわね。
さて、貴方はこの状況を好転させる事が出来るのかしら？」

現時点でネギが出せる手札は無いに等しい。
今の性格のネギならば、恐らく持ちうる札は一枚のみ。
それは自分自身、だと思う。

「なら……」

「その様子だと、何か考えでもあるのかしら？　私を納得させるだけの手札が貴方にあるとでも思っているの？」

俺は聞き返す。

「はい、あります。　朝倉さんが魔法をバラしたのなら、僕が責任を取ってオコジョになります。
僕は彼女の担任であり、彼女が行おうとする事の責任を取る事が義務ですから。
何より、ルノーさんは朝倉さんの携帯電話を壊してしまったので、世界への魔法暴露は回避された物だと判断して、僕が監督不行き届きで、オコジョになって麻帆良学園を去る事で決着が着くと思います」

ふむ、なるほどね。
悪くはない……学園長ならもっと罪を軽くもしてくれる、という

か不幸な事故だったと無罪にしそうだ。
でも、それじゃあ駄目なんだよ、ネギ・スプリングフィールド。

「……貴女はそれでいいのかしら朝倉和美？　歳下に匿われるなんて、何とも情けないわね？
それと彼女のパソコンには未だ魔法バレの証拠等が保存されているけれど？
自分の記憶と証拠が消されるとわかっていて、ジャーナリストである彼女が黙っていると思うかしら？
記憶を消しても、彼女が自分のパソコンで記憶にない魔法に関する情報を見つけたら、また周りを嗅ぎまわるでしょう？
それもなんとか出来るの？」

そう言って、俺は引き金に掛けた指を放す。

「オ、オコジョって魔法少女？！　でも、確かに歳下に庇われるのは……」

「僕は、自分の生徒を信じています」

朝倉が自問自答を始め、ネギが言う。

てか、記憶ねぇのに信じるもねぇだろ。

「何を安心した顔をしているのかしら？　もしかしなくても命が助かった、なんて勘違いしているの？」

コイツ本当に天才なのか？
ああ、馬鹿と天才は紙一重なのか。

またしても俺が引き金に指を掛けた事で、場に緊迫した空気が戻る。

「僕が責任を取ればそれで……ッ？！」

そこで俺はネギの方に向けているＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍだけの引き金に指を掛ける。

「貴方程度がオコジョになるだけで済む問題じゃないのよ。魔法がバレると言うのは此方側に来る可能性があるという事よ。

此方側に来る可能性があるという事は、より大きな理不尽に蹂躙される覚悟を……その瞬間を肯定する事でもあるわ。

いい加減、その甘い考えを捨てなさい。

今回のこの意見だけれど、自分がオコジョになる位なら誰も死なない、誰も傷つかないから大丈夫とでも思っているの？

貴方がオコジョになったとしても、結局記憶を消されるのがオチよ。

いいえ、貴方は自分の英雄の息子というネームバリューを軽く見過ぎている節があるわ。

貴方は魔法世界ではある意味、これからの魔法界を担う期待そのものなのよ？

そんな存在と出会った一般人が、貴方の所為で問題を起こしてしまったという問題を起こしたのなら。

彼女は記憶の消去どころの話じゃない。

それこそ魔法に関わる者全てが貴方を期待するあまり、貴方の名に傷が付かないように、文字通り全てが彼女を殺すでしょう。

貴方は、また偶然見られてしまったとはいえ、巻き込んでしまったのよ。

自分が責任を取れば、なんていつまでも通用すると思わない事ね」

「なら、尚更僕は引く訳にはいかないじゃないですかッ！！　僕の所為なら――――――！！」

ネギの方のＭＡＧ－７　Ｆ－Ｃｕｓｔｏｍの引き金を俺は引いた。

魔法障壁の銃弾を受け止める音が響き、ネギは腰を抜かしたらしく、朝倉と同じように座りこんでしまう。

魔法は圧倒的な威力を誇りながら、イマイチ死をイメージさせ難い。

だが、刀剣や銃は今までなんの力も持たない人間が死を与える為に作りだされた物だ。

実際に使われた所を見て、実戦経験の無い子供が平然としていられるものではない。

ましてや障壁を張っているとはいえ、自分自身に放たれたという恐怖は拭えされないだろう。

「撃たないとでも思った？　いつまでも自分の身を犠牲にして守れるなんて間違いは早々に直しなさい。

それと誰も殺さない、殺させない、なんて理想では結局誰も救えないわ。

朝倉和美、私達の世界は魔法だけじゃないわ……こんな物が在りふれて、こんな事が日常茶飯事に起こりうる事なのよ？

貴女は全世界に向けてこんな事が日常になる事を広めたいの？

今は銃だったけれど、魔法だって同じよ。

簡単に人を殺傷できる。　人を殺せる力、それを貴女は広める事が正しいと言えるの？

情報規制されるのは目に見えているけれど、もし仮に金属探知機で発見も出来ない殺傷能力を持つ人種……魔法使い達の事が世界に広がれば、第三次世界大戦の引き金を引く事になるかもしれないのよ？

貴女の所為で、一体どれほどの人が死ぬのかしら？　百？　千？

万？　億？　それ以上？
そんな数の犠牲者が出るのなら、貴女一人死んでくれた方が、多くの人達を救えるわ。
さあ、判ったかしら？　事の重大さに。　ネギ・スプリングフィールド、よく考えなさい。
貴方の知っている立派な魔法使いなら朝倉和美を処理するという意見が多いでしょうね。
見知らぬ多くの人を救うかを天秤に掛けて、見知った一人を消す覚悟がある？
それを否定するのなら、貴方は立派な魔法使いには成れないわ」

俺はもっともらしい事を言う。

「立派な、魔法使いなら……」

ネギはゆらりと立ち上がり、杖を握り締め、朝倉の方へと向く。

「ひ……ッ？！」

朝倉が悲鳴を上げる。
今まで庇ってくれた者が居なくなった。
一般人なら、多分耐えられない。
だが、次にネギの言った言葉は俺に従う意を示す言葉ではなかった。

「ルーデシアさん……立派な魔法使いって何でしょうね……？」

「体（てい）の良いプロパガンダでしょう？」

メガロのな……。

「父さん達もそうだったんですかね？」

「さあ？　どうかしら？」

俺ははぐらかす。

「馬鹿ですよね……前に散々言われたのに……結局、自分を犠牲にすれば助けられるなんて……」

「立派な魔法使いと正義は同義じゃない、前にも私は言ったわ」

「はい」

だから僕は――――――

――――立派な魔法使いを目指しません。

ネギは宣言した。

そして――――――

「僕は、自分の正しいと思った事を貫きます……それが、僕にとっての正しい事だと思いますから……」

そう言って、俺に相対する。

杖を握り締め、一度圧倒的に負け、今尚勝てないであろう敵（おれ）に向かって、今度は自分勝手じゃ無く、自分の見つけた新たな自分勝手（信念）で、俺と敵対する。

「そう……ほんのちょっとだけ、だけれど見直したわ」

俺は笑う。

失笑ではなく、歓喜でも無く、純粋に微笑んだ。

今回の事を利用したとはいえ、こんなにも早く成長への切っ掛けを見つけた事に。

「なら、今回はこれで終わりね」

俺は銃を仕舞い、背を向ける。

「朝倉和美、今回はネギ先生の為に丁度良い問題を起こしてくれたから、利用させてもらったわ。

だから見逃してあげる……というか、この程度の脅迫は元々するつもりだったのだけれど。

本当に全世界に魔法の存在をバラすという事はそういう事よ。

今回の私の例えは極端だけれどね？　でも規模が世界だから、あながち間違いとも言えない例よ？

自分の存在を消されたくなければ、口を噤んで大人しくしていなさい。　そして、次は無いと思いなさい？」

「ええッ？！　僕、試されてたんですかッ？！」

「だ、だずがっだ～……」

ネギが驚き、緊張の糸が完全に切れた朝倉は顔をクシャクシャにして泣き始めた。

それをネギが慰める。

「あのー、１つ聞きたいんですけど、朝倉さんの対応は……？」

ネギが俺に聞いてくる。

朝倉はビクッと身体を硬直させた。

「別に何もしなくて良いんじゃないかしら？

世界にバラしたら学園長辺りが国の偉い人と協力して、戸籍改竄までして情報どころか、発信元の存在まで、綺麗さっぱりと消してくれるでしょうし。

一個人程度ならそれでお終いよ。　それとも、私の忘却魔法で今からでも記憶を消す？」

「えっ？　あ……ッ！！」

ネギはその手があったかと驚きの声を上げる。

そうなのだ。

魔法使いなのはネギだけじゃなく、俺も含まれる。

なら俺が忘却魔法を使えば良いだけの話。

今回のネギへの問答は、朝倉を脅迫している途中で思いついた即興の事だったが、上手い具合に右肩上がりな作用をもたらした、と

いう話だ。
で、もう一つ言うと、朝倉の記憶を消す事によって後々何かしらイレギュラーが発生する可能性を考慮しての事。
結局、吸血鬼事件で明日菜を巻き込まないように忠告し、叩きのめしても関わって来た事もあり、忠告して首を突っ込んできた者は様子見する事にした。
つまり本人が望まない限り、最初から記憶を消すつもりはなかったのだ。
ネギに甘い甘いと言いながら、結局甘いのは自分自身という、他人に言われれば反論しようのない事でもあるのだが……全く締まらないものだ。
もっとも学園長辺りがまた一人、２－Ａの生徒が魔法に関わったと喜びそうだし、問題にもしないだろう。
これだけ脅したんだ。
関わってきたとしても消極的になるかもしれないし、それこそ自己責任なのでよっぽどの事が無ければ俺はフォローもしないつもりだし。

「貴方達が自覚を持って行動するなら、私は何も言わないわ。別に冷血な訳ではないの。
目に余る行動を取るから、私は警告をしているに過ぎないわ。
本当なら、面倒事は無視する質なのよ？　貴方達は私の大切なものの境界線にすら入っていないのだから。
さて……邪魔者も来たようだし、私は部屋に戻るわ」

俺はそう言って委員長達と入れ違いに風呂から出て行った。

そして、委員長達が風呂に突入して目撃したのは、泣きじゃくる朝倉をネギが慰めているという良くわからない状況だけだったとさ。

更に、俺に脅された朝倉はラブラブキッス大作戦を決行する訳も無く、その夜は静かに更けて行き、ネギはのどかへの告白を断ったらしい。

仮契約も明日菜以外とはしていないとか。

何でも、先生と生徒だからという理由に加えて、自分には目指すモノが出来たからしい……一体、何を目指すのやら……うーむ、原作では宮崎のどかが大活躍するのだが、一体どうなるんだ？

世界の修正力とかが働いて、結局巻き込まれそうな気がするぜ……まあ、なる様になるだろ……。

第２７翼　世界の現状、脅迫する紫の麗人（後書き）

前書きに書いた通り、もうちょっとネタに走りたい話をその内いれたいです。

ネギまのバトンが周って来たので、活動報告にて書きました。
内容は主人公への質問を主人公が答えるというものです。
興味のある方は覗いて頂けると嬉しいです。

次回はＵＳＪとかで戦う話を入れたかったんですけど、あんまり文が思いつかなかったので、結局シネマ村で戦う事になりました。
それと新たなる人物が襲来予定です。

主人公への個人的な質問に受け答えする様な話も番外編で入れたいと思いますので、聞きたい事などが在りましたら感想板の一言に書いて頂ければ、その内容を入れたいと思います。
ではこれにて失礼ノシ

第ＥＸ・４章　なぜなに朱然さん（番外編という名の時間稼ぎ）（前書き）

ネギま系のバトンを活動報告に書いたのですが、一応本編にも書いておこうかな～と。
それと主人公への質問を乗せてみたりしました。

第ＥＸ・４章　なぜなに朱然さん（番外編という名の時間稼ぎ）

「皆さんこんにちわー、作者のＶｉｅｒです」

「この憑依とか転生とか召喚されるお話のオリジナル主人公、朱然義封よ」

「えっと、一つ聞いてもいい？」

「何かしら？」

「何故にルーデシア？」

「良いじゃない別に」

「・・・・・・目覚めた？」

「・・・・・・」

「ちょ、無言で脛を蹴りつけ続けないでくれないかな・・・・・・・平静を装ってはいるけど、痛い」

「口は災いの元って言うじゃない？」

「ああ、はい、わかったわかりましたよ。　そろそろ話を勧めないと読者様達が退屈すると思うので早速、水仙ｓッ」

「作者と言えどもその名は言わせないわよ？」

「いやいや、作者ですよ？　生みの親と言っても過言ではないのに呼んではいけないんでしょうか？」

「駄目よ」

「・・・・・もう良いよそれで。　じゃあ、朱然さんに早速質問いきたいと思います」

「ええ、どうぞ。　唯、基本的な事は活動報告のバトンで答えたのだし、そちらを覗いてもらえばいいと思うのだけれど」

「あー、でも一応その問いは載せておきたいと思いますが、面倒だと思うのでそれも踏まえながら何か付け加えてくれると助かります」

Q1　貴方の名前は？

「■■■■って、書いても伏せ字で判らないだろうし、そう名乗るつもりもないので、今の名前、朱然義封って言うのが本名かな？」

「■■■■は答えないので？」

「言わないわ。　過去は乗り越えたのだし、この身体は魂が無かったとは言っても朱然義封のものなのだし、失礼でしょう？」

「まあ、そうですよねー。　じゃあ、次の質問」

Q2　名前の由来は？

「実在した古代中国は三国時代が呉の将、朱然義封に憑依した事がこの名前の由来と言っても過言ではない、のかな？
因みに姓の朱、これは日本で言う佐藤とか田中とかだね。
で名の然、これは名前に当って、最後の字の義封だけど、これは親や主君などの特定の目上の人物だけが名を使用し、それ以外の人が名で呼びかける事は極めて無礼な事とされていたのでそれ以外な人用に呼ばせる名前って事だよ」

「これはそのままの意味ね」

「え、もっとこう何か無いんでしょうか？」

「豆知識も話したのだしこれで良いのよ」

Q3　貴方の性格は？

「んー、優柔不断とか思いつめると一直線みたいな感じかなー？
あ、でも他の人からツンデレって言われた事が・・・・・・後、よくお人好しって言われた事もあるよ。
面倒見が良いとかも・・・・・・不本意だけど」

「素でツンデレ属性じゃ？」

「私自身断じて認めないわ。　私がツンデレになって何所が面白いの？」

「でも読者様の中で感想を書いてくださる人の中にも可愛いとか、

欲しい言ってる方が居るよ？」

「断じてお断りよ。　私は男のものになる位なら死を選ぶわ。　女の子なら別に良いのだけれど」

「何か恋姫の華琳さんとか、桂花さんみたいになってない？」

「！！」

Q４　生年月日を教えてください

「一応、１月２日。　何とも微妙な日だけど」

「本当に微妙な日よね」

「冬休み中だし、おせち＋ケーキのコンボが来そうな日だ」

「母親はおせち作りなんてしないし、父親は書斎で仕事、姉さんだけね、祝ってくれたのは・・・・・・」

Q５　何歳ですか？

「数えで言うなら１３１歳、朱然義封という人物としてネギま！の歴史での生まれから数えるなら１８２１歳。

まあ普通に教えるなら前者、ギャグで言うなら後者」

「もう爺さんですね」

「・・・・・・」

「ああ、すみません蹴らないでくださいすみません」

Q6　兄弟、姉妹はいますか？

「姉が一人だけ」

「恋姫の時だと三つ子の妹が居るんですよね？」

「ええ、騒がしかったわ。　でも私は養子だったから血が繋がった兄弟でいうなら、やっぱり姉さん一人よ」

Q7　好きな人は？

「前に好きだった人が・・・・・・今でも・・・・・・」

「これは蓮華さんですね、ッ」

「あの・・・・・「孫仲謀」え？「孫仲謀よ」ああ、はい孫仲謀さんでしたハイ・・・・・孫権さんでも駄目なんですかそうですか」

「当たり前の事よね」

「で、エヴァンジェリンさんは？　キスしましたよね？」

「黙秘します。

唯、本当に初めて愛した人が居たのにエヴァの気持ちに答えたら嘘になってしまいそうだし、そんな中途半端に付き合ったとしたらエヴァにも失礼よ」

「そう言えば呉の皆さんとは？」

「黙秘よ「え、でも」も・く・ひ・よ？「ハイ」」

Q8　どんな人？

「誰かが居る時は生真面目で、強情で、弱さを皆に隠して・・・・・でも、一人になると途端に弱かった女性だよ」

「肩の力を抜く事を知らないんだもの、全く生真面目よね」

「（女になってると知ったら孫仲謀さんは一体どんな顔するんでしょうね？）」

「あら？　何か言いたそうね？」

「いえいえ」

「へぇー・・・・・・」

Q9　へぇ、今度会わせてくださいよ

「故人だ。　もう一度会えたら、どんなに救われるんだろう・・・・・？」

「もう一度、会いたいですか？」

「そうね。　やっぱり会いたいわ」

Q10　冗談です

「そうかい・・・・・・」

「これは別に良いですね」

「ええ、そうね」

Q11　嫌いな人とか居ます？

「以前のネギ、近衛近右衛門、神楽坂明日菜、カモ」

Q12　何処が嫌い？

「ネギは最近良くなってきたけど、前は何よりあらゆる自覚が足りなかったからねぇ。

学園長は・・・・・なんかウザくない？　裏で色々策謀巡らせたり、根回ししてるっぽいしさ。

明日菜は無駄な発破かけ過ぎ、カモはエロは別に見逃すけど、無関係な人を進んで巻き込むのが俺的にアウト」

「最近のネギ君は見れる様になってきたのでは？」

「ええ、喜ばしい事じゃないかしら？」

「学園長に一言！」

「今すぐ冥土への片道切符をお送りしたいわ」

「明日菜さんについては？」

「記憶を無くす前はアスナ、今は明日菜という具合に区別しているわ。　からかうとあの手のツンデレは楽しいわよね」

「カモに一言！」

「氏ね」

Q13　好きな食べ物は？

「甘い物とか、チーズ系の入った物かな。　チーズが焦げてカリカリになったと事か美味しくない？」

Q14　嫌いな食べ物は？

「辛い物、あんな激物を好んで食べる思考が意味分からんし」

「所謂、子供舌ですね」

「子供舌結構じゃない。　誰にも迷惑をかける訳ではないのだし」

「好物がチーズとか甘い物って書いてありますけど、太らないんですか？」

「太らないわよ？」

「軽く女の敵ですね、って今は女でしたね」

Q15　癖とかあります？

「最近、男に戻った時につい女の時の胸が邪魔で、胸の下で腕を組む癖が・・・・・なんか、色々駄目っぽい気がする・・・・・」

Q16　口癖は？

「特には思い浮かばないかも。　強いて言うなら失望しただね」

Q17　寝癖は？

「髪が長いけどサラサラだかｒって、寝相の方？

あー、起きると何故か万歳してる事かな」

「胸の下で腕組むとかもう女ですね、おっと！　蹴ろうとしないでくださいよ」

「仕方ないじゃない。　邪魔なんだから」

「ルーデシアの時は爆乳ですしね」

「ソコに直りなさい。　セクハラは極刑よ」

「所で何で万歳してるんですか？」

「仰向けに寝ている時に万歳した方が何故か楽らしいのよ」

「へぇ～、そうなんですか」

Q18　幼なじみはいますか？
「居ないよー」

Q19　その人は大切ですか？
「居ないからスルーで良いよね、この質問」

「居ないんですか？」

「居なかったわね」

Q20　苦手なものは？
「狂信者、潰しても潰しても沸いてくるゴキブリ並みの生命力だし。黄巾党とか、五胡とか、メガロメセンブリアとかさー」

「面倒よね、狂信者って。　信じ過ぎるのも問題という事よ。　とある物語の薄幸少年も言っていたじゃない。政治に宗教を混ぜたから戦争が始まったって」

「他にも色々あるんでしょうけどね」

Q21　特技は？
「速読、道具作成、隠密、武術全般、五感制御、割とマルチリンガ

ル」

Q２２　趣味は？

「読書、改造、改良、開発」

「器用貧乏ですね」

「私の場合は魔眼を使えば器用豊富とでも言えばいいのかしら？」

「開発ってアヤシイ響きですよね？」

「あら、貴方の腕をロケットパンチに改造して欲しいのかしら？」

「すみません自分調子乗りました！」

Q２３　自分は実は〇〇だ

「実は女装が趣味だッ！！」

Q２４　へぇ、そうなんだ

「えッ、冗談だよッ！？　そこは「何だ、冗談だったんだー」とか言うとこじゃない？　ねぇ？！」

Q２５　そろそろ終わりですね

「ちょ、何勝手にメに入ちゃってんの？！　てか女装の話をカットしてくｒ」

「自分で言っちゃいましたね」

「あれだけカットしてと言ったのにカットされないのだからこの世は間違っているわ」

「ええ、間違ってますね。　既に貴女の女装スキルはＡ＋、それによって新たに女体スキルが隠しスキルとして発現しましたし」

「アーアー、何モ聞コエナイワー」

Ｑ２６　このバトンを誰に渡します？

「カモネギさんの魔女と槍兵とチートがネギま！で無双の朱雀命君にバトンタッチする予定かな。

　ｚｅｒｏランサー格好良いよね、中の人カッコイイし、後、面識あるキャス子さんは出合い方が違えばわかり合えたかもしれないかもしれないのが残念。

　主人公の朱雀命君には本編にて学園長をもっと苦しめて欲しいと思ってます！　切実に！」

「マスコミに情報リークとかエグイですよね」

「とても素敵な策略じゃない。　私はこういうのは好きよ？　私もこんな風にした方が良かったかしら？」

Ｑ２７　最後に自分に一言

「俺は此処に誓おう、己が行いに後悔しないという事を」

「さっきの女装の事もつまり後悔しないって事ですよねこれ」

「何の話かしら？「いや、ですから・・・・・・」何の話かしら？」

「飽くまで無かった事にするつもりですか・・・・・・」

Q２８　お疲れ様でした

「あー、うん、お疲れ様。　って、そうだ！　さっきのマジで女装の話をカットしてくｒ」

「往生際悪いですね」

「・・・・・・」

「ちょっとちょっと、明後日の方向を向かないでくださいなー」

「此処までがバトンの質問ですね～。　次は感想に寄せられた質問回答です」

蒼月璃煌瑠＊より

「ここのところ女性でいることが多いですが、何か影響がありますか？
なんかルーデシア以外の変身も何故か女性が多いし、それも影響…？
男性キャラになった時にうっかり女性用の下着やら服やらを無意識に手に取ったり着てしまったりとかありそう」

「だそうですが？　って、ヤオになっている？！」

「この姿でははじめまして。　この質問は男の姿の僕への質問だと思ったからこの姿になったのだけど」

「成程成程、ではお答えください」

「う～ん、そうだね・・・・・・麻帆良学園って女子校エリアの真っただ中だから女性の姿が当たり前だし、男の姿でうろうろしていると色々噂になるんだ。
女性への変身が多いのは生活の大半が女子校エリア寄りだからその所為かな・・・・・・？
それと最後の方のうっかりの部分だけど、確かに手に取ってしまったりはあるけど、流石に着た事はないよ」

「男としてこの現状をどう思っているかも訊きたいです。
エヴァでの件で、されるがままだった全く男らしくない、むしろ男の娘を存分に発揮した形の朱然さん。絶対影響出てますよね？」

「男として、この状況は早く何とかしたいと思っているんだけど、学園に居る限りは難しいかな。

最近、女性になってばかりいるからか女性用下着とかに照れなくなったかな？
後はレディースショップとかランジェリーショップも自然に入っていけるようになったんだ・・・・・本当に何とかしないと不味いと思ってる。
流石に女子トイレは恥ずかしいから、なるべく我慢してるけど」

「普通に言ってますけど、明らかに変態への階段を登り詰めようとしてますよね？」

「言わないでくれるかな？」

「ちょっとッ？！　大渦を何故構える？！」

「ふぅ・・・・・作者はもうちょっと自重した方が良いと思うんだけど・・・・・多分、しないんだろうね」

「以上！　ありがとうございました！」

「疲れたから僕は帰るよ」

第ＥＸ・４章　なぜなに朱然さん（番外編という名の時間稼ぎ）（後書き）

どうだったでしょうか？
多分、もう少しで二十八翼が書き終わるので、もう少しだけお待ちください。
というか、二十八翼に新たにイレギュラーを入れてみたは良いけどネギま編の物語が収集するのかコレ？とちょっと不安に・・・・・・。

第２８翼　シネマ村、？かれる紫の麗人（前書き）

此処でＦａｔｅ系のイレギュラーを混入しようかと悩んだのですが、活動報告に書き込んで頂いた方々に、やめといた方がいいのでは？とアドバイスを頂いたので、Ｆａｔｅ系イレギュラーはボツになりました。

アドバイスを書きこんでくれた方々に感謝です。

第２８翼　シネマ村、？かれる紫の麗人

皆さんこんにちは、ただいま俺達は昨日に引き続き仏閣巡り終え、結局、問題の起こるシネマ村に行く事に……で、今俺は花魁（おいらん）の様な格好です。

あーもうッ、動き難いったら……！

エヴァが俺と茶々丸、ザジに、費用は私が持つ！だからこれを着るのだッ！とか言って、事情を聞いた店の人に連行された。

で、ゴテゴテした着物を着る事に……ザジはジェントルメンな格好が妙にしっくりしているが、付け髭が似合ってなくて笑えた。

エヴァと茶々丸は普通に着物。

それはさて置き、それだけなら良かったのだが、委員長達にはエンカウントしなかったのにネギ＋明日菜の班に会ってしまったのだ。

世界の修正力なのか？

こんな恰好じゃ、戦い難くて敵わないぞオイ。

「せっちゃん、なんでおらんの？」

「え？　刹那さん居ないんですか？」

木乃香とネギが今知ったとばかりに言う。

というか、さっきから建物の角からチラチラと見えるのは刹那だね。

木乃香が合流してから気付いたんだけどさ。

何故俺が気付いたのかというと、今の刹那はとある目録の三沢塾に入った薄幸少年の様に、人混みの中でポッカリと気配の全くない所があったからです。

昔、明命と思春に隠密の何たるかをみっちりと教えてもらったからよくわかるのだ。

「気配を完全に消す？　そんなものは隠密なら出来て当たり前だ」

とは思春の言。

「気配を消すのではなく、周りの環境と一体となる事こそが隠密の極意なのです！」と明命が教えてくれた。

つまり今の刹那は人の気配という名の色を掻き消している様なものなのだ。

隠密としては失格。

自分の気配を消すのは当たり前、そこからどれだけ人の気配という名の色に近づけるかが隠密の肝だ。

まあ、忍者の楓とかならまだしも剣士の刹那には酷な話だけどさ。

やっぱり日々の積み重ねが大事ですよ、うん。

てか敵が勢揃いしてシネマ村に来そうな気がするんだよね……。

と俺が嫌な予感を感じていると、馬車に乗った月詠が現れた。

「どうも～、ウチは東の洋館の貴婦人です～、遊廓（今で言うキャバクラ？）を建てた借金のカタにそこの太夫（遊廓で一番人気の人）である貴女と妹を頂きに来ましたえ～」

月詠は扇子で俺と木乃香を指した。

って、俺もかよ！？

しかも太夫なの？！

「そんな事させません！」

そこで進み出たのはネギだった。

おーおー、勇ましい事で。

「可愛らしい用心棒はんですね～。　なら――――」

そう言って、自分の手袋を外し、ネギに向かって投げかけた。

それをネギは受け取ろうとして、俺はネギを軽く押し退けて手袋を受け取った。

観客はネギが受け取る物だと思っていた事と当事者である俺が戦えるのか？という事に、おおッ？！と驚く。

今のネギには厳し過ぎる相手だからね。

「戦えるんですか～？」

月詠は多分、その格好でと言ったつもりなのだろうが、丁度良い、適当な口実でも述べてイベントという事にして戦うとしよう。

確かに着物は動きづらいが戦えない訳ではない。

「わっちは遊廓の太夫……武芸の芸も芸の内、なら戦えない訳が無いでありんす。

わっちが勝てばその借金、取り消してもらえるでありんすか？」

外見が外国人の俺が、似非廓言葉でソレっぽく口上を言うと観客がワッと沸いた。

「うふふ、良いですえ～。　ではこれより３０分後、貴女自身とこのかお嬢様と借金取り消しを賭けて、シネマ村正門横日本橋にて――――」

月詠はそこで言葉を区切ったが、目がこう言っている。

――――逃げたらあきまへんよ？

てな。

人混みの中で俺だけに殺気を向ける月詠。
その近くに居たネギがあまりの鋭さに身を竦ませる。
月詠は身を翻し、馬車に乗り込んで行ってしまった。

「いやぁ、格好良かったよルノーさん！　ね、ゆえ、のどか」

「う、うん……凄かったですー……」

「シネマ村のイベントでしょうか？」

図書館組が空気を読まずに凄い凄いとはやし立てるが、ネギは本物の殺気を感じて呆然としたままだ。
が、明日菜に肩を叩かれ正気に戻った。

「いつまで呆けているのかしら？　さっさと行きましょうネギ先生」

そうして俺は、その死闘を演じる舞台となる日本橋に移動したのだった。

「うふふ、ぎょうさん連れて来てくれはっておおきにー。　楽しくなりそうですな～、銀髪はん？」

本当に蕩けそうな笑顔を向ける月詠。

傍から見てるだけなら可愛いんだけどなぁ……。

「私は楽しくないわ。　寧ろ最低の気分よ。　ネギ先生？　先生なら、皆をきちんと守りなさい」

俺は節目がちになって、進み出る。

あー、面倒くさー。

後ろの面々の半分は実力ある関係者なので、特に怪我などの問題は無いだろう。

原作では委員長が月詠を挑発したから百鬼夜行を召喚したが、今回は茶々入れんだろうし大丈夫かな？

「さあ、存分に死合いましょう？」

そう言って新しく調達したらしい二刀に気を流し込み、俺に斬りかかってきた。

対する俺も気を纏って即座に届かざる守護拳（マンゴーシュ）を使い、右からの袈裟斬りをまるで鏡の様に振った左手で刀身の側面から触れ、少し下がりながら八卦掌の様に峰の方へ手刀を回し振り抜かせる。

「？？」

月詠が首を傾げながら、第二撃、左からの薙ぎを放つ。

水平に来る刀身の下から左手刀で触れ、先程と同じ様に少し下がりながら振り切らせる。
そこで一旦、月詠が止まる。
「おかしいですえ～？　まるで手応えを感じられへんー」
そう言って、月詠が頬を膨らませて可愛く怒り始めた。
「ウチはもっと、こう……激しいのがええのに～。　まるで一人で慰めてるみたいで虚しくなる様な感覚ですえ～？」
表現がエロイよ月詠さん!?
「もっと激しくー！　やないと……」
そう言って向けた視線の先は、クラスメイト達だ。
チッ！
流石に巻き込む訳にはいかない、か……はぁ、要望にお応えするしかなさそうだ……何より、これ以上放置すればＲ１８指定の言動を無限放出しそうだ。
教育上それはよろしくないぞ月詠さん！
「わかったわ、さっきの技は使わない。　十分に激しくて、とびっきり滅茶苦茶にしてあげるわ」
そういった瞬間、パアァァッと笑顔になり、斬りかかってきやがった！
首を斬る横薙ぎと心臓を狙った突きが繰り出される。

俺は右腕を上げ、左腕を胸の上に構え、バレリーナの様に回転しながら接近。
心臓に向かっていた突きが着物の左袖に突き刺さり、回転と共に月詠の左手から刀がすっぽ抜け、川に落ちる。
それと同時に俺の首を狙っていた刀も右袖に刺さって回転によって絡め取られて一つ目の刀の反対側に落ちた。
そして、月詠の顔に数センチの距離で俺の顔が近づき――――

「今回はこれで終わりよ、此処は人が多過ぎてこれ以上激しく出来ないわ。
もっと激しいのを御所望なら、静かな所で二人っきりの時にして頂戴？」

俺は言い終わるのと同時に生体電気を気でちょっとだけ増幅し、月詠の首筋に手を添えて――――

「きゃんッ！？　ああん……もっとぉ～……」

――――月詠は気絶した。

全く……常人なら一瞬で気絶するのに、恍惚とした表情でもっとか変態過ぎる。
あれ？
何故か悪寒が……もしかして電気攻めという新ジャンルを月詠に与えてしまったからか？
お、俺はなんて事をッ？！

「きゃあぁぁぁッ？！」

むむむと唸っていると木乃香の悲鳴が聞こえて来たので視線を向

けると、木乃香とネギがいつの間にか城の屋根に居て、その向いに原作の天ヶ崎、小太郎が居た。
どうやら月詠と戦っている間に木乃香が連れて行かれそうになり、ネギが後を追った形になったと推察できる。

くッ、戦闘に集中し過ぎたかッ？！

ネギは障壁を展開して、小太郎が気弾を数発ぶつけては嘲笑い、天ヶ崎が木乃香を渡せと言っている様だ。
フェイトとルビカンテが居ないだけ危険度は低いが、今のネギには十分、荷が重い。
俺は月詠をその場に寝かせ、城の天守閣へと登ろうと高下駄を捨て、跳躍しようとした時だった。
いつの間にか関係者以外の一般人が姿を消していた事に気付く。
さっさと劇に乗じて月詠に勝ってすぐにシネマ村を後にしようと思い、人払いの結界を展開しなかったのだが、戦いづらい服での戦いに集中し過ぎた様で、エヴァが念の為に人払いをしてくれたのだろうな……ありがたいぜ。

疑問が解決し、遠慮なく本気で跳躍しようと身構えた所で――――

――

――――なりふり構わず回避しろ

不意にそんな思考が全身を駆け抜けた。

俺は即座に月詠を再度抱き寄せ、瞬動を使い、殺気のする場所を避けて避けて避けまくる！

行動に移した瞬間――――遠い昔に聞き慣れた、何かが風を切り裂いて突き進む音が聴こえた。

これは石の槍（ドリュ・ペトラス）ッ！！

複数の石の槍（ドリュ・ペトラス）が俺に殺到する――――――！！

フェイトかッ！！

月詠ごと攻撃だとッ！？

木乃香を助ける時間がないッ！

次の回避場所はッ！？
今動けるのは誰だッ？！

一瞬で複数の思考が浮かび、俺は避けながら叫ぶ。
この場で自由に動け、且つすぐに木乃香とネギを助けに行ける人物に。
未だに躊躇している愚か者に。
自分が居なくともネギが木乃香を守ってくれるかもしれないという微かな望みを期待している者に。

――――――俺は叫んだ。

「桜咲刹那ッ、いつまでそうしているのッ！！　貴女の翼は何の為にあるの！？　彼女の為にあるのでしょう？！
未だ躊躇う理由が何所にある？！　そんなものは無いでしょうッ？！　いい加減になさい！！
貴女を縛っているという掟が自分自身で造り出したまやかしならッ、そんなまやかしを壊しなさいッ！！
今更、貴女が失うものなんて、彼女を守るという誓いと彼女が居なくなってしまう以外に在りはしないでしょう貴女にはッ？！
たまには迷ってもいいわ！　たまには悩んでもいいわ！　でも、躊躇う事と恐れる事は絶対にしてはいけないでしょう、違うッ？！
そして誇りなさいッ！！　その翼があるからこそ、今ッ！　彼女を救えるのだとッ！！」

「ッ？！」

刹那が息を呑む声が聞こえた気がした。

月詠に攻撃が当たらない様に庇いながら、石の槍（ドリュ・ペトラス）を避け続け、俺は言う。

俺を狙っているのは紛れもない最強レベルの人物だ。

大戦が終わって尚、紅き翼並みの実力を持っている事が向けられる殺気が肌を通して伝わってくる。

油断は即、命取りになる。

叫んでいる間にも隙が出来る。

その隙をアーチャーの戦い方を参考に、即興で誘導させ回避する為の軌道に組み込む。

チラリと視線を茶々丸とエヴァの方へ向けると、その後ろで戸惑う明日菜、ハルナ、夕映、のどか、実力未知数のザジを守っている。

あちらは任せておいて問題無いだろう。

だが、彼女達は守っている為に動けない。

木乃香を助けに行ける手段を持つのはこの場所で翼を持つ刹那のみ。

だから俺は自身が惑わせた刹那へ叫ぶのだ。

今、その翼を使わずに、何時使って彼女を救うのかと――――――！！

その時、俺の視界の隅に白い翼をはためかせた刹那の姿が写った。

表情に迷いは無い。

利き手には夕凪を携えている。

あの様子ならもう、彼女は大丈夫だろう。

石の槍（ドリュ・ペトラス）が一本、俺の右肩を掠っていった。

矢除けの加護はあるが、如何せんお姫様抱っこをしているので両手が使えない。

つまり全てをかわす事は適わない。

ネギと木乃香は刹那に頼んだ。

他はエヴァと茶々丸が守ってくれる。

他を気にする必要はない。

ならば後は――――――

――――――この身に迫る石の槍（ドリュ・ペトラス）の猛威から最小限の被害に収める事のみ！！

両手が塞がっている為、時には紙一重にかわし、あるいは蹴撃で弾く！

右足首、水月を舞うように、左太腿、頸椎を澄んででかわしつつ回転、左回し蹴りで肩甲骨を狙う石の槍を蹴り飛ばし、後頭部への一撃を首を傾け、月詠の眼前と腹部へと向かう物を一歩だけ退いてから月詠を落とさぬようにバク宙し、蹴り落とす。

更に右肩、左耳、腰、左膝裏への一斉攻撃を細心の注意を払って紙一重で回避する！

十一連の石の槍（ドリュ・ペトラス）を回避した瞬間、石の槍（ドリュ・ペトラス）のほぼ三百六十度全面攻撃。

即座に気の密度を引き上げ、円舞（ワルツ）を舞うよう数度目かの回転、足を使って上方の石の槍（ドリュ・ペトラス）を一点突破した。

石の槍（ドリュ・ペトラス）を何とか回避する事は出来たが、その過程で石の槍（ドリュ・ペトラス）が二本、肘と太腿を掠めていき、借りた着物はいたる所がボロボロになってしまい、かなり扇情的な姿になってしまった。

「今のを避けるなんて、流石だね。　紫の麗じ――――――」

「今はルーデシアよ」

正体をバラされる前にフェイトの言葉を遮る。

「――――――……ルーデシア」

そして俺は即座に名前を訂正させた。

「……女を剥くなんて随分と過激な再会の挨拶ね。　一体、何のついでに日本でこんな事をしているかしら？」

俺は月詠をお姫様抱っこしたまま問う。

「君は男だろ――――――」

「今は女よ」

再度、口を挟みつつ上げ足を取る。

「――――――……悪かったと、今回は謝っておくよ。　唯、ついでに英雄の息子の顔でも見てみようと思っただけさ」

またもや間違いを訂正させる。

というか本音はそっちか。

自分達の計画の障害になる可能性があるかどうかを見極めに来たと素直に言ったらどうだっての。

「なら、もう良いでしょう？　さっさと帰ったらどう？　小物に仕えている程、暇でもないでしょうに？」

「契約は契約さ。　どんな形であれ、お互いが守るからこそ契約と言うんだろう？　違うかい？」

地を司るアーウェルンクス……実力は贔屓目に見ても互角、油断すれば月詠を抱いている分、此方が殺られる可能性が高い。
最後に直接会ったのは数年前の孤児院だったか……実力は全く衰えていない様だ。

「さて、月詠は返してもらうよ」

「仲間ごと狙う人には返せないわね」

「フッ、人か……君だからこそ、月詠ごと撃っても無事だと信頼していたからあの攻撃しただけだよ。
君も相変わらず腕は鈍っていなかったようで何よりなのかな？」

言ってくれるなフェイト。
まあ持論だが、人であろうとする限り、誰もが人を名乗ってもいいと俺は思う。
月詠に関しては渡してもいいかな……？
保護しておいても「ウチともう一回勝負や～」とか言ってきそうだし、何より酷い事はせんだろ。

そう結論付けフェイトに月詠を渡す。

「全く……この着物、借り物だったのに……借り物だったのに……」

ワザと二回言ってみる。

もう一度言うが、今の俺の姿は酷い。

というか色々隠せてない、主に肌に直接付ける蒼色の面積が少ない布とかが……読者へのサービス満点ですよもう。

ラノベだったら此処で俺のボロボロ着物姿の押絵が入る所だろうけど、作者に絵心が無いので残念ながら妄想でカバーしてくれ。

想像せよ（某ロボット漫画の総裁風）。

全体的にボロボロで、右肩から先にはもう袖は無く、左も辛うじて布はあるがボロ雑巾の様だ。

足の方も普段はパンストを穿いているのだが（スカートだと何か寒いから）、着物を着る時に脱がされて今は素足に足袋。

下駄は脱ぎ棄てたまま何所かに弾かれてしまって紛失。

下半身の左側には深いスリットどころか、肋骨の部分まで裂かれ、ショーツは丸見え、ブラはベルト部分がチラ見えだ。

背中も左肩から右下へ一発掠った為に破れて、ショーツ右側面とブラのホックとかストラップが丸見え。

＞ｉ２８９７９―２４７７＜

だが下着は死守したから大事な部分は見えてないよ！

ディフェンスに定評があるんです。

何というか女の体になるとちょっとだけだけど、自然と羞恥心が出るから不思議です。

男だとあんまり気にならないのにねホント不思議だ……。

「……君宛に弁償の品を送らせてもらうよ」

そう言ってフェイトは川に飛び込み消えた。

水のゲートで移動したのだろう。

やれやれ、面倒事が増えた……てか、図書館組を早速巻き込んだぞ？

ああ、もう説明が面倒だ。

エヴァかネギに説明は押し付けるとしよう。

人払いの結界も解かれ、人が戻りつつある中、図書館組＋エヴァ、茶々丸は木乃香と刹那、ネギと合流し、茶屋で一休みしながら図書館組がネギから色々説明をし、茶々丸が補足をした。

俺は着物を弁償するという事で貸衣装やの人から請求書を貰い、普通の格好に戻って、エヴァの横で団子を齧っている。

そんな時だった。

「師匠？」

そこで俺を師匠と呼ぶ新撰組姿の男が現れた。

「？　どなたかしら……？」

だが、面識が全く無いと思ったので聞き返す。

「私です。　浦島可奈子です」

ハリウッド顔負けの特殊メイクで造ったマスクをズルリと剥ぎ取り、見知った女の子の顔が現れた。

俺は天を仰いだ。

何故、今、この時に、彼女を使わしたのかと。

浦島可奈子。

知ってる人は知っているラブひなの登場人物。

黒髪ロングを首の後ろ辺りで結んだクール系で綺麗系な容姿の持ち主。

実家が老舗和菓子屋なのに甘い物が嫌い、辛党。

浦島景太郎の義理の妹で義理の兄である景太郎に劣情を催し、彼女が居るにも拘らず未だに義理兄を付け回す変態ブラコンストーカー。

因みにこんなんでも東大卒業生……つまり俺の後輩。

魔法を使わない変装と気すら扱える浦島流柔術という流派を名乗る神鳴流の素子と互角に渡り合える程の達人。

趣味は確か……変装・緊縛術一（特に亀甲縛りが得意）・身辺調査だったかな？

それが何故、このシネマ村に偶然にも居るのだろうか？

「何故、こんな所に居るのかしら？」

「ああ、それですか。　ひなたお婆様のお使いで、近衛詠春さんへのお手紙を届ける最中です。

途中で旅費が底を尽いたので、ちょっとアルバイト中でした」

「そうなの……詠春に手紙、ね」

俺はハァ～と溜息を吐いた。
ひなた婆さんよ……魔法世界の英雄に手紙を送るアンタは一体何者だ？

ネギ達の方からも刹那が、総本山に居れば良いのではないかという声が聞こえてくる。

結局、世界の修正力はどうあっても俺達を総本山に関わらせたいようだｏｒｚ

後日、学園の俺の部屋に大きな箱が届き、弁償代と上等な着物、何故か死守した為に弁償する必要の無いこれまた高級ブランドの蒼色のブラとショーツが入れられていた。
そして、何故かサイズも丁度ピッタリだった……フェイトよ、下着とか買いに行ったのか？
それ以前に何故、ルーデシア時のサイズを知っている？
スリーサイズをほぼ正確に知らんとサイズピッタリなんて事はあり得ない筈なんだぞ？
と突っ込みを入れたのは間違っていないと思う。

というのはまた別のお話。

第２８翼　シネマ村、？かれる紫の麗人（後書き）

最近、この作品のの主人公である朱然さんに主人公兼ヒロインを付けた方がいいのだろうか？と悩んでいる作者です。
今回は書いている内に脱げキャラになってしまいましたし（笑）

因みに書き直す前にあったＦａｔｅ系イレギュラーはエクストラのサーヴァントを出す予定でした。
この話では赤ライダーこと、フランシス・ドレイクさんと緑アーチャーこと、ロビンフットさんの二人が登場予定で、後々にキャス狐とか赤セイバーとか出したいなーと思ってたんですよねー、はっはっはー。
うん、これはもうやり始めたら収集つかなくなってたかもとちょっと冷や汗。

この頃、寒くなって来たのでこたつの他にストーブまで引っ張り出しました。
去年の冬はベットじゃなくてこたつで寝てた方が多かった記憶が・・・・・。

チマチマ書きをしている所為か、所々に変な所があったりするので、可笑しな部分がありましたらご一報を頂ければ修正します！
なに分、見直しをしていても自分では気づかなかったりする時がある物でして・・・・・・。

作者は知り合いの女の子達がちょっと怖いです。
別に普通の子達なんですよ？
ウィックとか化粧品とか女物の服をもってにじり寄ってこなければ。

マジ、リアル話です。　マジ、怖いッス！
誰か助けてッ？！

最後にこの小説を読んでくださっている、ありがたい読者様の方々も体調の方には、十分に気を付けて下さいな～ノシ

第２９翼　総本山襲撃、昔話する紫の麗人（前書き）

皆さんこんにちわ。
Ｖｉｅｒは汚されてしまいました……もう、お婿に行けないッ！！

第２９翼　総本山襲撃、昔話する紫の麗人

関東呪術教会、来客用の間。
上座にソレっぽい服を着た詠春が現れる。

老けたな……詠春。

「お父様、久しぶりやー！！」

木乃香が飛び出し、詠春に抱きつく。

「渋くて素敵かも……」

明日菜がそう呟き、周りに否定される。

「木乃香を守ってくれたそうですね？　木乃香の父として、お礼を」

木乃香が抱きついたままの格好で、ネギに頭を下げる。

「そ、そんな！　頭を上げて下さい！　僕は先生として当然の事をしただけですし」

ネギが慌てて言う。

「刹那君も護衛ご苦労だったね」

「そんな……もったいないお言葉です！　私は今まで……」

刹那は今までの事があるのでより恐縮する。

「君達は――――」

詠春が明日菜達より後ろに居る俺に気が付く。
俺は唇に人差指を当てて、シーと黙っている様にとジェスチャーして、あ・と・で、と口パクをすると詠春はコクリと頷いた。

因みにザジとエヴァはホテルに帰った。
なんかザジとエヴァは魔の属性が強いので、総本山の結界に近づくと二日酔いと船酔いと乗り物酔いを混ぜたような感じみたいになって気持ち悪くなるだけだからと言っていた。
俺もルーデシア時は悪魔なので魔属性を持っていたが、特殊な身体の所為か二日酔い程度の気分の悪さしかなかった。
もっとも結界の中に入ったら不快感はなくなったので、問題は無いだろう。

「青山詠春様でしょうか？」

「ええ、君は？」

「私の名前は浦島可奈子です。　浦島ひなたからの手紙を預かってきました」

可奈子が手紙を取り出す。

「ひなたさんからですか……ちょっと失礼」

ふむ、と少し考え込む様な仕草をして手紙を受け取り、中身を取り出して目を通す。
すると少し苦笑してから手紙を懐に入れた。

ホントに何者なんだろ、ひなた婆さんは？

考え事をしていると原作通り、身代りを立てて此処に泊まる事となった。

そして、宴は開かれる。

特に混ざるつもりも無い俺は部屋の隅に居たのだが、酒？を呑んだハルナに絡まれた。

「ほらほらルノーさん、一気に！」

「私は酒はなるべく飲まない主義なの」

ぶっちゃけ酒は嫌いです。

だってアルコールの味が好きじゃないし。

そこ！

今、子供舌って思ったなッ？！

味は嫌いだが、酒に対する免疫は昔に大分鍛えられたから強いし、飲めない訳じゃないんだからなッ！？

「固いねぇ～、そんなんじゃ男も出来ないよ～？」

「そんなもの要らないわ」

俺は茶碗蒸しをスプーンで掬って食べる。

「えぇ～、ルノーさん美人だし、ナイスバディだし、彼氏の一人や二人、作りたい放題だと思うんだけどなぁ～？」

ニヤニヤしながらハルナがよりかかって来る。

「私的には女の方が好きよ」

元が男だけに男とくっつくとか考えられんよ。

例え女の姿だったとしても、だ。

というか、考えなかった訳じゃないが、女の姿でデキちゃったらどうなるんだろ？

産むまで女の姿なのだろうか？

まあ、そんな事になったら俺は自殺する自信があるし、仮定の話なんてやっぱりどうでもいいか。

「なぁにぃ～？　ルノーさんってば百合だったの？」

「さあ？」

茶碗蒸しを食べ終わった俺はそう言って立ち上がり、ネギと刹那に改めて礼を言い終えた詠春に近づき、廊下へ出る。

「老けたわね詠春」

「久しぶりに会っての第一声がそれか？　今まで戦い一辺倒だったんだ……慣れない事をしてれば痩せもするさ水仙」

詠春の口調が当時のものに戻り、少し疲れた笑みを浮かべる。

「ところで部下の？くらいしっかり制御出来ないのかしら？」

半眼で言ってみる。

「さっきも言ったが、長なんて柄じゃない事してるんだ。　多少は大目に見てくれ……唯でさえ人は御し難いんだ」

冷汗を流しながら答える詠春。

「大目に見れないわよ。　そうそう、学園長がネギを木乃香ちゃんと同室にしているのは知っているかしら？」

「何だと？」

口調だけ当時の様に戻ったと思っていた詠春が、一気に最盛期の雰囲気を取り戻した。

怖ぇ……。

「水仙……そこの所を詳しく隅々まで教えてくれないか？　まさか誰かが仮契約なんてしてないよなァ？」

顔近ッ！
顔怖ッ！
目が黒化してるよ……ッ！！

「だ、大丈夫よ……というか知らなかったらしいわね、さっきネギに対して取った態度から察するに。
私はむやみに仮契約する気は一切無いし、ネギがソレっぽい事をしようとした時はそれとなく阻止したから。
ネギは一応、私の荒療治で軽々しくそんな事をしないように修正しておいたから、緊急時にならない限りそうならないと思うわ」

「そうか！　それは良かった！」

はっはっは！と笑い始める詠春。

「唯、天ヶ崎千草一味とその黒幕……大方、昔スクナを呼んだお馬鹿さん達かしら？

多分そんな人達の所為で、木乃香ちゃんが狙われているというのに悠長な事ね、詠春？」

「ほぅ……やはりそうか一度は大目に見たが、懲りていなかったか……古狸共が……」

伝える事は言ったし、まあ何とかなるか？

というか詠春から、粛清……拷問……苦痛を……とかブツブツ物騒な単語が聞こえてくるんだが……。

「私の事は皆の前ではルーデシアと呼んでくれないかしら？　今正体を教える訳にはいかないのよ」

「わかった。　ところで何故、娘のクラスメイトになってるんだ？」

「貴方の義理父の所為よ……折角東大を卒業して教員免許まで取ったのに全て無駄になったわ。

詠春、学園長には気を付けておいた方がいいわよ？　色々と何かを裏で画策しているらしいしから。

此方からも一つ聞きたいのだけれど、ひなたさんとは知り合いだったのかしら？」

「ああ、俺の母の知り合いでな……」

そういう関係か、もっとトンデモ無いもんだと思ってたが、割と

普通で良かった。

「そう……一つお願いがあるのだけど」

「何だ？　珍しい」

「個室の部屋を用意してくれないかしら？　流石に身体が女とはいえ、男と一緒に寝るのはダメでしょう？」

「確かにその通りだな……用意しよう」

「ありがと、詠春。　それともう一つ、アーウェルンクスが来ている様なの、気をつけなさい。　今はフェイトと名乗っているわ。　で、そのアーウェルンクスレベルなら総本山の結界と言えども突破される可能性が高いわ」

「何ッ？！　くッ……九州で巨大な土蜘蛛の群れ退治の依頼が無ければ神鳴流を全員行かせる事も無かったのだが、これも奴らの罠か……？

私の方で結界を短期間でも強化できるように取り計らおう」

「その依頼の方は十中八九、偽の依頼でしょうね……何かあったらすぐに私を呼びなさい詠春。　そうそう、これを使いなさい」

俺は懐から結界補強の為の符を詠春に２０枚を束で渡す。

これだけあれば一時的ではあるが、１．７倍くらいは結界補強ができるだろ。

この札は１枚１万だけど、迷惑料込で３０万請求しておこう……

学園長に。

「今の貴方じゃフェイトの相手は厳しいでしょう？　後、刹那とネギには知らせておいた方が良いでしょうね。
それと浦島可奈子にも知らせてもいいわ。彼女も最近、裏の方に関わってる一人だから。
腕は素子と良い勝負が出来る位の使い手よ」

「ほう……彼女と互角、ですか……」

「そうよ。　中々の使い手でしょう？」

俺はそう言って詠春と別れ、個室の部屋に向かった。

さて後はどうなるか……刹那と可奈子と俺が居るからそう簡単にはいかんだろうが、油断はしないでおこう。

部屋を確かめた後、俺は早速、風呂へ直行した。

風呂場の前にタオルやらを持った詠春が居た。

「む、風呂か？」

「ええ」

当然でしょう？という表情で言ってみる。

「元の姿に戻って、久しぶりに昔話をしながら入らないか？」

「それもいいわね。　所でネギは？」

「クラスの皆さんに捕まってたよ」

「そう……」

そう言って俺は久しぶりに元の姿に戻った。

「やはりその姿の方が、慣れているからな」

俺は元の姿に戻る前に外したブラとショーツを無造作に持っていたタオルの上に乗せた。

「……ッ」

詠春が赤くなる。

「なんだ詠春？　こんな下着程度で何を赤くなってるんだ？　ん～？」

何となくほれほれとブラを詠春に近づけてみる。

「近づけるな！」

「全く……子供が居る＝やる事やってるんだから一々照れるなよ」

「そういう問題じゃないだろ！」

詠春がそう言って男の脱衣所の方へ向かう。

「何をそんなに純情ぶってるんだか……ま、それはともかく、麻帆良だと大概の生活が女子校エリアだから、最近は男の姿にあまりならないんだし、こうして肩ひじ張らないのは久しぶりだし、ゆっくり浸からせてもらうとしますかね……」

俺もそれに続いて、風呂場に入り、身体を洗ってから風呂に浸かった。

「あ〜あ〜ぁ〜、癒されるぅ〜〜〜〜〜」

「おっさん臭いぞ……で、さっきの事はさて置き、余程大変なようだな水仙。　あの姿の時はルーデシアだったか？」

「今は元の姿だから水仙で良いよ……で、大変かどうかって問いなら当たり前だろ。

幾ら本当に女になれるからって女子校に潜入とか……中身は男だからストレスが凄いんだよ。

今時の話題なんて軽いジェネレーションギャップ感じるから話なんて合わんし」

呉に居た時もそんな感じだったが、連華とか明命とか亜莎はイジッてるだけで癒されるからストレスとか感じなかったけど、此処だとストレスは溜まるばかりだし。

別のナニかも溜まる一方だしな。

「世の男からしたら、ストレスくらい我慢してでも潜入したいと思うのが普通なんじゃないのか？」

ま、世のモテない男共ならそんな願望もってもおかしくないけど、厳しいよ？

だって――――――

「アホか、手も出せないなんて寧ろ地獄だ地獄」

見れるけど何も出来ないなら、俺は行かないね！

まあ、付き合う気も、手を出す気も無いけど。

着替えとか風呂とかに混ざってると、どうにも反応しそうになるんだけど……何せ真っ先に反応するナニが無いから頭が冷えるのだよ。

「そんなもんか？」

「そんなもんだ。

それにどんなに強固な精神力を持ってても限界はあるし、トチ狂って手を出すなんて事になる可能性も無くは無い訳でな……でも性欲は本能だから理性で抑え込める程度にも限界がある。

まあ、絶対にとは言わないし、相手が中学生のチビッ子共だってのもある。

俺の場合、女性の身体になると性欲が男より少し軽くなるからと、妻に少なからず操を立ててるからだ」

軽い口調で言った瞬間、いきなり詠春が立ち上がり、後ずさった。

「ちょ、ちょっと待て！　お前結婚してたのか……ッ！？」

「あれ？　言ってなかったっけ？」

あるぇー？

「聞いとらんわ――――――ッ！！」

途端に詰め寄って来る詠春。

「暴れんな詠春！」

「どんな人なんだ？！　迷惑はかけてないのか？！　何故、結婚式に呼ばなかった？！」

詠春がまくし立ててくる。

「あーもう！！　ちょっと落ち着け！！　妻と言ってもお前が生まれるよりも前の話で、俺の妻はとっくに鬼籍に入ってる！！」

そう言うと詠春がピタッと止まった。

「……すまん、無神経だった」

落ち着いた詠春が頭にタオルを乗せて改めて湯船に浸かる。

「別に良いさ……つまりはそういう事で今の俺は別の異性に自分からは手を出すつもりはないし、相手から手を出されても精々キス止まりだ。

それ以上を望まれたら流石に拒絶するよ……まだ他の誰かを愛したりは出来ないと思う。

切っ掛けがあれば変わるかもしれないがな。　それに俺がかなりの歳を取ってるのは話しただろ？」

「ああ」

「蓮華は……ああ、蓮華というのは妻の名前だが、さっきも言った通り、お前が生まれるよりも前に妻になったんだ。
別に無神経でも何でもないし、気にする必要も気に病む必要も無い。唯、俺が立ち止まって足踏みしてるってなだけだ……」

「そうか」

「そうだ」

俺と詠春の間に沈黙が流れる。

「で、詠春との話に夢中になり過ぎて気付くのが遅れた俺の落ち度だけど、そこの二人、出て来い」

「「……ッ！」」

息を呑む声と共に刹那と明日菜が現れた。

「……ッ、私とした事が……本当に、歳は取りたくないですね」

詠春も気付かなかった事に苦笑を洩らす。

「で、今までの話を全部聞いたんだな？」

「すみません……」

「……アンタ、一体何なのよ？　ルーデシアさんがアンタなの？！」

刹那は謝り、明日菜が騒ぐ。

本当にもう……何だって世の中上手くいかないのやら。

「ああ、俺がルーデシアだ……こうしてな」

俺は目の前でルーデシアに変わる。

「……変態」

う……ッ！！

今、真顔で言われる変態という言葉がこれほどまでにキツイ事を初めて知りました。

「否定はしないし、バレたからにはこれで学校ごっこは終わりかしらね……」

「「え……ッ！？」」

驚く二人。

「当然でしょう？　そもそも、私は男の姿で教師になる予定で態々東大で教職とって卒業してきたのよ？」

「え、えぇ――――――ッ！？」

東大卒業発言に驚きの声を上げる明日菜。

実際、ヤオかウィンの容姿で麻帆良に来る予定だったんだ。

それをあのぬらりひょんは……。

俺は元の姿に戻る。

「それを学園長の奴が制服を持って、教員の空きは無いから生徒として通えとか言われたんだがな。

麻帆良学園中等部に通っていたのは俺の意志ではないが、流石に言いふらされるのを止める手立ても無いし、言いたければ言えばいい。

女になれるとはいえ、男が通っている事に変わりは無い。問題がこのままいるのは不味いだろう？

なら……俺はこれを期に学校やめるのがベストな選択だ」

ちょっとそこまで出かけてくる、くらい自然に言う。

「何よ……何なのよ、それ」

「朱然さん、それは……」

どうやら俺にとっての“そんな事”が気に入らないらしい。

「やるべき事はやった。

後は少しだけ手助けする位だと思ってたが、こう言う展開になったからには、此処には――――」

「勝手に決めないでください！」

言い終わる前に、刹那の怒鳴り声が差し込まれてしまった。

――――……」

刹那が俺を睨みつけてくる。

「私やネギ先生の間違いを勝手に穿り返して、勝手に直して、勝手に消えるなんて――――――」

――――――貴方は自分勝手過ぎます！

そのセリフは遠い昔――――――

理想だけを胸に王として立とうとし、俺が最初に覚悟を問いかけ――――――

人が良く、滅多に人を嫌わない彼女が唯一嫌い――――――

すこぶる反りが合わない俺に投げかけた――――――

――――――俺の間違いを正してくれた少女が言った言葉とダブった。

「全く……同じ事を二度も言われるとは思わなかった」

俺は頭を振った。

まさか全くそのままのセリフを聞くとは思いもしなかったぜ。

「えっ？」

言った刹那が首を傾げた。

「つまり、ありがとうって事だよ」

「？？」

未だに刹那は良くわかっていないようだ。

まあ、わかられても困るが。

「で、勝手に自分で色々決めるのが悪いんなら、何をどうするのが良いんだ？」

「それは……」

「考えてなかったんかい……」

俺は脱力した。

「あ、でも、まずは謝らせて下さい……私が意固地だった為に、酷い態度でした。　すみません」

そう言って素直に頭を下げた。

「あー、それは気にしてない……そういうのはそれこそ、こっちが勝手にやった反動だ、気にするな。
で、俺の学校やめるかやめないかどうこうはどうすれば――――――」

そこまで言った所で脱衣所が騒がしくなってきた。

「む、マズイ！　お嬢さん方が来た様だ！」

空気だった詠春がうろたえた。

「何……ッ？！　男女別の風呂じゃなかったのか？！」

俺達は慌て始める。

「時間交代なんだ、うちの風呂は」

「何だそれは！！」

「向こうに裏口への勝手口がある！！」

詠春が言い、俺も後に続くが、そこで詠春が石鹸に足を乗せ滑った。

その巻き添えを喰らい、俺も俺で踏ん張ろうとした足が滑る。

止まれずに明日菜達にぶつかり――――――

――――――そして、俺は刹那に押し倒される形になった。

そこで扉の開く音が聞こえ、俺は即座にルーデシアになった。

「「「「「ああ――――――ッ！！」」」」」

「「「あ」」」

そこには尻餅をつく明日菜、顔面から岩に激突して気絶した詠春、刹那に押し倒された形になっている俺という状態を入ってきた木乃香、のどか、ハルナ、夕映、木乃香とハルナに強引に捕まったネギに披露する事となった。

それはもう、混沌だった。

「お父様とせっちゃんは何やっとるん――――――？！」

「お、お嬢様ッ？！　ち、違うんです！　これはッ！！」

黒いオーラを纏う木乃香に言い訳をする刹那。

「刹那さんにルノーさんが押し倒されてる？！　やっぱり百合属性？！」

ハルナが目を輝かせる。

「な、なんで目隠しするのゆえー？」

「見てはいけませんよ、のどか。　ネギ先生も」

「な、なんですかッ？！　というか僕は先生なので皆さんとお風呂にはッ！？」

のどかとあたふたしているネギに目隠しをする夕映。

「ちょっとアンタ。　さっきの話は――――――」

「……ッ」

俺に先程の内容と俺の正体を聞こうとした明日菜を無視して、足早に去る俺。

今、此処で話すにはリスクが高いからな。

「……」

そして、気絶したままの詠春。

結局、そのまま用意された部屋まで戻って来てしまった。

さて、どうすればいいだろうか？

刹那と明日菜に余計な事を聞かれた事と、明日菜が俺が男だと気付いた事についてだ。

俺の話はさて置き、明日菜に男だというのを見られたのは痛恨のミスだ。

明日菜の性格とあの話の内容を聞いていたなら、むやみに他人に話したり、聞いたりはしないだろう。

よしんばあったとしても刹那だけだと思うが、明日菜は記憶を消されているから俺の正体には辿りつけないだろうし、刹那も男だという事は話すかもしれないが、俺の正体までは話したりしないと思うから、一応大丈夫か？

一番知られてはいけないネギに正体はバレる事はないだろう。

だが、頭を冷やして考えてもやっぱり修学旅行が終わったら転校という事にして早々にクラスから出て行くとしよう、そうしよう。

明日菜には直接詫びて、一発殴られるくらいは覚悟しておくか。

そう考えた俺はいつも通り服を全部脱いで布団にもぐりこんだ。

草木も眠る丑三つ時、寝ていた俺は目を覚ました。

抑えてはいるが、魔法行使によって発生する余波が感じられる。

「水仙！　気付いブフゥ――――――ッ！！！？」

丁度、掛け布団を跳ね上げ、立ち上がった所に詠春が現れた。
その時の俺は当然全裸。
でもってルーデシア形態のまま。
それを見た詠春は一児の父の癖に未だそういう方向への耐性が無いのか鼻血を吹き出した。

中学生じゃないんだから……って！！

「変態！」

「誰が変態――――――」

「後ろ……ッ！」

「――――――！！」

鼻を押さえていた変態（えいしゅん）の後ろにフェイトが立っていた。

「ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲイト。
小さき王（バーシリスケ・ガレオネ・コークトー・ボドーン・カイコイン・オンマトィン・プノエーン・トゥー・ネクロノン・パライルーサン・プノエー・ペトラス）　八つ足の蜥蜴　邪眼の主よ　時を奪う　毒の吐息を
石の息吹！」

「何ッ？！　くッ、抵抗（レジスト）！」

「大牙！」

俺は大牙を逆手持ちで前に突き出し、不変の概念を自分自身に巡らせる。
全て遠き理想郷（アヴァロン）とは違い、魔力を流すだけで発動し、触れている

モノだけという制限はあるが、魔力の続く限りは触れている対象を発動時の状態で固定する事が出来る。
唯、大牙自身に不変の概念を込める以外に使うと、すこぶる燃費が悪い事と、ある意味不変とは停滞とも言えるが、魔力が無くなると解除されてしまうという他に多次元からの交信や並列世界からのトランスライナー等の干渉は防げない。
防げるのは物理的な物、魔術的な物で、自分よりも強い者の攻撃にも耐えうるが、それを貫通しうる威力を喰らっても解除される。
そして、今、石の息吹（プノエー・ペトラス）を喰らえば石化というＦＦと同じ死亡扱いになってしまうのでこの際、燃費は無視だ。

そして何よりッ！！
全裸のまま石像になるのは嫌だッ！！

めちゃくちゃ個人的な理由が９割を占めていた。

いつぞやの戦いの時の様に大牙を団扇の様にして、石の息吹（プノエー・ペトラス）を散らし、大牙を振りかぶり、渾身の力で叩き潰す様に上段から振り下した。
フェイトはその一撃を先程、放った石の息吹（プノエー・ペトラス）の塵と外の砂を使って緩衝材のように器用に操り、衝撃を和らげて両手で受け止めた。

「効いていない？　そのアーティファクトの力かい？」

大牙を両手で受け止めながら、表情を変えないフェイトが言う。

「うッ、く……ッ！」

その間に詠春が半身が石化していながらも跳躍し、ネギ達の部屋の方へ向かった。

自分が今、お荷物だと判断してネギ達に知らせに行ったのだろう。

「さあ、どうかしら？」

惚けた俺はフェイトの腹を目掛けて蹴りを放つが、フェイトは即座に大牙を放して距離を取った。

その間に左腕で胸を隠して、右手の大牙を逆手に持ったまま構える。

「こんな恰好のまま戦う事になるなんて……もしかして狙ってやっているのかしら？」

「そんなつもりは無いのだけど。　僕はあまりそういう事に興味無いから」

「まさか……男色だというの？！」

バッ！！と俺は自分の身体を守る様に抱締めた。

「……君は一体僕を何だと思っているんだい？」

「私の裸を見る為に襲撃してくる男色の変態で、世界滅亡を目論む組織の構成員かしら？」

素直に言ってみた。

「……後者はともかく、前者は流石に遠慮したいんだけど？」

「この変態……従者の女の子達に手紙でその旨を書いて送らせてもらうわ。　彼女達は一体どんな反応をするのかしら？」

最初は何かと警戒していたりしたが、彼女達とはそれなりに仲良くなっていたりするのだよ。

特に相談事が出来る人が身近にいないらしくて、何となく声をかけたのが切っ掛けだけど。

何せフェイトは感情が乏しいというか、話は聞いてくれるが、よく理解できてないらしいし、デュナミスはそもそも会う事も稀らしい。

中でも一番仲がいいのは暦かな？

フェイトに振り向いてもらうにはどうしたらいいかとか、環が尻尾が邪魔だからとパンツ穿かないとか、調のアーティファクトは相変わらず上達しなくて騒音が酷いとか、焔がキレるとボヤが絶えないとか、フェイトの組織内では一番苦労しているようだ。

環、栞、調も暦程ではないにしろ、多少の相談は受けているが、焔は俺の事が気に入らないみたいで相談された事はない。

主に彼女達の相談はたまに孤児を預けに来る時に色々と話したり、文通が主になっている。

明らかに世界滅亡を目論む組織の構成員とその組織を一度潰した英雄が文通とか間違ってるだろ、とツッコミが入りそうだが、そういう細かいのは気にしたら負けだと思うよ、うん。

と、そろそろ戦闘に戻らなければ。

「少し待つんだ紫の麗人……今はそんな事を話している場合ではｎ」

突然、フェイトが会話を止め、少し驚いた様な表情をした。

「！」

そして、弾かれた様にフェイトが風呂の方を向き――――――

――――――フェイトが水になって爆ぜた。

恐らく本体に予想外の事が起こり、置き土産に爆発したのだろう。
刹那がフェイト本体に何らかの傷でも付けたか？

まず俺がした事は――――――

――――――服を着る事だった。

その後、俺はそそくさと服を着てネギ達と合流し、風呂場で気絶

しているネギと明日菜を刹那と俺、可奈子で起こしてから事情を聞いた。

何でも詠春の知らせを受けたネギ達が木乃香を守っていたが、ネギと明日菜は一撃でノックダウンされ、可奈子の攻撃と俺の方へ来た水の傀儡の維持で隙の出来たフェイトに、刹那が一太刀入れたのだが、結局、木乃香を奪取されたとの事だった。

第２９翼　総本山襲撃、昔話する紫の麗人（後書き）

とまぁ、またあられも無い姿な朱然さんです。
最近、ヒロインよりもヒロインらしいかもしれません（笑）

途中の刹那が説教する所で劉備さんの話を入れましたが、朱然さんの過去を教える場面でより詳細に何があったのかを書こうかとも思っております。

正体が一部にバレました。
まあ、その内にボロボロとバレます。
ネギに何時バラすかは未定ですね。

前書きに書きましたが、作者は汚されてしまいました。
より詳細に書くならば、締め落としを喰らって「あ、胸が当たって感触が・・・」とか思ってる間に落とされ、その間に色々装着され、化生を施されて、すね毛をガムテで一気に処理されている途中で目が覚め、後は強引にニーソを装着させられました。
５対１は幾らなんでも卑怯だと思います。
服はメイド服でした・・・ええ、カチューシャとか装備しましたよ・・・パット満載巨乳メイドでした・・・あははは、はぁ・・・ｏｒｚ

第３０翼　狂った少女、興味を持つ紫の麗人（前書き）

一応、月詠回なお話を書いたつもりですが、うーん・・・・・・・それにしても眠い。
寝よう・・・・・・。

第３０翼　狂った少女、興味を持つ紫の麗人

「これはいける！！　名案を思いついたぜ！！　ぐぇぇぇぇッ！？」

移動中、ネギの肩に乗っていたカモが口を開いたと思ったら苦しみ出した。

というか、俺の首輪型マジックアイテムで首が締まった。

「せ、刹那の姉さんとあ、兄貴がチュウすんだよぅ……ぐぇぇッ！！」

首が締まっても言うとは……。

「「なッ？！」」

ネギと明日菜が驚いた。

首輪は必要だと思うけどなー、特に悪知恵の働くのは。

「因みにこのオコジョが付けている首輪は私が作ったの。

私のコピーした自意識が込められていて装着者を見定め、悪だと判断された場合に首が締まっていく特別製だけれどね」

「つまり悪だくみしてるのねッ？！」

明日菜はカモを壁に叩きつけた。

「待った待った！　仮契約だよ、仮契約！　ルノーの姉さんは一般人との仮契約が許せないんであって、関係者ならいいんだろ？

刹那の姉さんなら関係者だしよ。　なら、気と魔力を纏えばパワーアップ出来ると思うんだがなぁ……？
なんなら兄貴とルノーの姉さん、浦島の姐さんが仮契約でもＯＫだぜ？　もしくは3人まとめ、ぐぉぉぉぉッ！？」

俺の自意識だけあって、一気にカモの首を締め上げにかかってるな首輪。

「私はお断りよ。　ゾッとするような提案しないでくれないかしら？　不愉快よ。　私は女としかキスしない主義なの」

あ、ネギが落ち込んだ。

子供と言えど男とキスなんてしたら吐くぜ。

「私は……私もお断りします。　お嬢様の護衛ですから」

おお、刹那が断った。

「私には兄が居ますので」

無表情で照れなく言い切ったよこの娘。
やっぱりブラコンだ。
景太郎よ、さっさと結婚してこの娘に兄離れさせないと色々ともったいないぞ？

「因みに気と魔力は余程の修練をしなければ反発して、かえってパワーダウンするわよ？　さて、戯言は済んだわね？
連中は目的があって近衛木乃香を攫ったのだから急がないと手遅れになる可能性もあるわ」

この言葉を最後に俺達は道を急ぐ。

「待てッ！」

「そこまでだ！　お嬢様を放せ！！」

「木乃香に何かしてたらタダじゃおかないわよッ？！」

見つけた途端に突っ走った三人。

武器を構えて戦隊気取りか？

こう言う時は奇襲をかけるのがセオリーなのに……急いては事を
し損じるという諺を知らんのか？

俺と可奈子はちょっと離れた所に居る。

あっちが囮をしている間に大樹を構え、弓を番えて隙を窺う。

さて、今の内に狙い射れるか……？

俺が正に矢を放とうとしたその瞬間、鬼達を召喚する為に動いた
ので射るのを中断する。

そして、１００体を越える鬼が召喚された。

刹那は平静だが、ネギと明日菜が青褪める。

「ふむ……鬼、ですか」

「可奈子は始めてだったかしら？」

「あの類の者は始めてですね」

「そう」

実戦経験が皆無な、それどころか異形の者を見るのはネギと明日菜にとっては二度目になるだろう。

俺のシヴァは確かに異形の様ではあるが、美しい女神をモチーフに作ったから畏怖はあっても恐ろしくは無いだろう。

だが、鬼達の様に化物らしい容姿をしている者達は直視し難いものだ。

かく言う俺も慣れるのには少し時間が掛かった。

そうしている内に天ヶ崎達が行こうとする所を射ようとしたが、フェイトがチラリと此方を見て木乃香の前に立った。

チッ、一射目の微かな殺気でやはり気付かれるか……もう少し念入りに溶け込むべきだったな……。

フェイトと睨み合っている内に天ヶ崎達が行ってしまう。

俺と可奈子は即座にネギ達の所へ跳躍し、着地するのと同時に――

――――――

「風花旋風　風障壁ッ！！」（フランス・パリエースウェンティ・ウェルテンティス）

――――――風の障壁が完成した。

「何所行ってたんだよ姉さん達?!」

「貴女達は実戦を知らなさ過ぎるわ。　見つけたら大声を上げて突撃なんて戦場では考えられないわね。

　ハチの巣にされたいのかしら?　奇襲するのがベターな選択だったのにいきなり突っ走るから足止めを喰らうのよ?

　刹那もそれなり実戦は経験しているでしょう?　焦るのはわかるけれど、頭を冷やしなさい。

　何時までも戦う事だけを考えていると、いざという時に足元すくわれるわよ?」

「「「うッ」」」

　三人が声をそろえて俯く。

「す、過ぎた事はこの際置いといてだ!　作戦を手短に立てなきゃなんないぜ?」

「そうね」

　時間を無駄にするのは確かに勿体ないな。

「なら此処は飛べる兄貴と刹那の姉さん、ルノーの姉さんとが木乃香姉さんを救出。

　浦島の姉さんと明日菜の姐さんがこっちに残るって感じがベストだと思うんだが……?」

　ふむ……。

「私も此処に残る方がいいわね。　可奈子も神楽坂明日菜もこの手の異形に対しての実戦経験が少ないわ。
　知っている者を残した方がいいでしょう？　それに私はこの程度の雑魚であればという条件付きだけれど、一対多の戦いは慣れているわ。
　ネギ先生と刹那は飛べるし、近衛木乃香を奪還するだけなのだから、数は少ない方が良いわね。
　対して明日菜は飛べる術を持たないけれど、アーティファクトは退魔の力を持っている筈だし、可奈子も気の使い手としてなら刹那よりも上よ、私は言わずもがなだから、この三人が残るのが適任でしょう」

「むむむ、成程な……」

「じゃあ、決まりですね！」

　そう言ってネギが前に進み出るが、俺がそれを留める。

「貴方は神楽坂明日菜へ魔力供給をしなくてはならないでしょう？　なら、此処は私が道を用意してあげる。
　だから、必ず近衛木乃香を助け出しなさい」

「はい！」

　今度は俺が進み出て詠唱を始め、障壁が途切れる瞬間を狙い――

――

「水の激流！！」

水属性の雷の暴風と同等の呪文を発動させた。

t単位で高圧縮した水を指向性を持って解放、前面の目標を水圧で一気に圧死、もしくは押し流す呪文だ。

水系呪文って高位呪文になればなる程、水の無い場所だと空気中の水分だけでは足りないから威力が足らなくなるんだよねぇ……強引にすればその限りではないんだけどさ。

でも水系は形の応用がし易いし、逆に水ある所だと威力が高い。

まあ、つまり何が言いたいかというと足元の水が全部無くなったという事だけだ。

どうでもいい事だが。

そんなこんなを言ってる内にネギと刹那は見えなくなった。

「さて、楽しい楽しい鬼退治と行きましょうか」

「師匠は相変わらず呑気ですね」

「な、何で二人はそんなに平気なのよッ！？」

「私はこの手の事は慣れているもの」

「世界にはこんな物も居る、という今までの自己認識が改められただけだと思うのですが？」

余裕の表情を浮かべる俺と可奈子に対し、カチカチと歯を鳴らす明日菜。

「逆に聞きたいのだけれど、この程度の事で臆しているのなら「始めから首を突っ込まなければいい、でしょ？」わかってるじゃない」

ニヤリと明日菜に笑ってやる。

明日菜の方も軽口で緊張が多少はマシになったようだ。

「帰ったら問いただしたい事もあるんだから！」

「ならまずは生き残る事ね。

天ヶ崎千草は殺さない様にだけは言っていったみたいだけれど、負ければ鬼達の慰みものにされるかも知れないから気を引き締めておいた方がいいと思うわよ？」

「ええッ！？」

「下品です。　私の初めては兄さんの物です」

俺は明日菜に更なる軽口を投げかける。

が、可奈子は本気、なんだろうなぁ……。

「なんや、賑やかな譲ちゃん達やなぁ～？」

「先程の礼をせねばなるまい」

「……」

大鬼と烏族剣士の言葉に狐面がコクコクと頷く。

狐面がちょっと可愛いと思った。

「神楽坂明日菜、可奈子、取り敢えず動かないでね？　動いていると貴女達だけ切らないようにするのが面倒だから」

「わかりました」

「えっ？　それってどういうk」

明日菜が言い終わらない内に俺は即座に無影を操った。

その瞬間、百体近くいた雑魚が一斉に寸断され、血飛沫が舞った

――――――

「なんじゃこりゃァァァァッ！！？」

「うォォォォッ！！？」

「……ッ！！？」

「ぎゃあァァァァッ？！」

「げはァァァァッ！？」

「何よ……コレ……」

明日菜が、呆然と言う。

そこには先程、水の激流によって使い切った水の代わりに、化生共の血と肉の池が出来上がっていた。

その数秒後、霞む様に化生だったモノが塵となって消えた。

「う……ッ！」

それを見た明日菜がえずき、吐いた。

まあ、数秒だけとはいえグロかったからな。

吐くのは仕方ない。

「働いてもらおうとも思ったのだけれど、やっぱり無理のようだから休んでなさい。　慣れてないでしょう？

こういう光景は」

「……ッ……ッ、わ、私だって……ッ」

気丈にも吐いていた明日菜は立ち上がり――――――

「来たれッ！！（アデアット）」

ハマノツルギを構える。

「銀髪の譲ちゃん……殺すな言われとったけど、嬢ちゃんはどうやら手加減すればワイらが殺られるようやし、本気で行かしてもらうわ」

和やかムードだった大鬼が巨大な鉄棒を、烏族剣士が剣を、狐面が刃物トンファーを構え、殺意を向ける。

「本気でやっても正直、勝てる気がせんがな」

「……コクッ」

別に血肉が好きな訳じゃない、唯、鬼達には悪いが、明日菜に見せておきたかっただけだ。

俺達の居る場所はこう言う所だと、屍があっても見向きもされず放置される様な場所だと。

万の斬撃を避け切った者達が全力で此方に向かってくる。

「私はあちらの狐のお面を相手します」

可奈子がそう言って空中に跳躍――――――

「浦島流柔術・龍牙！」

狐面も飛び出し、可奈子が撃った気弾をトンファーを斜に構えて流し、接近。

数撃、攻撃の応酬をした後、着地。

そのまま、縦横無尽に走りながら戦い合う。

明日菜も烏族戦士との戦いに入った。
技量的に勝ち目は薄いだろうが、こっちが片付け終わったら手伝いに行くとしよう。
あの烏族、相手が明日菜だとわかった途端に殺意が薄れたしな。

残ったのは大きな鬼。
手に持つは大鬼の身の丈よりも長く、柱と言ってもいいくらいの六角棒だった。
大鬼は対峙する。
俺の実力を肌で感じているのだろう。
特に合図をした訳でもない。
大鬼が走り出した。

それを俺は冷徹に――――――無慈悲に、無情に、無残に、大牙で文字通り叩き潰した。

殺し終えた俺は新たな殺気を感じ、大牙を手に受け止めてから森の方へ弾き飛ばし、後を追う。

「うふふ、最高の舞台ですえ～。　楽しみましょう銀髪はん？」

二刀の内、右手に持っている方の刀身に舌を這わせ、早くも目を

黒化している。

「月詠、ね……」

「ああん！　ウチの名前覚えてくれはったんですね～、感激やわぁ～。

さあ、今宵この場所は人目も気にせんでもいいし、外野も忙しそうや～。

シネマ村で約束してくれはりましたなぁ～。二人っきりならウチをメチャクチャにしてくれはるって」

「ええ、言ったわね。　早速、始めるのかしら？」

そう言って、八卦八武装（せんてんはっけ）を準備しておく。

「はい～」

うっとりとした顔をする月詠。

「そう……なら始めましょう。　時間は無いけれど、魔法無しでお相手するわ」

対峙するは二刀の剣士。

「あはぁ？　ますますウチ好みで良いですわぁ……ではでは～、月詠、流派神鳴流、いざ参いります～」

我が身が構えるは八種の武装。

「麻帆良学園中等部３－Ａ在籍、出席番号２９番、ルーデシア・ル

ノー……精々、全力で来なさい」

口上は程々に、火蓋は切って落とされる。

夜の森で月詠の剣撃が閃く。

月詠は二刀に純粋な殺意によって気という生命エネルギーの輝きが仄暗い黒に染まり、凶刃を振るう度にその軌跡は漆黒を纏わせている。

対して此方は堅くもあり、柔らかくもある防御を八種の武器を巧みに操り、八色の軌跡を描きながら月詠の連撃を次々と防ぎ、捌いてゆく。

既にその掻い潜った剣撃の数は数十回を超えていた。

「ハァハァ……もぅ、守ってばかりではウチは満足できまへんよ～？せやけど、こんなに保った人もルーはんが初めてですわぁ～！もっとぉ！　もっと激しくぅ！

ウチを受け止めて昂らせてください～！」

そう言って、何度も、何度も、何度も、相手を殺す為に、斬る為に、刺す為に月詠は刀を振るう。

月詠のハァハァって疲れて出るやつじゃなくて、明らかに興奮して出るハァハァなんだが……てかルーはんて何だ、ルーはんて。
ルーの後に大柴とか付きそうでなんか嫌だ。
それはともかく、此処まで純粋な殺気も珍しいな。
俺の方もそれなりに反撃を開始し始める。

「あぁ！！　激しいですぅ～！！　乱暴過ぎます～、はぁぁ～？
こんな風にされたら、思わずイってしまいそうやわぁ～！！」

防御などまるで考えていない。
此方の攻撃を薄皮一枚ギリギリになるまで受けながら踏み込み、それでも怯まず攻撃を放つ月詠。
攻撃の方も攻撃ですら無く、彼女は純粋に斬るという事のみに重点を置いて斬りかかってきている。
余程の差でもない限り、１０の攻撃は１０の防御でなければ防げない。
月詠は武器性能によって全力が出せず、此方が魔法等を使わない、気と体術だけで戦うならば、此方は甘く見積もって7は防御に回さなければならないだろう。

「可笑しくて、激しくて、お互いがメチャクチャになって訳が分からなくなる位に戦いましょう～？」

唐竹割り、薙ぎ、突き、払い、袈裟掛け、逆袈裟、肘、膝、足刀、蹴撃、眼潰し、何でもありの殺し合い。
そんな中でも月詠は斬る事を最優先にしてくる。
ひたすらに斬るだけを行ってくるのだが、それ故に刀以外の攻撃との技の連携に若干の隙が出来る。

それだけならば、やりやすいのだが――――――如何せん太刀筋が鋭過ぎる。

「そして最後にウチを殺してください～」

月詠は笑う、ひたすらに楽しそうに、可笑しそうに。

「ウチは貴女を殺します～」

俺は笑わない、眉間に皺を寄せ、不快だという様に。

目は口程にものを言うが、彼女の瞳に映る表情は……喜悦、悦楽、恍惚、高揚、興奮、愉悦、それだけか？

それに人を殺す事を容認はできるにしても、進んで殺したがるというその感情は、俺には理解できない。

……使うか、ナギとのアーティファクト。

「来れ」

俺は仮契約のカードを使う。

瞬間、世界は呑み込まれ、森は炎上する日本家屋が建ち並んだ村に変わった。

先程まで月明かりが青白く照らしていたのに、今は炎の揺らめきによって照らされる。

「懐かしいわぁ～、ウチが皆を殺してあげた時の場所やわ～」

月詠が俺に斬りかかりながら嬉々として言う。

「さっきのは西洋魔術師はん達が使うカードやな～？　この場所は空間系ゆう種類かな～？
あれ？　でも、仮契約ってキスしはるのが手っ取り早いんですよね～？」

ん～？と首を傾げながら月詠は言う。

「その通りだと言っておくわ」

「えぇ～？！　ならもうファーストキスじゃないんですかぁ～？
倒した後にルーはんの初めて奪っちゃおうと思っとったのに～」

えぇ～、狙われてたの？
目の色反転してるから怖いよッ！？
てか、相手のトラウマの場所って設定しといたのに月詠は嬉々としてるし。

「一体何があったのかしら？　この場所で」

ナギと仮契約した（キスじゃないよ！）アーティファクトの効果は取り込まれた者全員が、一切のダメージが無力化され、取り込まれた全ての人間の記憶を元に展開者、つまり俺が設定した空間を展開するという、相手の記憶を見る事、閉じ込めて相手のトラウマを掘り起こして虐める位しか使い道が無く、更に俺の視認領域である半径４キロまでしか広さが無いアーティファクトだ。
もっとも最終手段として根源の場所を展開すると普通の人は知覚できず発狂して廃人になったので余程の事がないと使わんけどね。

誰でも根源を見れる訳ではなく、至れていない者が見ると駄目っぽい。

つまりは今の所、俺以外が見るともれなく廃人という名の死が待ってるよ？という事だ。

魔術師の方々は大丈夫かもしれんけど、検証のしようが無いから考察するだけ無駄だし。

大戦の時に偶々設定を弄ってた時に敵が襲ってきて、間違ってやったらそうなった。

ナギとラカンにトラウマ設定の空間を使ったら「俺にトラウマはねぇ！　雷の暴風！」「ハン！　この程度の過去は乗り越えたぜ！！」で即壊された。

鳥頭共め……。

アルは「私も欲しいですね、そのアーティファクトは」とか言ってたし。

さて、アーティファクトの説明は程々にして、一体この場所で月詠は何をされたんだ？

「別に～、殺す事為だけに剣を教えられて、殺す為だけの技術を叩き込まれただけですえ～。

ホントむさ苦しいだけでしたわぁ～、最後に卒業試験言う名の仲間同士での殺しがありましてなぁ……生き残る為にみーんな殺したんです～。

ついでにそんな事で生業を立ててた村も全部纏めて殺っちゃおうと思い立ちまして～」

「そう……」

偏向教育で悪い事を悪いと思えなくなったみたいな感じかよ。

チッ、胸糞悪い。

「ほえ～？　ウチは救ってあげただけですえ～？　早く殺してくれ言うてはりましたし～。
それに人を斬る感触て病みつきになると思いまへん～？」

つまり、狂ってるとかじゃなく、月詠にとってこれが正常な訳か。

「戻れ（アベアット）」

俺はアーティファクトを戻す。

展開してもあんまり意味無い事がわかったし。

「……ッ！！」

月詠が声も上げず繰り出した右での突きを左脇に挟み込み、刀の側面に右腕で気を込めた掌打を打つ。

瞬間――――月詠が刀に流していた気ごと刀を中ほどから圧し折る事に成功する。

更にその圧し折る為に繰り出した掌打の勢いを止めず、回転。
左脇に挟んでいた刀の刀身を捨て、握りこんだ左手の甲で月詠の左の刀の柄尻を跳ね上げる事に成功したが、月詠はそれでも止まらない。
そこから月詠が俺に頭突きを突き出して来たので、慌てて俺も頭突きで対応。
お互いの気で強化された頭突きが、ゴッ！っという鈍い音と共に決まり、視界が歪んだ。
俺はそこで一気に距離を開ける為にバックステップ。
しかし、月詠は距離を放そうとせず、更に踏み込みながら弾かれ

た左の刀と折れた右の刀をまるで別の生き物の様に操ってくる。

殺気が有り過ぎて次に狙っている場所が至極、読みやすい。

が反面、月詠は此方の殺気を読んで次の此方の手を読んで刀を繰る。

殺気を読む事に天性の才能がある様だな……なら、純粋に経験の差を教えてやるとしよう。

そう判断し、即座に俺は殺気を消した。

それだけの事だが、月詠の反応速度が若干悪くなる。

「?!　攻撃が読めなく?　一体何をしたんです~?」

そう言って接近してくる月詠に対し、俺は答えずに左手に天翼を現わしながら両刃を展開せずに振り上げ、同時に右手に取り出した大牙を盾の様に構える。

自覚しているかと思っていたが、どうやら無自覚に殺気を読んでいたらしいな。

またしても攻撃が防がれた月詠は俺の足を狙うべく――――――

「にとうれんげき、ざんがんけーん」

脱力してしまいそうな声で、岩をも切り裂く斬岩剣を繰り出してきた。

俺は振り上げた天翼の刃を展開。

魔力を天翼に流し込み、今度は振り下した。

二刀と天翼の刃がぶつかり合い、金属同士がぶつかり合う音が――――――

――――――しなかった。

分断の概念が二刀に込められた気すら紙の様に分断し、月詠は即座に斬られた二刀を放り出し、両手で天翼の切れない柄の部分を受け止めた。

俺は大牙を捨て、大渦を月詠の脇腹に押し当て――――――

杭を打ち込まれた月詠は吹っ飛び、木の中ほどに磔にされた。

「んッ！！　はぁぁ～……」

月詠は恍惚とした表情で貫かれた腹部を気にせず、森の木々の枝の間に覗く月を仰ぎ、艶っぽい吐息を洩らして俺に視線を移す。

「満足したかしら？」

「もっとぉ～。　まだまだ、ウチは満足してへん～。　もっとしましょ～？

……あれ、瞼が……まだ……ウチは戦り合うた、い……」

月詠は血を失い過ぎて気を失った。

――――――オオォォォォォッ！！

スクナか……間に合わなかった、か……。

俺は木に縫いつけた少女を杭ごと抜き放つ。

その瞬間に月詠の傷口から飛び散った血が俺の頬に飛んだがそれを気にせず、俺は治療の為に治癒魔法を詠唱し始める。

最終決戦はもうすぐだが……少し月詠に興味が湧いたな……この娘も何とかできるなら何とかしたいかも。

かくして狂った少女を下した紫の麗人は、彼女の命を拾い上げる為に治療を始め、木々の隙間から月明かりが二人を優しく照らす。

しかし、魔法使いと陰陽師の戦いは未だ続く。

第３０翼　狂った少女、興味を持つ紫の麗人（後書き）

と月詠の過去を捏造してみました。
村壊滅後、遅れて来た神鳴流に拾われ、修行を通して精神鍛練中、でも結局あんまり治ってないという設定で。
女の子好きになったのはそんな殺伐とし過ぎた為の反動みたいな感じですかねぇ。
でもって、何か書いていると月詠さんの性格が原作とかけ離れ始め、変態的言動をするという……。
偶々見たガンダム００のＭＡＤ、介入できないシリーズの所為だと思いたい。
あの「私、マリナ・イスマイール」怖いよぅ……。

本人の意図しない所で仮契約を断られまくるネギ、彼は主人公の座に帰り咲けるのか？！

朱然さんの使ったナギとのアーティファクトは文で書いた通りの代物です。
名前は考えてないです。
多分、ネギの過去暴露編で使う予定が無くも無いので、その時までに名前を考えなくては……。
ネギとの戦いで使おうかとも思いましたが、何となく此処で使ってみたり。

最近はスラスラ書ける時と書けない時の落差が激しいです。
なんでだろう？　これが普通なのだろうか？
後、外が寒い……家から出たくない……こたつから首より下を出したくない……。

次回は三人称で書きたいなーと思ってます。

第３１翼　リョウメンスクナノカミ、滅する紫の麗人（前書き）

倒れ伏す未熟な魔法使いは、原作にはなかった力を行使する。

それは本来、使われる事の無い魔法。

些細な違いは一体、これから何をもたらし、どんな結果を生むのだろうか。

第３１翼　リョウメンスクナノカミ、滅する紫の麗人

ネギは倒れていた。

「……ッ、ッ！」

歯を食いしばり、目は己の無力さを思い知って尚、諦めてはいない。

「どや、西洋魔術師。　これで俺の勝ちや！」

ネギを下したのは狗族の少年、犬神小太郎。

ポテンシャルを比べるならば、明らかにネギに軍配が上がるだろう。

故にネギが敗者となったのは圧倒的な実戦経験の差。

圧倒的な実戦経験は時に天才をも下す可能性があり、今回は犬神小太郎の経験が、ネギのポテンシャルを凌駕したに過ぎない。

そして、もう一組。

刹那とフェイト。

こちらも言うまでも無く、単純に刹那はフェイトの敵足り得なかった。

刹那は実力、実戦経験共に並みの者より高かったが、フェイトの方が圧倒的に練度が違った。

かくして儀式は恙無（つつがな）く進み――――――

――――――オォォォォォッ！！

古の大鬼神は復活した。

マズイマズイマズイ！！　実戦経験の少なさと、兄貴の子供のプライドが悪い方に出ちまったッ！！

刹那の姉さんもあの白髪にやられちまったし、どうすればッ？！

アルベール・カモミールは焦る。

此処に居る味方は０。

この状況を逆転させる機転は思い浮かばない。

「アハハハッ！！　これで関東魔法教会に攻め入る準備が出来ましたえ！」

天ヶ崎千草は復讐の為の下準備が終わり、己の復讐が始まる事に歓喜の笑いを響かせる。

「天ヶ崎千草、契約は此処までで良いんだろう？　僕はこれで帰らせてもらうよ」

「ええ、フェイトはんとの契約はリョウメンスクナノカミの復活までやしなぁ」

「そう……まあ、別に良いけれどね。　そうそう最後に忠告しておお

くけど、あの灰銀の髪を持った娘に注意しておいた方がいいよ」

フェイトは朱然の事を天ヶ崎に忠告した。

何せあの朱然義封には、このリョウメンスクナノカミを以てしても確実に倒しきれるとは言い切れないと思ったからだ。

フェイトも本来の得意とする地を操る力を使えば出来ない事は無いが、あの朱然義封は赤き翼のメンバーだという事、自分と同じ人工生命体という事を無しにしても、明らかに異質なのだから。

特に８種類の謎のアーティファクトは異質すぎる。

ナギ・スプリングフィールドとの契約によって手に入れたのかとも思われたが、仮契約カードを使っていない所を見るに違うようだ。

他にも何も無い所から銃を取り出す等もあるが、やはりこの謎のアーティファクトは謎過ぎる。

前のアーウェルンクスの記憶を受け継いだ時に見た様々な効力は、この世界の魔法論理をいとも簡単に突き崩す効果まで発揮していた。

例えるなら魔法の反射、魔力の異常収集、魔法効果の打ち消し、前準備なしでの魔法障壁貫通ｅｃｔ　ｅｃｔ

「小娘一人程度で、この鬼神をどうにか出来るとで思っとるんか？」

自信満々に答える天ヶ崎。

「……忠告はしたからね」

そう言い残し、敵側で一番厄介だった筈のフェイトは、用は済んだとばかりに水のゲートを使い、いともあっさりこの舞台から退場した。

何で僕はッ！！

ネギは己の無力さを呪っていた。

血の滲む様な思いで覚えた魔法が、当る前にかわされるどころか撃たせてさえもらえない。

「ハ、契約通りっちゅーか、淡泊っちゅーか……アイツは何考え取るかわからんし、あんま好かんかったから別にいいわ。

俺の契約も一応、此処で終わりやけど……トドメいっとくか？」

目の前の犬耳少年が此方に視線を向ける。

ゆっくりと小太郎がネギの方へ歩いてくる。

このままじゃ僕は足手纏いだ……ッ！！　力が欲しいッ！！　自分の周りだけでも確実に守る事の出来る力がッ！！

――――――何時までそうしているのかしら？

？！

ルーデシアさん？！

――――――驚いている暇は無いでしょう？

――――――それとも、このまま無様に倒れているだけで、誰かが

近衛木乃香を助けれくれる事を期待する？

でも、もう僕は動けないんです……。

――――――全く……15分よ。

えっ？

――――――15分時間稼ぎすれば、全部上手くこの事件は解決するわ。

――――――目の前の犬耳少年をどうにかして、鬼神を足止めしなさい。

でも、僕は攻撃を受け過ぎて動けませんッ！！

――――――そんな程度で動けなくなるのに誰かを救いたいなんて傲慢な事を考えていたの？

――――――立ち上がれないなら立ち上がらなければいい方法を探すか、立てるまでの時間を稼げばいいんじゃないかしら？

！！

――――――後14分、どんなに無様な事になっても足止めをしなさい。

――――――見栄や格好をかなぐり捨ててみれば、意外と何とかなるものよ？

そこで念話は切れてしまう。

だが、倒れているネギの瞳には既に絶望は無く、諦めている気配は微塵も無かった。

今、僕に出来る最善を尽くす、身体は言う事を聞いてくれない。
なら、どうすれば足止め出来る？
今一番の問題はこのコタロー君をどうにかして排除する事だ。
戦う必要がある。
仮契約カードの召喚は動けないから使えないし、く……ッ！！

小太郎がネギの前まで来た。

「ん？　なんや、まだ諦めてへんっちゅー顔やな。　ま、西洋魔術師は前衛が居なけりゃ紙みたいに弱いし仕方ないで。
実戦経験も無いなら此処まで来れただけで十分やろ」

小太郎は右手に気を乗せ、ゆっくりと振り上げる。

そうだッ……アレならッ！！

ネギはある事を思い出し、あの事から推察できる術式を頭の中で高速で構築し、組み立て始める。
見た事があるのは2回。

でも、あの魔法陣とあの攻撃の仕方を見れば、中身の方も何となくだけれど、大雑把な構成は分かるッ！
出来るか出来ないかじゃない！

やるんだッ！！

「さっさとトドメ喰らいや」

小太郎の気を込めた一撃が、ネギに振り下された。

そして――――――

ネギのソレは不完全ながら何とか成功し、小太郎の攻撃を盾で受け止めている姿を現した。

「「なッ！？」」

カモと小太郎が驚きに目を見開く。

「兄貴ッ？！　コイツはッ！？」

そこには雷を纏った楯と剣を持ち、落書きもかくやという程に簡素な騎士の姿があった。

「なんやこれ……ッ、これも西洋魔術か？！」

「行けッ！」

戸惑う小太郎に対し、倒れながら命令を下すネギに答えるかのように、雷の不出来な騎士は迅速に動いた。

「チィッ！！　こんな木偶人形に俺がッ！！？」

数度の攻撃の応酬の後、小太郎の動きが悪くなって来た。
雷の騎士の動きはそれこそ稚拙なものだったが、触るだけで相手にスタンの効果を発揮させる事が出来る。
気を撃てるとはいえ、素手での格闘を好む小太郎には弱点や苦手ではないにしても、やりづらい事この上ない相手だと言わざる負えない。
だが、それも所詮は急造品。

「行きやッ、犬神ッ！！」

小太郎の影から犬達が走り、雷の騎士を圧倒し、打ち倒す。

「チッ、舐めた事するやないか、無駄なあがきやったけど、なッ！」

「うあ……ッ！！」

ガッ！という鈍い音と、思わず漏れてしまった声を残し、ネギは小太郎に祭壇の方へ思い切り蹴り飛ばされた。
小太郎が狙ったのか、水に落ちずに祭壇の2、3メートル程まで転がったネギは力なくうつ伏せに倒れる。
それを追う様にしてネギの近くまで来た小太郎は、ネギの正面に立ち塞がる。

「いいザマやないか、もう諦めたらどうや？　もう動けもせんし、

あんなデカブツをお前一人で止められる筈ないやんか。
此処で参りました、言うならこれ以上、俺は何もせんし。手当くらいはしたるわ、どや？」

小太郎はわかりやすい条件を掲示する。

「……だ」

「ん？　なんや？」

ネギの口から微かに何かが聞こえた小太郎は、耳を近づけた。

「……やだ」

それは微かだが、確かに諦めていない強さを持った言葉だった。

「！　もうお前の負けやんか……でも、気に入ったで！　命乞いする様な奴より見込みがあるわ。
その根性に免じて、馬鹿にしたのは謝ったる。　そんで、今度こそトドメや！」

今度こそネギに引導を渡そうと気を込め、一気にその一撃を振り下そうとして――――

「何ッ、がァッ！？」

小太郎は突如現れた人物の掌打を受け、湖面へと投げ出され、水を切って沈む。

その助太刀に現れた人物はネギのよく知る人物だった。

「よく頑張ったでござるな、ネギ坊主」

その人物の正体はネギの教え子、長瀬楓。

細められた目は鋭く、湖面へと沈んだ小太郎を油断無く見据えているが、ネギへと掛けられた言葉は優しく、ネギの耳に届く。

「拙者があの犬耳少年の相手をするでござる。　ネギ坊主はそこで休んでるでござるよ」

だが、ネギは休む事を良しとはしなかった。

「僕は……まだ、やる事が、あるんです」

強引に身体を起こそうとしながらネギは言う。

「それは無茶をしてでもやる事でござるか？」

楓は覚悟を問う。

「……はいッ」

倒れながらもネギは視線を逸らさず、ひたすら真っ直ぐに答えた。

「うむ、なら止めはせんでござるよ。　男の子でござるな」

そう言って楓は、水面から跳躍してきた小太郎の一撃を受け止めながら言う。

「ッ！！　よくも邪魔してくれたな糸目のねーちゃんッ！！」

小太郎は激昂する。

「何分、ネギ坊主はやる事があって忙しいらしい。　代わりに拙者がお相手するでござるよ。
弱い者イジメ程、格好悪いものもないでござるよ？」

「上等や……ッ！！」

こうして、原作とは少し違った戦いが始まった。

その間にネギは両手足を踏ん張り、今にも倒れそうな身体に鞭を打ち、木乃香が寝かされていた祭壇まで這いつくばり、その祭壇に寄りかかりながらも立ち上がった。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル……ッ！　来れ雷精（ウェニアント・スピーリトゥス・フルグリエンテース）　風の精……ッ」

「待てッ兄貴ッ！！」

ネギは霞む視界の中、震える左手を鬼神に向け、絞り出すような詠唱を始める。

その詠唱を聞き、何を唱えているのかを察したカモは叫ぶが、ネギはやめようとしない。

「雷を纏いて吹きすさべ　南洋の嵐（クム・フルグラティーネレット・テンペスタースアウストリーナ）……ッ！」

「無茶だッ！！　撃てる筈がねぇッ！！　倒れちまうッ！！」

カモの警告をネギは無視し、鬼神へと向けられた大呪文は完成した。

「雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）……ッ！！」

「凄ぇッ！！　撃っちまいやがったッて兄貴ィ――――――？！」

その呪文を唱えた所で、カモの叫びを聞きながら、ネギの意識は更に霞む。

「さあ、お嬢様。　まずは貴女の居た麻帆良学園を潰しに行きましょう？」

「ん～ッ！！　ん～ッ！！」

木乃香が暴れるが、呪の刻まれた符の枷はびくともしない。

「麻帆良学園は……向こうやな……！」

天ヶ崎はリョウメンスクナノカミを操る為に木乃香の魔力を引き出す。

「ん〝んッ！！」

その瞬間、木乃香の身体に快感が走り、弓なりに仰け反ってしま

う。
そして、リョウメンスクナノカミが緩慢な動きで動き出そうとした時だった。
轟音と共にリョウメンスクナノカミに何かが当たり、前によろけた。
「なんや……？！」
リョウメンスクナに当たったモノ。
それは倒れたネギが放った、雷の暴風だった。
「お、驚いたけど、やっぱりその程度じゃビクともないみたいやなぁ！！」
天ヶ崎が見下すように笑い、ネギは気絶しかけていた。
それは微々たる時間稼ぎだったが、確かにそれは意味のある時間稼ぎだった。
何せ――――――
「はーっはっはっはっはッ！！」
「……目標を補足しました」
ネギに残った微かな意識に、数える程しか聞いた事の無い高笑いが響き渡った。
次に現れたのは、漆黒のマントをはためかせて宙に浮く、６００歳を数える真祖の吸血鬼、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。
そしてもう一人、背中のブースターで飛ぶ、機械と魔法のハイブ

リット従者、絡繰茶々丸の到着する時間を稼いだのだから。

「なんや？　自分らは？」

突然、登場した闖入者をいぶかしむ天ヶ崎。

「我が名はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。　此方は従者の絡繰茶々丸。　今からこの大鬼神を打ち滅ぼす者の名だ。　覚えておけ小物」

「誰が小物やッ！！」

突っ込みを入れる天ヶ崎。

「そして、もう一人の従者を呼ばせてもらうとしよう。　どうやら貴様が足止めした我が従者の方は全ての障害を排除したらしいのでな」

「なんやて？！　あの１００を超える鬼共をこんな短時間で倒しきるなんて、何者やッ！？」

――――――何者？　唯の人よ、小悪党。

そうしてエヴァの仮契約カードによって朱然が現れる。

「お前はッ、あの時の銀髪の小娘ッ！？」

天ヶ崎が驚くと同時に――――――

「隙有りッ！！」

純白の翼を羽ばたかせ、刹那が夕凪を振るい、木乃香を救い出した。

「なッ！？　お前はフェイトはんが石像にして倒した筈――――――？！」

「私が治しただけよ。　その所為で少しばかり時間を取られたけれど」

「こんの小娘がぁッ！！」

制御の要である木乃香が居なくなった所為で、スクナが暴れ始める。

「くッ！！　制御がッ！？　……ッ、わかっとるんやろうな？　もう、誰にも止められへん様になったんやで？」

「わかっているとも、だからこそ、私が呼ばれたんだよ小物。　やれ茶々丸」

エヴァンジェリンがマントをバサァッと広げ、尊大に言う。

「了解しましたマスター。　結界弾セットアップ。　発射（ファイア）！」

茶々丸がそれに答え、自分用に創られた超製の砲撃銃を取り出し、捕縛結界を発射する。

――――――オオォォォォォッ！

鬼神が結界によって拘束される。

「さて、宴もたけなわ、さっさと潰してしまうとしよう。　リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！
契約に従い　我に従え　氷の女王ッ！　来れ　とこしえの　やみ（エレボス）！　えいえんのひょうがッ！！
全ての　命ある者に　等しき死を！　其は安らぎ也！　おわるせかい（トロフェー）」

エヴァンジェリンが氷属性の広範囲殲滅呪文・おわるせかいを唱え、指を鳴らす。
すると、リョウメンスクナノカミは全身氷漬けになってしまう。

「む？　何故砕けん？」

だが、氷結粉砕する筈なのに砕けない。
それどころか、全身から湯気が立ち上り、溶け始めている。

「チッ、そうか……やはり封印で魔力が半分程度になっていては、完全復活したデカブツは砕けんかったか。
オイ、水仙トドメはお前が刺せよ？」

突然、言われたにも拘らず、朱然は当然の様に答える。

「そうね。　それに一度実物は見ているのだけれど、実際に倒したのはラカンとナギだったのだし。
修学旅行前に造ってみた物を使ってみたかったのよ。
試作品だし、一回しか使えないのだけれど、今回は学園長に色々と請求させてもらうから存分に使える様だしね？　来なさい」

静かにそう言った瞬間、朱然の手に2つの武器が握られる。

1つは槍、それは雰囲気で言い表すならば荘厳かつ神聖。
全体が透き通るような蒼で穂先には同じ様に透き通った蒼の八面体が在る。
唯、その穂先から今にも砕けそうな位に微細な罅が入っており、その罅の隙間からは純白が覗いている。

2つ目は刀、というか刀身が無い柄と鍔のみの物だ。
柄も鍔も特に変わりは無く、目を引くのは柄巻きが紫で少し変わっていると思うくらいだろう。

これらは本来、この世界には存在しえない異質な物。

まず、蒼き聖槍の名は大神宣言（グングニル）・・・・・・に限りなく本物に近づけた粗悪品。
コスト度外視で英雄王の蔵から見た聖槍の原典を元に創った物だが、何よりも本物の効果を重視した結果、1回だけの使い捨てになってしまった。

もう1つは、根源の知識より知った概念を扱う術を使い創作した、ある事に特化した限定礼装。
名を名斬り（なまえきり）の刀の刃と名付けた刀。
此方も朱然が一から作ったのだが、壊れはしない。

この攻撃は前菜（オードブル）だ。
これで死ぬなんて、ガッカリさせないでくれよ？
そう内心で呟きながら魔力を込め、朱然はその刀の真名を唱える。

「リョウメンスクナノカミを（な）（ま）（え）――――――」

声を張り上げながら、真名を唱え、刀身の無かった刀を上段から振り上げ――――――

「斬（きり）る刀の刃――――――！」

――――――刀身の無い柄を一気に降ろした。

――――――瞬間、透明な斬撃が不可思議な軌道を描き、スクナの

４本の腕が一斉に断たれた。

「なッ？！　なんや？！　何がッ？！」

完全に復活した古の鬼神が、あのような刀に斬られる等とは思わなかったのだろう。

天ヶ崎千草はスクナを仰ぎ見て、取り乱した。

この刀の効果――――――それは限定対象に対する絶対的な斬撃だ。

この刀は日本の有名な話を参考に創られている。

鬼切、童子切、雷切、髭切、友切、姫切、蛇切、蜘蛛切、岩切、膝切どれか１つくらいは耳にした事があるだろう。

この刀は、その決定された名前を持つ対象を斬る、というこの一点に主眼を置いて鍛えられ、対象の名を持つモノに対して絶対的有利な武器を目指したのだ。

確かに雷という名で斬るのであれば雷を斬り、全てと限定すればそれこそ全てを斬る事は出来る。

一重に、リョウメンスクナノカミという強大なモノを斬る事が出来たのは、リョウメンスクナノカミという名で限定して斬ったからだ。

雑魚の鬼共ならば、それこそ鬼というカテゴリーで斬ってしまえばいいのだから。

それに加え、指定した名の該当数が多ければ多い程、その分だけ効果が分散され威力が下がり、尚且つ指定した名のモノ以外にも他

の要素が混じっているなら指定した名のモノしか効果を発揮しない。
指定外の分だけ切れない要素が混じり効果が阻害され効果が下がる、といった具合の効果がある。
その中でも、名前とはそのモノの本質を現わす最たるものであり、唯一の物でもある。
唯、「」とか正体のわからないものに対しては切れもしないという、ある意味、使いどころを見極めなくてはならない物だが、聖杯戦争であったなら、まさしく真名を知る事が勝利を得るに等しい真名殺しという宝具になっただろう。

唯――――――

「斬る時の座標がズレたわね……調整しないと――――――」

「オイ」

「――――――何かしら？」

「明らかに可笑しいだろう?!　何だ今の攻撃は?!」

どう改造しようかと思っていた朱然にエヴァンジェリンが近づき言う。

「ちょっと待ちなさいエヴァ。　後で説明するから今はトドメを刺させてくれないかしら？」

「……わかった。　だが、近い内に必ず教えてもらうぞ？　お前は私に隠し事ばかりだからな」

そう言うと、睨みながらもエヴァンジェリンは離れた。
その表情は何所か不安げであり、不満げでもある。

「さて、使い捨てにするには色々と勿体ないのだけれど……」

朱然はそう言って、透明な槍をヒュンヒュンと回転させ、構えながら魔力を注ぐ。

それに比例して、蒼白い聖光が罅の隙間から洩れ始め――――

「示せ――――」

その宣言と共に向けられた対象へ――――

「大神宣言（グングニル）――――！」

――――結晶の槍は投げる訳でも無く蒼き聖光と共に手を離れた。

粗悪品として作られながらも、その一撃は確かに目標の場所に飛来する――――――！

――――曰く、その槍は何者にもかわす事が出来ず、決して的を外す事がないという。

「させるかぁぁぁぁッ！！　お札さんお札さんッ！　ウチを守っておくれやす！！」

天ヶ崎千草は、尋常ならざる気配を持って放たれた大神宣言（グングニル）の進行方向へ、手持ち全ての防御の符を展開し、自身すらも壁にするべく立ち塞がった。

だが――――――

――――――大神宣言（グングニル）は天ヶ崎千草と防御を透過し、易々とすり抜けた。

「なんでや――――――――ッ！？」

天ヶ崎の悲痛な声が響き渡り――――――

――――――その蒼き聖光はリョウメンスクナノカミの核に寸分違わぬ精度で突き刺さった。

しかし、大神宣言（グングニル）はスクナを貫通する前に壊れた。

本来ならば壊れずに貫通し、投擲者の手元に戻って来るのだが、

威力があり過ぎて槍自体が砕けてしまったのだ。
その所為で、意図せずして壊れた幻想（ブロークンファンタズム）の様な爆発が起こり、スクナの胸に巨大な大穴が空き、漸くリョウメンスクナノカミはエヴァンジェリンの魔法の効果がやっと効き始め、崩れた。
こうして、古の大鬼神は打ち倒される。
天ヶ崎千草はスクナが崩れた破片が落ちた時に出来た水飛沫に紛れて逃走。
こうして、原作でいう修学旅行編最大の戦いは終結した。

「ふぅ……8千万円が一瞬で粉々よ。　学園長には吹っ掛けさせてそれ以上を貰わないと割に合わないわね」

果たして必中の聖槍という宝具が、使い捨てとはいえ八千万円というのは高いのか安いのか……。
新たに学園長の懐がとても大変な大損害を被りそうなフラグが建ったが、それはまた別のお話。

「水仙。　あの小物にチャチャゼロを差し向けるがいいだろう？」

「ええ、そうして頂戴」

それを見届けながら、エヴァンジェリンの提案に返事をした朱然のポケットから振動音が鳴り始める。
朱然はポケットから震える携帯電話を取り出し、発信者の名前を確認する。

龍宮真名。

原作通りに手助けに来てくれたのだろう。

そう思い至った朱然は通話を押した。

「水仙かい？」

「ええ、そちらの方は？」

主語を抜いても話が通じると思った朱然は当然の様に聞き、真名は当然の様に答えた。

「ああ、古と共に神楽坂とその浦島可奈子さんを援護したよ。　狐面と烏族はたった今、両方とも還った。

後、この娘は捕縛して総本山へ連れて行けばいいんだね？　いつかの店での借り（サービス）の分は返したぞ？」

「わかったわ。　此方も全部終わった所。　後日、学園長に色々と請求しましょう。　そのお金で何か食べに行きましょう？」

「良いね。　何所かお勧めの場所はあるかい？」

「そうね……私が大学に居た時にアルバイトしていたお店で、ファミーユという所と、そのお向かいにキュリオというお店があるからそこで食べましょう。

ケーキは嫌いかしら？」

「いいや、好きだよ。　甘味は杏仁豆腐が好きだが、たまにはケーキも悪くない。　私達の方は先に総本山に戻っていていいんだな？」

「ええ、御苦労さま」

そう言って電話は切られ、俺とエヴァ、茶々丸、刹那と刹那にお姫様抱っこされている木乃香が祭壇でいつの間にか気絶しているネギの元へと着地した。

そこには忍者装束の長瀬楓と綾瀬夕映、宮崎のどか、早乙女ハルナがネギの介抱をしていた。

が、此方が近づくと図書館三人組が近づいて、言いたい事を言い始める。

「いやぁ～、見てたわよッ！　実際にアニメとか漫画みたいな事があったなんて感激よ～！」

「ええ、退屈な日常には飽き飽きしていましたが、まさかこの様な事が身近にあり得たとは……驚きです」

「う、うんー……ほんと、ビックリー」

その辺りの説明は後回しにして、朱然はネギの容態を見る。

所々に打撲の跡があるが、後は魔力の過剰消費以外の異常は見当たらない。

「早めにネギ坊主を休ませたいと思うのでござるが……」

ネギの汚れた頬を手拭いで拭く楓。

「ネギ先生のバイタルは平均よりも下回っていますが、許容範囲内ですね」

冷静に言う茶々丸。

「ええ、そうね。　取り敢えず、優先すべきは怪我人の治療であって、何も知らない人への説明は後日ゆっくりとしましょう」

「まあ、妥当な判断だな。　私も久しぶりに大呪文なんぞを唱えたのでな早く休みたい」

「そうね。　では総本山へ引き上げましょう」

こうして、長い長い夜は更け、新たな日が東の空を紫に染め上げた。

第３１翼　リョウメンスクナノカミ、滅する紫の麗人（後書き）

取り敢えず、三人称で書いてみたりしました。

ネギがちょっとドロ臭くも活躍してみたり、小太郎と楓の戦いのフィールドが湖面であったり、スクナが完全復活でエヴァの魔法が効かなかったり、トドメを指す為に朱然さんが新しい宝具を使ってみたり、図書館三人組が石化していなかったりしました。
後はフェイトがアッサリと舞台から降りたりも。

そんなこんなで、朱然さんが関わった事で微妙に違う、過程を経てみました。
微妙というか、些細と言いますか・・・・・・。

次回はかなり短いかもしれません。
何分、今回が１００００文字超えたので。

では、次回にまたお会いしましょうノシ

名を斬る刀の刃の説明部分を少し修正しました。
その内、オリジナル宝具のスペック表を作るかも知れません。

第３２翼　修学旅行終わり、バレる紫の麗人

あのリョウメンスクナノカミとの戦いの後、俺達は一泊しホテル嵐山へと戻った。
でもって、ストリップショーを始めた式紙達を紙型に戻し（俺は自前だったのでセーフ）、一服している時だった。
詠春が昔の隠れ家にネギ達を連れて行くというので、俺は面倒なのでスルーした。
それがまさか、仇になろうとは思いもよらなかったのである。

Ｓｉｄｅ　詠春

「此処がナギ達、紅き翼が日本に来た時に使っていた隠れ家ですよ」

「わぁぁぁぁッ！！」

「「「へぇ～！」」」

この部屋に来るのも久しいですね・・・・・・。

私の案内で部屋の中にネギ君達を通すと、早速あちらこちらを探し始めるネギ君とその生徒達。

まあ、魔法関係のものは水仙の作った対魔法用シェルターの秘密部屋の棚に並んでいますし、入口は厳重に封鎖されているので、如

何に膨大な魔力を持ち、魔法に才能のあるネギ君と言えども見つける事は出来ないでしょう。
よしんば入口を見つけても、帝国のお姫様経由で水仙が手に入れた国家の重要機密や宝物庫に掛かっている魔法錠が幾重にも掛かっているので、それこそ超広範囲の殲滅魔法を使ってもびくともしません。
と、おや、これまた懐かしいものを広げていますね。
あれは私達が旅をしていた頃からの記憶を写真にしたものですね。

side 詠春out

俺はゴロゴロと旅館の布団で芋虫の様に転がっていた、のだが・・・・む、なんだろう？

――――――不意に悪寒が走った。

ニュータイプ張りの予感だと？！
何かを忘れている様な・・・・・・それでいてとても重要過ぎるものがスッポリと・・・・・・って！！

「あそこにはアルバムがあったッ！！」

俺は仰向けから両足を持ち上げて行き、自分の顔の方へ近づけ、それと同時に即座に両手を床に着き、足を戻す勢いと腕の力で即座に立ち上がって旅館の窓から宙へと躍り出た。
それからはもう、クルスになって、更に光の精霊化をして昔の隠

れ家へと飛んだ。

それこそ音速超えるどころか、光の速さで向かったぜ・・・・・・何せ、そのアルバムには昔の・・・・・・ルーデシアの時の写真も入ってるんだぞッ！？

オマケに娘に甘い親馬鹿（えいしゅん）が居るんだッ！！

ネギが紅き翼のアルバムに興味を示す→木乃香達も見る→誰かがルーデシアの姿の俺を見つける→ネギが訊く→詠春答えない→今度は木乃香が訊く→嬉々として娘に甘い親馬鹿（えいしゅん）が言う→Ｄｅａｄ　ｅｎｄだ！

俺の正体がバレるッ！！

言うなと言ったが、俺の第六感というか、大宇宙の意志とかがバレそうだと告げている！

でもってバレた場合、着き纏われるどころか、昔のナギ盲信状態のネギに戻る可能性もあるッ！！

そして、お父さんの仲間だった人なら僕が困った時、今回の様に、必ず味方になってくれる、なんていうふざけた妄想を抱きかねない。

なんというか、そんな期待されるのはゴメンだ。

俺は紅き翼の隠れ家前で精霊化を解き、ルーデシアになって瞬動と共に隠れ家の扉を足破った。

――――轟ッ！！

扉が吹き飛び、一階のソファーとテーブルを巻き込んで反対側のコンクリの壁にぶつかって粉砕した。

悲鳴と驚きの声を上げるネギ達。

「詠春ッ、何所ッ?!」

俺は気にせず詠春を呼ぶ。

「何事ですか?!」

詠春が咄嗟に俺の所に飛び降り事情を聞こうとするのだが――

――

「ルーデシアさ、じゃなくて朱然さん?!　貴方に聞きたい事があるんですッ!!」

二階で俺の事をそう言うネギが居て、此方に走り寄って来る姿が見て取れた。

俺は床に手を着いた。

正にそれはｏｒｚ状態だった。

終わった・・・・・・ネギ性格改造計画が原作６巻にして頓挫した・・・・・・。

「い、一体何が?」

詠春が床に手を着く朱然を見て、？マークを頭上に幾つも浮かべる。

こうして、非常に不本意ながら俺の計画は全てではないにしろ、御破算になったのだった。

もう学園やめて帝国で静かに暮らそうかな・・・・・・。

で

「私は何も教える気は無いわよ」

「そこをなんとかッ！」

「・・・・・・（プイッ）」

「お願いします！」

ジャパニーズ土下座をするネギと明後日の方向を向いている俺こ
とルーデシアの図。
まあ、それもこれも詠春の所為だ。
詠春にはいずれ仕返しをせねばなるまい。

「そんな事しても、絶・対・に、教えません。　実力行使されても
よ。　いっそ、しつこい様なら私は学園をやめて行方を眩ますわ」

本気です。
また闇討ちとかされるのは嫌だ。

「そ、そんなッ？！」

余程、予想外だったのか驚きの声を上げるネギ。

そんなこんなで、ネギのウザい追及をのらりくらりとかわし、学園へと帰ったのだった。

あー、ホントもうどうしよう・・・・・・。

第３２翼　修学旅行終わり、バレる紫の麗人（後書き）

今日は二話分投稿します。

第３３翼　昔語り、歓喜される紫の麗人

修学旅行が終わり、正体がバレたりして、ネギがまた付き纏ってきたが、俺が断固として譲らなかったので朱然義封の姿に戻り――――

「なら聞く、それは今よりも大事な事か？」

「はい！」

躊躇なしとか・・・・・・。

「それは未来よりも大事か？」

「・・・・・・はい」

む、ちょっと躊躇ったな。

「それは自分の知り合いよりも大事だと言えるほどのモノか？」

「それはッ！　・・・・・・いいえ、僕は他の人を巻き込みたくありません・・・・・・」

ネギはそう言って、渋々ながらも諦めた。

よかった・・・・・・調きょ、ゲフンゲフン！

修正は無駄じゃなかった・・・・・・と内心ホッとしたのは秘密だ。

そして最後にこうも言っていた。

「露天風呂の時に僕は、歪んでいる立派な魔法使いにはなりませんと言いました。

そして、自分のやりたい事は貫きたいとも言いました。　でも父さんの行方はこれからも探していきたいです。

どうして居なくなってしまったのかも気になりますし、やっぱり家族ですから。

今までの憧れが全部無くなってしまった、という訳では無いですけど・・・・・・」

まあ、ネギ成長フラグの全てが全て無駄になった訳ではなかったので、良かったと言えば良かったよ。

そんな感じでナギの行方に関しては、自分から聞きはしないとも言っていた。

それはまあ良かったが、次の問題があった。

「ああ、修学旅行前に言っていたアレか・・・・・・。　考えておいてくれとか言っていたか？」

「そうそう」

俺は元の姿でエヴァの家に直接訪れ、頼み込んでいた。

「メンドイ、却下だ」

「今度、二人っきりで夕食に行こうかと思っていたんだが？」

そう言うと、ピクリとエヴァが反応した。

お？　もうひと押し？

「ふむ・・・・・・坊やの血の他にお前の血も吸わせろ」

「あー、そう来ますか・・・・・・ダイジョウブ？」

脳裏にフラッシュバックするあの時の惨事、それをエヴァは何が？とは言わない。

「だ、大丈夫だッ！　あんな事はそうそう起こらん！」

慌ててエヴァが言う。

「わかったわかった。　それで良いよ」

俺はエヴァを宥めながら言う。

「・・・・・・もう少しか？」

と、ボソリとギリギリ聞こえる声で俺の耳に届いた。

「残念、少しも何も、俺は今の所は恋愛ゲームだと攻略不可能キャラだし」

その問いに対してばっちりと答えた。

「！？　聞こえていたのか！？」

エヴァが驚いた。

「――――」

俯いたエヴァの頬に朱が刺した。

ヤバい、可愛いわコレ。

そんな女の子しているエヴァの態度にちょっとドキッとしてしまった。

部屋にちょっと甘酸っぱい沈黙が流れる。

「何時までそうしておられるのですか？」

突然、茶々丸が入って来て、そんな事を聞いてきた。

「「ッ？！」」

俺とエヴァはお互いに声にならない悲鳴を上げた。

・・・・・迂闊だった。

この俺がこうまで気付かないとは。

因みに何故、隠密を熟知している筈の朱然さんが気付けなかったのかと言えば、茶々丸はロボなので、生物特有の気配が読めないのだ。

もっとも、魔眼を使えばその限りではないのだが。

突然の茶々丸襲来によって、先程のエヴァの感想は消し飛んだ。

「ま、まあ、それに関しては置いておくとしてだな！　まだ、あの刀身の無い刀と透明で嫌な感じの槍の事を聞いていないぞ！」

「物理的、魔法理論的にもあり得ない攻撃でした。　アーティファクトでしょうか？」

二人は俺がスクナに使った二つの武器の説明を求めて来た。

「ふむ・・・・・まあ、分類的には茶々丸の言っているアーティファクト、アレに近いものかも。

唯、仮契約でもらえるモノとは明らかに別格だよ。　何より威力は破格、効果も別格だし」

この世界では知られても俺以外に概念を付与、なんて芸当が出来る者はいないだろうし、二人に話しても大丈夫だろう。

「お前が夜の警備で使っている大剣やら、鎌やら、杭打ち機もその範疇に入るのか？」

「ああ、八卦八武装（せんてんはっけ）も名を斬る刀（なまえきり）の刃も大神宣言（グングニル）もこの世界では確かにそれ分類されるかも」

俺は軽く言ってみる。

が――――――

「待て、グングニルだと？　何故そんなものを持っている？　というか粉々になっただろアレは」

やっぱりそこに反応しますよねー。

「うん、正確に言うならアレは限りなく本物（オリジナル）に近い粗悪品（レプリカ）だよ。

アレ作るのに材料費だけで７０００万、加工費に１０００万程掛かったんだ。
学園長に今回の不始末＆迷惑料込で吹っ掛け価格一億要求したら、泣く泣く分割払いで勘弁してくれとか土下座してきたよ、はっはっはー」
はっはっはーと棒読みな感じにカラカラと笑う。
その後、学園長が何所かに電話し始めたと思ったら「婿殿！　お主の不始末も有るんじゃから半分位は払え！」と言ってたから、まあ、詠春は気の毒だが、巻き込まれてもらおう。
ネギニ正体バラシタ責任モ有ルシネ！
「それは確かに見てみたくもあるが、何故そのグングニルが本物だと言いきれて、しかもそんな伝説級のアーティファクトを造れるんだ？」
「ごもっともな質問だね。
それはまあ、俺の魔眼がそういうモノを作るのに向いているからで、何所で見たのかと言えば、それは――――」
そこで俺は言葉を区切る。
もしかしてこれは丁度良い機会かも？
――――でも、こんな荒唐無稽な話を信じてもらえるのか？
それは異なる世界で一番恐れている事。
否定されれば、それは俺自身が否定される事と同義だ。
今の俺があるのは、今まで俺が根源へ至り、異なる世界を周った

末の事なのだから。
だからこそ、俺は恐怖する。
恋姫の世界では全てが終わって、呉どころか魏と蜀にまで色々と迷惑をかけた末に話した事だ。
Ｆａｔｅの世界ではそもそもその存在が魔術師限定とはいえ認知されていた。
Ａｎｇｅｌ　ｂｅａｔｓの世界では必要に駆られて話す必要があった。
だが、今回は恋姫の時と似て非なる状況で、今度は自分から話さなければならない。
紅き翼のメンバーにも必要最低限の事以外は話していない俺の秘密。

「オイ、どうした？」

「異常な発汗も見られますね。　大丈夫ですか？」

気が付けば、俺は震えていた。
それをエヴァと茶々丸が心配そうに問うてくる。

その姿に――――――俺は心の中で信じてくれる事を願った。

「ああ、いや――――――少し、不安になって。
これから話す事は荒唐無稽でね・・・・・・今まではぐらかしてきた俺の昔話の話になる。
紅き翼の奴らにも最低限しか聞かせてない。　魔法で見せる方が分かりやすいけど、何となく今は口頭の方が伝えやすい。
聞いてくれるか？」

それとは別に、前にエヴァが俺の中で蓮華に会ったらしいので、

余計な騒動が起こらないようにと思ったのも有るのだが。

「フ、当然だ。　惚れた男の事は些細なことでも知っておきたいものだからな」

見くびるなよ?と念を押すエヴァ。

「そうか・・・・・じゃあ、二人とも身構えずに聞いてくれ」

もっとも退屈で、面白味も無いかもしれないけど、と言って、俺は語り出した。

約１３０年分の昔話。

エヴァにとって、年齢的にはそれ程の長さでも無いが、密度で言えば負けないと思われる記憶。

経験、記録、過去、思い出、エピソード。

そんな内容を懐かしみながら、俺はゆっくりと語り出した。

話終ると、昼過ぎだった時間はとうに過ぎ、夕暮れに差し掛かっていた。
その間、その話を聞いたエヴァは瞼を閉じたままで聞き入り、茶々丸は微動だにしなかった。

「――――――で、今に至り、麻帆良で女子中学生をしているという訳だ」

「「・・・・・・」」

何かしら言ってくれるのかとも思ったが、二人は無言。

エヴァや茶々丸なら或いは、とも思ったのだが・・・・・・ダメだったのか・・・・・・？

俺は口を開き問おうとした途端、先にエヴァの口が開かれた。

「つまり、お前はこの世界にとって、異物だと。そういう解釈でいいのだな？」

こちら見る眼は射抜くが如く、その言葉は直球にエヴァが聞いてくる。

「ああ、その認識で間違いない。俺は異物だ。そして、死して尚、別の世界へと旅をする異端でもある。
それを証明する手立てはこの世界の魔法理論を越えた力だけだ。
エヴァと茶々丸なら信じてくれると信じて話させと貰った。
俺はこの生は普通ではないと自分でも思ってる。でも、それを

悲観的に見るつもりは一切ないし、後悔した事も無い。
寧ろ、変えたかったモノを変え、救える事に少なからず嬉しささえ感じてる。
勿論、その所為で傷つき、死んだ者達が居る事も自覚してる。
俺は自己満足の為に人を救い、殺してきた」

俺も真っ直ぐ見返して言う。

「ならば問おう。　朱然！　お前は何故、戦わない道を選ばず、自分を知りもしない者を救おうとする！？」

「確かに俺が行く世界は戦うことが前提の世界しかないけど、戦わない道という選択肢も確かにある。
だが俺が俺であるが故に戦う事をやめはしない。　自分を知りもしない者を救うのは唯の自己満足だ。
感謝されたくて救う訳じゃない。　昔、守りたいと思った人を守れなかったから、今度こそ俺は守りたいと思った人を守りたい。
その人が自分で立てる様になるまで手助けをしたい。　助けを求められれば助けたい。
そして、自分だけでどうにもならない時は他の誰にだって頭を下げて助けてもらう」

自分の我儘で、他の誰かが傷つくかもしれないとわかっていても。
それでも俺は、自分の我儘で物語に関わる事を望む。
俺が俺である為に。

「それを如何にして証明する！？」

「俺が異端である事でそれを証明する」

本来あり得ない異端だからこそ、物語を知っているからこそ、俺は自分を異物だと認識し、それを証明していく。
物語を歪め、壊し、変える事で。

今も、昔も、そして――――――これからも。

今度はお互いがお互いを牽制し合う様な沈黙が暫し続き――――――

「・・・・・クッ、プッ！　ハハハハハ！！」

盛大にエヴァが笑いだした。

「やはり私の眼に狂いは無かった！　不思議なほどに惹かれた訳だ！　これ程、お前を選んだ事が嬉しいと思った事は無いぞッ！　歓迎しよう、我が同胞よ！　私達は出会うべくして出合ったとしか思えんよ！　ますますお前を私の物にしたくなったぞッ！　いや寧ろ、お前の方が私を求めさせてみせる！　茶々丸！　地下のワインセラーからとっておきを出せ！」

「了解です、マスター」

「しかし、そこまでとはなッ！　私達は似ているのかもしれん。その方向性は違う方向を向いてはいてもだ。
特に自分が異物と知り、絶望を体験し、それでも尚、無様に生き足掻く所などがな！　今日は気分が良いッ、朝まで飲むぞッ！」

こうして俺の願いは叶えられ胸を撫で下ろし、エヴァは真に対等な者と出会えた事に歓喜し、茶々丸はそんな主人を微笑みながら給仕に勤しんだ。

第３３翼　昔語り、歓喜される紫の麗人（後書き）

と、今回は二話連続で投稿させて頂きました。

ついにネギにバレました。

主に詠春の所為です（笑）

恋姫編の過去のお話は多分、ヘルマン襲来の辺りで話すかも？

第３４翼　ルームメイト、驚く紫の麗人（前書き）

ネギまの３２巻を今日買いました。
月詠の性格がうーむ、何か違うけどこれから修正して行こうかなとおもったり。

第３４翼　ルームメイト、驚く紫の麗人

「で、根源とは詰まる所、何なのだ？」

あれから本当に朝まで飲み続けたエヴァが突然に訊いてきた。

まあ、説明にしても「全ての発端と終焉、知識の泉（アカシックレコード）、あらゆる可能性の集合体、何でも創れる神の座、まあ単純明快に言えば、あまりにも純粋過ぎる力とか、あらゆるモノそのものかな？」と説明したのでわかりにくかっただろう。

「根源というモノを定義すること自体が間違いだよ。　アレは何所にでもあって、何所にも無いモノだし。

余程特殊で頭のネジがブッ飛んだ変人とか、妙に適性のある人間だけがソコを覗き、聞き、知覚し、感知し、至れる場所だから。

この世の裏の裏、端っこの端っこ、そのまた外側の外側というあまりにも捻くれた所にあるモノ？

うーん、何とも言い表せないのが根源なんだけどさ・・・・・。

俺の記憶からも根源に至れる可能性は無くは無いけど、見たら良くて廃人、悪ければ脳髄破裂。

それは真祖の吸血鬼だったとしても例外じゃない。

なにせ資格無しと判断された瞬間、あらゆる物理、属性、概念から、果ては運命とか因果までの総攻撃が自分自身を殺す為に総動員されるし。

その中には不死身殺しの概念まで在るから、人間なんて知覚される程度の小さな存在が生きれる可能性なんて、天文学的数値に天文学的数値を天文学的数値乗するような途方も無いものだから。

因みに俺は、妙に適性のあった人間かな？　それでも俺は肉体が耐えきれずに一回は脳髄破裂で死んだけど。

ある意味、肉体から解放されて魂が馴染んじゃったみたいな？
ま、俺自身は自分を人間と定義しているからカテゴライズ的には人間で間違いないと思ってるけど」

「何となく根源についてはわからんがわかった。　もういい、私には大凡理解出来んものだという事がな。
まあ、私はそんなものには興味は無いし、逆に感謝したい位だ。
なにせ、そんなモノが在るお陰でお前にも出会えた訳だしな」

「そうそう、考えるだけ時間の無駄だよ」

一応、同意しておく。

「マスター、お客様です」

「誰だ？」

「ネギ先生とクラスメイトの皆さんです」

「む、弟子入りの件だったな。　通せ」

「了解しました」

相変わらずのやり取りで、命令を忠実に実行に移した茶々丸は、少しして来訪者達を案内しながら戻ってきた。
此処に現れたのはネギ、明日菜、木乃香、刹那、のどか、ハルナ、夕映だった。

「弟子入りの件だろう？　水仙経っての頼みだ、授業料ももらえれば面倒だが引き受けてやるって、どうした？」

エヴァが話しているのに全く聞いていない。
というか視線がこちらに釘付けだ。

「この美形はどなた？」

ハルナが訊く。

「ん？　ああ、水仙の本当の姿を見たのは初めてか。　お前等も毎日とは言わんがそれなりに会っていただろう？
ルーデシア・ルノーだよ。　本名は朱然義封と言う。　間違っても水仙と呼ぶなよ？
水仙とはコイツが認めた者しか呼ばせない愛称の様なモノだ。
許可なく呼べば一度は警告、二度目からは命の保証は無い」

「「「「え、えぇ――――――ッ？！」」」」

事情を知らない図書館組＆木乃香が驚いた。

「だ、だって！　男よね？」

「ああ、男だ。　顔は女の様だが、見紛う事無き男だよ」

エヴァが無い胸を張って言う。

「綺麗やな～」

「呑気に言ってる場合じゃないですよ木乃香。　私達は彼の前で着替えやお風呂を堂々と一緒にしていたのですよ？」

「は、恥ずかしいよユエー・・・・・・」

知らない者達がそれぞれに警戒を示し、羞恥を露わにする。

「あー、恥入ってる所で悪いけど、子供には興味無いから。　あと、どうしても許せないなら俺は学校やめるけど？」

当然のように言う。

それに対して夕映が口を開こうとした所でエヴァが先に話始める。

「話は済んだだろう？　さっさと出ていけ、修行は引き受けてやる。

それに例え水仙が学校をやめても私が逃がさん。

日曜の夜０時、までに適性テストとして茶々丸か水仙のどちらかととでも戦ってもらうとしよう。

テストとはいえ、詰まらない結果になった場合は修行は無しだ。

意志や覚悟の無い者に稽古をつける程、暇ではないんでな」

「！　わかりました！」

「試験内容は追って茶々丸から知らせよう。　それまでに何かしら自分で戦う為の力を磨いてみるがいい。

それも試験内容だ。　わかったら出ていけ」

エヴァに追い出され、訪問者たちは帰っていった。

「何所までやれるか見ものだな」

新しいおもちゃを手に入れたような表情のエヴァ。

「私が戦うのですか？　命令であれば戦いますが」

何所か戸惑いを含めた様な言い方をする茶々丸。

「そう難しく考えなくていいんじゃない茶々丸？　俺は頼みこんだ手前、別にそれくらいは構わないけど」

「そうだな・・・・・茶々丸と戦う場合は純粋に体術のみ。水仙と戦う場合は、何を使っても構わないという条件で良いんじゃないか？」

うっわ、その条件だったら、俺は俺と戦うなぁ～。

「成程、人が悪いなエヴァ。　純粋な体術で茶々丸に勝つ事は、今は決定打を持たないネギには厳しいだろうな。逆に俺の方と戦う場合は、気、魔法、仮契約カード、自分以外の救援、援護、武器、何でも有りか。俺と戦う場合は何かしらハンデをつけるのか？」

「ふむ、この世界の魔法や気くらいなら使ってもいいだろ。　人間形態以外の使用は禁止だな。そんなもの使えば、お前の力量なら瞬殺だろーしな」

「了解、でも竹刀くらいは使わせてもらうよ？」

俺は言う。

「何？　武器もお前が使えば――――――」

「違うよ、武器だからこそ、俺は力を抑える事が出来るんだ」

エヴァとその傍らに佇む茶々丸を真っ直ぐ見る。

「「ッ」」

その二人が息を呑む。

敵を倒すのは八卦八武装や武器を使う事だが、こと冗談抜きで敵を確実に殺す時に使うのは無手であり、己の肉体なのだ。

逆に言えば、武器を持たないで戦うという事は、俺にとって最大の武器を使う事と同義であり、一番相手を殺す事に特化しているという事に他ならない。

確かに手加減もできるが、それですら格闘初心者のネギとはあまりに力量差があり過ぎる。

唯の気での強化でさえ、一般の魔法使いを圧倒できるのに、得意な得物を使っては意味が無い。

更に今のネギ達程度に合わせるのなら、俺の方が更に自分に枷をつけなくてはならない。

実力差は歴然だ。

今の状態でネギ一人が俺に臨むのならば、万が一の勝機は無くとも、億が一、地面に落ちていたバナナに偶々滑って、ラッキーパンチが急所に運良く当たるかも知れない位には。

今回の様に実力差を誇示する為の戦いでない以上、得意な得物は必要ない。

使う意味を成さない。

寧ろ、俺にそれを使わせるぐらいの気概を見せてもらわなくてはならないのだから。

「ま、そういう事なんだよ」

「わかった。　確かにその通りだな。　さて、夜通し起きていたか

らな。　流石に眠くなってきた」

うつらうつらと船をこぎ始めたエヴァを茶々丸は抱き止める。

「そうか、じゃあ俺も寮に帰って寝る事にするよ。　茶々丸、エヴァをよろしくな」

「了解です。　私はマスターの従者ですから」

茶々丸は穏かに笑ってそう言うと、エヴァをお姫様抱っこして奥に引っ込んでいった。

俺はそのまま寮に帰り、明日授業があるので、ルーデシアに変わり、服を全て脱ぎ散らかしてベッドに倒れ込んだ。

柔らかなベットの感触感じながら、俺は手探りで掛け布団を手繰り寄せ身を包み、酒の力もあってかすぐに意識は沈んでいった。

Ｓｉｄｅ　？？？

――――――ガチャリ

微かな音と共に鍵が開く。

「うふふ、こんなに早く再会できるなんて暴れた甲斐がありましたわぁ～」

侵入者はそんな事を呟きながら、細心の注意を払って部屋に侵入

した。

あの後、目を覚ましてから彼女の元へ行きたいと大暴れをして数時間。

突然やってきた長に「改心するつもりはありますか?」と問われ、彼女の下でならと頷いた。

そして、気を制限される術式を施され、ウチは監視役に監視されながら新幹線に乗って、彼女の後を追った。

学園に着いてから、学園長からのどうでも良い話を聞き流し、寮に向かった。

寮へ向かい、寮母さんから鍵を受け取り、彼女の部屋へ。

玄関から廊下へ、廊下から部屋へ。

長からは、彼女が男である事も教えてもらった。

でも、そんな事はどうでもいい。

彼女である事には変わりは無い。

女にもなれて、男になれるのなら子供も産める。

良い事ずくめじゃないかと。

部屋に入ると、部屋の壁と言う壁に本棚が置かれ、本が所狭しと並び、詰まれていた。

他に家具は冷蔵庫と固定電話くらいしか置いていない。

ウチは彼女に恋をしたのかもしれへん。

今まで出会った誰よりも強くて、綺麗な同姓。

ホントは異性やったけど。

床には脱ぎ散らかした服が落ちていて、クローゼットの方にも服が挟まっている。

開けてみると男物と女物の両方があった。
今度は視線をベットに向ける。

おったおった。
今はルーはんみたいや。
よう寝むっとるなぁ～。
キレーやなぁ～。

侵入者はベットに横たわっている朱然に覆い被さり、顔を近づけると濃い酒の匂いがした。
匂いからして、西洋の蒸留酒（ウィスキー）と葡萄酒（ワイン）の匂いだ。

う～ん。
お酒臭いな～。
ホントならもう見つかっとっても可笑しい思うとったら、お酒に酔って気づいとらんかったみたいや。
今なら悪戯し放題？

眠っている朱然に軽いキスをしてみる。

その唇は浅い息をするのみだ。

もう一度キスをしようとして、思い止まった。

ルーはんを殺して、血に濡らした唇を奪ったらどんなに心躍るんやろか？

自分の唇に付いた微かなアルコールを舐めながらそれ以上は何もせず、ジーッと眠る朱然を眺める。

ウチと戦った時とは違って、無防備やなぁ～。

思い出すのは、身も凍る様な鋭い殺気と、杭打ち機で杭を打ち込まれた時に感じた高揚感。

あの時の戦いを思い出すだけで濡れてしまいそうや～。

自然と右手が出て、頬に触れる。

頬に添えた手から伝わる肌は、酒の所為か熱にうかされた様に熱い。

そのまま、手を動かす。

肌スベスベやな～。

髪もサラサラ、男の姿でもそうなんやろか？

「ふあ・・・・・・」

あの事件から殆ど休まず暴れていた事と、此処までかなりの強行軍だった為に欠伸が出てしまう。

・・・・寝むなってきたし、ウチも寝よ。

今は女同士やし、一緒に寝ても・・・・・・ふふふ。

そう結論付け、何時も寝る時に着るフリル満載のパジャマを着て、布団に潜り込んだ。

そして迷わず朱然に抱きついた。

服着とらんし、なんやこの大きい胸？

男で、女になるとこんな胸・・・・・・趣味やろか？

本人が起きていれば、絶対に反論するような事を思いながら、抱きついた朱然の胸の谷間に耳を当て、心臓の鼓動を聞きながら瞳を閉じる。

そう言えば、こうやって誰かと寝るのは随分と久しぶりやわ～・・・・・。

人の鼓動がこんなに落ち付くとは思わんかったなぁ・・・・・・・。

それから数時間後。

「・・・・・んッ、んぅ・・・・・・」

時たまその侵入者が寝ぼけたまま頬擦りしたり、揉んだりして朱然の口から悩ましい声が漏れていた事は誰も知らない・・・・・・。

Ｓｉｄｅ　？？？ｏｕｔ

夢を見ていた。

まだ、ルクレツィアが来て間もない時、俺から離れず、一緒に眠っていた頃の夢。

そんな中で、何かが唇に触れた気がした。

何だろ・・・・・・？

そう思った所でルクレツィアが抱きついてくる場面が流れた。

ルクレツィア・・・・・・。

そのまま俺はルクレツィアを抱きしめた。

「・・・・・・ん？」

目を覚ますと、何かを抱きしめていて、何かが抱きついていた。

俺は恐る恐る布団の下を覗き込む。

女の子が居た。

俺は布団を即座に戻した。

「エ？　ナニコレ？　何ガ起コッテルノ？　ハ？　エ？　ドッキリ？」

混乱した。

それはもう混乱しました。

何で俺、女の子連れ込んだ？

あれ？　酒飲んだから？

混乱の中、俺はもう一度相手を確かめる為に布団を大きく捲った。

月詠だった。

「ハ？　月詠？　エ？　何デ？　私、ナニヲシタノ？」

ますます混乱した。

落ち付け・・・・・何で捕まった筈の月詠が俺のベットで寝てる？

いやいや、待て待て。

俺は今、女。

月詠も、女。

別に何も有る筈が無いだｒ

「ああん？　朱然はん、そんな激しくしたらウチ・・・・・ムニャムニャ」

・・・・・・。

・・・・・・。

・・・・・・。

え、マジで百合っちゃったの俺？

俺はサァーッと血の気が引きながら、月詠を起こさない様に剥がし、自分の身体をペタペタと触って異常がないかを確認した。

何かをされた形跡なし・・・・・って、何で一晩の過ちをしちゃった的な反応してるんだ俺はッ！？

しばらく眉間に皺をよせながら服を着て、月詠を起こした。

「起きなさい月詠」

「ほえ？　あ、ルーはんおはようございます～」

ニヘラと力の抜ける笑みを浮かべる。

「何故、捕まった貴女が私のベットで寝ていたのかしら？　そこの所を詳細かつ明確に説明して頂戴」

「えーと、ですね～・・・・・・」

と、月詠が寝起きのポワポワした感じで話をし始めた。

話を聞くに捕まった後、俺にまた会う為に暴れに暴れた月詠に手に負えなくなった詠春が、俺の傍に居たいという希望と、降って沸いた詠春の借金の意趣返しに来たようだ。

月詠の監視として、関東方面に向かうつもりだったらしい可奈子が途中まで付いて来ていたらしいが、月詠を麻帆良に送り届けた後、景太郎を追う為に日本を早々に離れたらしい。

で、この娘が送られて来た事を更に学園長が便乗して、ルームメイトの居なかった俺のルームメイトに据えたらしい。

こんな時だけ無駄に協力的になりやがって・・・・・・。

これは何か？

俺が学園やめたら、お前宛てにこの学園で預かった月詠が大変な事するとその被害の負債を負わすぞ的な学園長の遠回しな脅迫か？

しかもルームメイトという事は毎晩、この武闘派百合属性ゴスロリ娘に命を狙われろと？

確かに百合ならば良いとは言った。

助けたいとも言った。
でも極端すぎるだろこの娘とこの状況は・・・・・・しかも俺は女になれるとはいえ男で、月詠は女だぞ。
手は出さんが問題だろコレ・・・・・・。
学園長、いや、ぬらりひょん！
見つけたぞ、世界の歪みを！
お前がその元凶だ！
天使的な名前を付けられた太めのガン○ムで貴様を殲滅してやる！

こうして、朱然にとって色んな問題が多々ある新たなルームメイトが出来き、それを何とかすべく学園長室へと一直線に向かったのだが、時すでに遅し、既に何処かへと逃亡した後だった。
見つけたら地獄見してやる・・・・・・。

第３４翼　ルームメイト、驚く紫の麗人（後書き）

月詠さんが朱然さんのルームメイトになりました。

最初にこの話を書いた時はかなり寝ぼけながら書いたのですが、後半部分で月詠が朱然さんにそれはもう夜這い的なアレやコレをして、何かを何所かに入れちゃったり、みたいな過激なモノを書いてしまい、読み返しておぅ・・・・・これは過激過ぎ、ボツだなと思い後半はこんな感じにしました＾＾；

これから少しづつ話の展開を変えていきたいとは思うのですが、学園祭でどの立ち位置にするのかと、魔法世界編でネギ達と共にフェイト達と闘うか、フェイト達と行かざるおえない状況を整えて朱然さんを敵対させるかを悩み中です。

次回は知ってる人は知っている某メイド喫茶のゲームのキャラ達がゲスト出演する予定です。
知っている人はお楽しみに。

そんなこんなでこの作品も５００万ＰＶ＆４０万ユニークを越えてしまいました。
原作の人気も有るのでしょうが、此処まで伸びるとは思いもしなかったです。
読んで下さった皆様、感想やアドバイスを書いてくださる皆様、お気に入り登録してくださる皆様に感謝を。
長くなりましたが、また次回にてノシ

第３５翼　お出かけ、メイドになる紫の麗人（前書き）

お遊び回の様なモノなので、特に読まなくてもｏｋな話です。

第３５翼　お出かけ、メイドになる紫の麗人

――――――ガタンゴトン。

定期的に身体を伝わる振動で睡魔が襲って来そうになるが、俺は寝れない。

何故なら――――――

「はぁ～？　スリスリ～」

それは傍目から見れば、可愛い系ポワポワ美少女の月詠が朱然バージョンの俺の左脇に座っていて、俺の腕に抱きつき、その腕に頬ずりしているからだ。

抱きつき攻撃が精神的に厳しいです……周りの男達がランサーとアーチャーとバーサーカーに殺気を叩き込まれるかのような視線が痛い程に突き刺さってるんです。

頼む……ホント、周りの視線が厳しいからやめてくれ……これでも妥協してもらっているのだ。

この娘「抱きつかれるのと斬られるのどっちがお好みです？」って聞いてくるんだよ……斬られるくらいなら俺は男共の殺気に晒され、抱きつかれる事を選びます！

そして、その刺々しい視線の理由はこれだけではなく――――――

「で、何所まで行くんだい？」

俺の右脇に座っているクール系ナイスバディ褐色美女、龍宮真名が訊く。

「学園の外から5駅離れた場所から、徒歩15分位の場所にブリックモールっていう中世ヨーロッパを意識した大型ショッピングモールがあるんだけど。
そこの中にあるお店、今日は奢るから好きに食べてくれ」

「ふむ、遠慮無く食べさせてもらうよ。　で、意外にも付いてきた刹那はどうだ？」

真名の更に右に座って、ムスッとしている最近、狂犬からツンデレにジョブチェンジした純情系美少女、桜咲刹那が月詠を横目で睨みながら口を開いた。

「わ、私は月詠の監視の為に付いてきただけであって、洋菓子を食べに来た訳ではない！」

と、何やらツンデレみたいな事を叫ぶ。

――――と、つまりは美少女ハーレム状態をしているからです。

「はいはい、公共の場で叫ばない様に。　そういうのは迷惑のかからない静かな場所でな」

流石に迷惑なので、刹那に注意を促す。

今はあまり周りを刺激しないでほしいなぁ……男共の射殺す様な視線が今のでかなり増えました。
女性の方もチラチラ見ながらコソコソと何かを囁き合っている。
その会話の内容が何となく察しが付いてしまうのは、歳の所為だろうか……？

「すみません……」

注意された刹那はシュンと縮こまった。

「月詠、暑っ苦しいから離してくれ」

未だに頬ずりしてくる月詠の頭を、ガシッと掴んで引き離そうとするが離れない。

「いやや～、離したら暴れますえ～」

寧ろ余計にひっ付いてきた。

「頼むから……抱きつくのは妥協したけど頬擦りはやめてくれ。離さなくて良いから、せめて頬擦りはやめて下さい本当に」

「そういう事なら、人の居ない時にさせてもらいますえ～？」

――――――チッ！

うわ、今男達の集団から一斉に舌打ちが聞こえたよ？！

そんな中、月詠が嬉しそうな反面、俺はゲンナリした。

何と言うか……精神攻撃を受けているようで直接攻撃よりもダメージが大きいよコレは……。

そんなやり取りをしていると、電車特有の振動が止まり、プシューッという音と共に扉が開いた。

「5駅ですから此処で降りるんですよね？」

「ああ」

そんなある意味、話題を振り撒く集団は電車を降りた。

それから徒歩15分。

はい、此処が特定人種になじみのある場所。
ブリックモールに着きました。
その入り口を入ればそこには広いフードコート。
左右にはお馴染みとなった洋菓子専門店。
左にはキュリオ、右には俺がバイトしていたファミーユという店がある。

というか無駄に混んでるな……何かのフェア中か？

そう思いながらフードコートにの一角を陣取ろうと見まわした所で――――――

「朱さんがハーレムを引き連れて来たッ？！　それは置いておいて、丁度良い所にッ、これぞ天の助けだよぉ～！」

そう言って俺はメイド服の女の子に月詠ごとキャプチャーされ、それを見ていた刹那と真名も一緒にファミーユの店内に引き擦り込

まれた。

「久しぶり、後、ハーレムじゃないからね？　ホントのホントですよ？　でもいきなりどうしたの、明日香ちゃん？」

俺は久しぶりに会った、ファミーユの仲間、今では八橋大学を卒業してファミーユのフロアチーフとして活躍する雪乃明日香ちゃんに言い訳をした。

その間、涙ぐんでいた明日香ちゃんの目が、何所か蔑む様な目をされた気がするが、きっと気の所為だ。

気の所為だと……思いたいなぁ……。

「うわ～ん、てんちょと里伽子さんと恵麻さんが復活した本店に行ちゃって、由飛さんはバイトやめて今はピアノで世界中を飛び回ってるし、こっちはかすりさんと私とバイトの子達で回してたんだけど、バイトの子達が風邪と、親戚の不幸と、修学旅行で休んじゃったのぉ～」

涙ぐみながら一気に説明をしてくれた。

「つまり、今居るのは……」

「かすりさんだけ～」

そら死ぬわ。

「あー、衣装は残ってるの？」

「うん、だから」

「すいませーん！」

「はい、ただいまー！　お願い朱さん！　お礼はちゃんとするから～！」

そう言って、明日香ちゃんは行ってしまった。

やるしかない、か……。

「ごめん、連れて来てなんだけど――――――」

「手伝うよ」

「――――――え？」

突然、真名が提案をしてくれる。

「いいの？」

「ああ、きちんと報酬は貰うがね」

そう言って、ウインクを飛ばしてくる。

「ならウチも～」

にっこりと笑う月詠。

「朱然さんにはお世話になりましたし……」

刹那も照れながら言う。

そして――――――

「じゃあ、こっち来て」

そう言って、３人を更衣室へ連れて、中々に面倒なメイド服の着付け方を苦渋の選択の末に俺が着るのを見せて、３人娘をメイドに着替えさせ、簡単なレクチャーをしてオーダーを取ったり、運んだり、会計したりした。

この店でバイトする時はウェイターとメイドを交互にやっていた。

それもお気楽天然娘、今は天才ピアニストとして世界中を飛び回っている風美由飛が“え～っ、その方が面しら……じゃなかった、ミステリアスで女性のお客さんも男性のお客さんも気になって、また来てくれそうじゃないですか～”とか提案した所為なのだが。

「いらっしゃいませ、ファミーユにようこそ。　２名様ですね、こちらへ」

出迎えるは艶やかに微笑む褐色のメイド。

自分から立候補しただけあって、真名は瞬時にデキるクール系メイドさんへと変貌した。

「はい～、こちらシフォンケーキになります～。　ごゆっくりどうぞ～」

店内を駆けまわるのは、居るだけで和みを放出する眼鏡メイド。

意外にも月詠の方は刀を持たなければ、歳相応と言うよりは少し幼く見える柔らかい癒し系メイドになった。

「は、はい、合計８００円になります。　はい、丁度ですね。　ありがとうございました！」

レジで一生懸命に受け答えするのは、ハキハキと受け答えをする快活なメイド。

今の刹那はサイドポニーではなく、そのままの髪型で、緊張しっぱなしの初心者感が素人にもわかるのだが、何所か微笑ましいメイドへと変わっていた。

フードコートから店内に帰る途中で――――――

「あ、朱然さん、久しぶりですねー。　戻ってきたんですか～？　それにあの可愛い娘達は新しいバイトの娘達ですか？」

ライバル店であるキュリオの副参謀、川端瑞奈さんが挨拶して来た。

「知り合いとケーキを食べに来たら巻き込まれちゃって」

つい苦笑をしてしまう。

「あー、今日は一段とアクロバティックだなーと思ってたんですよー。

あ、それと今日は玲愛が応援に来てるんで、こっちの娘達が緊張しっぱなしで……」

何所か苦労している様な笑みを浮かべる。

「瑞奈！　敵と何時まで喋ってるの！　アンタも久しぶりに居ると思ったら世間話してる場合？

確かに夕方になってアンタと素人が来て、それなりに回り始めたけど、まだまだお客様を捌ききれてないわよ？

瑞奈、取りこぼしをこっちに引き込むわよ！　アンタも久しぶりに戻ってきたんならちゃんと仕事しなさいよ！」

突然、キュリオの本店へ行った筈のツンデレクイーンこと、花鳥玲愛が現れて彼女の固有スキル・生真面目を発動し、むんずと川端さんの襟首の後ろを掴んで引き摺って行ってしまった。

因みにこの花鳥玲愛、バイト仲間だった風美由飛の義理妹であり、ある時を境にするまで姉妹喧嘩をしていたのだが、今は普通くらいにはなった様だ。

「あーん、久しぶりだったからちょっと挨拶しただけなのにぃ～！朱然さん、また今度～！」

相変わらず、花鳥は見事なカトレアっぷりだな～。

「ッ？！」

うわッ、睨まれた。

心の中でもカトレアと思われるのが嫌なのか……。

等のお向かいさんとの激突を久しぶりに体感した。

それから数時間後。

本店から応援にいらっしゃったスーパーエグゼクティブメイド高村里伽子さんが現れ、臨時で入った真名達もメイドさんが板に付いてしまった様だ。

「正直、バイトの子達から休みの電話貰った時は絶望したわー。美緒っちに無理言って午前だけ手伝ってもらって、偶々明日香ちゃんの授業が休講になって昼から急遽来てもらって、夕方に朱っちとお友達が助けれくれなかったらホントどうしようかと……」

そう言いながらも手は止まらず、繊細なデコレーションを施していくのは京都の老舗和菓子屋・すゞなみを実家に持つ涼波かすりさん。

デコレーションの繊細さや、和菓子と洋菓子を合わせた新しいお菓子を制作している、才能のあるこのファミーユ2号店の店長であり、パティシエールだ。

「はいはい、かすりさん。こっちのスポンジ焼き上がったよー」

俺はオーブンからスポンジを取り出し、かすりさんの指定した場所に置く。

「了解ー。そっちに置いといてー。ショートケーキ終わったから切って」

――――――切ッ！

無駄に今まで培った技術で均等に切り分けた。

「ＯＫ。　ほいほいほいっと！　明日香ちゃん、出来たよー」

「はーい！」

明日香ちゃんが飛んできてショートケーキを持っていく。

「オーダー、チーズケーキ２、苺のミルフィーユ１、ダージリン３」

応援に来た里伽子さんが迅速にオーダーを伝え、踵を返し、新たなオーダーを取りに向かった。

因みに、里伽子さんは先程、高村と書いた通り、原作通り仁と結婚をしている。

腕の方は、原作のルートが終わるまで手出しせず仁に頑張ってもらう方向で知らんぷりしてたんだけど、実際にその状況を見たら、ぐわァァァァッ！　じれったい！　真実を教えたいッ！と思ったが自制して、ほんの少しだけ手伝だったりして、仁が自力で里伽子とくっ付いた後に、バイトをやめる餞別に～とか言いながら、魔眼と魔法を使って治療した。

物凄い不審な目をされたが「まあ、世の中には不思議な事があって、今まで苦しんだ分、幸せになってもいいって言う神様の贈り物だとでも思えばいいよ」と言ってさっさと居なくなった。

その後、ひなた荘宛てにファミーユの日持ちするケーキの詰め合わせと高村仁特製プリン、怪我の治療の感謝を書き綴った手紙が来た。

原作の話は好きだが、実際の二人の苦しみを見聞きした者としては手を出さずにはいられなかった。
で、今は本店も復活し、今日は偶々運悪く明日香ちゃんの言っていた事になっていたという訳だ。

「……お客さんも引いてきたから、朱さんは上がってもらっていいわ」

戻って来た里伽子さんが溜息を吐きながら言う。

「そう？　じゃあ上がらせてもらうから」

そう言ってメイド服を脱ぎ、私服に戻った。

「助かったよ～。　朱さんとハーレム？の皆さんありがとうございました」

明日香ちゃんがペコッと頭を下げる。

「いやいや、ハーレム違うから――――――」

「ウチは別にいいですえ～」
「ふむ、愛人か」
「そんな関係ではッ？！」

月詠は否定してくれ。

「真名、そこは納得する所じゃないぞ？　刹那、頬を染めるな」

「全く……こっちが忙しく働いて彼氏の一人も作れないって言うの

にさ～、このこのッ」

ジト目で割と本気に小突いてくるかすりさん。

地味に痛いんでやめてください。

「あ、そう言えば2、3日前に京都に行って、すゞなみ寄ってきたよ」

「ええッ！？　紬姉さん何か言ってた？」

「あーうん、頑張ってるようで何よりですな～、とかなんとか。後、総店長に今度の対決はウチが勝たしてもらいますーってさ」

「そっか～、よかったぁ可笑しな事聞かれなくて……でも、第2回和洋菓子食べ比べ大会は勘弁してほしいなぁ～」

伏し目がちになって引き攣った笑みを浮かべるかすりさん。

「ありがとう、朱さん。　私の左腕の事も……」

あの左肘を右手で押さえている立ち絵と同じ動作をしながら言う。

「アレはもうケーキ送ってもらったし、あの事を黙っててくれる事でとっくにチャラだよ。

それよりも仁と仲良くしてくれ。　別れるとか聞いたら仁が泣くよ？」

「わ、わかってる」

珍しく頬を染める里伽子さん。

そんなこんなで懐かしい面々との話も程々に、人の絶えた店内で、やっと客として座った俺、真名、月詠、刹那は労働分のケーキを頬張っていた。

「たまにはこういう経験も悪くないね」

「はい～、とっても可愛えぇ制服でした～」

「私はあのような衣装はもうごめんです……」

そんな感想と共にケーキを食べ終えた俺達はお土産のケーキを貰って、見送られながらファミーユを後にしたのだった。

第３５翼　お出かけ、メイドになる紫の麗人（後書き）

と、そんなお話でした。
期待ハズレだった方々には本当にごめんなさい！ｍ（＿＿）ｍ

一応、３年くらいはファミーユでバイトをしていたみたいな設定です。
あだ名は朱さんと書いて、あかさんと読みます。
魔法使いだとバレているのは仁と里伽子さんの二人だけで、ファミーユで働いている時は魔法を使わない様にしてましたが、里伽子さんの怪我はつい見ていられなくなって使ってしまった的な感じです。

出合いは、詠春に会いに偶々会いに京都へ行った所で、タクシーを捕まえて朱然さんが乗ろうとしていたら、夜の駆け落ち騒動的な感じで逃げていた二人に事情を聞いて、タクシーを渡し。
後日、バイトを探す由飛に会い、あの握力で掴まれ引き摺られて夜のファミーユに侵入、そのままバイトと間違われ働く事に・・・・・・みたいな感じでしょうかね？
これも外伝として書くかどうかは未定です。
書くとしたらハードル高い気がしますけど（笑）

今日はもう一話と、今更ですがネギま編の設定的な物を投稿します。

第３６翼　テスト、手加減する紫の麗人

５月４日、日曜日の０時。

俺とネギはエヴァの別荘で対峙していた。

茶々丸との戦いであれば原作通り、世界樹広場で戦う予定だったのだが、ネギが俺を選んだ事からエヴァの別荘を使う事になったのだ。

その時のネギは俺と茶々丸のどちらを相手にするかと言う問いに対し、ネギは堂々と俺を選んだ。

ネギが連れて来たのは明日菜、刹那の二人。

三人の手にはお決まりの得物が握られている。

「制限時間は３０分だ。　何時までも決着を見続けるのはしんどいからな。

水仙は決めてあった通り、気での強化と得物はその竹刀と、何だ・・・・・それは？」

エヴァがジト目でそれを見る。

それとは――――――

原材料――――――割り箸、輪ゴム、輝いていたあの日の童心、以上。

しかし、その実。

使われているのは最高級。

割り箸――――――これは麻帆良に来てから学園長を脅して削り取

った神木をフレームにしている。

輪ゴム――――こちらは聖水で育てたゴムの木から採れたゴムを使用している。

輝いていたあの日の童心――――造っていて少し楽しかったり。

最高級の材料をこんなのに使ってバチが当たりそうだが、呪ったら呪い返すというＦａｔｅの世界で覚えた神代文字で書かれた加護の文字を彫ってある。

「ゴム鉄砲。　対象を拘束する術式を込めたゴムを発射するんだ。俺の造ったお遊び用。
でも当たったら3分は解けないから、その分時間をロスするよ」

「面白いモノを造ったのだな」

「朱然様のイメージが・・・・・」

少し眩暈を感じているのか、ふら付く高音。

「でもでも！　あれはあれで面白い魔法具ですよお姉様？　あのサイズと簡易性で3分も相手を拘束出来るのは凄いですよ！」

興奮気味言う愛衣ちゃん。

「成程、佐倉さんはとても詳しいのですね？」

「ええ、少し魔法具に興味がありまして、そもそも魔法具は――――」

茶々丸と愛衣ちゃんが魔法具トークを始めた。

「あー、でこっちは放って置くが、坊や達は何を使ってもいい。それこそ魔法や真剣でも汚い手でも、な」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

突然、明日菜から待ったが入った。

「ん？　なんだ神楽坂？」

「なんだって・・・・・なんで朱然さん？がその眼帯みたいなので顔を覆ってるのよ？！
あんなんじゃ見えないじゃない！　それにゴム鉄砲って何よ？！」

俺の方を指さしながら指摘したい事を言う。
本当の名前にまだ慣れていないのか、恐る恐る言ってくるのが少し気になるが、それはこの際、置いておく。
因みにその眼帯はライダーさんのモノをモデルに造らせて頂きました。
もっとも普通の眼帯なので魔眼を封じる様な効果は無いけど。

「明日菜さん、彼は恐らくあれでも手加減し足りないくらいの技量差があると思いますよ」

刹那がおずおずと言う。

「え？　そうなの？　ホントに？」

その言葉に困惑をする明日菜。

「当たり前だろう。　言うなれば此処まで手加減をしてやっとお前らの実力が測れる位に戦闘が継続出来る。
本来の姿ならば、お前らなど瞬きの内に倒されている」

「・・・・・卑怯な気がするけど、そこまで言うなら・・・・・」

このテストを見守るのは、エヴァは勿論の事、茶々丸、月詠、高音、愛衣の五人。
月詠は結局、学園長が捕まらず、月詠と同室のまま四日を過ごした。
その間、月詠は何かにつけてベタベタとくっ付いてくるし、寝る時はベットを開け渡して寝袋で寝ているにも関わらず、朝になるといつの間にか月詠が抱きついて寝ているという恐るべき事態によって結構、キていたのだ。
なので、どうすれば離れて普通になってくれるのかと訊くと「ウチと殺し合ってください～」と言われたので、五日目に簡単な模擬戦をしたら普通になった。
戦った時に魔眼を通して見た所、月詠に気を制限する様な術式を込めたチョーカーをつけられていたので、殺し合うまでには至らなかったものの、それでも生来の剣の鋭さによって十分、スリリングな戦いになった。
それと高音と愛衣が来たのは、ネギがこの二人に、エヴァと俺に弟子入りするというのを漏らしたらしく、自分等も俺の弟子になる為に試験を受けに来たという経緯がある。
もっとも、漏らした所で物凄くネギは怒られたらしいけど（笑）
俺がフォローしなければネギは学園長室まで引き摺って行かれた

かもしれん。

「では始めるとしよう。　両者、準備は良いな？」

俺達は答えない。

「では、始めッ！！」

ネギ達は動き出す。

ネギ達の編成は前衛2、後衛1のスタンダードな編成。

俺は動かず気を全身に巡らせ、得物に気を流し強化する。

その得物の竹刀を力まず軽く握り、正眼に構える。

魔眼は使わない。

だから今までの経験で積み上げたモノを使う。

息を整え、神経を研ぎ澄まし、気配、音、空気の流れ、気と魔力、殺気を感じ取る。

刹那が瞬動によってこちらに一人で向かい、俺の竹刀を跳ね上げ様としてくる。

あわよくば、そのまま竹刀を弾こうとしているのだろう事が緩やかな早さで見える。

俺はようやく動く。

刹那の夕凪が竹刀に触れる瞬間、交叉法によって逆に突きを刹那の左肩へと突き込んだ。

「くぅッ？！」

呻いて、落とし掛けた夕凪を辛うじて左手で掴み、突かれた肩を右手で押さえながら更に前進、刹那は何かしらの反撃を受ける事を承知で、捨て身の攻撃を行ってきた。

そこにやっと追い付いた明日菜が回し蹴りを放つと同時に、ハマ

ノツルギを振りかぶる。

「てりゃあ――――――ッ！！」

俺は竹刀を器用に使って刹那を投げ飛ばし、ゴム鉄砲を押し付けてゼロ距離から射撃。

刹那を拘束後、明日菜の蹴りを受け止め、ハマノツルギを絡め取った。

「嘘ッ？！」

明日菜が驚いている間に、左右を挟むかのようにネギから放たれた雷の魔法の射手がそれぞれ２１矢。

それはあの吸血鬼事件の時の様に明日菜を掴み、左へ投げた。

「なッ？！」

「きゃあッ？！」

驚愕するネギと投げられて悲鳴を上げる明日菜。

左から来ていた魔法の矢は明日菜に当たって、３矢だけになった。

俺は迷わず後方へバックステップ。

左の２１矢と右の３矢がぶつかり、残った１８矢が追って来る。

その全てを竹刀で叩き落としていく。

「行けッ！」

瞬間、驚愕していたと思っていたネギが声を上げる。

魔法の矢に命令を下しているのかとも思ったが、背後に魔力が現れる。

バックステップした俺の後方から修学旅行の時にネギが使った召喚獣モドキの雷の騎士が俺に向けて雷を纏った剣を振り下そうとしていた。
即座に竹刀を斜に構え、雷の剣を受け流し、受け流した反動で持ち上げた竹刀の一閃で雷の騎士を袈裟掛けに切り裂いた。

「白き雷（フルグラティオー・アルビカンス）」

雷の騎士を斬った後、今度はネギに背を向けていた所でネギが速度重視の白き雷を放つ。
俺は身に迫る雷を気で強化した蹴足であらぬ方向へ蹴り飛ばし、ゴムを再装填したゴム鉄砲を放ち、ネギは拘束される。

「そんなッ？！」

「神鳴流奥義、百列桜花斬！！」

投げ飛ばされた筈の刹那が不安定な態勢の俺に対し、斬撃の嵐を向ける。
だが、先程俺が与えた突きの影響か、キレがない。
そのまま俺は斬撃を掻い潜り、ネギ達との間合いを大きく開いた。
それからも攻防は続くが結局、俺には掠りもしなかった。

「ッ・・・・・・掠りも、しない、なんてッ」

「此処まで力量差があるとは・・・・・・くッ」

「・・・・・やっぱり凄い、これが父さんと肩を並べて戦った人の強さ・・・・・・」

息も絶え絶えな明日菜、痛みを感じながらも実力不足を実感する刹那、父と共に戦った力の一片を感じ、遠く感じる反面、嬉しく思っているネギ。

そこで時間が来た。

「さて時間だ。　あの雷の不出来な騎士や使えるモノを全て使う事、何より強さへの渇望はよくわかった。

少し物足りんが、まあいいだろう。　合格にしておいてやる。

明日から修行を始める、学校が終わったらすぐに来るがいい」

エヴァは腕を組みながら、四つん這いになって見上げるネギを見降ろし言う。

「は、はい！　よろしくお願いします！」

「さて、次はこっちか」

ネギに向けていた視線を高音と愛衣に向ける。

「ッ、一つお願いがあるのですが」

高音はエヴァの視線に押されつつ願い出た。

「ん？　何だ？」

「私達は朱然様に弟子入りしたいのと、もう少し本気で戦ってほしいのです」

「お、お姉さまッ！？」

「ほう？」

突然の高音の願い出に驚く愛衣と、興味深そうなエヴァ。

「だそうだが？」

「良いよ別にもし勝てたとしたら無条件で弟子にしてあげるよ。俺の制限も本人がそれで良いんならそれで、何か要望は？」

俺は高音に訊く。

「では、目隠しは取って頂きたいです。　魔法も当然有りでお願いしますわ。
その英雄と謳われる程の実力を肌で感じたいのです」

清々しささえ感じられる程に言い切った。

「素敵です、お姉さま」

そして、感動する従者愛衣。

潔いというか・・・・・俺が紅き翼だとわかってから対応が雲泥の差だ・・・・・・。

「ふむ・・・・・成程な。　しかし、それでは強過ぎるだろう」

「じゃあ、音と影で戦う事にするよ」

「影はまあ、わかるとしても音？　風ではないのか？」

エヴァが怪訝そうな顔になる。

「うん、音。　サウンド、空気の振動」

「そんな事、魔法できるのネギ、刹那さん？　それに影と音で戦えるの？」

俺の戦い方に疑問を持ったのか明日菜が小声でネギと明日菜に問うているのが聞こえる。

「どうでしょうか？　風なら解りますけど、音は扱った事が無いので・・・・・影もそれなりにマイナーではありますが使う人はいますよ」

「私も音は訊いた事がありませんね。　影は修学旅行の時の犬耳少年が変則ですが使っていましたが・・・・・」

音は扱いが難しいし、扱える者も見た事無い程マイナーだし、特定のアーティファクトでも使わないと使えないしね。

調のアーティファクト以外見た事無いし。

「で、お前等は良いのか？」

「ええ、結構ですわ」

「私も良いです」

「では、制限時間は３０分。　水仙の持っている武器と影と音での攻撃のみ。　高音、愛衣は何でもありだ。　始めッ！！」

「始めから全力で行きますわよッ！！　黒衣の夜想曲（ノクトゥルナ・ニグレーディニス）！」

宣言と同時に巨大な仮装したスタンドが現れた。

「はい！　お姉様！　来れ（アデアット）！　全体武装解除（アド・スンマム・エクサルマティオー）！」

衝撃波となった武装解除が俺に迫る。

俺はよく使っていた黒さん愛用の音叉ナイフよりも更に小さい果物ナイフサイズの刃渡りと、持ち手が完全に音叉の形になっているナイフを取り出し、前に一本、右と左後方に一本づつ地面に楔の様に打ち込んだ。

そして――――――

――――――ピィィィィッ！！

俺は口に指を咥え、指笛を吹いた。

瞬間、愛衣の全体武装解除が音叉ナイフ（小）を起点にＶの字に形成された音の防壁によって受け流された。

「武装解除出来ない？！」

「その全体武装解除は衝撃波を出して吹っ飛ばすタイプだ。　なら、

音の防壁なら十分にかわせるよ。
物理攻撃も魔法も防げるが、こと衝撃波や風、音の攻撃に対しては堅固な盾になる。
しかも殆ど魔力を使わないしな」

「ならば！」

高音が黒衣の夜想曲の触手の様な物がこちらに向かってきた。
瞬く間に俺の音の防壁が貫通し、壊される。
だが、俺は気にせず音叉ナイフ（小）を空間倉庫から8本滞空させ指笛を鳴らす。

――――――ピィィィッ！！

それを合図に音叉ナイフ（小）が高音と愛衣を三重の四角形型の音の結界を形成する。
単純に四角を重ねたモノではなく、中心から４５。ずらして閉じ込めた。
上から見れば八芒星の様に見えるだろう。
そして、もう一度、指笛を鳴らす。

――――――ピィィィッ！！

「く、ぅッ！！？」

「ああ゛、あぁ、頭が割れッ！？」

俺の指笛の音を反響しあって、三半規管どころか、普通に動く事さえままならない程の轟音に変わる。

ふむ、影を出すまでも無かったか？
この轟音で魔法を使える程ではないという事か・・・・・・なら集中すらできないだろうな。

そう思っていると高音の黒衣の夜想曲が崩れ始める。

「やめッ！」

エヴァの制止の声に俺は指笛を吹くのをやめる。

「は、あ・・・・・・ッ！！」

「ッ・・・・・・ぅッ」

結界が解けると同時に二人は蹲り、頭を抱える。

「高音さん?!　佐倉さん?!」

ネギが二人に駆け寄る。

「おい水仙。　やり過ぎだぞ」

「二人とも悪かった。　二人ならこの位、何とかなると思ってたんだけど」

俺は頭を掻きながらあははーと引き攣った笑みを浮かべてしまった。

「取り敢えず、この二人は弟子にするのか？」

「うーん、実際の所、弟子にはしないかな・・・・・実力とか、経験とか、技能とかが問題じゃないし、感情的な物でもないよ。
教えるのは得意だし、世界に一人だけの特殊技能者でも、それなりにまでなら育てる自信はあるけど。
今は弟子を取りたくないっていうのが、本音なんだよね。　時間が余った時に教える位なら別に良いんだけど」

率直な意見を述べてみる。

「ふむ・・・・・・まあ、それも一つの選択だろうし、私は構わんが・・・・・・」

「いえ、それが朱然様の判断なのですから気に病む必要はありません。　しかし、何故今ではダメなのですか？」

未だに三半規管にダメージがあるのかフラフラしながら訊いてくる高音。

「やる事があるから、かな？」

「やる事、ですか・・・・・それならば無理にお願いするのはいけませんわね。
今回の模擬戦は何所までが本気だったのですか？」

弟子入りをあっさりと引いた高音が訊く。

「んー、音による攻撃の切り札も使ってないし、影も全く使わなかったから全く本気じゃ無かったよ」

「あの音の結界を越える切り札があるのですか？！　ッ！！？」

愛衣ちゃんが驚きの声を上げ、自らの声で頭痛が起き、呻く。

「あるよ・・・・・そもそも俺は、格上の相手と戦う時はなるべく自分の有利な条件をそろえて、相手を不得意な領分に引き込んで戦うスタイルなんだ。

格上って言ってもナギとかラカンとかだけどね。音で戦うのもアイツら用に考案した戦い方なの。

当のアイツらは全く意味無かったけど」

アイツらはこと如く力技で粉砕してくから生半可な攻撃はまったく効かんし。

「弟子に取らない代わりに、それぞれの弱点なんかも教えておこうか・・・・・。

まず、高音ちゃん。君は幾分、自分の力・・・・・黒衣の夜想曲を過信し過ぎているきらいがある。

確かにオートガードは大抵の攻撃を防御してくれるし、影の槍の応用性、障壁突破能力という攻撃力、空も飛べるっぽいし、機動力も悪くは無いと思うけど。

その術式に振り回されてるね。いや、その術式に集中するあまり、それ以外の方法が取れないと言った方が良いか・・・・・。

ともかく、絡め手に弱い、至近距離（クロスレンジ）の対処が未熟で出来ない、影を直接的にしか使いこなしてない。

攻撃のバリエーションを増やして、至近距離での戦い方を覚える事、さもないといつか脱げ女と言う不名誉な仇名が付くぞ？」

「あんな一方的な戦い方でそこまで・・・・・というか脱げ女・・・・・」

高音は落ち込んだ。

「次、愛衣ちゃんね「ひゃい？！」そんなに驚かなくても・・・・・・。

まあ、気にせずに言わせてもらえば、今回はアーティファクトの効果くらいしか見てないし、よくわかりません。

もっとも、あのアーティファクトを完全に防ぎ切れるのなんて、並みの魔法使いじゃ殆ど居ないからある意味効果的だけど、やっぱりアーティファクトに頼り切ってる気がするなぁ・・・・・・。

紅き翼の面々と比較するつもりは無いけど、アーティファクトは得てして特殊性が高い物が多い。

ラカンの千の顔を持つ英雄とかね。　道具を使うのはいい、でも使われるな。　これを念頭に置く様に。

後は魔法関係の助言だけど、それは見てないから何とも言えないので、時間のある時にでも見せに来てくれれば愛衣ちゃんに合った術式構成を考えるよ」

「あ、ありがとうございます！」

ペコペコと頭を下げる愛衣。

「さて、面倒事も終わったし、一日は出られんから各々好き勝手に時間を潰せ、出られたらそのまま帰る様に」

エヴァのその言葉で今回はお開きになった。

そんなこんなで、ネギはエヴァの弟子となり、高音と愛衣も何気にエヴァの所に顔を出す様になったのだった。

もしやネギパーティーに高音と愛衣が入るなんて事に・・・・・・？

いや、性格上それはないか？

第３６翼　テスト、手加減する紫の麗人（後書き）

意外と書きづらかったですが、こんな感じになりました。

高音&愛衣ペアの立ち位置どうしよう・・・・・・。

とある漫画を読んでいて音で攻撃する的な物があったので、それをちょっと入れてみました。

次は設定を投稿します。

ネギま！時点のステータス表

名前　朱然義封
二つ名　紫の麗人　無数の姿　謎のアーティファクト使い　終戦に歌う紫姫ｅｔｃ　ｅｔｃ
天敵　ネギ　ナギ　ラカン　テオドラ　近衛近右衛門　青山鶴子

筋力　Ｂ＋
魔力　Ａ＋
耐久　Ｂ＋
俊敏　Ｂ＋
幸運　Ｃ

※宝具はＦａｔｅの世界特有の物として表記しません。
※ステータスの＋は中間だとお考えください。

保有スキル

流見の魔眼：Ａ＋
あらゆる流れを見れる魔眼。
子供達を取り込んだ事による弱体化等の副作用は無いが、子供達の姿になると魔眼が発動出来ない。

変化：Ｃ～Ａ
今までの経験の積み重ねにより身につけ、望まずして身につけられてしまった技能。
Ｃランクは服装のみ、Ｂランクはハリウッド顔負けの特殊メイクで顔を変えられ、骨格調整によって多少の違いは誤魔化せる。
Ａランクであれば限定的に顔や骨格どころか性別、口調さえ変わ

ってしまう。
更に高いランクは限定等は無く、部分的な物も可能となるらしいが、今の朱然さんには到達できない境地らしい。
これ以上のランクになる可能性は無い筈？
このスキルでAランクより上の発動時は別人の身体と言っても良い為、魔眼を使えない。

体質改造：A
この世界で望まずに身につけられてしまった技能。
朱然が成れる形態は赤龍、白虎、悪魔と光、闇、水、土の精霊。

矢除けの加護：B

千里眼：C
相変わらずランクは上がらないが、人という殻を捨てれば上がる可能性がある。

心眼（真）：B
魔眼が無くとも、死闘を繰り広げて来た為、魔眼の効果が無くともエミヤの一歩手前までのランクに上がった。
魔眼が発動しても、これ以上ランクは上がらない。

気：A
約百年と言う研鑽を重ねた事により身体能力を1．5ランクアップさせる。
オーソドックスな気の技のみならず、応用した技も使える。

魔法：A
ゼクト、アルを師事した事により高度な魔法が使える。
朱然の適性は特にこれと言って不得意な物は無いが、特に得意な

のは水。

仙人：Ｃ

尸解仙という、仙人では最低ランクであるが故にＣランク。
それでも不老不死ではあるが、殺されれば死にます。
肉、魚よりも野菜の方が美味しく感じられるという味覚改造の特典付き。

武具・宝貝・道具作成＆改造：Ａ

やっと宝貝やら何やらを造る事が楽しくなって来た。
造った宝具は真名解放出来るが、造るまでに凄まじいお金が掛かるのがネック。
通常の宝貝も有るらしいが、あまり使われない。
スーパー宝貝は宝具とは正反対の科学的な物なので今の技術では再現不可能で、造ったとしてもかなり劣化する。

宝具

八卦八武装（せんてんはっけ）

ランク：Ｃ＋
種別：対人、対軍
レンジ：１～４０
最大補足：５０

説明は割愛。

伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）

ランク：Ａ＋

種別：対城
レンジ：１～５０
最大補足４００

朱然の最終兵器。
八卦八武装の全ての武器を合体させ、概念を収束・増幅し放つ事で力を得る剣。
剣とは言っても、形態としては剣、盾、手脚甲、槍、双鞭、弓、糸、鎌と様々。
今までの世界で自分が造った物は持ち越し出来ていたので生前の功績として手に入れたのか？
この概念の効果は一体何時付与されたのか？
合体などという機能は何時付いたのか？

それについては未だ秘密が隠されているかも？

名を斬る刀の刃（なまえきり）
ランク：-～Ａ＋＋
種別：対人、対軍
レンジ：１～４０
最大補足：１～９９９

柄も鍔も特に変わりは無く、目を引くのは柄巻きが紫という所と刀身が無いという所だけ。
その効果は限定対象に対する絶対的な斬撃といういたってシンプルな物。
刃が無いので、対象以外を斬る事は不可能である。

この刀は日本の有名な話を参考に創られている。

鬼切、童子切、雷切、髭切、友切、姫切、蛇切、蜘蛛切、岩切、膝切等の“〇〇を斬った”という事で付けられたり、曰くつきの別称として付けられた名前が元である。

更に詳しく効果を説明すると、この刀はその決定された特定因子を持つ対象を斬る、というこの一点に主眼を置いて鍛えられ、対象の名を持つモノに対して絶対的有利な武器を目指し、制作されている。

雷という名で斬るのであれば雷を斬り、全てと限定すればそれこそ全てを斬る事は出来るが、指定した名の該当数が効果範囲に多ければ多い程、その分だけ効果が分散され威力が下がり、尚且つ指定した名のモノ以外にも他の要素が混じっているなら指定した名のモノしか効果を発揮しない。

つまり指定外の分だけ切れない要素が混じり効果が阻害され効果が下がる、といった具合の効果がある。

が、威力を重視するのであれば、そのものに対して唯一にして、モノの本質を現わす最たるものの“名前”で斬れば良いのである。

唯、弱点として「」や正体不明のモノに対しては切れもしないという、ある意味、使いどころを見極めなくてはならないと言う事でもある。

聖杯戦争であったなら、まさしく真名を知る事が勝利を得るに等しい真名殺しの宝具となっただろう。

補足――――――

名前があるのであれば神殺しにもなりうるが、神と言う言葉自体が、人間の定義した物である為、殺すには至れないと思われる。

逆に言えば、名のある神は殺せる可能性があるという事でもある。

大神宣言（グングニル）・粗悪品（レプリカ）
ランク：Ｂ＋
種別：対人
レンジ：１～９９
最大補足１

製作費８０００万円の使い捨ての粗悪品ながら雰囲気は本物と遜色は無く、荘厳かつ神聖である。
全体が透き通るような蒼で穂先には同じ様に透き通った蒼の八面体の斬る形状ではなく、突くのみの形状。
その穂先は今にも砕けそうな位に微細な罅が入っており、その罅の隙間からは純白が覗いている。
その効果は指示した対象への完全必中とその過程の妨害不可。
必中という名の通り、対象へ何所までも飛んで行き、確実に指定場所に突き刺さる。

補足――――――

刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）は因果逆転という時間逆行的な物を利用するが、大神宣言（グングニル）はもう一つの能力である、刺さる過程の妨害を文字通りすり抜け必中する。
ただし、突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）との打ち合いになれば相打ちで勝つ事はできない。
斬り抉る戦神の剣（フラガラック）との打ち合いならば完全に負けとなる。
防御法としては、妨害が不可能であるが着弾すれば防御が可能になる為、間に装備した盾か鎧がある場合は阻まれる可能性がある。
つまり普通の防具等であれば貫通は必至だが、防御系宝具自体のランク如何によっては防御できる可能性がある。
例を挙げるならば熾天覆う七つの円環（ロー・アイアス）程の物になればほぼ防御可能である。

破戒すべき全ての符（ルールブレイカー）・粗悪品（レプリカ）

ランク：－

種別：対魔法

レンジ：１

最大補足：１

Ｆａｔｅ劇中にて使用された宝具・・・・・・のパチモン。

こちらはこの世界の魔法完全無効化能力を付与して造っただけの物なので、概念的には全く効果を発揮しないのでランク外。

刀身に触れれば、某薄幸少年の右手に宿っている力的な感じで効果を発動し続ける代物。

弱点もほぼ同じで、空間的な物は防げません。

持続型の結界等はきちんと起点を狙って突き立てましょう。

常に発動状態なので、鞘を造って仕舞ってあります。

仮契約のアーティファクト

特性　希望

方位　東

色調　紫、黒、白の三色

星辰性　流星

数字　１２４８

至りし異端者

聖譚曲（オラトリオ）

契約者：ナギ・スプリングフィールド
種別：空間・催眠系
対象：任意範囲内全て
範囲：所持者の視界が届く場所まで
形状：無し

効果
1、取り込まれた者全てが、一切のダメージを受けつけない殺傷不可能領域。
2、取り込まれた全ての人間の記憶を元に、所持者が設定した空間を展開可能。

所持者によっては範囲の部分が欠陥になりうるアーティファクトだった。
朱然さんは基本的に、“相手のトラウマ”という設定を使っている。

朱然さんが検証したところ、1の効果は取り込んだ相手に攻撃が当たった瞬間、即座に空間外へとその攻撃を分散し、攻撃を無力化させている。
つまり、攻撃力如何によっては力技で脱出可能。
もっとも空間なので、膨大な力を瞬間的に与えなくては脱出は不可能。
2の効果は、取り込んだ人間の記憶を元にした空間を展開するという性質なので、朱然さんが現在設定している相手のトラウマというものだと、相手のトラウマである場所、物、人、等のモノが展開される。
つまり、エヴァに対して使えば、ネギ&ニンニクのフルコース地獄。
ネギに対して使えば、6年前の故郷と悪魔の群れが現れる。

尚、この空間に現れるモノは全て記憶から抽出された幻であるが、物ならば質感、魔法具ならば魔力量の有無、人物に至っては体術まで本物そっくりになる。
人物は朱然さん自身が成る事も出来る。

納めし四対の石棺（カノープス・サルコファガス）
契約者：エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
種別：特殊強化系
対象：所持者のみ
範囲：所持者のみ
形状：背中に8つの棺が2本の鎖で繋がれ、滞空している。
　棺自体の耐久力はかなりの物。

効果
その棺の内に収めた魔法具の特性を、自らの肉体から直接その特性を発する事が出来る。
宝具である八卦八武装（せんてんはっけ）を納めればその効力を直接、タイムラグ無しに使う事が出来る。

使用制限時間は１０分間で、使用限界になると１０分間リロードを待たなければ、使用不可能が解けないというデメリットがある。
１つの棺に魔法具を収める毎に、更に時間が1分減っていく。
８個いっぺんに使うと2分しか使えない。

ネギま！時点のステータス表（後書き）

今の朱然さんはどんな感じなのか？という感想があったので、何となく今更投稿します。

第３７翼　境界の怪物、忘れたくない紫の麗人（前書き）

今回は文が多かったので、変な部分があるかもしれません。

第３７翼　境界の怪物、忘れたくない紫の麗人

テストが終わってから別荘を出て、茶々丸と歩いている時だった。

「水仙さん、アレを」

茶々丸が指を指す方に目を向けると、杖に夕映とのどかを乗せているネギの姿だった。

飛ぶ為の杖や箒には認識阻害の魔法をかけるのが原則になっているが、魔法杖程度の認識阻害魔法では俺の魔眼は誤魔化せないし、茶々丸の特別製カメラアイも誤魔化せない。

「あの方角からして図書館島か？」

「西の長から何かの地図を貰い、彼女達に渡した様ですが・・・・・・」

ああ、そう言えばドラゴンと地下で御対面ってイベントがあった気がするな・・・・・・。

「少し心当たりがある。　茶々丸手伝ってくれないか？」

「わかりました」

そうして、俺達はその場から居なくなった。

それからネギ達を監視していた。
ネギ達は裏口の一つから螺旋階段を下りて行くのが見て取れる。

「何所へ行くのでしょうか？」

「図書館島で行く場所って言うんなら、地下だろうね」

ネギが蜘蛛の巣に絡まったり、インディトラップに引っかかったりしながら扉へ辿りついた。
その扉は木の根に埋もれ、よく見なければ開くとは思えないだろう。
だがそこはアルの隠れ家がある道へ通じる扉だ。

開けさせる訳にはいかないし、何よりそこには――――――

――――――Ｇｒｒｒｒｒｒ

響くのは獣の唸り。
響くのは巨体の動く音。
響くのは力強い羽ばたき。

「ドラゴン、ですか・・・・・・」

「魔法世界でも竜はそれなりに珍しいんだけどなぁ・・・・・・絶対、アルの趣味だな・・・・・・さて、そろそろ助けにいくかね」

そう言った所で、ドラゴンは侵入者を潰すべく足を踏み出した。

「夕映さん！　のどかさん！」

ネギでは間に合わない。

俺と茶々丸は同時に動き出し、俺は夕映を、茶々丸はのどかを抱えて空中へと滞空する。

「う、浮いてるです・・・・・・貴方は確か朱然さん、でしたか？助けて下さってありがとうございます」

「お礼なんてどうでも良い。　何でこんなとこに態々来るのかねぇ・・・・・後で全員説教だな」

「う、それはご勘弁願いたいのですが・・・・・・」

「のどかさん、夕映さん大丈夫ですか？！」

夕映と話していると箒に跨ったネギが俺と茶々丸の間に飛んでくる。

「二人に怪我は無い。　だが、こんな危険な場所に何の力も持たない一般人を連れて来るんじゃない。

ネギ、最近見直したがお前、俺が前に言った事を忘れてないだろうな？　とッ！！」

俺は話を続けようとした所で、ドラゴンが炎のブレスを吐いてきた。

それと同時に、眼下のドラゴンが羽ばたき始める。

「チッ！　帰ったら、お前の修行をしてやる。　死んだ方がマシだと思う様な地獄のフルコースだ。
お前は茶々丸と一緒に外へ出ろ。　コイツの足止めは俺がしといてやる」

「で、でもドラゴンですよ?!　一人じゃ?!」

ネギが俺の身を案じてくるが、余計な御世話だ。
寧ろ癇に障る。
一々仕事増やしやがって。

「ハッキリと言うぞガキ。　お前らは邪魔だと言ってるんだ、とっとと失せろ！」

今までに無いくらいにハッキリと、それでいて粗野な本気の怒声をネギ達に叩き付けた。

「「「!!」」」

その声にネギ達が身を竦ませる。

「驚いてる暇があるんなら此処から離れるなりしろ。　茶々丸、この馬鹿共を地上まで先導してくれ」

「了解です」

そう言って、茶々丸はのどかを抱えたままブースターで飛び去り、ネギも夕映を乗せ離れて行った。

――――――Ｇａａａａａ！！

「ふん、今はすこぶる機嫌が悪い・・・・・・お前で憂さ晴らしさせてもらうぞッ！！　半龍化！！」

その言葉の後、ドラゴンから再度、放たれたブレスに包まれた。
高熱に包まれながらも俺は死んではいなかった。
何故なら赤い龍翼が服の背中を突き破り、尾？骨が伸びる感覚と共に尻尾が生え、頭に２本の角が捻じれ徐々に頭部から伸びたからだ。
龍族・・・・・取り込んでしまった子供の一人、ファヴニルの赤龍としての火耐性のお陰で、俺は丸焼きにならずに済むのだ。

――――――ガァァァァッ！！

俺は力の限り吠え、その咆哮によって炎のブレスが散らされた。

対峙するドラゴンは俺を喰らうべく、その顎をこちらに向け、飛び込んでくる。
俺は気を右手に凝縮し、そのドラゴンの角の間を狙い、思いっきり拳骨を落とし、二重の極み的な一撃を叩き込んだ。
瞬間、ドラゴンは気絶。
そのまま大地に墜ちて行った。
破砕できなかったのは下級でも竜種故だろう。

やれやれ、歯ごたえの無い竜種だな・・・・・・ま、俺が異常なだけだが。

半龍化を解き、炎で焼け焦げ、ボロボロの服とも呼べない物の代

わりに異空倉庫から新たな服を取り出して着替えた後、震えているであろうネギ達に説教をつけるべく、俺は地上を目指した。

「で？」

「で、と言われても・・・・・・その・・・・・・」

ネギに凄むとネギは言い淀む。

「ネ、ネギ先生を責めないでくださいー」

「そうです。　私達が無理に付いて行ったのです」

のどかと夕映がネギを庇う様に前に出る。

「・・・・・ネギ、お前・・・・・・確か詠春から何か貰ってたな「ッ」知らないとでも思ったか？

どうせナギの手掛かりとか言われて貰ったそれをコイツらに見せて興味を持ったコイツらが付いてきたって所か。

全く・・・・・あれだけ一般人を巻き込むなと言ったのに、一週間経ってこれとは先が思いやられるな。

もしさっき、俺と茶々丸がお前等に気付かなかったら龍に喰われて行方不明だぞ、わかってんのか？」

「「「すみませんでした・・・・・」」」

元凶三人は頭を下げた。

「・・・・・別に俺はお前さん等が喰われようと、惨い死に方をしようと、自分から首を突っ込んで死ぬんならどうだっていいんだよ俺は。
でもこうやって説教してんのは、いきなり何も知らない子供が死ぬのがあまりにも理不尽だと思ったからだ」

「あの・・・・・つまりは心配で助けに来たという事で良いのでしょうか？」

夕映が言う。

断じて今の言葉はツンデレではないぞ。

「反省してないのかお前？」

俺の視線はブリザードを放った。

「いえ、すみません。　しかし、我々は知ってしまったのです。魔法の世界を」

あんな目にあったのに、未だに関わろうとする者の目をする夕映。

「反省する気が無いのか綾瀬夕映。　知ったからどうした。　偶々巻き込まれて、物語の主人公気取りか？」

対する俺はその意志を叩き潰す様な視線を向ける。
それに伴い、険悪な空気が流れ始めた。

「・・・・・・ッ」

喉が鳴る音が聞こえる。

「次に自分から向かうのならば、もう助けない。　それは自己責任だ。

覚えておけ・・・・・・非日常を知るのも、力を使うのも別にそれは良い。

だが非日常の世界は綺麗なものじゃない。　もっと現実的だ。

そこには腹の黒い人間も居る、さっきみたいな竜種も居る。

何より死が身近にある。　その死ですら、この日本では考えられない様な凄惨な死に方の方が多いんだ。

それを承知で首を突っ込むんなら勝手にしてろ、どうせお前等の人生だ」

俺は今までの鬱憤を晴らすかの如く、静かに、しかし辛辣な言葉を浴びせていく。

だが、そんな俺に反論する者がいた。

「先程から聞いていれば何様ですか貴方は」

「ゆえー?!」「夕映さん?!」「譲ちゃん?!」

「話を聞いていなかったのかお前?」

イライラのボルテージが上がっていき、眉間に皺が寄るのがわかる。

一体何度、説明を繰り返さねばならないのだろうか?

それが俺を苛立たせる。

「聞いていましたよ。　ですが、いきなり出てきてアレをするなコレをするなと言われても納得できません。
何をそんなに苛立っているのかもわからないでもありませんが、ダメな理由をもっと詳しく教えてもらわなければ。
もっとも、貴方にとって我々は本来どうでも良いと思っている様ですが、それでも私達に関わらなければならない何かがある。
そんな感じがするです・・・・・違いますか？」

綾瀬夕映、哲学者を祖父に持っているだけあって、頭のキレはゆり並みか？

興味の無い事に対して意欲が欠けている所為で、勉強の成績は悪いが、頭は悪くない。

脅しをかけておくか・・・・・それでも、関わる気がするがしないよりはマシだろう・・・・・。

「・・・・・だからどうした？」

「それが何かは知りません。　私達は貴方とは違うのですから」

言ってくれる・・・・・。

「その通りだ・・・・・俺は守りたい者がいる。
その守りたい者が、立場的にお前達の所為で壊れてしまうかもしれない、そんな瀬戸際の位置に移動してしまう可能性がある。
だから・・・・・俺はそうなるか、そうならないかを監視していた。
繰り返し言うが、お前らが勝手に死ぬならそれはそれでも構わな

い。　心配する手間が省けるからな。
俺の守るべき者を壊す事になった時、俺はお前達の敵となる。
そこには築かれつつある友好はあっても、躊躇する事はない」

俺の怒りで上がった熱を強引に冷却させる。

これ以上はダメだ。
年長者としてキレてはいけない。
もう手遅れな感じだが、兎に角イカンぞー、頭を冷やせー、1，3，5，7，11・・・・・うむ、落ち着いてきた。
ネギにも言っておこう。

「そ、それは一体どういうことですか?!」

ネギが驚く。

「良い機会だ。　はっきりと言っておく。　俺はお前の父親の友人だから手を貸していた訳じゃない。
ホントなら全部投げ出して、引き籠っていたい所だったが、居間でＴＶを見ているみたいに楽観的に笑ってる程、他人事にもなれない近さなんだ。
だから俺は俺の目的が有ったからお前と戦い、お前のトラウマの治療に手を貸し、修学旅行でも手を貸してやったに過ぎない。
断じて善意で助けた訳じゃない」

これ以上ない程、ハッキリと言ってやりました。
厳しかろうが、何だろうが、俺の優先順位は子供達＆エヴァ＆大戦時の戦友達が最優先だ。
減る事は余程の事が無いと思うが、無いとは言い切れないし。
逆に増やす事は容易く出来ると思う。

だが今現在、ネギ達は俺の最優先には入っていないのだ。
なにせ今までの行動がマイナスだし。
それでも最近はマシになって、プラスマイナス0くらいにはなって来ているのだが、今回の事でまた下がった。

「・・・・・なら、バレたら記憶を消すか、口封じしなくてはいけないといったのは？」

「そんなもの、こちらの世界の一般常識だからな・・・・・・本来、知らない方が可笑しいだろ。
それを言うなら、何故そんな基本的な事を出来ないお前が学校を首席で卒業できたんだろうな？
今のお前なら言わなくともわかるだろ？」

「僕が父さんの子供だから・・・・・・ですか・・・・・・」

ネギが項垂れる。

魔法学校の卒業生もネギを含め、５人しか居ないのもあったのだろうが、な。

「そういうことさ。　この学園も大半はそんな目でお前を見ている。
ネギ・スプリングフィールドという個人ではなく、ナギ・スプリングフィールドの息子としてな。
学園長にも言ってあるが、俺は敵と認識した物ならば、親しい者ならなるべく助けるが、どうでも良い他人なら笑って殺せる。
だからと言って気分が良い訳じゃないけど。　俺の問題を単純且つ、一瞬で解決させる方法が一つある。
それはネギ・スプリングフィールドを殺してしまえば打破される。
それをしないのはお前が未だ子供だからだ。

どんなに大人びていても、どんなに強くても、どんなに頭が良くても、どんなに強固な意志をもっても。
クラスの連中もまた然りだ。　俺は嫌いな奴でも子供ならば、一先ずは警告をする。
それを無視し、俺の敵になって向かってくるのであれば容赦はしない」

「ッ？！」

ネギは言わずもがな、夕映、のどか、カモは俺の薄ら寒ささえ感じる視線を受け震えている。

「大切な者を守る為なら、俺はどんなに残酷にだってなれる。
まあ、偉そうに言ったが、俺が全て正しいとも言い切れないし、間違っている事もあるだろう。
自分の価値観で俺の話が正しいのか、間違っているかを判断しろ。
間違っているのであれば別に俺の話を聞かなくても良い。
俺もお前等もヒトで、間違いを犯す。　幾ら強大な力を持っても俺は完璧超人ではない。
いや、真に完成している人間なんて人間じゃないか・・・・・。
神話でも人間は知恵の実を食べて不完全となったとも書かれているしな。
言うなれば・・・・・そう、より不完全な人間が俺だ。　人間は完全には成れないし、一生不完全だ。
しかも死ぬ事は言うまでも無く、歪むし、狂うし、壊れるしでとても出来が良いとは言えないがね。
まあ、そんな人間の話なんてどうでもいい。　解釈は千差万別だ。
それよりも今はコイツ等の話だったな」

俺は震えるネギから夕映に視線を移す。

「このまま踏み止まるのならば・・・・・綾瀬夕映、宮崎のどかは俺の敵とはならない可能性が極めて高い。
ネギ・スプリングフィールドも、この旧世界で目と耳を塞ぎ、この能天気な学園で教師としての職務だけを真っ当にしているだけならば、敵対する可能性は低い。
そうしていれば、俺はお前達の手助けをする位なら協力もするし、乞われた事をなるべくは教えてやろう」

魔法に関わるという事は、俺の行動如何によっては敵となりうる可能性が無くは無い。
だが逆に、関わらなければ戦う理由は無い。

「？　それはどういう・・・・・？」

「だが、お前等が興味本位でそれを知るのであれば、それに留まらず非日常の世界へと興味を持つだろう。
以前、俺が問題としていたのはネギ、お前の様な無自覚な者に巻き込まれる事だ。
神楽坂明日菜の様にな」

「明日菜さん、ですか？」

「・・・・・？」

何の事を言っているのか、わかっていない二人はそれぞれ反応する。
俺はそれを無視して話を進める。
言い聞かせるように。

「巻き込まれた者はいつか後悔する時が来るだろう。
世界でもトップクラスの治安を誇るこの日本で、お前の言う刺激のある日常を求める気持ちは分からなくは無い。
何の不自由も無く生きられる事の大切さが、当然過ぎて分からないのも分からないでもない。
俺もかつてはそうだった。　決して幸福な生活をしていた訳じゃないがな」

俺は自嘲気味に笑う。

「だが、それを知って尚、戦う事を選んでいる俺の経験から言わせてもらう。
俺は今でこそ後悔はしていないし、失った事、悲しんだ事は数多くあった。
一度戦う事を選択し、身に余る力を手にすればする程、戦わないという選択肢は限りなくゼロ近づいて行く。
後悔は体験してからでは遅い・・・・・・それだけは覚えておけ。
それでも尚、関わる事を望むのならば、意志、信念、覚悟、どれでも良いから、それを持って事にあたれ」

「覚悟、ですか・・・・・・？」

夕映は息を呑み、緊迫した空気の中で問う。

「そうだ。　なんでもいい・・・・・・一つ折れない何かを決めていれば、ある程度の問題は乗り越えられる。
少なくとも俺はそうしてきた。　自分が大切に思える者達を守り、救い、助ける覚悟。
それとは逆に、救う為に殺す覚悟を持ち、後悔しない事だ」

俺は宣言する。
唯、真っ直ぐに。
そして、ネギ達に俺は背を向ける。

「最後に――――――
頼むから・・・・・・俺の前に立ちはだかってくれるな。俺と同じになるな。
俺に余計な殺しをさせないでくれ」

俺は背中越しで、呆然とするネギ達にそう言い残し、図書館島を後にした。

こいつ等は知らないのだ、覗き込もうとしている奈落がどんなモノなのかを。
こいつ等が追っていたものは、白兎ではなく怪物なのだと。
だから少しだけ教えた。
こいつ等が今見ているのは、日常と非日常の境界線に過ぎない事だと。

今見ている場所は不思議の国（ワンダーランド）への入口ではない。
その境界を越えてからでなければ、中がどうなっているのか見えないし、一度境界を越えればもう戻っては来られない。
後は真っ逆さまに落ちるだけだ。
不思議の国のアリスの様に。

物語を知っているこいつ等は、胸を躍らせて不思議の国（ワンダーランド）があると

思い込み、期待に胸を膨らませる。
だが、墜ちて行けども不思議の国（ワンダーランド）には辿りつかない。
可笑しいと思い直して戻ろうとしても、もう墜ちることしかできないのだ。
そして、不思議の国（ならくのそこ）を探しても、終わりは結局、見つからない。

当然だ。

ヒトは空を飛べないし、その穴には底なんてない。
唯、底には深い闇があって、潜れば潜る程に濃く深い闇になっていくだけだ。
しかも上を見上げれば一筋の光（もとのにちじょう）があるのだ。
まるで見せつけるかのように。

越えてしまったが故に手を伸ばしても届きはしない。
そこで絶望し、諦めかけるのだ。
だが、墜ちて行くにつれて、背中に闇で出来た翼が生えてくる。
やっと帰れると懸命に飛んだとしても、境界を越える事は出来ない。

別の童話にあっただろう？

太陽に近づきすぎたイカロスは蝋の翼が溶けて、墜ちて行くからだ。
苦労して身につけ、身につけられてしまったその力は、その実、境界を越える事が出来ないのだ。
捨てようと思えば捨てられるが、そうすればまた墜ち続ける事になる。

人は、手に入れられない希望だとしても絶望を体験すれば偽りの

希望に縋る。
希望から絶望へ、絶望から希望へと。
何度も何度も繰り返す。
無駄だとわかっていても。
それでも希望を求め、墜ちては飛ぶ事を繰り返す。

その中でも、諦めて死を選ばず、あがき続ける者がいる。
更にその中の一握りは、繰り返した力がやがて本物の翼となり、境界を越える事が出来る様になる。
しかし、境界を越える事が出来るようになった者は、戻れない怪物へと姿が変わっているのだ。
そうなれば日常で暮らす事など出来ず、闇へと帰らざるを得えない。
帰らなければ、いずれは英雄が怪物を殺しに来るのだ。

巻き込まれる者は、この穴に追い込まれた者や入らざるを得なくなってしまって入るのだ。
自分から進んで墜ちるのならば、幾分かは闇に耐えられるだろう。
ある世界の魔術師達の様に。
だが、望まなかった者は闇には耐えられない。
自分が望んだ事ではないのだから。

俺も最初はそうだった。
しかも人間の醜い面を見せつけられてから落とされて、元から素質のあった俺は、始めから深い闇に潜っていた。

もう、失いたくはないから。

十分だと思えるくらいに力を手に入れていた俺は巻き込まれる者が、その奈落に入らない様に境界で、一筋の光（もとのにちじょう）から興味本位で入れ

られた子供や知り合いの手を押し返すのだ。
これ以上、自分と同じ者を増やしたくないと思ったし、これ以上、好きな人を自分と同じ場所へ落としたくはないから。
そして、既に闇でもがく者には、上手く闇で生きる事を教えるのだ。
壊れてしまわぬように。
少しでも楽になれる様に。

だって俺は、今までの誰よりもほんの少し深く闇を知り、その度に他の者よりも少しだけ強い力を手に入れたのだから。

身体は怪物になってしまったかもしれないけれど。

そこまでして心が人を襲う様な怪物にならないでいられるのは、境界から日常を覗いて、人間だった事を思い出しているからだろう。

覗く事をやめてしまえば、投げ出してしまえば、考える事も無いかもしれない。
でも今更だ。

目を逸らすには苦しむ人を見過ぎたし、何より殺し過ぎた。

何より、俺を救ってくれた人も居たのに、心まで怪物になれる筈が無いだろう？

しかし、結局綺麗事を言っても、俺も巻き込む者だ。

救う為に巻き込み、守る為に巻き込む。

此処までなら多分、ネギと俺はそんなには変わらない。

だが決定的な違いがある。

自ら問題を起こして巻き込むのなら、それ相応の対応をするか否かだ。

ネギはその対応をするどころか、手段も持っていないし、危険だという事を自覚させるだけのものを知っていて伝えていない。

あの6年前の事でも話してしまえばいい。

それが嫌ならば、脅してでも止めなくてはならない。

それがどんなに危険なのか、残酷なのか、死ぬ可能性もある事、それを教えなければならない。

例え自分が巻き込んだのでなくともそれをしなくてはならないだろう。

それは巻き込む者、巻き込んでしまった者の最低限の義務だと思っている。

でなければ、あまりにも理不尽じゃないか。

選択もしていないのに命のやり取りに巻き込まれてしまうのは。

だから俺は、巻き込まれる者を救うし、無自覚に巻き込む者を許さない。

守るべき者を害する者と同じ位に許せないんだ・・・・・。

第３７翼　境界の怪物、忘れたくない紫の麗人（後書き）

今回は朱然さんが、何故ネギに対して過度に攻撃的なのかを書けたらと思いながら書きました。
原作を知っているからだけで嫌っているか？という事だけではあんまりかな～と。
しかも後半が文だけになってしまいましたが＾＾；

漫画小説は問いませんけど、男性の書く女性は可愛らしく、女性の書く男性は格好良いですよね～。
イマイチ女性の思考がわからなくて、女キャラの心境などがこれで良いのだろうか？と悩みます・・・・・。

魔法、魔法世界↓非日常、非日常の世界、こちらの世界、力と夕映、のどかが居る手前、魔法関連の言葉を遠回しな表現に修正しました。

第３８翼　スタイル、器用貧乏な紫の麗人

「この・・・・・・、アホ――――――ッ！！」

「はうっ？！　風楯（デフレクシオー）・・・・・・・はう――――――っ！？」

エヴァの家に着くと、ネギが明日菜にハリセンで吹っ飛ばされていた。

何してるんだか・・・・・・。

まあ、全面的にネギが悪いんだろうが。

「遅かったな水仙」

「ああ、色々とね」

エヴァは「そうか」と短く返し、ネギ、木乃香、刹那をログハウス内へと促した。

何故、遅かったのかと言うと、使い捨てにして壊してしまった大神宣言（グングニル）をまた最初から造っているのだ。

前回ので、問題点はわかったから、本格的に使い捨てないタイプを造るつもりだ。

唯、衛宮士郎の様に創造の理念を鑑定し、基本となる骨子を想定し、構成された材質を複製し、製作に及ぶ技術を模倣し、成長に至る経験に共感し、蓄積された年月を再現するというプロセスを踏襲して作ってはいるが、そもそもこれは衛宮士郎のやり方だ。

なので、俺の場合はそれに根源から得た記録を元に更なる工程を追加している。

衛宮士郎の場合、固有結界から漏れ出たモノを投影と言う形で、明確にイメージをして発現させるのだが、俺には当然、無限の剣製など使えない。

そこで根源から一方的に脳がパンクするまで流し込まれた古今東西あらゆる記録を検索。

そこから必要な情報の整理、詳しく言うなら欠落してしまった記録を他の記録からの考察による情報から穴を埋め、修繕し、その手順を踏んで得た設計図を元に必要な素材を集め、その通りに造るのである。

それは置いておくとして、ログハウス内へ入ると、エヴァが眼鏡をかけて、茶々丸が黒板を壁に設置していた。

「座学かエヴァ？」

「いや、連絡事項とこれからの方向性を聴くだけだ「マスター準備できました」うむ、ご苦労」

エヴァが設置されたばかりの黒板にチョークで文字を書いていく。

1、精神力の強化

2、術の効率化

と書きながら、話を進めて行くのだが――――――

「人の話を聞け貴様ら――――――ッ！？」

全く話を聞いていない事にエヴァがキレた。

「あうう～、アスナさんとケンカしちゃった・・・・・・どうしよう・・・・・・」

「まーまー、ネギ君」

イジけているネギを慰める木乃香。

「オイ？　お前は弟子入りさせてくれと頼んで来た、だから私は教えているんだぞ？　やる気が無いのならもう来なくていいぞ。　何時までもイジけているがいい。　そんなのに教えても身にならんし、私もそこまで暇ではない」

「他にやる事があるのですかマスター？」

「ええい！　いらんツッコミをするなッ！　巻くぞ？！」

「で、ネギは何がどうなってそうなったんだ？」

エヴァと茶々丸のやり取りをスルーしながら、俺は刹那に訊く。

「それが――――」

何でも、俺が来る前まで外でエヴァがネギの魔力を調るとかで全力で魔法を撃たせた後、夕映とのどかから、図書館島地下での事を聞いた明日菜がネギを問い詰め、ネギが今更関係ないと言い、口論、冒頭のハリセンの一撃に至ったらしい。

・・・・・俺があんな話をしたからだろうか？

本編でもそんなやり取りがされた事を忘れている為に、背中に冷や汗が伝った。

「大体はわかった。　ありがとう刹那」

「いいえ」

俺は刹那に礼を言った。

「水仙。　連絡事項だが、私よりもお前が言った方が良くないか？」

「ん？　そう？　じゃあ木乃香へ伝言。　詠春からだよ。

“私は木乃香が普通の女の子として幸せに暮らしてほしいと思い、魔法の事を教えず、義父さんの麻帆良へと送り出しました。

今回の修学旅行でわかっているかと思いますが、木乃香の尋常ではない程の魔力量を利用しようという者達が居たからです。

しかし、今回の事で魔法を知ってしまった。

義父さんからは知らせた方がいいとも言われていたのですが、私は一人の親としてそれを良しとはしませんでした。

ですが、今回の事で私は決めました。　木乃香、魔法に関わるかどうかは貴女が選びなさい。

木乃香ももう自分で物事を決める事が出来ると信じています。”

だそうだよ」

これだけ聞けば良い父親なのだが、その後「出来ればすぐにでもこっちの女子校に転校して一緒に暮らそう！　そうすれば俺も安心だから！！　うん、それがいい！！」とか言い出したが、子煩悩で、子離れできなくても、戦友は戦友なので名誉の為に教えないでおく事にした。

「父様が・・・・・・」

少し涙ぐむ木乃香。

「木乃香、お前には魔法世界でも屈指の魔力量がある。　努力次第

では偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）になる事もできるだろう。
もっとも、そんなものになった所で、得られるのは感謝と自己満足と魔法世界の堅物共からの賛辞くらいのものだろうがな」

「うーん、どうなんやろか？　でも困ってる人がおるんなら助けたい思うし・・・・・・」

木乃香は考え込んだ。

「次は坊やだ。　これからの修行内容を決める為に選んでもらうぞ」

「何を選ぶんでしょうか？」

恐る恐るネギが訊く。

「お前の戦闘スタイルだ。　小利口過ぎるお前なら基本的な魔法使いが丁度いいと思うがな」

「他にはどんなスタイルがあるんでしょうか？
それと、エヴァンジェリンさんとシュゼンさん、父さんのスタイルも教えて欲しいんですけど」

「ふむ、サウザントマスターは聞かれるとは思っていたが、私と水仙のスタイルもか・・・・・・。
まあいい、教えてやろう。　もっとも強くなればなる程、あまり関係が無くなるのだがな。
まず、私は基本的な魔法使いタイプだ。　基本的な魔法使いは接近戦を従者に任せ、砲台になる事だ。
兎に角、このタイプは火力が無いと話にならんし、前衛との連携も考えなくてはならん。

一人で戦う時は、適度な距離を保つ事も必要だ。　私の場合は人形を操って前衛をさせていたがな。
次に多いのが魔法剣士タイプ・・・・・・サウザントマスターだが、奴のスタイルを敢えて当て嵌めるならコレだろう。
それも従者が不必要な程に強力な、だ。
こちらは己の肉体の強化、接近戦の技能は元より、魔法の発動速度と威力の両立が課題となり、どうやって相手の懐に潜り込むかが命題になる」

「やっぱり・・・・・・」

ネギは考えをまとめながら頷く。

「？　シュゼンさんのスタイルは魔法剣士でしょうか・・・・・・？」

「ああ、コイツのスタイルは・・・・・・私にもよくわからん。
本人も居るんだ、本人に聞けばいいだろ。　で？」

突然、ぞんざいに俺に振られた。
ちょっと悲しくなった。

「で？って言われても、一応、魔法剣士スタイルだな。　元々俺は武術を極めてから魔法使いになったクチだし」

「じゃ、じゃあ、あの召喚して戦わせるのは何なんですか？
発動させる時に使った呪文は訊いた事ない言語でしたし、あの修学旅行であの大きなオニにトドメを刺したのもシュゼンさんなんですよね？！」

俺に説教されたにも拘らず、物怖じせずに聞いてくる。

「あー、じゃあまずは召喚の方から答えるが、アレは疑似召喚獣だ」

「召喚獣、ですか？」

「ああ、アレは簡単だ。　日本にあるＲＰＧのテレビゲームでよくある召喚獣を疑似的に造って出しただけだ。

黒い悪魔みたいなのがディアボロス、氷の女神みたいなのがシヴァという名を付けている。

他にも開発中だ。　アレはもう大方の術式はわかっているんだろう？　実際に不出来な造形の雷の騎士にして使ってるんだからな」

「あ、はい！　アレは精霊召喚の術式を改良してるんですよね？」

「そういう事。　俺自身が本気で戦えばそんなの出さなくてもどうとでもなるから、お遊びみたいなもんだ。

この呪文詠唱で使う言語はヒュムノス語と言って、世界で俺しか知らない言語だな。

俺が造った言語って訳でもないぞ？　実際は歌に乗せて使う言葉なんだがな。　この言語については研究中だ。

次にリョウメンスクナを倒したのは正確には俺の力じゃなくて、俺の造ったアーティファクトの力だ。

これは製造法、効果やら何やらを説明するのが面倒だから今は省く。　言った所ですぐ理解できるとも思えんし。

俺以外は造る事も使う事も出来ない。　最初に俺は魔法剣士と言ったが、最近はその中でも物量を武器に使うスタイルだな。

使えるモノは何でも使う。　必要な時に必要な事を必要な分だけ使って対処する。　多くの手段で圧倒するスタイル。

故に俺のスタイルを覚えるのなら、切り札に次ぐ切り札を、隠し

玉に更なる隠し玉を、数多の手段を用意して使いこなし、どんな相手にも対等以上に戦う様に努力する。
それが俺の真似をする為の課題だ。　生半可な数では真似できないし、真似できる者でもないと思うがな。
それが出来れば一人でも、多人数でも相手取る事が出来るだろう」

「そ、そうですか・・・・・・」

ネギが引き攣った表情をした。

俺の戦い方を想像して、どれだけ面倒なのかを想像したのかもしれぬ。

「で、坊やはどんなスタイルにするんだ？」

「僕は・・・・・・」

ネギは言い淀んだ。

「ふむ・・・・・当分は基礎的なトレーニングをする。　ゆっくりと決めるがいいさ。
水仙、木乃香、お前達には少し話がある、付いて来い」

エヴァはそう言って一階に下りて行った。

果たして、ネギはどんなスタイルにするのやら？

そんな事を思いながら俺はエヴァに付いて行った。

少ししてログハウスの玄関の扉を開けた所で、タカミチをネギが居て、声をかけようとしたら、仮契約の召喚をネギが発動。
全裸の明日菜がクマのバックプリントパンツとバスタオルを持った状態で現れ、ネギに拳骨を喰らわした。
相変わらず、懲りない奴である。
俺も普通に見たし、殴らせそうになったが、避けながら「今更だろ、お前の裸とか。　服着なくていいのか？　タカミチが見てるぞ？」と言ったら、悲鳴を上げて走り去った。
「今更って言ったけど、そんなに見ているのかい？」とタカミチが聞いて来たので、肯定しておいた。

手を出すつもりはないし、その時は女形態だから問題ないだろ・・・・多分。

第３８翼　スタイル、器用貧乏な紫の麗人（後書き）

テンプレ回でしたが、ネギ坊主は一体どのような戦闘スタイルを選ぶのか?!
という問題はヘルマン襲撃終わりに持ち越します。

ヘルマン襲撃で、ちょっと一波乱入れる予定があります。
学園祭編は今はあまりアイディアが無いので保留中、ネギ、超両方と敵対するかも?

その後の魔法世界編は大雑把にネギ共闘&ネギ敵対の２パターンを考察中です。
なんかもうヒロインはエヴァ一本に絞った方がいいかもと思い、ラストは相愛&片思い&ダメの３パターンを考えてます。
そんなん考えてねぇでさっさと書けと言われても仕方ありませんが;

原作の動向が読めなくてホント戦々恐々しております。
氷のフェイ子にちょっと作者は萌えた反面、量産型になった事によってあの炎、氷、風の三人はそれぞれ打倒されそうな気がするでござる・・・・・。
一体どうなるんだろうか・・・・・・怖い（（（（；゜Д゜））））
ガクガクブルブル

最近、気に入っていた漫画が連載終了してしまいました。
賛辞を送ると共に、ああ・・・・・・もっと続き読みたかった・・・・・と思ってしまいます。
うぅ・・・・・・寂しいよぅ・・・・・・。

これからもチマチマ頑張りますので、これからもよろしくお願いします。

第３９翼　訪問者、邪魔し邪魔される紫の麗人

「なんでお前が此処に居る？」

「エヴァンジェリンと茶々丸と、私の新しいルームメイトの月詠という娘が私を狙っているからよ」

月詠をガス抜きさせる為に別荘で戦って別荘の中で一日が終わり、たまたまエヴァのログハウスでドラマを見ていた時、男は耳かきをすると喜ぶという番組を見たエヴァと月詠が耳かきを持って襲いかかってきたのだ。

不穏な気配を逸早く察知した俺は逃走し、部屋の鍵を持っている月詠が居る為に自室に帰る訳にもいかず、此処へと逃げ込んだのだった。

普通の人だったらヤッフゥ！イベントだぜッ！？とか思えるのだろうが・・・・・二人の耳かき持ってる手が明らかに震えてたもん！

鼓膜が破れるって！

アッ――――――！ってなるよ絶対！

「理由になってねぇよ！　何でアタシの部屋に隠れてんのかを聞きたいんだっつーのッ！！」

「いいじゃない、貴女がコスプレの衣装をウチの店に頼んで、クラスメイトだから割引してあげているんだから。

これくらい協力して？」

可愛く首を傾げてみる。

この仕草は、女バージョンの時によくやる様になったかも。
中身が中身だけに男の急所（ツボ）を知り尽くしているからなぁ・・・・・・。
これやると大抵の男はスケベだから何かしらお願いを聞いてくれるし便利なのよー。
って、ナチュラルに女の思考になって来てないか俺・・・・・・？

「く・・・・・ッ！？　性格はともかく、無駄に可愛い所が余計にムカツクわッ！！
私がどれだけ苦労して・・・・・・ッ！！」

千雨が眼鏡を抑えながらぷるぷるしている。

「！　そうだ・・・・・ルノー、隠れるんなら条件がある。
飲まなければ今すぐお前を探している奴らに連絡を入れて此処から追い出す」

「あら、何かしら？　それと匿ってもらっているのだから名前で呼んでも良いわよ？」

俺はその提案が何かを考えながら言う。

「お前はアタシのネットアイドル活動を知っている唯一の人物だ。
だが最近、ブログで友達が居ないかもしれないとか言い出した反ちぅの馬鹿がいる」

「わかったわ・・・・・何となく何をさせようとしているのか」

「察しが良くて助かるぜ。　だがお前はこういうのは好きじゃねー

だろ？　だから、さっさとこの部屋から出ていｋ「良いわよ別に」は？
　ちょっと待て！　お前、よく考えろよ？　ネットに写真が出回るんだぞ？　普通だったら嫌がるだろ？」

「別に？　写真を取られてネットに出回るくらいどうってことは無いわよ？」

■■■■の時はテレビに出ていた時に散々写真が出回ったし、今の容姿でスカウトはわんさか寄って来るので、今更そのくらいどうという事は無いのさ。
　というか、手っ取り早くお金を稼ぐ為にモデルの仕事を男女両バージョンで幾つか受けた事あるし。
　寧ろ、耳かきで鼓膜を突き破られる方が大問題ですよ。
　コスプレを着る位ならば別に良いとまで思えてしまっている。
　女の姿になってから、自分の身体を洗ったり、下着を着たりしている時点で、もうどうしようもない程に良くも悪くも慣れたし・・・・・ああ、言ったら鬱になってきた。
　今度から出来うる限り男でいよう・・・・・・。

「ほう・・・・・よく言ったッ、てめぇはアタシを怒らせた！
もう後戻りは出来ないからな？！
徹底的にコスさせて、このちぅ様の引き立て役にしてやるッ！！」

数十分後。

「く・・・・・・ッ！！
何故だ・・・・・・コスさせて、ちょっと化粧しただけでこのクオリティ・・・・・・フォトショで加工しているのがバカバカしくなる・・・・・・」

そこにはｏｒｚと床に突っ伏す千雨と、魔法少女？ビブリオンのもう一人の女幹部、ビブリオグラースノワールの姿が、そこにはあった。
何所か際どく改造されたレディースーツにハイヒール、眼鏡を装備した何所かの秘書の様な格好だった。
武器はもちろん鞭。

「胸が結構キツイわね」

「！！」

いや、冗談ではなくマジで胸苦しい・・・・・・。
因みにそのビブリオグラースノワールは戦場ヶ原様の様なツンドラな性格で、銀髪巨乳で眼鏡キャラらしい。
つまりルーデシアバージョンで、髪を弄って服を着替えれば正しく、そのまんまな訳だ。
もっとも胸の部分が今にもボタンを弾き飛ばしそうなくらい自己主張してるが。

「あら、どうしたのかしらそんな所に這い蹲って？」

「もうこのクラスやだ・・・・・・。　これだけは言っとくぞ？
今日これからお前とアタシは同じ秘密を共有する事になった。

絶対にバレるなよ・・・・・・・？」

バレると思うが・・・・・・・。

「ええ、わかったわ」

一応、返事はしておいた。

その後、同じくコスをした千雨とツーショット写真を撮って、静かな午後を過ごした。

もっとも、本人の意志に反してネットで凄まじい反響が巻き起こっているとは露にも予想していなかった。

後日、学校で千雨が定期的に写真を撮らせてくれ！と頼んで来たのでＯＫした。

こうして幻のネットアイドルが誕生し、少しの間、ネットで話題が話題を呼ぶ事になるのはまた別の話である。

深夜、寮の部屋に超が訪ねてきた。

何となくこんな機会がありそうな気がしたので、俺は黙って超を部屋に向かい入れ、超に茶を入れた。

「直接話すのは初めてネ“紫の麗人”サン？　ルームメイトは留守カ？」

超はそう言って話を切り出した。

いきなり斬り込んで来たな・・・・・・。

「あら、何の事かしら？」

取り敢えず惚けてみる。

「惚けなくてもいいネ。　部屋に黙て招き入れてくれたいう事ハ、全部知ていると自分で言てルと変わらないヨ」

いつもの微笑を浮かべて言う。

「・・・・・・なら本題をどうぞ。　因みに月詠なら夜の警備よ」

俺は惚けた事を棚に上げ、「そうカ、丁度いいネ」と納得した超を促した。

今更だが、月詠は気を封じられているが、それなりに戦闘はできるので、夜の警備には加わっている。

本人は、襲ってくる相手が弱過ぎて斬り応えが足らへんですわーと言っていて、事あるごとに俺に口直し的な戦いを挑んでくるので、なるべく戦わない様にあの手この手で諦めさせているのだが。

それと学校へは行っていない。

学園長が言うには、精神的、性格的に大丈夫かが判断できてから麻帆良学園中等部３－Ａに入れるとか言っていたが、どうなんだろうか？

性格的に厳しい気がするのは俺だけか？

「フム、なら単刀直入に訊くヨ。　貴方は一体何者で、どんな目的があって此処に来たのカナ？」

「何者、と訊かれても私は私としか言いようがないわ。　目的は私と私の関係者への危険要素の修正、もしくは排除かしら？　貴女も似た様な理由で此処に居るのでしょう？　火星人さん？」

超の問いに、俺も問いを混ぜて返した。

「！　私の事を知ているカ。　ますます面白いネ。　では、そこも踏まえて訊く事にするヨ。

私の知っている魔法世界の大戦を終結させた英雄の中に、朱然義封という名の英雄は存在していなイ。

私がこの時間へ介入したことによるバタフライ効果カ？とも思たガ、貴方は私よりも前に存在している事から私が起こした事ではナイと結論付けたネ。

そこで私は貴方を調べ始めタ。

１９８２年某日、魔法世界でナギ・スプリングフィールドが千の呪文の男（サウザンドマスター）、ジャック・ラカンが千の刃、青山詠春がサムライマスターと連合に称えられた時期・・・・・貴方が紫の麗人と言われた以前の足跡はほんの一年程前にいきなり現れたという以外の情報が全くと言っていい程ナイ。

何所で生まれたかモ、何所で何をしていたのかモ、何所で無数の姿と言われる力を得たのかも全部ネ」

何となく予想はしていたが、こういう風になったか・・・・・・。

俺の予想では超が俺の存在を知っていて、未来に何かしら影響を受けているかもと思っていたが・・・・・・。

もう一つの予想・・・・・俺が突然イレギュラーとして存在していた、の方が当たりだったようだ。

「それで火星人さん、私を調べて何もわからないという事がわかっていて、何をしに此処へ来たのかしら？」

「まずは貴方の存在に対する私の考察を聞いてもらう事にしようカ・・・・・。　私は貴方の事を私と同じ存在だと結論付けたヨ。どうカナ？」

超は答えを待つ生徒の様にジッと俺を見つめる。
対する俺は少し間を置いてから口を開いた。

「少し違うわね・・・・・私は貴女が世界を変えてしまったが為に苦しんだ者の内の一人よ。
貴女の所為で・・・・・私はさっきから八つ裂きにして貴女を殺したい程に憎んでいるわ」

「！！」

超の顔色が一気に蒼白になった。

「なんて・・・・・冗談よ。　残念ながら私は未来人ではないわ」

俺は口の端を吊り上げて意地悪く笑って言ってみた。
すると蒼白だった超の顔に少しづつ血の気が戻っていく。

「・・・・・驚いたネ。　冗談はさておき、一体何者なのかを教えてくれないカ？
私ばかり情報を教えるはフェアではない思うガ？」

胸を撫で下ろした超は言う。

「フェアも何も、貴女が勝手に話をしただけでしょう？　そもそも対等な位置に立っているとでも思っているのかしら？」

冗談を言った時のままの表情で続ける。

「そう言えばそうカ・・・・・・」

意気消沈しているかの様な言葉だが、顔は微笑のままだ。

「でも、私と貴女は似た様な理由で此処に居る様だから教えましょうか・・・・・・。

私は本来、この場所に居る筈の無い者よ。　そして、元観測者。

私は超鈴音が未来人である事を知っているし、学園祭で事を動かす事も知っているし、ネギ・スプリングフィールドの子孫である事も、魔法世界がこのまま行けば崩壊し、魔法世界と旧世界の全面戦争が起こりうる事も知っているわ」

「ナ？！　予想以上ネ・・・・・・計画は綿密に、しかし、極秘裏に進めていたのダガ・・・・・・」

超が難しい顔をして、警戒を始める。

「別に邪魔はしないわ。　するのなら勝手に進めればいいとも思っているの私」

もし子供達に害がなければ放置、害があるのなら排除するまでだ。

「ホントカ？」

警戒をしながらも、俺の発言が予想外だったのかキョトンとする。

「本当よ。　でも予言しておこうかしら。　貴女の計画はほぼ確実にご先祖様に妨害されるわ」

十中八九、俺が何もしなければ原作通りになるだろう。

俺が介入したらどうなるかはわからんがな。

「予言カ・・・・・・元観測者とは一体何の事か教えてくれないのカナ？」

「教えたら、貴女は何を私にもたらしてくれるのかしら？」

「・・・・・・」

超は考え始める。

俺に何を渡せばその答えを貰えるのかを考えているのだろう。

「歴史が改変可能であるならば、何をもって正しい歴史とするか」

「いきなり何ネ？」

「とあるＳＦ作家が書いた小説で掲示されている疑問よ。　世界は変わらない事を望んでいるわ。

変えようとすれば星の拒絶が変えようとした者を何かしらの手段を以て排除しに来る」

「どういう意味カナ？」

「世界の分岐は簡単には変わらないの。　私のような元から違う存在でもなければね。

それでも些細な事は変わらないのだけど・・・・・例えば今日この時、私が超鈴音を部屋に入れなかった事で世界は分岐なんてしないという事よ。

貴女が行おうとしている程の大掛かりな計画なら、もしかすれば変わる可能性もあるけれど、世界は極端に変わる事を拒絶する」

「まるで世界には意志がある、とでも言う様な言い回しだネ」

「世界には大なり小なり常に意志があるわ。　生命体という括りではないと思うけれど確かにそこには意志があるのよ。

私が何者かの答えは貴女の言った正にそれよ。　私は違う世界の人間・・・・・つまり異世界人。

私が元々いた世界に漫画があったわ。　ネギ・スプリングフィールドを主人公とした物語を。

貴女の計画はその中でも詳細とは言い難かったけれど、大まかな事は描かれているの」

「それは・・・・・」

作った様な驚き顔を見せる超。

「もっとも、この世界に生きる人はきちんと生きているし、存在をしているわ。　私が居る事で変わっている事もある。

今までの世界でもそうだったわ。　私を殺す為に、神様まで使ってきたりしたのだからお笑いよね。　本気で死ぬと思ったし、殺されたわ。

何が言いたいのかと言うのなら、貴女の可能性は世界にとって予定調和な可能性が高い、という事よ。
私は止めはしないから勝手に頑張りなさい。私は私のやりたいように動くわ」

「その忠告、覚えておくとするヨ。仲間には・・・・・なてくれる雰囲気じゃないネ？」

「ええ、態々手を貸す理由がないわ。手を貸さない理由も無いのだけど。
ところで何故、貴女はもっとも確実な方法を取らないのかしら？」

「ご先祖様を消す、という事カ？」

俺はええ、と頷く。

「単身、過去へ来るくらいなのだから、問題の原因を起こした御先祖を殺すくらい簡単でしょうに？
まさかタイムパラドクスで自分が死ぬのが嫌だから、なんて下らない理由ではないでしょうね？
そんな理由なら、私は今の時点で貴女と明確に敵対させてもらうわ」

英霊エミヤのように、とまではいかないが、そんな覚悟も無くてこんな事をしているのならば、俺は迷いなく敵対するだろうし、到底相容れないだろう。

「それも考えたのダガ、ネギ坊主はあまりに幼過ぎタ。
私には出来なかたヨ・・・・・例え原因を作った御先祖だとしてモ、未来有る子供の命を奪うナド・・・・・。

それに今回の計画が成功すれば、変える事も出来ると思ているヨ」

「・・・・・・」

・・・・・そうか、子供を殺す事が出来る奴なんて稀か。

しかし、成功したら成功したであちらの世界の子供達に被害が来るか・・・・・・。

これはいよいよ身の振り方を考える必要が出てきたか？

「そろそろ帰るヨ。　収穫はプラスだたし、中々面白い話を聞けたしネ」

そう言って、超は部屋を後にした。

結局、茶は手を付けられず終いか・・・・・・勿体ないから俺が飲むか。

俺は冷めたお茶に口を付ける。

「温(ぬる)い・・・・・・」

第３９翼　訪問者、邪魔し邪魔される紫の麗人（後書き）

いつもよりも間が空いてしましました。
楽しみに待っていて下さった方々、ごめんなさいです。

第４０翼　日常、普通な紫の麗人

「・・・・・・眠い」

ウィンになって、俺は目をこすりながら崖の上で言う。

今宵も飽きずに攻めてくる愚か者がいるらしい。

「あの・・・・・・また、姿を変えたのですか？」

問うてくるのは高音・Ｄ・グッドマン。

従者の愛衣はこっくりこっくりと船を漕いでいる。

「・・・・・・そう」

「はぁ・・・・・・」

会話の続かなさに頭を押さえる高音。

ウィンの姿になると、どうにも口数が少ない。

恒例の容姿説明をするならば身長は１７５センチ、瞳は水色。

フェイトっぽいかも、違うのは髪の色が薄水色で、所々に濃い目の水色のメッシュが入る事ぐらいだろう。

「・・・・・・来たよ」

眼下に居るは鬼の軍勢。

今日の術者は気合が入っているらしい。

「愛衣、来ましたよ。　起きなさい」

「ふえ？　もう終わったんれふか？」

このふにゃふにゃ具合は月詠と良い勝負かもしれない。

さて、さっさと終わらせて寝るとしようか。

「・・・・・・いってらっしゃい」

「あの数を私達で何とかしろ、と？」

「・・・・・出来ない？」

「やってみせましょう！　今までの私とは違いますわ！　行きますわよ愛衣！」

あからさまな挑発を真に受けたよ、この娘。

「ふぇ？　お姉さまぁぁぁぁ！！？」

愛衣ちゃんご愁傷様ー。

高音に首根っこを掴まれた夢うつつな愛衣は崖から飛び降りる時のふわっという何とも言えない感覚で目が覚めた様だ。

さて、何所までやれるのかを見せてもらおうかな？

１０分後。

結論から言えば、高音と愛衣は包囲されてしまった。
しかしながら、二人は良くやったと思う。
前衛と後衛にいつも通りに別れて、自分達よりも多くの相手を翻弄し、数を減らす事に成功していたのだから。
術者が更に増援を呼ばなければ、そのまま倒せる勢いだったし、愛衣に攻撃が集中しない様に高音が守り切れれば尚良かったし、愛衣にもっと火力があれば、二人が勝っていただろう。
だが、結果を伴わなくては戦場では失敗だ。

「・・・・・・未熟」

ボソリと一言漏らし、俺は動く。
崖から跳躍。
大気中の水分を周囲に集め始める。
水が無いと水の魔法の威力が半減だからな。
水の精霊族であるウィンは水が得意な俺と特に相性が良い。
フェイトの砂塵攻撃等の攻撃手段と同じように、水を自然と手足の動かすが如く操れる。
そこに言葉など必要はない。
唯、どう動かすかを念じるだけて良い。
でも学園長辺りが覗いていると思うので、水を集める以外は普通に詠唱をする事にしている。

――――ふわり。

そんな羽根が地面に降り立つような軽さで、俺は大量の水を従えながら降り立った。

「・・・・・・天地雷風水火山沢（てんちらいふうすいかさんたく）」

八卦を現わす言葉を唱える。

今から行うのは西洋魔術ではない。

一人旅や、ナギとの旅で学んだ技の詠唱だ。

「なんじゃいこのひょろ長い小僧は？」

先頭に偶々居た鬼が言う。

だが、俺はそれを気にせず――――

「・・・・・・水気（すいき）・超級太極弾（ちょうきゅうたいきょくだん）」

ボソリと呪文を唱え終えた。

その効果がすぐに実行され、俺に従えていた水が俺を包みこんで球状に変化し、黒くなった所で動き出した。

「なんじゃコイツｈ――――」

先程の鬼が瞬動で距離を詰めた俺を覆う黒い水に触れた瞬間、削

られる様に一瞬で消し飛んだ。
俺は動き続ける。
止まらずに次々とその黒き水球を纏った体当たりが、問答無用に鬼達を消し飛ばす。

この技は本来、普通の気を纏って一直線に飛び出す技で、方向転換が一切出来ない代わりに、体の周囲に触れる敵をほとんど瞬殺する攻撃力をもつ。
端的に言えば一直線へ向かう道筋への飛距離と圧倒的な攻撃力で触れた敵を消し飛ばす技みたいな？
とある場所で得た奥義の一つなのだが、その奥義に今回は水の属性を付与する事で黒い水球を纏う様にアレンジし、自由に動ける様に改良した。
なんか結〇師の絶界と微妙に被るが、年代的にはこっちのが昔なので、こっちが本家だと思う、って本家って何だ本家って？
ともかく！
より強力な攻撃を受けると全身を覆っている気が解けてしまう事ぐらいが弱点の無駄に攻撃力のある体当たり攻撃なのだ！

「ミス・テス　ミ・スリル　ミストラル。
目醒め現れよ　浪立つる水妖　水床に　敵を沈めん　流水の縛り手（リウス）」
（エクス・リムノー・エクシスタッヴェ・スンダンス・ウンディーナイミニークム・インメルガルウェウム　ウィンクトゥス・アクアー）

鬼が全て消し飛ばした後、隠行の術で隠れていた術者を水系捕縛魔法、流水の縛り手で捕縛し、窒息するまで水の空気を無くして気絶させた後、学園側の処理班に任せた。

「助かりましたわ」

「ありがとうございます！」

二人が礼を言う。

「・・・・・・要、修行」

「「うっ」」

ジト目で言った為か、二人は目を逸らした。

「・・・・・・解散」

「お疲れ様ですわ」

「お疲れさまでした！」

こうして今宵も、何の変化も無く夜が更けて行った。

「そこの娘達、可愛いねぇ～、俺達と遊ばない？」

「後悔させないからさぁ～」

「絶対楽しいから！」

次の日、ヤオの姿で買い出しをしていると、大学生らしい集団にナンパされている女の子達がいた。

「お断りですわ！」

というか高音達だった。

「お姉様ぁ・・・・・・」

「高音さぁぁぁん」

愛衣ともう一人、夏目萌が涙目になっていた。

「んだと？　折角、俺達ｇ「そこまで」んだテメェは？！」

俺は既に割り込んでいた。

「あ、朱然さん・・・・・・」

「今はヤオだｙ「いきなりしゃしゃり出て来て何、無視してんだよ！！」確かに、声を掛けるのは君等の自由だけれど、この子達は僕の知り合いでね。
放っておく訳にもいかないんだ。　出来れば穏便に怒りを収めてくれないかな？」

しかし、此処で返って来たのは返事ではなく。

――――――殴。

拳だった。

当然、喰らいたくは無いので俺はスウェーでかわした。

「よくかわしたな？　俺はウルティマホラで４位だったんだぜ？」

なんか自信満々に言ってくる。

で、取り巻きが沸く。

「そう・・・・・避けちゃったけど、これって一応、自己防衛って事になるかな？」

「明らかにあちらから手を出したのですし、なるのではないでしょうか？」

俺格好良いぜ！みたいな事をしている自称四位を尻目に、俺と高音達は背を向けてコソコソと話した。

ふむ、瞬殺されてもらおう。

「んじゃ、俺にボコボコにされてくれ、よッ！」

ボクシングスタイルでいきなり左ストレートを打ってきた。

速度はまあ、並。

威力もまあ、並。

と、言う訳で――――――

「ぐぼッ？！」

クロスカウンターを叩き込んでみたり。

「「大丈夫か？！　よくもやってくれたな？！　誰だテメェ名を名

乗れ！！」」

と、言われたので――――――

「『Ｓｃａｒｌｅｔ』という店でバイトしてるヤオ・ファンシィェン、広域指導員をしている。
気に入らないのなら店に挑戦しに来ると良い。　店の誰かが対戦してくれるよ」

「あ、あの魔窟の一人かよッ！？」

「お、覚えてやがれ――――――ッ？！」

と気絶した四位君を二人で背負って何所かに行ってしまった。

「えーと、ありがとうございます？」

凄く微妙にお礼を言われた。

「あー、無用な争いを引き起こす様な対応はしない様にね・・・・・・」

そう言って、俺はこの場を後にした。

そんな変わらない日常の１ページ。

第４０翼　日常、普通な紫の麗人（後書き）

地味だったので、もう一話投稿します。

第４１翼　南国旅行、絡まれる紫の麗人（前書き）

この小説、お気に入り件数が２０００件越えました。
本当にありがとうございます！！

第４１翼　南国旅行、絡まれる紫の麗人

「ひゃっほ――――――ッ！」

そう言って海に飛び込む能天気なクラスメイト達。

「暑いわね・・・・・・」

それをビーチチェアに座ったまま眺める水着の俺。

勿論、サングラス装備。

相変わらず能天気だ・・・・・若いなぁ・・・・・・。

しっかし、自分の家の企業が経営しているとはいえ貸切とか、ボンボンはやる事が一々仰々しいな・・・・・・。

貸しきるとか金が勿体ないとは思わないんだろうなぁ・・・・・・・。

エヴァと茶々丸は学園長に呼び出されたとかでこれなかったし、月詠はそもそもクラスメイトですら無いから誘われなかったし。

「あら、ルノーさんは泳がないんですの？」

「お招きありがとうございます雪広さん。　私はこうして眺めていられるだけで十分に満喫出来ているわ」

「そうですか・・・・・ところでその水着なのですが「何かしら？」少々際ど過ぎるのではありません？」

そう言って俺の水着をマジマジと見つめてくる。

どうもルーデシアになるとついつい蒼色の服を着たくなるんだけ

ど、水着まで蒼色だ。
デザインの説明をするのならば、トップが首から吊るす感じで、一度首元でクロスして胸のサイドに繋がり、隠している布は面積が少なく、鳩尾の部分が一度捻じれ、背中を紐で縛る感じ？
ボトムは両サイドを紐で縛るタイプ。
紐が多く、背中やお腹がより見えるので大胆に見えるのだろう。

「そう？　見られて減る物じゃないのだから良いじゃない」

俺はサングラスを頭の上に掛けて言う。

「ネギ先生には刺激が強すぎますわ！」

「先生は子供でしょう？　一々意識なんてしないわ貴女と違って、ね」

そこで話す事は無いとサングラスをかけなおした。

「う・・・・・そ、そこまで言うのであれば・・・・・・」

断言した事がそんなに驚いたのか、たじろぐ委員長。

「私の事より、あそこに行かなくて良いのかしら？」

海の方を指し示すと、そこにはまき絵や鳴滝姉妹、図書館組がネギ争奪戦をしている所だった。

調教したネギが嫌がっている事と、修行によって無駄に身体能力が上がってきているようで、水の中でもそれなりに逃げ回っている。
でも多勢に無勢だなって・・・・・あ、捕まった。

常人離れしてるが一応一般人の３－Ａの面々に捕まる様じゃダメだな・・・・・修行の密度を増やす事にしよう。

「こ、こうしては居れませんわ！　ネギ先生、今私が御助けに行きますわ～！！」

そう言って委員長はネギの下へ走り去ってしまった。

なんであんなのがハーレムを形成してんだか・・・・・・。

まさかカリスマのスキルが発動してるのか？

ナギの奴も味方からは無駄に人気あったしな。

それにアリカ王族だし、案外そんなスキルがあるのかもしれん。

どうでも良い事だが。

と、喉が渇いてきた・・・・・お、ボーイさんだ。

「そこのボーイさん、飲み物を貰えるかしら？」

「は、はい只今！　どのような飲み物になさいますか？」

おぉ・・・・・鼻の下伸びてるよボーイさん・・・・・・・。

「本当ならお酒を貰いたいところなのだけど、トロピカルジュースで我慢するわ。　お願いできる？」

「はい、すぐに！」

凄い勢いで飛んでったな。

ん～、夏の日影は気持ち良いな～。

そういえばネギ達がどっか行ったからか急に静かになったな・・・

・・・良い事だ。

「ルノーさん、スタイル良いねぇ？」

「ホントやね」

「うん、凄い」

運動部のまき絵以外が話しかけて来た。

「何か用かしら？」

「日焼け止めクリーム塗った？」

え？

何その脈絡の無い話題。

「そう言えば塗っていなかったわね」

裕奈がへっへっへ！とオヤジみたいな顔になって日焼け止めクリームを両手に出し、こちらににじり寄ってきた。

「何故にじり寄って来るのかしら？」

これから何をされるのかを想像した俺は即座にビーチチェアを盾にした。

「なぁゆーな。　ホントにこんなんでルノーさんと友達になれるんかな？」

「どうだろう・・・・・・？」

と言いながら二人も日焼け止めクリームを構える。

「南の島では開放的になるって言うじゃん」

・・・・・もうヤダ、このクラス。

しばらくの睨み合いの後、先に動いたのは運動部組だった。

裕奈が正面、アキラが右、亜子が左から回り込んでくる。

フ、その程度の運動性能で俺に勝てるものか！

俺は余裕を持ってかわし、すれ違いざまにラカンから気まぐれに教わった秘奥義を使った。

「「「きゃあぁぁぁぁ――――――ッ？！」」」

俺に向かって来た三人が真っ裸になった。

そう、ラカンから教わった女性限定秘奥義、無音脱がし術を使わせて頂きました。

無音めくり術もラカンそよ風爆風拳も使えます。

魔眼使って覚えました。

なまじ魔眼使ってる所為で、スカートじゃなくても上下両方とも無音で下着を脱がせられるようになってしまった。

開発者のラカンも「ぬぅ・・・・・まさか俺よりも上手く出来る奴が出るとは思わなかったぜ、このムッツリスケベ、いや、ある意味ゴットハンドか（笑）」と凄く良い笑顔で太鼓判押された。

その後、もの凄ぉぉぉく落ち込んだが。

女性に限ってだが、これは結構無力化するのに使えるんだよね・・・・相手が露出狂の変態さんじゃ無ければ。
一度、俺の二つ名を使って色々やっていた女の人がそういう人だった。
美人だっただけにそれがあったから残念な人だったなぁ・・・・・。
あ、あと何か隠している物を取るのも出来るよ。

「ちょっと水着返してー！」

俺が物思いに耽っていたら裕奈が胸と下を隠しながら近づいてきた。

「あら、ごめんなさい」

俺はそれぞれに水着を返した。

「脱がされたの全然気付かんかったわ」

「亜子とゆーなはともかく、ワンピースの私も気付かなかったよ」

水着を着ながら言う亜子とアキラ。
全身が真っ赤になる程恥ずかしいとは、まだまだ若いねぇ。

「なんでこんなこと出来るの？」

「さあ？　脱がすのは得意なのよね・・・・・・特に女の子は」

妖艶に笑って見せる。

「もしかしてそっちの人なの？！」

そう言ってズザザッ！！っと裕奈は距離を開けた。

「まあ、男は眼中にないけれど、女の子を抱いた事はあるわね。勿論、合意じゃ無ければ抱かないから安心していいわよ？嫌がる相手を無理矢理するのは趣味じゃないの。もし誰かがこの事をバラしたら無理矢理しちゃうかもしれないけれど。貴女達はどちらかしら？」

まあ、抱いた事云々は主に男の時にとか、蓮華とか、という注釈が入るのだが。

「へ、へぇ～、そうなんだ・・・・・・・」

「お、大人・・・・・・なんかなぁ～？」

「（カタカタカタカタ）」

「私に抱かれてみる？」

一瞬で距離を詰め、三人の頭を抱え込み、耳元で囁くように言ってみる。

「「「スミマセンでしたぁぁぁぁッ！！」」」

瞬間、３人は即座に俺を振り解いて遠ざかって行った。

これくらい脅しておけば大丈夫だろう。

百合フラグなら幾らでもＯＫなので、そこら辺はバレてもあまり

差し支えないし。

俺はまたビーチチェアに座って、運動部組が落して行った日焼け止めクリームを塗り、日光浴を始める。

「あの、よろしいですか？」

そこで声をかけられた。

「何かしら？」

「いえ、お聞きしたい事があったのですが、此処に座っても？」

「構わないわ。　私の所有物ではないのだし」

それを聞いた夕映は隣のビーチチェアにこちらを向くように座った。

「単刀直入に訊くです。　貴方は一体何者なのですか？」

「最近、この手の手合いが多いわね・・・・・私は私としか言いようがないわ」

「私が訊きたいのは、魔法使いに関する事ではありません。
図書館島で助けてもらった後の会話から、貴女がネギ先生よりも高位の人物である事、しかも麻帆良で最高権力を持つ学園長と同等かそれ以上の立場にある事がネギ先生の言葉の端々からわかりました。

更に貴女は、外見からは想像もつかない程に倫理観が確立していますし、武術の腕も古さんより上・・・・・貴女はかなりの高齢

なのではありませんか？
そして、貴女は望まずして魔法のある世界に関わるを得えなくなってしまい、何か大切なモノを失ってしまっｔ」

そこで夕映の言葉が途切れた。
何故なら俺が人払いの結界を発動してから、夕映の眉間にＳカトラスを突きつけているからだ。

「別に、自分から首を突っ込む分には私は何も言わない。　私を分析するのも・・・・・・まあ、許しましょう。
でもね。　私の過去を全く知らずに憶測で軽々しく語らないでほしいわね。　殺したくなるわ」

「あ、貴女は撃ちませんよ。　こんな目立つ場所ではすぐに銃声でバレますから」

平静を装ってはいるが、尋常ならざる汗が浮かんでいる。
一般人が銃を突きつけられて平静で居られる方が可笑しいのだから。

「・・・・・・良いでしょう。　その無理な無謀に免じて聞くだけなら」

「ッ、ッ、ッ・・・・・・では」

無意識に呼吸が止まっていたのか、浅い息を繰り返して呼吸を整えて問いを始める。

「貴女は何故、そこまで私達に覚悟を問うのですか？　私達は貴女の言う何も知らない一般人です。

貴女は何故か、私達が戦う事を前提に話を進めています。
確かにワイバーンの様な危険が数多くいると言われれば、付け焼刃かも知れませんが逃げるくらいの実力を付けなくては危険だというのはわかります。
何処でも人間が集まれば黒い部分など幾らでもあるでしょう。
ですが貴女の言い方を聞けば、まるで私達に明確な敵が現れると言っている気がするのです。　どうですか？」

なんというか・・・・・名推理だな・・・・・・。
この推理力を他の事に生かせんのか。

「名推理ね。　割と面白かったわ」

「教えてください、何故です？」

ふむ・・・・・・。

「今は教えてあげない。　それ相応の時期が訪れた時に教えてあげるわ」

「卑怯ですね・・・・・・」

ジト目で俺を見る夕映。
俺はそんな視線をなんのそのといった感じで涼しげに受け流した。

「貴女は魔法のある世界に関わる事を決めたのかしら？」

「は？」

一瞬、何を言っているのかとポカンとした顔になったが、すぐに

戻り――――

「はい、私は自分から関わる事を決めましたです」

それを聞いた俺は、一言「そう」と言って黙り込んだ。

・・・・・・。

「それでは私は向こうへ行きますので――――」

夕映がビーチチェアから立ち上がり、この場を離れようとした所で、俺は声をかけた。

「魔法を教わるのなら、普通の勉強もしっかりと頑張りなさい。魔法も学問なのだから知識がなければ使えないわ。今の貴女では魔法理論は理解も、活用も苦労するわよ？」

「・・・・・御忠告感謝するです」

微妙な顔をしてそう言い残し、俺はまた一人になった。

その間、人払いの結界の効果によって、トロピカルジュースを運んでいたボーイさんは近けず、周辺をうろうろしていた。

ごめん、ボーイさん・・・・・。

第４１翼　南国旅行、絡まれる紫の麗人（後書き）

ネタ技を使わせてみたり。
いつか役に立つかも？
本編では一体何の用途の為にラカンはあんな技を生み出したのだろうか・・・・・？

夕映に関しては、自分で関わる事を確認したのでちょっとだけ助言。
朱然さんに不用意な過去バナ詮索は厳禁なお話になってしまった。
うーむ、ツッコミが入ったら後で修正入れるかも？

現在４３翼を書いてます。
ネギ達には自分の正体を話す事にしました。
でもって、衝撃映像を見せて明日菜達ドン引きみたいな流れになりつつありますね。
本物の戦争をお前等に見せてやる的な？

最近、殺せない殺人貴が幻想卿入りという動画が面白いなぁ～とよく見ます。
自分、東方はよく知らないんですけど、十分過ぎるくらいに楽しめます。
特にネコアルクはツボ。
よくあのトリッキーな言動を再現できるなぁ～とうｐ主を尊敬します。
何気に戦闘シーンも原作の様な感じ、うらやましいです。

あと刀語１２話見ました。
ボスラッシュの如き１２人抜きと、否定姫エンドが面白かった。

そして、何より皿場に萌えた（笑）

第４２翼　悪魔編スタート、鍛える紫の麗人（前書き）

やっと八巻に突入です。

第４２翼　悪魔編スタート、鍛える紫の麗人

南国でリフレッシュ後、俺はついに大神宣言（グングニル）を完成させた。

「フッフッフッフ、ハーッハッハッハッハッハッゲフッゴホッ！」

いかん、慣れない笑いをして噎せた！

・・・・・・。

・・・・・・。

・・・・・・さて、それは置いておいて、今日は久しぶりに俺もネギと戦うんだったか。

と、言う訳で別荘へ移動。

エヴァとの準備運動がてらの模擬戦が終わった後に俺＆月詠との模擬戦が始まった。

もっともかなり手加減するのだが。

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！！　魔法の射手（サギタ・マギカ）　連弾（セリエス）・雷の１７矢（フルグラリース）！」

開始と共にネギは動き出す。

雷が帯電している矢が一斉にではなく、マシンガンの様に連射されながらこちらに飛んでくる。

その数１７。

避け切るのは簡単だが、それでは修行にならない。
因みに魔法の矢は連弾と付けると連射仕様になる。
魔法の矢に対して、俺は呪符を17枚生成し、空中にばら撒いた。

「17符・一穴天螺（いっけつてんら）」

一工程の詠唱。
呪符はその詠唱が届いた瞬間、バリッという独特の音と共に一瞬だけ帯電する。

この符術は、ナギとの放浪中に中国の山奥で会った五方輪という怪異専門の傭兵集団に教えてもらった物だ。
前にウィンで使った水気（すいき）・超級太極弾（ちょうきゅうたいきょくだん）もその中国版神鳴流みたな所の集落で世話になった時に、見せてもらった内の一つで、その技の中の一部分である呪符術（じゅふじゅつ）を使用してる。
名を呪方術（じゅほうじゅつ）と言って、日本の陰陽師が使っている符術と祖を同じくして全くの別物へと派生した物だ。
実際の所、呪符術は符術と似て非なる。
呪方術の修練を積んだ者が、自己から呪符を生成できる固有技能（リアリティ・マーブル）らしいのだが、固有結界だのという世界に一つしかない固有技能ではなかった為に俺も使える様になった。
というか俺自身がもう尸解仙とはいえ、仙人なので相性は上々だった。
寧ろ、西洋魔術よりもこちらの方がピンと来るほどに。
更に詳しく書けば、主に武術、気功術（きこうじゅつ）、呪術（じゅじゅつ）を持ちいて、創始者の仙人である紫微仙という者達から授かった五神宝珠（ごしんほうじゅ）という木火土金水の属性を持つ勾玉（まがたま）を、武具に備えた呪方士（じゅほうし）からなる者達を言うらしい。
今までの説明は全部その五方輪の受け売りなのだが、そこは勘弁

してほしい。

と、長い説明文はさて置き――――

独特の帯電音を発した後、17枚の咒符は鏃状(やじりじょう)になり、光の纏いて魔法の矢に向かう。

一穴天螺(いっけつてんら)は点での高い貫通力によって相手を穿つ咒符術。

西洋魔術と違って、この符術は詠唱が一瞬で済むのが利点だ。

雷の17矢は17の咒符とぶつかり相殺され、ネギが予想通りに魔法障壁を展開しつつ、新たな呪文の詠唱を開始。

瞬間、月詠がネギの詠唱を妨害せんと瞬動で接近、気で強化した二刀の摸造刀を振りかぶり――――

「にとうれんげきざんがんけーん！」

岩をも断ち切る二連撃がネギを襲う。

「くッ！！」

今のネギの障壁では手加減してはいても耐える事は難しいと判断し、呻きながらすぐさま距離を開ける為に後退。

その判断はある意味ただしく、ネギの被害は微々たるものに留まった。

だが、実際は月詠がワザと身体を掠る絶妙の軌道を描いただけの事、彼女は戦いを長く感じていたいが為にワザとそうしたのだ。

いたぶる為に。

それを見ながら、俺は地面を蹴って20メートル上空へと飛び上

がる。

それに対し――――――

「ラス・テル　マ・スキル　マギステル！！　風精召喚！　剣を執る戦友（エウォカーティオ・ウァルキュラアポルエーリア・グラディアーリア）！！　行って！！」

今度は風の中位精霊による自身の複製が２９柱、こちらに剣を持って多方向から攻めてくる。

その間、月詠は技後硬直になったネギへと駆ける。

「もっとウチを楽しませてくれへんと、つい手が滑って殺してしまうかもしれまへんえー？」

斬撃を叩き込まず、耳元に口を寄せて、そう囁く。

「！！」

ネギは即座に左手で月詠を払った。

しかし、そんなお粗末な攻撃を受ける程、月詠は甘くは無い。

月詠は払われた手をとって、ネギを一本背負いの要領で中央の柱に叩きつける様に吹っ飛ばした。

ネギは何とかぶつかる寸前に柱に足を着く事に成功するが、既に追撃を掛ける為に眼前に現れた月詠に横っ面を引っぱたかれた。

「ッ！！」

眼下で月詠の囁きを聞いてから動きの悪くなったネギが、懸命に耐えるのを見ながら、俺は片手間に２９の風の精霊を適当にあしら

っていた。

さて、月詠がプレッシャーを与えて動きが悪くなってきたようだし、そろそろ終わらせるかな・・・・・・。

「四方色滅（しほうしきめつ）」

即座に呪符を四枚生成、三角形の頂点に一枚づつと中心に一枚配置し、気を流す。

すると先程と同じ帯電音と共に呪符と呪符が紫電で繋がり、上から見た三角錐の形を描いて効果が発動された。

四方色滅（しほうしきめつ）は四方、つまり周囲を衝撃によって無差別に攻撃する術。

射程は術者のイメージに左右されるが、今回は複製だけを圏内に入れて発動させる。

その発動と同時に、その符から生じた衝撃によって、風の精霊が一斉に吹き飛んだ。

複製が消し飛んだ音に気が付いたネギは、2対1では確実に手も足も出せなくなる事を悟り、試合前に予め遅延魔法（ディレイスペル）で溜めていた切り札を開放した。

卑怯等とは言うまい。

模擬戦とはいえ、試合する事は疾うに決まっていた事で、試合前から戦いは始まっているのだから。

「これで！！　開放（エーミッタム）！　雷の暴風（ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）！！」

月詠との近接戦闘中に、正確な精度を以て俺に雷の暴風を叩き込んできた。

至近距離でその余波を喰らった月詠は器用に空中で受け身をとって、外側の柱の上に降り立った。

唯の衝撃程度では彼女は傷も負わないだろう。
今回は明日菜(たまよけ)が周りにない。
前に「流石に雷の暴風クラスが直撃したら死ぬ」と俺が漏らしてから、自分の最大攻撃を直撃されるのは不味いと思っていると意識しているのだろう。
しかも、模擬戦では障壁を展開禁止にするという俺の縛りがある為に、尚更狙ってくるとわかっていた。
1対1であったならば、複製で身動きが取れない俺ごと大呪文でカタをつけるつもりだった様だな。
まあ、全然予想内だが。
しかしながら、エヴァが基礎を徹底的に鍛え直しただけで、前に戦った時よりも1．3倍程、出力に無駄が無くなってきてると・・・・いやはや、天才とか言うのはなかなかどうして、人の努力をあっと言う間に飛び越えて行くな。
魔眼で覚えていく俺の言えた義理じゃないか・・・・・っと、呑気に思考している場合じゃないな。

「六氣封殺(りっきふうさつ)」

俺は更に六枚の咒符を生成、五芒星の頂点とその中心に符を配置して気を流す。
瞬間、俺に迫ってきていた雷の暴風が目前で止まった。

否――――――世界が止まったのだ。

驚くべきかな呪方術。

永く弛まぬ研鑽は時間を遡る事は出来なくとも、止める事は出来るようになっていたのだ。

その秘奥は門外不出だったのだが、ナギがその五方輪に模擬戦を挑んだ時にあまりの強さに使わざる負えなかったとナギの対戦相手は言っていた。

初めて見た時は本気で驚いた。

この時を止める技術は、この五方輪の連中以外に見た事がなかった事と、五方輪の中で更なる修練を積んだ者しか使えないらしいので誰でも使える訳ではないらしい。

だが俺は魔眼を使い覚える事が出来た。

この世界はつくづく強さのインフレが激しいが、他の世界よりも無駄に特異性の多い術も多く見れた。

覚えやすさと火力が高いが故に近年の世界全土にもっとも多くいる西洋魔術師（まほうつかい）。

これは言わずもがな、アルとゼクトが師匠だ。

日本に多く居る発動速度と式紙や鬼等の使役に長けた陰陽術師（おんみょうじ）。

こちらは詠春に会いに行った時についでに覚えた。

他にも、古代から脈々と受け継がれた古の西洋魔術と呼ばれる自然魔術師（ドルイド）を操る老女。

特定対象への対応性と燃費の良い対魔牧師（エクソシスト）として世界を旅する五人組一組の少女達（音での戦いはこの子達から教えてもらって中々の物になった）。

死霊を操り、呪いを扱う死霊術師（ネクロマンサー）として自分の在り方に葛藤する刺青を持った男。

魔法と科学を混ぜ合わせ不老不死を求める錬金術師（アルケミスト）に作られた人造人間。

今俺が使っている五方輪の扱う呪方術は、人としての殻を破り、仙人になろうとする仙道術（タオ）に属している。

他にも様々な人物に会ったが、大まかにはこんなものだろう。

今の西洋魔法は魔法世界から流れてきた物だと思う。

世界で一番普及しているのは、覚えやすさと火力があるからの二点だからだろう。

ある程度実戦を知れば十分に戦力になるのだから。

それが幸か不幸か、他の魔法形態は威力がパッとしないものの、それぞれが独自の持ち味を生み出し、時に驚くべき技術を持っているのだ。

そのお陰で俺は、超の持つ時間航行器（カシオペア）の優位を一時的に崩す事が出来る。

しかし、欠点もある。

この術は5秒しか時を留める事が出来ない。

故に俺はそれなりに動き出した。

今のネギ程度なら5秒あれば、十分過ぎるのだから。

気を足元に練るのに1秒。

爆発させ、２５メートル離れたネギの背後に切迫するのに1秒。

攻撃を当てる為にネギの背に手を当てるのに1秒。

腕に気を集中させ、程良く気絶させるくらいに調整するのに1秒。
溜めた気の一撃を発動させ、衝撃がネギへと伝わるのに1秒。
合計五秒だ。

そして、時は動き出す――――――

「爆裂（最弱）」

――――――浸、爆！

「え？」

ネギは間の抜けた声と共に、内部への浸透頸によって5メートル程吹き飛び、一度バウンドしてから、転がって中央の柱の根元に軽く当たってようやく止まった。

「水仙はーん！！」

試合が終わった所で、柱に居た月詠が俺の方へダイブして来た。
俺は月詠を抱き止めて、地に降ろす。

「いきなりダイブ禁止」

そう言いながら、俺はエヴァの方へ歩いて行く。

「えぇー！　ええやないですか、ちょっとくらいー！」

月詠がぶーぶーと文句を言いながら俺についてくる。

「水仙、さっきのは何をした？」

「雷の暴風を避けたのは疑似時間停止の術で、ネギを気絶させたのは浸透頸だよ。　人間って凄いよね。
自力でこんな事まで編み出せるんだから」

やれやれと首を振る。

「いや待てッ？！　何気にサラっとトンデモ技術を使ったなお前ッ？！」

エヴァが良い突っ込みをくれた。

「ケケケ、時間止メルトカ非常識ダナ？」

チャチャゼロが言う。

「（この事は超に言っても良いのでしょうか・・・・・？）」

茶々丸は超に、可能な限り朱然の情報を集めるようにと言われているが、エヴァの家族でもある為、機械らしからぬ葛藤をしていた。

「まあ、そういう訳なんでネギには内緒で。　教えたら何か色々と鬱陶しそうだし」

「あー、わかった。　取り敢えず聞かれたら誤魔化しておこう。
それはともかく、お前との模擬戦は坊やに限らず良い経験になるだろうさ。
なにせ古今東西を旅して周り、様々な手段を持っているデタラメなお前が相手なんだからな。
それこそ千差万別の戦い方を経験させられる。　経験という意味ではお前ほど相手に経験を積ませるのに丁度良い相手は居ないだろう」

おお、エヴァが絶賛とか凄い嬉しい！

「さて、そろそろ坊やを起こすか。　何時まで寝ている？　起きろ」

そう言ってネギに近づき、踏みつけるエヴァ。

「ふにゃッ、ま、まふたー、痛いれふ痛いれふ」

ネギが痛みで起きながらされるがままになった。

「ふん、お手本の様な戦い方では一生格上には勝てんぞ。　柔軟性を高めろ。
何の為に水仙がバリエーションを付けて様々な手段を用いていると思っている？
まずはその魔法学校で習った申し訳程度で教本通りの戦闘スタイルを追い出せ。　相手は常に同じではない、違う相手だ。
人、獣人、動物等ならば戦う事もあるだろう。　が、何事も不測

の事態はある。
私と水仙を師事するのならば、竜種、上位精霊、上位爵位の悪魔すら相手取れる様になってもらわねばなっと・・・・・・」

「マスター、大丈夫ですか？」

「ああ、水仙の前の模擬戦で魔力を使い過ぎた・・・・・・」

エヴァがふらつき、茶々丸が即座に支えた。

「今日の授業はこれまでだ。　いつも通り血を抜いたら出ていけ。月詠、お前も帰れ。　水仙、お前はこっちに来い」

「わかりましたマスター。　月詠さんと朱然さんも今日はありがとうございました！」

「水仙はん独り占めはんたーい！」

ネギはそう言って礼をした後、別荘を出た。

月詠は当然反対をしたのだが――――――

「茶々丸、摘まみ出せ」

「了解しました、マスター」

「木偶人形がウチの邪魔しはるんですかー？」

というやり取りがあったので、俺が久しぶりに寮に帰るから大人しく帰ってくれと言うと、月詠は笑顔になって帰って行った。

因みに、月詠が俺の部屋のルームメイトとして来てから、少しして俺はＳｃａｒｌｅｔで寝起きするようになった。
ネギに説教した手前、自分がそれをしたのでは示しが付かなかったし。

そして、呼ばれた俺はエヴァに引っ張られるがままに別荘の奥へと進む。
そこには丁寧にベットメイキングされたキングサイズのベットがある。
俺は清潔で真っ白なベットに肢体を投げ出した。

そこへフラフラしているエヴァが馬乗りになって――――――

――――――噛。

「ん」

エヴァの犬歯が俺の首に突き立てられ、僅かな痛みが走り、少し声が漏れた。
蚊の様に痛みを麻痺させる成分が分泌されるのか、痛みは感じない。
コクコクとエヴァの喉の音が聞こえるのみだ。
前にあった異常に感度が上がったりはしない。
採血される時の様に、貧血に至るまでの気ダルさが増していく、それだけだ。
頭がボーッと成り始めた所で、エヴァは吸血をやめた。

「・・・・・ッ、今日は少し多めに吸ったな。　少しフラフラする」

ぼやけた視界の中、頭を押さえながら言う。

「魔力を使い過ぎたと言っただろう？　お前の血は美味いし、幾らでも飲めそうな飽きの無い味をしている。ついつい飲み過ぎてしまう」

ニヤリと笑うエヴァ。

褒められるのは嬉しいのだが、血が美味いってのはどーなんだろう？

「さて、そろそろ出よう」

「ああ」

俺達は別荘を後にした。

次の日の修行後、ネギは基礎体力を高める為に下の砂浜でマラソンをしていて、俺は元の姿でエヴァに血を吸われていた。

「んッ、エヴァちょっと今日は（吸血が）乱暴じゃないか？」

少しばかりガッチリと噛みつかれているというか何と言うか・・・・・。

「五月蠅いな、機嫌が悪い日もあるんだ。　（吸血を）激しくして

も別に良いだろう？」

俺の問いにエヴァは首から牙を抜き答える。

「激しいと（牙が）痛いだろ？」

「なら寧ろ（感度とか上げて）気持ち良くしてやるさ」

「この前みたいに足腰立たなくされるのは勘弁願いたいんだけど・・・・・」

ジト目で言ってみました。

「何時まで前の事を持ち出すんだ！　アレは抑えつけられていたのが一気に解放されたからで！」

するとエヴァはいつもの言い訳を言う。

なんかこのやり取りが恒例になってきたなぁ～。

「ホラ、さっさと力を抜け」

「わかったよ・・・・・・んッ！　だから（噛むの）強いって・・・・・」

「うるふぁい！」

噛みついたままエヴァが叫んだ。

等とやっていると――――――

「な、何やってるのよアンタ達?!」

「ちょ、アスナ不味いって?!」

と抑えつけられているのもなんのそのと明日菜が物陰から現れ、押さえつけていた諸々の人物達が姿を現した。

「覗き見とは趣味が悪いなお前ら?」

不機嫌なエヴァが魔力を掌に集中を始める。

いかん、エヴァを止めなくては!

「エヴァ、ストップ! 落ち付け、こいつ等は何度言っても省みようとしない馬鹿なんだ!

覗き見されていた事に気が付かなかったとはいえ、主語を抜かして話していた俺達も悪いんだぞ?」

「う、ま、まあ、水仙がそう言うなら・・・・・・」

エヴァが頬を染めデレた。

可愛いじゃないか・・・・・・。

「で、何しに来た? ネギは下でマラソン中だぞ?」

「しゅ、しゅぜんさん、ますたー、言われたマラソン20キロ終わりました〜・・・・・・」

説明をしようとした矢先に、へろへろになったネギがノルマをこなしてきて倒れた。

「ネギ?!」

「せんせー?!」

「大丈夫、ネギ君?!」

その後、ネギは明日菜達に介抱された。
その間に月詠が現れ、必要以上に刹那に模擬戦を強請り、二人の模擬戦をその他で観戦する事になった。
模擬戦が終わる頃にはネギが回復して宴会が始まったのだった。

酔った拍子に月詠が「一万と二千年前から愛しとるぅ~」と言って襲いかかってきたのは、まあ、何とも言い難かったが・・・・・・。

誰が教えたのやら・・・・・・大方、ハルナ辺りだろうな・・・・・。

第４２翼　悪魔編スタート、鍛える紫の麗人（後書き）

呪方術は某スクウェア・エニックスがスクウェアだった頃・・・・・・まだポリゴンが凄いと思える時代にプレステで発売されたゲームの技です。
双界儀というゲームなのですが、知っている人は稀かも・・・・・・。

その中で、時を止められる時間が１１秒でしたが、流石に１１秒あると、朱然さんはやりたい放題出来るので５秒にしました。
色々調べていたらジョジョのディオさんが最初５秒で最大９秒だったので。
自分はジョジョ読んだこと無いんですよねぇ・・・・・・その内読もうかな・・・・・・。
まあ、それはともかく何故そのゲームを出したかはズバリ自分の趣味ですね（笑）

世界のマイナー魔法として上げたドルイド、エクソシスト、ネクロマンサー、錬金術師、仙道術はオリジナル設定です。
文中で書きましたが、ネギま！の世界では魔法世界から、火力と覚えやすさという点で、世界から元々あった技術体系が衰退してしまったと考えています。
日本に陰陽師がまだいるのなら、世界には地域特有の魔法が残っているんじゃないかと思ったので。

月詠さんは・・・・・・最後のネタも含め、敢えてスルーでお願いします（笑）

エヴァはナギとのフラグが朱然さんフラグに置き換わったので、血は朱然さんから吸っています。

次回はネギの過去に朱然さんが辛辣な言葉を投げかけるぜ！な回になると思います。
ではこれにて失礼。

ネギま！時点のステータスに仮契約アーティファクトの欄を追加しました。

第４３翼　ネギの過去、一笑に伏す紫の麗人（前書き）

ネギの過去に一言物申すぜ！な回です。
後半何故か、Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！で触れた朱然さんの過去を少し詳しく書いてしまった・・・・・何故だろう？

第４３翼　ネギの過去、一笑に伏す紫の麗人

「おい水仙、起きろ」

身体が揺らされる感覚で目を覚ました。

「エヴァ？　もう朝か？」

まだ眠い・・・・・・。

「いや、少し面白い事をしているぞ」

「面白い事？」

ネギの記憶か？

「ああ、坊やの記憶を覗き見している。　お前のアーティファクトなら見やすいだろう？」

「出歯亀は嫌われると思うんだけどなぁ・・・・・・」

そうボヤキながらネギ達の下へ向かった。

「あ、エヴァっちも来たの？」

「ああ、師匠として知っておくのも悪くないと思ったからな」

朝倉の疑問にシレっと言うエヴァ。

「この様な事はしないタイプだと思っていたのですが？」

「エヴァの頼みには甘いんだ、俺」

夕映の問いに、銃を突き付けた事を棚に上げて俺もシレっと答える。

それに、見る相手はきちんと選ぶよ。

「水仙」

「はいはい、来れ（アデアット）」

俺はエヴァに促されるままにアーティファクトを発動させた。

するとアーチャーに受けた固有結界、ＵＢＷの発動時に炎で目も開けられなかった様に、強い吹雪が吹き荒れたと思った瞬間、冬の町が映し出される。

そう言えば名前を教えていなかったので此処で教えておこう。

このアーティファクトの名は聖譚曲（オラトリオ）。

効果は前に少し触れたが、詳しくはネギま！のステータスを見てくれ。

それとネギと明日菜は額を合わせたままの状態で取り込まれてます。

「わぁぁ！」

「超リアルアルなー」

魔法らしい魔法（実際はアーティファクトだが）を見て声を上げ

る女の子，ｓ。
それからはチビネギが洗脳の様にナギの脚色された英雄譚を聞かされ続け、洗脳後のチビネギはアホな事を繰り返す。
それはもう、イライラするくらいに。
そして悪魔の襲撃があり、ナギが相変わらずの馬鹿魔力で６年前に見た時と同じように悪魔達を撃退した。
あの攻撃で、よくもまあ村人の石像が壊れなかったものである。
ナギの奴は攻撃魔法と極々初歩的な治癒術しか覚えていない筈なので、ネカネの足をどうやって治したか気になっていたが、昔、ゼクトだったかがナギに持たせていた高級な魔法薬を使っていた。
えーと、この角度でナギネギがこう見えてるって事は・・・・・・確かあっちに・・・・・・うん、あそこで幼女を抱締めたまま鼻血を出しているのは間違いなく俺だな。
ルクレツィア（幼女）を抱きしめ鼻血を出している女の様に見える男・・・・・唯の変態ロリコン野郎だ！？
危ない危ない・・・・・・異常視力が無ければこいつ等に見られただろうし、ロリコンの称号を強制贈与されたかもしれん（笑）
そして最悪、エヴァに斬り殺されていたかも。↑こっちは笑い事ではない。

と、そんな事を思っているとネギと明日菜が起きた。
そこへ不幸話に同情した女の子，ｓがネギへと殺到した。

「協力って、ダメですよ?！　マスターと朱然さんからも何か言ってください！」

「ハ、知った事か」

エヴァは原作の様にナギに気があって、その息子のネギをからかっていたのでナギフラグを破壊した為に今のネギには興味があまり

無いのでスルー。

そして俺は――――――

「ああ、うん。　勝手にすれば？　というかあの程度の何所で泣く要素があったの？」

――――――全く泣く要素を見出せず、冷たい言葉を浴びせた。

「な、何言ってるのよ！？」

「何でそんな事言うん？！」

「そうです！　ネギ先生は会えなかったお父さんと会えたのですよ？！」

「ちょっと冷たすぎない！？」

「血も涙も無い奴アルな！」

「貴方を見直したと思っていたのに・・・・・・あんまりです！」

ネギパーティから次々と非難の声が上がった。

「そう思った理由を挙げて行こうか。　ネギと明日菜には言ったけど、ぶっちゃけ俺もあの場所に居た。

村人達は全員石化していたし、その石像はウェールズ魔法学校の隠し扉を進んだ地下に保管されているよ。

誰も死んでないから、それは俺がウェールズの学園長に直接聞いた。　石化しているだけだよ。　会えない訳じゃない」

「ホ、ホントですかッ？！」

ネギが血相を変えて此方に近づいてくるが、俺は更に言葉を続ける。

「自分が危険になればナギが来てくれるとか思ったから天罰が下った？　笑わせるな、そんなのお前が自己憐憫に浸ってるだけだろう？　お前は神様が選り好みして自分だけを不幸にしてるだとか思ってる頭の可哀想な人か？

人間、幸も不幸も、優劣の差もあるが、俺は諦めず、抗い続けたからこそ今がある。　存在を許されている。

だが、お前はどうだ？　お前はナギの背中を追って確かに努力をしただろう・・・・・でもそれだけだ。

お前はまず、自分がいかにちっぽけな者かを自覚する事を勧めておくぞ？　なにせ、お前は自分の立ち位置が酷く曖昧なんだからな」

ネギが立ち止まる。

「それに何かモヤモヤとお前に感じていたが、今までの記憶を見せてもらって確信した。

魔法学校では攻撃魔法を重視して覚えて、申し訳程度の治癒魔法しか覚えていなかったらしいが、何で石化した村人を助ける為に治癒魔法に重点を置いて覚えなかった？

お前の魔力量なら、もしかしたら悪魔の石化を解けるかも知れなかっただろ？

悪魔の石化は、並みの人間が解除できない高濃度の魔力で行われるから、通常の人間が行う魔力変換よりも高密度になって、人間の魔力量では解除しきれないというのが魔法理論に在る筈だ。

お前程の魔力があるのなら、悪魔の石化を治す事も不可能じゃな

いとは思ったんだが、考えなかったのか？
それに今の時代、攻撃魔法より治癒魔法の方が立派な魔法使い（マギステル・マギ）になりやすいのに。
まあ、立派な魔法使い（マギステル・マギ）にならないと言ったお前には、今更関係ない話だがな。
村人の場所が分からなかったから、せめて村人達の仇をとりたかったか？
仇を殺しても本当の意味で村人は救われないんだよ。　お前の気持ちが晴れる以外の利点が無い。
ほら見ろ、同情は出来なくもないが、泣く要素なんて見当たらないだろ？
何より、あんな死人が出ない場所より俺の見て来た戦場の方がずっと――――――」

――――地獄だったぞ？

ふぅ、言い切ったぜ・・・・・って、おお？！
ネギがカタカタと震えてるし・・・・・。
まあ、なんにせよ気に入らないな、天才と持て囃されている割に、どうしてこんな事にも気付けないんだ？って、子供だからか・・・・・。

幼少の頃のあの洗脳地獄と甘やかしが最近は少し改善されたと思っていたのだが、どうにもまだまだ根幹を治すには至らなかったらしい。

何というか、これはこれでネギが哀れに思えてくるな・・・・・。

「なら、アンタの見て来た地獄を見せてもらおうじゃない！　ネギのお父さんの事も知れて一石二鳥よ！」

明日菜が喰ってかかり、その後にエヴァと茶々丸、チャチャゼロ、月詠以外がそうだ、と続く。

「本当に良いんだな？」

俺は問い返す。

冷淡に、無表情に。

「――――――ッ？！」

唯それだけの問いに息を呑む女の子，ｓ。

「見たくない者は早急にこの場から立ち去れ、人が次々に死ぬ光景が流れるからな」

そこで場を離れた者は居なかった。

「居ないか・・・・・なら始めようか。　ついでに俺が何者かも一緒に教えてやる。

俺の正体を知りたいのが居るみたいだからな」

俺は夕映に目配せをする。

夕映はジッと此方を見ている。

そうして、俺は発動させた。

そこで目を覆ったのは、ＵＢＷの様な炎でも、ネギの様な吹雪でもなく、突然に、唐突に、拡がっていく暗闇だった。
そして、次に視界が晴れた時、奴はそこに居た。

俺の始まりが。

「誰よアレ？」

明日菜が訊く。

「アレは俺だ。　俺の一番最初の・・・・・・始まってしまう前の、俺だ」

そう言った所で、奴が俺と向き合う。

「ふん、大勢連れて来たな」

粗野な言葉遣い。
はっきりとした気に入らないという意志を感じる。

「別にそんな事、気にしてないだろ。　時間の無駄だ」

俺は平均的な日本人顔に黒髪黒眼の何所にでも居る様な、昔に何度も鏡で見た自分に言った。

「それもそうか・・・・・・あの扉だ。　良く覚えてるだろ？」

■■■■が示す先に、忘れる筈も無い扉があった。

よく覚えている。

いや、忘れられる筈が無い。
あの扉は・・・・・俺の家の玄関なのだから。

その扉が独りでに開いて行き――――――

周りの景色が変わった。

「あの黒髪の平々凡々なのが、約１３０年前で最初の俺だ。　異世界で普通に暮らしてた普通の子供だった」

見慣れた一軒家の中を走り回るのは幼き日の■■■■。
その後を追いかけるのは中学生になったばかりの姉さんだ。
だが、そこに両親の姿は無い。
ひたすらに映し出されるのは俺と姉さんだけだった。
父は仕事で家に殆ど帰らず、母は自室に籠って出てこない。

姉さんだけだった・・・・・俺を見てくれるのは。

――――――そう思っていた。

それから変わり映えの無い月日を重ね、俺は成長し、中学2年になった俺は寝ぼけて階段から落ちて魔眼を手に入れてしまう。
何となく見ていたスポーツ番組からプロの選手の動きを得て、偶々学校の球技大会でプロの動きをそのままにして活躍してしまう。

姉さんが俺の活躍を父と母に嬉々として話すと、近所の評判がと反応を示した。

それからは家から逃げる様に助っ人としてテレビで見たテクニックを使い、俺は注目される様になる。

姉さんが俺の活躍を父と母にもっと話すと、姉の話をますます聞く様になるのだが、何故だろう？
姉さんが父と母の気を引いている気がする。
いや、気のせいだろう・・・・・・。

――――――俺は目を逸らしていたんだと思う。

但し、他人とどう話して良いかわからず、周りは勝手に無口で、近寄りがたいの特別な存在として俺を扱った。

姉さんは俺の活躍を父と母にもっともっと話す。
父と母は仮面を被って、家族の様に振舞ってくる。
姉さんは・・・・・・いや、気のせいだ。

――――――自分の都合の良い様に。

俺も他人とコミュニケーションをとる必要が無くて助かった。
そんな助っ人をしていると、何時しかテレビが来て、プロの技を

一瞬で自分の物に出来る天才と評し、俺はその天才とやらに成りきった。

姉さんが喜んでくれる。
だから・・・・・俺は姉さんの為に頑張ろう、そう思った。
でも姉さんは・・・・・・いや、気のせいの筈だ。

――――――あの頃は、自分の唯一の居場所だと思いたかったから。

それから俺は高校生になり、テレビによく出る存在になった。
当然、家族は外面だけは完璧だ。
理想的な家族という仮面を被った家族。

俺にとっては、それが気に入らなかった。
姉さんがとても――――――喜んでいる。(キブンガワルイ)

それでも時は進み、会話の無い車内で、俺は星を見ていた。
そして、突然真っ暗になった。
目が覚めると、そこは病院のベットの上だった。
両親が死んだと聞かされた。
涙なんて出やしなかった。

悲し過ぎたんじゃなく、知らない両親だったから・・・・・・涙が出なかったんだ。

姉さんが、俺を――――――見てくれなくなった。(オレヲミテクダサイ)

だから今度は俺が、姉さんを――――――守ろうと思った。

退院して、俺はまた脚光を浴びるが、対照的に姉さんは何もしなくなっていった。

俺は姉さんを守ろうと思った。

だって、姉さんは今まで俺を見てくれていたのだから。

そのくらいの恩返しは当然じゃないか、唯一の――――――肉親なんだから。

――――――実際の姉は、家族という物に憧れて、俺をダシにしていたんだ。

おかしい、流れが見えない。

寧ろ、おかしな感覚が俺に流れてくる気さえする。

俺は瞬く間に世間から墜ちていった。

周りには誰も居なくなった。

親戚を名乗る物達は、狡猾に俺と姉さんを食い物にして、全てを奪っていった。

気付いた時には幾ばくかのお金だけ・・・・・俺は本を読む事に没頭し、読めるモノなら何でも読んだ。

本当に、なんでも・・・・・。

数多くの本の知識を得て、魔眼なんて無くたって生きていけるんだと思い出した。

知らない内に魔眼に頼り切ってしまっていて、気付けなかったんだ・・・・・。

しばらくすると家も差し押さえられて、すぐに出なくてはならな

くなった。

その次の日の朝、俺の頭に知らない知識や感情が流れ込んで来た。
そのあまりの多さの情報の波に頭が破裂しそうな感覚さえ感じ、
頭痛で痛む頭を押さえた。

――――――ピンポーン

インターホンが鳴る。

「・・・・・・確かに驚いたけど、これの何所が――――――」

地獄なのよ？と明日菜が言い終わる前に、情報飽和による頭痛で
頭を押さえた俺がドアを開き――――――

――――――刺された。

「ぁ？　ぁあ〝あ〝ァァァッ！！　い、痛いッ、た、助けッ、誰か助けてッ！！」

頭痛と刺された痛みにのたうちながら、己の腹を両の手で押さえ、蓑虫の様に無様に転がり、声を張り上げて助けを求めている俺。

そんな俺は、何とか這いながら居間に辿りついた。

玄関から居間まで血のラインが引かれ、血の匂いが立ち昇る。

武道の動きも知ってはいたが、魔眼が無ければそんな動きは使えない。

何より俺は、試合程度の物しか知らない。

この時代で殺し合いをした事なんて無いんだから。

その光景に呆気にとられているネギや明日菜達。

木乃香、のどかの二人は顔を背けている。

「お前さえいなければッ、お前が有名じゃなければッ！」

大学生の男に無残にも刺され続けるのだが――――――

「む？　水仙、お前の傷が治ってないか？」

見慣れている所為か、冷静なエヴァが気付いた。

「ああ・・・・・この日だけ俺は不死の身体になっててね。　刺されても刺されても死なない身体だった。

でも、すぐにしっかり殺されるよ」

やがて、刺され続けていた俺は血溜まりの中で血を失い過ぎて、叫べなくなり、動けなくなった。
いかに死ななくても、痛みはあるし、血が無くなれば動けなくなる。
悲鳴が止み、大量の血溜まりの所為で、むせ返る様な血の匂いが部屋に充満する。
それでも未だ痛みの中で生きているとは露にも思わない大学生は、姉の部屋に向かう。
それから少しして、綺麗な黒い長髪を持った、俺に全然似ていない女性・・・・・俺の姉を引き摺ってきた大学生は、姉の首にナイフを突き立てて、同じ様に何度も何度も何度も何度も刺し殺した。
俺とは違って姉は美人だったな・・・・・。
何で俺だけで満足しなかったんだか・・・・・こうしてもう一度見るとコイツを殺したいと思える。
「ははははははははははっはははっはははっはははは!!」
血塗れの大学生は狂った笑いを残して、凶器の果物ナイフを持ったまま、家を出て行った。
そこで俺はもぞりと動き、微かにしか動かない身体を何とか動かそうと悪戦苦闘し、姉の姿を見た所で――――
――――ドパンッ!!

「「「きゃあッ？！」」」

突然の爆発に驚いた数人が悲鳴を上げ、のどかはあまりの光景に気絶してしまった。

その水っぽい破裂音の正体は、俺の頭部が破裂した音だった。

そして、脳漿と頭蓋の破片、頭皮、髪の毛、眼球、鼻、唇、耳が肉片となって居間全体にこびり付いて、頭部の無い俺の身体が横たわっていた。

その光景は赤とピンクと黒と黄色と白が部屋中に散乱した趣味の悪い絵画の様だった。

一般人組とネギは、全員全身を震わせていた。

木乃香、朝倉、ハルナ、夕映を見ると流石に凄惨過ぎたのか、宴会で飲み食いした物をその場にぶちまけてはいなかったものの、咽(むせ)返(かえ)る様な血の臭いに、手で自分の口を押さえていて、まるで吐くのを耐えているかのようだ。

実際の殺人現場を見て吐く者がいないのは脳がその現実を未だに受け入れがたいと思っているからだろう。

血を見慣れている刹那でさえ、このあり様に顔を背けていた。

明日菜は言葉にならなかったのか、パクパクと口を開いては閉じてを繰り返している。

エヴァは目を逸らさず、ただその光景を見ているが、時々こちらにチラチラと視線が来る。

茶々丸は気絶したのどかを介抱して、チャチャゼロは楽しげにケケケと笑い、月詠は目をキラキラさせている。

「さて、プロローグはこんなもんだ。　少し補足をすると、あの大学生は俺の親を交通事故で殺して逃げた奴だ。
　捕まっているという話を聞かなかったから、逃亡していたらしいがな。
　その逆恨みで、俺と姉さんはこうして殺された。　唯それだけのありふれた話だ。
　最後の頭部爆発はさて置き、実際にお前等が朝食を食べながら、部屋で呑気にニュースを見ていて「ああ、可哀想に運が悪かったね」と他人事の様に思う殺人現場の一つだよ。
　実際に人が死ぬ所なんて滅多に見られないだろ？」

　俺は皮肉げに笑う。

　起きてしまった事は変えられないから、どうしようもないものだから、俺には笑うくらいしか思いつかない。

「何で？　何であんなんされて笑ってられるん？！」

「お、お嬢様ッ？！」

　意外にも、怒ったのは木乃香だった。
　その瞳には悲しみがあり、目尻には涙が伝っていた。

「俺も人殺しだからだ。　何千、何万人も殺している俺が、どうして今更、自分と姉さんしか殺していない人間を憎めと言うんだ？
　確かに憎い、目の前に居れば、殺してしまうかもしれない。
　だが、それは俺だけじゃなく姉さんも殺したからだ。　自分を殺されて恨めるほど、俺は綺麗じゃない。
　傷つけるという事は傷つけられるという事だ。　誰かを傷つけて、自分だけ清廉潔白という訳にはいかない。

当然だろう？　例えこの時、理不尽に殺されたとしても、その後に人を殺しているんだからな。

一人殺せば殺人者で百万人殺せば英雄となるとチャップリンは言った。

だが、どんな理由であろうとも、人を殺しているのには変わりは無いんだから・・・・・・」

俺はこいつ等の反応が予想の範囲内だったので、さっさと次の記憶に飛ぶ準備を始める。

「さて此処からちょっと飛んで、この容姿になった次の世界に行くぞ？」

流石に根源に行くと廃人になるから、飛ばす所は飛ばさないとな。

そう言って、今度は中華風の門が現れ、これも独りでに開いて場面が変わった。

蓮華は出てこないな・・・・・まあ、嫁姑戦争がこんな所で起こるのは流石に厳しいので良かったと喜ぶべき所か？

そこには今の小さな俺が崖下で血塗れになって倒れている所だった。

そして、男女逆転した三国志を駆け抜ける事となる。

ネギ達は仲間と駆け抜けた俺の偉業ではなく、寧ろ原始的な戦争

や飢えた人間が死ぬ所、強姦される女性の悲鳴、略奪によって人が殺されていく所に気分を害していった。
考える事を止め、獣に身を落とした人間が殺される。
悶え苦しみ、呻き声を上げ、怨嗟の声を残し、あっけなく次々と次々と。
そこにはドラマなんて無くて、ただ人間の闘争本能、生存本能で殺し、殺されるだけの舞台があるのみ。
斬殺、絞殺、殴殺、撲殺、射殺、貫殺、焼殺、暗殺、圧殺、水殺、毒殺。
原始的でもこれ程、殺し方がある。
それを・・・・・未来を築きたいからと言い訳して奪い合う。

俺はこの時、自分の記憶を記録としてしか見れなかったけれど、姉さんは俺の事を見ていなかったけれど、それでも大切だった姉さんを護れなかったから・・・・・自分の護りたい者だけは自分が守ってみせると、俺は上手くやって見せると戦った。
それはある時、数千倍の兵士であり、ある時は敵軍の将であったり、ある時は守るべきその人だったりもした。
その試みは確かに成功した。

そして、五胡との戦いが終わり――――――

――――――神の前に、鍛えただけの力で歯向かった俺は結局、最後の最後で何も出来ずに倒れる事しか出来なかった。

そこで自分の力とは全く関係の無い、正に天の助けによって神は打ち倒された。
そして、蓮華を無事救い出す事に成功する。
「今度こそ、ハッピーエンドでしょ？」
朝倉が恐る恐る疑問を投げかけるのだが、あの時の俺は抱締めた蓮華を突き飛ばして微笑み――――――
「えっ？」
誰かから洩れた声が響いた瞬間。
――――――ザシュッ！！
「ゴブッ！」
貫かれた俺は血の塊を吐き出し――――――背中から腕の太さはあろう鋭い棘に刺し貫かれた。

「水仙――――――ッ！！」

唯でさえ血まみれのボロ雑巾の様になっていた俺は、口から大量の血を吐きながら俺の名前を絶叫する蓮華に抱き止められて、地面へと寝かされる。

「水仙！　しっかりして！　何で?!　血が、血が止まらない！どうして止まらないのよぉ?!」

蓮華は泣き叫びながら、手で胸の大穴から溢れる血を止めようと必死になっている。

そんな事では助からない事はわかり過ぎているのに。

そこで太公望が現れ、命を繋ぎ止める奇跡の所業が終わる。

「まあ、一応はハッピーエンドだ」

俺は生き返り、めでたしめでたし、なのだが・・・・・実はそれから半年ばかり後、一悶着あったのだ。

血生臭くは無いが、とても印象に残った事が。

今の生き方を決めるとても大切な思い出が。

そう思いながら、あの出来事を思い返し始める。

第４３翼　ネギの過去、一笑に伏す紫の麗人（後書き）

取り敢えず、こんなんなりました。
いつもより書くのに手こずってしまって投稿が少し遅れてしまいました・・・・・。
可笑しな点があればご一報いただければ修正したいと思っていますのでお気軽にどうぞ～。

読んで下さったとおり、前半はネギの過去にツッコミを入れ、後半は朱然さんの過去を書きました。
朱然さんの過去は大体あんな感じですかねー。
それは置いておいて、年末という事もあり、今年の投稿はこれで最後になるかもしれません。
何分、忙しくなって来たので。
年明けにまた投稿を再開する予定です。
と書きながら、何となくで投稿するかもしれませんが（笑）

あと朗報かはわかりませんが、自分の友達がなんとこの作品の挿絵を2枚程、描いてくれる事になりました。
出来の良し悪し次第で乗せるかもしれません。
どのシーンを書くかは乗せるまでの内緒ですが、自分よりは格段に上手い人だと思うので、お楽しみに～。

次回は恋姫ａｆｔｅｒなお話が続く予定です。
多分話数は四話くらいになると思います。
では皆さま、良いクリスマスと、年末を！

誤字脱字その他諸々を修正しました。

第４４翼　追憶・始ノ章、居心地の悪い朱然

俺が打ちのめされてから半年が経った。

それは・・・・・天下三分が機能し始め、全てが順調になった時。

全ての戦いが終わって、好きな人も出来て、全てが順調な筈だった。

でも、そんな穏かに流れ始めた時の中で俺は・・・・・何所か居心地が悪かった。

俺が掴み取った居場所、それは死んでしまっていたとはいえ、朱然という居場所を乗っ取って得た居場所で、隠している事がどうしても言えなかったから・・・・・。

自分の存在が許されるのかという疑問。
蓮華達が物語の中の登場人物だったという秘密。
憑依してしまう前の■■■■としての記録。
これからこの世界が続くという保証。
イレギュラーが来るかもしれないという仮定。

今までの戦乱の時代はそんな事を考えている余裕なんて殆ど無かった。
唯、自分が守りたいと思った人を守る事で頭がいっぱいだったんだ。
そんな俺は平和な場所で、考えれば考える程、何所かズレてしまっているようで・・・・・。

俺は周りから徐々に距離を取るようになってしまった。

これはそんな昔々の苦くて、愚かな・・・・・・勝手に人を疑って、勝手に臆病になっていた、昔の自分が目の前に居たら殴り倒したくなってしまうくらい馬鹿だったと思える自分の話だ。

「水仙、待って」

徹夜での仕事が終わってから自分の部屋への廊下をシパシパした目を押さえながら歩いていると、後ろから近づいて来た蓮華に回り込まれた。

「蓮華？　どうした、いきなり？」

何でもない様に言ってみる。

「どうしたじゃないわ。　最近の貴方は何所か変よ。　皆そう言ってるわ」

蓮華が言っている意味もわかる、最近の俺は皆に対しての態度が余所余所しくなってしまっている。

調練では自分の部隊を中心に教え、全体調練も自分の部隊は遊撃隊なので他の隊との連携は申し訳程度だった。

文官としての仕事も武将は自分の部屋で行い、終わった物を冥琳に持っていくだけなので、自分から会いに行かなければ顔を合わせる事も無い。

今の俺は自分からの交流を意識して避けているのだ。

「・・・・・仙！　水仙、聞いているの！？」

少しボーッとしてしまったようだ。

「聞いてるよ蓮華。　大丈夫、何でも無いよ。　初めての三国合同の宴は呉(うち)だろ？
俺に何か手伝う事があるなら言ってくれ。　それ以外だったら、少し疲れてるから休ませてくれないか？」

俺は取り繕う。
仮面を被って、何でも無い様に。
気付かれない様に。

だが――――

「何を・・・・・そんなに恐れているの？」

ドクン、と心臓が跳ねあがった。

“恐怖”・・・・・俺の今、もっとも感じている感情の名前。

蓮華は踏み込んでくる。

半年前から蓮華も少し変わった。
何かにつけて俺と一緒に居ようとする。
恋人だと言ってしまえばそれまでだが、何所か違和感を感じるの

だ。
姉さんの様に。
いや・・・・・・単に俺は信じる事に恐れを感じているのかもしれない。

「別に・・・・・・」

それを俺は視線を明後日の方へ向けながらこれ以上、踏み込まない様にと拒絶する。

放っておいて欲しい・・・・・・蓮華の事は好きだし恋人だけど、でもそれだけだから。
呉の皆、義母さんや義父さん、義妹達は家族のというか、自分を捨ててでも守りたい人達。
他人と守りたい人の境界ははっきりとしてはいるが、俺にとって恋愛感情はとても希薄なモノなのだ。
蓮華の事は好きだ。
断言できるし、これは間違いない。
でも、恋か？愛か？と聞かれれば俺は首を傾げてしまう。
ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ。
ソノ感情ハ、守リタイ者ヨリモ更ニ上位に位置ヅケラレルモノナノカ？

「話してくれなくては何もわからないわ！」

蓮華が俺に詰め寄って、キッと見上げてきた。

蓮華はそう言うが、言える筈が無い。
自分が異世界で死んで、空っぽだったこの身体に憑依した。
それは、この身体を結果的に奪ってしまった事に変わりは無いし、

この世界で俺が関係した為に何かしら変わってしまった人も居る。
助けた人なら礼を、苦しめた人なら怨嗟の声を。
俺は助けたかった、救いたかった、守りたかった。
もう大事な人を目の前で失いたくないから。
自分勝手に自分の守りたかった人を守って、見知らぬ人を殺してきた。

「言ってくれてもいいじゃない・・・・・私は貴方の事をまだほんの少ししか知らないわ・・・・・。
私は貴方の事なら何でも知りたい。　何でも受け入れてあげたいと思うのは可笑しな事なの？」

真っ直ぐな・・・・・本当に真っ直ぐで、俺の事を想ってくれている。

そんな気持ちを感じた。

でも俺は・・・・・その優しさも、何所かで疑ってる・・・・・。

手に入れてしまったからこそ、離れて行ってしまう恐怖を強く感じてしまう。
姉さんが俺を見てくれなくなった時、俺は目を逸らす事でその恐怖を遠ざけていた。
でも俺は自覚してしまった。
俺自身の記録を見て、蓮華達と過ごす内に自覚してしまった。

臆病になってしまったんだ、俺は・・・・・。

張りつめた糸は――――――

「何でも受け入れてくれるって言ってくれたけど・・・・・・でも人間って、そこまで優しくはなれないって思い込んでしまうんだ・・・・・・。

少し前の俺の周りには・・・・・・そんな人、誰も居なかった」

こんな事が言いたい訳じゃないのに・・・・・・蓮華や皆を傷つけるって、わかってるのに言葉を紡いでしまう。

――――――いつか切れる。

■■■■の記録が邪魔をする。

皆と戦って、人間がそこまで酷い存在じゃない事くらい学んだ筈なのに。

何故か口から出るのは拒絶の言葉。

■■■■の周りには、奪っていく人間しか居なかった。

搾取していく人間しか居なかった。

上辺だけしか見てくれない人しか居なかった。
安っぽい同情しかくれる人は居なかった。

受け入れてくれる人なんて・・・・・結局、誰も・・・・・。

その記録が俺に捻くれた言葉を言わせる。
過去の事は自分だったとはいえ、他人事の記録としてしか見れない筈なのに。

「何を言われても受け入れるなんて、あり得ないよ。
例え受け入れられたとしても、後になってどんな反動が来るのか、それが怖くて・・・・・。
そう思ったら余計に悪い方へ想像して、重荷になりたくなくて・・・・・なら、黙ってるしかないだろ・・・・・・？」

乾いた・・・・・それでいて皮肉な笑みを浮かべながら言う。

違う・・・・・本当はこんなこと言いたい訳じゃないのに！

俺の口から、今までに溜められていた不安が、恐怖が、言葉が止まらずに吐き出されていく。
言い出したら止まれない。

言えない・・・・・君達は物語の登場人物で、自分が守りたいと思っただけだったから守っただけだなんて・・・・・。
姉さんの様に俺を見てくれる人が居なくなってしまったら、それ

は俺自身の全てが否定される事と同じだから・・・・・・孤独は俺にとって、死と同じだから！

「水、仙・・・・・・・？」

蓮華は目を見開き、後ずさる。

「確かに俺は・・・・・・蓮華の事が好きだ「なら！」でも分からないんだ・・・・・・その気持ちが本物なのか。

もしそれが本物だったとして、俺の事を伝えた時、皆が・・・・・・蓮華が離れて行ってしまうかもって・・・・・・。

そう考えたら・・・・・・余計に怖くて・・・・・・怖くなって・・・・・・。

見えない気持ちがより一層見えなくなって・・・・・・だから・・・・・・」

しばらく放っておいてくれと言い出そうとした時、蓮華は縋るように声を張り上げた。

「貴方を一人になんて、できる訳無いじゃない！」

本当は、もう一人になりたくない！

傍に居て欲しい！

矛盾する二律背反。

でも・・・・・・例え中途半端な距離でも、完全に嫌われて周りに誰も居なくなるのなんて俺には耐えられないからッ！！

だから――――――別れよう？

俺は気が付けば、決定的な言葉を言っていた。
壊れてしまうかもしれないその言葉を。
手放してしまえば、例え触れ合える程の近さに居なくても俺を見てくれるのならと。
中途半端でも、こんな不可解で不可思議な恐ろしさに怯えなくても良いかもしれないからと。
言ってはいけない言葉だとわかっていたにも拘らず、簡単に。
口に・・・・・してしまった。

「水仙！！」

――――――パン！

乾いた音と共に、俺は蓮華の平手を受けて横を向いてしまい、蓮華が俺の両腕を両腕で掴んだ。

「お願いよッ！
私は貴方を信じたいのッ、だから私を信じさせて・・・・・そして・・・・・私を信じてよ・・・・・もう、貴方を失いたくないのよ・・・・・あんな事、もう・・・・・嫌なのよ・・・・・」

その蓮華の言葉に俺は――――――

無言でその場を後にした。

背後に蓮華のすすり泣く声を聞きながら・・・・・・。

結局、俺は逃げてしまったのだ。

人を疑って生きた■■■■としての記録を話せば、離れて行ってしまうという恐怖に、守って手に入れたその場所を手に入れたからこそ、手に入れてしまった恐怖に耐えきれずに・・・・・・。

そして、その気持ちに確信が持てなくて・・・・・・自信がなかったから・・・・・・俺は逃げ出した。

それから数時間後、俺は何も持たずに荒野をフラフラと歩いていた。

歩けどもそこは荒野、踏み固められた道ではなく、道も定めず、ひたすら歩いているだけだった。

最低だ・・・・・なんであんな事、言ったんだ・・・・・・かなり支離滅裂な事、口走ったよな・・・・・・。

思考が繰り返され、一周して、また始めに戻ってきた。

謝らないと・・・・・・でもどんな顔して謝れば・・・・・・わからない、こんな経験も記録も知らないし、そもそもした事が無い・

・・・・・。

そう言えば俺、誰かに謝った事なんてないし、人を好きになった事も初めてだったっけ・・・・・・。

そう、■■■■の記録に恋の経験などある筈ない、朱然としてもこれが初めての体験だ。

テレビやドラマ、小説で散々取り上げられて尚、廃れる事が未だにない題材。

■■■■の時に、本で散々読んだモノ。

今までは何かしら忙しくて・・・・・・騒がしくて・・・・・・それに目を向ける暇が無かったのだから。

蓮華・・・・・泣いてた、よな・・・・・・？

朝からずっと歩き通しだったが、考え事をしていたからか常人よりも遥かな距離を進んでいた。

最早、何所を歩いているのかを見失っている。

方角的には西へ西へと歩いてきたが、この時代での遭難はある意味でかなりの危険が伴う。

日本の様に駆け擦り回れば、何所か整備された道が見つかる訳じゃない。

此処は広大な広さを持つ中国で、今の時代は人里なんて疎(まば)らだ。

踏み固められた道を進まないのであれば、切株の年輪や大陽の位置を大雑把な地図と照らし合わせて進まなくてはならない。

「・・・・・・ッ」

何もない所に蹲く。

そのまま俺は倒れ、土で汚れたまま仰向けに転がる。

それから、どのくらいの時間が過ぎただろうか？

日は沈み、月が登って、星が瞬き始める。

馬鹿だ・・・・・自分の馬鹿さ加減に呆れる・・・・・・今回の事は最大級かもしれないかも・・・・・・。

そう思った所で一気に疲労が押し寄せ、意識が暗転した。

目を覚ますとそこは澄みわたる蒼穹で、俺の身体はガタゴトと揺られていた。

硬い場所で寝ていた為か体中が痛い。

特に頭と喉が痛い。

寝過ぎた為に少し脱水症状を起こしているようだ。

この振動から察するに・・・・・荷馬車に拾われたっぽい？

「おお、目が覚めたかい譲ちゃん？」

?を握った凄い髭面のオッサンがニッカリと笑って、一旦馬車を止めてから覗き込んで来た。

本来なら誰が譲ちゃんだと反論する所だが、今は頭痛であまり話したくない。

「誰？」

それでもまずは現状を把握しなくてはならない。

なので頭に走る鈍痛に顔をしかめながら、掠れた声で問いかける。

「ただの行商人だよ。　譲ちゃんは丸二日寝てたんだぞ？　道で拾った時にゃ、そら驚いたんだ。

なんせ顔は見た事ねぇくらいに別嬪（べっぴん）で、召物はそこらじゃ売ってねぇ上物と来た！

どこぞの山賊に見つかるより先に見つけられたのは運が良かったんだぜ？」

ガハハと豪快に笑って、また馬を走らせる。

「じゃあ、此処は・・・・・・？」

「もう蜀の中だぜ？　ああ、それと拾ってやったんだ。　居る間は、お前さんにも働いてもらうからな？」

・・・・・・マジで？

こうして朱然のプチ家出が幕を上げるのだった。

第４５翼　追憶・会ノ章、叱咤される朱然

蜀の領内に入り、俺は拾ってくれたオッサン（名前を揚雲（ようぅん）と言うらしい）は、三国同盟が成立する前から商人だったとかで、今では三国を旅する荷物の運送業?をしているとか何とか。

呉から蜀へ行く途中で俺を見つけて～、という流れになったらしい。

俺は拾われた恩もあり、オッサンに連れられて蓮華との関係、仲間との関係を考えながら悶々と看板娘をしていた。

一応、起きてすぐに腹が減ったので昼餉を食べている時に男だという事を話し、恒例となってしまった女だと思っていたというリアクションを頂いた。

それから更に6日後、俺は蜀の都である成都に着いたのだった。

因みに何故こんな短期間で異常な距離を進んでいるかと言うと、都まで俺とオッサンが交互に交代しながらほぼノンストップで走らせたからです。

俺が馬に乗れるし、御者も出来ると言ったら働かざる者食うべからず!とオッサンが言うからだ。

馬が疲れたら休憩↓俺↓休憩↓おっさんのローテーションを繰り返してる感じ。

ただ何故か急いでいるらしい。

あと最初に休憩した街で呉に手紙を出しておいた。

勝手に旅に出たのは申し訳ないと思っているし、気持ちの整理をしたいとも書いておいた。

三国同盟の宴には間に合う様に帰る、とも・・・・・・最後にゴメンと書き加えて・・・・・。

「はい、お釣りになります」

「どうも」

オッサンが蜀での用事を済ませる為に店を離れたので、俺は一人で店番をして釣り銭をお客に渡して次のお客の対応をしようとしたその時。

「いらっしゃいま、せ？」

「えーっと、何にしようか、な？」

「何故、貴様が此処に居る？！」

劉備こと桃華と関羽こと愛沙が居た。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

「おい、何か言え！」

しばしの沈黙―（関羽は五月蠅いのでスルー）。

「・・・・・・何を御所望で？」

「そんな事を言えと言っているのではない！　何故、貴様が此処にいるのだと聞いているのだ！」

俺は視線を逸らしながら言う。

それでも尚、関羽はスルー。

というか、この可能性は無くは無かったと考えていたが、まさかいきなり見つかってという展開は予想だにしなかった・・・・・・それと関羽が五月蠅い・・・・・・。

「・・・・・・水仙さん、ですよね？」

ジト目で此方を呼ぶ桃華。

「・・・・・・だったら、どうしたんだ桃華？」

「貴様ッ！　桃華様の真名を勝手に呼ぶんじゃない！」

関羽が俺に何所から出したのか、青龍偃月刀を突き付けて来た。

「何で貴方が此処に居るんです？　呉は今、三国同盟の宴の準備で忙しいんじゃ？」

「色々あってな・・・・・・」

「きっさま～～～～ッ！！　こうまで私を無視してタダで済むと思っているのだろうなッ！！

というか桃華様まで私を無視しないでください！」

気まずい・・・・・・。

「私に散々責任とか、後悔するなとか、仕事はしっかりしろって言ったのは水仙さんだったと思うんですけど？」

ニッコリ笑いながら怒りマークを付けて、地味な嫌味を言ってくる桃華。

「別に・・・・・君には関係ないと思うんだが？」

俺もニッコリとしながら怒りマークを付けて言う。

「私を無視するなッ！！「関羽」（愛沙ちゃん）ちょっと五月蠅い！」・・・・・・うぅ、桃華様まで・・・・・・しくしく」

関羽がデフォルメ調になってイジけたが、それすらスルー。

俺と桃華のお互いの背景にゴゴゴ…という効果音が付きそうな感じで睨み合いが続いたが、それは置いておくとしよう。

「で実際の所、なんで蜀の・・・・・・しかも露店をしてるんです？　何かしらの用事で蜀に来るなら、こっちで色々おもてなしとかしましたけど？」

「・・・・・・家出だ」

「えっ？　家、出？」

ニッコリと笑ったまま、あー…、何だろう？この何とも言えない気持ちは？的な表情を浮かべた桃華。

自分自身、蓮華と喧嘩をしたというか、よくわからない前後不覚な精神状態だったからなぁ・・・・・・。

「悩みがあるんなら一応、聞きますけど・・・・・・？」

何か凄い同情されて惨めな気分になった・・・・・・でもこれはある意味、相談できる？

今は何とか落ち着いたし、何も知らない第三者から教えてもらうのも・・・・・意外と良いアイディアかもしれない。

そう考えた俺は桃華と関羽に今までの経緯を話した。

最近感じたズレ、違和感や初めての感覚への不安、戸惑いまで。

最悪、呉から追い出されたとしたら、このまま世界を旅するのも悪くないかもしれない、と苦笑しながら。

もちろん秘密の事は伏せて。

「あははー、馬鹿ですね水仙さん？」

「貴様、馬鹿だろう」

おぉ・・・・・桃華が笑顔、関羽が真顔で言い切ったよ・・・・・しかも超とか、物凄いとか、真剣という単語が頭に付くくらいの表情で言い切りやがったよ、この娘ら・・・・・。

「君等は良いね、悩みがなさそうで・・・・・」

流石にイラッと来たので、皮肉で返したのだが――――

「冗談抜きで馬鹿ですよね水仙さん？　いいですか？　その秘密でどうこうなるんなら、始めから手を出さなければ良かったんです！　それになんですか！　聞いているこっちが呆れるほどの純情っぷりは！」

凄い呆れられた。

仕方ないじゃないか！

そんな体験した事無かったんだから！

「ま、全くですね！　女という生き物を理解していない」

ちょっと待て関羽・・・・・お前、今ドモったろ！

絶対にお前自身も知らないだろ！

そんな事を思った所で、桃華が真剣な眼差しを向ける。

それに対して俺は押し黙った。

前には無かった威圧感・・・・・と言えない程の小さな此方を窺う様な気配。

それを桃華は俺に放っていた。

「私は貴方の所為で未だに王としての在り方に悩んでます。　でも、そのお陰で私はこうして王で居られるんだと思います。

だから、私は言わせてもらいますね？　皆の間違いを勝手に穿り返して、勝手に直して、勝手に消えるなんて、貴方は自分勝手過ぎます！」

「全くです。　こんな者に負けてしまった自分が恥ずかしい限りですよ。

まさか自分の仲間やご主人様を本当の意味で信頼していないとは・・・・・何故この様な悩む必要も無い事を今更こんなにも悩んでいるのか・・・・・・最優の将が聞いて呆れますね」

ズンと、その桃華と関羽の言葉に俺の心が軋んだ気がした。

そう、なのかな？

確かに俺は家族と言ってくれた人を失いたくないから、という強迫観念の様なモノに突き動かされて雪蓮や冥琳を助けたし、血の繋がった父親を殺して蓮華を救い出した。

自己満足でも俺は失いたくは無いと思ったから・・・・・。
今の俺は自分自身が原因で何かしらの不幸が来るのを恐れているから・・・・・いや、単に臆病になっているだけだった・・・・・？
でも・・・・・。
「忘れないでください。　絶対に」
何を、とは言わずに桃華と関羽は身を翻してそのまま城へと帰ってしまった。
「何というか、逞しくなっちゃって・・・・・」
そんな事を呟いていると、大通りの方からオッサンが現れた。
「おう、店番ご苦労な。　ん？　どうした微妙な顔して？」
怪訝そうな顔で聞かれた。
「ちょっと昔の知り合いに合って一喝されまして・・・・・」
苦笑いで、それこそ苦々しくオッサンに言う。
「ほぅ・・・・・それは、まあ何とも言えんな・・・・・今日で蜀を発つから準備しておいてくれ」
おっさんが事も無げにいきなり言ってくれた。
「は？　今日着いたばっかりなのにまた移動というのは・・・・・？」

突然過ぎる事に俺は呆気にとられながら反射的に話を聞いていた。

「やっと予定が合って、会えるかもしれんという文が届いてな・・・・」

はて？

もしかして恋人？

でもおっさんには嫁さんが居ると話を聞いたし・・・・・・。

まさか別居中？

「？　誰かと会うんですか？」

本当なら立ち入った事は、華麗にスルーするところなのだろうが、俺はついつい聞いてしまった。

「内緒だ」

ふふん、と笑っておっさんは品物を手早く片付け、俺とおっさんは慌ただしく蜀を立つのだった。

本当に誰と会うのだろうか？

疑問を胸に、俺は蜀を後にする。

あやふやな気持ちを抱えたまま、荷馬車に揺られて魏へと向かう。

果たして答えは得られるのだろうか？

そんな事はわからない。

明確な答えなんて無いのかもしれない。

でも・・・・・それでも何かしらの答えを一旦は出さなくては

いけない。
だから見つけてみせる。
きっと・・・・・・必ず。

第４６翼　追憶・罪ノ章、許された朱然

蜀での荷物を大急ぎで積み込み、露店を畳んで馬車に積み込んだ。
そして、オッサンが?をとって蜀を出て魏へ。
ローテーションで進んで一週間。
それ程の強行軍で辿り着いた。

魏の首都、洛陽へと着いて早々、オッサンは城へと駆けて行った。
その間、俺は蜀でやっていた通りに露店を広げる。
まあ、露店はオッサンがやる事無い時にやってるだけで良いと言っていたので、何かしら行きたい所があるなら畳んで好きな所に行っても良いとも言っていたが、特に無いので店番をする。
店番を始めると俺の容姿に惹かれてか、客が寄って来る。
そうこうしている内に、またもや客だ。

そう思って顔を上げると――――

「む、お前は朱然ではないか」

「水仙じゃない。　何でこんな所にアンタが居るのよ?」

蜀で桃華と関羽に会った様に、此方でもいきなり知り合いに会ってしまったのだった。

「久しぶり」

「そうだな」

俺と秋蘭は普通に挨拶し合った。

「で、アンタがこっちに来るなんて連絡は全く無いんだけれど?」

ネコミミフードを被ったネコミミ軍師は眉間に皺を寄せて言う。

「実は」

「実は?」

「呉の皆、というか蓮華とケンカして家出中」

軽ーく言ってみた。

「バッカじゃない?」

普通に呆れられた。

「朱然よ。　仮にも一国の将が家出とは感心しないぞ?」

ああ・・・・・何と言うか、うん、何とも言えないよ。

「それは感じてるけど、それでもあのままで居たら、遅かれ早かれ俺は呉を出ていたと思う。

というか蜀で劉備と関羽に説教された」

「何というか、あの能天気王に説教されるって言うのもアンタの酷さを如実に表してるわね」

「確かに劉備殿は、滅多に人を叱ったりはしないと聞くが・・・・・」

「そう言えば秋蘭、アンタ今日人と会う約束があるって言っていた気がするけど？」

突然に桂花が秋蘭に話を振った。

「おお、そう言えばそうだったな。　どうだ朱然、城に来ないか？　華琳様もお会いしたいとボヤいていたからな」

「・・・・・・挨拶くらいしておくかな」

俺はそう呟いて、露店をすぐに畳んで城へと向かった。

「私に面会を求めていたのは確か・・・・・・揚雲だったか桂花？」

「知らないわよ」

「え？　揚雲のオッサン？」

秋蘭の口からまさかのオッサンの名前が出たので、つい口に出してしまった。

「何だ、知っているのか朱然？」

「いや、魏で予定が噛み合わなくて会えなかったけど、今回やっと予定が合いそうだとか言っていたから・・・・・・」

「・・・・・朱然、その揚雲殿の事は良くは知らないのだな？」

「？　ああ、妻が居る事ぐらいしか知らないけど？」

俺は休憩などの途中で断片的に訊いた事を言う。

「そう、か・・・・・・なら言っておこう。　揚雲殿の妻は私の副官だったのだ」

「え？」

何故か、嫌な汗が滲み出した。

「その副官は、赤壁での戦いで朱然の放った雷の矢を受け――――――」

――――――死んだ。

殺した、殺した、殺した殺した殺したころしたころしたころしたころしたコロシタコロシタコロシタコロシ――――――

「ちょっと？」

桂花の声にハッと我に返った。

俺が・・・・・殺した？
知り合った人の身近な人を・・・・・・奪ってしまった。

――――――奪い取った代償。

知らない他人の命を摘み取ってきた。
知っている人と殺し合いをした。
大事な人の為にその人を殺した。

「揚雲殿に副官の遺品を返していなかった。　最近になって受け取りたいと言って来てな・・・・・・」

二週間程度の旅を共にしただけの関係でも、俺にはありがたかった。
何も聞かずに俺を連れて行ってくれたのに・・・・・・俺は・・・・・。

「戦はそんなものじゃない。　何時殺されても文句は言えないのが戦よ。
それこそアンタが悩むだけ無駄じゃない」

桂花は言う。

その通りなのだ。
戦は殺し殺されるのが当たり前なのだから。
殺される方が・・・・・油断する方が悪い。

わかっている。
わかってはいるのだ。
でも知っている事と、体験する事は違う。
それはよく知っているつもりだ。

「お？　お前さん、何で夏候淵将軍と一緒にいるんだ？」

そこには、揚雲のオッサンがいた。
俺は俯いてしまう。
いや、俯くしかなかった。

「その話は後で、まずは遺品を」

「ええ、わかりやした」

そう言って二人は秋蘭の部屋へと向かい、少ししてオッサンにとって形見となる遺品を受け取って戻ってきた。
抱えられる程の葛篭（つづら）と、金属でできた一対の棍。
唯、それだけだった。

「で、お前さんは将軍と知り合いって事は此処で俺とお前さんは別れるって事で良いのかい？」

おっさんは俯いたままの俺に言う。
いつも通りに。

「・・・・・まない」

それに対して俺は、謝っていた。

「あん？」

オッサンは困惑する。

「・・・・・すまない。　俺の名は呉の将、朱然。　オッサンの大切な人を・・・・・・奪った張本人だ」

「朱然？！」

「アンタ？！」

桂花と秋蘭が驚きの声を上げた。

それはそうだろう。

殺した者が殺された者の縁者なら、命を狙われる事すらあるのだから。

だが――――――

「・・・・・そうか。　まあ、あんなご時世だったしな」

揚雲は苦笑しながら頭を掻いて、何とも言えないといった風に言った。

でもいざ奪ってしまった人を目の前にして、俺は納得が出来なかった。

黙っている何て・・・・・出来やしなかった。

「オッサンは俺を攻める権利がある！　いやそうしないといけない！　そうだろう！？」

俺は揚雲に詰め寄って、襟元を両手で絞め上げていた。
だがオッサンは俺の両手を掴んで、ゆっくりと引き剥がして口を開いた。

「確かに憎い。　憎いけどよ・・・・・お前さんも目指す物があって、そうせざる負えなかったんだろ？
それがどんなもんかは知らねぇが、お前さんの想いがアイツの想いよりも大きかっただけじゃねぇか？
戦場じゃあ、相対したら殺し殺されても文句は言えねぇ。
確かにお前さんを知らなけりゃ、俺はお前さんを憎んでたかもしれねぇが、生憎と一緒に旅をして、馬鹿が付く程に良い奴だって事を知っちまった。
俺はお前さんを気に入っちまったんだ。　なら俺は・・・・・・お前さんを許すぜ。
ほれ、その酷ぇ顔を上げやがれ！　胸を張れ！　私を倒したのはこんな縮こまってる奴じゃねぇ！ってアイツなら言うだろうさ！
これからも見せてくれや！　お前が目指すその先を！
俺も納得できるくらいに誇れる未来を！
何より妻の事を冗談で言い合えるくらいになった方が、妻も喜ぶだろうよ！」

俺は愕然とした。

オッサンがとても強く思えた。
神と対峙して力で打ちのめされた時の様に、今度は心を打ちのめされた。
己の弱さを思い知らされた。

「きっと、お前さんは強くなれる。　俺ぁ、そう思うぜ？」

何故、こんなにも強く在れるのだろう？
俺もこれ程に強く成れるだろうか？
そんな事を思った。

「おっさんに、俺の真名を・・・・・受け取って欲しい。
姓は朱、名は然、字は義封、真名は水仙。　これからは真名で呼んで欲しい。
呉に来た時には是非寄ってくれ。　出来る限りのもてなしをさせてもらう。
俺はオッサンの様に強くなりたい。　力だけじゃなくて、心も」

真摯にオッサンを見る。

「よ、よせやい！」

オッサンが照れた。

「文聘仲業（ぶんぺいちゅうぎょう）。　俺の自慢の嫁だ。
その名を・・・・・忘れんでやってくれや」

「ああ、絶対に忘れない。　絶対に・・・・・」

そんなやり取りを経て俺は揚雲を見送り、華琳に挨拶をしてから三日程城で手伝いをして馬と食料を分けてもらい。
呉へと帰ったのだった。

第４７翼　追憶・結ノ章、憚らず泣く朱然

呉に帰って、俺は一人一人に謝った。
一人一人の部屋へ出向いて。
幸いにも蓮華以外は皆、苦笑しながら許してくれた。
もっとも祭にはとっておきの酒を要求され、冥琳には文官の仕事を2週間手伝わされる予定で、亜莎には一日付きっきりで色々教える事になったし、穏には家にある蔵書を幾つか寄贈し、思春には模擬戦をする事、雪蓮、明命、小蓮にも一日何かしらに付き合うという約束をさせられた。

最後に蓮華はというと実は数日前に建業を発っていたらしい。
俺はすぐさま建業を発った。

呉の沿岸部の小さな港街。
蓮華は少し離れた白い砂浜に居た。
その眼差しは地平線の更に向こうを見ていて・・・・・・とても綺麗だと思った。
蓮華が気付いて此方を向いた。
風に吹かれた髪を抑えながら。
そのちょっとした仕草に、胸が高鳴った。
今度こそ・・・・・・恋に堕ちた、とでも表現すべき状況なのだ

ろうか？

「・・・・・思ったより元気そうで良かった・・・・・」

今にも泣きそうな、でもどこか怒った様な顔の蓮華が居た。

「蓮華・・・・・久しぶり」

俺は久しく会った蓮華に力無い笑みを浮かべながら言う。

情けない事に、他の皆にお膳立てされた俺達はやっと向かい合う事が出来た。

一番最初に謝ろうとして蓮華の部屋に向かったのだけど。

そこには肝心の蓮華が居なくて、戸惑った。

何でも俺の文が届くまで泣き続けて部屋を滅茶苦茶にする程に情緒不安定になったらしい。

まともな思考が出来るまで、離れに軟禁生活を送っていたと聞かされた。

本当に、今回は済まなかったと思っている。

「泳がない？」

「いいよ」

そんな短い言葉で、何故か着替えの為の小屋に用意されていた水着に俺達は着替え、誰も居ない海岸で手を繋ぎながらそこそこの深さの場所まで歩いた。

季節は春と夏の間。

なので海の水の温度は少しばかり冷たいかもしれない。

俺は蓮華の手をとってしばらく進んだ。

中々の距離を進んで爪先立ちなら何とか俺の足が付くが、蓮華は

もう足が付かない場所まで来てしまった。

この間に会話は無い。

蓮華は今の俺の両手に掴まっている。

まるで蓮華が泳げなくて、泳ぎを俺が教えているかのような形だ。

「だいぶ沖まで来たかな・・・・・・戻る？」

「ううん。　もう少しだけ此処に居させて」

そうして俺は蓮華が疲れない様に腰を両手で掴んだ。

その所為で、今度は高い高いをしてるみたいになる。

この世界の服屋はビキニまで造れるという無駄なハイスペックを誇っている。

その為、今蓮華が来ている真っ白なビキニとそれを押し返す様な見惚れてしまうくらい素晴らしい肢体が眼前に晒されている。

でも、不思議と不純な気持ちにはならなかった。

「水の中だとこんなに軽いのになぁ・・・・・・」

思わず思った事を口に出した。

「！　失礼ね！　私は水の中じゃなくても軽いわ！」

再会してあんまりにもあんまりな事を口走ってしまった。

「あ、違ッ！？　ぶわッ？！　ちょ、違うよ！　がぼッ、ごほッ？！　体重の話じゃないって！」

即座に蓮華が自由だった両手で俺の頭を海面に押し付けた。

って！
水が鼻にッ！！
鼻の奥が痛いッ！
塩辛ッ！！

「ぶはッ！！　げほッ、げほッ！！　睨まないでくれませんか蓮華さん・・・・・・？」

蓮華が凄い睨んでいる。

「だって！　久しぶりに会ったと思ったら私が太ったみたいに！」

「いや！　そういう意味じゃないから！」

俺は慌てて訂正しようとして「むぅ」と唸ってから口を開いた。

「何て言うのかな・・・・・・」

俺はまだ喉奥にありそうな気がする海水を咳をして吐き出し、ぽつりぽつりと話し始めた。
昔の事、今まで隠していた事の全て、悩んでいた事、恋という感覚があまりにも未知の感覚で戸惑っていた事、旅の話等々。

「今まで人を好きになる余裕なんてなくて、本気で好きになるってこんなに重くて苦しいんだって、そう思ったんだ。
それに手に入れたこの平穏が、沢山の犠牲の上にあるって事も漸く実感し始めたみたいでさ・・・・・・」

俺にとって恋という感覚は今まで感じた事の無い未知の気持ちで、初めてで、手に入れるのが怖くて。
今まで戦って得た平穏は、オッサンの事があって漸く実感した・・・・・。
ようやく手に入れると思った所で、今度は失ってしまう恐怖に駆られてしまった。

「それに、俺の事を好きだって言ってくれる人が居るのが、こんなにも嬉しいなんて思わなかったんだ。
だから――――――」

――――だから俺は怖かったんだ。

そう言った瞬間、蓮華は俺を抱締めた。

手に入れられるかもしれない寸前に、自分という存在にそれは手に入れられるのか？という疑問が浮かんだ。
その疑問はいつしか俺の中で、深い澱になって沈んだ。
そして、やっぱり自分には手に入れられないと決めつけて、蓮華を突き放したんだ。
俺が迷ったばかりに、影ばかりを見てしまったから・・・・・・。
だから俺は、現状維持をまず考えて、上手くいかなくなったら放棄してしまいそうになった。
蓮華から逃げて、呉から逃げて、三国すら捨てる。
そんな自己の放棄とも言える選択を選びそうになった。

幸いにも桃華に止められたが。
そして、逃げる事を選べなくなった俺は現状維持に留まろうとした。
でも、オッサンに立ち止まる事をしないと誓った。
なら後は先に進むだけしか残されていない。
先の見えない真っ暗闇の支配する未来へと。
でも、俺は脆弱だ。
力だけでも、心だけでもダメだった。
俺はその脆い自分にしがみ付いていたい。
愚かだと思っていても止められない。
この世界の生活で、俺は一体何を得たのだろう？
その問いに、今回の旅が答えをくれた。
自覚できるのが唯一の救いだったという事。
自覚が出来ていれば補強をする事が出来るのだから。
弱点は克服できる事。
頼る事で自分を強く出来る事を知った。
全て無かった事にするのは自分という存在を、全て無くす事と同義だった。
頼って、頼られる事が俺の存在が許されるという事と同義なのだと感じた。
そして、どっちつかずなのは、お互いにとって悪手でしかない。
選べばそれは進む事になる。
良くても悪くても、進む事が出来る。
俺は間接的過ぎた。
何事も自分を間接的にしてしまった。
自分がどうしたいのかを直接的に表現する事が殆ど出来なかったと言っても良い。
だから俺は進む。
今すぐには難しいけれど、きっとその手段を手に入れて見せる。
まずは第一歩だ。

俺は・・・・・蓮華が欲しい。
それが俺の初めての直接的な行動だ。

蓮華の胸に頭を抱き止められる形になる。
俺の頭に当って、男には無い柔らかさが形を変える。
俺も蓮華を腰の辺りに回して抱き締める。
抱きしめると折れてしまいそうなくらいに柔らかな感触が在った。
潮風の臭いよりも、女の子特有の甘い香りが鼻孔をくすぐった。
鳩尾に付けられた額からトクン、トクンと蓮華の鼓動が、生きているという証が脈動しているのを感じる。
それが、とても俺には心地が良かった。
蓮華が俺を抱締めたままゆっくりと、話し始めた。

「ずっと・・・・・言ってほしかった。　やっと・・・・・言ってくれた。
私ばかりが弱音を吐いて、貴方に頼られない事が悔しかった。
好きだった人が悩んでいる時、何も出来ない事がとてももどかしかった・・・・・」

蓮華は泣いていた。

「・・・・・ごめんッ、ごめん、蓮華ぁ・・・・・」

釣られて自然と、涙が溢れた。

俺達は泣いた――――――

誰も居ない海で――――――

気持ちは見えないし、形も無いし、掴めもしない。
でも、確かにそこにあるんだと。

それだけは――――――

それだけは忘れないよう・・・・・確かにこの時、俺は胸に刻んだんだ。

大事に、大事に、その想いを――――――

――――――忘れない様に。

第４８翼　追憶・落ノ章、頂かれた朱然（前書き）

明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願いします。

６００万ＰＶ＆５０万ユニーク達成しました。
本当に皆様には感謝してもしきれません！

第４８翼　追憶・落ノ章、頂かれた朱然

「んん～」

目を覚ます。
アルコールが残っているのか頭には未だに靄が掛かっている。
俺は額に手を置こうとして――――――

――――――ギシッ。

「む？」

俺の腕が動かない。
というか、両手両足首に縄の感触。
でもってそれは身体の自由が殆ど無いという事で・・・・・・。

「おはよう水仙。　良く眠れた？」

眼前には蓮華の顔が逆さに映った。
どうやらこの柔らかな枕は、蓮華の太腿らしかった。

「あの・・・・・聞いても良いでしょうか？」

「何かしら？」

「何故、僕は身動きが取れない様に束縛されているのでしょうか？」

「さっきまでの事を思い出してみるとわかるかもしれないわ」

「はぁ・・・・・・」

俺は意識を手放す前を思い出し始める。

俺と蓮華が建業へと戻って来ると、宴の用意がされていた。

←

そこには太公望も何故か居た。

←

怪しみながらもなんだかんだで皆、酒を大量に飲み始めた。

←

太公望と蓮華、思春以外がすぐに眠り、意識を手放した。

←

俺もその少し後、意識が混濁し始めた。

←

蓮華が微笑みながら俺を自分の部屋へと追い詰めた。

という流れになって・・・・・・えーっと、蓮華が俺を抱締め、酒も入っていた事もあってつい甘えるというか縋りついてしまったというか、何というか・・・・・・泣き落としで諦めてもらおうとしたんだ。

こんな感じに。

「俺は今まで誰も頼れない人生を送って来て、さ。　頼り方とか、甘え方が・・・・・・その、わからないんだ・・・・・・」

言ってみたら徐々に尻すぼみに声が小さくなって、俯いてしまって顔どころか耳まで真っ赤になってしまって、それを見た蓮華がプ

ルプルと震えたと思ったら思い切り抱きしめられた。
そんな風にされた事も初めてだったので、キュッと縋りついたら物凄い力でサバ折りされて、そのまま天国の様な地獄で気を失った。

結論、蓮華が太公望に頼んで酒に一服盛った。
思春も共犯。
現在は意識を失ったところでベットの天蓋を支える支柱に四肢を拘束され今に至る。

・・・・・・。
・・・・・・。
・・・・・・。
・・・・・・。
・・・・・・アレ？

今、俺の貞操が結構ピンチ？

とか思っている所で蓮華が動いた。
しかも――――

「ちょ、何所触ってッ！？」

「男性が女の胸を触るみたいなものよ」

「だったら上だよね、触るのはッ？！」

「確かに男性の胸板も嫌いじゃないけれど、これからの事としては気になるじゃない」

そう言って蓮華にディープなキスをされた。
なんか凄い甘ったるい味がした。

「んぅ?!　蓮華さん?　なんか性格が違くないですか?ってアレ?　ちょっと待って、なんか身体が熱く?」

意識がハッキリし始めたと思ったら、動悸が早くなり、全身の血が沸騰するかのような感覚に苛まれ、何より今すぐに蓮華を貪りたく・・・・・・。

――――――何を考えていた?

「私も凄く身体が熱いの」

ハァハァと荒い吐息を吐きながら、俺に覆いかぶさる蓮華。
その姿は、熱に浮かされた様な視界の中で尚、艶かしく妖艶だった。
でも狙うのは蓮華で、獲物は俺。
枕元に中身が零れている小瓶が在った。

そのラベルには――――――

――――――太公望印の超強力秘薬(びやく)、これでどんな相手もイ・チ・コ・ロ?

「あんのッ、なんちゃって軍師がぁぁぁぁ――――――ッ!!」

俺は魂から叫んだ!

「うふふふふ。　水仙、抵抗して?　そして、とても良い声を私だけに聴かせて?」

蓮華が俺の服を脱がし、つぅーっと指で胸元をなぞった。

「ひぅ?!」

「あら、肌がスベスベ。　でも奥にはきちんとしなやかな筋肉が」

蓮華が俺の脇腹を触った瞬間。

「ッ!!?」

つい反応してしまった。

蓮華を見ると、ニマァと嫌な笑いをして――――――

「ま、まだ心の準備が出来てないんです――――――ッ!!!?」

そして約二時間後。

こうして、俺のハジメテは蓮華に美味しく頂かれてしまったのだった。

そこにはムードもへったくれも無かった。

ひたすらに蓮華に嬲られて、蹂躙されただけだった。

う、うぅ・・・・・泣いてない、泣いてなんか無いやい！
だから最後だけは！

「俺はさっきまで奪われてばかりだったから、偶には抵抗もしたくなる」

真剣な眼差しを蓮華に向ける。
が、未だに縛られたままで格好がつかない。

「でも貴方は奪われるのが好きなんでしょう？」

う、食べられちゃった身としては何というか否定しきれないというか・・・・・・。

「うん、まあ、否定はしない。　それでも偶には――――――」

――――――奪いたいじゃないか。

俺は蓮華の目を真っ直ぐに見詰める。

「！！　そ、そう？」

そうして一瞬、覆いかぶさっている蓮華が少し身を起こした所に俺は上半身だけで起きて、蓮華の唇にキスをした。

「ッ？！」

蓮華が驚いて完全に身を起こした所で――――

「「「「「きゃあぁぁぁぁッ？！」」」」」

重圧に耐えかねた戸が壊れ、全員が折り重なったままになだれ込んで来た。

「すみません蓮華様・・・・・・時間稼ぎできませんでした・・・・・」

「おお、上手くいったんだの？」

甘寧と太公望が一番下で呻く様に言う。

「まさか、蓮華がこんな強硬策をとるとはね」

「全くだ、無味無臭の眠り薬を飲まされるとは・・・・・・」

「うぅ・・・・・不覚を取りました・・・・・・」

「おお、やっとか！」

「蓮華さんも独占欲が強いですからねぇ～」

「おねーちゃんズルいー！」

「あのあの！　流石に独り占めは・・・・・・」

誰もが口々に言いたい事を言う。
というか何だろう？
これがいわゆるモテ期というモノなのだろうか？

「水仙、貴方はずっと私を見てくれる？」

蓮華は俺の腹に乗ったまま問いかける。

「わからない。　他の誰かにもしかしたら奪われてしまうかもしれないよ？」

俺は悪戯っぽく言ってみる。

「なら私がずっと貴方を征服してあげる。　ずっとずっと私だけの物にする」

「なら俺は蓮華に奪われ続けるけれど、俺も蓮華を奪い続けられる為に頑張るよ」

俺は縛り続けられているという、やっぱり何とも言えない状態だが、これも思い出になるのならと俺は心の底から微笑んだ。
現実は何時だって不確かで、苛烈（かれつ）だ。
蓮華が居て、呉の皆や家族が居て、魏蜀の皆も居て、そして俺のいる現実が目の前に突き付けられる。
後悔や苦しみも、成長か劣化か、良いのか悪いのか区別なんてつきやしない。
でも、それでも俺はこの世界で、必死になって、苦しんで、悩んで、打ちのめされて、皆と生きて行きたいんだと、そう思ったんだ。
最後に、これだけは言える。
これが■■■■ではなく、朱然として・・・・・今の俺だとい

う事だ。

「でもアレね。　これで水仙も王族の一員だから気軽に姉さんとでも呼んでね水仙？
あ、私も娶ってくれるのなら貴方って呼んでも良いわよ？」

「え〝っ？」

「そうだな。　これからは敬意を以て接しなければならんか。
命の恩人だからな・・・・・聞くに水仙は生き返った代償に子供が出来辛いらしいから、呉の後継ぎの為に私も手伝うのも吝かではない」

「え？　え？」

「あー！　シャオも！」

「儂もまだまだ若い者には負けんしの」

「出来れば私もお願いしたいです！」

「水仙さんとの子供ですかぁ～」

「師匠との子供ッ！？」

「碌な男が居ないからな・・・・・」

次々に名乗りを上げる女傑達に対し、俺は事態が良く飲み込めません。

「水仙、もう何所にも逃がさないわよ？」

この時の事は良く覚えている。

呉の女性は蜘蛛の様で、俺は蜘蛛の巣に引っかかって雁字搦めになった獲物だったのだと。

確かに昔の王様は側室とか、重婚とか、ハーレムとかがこの時代には当然という考えがあるらしいけど、俺は蓮華を選んだ筈で・・・・・ああもう！

こうなったらヤケだ！

全員まとめて面倒見てやるッ！

もう逃げも隠れもしないやいッ！

蓮華以外はまだどうしたらいいか正直わからんけど、全員背負って見せる！

まだまだ騒がしくも大変な日常が待っている様だ。

だが、これだけは敢えて言わせてもらおう・・・・・。

――――――呉の女性、恐るべし。

第４８翼　追憶・落ノ章、頂かれた朱然（後書き）

何となく、こんなオチになりました。
まあ、進歩したみたいなお話を書きたかったんです。
少し微妙だったと後悔はしているかも・・・・・。

怒涛の五連投稿でしたがどうでしたでしょうか？
結構、悩んだんですが、一気に投稿させて頂きました。

過去編はＦａｔｅ編、エンジェルビーツ編ともう少しだけ続きますので、暫しお付き合いください。

因みにハーレムになったのかは、皆さまのご想像にお任せします（笑）

第４９翼　運命の夜、英雄と戦う異端者

「「「「「……」」」」」

折角、コイツ等が喰い付きそうな、それでいてショックを和らげられるような思い出を見せたと思ったのだが、ネギ達は未だに黙ったままだ。

やはり人が死に過ぎる映像を見た後ではそれ程でもなかったのかも。

「……水仙、これは私への挑戦と受け取っても良いのか？」

「うぅー、私もあの場に生きたかったわぁ」↑生きたかったは誤字に非ず。

「ケケケ、昔ノゴ主人クライ殺ッテルナ」

蓮華達の事を見せた為に目の色が反転しかけているエヴァと、相変わらずの月詠とチャチャゼロ。

「エヴァ……俺の記憶はまだ続くんだ。　暴れるのは勘弁してくれ……次だ」

そう言って、視線を何もない先へと向けるとまた暗闇に戻った。

そして、そこには――――――

「久しぶりね、スイセン」

「ああ、久しぶりだなイリヤ」

――――――イリヤスフィール・フォン・アインツベルンの姿が在った。

「私も昔の貴方……さっきの出会った■■■■と同じ記憶の産物。
貴方がサーヴァントとして呼ばれた世界の記憶を守る者よ。
次の行き先はあの扉」

イリヤは視線を向けた先には、冬木の樹海の先にあるアインツベルン城の重苦しい扉だった。
その扉が開いて行く。
景色が変わっていく。
イリヤの幻影はもうそこには居なかった。
ネギの記憶の様に、少しの雪が舞い散る。
そこには狼を挽肉（ミンチ）にした俺と鉛の巨人、狼の血を浴びた雪の妖精の姿が映し出された。

「サーヴァント・イレギュラー、此処に参上した。　これより我が武は君の楯と成り、矛と成ろう。
此処に契約は完了した。　よろしくマスター？」

そう言って、この物語は動き出した。

それからはイリヤとの日常が始まって、ぶつかって……最後に祖父を殺した。

その後にアインツベルンの城をくまなく整理し、その時に色んな魔術書や何かに使えそうな材料は貰ったが、最近のアーティファクト制作等にとても役に立った。

場面が変わって夜の冬木の街が映し出される。
そこには鏡写しの様な二人組が住宅街の屋根の上で対峙していた。

「朱然さんが二人？」

何とか復活し始めた朝倉が？を頭の上に浮かべながら問いかける。

「容姿は似通っているが他人の空似だ」

俺は簡潔に言った。

実際の所、何でライダーの容姿になったりしたのかは恋姫の朱然に憑依して固定されてしまったからという説明は必要ないのでスルーした。
矢除けの加護とか千里眼、武器・道具作成があったりしたのは多分、魔眼が完成して暴走が起こった時に不死化したのは覚えているだろうか？
その時に不死等の様々なスキルが付与されてから消去されたんだけど、その三つのスキルだけが消去されずに残ったのだろう。
なんともラッキーな事に。

その後は俺の原作を知っているが故の知り得ない情報でライダーの動揺を誘い、無影による物量作戦でライダーを退け帰った俺の後ろ姿が映された。

そこで一旦、景色が変わる。

またしても夜だ。
その小高い丘の上にある穂群原学園の屋上から赤き弓兵の双剣と蒼き槍兵の紅槍が繰りだされているのが映し出される。
その圧倒的な技量を目の当たりにしたネギ達は、別の意味で沈黙を強いられた。
息も吐かせぬ殺し合い。
だが、これほどまでの技量で行われる殺し合いに魅せられるのは仕方が無いだろう。
何せ対峙する二人や、ライダー、バーサーカーもこのネギま！の世界においても最強と言われても過言ではない程の実力を持つのだから。

「あの……彼等は？」

その沈黙を破ったのは刹那だった。

「簡単に言えば幽霊の最上位とか、使い魔の最上位に位置する英霊と呼ばれる者達だ」

「英……霊……あッ」

俺の説明を聞きながらも、その二人の攻防から目を放さなかったのはある意味、苦笑するしかないだろう。
其れほどまでに最高峰の域に達している剣撃は素晴らしいものだったのだから。
刹那が驚きの声を上げたのは、アーチャーの莫耶が弾かれてランサーの槍がその身体を抉ると思った刹那、アーチャーが新たな莫耶で防いだ所だったからだ。

さて、此処からはこの世界の残酷なところを教えるとしようかな……。

「英霊とは、この世界で言う英雄と呼ばれ、人々から崇拝された者達の辿りつく一つの結末の様なものだ」

英雄という言葉にピク、とネギが反応を示す。

「ただそれは、善きも悪しきも存在する」

「どういうことでしょうか？」

ネギではなく夕映が俺に問う。

「つまり、悪行によって人に恐怖され、戒めとして崇拝された怪物、怪人も英雄として祭り上げられるという事だ。

反英雄としてな。　例えばさっきの紫色の髪の女性、メドゥーサ然り、青髭（ジル・ド・レェ）然り、切り裂きジャック（ジャック・ザ・リッパー）然り、な。

他にも童話の人物、出自の不確かな者、架空の英雄も人間から多少の信仰さえあれば、英雄として召し上げられる。

その基準は良くわからないけどな。

しかし、その手の者達が現界するに当っては、同じ事を出来た人物にその英雄の殻を被せて疑似的な英雄として現れる事が可能の様だ。

もっともこれは例外中の例外で、滅多に起きないんだがな。　俺もある意味、この世界では疑似的な殻を被らされて呼ばれた。

本来はセイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシン、キャスター、バーサーカーのクラスで呼ばれる。

おれはイレギュラーとして呼ばれたが」

「じゃあ、さっきの朱然さん似の人がライダーって呼ばれててメドゥーサだったから、あの赤い方と青い方、あとデッカイ灰色の巨人もどこかの英雄なの？」

今度はハルナが訊いてくる。

「ああ、蒼い方と巨人の方はネギやエヴァには馴染みがあるかもしれない。　蒼い方はランサーだな。

ケルト神話における半神半人の英雄、アイルランドの光の御子、魔槍ゲイボルクを持った英雄、クー・フーリンだ。

灰色の巨人の方は幾多の怪物退治や十二の苦行を乗り越えた事で有名なギリシャの大英雄、ヘラクレス。

もっともヘラクレスはバーサーカーとして呼ばれているから腕の突起ができて筋肉は硬質的になって顔つきも怖い。

狂戦士として呼ばれなければ体格はそのままだが、腕の突起がなくなって筋肉はもう少し普通に見えて、顔も人間味が増す……らしい。

そして、紅い方はアーチャー……残念だが、この世界では居るかどうかも定かじゃないな。

もし居たとしても、この世界では英雄にはなれないだろうな」

「な、何故ですか？」

ネギが恐る恐るといった風で訊く。

「この世界だからこそ紅い方は英雄になる為の技能を扱えるから、とだけ答えておく」

「そうですか……」

何せ衛宮士郎がネギま！の世界に居たとしても魔術回路なんてシロモノがあるか怪しいし、あったとしても聖杯戦争が起こる事も無いからそもそも衛宮士郎にならないだろう。

もし仮に魔法使いの家系に生まれて魔法使いになっていたとしても才能が無いだろうからな……固有結界を発動させる事なんてほぼないだろうさ。

「あの赤い方はある意味で、この世界だけの英雄だと思う。　そして、この世界での本来の主人公の未来の姿。

そしてネギ、あの紅い方はお前に良く似ている。　詳しく言うのなら過去や父親に憧れたところがな。

もっともお前よりも酷い過去と、お前ほどではない才能しかなかった様だけど、それでもこの世界で、この儀式を体験した少年は数ある可能性の中から英雄へと至れた。

恐らく俺の知っている中で、お前の選択次第で行く末が一番近くなる英雄かもしれない」

「ッ？！　それはどういう事ですか？」

ネギが此方を向く。

「見ていればわかる」

俺はそれ以上語る事は無いとばかりに無言になった。

それから見惚れる様な決闘が終わり、ランサーとの問答が終わってアーチャーとの問答のシーンが流れ始める。

「アーチャー……いや、エミヤシロウ。　お前はこの聖杯戦争で何を望む？」

「！！　貴様ッ！！」

アーチャーの鋭い殺気が、此方に向けていなくともこの場を支配する。

「エミヤ、シロウ……」

ネギは呟く。

「あの……聖杯戦争とは？」

夕映が訊いてくる。

「文字通り、勝者に与えられるのは何でも願いがかなう聖杯という願望器だ。

それを7人の魔術師……この世界で言う魔法使いが、さっき言ったクラスを冠した7体のサーヴァントと呼ばれる英雄達を1体ずつ呼び出し、最後の一組になるまで殺し合う儀式だ。

ただ、その聖杯はサーヴァントの魂を燃料にするから全員で分け合う訳にはいかない。

例外はあるけどな。　しかもこの聖杯戦争は普通の人間が巻き込まれる事も容認される。

というか、この世界では魔術師は己の利益の為ならば人間を実験に使ったりする輩も大勢いるし、世間に魔術の存在がバレなければ大抵は容認される。

その神秘の秘匿がバレそうになると魔術教会から執行者と呼ばれる魔術師が命を狙いに来る。

それに特異な才能……例を挙げるならあの紅い方とかだけど、本人の体質に起因する一代限りの特別な魔術を保有する者は魔術教会によって封印指定とされて、名誉な事とされているが、デメリット

として保護という名目で一生を幽閉されたり、死んだ後も脳だけホルマリン漬けにされて保存されるような扱いを受けるそうだ」

「そんなッ！？」

悲鳴の様な声を上げる明日菜。

「事実だ。　お前等の世界は、まだオコジョにされるくらいだから優しいが、この世界ではバレれば即座に消されるんだ。
やり過ぎれば何所の世界でも即座に隠蔽するのが組織だから、そこの所は心しておけ」

俺がそういうのと同時に、過去の俺がアーチャーに問いかける。

「自分で自分を殺すのか？」

「答えろ、貴様は何者だ？」

イレギュラーとしての俺にアーチャーが有無を言わせない問いを言う。

「自分を殺すって……何言うとるん？」

木乃香が言う。
だが、俺は答えない。
何故なら、アーチャー自身がその問いを答えるのだから。
自らの手で衛宮士郎（かこのじぶん）を殺す。

そのアーチャーの言葉に、未だ呑み込めていない者達はクエスチ

ョンマークを浮かべる。
しかし、次からの自身の辿った人生を話すと、その苛烈過ぎる過去にネギ達は再度、黙り込むのだった。

死すべき運命にあった百人を救う為に世界と契約し、契約後も人を救い続けられるのならばと理想の為に進み続けた。

それは称賛される事だっただろう。

だが待っていたのは全て手遅れの世界に呼ばれ、自意識を持ったまま操られ、原因となった者達を殺し続ける掃除屋としての日々。
英霊の座に戻る時、自我を取り戻し、罪の意識に苛まれる苦痛。

どれ程の苦痛だったのかは計り知れない。

そして、摩耗し、借りものの理想だったと気づく。
その歪んだ自己犠牲の理由と正義の味方という矛盾した存在。

木乃香の問いの答え――――それは自己存在の抹消。

それは到底、俺には容認できない、自分自身が起こした全てを消し去ってしまうという俺からすれば許されざる事。
自分自身の存在そのものを否定する所業。

「詰まる所、このエミヤシロウという英雄は過去に全てを失った。
自分自身の両親の顔も名前以外の全てを。
そして、自分だけが助けられた、他人を押し退けて救われてしまったという罪悪感と自分を助け、義理の父となってくれた人の自分を見つけた時のあまりにも嬉しそうな顔と、その義理の父の正義の味方になりたかったという理想を自分の目標としてしまった。

自分を勘定に入れない、矛盾し、歪んだ正義の味方になる事を選び、それでも尚、全ての人を救えなかった為に、その父親が昔に取っていた9を救い、1を切り捨てる方法を選んだ。
その願いの果てに、エミヤシロウは英雄へと至る事が出来た。
助けた人間に汚名を着せられ、助けた人間に裏切られ、助けた人間に全ての元凶だと弾劾されて、処刑され信仰を得るまで、ずっとな……。
後は本人自身が言った通り、世界と契約して死後も人を救う道を選んだにも拘わらず、手遅れの世界で元凶となった全ての人間を、老若男女全て殺して殺して殺し尽くす戦闘機械になり、理想は何時しか摩耗して自分の理想は間違いだったと思い直し、過去に起こった未来の自分を見た儀式に呼ばれる事を思い出して自分自身を殺すことを決めたんだ、コイツは」

「そ、そんな……」

ネギは呆然とする。
他の全員も。
常人の理解をの範疇を越えてしまっている。
それくらいに異質で壮絶なエミヤシロウの人生。
ネギは救いの無かった過去と、そのあまりにも救いの無い未来の話に表情を暗くさせた。
恐らくは今、英雄という言葉の意味と憧れを考え直せざる負えない、とでも思っているのかもしれない。

場面は止めどなく流れる。
ぼかすべき場所はぼかされて、見せられる場所は映し出されて。
アーサー王の願い、エミヤシロウの過去である衛宮士郎の在り方、この世界の魔術の常識、脱落する愚者、暗殺者の架空の正体、殺し合いの合間の日常、間桐が桜にやった事、9体目のサーヴァントの

襲来、常軌を逸した攻撃力を誇る天地乖離す開闢の星の一撃、大英雄の犠牲を。

特に俺の語った桜の境遇はネギ達に殺人とは別の意味で衝撃を与え、受け入れられなかったらしい。

子供の頃に養子にされるのはまだわからないでもない話だが蟲に犯され、肉体を改造され、義理の兄に虐げられるという所は目を覆ってしまう様なリアクションをした。

まあ、仕方ないと言えば仕方が無いな、うん。

言峰教会の前。

アーチャーと俺が対峙する。

双剣と大剣の戦い。

途中で大剣から小剣が抜き放たれ、剣撃は更に過密に、苛烈に、鮮烈になっていき距離が離れる。

アーチャーは弓に捻じ狂った矢を番え、魔力を最大まで込め――

――

対する俺は鏡の様な楯、無境を構え魔力を込め――――――

――――――指を放した。

――――反転させた。

反転された赤原猟犬（フルンディング）がアーチャーに喰らい付く瞬間にかき消えて尚、アーチャーの詠唱はまだ止まらない。
アーチャーの攻撃は止まらない。
詠唱はアーチャーの今まで歩んできた人生そのもの。

体は剣で出来ている
――――I am the bone of my sword.

血潮は鉄で　心は硝子
――――Steel is my body, and fire is my blood.

幾たびの戦場を越えて不敗
――――I have created over a thousand blades.

ただの一度も敗走はなく
――――Unknown to Death.

ただの一度も理解されない
――――Nor known to Life.

彼の者は常に独り　剣の丘で勝利に酔う
――――Have withstood pain to c

reate many weapons.

故に、生涯に意味はなく

――――Yet, those hands will never hold anything.

その体は、きっと剣で出来ていた

――――So as I pray, unlimited blade works.

アーチャーだけの呪文。

この長い呪文はアーチャーにとって大事な意味があるのだろう。

この呪文は、自分の人生を振り返りながら表に現す為の儀式の様なモノだったのではないのだろうか？

映し出されたのは今まで一人で突き進んだ荒涼とした大地。

空は常に晴れる事の無い後悔の曇天。

何時止まってしまうのかとも思えてしまう愚鈍に動く己の様な天上の歯車。

降り注ぐのは今まで進んだ戦火の火の粉。

境界を囲むのは逃げ場の無い燃え盛る紅蓮の壁。

殺してきた者達への墓標の如く突き刺さっている無限の剣。

その一部には規格外の魔力が込められているのが判る。

もの悲しくも胸を締め付けられるかのような光景。

「風景が……変わったッ？！」

当然の反応をそれぞれ示す観戦者達。

そこで俺に少し異変が起こった。

「ッ！？」

今までのアーチャーの微かな記憶がフラッシュバックの様に、脳裏に流れたのだ。

何所までも人を信じ、そして裏切られた生前の正義の味方の果てを。

「今のは……なんだ？」

疑問が俺の頭を駆け巡っていた所で、アーチャーは言う。

「貴様が挑むのは無限の剣、果たして貴様に……」

――――――私の剣（ねがい）を折る事が出来るか？

対峙する俺は八卦八武装（せんてんはっけ）の全てを現わす。

「来るか・……行くぞ、異端者（イレギュラー）お前の覚悟は十分か？」

降り注ぐ剣弾の雨を掻い潜りながら疾駆し、そして――――――アーチャーは同じ大牙で数合斬り合った。

「あれが……違う世界の英雄」

それは誰が漏らした言葉だろうか。

アーチャーが大牙を捨て、すぐ脇の剣を手に取る。
その剣は優美にして、至高であり、最高の幻想。
それを大上段に構え、真名を開放しようとする。

「約束（エクス）されし――――――」

対する俺は誓いを口にし、八つの武器が束ねられる。
それは太極を現わす力。
同じ様に大上段に構え、真名を開放しようとする。

「伏義(ふっきの)八卦次序――――――」

その極光は俺に向かって――――――
その太極は奴に向かって――――――

「――――――勝利の剣(カリバー)！！」
「――――――太極剣(たいけん)！！」

――――――振り下された。

激突。

眩い極光と螺旋を描く太極がぶつかり合い、太極は極光に呑まれ始めるが徐々に太極が押し返し、アーチャーの剣を圧し折った。

アーチャーは少しの問答をした後、光と散った。
やはり声を発する者達はいない。
それ程のぶつかり合いだった。

固有結界が砕け、ライダーとランサーが合流。
言峰教会地下へと向かった所で、ギルガメッシュが二度目の強襲。
そして、キャスターと葛木が串刺しになって絶命した。
臨戦体勢のままだったが、ギルガメッシュは余興を思いついたので待つと言って去った。

最後の戦いの場、柳洞寺地下の地下大空洞。
そこには醜い巨大な肉片に顔だけを残した間桐慎二の姿と、肉片に包まれたガラスの棺に納められたイリヤとセイバーの姿があった。
そして最後の戦いが始まり、ギルガメッシュは3対1で何とか押す事ができ、天地乖離す開闢の星（エヌマエリシュ）が放たれ、俺の持ち得る最硬の防御と受け継いだ技を使って、古代の天馬の防御力を使い何とか耐え切って、ランサーの刺し穿つ死棘の槍（ゲイボルク）でトドメを刺した。
心臓を完全に破壊されたギルガメッシュは何所までも傲慢で、何所までも不遜に消えていった。
それからランサーとの殴り合いを経て、最後にセイバーに聖杯の説明をした上で約束された勝利の剣（エクスカリバー）で聖杯を破壊してもらった。
その影響でこの世界に強引に滑り込まれた俺が最初に消えかかる。
それぞれに別れを言って、俺もまた光と共に消え去った。
そこで映像が途切れ、また真っ暗な空間へと戻ったのだった。

「父さんも……」

「なんだ？」

不意にネギが声を出す。
その表情は読み取れない。

「父さんもたくさん殺したんですよね？」

「ああ……後で嫌という程、見せてやる。　この世界も最後に少し教えるが、少なからず、そう言った闇が存在する。
お前はナギの息子だ。　何に利用されるかわかった物じゃない。
お前の周りに居る人間も人質にされて、お前は望まない事をさせられる可能性もある。
だから何時だったかに力と自分の意志を持てと言った」

俺は憮然として言う。
ネギには己の責任を、明日菜達は枷になる可能性があると言う事。
両方に力の行使は危険と責任が常に付き纏う物だと言う事を。

「それと、力を持つと言う事は使う事もあるという前提での事だ。
その力の所為で恨まれる事も覚悟しろ。
例えそれが、どんなに正当な理由であったとしても、今の時代に殺された側で納得する人間はそうそう居ないからな」

「僕は……」

ネギはそれっきり黙ってしまった。
明日菜達も同様だ。
全員が全員、表情は暗くなり、魔法に憧れ、期待をする目が真逆に成りつつあるようだ。

次はＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！の世界だが、この世界は正直に言うと死が存在しない分、かなりグロい場面があるし、何より戦線の

メンバーがその世界に来る前に殆ど訳有りな死に方をしている。
一体、どういう反応をするんだろうか……。
そんな風に思っていると、やはり新たな人物が現れるのだった。

第４９翼　運命の夜、英雄と戦う異端者（後書き）

何度か書き直したんですけど、イマイチ話を膨らませられませんでした；；
もしかしたら書き直すかも？
五連投稿した後に書こうと思ったら筆が進まなくて困ったです、うぅ・・・・・Ｆａｔｅ設定が久しぶり過ぎて間違いもある気がしてならない・・・・・。

最近、凄く寒いですね・・・・・朝起きると吐く息が白かったりします。
インフルエンザも流行っているようですので皆さんもお気をつけて下さいませ。

最後に、髪がかなり長くなったので切りに行こうと思って美容院に行くと何故かいつも閉まっていると言う・・・・・髪を切ってはいけないという天啓だろうか？

第５０翼　襲来、知る由もない紫の麗人

「水仙」

正面の暗闇から俺の真名を呼びながら蓮華が突然現れた。

「蓮華？」

俺は予想した人物達ではなかった為に、俺は眉を顰めた。

可笑しいな・・・・・次はゆり、音無、かなで辺りが出そうな気がしていたんだが・・・・・・。

「あの世界はダメよ水仙」

「？　どうしてだ蓮華？」

蓮華が警告を発するが、よくわかっていなかった俺は首を傾げる。

「あの世界の場所をアヴェンジャーは言っていたでしょう？」

「！　何で蓮華がアヴェンジャーをって、そうか・・・・・・そうだったな・・・・・・」

蓮華もまた俺の記憶なのだろうし。

それにアヴェンジャーは言っていた。

あの世界・・・・・・死後の世界は人間の無意識の総体で出来た様な場所だと。

死後のあの世界は英霊の座よりも深い場所に在るとも言っていた。

なら至っている俺は大丈夫でも、未だ確かな自分の肉体を持っているコイツ等には危険なのだろう。

「じゃあ、話す訳にはいかない、か」

「ええ、その方が良いわ。　伝えるべき事は伝えたんでしょう？この子達は落ち着いたとはいえ限界よ」

良く見てみると疲れを知らない茶々丸、チャチャゼロ、あらかじめ知っていたエヴァにあの様な光景に慣れて過ぎている月詠以外は刹那さえも何所か疲弊した顔をしていた。

「この子達を此処から出してあげた方が良いんじゃないかしら？」

「わかった。　止めてくれてありがとな蓮華。　戻れ（アベアット）」

俺は蓮華に言われるままに聖譚曲（オラトリオ）を戻した。
すると空間が溶ける様に消失し始めた。

今後はＡｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！編は見せない方が良いと覚えておこう・・・・・・。

そんな事を考えていると蓮華がエヴァの方を向いて――――――

「私の水仙は渡さないわよ？」

スッと目を細めた蓮華が少し低めの声色で不意に宣言した。

「貴様ッ！？」

エヴァが目尻を吊り上げて詰め寄ろうとするが、手が触れる瞬間に完全に蓮華はかき消えてしまった。

「～～～～ッ！！」

エヴァは年甲斐も無く地団太を踏んだ。

「あー、上映会は此処までだ。　ナギ達の話は・・・・・その様子じゃ無理そうだな」

エヴァの方からネギ達へと振り返ると、全員がへたり込んでいた。

これは確かに話を続けられる様な状態ではないな。

もう良い時間だし、休ませないと。

「中々に刺激的なモノを見せたが、あくまで参考までに覚えておくと良い事があるかも知れない」

俺はそう締めくくってネギ達を寝床に連れて行った。

それから別荘一日を過ごし、気分が芳しくないのどかを看病をす

る為に一旦出て、再び入って残る事にした俺と茶々丸以外は出て行った。
お姫様抱っこかおんぶをして出ようとも思ったのだが、こういう時は無理に動かしたりせず、落ちつくまで居たほうがいいのでは？と多数で決まったので残る事にしたのだ。
因みにエヴァは渋ったが月詠に連れてってもらった。
また寮に帰って月詠の相手をしないといけないかもしれんけど。
悪魔襲撃は別に俺が何をする必要も無いだろ。
過保護な学園側がネギを守らない筈が無いし、やられそうになってもエヴァに月詠、楓も居た筈だからな。

「大丈夫か？」

「は、はいー・・・・・・」

「もう少し落ち着いてから出ましょう」

「そうだな」

それからのどかの気分が良くなるまでダイオラマ球で半日掛かり、一度入り直したのでもう半日またなければならない。

Ｓｉｄｅ　？？？

風を操り纏って豪雨を弾きながら麻帆良を目指していた。
翡翠の瞳は輝いている。

鏡を見て始めてその事を知ったんだっ。
ママはその眼をすごくキレイって言ってくれた。
ママが言ってたけど、その眼は魔眼って言うらしいけどねっ。
風さんを無理しないくらいに集めてみてって言われて集めた時はママがすごく驚いたっけっ。

「急げっ急げっ！　ママはどこかなっ？」

あ、また独りで呟いちゃったっ。
ママにはその癖を治しなさいって言われたんだけどなっ。
今はそんな事よりママのところに行かないとっ。

「やっと着いたっ！」

眼下に広がる広大な学園都市を見降ろし、急いでいるのに急いでいない様な口調でママを探してみる。
風さんにママを探してもらおうと思ったけど、使おうとしたら一瞬だけ落ちそうになっちゃったっ。

「急いで来たから疲れちゃったかも？」

う～ん、下りて休憩した方が良いかなっ。
ママも急いでいても焦っちゃダメって言ってたしねっ。

「アレ？　前より入りやすい？　ま、いっか！」

人に聞いた方がママも見つけやすいかもっ？

この時、学園長が一時的に結界を解除し、悪魔を故意に入れてい

た。
ネギの修行の一環として。
それを少女は知る由も無い。
「ちょっと一休みしよっと！」
そして、原作に居なかった少女は急降下し始め、彼女達の前に姿を現した。
Ｓｉｄｅ　？？？ｏｕｔ
Ｓｉｄｅ　ネギ
「ふむ、なかなか良い動きをするねネギ君。　そちらの少年も東洋の神秘だという分身には驚かされた。
しかし、それだけだ・・・・・ネギ君は実戦経験が殆ど無いに等しく、少年は懲罰によって特殊技能が封じられているようだからね。
正直残念だ。　拍子抜けと言っても良い」
強い・・・・・マスターや朱然さん程じゃないけど、それでも僕とコタロー君だけじゃ？！
「フンッ！」
ネギはなりふり構わないスライディングでヘルマンの悪魔パンチ（デーモニッシェア・シュラーク）

を避けたが、小太郎は直撃してしまった。
小太郎は両腕を胸の前でクロスさせガードしたが、それでも十分骨に響く威力だ。
気を纏ってガードしなければ骨など簡単に砕けてしまっているだろう。

「がぁッ?!」

「く・・・・・っ！　コタロー君ッ!!」

ネギの呼びかけに小太郎の反応はない。
小太郎はステージの固定席を巻き込んで気絶していた。
ネギは焦りを抑えつつ杖を構えながらヘルマンに相対する。

「ネギ君、君の本気を見せてはくれないかな？　でなければ、わざわざ封印を解かれてまでこんな所に来た私の苦労が報われんのだよ」

「貴方は僕と戦う為だけに来たって言うんですかッ!?」

「そうかそうでないかで言えばそうだね。　大体の理由としては君の調査が主な依頼な訳だが、広義的解釈してもらえれば大して違いはない」

朱然さんの言った通りだ!
僕が居るから明日菜さん達が巻き込まれてるんだ!
僕が巻き込んだからッ!

「思うに君は戦う理由が明確にないのではないかね？　見知らぬ誰かの為に～等と失笑を誘う偽善的で模範的な理由では君は恐らくこれからも弱いままだろう。

そこでだ。　君に戦う為の・・・・・私と戦わざる負えない理由というモノを見せたら君は本気で私と戦ってくれるのかな？」

な、何を言っているんだ？！

「そんなことッ？！」

「無いと？　君の本気で戦う理由・・・・・それは6年前の村での出来事から逃げたいと思っているのではないかね？

一般人を巻き込んでしまった責任感や、それ故に守らなくてはならないと思っている義務感ではなく、ね」

「ち、違うッ！　僕はッ、僕は・・・・・もうッ！」

ネギは後ずさりながら、否定するように首を振る。

「おや？　反応が薄い？　誰かの入れ知恵で治りかけているのかな？　だが、治ったと思っても人間は案外治っていなかったりするものだよ。

目の前にそれを引き摺り出されれば尚更だ。　そろそろ小話もいいと思うのだが・・・・・どうだろう？

私の本性を見れば流石の君も本気にならざるおえないのではないかな？　さあ・・・・・君は私を覚えているかな？」

ヘルマンが帽子を脱いで素顔に戻ろうとした所で――――

「さっそく思い出しｔ「きゅーけーいっ！！」何んとぅぶッ！！？」

ルクレツィアが体操選手が決まった的な時に使うＹの様な格好でヘルマンの頭に着地した。

ヘルマンは高高度から落ちて来た物体、もといルクレツィアの着地の衝撃に耐えられず、顔面から地面に叩きつけられた。

というか、ぐしゃりとすごく嫌な音と地面の割れる音が辺りに響き渡った。

えっ？

この子は誰だろう？

敵のおじさんが潰され・・・・・・え？

「ぐ、ぬぅぅぅ・・・・・・」

ヘルマンが呻きながら両腕を地面に手を付けてグッグッとルクレツィアを後頭部に乗せたまま起き上がり始めた。

「あ、ごめんねっ！」

それに気がついたルクレツィアがひょいっ！とヘルマンの脇に下り、ヘルマンはようやく立ち上がった。

「はっはっは、なに、レディの一人も受け止めらないとは紳士失格だよ。　君に怪我が無い様で何よりというもの・・・・・・？　おおっ！

君は６年前にネギ君の村を襲った悪魔達を束ねた娘ではないか！！　まさか再び再会できるとは思ってもいなかったよ！！　ネギ君、

君は実に幸運だ！！
君の村を焼き払った仇本人が目の前に現れたのだからねッ！！」
鼻が折れたのか、凄い勢いで吹き出す鼻血を気にせずおじさんがそう言った瞬間、僕は僕の意識を、枷を外してしまった。

Ｓｉｄｅ　ネギｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　ルクレツィア

「はぁぁっ」

いきなり目の前の子が凄い魔力を出しながら襲いかかってきた。
すぐに空中――――――自分の一番得意な場所へと逃げた。
レティは疲れた体で圧縮した風をなんとか操って襲ってくる子の攻撃を弾いていた。
ママには自分が悪い事をした覚えがない時は殺さない程度に叩きのめしていいと言われたっけ？
でも・・・・・あの悪魔のおじさんは私が村を焼いたって言った。
もし殺さないのが無理なら、逃げなさいって言われたし・・・・・。

「きゃうっ！？」

逃げようとしたレティの前を塞ぐようにその子が現れて、足刀蹴りを繰り出してくる。

レティはとっさに腕で何とか防いだけど、骨に凄い衝撃が走ってビリビリした。

此処に来るまでに力を使い過ぎた所為で、もうあまり強い風の力を使えない。

「うぅ・・・・・早くママに会いたいのにっ！！　伝えないといけない事があるのにっ！！」

レティの邪魔しないでよっ！！

その子の攻撃は止まってくれずに自分に向けられる。

言葉を投げかけても何の反応も返ってこないし、何よりその子の眼は何も写してはいない。

その目は自分が敵だって思ってる目・・・・・敵意しかない。

「やっ、はっ、ふっ！」

空中では衝撃を地面に逃がす事が出来ないからまずは距離を取る事って言われたけど、この子を殺す訳にはいかないよっ。

よって、その衝撃は確実に自分の風の防御を削って削って、そして――――――

もうっ、風の精霊さんが集まってくれないっ！

「っ」

ネギの渾身の肘打ちが自分の鳩尾に叩き込まれるのを感じた。

「――――――ッ」

息、出来ないっ！

涙出る、お腹痛い、気持ち悪い、吐いちゃいそう、何でレティ、殴られてるの？

そして、自分の心臓にネギの手刀が――――――

ママ、助けて・・・・・・っ！

Ｓｉｄｅ　ルクレツィアｏｕｔ

第５０翼　襲来、知る由もない紫の麗人（後書き）

まずは謝罪を。
ＡＢ編と紅き翼編ですが、どうにも過去編が長すぎるとの意見があった事がまず一点目。
ＡＢ編の過去で何を伝えるのか？という意見が割と多かった事が二点目。
紅き翼編も書こうと思ったのですが、そうすると過去編がトンデモな長さになってしまうと思った事が三点目。
それらを考慮して、此処でカットする事に決めました。
過去編を期待して待って頂いた読者様には申し訳ないと思います。
すみませんｍ（＿＿）ｍ

その様な話は外伝で書けばいいのでは？ともご意見を頂いたので、そちらも忙しくなければ考慮したいと思っています。

謝罪はこのくらいにしまして、今回はむしろルクレツィアのターンでした。
果たしてルクレツィアはどうなるのか？！
ぶっちゃけ、此処が白き翼ルートか完全なる世界ルートに分岐する一歩手前なんですよね～。
その名の通り、白き翼ルートはネギ達と共に原作に沿った話を。
完全なる世界ルートではフェイト達の仲間になり、朱然さんが自分の目的を果たす話になる予定（オリ設定が多いかも？）。
一応、完全なる世界ルートでも学園祭編は存在しますよ。
選んで頂こうかとも思ったのですが、完全なる世界ルートになる予定です。
何故かというとラストのプロットが完成しているからですかね～。

いやいや、寧ろ白き翼編が良い！という読者様が多かった場合は白き翼ルートに修正するかも・・・・・・優柔不断でごめんなさい。

長々と書いてしまいましたがこれにてノシ

ちょっと修正しました。

第５１翼　敵対、殺そうとする紫の麗人

「もう大丈夫か？」

「は、はいー」

のどかをおんぶしていた俺は別荘を出た所で良く知っている魔力を感じた。

ルクレツィアの魔力！？

俺は立ち止まってしまう。

「どうかしたのですか？」

茶々丸が朱然の顔を覗き込むと、その瞳は紫水晶（アメジスト）が爛々と輝いていた。

「戦ってる・・・・・」

そう言って朱然はのどかを静かに降ろした。

「えっ？」

のどかが戸惑いの声を上げる。

「行かないとッ！　なんでこんな時に限ってッ！！」

何も起こらないと思っていたのに！

なんでイレギュラーが起こるんだよ！

朱然は駆ける。
駈ける。
翔ける。
それこそ地を駆け、丘を駈け、空を翔けた。
必死に、必死に。
何故なら、ぶつかり合っている相手が魔力暴走で魔力が増大し続けているネギだと言う事。
逆に反比例してルクレツィアの魔力が小さくなっているから。

だから早く！
一刻も早くそこへ行かないと！
動け動け動け！
音よりも、光よりも早く！

突き動かされた俺は文字通り光となってその場所へと辿り着く。
空中。
眼前にはルクレツィア。
ネギの手刀が繰り出されようとしている。

間に合う！
間に合わせて見せるッ！！

俺は手を伸ばす。
ルクレツィアを助ける為に。
昇る俺と、墜ちるレティ。

もう少し！
あと１０センチ！

その１０センチを、すれ違いの刹那・・・・・俺は――――――
掴み損ねた。

何故ならネギの手刀がルクレツィアの心臓を貫いていたから。

また、救えないのか？

また、目の前で大切な者を守れないのか？

また、俺の掌から零れ落ちようとするのか？

また、また、また・・・・・ッ！！

「あ、あぁ・・・・・・ッ！！」

俺の口から、自ら発した覚えのない意味すらない声が発せられた。

そして――――――

「嫌だァァァァァァァ――――――ッ！！」

絶叫した。
喉が張り裂けそうなくらいに。
でも魔眼が教えてくれる。
残酷にも死が近づいている事を克明に。

瞬間、俺は反転して精霊化を解き、ルクレツィアを丁寧にネギの手刀から引き抜いてから、ネギの頭上に踵を落とした。
ネギはもんどりうってそのまま墜ちていった。

このまま簡単に殺すなんて俺は優しくないぞ！

それを見届け、同じく墜ちていたルクレツィアを空中で抱き止め、俺は地上のステージ前に降り立った。
胸を刺し貫かれたルクレツィアは口を開いた。

「マ、マ・・・・・？　やっと、会え、た・・・・・ねっ」

助けられなかったルクレツィアが俺に笑みを向ける。

「レティ！　レティ！　なんで此処にッ！」

帰った筈なのに何でッ！

そんな言葉が頭の中で反芻する。

「・・・・・・こ、れ」

ルクレツィアは震える手で手紙を取り出した。
その手を手紙ごと両手で握った。
くちゃっと、雨に濡れた手紙が湿った音と共に潰れた。
そんなものよりも今はルクレツィアの手をもう放さない為に握り締めた。

「おかし、いの・・・・・からだ、うごかないん、だよっ？　だんだん、さむくなるの」

「レティ！　居なくならないでくれ！　俺より先にしないでくれよ！？」

どんなに願っても、ルクレツィアの命の流れが溢れ出ていく。

「なんで親の俺より先に逝こうとするんだよ・・・・・・ッ！」

失われているのが目を通して理解できてしまう。

「ママ、なかないでっ・・・・・・わら、ってたほうが、れていすき、だよ・・・・・・っ？」

絶対に逝かせない！
逝かせてたまるもんかッ！！

「レティ、ちょっと痛いけど我慢できるな？」

「・・・・・・うんっ」

絶対に死なせないッ！
死なせてたまるかッ！！

「エグジグ　エグザグ　エグゼクト！
契約により我に従え　癒しの神官　来れ　安寧の光　彼は我等の病を背負い　我等の痛みを担え　神癒の御手！」

「・・・・・・く、ああっ！！」

微弱だが、貫かれた胸に途絶えかけた心音が戻りかけ、完全回復呪文の反動でレティは気絶してしまった。
この呪文は心臓さえ動いていれば限りなく死に近くとも回復を可能にする事が出来る。
ただし、心臓や頭部等が欠損していると効果はない。
例えこの呪文が成功しても、反動として寿命がかなり縮んでしまうだろう。

わかってる！
もう、回復が効かないくらい！
でも！
でもッ！
諦めたくなんかないッ！！

俺は魔力を込める。
ルクレツィアは傷を塞ぐ為の痛みで気を失った。

言葉を交わす最後の時間になるかもしれないけど、それを犠牲にしてでも俺は諦めたくなかった。

しかし、命の流れは止めどなく流れ出て――――――

――――――ルクレツィアは死んだ。

守れなかった。
まただ。
一度目は姉。
二度目は最初の孤児院の子供達。
三度目が今。
どうして・・・・・こんなにも力を持ちながら、俺の大切な者は俺の掌から零れ落ちていく？
死は平等に訪れる筈なのに。
今まで生きていた筈なのに。
でも死んでしまった。
今はただ、静かに我が子を弔ってやりたい。

なのに――――――

「はっはっは、素晴らしいよネギ君。　まさかこれ程とはね！　途中で余計な邪魔が入ったが、いや！
人間としては最上級かもしれんよ、これはッ！！」

ヘルマンは歓喜の声を上げる。
その声が酷く遠く感じる。
だが、とてもはっきりとその言葉が耳に届いた。
俺の理性が吹き飛ぶほどに。

「右手に気、左手に魔力・・・・・・合成、咸卦法――――」

俺はルクレツィアを寝かせ、手紙をポケットに入れてから呟いていた。

許さない・・・・・・ッ。
絶対にッ!!
貴様がネギをそそのかした元凶かァッ!!
耳障りだッ・・・・・・ネギ共々その魂、今この時を以て、殺し尽くしてやるッ!!

――――黙れ。

静かに、しかし、耳に残る声がその場に響き。
ヘルマンが此方を向いた。

「おや、誰かと思えば君は確か紫の麗Ｊ「取り敢えず、死ね」なんッ!?」

無影の型・奥義――――無影。

俺は疾駆する。
音も無く、気配も無く、存在も悟らせない。
咸卦法を纏わなければ到底、肉体が耐えられない加速。
生身で使えば空気の摩擦で皮膚は焼け爛れるだろう。
音の壁に当り潰れるだろう。
限界を越えた体に負荷が掛かる事なんてお構いなしに唯、殺す為に行使する。

大渦の型・奥義――――――大渦。

無影の加速を留めず、踏み込んだ足の裏から確かに伝わる大地の波を長年培った化で右手まで伝えながら、腕に回転を加える。
それは大渦の様に巻き込む為の一点を貫く渾身の一撃を繰り出す。
更にその右腕には斬魔の気を込めるのを忘れはしない。

その渾身の奥義は確かにヘルマンの心臓に叩き込まれた。
破魔の力が心臓を破壊し、その周囲の肉と骨、内臓は一回り大きい空洞ができた。

「まさかッ！　この私でさえ視認が不可能だとはねッ！」

だがヘルマンは喋る。
生きている。

だから俺は右手を引き抜く前に背骨を掴んだ。

伝わる手応えは人間と変わらない。
血の温かさも人間のまま。
なのに生きている。

ルクレツィアはもう居ないのに、こんな奴がまだ生きているッ！！

遅れてヘルマンの背後からやっと破裂するかのように血が噴き出した。

「ぐぬぅ・・・・・・ッ！！」

「「「「「きゃあぁぁぁぁぁッ！！？」」」」」

呻く悪魔と明日菜達の悲鳴を余所に俺は残った左手に大神宣言（グングニル）を現わし、回転、穂先を喉元へと突き付けた。

するとヘルマンの顔色が変わった。

「なんとッ？！　その禍々しいまでに神聖な気配の槍は「大神宣言（グングニル）」ガ、ヤハリッ？！」

俺はヘルマンの喉を零距離から真名解放した大神宣言（グングニル）で刺し貫いた。

これでもまだ話せるかッ！！

内心は烈火の如く、しかし外見は水面のように表情はない。

「天敵トモ言エル神ノ槍ヲ、コノヨウナ極東デ目ニスルトハ「取り敢えず死ねと言ったぞ、秘神宣言（グングニル）」ガァァッ！？」

刺し貫いたまま更にもう一度、真名を解放した。

瞬間、グングニルの穂先の微細な罅から眩い破魔の光が漏れだした。

その威力は折り紙付きだ。
何せ、この槍の穂先には軍神オーディンが扱ったとされるルーンの全てが内包されているのだから。
これこそ、古の大鬼神を唯の一撃で屠る事が出来た真の力だ。
粗悪品はこの穂先が内包したルーンに耐えられずに砕け散ってしまったが、完成品はそんな事にはならない。
間違いなく効力を発揮する。
このルーンを発動するには刺した後にもう一度、真名解放をしなくてはならない事、発動できるルーンの効果は1つだけなのが難点だ。
だが、効果は様々で用途別に使える。
さすがは神の持っていた槍だろう。
今回は破魔のルーンを発動させた。
故に悪魔にとってこの槍は最大の天敵の一つだ。

「マサ、カ・・・・・・魂ガ浄化サレ・・・・・・」

「ヘルマンのおっさん！」

「おじさま！？」

「・・・・・・ッ」

ヘルマンはそう言い残して魂は浄化され、灰となって消滅した。
その代わりにスライム三人娘が三方から襲いかかって来たが――

――――

「エグジグ　エグザグ　エグゼクト。　凍てつく氷柩（ゲリドゥスカプルス）」

俺は振り向きもせず、スライム達を氷の棺で包み込んだ。

スライムは殺すのは中々に手間が掛かるな・・・・・・後でゆっくりと業火で溶かし殺してやる。

俺は視線をネギの方へ向ける。

ネギは気絶している。

コイツを治せれば良い方向へと変える事ができると思ったが・・・・もう、何もかもが――――――

――――――どうでもいい。

俺は大神宣言（グングニル）を客席に埋まったネギの心臓へと向け――――――

「大神（グン）――――――」

「学園結界を朱然個人へ再起動するのじゃ！」

「何ッ、ガッ？！」

学園長の声が響いたと思った瞬間、学園都市を覆っていた結界の全てが俺を押し潰した。

無様に地面に叩きつけられ、その反動で歯が唇を切ったのか血の味が口の中に広がった。

そして、学園長が俺の目の前に現れた。

「クソ、爺がッ！　俺の邪魔を、するのかッ！！」

俺は咸卦法の密度を最大まで引き上げ、上半身を起こし、跪いた格好から更に立ち上がろうとした。

気が付けば周りには見知った魔法先生だけが俺を取り囲んでいた。

魔法生徒には都合の悪い事は見せないつもりだなコイツはッ！

「・・・・・・ッ！　そうか・・・・・・邪魔をするのかッ！！」

「学園を守護する結界を一人で背負って尚、立ち上がろうとするとはのぅ・・・・・・第二陣！」

学園長が感心したような感想を漏らし、指示を出す。

すると――――――

「紫炎の捕らえ手（カプトゥス・フランメルス）！」

「流氷の縛り手（ウィンクトゥース・アクアーリウス）！」

「風花旋風　風牢壁（フランス・カルカル　ウィンティ・ウェルテンティス）！」

「蒼雷の囲い手！」

「赤土の阻み手！」

「七重捕縛結界！！」

ありったけの捕縛魔法が俺に直撃し、拘束した。

炎、水、雷、風、土、影、捕縛専用の魔法陣が何重にも体の自由を奪う。

しかし、俺は止まらない。

止まらせる訳にはいかない。

「覚悟は、できているんだろうなッ！！」

俺は完全に立ち上がり、八卦八武装（せんてんはっけ）を呼び、学園長と周りを囲む魔法使い達を睨みつける。

「ネギ君を殺させる訳にはいかんと言った筈じゃ」

静かに、諭すように学園長は言う。

そんな事などどうでもいい。

なにより俺はッ！

「言った筈だッ！　俺の邪魔をした場合は殺すとッ！！」

「どけッ！　どかんかッ！　水仙、無事かッ！！」

強引に真名を解放しようとした所でエヴァの声が聞こえてきた。

「ああ・・・・・・ッ！」

エヴァは俺を庇う様に学園長の前に立ちはだかり、敵意をむき出しにして学園長を睨みつける。

「学園に悪魔が入り込み、我々が気付いた時にはネギ君が侵入者のこの娘と交戦しておったのじゃよ」

学園長は取り繕った様に言う。

「ふざけるなっ！　私が気がつかないとでも思ったのかッ?!　悪魔共が何時入ったのかは学園の結界が生きていれば私がすぐに感知できるはずだッ！

だが私が別荘から出た時には既に私を縛る筈の結界の拘束力がなかったのは明白だッ!!

大方、坊やの修行の為に貴様が悪魔を引き入れたのだろうッ!?

それを水仙とその近しい者には一切知らせなかったのもなッ!!」

「・・・・・・」

学園長は何も言わない。

全員が全員、沈黙したままで雨に打たれ、髪は湿り、服は濡れる。

状況が呑み込めない明日菜達は黙って此方を状況を見守っている。

第５１翼　敵対、殺そうとする紫の麗人（後書き）

クソジジィィィ――――――ッ！！
という話になりました。
タカミチは知りません。
魔法生徒も知りません。
でもヒゲグラ先生とかは知ってます。
権力には逆らえません。

ルクレツィアごめんよ～。
作者が不甲斐ないばっかりにッ！

そんなこんなで不本意な朱然さんには魔法世界で一騒動あった事をしり、メガロを壊す決意をしてもらいます。
捕縛系魔法の蒼雷の囲い手、赤土の阻み手はオリジナルです。

卒業研修の手伝いをして2徹してバイトに行ったら社長に、何か凄い死にそうな顔してると心配されました（笑）
帰ってから丸1日爆睡してちょっと復活しました。
後は栄養ドリンクで・・・・・おや？　誰か来たようｄ

グングニルの第二の真名解放の文字を変えました。
少し変なところがあったので修正しました。

第５２翼　壊れた日常、捨てる紫の麗人

俺の邪魔をするなッ！！

「？！　なんじゃとッ？！」

「な？！　無理をするな水仙！？」

俺は咸卦法の密度を限界まで引き上げた。

「オォォァァァァァ――――――ッ！！」

俺は捕縛系魔法を、纏っている咸卦法の周囲放出で吹き飛ばす。

その代わりに自分の肉体の所々の毛細血管が弾け、血が噴き出した。

そして――――――

「俺はここに誓おう！　己が行いに後悔しないという事を――――――！！」

もう……後悔なんてしたくない。

だから俺は誓った。

後悔するよりも前を向いて欲しいと蓮華は言ったから。

この誓いは後悔しない為の誓いではない。

込められた性質は真逆だ。

後悔ばかりのこの生を忘れずに押し込める為、今までの後悔を刻みつける為の言葉。

例え誰にも理解されなくても、例えその道が血塗られていてもッ！
この言葉はッ、この誓いは力になる！

流れる血が頬を伝い、血涙を流している様に見えるだろう。
全身から噴き出した血は、まるで狂った殺人鬼が返り血を浴びたかの様に滴る。

「なんとッ？！」

「待て水仙ッ！　此処でそんなものを使えばッ！？」

八つの武具が集い、俺の手に握られたのは白と黒のニ刃を持つ鎌。
しかし、その鎌の刃は今の俺の感情が反映されているかのように禍々しい光を放っている。

「伏羲（ふっきの）八卦次序――――――」

「水仙ッ！！」

エヴァの制止を振り切って、俺は学園丸ごとを覆っていた結界の重圧に耐えながら太極の鎌を振りかぶった。

だがそこで、学園長が何かを取り出した。

「！！　それはッ！！」

驚愕により、俺は真名解放する手が止まってしまった。
取り出されたのはペンダントだった。
大きくも珍しくもない形。
だが、それを俺は良く知っていた。

「何故、それをお前が持っているッ!?　答えろッ!!」

学園長が持っていたモノ。
それはエヴァの吸血鬼化を治す為にやっと完成させた試作品のアーティファクト。
できたばかりで、ｓｃａｒｌｅｔの工房に保管していた筈のモノ。

「爺……俺はお前の事は最低限は買っていた。　だがそこまで腐ったかッ、下衆がッ!!」

「今、この学園からエヴァンジェリンを解き放させる訳にはいかんからのぅ。
お主が魔法世界にエヴァを連れていく事によって起こる混乱は避けねばならん。
それともお主はずっと匿い続けるつもりかの?　例え人間に戻れたとしても、今までの罪が無くなる訳ではないのじゃ。
いずれはバレるじゃろう。　儂はそれを思って言っておるのじゃよ」

「水仙!?　爺?!　なんの話をしている?!」

エヴァは全く事態を呑み込めずに俺と爺にそれぞれ視線を向ける。

「アレは俺が造っていた……お前を吸血鬼から人間に戻す為のモノだ」

「何ッ?!　なら何故、爺がそれを持っているッ!?　いや、それより私を人間に戻すだとッ!?」

「この事件を囮に、俺の目が逸れたのを良い事に盗み出したんだろうさ……ッ！」

俺は爺を睨みつける。

アレは完成して尚、まだ未完成だ。
アレは他人に押し付ける為のモノだから。
だがこの爺なら良心など痛まないッ！
何より、この爺も責任を取らせてやるッ！

「発動ッ！！」

「フォ？！」

エヴァの吸血鬼化に対する考察。
エヴァは生まれた時から吸血鬼ではない。
真祖とは生まれた時からそうである。
ならば、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルとは何者なのか？

どんな経緯であれ、後から吸血鬼化したエヴァは成り立ちから見れば死徒、在り方ならば吸血種だと思われる。
恐らく、真祖と呼ばれる程に強大になったのは闇の魔法（マギア・エレベア）の多用による吸血種の因子の浸食が原因だろう。
では治療は可能だろうか？
答えは否。
通常で治す事は不可能と言っていい。
治すには吸血鬼化し、エヴァの生きた６００年という時間をどうにかしなければならないのだから。
だが同時に是と答えよう。
別の誰かに移し替える事が可能ならば、治す事が可能になると結

論付けた。
６００年を魔法陣に取り込んだ人間に分配する事で時間の蓄積をやり過ごし、吸血鬼としての体質すら分配するという術式。
それを今のエヴァが肯定するかどうかと言えば、それは否定するだろう。
誰かを犠牲にしたくないというような崇高な理由ではなく今更、人間になどに戻った所でどうしようもないと言うだろうから。
でも俺はエヴァも普通に、追われる事のない人生を送ってほしいと思っている。
誰にも取り残される事の無い人生を。
取り残される事は……とても寂しい事だから。
なら今だ。
この爺ならエヴァの６００年という時間を受けさせても、やはり良心は痛まない。
俺とエヴァ、爺の三者を魔法陣が取り囲む。
「水仙！　何をしようとしている？！」
エヴァは俺に詰め寄った。
首が締めつけられる感覚。
俺は無視したまま、ペンダントの術式を解凍した。
大まかな術式の内容は、俺の受けた吸血鬼化を応用した改造術式を更に改造した、身代りと分配。
最初の対象は爺、次が俺。
爺が受け止めきれない残りの時間を俺が肩代わりする。
受け止めきれなければ不発になるし、爺が何かをするかもしれない。
「く、ぅッ？！」

エヴァの身体から闇が吹き出す。

正義の魔法使いで日本の魔法使いの拠点のトップが吸血鬼だなんて、スキャンダルどころの話じゃない。

魔法使い達は吸血鬼を排斥するのだから。

魔法使いの間にこの情報を流せば、爺は追われ、命を狙われ続けるだろう。

当然、俺も。

「これはッ？！」

爺はペンダントを俺達の方へと投げるがもう遅い。

術式はもう爺と俺を逃がしはしない。

そして、術式は成った。

その闇が爺へと吸い込まれ、吸い込み切れなかった闇が俺へと流れ込み始める。

エヴァは人間に、爺と俺は吸血鬼となる。

爺は５０年程、俺は５５０年程、時間を請け負った。

爺は更に皺が深くなり、骨と皮が目立って更に年老いた。

見た目は間桐の妖怪といい勝負だろう。

対して俺は６００年くらいなら元々問題はない。

尸解仙は想いで生きる。

その想いが強ければ強いほど俺の寿命は続く。

殺されない限りは。

だから最悪、俺が吸血鬼化を全て受け止めるつもりだった。

もともと魔眼暴走の時に不死化したから吸血鬼としてのポテンシャルは良い方だと思っていたしな。

しかし、老いない俺は全く変化はない訳ではない。
瞳は相変わらず紫水晶の輝きを放っているが、瞳孔は猫の目の様に縦長に割れて、更には犬歯が若干鋭くなっている。
これで爺も俺も所謂、不完全ながら不死になった訳だ。
不完全というのは、エヴァが闇の魔法（マギア・エレベア）の浸食によって、あそこまで真祖に近づいてしまったから時間の蓄積と吸血鬼の能力がイコールでの分配ではなくなった。
時間は分配されたが吸血鬼になったばかり……生まれたての吸血鬼というのが正しい表現だろう。
感覚としては不死になったというより、かなり死ににくくなって急激に魔力が増大したが、逆に体を突き動かしてしまいそうになる程の吸血衝動が酷くて辛い。
それなりに相性の良い俺でコレなのだ。
爺は堪った物じゃないだろう。
苦しげに呻きながら喉を押さえているのがいい例だ。
この分だと日の光もダメだろう。
何より時間は周りを置き去りにする。
爺はその吸血鬼の体質に悩まされ、自殺をしても生半可な傷では死にはしない。
俺は慣れいるが、爺は慣るまでにかなりの時間を要するか、途中で発狂でもするだろう。
何せ排斥すべき対象に自分が成ってしまい、狙われ続けるというストレスは尋常ではない。
それはさて置き、太陽に対する耐性は相性の良い俺でも何かしらの対抗策を考えなくてはならない。
吸血衝動を押さえつける為に、恐らく全魔力の3割を己の封印に費やさなくてはならないだろうし、日の下は歩けない事はないが身体能力を始め、色々と4割程は削られてしまう感じだ。
魔力増大でナギ程にまで上がったようだが、3割を封印に回すのであれば寧ろマイナスだ。

つまり最悪の場合――――――

日の下では7割の魔力が封じられ、身体能力その他、諸々が4割の封印。

――――――という事になった。

エヴァを無理矢理、しかもこれからする事の代償がコレなのだろう。

全く笑えない状況だ。

もっと時間をかけて然るべき性能のモノを作れればこんな強引に……寄り代の様な方法でやらなくても済んだ筈なのだが、それは爺の自業自得で俺の落ち度だった。

これからエヴァにする事――――――それは呆然としているエヴァとは此処でお別れだという事だ。

結局、余計な世話を焼いた所為でレティを失って、爺の余計な介入の腹いせにエヴァを勝手に人間に戻して爺の報復に使い、戦闘力も減衰しまった。

人間に戻ったエヴァの拡げられた魔力はそのままのようなので、魔法使いとしては十分過ぎる程の魔力を有してはいるだろうが、此処で爺と同じく吸血鬼となった俺と行けば命の保証はできない。

そんな事には巻き込ませる訳にはいかない。

エヴァが望んでも、俺は受け入れられない。

設定としては――――――

俺はエヴァの真祖と呼ばれる程の吸血鬼の力を望んでいた。

吸血鬼の力を手に入れたらエヴァはお払い箱。

そうしておいた方がエヴァには良いだろう。
物凄い嫌われるだろうし、憎まれるだろうけど、旧世界で生きる分には問題はない。
なら精々嫌われておいた方がエヴァの為になる。
いずれは折を見て人間に戻そうと思っていたが何もかもが狂った。
もうこれ以上は此処に居る必要も……殆どない。
それも学園祭にどうにかすれば、どうにかなるだろう。

「う……僕、は？」

その時、ネギが目を覚ました。

瞬間、俺は抑えきれない殺気をネギへと放っていた。

「ッ！！？」

ネギが喉を押さえてのた打ち回る。
強すぎる殺気は本能を刺激し、筋肉を緊張、硬直させて呼吸困難を引き起こす。
それ程までに、俺はネギが憎かった。
今なら視線でネギを殺せるだろう。
だが俺は殺気を緩める。

「ハッ、ハッ、ハッ、ハッ、ハッ……」

ネギは呼吸を整えながら現状を把握しようと周りを見回した。
学園結界に拘束されて少し辛そうにしている俺をまず見て、それから苦しみに呻く学園長、呆然とするエヴァ。
混乱しながらも俺を警戒し、取り囲む魔法教師達。

ステージ上で此方を見ているだけのネギが巻き込んだクラスの者達を見て――――

「一体……何が……？」

と、のたまった。

また、殺意が沸いた。

どうしようもなく、止めどもなく。

コイツを殺したいと。

俺は殺意を何とか抑え、淡々と、黙々と進む。

吸血衝動は満月が近い事と怒りによって一時的にだが収まっている。

伏羲八卦次序太極鎌（ふっきのたいけん）を消して、学園結界を背負ってひたすらに進む。

真っ直ぐ、ゆっくり、確実に。

進む度に地面が砕け、地響きが鳴る。

魔法教師達は、俺の血塗れの格好と唯ならぬ魔力の本流に気圧されて、道を黙って譲った。

今や権力は意味を成さない。

学園長は指示も出せない。

だから何も出来ない。

そもそも魔法先生達は学園長の今回のやり方にはあまり快く思っていなかったのかもしれない。

それに英雄の息子よりも英雄。

それが魔法使い達の答えなのだろう。

例え吸血鬼になったとしても。

全く、呆れるしかない。

ネギの起き上がった観客席の近くで青白い顔をして寝かせたままのルクレツィアを抱き上げる。

その顔はただ眠っているだけの様に穏かなものなのに。

見ているだけで、涙が流れそうになるのに。

「その娘は僕の仇ッ！？　朱然さん、どういう事ですか！！？」

ネギ（コイツ）に殺された。

こんな奴まで救おうとしたから。

俺が麻帆良に来なければ。

さっさと魔法世界に帰っていれば。

そんな後悔だけが沸き上がる。

「どういう事？　どういう事だと？！　お前が殺したんだろうがッ！！」

「！！」

だから俺は怒声でネギに返した。

そのネギは今知ったという表情を浮かべた。

それが苛立たしい。

コイツに抱く感情は怒りとそれのみだ。

レティを殺した事をなかった事にするかの様な、その“自覚”も“覚悟”も無い腑抜けた面も。

最初の頃の様に逆戻りしたようだ。

今すぐにでも殺してしまいたいッ！

でも、だからこそ俺は敢えて殺さない事を選ぶ。

思い知らせてからだ。

自分のした事の重大さを見せつけてからだ。

今すぐ殺してやると思ったがコイツの反応を見て気が変わった。

自分のやった事を自覚させて苦しめて苦しめて……簡単になんか殺してやらない。

ゆっくりと俺は浮遊術で浮き上がる。

だから俺は賛辞を贈ろう。

「おめでとう、この人殺し。　よくも俺の娘を殺したなッ？！」

「む、すめ？　そん、そんなッ！？　嘘だッ？！　嘘だ嘘だ嘘だッ！！　僕は殺した筈がないッ、アレは全部みんな夢でッ！？」

「夢じゃない。　現実を見ろ。　目を逸らすな。　事実だ、人殺し」

「う、ぁ……ぁぁぁあああッ！！？」

ネギは自分が落ちて壊れたベンチに手を伸ばす。

そして、ベンチを固定していたネギが落ちた時に壊れてできた先の尖った金属片を拾い、自分の喉に突き刺そうとした。

「ッ！　させるかッ！！」

俺はすぐさま気弾を使い、金属片を持っていた両の手を弾き飛ばした。

その反動でネギはもんどりうってうつ伏せに倒れながら、立ち上がろうとして四つん這いになった。
顔は伏せられ、表情は窺えない。

「……下さい。　僕を殺して下さいッ！！」

回想の時の俺が揚雲のオッサン言ったようにネギは言う。

レティは絶対の死ではなかった。
避けられた事の筈だ。
なら許せる筈がない。
確かに俺は、レティの事を間接的な表現でとはいえ、ネギに伝えていたんだから。

ネギは俯き、雨に濡れた前髪から雫が落ち続ける。

「俺は自殺なんて許さない、誰かに殺されるのも許さない」

「……ッ！！　ならッ！　どうすれば僕を許してもらえるんですかッ！？」

ネギはバッと顔を上げ、見下す俺と見上げるネギの視線が合わさる。

「許す？　起こってしまった事は変わらない。　変えられない。
変えてはいけないモノだッ！！
どんなに好きでもッ！　どんなに愛していてもッ！　人は生き返らないのと同じようにッ！
殺した事実は消えないッ！　お前の罪は一生消える事はないッ！」

「それでもッ！　それでも僕は償いたいッ！　罰してッ、欲しいんです……ッ！」

またネギは俯いた。
雨の雫の他に、ネギの嗚咽が聞こえる。

「店の地下に有ったこの杖はくれてやる。　初めて人を殺した祝いの証だ」

そう言って俺は空間からｓｃａｒｌｅｔに飾ってあったあの杖を取り出し、ネギの方へと放り投げた。
投げられた杖は二転三転と回転してネギの前に落ち、地面に音を響かせた。

「……いずれ、お前には絶望を送ってやる。　待っていろ」

「……ッ！！」

俺は顔を歪め、豪雨に濡れながらネギに最大の皮肉を渡した。
ネギは落ちた杖を強く握り、魔力の枯渇によって気絶した。
気絶する前。

ネギの最後の表情は――――――

――――絶望の中に希望を見つけたかのような壊れた笑みだった。

そのまま俺は飛び去ろうと思った所で――――

「水仙ッ！！　何所へ行くッ！？」

「ああ、そう言えば用無しが居たか……」

「用、無し……？」

エヴァは理解できないと言った風に繰り返す。

「そう、用無しだよ。　俺は今後の為に吸血鬼の力が必要になりそうだったから君に近づいた。

吸血鬼の力を奪ったならもう用はないだろう？　だから用無しと呼んだ。　ああ、もう水仙と呼ばないでくれ。　反吐が出る」

「き、貴様ッ！？　あ、あの時、私を助けたのもッ！　仮契約したのもッ！　全部ッ、全部その為だとでも言うのかッ！？」

問い詰めながらも、何所か縋る様な表情。

「そうだ……仮契約解除。　これで君とは何の関係も無くなった。

いや、実に滑稽だったよ。
あの闇の福音も所詮は女だったということだな！」

俺がそう言いながら仮契約カードをエヴァの方へと捨てた。
仮契約カードはエヴァの足元へと滑るように落ち、消滅した。

「……す。　殺してやるッ！！　何所までも追って殺してやるッ！！」

怨嗟の声。

……ッ、わかってて、そう言われるのはやっぱりキツイな。

「折角、人間に戻れたんだ。
君の言う怠惰で、自堕落で、日々の小さな幸福と愉しみを感じながら普通の人間の様に暮らせば良いんじゃないか？
こんな学園になんてさっさとおさらばして……普通に、ね。
登校地獄の呪いはそうだな……1ヵ月後の学園祭にでも解きに来るよ」

そうさ……本当はこんなに唐突になる筈じゃなかったのに。
でも事は起こったし、起こしてしまった。
それが悪いベクトルのモノなら、なるべくそれ以上に悪くならないようにしなくてはならないのも義務だろう。
唯、今はこの娘を弔って、エヴァとの関係を偽装する事が最優先だ。

俺はそう言って学園を後にした。
様々な想いを、置き去りにして……。

その後、影の転移魔法を使って西へ西へと向かった。
向かった先は関西呪術教会総本山、近衛詠春の下だ。
総本山中腹で神鳴流に取り囲まれたが、詠春と鶴子に弁護されて何とか中へと入る事が出来た。
そこから詠春に事情を話し、ルクレツィアの埋葬を頼んだ。
いくら感謝してもし足りない。
爺が吸血鬼化した事は爺の自業自得だという事で詠春は納得してくれた。
その後、レティが命懸けで届けてくれた手紙を読んだ。
魔法世界の孤児院がメガロによって襲われたと書かれていた。
子供達は一番上のブルバギ、ヒナギク、コザクラ、リリクス、ラリーが連れてアリアドネーに保護してもらったらしい。
それぞれ軽傷は負ったものの、何かしらのハンデを受ける重傷は負ってはいないそうだ。
中立である筈のアリアドネーの孤児院に襲撃をかけるとは考えなかった訳ではなかった。
メガロが孤児院を襲った理由は人造魔法使いのルクレツィアを消す事か、ナギの故郷襲撃の口封じだろう。
だからこそ上の子供達には戦闘訓練も積ませてはいた。
魔法世界では実力があった方が何かしら有利になると思ったし、護身の為だ。
メガロからの襲撃者は、全員がルクレツィアと同じような者達…
…人造魔法使いだったらしい。
コザクラの魔眼がそれを読み取ったと書かれていた。
襲撃を受けたところで即座に一番上の子供達は逃走を開始、敵を迎撃をしながら魔法学校へと逃げ込んだとの事だった。

その際、下の子達が数人……守り切れず死んでしまったらしい。

翌日早朝、総本山高台。

「行くのか？」

「ああ」

高台から顔を覗かせ始めた太陽を眺め、後ろに居る詠春へと返事を返す。

一時期の裏工作で静かになったとも思ったが、もういい。

十分だ。

壊してしまおう。

ネギも、爺も許さない。

メガロメセンブリアも全部、俺の持てる全ての力を振るおう。

「個人でメガロメセンブリアに敵うはずがない。　それこそナギやラカンだってな。　情報を弄られてそれまでになる可能性だってあるんだぞ」

「裏の情報もそれなりに集まってる。　多少強引でも押し通して見せるさ……そろそろ行く。

ルクレツィアの……娘の事、よろしく頼む」

「……最後まで見守るのが親の務めだろうが！」

「別れはもう済ませた。　他の子供達も放ってはおけないんだ……親だから」

俺は詠春を残して高台を降りて行く。

まずは……魔法世界、完全なる世界に潜り込む必要がある。

個人ではおのずと限界があるし、誰がヘルマンをけしかけたのかを突きとめておきたい……。

「行ってくるよ、レティ……全部が終わったら、もう……いや……」

俺は最後にもう一度だけ総本山を見上げて言いかけた言葉を切り、頭を振って歩み出した。

もう振り返りはしない。

他の子供達の為にも、レティの為にも。

さあ、行こう……歪で不条理な世界を、壊しに……。

第５２翼　壊れた日常、捨てる紫の麗人（後書き）

何というか、なんだこの展開？
と読者様方をぽかーんとさせてしまったかも、と冷や汗を流してます作者です。

クソジジイィィ――――――ッ？！第二弾。
まあ、学園長も今更、エヴァンジェリンが魔法世界で波乱を起こすよりは旧世界の、この学園に居た方が良いという考えからペンダントを盗ったみたいな感じですかね。
悪魔を引き入れた事に関してはネギの今後の為。
それによってルクレツィアは死んでしまい、朱然さんのその八つ当たりで吸血鬼化へ。

ネギ崩壊。
これはまあ、初めて殺してしまった為の反動みたいなものでしょうか？
朱然さんが修正したとはいえ、あの性格と歳で人を殺すのには耐えきれなかった為にあんな事に。
最後の壊れた笑みは、罰してくれる事に対しての笑みでしょうか。

エヴァの吸血鬼化の考察。
これは前々から思っていた事ですかね～。
某ゲームの設定を取り扱っているサイトにて吸血鬼の真祖は始めからそういったモノ。
それ以外は死徒みたいな事が書かれていたので、エヴァは死徒なんじゃ？と思ってみたり。

朱然さんは一旦、魔法世界へ往き、完全なる世界に入ります。

今回はといいますか、今回もといえばいいのか、何とも強引なオリ展開を見せ始めました。
自分の頭ではこんな展開しか思いつかなかったので；；
力不足でお見苦しいところもあるでしょうが、何か気になる点などがありましたら指摘して頂けると幸いです。
何時、更新が途絶えるかもわからない不安定さですがよろしくお願いいたします。
ではまた次回にてノシ

少し修正しました。

第５３翼　完全なる世界、与する紫の麗人（前書き）

今回で話のストックが無くなってしまったでござる……。

第５３翼　完全なる世界、与する紫の麗人

「お母様！」

「ママ！」

「母さんッ！」

子供達がそれぞれ俺に飛びついてくる。

全て女性形なのはスルーしてくれ……。

そう、俺はアリアドネー魔法学校に居た。

今の姿は本当の容姿。

「母上、レティは何処に？　それにその瞳は……」

ヒナギクが問う。

「レティは……死んだ。　いや、殺されたんだ」

「何ですってッ？！」

「一体誰がレティを？！」

コザクラ、ラリーが声を荒げ、ブルバギ、リリクスは目を伏せた。

「それは教えられない。　だが、そいつは俺が必ず……絶対に許しはしない」

その先は言わなかったが、子供達は分かってくれたのだろう。
誰も何も言わない。

「お母様、お母様に吸血鬼としての力が見えるのは気の所為かしら？」

コザクラの魔眼が俺の中の力を感知してしまったようだ。

「気の所為じゃないよ。　吸血鬼の女の子を勝手に救ってきただけだ。　自分に吸血鬼の能力を移し替えてな」

気にしない気にしないと手を振る。

「相変わらずだな母さんは。　で？　その女の子は？　連れてきてないのか？」

「ラリー……女の子の部分に反応しないの」

「気になるだろう？」

コザクラとラリーが言い合いを始めそうになるが――――

「名前はエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルという頭脳は大人、体は子供……巷で闇の福音とか言われていた吸血鬼だ」

「「「「「ブッ！！？」」」」」

――――まさかの名前に上の子供達は吹き出した。

おお、上の子供達が一斉に吹き出した。
というか滅多に喋らないブルバギさえ吹き出すとは。
魔法世界では、やはりメガロメセンブリアが昔から宣伝をしてそれを鵜呑みにした者達が子供達に刷り込むから余計に悪い方向へとイメージが定着していく。
エヴァもエヴァで不本意に吸血鬼にされたが為に、殺さなければ生きられなかったのだろうし、それも相まってエヴァは悪の魔法使い、滅ぼすべき吸血鬼の代名詞にされてしまった。
エヴァを救うのならば、今の在り方を肯定している世界の価値観というモノを……メガロメセンブリア、その元老院をどうにかしなければならない。

「し、真祖の吸血鬼を治したのですか……お母様」

リリクスが引き攣った顔で言った。

「この世界の真祖の吸血鬼は別世界では違うという事に着目して、無理矢理に違う世界の吸血鬼の概念とぶつけ合って、その概念的矛盾が生じて微かに乖離したところをすかさず分配の術式で分配、移し替えたんだ。
彼女が居る場所が中々に厄介な場所にあってな……処々事情で勝手に治したんだが、あの場所に縛りつけられた呪いを解く時間がなくて……そこの魔法使い共は最悪、その子を人質にしてくる可能性があった。
だから能力を手に入れるだけが目的だったという設定で、罵詈雑言と挑発をして逃げてきた」

そうしたら、やっぱり何所までも追って殺すっていわれたよ、と言いながら半ば苦笑した。

あんな事を言って、あんな事をして、笑っていられる筈がないなんて思われるかもしれない。
でも、だからこそ笑ってでもいなければやってられないじゃないか。
全て上手く行くなんて考えてない。
でも上手くやってみせると、俺は間違えないと、心のどこかで慢心していた。
子供達とエヴァだけを守ろうとしていれば、あるいは上手く行ったのかもしれないし、やはり今回のように何所かで間違えたのかもしれない。

「母上……どれだけお人好しなのですか、馬鹿ですか？」

ジト目でヒナギクに呆れられた。
他の上の子供達も一様に、そんな感じの視線を向けてくる。

だぁ～！
実際に言われると余計に自分のアホさに頭が痛くなるッ！

「なら、闇の福音も助けられたら此方に連れてくるのですか？」

「可能ならばそうしたいが、彼女はもう人間となっても恨む連中、賞金を狙っている連中は数多くいるし、彼女はこれからも苦しんでしまう。
彼女を匿っている人間も含めてな……。
これから俺の取る道の中で、彼女の行動如何によっては、もう一演技する事になると思う。今度こそ……」

今度こそ間違えない。
守るべきモノを間違えない。

いや……間違える訳にはいかない。

レティが死んで、少なからず気が動転していたというのもあるが、なんて無様。

名前も知らないどこぞの他人が死ぬ事、向かってくる他人を殺す事には慣れはしないが躊躇はもうない。

でも、身近な誰かが死ぬのはやはり慣れないし、敵対するとなればやはり色々と鈍ってしまう。

全く……こんな体たらくでは、ネギに説教する資格すらないじゃないかと自己嫌悪に陥ったのは、また別の話。

「かなり強引だが、彼女の悪いイメージを払拭はできなくても緩和くらいは出来るように織り込み済みで動くさ。

そうなると彼女には俺を恨んだままで居てくれた方が今は都合が良い。

まあ、それはお前達にはあまり考える必要もないし忘れていてくれ」

また自己嫌悪に陥りそうになったので、そこで切り上げてレティの最後を伝えると皆、レティの為に涙を流した。

俺も死に際に会えなかった子供達の最後を聴いて泣いた。

セラスが埋葬を手伝ってくれたそうだ。

訊けば、助けられなかった子供達の亡骸、殺された子供達の遺体の状態は酷い者ばかりだったらしい。

全身が炭化している子、カマイタチに切り刻まれバラバラになってしまっていた子、押しつぶされ圧死した子、下半身だけが残っている子と旧世界であれば常軌を逸している状態ばかり。

それでも何とか子供達の一部を集めて、集めて、集めた部位（パーツ）は魔法学校で丁重に扱われて全員をセラスと上の子供達が生き残れた子供達と一緒に弔ったとか。

その時の近所の反応は様々だったらしい。
同情、憐れみ、無関心に疑惑。
何か危ない事をしていたのでは？という疑惑を持つ者はかなり少数だったが、それでも不快だっただろう。
この世界では死はそれほど遠くはなく、手を伸ばせば手繰り寄せられるくらいには近いものだった。
だからこそ死が身近にあっても騒がれる事もあまりない。
それがこの世界の真理だ。
だけれど気に入らない、そんな世界の在り方が気に入らない。

次の日、緊急用というか、一度きりの連絡手段を使いフェイトと連絡を取り、オスティアにて会う事となった。

「私も母上に付いていこう」

「俺もだ、母さん」

コザクラとリリクスは最低限は戦えるが、飽くまでも最低限。
下の子供達も戦闘など出来る筈もない。
だから子供を守る為にコザクラとリリクスは残り、ヒナギク、ブルバギ、ラリーは付いてくと言った。
守る為の子供達が戦いたいと言ったのだ。
自分が仕込んだとはいえ、こんな事になるなら教えない方が良かったとさえ思った。
家族を巻き込みたくないから、子供達の一緒に戦いたいという言

葉に俺は頷けずにいる。
孤児院の子供達の行く先は様々だ。
魔法学校へと通う者、自立して自分なりに働く者、トレジャーハンターをする者。

そして――――――

俺に殺しの技術を教わって傭兵となった者。

ヒナギク、ブルバギ、ラリーがその傭兵となった者だ。
傭兵になったのはこの三人だけだが、自分から頼み込んだ者達だけあってその実力は桁外れの者達となってしまった。
この孤児院出身で、三人だけの傭兵の集まり。
麻帆良に行く前に、俺も短い期間だが傭兵として動いていた為に一緒にカウントされた。
というか三人が、ウチの上司は俺だ的な事を言ってまわっているのが原因だが。

別段、名乗っていた訳ではないらしいが、いつしか噂になり始めて畏怖の名を込めてこう呼ばれた――――――“怪物（フリークス）”と。

噂を端的に述べるなら――――――

ヒナギク。
名前の通り、女性。
典型的な日本人の容姿で髪は腰まで届くロングヘアを貫いていて、前髪も左側だけ後ろと一緒に縛られているくらい長い。
服装は動きやすく改造された黒を基調とした着物を着ている。
直刀の二刀使いで、短刀の投擲もかなりのモノだが、注目すべき

はその剣速。
剣の早さだけならば、彼のサムライマスターよりも早いかもしれないとかで剣鬼と呼ばれている。
実は人間と悪魔のハーフでコザクラの妹。
剣の腕は悪魔とのハーフだけあって、気との併用で人間離れしている剣速を繰り出す事が出来る。
ただ剣と仕事と孤児院の事以外は少し残念な娘。

ブルバギ。
ヨーロッパ系のスキンヘッドに襟の長い法衣の様な衣装に身長以上もあるトランクケースを背負っている。
ターゲットは音すら聞く事無く仕留められる。
魔法ではなく大口径の狙撃ではないか？と言われている。
姿を見る事が稀な為に、幽霊と噂されているとか。
実際は俺特製の大口径の特殊な狙撃銃を使っての超長距離狙撃をしている。
遅延、加速、停止、歪曲、追尾、付与の概念を弾に込めて打ち出す銃だが、狙撃手としてもかなり優秀だ。
かなり無口で、滅多な事では声すら聴けない。

ラリー。
白髪に髭を蓄え、サングラスを掛けて高そうなスーツと指には数多くの指輪型の魔法発動体を付けている。
犬系獣人なので、帽子を被って耳を隠している。
大量の精霊召喚の様なモノ（主に犬）での追撃、殲滅戦を得意としている。
魔力量が多く、たった独りの軍団とも。
犬なだけあって、猟犬と呼ばれているが本人は気に入らないらしい。
実際は紳士なハードボイルドを自称しているが、優れた観察眼を

持っている。
精霊の召喚と指揮に対してかなりの資質を持っていて、召喚獣の参考にもなる程に卓越していると言っていい程。

しかし、いずれも気に入らない依頼は受けず、依頼人が悪意を以て騙した場合は何処までも追って殺すらしい。
その三人は勧誘しても絶対に縦には頷かない。
何故なら、少し前にあった拳闘大会で一時期話題になった黒い死神が自分達のボスであると言っているからだ。
メガロメセンブリアはその黒い死神を探していたが、結局どこの誰かはわからず終い。
今も尚、あのメガロメセンブリアから逃げ続けている。
この三人にも当然、メガロメセンブリアは居場所を問い質したが、結局は知らぬ存ぜぬだとか。
知っている風なのだが、三人は傭兵間どころか民間の間でも義賊として扱われている為にメガロメセンブリアも手出しが出来ないらしい。

そんな噂をこちらの世界の……傭兵の間どころか、魔法世界の端々でも最近、良く耳にする者は多い。

確かに十分過ぎる程に頼りになるが、それでも守りたい者は遠ざけたい。
だから俺は断った。
何せ世界を私情で敵に回すのだから、それに巻き込むのはダメだろうと思ったから。

「お前達は下の子供達を導いてやってくれ。
まあ、これから俺が色々と面倒事を起こすと思うが、全てを知ら

ぬ存ぜぬで通せばいい。
だから……後は頼んだ」
そう言い残して、立ち尽くす子供達を置いて高速艇でオスティアへと渡った。

それから数日後、俺は魔法世界へと向かいオスティアのカフェでフェイトと向かい合って座っていた。
勿論、変装している。
と言ってもヤオになっているだけだが。
同席者は調、環、暦。
焔は未だに俺を嫌っているようなので連れてこなかったそうだ。
フェイトと俺、環が珈琲、残り紅茶を頼んだが、フェイト以外は手を付ける雰囲気ではない。

「紫の麗人……いや、今はヤオだったかな？」

「そうだよ。　今日、呼び立ててしまった事をお詫びしようか？」

俺はおどけたような調子で言う。

「一体どうして私達に接触をしてきたのです？」

伏せたままの眼をこちらへと向ける調。

「……」

環も喋りはしないが、同じように探るような視線を向けて来る。

文通をしていると言っても立場的には敵と敵なのだから、それは仕方がない。

「それはそちらも知っているんじゃないか？」

フェイト達が何処まで掴んでいるのかを問うてみる。

「生憎、僕たちの組織は君達に倒されてしまって、散り散りになったのは知っているだろう？

造物主がナギ・スプリングフィールドと君に倒されてから空中分解、残党はタカミチ・T・高畑が狩っているから増えるどころか減る一方だよ。

それでも最近、またメガロメセンブリアがキナ臭い事をしている事、非公式ながら君の孤児院を襲撃した事は伝わっているよ」

人造魔法使い、というのは掴んでいないか……。

まあ、俺やコザクラの魔眼で見なければ強い魔法資質を持った者、くらいしかわからんか。

「なら話は早いかな。　孤児院（ウチ）を襲ったのはメガロメセンブリアの御同輩だよフェイト。

再開したんだ。　潰したはずのアレが……メガロメセンブリアは目撃した子供達を逃がしはしないだろう。

僕の娘がネギに殺され、孤児院は襲撃……。　僕はね、フェイト……そんな風に動く世界を憂いているし――――」

――――――壊したいと思ってる。

「「「?!」」」

底冷えする程の憎悪が漏れる。
その所為で調、環、暦は震えだした。

「つまりは……僕達の仲間になりたいという事で良いのかな?」

フェイトは珈琲を一口飲んで、自然に言った。

「ええッ!?　朱ぜッ、ヤオさんが仲間になるんですかッ!?」

その言葉に一番動揺したのは暦だった。
何せ、いきなり立ち上がった所為で椅子後方へと倒れてガタンッ!!と大きな音が鳴り、辺りがシンと静かになるくらいに。

「……すみません」

暦は周りに謝りながら椅子を戻して座り直し、シュンと尻尾と耳が垂れ下る。
少しすると喧騒が戻ってきた。

「少し違うかな。　ところでヘルマンを麻帆良に仕向けたのは君かな?　フェイト?」

ヤオになっている俺から闇が沸々と漏れ出してしまう。

ニッコリとした笑みを浮かべてはいるのだが、テメェの仕業なら今、此処でブチ殺すゾ？的な表情。

「わッ、わッ！　漏れてますッ！？　闇が漏れてますッ！？」

「落ち付きなさい暦」

ワタワタとパニくる暦に叱咤する調。

「おっとゴメンゴメンつい、ね……」

「ついで闇を漏らさないでくださいよぉ～」

暦が泣きかけたので、俺は少し表情を緩めて再度問う。

「答えを」

それでも依然として重圧を感じる笑顔をフェイトへと向ける。

「僕ではなくデュナミスだよ。　悪魔や使い魔関連全般は彼の管轄だからね」

フェイトは涼しげに言う。

デュナミス……ああ、居たなそんなのが。

「……殺るｋ「殺っちゃダメです――――――ッ！！」チッ」

隙見て何時か殺ろう……絶対に。

だがまずは目の前の敵より本当の敵（メガロメセンブリア）を掃除しなければ、後々に影を落とす事になるだろう。

「冗談はさておき、僕は自分の勝手な都合でそちらを手伝わせてもらう。　扱いはそちらに一任してもらって構わない。

気に入らない事は手伝わないつもりだからな。　一先ず、メガロメセンブリアを潰せれば目的の一つは達成される。

その為なら僕の掴んでいる情報も出来る限り譲渡しよう。

最後に、魔法世界の子供達を救う事を約束するのなら、僕自身が完全なる世界に付いた事を世界に公表して民衆の支持を仰いでも良い。

利害は一致していると思うのだけど、どうだろう？」

「随分と気前が良い気がするけど……良いよ。　君は幹部として動いてもらおうかな？

僕達は何せ人数が少ない。　少しでも実力のある者は多い方がいい。

君の目的が何であれ、子供達の為、守るべき者の為なら君はとても信用できる。

でもそれと同じくらいに目的の為なら何でもできるくらいに信用できないけどね。

それなら末端で好き勝手やられるよりも上の地位で縛ってしまった方が此方も対応もしやすい」

「随分とハッキリ言うものだね」

「どんなに周りくどくても意味は大して違いはないからね。　さて、珈琲も飲み終わった。　行こうか」

フェイトはコーヒーカップをソーサーに戻し、椅子を引いて席を

立った。
調、環、暦もそれぞれ席を立つ。
「ようこそ、完全なる世界（コズモエンテレケイア）へ」
フェイトは右手を差し出し、俺はその右手を掴んで席を立った。
俺は手を放す。
「そうそう、一つ訂正してもらっていいかな？　僕達、完全なる世界（コズモエンテレケイア）は世界を救う為の組織さ。
愚かな人形達を消し去ってこの世界の再構成をする。　新しい世界で人は争いのない生を謳歌する」
「わかった訂正しようか。　僕は今の世界を壊そう……救う為に」
「少し引っかかる言い方だけれど……」
この日、この時――――――俺は英雄である事を捨て、世界の敵になった。

第５３翼　完全なる世界、与する紫の麗人（後書き）

今回は、朱然さんが前回の反省と完全なる世界に就職するお話でした。

孤児院の子供達（一番上）の名前が出てきましたが、特に説明の出て来たヒナギク、ブグバギ、ラリーの三名は今後出演する可能性があります。

朱然さんとフェイト達との行動理念はある意味一致して、ある意味不一致しています。
これは追々話が進むにつれて頑張って書いて行きたいと思ってます。

毎度、酷い内容かもしれませんが、それでも楽しんでもらえると嬉しいです。

つづけノシ

第５４翼　下準備、種を蒔く紫の麗人

「此処が私達の本拠地で、朱然さんも良く知っていますよね？」

「ああ」

暦に案内され、墓守り人の宮殿の広間へと案内された。

前に来たのは戦いに来ただけだから、ゆっくりと見る暇がなかったが、こうしてみると中々凝った作りをしてるな。

「暦、彼の案内は終わったかい？」

「ふぇ、フェイト様？！　あ、あのッ、すみませんッまだ終わってませんッ！」

「そう……君が仲間になったという事で、僕達の具体的な作戦行動の内容を教えておくよ。

まず僕達には必要なモノがある。　造物主（コード・オブ・ライフメイカー）の掟だよ。

造物主が造物主たる力を込められた世界の鍵。　これが無い事には作戦は成り立たない。

それを今、デュナミスが中心になって探しているけど、やっと明確な場所がわかり始めたらしいから、それは置いておくよ」

「明確な目標はこの魔法世界に生きる者達の魂を救う事が目標なんだろう？

まさか、この人造異界に創造された魔法世界を、現実世界に引っ張り出すとかか？」

「君は……いや、前の大戦に直接的に造物主と対峙した君なら、何かを聞いていたり知っていたりするのも可笑しくはないのかな？」

フェイトは少し驚いたと目を見開いた。

「で？　実際はどうなんだ？」

「そうだね……確かに僕達の目的は、２０年前の大戦から崩壊の兆しを迎え始めた、現実世界の裏側に存在する魔法世界をどうにかする、とだけ君には教えておくよ」

２０年前……ああ、なる程、２０年前ね……何となくだがパズルのピースが集まってきたぞ。

前の造物主との会話で、この世界がどういう在り方をしていたのかも鑑みれば自ずとわかって来る訳だ。

魔法世界は人造異界にあると言っても所詮は異物。

しかも世界と言うだけあってかなり大規模だ。

ならば早々に排除しに掛かるだろう。

しなければ世界が滅ぶのだから。

しかし、アラヤは人間という種を存続させるモノであって、仮初の幻想である魔法の住人などが滅ぶなど、どうでも良いのか動きはしなかった。

いや……もしかすると紅き翼が、アラヤによる意志で完全なる世界にけし掛けられていたのかもしれない。

話が逸れたのでアラヤの話は置いておく。

ガイアは星を守る為ならばどんな事でもする星の意志そのものだ。

そのガイアは星を守る為に造物主を星の触覚にし、造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）を与えた。

だが造物主は元人間であり、星の守護者になったが意志はあった。

人間同士の闘いによって疲弊する星の為に人間の争いを諫め、疲

れ果てた造物主は、人造異界に造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）でガイアに見つからない様に、人造異界という場所を創造し、魔法世界を作った。

その所為で、このままでは星どころか世界自体が壊れてしまうと感じたガイアは、旧世界と世界の何所かに造られた魔法世界を繋ぐゲートポートから、魔法世界を構成する魔力を徐々に吸い上げていた。

２０年前の大戦で造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）で動かしていた造物主の抜け殻が広域魔力減衰現象にて魔法世界を消失させる予定だったが、紅き翼と連合軍がそれを阻止してしまった。

ガイアにとっては狙いを阻まれた事になるが、その大規模的な魔力の流れが目印となり、人造異界にある魔法世界の場所が特定され、急激に魔力を吸い上げる事が容易になった。

その結果、約２０年前から急激に魔力が枯渇し始め、魔法世界に残った時間は約９年６ヶ月程となった、という訳だろうか？

そんな考察をしていると、まだ信用しきった訳ではないからね、とフェイトは締め括って歩き出す。

それに俺と暦は続く。

「ま、仲間になったばかりの新入りに教える程、甘くはないって事か……まあいいけど」

俺達は進む。

傍から見れば、正に廃墟の様な古ぼけた雰囲気なのだが、埃っぽい感じはしない。

掃除でもしているのだろうか？

そんな事を考えていると、その扉の前に着いた。

その扉は、かつて過去に造物主が居た広間の扉だった。

「そう言えば、造物主はあれから死んだのか？」

「死んでないよ。　何せ本体は未だに無事なはずだからね。　近い内に復活するかもしれないけど、僕達が事を終らせる方が早いと思うよ」

「そうか……」

やはり造物主は死んではいなかったか。

この世界で、星の触覚である造物主を見た為に、どういったモノかは一応、理解は出来た。

アレは死の概念がほぼ存在しない。

星が、ガイアの意志が殺させない。

星に囚われた者、星の守護者、いずれ復活する者。

そういうモノだ、アレは。

ナギの一撃が如何に強力であろうと、俺が空間破砕で巻き込もうと死にはしない。

出鱈目な存在だったのだ。

「この広間で幹部達は案件を決めたりするよ。　呼ばれたらまず此処に集まるものと覚えてくれれば良い」

「今は皆、それぞれに動いているので集まれませんけど……デュナミスさんは鍵を探していて、調と栞は末端への指示と資金調達、環と焔は今後の障害になりそうな組織や個人の排除ですよね」

「ふぅん」

返事をしながら、やっぱり何所の組織も、組織である以上はあん

まり変わらないんだな……と思ってしまう。

「朱然……いや、他の者と同じ様に仮の名前を名乗るかい？」

「……フェイトが決めればいい」

そういうとフェイトは顎に手を沿え、瞼を閉じた。

少ししてフェイトは静かに口を開く。

「なら……柩（ひつぎ）と呼ぼうかな？」

「柩、ね。　何というか、らしいのか？」

「確かにらしいかもですね」

暦がフェイトに同意して来たので、虐めたくなった。

「ほぉ、暦君は俺が死者を入れる棺桶（かんおけ）の名が相応しいと、そう言いたいのかね？」

少し不機嫌そうな表情と声色で言ってみる。

「へっ？　いえ、そういうつもりで言った訳じゃないです？！」

するとアワアワとうろたえ始めた。

「ふむふむ、ではフェイトのネーミングセンスが気に入らないと？」

チラリとフェイトの方へと視線を向けて見ながら言う。

「それこそまさかです！」

暦は断言する。

「ほぅほぅ、なら俺とフェイトどちらの味方になるんだ？」

「……」

俺とフェイトが暦をジーッと見つめる。

フェイトも何気に気になるのだろうか？

「え、と……フェイト様の味方、で……」

おずおずと暦は言った。

「だそうだ。　モテモテだなフェイト？」

「？　何を言っているんだい柩？」

フェイトはスキル・鈍感を発動させたようだ……。

俺は暦を引っ張って、フェイトに聞こえないように背を向けて暦と話し込む。

「アイツはいつもああなのか？」

「うぅ……やっぱりワザとだったんですね……そうなんです。　フェイト様は幾ら言っても気が付かないんです」

「？」

フェイトは首を傾げ、俺と暦は秘密会議を進める。

「あの手のタイプは恋愛というか、好意という感情がそもそも鈍感そうだからな……」

「はい……進展が全くないんです」

「襲う、とかは？」

いっそ押し倒してそのまま……。

「そそそ、そんな事できる訳ないじゃないですかッ？！」

ですよねー。

一番手っ取り早そうなんだが、やっぱり無理か。

さてどうしたものか？と考えていると、フェイトが正面に回り込んで来たので話を中断する。

「枢にはやってもらいたい事があるんだけど、いいかな？」

「ん？　なんだ？」

暦と今の件はまた後でとアイコンタクトで確認してフェイトに問い返す。

「勧誘をしてもらいたいんだ。　何せ人が少ないからね。　やはり質も大事だけど、量も疎かに出来ない。

君の勧誘なら、もう少し何とかなるかな？」

「早速、英雄としての顔を利用しろという訳か……2人有望そうなのが居る。　1人は俺が説得すれば嬉々として付いてくるだろう。　1人は説得次第で仲間になるかもしれない。　何時までがタイムリミットだ？」

「10月に入るまでくらいかな？　此方の術式はある程度は操作可能だけど、あの時期が一番効率が良いんだ」

「わかった。　それまでにスカウトをする事にしよう。　後者の方は6月に最初で最後の勧誘が出来る。　それまでにこちらの世界で色々と勧誘してみるさ」

「頼んだよ？」

「ああ、そうだ」

俺は思い出したかのように話を切り出す。

「？」

「俺には同行者は付けるのか？」

「ふむ……君は一応、今は信用できそうだから同行者は無しで良いよ。　話は他にもありそうだね？」

「此方が動きやすいように、ある程度だが真実を織り交ぜた噂を流すが良いか？」

「……いいよ。　君の手腕に期待する事にしようかな？　でも、も

し可笑しな事があるとわかったら……」

瞬間、俺の周りに極薄ながら、刃に触れれば即座に両断されてしまう程の鋭さを持つ塵で構成された刃が包囲していた。

「……今は目的が一致している。　だから刃を引け、３番目（テルティウム）。

刃を向ける先を誤るなよ。　如何に地を操れたとしても所詮は単一の力。　お前の打倒手段くらい、幾らでも用意が出来る。

それ以前に、感情も未だ未熟な人形のままでは、決して俺にその刃は届かないだろう。

己が本当は何を求めているのかを見つける事だな？」

俺はフェイトを睨みつけ、ギチリと空気が軋む音がした気がした。

「……本当に、この地の刃が届かないか試してみるかい？」

「止めはしない、が……その時は決死の覚悟で向かって来い。　その身、その魂までこの手で砕いてやる」

沈黙。

地の刃が塵へと帰り、そこで今日の話は終わりだと言って、フェイトは去っていった。

ペタリ、と暦は腰を抜かしたので、立てるまでおんぶしながら他の部屋等を暦に案内してもらい、フェイトを振り向かせる為の会議をした。

だが結局、フェイトの鈍感スキルが難攻不落すぎる、という結論へと至った。

まあ、フェイトは人形として造物主に造られたらしいから、感情が薄いのもやむ負えないのかもしれんが。

三日後、墓守り人の宮殿で準備を整えた俺は主要都市を転々としながら、夜の闇に紛れてスカウトをして様々な噂を流した。

スカウトの方は英雄としての顔を使いながら勧誘を進めたが、それでも迂闊に出来ない為に遅々として進まなかった。

しかし、一月の間に噂の種は順調にバラ蒔かれていった。

その内容とは、根も葉もないものから、黒の死神がメガロメセンブリア元老院議員を暗殺するだとか、俺が完全なる世界と手を組んだとか、ナギが実は生きているだとか、メガロメセンブリアは非道な人体実験を行っているとかちょっとした真実を織り交ぜたものだ。

噂の種は芽吹き始め、噂は噂を呼び、ある事無い事、背びれ尾ひれがついて雪達磨式に増えていく。

弱小組織になった完全なる世界にとっては多少大胆な動きをしやすくなると同時に、巨大であるが故にメガロメセンブリアは動けず、牽制になるといった所だ。

噂と侮るなかれ、人の口に戸は立てられない。

噂レベルである以上、真実が含まれていたとしても愚鈍な組織では動く事は出来ないのだ。

仮に本当に本腰を入れて動いたとしたら、それは即ちその噂の何かが本当の事だという事を宣伝するようなものだし、そこまで至ら

なくても民衆は不安を抱える事になる。
俺の計画の第2段階の布石としてメガロメセンブリアには後手に回ってもらうつもりなのでね。
未だ第1段階にすらなってはいないが、いずれ完全なる世界が動いた後に動く俺の目的の為には派手さと注目度が必要になるはずだ。
だから今は完全なる世界の宣伝をしておく。
現体制を壊す為に奔走する新しく生まれ変わった完全なる世界、とね。

第５４翼　下準備、種を蒔く紫の麗人（後書き）

何とか今書き終わった出来たての最新話をお届けします。

今回、なんかＦａｔｅ寄り設定だった造物主さんのセリフを更にＦａｔｅの設定を使って、あんな感じの設定になりました。
魔法世界消失はガイアの所為だったのさー、ナ、ナンダッテー（棒読み）みたいな？
この時点で書くかどうか悩みましたが、何時までも放って置くと忘れる可能性がある為に書いてしまえと書いてしまいました。

朱然さんがメガロにちょっかいを仕掛け始めた様ですが、ちょっとこの先、メガロに牽制の意味を込めて真実を混ぜた噂をちょちょいと。
情報戦とか作者の頭は許容量が足りなさ過ぎてイマイチ有効打を考えられないというポンコツ具合です。
その内、良い妙手が閃きますように。

この先、どんな展開になるのやら・・・・・。
最終話は出来ているけれども途中経過がノープランなので、結構本末転倒かもしれませんが、なるべく頑張って最後まで辿りつく予定です。

毎回、感想を下さる皆様には感謝してもし足りないくらいです。
本当にありがとうございます。
というか感想なかったら此処まで、ずっと書き続けてなかった気がします（笑）
未だ稚拙すぎる作品ですが、楽しんでもらえると嬉しいです。
ではでは次回にてノシ

第５５翼　寄り道、弱体化した紫の麗人（前書き）

今回は少し内容が薄っぺらいかも？

第５５翼　寄り道、弱体化した紫の麗人

「二週間ぶりですね、柩さん」

「……」

グラニクスの裏路地。
俺に声をかけて来たのは調と焔の二人。

何故、この二人が声をかけて来たのかと言われれば、それはフェイトから指令が一つ来たからだ。
でもって相変わらず焔との関係は悪い。
それはまあ、今は置いておこう。

フェイトから来た手紙の内容は――――――
柩は調、焔とグラニクスにて拳闘大会の出資者の一人がメガロメセンブリアと繋がっており、私設団を作って完全なる世界撲滅を謳っている者を処理せよ。

それだけならば別に問題もないので無理をして倒す程でもないのだが、そこの出資者は女の奴隷を買い漁り、奴隷の間では破ってはいけない暗黙の了解となっている『己の身を守る権利の破棄』を自ら言わせる口実をチラつかせるという手口で女奴隷に下劣な事をしているらしい。
飽きれば、その私設団の男達……まあ、ゴロツキ共に壊されるまで～、といった事になっているらしいので、この二人と丁度、近くに来ていた俺に声が掛かったり、女の身である調、焔は勿論、俺も二つ返事でＯＫしたという訳だ。
一応、俺も女にも成れる身だし、そういう下らない者はキッチリ

処理しなくてはならないだろう。

「ああ、二週間ぶりだな調、焔。　目標の場所は？」

「此処から見えます」

調がそこそこに大きなコロシアムを指差した。

「あちらのコロシアムの最下層階ですが、道は２つしかありません。表向きは良い人物とされているので、本性を証明する証拠も必要になるでしょう。

何より一番気をつけなければならないのが、今はまだ表舞台に立つ訳にはいかないという事。

ですので、極めて迅速にコロシアム一階から侵入、最下層まで一気に突破します。

拳闘士の最高ランクはＡＡクラスが最高でしょう」

ＡＡか……居たら居たで面倒な障害だな。

「侵入経路は？」

「そちらに関しては焔が……焔、いい加減にしなさい」

調が焔に事前に調べさせていたらしい侵入経路を伝えるように促したが、それでも焔は答えない。

それどころか視線すら合わせない。

「私はコイツを信用していない。　フェイト様を利用する敵だ」

「……子供だな。　そのまま二人でやる分には俺は構わない。

こういう作戦では、どんなに気に入らなくても使う強かさを持つべきだ。
フェイトは、正に俺のメリットとデメリットを天秤にかけて俺を完全なる世界に入れた。
つまりはフェイトの目は節穴だった、と君は言いたい訳か？」

「貴様！」

焔の目に炎が宿る。

「止めなさい焔！　枢さん、軽はずみな挑発は控えて下さい。　今後の行動に支障が出ます」

しかし、焔と一緒に調に怒られた。

「信頼はしなくて良い。　今は信用してくれ。　それが出来ないなら二人で行ってくれ。
実力が足りないというのなら俺一人で潰しに行く。　俺は信用できない奴とは行動を共にするつもりはない」

ハッキリと俺は言った。
信用すらできない者は、意図せずして足すら引っ張ってくる事が多いので、此処のところはハッキリさせておきたい。

「……する――――――

「ん？　なんだ？」

焔の声があまりにも微かな声だったので、聞き取れなかった俺は訊き返す。

――――協力すると言ったんだ！　今回だけだからな！」

焔は顔を真っ赤にして俺に怒鳴った。

……ツンデレか？

「取り敢えずはそれで良い。　で、侵入経路は？」

「正面からと裏からの二つだ。　どうする？」

……正面から俺が陽動兼正面突破、裏から二人が侵入が妥当だな。

「俺が正面突破しながら派手に囮になる。　お前達は裏口から回って逃げ出すかもしれないターゲットの捕獲と捕まっている奴隷達を救出する。

後は騒ぎで集まってきた警備隊に任せればいいさ」

「そうですね。　その段取りで行きましょう。　団員の方も全て黒、皆犯罪歴が有り、今尚何かしら悪事に手を染めている者ばかりです」

「それは、良心が痛まなくて結構な相手達だな？」

「ええ、そうですね。　それに――――」

そんな犯罪者共を懐広く受け入れているというのも、そのターゲットの良い面と認識されているらしい。

「今すぐ行きますか？」

「ああ、そうだな。　時間は無限じゃないし、さっさと片づけた方がいい。　何より、あのコロシアムは、今休みの筈だからな」

そうして俺達はコロシアムへと向かった。

「準備は出来てるかい？」

俺は、3年前に拳闘大会で話題となった格好をする。

といってもヤオになって、黒い死神さんコートを着て、仮面を付けているだけなのだが。

『はい、こちらの準備は整いました』

『下らないヘマをするなよ』

「はいはい、ツンデレだね焔は」

俺は焔をからかい、フック付きの無影を投擲準備に入る。

コロシアム正面には7人が話し込んでいた。

『誰がツンデレだ！』

「行くよ！」

焔が反応した瞬間、俺は動き出した。

左腕を振ると同時に無影が7本一斉に投擲され、巻き付いた。
昼で身体能力が下がっているとはいえ、長年の技はまだまだ使える様だ。

「ぐえ!?」

「誰だ?!」

「あ、アイツは!!」

俺はゆっくりと靴音を立てるように捕まえた7人へと歩いて行く。

ふむ、心当たりがある奴がいるみたいだな。
もう少し騒いでもらわんといかんし、ちょっと脅すかな。

「君等の親玉は何所だ?」

捕まえた一人の顔面を鷲掴みにして、俺は問う。

「黒い外套に仮面の黒髪の男……間違いねぇ！　く、黒の死神だぁ!!」

「な、何ィ?!　あの4年前に主賓の一人を殺った、あの?!」

「だ、誰かッ!!」

外の団員が助けを求め、騒ぎ始めた所で正門が開いて団員3人が出て来た。

予定通りだな。

「何を騒いでる?!」

「!!　誰だ貴様は!?」

俺は答えず、気で増幅した生体電気を無影へと放出する。

「「「「「アアァァ゛ッ!!?」」」」」

無影を巻き付けた最初の7人は、流された電流の所為で痙攣し、苦悶の声を漏らして倒れた。

俺はクンッ!と腕を一振りすると、巻きついていた筈のフックが外れ黒い外套へと収納された。

「テ、テメェッ?!」

「殺っちまえッ!!」

遅い!

俺はそのまま刃を完全に潰した音叉ナイフを空間から引き抜き、振りかぶると同時に柄の部分にフックを取り付け投擲。

一人が首を音叉ナイフに貫かれ、出て来たばかりの団員が呼吸が出来なくなり、もがき苦しむ。

音叉ナイフを引き戻しつつ、一気に門前へと駆け、残りの2人が詠唱を開始しようとした所で――――――

「ガァァ゛ッ!!?」

空中でキャッチした音叉ナイフで、首の後ろを一閃。
戦いの歌で強化された拳が腎臓を狙って穿たれているのを背後から感じ、側転。
繰りだされた団員の拳は俺の腎臓ではなく、上へと打ち上げられて指の骨が砕けた。
すかさず右腕からフックだけの無影を投擲。
首に巻き付き、電流を流す。

「ゴァァァ〝ッ!!?」

これで１０人。
その後に出て来た団員達も同様にして無力化していく。
何人も何人も。
そして、中央のコロシアムまで進み、３０から数を数えるのを止め、２０分が経った後だろうか。

『枢さん、此方は目標を捕獲しました。　同時に掴まっていた奴隷達も救出が終わりました』

「わかった。　此方もほぼ終わったから引き上げ――――――!?」

俺は瞬動で距離を開けた所で、先程まで立っていた場所に上半身裸で入れ墨をした、半ば野人の様な男が地面を割っていた。
表情は獣の様に厳ついが、決してそれは獣人ではない。
種族は人間だ。

『どうしたのですか枢さん!?』

「俺の居ねぇ間に随分と舐めた真似してるじゃねぇか？　あァ〝？
何で此処を襲撃してきやがった?」

「……（ＡＡランクが来た、お前達は先に後退しろ。　ＡＡランクを倒し終えたら俺も撤退する）」

『わかりました』

調からの念話が切れた。

「チッ、だんまりかよ。　まあいい、殺してから考えりゃいいからな！！」

その間に苛立った拳闘士は、俺に襲い掛かる。
その挙動は正に轟。
凄まじい音と共に突っ込んでくる。
まるで超級太極弾の様だ。

「ＡＡランクとはお前の事か？」

獣の軌道を避けて避けて避けながら、俺は言葉を投げかけた。

「あ？　確かに俺ァそんなのになってたっけなァ！　だが、んなこったどぉでもいいんだよォォオッ！！
テメェを殺せりゃあなァァッ！！」

獣が吠える。
俺は会話をする事を止めた。
獣は、ただ真っ直ぐに突進してくるだけだ。
その攻撃はひたすらに相手を轢き殺すだけに特化し過ぎた獣。
その体は硬く、どんな攻撃も真っ向から潰して来たのだろう。
拳闘士でＡＡというクラスは所謂、壁だ。

Aまでならば一生の努力をかければ凡人でも届くかもしれない。
だが、それ以上のランクとなれば話は別だ。
そこからは天才か、異才か、天災しかいない。
コイツは異才の類だ。
特化し過ぎた……言うなれば他とは異なる才能。
自分の持てる最高の防御で身を固め、相手を潰すという事にかけての才能。
ならば俺も答えよう。

俺は咸卦法を纏う。

そして――――――

無境の型・奥義――――――無境。

これは所謂、交叉法（カウンター）。
自分から動く事をしない代わりに、相手の全てを相手自身へと返す妙技。
相手が直接的な攻撃をする場合にのみ効果を発揮する限定的な技。
魔法や銃撃には全く効果の無い奥義。

俺は両手が拳闘士の肩へと着いたところで両腕に激痛が走り、俺が１０メートル程、後退させられた。
後退した後、俺の両肩までの布が吹き飛び、拳闘士が自分から吹き飛んだかのように後方へと吹き飛んで、３度地面を大きくバウンドして倒れた。
倒れた拳闘士は両肩と肋骨の骨がバラバラに砕けている。
俺は両腕が痺れて、ダラリと垂らすしかなかった。
だが俺の方が弱体化しているとはいえ、まだ強かったから俺が勝つ事が出来た。

『終わりましたか？』

丁度、調からの念話がかかってきた。

「ああ、今終わった」

倒したＡＡの闘士に視線を向けたまま返答をする。

『そうですか。　グラニクス自警団がそちらに向かっています。合流はやめて解散しましょう』

「そうか……じゃあな」

『勧誘、頑張ってください』

今のままでもＡＡクラスなら倒せるが、それ以上は厳しいな……。

奥義である無境も、咸卦法の強度不足で相手の衝撃を完全に相手へと返し切る事が出来なくなった。

日のある内は、奥義は使わない方が無難か……。

幸い、俺は自身の実力とは別に、自分よりも強力な宝具も幾つか保有しているから格上でも勝機は十分にあるが、今後の展開次第ではかなり厳しくなってくるか。

となれば、対策は必須事項だな。

こうして俺は、己の弱体化を痛感し、調、焔と合流せずにそのままグラニクスを離れ、勧誘活動を再開した。

第５５翼　寄り道、弱体化した紫の麗人（後書き）

朱然さんが弱体化してしまったというお話でした。

次回もオリ話を挟んで、次々回で漸く麻帆良学園祭編に入ります。
果たして、朱然さんの居なくなった麻帆良学園３－Ａ関係者達はどうなっているのか？！
と、宣伝も交えつつここいらで失礼ノシ

第５６翼　黒い死神、暗躍する紫の麗人

メガロメセンブリアの裏路地。
夜の帳が下り尚、深い闇が支配する場所を俺は走っていた。

走る走る走る――――――

靴音が自棄に響いている様な気がする。

「何所に行ったッ！？」

騎士甲冑を纏った男達がガチャガチャと重い音を響かせて俺の後を追っている。
行く先々に甲冑の影が見え、何度も何度も方向転換をした。

黒衣を翻しながら――――――

「こっちには来ていないぞッ！！」

裏路地を走るビルとビルの反響音から徐々に包囲網が狭まっている事、追い込まれている事を感じる。

道化の仮面の視界越し――――――

「袋小路に追い込め！」

俺は行き止まりに足を止めた。

背後からは重装フルプレートの男達が何重もの壁となって押し寄せる。

メガロメセンブリアの衛士達だ。

――――――ついに俺（えもの）は囲まれた。

背後と左右にはそびえ立つ高層ビル。

見上げる空には既に箒に跨った魔法使いが固めている。

「もう逃げられないって、まさか黒の死神がわざわざメガロメセンブリア（まち）に姿を現すとはねぇ～。

灯台下暗しを狙ったのかもしれないけど、残念だったね！」

若い隊長と思しき角付き甲冑男が俺を指さし声高に声を張り上げた。

どこかねっとりとした嫌な感じのする喋り方だ。

「……」

俺は口を開かない。

「どうしたのかなぁ～？　恐怖で口も利けなくなったかね？　んん？」

優位に立つと、劣勢になった獲物をいたぶる類の様だな、この男は。

さて、数の彼我戦力差は1対１００と言った所。

だが、質の彼我戦力差で言えば、此方が抑えに抑えて３０００対１００と言ったところか？

――――――残念だったな、獲物は君達だよ。

仮面越しから少し籠った声が投げかけられる。

「な……に……？」

甲冑達はどよめく。

この程度でざわめくなんて、統制がなってないな。

俺の昔の部隊では、この程度で騒ぐほどの余裕があるのなら実力を高める為に使うんだが。

「誘い込まれた事も知らずに呑気な事だね」

ゆっくりと、両の手で仕込んでいた無影を操った。

――――――ようこそ、顎（アギト）の中へ。

瞬間。

影すら残さ無いという意味で名付けられ、宝具化した後に黒銀となった鋼の糸が何重にも閃った。

「な、なんだとォォォォ――――――ッ?!」

無影が煌めき、甲冑はバラバラと落ちて丸裸になった格好の付かない男達の姿。

そこから更に四肢と首に無影が絡みついた所で時が止まった。

空中を固めていた者達もビルとビルの間に出来た無影によって形成された蜘蛛の巣に絡め取られている。

「僕の質問に答えてもらうよ?」

「断るッ!! 誰がお前みたいな薄汚い暗殺者の言う事なんてきくか!」

隊長は即座に俺の命令を突っぱねた。

勇敢だな……。

俺は歩を進め、絡め取られ身動きのできない隊長の右手小指を――――まるで握手するように圧し折った。

「もうしばらくすれば応援が来て、貴様などあっという間にはァァ

〝ッ！？」

パキッ、という小指の折れる軽い枝を折った様な音と、折られた隊長の苦痛の声が裏路地に響く。

「まずは軽く一本。　話の主導権は僕が持っているのでそこの所をよろしく。

君が全国指名手配者である僕を逮捕した、という功績に目が眩んで勝手に兵たちを動かしたのは把握している。

故に増援が来る可能性は低い。　そして、仮に誰かが応援を呼んでいたとしても数分では来られないよ。

来たとしても焼け石に水だしね。

ではまず始めに、メガロメセンブリアが裏で何をしているか知っている事を洗いざらい吐いてもらおうかな？」

「くッ……誰がァ　〝ッ！？」

俺は何も言わずに薬指を折った。

「ま、待ってくれッ！　言うッ！　言うかはァ　〝ッ！？」

更にもう一本、中指を折る。

次に人差指を握りながら力を少し込めると喚き始めた。

「ッ！！　止めてくれッ！！　折らないでァア　〝ッ！！」

人差指も圧し折った。

「始めから素直になっていれば、全部の指が曲がらない方向に曲がらなかったのにね？

詰まらないプライドは、さっさと捨てる事をお勧めしておこう。
流石に数十分と居れば、億に一つくらいは捕まってしまう可能性もあるのだし」

無機質な声で隊長に言う。

「あ、ああッ！　俺の右手の指がッ！　貴様！　絶対に許さんぞ！　貴様を捕えたら同じ様に「次は左手、いこうか？　それとも肋骨とかの方がいいかな？」ッ！！
ま、待て！　これ以上はッ！　これ以上は止めてくれッ！　もう逆らわないッ！　逆らわないから！」

何となく、口調から親の七光で出世した実戦のじの字も知らないボンボンだと思っていたので割と軽い方の拷問をしたのだが、どうやらアタリの様だ。
今度は左手の小指を握った状態を保ったままで質問を進めると、聞いていない事まで口を割ってくれた。
もしも実戦経験が多いベテランだったなら口を割る事もなかっただろう。
それに親の七光で上がった子供は、親の行いも知っているらしくとてもとても愉快な事を教えてくれた。
中でも一番愉快だったのは、俺の偽物を立てる話が持ち上がっているらしい。
確かにナギやラカンと言った派手なのは瓜二つな人間を探すのは骨だし、ゼクトはそもそも戦死という扱いで、表向きガトウも死んだ事になっている。
アルは胡散臭くて偽物を立ててもあまり意味はない。
ところが俺は生きているし、最終決戦で戦線を指揮した事もあり、何より無数の姿という誰でも無く、誰でもある姿形（すがたかたち）が曖昧な人物である。

端的に言えば、コードギ〇スのゼロの様な存在なのだ。
本当の姿は謎だが、自分達を救ってくれる英雄。
それが俺の世間でのイメージ。
つまりは誰でも名乗れば、俺に成れてしまうのだ。
表向き、正義の魔法使いを謳っているメガロメセンブリアが認めれば、それは世間ではホンモノと思われてしまうのだ。
孤児院を襲ったのだから、俺にバラされるというリスクがあるのでは？と思うかもしれないが、メガロメセンブリアが孤児院を襲撃したのは、あくまでもルクレツィアを見つけ、人造魔法使いの存在とナギの故郷の襲撃の口封じだと思われるので、俺が関係しているとは考えていない可能性が極めて高い。
ある意味で、これはチャンスだ。
偽物には精力的に行動してもらおう。
俺の計画が動き出し、第二段階の節目に今まで無かった事にされてしまった事と一緒に、偽物が偽物だという証拠を突き付ければメガロメセンブリアの信用は地に落ちるだろう。
さて、拷問を続けようかな？

その後も言い淀んだり、黙り込む度に拷問を織り交ぜながら口を割らせて行った。
骨を折る所が無くなったら、指を一本づつ切り落としていき、最後には隊長の口の中に布を突っ込み、火系の魔法の矢を手に宿したまま皮膚を焼いた。
切り落とした部分に止血の意味も込めて押し当てたので、皮膚組織が炭化してしまった以上は治癒魔法でも上手く繋げる事は難しいだろう。
一緒にとらえていた部下達は変わり果てた隊長の姿に慄いてはいたものの同情の視線よりは、途中まで自業自得だという視線を向けていたが、最後の方になればなるほど次は自分達かと顔面が蒼白になっていった。

かなり嫌われてたみたいだが、此処までされれば十分過ぎる程に同情は得られるだろうよ。

「君達もこうなりたいかい？」

俺が足元で見るに堪えない状態になってしまっている隊長を捉えたまま部下達に言うと、部下達は口々に許しの懇願を泣き喚いた。

全く、矛先が自分の方へと向くとコレだ……。

「ふむ、じゃあ君達に取引だ。僕はこれから逃走する。君達は僕を追わなければ、五体満足で帰れて生きられる。どう？」

部下達はガクガクと頷いたので、俺は空に居る魔法使いを捕えていた無影は残したままで部下達を解放した。

俺は唯一の逃走路である部下達へと歩き、部下達はモーゼの十戒のように左右へと別れた。

あ、そうだ。

「そうそう、僕の事はこの隊長の誤認だったと誤魔化しておいてくれないかな？

バレると鬱陶しいんだ、って言ってもこの有様じゃ無理か……僕とは全く違う容姿を報告して、そいつにやられたとでも言ってくればいい。

コイツが仮に本当の事を言おうとしたら、隊長は気がふれてしまったのでは？とでも言っておけばいい。

もし君達がそうしなかった場合……」

いきなりアタリを引いてしまったので、架空の人物による傷害事件といった風に装ってもらう。
更に報告されるかもしれないので、脅しをかけて動きを鈍らせておく。
此方は既に、家族を殺されているのだ。
ならば脅しくらいは目を瞑ってもらっても良いだろう。
どの道、俺は地獄行きだろうが。

「!?　な、何でしょうか?」

副官らしき人物が振り返った俺に、敬語を使って聞き返す。
他の者達も一様に俺の挙動に緊張している。

「君達の家族や友人、恋人が事故に巻き込まれるかも知れないよ?」

「「「「「ッ!!」」」」」

俺は闇に溶けるように姿を消した。

次の日。
俺はノーラの姿でメガロメセンブリアの街中を適当に歩きまわった。
流石は魔法世界屈指の先進国家。
ゴミゴミしている。
そこに暮らす人々はの大多数が人間だ。
表向きは華やかな都市。

しかし、裏を見れば影が暗躍し、困窮している人間が住みついている影の都市。
まるで日本の様な都市だ。
技術ばかりが先進して、自国の生産力が追い付いていない感じ。
２０年前の大戦で、完全なる世界が糸を引いて連合と帝国がぶつかった時も、メセンブリーナ連合は傀儡となっていると装っていたが、上層部の内心は乗り気だったのだという（ガトウの調査にて）。
そして、完全なる世界が滅んだ後、全ての罪を完全なる世界とアリカ王女に被せて自分達は良い所取り、という終わり方をした。
その後も連合で活躍した紅き翼を英雄へと仕立て上げ、紅き翼のメンバーであるガトウとその弟子であるタカミチ、クルトを取り込み、さも紅き翼は自分達が結成させたというイメージの向上と映画やら何やらで商業的利益を吸い上げ、裏で都合の悪い事を知ってしまった俺達に追手を仕向けた。
身の危険を感じた紅き翼のメンバーはそれぞれ身を隠す為に散り、詠春は関西呪術教会の長、アルは麻帆良学園地下にてメガロメセンブリアの追手に受けた深手の傷を治す為に動けず、ガトウは死んだ偽装をして今もメガロメセンブリアを調査、ラカンは悠々自適に帝国へと流れ、俺はアリアドネーで孤児院運営と臨時講師をしていた。
ナギとアリカは旧世界へ行くと言ったきりで行方知れず。
タカミチは知っての通り、ガトウの死によりアスナを連れ麻帆良の教師、クルトはそんなメガロメセンブリアをどうにかする為にメガロメセンブリア元老議員に。
ガトウの死については、紅き翼を恨む者達による襲撃だったらしいが、裏で糸を引いていたのはメガロメセンブリアだとガトウ自身が付き止めた。
タカミチはその真実を知らないのだろう。
面白くもない話だ。
誰もがメガロメセンブリアの掌の上で踊らされ、振り回されているなんてな……。

一月という時間はあっという間に過ぎて、噂が広がりにくくなった所で一度、少しの期間、間を置こうと思った。
そして、それとなく噂の鎮静化にメガロメセンブリアが、それとなく動き始めたという噂が耳に入った。
拷問した時に訊き出した俺の偽物もメガロメセンブリアと共に動いているらしい。
魔力もそこそこに高く、それでいてイケメンな長髪の男だとか。

さて、そろそろ麻帆良学園祭か……例の2人のスカウトをするとしよう。
新しい噂を流す為のメガロメセンブリアの情報規制の裏をかいた情報網構築の下準備もあるが、あの2人をスカウトする為に旧世界に行かねばならないしな……。
まあ、今回はそれとなくメガロメセンブリアがどういうルートを使って情報規制をしているのかも探る意味合いも込めていたし。
第2段階までは精々、完全なる世界に都合のいい人形を演じるさ。

俺はメガロメセンブリアに在る旧世界のゲートへと向かう。

「さて、一月ぶりの麻帆良か……」

つい独り言をつぶやいてしまう。

ネギ達の現状に関しては2パターン。
学園側に記憶を消されているか、記憶が残っているかのどちらか

か。
月詠は……幽閉されてしまっていたら申し訳ないと思うし、そうなっていたなら必ず助け出す。
ネギ達が記憶を消されてしまっていたとしたら最悪、エヴァも……記憶が消されているかもしれない。
俺が向けた偽りの悪意でエヴァの身柄も、記憶も守られていると信じたい。

「日の光が当たらない装備も一応は完成した……見た目はアレだが、麻帆良は学園祭だから問題はないだろう……」

俺はまた、麻帆良学園へ向かう為の準備を始める――――――

第５６翼　黒い死神、暗躍する紫の麗人（後書き）

文字ばかりになってしまった……。
今回はダークな朱然さんと、本編前の空白期の考察を考えながら書きました。
実は朱然さんにとって、自分の偽物がメガロメセンブリアに居るのはある意味で都合が良いです。
何せコレという本物だという証拠を突き付ければわかりやすく信用を落とせるので。

すべてはメガロの陰謀？
メガロメセンブリアは自国の生産力の無さを、当時仲の悪かった他国に助けを求めるかどうするかを悩んでいたところに、完全なる世界が世界を無に帰す為に世界規模の戦を仕掛けさせるという情報を元に、メガロメセンブリアは仕方なくという風を装いながら、メセンブリーナ連合の中心としてヘラス帝国と争う事になったという大義名分で戦争へと臨んだという感じですかね。
世界を無に帰す儀式は否応なく敵対していた国とも手を組ませられますし、完全なる世界に全ての責任を押し付けられますし。
アリカ王女がそれに気が付いて、発言しようとするも逆に父殺し＆奴隷を守る為に作った奴隷首輪＆オスティア国土の消失＆多くの難民を出した責任を全て押し付ける事で証拠隠蔽。
紅き翼がアリカ王女を救出した事に対する情報漏洩を防ぐ為に紅き翼に刺客を送る→紅き翼解散？
邪魔者が居なくなったメガロは自国の生産力の低さを停戦して共闘したという事で対等の条件で他の国に大手を振って頼れる事に？
みたいな事をあんぎゃーす様から教えて頂いた考察サイトを元に話を思いついたので書きました。
ぶっちゃけ内政とか良くわからんので全部オリ設定ですし、何所か

に重大な矛盾が有りそうで怖いですが、この作品のメガロは全ての黒幕的なポジションで。

うぅ、長時間パソコンの画面を見ていると目が霞むぜ……。
教授め……休みなのに呼び出すとか何なんだよ……パソコンくらい自分で使えるようになってくれよぉ（ＴｏＴ）

誰か彼女になってくれ！って言ってなってくれる人が居たらいいなぁ……居ないんだろうなぁ……落ち込むわぁ。
誰か俺に癒しをくれ！

後書きが長くなりましたが、次回はいよいよ麻帆良学園祭編ですノシ

第５７翼　麻帆良学園祭開始、潜入する紫の麗人

俺は麻帆良学園に入ってからある衣装を着て歩いていた。
平時ならばかなり異様だが、この麻帆良学園祭中ならばギャグで通用する。
何より、この学園関係者は俺がこんな格好をするとは思いもしないだろう。
というか、これを脱ぐ訳にはいかない。
俺は吸血鬼になって、日の光を浴びていると能力が極端に下がってしまうからというのもあるが、此処は敵地なのだ。
ならば顔も隠さなければならない。
ぶっちゃけてしまえば変身してしまえばいいだけの話なのだが、それでは弱体化の問題が未解決。
そこで少ない時間で考え付いたのだ。
吸血鬼は昼間が弱点なのではなく、日の光が弱点なのだ。
ならば全身をスッポリと覆ってしまえばいい。
ある軍曹のパワードスーツの様に。

と、言う訳で、かなり前に作ったネタ装備を改造したのだ。

無機質ながらつぶらな瞳。

全身を覆いながらも太く、しなやかな体。
白と黒の体毛を持ち、本物が日常で出会えば悲鳴は必至な造形。
額には黒い星。
背中には七つ夜の三文字。
それは正に、知っている人は知っている。
中身が幻であり、存在しないハズのものらしいと何時かの何処かで見た記憶があったキャラクター。
正(まさ)しく、俺という疾うの昔に存在が本来無い筈の者が着るのに相応しいだろう。
その名はパン○師匠。
ごくごく普通の暗殺術を使い、驚異の速度で攻撃をするパンダの着ぐるみである。
だが、中身が当然違うのでポエマーではない。
ついさっき絡んできた頭の悪そうな三人組をノした時、「悪いね☆」と言いそうになったのも気の所為だ。
断じて俺はあんなポエマーになるつもりはない。
そんなセンスがあるとも思えないし。

そんな事を考えていると――――――
肩に衝撃。

「おっと悪い！って……パンダの着ぐるみ？」

アレ？
このアホ毛を持つ凡庸な容姿を持った神谷ボイスの少年を何処かで見た気が……？

「こちらこそ悪かった。　少し考え事をしながら歩いていたんだ」

俺が謝ると、見覚えのある少年の後ろから、これまた見覚えのあ

る少女が現れた。

「阿良々木君、何をしているのかしら？」

おお！

まさかの阿良々木さんと戦場ヶ原様じゃないか！

「すまない戦場ヶはｒ「ひたぎよ」戦じょ「ひたぎさん」戦「ひたぎ様」ちょっと待て！

なんで訂正する毎に偉そうに敬称が強力になっていくんですかひたぎ様！？」

実際に会った阿良々木少年はもの凄い卑屈でした。

後、戦場ヶ原様はやっぱり戦場ヶ原様だった。

「なんだかんだで様呼びなのね阿良々木君。　その卑屈すぎる程の矮小さがとても小憎たらしいわ」

「全然、褒め言葉じゃない！？　パンダの着ぐるみの人がポカーンとしちゃってるよ！？」

そんな事を言われたので、ついボケたくなった。

「流石ですひたぎ様。　私めの名前はパンダ師匠（偽）です。　気軽にパンダ師匠（偽）と呼んじゃって下さい」

「あらどうもご丁寧にパンダ師匠（偽）さん。　戦場ヶ原ひたぎです」

「待て待て待てッ！？

何で見ず知らずのパンダの着ぐるみさん、自称・パンダ師匠（偽）さんがひたぎ様をひたぎ様って呼んで自ら名乗ってるんだ?!
そもそも（偽）ってなんだよ!?
（偽）って！　何か他にも（　）の中に（真）とか（悪）とかバリエーションがあるとでも言うのか!?
ひたぎ様も怪しげなパンダの着ぐるみに自己紹介しないでください！」

阿良々木少年は混乱した！

阿良々木少年よ、まずは戦場ヶ原様を普通に呼ぼうぜ……それはともかく。

「失敬な！　今の発言に私は傷ついたので、阿良々木暦君のサインください」

俺は何処からか取り出したサイン色紙と油性マジックを困惑している阿良々木少年へと手渡した。

「いや、訳わからないから！　僕のサインの価値なんてそこら辺にある石ころと同義ですけど?!
というか何で僕の名前を知っている!?」

え?
何なんだコイツ?
いきなり凡人の筈の僕にサインを欲しがる意味が分かんないぞ?!
しかも名前知ってるとか訳がわからない！
中の人の行く先が、とてつもなく迷走中だ！
一体このパンダの着ぐるみは何所へ向かおうとしているんだ!?

「「と思っているに違いない（わね）」」

「心を読まれた！？　地の文を読まないでくださいお願いしますッ！！

それと、ひたぎ様が二人いるみたいで僕の突っ込みスキルはそろそろ限界だ！！」

阿良々木少年は、往来で同級生の女子と見ず知らずのパンダ着ぐるみに全力で土下座した。

「「そのまま額を地面に擦りつけてくれ（るかしら？）」」

「ひたぎ様が２人居るぅぅぅ――――――ッ！！！？」

阿良々木少年の叫びを余所に、俺と戦場ヶ原様は無言で向かい合ってガッチリと握手を交わした。

何か言いようのない絆が結ばれた気がした！

別に某仮面なＲＰＧのように、コミュニティが発生した訳ではないが。

傍から見ると、変なパンダの着ぐるみと十数年来の友とでもいうかの如く、堅い握手をする美少女。

その二人に対して地面に額を擦りつけている少年という傍から見れば訳のわからない構図が展開されていた。

その後、阿良々木少年と戦場ヶ原様にサインを貰って俺は彼等と別れた。

阿良々木少年の影から、ヘルメットを被った金髪幼女が目元まで出て、此方を睨んでいた気がしたのは、きっと気のせいだろう……

多分。

は！？

つい任務が疎かになってしまった！

もっとシリアスな感じになると思ったのに不覚ッ！

俺は着ぐるみを着たままのっそりと歩きまわり、３－Ａがどうなっているのかをそれとなく探った。

取り敢えず３－Ａに向かうと、コスプレ喫茶になっていた。

む？

原作は確かお化け屋敷だった筈……。

そう思っていると相変わらずのゴスロリな月詠が現れた。

素でコスプレ扱いか月詠よ……心配して損したよ……。

にしても月詠は３－Ａに編入したのか？

「パンダはんは冷やかしやのうて、お客様ですかぁ～？」

俺は疑問を押し込み、月詠の言葉にコクコクと頷いた。

「パンダはんのお客様一名さま、ご案内です～」

「「「はーい！」」」

そう言って俺はノリの良い３－Ａの連中に席へと、案内という名の連行をされた。

「ご注文は何になさいますか～？」

続けて釘宮がチアのコスチュームでメニューを渡してきたので、無難に珈琲を選んだ。

「アイスコーヒー１つー！」

俺はそれとなく店内を眺め、３－Ａ生徒の話に耳を傾ける。

「つっきーも、もう３－Ａに溶け込んでるよねー？」

「そかなぁ～？」

「うんうん、２月に転校してきてからだけど、始めから居るみたいだよねぇ～」

「刹那さんにベッタリなのは、刹那さんが好きだから？」

「恥ずかしいですえー」

いやんいやん、と月詠は頬を染めながらクネクネし始めた。

……つっきーというのは月詠の仇名か。

２月……ネギがこの学園に来て、俺が転校してきた頃か。

成程、読めて来たぞ……つまりルーデシア・ルノーという存在は月詠という存在に入れ変わられてしまったという事か。

爺の最後の差し金か？
生きているのか死んでいるのかはこの際どうでも良い。
生きていれば殺すし、死んでいれば忘れるだけだ。

「アイスコーヒーお待たせしました。　ごゆっくりどうぞー」

アイスコーヒーを持ってきたのはメイドな千雨だった。

千雨か・・・・・そう言えばコスプレの写真を取ったからデータに俺が映っていた筈だな。
俺はすぐさまルーデシアの姿に代わり、千雨の腕を取って引き止めた。

「待ってもらえないかしら？」

「！　誰だアンタ？　声からして女だから痴漢扱いはしないでおくが？」

いきなり声をかけられ、掴まれた腕を振り払った千雨は警戒して少し距離を取った。
俺はすぐさま頭を持ち上げて顔を晒した。

「お前は私のブログにツーショットで映ってた？！」

千雨は驚きを露わにする。

「……成程、貴女も消されたのね」

今の反応で確信した。
やはり俺の居た痕跡は消されてしまったのだろう。

不思議と、その事には怒りは湧かなかったが、失望と悔しさが込み上げた。
これじゃあ、本当にルクレツィアが無駄死にではないか。

「は？　消す？　何の話だ？　生憎、妄想とかだったら私を巻き込まないでくれ。
それよりもブログの写真の説明を……」

「ええ、貴女なら確かにそう言うわね。
でも、貴女のブログには私との2ショット写真が幾つかある筈、それを見た貴女は私の事を誰だかわからない。
つまりは貴女は消されたのよ、記憶をね。
貴女はそれ程、深く関わってはいなかった筈だから、特にそれ以上何かされた訳でもないでしょうし」

俺は言いたい事だけを言って、出された珈琲を一気に飲み干す。
冷たい珈琲が胃に落ちた。

「お勘定は此処に置いておくわ。　運が悪かったらまた会いましょう、ちぅさん？」

「なッ？！」

俺はピッタリの額をテーブルへと置き、頭を付けてから元の姿に戻り、３－Ａを後にした。

しばらく何所へ向かうかを思案しながら外を歩いていると、ネギ達を見つけたのでストーキングしたところ、ちらほら聞こえる会話から俺の居ない間にのどかや木乃香、刹那などと仮契約してしまっていたらしい。

つまりは――――――

ネギが来る前に転校してきたのは俺ではなく、記憶を改竄された月詠で３－Ａで過ごしていたのは元から月詠だった。

それ以外は大体、原作通りという風に記憶を改竄されているっぽかった。

予想した少し斜め上を行く状態だ。

それに一番気になっているエヴァの姿は今のところ確認はできなかった。

元から居た月詠を俺が居た場所に押し込めて帳尻合わせした、というのは確かに完全に痕跡を消すよりも簡単だ。

多少、違和感が残るだろうが、それは気の所為で済まされてしまうからな。

爺以外にも頭の回る奴が居ても可笑しくないが、これは誰の仕業だろうか？

爺の最後の命令だったのか、それとも他の誰かの指示か……どちらにせよ確かに居なかった事にするより代わりを滑り込ませた方が確実だ。

魔法生徒である高音、愛衣等には、俺が魔法世界で緊急の用事が出来たのでそうなった、という事になっているのか、はたまた同じく記憶が改竄されているのだろう。

ネギの性格も元のナギに憧れるだけの存在に戻ってしまった。

消されてしまった。

己の存在が邪魔だと断定され、己の居た跡が掻き消される。

消されてしまうという事は、始めからなかったという事だ。

そこには始めから俺など居なかったという事。

俺という存在が否定されたのだ。

俺の存在が、ネギが選んだ道が、３－Ａが得た経験が、ルクレツ

ィアの死がまったくの無にされてしまったんだ。
他人の都合で。

グルグルと思考がイタチごっこをする。

全テ、壊シタイ。
コンナ世界、壊レテ――――

そんな思考に行きつきそうになった。
だが、思い止まった。
此処で全てを滅ぼすのなら、それ程は苦労しないだろう。
広範囲殲滅呪文や宝具を主要施設へと数発撃ちこめば、この広さの都市なら致命的なものとなるだろう。

でも――――

そんな事をしてもルクレツィアは生き返らない。
そんな事をしても余計な恨みを買うだろう。
そんな事をしても巻き込まれなかった筈の他人が巻き添えになるだけだろう。
だから止めた。
守るべき誰かの為でもないのに何も知らない者達を、俺が巻き込める訳がないんだから。
そんなのは虐殺以外の何物でもない。
目的と手段を取り違えてはいけない。
何よりレティを理由にしたくない。

だから――――

思い出させよう。

３－Ａは別に忘れたままでも良い。
今更、思い出させたとしても無駄に巻き込むだけだ。
だがネギだけは、必ず記憶を取り戻させる。
無かった事になんて絶対にさせない。
しかし、まずは俺の仲間の為の勧誘が先だ。

俺は気を引き締め、目的の麻帆良武闘祭へとエントリーした。

会場は異常な熱気に包まれていた。
なにせ超が賞金１千万円という学生どころか、成人した者でも破格過ぎる賞金を設定したのだから。
俺は静かに、そう……ただ静かに周りの雑音を聞き流していた。

目の前にはエヴァの姿があった。

そして――――――何を言うでもなく、棒立ちだった俺の横をすれ違った。

「……」

エヴァが記憶を無くしているのかは分からない。

だが、嬉しかった。
特に拘束されている訳でもなく。
そこにいる事が出来ていた事に嬉しく思った。

「只今より麻帆良武闘祭、予選会を始めたいと思います！
参加者の方はエントリー後に割り振られたアルファベットのステージへと上がってスタンバイをお願いします！」

司会をしている朝倉が選手の誘導アナウンスを繰り返す。

俺は動き出す。

俺の予選はＡか、３－Ａが誰も居ない……む、大豪院ポチが居た。

あまりにもあんまりな名前と顔だったので覚えていた。

「では準備が整ったようなので……」

大方の選手がステージに登り終えると、朝倉が試合開始の合図を大きな銅鑼で鳴らした。

麻帆良武闘祭予選会――――――開始。

第５７翼　麻帆良学園祭開始、潜入する紫の麗人（後書き）

という訳で、まさかのパンダ師匠（笑）の姿で学園祭スタートです。
ネタ的な意味以外、特に意味はありません。
伏線でもありません。
存在的には、そこに実際には存在していない筈の存在という意味で似てるかも知れませんけど。

そして更に、化物なお話から何となく三人の出演が、いつか共演させてみたかったので何となく今回出して見ました。
だって最近、朱然さんがダーク朱然みたいなんだもん！
シリアス書き過ぎると気が滅入ってくるから下手でもギャグ入れたくなるんだよ！
何はともあれ、ソレっぽい性格だと感じてもらえれば嬉しいかも？

そして、感想でどちらかと言われていた記憶の有無。
ネギ達の記憶は残念ながら改竄されてしまいました。
学園祭中に記憶が戻るかもしれませんし、魔法世界編終盤で記憶を戻すかもしれません。
それはこれからの展開次第です。

いやはや、感想では様々なご意見が寄せられて色々あったりなかったり。
指摘されて初めて気付く事もあったりなかったり。
我らが主人公の朱然さんはぶっちゃけ最近？行動の一貫性がないとか、小物臭がするとの感想が・・・・・おおぅ、そんなに朱然さんは酷いのでしょうか？と書いてみる。
儂しゃもう、限界（現実とかが）かもしれんのぅと弱音を吐いてみたり。

ちゃんと続きは書くので、そこの所は無問題ですけど。

では次回、麻帆良武闘祭予選、お楽しみにノシ

第５８翼　予選、波乱を起こす紫の麗人（前書き）

因みに今回はネタ回。
次回は多分、シリアス回。

第５８翼　予選、波乱を起こす紫の麗人

さて、俺本人と気付かれない様にはどう戦ったものか……。

目立たないという事は二の次というか、この着ぐるみを着ている時点でかなり注目されているのでそれは諦めた。

今は夜なので、パンダ師匠着ぐるみを着て居なくとも吸血衝動を抑える魔力３割以外は通常通り……とはいかないが、殆ど本調子と変わらない。

ならばどう手加減するか？という点で良い物があった事を思い出した。

ごそごそと背後の空間をまさぐって取り出したるは宝貝・五光石（ごこうせき）。

――――――ポロリ。

この着ぐるみは指が無いので五光石を落としてしまった。

俺はしゃがんで掴もうとするが――――――

――――――ポロリ。

――――――掴めない。

……。

仕方がないので、両手で挟み込む様にして取った。

気を取り直して説明に戻ろう。

宝貝の制作の練習に作ったのだが、威力は本当に大したことはな

い。
投げた石が当たる程度なのだから。
ただし、投げると必ず当たる上に、くどくて濃ゆい顔になり、倒れるまでスローモーションになるという効果を持つ。
何とも使いどころがなさ過ぎる地味にイタイ、ネタ宝貝なのだ。
ルール上は投石は可だった筈なので無問題の筈だし、これなら俺だと思われずに戦える……凄い目立つだろうけど。
寧ろ派手にした方が疑われにくいか？
なら……派手に動くのもアリか？

「盛り上げるか☆」

呟いたら外部スピーカーから何所かで聴いた声とセリフが聞こえた。

え？
アレ？！
呟いたら言語が強制ポエマー口調になって更に声までソレっぽくなった？！
むぅぅ……ッ、外部スピーカーは突貫で造った故の故障か……？
予選がもうすぐ始まるから直している時間はない、か……泣けてきたかも。

早速、諦めた俺は軽い効果音が出そうなくらいに踏み込んだ足を踏ん張って、緩慢な動きで五光石を投擲した。
オーバースローで。
綺麗な放物線を描き標的へと向かう。
だが仮にも参加者の多くは武術や武道に汗を流した者達だ。

狙われたどこぞの格ゲーの格好をした男が、即座に五光石をかわ

そうと身をかがめた瞬間――――――

――――落！

カクンッ！とフォークボールというより直角に五光石が落ちて、標的の男の後頭部を直撃し、ゴムボールの様に俺の手に五光石が戻って来る。

「ぐぅあぁあぁあぁッ！？」

その間に当たった男はスローモーションのようにゆっくりと……しかし、もの凄くくどくて濃い顔になって倒れ伏した。

それを見ていた周りの時が止まる。

『お、おおぉ――――――っとぉッ！　予選Ａグループに動きがあったようだ！

謎のパンダの着ぐるみが取り出して投げつけた投石が直撃した瞬間、当たった選手の顔が物凄く濃ゆい顔になって気絶したぁ――――――ッ！

一体どんな仕掛けなのか――――――ッ！？』

「投石は有りなのかよー！？」

観客からヤジが飛ぶ。

『えー、ルール上は重火器や弓矢、吹き矢などは厳禁ですが、投石や投げ縄はルール規定違反外なので問題ありませーん！』

「うわ、ずりー！」

「いや、それも戦術だろ？」

「ふむ、確かにそうかも……」

相変わらず学園結界でアバウトな思考になってるな……。

ま、そういう訳なんで悪く思うなよー。

「悪いね☆」

……ヤバイ、物凄い恥ずかしいぞコレは。

素面でこんなこと言える某中の人を寧ろ尊敬したいわ。

「投石を選んだ事から接近戦の心得が無いものと見た！」

「隙有り――――――！！」

後ろにいた金髪赤道着とモヒカンレスラーが襲い掛かってきた。

もう少し洞察力を高めましょうって事で、やられちゃってくれ。

「残念、寧ろ大好物だよ。　殺せない事が気掛かりなくらいでね」

赤道着の中段突きを同じ中段突きで弾き飛ばし、掴みかかってきたモヒカンレスラーは発勁で吹き飛ばす。

悲鳴すら残さず2人はステージ外へと飛んだ。

素人よりは強いけど、まだまだ練度が浅い。

格好より修行だと思うんだがなぁ。

と思っている内に更に3人が距離を詰めてくる。

前方から中国拳法家とボクサー。
後方から柔術家。

中国拳法家が跳躍して飛び蹴りを放って来たが、化勁で後方へと受け流す。
すると柔術家は飛んで来た中国拳法家を後方へと投げ飛ばし、俺への距離を詰める。
柔術家が中国拳法家を投げ飛ばしている間に、ボクサーの左ストレートが繰り出され、俺はボクサーの方へと更に踏み込む様に進みクロスカウンターで沈め体を反転。
丁度、柔術家が当て身を出して来たので、そのまま腕を両腕で挟む様に掴み、変則の一本背負いを決めた。

「話にならん。　来世からやり直せよ、オマエ等」

外部スピーカー絶好調。

代わりに俺の気分は反比例してダダ下がりだけどな！

俺はその後も五光石や普通の体術を使って阿鼻叫喚の地獄を生産し続けた。
主に精神面が滅入りそうな絵面が超特製の巨大スクリーンに映し出されるのだ。
見ていて気持ちの良いものではない。
そんな事を思っているとまたもや朝倉の司会が響いた。

『目を放している隙に予選Ａグループ、パンダの着ぐるみが周りの選手を凄い勢いで瞬殺していく――――――ッ！！
しかも攻撃する毎に中二病の様なイタイセリフを連発しているぞ――――――ッ！！
中の人物はやっぱりイタイ人なのか――――――ッ！？』

もうコレ泣いても良いよね？
イタイ人認定されたし。

さめざめと着ぐるみ内で泣きながら予選選手を削りに削った。
一緒に俺の尊厳とかＳＡＮ値もガリガリ削られた。
無性に棄権してどこか遠くに行きたくなった。
そんなこんなしながらも男の選手も少なくなった所で、ふと女性の参加者の姿が目に入った。
視線が合った。
３人いたのだが、俺を警戒してかなり距離を取られた。
３人ともやはり格ゲーのコスプレをしている。
右からストリー○ファイターのチュ○リー、サムラ○スピリッツのナコ○ル、デッドオ○アライブのか○み。

前から思っていたが、この学園の格闘家を名乗る者達は外見から入るのが通例なのだろうか？

距離をとっていたとしても五光石は必中する宝貝なのでテキトーに投擲。
五光石でチ○ンリーをやはり濃い顔にして倒し、そのまま距離を詰めたところで――――――

――――――瞬間、観客の約半分が歓声を挙げた。

「「い、いやぁ――――――ッ！！」」

残っていた女性等の上下の下着が挟み込んだ両手の着ぐるみ越しにガッチリと掴み取られているのを感じる。

というか見えても居るのだが。

因みに色は白と水色だった。

そして、女性参加者は着衣を押さえながら自らステージを飛び出して行ってしまった。

また、つまらぬ物を獲ってしまった……。

『おおーっと！！　これはヒドイ！！　つかエロい！！　このエロパンダは女性全員の敵なのか！？

逆に男性陣からは予期せぬサービスに歓声が挙がっている――――！！　着衣上から下着だけを剥ぎ取るとはタダ者ではない！！

私なら絶対に近づきたくないですね！

男性陣はカメラでその光景を撮ろうとしていますが、残念ながらこの会場内はオーナー超の不思議技術で記録媒体を使う事は出来ません！！

男性陣は実に残念な仕様でーす！！』

まあ、下着に執着するような性癖は無いのでリリースしておこう。

はぁ～……自重した筈なのにネタに走ってしまう……疲れてるんだろうか？

疲れてるんだろうな……最近、荒んでたし。

『は、剥ぎ取った下着を投げ捨てた――――――！！　やれやれと頭を振っているその背中に哀愁を感じるのは私だけか――――――！？

ホント何がしたいんだパンダ師匠（偽）選手――――――!!　後、剥ぎ取られた選手ー？
替えの下着は左右会場入り口脇の売店で売ってますよー！』

うん、ホント何をしているんだろうね？
自分でもよくわからないんだ。

予選会も終盤、俺の前に立ちはだかる勇者が現れた。

「そこまでにしてもらおうか！」

「フム、残ったのは我々三人か……」

やっぱり残ったのはこのメンツか。

「参ったね、どうも」

例の大豪院ポチと、なんか烈空掌とか言って遠当てをしてくる選手（遠い記憶で見た気がするが名前を忘れた）だ。

「中村」

中村？
ああ、思い出した。
楓に一撃でやられた人か。

「ああ！　わかってるって！」

そう言って、多少は見れる連携で襲いかかってきた。

やっぱりこうなるよなぁ……。

まあ、何はともあれ死なない程度にサクサク片付けるか。

「つまりはこういう事だろ？　いつか死ぬなら、ここで死んでも大差はないってさ」

「自信過剰だな」

「簡単に死ぬとか言ってると碌な大人になれないぞー！」

心配された……なんか納得いかない。

いや、物凄い不本意しかないな、うん。

俺はすかさず五光石を近付いてくる大豪院の方へと投擲したのだが――――――

「フ、元から濃い顔の私には効かないぞ！」

――――と言って、直撃しても突っ込んで来た。

見開かれ血走った眼、強烈にリアル描写されたタラコ唇、より強調された眉毛の大豪院ポチがエージェント・ス〇スばりの綺麗なフォームで迫って来るのだ。

その顔は尋常ではない程の破壊力を生み出す。

うわッ！

濃ゆいタラコ唇の男が更にくどくて濃ゆい顔になって急接近してくる！

超キメェ！！

物凄い鳥肌が立った。

そのあまりにも濃くなり過ぎた顔に思わず俺は動きを止めてしまう。

「チャンス！　烈空双掌（ダブルれっくうしょう）！」

中村はその隙を見逃さず、二つの遠当てを放つ。

その遠当ては大豪院ポチを追い抜いて挟み込むように俺に迫る。

俺はすぐさまライダーが良く使っていた四つん這いになるような姿勢をとって――――――

――――――閃（はし）った。

まず最初に、挟み込む様に俺に着弾しそうになった遠当てをギリギリで前進して、その爆発を利用しての０からトップスピードまで駆ける。

背後から衝撃と遠当てがぶつかり合って弾ける音が聞こえた。

そのままその衝撃と音を置き去りにして、大豪院ポチへと距離を詰め、顎へと衝撃緩和の為の柔らかい肉球の方で一撃を喰らわせる。

傍から見れば、一瞬だけ姿を消したように見えた事だろう。
急加速が終わり、俺は大豪院ポチと中村の丁度中間辺りに現れた所で、大豪院ポチが崩れ落ちた。
仰向けに倒れ、白目を剥いている大豪院ポチの顎下には、くっきりと肉球マークが付いていた。
試しにやったが、イマイチだな。

「しかしヘタだね、どうも」

『な、何が起きたのか――――――ッ！！？
パンダの着ぐるみ選手が中村選手から発せられた遠当ての爆発に巻き込まれたかと思った瞬間、瞬間移動したかのように大豪院選手をすり抜けて現れ、大豪院選手が崩れ落ちたぁ――――――！！
良く見ると顎に肉球の痕がッ！！　目にも止まらない早さで大豪院選手の顎へと一撃を加えたようだ――――――！！
予選Ａステージ決着！　残ったのは中村達也選手とパンダ師匠（偽）選手だぁ――――――！』

朝倉の勝利宣言を聴きながら、俺は別の事を考えていた。

五光石にあんな弱点があるとは……。
本気でヤバかった……濃い顔の奴には絶対に五光石は使わないように気を付けよう。
諸刃の剣になり過ぎる。
何はともあれ、予選会は無事通過か……さて、決勝トーナメントの相手は……まだ試合が全部終わってないのか。

俺は選手控室で暇を潰し、発表トーナメントを見た。

俺の名前はっと……あった。

決勝トーナメント第2試合
パンダ師匠（偽）ＶＳクウネル・サンダース

いきなり強敵どころかラスボスですかそうですか。
あぁ……そう言えば原作で大豪院はアルと戦ってたな。

すっかり忘れてた！！

本気で帰りたくなってきたよ……中村の方を倒しとけばよかった……どの道、一回戦を勝っても二回戦でアルと戦う事になったんだろうけどさ。
勝てない事はないけど、かなり骨が折れそうなんだが。
アルの事だ、フフフとか胡散臭い笑みを浮かべて重力魔法連射ーとかやって来るに違いない。
しかもアレは偽物みたいなものだった筈だから大呪文で一気に消すしかない。
でも呪文詠唱は禁止……なら最悪、切り札の一つを使うしかないか？

俺は被り物の頭を抱えた。

それと明日までに外部スピーカーを直さねば……もう、イタイ人と他の人に思われてしまうのは嫌だから……。

ぶっちゃけそっちの問題の方が比重が重かったり。
そして、夜は更けていく。

1961

第５８翼　予選、波乱を起こす紫の麗人（後書き）

母と妹が襲来して来た。
貴女達は私の大切なモノを奪って行きました。
私の睡眠時間です……。

という訳で貫徹ハイテンションで書き上げました。
ネタ回の時はほぼ貫徹ハイテンションで書いてます。
いや、逆に貫徹ハイテンションだからこそ書けるのかも？

どこまでも言語的な呪いが付き纏う朱然さん、哀れ也。
後半から半ばヤケクソになってます（笑）

トーナメントは組み合わせを変えない予定なので、改造した高音と愛衣が健闘する場面を書く予定です。
勝つか負けるかは気分次第ですが。

ちょっと修正。

第５９翼　一回戦第一試合、観戦する紫の麗人（前書き）

サクッと書けたので更新しました。

第５９翼　一回戦第一試合、観戦する紫の麗人

流石に学園祭とはいえ、今の麻帆良は俺にとって敵地なので迂闊に外には出ずにｓｃａｒｌｅｔの地下で着ぐるみの外部スピーカーを修理していた。

ｓｃａｒｌｅｔは厳重に鍵を閉めてあるので、余程の事がなければ開けられない仕様。

それでもあの爺は侵入して、あまつさえあのネックレスを盗み出したのだが、爺があなった以上はこの学園の誰が侵入しようとしても不可能だろう。

それは置いておいてパンダ師匠の着ぐるみだが、直す度に呪われているかのように不具合が生じた。

例は下の通り――――

ぶるァァァァ！！

守りたい世界があるんだぁぁ！！

ちぇりおォォォォ！！

弾けろブリ○ニアッ！

キラッ☆

腸をぶちまけろッ！！

岡崎サイコ――――――！！

俺の歌を聴けぇぇぇぇぇ！！

――――とか他にも多数収録。

それをまた修理するのに手間取って、実際は学園祭に出なかったのではなく出られなかったが正しかったりする。

修理と、ある物を作り終わったと思った所で時間は既に決勝トーナメントが始まる２０分前。

ｓｃａｒｌｅｔから会場までは割と距離があるので、特に学園祭

の何所かを回ったという話は全く無かった。

俺は改めてパンダ師匠の着ぐるみを着て、選手控室へと足を踏み入れた。

どうやらネギ、小太郎、明日菜、刹那、エヴァ以外は揃っているようだ。

タカミチは入った瞬間に一瞬だけ視線を向けたが、特に感じる事もないのか視線を逸らし、懐の煙草を取り出しながら外へと出て行った。

それとは別にクウネル・サンダース、もといアルビレオ・イマは此方を見た瞬間に口元に微笑を浮かべた。

……絶対にアルの奴は気付いてるな。

そう確信した所で、数分後にネギ達が入って来た。

その後にタカミチも別の入口から戻ってきて談笑を始める。

割と離れた所から耳を澄ませて少し盗み聞きしてみた。

「だからタカミチ……手加減はしないでね」

そうネギが言い、タカミチは微笑んで一言二言ネギに何かを囁いた。

魔法バレがあるので手加減するしかない、とでも言っているのだろう。

ネギとタカミチの会話が途切れた所で、今度は明日菜がタカミチと話し始める。
そこにネギも入って何か言ったところでタカミチが大声を上げた。
「え――――――っ！　アッハッハ！　そうか、そんなに速攻だったのか！！」
タカミチは後頭部を掻きながら苦笑した。
「おはようございます選手の皆さん！！」
いつの間にか入って来た超と朝倉が、トーナメント表の前に立ち挨拶と共に試合ルールを説明し始める。
ダウン１０秒。
リングアウト１０秒。
気絶、ギブアップで負け。
決着がつかなければ、観客のメール投票で勝者を決める。
武器等は予選と同じく、刃物、銃火器、弓矢等の殺傷能力の在る武器を出した時点で反則負け。
木刀、竹刀、棒、杖、ボール、投石、投げ縄等の殺傷力の低い物は許可される。
防具も殺傷力の在る様な部位が無ければ基本的に可。
尚、呪文詠唱は禁止。
というのがルール概要だ。
中村が技名は叫んでも良いのかを訊いて、ＯＫを貰ったのでテンションが上がりまくってウザかった。
その中で、俺も一つ質問があったので手を挙げた。

エヴァも居ないし丁度いい。

「何カナ？　パンダの着ぐるみサン？」

「ロープや糸は使用可能の様ですが、鋼糸（ワイヤー）は使っても良いのでしょうか？」

外部スピーカーから男と女の丁度中間くらいの声に変換された声で俺は質問した。

鋼糸（ワイヤー）と聴いた選手達は俺に注目する。

「鋼糸（ワイヤー）カ……糸とロープはその気になれば切れるガ、鋼糸（ワイヤー）は切れないイ事、使い方次第で殺傷力が危険なので使用不可ネ」

にぱっと張り付けた様な笑顔を向けながら超は言う。

「では言い直します。　直接的に使わなければ使用しても良いですか？」

俺も、対戦相手が対戦相手なので打てる手は打っておきたいので喰い下がる。

「それではどういう意味での使う、なのカナ？　人に直接的に使わナイ、直接的に操らナイのどちらカ？」

「意味合い的には前者です。　後者も出来なくはないですが」

「成程……しかし、相手に直接、使てこその武器だと思うのダガ？」

「直接的に使わなくとも、使える事は多くあります」

俺の返答を訊いた超は、ムムムと悩んだ末――――

「ふむ、それならば絶対に人に対しては使わない、という限定的な使用を認めるヨ」

「わかりました。　ありがとうございます」

よし、これで倒せるかどうかはアルの耐久力次第だが、切り札の一つを使えるな。

さて、タカミチの反応は……む、やはり少し俺の正体に疑惑を向け始めたな？

タカミチはこちらをチラチラと見ている。

なるべく視線を向けない様にはしているが、俺にはとてもわかりやすい。

まあ、限りなく黒に近いグレーならば幾らでも誤魔化しは利く、まずはアルを倒す事とエヴァの呪いを解く法が先決だ。

勿論、超に接触する為、というのが一番の目的なのだが。

「他に質問はありませんかー？　ありませんねー？　では、最後に選手に激励をお願いします！」

「うむ、昨日の試合も良いものだタガ、今日の試合も最高のモノとなる事を期待するネ」

そう言って、超と朝倉は出て行った。

最後に超が鋭い視線向けたのは、恐らく薄々俺の存在を知っているのかもしれない。

『ではこれより！　麻帆良武闘祭決勝トーナメント第一試合を開始いたします！！
対戦者は、予選会で多重の分身を使っていた謎のチビッ子忍者、村上小太郎選手――――――ッ！！
この試合でも分身の術を見る事は出来るのか――――――?!　その小太郎選手に対するは中2の佐倉愛衣選手だ――――――！！
予選会ではあまり派手さの無かった為に印象は薄いかもしれませんが、それでも本選まで勝ち残った実力はホンモノだ――――――！！』

俺は朝倉の司会を聴きながら、ネギ達とは反対側の選手席に座って試合観戦をする事にした。

さて、原作では愛衣は小太郎に負けていたが、記憶が残っているのであればもしかすれば……。

『では！！　第一試合、ｆｉｇｈｔ！！』

愛衣はまず、箒型アーティファクト・オソウジダイスキを呼び出し、腰溜めに構えた。
小太郎はタイミングを計っているのか、軽くステップを踏んでいる。
愛衣が動き出そうとした瞬間、小太郎の体重が左足に込められ瞬動が発動。
小太郎が愛衣の目前まで一気に距離を詰めた。

原作ではそのまま風圧によってリングアウトになる筈だったのだが、愛衣の表情は冷静だ。
振り上げられようとしていた小太郎の掌底が、オソウジダイスキの柄の先で止められていた。
振り切る前に止めてしまえば、風圧など起きよう筈もない。

「何やてッ！？」

「残念ですが、見えてますよ？」

小太郎が驚いた隙に、愛衣は即座に無詠唱の火の矢を3本、ゼロ距離発動させた。

「くッ！！」

意表を突かれた小太郎は、火の3矢を気を纏った拳で、近距離にも関わらずに器用に弾いた。
しかし、その間に愛衣は準備を進める。
俺が前に、愛衣に教えた魔法術式の構成が魔眼によって見て取れる。
それは早さと火力を重視した構成。
典型的な魔法使いタイプの愛衣は、始めに某管理局の白い悪魔の様な重装砲撃タイプの術式構成にしようと思ったのだが、突っ込み過ぎて無防備な背中を晒す高音のフォローを迅速に行う為に、一緒に付いて行かなくてはならない、と本人からの強い要望があった。
その為には自然と近接戦闘の技能も必要だという話となり、今からでは体術を習った所で付け焼刃なので諦め、攻撃を避けられる事と最良手を選ぶだけの時間を得られる術式を考案。
戦いの歌を基に、体感時間遅延……つまりは思考高速の術式を編み出した。

名前はつけなかったが十分に効果を得られるものに仕上がったと自負している。
それを発動しながら、更に十分な瞬間火力と発動時間短縮化を求めた魔法構成を考えた。
例えるならば、ガトリングガンやサブマシンガンの様な。
そこで、高速発動できる最も単純な術式は魔法の矢だったので、此方も構成を更に単純な物とする為、直線的にしか飛ばない単発で射程は約２０メートル、という風に術式の構成し易さを追求した。
それを効率の良い魔力運用とセットで使う。

そして――――その結果、火の矢が次々と乱射された。

達人級にはこれでも厳しいかもしれないが、実用には十分に耐えうるだろう。

「何時まで捌き切れますかね？　さあさあ、もっと私を楽しませてください！」

愛衣が口元に笑みを浮かべているのが見える。

……誰コレ怖イヨ？

それを小太郎は至近距離で弾き続ける。
確かにそれだけの技量をあの歳で持っている事は称賛する所だが、その所為であちらこちらに小規模の爆発が起こった。
だが、きちんと超の不思議技術で防護された為に観客には一切の怪我はない。
因みに観客の心境的には愛衣のトリガーハッピーっぷりにドン引

きである。

『ちょ、ちょっと！　周りに被害がッ！？　うわ熱ッ！！　服に火がッ！？』

因みに、無駄な機能を減らした火の矢の連射速度は毎秒５発である。

自身を強化していたとしても今の小太郎には到底、処理しきれる数ではない。

目に見えて小太郎の火の矢の処理が追い付かなくなりつつある。

「チッ、こんなんいちいち弾いてられへんわ！！」

堪らず、小太郎は瞬動で距離を取った。

ステージの端と端に愛衣と小太郎は位置を置いた。

この距離こそ愛衣の得意な距離だぞ、小太郎？

「！？」

「さようなら」

俺は思わずニヤリと口元を歪めたところで、愛衣も同じくニタリと笑い、右手を小太郎の方へと向けて無詠唱の紅き焔を発動させた。

紅き焔は寸分違わず、小太郎の方へと向かいステージ端を巻き込んで大爆発を起こし、小太郎はステージ上で倒れてしまった。

『おおーっと！！　佐倉選手の大きめな謎の炎が小太郎選手に直撃してしまったぁ――――――！！

小太郎選手は大丈夫なのか？！　ダウンなのでカウントを取りま

す！　１０、９……』

直撃……ではないな。

何せあの小太郎は――――――

『８、７、６……』

濛々と立ち込める煙の先を俺は見据えながら俺は呟く。

『５、４、３……』

愛衣も未だ警戒を緩めずに小太郎の落ちた方を見つめている。

『２、１、ゼ』

――――――式紙だしな。

朝倉のカウントがあわや０と言われる直前、愛衣の後ろの水面から小太郎が飛び出し、３人の分身と共に愛衣の背後へと襲い掛かった。

背後から聞こえた水音に愛衣は逸早く反応は出来たが、驚きに目を見開いている。

愛衣は振り向きざまに術式構成し、またもや火の矢の連射を始めるが分身に阻まれ、動揺した為に狙いが甘くなり、分身の方は全て撃ち抜く事は出来たが本体の小太郎の頬や二の腕を掠るのみとなってしまい懐に入られてしまう。

そのまま愛衣は小太郎が瞬動で背後に回り込み、愛衣の意識を刈り取った。

命を賭けた実戦経験の差、っと言ったところか。
まあ、善戦した方かな？

『第一試合決着！！　勝者、村上小太郎選手――――――ッ！！　あわやダウンかと思われたが、何と倒れていたのは偽物だった――――！！
爆煙に紛れ偽物と入れ代わり、本体は水中から回り込んで背後から奇襲！　地の利を生かした見事な奇襲作戦でした！！』

「フン、こんな奇襲じみたやり方、俺は好かんわ」

小太郎は滴る水滴を払いながら勝ったにも拘らず、少し機嫌が悪かった。

『えー、只今、麻帆良大土木建築研により、破壊されたステージの修理が終わったようです！！
早くも選手が対峙していますが、どうやら何かを話しているようです。　知り合いなのでしょうか？
では第二試合の選手説明を行いたいと思います！
あからさまな偽名と予選会でもあまり目立った活躍は見られませんでしたが、実力は未知数か？！
クウネル・サンダース選手――――――ッ！！』

歓声が上がる中、俺はアルと話していた。

「3月からですから、3ヶ月ぶりですねスイセン」

「そうだな。　あんな事になるとは思っていなかった。　学園長は息災かな？」

少し探りを入れてみる。

『今大会もう一人の色ものキャｒゲフンゲフン！選手ですが、此方はクウネル選手とは対照的に予選会では、もっとも派手に振舞っていました！！

避けても当たり、顔が凄まじく濃くなる投石と、向かい来る猛者達を打ちのめすかのような見事な体術、何より着ぐるみを着ているとは思えない速度で走る等は当たり前！！

だがキザったらしい中二病セリフが痛々しかった！　しかしてその実態はッ！　その神速で女性の下着を着衣上から剥ぎ取る変態！？

パンダ師匠（偽）選手――――――！！』

またもや観客から歓声が沸く。

何というか、変態定着なのか……。

うんざりした。

「学園長ですか……まあ、貴方もいずれは知る事でしょうし、御教えしましょう。　学園長は――――――」

――――死にましたよ？

観客の歓声が、壁を挟んだかのように遠くなった。

「あのクソジジィ、結局狩られたか？　もしくは自殺？　どっちだ？」

何となく、訊きたくなったので訊いてみた。

「貴方がそこまで言うのですから、学園長は随分と貴方を怒らせるような事をした様ですね」

「俺の娘を死なせてしまう間接的な原因を作り、俺の試作魔法具を盗み出した。　後は、俺という存在をなかった事にしたかもしれない」

俺は吐き捨てるように言う。

学園長の独善には反吐が出る。

そして、自分自身がエヴァや他の者に向けている独善にも……。

自己矛盾。

それは俺が抱えている最大にして、最低な命題だ。

俺は好きな者の為ならば、必要な犠牲を払って生きながらえさせたいと願う。

でも関係ない人間は巻き込むべきではない、と縛られてしまっている。

矛盾は矛盾を呼び、俺は葛藤を繰り返す。

だから……その時その時で主張が変わってしまう。

１と０、ＹＥＳとＮＯ、善と悪……それを必ずしも選ばなくてはならないのか？

その中間を選ぶ事も出来るのが人間ではないのか？

極端な選択しかしないのなら、それは機械と同じではないか。

「それはそれは……」

アルは顎に手を当てて納得したような素振りをした。

「学園長の死因は圧殺ですよ。　タカミチ君が殺したそうです。あのタカミチ君がよくぞそこまでに成長しましたね。時の流れは早いですよ……タカミチ君やスイセン、貴方をもそこまで変えてしまう」

「俺は変わってないよアル。　何も変わってない。　もともと持っていた感情を曝け出したに過ぎない。俺は優勝に用がある。　退いてはくれないんだろうな？」

「ええ、生憎とネギ君への遺言を送らねばなりませんので」

「なら――――――」

「ええ――――――」

もう、後はぶつかり合って勝ち取る以外に方法はない。

「推し通る（らせてもらいます）」

『では！　これより麻帆良武闘祭一回戦第二試合……ｆｉｇｈｔ！』

第５９翼　一回戦第一試合、観戦する紫の麗人（後書き）

小次郎ＶＳ愛衣をお送りしました。

残念ながら朱然さんの改造を受けて尚、愛衣は負けてしまいました。

そして気になる学園長の生死発覚！

覗き見していたアルによって情報がもたらされたり。

まあ、ぶっちゃけタカミチの剛殺居合拳によって生きたまま何度もペチャンコにされたと思って頂ければいいかと。

次々回のアルとの対戦で、鋼糸ないと厳しいかなぁ～と思ったのでちょっとご都合かもしれませんが使用可にさせていただきました。

このまま武闘祭は少し違った様相を呈していくかも。

次回、切り札をお楽しみにノシ

加筆修正しました。

第６０翼　一回戦第二試合、切り札を使う紫の麗人（前書き）

まさかの三日連続投稿。
でも多分、また日が空くんだろうなぁ～……もうストック無いし。

あ、あと久しぶりにアクセス解析を見てみたら７００万ＰＶ＆６０万ユニーク超えてた（笑）
まあ、九割九分九厘は原作の人気と一年近く書き続けただけであって、此処まで良く伸びたなぁ～と思ったり。

第６０翼　一回戦第二試合、切り札を使う紫の麗人

麻帆良武闘祭司会の朝倉が試合開始の合図をした瞬間、轟音と共に俺の立っていた半径５メートルが陥没し、埃が舞った。
誰もが俺がステージに叩き潰された様に見えただろう。

『おお――――――っと!?　パンダ師匠（偽）選手が見えない何かに潰されてしまった――――――!!
大丈夫なのか!?　てかステージがッ!?』

アルが此方を見上げながら微笑み、俺も見降ろして笑みを浮かべた。

そう、俺は上空に逃れていた。
それは残像だ!って奴だ。

『ん?　何と!　クウネル選手の謎攻撃?が決まったと思った所、パンダ師匠（偽）選手は上空へと逃れていた――――――!!
潰された様に見えたのは、まさかまさかの残像だったのか――――?!』

「流石ですねスイセン」

「相変わらずだなアル。　お前の重力魔法はやっぱりエグいよ」

アルの賛辞に対し、俺は自由落下しながら返答と共に無詠唱を開始する。

魔法の矢（サギタ・マギカ）　連弾・水の１９９矢。

ステージ周囲の水が巻き上げられ、俺の周囲に球状となって滞空した後、次々と次々と矢となってアルへと向かう。
アルはフワリと浮き、ステージ中央の空中に陣取った。

『み、水?!　パンダ師匠カッkええい呼びにくい！　パンダ選手、水を操っているようです！　一体どうやっているのか!?
これも気を使った技なのか?!　しかし、クウネル選手には当たらない！　不可視の壁に阻まれているようだ――――――!!
というかクウネル選手、空中に浮いている?!』

着地と共に走りながら、砂の矢のように目前で水の矢を弾幕のように打ち続けるのだが、朝倉の言葉通り、連射された水の矢がこと如く逸れていく。
弾かれるでも、防がれるでもなく、滑るように逸れていくのだ。
それを見ても俺はそのまま攻める手を休めない。

チッ、相変わらず面倒な障壁を!

内心、舌打ちしながらも次の手を探す。

弱体化していたとしても、活路はある筈だ。
強者には強者故の隙というものがあるのだから。

この間にも、アルは空中から重力魔法を落としてくるので、走りながらの反撃になる。
正面の地面が砕け、ステージの手摺りが粉砕され、木片が弾ける。
だが、重力は俺を捕えない。
その攻撃を俺は駆け、跳び、時には水の矢の反動で紙一重の回避を実現する。

水の矢が逸れてしまうのなら、一瞬でも視界を塞いでコンマ数秒の隙を作るまで――――――!!

水の矢で牽制しながら出来得る限り、無詠唱での高位呪文を心中で唱える。

『派手な水弾と押し潰すかのような謎の攻撃の応酬!!
パンダ選手、着ぐるみという重量のある物を着ていながら見事にかわしていく――――――!!
一方のクウネル選手、フードに隠れた口元に微笑を浮かべていますが、形勢はクウネル選手の優位なのか――――――!?』

契約により、我に従え水の精霊　集い来たりて敵を喰らえ　蒼霞蛇。

火のアーウェルンクスの紅蓮蜂と同系魔法で圧縮された水の蛇……即ち、蛟の形で相手に殺到した。
着弾と共に圧縮された水が解放されて水の急激な膨張によって相手を殺傷する呪文なのだが、爆風などは起こる訳ではないのでダメージは期待できなかったようだ。

次、水精大瀑布（マグナ・カタラクタ）。

突如、アルの頭上に巨大な水塊が現れ、押し潰すように激流を落とす。
その一撃は車をも押し潰しかねない。
しかし結果は少し沈んだだけで、効果無し。

次、障壁突破・水の三叉。

会場にある水面から三つの竜巻が、触れた物を削り取るように3方向から同時に障壁突破の術式と共に襲い掛かるが、此方も効果が無く逸れていった。

昼故に、あまり魔力を消費し過ぎたくないので周りの水を使って魔力を温存していたのだが……そんな事を言っている場合でもないか？

そんな焦りに嫌な汗が背中を伝う。

「フフフ、無駄ですよスイセン。　知っているでしょう？」

「ああ、斥力障壁だろう？」

斥力障壁は雷魔法の応用で使える障壁だ。

勿論、これはアルという卓越した魔法技術を持つが故にできる芸当、俺も本来なら出来るのだが、魔力消費も中々に厳しい為に、今の俺は使う事は無いだろう。

因みに斥力とは引力の逆だと考える人も多いだろうが、実は重力で生じるのは引力だけで斥力は発生しない。

端的に言えば、雷魔法で磁気を操り、磁石のS極とS極、N極とN極を近付けるようとすると反発し合うのが斥力だ。

それを自分を包み込む様に使っているのだ。

例を出すのなら、封〇演儀の普賢真人（ふげんしんじん）の太極符印（だいきょくふいん）、MGS2のフォーチュン辺りだろう。

もしかすればビリビリ中学生、御坂美琴なら使えるかも知れないが。

「なら、これでどうだ？」

俺は口笛を吹く。
口笛は振動となって外部へと伝わり、その鳴り響いた音は固有振動によって斥力障壁を無視して障壁内部で音の塊となってアルへと向かう。

「成程」

アルが一言呟いたところで、パパパパンッ！と空気の弾ける音がアルの顔面で響く。
空中を浮いていたアルが少しだけグラついたが、唯それだけだった。

ふむ、効果はあったが威力が足りないか……。

「確かに斥力で振動は防げませんが、この威力ならどうとでも」

そういってフフフと笑うアル。

そうだな。
その程度では倒し切るには威力不足だ。
大呪文なら、あるいは斥力障壁を強引に貫通させる事も可能かもしれないが、呪文詠唱が禁じられ威力が格段に下がる。
仮に呪文詠唱が可能だとしても、昼の状態では込められる魔力に不安が残る。
だが、今ので十分に勝機は見えた。
アルはラカンやナギの様な肉弾戦タイプではないし、アルの防御力ならいけるだろう。

俺はそう結論付け、足を止める。

するとアルも攻撃の手を止めた。

やはり攻撃の手を緩めたか……。

それが強者故の隙――――慢心という心の隙だ。

「随分と弱くなっているようですね？」

「お前はちょっとばかりズルしてるな？」

世界中の魔力を使っての分身体を超長距離操作するという離れ業。

流石は変態でニートとはいえ、紅き翼の一員だ。

倒すには高密度で形成された分身体を越える威力の攻撃を与えなければならない。

「わかりますか？」

「俺の眼は明確過ぎるくらいに教えてくれるからな。　そろそろ制限時間が近い。　次の一撃でお前を倒し切ろう」

さあ、弱者と墜ちた身で強者を打ち破ろうか！！

『パンダ選手、次の一撃でフィニッシュ宣言だ――――――！！　クウネル選手の鉄壁の防御を崩せるのか――――――ッ！？』

俺は無影を投擲する。

一本や十本どころではない。

次々と投擲し、編み、現わす。

周囲半径５００メートルの建築物を利用し、巨大で立体的な魔法陣を完成させた。

そう、超に問いかけたのはこれを使う為だ。
威力が出せないのなら補えば良い。
威力も、詠唱省略も、制御も、術構成速度をも集約した魔法陣の生成。
喰らえアル！

――――――収束音糸結界・不協和反響陣（ディスコーダンティア・レゾナンティア）！

空中のアルの周囲にのみ、周囲の雑音と騒音等を誘導して共鳴と反響によって音を増幅し、対象を閉じ込め、衝撃を指定した範囲に約２０秒叩き込む。
今のアルの周囲音圧レベルは、詠唱付きの完全状態ではないというマイナスによって最大約３００ｄＢまで落ち込んでいる。
しかし、歴史上で最も大きな音とされているのは１８０ｄＢ。
つまり、それでも歴史上もっとも大きな音の約１．７倍。
１．７倍では効いていないのでは？と思うだろうが、１３０ｄＢを瞬間的に聴いただけで、治療困難な音響性外傷や感音性難聴などの障害が残る可能性がある。
実際に喰らえば鼓膜が破れるどころの話ではない。
命に関わるだろう。
偽物のアルだからこそ手加減も要らない。

術が発動した瞬間からアルはもがき苦しみ、真っ逆さまに墜ち、大きな水柱と共に沈んだ。

『一体どうした事だ？！　優勢だったクウネル選手が急に空中で苦しみ出し、水中へと沈んだ――――――ッ！！』

傍から見ればいきなり痙攣して墜ちた様に見えた事だろう。

――――――だが。

「……ナギやラカンには無い勤勉さですね。　しかし、私を消し去るには今一歩足りなかったようです」

倒れない。
それはそうだろう。
この程度で倒されてしまっては英雄などとは呼ばれまい。

アルは何事もなかったかのように、微笑を浮かべたまま浮き上がった。
その身体は墜ちる直前に斥力障壁を再度展開した事によって、全く濡れていない。

『クウネル選手が倒れたかと思ったが、どうやら決定打には至らなかったようだ――――――！！』

「チッ」

俺は思わず口から反射的に舌打ちが漏れる。

消し損ねたか……詠唱禁止で威力も下がっているとはいえ、大呪文が直撃して無事とはな。

「割と殺す気でしたね？」

微笑んでるくせにアルの頭には怒りマークが浮かんでいるように見える。

俺はつい、見えないにも拘らず被り物の中で視線を逸らした。

「さて、そろそろメール投票の時間になってしまいますね。　私も少し本気を出すとしましょう」

アルは仮契約カードを取り出し、俺はそのアーティファクトを知っているが故に身構える。

イノチノシヘンは十分過ぎる程に脅威だ。

数分とはいえ、ナギを出されれば今の俺には荷が重すぎる。

「来れ（アデアット）」

『な、何だこれは――――――？！　クウネル選手の周りに多数の本が現れた――――――？！』

アルは一冊の本を左手で掴んで開き、いつの間にか右手に持っていた栞を挟み込んでから抜き取った。

すると栞が松明の様に端から崩れ始めた。

誰になる気だ？

そんな事を思った時と、腹部に衝撃が来たのは同時だった。

「ゴッ？！」

口から思わず呻き声を漏らしてしまった。
くの字に折れ、見下げた視線には褐色の太い腕が俺の腹部に拳をめり込ませている。

見覚えがある。
見違える筈もない。

見上げればそこには――――

「昔のお前なら避けられたんだろーが、今のお前にゃ見えなかったみたいだな？　なあ、スイセン？」

「よりによって、お前を使ってくるとはな……ラカン！！」

褐色の肌。
鍛え上げられた強靭な肉体。
無頓着に伸ばされた長髪。
自信過剰な物言い。
まさにあのラカンそのままだ。

『な、なんとクウネル選手がフードを脱ぎ捨て褐色ガチムチ筋肉達磨になってしまった――――――!?
アレが本当の姿だとでも言うのか――――――?!』

今の俺には荷が重すぎるどころか、一秒後に立っていられないかもしれない相手が居た。
ラカン姿のアル（人格すらラカンそのままなので、名称はラカンで良いだろう）は瞬動によって距離を開くと、俺の身体は支えを失

って、両膝どころか両手まで突いてしまう。
その反動で被り物の頭が脱げて床に転がった。
そこで丁度、一陣の風が吹き抜けて着ぐるみの中に仕舞ってあった俺の長い髪が流れるように外になびいた。
俺は苦悶の表情のまま、ラカンを見上げる。

『ななな、なんと――――――!!　クウネル選手の一撃によって、パンダ選手の被り物が脱げてしまった――――――!!
しかも中身は超美形だ――――――!!　ヤベ、惚れそう!』

脳内から煩悩が漏れてるぞ朝倉ー?なんて、考えられるくらいにはまだ余裕が有るか……だが、どう倒す?
アルのアーティファクトの効果で数分とはいえ、あのラカンが相手だ。
その数分で試合は終わってしまう……無論、俺の敗北という結果で。

「情けねぇなスイセンよぉ。　昔ならカウンターの一つでも返して来ただろ?　ルールがあるとはいえ、その程度じゃあ無かった筈だ。
仮に俺はお前との殺し合いだったら、圧倒してお前に勝てるとは思ってねぇ。
腕の一本どころか、四肢全部を捨てて掛からねぇと確実に殺せねぇ程だ。
てかお前、俺とかナギと闘ってる時は殺さない様に手加減してただろ?
手段が有るのに使わないなんて事はとっくに気づいてたぜ?」

腕を組んだラカンが笑いもせず、憮然と言う。

ラカンは恐らく本気で言っているのだろう。

ルール有りの試合ならば、俺は恐らくナギやラカンには勝てないだろう。
だが、ルール無用の殺し合いならば、殺し慣れ過ぎている俺は恐らく互角の戦いが出来るはずだ。
宝具を使えば、一抹の不安はあるが、ラカンでも殺せるかもしれない。
実際の話、技名を叫んでも良いのなら宝具も使える筈だ。
真名解放は魔力を込め、その宝具の名を叫ぶだけなのだから。
気を込めた技を叫びながら出すのが大丈夫なら、宝具だってルール上は大丈夫の筈だ。
でも、だからこそ俺は――――――

「御断りだよラカン。　アレはむやみやたらに晒す物でも、使う物でもない。
それを使う時は真に必殺をしなければならないと誓った時か、なりふり構わなくなった状況の時だけだ。
今この場で使うつもりはない」

俺は立つ。
力の抜けてしまいそうになる身体を強引に動かし、立ち上がる。

こんな所で倒れたら、此処に来た意味が無い。
こんな所で倒れたら、これから成す事を成就出来ないかもしれない。
こんな所で倒れたら、俺は自分を許せない！
だから考えろ考えろ考えろ！！
道はまだあるはずだろう！
この世界で最強と名乗れるコイツを何とかする方法がッ！！

「なんだよ釣ねぇな。　一度、本気でお前と闘って見たかったんだ

が……。

まあいい、面倒だが久しぶりに手加減して闘るとすっかな？

本物じゃねぇとはいえ俺は俺だ。本気ださねぇと……手加減しても死ぬかもしれねーぜ？」

ラカンは腕組を解いて構える。

空気が沈み込んだ気がした。

何か！

何か何か何か！！

コイツを退ける方法は――――――！！

思考して、考案して、考察して、考え抜いた先に、俺は一つの可能性を見つけ出した。

ラカンを相手にせず、且つアルを負けさせる妙案が。

今まで頑なに守ってきた物を使えば良かったのだ。

俺は即座に行動する。

それはアルにだけ効果が絶大であろう餌をくれてやる事だ。

「アル、もしこの戦いを辞退したら……俺の記憶を後で収集させてやる」

唐突に俺はアルへと向けて言った。

頑なに拒んだ俺の記憶とネギへの遺言、お前にとってどちらに興味をそそられる？

『さあ、この試合も残り数分――――――

朝倉が、動かない試合に盛り下がった場を盛り上げ直す為に話そうとした矢先。

「審判、ギブアップで」

アルのギブアップで朝倉は思わず時の喋りが出てしまう。

――――え!?　これからって時にギブアップ!?

それに元の姿に戻ってしまっています！　アレは変装だったのでしょうか？

それはともかく、クウネル・サンダース選手が突如ギブアップの申告をした為、一回戦第二試合は訳がわからない内にパンダ師匠（偽）選手の勝利でーす!!』

早ぇぇッ!?

変わり身、早過ぎだよアル！

策を弄したとはいえ、あまりの変わり身の早さに俺は困惑した。

いつの間にか、そこには元に戻ったフード姿のアルが居て、ギブアップ宣言をしていた、というこれからというところで肩透かしを喰らった状況の観客達は微妙な反応をしてる。

俺は内心、凄く複雑になりながら俺は被り物をかぶり直した。

はぁ……最初からこうすれば良かった……。

俺はやれやれと頭を振り、ステージを降りようとしたところで――

――――

そこへタカミチがポケットに手を入れたまま、俺とステージ出入

り口に割って入った。

「スイセン、君を――――――」

――――――拘束させてもらう。

第６０翼　一回戦第二試合、切り札を使う紫の麗人（後書き）

かなり肩透かしな朱然さんＶＳアル戦をお送りしました。
いきなりアルの所為で正体がバレました。

アルの優先順位の問題は←の通り。
ネギへの遺言＜朱然さんの人生史収集。
みたいな？

そして、正体バレに伴ってタカミチ乱入。
書いていたらなんかそんな感じに。
でもその方が面白そうだからそのまま投稿してしまおうと……ダメ？

最近、魔法少女まどか☆マギカを見て一言。
ＱＢマジ悪魔。

次回は乱入したタカミチが大会失格になるかも？＆学園長の最後を書く予定です。
ではでは～ノシ

少し読みにくいかもと指摘を受けたので修正と加筆してみました。
内容的にはあまり変わってない筈です。

音が２２００ｄＢだと、それによって発生するエネルギーが大変な規模になってしまうとの事で修正しました。
勉強不足ですしたね＾＾；

第６１翼　流される真実、喚起させる紫の麗人（前書き）

最近、地声にドスを効かせて声を出すと、ナチュラルに若本さんヴォイスな作者です。
なので最近よくモノマネしてと言われていた所為か、喋り方まで似てきたかもしれない・・・・・・。
でも「ぶるぁぁぁッ！！」とか「オール・ハイル・ブリタァニァァァッ！！」みたいな絶叫系は勘弁な！

第６１翼　流される真実、喚起させる紫の麗人

「大きく出たなタカミチ？　何か良い事でもあったか？」

身に覚えも、話もないという風に首を傾げながら言う。

「ふざけないでくれスイセン。　僕は君から聞きたい事が山ほどある。　それに貴方にも」

タカミチは戦闘態勢……ポケットに両手を突っ込んだまま、少し低めの声で問いかけ、アルの方にも視線を向けた。

「残念ですが、今の私からは君に話す事は特にありません。　スイセン、今日の夜に会いに来てください。　道標は残しておきますので」

そう言って、アルは返事を待たずに溶けるように消えてしまった。

相変わらず、趣味の事になるとスルースキルが尋常じゃないな……。

「彼にも聴きたい事があったけど……」

完全に標的が俺になったな……アルめ、覚えてろよ……。

「学園長の事か？　そんなこと俺にとってはどうでも良い。　学園長がどうなったなんてハッキリ言って、生死以外はどうでも良い事なんだよ俺にとっては。

学園長は俺にとって悪害にしかならなかった。　その事実だけで

敵対するには十分な理由だった」

「貴方は……ッ！！」

タカミチは苛立っているのか眉間に皺が寄っている。

そう……俺にとってはそれだけでいい。

ルクレツィアの死は本来、起こり得なかった可能性が高かった。

だが、俺がこの学園に居た為にレティは此処に来たし、デュナミスが悪魔を召喚して、恐らくはフェイトが襲撃を許可した為に、ネギはヘルマンによってトラウマを刺激されてレティを標的にしたのだろうし、学園長がネギの修行等という理由の為に学園結界を停止させていたから悪魔達は易々とネギ達を襲撃して来た。

レティの死の一端を負っているのはデュナミス、フェイト、学園長、ネギ、そして……俺。

悪魔を召喚しただけとはいえ、デュナミスは殺すだろう。

これからの計画でもアイツは邪魔だ。

フェイトは予想だが、現時点で完全なる世界のトップから許可が出ずに、デュナミスが悪魔を独断で動かす理由が無さ過ぎる。

よって、その事実が確認できれば俺はフェイトを殺すだろう。

学園長は既に死んでいるのなら、もうどうでも良い。

ネギは、あの事実を忘れているのなら寧ろ、原作通りに進ませれば明日菜を勝手に魔法世界まで連れてくるだろうし、フェイトの画策で墓守り人の宮殿へと来るだろう。

フェイトにはそのまま、世界を無に帰す儀式をさせる。

そうすれば、白き翼と完全なる世界は勝手に潰し合う。

俺はその後、潰し合った勢力を掃討した後、俺の計画を始める。

ネギ達の記憶を戻したとしてもネギは俺を追って来るだろう。

追ってこないのなら、それとなく挑発してみればいい。

ネギは俺に負い目を持っているし、明日菜などの周りが勝手にネ

ギを励まして世界の危機とやらを救いに来る。
世界の修正力によって今までが辿るべき未来の通りになったのなら、余程の事がなければその通りになるのだろう。
なにせ学園の所為とはいえ、俺の存在が無かった事になり、多少の誤差はあっても大した変化がなかったのだ。
なら世界の修正力すら利用して、俺は事を進めるだけでいい。

「何を憤っているんだタカミチ？」

「学園長は、平和の為にどんな汚い事もして来たかも知れない。でもそれは必要な事だった！」

タカミチの表情が苦渋の色に変わる。

その点では爺の事は買っていたさ。
だが、納得は出来ない。

「なら、どうしてレティは死ななければならなかった？
ネギの修行等という、ふざけた理由に巻き込まれ死んだのには、その学園長が掲げる平和とやらの何に役立った？
まさかネギの成長の為に、尊い犠牲となったから諦めろとでも？
復讐は何も生み出さない、レティはそんな事、望んでいないとでも言うつもりか？」

「貴方が言っているのは唯の屁理屈だ！　どんな理由であれ、人を殺す理由にはならないだろう？！」

「その言葉自体をお前に返すよタカミチ。　お前だって人を殺して来ただろう？　お前のその問いはお前が言うべき言葉じゃない。
それを本気で言っているのなら、そんなのは甘い人間の戯言だ。

死者は訴える事しかしない……でもな、だからこそ敢えて言ってやる」

――――――だからどうした？

「……ッ！？」

わかっていてやっている事に対してだろうか、それとも今までタカミチが見て来た英雄としての姿とのギャップに驚いたのか、タカミチは目を見開いた。

だが、すぐにタカミチは困惑の表情を浮かべる。

自分でも思うが、開き直った奴ほど面倒な奴はいないと思う。

「何を驚いてる？」

「貴方は……一体何をしようとしている……？　何を目指しているんだ……？」

確か、最後の戦いにタカミチがいた筈……今は些細な情報も渡さない方がいいか？

そんな考えが過ぎり、俺は話題を強引に変えた。

「俺の目的なんて復讐以外にあると思うか？　それよりも学園長はお前が殺したんだろう？」

突然の問いにタカミチは息を呑む。

この問いならば、多少強引でもタカミチを追い詰めつつ反応せざるおえないだろう。

「その点でいえば、俺はお前に感謝してるよタカミチ。　ありがとう」

本心からの感謝をタカミチへと贈る。

その感謝は本当だし、本気だ。

自分の手で殺せなかったのは残念だが、死んだのならばそれは俺にとって感謝すべき事だから。

「や、止めてくれ……僕は……ッ！　貴方は学園長が最後に何と言ったのかを知らないだろう？！」

俺からの感謝にタカミチは動揺し、その事を考えたくないのか問題をすり替えてきた。

「興味もないね」

これも本心。

わざわざ嫌っている人間の心境を知ろうとする程、俺は優しくは無いし時間の無駄だ。

「貴方は、知る義務がある」

そんな義務など放棄してしまいたいが、タカミチは有無を言わせ

ない圧力を叩きつけてくる。
俺は仕方なく聴く事にした。
もしかすればエヴァの事も知る事が出来るかもしれないから。

「なら勝手に言え、俺の気が変わらない内に」

「学園長は――――――」

タカミチは口を開き、あの悪魔襲撃のその後を話始める。

悪魔襲撃事件後――――――

「なんだ……？」

出張から帰ってきたタカミチは、学園長の魔力が増大しているのを感じ、その場所へと走った。
するとそこには、倒れている教師陣と困惑している３－Ａの生徒。
気絶しているネギと小太郎の姿。
対峙する老いた学園長とエヴァの姿だった。

「タカミチか！　手伝え！」

「エヴァ？！　何があった？！」

尋常ではない状況だと、出張という名の……文字通り、戦場から帰ったばかりで鋭敏になった感覚のタカミチは感じ取った。

即座にタカミチは自身の武器である居合拳を構える。

「話は後だ。　爺を何とかしなければ、周りに被害が出るぞ！　今は自我を失っている！」

視線を向けた先、学園長の姿を見たタカミチは息を呑む。

その視線の先に居たのは老いていた学園長が、更に老いた姿だった。

それだけならば、まだ戦場にいた痩せ細った子供や老人を見慣れたタカミチには今更、驚く事でも無かったのにも拘らず、息を呑んだのは膨大な魔力を放出しながら、爛々と深紅に輝く学園長の姿だ。

タカミチは一度だけ、その姿を別の場所で見た事がある。

吸血鬼。

その討伐すべき存在である吸血鬼の類似点によって、タカミチは学園長を討伐しなければならない……近しかった者を殺さねばならなくなった事に息を呑んだのだ。

「わかった……ッ！！」

絞り出すかのようにタカミチは意を決し、覚悟を決めた。

戦闘。

唯の蹂躙だったのかもしれない。

魔力が増大していたとしても、死ににくくなった身体が有ったとしても、考える事の出来ない獣の思考だけでは、難敵以上になる事はほぼ無い。

意識が無くなったり、本能だけで戦う事もあるが、その手の敵は思考をしない分、単純な引っかけにさえ引っかかる。

エヴァの魔法によって動きを制限された学園長に、タカミチは決定打を幾つも叩き込んでいく。
そして、ものの数分で学園長は意識を取り戻した。

「儂は……ッッ!?」

学園長は自分の喉を掻き毟る。
皮が裂け、血が滲み、骨が見えてしまうくらいに爪で引っ掻く。
その吸血衝動に抗う為に。

「吸血鬼化したばかりだとそうなる。　かつての私もそうだった」

「吸血鬼化?!　一体何が?!」

信じたくはなかった。
だが、エヴァはタカミチに真実のみを教えた。

「水仙だ。　私の吸血鬼化を自分と爺に移し替えた」

端的にして、単純に。

「何故、そんな事を!?　吸血鬼化の方法は失われた筈じゃッ!?」

「水仙だからこそ……その方法を知っていたのだろう。　何故そんな事を、というのなら、爺が水仙の逆鱗に触れた事が原因だな」

エヴァはクールだった。
朱然に裏切られた筈にも拘らず、不思議なくらいに。

「そんな事で!?」

一方のタカミチはわからなかった。
英雄とまで言われた朱然が、何故そこまでするのかと。

「水仙にとって、それはそんなでは済まされなかったんだよ。　水仙を止める術は、その原因の全てを取り除かねばならない」

「ならエヴァ、君は人間へと戻れたんだろう?!　術式さえ分かっているのなら君が治療をッ、それが無理ならスイセンを君が説得して治療を――――――」

タカミチは捲(まく)し立てる。
しかし、タカミチの希望は拒否された。

「無理だな。　私が自分を治す為に、その術を試した事がないと思うか?　私の数百年をたった数ヶ月で達成してしまったんだぞ水仙は。

そもそも、水仙は実力も去ることながら、知識もずば抜けていた。
寧ろ、それこそが水仙の異常ささ。
私の今の知識では、失われた術式を見た所でどうにもならないだろう。　理解できない術式の方が多過ぎるんだよ。
それに水仙は何所に向かったかは検討がつくが、私は呪いで離れられない。
それに奴は大人でもあり、子供でもある。　分別を知っていながら、感情のままに進んでしまう。　恐らくは……」

水仙の言によれば、人間は魂、精神、肉体で構成されているらしい。
人間は、精神を脳から、魂は肉体から生じるものでもあるとか。
脳髄さえあれば、脳髄だけ生きる事が可能なら、人は肉体など要

らないのかも、と。
しかし、知性があって肉体があるのではない。
肉体があって知性があるのだと。
肉体に満たした精神の中で魂の形が決まる。
逆もまた然り、起源は、人格を決め、器に変化をもたらす。
人間の無意識集合体を超え、人型を過ぎ去り、深く潜った先の根源と言うべき場所に至る工程で流し込まされた朱然の知識の一部。
この知識を使えば、大概の事……森羅万象を支配する事も可能だろうとも言っていた。
でも、人間を捨ててまで欲しいものではないとも漏らしていた。

――――人間という縛りを捨ててしまえば、それはもう自分ではないのだから。

だが水仙本人は気づいていないのかもしれないが、水仙の過去に別れた自分と、子供達を喰らった事によって肉体が歪み、複数の魂を抱える事によって、精神的な歪みを意図せずして抱えたとしたら？
百年の経験や良識もあるだろうが、子供としての多感性や感情の不安定が両立してしまったという可能性がある。
それはつまり――――守るべき者を守るという事が、その精神の歪みを押し止めるストッパーになっていたのかもしれない。

「全く世話の焼ける……水仙にとって、近しい者はほぼ守るべき者だ。　今回の件で、水仙は私すら守るべき者だと思っている。
多少は変える事ができるだろうが、動き出せば自分では止まれない……いや、止まらないだろう。
自己矛盾に苛まれようと、目的の為に自分を殺し、感情のままに目的に向かう。

なまじ今までの経験が目を曇らせ、自分の歪みに気付けない。
気付いたとしても目を逸らしている事だろう。
どうしようもないものだと思い込んでいるのかもしれない」

エヴァは薄々気が付いていた。
だからこそ、朱然の突発的な芝居に気付き、乗って、エヴァも一芝居打ったのだ。
唯、朱然がその曇った目で、エヴァの心境を察する事が出来なかった。
それが朱然の落ち度であり、エヴァの見当違い。
その事に対し、エヴァは忌々しげに呟く。

「く……ッ！」

治療法は無い。
その事にタカミチは呻きを漏らした。
もう、学園長を助ける術がない。
また師匠だったガトウを残してしまった時と同じではないかとタカミチは悔やむ。

「水仙は、学園祭に私を解放しにやって来る。　その時に――――」

目を覚まさせてみせる、と言おうとしたところで周りの教師達が起き始める。

「ぐッ！　学園長……」

それに気付いたのは人外へと成ってしまった学園長だった。

「タカミチ君、儂を殺すのじゃ」

「なッ！？　そんな事――――――」

出来る訳がない、と否定しようとしても尚、学園長は話を続ける。

「そして、ネギ君や明日菜君の記憶を封印するのじゃ。　ネギ君は此処で潰す訳にはいかん。

儂の死後は朱然という英雄を据える事で、西との関係も改善されていくだろうと思っとったし、なんだかんだでネギ君を導いておった。

この学園も上手く運営してくれるじゃろうと思ったのじゃが、此処で学園長になれば安易に本国からの手出しもできんと思っておったのじゃ」

「手出し？　学園長、一体何を言って……ッ？！」

偶然か必然か、自分で知ったのかアルビレオ・イマにもたらされたのか。

大戦の裏を知ってしまったからこそ、学園長は老い先短い事を悟っていた為に画策をしていた。

全てはこの学園の為に。

「その為の準備に時間を取られ、引き止める為に強引になってしまったのじゃが……儂は間違えた。

結果がこれじゃよ……儂はいずれ、吸血鬼として討伐されるじゃろう。　ならば此処で儂は責任を取ろう。

儂が死んだ後は、タカミチ君……頼んだぞ。　責任を押し付ける事になるが、儂が死んだ事で少しは朱然殿も気が晴れるじゃろ。

さあ、やるんじゃタカミチ君。　エヴァも、そしてタカミチ君も今まで済まんかったのぅ」

「フン、今更だ。　この際、地獄に堕ちろ爺」

エヴァは腕を組み、雨に濡れて肌に張り付く服を剥がしながら背を向けて歩き去った。

学園長は両目を閉じ、その場に仰向けに寝転ぶ。

「……すみません、学園長」

学園長の最後の頼みを聴いたタカミチは意を決し、せめて苦しまない様に剛殺居合拳を振り下した。

そして――――学園長は死んだ。

タカミチに新たな縛りを与えて……。

これが居なくなってすぐ状況だ。

その中で学園長の話のみをタカミチは話した。

「これが、全てです。　学園長は確かに御節介だったのかもしれない！　なら貴方はッ！！」

「知らないね。　勝手に期待して、勝手に救おうとして、勝手に利用しようとして自滅した、唯それだけの話だろう？」

それでも俺は関係ないと切って捨てる。

何故、爺のその願いを俺が叶えなくてはならないのか？

タカミチはそれに気が付いていないのだろう。

「貴方って人は……ッ！！」

「それに……お前はいつ、自分の理由を見つける？」

「何を――――――

言っている、と言おうとして俺は続ける。

「ガトウの願いを叶え、メガロメセンブリアの依頼で完全なる世界の残党を狩り、学園長の願いに縛られて……お前の意志は一体どこにある？

お前の言葉には、お前自身の重みが感じられないんだよ」

貴方だって、レティの死に縛られているッ！！」

「それは切っ掛けに過ぎない、俺は自分の意志で決めて行動している。　お前の様に流されるままに利用されてはいない。

少なくとも、俺はわかっていて利用されていたしな」

紅き翼に入った後、俺はある程度覚悟していた。

完全なる世界の作ったシナリオの通りに事を進め、メガロメセンブリアに踊らされている事も黙認していたのだ。

当時の俺にとっては、利用されていようがいまいが復讐さえ果たせればどうでも良かったから。

「利用？！」

「そうだろ？

ガトウの頼みの通り、明日菜を連れて安全な麻帆良へと逃げ、利用され続けていたという事もわからずに、守る意義を失った紅き翼という名を背負い込んだ気になって、完全なる世界の残党狩りや良いように使われる。

果ては自分の死すら利用した爺に、お前はこの学園に縛りつけられた。　お前は流されてばかりだよ」

タカミチから居合拳が放たれたが、俺は避けると同時に、未だそのままになっている鋼糸の魔法陣を起動する。

「違う！　そんな……そんな事あるはずが……ッ！」

「動揺してるなタカミチ……お前もまた、２０年前の大戦の被害者の一人だよ。　だから――――」

タカミチへと目標を変更して発動させた。

――――お前はもう、戦場に出るな。

「――――ッ！！？」

タカミチは耳を塞ぐが、その程度で聞こえなくなる程、軟な術ではない。

程なくしてタカミチは絶叫の果てに倒れ伏した。

「お前は強くなったが、未だに弱体化した俺にさえ届かない。　ああ……最後に一つ良い事を教えてやろう。

お前はもう自由だ、何物にも縛られずに生きるのも良いかもしれん。　お前の師匠……ガトウは生きてるよ。

お前の歳くらいなら、時期を見てお前に教えてやれと言われていたんだが、妙にタイミングを逃してしまって言えなかった。

が、ようやく言えた。　まあ、俺以外にガトウの生存を知る者はいないんだが、そういう事だ。

お前はもう何者にも縛られなくて良い。　もう、お前は無理をして紅き翼を名乗って闘わなくていいんだ」

「そん、な……師匠が……」

倒れたまま、タカミチは愕然と硬直し、まるで抜け殻になってしまったかのような、その横を俺は通り、ステージを後にした。

2012

第６１翼　流される真実、喚起させる紫の麗人（後書き）

久しぶりに酔うまで酒をかっ喰らって（強引に友人に飲まされた）執筆したので、良くわからない事かいてるかも……。
それがちょっと不安です。
酔いが醒めたら修正するかも。

他に書きたい事があった気がするのにすっかり忘れてしまった。
酒は程々にしよう……。

2013

第６２翼　荒ぶる狂戦士、封印する紫の麗人（前書き）

また……ネタに走ってしまった……。
そして、薄っぺらい……。

第６２翼　荒ぶる狂戦士、封印する紫の麗人

『え～……協議の結果、デスメガネ高畑選手は他選手へ妨害は故意的なものと見なし、失格と成りました！
その結果、次の高畑選手との対戦相手であるネギ選手は不戦勝となります！』

少し離れた柱の上に立って、俺はタカミチの処遇を聴いていた。

ま、妥当な判断だな……。
さて、タカミチはこのまま潰れるならそれまでだ。
次の試合は確か……。

『それでは気を取り直しまして、第一回戦、第三試合を……』

そのまま楓と中村達也、古と真名の試合が代わり映えしない展開で終わった。

そして――――

『それでは第一回戦、第五試合を開始します！　まずは麻帆良大学工学部所属！　田中選手！！
対戦相手は聖ウルスラ女子高等学校２年！　高音・Ｄ・グッドマン選手！
さあ、フェザー級とヘビィ級の戦いの様な様相ですが、見かけだけで実力はわかりません！
それでは・・・・・ｆｉｇｈｔ！！』

「お姉様――――！　油断しないでくださーい！」

それなりに慢心している高音に注意を促す愛衣。

因みにそれなりに慢心していると控え目な表現したのは、主にギルガメッシュとか、ラカンとかと比較した場合なので、そのくらいなのである。

実際の所、ラカンと比べてもあのギルガメッシュの慢心っぷりは突き抜けていると思う。

今後、ギルガメッシュよりも慢心する奴はいないだろうと思ったし。

「フ、朱然様との戦闘によってパワーアップした私に死角などありませんわ！」

いやぁ……その辺りがもうね……。

「そこの筋肉な人！　本気で来なければ私は倒せませんわよ！」

あーあ、言っちゃった……脱げ女フラグを……。

「了解致シマシタ。　デハ、最初カラパワー全開デ」

そんな事を男の合成音で田中が言ったと思ったら、思いっきり口を開けた。

するとその口内には、カオラの所で見た集光レンズがあり、脱げビームが発射される。

ビームは基本、光なので発射と同時に着弾する筈の物なのに、高音はギャグの様に避けていく。

ビームで仕留められないと思ったのか、水平に両手を挙げてロケットパンチを繰り出した。

それを、影を纏った腕で明後日の方へと弾いた。

「見縊(みくび)らないで欲しいですわねッ！」

おお……フラグを圧し折ったか？

修行のお陰か、それとも……。

「行きますわよッ！！」

高音は瞬動を使って、両腕に影を纏ったまま田中に接近する。

田中は弾かれたロケットパンチを戻しつつ後退。

「そこで下がるのは悪手ですわッ！！」

高音は進む。

田中は後方へとバックステップによって後方へと飛んだ筈にも拘らず、慣性を無視するかのように数メートルを横に跳ぶ。

「そこッ！」

鋭い声と共に高音は踏みつけた。

――――――自分に覆い被さるかのような田中の影を。

『影踏』

高音に教えた影を使った闘法の一つ。

子供の頃に見た事があった遊び。

影使いや闇の精霊、忍者等が近距離戦闘で使う事が出来る技。
他人の影を、影を構成する闇の精霊……影精経由で干渉し、縫いつけてしまう技。
高音は未だ未熟な為に一瞬しか効果を発しないのだが、それでも結果はご覧の通りだ。

突如、空中を真横に跳んでいた田中が見えない何かに縫いつけられたかのように慣性を打ち消され、仰向けに倒れ込む。
そこへ高音が追い付き、影の拳を田中の腹部目掛けて思いっきり振り下した。

高音へと教えたのは幾つかの影技と近接格闘、基礎だけとパッとはしないものだったが、恐らく、麻帆良の教師陣よりも頭一つか二つは飛び出るくらいには成長させられたと思う。

ミシリ、と人間であれば、聞こえる筈の無い硬質な物音……無理矢理に大きな力を加えられたかのような音が響く。
そして、田中は一度バウンドした後、石の灯籠を砕いてステージ外の池へと落ちる。
朝倉が１０カウントを取った後も田中は浮いて来なかった。

脱げ女フラグを圧し折った、か。
純粋に教え子が強くなれた様でなによりか……ネギとの戦闘はどうなるかな？

『第五試合は開始後は田中選手がロボット……アンドロイドとしての性能を見せ、グッドマン選手が押されていましたが、後半は逆に田中選手を圧倒！！
１０カウントまでに田中選手は池から上がってこられなかった事により、グッドマン選手の勝利です！！

次の試合ですが高畑選手の失格により、ネギ選手は不戦勝となります。
ですので第六試合は試合なし、繰り上げまして第七試合を行いたいと思います！！』

そのまま、明日菜と刹那の戦いが始まった。
此方もあまり変わり映えの無い戦いだ。
ベンチではやっと来たエヴァに、いつの間にか現れたアルがスク水とネコミミを持っておちょくり始めていた。

アルは何やってるんだか……。

そんな光景に呆れつつ、眼下の試合はやはり見覚えのある流れで……。

『勝者！　桜咲選手！』

変わらない結末となった。

ふと、視線を感じてそちらの方に目を向けると、その視線の主はエヴァで、俺をアルが指さしていた。

……アルめ、俺を指さして……ッて、あんのニートめ……ッ、あっさり俺の事をバラしやがったな……ッ！！
夜に制裁しとくとしよう。

そして、エヴァの試合が始まって――――

「ごッ……カペポ？」

「すまんな……決勝に用が出来たのでつい力が入り過ぎた」

――――――やはり一撃で沈めた。

そこで一旦、休憩が入り、第二回戦の呼び出しが始まった。

『それでは第二回戦第一試合を開始したいと思います！』

小太郎が勇んでステージへと進みでる。

俺は柱の上から、軽い効果音と共に文字通り落ちた。

計算通り、開始時の立ち位置へと落下して――――――

――――――スベった。

それはもう顔面からスッ転んだ。

生々しい音を響かせながら。

『パンダ選手！？　ちょ、なんか嫌な音が聞こえたけど大丈夫ですか！？』

「……死んだんちゃうか？」

ぐぬぅ……ッ！！
俺でなければ首が折れて死んでたよ……。
俺は呻き声を上げつつ、両手を踏ん張って立ち上がった。
「誰がぁ……死んだってぇ……ッ！！？」
なんか凄い声が外部スピーカーから洩れた。
『！？　スピーカーから荒ぶっている男性の声が……？！　え、えーっと、パンダ選手は無事の様ですね！
では早速、第二回戦第一試合……ｆｉｇｈｔ！！』
朝倉はその声を聴かなかった事にする様だ。
そんな事を思っている内に小太郎が瞬動で近づいてきた。
「ぬぅん！！」
真正面から掌打を打ち込もうとして来たので、気合と共に膝蹴りで迎撃。
俺の膝は、小太郎の鳩尾を的確に捕え、膝にベランダに干された布団の様にぶら下がった。
「ガッ！？」
呼吸が出来ずに固まった小太郎を、その状態から軽く膝の力だけで空中へと浮かし、サッカーボールをボレーシュートするかのように回し蹴りで場外へと蹴り飛ばした。

「小太郎君！？」

ネギの叫びが木霊する。
その声に反応したのか、それとも実戦で培った本能なのか、小太郎は水の上に着地。
その表情は苦悶では無く、強者へ挑む者の笑みだった。

「行くでッ！！」

その言葉と共に水面を蹴って、ステージ上の俺へと接近。
小太郎の気を纏った拳が俺へと繰り出されるが、俺は冷静に小太郎の顎を狙って掌底を打った。
しかし、手応えが無い。

分身か。
で、次が……下、右、上、左、同時攻撃、と。
あ、式紙。
式神なんて使わなくても分身くらい使えるだろうに。

と思って避けて避けて避け切って――――本体の顎を捕えた。

「アイテムなんぞ！！　使ってんじゃあ、ねえぇぇ――――ッ！！」

こんなセリフと共に。

「屑がァッ！！」

トドメとばかりに小太郎を肘打ちで吹き飛ばした。

ぬおッ？！
身体が勝手にッ！？
なんか荒ぶっちゃってるんですけど！？
なにコレ！？
バル〇トス降臨？！

「ごォッ！？」

小太郎はもんどりうってステージの手摺りまで吹っ飛び、辛うじて腕がその手摺りにひっ掛った。

「ふん！　男なら……拳で語れぇい」

いやいや、アンタは斧とか使ってんじゃん！
スピーカー自重したげて！

「くっ！！　そやな……なら……犬神ぃ――――――ッ！！」

小太郎の掌に漆黒の影が集まる。
しかし、影精とはまた違ったモノの様だ。
小太郎は立ち上がり、ステージへと進む。

「我流・犬神流……餓狼爆砕拳！！」

圧縮された犬神が、瞬動で間合いを詰めた小太郎の拳から俺へと叩き込まれた。

しかし――――――

「術に頼るグズがァ！」

「な、なんやて？！　俺のとっておきが……ッ！？」

「この程度が奥の手とは……片腹痛いわァァ――――――ッ！！」

魔力と気が吸われ、強制的に咸卦法となり、嫌な予感と共にソレは放たれた。

「微塵に砕けろォ！　虐殺のォ……ジェノサイドォ、ブレイバァァァ――――――ッ！！」

ちょ？！

小太郎死ぬ？！

咸卦法で合わさった力が、小太郎へと向けられた掌から邪悪な気と共に放たれた。

「ぐ、ぅ……あぁぁぁぁ――――――ッ！！」

小太郎は一瞬だけ耐えた後、その咸卦法の爆発的な力の本流に呑まれ、気絶した。

「今日の俺は紳士的だぁ。　運が良かったなぁ！」

『……ハッ？！　訳のわからない内にパンダ選手の邪悪な必殺技的なものが決まってしまった――――――！！

村上選手、気絶の為……パンダ選手が準決勝へとコマを進めたぁ――――――！！』

……いや、うん、俺何もしてないんだよ？
ホントだよ？
勝手に必殺技的な物を放ったんだ……。
ダメだ……もうこのパンダ師匠の着ぐるみは封印だ。
使い続ければ、大変な事になりかねない。

こうして……パンダ師匠の着ぐるみは封印された。
代わりに、無改造のスペアパンダ師匠の着ぐるみを着直した。

もう、あの魔改造パンダ師匠着ぐるみを着る事は無いだろう……
多分、恐らく、きっと……。

2025

第６２翼　荒ぶる狂戦士、封印する紫の麗人（後書き）

という訳で、今回はちょっと短めで。
バルバトス降臨（笑）そして封印へ……。
次回からは普通の着ぐるみなのでネタには走れない筈……。
原作通りの組み合わせはバッサリカットさせて頂きました。

高音の魔改造は特に目立った事はしてません。
基礎的な事に、影を使った効果的な技を教えただけです。
何気に原作の高音さんはカゲタロウの技使ってるっぽいので、その位でも強くなれそうだなーと思ったのであっさり田中氏を撃破。

小太郎戦について。
もはやネタの域で、バルバトスに勝てるのなんてナギやラカンくらいではなかろうか？
後はサーヴァントとか？
どっちにしろ今の時点で小太郎は勝てないと思ったのであんな感じに。

東方に興味を持ち始めました作者です。
お気に入りのキャラは紅魔館の面々。
とくにパチュリーさんと咲夜さんがツボった。
病弱な人とメイドさんには抗えない……。
朱然さんって姓が朱だからスカーレットと読めなくもないし、グングニル持ってるし、吸血鬼だしでレミリアと合わせたら面白い事になりそうかもと妄想中。
そんな事は置いておいて、遅々として話が進みません……すみません。

そしてまったく関係ないけれど、最近こえ部なるサイトで活動を開始してみたり……ハンドルネームはそのままなのですのですぐに見つけられるかも。
作者の若本さんのモノマネが聴けるかも？
って、わざわざそんなもの聴きにくる物好きな人はいないか……。

次回、エヴァＶＳ刹那　ネギＶＳ高音の戦闘で終わるかも？
ではではノシ

ちょこっと修正しました。

第ＥＸ・５章　東方異邦録？（前書き）

実家のパソコンで内緒で投稿です。
あんまり期間をあけてしまうと微妙だと思ったのでチマチマと番外編を書きまして、どうにか先程書き終わりました。
性格とか間違っていそうですが、そうだったら直す予定です。

第ＥＸ・５章　東方異邦録？

幻想郷……人に忘れ去られたモノが流れ着き、辿り着く場所。
そこには様々な者と物が流れ着いた。
忘れられてしまった。
朱然もまた……。
全てを忘れ去られてしまった。
俺の存在意義もまた、無くなった。

今度こそ、俺は死を……自由になる事が出来るのだろうか……？

「何かしらこれ……？」

紫の長髪、赤と青色のリボン、白と紫と縦縞模様、それにフリルがついたパジャマのような服を来て、これまた紫色でフリルや三日月のワンポイントが付いている帽子を被っている少女が、同じく紫の長髪を持ち、女と見紛う容姿の青年を見下ろしながら呟いた。
彼女の名はパチュリー・ノーレッジ。
動かない大図書館という、あれ？当たり前なのでは？と言う異名を持つ人間の魔法使いだ。

「パチュリー様、お嬢様がお呼びです。　たまには私の部屋で紅茶を飲まないか、との事ですが、ってあら？　人間、ですか？」

そう言って、数多くの巨大な本棚を縫うようにして現れたのは、銀髪のメイドさんだった。

しかもそのメイド服、胸元は露わになっているわ、ミニスカだわでかなり際どい。

少し吊り目でガーターベルト、上品な刺繍の入ったニーソックスにブーツとくれば、突っ込みどころ満載である。　そんな彼女の名前は十六夜咲夜。

この大図書館の上に鎮座する深紅の館――――紅魔館の主人に仕えるメイド長である。

「何時も足を運ばせるのも悪いし、たまには良いかも知れないわね。それと咲夜、足下に転がっているこれはもしかしなくとも人間だと思うわ」

「侵入者でしょうか？」

咲夜はすぐに浮んだ疑問を口に出した。

「でしょうね」

それをパチュリーは肯定する。

そうして二人の視線は朱然へと注がれる。

コイツどうしよう？的な意味で。

よくよく見てみれば、気を失っているのではなく、眠っているようで、朱然が反応を示し始めた。

「うぅん……もう食べられないよ……むにゃむにゃ……」

「「……」」

あまりにもベタで、平和な寝言である。
その所為か、二人はこの侵入者に対して、紅魔館の門番たる少女の姿を幻視した。
あの昼寝をしている姿を、である。
だが、朱然の表情が苦しげに変わっていく。

「ぅぅ……蓮華、エウ〝ァ……少しはペースん……く、苦し……おえ」

終いには、えずき始める始末である。
一体どんな悪夢に取って代わったのだろうか？

「「……」」

ますます呆れる二人を余所に、朱然は目を覚ました。

「ハッ？！　ある意味で良い夢だった筈なのに、ギスギスした嫌な悪夢だと感じるこの感覚は何だろう？」

「「！？」」

二人はそろって警戒を始めた。

釈然としない感覚を抱えながら目を開けると、そこには見覚えのない図書館と、これまた見覚えのない少女が二人、身構えていた。

また、生き返ったのか……？

そんな事を思いながら体を起こすと、荒事に多少の腕の覚えを持っていたパチュリーと咲夜に距離をとって身構えられた。

どうやら自分は歓迎されていないようだと思い至る。

この二人をご存知の方もいるだろうが、説明をさせてもらえれば、パチュリーは魔法を操る程度の能力を持っているし、咲夜に至っては時間を操る程度の能力を有している。

並大抵の実力では、触れることすら叶わないだろう。

パチュリーならば、多種多様、あらゆる魔法で殲滅され、咲夜に至っては時間を止められて最悪、気づく間もなく喉を掻っ切られて死にかねないのだから。

ここは柔らかく接してみたほうが良いのではなかろうか？

そう思った朱然は滑らかに語りだす。

「俺の名は朱然。　好きなように呼んでくれて構わない。　すまないが、お嬢さん方に聞きたい事があるのだけど。

此処は何処で、今は何時かを教えてはもらえないだろうか？」

その問いに答えるつもりがないのか、パチュリーは口を閉ざし、代わりに咲夜が説明をしてくれた。

「ええと、シュゼンさん？　私の名は、紅魔館メイド長の十六夜咲夜……此方は、この図書館の主、パチュリー・ノーレッジ様です。

逆に訊きます。　貴方はどうやって、この紅魔館の地下にあるこ

の図書館に忍び込んだのですか？」

咲夜は丁寧な口調と、未だに警戒を解いていない為に、厳しい表情を向けてくる。

ふむ……此処は無難に自分の非を詫びた方がよさげだな。

そう判断して、軽くコホンと咳払いをして立ち上がり、仕切り直す。

「いや、すまなかった。　十六夜メイド長、ノーレッジ館長。　私としても此処へ来た事は不可抗力だ。

自らの意思で着た訳ではなく、事故で飛ばされてしまったのだ。

今度こそ死んだと思い、永遠の眠りに身を任せようと漂っていたのだが、気付けばまた、この世界へと生を受けてしまったようでね」

先程とは打って変わった俺の口調に面食らいつつ、口を閉ざしていたパチュリーが反応を示した。

正確には、後半の部分に興味を示したのだろう。

「貴方、話を聴くに普通の外来人とは毛色が違うようね？」

「普通の外来人と言うのが、一体どんな者をさすのかは知らないが、恐らくはこの世界とは別の世界……違った歴史を進んだ世界からの来訪者といった認識で接してもらえると助かる」

「え？」

「成程、並列世界の外来人……貴方、魔法は使える？」

「え？　え？」

「前の世界、その更に前の世界などの魔法といわず、様々な技術を収集、習得している。
勿論、魔法もね」

咲夜を置き去りに、他の世界の知識に興味津々なパチュリーが身を乗り出さんとばかりに様々なことを質問し、俺はその応答をしていった。

数十分後。

「へぇ、異世界の知識……とても……ええ、とても興味深いわね」

ふむ、何というか、今までに俺の周りにいた本の虫の中でも初めてのタイプじゃなかろうか？
俺の知っている本の虫といえば、穏、夕映（へんたいあたまでっかち）とかで、このノーレッジという娘のように同等の知識を持ちながら、意見交換できる人物は居なかったと言ってもいい。
何より控えめと言うか、儚い印象を受ける人物も自分の周りには居なかったし。
外見がそうでも、本性は違ったり、ね……。

「つまりは敵対の意思は無い、と言う事でよろしいのでしょうか？」

「肯定だ。　此方に影響が有る程の悪影響や敵対をしてこなければ俺は基本、無関心だし、好戦的と言う訳でもないから。
少なくとも話のできる人物と交渉するくらいの理性は持ち合わせ

ているつもりだよ」

十六夜咲夜さん、ね。

その立ち居振る舞いは武芸者としても一流のそれだ。

見れば十代後半だろうが、そんな歳でメイド長を任されているのだから、かなりの者だろう。

その雰囲気は、どこかセラを思い出す。

「そう言えば、レミィが呼んでいたのよね？　ついでに彼も連れて行って、しばらく此処でお世話できないか訊きたいわ。

どうせ外来人なら行くところなんて無いでしょう？」

な、なんて……なんて――――――

「そうしてもらえると、此方としても助かるよ」

「教えてもらいたい事も有る事だし、このまま追い出したのではあまりにももったいなさ過ぎるわ」

――――――自分本位なんだろう！　ガッカリだよ？！

一瞬、この娘はなんて優しくて良い娘なんだろうと感心しかけたが、全部自分本位でした！

「それでは此方へ」

そんな事は当たり前で慣れていたのか、咲夜は紅魔館の主の下へと向かうべく、俺を促した。

それに俺とノーレッジ館長は従って付いて行く。

図書館の入り口を出て階段を登ると、壁やカーペット、調度品ま

で真紅に統一された、紅魔館という名に恥じない真紅っぷりを披露してくれた。

「此処まで統一するとは……いっそ、病的というよりは感心が沸いてくる……そしてなにより、手入れに余念が無いときている」

「お褒めに預かり光栄です」

俺の賛辞に、少しだけ嬉しそうに返答する咲夜。

一階から二階、更に三階へと登り、ようやくこの館の主の部屋へと着いたようだ。

咲夜がその扉をノックをする。

すると――――――

「咲夜か？　随分と遅かったな？」

エヴァのような……尊大な口調の少女の声が扉越しに聞こえてきた。

「申し訳ありませんお嬢様。　少々予定外の事がありまして、パチュリー様の他にもう一名、お嬢様に会いたいという者をお連れしました」

「客？　まあいい、入れ」

「失礼します」

扉を開け、礼と共に咲夜が入室し、パチュリーが気にせず続いて、

最後に俺が礼をしつつ入室した。

「ほう？　此方が客か……貴様、同胞か？　しかし――――」

目の前に現れたのは水色の髪、真紅の瞳、赤とピンクを基調としたドレスに身を包んだ、やはりエヴァやイリヤと同じくらいの少女だった。

その背中には大きな蝙蝠の羽が有った。

更に、その言葉を信じるのであれば――――彼女は吸血鬼だ。

「あら、レミィの同胞と言う事は貴方、吸血鬼？」

「まあ、一応は」

と、パチュリーの発した質問に、俺は曖昧に答えた。

なんともハッキリとしない、俺の物言いに咲夜が更に問う。

「一応、とは一体どういうことでしょうか？」

その問いに俺は口を開きかけたが、目の前の少女が割り込んできた。

「簡単に言えば、吸血鬼だけの気配ではない。　この者……幽霊でもあり、精霊の気配もあれば、獣人……ふむ、悪魔に龍まで身の内に宿すか……節操の無い、正に混沌だな？」

説明も無しに、自分の中身を言い当てられてしまった。

この娘、やはり見かけどおりの歳じゃないな……下手をすればエヴァよりも年上か？

「そこまで判る程、か……俺の名は朱然。　失礼だが、貴女のお名前をお聞かせ願いたい」

「礼儀を弁えているところを見ても、十分に客人足りえるな？　私の名はレミリア・スカーレット。　この紅魔館の主人だ」

スカーレット、紅と言えるが……朱もまた然りか。
出来すぎだな。

「ご丁寧にどうも。　しかし、姓の意味が同じ、しかも同じ吸血鬼、これで他にも同じ物を持っていたら、運命どころか奇縁を感じるものだね」

「運命に奇縁、か……それもまた必然よ。　中々に面白いことを言う。　身の内に宿す力もどうやら中々の物のようだ。
本当に面白い。　客人よ、我が同胞よ。　思う存分にくつろぐがいい」

どうやら気に入られたようだ。

そう思って、ようやく気を抜こうとしたその時だった。
只ならぬ狂気を感じ、その場から身を引いた。
それはその場に居る全員が取った行動でもあった。

爆音。

地下から空へ向けて放たれた何かは、全ての床と天井をブチ抜き、雲一つ無い夜を顕わにさせた。

そして――――――

床の大穴から狂気が現れた。
金髪、紅眼、レミリアと似たドレス。
幼い体躯。

背中に有るのは……翼、か？
本来、皮膜があるはずの部分にそれは無く、代わりに虹のような七色の結晶体があった。
そう、そこに現れたのは――――――

「フランドール！！」

「妹様！？　どうして！？」

フランドール・スカーレット。
レミリア・スカーレットの妹。
情緒不安定、幼き狂気、無邪気な破壊者の姿だった。

「ねぇ、そこのお姉ちゃん。　私と遊ぼうよ」

続かない！！

2040

第ＥＸ・５章　東方異邦録？（後書き）

皆様、お久しぶりです。
本編を書いてはいるのですが、自分のパソコンではないので書きにくいったらないので番外編を。
後は、武闘祭ばかりも飽きるかなぁと思ったので。
本編に書いた被災地よりは削除しました。
緊急で書いてはみたものの、よくよく考えれば本編には関係ないと思ったので。
あと、感想を返せなくて本当にすみません。
この場をお借りして感謝を。
応援メッセージはとても励みになりました。
主に空腹を耐えたりとかで（笑）

ちなみに現在実家は放射能の脅威に晒されそうになっていたりするので、実は被災地よりも危険だったりするかも？
体調とかは全然普通なんで、別に大丈夫だと思うんですけどね。
そしてやはり、投稿再開の目処はついていませんが、その辺りはご容赦を。
必ず復活して完結したいと思ってますので。
では皆様も体調には気をつけてください！
ではでは～ノシ

第ＥＸ・６章　謎物語　しゅぜんノウン（前書き）

どうも、お久しぶりです。
未だに実家に居ますが、そろそろ仙台に戻るかもなＶｉｅｒです。
またしても番外編ですが、ご容赦を。

なんとか持ち出した化物語を呼んでいたら、構想が出来て、筆も進んだので携帯電話で頑張って見ました。
自分は、メールとかほぼ単発なので、長文に慣れてないんですよ。
なので苦労しました＾＾；
主に、さ行を打とうとして乱打したら、電源ボタンで待ち受け画面↓消　え　た！？
を繰り返しました……やっぱり、自分はパソコン投稿のがいいです。

第EX・6章　謎物語　しゅぜんノウン

俺は誰だ？
俺は何だ？
俺は何をしていた？

気が付けば、俺は俺という存在が謎になってしまっていた。
一体どこの誰なのかも。
何処でどう育ち、どういった人間だったのかも。
記憶の一切合財全て、わからない。
しかし、知識の量や身体能力が異常な事、魔法や気などというものが確かに在って、それを俺は確信していた。
だが自分の素性が不透明過ぎだ。
自分の名前がぽっかりと抜け落ち、崖へと落ちる覚悟を抱き、忘却の崖から身を躍らせ、思い出そうとすればするほどに五里霧中へと迷ってしまっている気がする。
それでも尚、思い出さなければならないと思い、思考と考察を重ね重ねていくと、いつの間にか考えていたこと自体まで忘れている始末だ。
どうにも喉につかえているかのように、腑に落ちない。
思い出せないのならば、思い出す事のものでもないと忘れてしまえば良いのだが、気持ちが悪い。
納まりが悪いのだ。
気分が悪くなる。
だがしかし、思い出す術が無い俺は、その魔法や気なるもので何とかしようと思ったが、この身体では魔力を感知できない。
気を生成しようとしても、生成できない。
身体が覚えている。
知識もある。

でも出来ない。
行使できない。
自分で治せないと判断し、俺は一体誰なのかを探す。
本来ならこちらが優先されるべきだろうに何故か、俺は魔法を行使しようとしてしまった。
これも過去の経験からなのだろうか？
俺は洗面所へと向かい、備え付けられていた鏡で自分の姿を見た。
見たのだが、要領を得ない。
見えないような、男のような、女のような、子供のような、大人のような、人間のような、人間ではないような、そんな風に見えてしまったのだ。
なんだよ……これは……ッ！！
確固たる名を失い、姿を失い、果たして自分はこの世に存在しているのだろうかと足元が酷く不安定になる。
それを何とか堪えながら、俺は目を覚ましたダイニングを通り過ぎつつ考えた。
よくよく見れば、誰もいないくせにやけに広いアパートの一室だ。
なら、寝室に色々あるかもしれない。
そう思い、俺は進み扉を開いた。
寝室の壁に掛けてあった制服に目が止まる。
男物……という事は、俺は男なのだろう。
俺は“俺”と言う一人称を使っているのだから、何となくそうだとは思っていたが。
学ランの胸ポケットに入っていた学生証を開く。
これが自分のだという確証が持てない。
書かれている名は認識できない。
張り付けてある写真は鏡で見た通りだ。
しかし、学年が2年である事は疑いようがない。
ポケットに入っていた携帯電話のカレンダーを見比べ、間違いではない事を確認。

同時に、時間が飛び込んで来た。
午前８：００。
不味い、そろそろ家を出なければ、という知識が脳裏に浮ぶ。
つまりは……いや、やはりと言うべきか、俺は学生なのだろう。
そう思い、着ていた服をベッドに脱ぎ捨て、制服を着込む。
自分で自分を認識できないだけで、他の人間ならば教えてもらえるかもしれない。
そんな薄っぺらい希望を胸に、初めての行き慣れた道を登校した。
季節はもう秋から冬に成り代わる頃だからだろうか、とても冷やされた空気が肌を撫で、肺に取り込まれるのを感じる。
そのまま白い息を吐き出しながら進むこと２０分。
やっと辿り着く事ができた。
私立直江津高校。
それが、俺の通っている学校の名前らしい。

絶望が在った。
知識通りに学校へと足を踏み入れ、教室へと辿り着き、自分の席へと座った。
後は友達などにそれとなく話を聞くだけで、この不可解で奇妙奇天烈な現象は終わりを告げると思っていた。
授業が始まり、授業が終わる。
学校が終わった。
何事もなく。
つつがなく。
当たり前のように時間は進んだ。
誰も、俺の事など気にも掛けず、歯牙にも掛けずに通り過ぎた。

通り過ぎた教室の窓側最後尾の人気スポットに未だ、俺は座り続けている。
イジメなら別に良い。
少なくとも俺は独りで生きて行くだけの話。
だがそれは確かに、確固たる自分を認識し、定義しなくては無理だ。
少なくとも、今の俺には無理な選択。
でも出席確認で全員出席していると教師は言ったのだ。
欠席は誰もいないと。

「何で……何で誰も俺を呼んでくれないんだ……俺は一体誰なんだよぉ……」

絞り出した掠れた声が、伽藍とした教室に鈍く響いた。
膝の上に置かれた両の手を、真っ白になるくらいに握り締める。
そう、俺は居ない。
確かに教室に居たはずなのに、俺の名前が一切呼ばれなかった。
誰も居ないかのように。
初めから存在しないかのように。
納得なんて、できる訳ないじゃないか！
誰にも見られていないだなんて、誰の記憶にも残らないなんて、思いたくない――――――

「あれ？　まだ誰か残ってるじゃん」

ハッと俯いていた顔を上げ、声の聞こえた教室後方の出入り口に視線を向けた。

「何を言っているの？　誰も居ないじゃない」

そこにはカップルらしき男女が、廊下から教室を覗き込んでいるのだ。

「え？　だって、あそこの窓際に……」

少年の右手人差し指が、ハッキリと俺を指差した。

「俺が……見えるのか……？」
「まさか、怪異……なのか……？」

俺も、少年も呆然と呟いた。
祈りが通じたのかと、俺は安堵の息が漏れ出た。
そんな中で、少女だけが動く。
少年を庇うように、まるで騎士のように俺に立ちはだかったのだ。
ガシャリという装填音のような音と共に、両手に異常な数の文房具を構えて。

「下がって阿良々木君」

「待ってくれ戦場ヶ原！　まだそうと決まった訳じゃないだろ！」

最初の会話内容を信じるならば、戦場ヶ原と呼ばれた彼女――――――蟹に行き遭った少女、戦場ヶ原ひたぎと言うショートカットの少女は俺が見えないはずだ。
なのにも拘らず、少年――――――吸血鬼に襲われた少年、阿良々木暦と言う彼女よりも背丈が若干低めで、男にしては髪が伸び過ぎている。
その俺の見える少年を、少女は憶する事なく当然のように庇っているのだ。
まるで俺という存在が危険だとでも言うように。

冗談じゃない！
俺は自分を見つけたいだけなのに！

「俺は自分がわからないんだ。　助けて、くれないか？」

助けてほしい。
救ってほしい。
この訳の分からない状況下から脱したい。
それが俺の願いだ。

「助けを求めてる。　なら僕は！」

「みすみす彼氏を危険に飛び込ませたりしないわ。　私に見えなくて、阿良々木君に見えているのなら、それは私にとっては敵よ」

「戦場ヶ原……本当に、見えてないんだな？」

少年は確認する。

「ええ、私には全く見えないわ。　声も姿も何もかも」

阿良々木少年の問いに対し、戦場ヶ原という女生徒は、やけにハッキリと断言した。
俺を否定したのだ。
迷いなく、淀みなく、臆する事なくだ。

「やけにハッキリとモノを言う彼女さんだな？」

むしろ、そこまで断言されたお陰で、若干の平静さを取り戻した俺は意地を張った。

「あー、まあ……前例があってね。　前回はそれが原因でややこしい事になったんだよ。　で、お前……アンタ……君――――――

なんて呼べばいいんだろ?と阿良々木少年は、目を泳がせながら頬を掻いた。

「好きに呼んでくれて構わない。　お前、アンタ、君、アナタ、ダーリン、何でも――――――」

ちょっと待て!

前半はまあいい……でもな、何で知り合ったばかりの奴と後半のアナタとか、ダーリンとか、夫婦みたいに呼び合わなきゃならないんだ!

僕はお前に対してそんな風に呼ぶつもりはこれっぽっちもない!」

阿良々木少年は全力で突っ込みを入れて来た。

何故か、その突っ込みに懐かしさを覚える。

所謂、デジャヴ……既視感ともいえる感覚。

俺は以前、阿良々木少年と会った事があるのだろうか?

それとも突っ込みされる事になのだろうか?

それは思い出せない俺にはわからない。

「へぇ……阿良々木君。　私を差し置いて他の誰かをそんな風に呼んだら、いつか言った時のように切り落とすわよ?

男であれ、女であれ、ね」

底冷えする声色と、スッと細められた彼女の視線は、見つめられた者を凍らせる絶対零度の視線だ。

女王様みたいだなぁ……心の中で、彼女には様を付ける事にしよ

う、うん。
　見えてはいないだろうが、正直そんな視線は向けられたくないので、余計な茶茶を入れずに成行きを見守る。
「ええ！？　それ本気だったの！？　しかもその物言いは明らかに男の特定部位を指してますよね！？
　それは色々と不味いと思うのでやめてもらえないでしょうか戦場ヶ原様！」
　何やら物騒な話が飛び出した。
　アクション映画で、それもなかなかにダークな内容の作品を見た事がある人は、恐らく切り落とすという単語を聞いて連想するのは、耳や指辺りを切り落とす事だろう。
　しかし、女性が男性に言うと、切り落とす部位が下の方だと連想してしまうのが男の悲しい性だ。
　実践はなるべく控えてあげてほしい。
　戦場ヶ原の容赦のない物言いをしながらもとても楽しそうだ。
　生き生きしている。
　分かりづらいが、私、恋してます的な雰囲気が漂って来る。
　なんとも羨ましい。
「テロには譲歩しない、屈しないが基本よね？」
「お前はどこの高校生軍曹だ！　それに僕はテロなんてするつもりはないぞ！」
「その元ネタって、確かロボットアニメだよね？」
　黙っていようと思ったのに、つい楽しげな会話に入ってしまった。

「ペットの躾は去勢からと相場は決まっているわ」

「ペット！？　僕とお前は恋人であって、ペットになった覚えはないぞ！　それとお前……ネタとか知ってるのか？！」

「そのフリは2度ネタな気がする。　しかし、恋の奴隷（ペット）ねぇ……マニアックな関係だな。

最近の若い性は歪んでるって本当なんだね。　で、俺を助けてくれるのか、くれないのかハッキリしてほしいんだけど……」

「ああもう！　僕は聖徳太子じゃないんだ、ゆっくり順番を守って言ってくれ！」

「「じゃあ私とその女、どっちを取るの！？」」

俺と戦場ヶ原の声が、打ち合わせ無しにも拘らず、見事にシンクロした。

「お前ら……僕をからかってそんなに面白いのか？！　戦場ヶ原、お前ホントはコイツの事、見えて聞こえてるだろ！？」

ここ一番でキレの良い突っ込みが飛んで来た。

ふむ……やはりどこかデジャヴってる気がするなぁ……。

閑話休題。

怪異。
そこに在って、そこに無いモノ。
人が創り、自然に生じるモノ。
光の影に隠れ、蠢くモノ。

「……で、俺がその怪異そのものに成ってしまっている、と？」

「僕も戦場ヶ原も遭遇したんだ。　戦場ヶ原は元に戻れたけれど、僕は少しだけ怪異としての後遺症が残ったんだ。
だから僕はお前を見る事ができるし、戦場ヶ原には見る事ができなかったんだと思う」

怪異の説明を受けて、俺は何となく納得した。
既に普通の人間に、俺は認識できていないのだから、その怪異とやらのお仲間になってしまっているのだろう。
それは何となく理解した。
それはそれはしてしまったさ。
でも、できる事ならば、こんな面倒はすぐにでも元に戻して人間に戻りたいと思う。

「少し前までなら、僕達の知り合いにそういうのを専門にしてる奴が居たんだけど……」

「その口振りから察するに、残念ながらその専門家とやらはもう居ないようだね？」

「忍野さんは一体、今何をしているのかしらね？」

戦場ヶ原は懐かしむ、というよりは、どこか居なくなって良かったかのような言動で、俺と少年の会話に割り込んできた。

「アイツの事だから、どうせまたどっかの空き家とかを根城に怪異の収集とかしてんじゃないか？」

「ええ、そうね。　誰かを勝手に救われるように手助けしているんでしょうね。　お人好しみたいだし」

どうやら、その忍野――――――忍野メメと言う怪異専門家は、助けるという事を、表現を、何故か嫌っているらしい。

少年曰く、彼の口癖は「勝手に助かるだけだよ」「元気だねぇ。何か良い事でもあったのかい？」らしい。

何とも捩じれて、曲がって、屈折しまくった性格で、心中を見透かしたかのような言動をする不良中年。

無駄な雑学に富み、金髪にピアス、派手なアロハシャツ。

神社やらの専門学校を卒業している癖に、思うところがあって、日本津々浦々を全国行脚しているのだとか。

その経歴は一先ず置いておくが、話だけ聞くとどうにも仲良くなれないし、なりたくもない人物のようだ。

それだけは間違いないだろう。

「はぁ……でも自分の姿どころか名前、声に至るまで全く認識できないってのは、それはそれで怪異らしいな。

家にあった男物の制服から男だって推察したんだろ？　他に分かる事って言ったら何かないのか？」

「残念ながら、俺にはサッパリ手掛かり無しの八方塞がりだ。

そういえば訊いてなかったけれど、阿良々木少年に俺はどういう風に見えているんだ？」

そう、それを今まで訊かなかった事が、とても不思議なくらいの

質問だ。
普通の人間に見えないのは良くはないが、不本意ながら怪異の特性だと諦めた。
でも怪異の混じった人間には、俺の姿は一体何に見えているのだろうか？
もしかすれば、角やら翼やらが生えている異形かもしれない。
もしかすれば、普通の人間の姿なのかもしれない。
もしかすれば、自分と同じように中途半端に認識できないのかもしれない。

「何と言ったらいいんだろ？」

「そんなに凄い姿なのかしら阿良々木君？」

「そうなのか！？」

言い淀む阿良々木少年に、戦場ヶ原様は問い掛けた。
それがますます俺の心境を乱していく。
不安が募る。
頼む！
せめて、俺の姿がむさ苦しいガチムチとかは止めてもらいたい！
俺の心境的にも、描写的にも！

「男装途中の女に見えるよ。　なんかこう……エロい感じの外人さん、みたいなって！　ガハラさん？！
ホッチキスを二刀流の如く両手に装備して鳴らさないでくれませんか！？
未だに僕、あの時の事トラウマに成りかけてるんだからな！？」

戦場ヶ原様の瞳には、何故か炎という文字が、音を立てて揺らめ

いているのは気のせいではないのだろう。
カシャッカシャッ！という軽快な音と共に、ホッチキスから折れ曲がった弾が、幾つも排出されて床に散らばっていく。
なんというか、文房具って使い方次第で武器に成り得るから恐ろしいね。

「あら、そう……阿良々木君は、年上のエロい系外人さんが好みだったの……私も、もう少し歳を取れば射程範囲内に入るのかしら？」

無表情で訊きつつ、ホッチキスの音が加速していくのが、余計怖い。

「待ってくれ戦場ヶ原！　今のは主観的なように見えて、客観的な感想だ！　十人中十人は同じような感想を言うはずだ！　僕は戦場ヶ原なら、どんな体型だとしてもストライクゾーンだァアアアッ！！」

阿良々木少年の絶叫告白が、放課後の校内に響き渡った。

「そう」

戦場ヶ原様は納得したのか、一言だけ呟き、ホッチキスを瞬く間に収納した。
瞳で揺らめいていた炎も消失したようだ。
一体、そのホッチキスやら文房具は何処から出して、何処に収納されているのだろうか？

「そろそろ漫才も良いかの？」

ズルリと。

阿良々木少年の影から、金髪幼女が這い出して来た。
うんしょ、とか言いながら。

「……幼女誘拐ですかそうですか、うわァ……」

「羽川さんも交えて、近い内に一度、話し合いをしましょう。
流石に犯罪を犯してしまった人間を更生させるのは、私一人では荷が重い気がするわ」

「弁解を……させてください……」

阿良々木少年は、ガックリと膝を着いて俯いたまま、懺悔をするように口を開いた。

美しき吸血鬼の絞り粕。
鉄血にして、熱血にして、冷血だった吸血鬼。
刃の下に心在り――――――ハートアンダーブレード、転じて忍野忍という名に縛られた元最強の怪異らしい。
ミスタードーナッツのドーナツが好物だとか。

「お前様は、いい加減に学習する事を覚えた方が良いと思うのじゃが……」

「ややこしくしたのは、主にお前のせいだろうが！」

「怒鳴るでない。　儂がこの怪異の正体を教えてやろうと言っておるのじゃ」

「わかるのか！？」

「まあ、成り行き上仕方無くの。　で、ものは相談じゃ、怪異の正体を教える変わりに、正当な報酬を要求する！」

ズビシッ！と、偉そうな幼女に、今日2回目の指差しをされた。

「まあ、余程の無茶振りしてこなければ大概は」

それに対して、俺は助けてもらえるのならと思い、了承した。

金髪幼女は、何とも年季の入った言葉遣いで事を進めていく。

何とも言い難いが、これで何百年もの時を過ごしているのだから驚きだ。

何があって幼女の姿なのかは、当人達の込み入った話だし、訊くのは不躾と言う物だろう。

だから踏み入って話も聞かない。

しかし、しかしだ。

「ミスドの各種を食べ放題……最近はご無沙汰じゃったしの、禁断症状が出るようになってしまったよ」

「禁断症状！？　血じゃないんだ！？」

やはり少年が、幼女へ突っ込みを入れる。

ドーナツで禁断症状の出る吸血鬼……それで良いのか伝説の吸血鬼……と思ったのは俺だけではないはずだ。

「じゃあ、一ヵ月ミスドのドーナツ詰め合わせを進呈しよう」

ドーナツ一ヵ月。
それで助かるのなら安い物だろう。

「ホントか?!　主様とは器が違うの！
主様もこやつと同様、もっと儂に畏敬の念と共に、ミスドのドーナツを貢いでもバチは当たらんとは思わんのか？」

もう一度、言っておく。
それで良いのか、伝説の吸血鬼……。

「忍、お前……良いからさっさと話を進めてくれ。　ドーナツの件は、一時保留だ。　今回の働き次第で、前向きに検討してみるけど……」

「未だかつて無い程に、儂のテンションは急上昇じゃ！　楽しみで待ちきれないほどに楽しみじゃ！
さっさと終わらせてしまうとするかの！
アレのおしゃべりで耳に挟んだ中でも、一番近い怪異なのは恐らく……鵺じゃろ」

鵺――――それが、俺の怪異。
頭は猿、胴は狸、手足は虎、尻尾は蛇、加えて翼が生えている絵や、そう文献で表現されているものもある。
だが実際、正体不明、名称不明で、飄々とした掴み所の無いモノを総称したモノらしい。
鳴き声は正に「ヒョーヒョー」と気味の悪い声で、やはり聴いた者は気味悪がったのだと言う。
この怪異の発動条件は2つの条件を満たす必要があるらしい。
阿良々木少年が、今まで拘った怪異――――襲われたのか、魅せられたのか、行き遭ったのか、迷ったのか、願ったのか、絡まれ

たのか、刺されたのか、生まれ代わっていたのかという、今の俺の状態を端的に言い表そう。

俺はどうやら、見失ったから、鵺に成ってしまったらしい。

怒りに、復讐に、我を忘れる程に。

復讐の怒りで、自己を見失った者は鵺に成る。

己を怪異――――――呪いそのものと化し、相手に不幸を振り撒き、非業の最後をもたらす。

その治療法は単純明解にして、難解だそうだ。

自分で自分の名前を思い出し、確固たる自分を取り戻せば良い。

それが唯一の治療なのだという。

俺は一体、何者だと言うのだろうか……？

つづ――――――かない！

第ＥＸ・６章　謎物語　しゅぜんノウン（後書き）

と言う訳で、記憶喪失系主人公になってしまった朱然さんの物語、しゅぜんノウン其ノ一でした。

あくまで化物語上下巻のみしかないので、忍の口調が怪しいです。跡で修正するかもしれません＾＾；
本文は、なるべくそれっぽく書けてたかなぁ……とちょっと不安ですが、続かないので大丈夫かな？と。
時系列的には、大体の怪異が終わってしまった所でしょうかね……秋と冬の中間くらい？
朱然さんは、最近なんでもできる正体不明な人になっているので、本編でも挙げられている正体不明の総称みたいな感じで取り上げられているっぽい鵺なんかが丁度いいかな？と思って鵺にしました。
因みにノウンは、正体不明や未知などの意味を持つｕｎｋｎｏｗｎからです。

まだまだ地震も続いていますが、負けないようにしたいです！
ではまた次回ノシ

第６３翼　倒れぬ少年、進む少女（前書き）

何とか宮城県に戻ってきました。
バイト先も何とか無事でよかったよかった。
福島の風評被害は中々に厳しいです。
早く何とかしてくれないかな……。

第６３翼　倒れぬ少年、進む少女

『それでは、第十一試合を開始したいと思います！　予選会では自分よりも大きな相手を倒して来た……ネギ・スプリングフィールド選手！！

ネギ選手はラッキーな事に、第一回戦が不戦勝になった為に準備は万端か――――――？！

対するは、麻帆良学大学工学部……別名、マッドサイエンティストの巣窟より作り出された田中選手に逆転勝利を収めた、高音・Ｄ・グッドマン選手だ――――――！！』

高音とネギは対峙する。

ネギは魔法使いの格好、高音は脱げ女フラグを圧し折った為なのか、普通にウルスラの制服を着ていた。

「ネギ先生……あんな問題を起こしたという報告を受けていましたが……。

その直後に、この様な大会に出場なさるというのはあまりに軽率な行動ではないのでしょうか？」

ギロリ、と高音はネギを睨みつける。

「え？！　いや、反省はしてますし、直後って訳じゃ！」

ネギはタイムマシンの事を秘密にしている為に、話す訳にはいかず、その言動はしどろもどろになってしまう。

『それでは……ｆｉｇｈｔ！』

そうこうしている内に試合が始まり、両者は同時に動き出す。
ネギは動揺したままで。

「オシオキが必要のようですね！」

「ぼ、僕だって！　決勝に行って父さんの手掛かりを――――」

ネギがそこまで言ったところで、ネギは強制的に言葉を切らざる負えなくなった。
何故なら、瞬動で高音が距離を詰め、ネギの腹部に拳を叩き入れていたからだ。

「かふ……ッ！！」

ネギの喉から空気が漏れる。

ネギは反応できなくなっていたのだ。
本来、タカミチとの試合前に、ネギは瞬動の存在を小太郎から教えられ、タカミチとの試合によって瞬動を完成させた。
しかし、タカミチの試合が無くなった事により、瞬動が未だ完成していなかったのだ。
更に言うのであれば――――今、この世界に於(お)いては、確かにネギは朱然に瞬動を教わり、習得をしていた。
だが記憶は失われた為に、習得という事実は無くなった。
未習得という事にされた。
故にネギは瞬動を今の時点で完成していない。

「瞬……動……？」

ネギは何がどうなったのかを察し、その単語を無意識に呟いた。

そのままネギは、高音の腕に支えられる様な形になりながら何とか立っている状態になってしまう。
足が震え、胃の物が逆流しそうになっている。

高音に現在の状態で勝利を収める事が可能なのか？と問われれば、それは難しいと言わざる負えない。
本来、瞬動を得ていたからこそ、高音の懐へと踏み込む事が出来たのだから。
先程の記憶を封じられたくらいで技術さえも忘れてしまうのか？という問いには、一概に言えはしないが、少なくとも覚えたての技術ならば、それには是と答えよう。
確かに、このネギも小太郎から瞬動の触りくらいは教えてもらった。
タカミチ戦の少し前に練習もした。

「どうしたのです？　前に戦った時よりも随分とお粗末ですよ、ネギ先生？」

事情を知らない高音は真っ直ぐにネギの瞳を覗き込む。

では何故、ネギの瞬動が完成しなかったのか？
理由は単純にして明快――――それこそが先程の問いに戻る訳だ。
その答えは記憶の改竄。
幾ら身体が覚えていたとしても記憶が不確からならば、その微妙な差異に脳が、身体が、感覚が、ズレを覚えて違和感を感じる。
覚えたての技術ほど、その差異は大きくなり失敗するだろう。
他にも、何所かになんちゃって転生者の様な人物がいたとして、神様とやらに都合良くチート能力を貰い、更にその能力を使いこなす能力を貰ったとしても、その動きに対する挙動、適切な使用、応

用、端的に言えば、それを使う為に適した肉体を作る事、つまりは実戦経験に基づいて構築し、学習しなければ、それは大きな隙となる。

所謂、宝の持ち腐れだ。

「前に……闘った……？」

身に覚えに無い、高音の疑問にネギは更に呟く。

エヴァの別荘で、高音とネギは手合わせをしていた。

その結果は引き分け、という結果になってしたし、今回の学園祭では、報告と言っていた高音の言の通り、ネギの暴走に高音と愛衣は鉢合わせていない。

つまりは英雄の息子が潰れるよりは、と中途半端な記憶改竄を受けたネギに対し、現在の麻帆良の防衛戦力である彼女らの成長は目覚ましく、学園長亡き後に後釜として学園長になった理事会の一人（表向きは学園長はまだ死んでいないので理事会の一員のまま）は、学園長からの遺言の為に記憶操作をタカミチが頼み、それを自分の都合の為に曲解した指令を出した後釜の学園長が、朱然は魔法世界へ急用の為に帰ったという事にした事が原因で、魔法生徒には記憶改竄は行われなかった。

タカミチが学園長の遺言を伝えなければ、タカミチが魔法を使う事が出来れば、タカミチが最悪、その場に立ち会っていたのなら、学園長が生きていれば、別の者が学園長になっていたのなら、もっと実力がある

者達がいたのならば、そもそもあんな不幸の積み重ねで事件が起きなければ、こんな矛盾に満ち満ちた状況にはならなかっただろう。

もしかすれば、隠蔽などせずに事の起こりを魔法生徒に伝えたのならば、こんな事にはならなかったのかもしれない。

学園長はあのちゃらんぽらんな性格な所為で、とてもわかりにく

かったが、政治や学園の統治についてはかなりの手腕を有していた、という事でもある。

「僕は高音さんと闘ったのは初めてのはず……」

ありもしない事実にネギは後ずさり、混乱する頭を押さえた。

高音もまた、ネギの挙動に困惑する。

ネギは心の何所かで、思い出してはいけないという気持ちがある事に困惑していた。

「？　ネギ先生……？　一体どうしたというのです？」

事情の呑み込めていない高音は、ネギの両肩に手を置いてもう一度、ネギの瞳を覗き込む。

その瞳は困惑に彩られていた。

他にも困惑していた者達が居る。

周りの観客達だ。

何せ、戦闘開始の合図があって、これから激しい闘いを見れると期待していたのに、唯の一撃しか放たれていないのだから。

「？　誰、だ……？　こんな人、僕のクラスになんか居ない……僕のクラスにいたのは月詠さんだったはずだ……。

でも……なんでそこにいるのは違う人なんだ……？　僕のクラスに居たこの人は……僕のクラスに居た人？

違う、何を言っているんだ僕は？？　この人は始めから敵だった……はず」

ネギの自問自答。

フラッシュバックの様に、ネギの脳裏にはルーデシアとしての朱

然が、出ては消えるを繰り返した。
修学旅行で自分を助けたのは、月詠であってルーデシアではなかったと。
そこには月詠が居た筈なのに、そこにはルーデシアの姿が映る。

なのに――――――

見知らぬ筈のルーデシアを確かに自分は知っている筈だと確信している自分が居る。
彼女が理由もなく敵対する意味がないと己が心が叫んでいる。
純然たる事実だと脳が悲鳴を上げている。

果たしてそれは――――――自分が重大な何かを見落としている様な……。

やめろ！
消すな！
この記憶は……僕の罪を消すな！
勝手に無かった事にするな――――――！！

反響する自分自身の声。
誰かに抑えつけられていたような感覚。
大人が呟く忘却呪文の詠唱。
絶対には思い出してはいけない重大な事を、絶対に思い出さなくてはならないと確信してしまっている。
矛盾している筈なのに、思い出す事で自分が壊れてしまうとわかって居るにも拘わらず。

だって、悪魔が襲撃して来た雨の降る日……この時に僕は、初めて人を■した――――――

「大丈夫ですか？　ネギ先生？」

明らかに異質なネギの状態に、高音は肩に置いた手に力を入れ、揺さぶる。
揺さぶられた事によって、ネギの意識は思い出す前に浮上した。

目前には高音、少し離れた場所に朝倉、周りには大勢の観客と教え子に友達の姿。

「え……？　あ、はい……大、丈夫です」

ネギは、未だに先程の脳裏に浮かんだ矛盾する、その知るべきではない知るべき事を脳髄の更なる奥へと強引に押し込まれる感覚を感じながら、一体何を思い出し掛けた事すら忘れた。

そうしてネギは、モヤモヤとした頭を振って、今の戦いに集中をする。

高音はそれを見ながら、もう大丈夫だと判断し、試合開始時と同じくらいの距離を開けた。

ネギと高音は仕切り直すかのように、どちらともなく構えた。

一体何を合図とするのか……？

二人の態度に、観客達の多くはそう思った。

その所為か、シン……と周囲の雑音が止んだ。

そして――――――

父親に肩車されていた子供が、異様な静寂で緩んだのか、持って居た風船を手放した。

「あっ！」

子供の声は良く通る。

その瞬間に、二人は動き出した。

両方とも瞬動で。

打ち合い、交叉する拳を避けながら両者は笑みを浮かべた。

「先程よりも動けていますね？」

「ええ……ッ！！」

高音は満足そうに、ネギは必死に。
瞬動を交えながら、お互いの身を削る攻撃の応酬が放たれていた。
高音は純然たるボクシングスタイル。
ネギは剛の拳と謳われた八極拳。
ネギのそれを、軽いフットワークを交えた瞬動でかわす高音。
高音のそれを、柔の掌と言われる柔軟な八卦掌でいなすネギ。
何より、ネギの動きは先程とは比べられない程に、その動きを取り戻していた。
その一つ一つの技が冴えわたっているとネギは感じられるのだ。
まるで、忘れていたモノを取り戻すかのように。

「……ッ！！　やはり……このままでは、あの時と同じですわねッ！　ならばッ！」

均衡を保っている事に業を煮やした高音は、切り札を切った。

「なッ？！」

高音の切り札。
その巨大な体躯を現わした。
その独特の衣装――――――言うなれば、漆黒で構成されたベネツィアの仮装のような格好。
しかし、巨大さ故に、異様さを醸し出す。

黒衣の夜想曲（ノクトゥルナ・ニグレーディニス）

闘い方を教わった高音は、朱然に言われていた。

切り札を使うなら、更なる切り札を用意しろ。

朱然の戦闘スタイルの基本にして最大の命題。

高音もまた切り札の更なる切り札を用意してはいる。

それ故に多用は控えていた。

切り札は必要な時にこそ切るモノだ。

切り札が既に切り札でない時に切るモノなのに、敢えて高音は此処で切った。

そして、もう一つの朱然の教え。

切り札を切るからには必ず殺し切れ。

果たしてそれは良かったのか、それとも悪かったのか。

それでも高音は此処で切った。

つまりは本気で潰す気だ。

「派手だ――――――ッ！！？」

『おおーっとぉ――――――！！　なんかスゴイの出た――――――ッ！？』

あまりに派手な為に周囲からツッコミが入るが、高音は気にしない。

自分のコレは、何も恥じる物など無いのだから。

そのままネギへと向かって、動揺を隠しきれないネギに上から押し潰すかのように抜き手の一撃を振り下す。

叩き込まれた抜き手をネギは瞬動で避けるが、ネギが居た場所は

その人形の太い腕を一回りほど大きめに粉砕し、抉り取った。
高音は攻める手を休めない。
距離が離れれば無数の影槍を放つ。
近距離ならば、朱然に強引とも言える方法で技術を引き上げられたボクシングに近い拳と、柔軟な掌、抜き手を巧みに使う近接格闘術。
タイムラグもほぼ無く、精確に複写（トレース）する。
影精を纏い、軽い遠距離攻撃……魔法の矢程度ならば黒衣のマントで弾く事が可能。
近距離攻撃ならば、ほぼ全てを全自動防御（オートガード）するという仕様。
術式をコツコツと組み、頭を悩ませながら作った努力の具現。
高音のコレを倒すのであれば、本来のネギの攻略法……ゼロ距離からのスタン、長距離からの大呪文で消し飛ばす、近距離攻撃に絶対に防御という反応してしまうという所を突く、等が上げられる。
が、この大会のルールでは呪文詠唱は封じられ、逃げ場はほぼ無し。
この戦いにおいては、手段が限られるが故に高音はこの大会に置いて、優勝候補に数えても良いだろう。
ならば、やはり経験が切り取られたネギの取るべきは行動は限られる。
ゼロ距離からのスタン攻撃一択だ。
高音は一度、記憶を忘れる前のネギと闘っている。
ならば、その手の内も知っていた。
一方のネギは、自分の今ある技量で高音を倒す為に、どうすれば良いのかを今尚、続けられる高音の影槍の刺突をかわしつつ構築し、準備を始める。
ラス・テル　マ・スキル　マギステル！　魔法の射手（サギタ・マギカ）　雷の三矢（フルグラーリス）！
無詠唱でのゼロ距離から魔法の雷矢を入れる為に。

一瞬の無詠唱という術式構成で、思考が鈍った所への影槍十本がネギへと走る。
障壁を構築しても、障子紙程度の防御力しか得られない。
そう一瞬で判断したネギは、反射と言っても良い速度で構築した魔法の光矢を、左腕に宿してから後方の地面へと解放した。
爆発と共にネギは飛び上がり、横一線に迫っていた影槍を跳び超えて高音へと肉薄していく。

そして――――

「ぐ、げ……ッ！？」

ネギは折り曲げられた巨大な腕に両腕で掴まれていた。
更に、折り曲げた事によって高音の目の前に来たネギを、高音は自らの手によって首が締める。
瞬く間に肺の空気を押しだされ、肋骨が悲鳴を上げ、内臓が絞り出されそうになる。
それに加えて、新たに空気を取り入れる事も出来ない。

「残念ですが、読んでいましたよネギ先生？　このまま意識が飛ぶまで締め上げますが、すぐに良くなりますわ」

高音の眼に慈悲の色はない。
躊躇もない。
近接戦を習った時に朱然から学んだ事の一つ。
敵となったモノに容赦するな。
それが最後に高音に教えられた言葉。
「ネギ――――――ッ！！」
「ネギくぅ――――――――ん！？」
「ネギ先生――――――――！！」
明日菜達の悲鳴が木霊する。
「……ッ！！　ァ、ッ！！」
最早、喋る為の空気は残っておらず、ネギの口からは悲鳴すら上がらない。
吸える空気もなく、ネギはもがく。
もがいて、もがいて、その先に――――――ネギは意識を失った。
だらりと力の抜けた肢体が揺れ、口元は抵抗していたときに出た涎で汚れている。
「これでオシオキは終わりですわ、と言っても聞こえる筈もありま

せんわね」

高音は黒衣の夜想曲を解き、ネギはそのままステージに鈍い音と共に落ちた。

『ちょッ！　ネギ君、大丈夫?!』

朝倉は、あまりにもエグい高音のやり方に、素に戻りながらもネギへと近づいて気絶を確認した。

すぐさま朝倉は、高音の勝利宣言をする。

その宣言に、試合が終わる事へ異を唱える物は居なかった――――

――――箸だった。

「な……ッ!?」

『な……ッ?!』

意識を失った箸のネギ本人が動き出した。

試合はまだ終わっていない――――――!!

高音と朝倉は同時に驚きの声を上げたが、高音はすぐさま影を己の両手に纏わせる。

「影よ……ッ！！」

高音は影を纏った右腕を、瞬動で急接近して来たネギに対して繰り出した。

だが、ネギには当たらずにネギの魔力を込められた一撃を腹部に受けた高音は、そのまま崩れ落ちてしまった。

「そん……な……」

ネギは拳を出したまま微動だにしない。

つい数秒前とは真逆の構図が出来上がってしまった。

朝倉は高音が完全に気絶している事を確かめ、ネギの勝利を叫んだ。

『気絶から奇跡の復活！！　これぞ不屈の闘志とでも言うべきなのか――――――ッ！？

ネギ選手、大逆転勝利だ――――――！！』

朝倉の宣言で、観客達は歓声を上げた。

だが、未だにネギは動かない。

それを朝倉は不審に思い、ネギを覗き込んだ。

ネギの表情は……気絶したままだった。

『なッ！？　ネギ君が立ったまま気絶してる？！　メディィック！

メディ――――――ック！！』

ネギは立ったまま気絶していた。
まるで、倒れる事が甘えだとでも言う様に、自分は倒れる資格がないとでも言う様に……。

ネギと高音が担架に乗せられ、選手医務室へと運ばれて異常がない事が確認された。

『えー、先程の試合ですが、両選手に異常は無し。　両選手が気絶のままの場合、ダブルノックアウトという扱いになります！
しかしながら、両選手のどちらか一方が次の試合までに起きる事が出来、大会参加の意志を示した場合、その選手が次の試合へと駒を進める事になります！
さあ！　試合もそろそろ終盤と言ったところでしょう！　第十二試合の選手をご紹介します！！
まず、女子中生でありながらデッキブラシを巧みに使う美少女剣士、桜咲刹那選手――――――ッ！！』

「あ、あの……エヴァンジェリンさん……御手柔らかに……」

刹那はおずおずと言う。

『かたや対戦相手のエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル選手も女子中学生！
その容姿は、お人形や小学生かとも思える愛らしい物がありますが、一回戦では対戦相手を一撃ＫＯという何とも鮮やかな勝ち方をしています！』

「ふん、あまり温い事を言うなよ刹那？　理由が出来たのでな……本気で勝ちに行く。
が、それだけでは詰まらん。　ついでにお前を揉んでやろう。
貴様も本気で来るがいい」

「そ、そんな……ッ！」

エヴァの眼は本気だ。
本気で潰す気で、それでいて戯れに刹那を虐める気だと。

『美少女対決になりましたが、果たしてどちらに軍配が上がるでしょうか？！　では第十三試合……ｆｉｇｈｔ！』

試合開始の合図を聴いて、二人は即座に闘う者へと成った。
それは流石、と言った所だろう。
試合は程なくして動く。
持っていたデッキブラシを構えていた刹那は瞬動で、エヴァは悠々と。
対極的な動きで以て、硬質的な音が鳴り響いた。
刹那は目を見開く。
手加減は無かった。
自分は全力でデッキブラシを振りきった筈だった。

なのに――――――

何時の間にか、エヴァが手にしていたのは鍛えた鉄を骨組みに使っている鉄扇。
それで受け止められていた。
尚も力を込めている筈なのに、気を込めたデッキブラシは進まない。
まるで巨石と鍔迫り合いをしているかのように。

「どうした？
人間に戻った私程度に、人間を元から超えている筈の身体能力で自分が圧倒できないのが可笑しいか？」

「人……間……？　貴方は吸血鬼の筈では？」

「最近、人間に戻ったんだよ、と……お前は忘れていたんだな……つい口が滑った。
まあ、そんな事はどうでも良い。　刹那、貴様……最近は随分と楽しそうだな。
あんな事があったにも拘らずに、な」

エヴァは急に鉄扇に込めた力を抜き、バランスを崩した刹那の腕を取って、投げ飛ばした。

「あんな事？　エヴァンジェリンさん、貴女は一体何を言って？」

「大切なお嬢様をまた攫われただろう？」

エヴァは接近し、刹那の脇を通り過ぎた。
通り過ぎたと思われたところで、刹那の身体が真横に跳ねる。

「何を言っているんですか！？　神鳴流奥義！　斬空閃！」

何時の間に、と思う反面、剣圧を飛ばす斬空閃を反射的に放っていた。

刹那は、あっ、と漏らす。

エヴァの言を信じるならば、唯の人間に戻ったと言うのならば、神鳴流の奥義をどうこう出来る程、甘くは無い。

しかしそれは、エヴァの年齢が見た目通りだったらならば、と注釈せざるおえない。

約六百年だ。

その六世紀を生きた化生だったのだ。

今更、人間に戻った所で身体の驚異的な自己治癒能力が無くなっただけに過ぎない。

日々人間は新しい技術を手に入れる半面、気を抜けば怠ける生き物でもある。

ならば怠ける程の技術が今よりも少なかった昔の人間はどうなるのか？

簡単だ。

怠けず、弛まず、己を鍛え続けたに違いない。

鍛えて、鍛えて、己の限界まで、極限まで鍛え上げた。

その純粋な練度を持つ者が、昔のエヴァを追い詰める。

なら、現代の……エヴァの言う生温くなった技程度でどうこうなると思うだろうか？

答えは否だ。

エヴァは飛んで来た斬空閃を見据え、その異形を討伐する事に鍛えられた剣圧を、魔力を纏った己の手で無造作に、無意味なはずなのに――――――掴んだ。

「な……？！　馬鹿な……ッ？！」

刹那の言う通り、それは己の技に自信を持つが故に馬鹿げていると言わざる負えないだろう。
今まで誰も掴み取る、などと言う意味の無い事をする者はいなかったのだから。
しかし、それは確かに意味の無い事だったが、刹那にとっては確実に意味のある事と成った。
畏怖、恐怖、底知れなさ。
人間と烏族のハーフとはいえ、人間として育てられたのならば、刹那は人間と言っても良いだろう。
理性のある人間は、飢えの他にもう一つ……恐怖にも逆らえない。
動物は本能で恐怖を感じるだろう。
人間も同じだが、些か恐怖には鈍い節がある。
だが、それを自覚した時、動物以上に恐怖で何も出来なくなるのが人間だ。

「大層な自信があったものだな小娘……。　たかだか十五で、人間に戻った私を倒せるとでも思ったか？
だから温いと言ったんだよ。　吸血鬼など、私にとってはおまけだ。　後から付いた能力に過ぎない。
お前の烏族としての力が人間に加えられる程度と同じなんだよ」

エヴァはそう言って、未だに掴んでいた斬空閃を握り潰した。

「貴様は本当に詰まらなくなったな。　入学当初よりも丸くなり過ぎだ。
何より、学園の阿呆共の所為で余計に拍車が掛かっていると見える」

「学園？　先程から一体何の事を言っているのですか？！」

刹那は叫ぶ。
刹那もまた恐れている。
あの恐怖の権化とも言える鬼神のような朱然を。
ネギへと向ける濃密な殺気に一般人であった明日菜、木乃香、ハルナ、夕映、古はすぐに気絶できた。
でも刹那は違う。
なまじ実戦を知り、殺気を向けられる事にも慣れていたからこそ起きたし、強過ぎる殺気に意識が遠退きそうな意識をギリギリ保っていた。
最後に見た光景は、禍々しい光を反射する両刃の鎌を放つところまでだ。
その鎌が振り下されたところで自分は一度、死んだと思わせられた。
そこで意識が途切れた。
そのまま刹那は記憶改竄を受け、忘れた。
ルーデシア……朱然に強引に修正された木乃香との距離は幸いにも、そのままとなっていたが、月詠というわかりやすい身代わりの所為で、認識のズレがわかりにくくなった。

「言わないとわからない愚図に用は無い。
水仙の成した事が全くの無意味か……しかし、爺の後釜に収まった阿呆は余程の下策を打ったようだな。
呪いが解けたら、さっさとこの学園から離れた方が良いか。一先ず水仙を追うのが第一目標にでもなるのか？　むぅ……」

刹那の問いを無視し、エヴァは今後の事に目を向けている。
そこにはもう刹那等という路傍の石に目も向けていない。

「神鳴流奥義！　百烈桜花斬！！」

無視するなとばかりに斬撃の嵐がエヴァに向かうが、それでもエヴァは刹那を見ていない。

「もう良い。　邪魔だ」

エヴァは鉄扇を開き、横薙ぎに振り抜いた。
まるで風を送るかのように。

瞬間――――――轟風が吹き荒れた。

その轟風に刹那の斬撃の嵐は阻まれた。
百烈桜花斬の名の通り、花弁が舞い散る。
しかし、その光景は満開の桜が嵐によって、無残に散らされるかのような光景だった。

「忘れているだけならば、それも良かろう。　一つの幸福だ。
この学園の阿呆共に利用される前に去った方が賢い判断だと思うぞ？　では、そろそろ眠れ」

鉄扇を持っていない左手首をクンッと翻した途端。
刹那の身体は空中に束縛された。
ゆっくりと、ゆったりと、エヴァは刹那に近づいて軽く刹那の鳩尾の辺りを鉄扇で突いた。
それだけで刹那は意識を失った。

『試合終ー了！！　一方的な試合運びのまま桜咲選手が敗北――――！！

準決勝進出は……エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル選手

だ――――――！！』

なんともあっさりと決まってしまった。

当人のエヴァは、興味もなさげにステージを降りてしまう。

エヴァが妙な気まぐれさえ起こさねば、それこそこの試合も一瞬で終わっていた。

それだけの試合だっただけの話。

第６３翼　倒れぬ少年、進む少女（後書き）

次回もお楽しみに～ノシ

第６４翼　準決勝、大人げない紫の麗人（前書き）

ぼーっとしていたらいつの間にか凄い時間が……。

第６４翼　準決勝、大人げない紫の麗人

俺はまた、ステージに立つ。
不思議な物で、こんな見世物として闘う事はあまり好きではなかったんだが、こうして上がってみると昔の三国合同武闘大会を思い出して、それなりに血が沸き立つような感覚がする。
思い出は、記憶の古い順から変わっていくというが、そうだな…
…もうあれは遠い。
手を伸ばしても届かない、そんな物理的な距離の意味でもない。
そこには二次元と三次元のような、そんな感じの距離感だ。
何より、俺は手を伸ばす資格すら失ってしまったのかもしれない、なんて言うのも思い出した為の感傷だろう。

『準決勝――――――!!　さあさあ、皆さんお待ちかね！　最強の候補が絞られました！　この四人だぁ――――――!!』

朝倉がバッ!!とマイクを持っていない方の左腕を思いっきり広げた。
それと同時に、ステージの上の四面スクリーンに準決勝まで進んだ俺、エヴァ、楓、ネギの顔写真が映る。

『ついに次は最終決戦！　果たして、賞金一千万円と麻帆良最強の称号を手に入れるのは一体誰なのか――――――!?
準決勝第一試合!!　分身を作り出す、現代のクノイチ!?　長瀬楓選手――――――!!』

バーテンダーのような格好の楓が俺の目の前に現れ、その細い目で俺の方を窺う。
そんな中で、楓は少し離れた場所に視線を向けた。

何だろうと俺も見てみると、屋根の上にアル、小太郎、古が居た。

成程、あの場面の場所はあっちだったのか。

『今大会のダークホース！！　戦闘力はパンダの着ぐるみ？！　パンダ師匠（仮）選手――――――！！』

「パンダ師匠とやら……お主、ネギ坊主に恨みを持つ者でござるか？」

突然、楓が問いかける。

「……そうだ」

普通の着ぐるみになってしまった為に、篭った声になったが、確かな声で返答した。

声色は高い筈なのに、しかしその声は確かに重かった。

それが男の物だと言う事を楓に否応なく感じさせる。

「そうでござるか……しかしネギ坊主の仕出かしたソレは、子供のやった事では済まされないのでござるか？

それは本当に間違いなくネギ坊主なのでござるか？」

楓は疑問を俺にぶつけて来た。

「俺の目の前だったよ。　ネギ・スプリングフィールドが、間違いなく……俺の娘を殺したのは」

着ぐるみの頭で見えてはいないが、俺は無表情だ。

怒りを顕わにする必要もない。

そこには、その事実だけがあれば良いのだから。

「馬鹿な……ッ！？」

『おーっと？！　何やら選手間の間で何かしらを話しているようですが、長瀬選手が驚きを露わにしているぞー？』

「事実だ。　それを君は確かに見ていた筈だ」

「あの真っ直ぐな少年が、望んでそんな事をする筈がないでござる！」

俺の言葉……というよりもネギの性格的に有り得ない、その確固たる真実を楓は否定する。

『では、選手間もどうやらヒートアップして来たようなので……ｆｉｇｈｔ！』

動揺していたとしても流石は実力者。

楓は瞬時に動く。

前方からより完璧に近い縮地からの足刀蹴り。

俺は目前に迫る足刀を無視し、寧ろ突っ込むかのように、上半身をお辞儀するかのように前に折り曲げた。

その足刀の一撃は着ぐるみの頭を透り抜ける。

俺は両手を地に伸ばし、手が着いたところで両手と両足をバネのように縮め、一本の槍のように何もない後方へと、全身のバネを使って跳んだ。

そこで透過していたと言っても過言ではない程に存在感を薄めていた楓は、即座にバク転して、俺の両足による刺突をスレスレでかわしつつ、オーバーヘッドキックの様に俺の頭に右足で蹴りを叩き

込みに来た。
当然、俺はその蹴撃を受けるつもりは無いので、強引に空中で身を左に捻り、此方もスレスレで避ける。
そのまま慣性に従って放物線を描き切った俺は地面へと両足を着き、未だ逆さまの楓へと滑るように前進。
楓は苦し紛れに左足を振り切って来たが、それを柳のようにスルリと左半身を引き、かわすと同時に前に出ている右半身から右手を伸ばす。
それを身体に受けまいと、両手をクロスさせるように構えた楓の腕に、右の平手を軽く押し当てて発頸。
楓は衝撃と共にステージの外の手摺りに叩きつけられた。
この間のやり取りは、ほんの十秒程度の出来事だった。

「く……ッ！！」

楓は呻きながらもステージ上に戻って来る。

「気配が消え過ぎていてかえって不自然、対人戦は初めてか？攻撃する時に微かに躊躇が見える、狙いが正確過ぎて寧ろ読みやすい」

俺は何時ものように、稽古をつけるかのように直すべき点を挙げていく。

「ネギ坊主を……殺すつもりでござるか？」

発頸をモロに受けた左腕をダラリと下げたまま、楓は問う。
同じクラスに居た時には見た事もない程の殺気を以て。
ネギを害成すのならば友達を、知り合いを害するのなら、この手を汚してでも……そんな守るべき者の持つプレッシャーを感じる。

「忘れたままなら、ネギ・スプリングフィールドはこれから待ち受ける闘争の元凶となる事になる。
他の俺の子供達が死ぬ事に繋がってしまう。だから、学園祭中に不幸な事故が起こるかもしれない。
だが忘れた記憶を思い出した時は……戦争回避の生贄になってもらう」

格闘技の試合中に事故が起こる事がある。
だが、それは飽くまでも不幸な事故だ。

その程度で死ねるのなら……楽なものだろう？
優しさで万人を救えるのなら、幾らでも俺は優しくなろう。
でも、優しさだけで人は救えない。
エゴだけでも、信念だけでも。
それを俺は知っている。

「何を……言っているのでござるか……？」

用意するはどちらも苦の道。
苦しんだ末の死か、それとも消耗品として扱われるかを選ばせる。

それが俺の掲示する贖罪、それを選ぶのは他ならないネギだ。

「言葉通りの意味だよ……勿論、俺自身が唯で済むとも思っていない」

往くは戻る事すら許されず、不変という道を強いる罪過の地獄。
留まるは迷いに身を焦がされ、自責の灼熱に焼かれる煉獄。
戻るは遂げられぬ平穏を、唯々諾々と享受する抜け殻の天獄。

遂げられず抜け殻になるなんて、逃げる事はしたくない。
迷って中途半端に手を出して、全てがご破算なんて目も当てられない。

なら、俺は――――――

「少しでも前へ歩み続けようと思っている」

決して歩みを止めない。
歩みを止めたら、そのまま蹲いて倒れてしまいそうだから。
決して休まない。
休んでしまったら、そのまま動けなくなってしまいそうだから。
時々後ろを振り返ろう。
そうすれば、もう少しだけ先に進もうと思えるから。
後悔を心に刻み続けよう。
そうすれば、後悔をしない為に頑張れる筈だから。

進んだ先に――――――きっと望む未来がある事を信じて。

「それが間違いだというのなら教えてくれ。　復讐に身を焦がす事は、いけない事なのか？
それは本当に間違っているのか？」

問いかける。
俺は間違っているのかと。

造物主は言った。
ナギが武の英雄、俺は復讐の英雄、お前達には世界は救えない、と。
今思い返してみれば正に予言だ。
ナギや紅き翼は解散、俺は道を踏み外して復讐へ。
俺自身が証人、というのがお笑い草だ。
しかし、確かに正しかったのかもしれない。
そんな風に復讐に生きる人間が居るのも、また真実の筈なのだから。

「わからないでござるよ……拙者とて十五の小娘で、未だ未熟者の身。
しかし、復讐は虚しいものだと言う事、子供を殺す事は間違っていると言う事だけは判るでござるよ。
間違っていたのならば、子供は叱咤し、何度でも言い聞かせ続けるものだと」

そんな事、わかっているよ楓。
でもお前だって知っている筈だ。
忘れているだけで、俺はネギに何度も繰り返したよ。
でも、それでも、ネギは俺の娘を……ルクレツィアを殺したんだ！
言い聞かせ続けても直らないのなら、選ぶ道は――――

「貴殿は……とても寂しい物の考え方をする御仁でござるな？」

未熟と言いながら、まるで見透かしたように言う楓。

寂しい、か……歳を取ると、どうにも悲観的に物事を見てしまう質（たち）になってしまう。

思わず自嘲の笑みを浮かべてしまった。

「自分でも呆れるほどに戦い続けた。　その先がコレでは、笑い話にもならない。
だが今更、自分の在り方を変えるのには、少しばかり時間が立ち過ぎたんだ」

「止めてくれる人は居なかったのでござるか？」

「居た……かもしれない。　でも捨てたんだ……守る為に、自分から。
もう俺の所為で傷つけさせる人を……増やしたくなかった。　巻き込みたくもなかったから……」

「……そうでござるか。　出会い方が違っていたら――――」

「それは無い。　少なくとも、俺は努力をした。　それを裏切ったのはネギ・スプリングフィールドの方だ」

あの出合い方以外をしていたとしても、俺とネギは相容れなかったのだろう。
過程は結局、過程に過ぎない。
結論は出た。
今更、議論の余地は無い。

「先程からの物言い……以前から拙者達を知っているのでござるか？」

「ああ、よく知っている……知っているとも。　お前達は忘れている。

この学園に忘れさせられた哀れな……そして、運命に定められ、翻弄される事を決められた者達。
さて、もう良いだろう？　本当に、最後の会話としては喋り過ぎた……」

「どうやら、それ以上は何も話してはくれなさそうでござるな？」

楓のその言葉の後、俺と楓は同時に動き出した。
互いが瞬動と縮地を使って。

ふむ、この時点でこの静けさの縮地……侮れない、か。
あまり此方の動きを見せすぎるのも今後に差し支えるか？
着ぐるみは、遮光加工だけはキッチリとしている為に、魔力以外はそれ程低下はしていない。
なら、できるだろう。
ウィン、力を貸してくれ。
水の精霊。
水を司る者。
幸いにもステージの周りには水が多く在る。
ならば、手足のように使いこなせない筈が無い。

集まれ水よ！

その意志を聴いた水が組み上げられる。

水の牢へ――――――！！

楓に向かって四方八方から水の壁が殺到し、そのままステージの半分をすっぽりと覆う程の水の檻となった。
当然、楓はそのままで居る筈もなく脱出しようとするが、水の檻

の中では捕えるだけでなく、不規則に激流を発生させている。
肺の空気を吐き出させるかのようにキリモミする。
その中でさえ、楓は何かをしようとする。
正に不屈。
俺はそれを無視し、更なる攻撃を続ける。

今は眠れ……縮ッ！！

持ち上げた掌を握り潰す。
瞬間、飛沫と共にステージの半分を覆っていた水檻が半分になった。
その圧縮によって、楓は呆気なく気絶を余儀なくされる。
俺はその水を外し、楓はステージに倒れ伏した。

『最初の息も止まるような接近戦から、後半は圧倒的な謎の水攻撃によって成す術なく長瀬選手、ダウン――――――！
これにより、パンダ選手が決勝戦に駒を進めました！！　このまま優勝してしまうのか――――――？！
さあ！　サクサク次の試合に行ってみましょう！！と、意気込んだところで残念なお知らせです。
ダブルノックアウトしたネギ選手、ならびに高音選手が復活できなかった為、自動的にエヴァンジェリン選手が決勝進出です！！
決勝戦の対戦カードは、パンダ師匠（仮）選手ＶＳエヴァンジェリン選手に決定ッ！！
公平を規す為に、三十分の休憩を挟みたいと思います！！』

こうして、俺とエヴァはついに――――――

一月（ひとつき）ぶりの再会を果たす――――――

第６４翼　準決勝、大人げない紫の麗人（後書き）

油断せずに本気を出せば、楓に朱然さんが遅れを取る訳が無いのです回。
何度も同じ事を書いている気がしてならないですけど、ご勘弁。

何気に今日初めて知った真実。
バイト先の社長が、大震災の日に娘さんと宮城県の夢メッセＢ級グルメを食べに行くところが、娘さんが友達との約束で行かなくなって命拾いしたらしいとかなんとか。

第６５翼　決勝、助けを求める紫の麗人（前書き）

ついに麻帆良武闘祭が終わります。

第６５翼　決勝、助けを求める紫の麗人

『さて、皆様お待たせしました！　ついに決勝戦の幕が切って落とされようとしています！』

「約束を果たしに来た」

俺はエヴァの瞳を真っ直ぐに見て言う。

そう言った俺に対して、エヴァは口を開く。

「まさか、お前があんな行動に出るとは思わなかったからな……少々驚いたが、伊達に６００年は生きていない。

私の演技も中々のモノだっただろう？」

エヴァは悪巧みしている時の笑みを浮かべた。

わかってたのか……結局、何時も俺は馬鹿だ。

エヴァを信じ切れてなかったんじゃないか……。

「そうだな。　つい外見の方で意識してしまって、歳というか、経験の事なんてすっかり抜け落ちていたよ。

それに、俺達は一年も一緒に居た事がない……そんな薄っぺらい時間で――――」

俺の口からは強がりのような言葉が口先を出て、そのまま否定的な言葉へと繋がるところで、エヴァが俺の言葉を遮って話を進める。

「確かに私とお前は、未だ一年にも満たない時間しか共に共有していない。　だが見損なうなよ？　私が……この私がだぞ？

あんな戯言とお粗末な演技で誤魔化されるとでも思ったか？」

怒っている。

それはもう、絶対零度の視線だ。

背筋から嫌な汗が滲む。

「なら、その呪いをすぐに解こう。　そして、麻帆良から離れて事が終わるまで、旧世界の何所かで旅行でもしていてくれ」

俺は、ｓｃａｒｌｅｔの工房で呪いを解く為に造っていたペンダントと並行して造っていた、登校地獄の呪いを解く術式を展開する為に、手を伸ばし掛け――――――

「お前は元から歪んでいたが……いや、正確に言うなら“狂っていた”か？」

――――――手が止まった。

「狂っている？　俺が……？」

狂っている？

ああ、そうだ。

俺は狂っている。

わかっている。

……

そんな当たり前の事を何故今更？

疑問が過ぎる。

そうさ……俺のこの生き方は、明らかに歪んでいる。
説教している側が間違っているなんて、笑い話だった。

「そうだ。　思い当たる節はあるだろう？　狂って尚、目を逸らし続けている事が」

オマエには、目を逸らし続けている事があった筈だろう？

「……」

表情が変わらない。
変えられない。
変えられる筈が無い。

「その様子では、わかっているようだな？」

俺自身の身の内から湧き出るかのように、まるで別の自分が問いかけるかのように、その疑問が浮き出てくる。

「お前は、大切な物の為ならば全てを捨ててしまえる。　お前自身が語ったエミヤシロウとかいうのと同じさ。

人は誰かの為に何でもできる訳ではない。　極論だが、人は自分にメリットがあるから行動するのだ。
もしくは立場上の義務なども含まれるか？　兎に角、押し付けられた救いを与えられた方は感謝するどころか困惑するだけだ。
何かあるのでは？と勘繰ってしまうものさ。
お前のやっている事は、甘っちょろい偽善と誇りの無い偽悪で自分すら騙している臆病者だ」

そうだ……俺は人を守りたかった訳じゃない。

「……そう、だな……俺は臆病者だ。　臆病者だったよ」

失ってしまう事が未だに忘れられないから……怖いから、恐ろしいから。
失いたくない人を守るという口触りのいい言葉で飾って差別していただけだ。
わかっていた。
そんな事は昔から。
何故なら、大切な人が居なくなってしまう悲しみが、一体どれ程のモノかを何度も体験しているから……。
未だに数回……憑依し、転生し、召喚をされ、この身が滅びるまで在り続けて得た最も大切な者達。

目の前で奪われる事への恐怖が脳裏に刻みつけられている。
焼きついて、焦げ付いて、こびり付いてしまっている。
失いたくないのなら……行く末を知っていて、力のある俺が守らなければならないと思い込んでいた。
例え、大切な物……その本人達に疎まれる結果になってしまったとしても、失ってしまうよりはずっと良いと。
結局は俺自身も身勝手な願いに溺れていたのだ。
ネギに説教をしたのも、俺自身の大切な物を巻き込みたくなかったから。
３－Ａのクラスを遠ざけようとしたのも、全ては自分が失う事の恐怖に突き動かされて行動させられていたに過ぎないのだ。
その結果、また何時かのように裏目に出てしまった。
今回はとびきりの最悪な形。
全てがご破算になったとは言わないが、自分の都合を優先して物語を歪め、悲劇を起こしてしまった。
自分の起こした事象が、自分の守っている筈だった娘を殺す原因となり、因果応報として戻る事になってしまった事は……確かに自分の所為なのだから。
ネギが直接的な加害者ならば、俺は間接的な加害者なのだ。
俺は目を逸らして、開き直って事を起こした。
ネギを殺す？

だったらまずは俺自身が死ななければならないだろう？

だが、今のままでそんな事をしてしまえば、メガロメセンブリアがいずれ暗殺者を仕向けてしまうかもしれない。
更にメガロメセンブリアを潰せたとして、完全なる世界が魔法世界をどんな形で救うのかを俺は確実にはまだ知らない。

幾つかの考察もしてはいるが、やはりまだ考察の域を出なのだ。
その情報を得るためにも完全なる世界に身を投じてみたが、まだ足りない。
後もう少しだけ足りないのだ。
それを抜きにして、俺は魔法世界を存続させる為の手段を用意し、そこへ至る為の計画も立てた。
一個人で世界を変えてしまうなど、狂っていると言われても仕方が無い。
掛け金は自分の身の破滅、報酬は守りたかった者の笑顔。
ハイリスクな賭け金と分の悪い賭け、そのくせ自分に得る物は……自分にプラスとなる事が少な過ぎる。
とても青臭くて、現実的、合理的に見れば明らかに下らない理想。
これを狂うを評さずして何というのだろう？
それは何時からだったのか……あるいは始めからこうだったのか……今ではもうわからない。
俺の今の状況を例えるのならば、化け物な下巻の物語で阿良々木少年が言っていた事が一番近い気がする。
『正義の道を歩みながらたった一つの判断ミスから果てない外道へと身を落とし、聞くも涙、語るも涙の艱難辛苦（かんなんしんく）を体験した末に闇の組織の幹部となり、言うに耐えず見るに耐えない悪行を繰り返していた最中に、かつて正義だった頃の同志が現れ、その同志から昔の名前を呼ばれたダークヒーローのように』
ダークヒーローなんて望まれたってやるつもりはないけれど、でも俺は既に悪役となった。
その道を選んだ。

「私を舐めるなよ？　何時、私を守ってくれと頼んだ？　私は少なくとも、お前を対等に見ていたのだぞ？
お前のやった事は二重の意味で私への裏切りだった。
結局、お前の目には……私は守るべき者としてしか映って居なか

った。　決めつけていたのだ。
私はそこまで落ちぶれたつもりはないぞ？　構えろ……人間に戻ったとはいえ、私は衰えた訳ではない。
そして、お前に思い知らせて目を覚まさせてやろう。　私はお前に守られる者でも……ましてやお前を守るつもりもない。
私がお前に望むのは対等である事だ。　お前が狂っているのなら私が受け止めてやる。
間違えたら何度でも私が正してやる。　罰して欲しいのならば、私がお前に罰を与え続けてやる。
その程度の障害、笑って乗り越えて見せよう。　お前の立てた計画も私が全て止めてやる。
私にお前を諦める、などという詰まらない結末はそもそも無いのだからな。
お前の意志など関係ない。　私がそうしたいからそうするのだ」
エヴァは恥ずかしがる事もなく、高らかに宣言する。
俺は既に自分のモノなのだと。

「……そうか。　それがエヴァのしたい事なら仕方ない。　俺にはそれを止められない。
止める権利もない。　でも、言ってくれてありがとう、エヴァ。
多分、自覚だけでもダメだし、他人に指摘されて、言葉にされなければ……エヴァに言われなければ、俺は目を逸らし続けていたと思う。
多分、俺は言ってもらえる事を待ち望みにしてた。
自分が守りたい者を最優先にして守るなんて、守ろうとした者達を無視して救いを押し付ける権利なんて何所にもなかったな。
“救わなければならない”んじゃなく、“力になる”で良かったんだ。
あまり変わっていないかもしれないけど、少なくとも俺はまず始

めに、見て、話して、訊くべきだったんだ。
思い込みでも、決めつけるでもなく、相手が何を見ていて、何を求めていて、何を訴えていたのかを……救われたいか否かをまず、問うべきだった」

俺は気持ちを一新させ、エヴァに向かうべく自然体に構える。

「でも……ソレとコレとは話が別だ。俺には成さないといけない事がある。
例え取るべき道が間違っていたとしても、俺は進まなくてはならない。
俺はもう、俺自身の意志では止まれない。
待ち受けている物が何の意味も、結果も残さないモノだとしても……俺はそれを実行し、成さなければならない」

俺は選択してしまった。
魔法世界の子供達を守る事を選んだ。
その為の行動も。
なら、俺はもう引く事は出来ない。
引き返せる筈が無い。
やる事は変わらないのだ。
エヴァの呪いを解き、超と接触し、これから先の未来を予測し、俺の計画を成す為の道筋を……。
全ては俺の子供達の未来の為に。
掌で踊り続ける哀れで愚かな魔法世界の住人に気付かせなくてはならない。
真相と、幻想と、無知と、愚かさを。

「フ……ああ、お前ならそう言うと思っていた。だが安心して良いぞ？

例え天国だろうが、地獄だろうが、世界の果てだろうが、何所までお前が私の手の届かない場所へと逃げてしまったとしても、なぁに何所までででも追い詰めて追い詰めて、逃げ場を全て叩き潰せばいい。

そうすれば、行き場を失ったお前は私のモノだ。　捕まえてやる。

決して逃がさない。

逃がしてなどやるものか。　これ程までに虚仮にされたのも生涯でお前が初めてだからな。

その身に私の全てを刻んでやろう。　私無しでは生きられない程にな！」

清々しいまでの独占欲。

「俺の所有権を許可した覚えは……無いんだけどなぁ……」

つい着ぐるみの後頭部を掻くような仕草をしてしまう。

「それに一つ、私の経験から良い事を教えてやろう」

「何だ？」

あまりにもあんまりなプロポーズ――――――というより、結婚を前提にしたかのような告白――――――を受け、あまりにも格好がつかな過ぎる自分に少し落ち込みながらも俺は訊く。

「人生には無数の選択肢がある、が正しい選択肢なんてモノは一つもない。

それを選んだ後に正しいモノへとソレを変えていくのだ。　そうは思わないか？」

「――」

すとん、とその言葉は俺の胸にあっさりと素直に落ちた。
だから俺は目を瞑り、ゆっくり溜息を吐いた。

不覚にも見惚れた。
俺には未だ脆い在り方とは対極の……その何所までも不遜で、揺るぎないエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルという在り方に。
約１３０年を過ごして今尚、未熟過ぎる己には眩し過ぎる、その誰よりも多くの経験で、あまりにも正論すぎる正論に憧れた。
そして、間違いなく俺は今、この時、エヴァに恋い焦がれ、惚れた。
蓮華の事は変わらず今も愛していた筈なのに、その瞬間だけ俺は間違いなく心奪われた。
可笑しな感覚だ。
笑いが込み上げてくる。
胸の鼓動が高鳴り、踊る。
手を伸ばしたくなる。
そんな事は無いと思っていたのにも拘らず、そのどうしようもないくらいその感情が沸き上がってしまう。
もし、新たに人を好きになるとしたら、こんな心境なのだろうか？
俺が優柔不断なのか、浮気性なのか……それはわからない。
でも、確かに俺はエヴァを求めていた。
多分、俺は今、恋をしているのだろう。

「あーあ……ホントに俺は何時も選択を誤るよ……情けないったらありゃしない。
エヴァ、お前は本当に良い女だな。　ホント、俺には勿体ないくらいだよ」

半ば自棄になりながら俺は言う。
その声は震えてしまっている。
そんな体(てい)たらくに呆れてしまう。

「だろう？」

そんな情けない俺の反応を見たからか、エヴァもクツクツと笑って鉄扇を構える。

『ｆｉｇｈｔ！』

朝倉の声が響き、俺達は駆ける。

なんて事は無い。
これから起こるのは、全力でのじゃれあいのようなものだ。
己の技量を最大まで引き出し合って行う武闘。
俺の咸卦法を用いた八つの奥義を組み合わせて放つ変幻自在の奥義は全て、エヴァの一世紀で習得した技も全て、お互い全力で放ち切った。
だがやはり、他の参加者とは一線を画する技の冴え。
研鑽の果てに至る最高の技の応酬。
サーヴァント同士の戦いに勝るとも劣るモノではないと思う。
制限時間を忘れるほどのお互いがお互いを高みへと引き上げ合うかのような……そんな感覚が俺を支配した。

その武闘の果てに――――――

エヴァは倒れ、俺を見上げる。
最後に八種の奥義を全て組み合わせた一撃を、エヴァは受け止めきれずに鉄扇は砕け、エヴァは地に伏した。
観客は歓声を上げ、朝倉は俺の勝利を宣言する。
そんな歓声を聞き流しながら、エヴァの次の言葉に動きが止まってしまう。

「愛してる」

此処に来て、エヴァは臆面もなく言い切った。

「ああ、前から知ってた……だから俺を止めてほしい」

だから俺は肯定をして、助けを求める。

自分ではもう止まれないから、なんとも他力本願な願いを。

「……良いだろう。　首を洗って待っておけ」

その時がきたら必ず、お前を――――――

殺(あい)してやる――――――

その笑みは、獰猛な癖にとても優しくて……あの時と同じセリフを言った。

もしかすれば、愛するの類義語は殺す事なのかもしれないと俺は思う。

別の人なら尊敬しあう事かもしれない、支え合う事かも知れない、

狂う事かもしれない、壊れるかもしれないし、溺れるかもしれない。
そんな風に俺は思った。
多分、エヴァの関係は相手を殺してでも自分のモノにしてしまいたいという、非常識なモノなのだろう。
だが、それも良いと思える俺も、余程の非常識な人間なのだと思った。

「待ってる……止まる事が出来たら――――――」

――――――今度は俺が告白しよう。

俺は最後に登校地獄の呪いを解除するペンダントをエヴァの首へと掛け、エヴァの頭を撫でる。
エヴァが手を伸ばして俺の手を取ろうとしたところで俺は手を引いた。

「む、少しくらい良いではないか」

倒れたままのエヴァが口を尖らせる。

「今、捕まったら色々と台無しにしてしまいそうだからな……頭を撫でるだけでお預けだ。
続きは夏休みまで待っててくれ、ネギに関わっていればいずれは俺に会える筈だから」

「そうか……待遠しいな」

「ああ、確かに待遠しい」

俺は言い残し、ステージを後にした。

エヴァ……俺を助けてくれ――――――俺はもう、自分じゃ止まれないから。

情けなくも、心中で言えなかった助けを求める。

第６５翼　決勝、助けを求める紫の麗人（後書き）

ちょっと物足りなかったかもと戦々恐々。
誤解は解かれても、状況的に朱然さんは止まれません。
止まったらメガロや完全なる世界が色々とやってしまいますので。

今回の話で１５０話分になります。
完結は一体いつになるんだろう……？
長いもので、大震災でうやむやになってましたが、何気に3月２５日で執筆が1年を越えてしまいました。
まさかこんなに書き続けるとは夢にも思わなかったです＾＾
リリなのやテイルズの世界に行きたいと言いましたが、普通に２００話とか超えて３００話とかいきそうで怖いｗ
長くなりましたが、気長に完結まで付き合って頂けると幸いです。

対義語↓類義語
に変更しました。

第６６翼　世界征服、勧誘する紫の麗人（前書き）

学校の準備やらで遅くなってしまったでござる。

第６６翼　世界征服、勧誘する紫の麗人

俺とエヴァの決勝戦が終わった後、表彰式が始められた。

『今回の麻帆良武闘祭優勝者であるパンダ師匠（仮）選手には、賞金一千万円が贈られまーす！』

表彰台の１と書かれた一番高い場所に乗ったまま、オーナーの超が持ってきた巨大な１０００万と書かれたボードを受け取った。

その際、超の手に小さく折り畳んだ手紙を握らせる。

「？　フッ……」

超は疑問を持ったように一瞬だけ眉を動かしたが、予想の範囲だったのか、その手紙を袖口へとさり気なくしまうようにして受け取り、不敵に笑って見せた。

そのまま超は、何食わぬ顔で2位のエヴァに握手をして、メール投票で3位になったネギに握手をした。

エヴァは誤解を解いたからか、俺の方を見ていない。

ネギはチラチラと視線を向けてくる。

その視線の意味は奇異？

記憶を消された事によって、俺とエヴァの関係を勘繰っているのか、それとも俺の正体に対する物か……或いは両方か。

俺はその視線を受け流しつつ、殺到してきた麻帆良新聞部や放送部の相手をする。

「優勝した今の心境を！」

「エヴァンジェリン選手と恋人というのは本当ですか?!」
「水を使った攻撃は一体どんな仕掛けなんですか!?」
「八百長試合だったのでは?!」
人、人、人。
正直、鬱陶しい。
優勝した心境?
アルとエヴァ以外はそれ程でもなかったので、別にこれと言って思った事ないし。
エヴァと俺は、“今は”恋人じゃない。
今はお友達以上、恋人未満といったところ。
でも恋人になるかどうか返事をはぐらかしてたが、それさえ返せばエヴァの事だ……その瞬間から色々すっ飛ばして夫婦になりそう。
それはそれでなんか怖い。
主に蓮華とか蓮華とか蓮華とか。
水を使った攻撃は魔法だが、言える訳ないだろ。
言ったら記憶消されるぞ?
でもマスコミにリークしたら今の麻帆良なら大混乱しそうだな…
…何かしてきたらリークするのも手か?
一般人から見れば八百長に見えなくはないな。
魔法や気を使ってる事自体がズルしてるもんだしさ。
と反射的に答えが浮かんだが、言わなくてもいいかと思い至り、一千万と書かれたボードを空間倉庫に仕舞い、頭が落ちないように両手で押さえたままペコリと一礼し、後ろへ大きく跳躍。
無言のままで超の居るオーナー控室へと向かった。

超は先程の服装――――――呉の文官の着ていたような長い裾と袖の衣装に、中華っぽい意匠を施した服――――――で出迎えてくれた。
寮で出迎えた時と今度は立場が逆転しているな、と俺は被り物の内で苦笑する。

「久しいネ、パンダサン？」

「それ程でもないだろ？　それよりも良く学園側の記憶修正を逃れたな超？」

超に促されるままに、俺は大きなソファーに座る。
安物っぽい造りの割に、スプリングが利いて座り心地が良いと思いながら被っていたパンダ師匠の頭を取って、空いている右側に置いた。

まずは探りを入れてみる。
俺が居なくなった後の事に何があったのかを知りたいからな。

「確かに一度、私は君の記憶を消されたヨ。　しかし、新しい学園のトップは中途半端な処置をしたからネ」

「それだけじゃない、だろ？　何で気付いた？」

察しはついているが、それは俺の考察でしかない。
ならばそれを確実にする為には確認をとる、というのは当然の流

れだろう。

「……茶々丸の記憶ドライブだヨ。　茶々丸の記憶のプロテクトの固さは世界一を自負してるネ。

それを見て記憶を消されてしまた事を知た私は、忘却術を解除して記憶を取り戻したと言う訳ダ。

記憶媒体の修正は麻帆良学園の電子精霊群によて修正されるが、その辺りが今回はズサンだたネ」

何せデータは消されていたとしても、独立した記憶媒体や現像した写真などに君の姿が残ているのが良い例ネ、と超は失笑する。

話を聞くだけならば、どうやら新しい学園長は無能とは言わないが、微妙な、というよりも凡庸な管理能力しか持っていないようだ。

「で、わざわざ私に周りくどい方法で接触した君は、一体何を頼みに来たのカナ？

君の言た、私の予定調和の失敗を覆してくれるのカ？」

さて、ここからが本番だ。

「そうかもしれない、と言ったら？」

「ほぅ、それは実に心強いが、一体どんな心変わりなのかな？」

「心変わりか……ぶっちゃけて言えば、ネギ・スプリングフィールドへの復讐だな。

超鈴音、茶々丸の記憶を見たのなら言わなくても理由を知っているだろう？」

我ながら卑怯だな……こういう言い方は。

「成程ネ。　英雄と言えども人の子カ」

「例え血は繋がらなくとも俺は親だった。　それは間違いない」

「しかし、足りないナ。
前に随分と好き勝手に言てくれたものだガ、あれは何だタ？　君の言ていた正義はそこまで軽いものだたのカ？
私は納得していなイ。　私を否定した君をわざわざ仲間に引き入れる必要はナイ。
さあ、君は……復讐の果てに何を見出し、残すのカ？」

射抜くような……それでいて試してくるかのような視線。

やはりそう来るか、でもそれは予想の範囲内だよ超。

俺は一度、大きく息を吸って吐きだしてから語り出す。

「賭けをしないか？」

試されている俺が、逆に超を試す。

「賭け？」

「そう、賭けだ。　俺は今回、君達を手伝わない。　勿論、誰の手伝いもしない。
それを誓おう。　そして、ネギ・スプリングフィールドが君を止めた時、君は俺の仲間になってくれないか？」

超の作戦を手伝うと言っておきながら、手伝わないと言う矛盾。

否、超ならば俺が手を出さない事が最大の手伝いになるだろう。
俺は願うし、肯定する。
娘を殺した復讐相手を信用している。
それくらい、俺はネギの資質を誰よりも信用しているし、世界の修正力をも信用しよう。
視界が狭かろうと、性格が歪んでいようと、スペックと成長速度でいけばネギは確かに紛れもない超一級品なのだ。
上手くやっている筈だった俺の予防線は最悪の形で、偶然が重なって裏切られた。
しかし、不幸中の幸いにして俺は、これから起こる事を知っているし、俺の存在が掻き消されてしまうくらいの世界の修正力が、確実とは言わないとはいえ俺を優位に立たせる。
超は逆に、俺からもたらされた情報を元に、更に入念に、丹念に事を運ぶだろう。
それを知り、予想する事が出来て、更に余程の予定外、予想外、想定外を反則とも言うべき個人戦力で以て、即応性のある対応を選択してくる可能性のある俺が、何の手出しもせずに静観する。
超は自信家だが、仲間が居るとはいえ、未来の技術をふんだんに盛り込み、それすら覆されるという事実を突き付けられ、当初よりも余剰に数と質を高めたそれが、超の自信を確立しているとも言えるだろう。
だからこそ、この賭けは成立する筈だ。
俺が明らかに圧倒的に不利で、超が圧倒的に有利なこの賭けをする意味が無いがしかし、超は俺という不確定要素を排除する為に受けざる負えない。
俺という不確定要素が排除されて、超の計画は確実に完成に近付ける。
逆に俺は、身を以て知ったこの世界の修正力の強さに縋り付くしかない。
一見、俺が不利と見せかけて、それを超が見抜く事も予想して、

それでも尚、俺の掌で踊ってもらうぞ！

「不可侵条約カ、それは確かに一応のメリットが有る。　だが、それで私が納得する程、馬鹿ではない事くらい知ているダロ英雄？
私が訊いているのは、私が納得できるお前の正義ダ」

超は失望したとでも言うかのように言う。

納得できる正義、ね。
そうだろうそうだろう。
お前はそれを訊かざるおえないよな超。
だがハッキリと言おう！

そんなもの……俺に――――――

「……俺に、正義なんてものは無い。　俺がしようとしている事は、正しい義とは程遠い所業の果てに在る。
俺はただ、自分の正しいと思う最善を尽くす。　俺の名の通りにな。
朱に染まる事を然りとし、義を封じて事を成すと。
すべてが選べないなら、全てを敵に回し身内を選ぶ選択をする。
超、前に君と会った時の俺にとって最善は、中立を保ちつつ自分のｂｅｔｔｅｒになりうる方を見極めて選び取り続ける事だった。
それを俺はしくじり、今は最も大切なものの為に最善を変える事こそが俺の正義に成った」

選ぶのではなく、造る。
選択肢が救いようのない物ばかりなら、新しい選択肢を造る。
全てを救えない？
だったら守りたいと思う全てを救う為の計画を、問題を、障害す

ら利用してそこへ至る状況を無理矢理に、強引に、他人を踏みつけ、嘲笑って、せせら笑ってでも作り出せばいいだけの事だろう？

「フム……面白い。　流石は英雄と言われるだけあるネ。　確かに選択肢が無いのなら、自分で造ってしまえばいい。

それは確かに困難であり、考え付かない癖に、物語では王道と言っていい選択ダ。

では最後に訊く。　私の選択が御先祖様に阻まれた場合の私の役割とは……君の成そうとしている事は一体何ダ？」

喰いついた！

コレを訊いたのなら後は簡単だ。

超と思想は違えど、目的地は違えども、目指す方向は同じなのだから。

俺は家族を救い、超は今後百年にも及ぶ世界間の戦争を防ぐ事が目的だ。

俺は最後の質問を笑って答える。

さぞ、傍から見れば今の俺は、それはもう誰よりもあくどい顔をしていると容易に想像できる。

今まで世界を救ってきた英雄が、地に墜ちてする事なんて決まってるじゃないか。

何でも無いように、すべては俺の家族の為に口を開く。

「ああ、なんて事は無い……全ての役者がそろったところで、良い所取りをするだけさ。

お前は旧世界の人間に魔法の事をバラす事で、世界のパワーバランスと意識を急激に改変しようとした。

俺は逆さ……いや、英雄なんてモノにされたからこそ、お前さんとは違って、この手を使う事が出来る。
信じるに足る証拠と合わせた英雄の話なら、信じても良いかな？と思わせられるからな。
本当になんて事はない。家族の為に全く意味の無い戦いを始めるだけの話で、俺の目的は凄まじく簡潔に言うのなら――――」

――――真正面から魔法世界に喧嘩を売って、真正面から返り討ちにして、お前の大好きな世界征服を仕掛けてやるんだよ。

「ハ、ハハハハハハハハ！　成程！　世界征服カ！　それは流石に予想外ネ！　英雄のセリフじゃないヨ！
しかし、可笑しいネ！　こんなに笑ったのは久しぶりダヨ！　わかった、君の提案を受けよう。
此方からも条件を出させてもらうヨ。　君は私と敵対して構わないイ。　どうやら私は世界にとって予定調和らしいからネ。
君個人が私の信じるに足る存在かを示してくレ。　学園祭最終日、私はネギ・スプリングフィールドと共に全力でキミを叩き潰そウ」

世界征服宣言をしたが、これは超だから選んだ言葉だ。
実際の所、独裁国家作るだのをするつもりも、何所ぞのラスボスのように世界の破滅を望んでいる訳でもない。

特殊な力はあっても、突出して頭が良い訳ではない俺は考えたんだ。

俺のできる範囲で、世界を変えられるようにするにはどうすればいいのかを……。

しかし、わざわざ俺を敵対させる意味は何だ……？

そもそも、敵対する筈のネギにタイムマシンを渡す時点で意味がわからないが、世界の修正力に期待するよりは此方の方がやりやすいか……良いだろう、過去の英雄の力がどれ程の物かを知らしめよう。

「望むところだ」

超と俺の視線は交錯する。

麻帆良学園の密かな一室で、墜ちた英雄は高らかに世界征服を宣言し、対面に座る未来からきた少女は腹の奥底から馬鹿笑いをした。

そうして別れた二人は一時、敵同士となる――――――

第６６翼　世界征服、勧誘する紫の麗人（後書き）

そもそも、タイムマシンを何故、超がネギに渡したのかが理解できない……なんて思いながら書いてみたり。
タイムマシンさえなければ、一度は超の作戦が成功したのは確定した筈なのに、何故だろう？
と、考えても埒が明かないのでそのままです。

朱然さんの野望は世界征服……のようなもの？と思って頂けると。
さてさて、次回はアルに会いに行く話ですかね～。

第67翼　イノチノシヘン、収集される紫の麗人

タカミチ乱入後、俺は図書館島へと向かっていた。
魔法使い達と闘いながら。

そう……超との会合後、アルの隠れ家へと向かっていたのだが、
ネットで俺の素顔がバレ、捕縛命令が下されたのだろう。

追手の数は3。
学園の建物の屋根を跳びながら、その3人も距離を詰めてくる。

瀬流彦、ヒゲグラ、刀子の三人だ。
瀬流彦は相変わらず、少しヨレたスーツ。
ヒゲグラ、刀子の二人は隙の無い新品のスーツを着ている。
三人の連携はそれなりと言った所。
ヒゲグラが牽制の無詠唱カマイタチを指パッチンしながら連射し、
刀子がその間に接近しての剣撃で決定打を打ち込む。
瀬流彦は攻撃よりも捕縛や防御の方が得意らしく、此方が牽制で
撃った魔法の水矢を防御してくる。

流石に連携が取れてる、動きにくいな……着替えるか。

最早、中身を知られた為、変装に意味は無いので着ぐるみの頭を
空間倉庫に入れ、動きにくい着ぐるみの腕のみを脱いで、空間倉庫
に手を突っ込み、適当に掴んだ服を引きづり出した。
堕天使エロメイド服だった。

む、ハズレた。

すぐに空間にメイド服をブチ込み、カマイタチをかわしつつ、もう一度手探りで服を引き出す。
マイクロビキニ水着だった。

いやいや、今はそんな愉快な物はいらん。

またしても空間にビキニ水着をブチ込み、飛んで来た斬空閃をかわしつつ、服を出す。
超ミニスカナース服だった。

なんでこんな時に限ってこんな……ッ！！

超ミニスカナース服を持ったまま、カマイタチと斬空閃を避け、俺は自分の運の無さに苛立った。

因みに俺の服は、割と無節操に買っては倉庫空間に突っ込んでいたので服関係の整理整頓されていない。
男物3割、女物7割、その内でイロモノ衣装が2割。
つまりは運悪く3連続でイロモノ衣装を引いているのである。
幸運ランクCという微妙さは伊達ではない。

「いい加減に止まりなさい！」

「断る！」

ギャグの様な事をしている内に、刀子に接近を許してしまった。

「その着ぐるみで思ったより動けていないようですね！　斬岩剣！」

刀子が大上段から、気を込めた岩をも砕く一撃を見舞う。

俺は距離を放そうとはせず、寧ろ刀子に突っ込んだ。

「な？！」

刀子の驚愕の声を聞きながらこの状況でもっとも効果のありそうな一手を見舞う！

「秘奥義、無音脱がし術……応用編――――――瞬間着せ替え術」

瞬間、空中で俺と刀子の影が交叉する――――――！！

そして……時が止まった。

「な、ななッ！！　破廉恥なッ！！　貴方はそれでも英雄なのですかッ！？」

「自分から英雄などと名乗った事は……ちょっとしかないが、英雄である以前に俺は人間だ！」

刀子は羞恥に身を震わせスカートを抑え、俺は刀子の問いに対して断言してみた。

普通の高校生とか、兵士とか、将軍とか、王様とか、従者とか、英雄とか、特別顧問とか、大学生とか、メイドさんとか、吸血鬼とか、精霊とか、獣人とか、院長とか、中学生とか上げればキリがないくらいには色々やったが、根本は人間だ。

ヒゲグラは顎に手を沿えて刀子を見ながらマイペースに言った。

「ふむ……まあ……似合ってるんじゃないか？」

瀬流彦は吹き出しながら言った。

「ぶはッ！？　色々と見えてはいけない物が見えて……ッ！！」

刀子は見事に超ミニスカナースへと転職していた。

その名の通り、超ミニスカなのはもちろんの事、大胆に胸元の部分をカットされ、普通に動くだけで下の下着が丸見えというトンデモ衣装。

ナースキャップもきちんと装備されている。

正にイメクラの様な有様だった。

その間に、俺はやっと普通の男物の私服を空間倉庫から見つけ、ジーパンとラフなシャツにさっさと着替えておく。

そして、何となくやられっぱなしなのは癪（しゃく）だと思ったので、そのまま反撃する事にした。

「それはプレゼントするよ。　一般人の新しい彼氏との夜のお楽しみに使ってあげればいいんじゃないか？

大体の男はそう言うのに弱いからさ、うん」

ヒゲグラと瀬流彦も、うんうんと頷いている。

「貴方達は一体どちらの味方ですか！！」

顔を真っ赤にした刀子は、両手で超ミニスカの前後を無理矢理に引っ張って下着が見えない様に頑張りながら叫んだ。

その所為で、引っ張られたミニスカは下へと伸びている一方、へそや、スカートを抑える右腕によって抑えつけられているブラの下

が見えているのは、ある意味で笑えた。

さて、確かこっちの方に……お、あったあった。

刀子がヒゲグラや瀬流彦の方を向いている間に逃走しようとも思ったが、そのまま図書館島まで付いてきそうだったので、此処でリタイアしてもらうべく次の策を決行する。

空間倉庫から、カメラを取り出すなんて鬼の様な酷い事はしない……最高画質で思い出が保管できます、を売りにしているビデオカメラを取り出し、録画を開始する事にした。

録画ボタンは確か赤いボタン……これだな。

……ポチッとな。

俺はＲＥＣの文字と最大まで充電されたバッテリー残量が表示されている液晶画面を覗き込んだ。

――――覗き込んだ液晶画面越しに視線が合った。

――――――何となくヒラヒラと手を振ってみた。

「なッ！？　と、撮るなぁぁぁぁ――――――ッ！！」

まさかのビデオカメラに刀子は一瞬だけ呆気にとられた後、羞恥

の赤から、永久録画されるという恐怖の青へと顔色を変え、襲い掛かってくる。
当然、超ミニスカなので動けばバッチリ見えるのだった。

お、パンチラってか、パンモロ？

刀を振り上げながら、ビデオカメラを破壊する為に駆けて接近してくる刀子の下着の色……即ち、それなりに装飾の付けられた上下の純白がこの瞬間、最高画質で録画された。
バーサーカーばりの迫力を出しながら襲い掛かる刀子を、ひょいひょいとコミカルに避けながら撮影をしていると、あまりの刀子の迫力に混ざるに混ざれなくなったヒゲグラと瀬流彦は、少し離れたところで待機している。

「お、落ち着いて下さい葛葉先生ー！」

「そうだぞー。流石にその衣装はどうかと思うが、似合ってはいるんだ気を落とすなよー」

その男二人は、離れた場所で両手をメガホンのようにして刀子へと言葉を投げかけた。

「これが落ち着いていられますかッ！！　これはあの人に無理矢理、着せ替えられただけで私の私物ではありません！！
それに、もう英雄などという事など知った事ではありませんッ！！　ビデオカメラを壊して捕縛と言わず、此処で葬りますッ！！」

明らかに殺すつもりで横薙ぎに振り切られた……しかし、冷静さを失った為に握りが甘くなった刀を、俺は柄尻を蹴って弾き飛ばした。

そのまま刀子の刀は、３０メートル先に在ったレンガ造りの壁へと突き刺さった。
俺は驚愕した刀子の首筋に一閃。
気絶した刀子をヒゲグラの方へと投げ、ヒゲグラが受け止めたのを尻目に俺は逃走した。

「という事があった」

やっと辿り着いたアルの隠れ家で、今までの経緯を話してみた。

「ほぅ……なかなか面白い事をしていますねスイセン……ですが、私の守備範囲外ですので。
やはり未成熟な……それでいて、これから花開く蕾の様な可憐さには何者も勝てませんよ」

やはりアルはロリコンの様だった。
紅き翼時代は割とノーマルだった筈なのに、一体何があったんだろう？
刀子はアレで美人なのに反応もしないとは……昔の仲間としては複雑な気分だ。

「で、収集はすぐやるのか？」

「ええ、２０年越しですし、来れ（アデアット）」

アルはイノチノシヘンを展開し、タイトルの無い無銘の本を一冊

掴み取った。

「確か、このタイトルの部分に本人が名前を書くと記憶が保管されるんだよな？」

「ええ」

俺はアルから無銘の本を受け取り、これまたアルから受け取った金細工をあしらった羽根ペンを受け取って、名前を書こうとして…

…手を止めた。

「どうしたのですスイセン？」

「いや……ちょっとな」

果たして、此処にはどの名前を書き入れるべきだろうか？

■■■■？

朱然義封？

水仙？

「そこには自分だと確信を持って書ける名を書けばいいのですよ」

「……なら――――――」

なら、俺の名は――――――

――――朱然。

これが今の俺だ。

名前を書き込んだ瞬間、無銘の本は朱然の命の記録を写し取った本となった。

アルは朱然という名の本を手に取り、パラパラとページを捲り始める。

「ふむ……普通とは違って、ページ数が尋常ではないですね……おや？　この黒いページは……？」

アルがその黒いページに気付き、そのページを捲ろうとした所を、アルの手を取って強引に止めた。

「スイセン？　どうしたのです？」

何故止めたのか？と理由のわかっていないアルは困惑した視線を向けてくる。

「その黒いページは3箇所あるが……そのページは絶対に開くな。発狂して死ぬかもしれない」

「発狂？　そういえば、貴方のアーティファクトで発狂した者達がいましたね……」

俺の尋常ではない雰囲気にアルはページを取っていた手を引き、昔の事を思い出すように目を瞑った。

「ちょっと貸してくれ、俺だけは見れる筈だからな」

「仕方ありませんね……」

アルは渋々と言った感じで本を手放した。

俺はページを捲るべく手をかける。

黒い黒いページを、あの仄暗(ほのぐら)い夜の海を漂うような根源のページを。

俺の手はゆっくりとページを捲った。

ギチリと――――――噛み合わせる様な音が頭に響いた気がした。

無、有、善、悪、正、負、男、女、昼、夜、陰、陽、光、闇、阿頼耶識、星、概念、意志、終焉、運命、歴史、神話、両義、八卦、太極、誕生、過去、現在、未来、魔法、魔術、陰陽術、錬金術、精霊、触覚、吸血鬼、死徒、真祖、幻想、絶望、希望、可能性、結末、英雄、怪物、神、時、空間、未知、岐路、停止、停滞、再生、逆行、対抗、最後、生、死、帰順、排除、排斥、移動、管理、放置、感覚、感触、視覚、聴覚、嗅覚、触覚、味覚、超能力、破滅、転生、行動、物語、全、一、亀裂、修復、破棄、収集、因果、逆転、禁断、禁忌、誘惑、固執、執着、始点、終点、個体、液体、気体、永遠、悠久、久遠、転機、幽霊、天使、悪魔、妖怪、程度、適当、敵、味方、中立、混沌、段階、結論、完成、反応、重力、要因、法則、物理、分解、溶解、構成、想像、脳髄、魔眼、妄想、偶像、架空、魔眼、守

護、加護、宝具、宝貝、紋章、強化、劣化、弱体、月、太陽、星、形態、咆哮、常世、現世、刹那、循環、融合、封印、解放、万物流転、森羅万象、属性、法則、崩壊、絶滅、相性、相克、循環、記憶、概念、兵器、術式、欠片、断片、真理、欲求、渇望、無関心、物理、記述、技術、奇跡、罰、罪、咎、大罪、責任、追及、予言、神託、聖痕、天国、地獄、世界樹、傷、偽、座――――――――――

「……セン？　……イセン！　……スイセン！！」

「……ッ！」

知識の本流に身を任せていたらしい。

書かれていたのは単純な文字や単語。

その文字を見ただけで、その単語を見ただけで、そこに込められた全てを叩き込まれる。

俺でなければ既に発狂し、脳髄は破裂していただろう。

理解は理解を深め、知識は知識を覆った。

単一である根源からもたらされた、その真理とも言うべきオーバーテクノロジーや今までの記録が雪崩のように押し寄せて来た事で、一秒が数十年の様にも感じられた。

それほどまでに濃密な知識の塊。

「やっぱりダメだ。　この黒いページは並みでない人間にさえ絶対に耐えられない」

俺は本を閉じた。

「ふむ……一体何が書かれているのです？」

アルが興味津津（きょうみしんしん）といった体で本を眺める。

「真理、アカシックレコード、森羅万象、この世全て、根源、その辺りの１パーセントにも満たないモノだな……それを雪崩のように一気に脳髄に叩き込まれる。

人間程度の容量なら、一瞬でパンクして死ぬ」

本をアルに返し、俺の記憶を教えた者達に教えて来た事を教える。

「それはそれは……つまりは貴方の本は目にすれば、世界最高峰の知識を得られる魔導書（グリモア）になったと？」

「そんな程度じゃない。　言ったろ？　アカシックレコード……過去、現在、未来の全てさえ記されてしまう予言書でもある。

自分で許可しておいて何だが、絶対に見たり見せたりはするな……死ぬぞ？」

「仕方ありませんね……貴方が収集させてくれなかった理由がハッキリしました。　戻れ（アベアット）」

アルは大人しくイノチノシヘンをカードへと戻した。

「さて、もう一つお前に訊きたい。　そろそろお前の受けた傷は完治するだろう？

それを上辺の理由に引き籠って監視していたアレは、この地に封印されたままなのか？」

「ええ、相変わらずです。　ゼクトの意志が残っていたのか……意

識を取り戻したのかは知りませんが、楔となっています。
世界の安定の為に」

ナギと造物主を倒した後、溶けるように消えてしまったゼクトは表向き行方不明となった。

その後、楔となった造物主は、内密に廃棄された旧オスティアに繋がるゲートを持った麻帆良へと移送され、世界樹の元へと封印、怪我のアルが養生と銘打って封印の管理者になることを志願する。

当時から学園長だった近右衛門も一枚噛み、麻帆良には日本最大の魔法使いの拠点という、事情を知らなければ余剰戦力だと取られかねない戦力を保有し、麻帆良を守護する事となってしまったのだ。

「引き抜かれた場合、どうなると思う？」

「恐らく、良くて魔法世界のみの現実座標へ移行……最悪、魔法世界と旧世界の座標がぶつかり崩壊しますね」

内容が物騒な癖に、アルはにこやかに言う。

「そして、またゼクトの意志は造物主として星の意志に呑み込まれ、活動を開始する、か……」

計画的には造物主は邪魔だ。

恐らく、計画の最中か終わった後に復活する可能性がある以上、俺が倒さねばならない。

アレは不死ではなく、不滅の化物なんだから。

恐らく、アレは俺の他には誰にも倒す事は出来ない。

造物主の正体を知っている事が第一条件、それを知って干渉する為の手段を持っているのが第二条件、その手段を実行できる状況を造り出すのが第三条件。

その条件が全て当てはまるのは、俺かナギくらいだろう。
もっとも、ナギの場合は極限状況下での底力だから、当てはまっていないのかもしれないが。

「俺の邪魔をするかアル？」

「いいえ、貴方の邪魔はしませんよ。　貴方が実行するのならば、それは成功の確率があると睨んでの事でしょう？」

「……」

わかってるじゃないか。
もっとも、綱渡りな部分が無い訳じゃない。
世界にとって俺は、わかりやすい敵とならなければならないし、フェイト達側からすれば、人間はなるべく殺さないようにしないといけない縛りが存在する。
計画が最終段階へと進んだ後は最終的に、良くてフェイトとネギ……最悪、完全なる世界と白き翼を同時に相手する事になるだろう。
もっとも、造物主（コード・オブ・ライフメイカー）の掟を手に入れた後を考えれば、最悪の場合でも十分に相手できるのだろうが。

「最悪、アル……お前も保険に入れさせてもらうぞ？」

「おや、光栄ですね。　して、一体何をすれば？」

「ガトウとクルトにも保険をかけておいたが、俺が暴走する危険がある以上、その為のケジメは必要だろう？」

後はラカン辺りにも保険をかけておいた方が良いかもしれない。

「……スイセン、死ぬ気ですか？」

俺は軽い雰囲気でサラッと話したはずなのに、アルはいつもの何を考えているのかわからない胡散臭い微笑を引っ込めて、真剣な眼差しを俺に向ける。

「死ぬ気はない、保険だって言ってるだろ？　俺が俺で無くなった時の保険だよ。

言うなれば、俺が起こすであろう戦いは未来をかけた大戦って奴で、全人類が当事者なんだ。

だから全員巻き込んじゃおうかなぁ～と……」

そこから俺は、アルに俺の計画を明かす。

話が進むにつれて、アルの眉間に皺が寄っていくが、ガトウとクルトも似たような表情だったので、気にせずに話を進めていった。

全てを放し終わって、しばらく間が空く。

１０分程、過ぎたあたりで、アルが口を開いた。

「ご自分の子供や、ネギ君やアスナさん達まで巻き込むのですか？

貴方は子供だけは巻き込まないと思っていたのですが？

はっきり言って、貴方の子供達ならいざ知らず、ネギ君達には些か力不足でしょう？

まさか、死地に放り込んで放置するつもりですか？」

「大人の思惑とエゴで子供達を真実から遠ざけてどうする？　子供達の為の未来だろう？

その程度乗り越えられないのなら、ネギに未来を生きる権利はない。　仮定で死ぬなら勝手に無念を抱えて死ねばいい。

最後の選択に辿りついたなら自分の死か、全人類の死かを……選択してもらうよ」

「どちらが正解なんです？」

アルは答えを問いかける。

「――――――――――だよ。　今のネギなら力不足だが、否が応でも登って来るだろうさ」

未来は流れる。

予定された場所へ。

俺はその問いに素直に答えた。

先程のアルの疑問も一緒に。

本当に意地の悪い選択だが、そのくらい答えられなければな？

「それは……本当に意地の悪い。　貴方も相当に捻くれた人ですね。貴方がそこまで言うのなら良いでしょう。

久しく……私も魔法世界へと赴きましょう」

アルは、了承してくれた。

俺の……我儘に。

「ありがとう、アル」

「いえいえ」

第６７翼　イノチノシヘン、収集される紫の麗人（後書き）

何となく何かを守っている様な感じはしていたんですけど、造物主とか…恐るべき超展開に身が竦みますですよ＾＾；
その辺りも修正しつつ書ければと思います。

第６８翼　防衛戦、困惑する紫の麗人（前書き）

ちょっと早めに書き終わったので投稿。

第６８翼　防衛戦、困惑する紫の麗人

「成程ね……未来が変わるというのは、今が今である事に変わらないとするモノなのか」

俺は世界樹の太い枝に乗りながら、眼下の光景を見ていた。

「「「「「敵を撃て（ヤクレートゥル）！！」」」」」

眼下の群衆の１グループが持った、やけに風変わりな銃……魔法古銃と杖から、小学校の運動会などで上がるような乾いた音が弾けた。

「まあ、こっちもアレだけ時間があれば色々と造れたからな……それに――――――」

空間から大樹とは違う、まるで竪琴（ハープ）と見紛う弓を取り出した。

その弓には今まで扱う事の出来なかった技術の一つが封入されている。

そのアドバンテージが大樹を使うよりも、この弓の方が今回は使い勝手が良い。

超の計画が機械化鬼神を所定ポイントへ移動、飛行船の術式で統括、発動させる。

それを知っている俺に対する対策がある筈だ。

「来た――――――！！」

俺の瞳に映る田中ロボ軍団と多脚戦車が次々と図書館島の対岸の浜から水を滴らせ進軍してくる。

予定よりも1時間早い超の襲撃に参加者達は頭が働かず、次々と脱げビームの餌食となっていく。

本来よりも参加者が少ないか……爺が死んだ所為で、魔法具が足りていないようだな……。

雑魚は一般人に露払いさせるつもりだったんだが、この調子だと世界樹の魔力溜まりで魔力回復が出来たとしてもガス欠は必至か。

やれやれ。

俺は懐から式紙を取り出し、愛衣と高音へと燕型式を飛ばしつつ、先程出したばかりの弓をしまう。

「さて、まずは普通に大樹で潰していくか」

機械化鬼神は先程のとっておきを使うとして、雑魚は大樹の方が幾分かやりやすい。

ゲームが始まってしばらく、様子を窺っていた俺の瞳には一般人達の手に余る戦力が押しつつあるのを映していた。

ふむ、そろそろヒーローユニットの登場か？

足元の世界樹広場に大量の田中ロボと多脚戦車が着地してきたところで、やはり明日菜と刹那が現れ、ロボ軍団を蹂躙し、跳躍して行ってしまった。

それを見送った俺は大樹から槍を生成し、弦を引き絞る。

大樹は俺の身の丈よりも若干小さいくらいの大弓なので、寧ろ槍くらいの方が遠くから見れば普通の弓のように見えるかもしれない。

その引き絞られた木製の槍に、雷が纏わり付き――――

「雷槍雨襲！」

――――雷が閃る！！

一般人に当たらないように魔眼で見極めつつ指を放したその雷槍は、一直線に湖岸のロボ軍団の上空へと到達した所で爆散し、雷雨となって降り注いだ。

『え、雷ッ？！　何所からの攻撃だ――――――？！　突如として雷がロボ軍団を直撃した――――――！！

ヒーローユニットか？！　えーっと、で、出ました！！　ヒーローユニットの一人！

麻帆良武闘祭優勝者、パンダ師匠（偽）選手の中の人だぁ――――――！！』

周囲に超の作ったらしいサーチャーっぽいものが旋回を始め、巨大スクリーンに残心をした、ちょっとクールな流し眼をしている俺が映し出された。

それを見た世界樹広場の参加者や観戦者達が下で指を指しているのが見えるが、それは瑣末な事と無視し、改めて弓を引いていく。

てか、中の人言うな朝倉。

『此処で援軍の到着だ――――――――！！』

む、やっとか、案外遅かったな。
先程、飛ばした式には愛衣と高音の二人に、俺の店の地下へ行く為のパスを添付した。
その地下には、俺が造った数々の魔法具が眠っている。
今回の学園祭に伴って、店中の魔法具や粗悪品の宝具や宝貝を回収したが、保険として対非生命型魔導駆動体特殊魔装具……言ってしまえば、ネギが学園長に用意させた物のみを残しておいたのだ。
増援の参加者達が次々と雪崩れ込み、ロボ軍団を追いこみ始めるが、本命の機械化鬼神が湖岸から現れ、大混乱に陥った。

目の当たりにすれば、確かにスクナより霊格や体格は劣っているが、鬼“神”なだけあって色々と厄介だ。
まあ、だからこそこれを造ったんだがな。

俺は大樹を仕舞い、竪琴のような弓を取り出し、何も装填せずに弦を引く。

「エグジグ　エグザグ　エグゼクト　契約により我に従え、深海の王　清冽（せいれつ）なる万里の滄溟（そうめい）　荘厳忘れし狂乱の波濤（はとう）！！
四方八方より呑み干せ濁流！！　逆巻く絶海！！　出力術式変更、形状・矢！」

何も装填していなかった筈の弓に、広範囲圧縮された単純な造形の水矢が装填された。

さて、初お目見えだ……存分に鳴らせ――――――！！

「悲恋琴弦（フェイルノート）！！」

円卓の騎士トリスタンが愛用していたという白銀の竪琴のような

弓。
無駄なしの弓などと呼ばれている宝具。
魔力を吸い、周囲に美しい音が鳴り――――――魔弾は跳んだ。
その魔弾は放たれた筈なのに、軌跡を描いていない。
何故なら、既に放った瞬間に目標へと着弾していたからだ。
飛んだ軌跡はなかった筈なのに、水の矢は確かにその軌跡の先へと到達した。
その証拠に湖岸から現れた中央の機械化鬼神の上半身が、矢にした魔法……逆巻く絶海の圧倒的な水量によって潰され、倒れていくのだから。
湖岸の参加者達が、その光景に呆然、唖然、歓声と様々な反応を示した。
射終わったこの白銀竪琴の弓を見る。
ふむ、効果も十分、問題なさそうだな……。
この弓の効果、それは空間跳躍ではない。
因果律の逆転でもない。
それは過去への時間跳躍。
遠方より盗み見たネギの持っていた時間航行器（カシオペア）を読み取り、その技術を手に入れ、以前から作っていた粗悪品宝具に組み込む事で完成させる事が出来た。
結果、魔弾は時間を遡り、決定さていた過去への的へと跳んだのだ。
決定された場所へと飛ばす事が出来るのならば、それは確かに必中となるのは必定。
なればこその無駄なしの弓（フェイルノート）。

しかし――――――

「ば、馬鹿な――――――ッ！！」

俺はそう言わざる負えなかった。
確かに当たった。
それは間違いない。

それなのに何故――――――命中した機械化鬼神は、何事もなかったかのように受けた傷も無く立ち上がっている！？

視線の先、湖面へと沈もうとしていた機械化鬼神は進軍を再会する。

悲恋琴弦（フェイルノート）は、時間逆行による過去への射撃と矢と認識し射出できるのならばDランクながら宝具化し、迎撃が難しくなる事。

つまり俺の広範囲圧殺魔法である逆巻く絶海の威力に、1ランクアップさせているような威力だった筈なのだ。

回避の為には、ある程度以上の幸運もしくは、それと同等の俊敏性と一定以上の回避能力があれば可能なのだが、元の矢が広範囲魔法なので避けるのは至難。

かわせないにしても撃ち出した魔弾が魔法である以上、本来の魔法の威力＋宝具化による底上げ分の防御能力を有する事が出来れば防御はできる。

しかし、今のは確かに直撃し、効果があったのを確認した。

“上半身は潰れた”という結果はもたらされた筈だったのに――

――

『やあ、私は火星ロボ軍団の首領、超鈴音ネ』

絶対の結果がはずれ、打ちのめされていると突如、虚空に巨大な立体映像が映し出された。

『もう少し時間が経ってから登場しようとも思たのだガ。思たより君達が善戦しているので、計画第二段階……ヒーローユニットの排除をさせてもらうヨ。対策していたとはいえ、特にパンダさんは油断ならない事がよくわかたからネ』

ニッと笑みを浮かべた超を見ていたところで――――

瞬間、首の後ろに氷の棘が刺されたかのような感覚を感じ――――

――

反射的に形振り構わず、世界樹の枝から身を捻り、飛来したソレを回避する事に成功してもんどりうって墜ちた。

防御ではなく形振り構わない回避というその判断は正しかった。

此方の必殺が覆された心理的な衝撃と超の映像に気を取られ、殺気を感じるのが少し遅れてしまったが、それをかわす事は出来た。

問答無用に相手を3時間後へと飛ばす強制時間跳躍弾（B・C・T・L）を。

高所から墜ちた俺は、猫の如くミンチになる前に四肢を気で強化し、四つん這いで着地した。

そこからライダーの構えように、髪が地面に落ちているのも構わずに顔のみを上げて、周囲を警戒しつつも立体映像の超を睨みつける。

『ム、かわされたカ。　そのタイミングで君を失格に出来ないならば、もう虚を突けはしないだろウ。

素直にパンダ君の失格は諦めるとシテ、我が巨大機動兵器はただの攻撃ではどんな攻撃も無かた事になル。

別に時間が巻戻ている訳ではない事は教えておくヨ。

目的地に到達する前に対応できなければ、君の――――――君達の敗北に一歩近づく事になル』

超はそう言って、自分の店のＣＭを挟んで消えた。

超の居場所を俺は知っているが、そこで対決している間に術を発動させられる訳にはいかない。

よって、まずは機械化鬼神の殲滅をしなくてはならないと考えた

訳だが、先程のアレは一体どうなっているのだろうか？
時間回帰のようなものではないと本人が否定しているのなら、未来の技術？
それとも特殊な術式を利用しているのだろうか？
それはいい、だがやってくれるな超、その挑発必ず後悔させてやる――――――！

目の前に田中軍団が跳躍してくる。
どうやら俺に狙撃が効かない事に対して、数による飽和攻撃による時間稼ぎに対応を切り変えたようだ。
即座に俺は悲恋琴弦（フェイルノート）を戻し、大牙で迎撃を始める。
柄から延びる鎖の先端を持ち、大剣である筈の大牙を投擲。
重力に従って墜ちてくる田中の腹部に突き刺さった所で、掴んでいた鎖を操って引き寄せ、そのまま身体ごと回転し、他の田中の方へと大牙の突き刺さった田中を投げ返す。

まず二体。

「危ない！！」

聞き覚えのある声が言い終わる前に、左右から襲い掛かってきた田中を、大牙を手放しつつ、新たに刃を展開した天翼を取り出し、振りかぶって左回転と共に二体の胴を切り裂いた。

四体。

更に正面よりもう一体の田中が現れるが、天翼は重量のある武器で、慣性に身を任せている物を止めて切る猶予はない。
俺はそのまま刃を振るい、刃を背中側になるように左脇に挟み込むようにして左腕一本で天翼の柄の先端を正面の田中へと向け、持

ち手に新たに埋め込んだ魔法石に魔力を流す。
　すると、柄の先端に空いた穴からプシュッ！という空気圧の排出音と共に、十センチほどの大きな針の弾丸を射出し、的確に田中の動力部分に到達する。

五体。

更に天翼を持っていない右手に大渦を顕わにし、トンファーのように手首の回転によって正面から背後へと杭の先端を向け、親指で引き金を引いた。

――――――轟音。

杭打ち機（パイルバンカー）となっている大渦から、杭が打ち出されて田中の胸に風穴を開ける。

六体。

すぐさま天翼と大渦を仕舞い、守殻を纏いつつ無境を左腕に取り出し、目の前の苦戦している参加者の方へと走る。
　目の前の参加者の魔法銃は強力な分、弾数制限を越えた為に魔力チャージの隙が致命的となり、隙を晒している。
　参加者を追い越し、無境の曲面的な造形を利用しいなす。

「え、ちょ？！」

　またしても聞いた事のある声。
　先程の助言をくれた声の主は、元クラスメイトの明石裕奈だった。
　それは一先ず置いておき、攻撃をいなされた田中を他の田中の方へと蹴り飛ばす。

すると蹴り飛ばされた田中は、２０メートル程真横に吹っ飛び、多脚戦車のカメラへとぶつかって視界を一瞬だけ塞ぐ。
その隙を逃さないように、左腕を右肩を抱くように振りかぶり、腕を振り抜いた。
まるでヨーヨーのように無境が回転しながら多脚戦車の下にあった砲台を潰す。
しかし、多脚戦車は器用に足を操りながら近づいてくる。

チッ！
これだから機械は面倒だ！

内心舌打ちしつつ禍津を取り出し瞬動。
多脚戦車の懐に潜り込み、前足に向かって、思い切り禍津を叩き込んで両の足を圧し折りつつ、禍津を手放し、頭上の多脚戦車の腹に気を込めた打ち上げるかのような蹴りを放った。
一人の人間が蹴ったなどとは思えない程に多脚戦車は宙へと身を晒したところで、無影を操り寸断。
多脚戦車を一瞬でジャンクの山に変えた。

八体。

「すぅ……ふぅ」

大きく息を吸い、呼吸を整えるべく大きく息を吐いた。

「あ、あの！　助けてくれてありがとう！」

背中越しに裕奈に礼を言われた。
俺は振り返り――――

「別に気にしなくていい、礼よりもロボ軍団を一体でも多く潰してくれ」

宝具を無効化された上に、あそこまで超に挑発された俺は機嫌が悪かったので、無愛想な表情とぶっきら棒な口調で答えてしまった。

「そ、そう？　わかった！　一体でも多く倒すぞ――――――！！」

銃を持った腕を振り上げ、周囲の参加者達はノリ良く声を上げる。

時は進む――――――

ネギは奔走を始め、電子の海で情報戦が始まり、ヒーローユニットをになっていた者達はあらかた退場を。

しかし、未だ朱然が鬼神を倒す方法は見出していない――――――

第６８翼　防衛戦、困惑する紫の麗人（後書き）

はてさて、新宝具のお披露目だったのに超の不思議技術の所為で台無しです。
宝具はう～ん、出すかださまいかと悩みましたが、悩むならやってしまえと思ったので出してみたり。
近い内にネギま！時点のステータス２でも書こうかな……。

第６９翼　契約、奥の手を出す紫の麗人（前書き）

み、短い……。

第６９翼　契約、奥の手を出す紫の麗人

「埒が明かないな……」

俺は雷の暴風クラスを矢に変化させ、悲恋琴弦（フェイルノート）によって機械化鬼神共の下半身を撃ち抜く事で時間稼ぎをしてはいるが、やはり効果は表れない。

いや、表れているが……無かった事になっている。

超の言う事を信じるのなら、機械化鬼神に施されているのは時間逆行などの時間操作系ではない。

瞬間回復か？

だがそれにしたって修復時間が早過ぎる。

瞬きの内に修復なんて、吸血鬼だって余程の高位じゃなければ難しい。

確かに吸血“鬼”も鬼の一種だし、鬼神が同様の力を持っている可能性も無くはないが、今回は機械化されている。

機械化部分さえ修復される理由はない。

だとすればただの修復ではない。

それはともかく、田中軍団が予想以上に鬱陶しい。

機械なので遠慮なく壊せるが、人間と違って多少は固いし、フェイントなんて入れたところであまり意味が無いので、今まで主に人間との戦いに慣れ過ぎた俺にはやりにくいったらない。

ゲームが始まって小一時間が経過しようとし、そろそろ日が完全に落ちる。

夜の眷族の本領を発揮できるだろうが、だからと言って異常な修復性能の原因がわからないのなら意味はない。

超本人を叩くか？

いや、此処で俺が手を引けば、防衛地点を占拠される。

それは本来でも証明されているのだから。
時間航行器（カシオペア）が無い以上、俺が超に手間取っている間に術が発動すれば、参加した自体の意味がなくなる。
もっとも、超の絶対回避については悲恋琴弦（フェイルノート）を使えば、決定された過去を射抜けるこの矢は回避は出来ない。
疑似時間停止の攻略はあるが、やはりそちらも手間取る。

「ヤバイよ！！　巨大ロボが止まらない！」

「ゲームバランス悪過ぎだろ！！」

「賞金出さない気か？！」

迫り来る機械化鬼神の迫力に押され、参加者達は次々と射撃系の攻撃を撃ち続けるが、やはりそちらも意味が無い。

「ゲッ？！」

「ヤバッ！？」

鬼神の口に魔力が集中しているのが見て取れる。
湖岸から現れた時に出したビームを撃つつもりだろう。
それと時を同じくして、一番湖岸に近かった場所の機械化鬼神が防衛地点目前まで迫っている。

どちらを狙う？
決まってる。
この展開なら俺の狙うべきは……ッ！！

エグジグ　エグザグ　エグゼクト　来れ雷精（ウェニアント・スピーリテュース）　風の精（フルグリエ・シルフィクス）！　雷を纏（ラティーニ）

いて吹きすさべ　南洋の嵐！　雷の暴風！！（フレット・テンペスタースアウストリーナ　ヨウィス・テンペスタース・フルグリエンス）
出力術式変更、形状・矢！

鬼神は踏み出す。
だが、止まらない。
止まる筈が無い。
だからこそ、そっちは俺が止める！

「悲恋琴弦（フェイルノート）！！」

――――――瞬間、二つの雷嵐が吹き荒れた。

轟音が二か所、全く同時に轟く。
そして、その攻撃はやはり同じ胴へと当たり、上半身と下半身が圧し折れた。

そう、目の前に迫っていた機械化鬼神は、やはりネギの雷の暴風によって砕かれた。
それと同時に、湖岸に近かった防衛地点へ向かっていた機械化鬼神も同じように砕かれ、倒れていた。
祐奈達にＣＧです！と力強く答え、空へとネギは飛び去ってしまう。
鬼神が復活した事も知らずに。

「む？」

この時、人型機械化鬼神達は少し違う挙動を見せた。
挙動というよりも行動か。

瞬時に直っていたのにも拘らず、今度は直りが若干遅い？
今の事象の要因は、同型機種への攻撃か、同じ箇所への攻撃、もしくは同じタイミングでの攻撃……もしくはその全てか？
なら――――――

「ざんがんけーん！！」

気の抜けたような声。
聞き覚えのある声。
それとは裏腹に鋭過ぎる程の剣筋。
それを俺に振り下してくるその声の主は――――――

「月詠か？！」

俺は一刀で繰り出された斬岩剣を蹴足……足刀で、月詠の刀を蹴り逸らす。
逸らされた斬岩剣は、レンガ造りの路面を砕き止まった。
振り落とした刀を構え直し、居直した月詠は此方を見る。

「どうも～、お久しぶりです朱然はん？」

お久しぶり、か……。

「久しぶり、という事は……」

「はい～、きちんと覚えてますよ～？」

月詠は異性がみれば、さぞ保護欲を掻き立てられるような柔らかな笑みを浮かべる。

実際は誘蛾灯とか食虫植物の類なのだが。

「邪魔するのか？」

「最初は超はんの立体映像の後ろで、助けて～朱然は～ん！って言おか迷ったんですよ～？」

俺はその光景を想像してみた。

「フッフッフ、パンダさんの大切な人を人質にとらせてもらたヨ？」

「な、何！？」

「きゃ～、朱然はん、た～す～け～て～」

縄で縛られた月詠が凄く楽しそうに助けを求めるところが容易に想像できた。

助ける気がとても薄れるというか何と言うか……溜息を吐く自分も想像できるな……。

「今取り込んでる、戦うんなら後で幾らでも戦ってやるからちょっ

と退いて――――

「退きまへんえ」

ハッキリとした拒絶。

……本当に今話している時間も惜しいんだが？」

俺は眉間に皺を寄せ、邪魔オーラを出しながら悲恋琴弦（フェイルノート）を月詠に向ける。

「神明流に飛び道具は効きませんえ？」

「そんな事は十どころか百も承知だ。　だが、そう簡単にこの矢をかわす事はできない事をその身で試してみるか？」

突如現れた美少女剣士とヒーローユニットである俺の睨み合いに場の時が止まる。

しかし、鬼神は止まらず、這って進む音が響く。

「「……」」

少しの沈黙。

「本当に退かないのか？　俺に出来る範囲で何でもしてやる……だから今は退け」

凄味を効かせて言ってみる。

すると月詠はニヤリと笑い。

「なら――――――してくれたら退きますえ？」

「は？　ちょっと待て、お前……わかってて言ってるのか？」

月詠の願い。

それは――――――

「はい～、その方が楽しそうなんで～」

「他ならぬお前が決めたんなら、俺は別に構わない。　非人道的だろうが、両者が同意しているのならそれは合法だ。

だがこっちも条件がある」

「何ですか～？」

「俺は殺人鬼は要らん、良いと時以外には絶対に殺すな、それが契約だ」

俺が契約を持ち出すと、月詠は俯いた。

そして――――――

「が」

「が？」

が、って何だ？

「が、我慢……プレイ、だと、思えば、何、とか……」

俺が掲示した約束に、月詠が自分のキャラを崩す程に真面目で、

語尾を伸ばさない真剣な口調で、絞り出すように言った。
因みに俺はコントのようにズッコケた。

月詠よ……キャラが今までにない程にブレまくってるぞ？
後、プレイ言うな。

「じゃあ契約は成立だな……じゃあさっさと退け、邪魔だ」

月詠の条件は、別にぞんざいに扱っても良いと言っているようなものなのだ。
まあ、それはまた今度で良いか。

「あぁん、いつもよりもぞんざいな扱い……そんな朱然はんもええわ～」

先程のキャラブレが嘘のように、元に戻って頬を染めた月詠は俺の前から退いた。
だが防衛地点に視線を巡らせて行くと、鬼神が後数歩で拠点に着いてしまう。

「そうこうしている内に……はぁ……仕方ない、少しズルをするか……」

夜だし、この魔力溜まりを利用すれば大概の事が出来そうだしな。

遥か上空ではネギと超が戦っている為に時たま光っているのが見える。
主役らしく派手に魔法を放っているのだろう。

こっちもこっちで終わらせようか。

一般人になら、少しくらい見せても構わないだろうが、使わないに越した事はない。
しかし、普通の魔法ではこの世界の長ったらしい呪文詠唱を唱えている内に拠点が制圧されてしまう。
だから使おう。

さあ、真なる力の一つを示せ――――――八卦八武装（せんてんはっけ）

次序ノ六担坎為水（水より流れ移るもの）、次序ノ八担坤為地（地より沈み立つもの）

天翼と無境が俺目前へと表れ、その形を崩す。

＞ｉ２９２７２―２４７７＜

その言葉と共に、麻帆良の地と水は全て我が手足と成った。

「土(水)は水を吸い、固(と)め、塞き止める城塞と成す(大地よ)――――――」

――――――伏義六十四卦方位図乃七(たいきょくずのなな)・地水師(ちすいし)

その図は正に――――――この世の理。

拠点と鬼神との間に巨大な壁が競り上がる。
それはまるで言葉の通りの城壁のように。
その尋常ならざる光景に、参加者達は呆然と立ち尽くす。
鬼神達はその岩壁を壊そうとするが、壊れない。
巨大な質量が質量を砕こうとする轟音が、六ヶ所から鳴り響く。
だが壊れない。
当然だ。
その石壁はただの魔法ではない。
この世の摂理から形作った物そのもの。
世界の端とほんの少しだけ繋がる事の出来る図。

俺が砕こうと思わない限り、俺を越える力を使わない限り、その壁を壊す事は絶対に出来ない。

八卦八武装（せんてんはっけ）を使っていて、この世界に来て、ようやく識った本当の使い方。

恋姫の世界で、太公望の太極図を見た時に無意識の内に取り込み、使い慣れた武器達に分割されていたモノ。

伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）も武器達の名前に惑わされて本来の順番に並んでいなかったが為に不完全な状態だった。

だからランクもＡ＋程度に下がっていた。

それでも十分過ぎる程の力をもたらしたが、ＥＸのあらゆる死の国の原典、生命の記憶の原初の乖離剣エアや何者にも侵害されぬ究極の一であり、魔法の域にある宝具の全て遠き理想郷（アヴァロン）に並ぶべくもない。

しかし、本来の姿……伏羲六十四卦方位図（たいきょくず）なら話は違う。

これはこの世の理、摂理、森羅万象を描いた図だ。

もし始めから理解（わか）っていたら、ギルガメッシュにも俺一人で対抗できたのだろう。

そもそもギルガメッシュも、その事を見抜いたからこそ、この宝具を欲したのかもしれない。

と、物思いは後だな。

「最後の一撃だ。　悲恋琴弦（フェイルノート）！！」

本来、単体にしか効果を発揮しない悲恋琴弦（フェイルノート）から撃ち出された逆巻く絶海の矢は天に向かって撃ち出された。

「射殺す百頭（ナインライブス）！！」

――――――六つに分かれて

鬼神は一体残らず同時に、頭上から落ちた魔法の水矢で、上半身が撃ち潰された。
鬼神達がゆっくりと倒れ、地に伏すと同時に鬼神を阻んでいた石壁も塵と消えた。

「さて、後は上の決着か――――」

俺は空を見上げる。
既に鬼神を排除された超にとって、計画は既に破綻しているが、それでも超は決着がつくまでネギと闘うだろう。
始めからそうであったように。
月詠は釈然としないが仲間になった。
仲間とは少し違うか……月詠は俺について行く事を選んだ。

一際巨大な爆発が上空から地上へと衝撃波となって身を叩く。

スクリーンに映る上空の戦いはやはり……面白味も無く、あるべき流れとなった。

ただ、それだけの事か。

第６９翼　契約、奥の手を出す紫の麗人（後書き）

太公望を出した事とギルガメッシュが八卦八武装を欲しがった伏線回収してみたり。
鬼神をサクッと倒してしまった……何故か話が膨らまなかったんだ……うぅ。
月詠が朱然さんに出した契約はまだ内緒ですかね～？
察しの良い方であれば何となく想像できそうではあるのですが。
朱然さんの本当の宝具？が出ました。
まだ恋姫編を書いていた時にボツにした物を再利用しました。
今回の使い方はショボかったですが、シングルアクションでこの世の理を限定的に操るものだと思ってください。

最後に……原作怖いよぅ。

８月１５日　挿絵を入れました

ネギま！時点の朱然ステータス表２

昼　夜
筋力　Ｄ＋　Ｂ＋
魔力　Ｃ＋　Ａ＋＋
耐久　Ｄ＋　Ｂ＋
俊敏　Ｄ＋　Ｂ＋
幸運　Ｃ　Ｃ

※宝具はＦａｔｅの世界特有の物として表記しません。
※ステータスの＋はＦａｔｅ／ＥＸＴＲＡの表記と同じ中間だとお考えください。
※＋＋はＡ＋以上、ＥＸ以下

保有スキル

流見の魔眼：Ａ＋
あらゆる流れを見れる魔眼。

変化：Ｃ～Ａ
望まずして身につけられてしまった技能。
このスキル発動時は別人の身体と言っても良い為、魔眼を使えない。

体質改造：Ａ
この世界で望まずに身につけられてしまった技能その２。

矢除けの加護：Ｂ

千里眼：C

心眼（真）：B

気：A

筋力、耐久、俊敏に＋が一つ付く……つまり0．5ランク上がる。

魔法：A

この世界で最高峰の魔法が使える。

仙人：C

尸解仙という、仙人では最低ランクであるが故にCランク。
それでも不老不死ではあるが、殺されれば死ぬ。
肉、魚よりも野菜の方が美味しく感じられるという味覚改造の特典付き。

吸血鬼：C～A＋

昼は封印の為C、夜の状態でA、封印解除＆夜でA＋
ランクによって肉体修復速度に差があり、封印解除すると強い吸血衝動が生じる。
封印状態の場合、筋力、耐久、俊敏が2ランクダウン、魔力が3ランクダウン。
夜で魔力のみ1．5ランクダウン。

武具・宝具・道具作成＆改造：A

保有宝具

八卦八武装（せんてんはっけ）

ランク：Ｃ＋
種別：対人、対軍
レンジ：１～４０
最大補足：５０

朱然愛用の大剣、鎌、杭打ち機、弓、双鞭、盾、手脚甲、鋼糸という八種で一括りの宝具。
それぞれに乾・兌・離・震・巽・坎・艮・坤という八卦を構成する卦が宿っている。
個々のランクは発揮するには弱くＣランク相当だが、組み合わせて使えば効果を増強できる事からＣ＋

伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）
ランク：Ａ＋
種別：対城
レンジ：１～５０
最大補足４００

上記の八卦八武装（せんてんはっけ）を一つにまとめた形態で剣とは言っても、形態が八種あり、最後の文字が剣、鎌、槍、弓、鞭、盾、拳、糸に変わるが、読みは統一して「ふっきのたいけん」
この宝具で繰り出されるモノは物理的であり、魔術的であり、概念的でもあるが、飽くまで世界の理の内のモノである。
この宝具には善悪両方の属性が存在し、通常の場合はそのまま伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）、朱然が暴走し禍々しくなった方に仮に名前を付けるのであれば、文王八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）となるだろう。
因みに伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）は本来不完全なモノ。

補足――――――

剣から放出された白と黒の螺旋は、内包されている概念を増幅…
…正確には不完全なこの世の理を構成し放出、それを叩きつけている。
　拳での空間破砕や盾の反転防御、槍の魔力収束などは、上記の放出したこの世の理を別の形に歪め、都合良く行使しているに過ぎない。

伏羲六十四卦方位図（たいきょくず）
ランク：－～ＥＸ
種別：対種別
レンジ：１～９９
最大補足：１～１０００

八卦八武装（せんてんはっけ）、伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）の本来の姿……というより寧ろ、此方がオリジナル。
八に別れている八卦を一に束ねる事で、限定的にシングルアクションで世界の理、森羅万象を手足のように行使する事が出来る。
「易有太極（易に太極あり）、是生両義（これ両儀を生じ）、両義生四象（両儀は四象を生じ）、四象生八卦（四象は八卦を生ず）、八卦生六十四卦（八卦は六十四卦を生じ）、六十四卦至三百八十四爻（六十四卦は三百八十四爻へ至る）」
また逆も然りで、これを辿って一と成せば太極……即ち根源へと至る。
単純に言えば、宇宙の万物生成過程を示した図。
最大は六十四卦ではなく、更に細分化し、無限に広がり続けるモノ。
その効果は使用者の意のままであり、世界の修正力に大きく働きかける事象程、多くの魔力を消費する。

補足――――――

あらゆる死の国の原典、生命の記憶の原初の乖離剣エアとはある意味、兄弟のような宝具で、本来の持ち主ではない朱然がこれを使えるのは魔眼があるからこそ。

なのでギルガメッシュは魔眼も一緒に欲した。

乖離剣エアとぶつかった場合、世界を切り裂いた剣と世界の理がぶつかる事となり、相性的に相殺される。

そして、何者にも侵害されぬ究極の一であり、魔法の域にある宝具の全て遠き理想郷（アヴァロン）とぶつかった場合。

上手く運用が出来れば、何者も侵害できない遮断をどうにかできるかもしれない可能性を秘めている。

射殺す百頭（ナインライブズ）
ランク：-～Ａ＋＋
種別：対種別
レンジ：1～９９
最大補足：1～９９９

英霊ヘラクレスが最も信頼し、直接譲渡され習得した宝具。
状況・対象によってカタチを変える万能宝具。
その為どんな武器でも使用できるという利点がある。
つまり多数の武具、攻撃手段を使う朱然にはかなり相性の良い反則宝具と成り得る。

名を斬る刀の刃（なまえきり）
ランク：-～Ａ＋＋

種別：対人、対軍
レンジ：１～４０
最大補足：１～９９９

柄も鍔も特に変わりは無く、目を引くのは柄巻きが紫という所と刀身が無いという所だけ。
その効果は限定対象に対する絶対的な斬撃といういたってシンプルな物。
刃が無いので、対象以外を斬る事は不可能である。

この刀は日本の有名な話を参考に創られている。
鬼切、童子切、雷切、髭切、友切、姫切、蛇切、蜘蛛切、岩切、膝切等の“〇〇を斬った”という事で付けられたり、曰くつきの別称として付けられた名前が元である。

更に詳しく効果を説明すると、この刀はその決定された特定因子を持つ対象を斬る、というこの一点に主眼を置いて鍛えられ、対象の名を持つモノに対して絶対的有利な武器を目指し、制作されている。
雷という名で斬るのであれば雷を斬り、全てと限定すればそれこそ全てを斬る事は出来るが、指定した名の該当数が効果範囲に多ければ多い程、その分だけ効果が分散され威力が下がり、尚且つ指定した名のモノ以外にも他の要素が混じっているなら指定した名のモノしか効果を発揮しない。
つまり指定外の分だけ切れない要素が混じり効果が阻害され効果が下がる、といった具合の効果がある。
が、威力を重視するのであれば、そのものに対して唯一にして、モノの本質を現わす最たるものの“名前”で斬れば良いのである。
唯、弱点として「」や正体不明のモノに対しては切れもしないという、ある意味、使いどころを見極めなくてはならないと言う事

でもある。
聖杯戦争であったなら、まさしく真名を知る事が勝利を得るに等しい真名殺しの宝具となっただろう。

補足――――

名前があるのであれば神殺しにもなりうるが、神と言う言葉自体が、人間の定義した物である為、殺すには至れないと思われる。
逆に言えば、名のある神は殺せる可能性があるという事でもある。

大神宣言（グングニル）
ランク：Ｂ＋
種別：対人
レンジ：１～９９
最大補足１

軍神オーディンが所有していたという神聖かつ、荘厳な聖槍。
全体が透き通るような蒼で穂先には同じ様に透き通った蒼の八面体の斬る形状ではなく、突くのみの形状。
その穂先は今にも砕けそうな位に微細な罅が入っており、その罅の隙間からは純白が覗いている。
その効果は指示した対象への完全必中とその過程の妨害不可。
必中という名の通り、対象へ何所までも飛んで行き、確実に指定場所に突き刺さる。

補足――――

刺し穿つ死棘の槍（ゲイ・ボルク）は因果逆転という時間逆行的な物を利用するが、

大神宣言（グングニル）はもう一つの能力である、刺さる過程の妨害を文字通りすり抜け必中する。
ただし、突き穿つ死翔の槍（ゲイ・ボルク）との打ち合いになれば相打ちで勝つ事はできない。
斬り抉る戦神の剣（フラガラック）との打ち合いならば完全に負けとなる。
防御法としては、妨害が不可能であるが着弾すれば防御が可能になる為、間に装備した盾か鎧がある場合は阻まれる可能性がある。
つまり普通の防具等であれば貫通は必至だが、防御系宝具自体のランク如何によっては防御できる可能性がある。
例を挙げるならば熾天覆う七つの円環程の物（ロー・アイアス）になればほぼ防御可能である。

秘神宣言（グングニル）
ランク：Ｂ＋
種別：対人
レンジ：１
最大補足１

大神宣言（グングニル）のもう一つの効果。
穂先が罅割れ、今にも砕けてしまいそうなのは、膨大な効果を持つ１８のルーンが内包されている事に起因する。
その膨大な効果を再度の真名解放によって発動させる事が可能。
あくまで真名解放で発動できるのは、膨大な効果のほんの一部でしかない。

悲恋琴弦（フェイルノート）
ランク：Ｂ＋

種別：対人
レンジ：1～50
最大補足1

円卓の騎士トリスタンが愛用したという白銀の竪琴のような弓。
その効果は時間逆行による過去への射撃と矢と認識し射出できるのならばDランクながら宝具化し、迎撃が難しくなる事。
ただし効果は対個人用の為、対象を変えた瞬間に射出された攻撃は全てキャンセルされる。
因みに特殊効果はないが竪琴のように演奏も可能。

補足――――――

時間逆行による時間差射撃、同時射撃が可能。
性能は切り抉る戦神の剣（フラガラック）と似ているが、カウンターでなくても効果が発動されるが、切り抉る戦神の剣（フラガラック）よりも必中性はどちらかと言えば低い。
というのも時間逆行という決定された運命（かこ）への射撃の為、避けるには標的にされた過去の時点である程度以上の幸運か、それと同等の俊敏性、つまりはある程度以上の能力があれば回避は可能。
しかし、そのある程度の最低限が武芸の達人の域に達していなければ、回避する事は事実上不可能に近い。
また正確に心臓をピンポイントで抉る事もできるが、使用者の意志で決めた部位に射出する事も可能。
因みに朱然は魔法を矢として射出した為、上記に加えて魔法のランク＋宝具化に伴う1ランク上昇分の威力を相殺できる魔術的な障壁を用意できれば、命中しても防ぐ事ができる。

ネギま！時点の朱然ステータス表２（後書き）

そろそろ自重した方が良いですかね？

第７０翼　激情と羞恥と計画と、策を巡らせる紫の麗人（前書き）

あー、眠……チグハグ書いてそうで戦々恐々。

第７０翼　激情と羞恥と計画と、策を巡らせる紫の麗人

上を見上げれば、二人の人間が空気を裂きつつ落ちているのがわかる。
このまま放置すれば二人は地面へと叩きつけられ、物言わぬ肉塊に変わるだろう。
それを地上から見上げるのは俺と隣の月詠。
その他大勢は、空中に設置されている巨大スクリーンに視線がいっている。

「どうします～朱然はん？」

「賭けには勝った筈だからな……超だけ助ける」

「ネギはんは助けないんですか～？」

「助ける義理が無い」

此処で死ぬならさっさ死ねばいいんだ。
過去も思い出さずに、な……。

俺はそう思いつつ、月詠を置き去りにして単身、空中へと身を飛ばす。
途中で空を飛んでいた路面電車屋台を追い抜き、俺は超だけをお姫様抱っこで受け止め、ネギはその下に来た屋台の明日菜達に受け止められた。

ふむ、外傷は見た目ほど酷くはないな。
回復させておくか……。

俺は治癒魔法を使い、治癒の優しい光を宿した指をアルが古菲の骨折を治したように、空中を走らせて超の傷を回復させて行く。

「ちょ、超さんは!?」

「上にいるです!」

「アレはヒーローユニットのパンダさん?!」

元クラスメイト達は俺に気付き、声を挙げた。

「う……」

「起きたか超」

それと同時に超が目を覚まし、同じくネギも目を覚ましたようだ。

「負けてしまたネ……ネギ坊主にも負け、貴方にも負け……一体、何の為にこの時代に来たんだろうナ……」

超は空を見上げ、一筋の涙を流し言う。

「……」

俺は超に何も言わない。

言える筈が無い。

だって、慰めを超が望んでいるとは到底思えなかったからな。

「慰めてくれないのカ？」
「慰めてほしかったのか？」
俺は当然のように超の質問に答え、超は少し考え――――――
「……やっぱり何も言わなくて正解ネ」
涙を手の甲で拭いつつ寂しげに微笑んだ。
まったく、強情な奴だ……。
「おーい！　何時までもそこに居ないでこっちに来たら――――――？！」
明日菜が此方に声をかけてくるが、俺はそれに答えない。
ネギは明日菜の声に反応し、俺と超に気付き、傷ついた四肢に力を込めて立ち上がろうとしたがふらつき、木乃香に支えられて何とか立つ。
「朱然さん……僕は……思い出しました」
「……」
そうか……思い出したか。
というより、超がネギに揺さぶりをかけるのに思い出させたのか？
俺は超に視線を向ける。
「すまんネ」

やれやれ……勝手に思い出させるとは、後で色々と小言を言わせてもらわねばならないな。

「僕を……許して下さい……幾らでも謝ります。　幾らでも償います。　だから――――」

……そんな程度で許す筈ないだろうが。

沸々と、心に小波が生まれた。

「ネ、ネギ？　一体何を言ってんのよ？」

「そやよネギ君、一体どうしたん？」

「え？　え？　一体何がどーなってんの？」

ネギのいきなりの謝罪に、クラスメイト達が戸惑う。

俺はその戸惑いを敢えて無視しつつ、話を進める。

「……前にも言ったが、お前が俺の娘を殺した事実は消えない。

幾ら謝られようが、俺はお前を簡単に許す気はない。

お前が代わりに死んだとしても俺はお前を許さないし、死なずに自ら苦行の道を進もうとも許しはしない」

ささやかな小波が広げる心の乱れは、徐々に大きな波へと変わっていく。

「なら！　どうすれば僕を許してくれるんですか！？　教えてください！　僕は！！」

「だから……許す気なんて毛頭ないと――――――」

……ッ！

コイツ……何でもする、教えてくれ、許してくれと……自分で考える事を放棄してやがる……ッ！！

「そ、そうだ！　僕達が世界樹の魔力を使って過去へ戻ったみたいにカシオペアを使えば救え――――――ガッ！！」

「きゃあッ？！」

……ッ！！」

俺は見えざる早き拳圧をネギへと撃っていた。

が、超をお姫様抱っこしていた為に威力が乗らず、木乃香が弾き飛ばされ、ネギが倒れ込む程度に収まってしまい、その余波で時間航行器が完全に壊れて地上に落ちていく。

ふざけるな……ッ！！

「お前がそれを言うのかッ！！？　もう一度、娘の死を目の当たりにしろと言うのかッ、お前は……ッ！！」

慟哭。

その場に居た物達は皆、俺の慟哭に、憎悪に恐れ、身を竦ませる。

死は……誰にも平等に1度だけ与えられるモノだ……俺のような馬鹿げた存在でなければ、それを何度も繰り返す物でもない！

なのにそれをッ、お前は死の恐怖をもう一度ッ！！

ルクレツィアに受けさせろというのか……ッ！？

「朱然！　ダメネ！」

今にも路面電車屋台ごとネギを落とし掛けてしまう程に身を乗り出し掛け、己の胸にしがみ付いている超の声で、辛うじて思考を留める事が出来た。

「……すまん、熱くなり過ぎた」

……ダメだ、感情のままに流されるな……エヴァに教えられた事を無にするな。

「……」

頭を冷やしている内に、遠くで見ていたらしい生き残ったヒーローユニット達が現れる。

「う、動かないでください！！」

「何故です……何故貴方が反逆など……！！」

「さっさとお縄につきや！！」

生き残っていたヒーローユニット達が俺と超を取り囲んだ。

俺はそれぞれを一瞥し――――――

「何も知らされない哀れな者達に、弱いくせにやたら吠える犬か……悪いが捕まる気これっぽっちもない。

退け……さもなければ近づいた者から叩き墜とす」

先程の烈火の如く猛った態度とはうって変わって静かに、冷たく言い放つ。

それだけで場の空気を支配する。

そうだ。

熱くなるな。

お前にはまだやるべき事がある筈だ。

「ざけんなやッ！！」

小太郎は俺に向かって飛びかかってきた。

俺は冷静に、小太郎を視界に収め――――――

「失せろ身の程知らずの小僧がァァァァ――――――ッ！！」

先程、自分が放った怒声が霞む程の音量に加えて、言霊をのせて小太郎に叩きつける。

「……な……ぁ？」

ふらりと、小太郎は気を失い墜ちていく。

それを愛衣が急いで追い掛けて、オソウジダイスキに上手く引っかけて助ける事に成功する。

「い、今のは一体……？」

瀬流彦が両耳を塞いだままで呟く。

両耳を塞いだのは瀬流彦だけでなく、その場に居る俺以外の全員

に言える事だった。

今のは言霊を乗せた一喝と共に、気当たりを組み合わせたモノだ。

小太郎程度が至近距離で受ければ、それだけで意識の混濁を招くぐらいの真似は出来る。

つまりは不殺技だ。

「同じようになりたくなければ、追ってこない事をオススメするよ。それと麻帆良学園中等部３－Ａ在籍の超と月詠は本人合意の下に麻帆良学園から連れ出させてもらう」

「待ってください！！　僕は貴方に何をすれば――――――」

「さっきのは大人げなかった……素直に詫びよう。　が、くどいな？　ネギ・スプリングフィールド。

お前は何時から思考停止する人形になった？　少しは自分で思考をしろ。

俺は選んだぞ……お前達、正義の魔法使いの敵、完全なる世界（コズモエンテレケイア）の一員としてな？」

もっとも、途中で離反させてもらうがね。

今の発言に対し、過去の大戦を知る者達は息を呑み、魔法を知らない者達はただ事の成り行きを見守るだけだった。

俺はそんな連中を無視したまま世界樹広場の月詠と合流、そのまま麻帆良学園を後にしようとした。

「私に挨拶もなしか？」

だが、月詠の横にエヴァが待っていた。

「いや、きちんと挨拶はしていくつもりだったよ。　それと、エヴァにはやってもらいたい事があってね」

「む？　何だ？」

エヴァンジェリンがとても不満げに、眉間に皺を寄せて嫌々訊く。

「俺が多少は手伝って、器としては完成間近のネギを鍛えておいてくれないか？」

「……理由を訊こうか？
碌でもない理由だったらこの場で氷漬けにした後、転移魔法で人里離れた場所に安置して、たっぷり１００年程封印してから解凍するぞ？」

１００年後って、第一次火星地球間大戦が始まるだろうに……。

「俺はこれから魔法世界で色々と準備をしなくちゃならない。
で、エヴァにはなるべく俺の知る本来のネギに近付けられるようにしてほしい」

「器としてはほぼ完成しているだろ。　私が付いて行っても問題はない筈だ。　何よりガキ共のお守はゴメンだ」

「俺だってエヴァにそんな事は頼みたくないし、幾つか保険をかけておくつもりだが、何かとエヴァがネギ達についていた方がやりやすいんだよ。
ネギが魔法世界に来ないって言っているなら、エヴァは俺のところに来ても良いんだけど……」

絶対に来るんだろうなぁ……魔法世界……何せこの世界の修正力は半端ないからな……。

「むぅ……」

あー……凄いご機嫌斜めだなぁ、エヴァ。

「考えてもみろ、エヴァの言う１００後はほぼ間違いなく戦争で一緒に暮らすとか言う次元の話じゃなくなる。
でも俺の計画が上手くいけば、早ければ半年以内に旧世界で一緒に暮らせると思うぞ？」

孤児院を再建したりしたいから、やっぱりそのくらいは時間が欲しい。
一緒に暮らせるように準備が整う頃には孤児院は一番上の子供達が引き継いでくれるだろうけど、やっぱり時たま顔を出すくらいはしたい。

「な？」

エヴァに言い聞かせるように優しく言う。

「……わかった。じゃあ最後にキスをしろ」

エヴァは渋々了承したと思ったら、とんでもない事を言って目を瞑った。

「え、あ、いや……此処でか？」

俺は流石に戸惑った。
此処は世界樹広場なのだ。
しかも先程まで防衛しなければならない場所。
ゲームが終わったとはいえ、人がかなりごった返している。
そんなに人がいるところでのキス――――――ぶっちゃけイチャラブするのは……流石に恥ずかしい。

「んッ！！」

俺が羞恥の念に苛まれていると、エヴァはさっさとしろとばかりに強く声を出してキスを促す。

よ、よし、エヴァには色々と迷惑もかけたし、男らしくやってやろうじゃ――――――

俺はようやく決心し、エヴァにキスをしようと動き出したところで――――――

「いい加減にしたらどうですか～？」

「女を待たせるのは男として如何なものかネ？」

「痛ッ！？」

今まで空気だった月詠と超が、鏡写しのように回し蹴りを俺の背中に叩き込み、俺はつんのめってエヴァの唇に唇を重ねた。

ベタな展開みたいに歯と歯がぶつからなかった事はちょっとだけ褒めてくれても良いだろ？

麻帆良を転移魔法で移動し、所変わって羽田空港ロビー。
俺達は三人分のキャンセルされたアフリカ方面のチケットを手に入れ、飛行機が来るまで空港内を歩き回っていた。

「どの魔法世界行きのゲートを通るネ朱然？」

右隣を歩く超は旅行者風の格好で俺の横を歩きながら訊いてくる。

「アフリカのセネガンビアだ」

「ふむ、その場所にあるゲートは確か……グラニクスだたカ？」

「ああ、そうだ。　ちょっとラカンに保険をかけに会いに行く」

「朱然はん、保険ってなんですか～？」

俺の左腕に腕をからめている月詠が話に割り込んでくる。

「俺が失敗した時の保険だ。　詳しくはもう少しした後に話すからちょっと大人しくしてろ月詠」

「えぇ～、ウチももっとお話したいです～」

月詠が不満げな表情を浮かべながら組んでいる腕をギリギリと締め上げてくる。

「……月詠」

「なんですか～？」

「ロリポップをあげよう」

俺は空間倉庫から子供達によくあげていたロリポップ……つまりはベロベロキャンディを取り出して月詠の左手に持たせた。

「わぁ～い？　はむはむ」

月詠は子供のように、はしゃぎながら咥えたキャンディを舐めるのに労力を傾け始めた。

こうしてると普通に可愛いんだがなぁ……本性がなぁ……。

ッと……話を戻すが、俺はラカンにはエヴァの魔法巻物（マジックスクロール）を渡しに行かなくてはならない。

ついでに俺の魔法巻物（マジックスクロール）も渡すつもりだ。

エヴァの魔法巻物（マジックスクロール）を仮に闇の魔法巻物と名付けるなら、俺の魔法（マジック）巻物（スクロール）は光の魔法巻物と名付けるべきか。

闇の魔法巻物は自分の魂に外部から強化を取り込むような術だが、俺の光の魔法巻物の内容はある意味真逆だ。

上手く闇の魔法と併用できれば、リスクを無効か出来るどころか咸卦法のように更に強くなれる可能性すらある。

光の魔法と名付けたそれは、言ってしまえば疑似的な起原覚醒だ。

自分を自分たらしめる格と成す絶対命令。

本来ならば、起原覚醒した時点で起原に塗り潰され、呑み込まれるのだが、飽くまで疑似……つまりは起原に塗り潰されないように、予め身代りの霊体的な防壁を構築しておき、自分が自分で居られるラインで引き出せる力を行使する。

習得の難しさで言えば、自分が何者なのかを理解していれば驚くほど簡単に習得できてしまうかも知れない。
問題は、習得した後に何所までが安全なのかを見極める所だろう。
何せ一歩間違えば、たかだか百年に満たない程度の“人格”では、原初の始まりより生じた方向性に塗りつぶされるだけだからだ。
反面、闇の魔法の暴走のように無駄に強力になったりするのだが、それは禁呪なのだからしょうがない。
だが習得出来れば、異能は発言しなくとも人間のままで肉体面の強化が出来、尚且つ闇の魔法の浸食を抑え込む事も理論上は可能だとエヴァとの共同研究で実証出来ている。
かなり話が逸れたが、何故そんな事をしなくてはならないのか？という疑問だが、俺が介入した為か、ラカンとエヴァは直接的な接触が一切ない。
あのエヴァが、自分のモノを売ったりなどしようはずもない事を察してもらえばわかると思うが、つまりはゲートから飛ばされたネギは、グラニクスに辿りついたとしてもラカンがエヴァの魔法巻物（マジックスクロール）を持っていなければ、闇の魔法を覚える事が出来ない可能性が極めて高いのだ。
ネギが魔法世界に来る事が前提での話になっているが、俺の計画はあくまで本来を知っているからこそ予想が出来る。
ならば、わざわざその未来予知とも言える優位性を失うデメリットより、多少の危険を被っても本来と同じ流れを辿った方が対処しやすい。
それに、今のネギは必然的に関わった人間以外には戦わせない可能性が高い。
だからネギには塩を送るついでに、完全なる世界のメンバーと釣り合うくらいには実力を付けてもらい、潰し合いをしてもらう。
という説明を月詠と超に順を追って説明した。

「つまり俺の未来予知モドキは、俺の介入の所為で所々、綻びが出来てしまってはいるものの、俺自身がその問題を解決していけば、予知モドキの通りに世界が進むという事だ」

「成程。　しかし、その本来とやらでネギ坊主は世界を救うんダロ？」

俺の説明による矛盾へ、超は指摘をする。

「そう、本来であれば、俺が隠居していても進むだろう。　超、お前の知る未来へとな」

「……」

未来の事を思い出したのか、超は押し黙る。

「が、俺が介入した事によって少しづつ世界は矛盾を修正しつつも本来の流れを形作っている。

予定外が起こる事も危惧しておくべきだが、最大の介入理由はメガロメセンブリアは、俺の孤児院を襲撃してきた事、完全なる世界とネギは俺の娘の死の一因を担っていて、完全なる世界の言う救済と未来のネギが打ち出すであろう世界を救うプランが俺の子供達を救う可能性が低いからだ」

俺の第一目標はあくまで子供達の無事。

完全なる世界の救済は人間の子供もいる為、そもそも全員が救済される事にはならないし、何よりいずれ訪れる災厄から逃れる為に安楽死させるような計画には断固として乗れない。

ネギの言う世界を救うプランだが、これでは世界で苦しむ戦災孤児達を放置し、メガロメセンブリアすらも放置する事になるのでや

はり賛成できない。
時折、魔法世界を放浪して孤児達を少しでも救いたいと思っているからな。
だから俺は、まずメガロメセンブリアのやってきた事を魔法世界全土にリークさせ、真正面から事を構え、最早、英雄なんて幻想におんぶ抱っこしているようなものではないと魔法世界の住人に知らしめなければならない。
どうにも魔法世界の住人は、メガロメセンブリアの宣伝している背ひれ尾ひれの付いた英雄像に振り回され過ぎている。
だからこそ、飽くまで俺は英雄とは正反対の悪のラスボス……今までの世界観を征服して、既存の世界を壊さなければ目を覚まさない程に、メガロメセンブリアの住人達には英雄崇拝思想が根付き、蔓延っている物を根底から破壊し尽くす。
もっとも、俺がするのは変化の切っ掛けであって、変わっていけるかは魔法世界の住人次第だが。
そして何より、崩壊する魔法世界については大きな矛盾があるから、星の意志が魔法世界を壊そうとしているのであって、その矛盾を矛盾なく出来るならば崩壊は止まる。
それについては伏義六十四卦方位図（たいきょくず）を使って意志の無い空っぽの魔法世界に、星としての意志を与え、矛盾を消してやれば解決するだろう。
その矛盾を解決する為、というよりも星の意志を生み出す為に造物主の掟（ドオブライフメイカー）で星と接続し、話し合わなければならないんだが、これが一番の難題かもしれない。
俺の意志が何所まで巨大で膨大な星の意志と渡り合えるかが鍵だろう。
かなり大雑把だが、俺の計画はこんなものだ。
「飛行機が来たみたいですえ～？」

「ん、そうか……行くぞ二人とも」

「はい～」

「わかたネ」

子供達を助けるついでに、世界を救ってやるさ。

凄まじく不本意だがな。

俺達は振り返らず、俺達三人は飛行機に乗り込み、日本を後にする。

第７０翼　激情と羞恥と計画と、策を巡らせる紫の麗人（後書き）

そんなこんなで、ネギの記憶が戻ったり、エヴァがデレたり、ネギの新魔法（仮）の説明をしてみたり、朱然さんの計画を暴露してみたり。
今回は別々のカットを切って張ってパッチワークしたので、接合部分が見え隠れしてしまっていたりするかも。
後でちょこっと修正する予定です。

この作品で気になる点がありましたら、お気軽に感想の一言欄に書き込んでやってください。
なるべく感想はお返ししますよ～。
それと何時も感想を書いている方々に感謝を、流石に一年以上書いているとモチベーションを保つのが大変ですが、感想を貰う度に必ず書かねばと奮起できます＾＾
ありがとうございます！ノシ

第７１翼　グラニクス、予想通りだった紫の麗人

麻帆良学園を後にした俺達は、普通の飛行機でアフリカのへと向かった。

そう言えば、何事もなく麻帆良学園を出れたのか？という疑問には、否定で答えを返す事になる。

超の起こした騒動の後処理と俺の警告で、ある程度のまで追手は減らす事になったのだが、またしても葛城先生達に見つかってしまい、俺と超と月詠は三人仲良く麻帆良学園内を逃走する事になってしまった。

あまり目立ち過ぎるのもどうかと思った俺は、偶々前に追われた時に撮った鮮明かつ刺激的な映像を設置された学内の特大スクリーンに、超の小型携帯アクセス端末によるハッキングで流してみた。

すると葛城先生は、ファンクラブ・刀子先生に罵られながら踏まれ隊という、名称からしてアレな連中に追いかけ回され始めてしまったのはちょっと罪悪感が沸かないでもない。

そんな訳で、混乱の内に麻帆良学園を抜けた俺達一行は、そのまま転移魔法で羽田へと転移した。

因みに補足説明するが、俺達が向かったセネガンビアというのは西アフリカのセネガルとガンビアからなる地域で、二つの地域を括った名前だ。

正式名称はセネガンビア国家連合……っと、そう言えば、十年くらい前にまた分裂してセネガルとガンビアに別れたんだったか……。

それはさて置き、そんなセネガンビアの中央辺りに、世界遺産に認定されているセネガンビアの環状列石という場所があり、そこには岩こそ小さいが、無数の環状列石が立ち並んでいる。

その無数の環状列石の一つが、魔法世界と旧世界を繋ぐ魔法門（ゲート）になっているのだ。

俺達はその魔法門（ゲート）を通り抜け、グラニクスに着いた後は一週間ほ

ど余裕を見て借りたホテルで一応の休息を取ったのだった。
そして今は――――――

「どうだった？」

俺はヤオの姿で超と月詠に問いかける。

「ダメネ……」

「うぅ……今日はもう休みまへんか～？　この街埃っぽくて～」

月詠が相変わらずフリル過多の服を叩いて服に付いていた砂埃を払いつつ、俺達は暗い雰囲気を漂わせる。

何があったのかというと、ラカンが見つからないのだ。
なんでこんな時に限って留守なのだろうか？

「ふむ、そうだな……もう日が落ちるし飯でも食べよう」

「うむ」

「はい～」

俺達はグラニクスの広めの食堂へと入り、注文を決める。
数分後、三人分の料理が運ばれてきた。
俺の頼んだのは、只管に緑の山……サラダだった。

「しゅぜ……枢はそれでお腹一杯になるのカ？」

超は俺の名前を言いそうになって、完全なる世界でのコードネー

ムを呼び直しつつ自分の頼んだシュウマイを食べる。

「一応、仙人でもあるから肉とか魚よりも野菜の方が美味く感じるんだよ」

「はむはむ、仙人って何の話ですか～？」

月詠は野菜炒めをパクつきながら素直に疑問をぶつけてくる。

む、そう言えば、この世界で俺が仙人である事を知っている奴は紅き翼の連中とエヴァや茶々丸以外に居ないのか。

「俺は種族的に言えば、人間でもあり、吸血鬼でもあり、仙人でもあり、精霊でもあり、龍でもあり、獣人でもあり、悪魔でもある」

と、自分で言っていて混沌だなと思う。

「無節操ネ」

「朱然さんの浮気性～」

何だか、そこだけ訊く人が聞けば凄まじく誤解を招くような物言いだ。

「失礼な奴らめ……」

俺はサラダをガリガリと噛み砕きながら咀嚼し、呑み込んだ直後。

「お前さんらか？　ここ数日俺を探し歩いてるっつーもの好きは？」

俺の後ろの席に背中合わせに座っている褐色の大男が話しかけて来た。

しまった……俺とした事が、後ろに居たコイツに気が付かなかったとは……。

「久しぶりだな、ラカン」

俺は振り返り、ラカンに言う。

「ん？」

俺の物言いに引っかかる事があったのか、ラカンは振り返り俺の顔を見ておおっ！と、驚いた。

「久しぶりじゃねーか朱然！」

「あ、馬鹿ッ！　そんな大声で！」

静。

先程まで五月蠅いくらいの喧騒に満たされていた店内に、沈黙が訪れる。

あぁ……次に来るのは……。

「朱然ってあの？」

「英雄、朱然か？」

「確か姿を自在に変える無数の姿の……」

「隣に居るのはラカンじゃないか？」

やっぱりか……。

「わりぃッ！」

ラカンはウインクしながら両手を合わせる。

「三人とも、まずは此処から出るぞ！」

「まだ食べ終わてないヨ」

俺だってサラダ以外食ってないよ……。

「ごちそうさまでした～」

以外に早いなッ！

そう心の中で突っ込んだ所で客達のみならず、店員まで殺到してくる。

俺達はそれぞれがそれぞれの方法で店を離脱し、少し離れた場所の屋根上に集まった。

「いや～、わりぃ……久しぶりだったんでつい」

「ついで名前をバラすなよ！　毎回毎回追いかけ回されるのはナギだけで良いんだよ！」

「で？　昔話する為に会いに来た……って訳じゃあねーんだろ？」

ラカンは腕を組みつつ言う。

「お前に渡しておこうと思った物を2つと、今後の為の話をしにな……」

「ふむ、後ろの二人はおめーの従者か？」

シリアスな雰囲気で話始めたのに、ラカンは気になったのか超と月詠の事をからかってくる。

「従者……みたいなもんかな……それも込みで話すからまずは俺の話を聞け」

からかわれた事を流しつつ、俺は話はじめる。

今までの事と、そしてこれからの事を。

勿論、フェイトとの戦いで消されないようにも。

「家族の為に……か。

まあ、おめーが完全なる世界（コズモエンテレケイア）に成ってたのは驚いたが、別に世界滅亡とか考えてねーんなら良んじゃね？」

相変わらずの大雑把さだな……ま、だからこそラカンに言えるんだが。
もし仮に詠春に言おうものなら、問答無用にそこに直れと刀を突き付けられたことだろう。

「大戦の尻拭いをしなきゃなんねーって事はわかったぜ。ガキ共に任せるにゃ、ちょいと荷が重すぎる気がしねーでもないしな！で、おめーが渡したいもんってのは？」

「ああ、これだ」

俺はそう言いつつ二つの巻物（スクロール）を出し、ラカンに手渡す。

「ほぅ……中々に厄介そうなのが入ってるな？」

流石……見ただけで解るか。

「2、3ヶ月後くらいに使うだろうと思う。お前自身が覚えても良いが、白い方はお前には覚えられないからな」

それは何故か？
だって、コイツ馬鹿（ラカン）だから自分を突き詰めて、自分自身の起原を探すなんてまどろっこしい事、旅を共にした経験上絶対にしないと思うし。

「覚えとく。お前の保険……暴走時には手加減は要らねーんだな？」

「ああ、俺自身死ぬつもりはないから足掻くが、どうしようもない

状況になったら……それは仕方ない」

「……そうか」

ラカンがシリアスモードになるのは余程の事だ。
それをさせる俺の提案は、ラカンにとって尋常な事ではないのだろう。

「朱然はん」

「どうした月詠？」

「一度、ウチ……朱然さん以外の人と闘ってみたかったんですけど～」

あぁ……そう……やっぱりそう来たか。

「挑戦料１００万ドラグマだぜ？」

「朱然は～ん」

月詠が俺にすり寄って来る。
こうなると、首を縦に振らなければ延々とひっついてくのだ。

「はぁ……いつか必ず返せよ？」

俺は溜息をしつつ月詠の頭に手を置く。

「せやから朱然はんって好き～。　ん～！」

両手と口を突き出してきた月詠の頭を右手で抑え込む。

あー、はいはい、自重自重。

「プククッ！　こんなガキの尻に敷かれてんのかよ？」

ラカンが明らかに冷やかしてきた。

……ほぅ。

「月詠」

「はい～？」

「殺って良し」

「わぁ～い！！」

月詠は喜び勇んでラカンへと飛び掛かった。

予想通りというか、月詠はラカンに返り討ちにされたが、月詠の人切りとしての豹変ぶりに戸惑い、ラカンの褐色の肌に幾千もの白い蚯蚓腫(みみずば)れができたのは、ある意味で流石だと思った。

「ふー、ふー、おー痛て、まったくトンデモねーな、この譲ちゃん。身体中、痣と蚯蚓腫れだぜ……」

「ウチの刀の方が折れた～。　朱然は～ん、ウチ新しい刀欲しいです～」

普通の刀じゃ月詠が全力出せないし、ラカンに振り下せば刀の方が折れる、と……。

泣きついてきたのもしょうがないと言えばしょうがない。

ラカンに保険と渡す物は渡したし、月詠の刀と各国への情報伝達網でも作りに行くかな。

第７１翼　グラニクス、予想通りだった紫の麗人（後書き）

やっと魔法世界編突入です。
まあ、例の如くオリジナル展開になると、筆が進まないと文が短かったりするのが難点ですが。
次回は最後に書いた通り、月詠の刀でも作りに行こうかな～と思ってます。
ぶっちゃけ魔法世界編では、ネギパーティ魔法世界突入時から思い切って朱然さんサイドではなくネギパーティサイド視点で書こうかとちょっと思っていたり。
勿論、朱然さんがちらほら出てきたりするかもしれません。
今回は朱然さんが裏ボスポジションなので、ボスを倒しに行く勇者視点？みたいな感じですかね～。
もっとも、読者様の感想などで、止めた方が良いというご意見が多ければ、今まで通り朱然さん視点に成るかもしれません。
ではでは～ノシ

第７２翼　狩り人、刀を鍛える紫の麗人（前書き）

く……ッ！

最近色々と忙しい……ッ！！

第７２翼　狩り人、刀を鍛える紫の麗人

グラニクスに一週間の滞在後、転移魔法で龍山山脈へと場所を移した。

唐突だが、龍山山脈の説明をしよう。

龍山山脈……魔法世界で最も過酷な環境の一つとされる場所だ。

そもそも、この世界を創った造物主の趣味なのかは知らないが、魔法世界にはＲＰＧゲームのようにダンジョンのような場所が多数存在し、しかも十中八九そこにはボスっぽいものもいる。

この龍山山脈にもそんな場所が多数存在しているのだが、今回はそこへ行く訳ではないので説明は割愛しておく。

簡単に龍山山脈の表現をするのなら、切り立った荒削りの岸壁と底の見えない深淵の谷、一年を通して濃霧に閉ざされた場所で、草木もあまりの高所の為に生息できない。

魔法世界の強靭な草木でさえ、だ。

そんな殺風景な山道を、俺達はハイキングしている。

標高が高いだけあって、ペースを間違えると酸欠になったりと大変だが、魔法によって強化されている為に俺達は通常ではありえない速度で登って行く。

「こんな所で何を探すんです～？」

「ここには超高密度で良質な鉄鉱石が取れるらしくてな……なるべく品質の良い鉄鉱石やその他の特殊な鉱石を採取しに来たんだ」

「しかし、君にはいつも違った驚きをさせられるネ。　まさか謎のアーティファクト使いは、優れた刀鍛冶（ブラックスミス）でもあたとは……」

「実際は何でも造る……そうだな……強いて言うなら造形職人（モルディングスミス）と言ったところだ」

記憶という型を使って有り得ないモノを作り出す、という意味ではピッタリだろうさ。

歩くというより、もはや走っているという表現があっているこの状況で、俺達は会話をする。

「そもそも、俺のアーティファクトは普通のアーティファクトとは違う」

「普通のアーティファクトではナイ？　私の最高傑作だた機械化鬼神を倒したのもソレカ？」

超の瞳が興味の色に変わる。

「俺の仲間になったのなら、出来る限りの情報は共有しなくてはならないしな……俺の持っているアーティファクトはこの世界に存在しない別物だと思ってくれ。

そもそもこの世界のアーティファクトは伝説の武器、曰くつきの品などが契約精霊達によって厳重に管理、保存されているアーティファクトを、これまた契約精霊達が契約による情報を元に独自の審査を経て、契約者に貸し出される。

一々来れ（アデアット）や戻れ（アベアット）と言って戻すのは契約精霊達の場所へと戻しているからだ。

俺の宝具は、一度サーヴァント……まあ、一番偉い幽霊だとでも思ってくれ、でそれになった時に、生前に使っていた物は自身の身体の一部になる、というルールが残っているから、アーティファクトのように一々呼び出さなくても自由に呼び出せる」

「ルールってあの素敵な殺し合いのルールでしたっけ～？」

月詠は俺の聖杯戦争の光景を思い出したのか、うっとりとした表情で言う。

「素敵な殺し合いとは物騒な表現ネ？」

超は眉間に皺を寄せて言う。

「その殺し合いの名称は聖杯戦争だ。

7人の魔術師……この世界で言う魔法使いな？がさっきの一番偉い幽霊を一体づつ召喚して殺し合う儀式。

勝ち残ればあらゆる願いを叶えられる聖杯を手に入れられる戦いだ」

って、随分と話が逸れたな……軌道修正せねば。

「その一番偉い幽霊は昔や未来の英雄の幽霊で、その戦いではサーヴァントと呼ばれている。

一体一体が人間程度じゃ対抗できないくらいの強さを持っているんだ。

技の練度や身体のスペックが段違いだというのも要因の一つだが、一番の要因はこの話の主題だった宝具だよ。

単純に強力な攻撃をする物から因果を捻じ曲げる槍、果ては世界を限定的に変えてしまうほどの物や、世界を切り裂いた剣なんてものもある。

はっきりいって、アーティファクトと宝具では必殺という点で差異があり過ぎる」

宝具は真名解放を出せば、ほぼ必殺の攻撃が多いのに対し、アーティファクトは飽くまで使用者を底上げやサポートする事に特化しているように思える。

時々、宝具に匹敵するようなヤバげなアーティファクトもあるし、使用者の所為で宝具並みに危険な物になったりするアーティファクトもある。

ラカンの千の顔を持つ英雄（ホ・ヘーロース・来タりオーン・プロソーポーン）や、アルのイノチノシヘン（ハイ・ビュブロイ・ハイ・ビオグラフィカイ・オラトリオ）曲とかね。

「なるほどネ……ところでさっき、何でも願いを叶える聖杯というのがあたガ……」

やっぱり、そこに喰い付くか。

「残念だが、この世界にそんなものは存在を確認されていない。そもそも、その聖杯も呪われていたから壊したしな。

世界を救ってくれと願えば、世界を危機に陥れている一因を担う人類が全て滅びる、なんて事も冗談じゃなく起こってしまうような欠陥品だ」

「そうカ……」

走りながら超は肩を落とした。

「さて、雑談は此処までだ。　そろそろ採掘できる火山の入口に着くぞ」

俺達は１３キロ程を休みなしで駆け抜けて辿りついた。

はた目から見ても、活動が活発な活火山。

人が殆ど近寄れないより環境の厳しい場所。

その一角にキャンプ後があったので、俺達はそこで一休みする事にした。

これなんてモ○ハン？と、そう思えるような場所だった。

「耐熱魔法が無ければ暑さですぐ脱水症状は確実ネ」

「うぅ～、熱いです～……でもウチの刀のため～」

冷静に分析する超と、自分の刀のために汗を流す決意をする月詠。

超と月詠は疲れたからか、地面に腰をおろして肩を上下させている。

俺はまだ余力が十分にあるので、二人が休めるようにキャンプに在った簡易ベットを掃除した。

「よし、ベットが一応、綺麗になったぞー」

「わ～い」

「すまないネ」

地面に居た二人が土埃を払って立ち上がり、簡易ベットに移動する。

超は座り、月詠はうつ伏せに倒れ込むように寝転がった。

「ふむ、まだまだ元気そうだな月詠？　最良質の鉱石は火山火口付近らしいから更に登るぞー？」

俺はベットへと飛び込んだ月詠に言葉を投げかける。

「そ、そんなぁ～」

月詠はそのまま意識を失ってしまったようだ。

ま、元気と言ってもカラ元気だったみたいだな。

強行軍で来たからな……日が落ちるまで寝かせてやるか……。

俺は超に休憩を伝え、俺と超も日が落ちるまで眠りに就いた。

「起きろ」

俺は一言呟き、月詠と超を起こす。

「……もう日暮れカ？」

「もう八時だ。　予定より寝過ぎたな？」

「そうカ……ふぁぁ」

超はベットの上で起き上がり、伸びをした。

そして、超の隣で寝ている月詠は起きる気配がない。

「月詠、起きろ」

「あぁん、朱然はん……そ、そんなところにそんなもの入れへんといて……」

……。

「随分と好かれているナ？」

「今の寝言を聞いて出てきた感想がそれか？」

「も、もうウチ……ウチ、限界やぁ～」

俺は月詠に近づき――――――アイアンクローをした。

「あぁぁぁ！？」

月詠の嬌声とも言うべき声が苦しみに変わった。

「グーテンアーベント月詠？　良い夢は見れたかな？」

俺はにっこりと、それでいてとても優しく月詠に語りかける。

「幾ら月詠がアレだからと言っても、その起こし方はどうかと思うヨ」

超が呆れる。

「め」

「め？」

「目覚ましはキスで起こしてくれると嬉しいな？って、痛い痛い痛いですぅ～？！」

「寝言は寝てから言おうな月詠？」

俺はアイアンクローをしたまま月詠を宙吊りにした。

超は俺達を無視し、身支度を整え始める。

数分後。

月詠はベットの上で乙女座りしつつ、頬を染め、両手で頬を抑えつつ一言。

「はぁぁ～、朝の目覚めはやっぱりこのくらい激しくないと～」

「この変態ドM娘め……」

この変態ドM娘め……。

俺の思考とセリフが、これ以上ないくらいにピッタリと噛み合った。

技をかけた俺の方が憔悴し、何故か技をかけられた月詠の肌がツヤツヤとしているという矛盾。

「月詠にとて、それは褒め言葉ネ」

因みにこのやり取りは魔法世界に来てから、ほぼ毎日のように繰り返されている……はぁ……。

「さて、それじゃ火口まで行きますかね！」

俺達は更に登る。

所々に熔岩の河が流れ、その熱は常人ならとうに倒れ伏している温度に達している。

しかし、火山入り口までと同じく、それぞれが気、魔力、機械で自身の身体を保護している為、熱が俺達を消耗させる事はほぼない。

ほどなくして、俺達は火口へと何事もなくすんなりと進む事が出来た。

吹き上がる熔岩の脇に巨大な洞窟があり、地中の奥にある鉱石は洞窟の中の方が採掘し易いと判断し、中に入る。

洞窟の中は溶岩が照明の代わりに洞窟内を照らしていた為に、とても明るかった。

「ふむ……あそこの岸壁が良さそうだな……」

俺の示した岸壁は周囲の岸壁と色が違っており、良質な鉱石を多く含んでいる事がわかる。

「手早くしてほしいネ。　機械は本来熱に弱いんだヨ？」

「わかってる。　それ程の量が欲しい訳じゃないからな」

俺は超達から少し離れた固い筈の岸壁に――――――

「点穴」

――――――いとも簡単に指を刺し込んだ。

そのまま2ヶ所、3ヶ所と同じく岸壁に指をさすと、程なくして岸壁の一部が静かに崩れた。

「麓の村で言ってた龍さんは出なかったです～……折角、生き物を斬れると思たのにぃ～」

「危険は無い方が良いに決まてるヨ」

「怖気づいたんですかぁ～？」

「リスクは少なければ少ないほど良いネ」

月詠がニマリと笑い、超を挑発し始めたが、超は飽くまでもクールに受け流したところで――――――凄まじい咆哮が洞窟内を震わせた。

「チィッ！　お出でなすったぞ……！」

「できれば会いたくなかったネ……ッ！！」

俺達は一斉に集まり、手頃な物影へと身を隠した。

そして、そいつは現れる。

ゴツゴツした巨躯、鈍重な足音、揺れる洞穴。

そこには、昔見た狩ゲーのような龍が居た。

真っ黒な岩と一体になったかのようなその体は鎧の如く。

細部が色々と違うが、大まかにはグラビモスとほぼ同じだ。

冷静にグラビモス（仮）を分析する。
今のところ俺達は見つかってはいない。
この状況で先程、俺が崩した岸壁の鉱石は採掘する事は中々に骨が折れる。

そんな事を思っていると、グラビモスは俺の崩した岸壁へと近寄り、鉱石を喰らい始めた。

「朱然はん、アレは斬ってもええですか～？」

「ああ、あそこの鉱石は俺達が見つけた物だ。盗人……いや、盗龍には身を以て教えてやれ」

「はい～」

「結局、戦うのカ……」

「よし、全部喰われる前に倒すぞ！」

俺の言葉を最後に、俺達は物陰から身を乗り出した。

「二刀連撃、ざんがんけーん！」

瞬動で一気に距離を詰めた月詠が空中へと身を躍らせ、斬岩剣をグラビモスの尻尾の付け根へと先制攻撃を振り下す……が、流石は龍。
神明流の文字通り、岩を割り切る斬撃を受けてグラビモスの岩鎧はその斬撃どころか刀をも弾き返した。
月詠の方を見ると、俺が一時凌ぎに渡した強度重視の刀の刃がボロボロになっている。

「月詠！　退くネ！」

ロケットランチャーを担いだ超が声を張り上げ、撃った。
月詠はグラビモスの尻尾の棘を蹴り、回転しながらグラビモスから距離を取る。
弾頭が月詠の斬撃によってこちらに気付いたグラビモスの頭へと飛んだが、上位の竜種特有の魔法障壁によって爆発と共に喰らう筈の衝撃は無力化されてしまう。
俺は未だ空中に居る月詠と入れ違いになるように飛び、此方へ咆哮をしようとする頭部へと両手で振りかぶった大牙を叩きつけた。

衝撃。

……ッ、硬ぇッ！！

グラビモスは俺の一撃を受けて沈んだ頭を振りかぶり、俺を弾き飛ばした。

気で強化していなければ、叩きつけた筈の俺の両腕が折れていただろう。
頑丈さ重視の大剣、大牙で無ければ刃が欠け、下手をすれば折れていただろう。

流石はこの世界の龍か……。
Ｆａｔｅの幻想種の龍とやらはもっと面倒な相手なんだろうが、硬度だけなら十分過ぎるほどにコイツもこの世界では脅威だなッ！

「月詠！　使え！」

俺は強度だけを重視した刀を取り出し、月詠へと投げ、月詠はそれを受け取る。

「やれやれ……とんだ難敵だな」

俺は大神宣言（グングニル）を取り出し、月詠は刀を構え直し、超は新たに銃器の標準を向ける。

「ウチの刀が出来たんですか～？！」

いつもの間延びした喋り方の癖に、月詠はとても興奮して俺の持つ納刀された刀に視線を注いでいる。

その後から超が静かに入って来るのが見えたが、月詠がうずうずしているので刀を渡すことにした。

因みに火山での一戦……グラビモス（俺命名）との戦いは五十分ほど長引いた。

硬い、攻撃力半端ないで意外と苦戦してしまったからだ。

真名解放して放った大神宣言（グングニル）は魔法障壁をすり抜けはしたものの、持ち前の強固な岩鎧自体にも魔力で強化していたらしく弾かれてしまった時には思わず驚愕した。

洞窟内だった為に極大呪文などを放つ訳にもいかず、外へおびき出そうとした矢先に唯一の出口を熱閃で崩され、外におびき出しての極大呪文の案は潰されてしまい、その防御に特化した魔法障壁は飛び道具のみに異常な防御性能を見せ、近距離での近接攻撃で削る事になり時間を喰ってしまった。

グラビモスを倒してからは、ゲームのように数個と言わず、グラ

ビモスの素材を剥ぎ取れるだけ剥ぎ取りを行い、洞窟内の鉱石採取を掘り、用が済んだ後は塞がれた入口を文字通りブチ破ったが、帰ろうとしたところで超の冷却装置が壊れ、急いで山を後にしてから数時間後。

ノンストップで麓の街まで駆け抜けた俺達は冷たい飲み物を呑み干し、上手い料理を食べ、戦いの疲れを癒すべく、泥のように眠った。

それから俺達は完全なる世界の支部へと向かい、俺は武器制作の為の工房で刀造りを開始し、たった今、造り終えたところだ。

「ああ、月詠……お前の一部となる刀、銘は月夜見（ツクヨミ）。お前だけの為に鍛えられた刀だ」

俺は月詠に月夜見を渡す。

漆黒の刀。

鞘、下緒、柄、柄糸、鍔全てが黒一色だ。

今まで月詠は太刀と小太刀を使っていたが、俺が鍛え、造ったのは太刀一本。

この後に小太刀の方も造るつもりでいる。

「抜いてもええですか～？」

「ああ」

月詠は意を決し、スラリと刀身を抜き放つ。

夜のような黒と星のような無数の光が、そこにはあった。

刀身すら漆黒だ。

その漆黒は包み込むような夜を体現し、荒々しい刀身の波紋と共に、日本刀の刃と地肌との境に現れ、銀砂をまいたように輝く沸（ニエ）が星の瞬きのように見える。

その刀の全てに月詠の髪や血が混じり合い、月詠は自分の身体の一部のように使う事が出来るだろう。

更に、今回たまたま出くわし、倒したグラビモスの岩鎧を構成する鉱石を使った事により、気を流す事によって通常では考えられないほどの強度を誇る事に成功した。

いつの間にか宝具となり、折れず曲がらない不変という概念を付与された大牙に迫る程の強度ならば、今度こそ月詠は全力で刀を触れるだろう。

「わぁ……ッ、綺麗やわぁ……それにとっても手に馴染む感じがします～」

月詠は次の瞬間、工房に立てかけてあった頑丈そうな盾を微塵切りにした。

「本当に、良え刀や～」

そう言って月詠は月夜見（ツクヨミ）を鞘へと戻した。

そして――――

「仮契約（パクティオー）ネ！」

「何む……ッ！？」

「んちゅ～～～～～！！」

俺は刀を鍛える為に数日呑まず食わずで居た為に反応できず、仮契約をされてしまったのだった。

第７２翼　狩り人、刀を鍛える紫の麗人（後書き）

お待たせしてしまった皆様ごめんなさい。
レポートが……教授がいけないんだ……くそぅ……。

今回は月詠の刀制作の話でした。
鉱石取り＝モンハンとついつい連想して、黒グラビが登場してしまいました。
しかもネギまの世界なので大神宣言が弾かれるという異常事態を引き起こす魔改造黒グラビに……。
そして、月詠と仮契約。
朱然さん……浮気はいけないと思います。

第７３翼　ゲート襲撃、動き出す紫の麗人（前書き）

完全なる世界ルート日常編を書こうか悩み中でござる。
そして忙しい所為で、中々ストックが作れないのが最近の悩みです……。

第７３翼　ゲート襲撃、動き出す紫の麗人

「気付いているかい？」

「わかっている……僕は僕の目的の為に敵対する」

月夜見を造ってから約２ヶ月と少し。

俺の計画の為の情報網構築と保険、根回しは済んだ。

今いるのはメガロメセンブリアの魔法門（ゲート）。

ヤオに変身して、魔法世界では黒の死神と呼ばれていた格好になっている。

今回の作戦内容は、旧世界から魔法門（ゲート）に侵入したフェイトと内通者が内側から手引きをして、警備を掻い潜り、完全なる世界（コズモエンテレケイア）幹部総出で魔法門（ゲート）の要石を砕く事だ。

そして、やはり眼下には……ネギ達、白き翼がいる。

ネギとの敵対それは望むところだし、メガロメセンブリア元老院を俺は許す事はできない。

頓挫した忌まわしき禁忌の術を漁り、それを使って俺と同じ存在を創るだけに飽き足らず、口封じ、証拠隠滅の為に俺の孤児院を……子供達に怪我をさせ、殺し、孤児院を焼いた。

その所為でルクレツィアも死んだ。

麻帆良学園に来る前に暗部を一度潰したにも関わらず、また新たにそんな事をするなんて、到底俺には許す事は出来ないという気持ちは時間が経つにつれて薄れるどころか強くなっていく一方だ。

「さあ、始めよう」

フェイトが進む。

俺の心臓が跳ねる。
幾ら実力があっても、緊張はするのだ。
そして……この時より、俺の計画も第一段階が発動するのだから。

が――――――

「古老師、アスナさん、師匠（マスター）はこっちに来て、まき絵さん達を守って！！　楓さん……マクギネスさんは入国管理局です。
小太郎君はテラスののどかさん達について！！　アーニャ、携帯杖は持ってるね？　僕と二人で魔法障壁を全力で展開して！！」

ネギが声を張り上げ、指揮を取り始める。

予定通りだな……ネギの眼も、幾分かマシになっている。

「排除しよう」

俺は淡々と言う。

「いいのかい？　仮にも親友の息子で、君の元先生だろう？」

ふん、解り切った事を……。

「関係ないよ。　僕の目的の邪魔をするのなら、例えどんな相手だろうと蹴散らす」

静かに、そう静かに、呟くように言う。
遠慮など要らないのだ。
どの道、最後の舞台までネギは登って来る。

「へぇ……その点については今までに共有した時間と君の人格を信じるよ。しかし、いきなり僕達に気付くなんてね。これも千の呪文（サウザントマスター）の男の血のお陰かな？　まあいい。まずは軽い挨拶だ。

ヴィシュ・タル　リ・シュタル　ヴァンゲイト　障壁突破（ト・ティコス・ディエルダサス）・石の槍（トラス）」

フェイトは即座に障壁突破の付随効果の付いた石の槍がネギを貫くべく投擲された。

そして――――――

――――ネギは石の槍を左肩に受け、倒れた。

「ネギ――――――ッ！！」

明日菜の悲痛な叫びがゲート内に木霊する。

致命傷だな……が、咄嗟に半身ズラして即死は免れたか。

「さあ、挨拶と行こうか」

俺達は進む。
俺達は動き出す。
俺達は表舞台へと姿を現す。

ネギがやられた事により早くも白き翼は動揺する。

――――――久しぶりだね、神明流。

「!?　てめぇは……ッ!?」

「フェイト・アーウェルンクス!?」

「何でここに!?」

驚愕する白き翼の面々が口々に疑問をぶつけてくる。

「何でも何も……それは此方の台詞だよ」

だから俺が答える。
仮面越しに、少しこもった声で。

「白き翼諸君……予定外だけれど、僕達は歓迎するよ」

解っていた事を堂々と、まるで予定外のように俺は話す。

「もっとも、ネギ・スプリングフィールドは早くもさようならになってしまうかもしれないけれど、それも仕方ない。
人間、慣れ始めや中途半端が一番危ない時期だ。そんな状態が力を付けた、自分は強くなったと勘違いをする輩が多くて困るよ」

俺はフェイトの隣に並び立つ。

「そうは思わないかな？」

瞬間、楓、小太郎、刹那、古菲、が動き、それと同じくしてデュナミス、月詠、超、フェイトが動いた。
エヴァはまき絵達を守る為に動かない。
楓はデュナミスの黒き牢球（デスモーテーリオン）に封じられ、小太郎が月詠の月見乃夜桜で意識を手放し、古菲は超の時間跳躍による一撃で昏倒、刹那はフェイトのカウンターによって行動不可にする。

「アンタ達……私達を尾行てきたの？！　どうしてこんな事するのよッ！！」

明日菜がネギを介抱しながら怒鳴る。

「怒鳴らないでくれないかな……別に、君達がなんの問題も無くこの場所から出て行ってくれれば、こんな事にはならなかったんだよ？」

「どういう意味よ……ッ！」

「そう言う意味だけれど？　ネギが余計な警戒と指示を飛ばし始めたからこうなった。

またしてもネギ・スプリングフィールドは選択を間違え、教え子達を危険に晒す事になっただけの事……修学旅行でもそうだっただろう、神楽坂明日菜？」

「全部……ネギの所為だって言うの！？　それに、なんで知りもしないアンタなんかにそこまで言われなきゃなんないのよッ！」

まったく……進歩の無い……。

「記憶は取り戻したか？」

「……ッ！」

その様子……記憶を取り戻したか……。

「アンタ……まさか……」

明日菜や無事な連中の目が驚愕に見開いてく。

「ご名答、元クラスメイト――――」

俺は仮面を外しつつ姿を変える。

「――――ルーデシア・ルノーよ」

俺は冷たい瞳で元クラスメイトを見降ろす。

「え？　何で？　アレって超さんとつっきー？」

「何かの特撮、だよねアスナ？」

状況の呑み込めていない祐奈達の疑問を明日菜は無視し、呟くように俺に問う。

「なんでよ……なんで……こんな、酷い事……」

「するのかって？　決まっているでしょう？　貴方達が本当の私を最後に見た時の光景を」

ルクレツィアをネギが殺した時の光景を。

「……ッ！！」

「つまりはそう言う事よ。　そもそも学園祭最終日に言ったでしょう？　私は完全なる世界に行くって」

「喋り過ぎだよ、柩」

喋っていた俺の前に現れたフェイトが俺を待ったをかけた。

「もう良いだろう？　不確定要素は僕の完全石化で石に……」

フェイトがそう言ったところで、致命傷のネギが瞬動でフェイトの顔面へとパンチを繰り出してきた。

それを俺は横から掴み取る。

「朱然さん、僕がどうなろうとそれは構いません。　でも！　僕の生徒は傷つけさせません！！」

エヴァに頼んだ修行で少しは自我を取り戻したか。

「そう、なら私は貴方に約束するわ……ネギ・スプリングフィールド、貴方を苦しめて苦しめて苦しみ抜かせてあげる」

そう言って、ネギを投げ飛ばそうとした時だった。

硬い物で、同じく硬い物を殴りつけたような鈍い音が響いた瞬間、仮契約カードと武器が散らばり――――

「「来れ（アデアット）！！」」

ネギ達の反撃が始まった。

「木乃香、リミットがもう３０秒もない！」

「あんな重傷、触れられるくらいに近くに行かへんと治せへんッ」

「わかってる、任せてッ！　くーふぇ、援護をッ！」

「了解アル！」

俺は掴んでいるネギの首を落とすべく、手刀を繰り出したところでフェイトは木乃香への近くへと瞬動した。

「石の息吹（プノエー・ペトラス）」

石化の煙が木乃香を包み込む。

だが、急激に煙が渦巻き、散っていく。

そこには翼を生やした刹那が居た。

「お嬢様には指一本触れさせん！！」

刹那はフェイトへと向かっていく。
刹那の刀の一振りはフェイトを斬ったがそれは囮……回り込んでいたフェイトが石の槍（ドリュ・ペトラス）を放とうとする。
が、古菲の崩拳が炸裂し、そのままフェイトは弾き飛ばされた。

やはり達人の域を越えていない。
防ぐには十分過ぎる程度の早さだ。
エヴァの修行で最低限の強化はされているが、やはりその程度か……。

そんな風に眺めていた俺の手をネギは渾身の魔力によって振りほどき、木乃香達のところまで瞬動で移動して倒れ込んだ。

そろそろ限界か？

「ネギ！！」

目の前に現れたネギに、明日菜は隙を見せた。
それを逃す程、甘くは無いデュナミスが影の本流を操り、押し潰しに掛かるが、明日菜の能力の前に有効打は皆無だ。

「お姫様達も、だいぶ美味しそうになりましたなぁ～？」

デュナミスの攻撃を凌いだところでまたしても隙を見せる明日菜に対し、今度は月詠が動いて明日菜の首まで刀が数センチと言うところで小太郎が間に合い、月詠は蹴り飛ばされた。

「ネギ君……絶対にウチが治す――――――」

氣吹戸大祓（いぶきどのおおはらへ）
高天原爾神留坐（かむづまります）
神漏伎神漏彌命以（かむろきかむろみのみことをもちて）
皇神等前爾白久（すめがみたちのまえにまうさく）
集侍吾友達乎（うごなはるわがともたちを）
護恵比幸給閉止（まもりめぐまひさきはたまえと）
藤原朝臣近衛木乃香能（ふじはわらのあそみこのえこのかの）
生魂乎宇豆乃幣帛爾（いくむすびをうづのみてぐらに）
備奉事乎諸聞食（そなえたてまつることをもろもろきこしめせ）

「ぐ……ッ、うわぁぁぁぁッ！？」

「――――――良かったぁ！！　間に合うて」

ここで戦闘が膠着した。
こちらは要石を背にして陣取り、ネギ達はそれに対峙する。

「ふむ、悪くは無い……君達の仲間をゴミだと言った事は訂正しよう」

フェイトが悪く“は”という表現を使った事からも解る通り、未だネギ達の脅威度は低めなのだ。

「フェイト・アーウェルンクス……それに朱然さん……貴方達完全（コズモ）なる世界（エンテレケイア）は一体何をするつもりなんです？」

「貴方に懇切丁寧に教えるとでも思っているのかしら？　ねぇ、フェイト？」

「枢の言うとおりだよ、ネギ君」

「止めます。　フェイト、君達が何をしようとも絶対に」

ネギは断言する。

「私の邪魔をするのかしら？」

「できる事なら、朱然さんの邪魔はしたくはありません。　そうする義務が僕はあるんだと思います。

でも、それは僕と朱然さんだけでの話で、他の誰かを巻き込むというのなら、僕は……ッ！！」

義務、ね……訳のわからない内に義務にされるのは虫唾が走る……。

だが、ようやく殺し甲斐が出始めた。

「枢、そろそろ時間だよ」

「そう……そろそろさようならの時間だそうよ、ネギ先生？」

「待っ――――――」

ネギが俺の方へと手を伸ばしたところでフェイトの呪文が完成する。

「冥府の石柱（ホ・モノリート・ネウキオイ・ダウ）」

「！！」

ネギ達は即座に防御の姿勢を見せ、巨大な石柱の攻撃を受けた。
その攻撃によってこちらからは殆どネギ達の姿を確認は出来ない。

「楔の破壊完了、離脱用ゲート確保……脱出できます」

「うん」

「ほな、ズラかりましょか～」

「彼等にもゲートを……強制転移で、彼等をバラバラに世界の果てへ」

フェイトが提案する中、ようやくフェイトの石柱が降り注ぎ終えてネギが進み出る。

「待てッ！！」

「こちらに来る前に、君達は少しばかりぬるま湯に浸り過ぎていたんじゃないかな？
此処からの現実は僕からのプレゼントだよ」

要石が完全に壊れ、俺以外は転移魔法で離脱する。

「さようなら、また近い内に会いましょう？　ネギ・スプリングフィールド……ようやく――――」

俺も転移魔法が発動し、最後まで言う事は出来なかった。

――――貴方は救われるかもね？

Ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

やれやれ、水仙は面倒な頼みを渡しにしてくれたものだ。
エヴァは内心で溜息を吐いた。
朱然が超と月詠を連れて出て行ってから数日。
ネギは空っぽだった。
自分が犯した罪に押し潰されているのだろう。
だが修行は毎日来ているし、授業態度も勤勉と言っても良い。
いや、寧ろ勤勉を通り越して異常と成りつつある。
先程も挙げたが、記憶を取り戻した坊やは忙しさで忙殺しているのだ。
そして、今も……。
「温い、その程度か？」

エヴァの魔力を込めた蹴りを受け、ネギは別荘の塔最上階中央のオベリスクに叩きつけられる。

「ぐ、ぅ……ッ、まだ、やれます……ッ！！」

「ほう？　そんな状態でまだ向かってくるか……頭を冷やすがいい坊や、凍てつく氷棺（グリドゥス・カプルス）」

エヴァの放った魔法がネギを襲い、氷漬けになった。

ふん、つまらん。

「ケケケ、御機嫌斜メダナ、御主人？」

「五月蠅いぞ、チャチャゼロ。　茶々丸、五分して自力で出て来なければ手伝ってやれ」

「はい、マスター」

エヴァは氷漬けになったネギを一瞥し、鼻を鳴らして塔の中へと入った。

一時期修行が滞ったが、今は異常とも言うべき速度で成長を坊やは遂げている。

闇の器としての完成度はほぼ完成していると言ってもよい。

だが、水仙が言うべき場所はそこではない。

光の魔法。

水仙がいなければ、今後１００年を経ても扱う者はいなかったと言えるまったく新しい技術体系とも言うべきもの。

魔法は飽くまで精霊の力や精神エネルギー、生命力を燃料とする。
しかし、光の魔法は違う。
正直、初めて見聞きした技術に私は胸躍らせた。
約６００年、始めは自身の吸血鬼化の治療の為に古今東西の技術を調べる事の従事し、時が経つにつれて進歩するハイテクというのにも多少は精通したつもりだった。
まあ、当時のハイテクというと産業革命時点でのハイテクなので今では全く役に立っていないのだがな。
それはさて置き、水仙が私に教えた光の魔法の基盤。
概念という最早、人の手に余るほどの技術に私は恐怖した。
光の魔法……起原の覚醒という禁忌の技術。
私が編み出した闇の魔法という禁術、魂に直接魔法を融合、作用させ、肉体の限界を強引に越えさせるそれと対を成せる異常の術。
自分の根幹的な行動原理を突き詰め、無駄を排し、削ぎ落す事で自分自身と言う存在を本当の意味で知り、新たな能力の開花や身体能力の限界を引き上げるというモノ。
足りないのならば補うという闇の魔法とは正反対の考え方。
もっとも、起原覚醒というものは他人の技術で、その知識を知る事が出来たからこそのモノだと水仙は言っていた。

「マスター、ネギ先生を寝室へお送りしました」

「御苦労、茶々丸」

「いえ、では夕食の御用意をしてまいります」

茶々丸は私に恭しく礼をして退室する。

水仙が掲示したタイムリミットは夏休みの中旬頃。
それまでに坊やの光の魔法の習得に必要な“自我”を鍛えるとし

よう。

時は進む。

水仙、お前は坊やに何をさせたい？
殺したいのならすぐに殺せば良いものを、何故わざわざ手間をかけてまで強くしようとしている？

時は刻む。

坊や達がお前の前に立ちはだかるのなら、私は坊や達について行き、その時にお前の力になろう。

時は移る。

だが……死なないと言いながら、どうしてお前は――――――

時は流る。

「さようなら、また近い内に会いましょう？　ネギ・スプリングフィールド……ようやく――――――」

時は……追い付いた。

――――――そんなに死に急いでいるように見えたのだ？

第７３翼　ゲート襲撃、動き出す紫の麗人（後書き）

朱然さんは死なない、と言いながらエヴァにはどこか朱然さんが危なっかしく見えているようです。
朱然さん何気に死亡フラグ？

朱然さんがブリーチの世界で名前斬りを卍解して無双している夢を見たんだ……多分、疲れているんだと自分で思ったり。
それはともかく、前書きでも書きましたが、完全なる世界日常編を入れるか否か……どうでしょう？

第７４翼　合流、自己紹介をする紫の麗人

「皆、ご苦労だった」

フェイトは先程の最も警戒の厳重なメガロメセンブリアの要石を壊す事に成功し、同時刻に他の魔法門（ゲート）の要石を破壊してきた調、焔、栞、環、暦も同時刻に転移魔法によって墓守り人の宮殿へと帰還している。

俺はルーデシアのままだ。

「今、この時より計画は佳境へと入った。　これより計画の最終調整を行う……が、先程も言った通り、魔法世界と旧世界の分断に成功した。

数日程度を休息とする。　各人、最終段階まで英気を養ってくれ」

今回の作戦の締めを言い終わり、フェイトは此方に視線を向ける。

「現地に直接合流だった為に自己紹介も簡単なものしかしていないだろう柩？」

……超と月詠の紹介をしておけという事か。

「俺の本名は全員知っているのかフェイト？」

「質問に質問で返さないでほしいな……デュナミス、主が君達の事については協力者だという事以外は一切知らないよ」

つまり、お前の独断でデュナミス達へ意図的に俺達の事を隠していたなフェイト？

まあいい、その程度の事はこちらの計画に何ら問題は生じないモノだからな。

「先程のナギ・スプリングフィールドの忌子……ネギ・スプリングフィールドと随分としたしそうだったな？
そして、あの変身とシュゼンという単語……貴様が無数の姿、紫の麗人……我らの悲願を台無しにした紅き翼のシューゼンか？」

デュナミスの問いに対し、俺は元の姿に戻りつつ答える。

「シューゼンが間違いで朱然が正解だよ、影法師デュナミス」

「よくもぬけぬけと……フェイトよ、なぜ敵対者を我等の仲間に入れた？　貴様も知っているだろう？」

「ああ、知っているさ。　しかし、記憶のバックアップと今までの個人的な接触で彼の性格は信用できると判断した。
何か問題でも？」

フェイトはシレっとデュナミスに言う。
デュナミスはフェイトに聞こえないように、出来損ないめ……と呟き、だんまりを決め込んだようだ。

「では改めて、そこの二人も含めて自己紹介をしてくれないかな？」

まあ、いいだろう。
気は進まないがな。

「元紅き翼の朱然改め、完全なる世界では柩と呼んでくれ。　超、月詠、自己紹介は自分でしてくれ」

「わかったネ。　私は超鈴音、未来の火星人ダヨ。　戦闘は申し訳程度なので基本的に情報操作中心だと思てクレ」

超はヒラヒラと手を振りつつ自己紹介を簡潔に済ませる。

此処でも未来の火星人と言うか……フェイトガールズが超の事を可哀想な人を見る目で見ているぞ？

「ウチは月詠、神明流です～。　ウチは朱然はん個人に肩入れしてますんで、そこのところを間違えんといてくださいね～？」

最後の方で月詠が他の面々に向けて殺気を巡らせて一瞬の緊張が走ったが、すぐに柔和な笑みを浮かべ始めた。

行きなり警戒か……あまり露骨に面倒は起こしてくれるなよ月詠？

「と言う訳で、あまり仲違いはしないように。　唯でさえ僕達は人員が不足しているからね」

フェイトの言にそれぞれが返事をし、そこでようやく解散となる。

「そうそう、超鈴音……君は情報操作が得意だと言ったね？」

解散した後、フェイトは超に声をかけて来た。

「うむ、戦うよりも数倍は簡単な事ダヨ」

いや……寧ろ数倍面倒臭いだろうに……。

「で、それがどうかしたのカナ？」

「メガロメセンブリアの監視カメラをハッキングして、彼等が魔法門（ゲート）を壊したように映像を加工して欲しい。
そうすれば、僕達は彼等を隠れ蓑にして動きやすい」

「元クラスメイト達に罪を擦り付けろ、と言いたいのカ？」

超はフェイトを睨みつけ、フェイトはそんな視線をものともせず、純然たる損得勘定で事を進めようとしている。

これは……仲裁した方が良いかな？

「超、大丈夫だ。　問題は起こらない」

「！　そうカ……では引き受けようカナ」

「？　まあ、引き受けてくれるのならどんな理由であれ良いんだけれど」

フェイトはそう言って姿を消した。

ふう……怪しまれずに超を説得で来たか……。

「本当に大丈夫なのカ？」

超は確認の為に俺に問う。
フェイトは“別にネギ達がどうでも良いので大丈夫だ”という風なニュアンスだと受け取ったのだろうが、超にとっては意味が全く違う。

俺は以前、未来の大まかな出来事を知っている事を超に話している。

つまり、超だけには“俺の知っている未来も同じだから問題は無い”と受け取る事になるのだ。

「大丈夫だ。　なんならランダムに飛ばされた筈のネギ達の居場所を言い当ててやろうか？」

「ほぅ？　参考までに聴かせてもらおうカ？」

超は腕組みをして、何故か偉そうに言ってくる。

「ネギ、茶々丸、エヴァ、千雨、小太郎、朝倉、相坂はエリジウム大陸、ケルベラス大樹林。
夕映はアリアドネー魔法学園。　村上、和泉、大河内はヘカテス。
明石、佐々木はテンペテルラ。　古菲は龍山山脈。　楓、明日菜、木乃香、刹那はニャンドマ周辺。　アーニャ・ユーリエウナ・ココロウァ、宮崎、早乙女は知らんが無事のはずだ」

俺は、眉間を右手人差指で突きつつ、記憶にある事実を答えた。
因みにエヴァは茶々丸に掴まっていたのが見えたので茶々丸と同じ場所だと予想している。

「あー……後で白き翼バッチをハッキングして確認してみるヨ。
来れ（アデアット）」

超は仮契約カードを取り出し、呪文を唱えると、Ｂ５サイズのメカメカしいカードが数枚表れる。
超は慣れた手つきでそのカードを前方へと軽く投げた。
するとカードはバラけ、超の周辺を取り囲むように滞空する。

ヴンッ！という音と共に虚空に画面が表示された。

神秘の原文（アルカヌム・テクストゥス・レセプトゥス）

それが超のアーティファクトの名だ。

言いたい事は解る。

突っ込みたいのもだ。

月詠との仮契約の後についでだと言われ、契約した。

だが敢えて言おう、下心はない。

さて、このアーティファクトの説明をさせてもらう。

恐らく知っている人は、受け入れられたテキスト（テクストゥス・レセプトゥス）で通じると思う。

テクストゥス・レセプトゥスという言葉は、そもそも“あなたが手にしたこの聖書こそがすべての人に受け入れられたものである”という文から抜き出され、対格から主格に変えられたことによって生み出された。

それは詳しく語り出すと話が脱線するので置いておく。

効果は単純、常人には使いこなせない人間をアンテナにしたワイヤレス超ハイスペックコンピュータだと思ってくれれば良い。

このアーティファクトの所有条件は、この出鱈目なスペックを完全に使いこなす事が出来るかどうかだ。

つまり、超には造作もなく使いこなせるのである。

使いようによっては、5分も掛からずに世界中の核ミサイルを掌握を片手間でできるのだとか。

とんだ化物コンピュータだ。

「ヨシ、画像の加工は終わタ。　後はマスコミ関係にバラ撒いてお終いダ」

説明をしている内に超はネギ達が魔法門（ゲート）を壊した映像をでっち上げたらしい。

そして超は軽やかにＥｎｔｅｒキーを押した。

念入りに準備をした為に、魔法門（ゲート）の監視カメラは全て潰してから行動を開始した。

が、俺達が襲撃したメガロメセンブリアの魔法門（ゲート）だけはワザと監視カメラを潰さずに襲撃をかけ、それを加工するつもりだったのだ。

今頃、超によって加工された同時多発的な魔法門（ゲート）破壊テロによる唯一の偽造映像が魔法世界を賑わすだろう。

Ｓｉｄｅ　エヴァンジェリン

「……ものの見事に飛ばされたかと思えば、今度は指名手配か、有名人だな坊や」

私はクックッと他人事のように笑う。

水仙の差し金か？

坊や達だけが指名手配されているな。

「わ、笑い事じゃないですよッ！」

「馬鹿、叫ぶなッ！　顔隠せや……ッ！」

素顔を晒したままだったネギに、小太郎が小声で叫ぶという凄いのか凄くないのかわからない事をして掴みかかり、ローブについていたフードを強引にネギへと被せる。

水仙は、ああいう嫌がらせをさせると碌な事にならんからな。

「バッチの反応が近いです。　まずはバッチの持ち主を探しませんか？」

「まあ、それが妥当だろうな」

茶々丸の提案に私は同意しておく。

しかし、路地裏にはバッチのみが落ちており、発信器を付けた意味がないと一同が肩を落とした。

「朱然さんが言った通り……僕がまた、間違えたからこんな事に……」

「馬鹿かネギ！　前に言った事、もう忘れたんか！？　同じ事をグダグダ悩んでる暇があったら少しでもこれからどうするかを考えろや！」

「そんなこと言ったって、この状況じゃ！」

ネギと小太郎が言い合いを始める。

「まあ、待てよ。　こんな所で言い合ってたって状況は良くならないだろ」

それを千雨が仲裁し、一旦は2人共矛を収めた。

「で、どうするんだガキ共？　メガロメセンブリアの大使館にでも行って身の潔白を証明してみるか？」

「いえ、それは恐らく……」

ネギは適当に出した私の提案を否定する。

まあ、ダメだろうな。

「既にハメられてるこの状況では、出頭したところで拘束されるでしょう」

茶々丸は予想される解答を掲示する。

私も今回の事では指名手配されてはいないものの、私もこちらでは賞金首だ。

坊や達はそもそも濡れ衣と言う事もあり、拘束される程度で何とかなるかもしれないが、私は捕まったが最後、吸血鬼で無くなったとしてもエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルである以上、死罪は免れないだろう。

「僕達は自力で皆さんを見つけ出し、信頼できる人……ドネットさんに会う事か、自力で何とか旧世界に帰る事が当面の行動指針になりますね」

「ああ、恐らくそれで間違っていない。　それが模範回答だろう」

私が同意した後、小太郎は話を進める。

「じゃあ、次の問題や……このバッチは誰のやと思う？」

「バッチを持ってない飛び込み組は当然除外して良いとして、先生

の仮契約カードの念話が通じない相手……となると古菲と長瀬は他の連中よりかは足があるんだろ？」

「はい、古さんと長瀬さんならば昨晩よりもっと早くこの街へと着いていたでしょう」

茶々丸は耳のアンテナを伸ばしつつ、バッチを使ってもう一度周囲を捜査しつつ言う。

「だとすると残ったのは朝倉さん、でしょうか？　朝倉さんならば、恐らく危険な外へと出ずに街中へいる可能性が高いです」

「なら、朝倉のねーちゃんを捜すか……せやけど、このままじゃ碌な身動きが取れへんで？」

小太郎の当然な疑問にネギが答え、私達は年齢詐称薬を使い動き出した。

第７４翼　合流、自己紹介をする紫の麗人（後書き）

最近ネタが少なくて困ってるＶｉｅｒです。
皆さんのオススメなＳＳなど、教えてもらえると嬉しいかも。
今回は完全なる世界視点と、エヴァ視点でお送りしました。
原作の方は、やっぱり造物主が復活？しましたね～。
さらに歴代フェイトナンバーズ＆属性従者，ｓを従えての復活とか……エヴァが救援に来ましたが、それでも無理ゲーな気が……またネギパワーアップフラグだろうか？
もしくはラカンとかアルとかナギとかが出てくるのか？

次回は朱然さんのお料理教室でも書こうかな、と思ってます。
ではノシ

第７５翼　料理、懐かしい感覚と紫の麗人（前書き）

調子良く書けたので投稿。

第７５翼　料理、懐かしい感覚と紫の麗人

「やれやれ、呑気だねぇ……まあ、知っている事で、必要な手段とはいえさ」

俺はフェイトから言い渡された休日を過ごしつつ、新装備やらを造り、術式の構築を手伝っていた。

今は黄昏の姫御子……明日菜を中核にして行う術式の調整を行っているところなのだ。

本人が居なくとも調整できる範囲では準備を進めるつもりだと言っていた。

そもそも、明日菜が魔法世界に来なかったらどうするのか？とフェイトに問いかけた所、魔法門（ゲート）破壊前に拉致ってくる予定だったらしい。

つまり、ネギが魔法世界に連れて来た事は、正に完全なる世界（コズモエンテレケイア）にとっては渡りに船だったのだという。

本当にネギは厄介事を洒落にならないレベルで起こす奴だ。

そもそも、この世界では俺が麻帆良学園を引っ掻き回した所為で、その辺りが緩かったのだろうが、本来の世界で学園長やタカミチは止めなかったのだろうか？

止めなかったんだろうなぁ……さて、憶測もそこそこに最初のセリフのところに戻ろうか。

歴史を感じさせる西洋の古城を思わせる部屋の一室で、俺はある映像を見ていた。

グラニクス夏季大会、ミネルウァ杯。

ナギ・スプリングフィールドとオオガミ・コジローのデビュー戦である。

「おおーっと、これは勝負有ったァ――――――！　ヘカテスのラオ・バイオン、ダウンしたと油断したのか防御を抜かれダウ――――――ンッ！

　ラン選手は既に白旗を挙げた――――――ッ！！　一連の流れを見て、クアドゥルさんどうですか？」

「いやぁ、ラオ&ランのタッグはヘカテスでも指折りの拳闘士だよお？

　本来ならばオーソドックスで堅実なスタイルで攻めるこの2人を任すのは並大抵じゃあないからねぇ。

　何せ、虎獣人のラオには虎咆によって中級以下の魔法を打ち消してしまう他、俊敏性、攻撃力もあり決定打を打つのは難しい……加えて、ランは森妖精族、妖精族は見かけに依らない高魔力を保持してて、移動砲台と言っても過言じゃないしさぁ」

「今回のこの試合運びはどうでしょうか？」

「今回はそうだねぇ……恐らくルーキー達は実力が未知数、一度攻撃を喰らった事、強者の慢心を逆手に取り、カウンター狙いの一撃必殺を狙っていたんじゃないかねぇ？」

「成程、では今回はそれが見事にハマったと？」

「ん～、それもあるけどさぁ。　見た感じ、このルーキー達、異常に練度が高いんだよねぇ……こりゃ、意外と実力もラン&ラオ並みに有ったのかもしれないよぉ？」

　この解説のクアドゥルって人の声が、スネークの声にしか聞こえないんだが……。

「成程、これからに期待、と言う訳ですね！　では勝利者インタビューに移るようです」

解説と実況の音声が低くなり、ネギ達がインタビュー始める。

「新人さん、お名前をドウゾ！」

「コジローや！　オオガミ・コジロー！　覚えたってや！」

「ではでは貴方は？」

ネギは少し従順した後、司会からマイクを受け取り――――

「僕の名前は――――ナギ・スプリングフィールドです」

画面に映るネギは父の名前を騙る。

立派な魔法使いにはならないと言っていたから、ナギの名前は出さないかも？と思っていたが……まあいい、些細な事だ。

会場がざわめき、司会の悪魔族のおねーちゃんが慌ててネギに問い質す。

因みに低くなっていた実況と解説の音声からはドンガラガッシャーンッ！！という騒音が聞こえて来た。

ひっくり返ったのだろうか？

しかし、ナギの名前で似ているとなれば、魔法世界では嫌でも注目を浴びるだろう。

が、甘いなぁ……俺達……紅き翼の、それもナギの名前の重みをまったく知らないからこその軽率な行動だ。
ナギの名の重さを全く理解できていないからこその行動だな。
修行の為とはいえ、薄氷を踏んで踏み外すのは笑い事じゃないだろうに。

「僕と彼とは何の関係もありませんが、最強の男に相応しい戦いをお見せしましょう。強敵を待ちます！
ガンガン掛かってきてください！！」

会場からは観客達は、ネギが引っかけた事に対して、面白い奴が現れたと好評のようだった。

それに、ネギの奴は奴隷解放の為の資金稼ぎのついでに修行になるかもと思って拳闘士になったみたいだが、そもそも時たま事故で死ぬ事がある程度の見世物で実力を付けられると思っているのならば大間違いだぞ？
そこら辺を履き違えてるようだが、とっくにルールが決まっている戦い程度で成長できる段階はとっくにネギは超えてしまっている。
ラカンとの戦いはそもそもラカンが一撃必殺の規格外バグキャラだからこそ良い経験になったが、それ以外の格上ではルールがある以上、本気と言いつつ殺さない事を前提とした本気が当たり前になる。
故に経験など雀の涙程度だろう。
頭が良い癖にその辺りの思考が鈍いのは幼さ故か、実戦経験の無さ故か……溜息が止まらんよ。

俺は画面を消し、部屋を出ようとして部屋の扉を思いっきり開けた時だった。

「へにゃッ！！？」

「ニギャッ？！！」

という、何とも間の抜けた声とゴッ！！という鈍い音が二つ、俺の部屋の廊下正面の壁にめり込んだ二人組が居た。

月詠と暦だ。

「ひどいですえ～」

「頭が砕けるかと思いましたよぉ～」

壁にめり込んだ二人がゾンビのようにのっそりと壁から抜け出てくる。

というか怪我ひとつないのかよ、ギャグ補正か？

「で？　俺の部屋の扉に張り付いて何してたんだお前等は？」

「ウチは朱然はんをストーキングですぅぅぅぅッ？！」

取り敢えず、堂々と寝言を言った月詠にアイアンクローをかましつつ、暦に再度問いかける。

「で？　俺の部屋の扉に張り付いて何してたんだお前等は？」

「ぅぅぅぅぅ……」

一語一句違わず、とても良い笑顔言い切った。

月詠はもがいていたが、力が抜けたように身じろぎをしなくなる。

「そろそろお昼なんですけど、栞と調が遅れるそうで、お昼御飯が食べられるのは遅くなるそうです」

チラチチラリと月詠を見つつも暦は素直に答えた。

あー、料理作れる組が遅れてる訳ね。

なら――――――

「俺が作ろう」

「え？」

暦は驚いて声を上げた。

失礼な、孤児院でどれだけ俺が料理をしていたと思っていたんだ？

「俺は料理作れるのを忘れたか？」

「あ、ああ！　そう言えばそうでした！　あまりにギャップがあったからすっかり忘れてました！」

……失礼な。

「じゃあ、昼食を作るから手伝ってくれ。　ついでに3時のおやつも作るとしようか」

と言っても、もう既に正午は過ぎているし、手早く作れるパスタにでもしよう。

確か厨房に材料があった筈だし。

久しぶりに恵麻さん直伝のおやつ……時間的に焼き菓子でも作るかな……。

俺はまだファミーユでバイトをしていた時と、孤児院を切り盛りしていた事を思い出しつつ献立を考える。

「はい！」

俺は一旦部屋へと入り、月詠をベットへと寝かせた後、暦と共に厨房へと向かった。

「ではお料理を始めましょうか暦ちゃん、環ちゃん、焔ちゃん？暦ちゃんはお料理は全くできない？」

「は、はい！　栞と調にまかせっきりで……」

「さっさと作り方を教えろ」

「……」

目を伏せ、尻すぼみに答え項垂れる暦と何故自分がという思いが心中渦巻いている焔、ひたすらに沈黙している環、そして俺は久しぶりにノーラの姿でエプロンを着け、三人にお料理教室を開いていた。

墓守り人の宮殿は実質、ちょっとした廃都と言っても過言ではな

い。
その中心部にある一際大きな宮殿が俺達が生活する場所でもある。
しかし、宮殿と言うだけあって、個室にキッチンなどは無く厨房で調理し、全員が集まって昼食を食べるという生活になっている。
そして、此処に来て初めて俺は料理をしようとしたところで暦を引き連れている厨房へと向かっていたのだが、途中で環と焔に出くわし、そのまま料理を手伝ってもらうべく連行してきたのだ。
焔は抵抗したが、「男は料理のできる女に弱い」と教えたらいつかのツンデレ具合で着いてきた。
因みにノーラなのは、見た目と口調がとても柔らかくなるという理由です。
それ以外に意味は無い。
ノーラの容姿などは少し前の話を見ると良い。
それはまあ置いておき、調理を始める。

「ではここの冷蔵庫事情を鑑みて、今日の昼食はローマ風カルボナーラに決定しました！」

俺はそう言って、冷蔵庫から使う材料と調理器具をざっと並べていった。
普通の卵2、卵黄2、豚のほほ肉（グアンチャーレ）の塩漬け８０g、オリーブオイル適量、黒コショウ適量、塩適量。
それに2種類のチーズ、パルミジャーノ・レッジャーノ、ペコリーノ・ロマーノを大さじ4。
まずは湯を沸かしている内に豚のほほ肉（グアンチャーレ）の塩漬けの塊から肉切り包丁で大まかに包丁で材料を切り、調理するにあたって食べやすい大きさに切り始める。
大まかに切った塊を食べやすい大きさに切るのもやってもらおうかとも思ったが、まともに包丁を扱えるかどうかと思うと料理をした事がないという3人には難しいと思い、止めておいた。

硬い野菜や果物などなら素人でも何とかなりそうだが、肉や魚などは切る時に少し慣れがいるので、いきなりハードルを上げ過ぎだろう。

「それじゃあ自分が作る量のカルボナーラソースを作ってみて？まずボウルに卵を2つ、卵黄2つ、削っておいた2種類のチーズ、黒コショウを適量入れて、そこにあるミキサーでかき混ぜて」

3人は言われた通りに材料を入れようとした。

したんだけど……。

ゴリゴリゴリッ！

「にゃにゃっ？！　にゃんですか、この変な機械は？！」

電動ミキサーを初めて使った為か、ボウルのそこに直接ミキサーを押し当ててしまい、中身を飛び散らせる暦。

グチャッ！

「む、上手く割れない……」

焔は暦と環の卵を割るところを見て、ボウルの角へと卵を振り下し、透明と黄色の混じった液体と割れた殻に右手を汚している。

スポーンッ！

「……あ」

黙々と作業を進めていた環は、ボウルを抱えようとして手を滑ら

せ、中身を床にぶちまけ、声を漏らした。

3人はそれぞれ愉快な音を立てて不器用さ加減を披露してくれた。

「すみません……」

「く……ッ！」

「……ゴメンナサイ」

肉を切り終わった俺は、3人の失敗の後を即座にかたずけ、新たに材料を取り出した。

「謝らなくて良いの。

暦ちゃんには電動ミキサーの使い方を教えていなかった私が悪かったし、環ちゃんは運悪く手を滑らせただけで、焔ちゃんは初めて卵を割ったから力加減がわからなかっただけ。

今度は私が見てるから、もう一度やってみよう？」

失敗は成功の母、とも言うし、余程アレな腕前でもなければ、手順をしっかり見て覚えれば誰でも料理は出来るからな。

自然と漏れた微笑みを浮かべつつ、あやすように優しく言うと暦と環はホッと胸を撫で下ろし、焔はそっぽを向いた。

3人は先程と同じく、今度は先程より少しだけ慎重に作業を進め、失敗しそうなところを、孤児院で子供達に教えていたように丁寧に教えていく。

すると全員今度はカルボナーラソースを完成させる事に成功した。

俺は昼を食べる人数分のパスタを沸いた鍋へと投入し、塩を割と多めに入れ、程良くしんなりしてきたところで、3人に次の指示を

出す。

「それじゃあ、今からやるのをよく見ててね？」

俺は温まったフライパンにオリーブオイルを入れて広げ、切った豚のほほ肉（グアンチャーレ）の塩漬けの油が溶けるまでじっくりと低温で熱して行く。

茹で汁をそれぞれのフライパンに大さじ3～4杯入れて、フライパンで熱していた肉の脂が茹で汁と混じる事によって乳化したところで良い具合になるまで冷ます。

それを見た3人が同じようにたどたどしく俺の真似をしていく。

さて、パスタが良い感じかな？

菜箸でパスタを一本取り、パスタの具合を確かめ、丁度良い具合なので火を止め、流しに用意しておいたザルでお湯を切った。

それから丁度良い量のパスタをそれぞれのフライパンにより分け、カルボナーラソースを更に加えて、手早く馴染ませるようにかき混ぜた。

そこから中火で火を通し、かなり早めにフライパンの中身をかき混ぜて完成だ。

ふんふん、3人とも良い感じにだ。

焔だけ少し力み過ぎて少し零したりしてしまっていたが、それは許容範囲内だろう。

予め温めておいたお皿にそれぞれカルボナーラを盛り付けて完成。

「はい、出来上がり。　うん、みんな良い出来よ～。　もう栞と調は帰ってきてるんじゃないかしら？」

「ふぇぇ、大変でした」

「わ、悪くない体験だった」

「……じゅるり」

満足そうな顔だ。

教える事への楽しさ……うん、久しぶりの感覚かも。

「じゃあ、食堂には運んでおくから、暦は月詠と超を、焔はフェイトを、環はデュナミスと墓守りの主を呼んできてちょうだい？」

3人は素直に俺の言う事を訊いて厨房を出て行き、俺は簡単なサラダなどを作り、食堂で準備をした。

さて、あとは3時のおやつでも作るかな……冷蔵庫には何があったっけかなぁ。

クルミとハチミツか……クルミメープルビスコッティーにしよう。

お茶はミルクティーかな、普通に食べて飲んでも良し、ビスコッティーを紅茶に付けて食べても美味しいからな。

昼食、おやつはどちらとも好評だった。

特に、珈琲党のフェイトとデュナミスは、おやつを食べた後に「悪くない」と言っていたので、内心ガッツポーズしたのは内緒だ。

Ｓｉｄｅエヴァンジェリン

無事に朝倉和美と合流は出来たが、面倒な事に１００万ドラグマの借金をして奴隷に身を落としたらしい。
もっとも、奴隷という言葉とは裏腹に、魔法世界では国際条約で奴隷になった者には不必要な危害を加える事を禁じているし、衣食住もある程度は保証しなくてはならない。
それに加えて、昔の旧世界のような、奴隷の合意なしでの売り買いは禁止されている。
下手に難民などになるよりは奴隷の方が幾分かマシだ。
下心があったとはいえ、最高級魔法薬であるイクシールを使うお人好しに拾われるとは、和泉亜子、大河内アキラ、村上夏美、椎名桜子も余程、運が良い。

「しかし、１００万か……しばらくの足止めは覚悟するか……。
坊や達は拳闘大会に出ている間に、色々と情報を集めた方が良いな。　水仙とコンタクトを取っておきたい」

「マスター、魔法世界ならば情報屋が多数いると思いますが？」

「確かにそうだな……信用でき、なお高水準の情報を扱うようなのが良いが……」

エヴァは腕を組んで、拳闘場を背に歩いて行くと――――――

「そこの麗しいお嬢さん、どうだろう？　俺とお茶をしないか？」

この街に似つかわしくない小奇麗なスーツに、白髪。
手入れされ、蓄えられた髭、サングラス。
指には普通ならば一つないし、多くて二つ程度の……それも高価な指輪タイプの魔法発動体を１０以上身につけている。
身のこなしも、その瞳の強さもタダモノではない。

やり合えば、苦戦するだろうか？
さて……このレベルが偶然にも私に声をかけてくるか？
普通に考えて否だ。

「私に声をかけて来るとは、中々に見る目があるようだ」

此処は敢えて強気に。

「俺の名前はラリー。　師が無い……訳じゃあないが、傭兵だ。
偶々目に入ったお嬢さんがあまりにも美しくてね。
ついつい声をかけていたのさ」

傭兵……こちらでは珍しくは無いな。

「それで、その傭兵である貴方がマスターに何の用でしょうか？」

茶々丸はラリーに用件を端的に訊く。

「いやさ。　お嬢さん達、情報屋を探しているんだろ？　俺の知り合いを紹介しようと思ってな。
と言っても、俺の妹なんだが、とても名の知れた情報屋だぜ？」

ふむ。
嘘は吐いていなさそうだが、何所まで使えるのかが問題だな。

「で、その情報で私が満足できると断言できたとして、何故私なのだ？」

「水仙と言う単語。　妹が手に入れたメガロメセンブリアのテロで監視カメラが捉えた君達２人と水仙。

これ以上の答えが必要かい？」

……成程、あの加工された映像を解析し、私達と対峙する水仙を知っていたか。

私は目の前の男の警戒レベルを急激に引き上げる。

水仙、もしくは私を狙っているのなら、始末しなければならない。

「おおっと！　待ってくれ！」

ラリーと名乗った男は、おどけるように両手を上げ、降参のポーズで話を進める。

「戦う気は無いからな……一つ訊きたい。　お嬢さん達は水仙を摘もうとしてるのか？　それとも水仙と咲きたいのか？」

摘む……つまりは敵対だとすれば、咲くとは味方なのか、と訊いているのか。

何所に盗聴の危険があるのかわからない以上、仕方がないとはいえ、無駄に気障ったらしい奴だ。

「私は咲く方だ。　もっとも、私と共に居る者達は、水仙にとって害でしかないと思われているようだから。

私以外には近づかない方が良いだろう」

「成程ね。　了解了解。　じゃあ、早速色々と話をしようじゃないか、そこらの喫茶店でね」

ラリーは何気なく私の腰に手を回そうとしたが、私はその腕を叩

いて拒否し、喫茶店で情報交換をした。

第７５翼　料理、懐かしい感覚と紫の麗人（後書き）

朱然さんは、ようやく自然体らしくなってきたかも？

料理の話を書いていたら思い出したのだけれども、ある日バイト先のまかないがハヤシライスになった。
だが凄まじく濃かったのでアドバイスをしたら、作っていたおっちゃんは水ではなく砂糖を入れた。
リアルでそんな暴挙に出る人がいるとは思わなかったｏｒｚ。
まあ、どうでもいい話でしたね……。

次回は何を書こう……エヴァ視点は決まっているんですが、朱然視点がさっぱりまとまらない……。
朱然さんの作戦のあらましでも書こうかな……主にそれによってネギがどんな感じになるのかとか。
こういう時にノリ直書きで書いていると苦労しますね＾＾；
それと、オススメのＳＳを教えて下さった方々、本当に面白いものばかりで良い刺激になりました。
ありがとうございました！

第７６翼　追う闇、並ぶ月、振り返る紫の麗人（前書き）

あづい……溶ける……夏なんて嫌い……。

第７６翼　追う闇、並ぶ月、振り返る紫の麗人

Ｓｉｄｅエヴァンジェリン

「何？　坊やが辻斬りで重体？」

拳闘士のレベルはＡＡクラス……一般の魔法使いの優に１０倍。
今の坊やは約3倍の実力差。
死ななかっただけでも儲け物で、良い実戦経験になったか。

私は犬達に事情を聴きつつも、水仙がどうしているのかを考える。

水仙の子供達の一人であるラリー・バーミリオンと名乗った傭兵と会って数日後、同じく水仙の子供で情報屋でもあるコザクラ・バーミリオンに現在の水仙の行方を捜させている。
完全なる世界に入った事を教え、流石に本拠地と思われる墓守り人の宮殿に出向く訳にもいかず、世界中の監視カメラや目撃情報などを随時調べているらしいが、ここしばらくは動きが無いらしい。

それから数日後、坊やの腕が完治し、茶々丸と朝倉和美が能天気共を探しに、かなり強引なスケジュールの魔法世界一周旅行に旅立った。
坊やは水仙の仲間だった紅き翼、千の刃のジャック・ラカンに自分に足りない何かを見出したらしく、一時的に師事するらしい。
水仙に頼まれ、嫌々とはいえ坊やを鍛えた身としては、かなり納得がいかん。
が、実際に会った事は無いし、興味もないのだが、そもそも坊や

が自分に足りないものが、バカっぽさというところに行きつく思考自体が馬鹿なのではないかと思うのだが……。

まあ、それはいい。

だが――――

「むん……ッ！！」

目の前にいる筋肉達磨がカッ！！と目を見開いたと思うと膨大な気が渦巻き、周りの空気が軋み始めた。

おい、何だあの馬鹿げた気の量は……。

「覇王！！　炎……熱……轟竜！　咆哮！　爆裂閃光魔神斬空羅漢拳！！！」

凄まじい気が、変なポーズや動きを介し、異常な収束をした後に右の拳へとまったく無駄なく圧縮され撃ち出され、湖の水が霧となる程に弾けた。

……ただの馬鹿かと思ったが、あのポーズには気を効率良く収束する動作に繋がっている。

技名を叫ぶのも、言霊を纏った方が威力が上がる、なんていう理論が無い事もない。

自覚してやっているのか、それとも身体が無意識に覚えてしまったのかは知らないが、どうやら唯の馬鹿ではないらしいな。

「葱拳！！！　くぅッ！！　ダメだダメだ！！　語呂が悪い……ッ！」

唯者ではない馬鹿は、移動式の黒板で試行錯誤をした後、何かを

思いついたらしくまたもや構えを取った。

ぬ、先程とは比べ物にならんほど気が発せられている……ッ！？

「ネギッ、フィーバ――――――ッ！！！」

ラカンから放出されたエターナルネギフィーバーによって、一瞬の沈黙の後、数十キロ離れている筈の山の中腹から上が消し飛んだ。

ほう……意外と、この馬鹿に坊やを預けてみても面白い経験になるかも知れん。

寧ろ、水仙の光の魔法を覚えさせるには最上の組み合わせかも知れんな……今の坊やには、明らかに自己の根幹がなんであるかを理解していない。

考えれば考えるほど思考は雑念になり、己の最も純粋な衝動を見つけられなくなる。

純粋過ぎる物は異常とも言える力をもたらすが、同時に反動が洒落にならない。

まあ、それがあるから人間は身の丈に合った人間程度の力しか発揮できないのだが。

この理屈すらすっ飛ばす馬鹿との鍛錬は、坊やを更なる次元へと導く為の足がかりになる。

私はそんな事を考えながら、ラカンの前へと姿を現した。

事情やら水仙との関係を話すと、水仙の事で色々とからかわれたので、軽くおわるせかいや断罪の剣（エクスキューショナーソード）を放ったにも拘らず――――

「お？　なんだ？　おわるせかいか？　あー、此処の気候だと涼しいぜ」

とのたまったので――――――

「やめろよ金髪ジャリ……って何だその魔力剣は？　む？　痛て！　痛てて！　ふん！！」

断罪の剣（エクスキューショナーソード）をお見舞いしたのだが、ふん！！で折られ――――――

「霜焼けになったじゃねーか！　どうしてくれんだ！！」

コレ見てみろよ！ココ！と霜焼けになった部位を指さしつつ言っていたので、無言で確認したが本当に霜焼け以外の外相を与える事が出来なかった。

恐らく、膨大に練り上げた気を身体全体で包み込んだからこその技なのだろう。

それが無ければ十分にダメージは通る。

通るのだが……可笑しいだろ！？

流石に何かの間違いで死ぬかも知れんから手加減は加えたし、真祖の吸血鬼でなくなったとはいえ、魔法の威力は変わらんのに何故、私の最強クラスの呪文が霜焼け程度なんだ！！

一度は最強の看板を掲げた身としては納得いかんぞ！？

Ｓｉｄｅ月詠

えへへ～。

ウチは心の中で蕩けるような笑い声を上げる。

時刻は深夜。
魔法世界には月と言えるものがないので、星だけが瞬いている。

何故、内心で笑っているのかと訊かれれば、ついに朱然はん特製トラップ錠を解錠する事に成功したんですよ～？
ウチ剣士なのに、冒険家や盗賊になれるくらいにトラップ解除技能が鍛えられました～。
その成果が今、目の前に！

「うぅん……」

朱然はんが丁度良く仰向けに……。
どうやら今日はクルスはんになってはるようや～。

何時もならば、気だるげながらも凛々しい顔だが、寝ている為に何所か愛嬌のある隙が出来たような顔に見える事に、月詠はクスクス笑いながら顔のすぐ脇に座り、寝顔を観察し始める。

蛇足だが、朱然は寝て起きると姿がランダムに変わってしまう。
と言うより、寝ていると何度か姿が入れ代わっているらしい。
故にパジャマなどは着ない。
上は簡素なTシャツを着て、下着は一応、男物を穿いている。

月詠が朱然の寝顔を見ながら頬を突く。
本来であれば、朱然は敵意、害意のある存在が近づけば、寝ていても気付く。
流石に転移魔法やら村上夏美のアーティファクトのようなものを使われれば難しいのだが、最近は超とフェイト達でかなり複雑で繊細な術式の最終調整をしている為に必要以上に疲れが溜まり、敵意や害意を持っていない月詠に気付けなかったのである。

月詠は思う。

「いいわぁ……朱然はんは、とってもウチ好みです～」

純粋な戦闘力としての強さ……しかも未だに成長が止まる事がない。

いつか本気で殺し合ってみたい。

それでいて精神の脆弱さ……というよりも危うさ。

正義や悪、1と0などという二進論に囚われかけたが、ようやく柔軟さを取り戻し、必要でどうしようもない状況ならば、彼はどんな手段でも使い、利用し、何所までも堕ちてしまう特異さ。

嗚呼、トテモ美味シソウ。

月詠は笑う。

先程の蕩けるような笑いではなく、歪で、暗くて、不気味な笑みだ。

朱然が行おうとしている計画を聴いて、月詠は思う。

英雄と言う存在を無くす事。

既に紅き翼全員と会い、ジャック・ラカン、アルビレオ・イマ、ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグ、近衛詠春に朱然は了解を取った。

ナギ・スプリングフィールドは行方不明の為に了解は取れなかったが、恐らく彼もネギでなければ了承すると紅き翼の面々はそう言

っていた。
朱然はんの後ろを歩いていて、ウチに表情は見えなかったけど、彼は何の感情もなく言っていた。

「ナギはこんな時に居ないから悪い。　ネギは状況が最悪でも四肢の1、2本は貰っていく予定だ」

それは血が繋がっていなかった娘の為とはいえ、とても軽いとウチは思った。

しかし、朱然の次の言葉には、ぽかんと口を開ける事になる。

「うまくいけば、相打ちで華々しく俺と死んでもらう。　そして俺達、紅き翼は英雄として終わる事になる。
人々の記憶から俺達の存在は過去に変わる。　英雄は死ぬ。
英雄はもう過去の遺物になる……劇的な戦いの後、過去の英雄は死に、ネギは英雄に終止符を打つ為の礎となった事実だけが残る。
世界の危機を救った英雄ではなく、英雄殺しのネギ・スプリングフィールドとしての名を一生のものとして後世に残す」

メガロメセンブリアを潰すという前の段階で英雄を要らないものかもしれないと認識させ、実際に殺させて、死して尚、屈辱を受けさせる。
実にえげつない。
その過程も更にえげつない。
魔法世界を救った後、黄昏の姫御子をその手で殺させるか、世界全てを敵に回すか。
朱然が囚われの黄昏の姫御子の前に立ちはだかり、二つに一つを選択させる。
大切な物を切り捨てて世界を救えば英雄。

大切な物を取る選択をすれば世界の敵。
しかも朱然はネギの連れてくるであろう教え子達を、シュレディンガーの猫という名の人質にするつもりでいる。
黄昏の姫御子を殺さなければ、他の教え子達は死ぬかもしれない。
黄昏の姫御子を殺せば、教え子達にネギは侮蔑を投げかけられるかもしれない。
どちらを選んでも、ネギは朱然と戦わねばならず、ネギは更に死ぬ。
その選択を朱然が思った通りの回答で乗り越えたとしても、朱然とネギは必然的に戦う事になり、仮にネギが生き残っても後世まで悪名が残る。
どう転んでも、ネギにはバットエンド以外を用意する気がないのだ朱然は。

しかも、ウチには最高の獲物と殺し合いができるらしいというのが、また堪らないです～。

「超はんは魔力溜まりの残滓で、変わったかもしれない未来へと帰って、ウチも朱然さんと同じく、なるべく派手に戦って死ぬ事」

朱然の書いたシナリオの通りに世界を動かせるか、それとも失敗するのか。
それは誰にも予想できない。
だってそれは、誰にも予想できない未確定の起こした未確定の未来なのだから。

「ウチも寝よ」

ウチは朱然さんと何時までも一緒にいたい。
例えどんな形で死んでしまう事になろうとも、最後のその時まで

……。

ウチは当然のように朱然のベットへと入り、起きない程度に色々と悪戯をしながら睡魔が訪れるのを待つ。

もっとも、悪戯が楽しくなって寝不足になるかも～、あんなことやこんな事をして楽しみたいんです～。

Ｓｉｄｅ　朱然

暗闇の中に居る。
映画館のような場所に座り、射影器が動き出す。
ああ、これは夢だと理解する。
目を覚ませば忘れてしまう事も。
射影器から映し出されるその映像は、ルクレツィアが死んだところから始まった。
思わず唇を噛みしめ、拳を握りしめてしまう。

不安がある。
世界を騙し、逃げる。
それが最終的に俺が取った選択。
俺は自分の我儘の為に動く。
それは多分、一般的常識に当て嵌めれば、間違いなのだろう。
選択をしてきた。
関わる事、戦う事を。
だが、今回は逃げる。

しかし、この世界では、あまりにも俺は有名に成り過ぎた。
だから死ぬ事にしたんだ。

俺は軽く錯乱しながらも戦う姿が映る。

もし違う未来があったなら……ルクレツィアが死んでいなくて、
ネギ達と共に戦うような未来があったら、こんなまどろっこしい真似をせずに済んだのかもしれない。
本来の流れを歪め、決められた運命を変えようと足掻いた結果がルクレツィアの死。
今まで上手くやってきたと思っていた。
だがしくじった。
でもはいそうですかと納得できる筈ない。

ネギに俺の作った杖を投げつけている場面が映る。

俺は結局、上手くなどやっていなかったのか？
そんな自問自答が、罪悪感が、自責の念が渦巻いて行く。
俺は弱い。
どれだけ強くなっても、心が弱い。

手を差し出したフェイトの手を掴んだ場面が映る。

だから安易なネギへの復讐へと俺を駆り立てた。
ネギが自ら死のうとしたところを止めたのも、俺自身の手で殺したかったからだ。

時間航行器（カシオペア）をネギ共々殴った場面が映る。

ルクレツィアを時間航行器（カシオペア）で救わなかったのも、俺の心が弱かっ

たからなのだと思う。

世界の修正力によって、また助けられないのが怖い。

――――それ以上にそんな風に思ってしまう自分が忌々しい……ッ

ルクレツィアがまた自分の腕の中で死ぬのが恐ろしい。

――――女々しく、脆弱で、どこまでも強くなれない自分が憎い……ッ！

偽善に、偽悪に、己の心の根本的な根源を覆い隠していた。

――――当然のように全てを救ってやるなどと思っていた自分を殺したい……ッ！！

麻帆良学園を見限り、最後の戦いまでエヴァを遠ざけ、その原因を作った全てを皆殺しにした後、ネギを殺して自身もそこで朽ちようと思っていた。

麻帆良武闘祭でエヴァと戦う場面が映る。

そこから救い上げてくれたのがエヴァだ。
その見た目からは想像もつかない程の経験をした彼女の心は強く、エヴァは何でも無いように、それこそ当然のように言う。

――――――それがどうした、と。

己の矮小さを思い知った。
彼女には敵わないと思った。
自分の馬鹿さ加減を呪いたくなった。
そして何より、その途方もない心の強さに、俺は惹かれた。
包み込むような優しさをくれたのが蓮華なら、エヴァは此方の事情すら蹂躙して進んでいく。

――――――だからこそ俺は……どんなに無様でも、彼女と生きたいと思った。

やる事は多く在る。
綱渡りのようなところもある。
失敗するかもしれない。

それでも、今度こそ全てを叶えよう――――――どんなに困難だろうと、道が無かろうと。

――――――子供達を救い、エヴァを手に入れ、世界を騙して生き

ようと決めた。

本来、絶対死なない筈の主人公だろうが、ヒロインだろうが、脇役だろうが関係ない。

――――――目的の為に壊して、利用して、踏みつけよう。

そう思った。

射影器には、未来が未確定だという事を示すかのように真っ白に光っていた。

ああ、もう朝か……。

起きそうな感覚がする。

目を覚ませば俺の意識は薄れ、こんな事を考えていた事すら忘れるのだろう。

だが、俺は全てが終わるその時まで、この夢を見続ける。

第７６翼　追う闇、並ぶ月、振り返る紫の麗人（後書き）

ラカンのバグぶりにエヴァは憤慨。
月詠はヤンデレ?になってきているカモ……。
朱然さん精神的に脆過ぎ。
と今回はエヴァ、月詠、朱然さんの三視点からお送りしました。

ついに忌々しき夏がやってきた……Ｖｉｅｒは暑いの嫌いでござる。
冬は着込めばいいけど、夏はそれ以上脱ぎようないし……バイトの調理場の換気が最低過ぎて、夏場はサウナ状態になる……軽く、死ねると思いました。

中途半端になってる他の章の修正とかしようかな……擬音外したりとか、・・・・・・を……に変えたりとか。

第７７翼　光の試練、忙しい紫の麗人（前書き）

今回は少し筆が乗ったので、チョイ長めです。

第７７翼　光の試練、忙しい紫の麗人

「さーてと、守護人形達を仕上げるかなぁ……」

俺は相変わらず拳闘大会の中継を見て、未だに変わっていない事を確認した後、空中に浮かんでいた画面を消し自室を後にした。

コツコツと足音を響かせながら地下へと進む。

長い廊下を越え、螺旋階段を下り、下へ下へと下っていく。

昼とはいえ、廃都は薄暗く、人はほぼ居ない。

幽霊とか普通に出そうで怖いよなぁ……まあ、自分自身幽霊みたいなもんだけど。

でも怖いものは怖い。

そんな事を思いつつも足は止まらずに進み、地下の広い空間に辿りついた。

重苦しくも巨大な岩扉を開く。

岩扉と言っても魔法処理されており、強度はそのままに殆ど重さを感じないほどまで重量が軽減されているので、小さな子供でも開けられるくらいその手応えは軽い。

扉が開くと目の前には最終決戦でデュナミスの影人形と共に動く超と俺の特製守護人形が所狭しと並べられている。

別にデュナミスの意識と魔力を影人形達に裂かせる事も考えたのだが半自立型らしく、それならばとフェイトに影人形を生み出すのに余計な魔力を使うよりは予め、俺と超で用意した機械人形軍団を使えばいいと進言し、フェイトは頷いた。

ネギ達はともかく、エヴァには安全にこちらに来てもらう為の措置だ。

エヴァは人間だからリライトは効かない筈だし、実力も最強クラスだが、実戦から遠退いて永い間ほぼ戦場に出ていない事。
吸血鬼の不死身スキルに慣れていて回避し忘れて万が一が起こっては堪ったものじゃないからな。

そんな心配症を発症しながらも視線を巡らせると、守護人形達の合間を縫って超が現れた。
俺は気付いていない超に近づき、背中へと声をかける。

「超、早いな？」

「徹夜で此処に居ただけダヨ」

「完成はもうすぐって所か？」

目の前にある守護人形を眺める。
見た目は既に人間と変わりがない。
そのくせその造形は、とても恐ろしモノとなっている。
それが１０００体。
少ないとも考えられるが、この守護人形にはちょっと特殊な人工知能と声が搭載されているので、１０００体居るだけでも十分な脅威だ。
というか、俺が何も知らずにこいつ等と相対したら、間違いなく全力で逃げる。
なに振り構わず、回れ右をして全力で逃げる事のみに集中し、逃走するだろう。
例え回り込まれたり、逃げられなかったりしたとしてもだ。
そんな守護人形をメンテナンスする為に、俺は少し離れた場所にあるパソコンへと進み、クッションの利いた椅子に腰かけ、キーボードを軽快に叩き始める。

人工知能のプログラムについては、カオラとの共同研究によって大まかに把握しているのでそれほど苦労はしていない。
既に9割は完成しているからな。
守護人形には是非とも本物クオリティで居てくれた方が、メガロメセンブリアならびに帝国、アリアドネー艦隊の牽制として働いてくれるだろう。

「朱然、身体の方は全て完了ネ」

「ん、御苦労さん。　人工知能もそろそろ出来る」

パソコンから視線を外し、パソコンの向かいから声をかけた超へと返事を返す。

「しかし、何故この造形なんダ？」

「いや、何となく。
生理的嫌悪が有った方が近づきにくいし、この人工知能と声を搭載すれば、恐らく世界の修正力で本物並みの強さになると思うんだよね、多分。
そうでなくても足止めにはうってつけだ」

俺の勘……というよりも、コイツなら普通に次元を越えてきそうだし、何所かの並列世界で増殖とかしてたし。

「出来る限り本物の人間のように、というリクエストが有たからリアルを追及して作てはみたものの……コレは酷いと思うヨ」

「いや、中々の出来だ。　もっとも、暴走でもして世界中に逃げたら魔法世界が大混乱に陥りそうだが」

「間違いなく大混乱ネ！　こんなのが闊歩していたら、私は世界を呪うヨ」

超は冷や汗を流しつつ言う。

まったく同意見だ。

野生の〇〇〇〇〇が現れた！！

とか有りそうで怖い。

「さて、人工知能も完成したし、一体だけ起動してみて動作確認やらしてみようか」

カチッとＥＮＴＥＲキーを押し、人工知能の構造を完成させた。

「そうネ」

超は短く答え、起動のボタンを押す。

その日、墓守り人の宮殿でこの世に居てはけない者の咆哮が響いた。

Ｓｉｄｅ巻物朱然

「シュゼンさん?!」

「人造精霊に自分の記憶を転写させた所謂、巻物の精霊ってところだな」

光の巻物を開いたネギが驚き、ラカンが腕を組んだまま俺の正体を看破する。

「久しぶりだな、ラカン」

「ホンモンには最近会ったがな」

「ああ、成程。　でなければこの巻物をお前が持ってる訳ないか。で、コレを覚えるのはお前じゃなくて、ネギなんだろう?」

俺は視線をネギへと移し、ラカンに問う。

「は、はい！　でも……」

だが、それに答えたのはネギだった。

それにしても、せわしなく動く目に……ビクビクした挙動……。

「ネギ、お前……俺に取り返しのつかない何かをしたな?」

「……ッ！！」

挙動不審なネギが一際、ビクリと身体を震わせた。

「フム……さっきエヴァが出てったし、ちょっくら探してくるぜ。

千雨譲ちゃん、治療の為のアルテミシアの葉はあそこの小屋の中にたんまりと貯め込んである。
すり潰して傷に塗りつければ傷が治るから好きなだけ使ってくれて構わねーぜ？」

「はぁ？！　ちょっと待てよ！　弟子入りしたのに放置ってどうなんだ、オイ！　くッ、行っちまいやがった……」

ラカンは返事を聴かずにオアシスから跳躍して出て行ってしまい、千雨は頭を抱えた。

「エヴァもこっちに来てるのか？　俺の術式のペンダントは上手くいったって事か……中々の朗報だな。
まあ、それは置いておくとして、本体に何をしたのかは訊かないでおいてやる。　俺は朱然自身じゃないからな」

さて、時系列的には俺はお前に色々教えていたところだが、俺が居ないとなれば取り返しのつかないイレギュラーが起こったか？
俺は俺で独立してるし、細かい事を聴いたところで俺にとっては朱然の記憶は記録に過ぎないし。

「器は出来ているな……まあ、当たり前だな。　闇の魔法の方は習得したのか？」

「ま、まだです……ラカンさんから数日程、手ほどきを受けましたけど……」

「光から学ぶか……それはそれで良い。
課題は至極簡単、幻想空間の中で精神体となって戦いつつ、お前自身の本質を見出せ。

では行くぞ！！」

俺はネギと視線を合わせ、幻想空間へと精神を取り込んだ。

「ここが……幻想空間……」

ネギは周囲を見渡す。

周囲は霧に包まれ、何も見えない。

「そうそう良い忘れていたが、この幻想空間では身体強化以外の魔法や気が一切使えない。

それに精神体だから殺しても死なない。　いや……正確には死なない訳じゃなく、精神の限界まで死に難いだけであって、限界を越えれば死ぬ。

だから心して挑め。　これからお前が手に入れる為の力は、別の世界の理だ」

俺は姿が見えていないであろうネギへと向けて声を発する。

「この幻想空間はお前の心だ。　この霧はお前の心を写し、お前が進む毎につれて霧は晴れていくだろう。

油断をするな、お前はお前自身を殺す事に微塵の疑問も持っていない。　殺すつもりでかかれ」

当然、俺も霧に包まれ、ネギの姿が見えない。

だがこの世界は俺自身でもある為、俺にとってはあまり苦にはな

らず、見えている。

「くッ！！？　ガ？！　ぶぐッ！？」

生気のある気配――――――ネギが滅多打ちにされる音と、絞り出されているような声。

ネギの周囲には、生気の無い気配が多数、ネギを滅多打ちにしている。

「この世界はお前自身、お前の心象風景を思い出せ。　このまま何もせずに自分に殺されるつもりか？」

俺は良く通る声で、ネギへと指示を出す。

本体に何があったのか、ネギと敵対しているのか、何がどうなっているのかなど、俺にとってはどうでも良い。

俺の記録は飽くまで、修学旅行が終わってから学園長に、ネギを鍛えるようにと言われた辺りまでだ。

それに記憶の転写というよりも、記憶の記録の転写なのだから、それ以上は俺とは関係の無い他人事。

俺の存在意義は、光の魔法を覚えたいと思ってこの巻物を開いた者に死のリスクを天秤に賭けさせて死んで無に帰すか、それとも生きて人間を越えた人間にするかの二つに一つ。

さぁて、ネギはどちらかな？

グチリ、グチュリという鈍い殴打音が止む。

どうやら一度、死んだようだ。

自分自身の内包した要素が別れた同程度の存在が数百体、己のトラウマを刺激し、自責し、心身共に追いつめる。

自分自身を客観視する恐怖……つまりは自分の醜い部分すらもさらけ出される事。
戦いの場は己の心象を写す鏡……今は悩み故の見通しの利かない濃霧と言ったところか。
さて、まだ一度目だから生き返るまで大体５～１０分……後何回死ぬのかねぇ。

「ゆめ忘れるな。　お前が手に入れる光の魔法は、己の身すら焼きつくす両刃の光。
身を弁えない力は身を滅ぼすだろう。　だが、使い方を間違えなければ、お前は人間のままで人間を越えた力を得るだろう」

俺は死んでいるネギへと進み、その骸へと投げかける。

Ｓｉｄｅ朱然

「と言う訳で、フェイト、デュナミス、墓守りの主、月詠は廃都周辺の探索やらに出かけたので、君らの地力を強引に引き上げる為に模擬戦です。
最低でも各々が自身の種族の特化形態に成れるようにガチでいきますので、そこのところを了解してね？」

墓守り人の宮殿から少し離れた空中浮遊岩礁帯の一つにフェイトガールズと俺は立っていた。

守護人形の実験起動から3日経ったのだが、守護人形が暴走しました。
どうやら元の人格が相当アレでピーキーだったので。
勿論今は改良して、普段は紳士モードになっているので暴走の危険は無い。
暴走事件の際、フェイトガールズが特化形態に慣れない事を知った俺は、シナリオ通りに事を進める為に修行をする事にしたのだ！

「あの～……」

説明を簡潔に終わらせ、さてどうしようか？と考えていると、暦がおずおずと手を上げる。

「はい、暦」

「何故、眼鏡をかけているんですか？」

「仕様です。　突っ込んではいけません」

俺はニッコリと笑ってスルーする。

「え、でも――――――」

そんな俺に物申そうとする。

「突っ込んではいけません」

「――――――ハイ……」

もう一度、ニッコリと笑って言うとわかってくれたのか黙ってく

れた。
　いつものようにツンデレな焔が、今日は何故か借りて来た猫のように静かだ……良い事だ。
「それで、一体どういった訓練をするのですか？」
　いつも伏し目な調が問う。
「さっきも言ったように、フェイト達が探索に出て、計画の準備もほぼ完了。
　それに最終段階まで来たのに君達が戦力として足手纏いになるのは君達も本意ではないだろう？」
「た、確かに……しかし、一人一人に時間を割いて教えるのにも限度が――――」
　確かに一人一人に懇切丁寧に、教えるには時間が圧倒的に足りない。
　因みに俺の居ないオリジナルの方では、それこそいとも簡単に獣化、精霊化、龍化などを使っているが、本来それぞれの種族でも余程の天才でもなければ年齢を十分に重ねてから自然と特化形態を覚えていくのだ。
「ああ、その辺りは大丈夫。
　君らにやってもらうのは、俺と君ら全員での時間無制限、しかもどんな手段でも可の楽しい楽しいサバイバル戦だ。
　一応、殺さないようには気をつけるよ？」
「――――はい？」

え？何言ってんのこの人？という五人の視線が突き刺さった。

今までの経験上、それが一番効率的なのだから仕方がないじゃないか！とは年下も年下、娘、孫、下手をすればひ孫に位置する彼女等に言えるはずもなく、俺は黙る。

「いいだろう」

突然、焔が賛成をする。

もしかしたらツンが終わって、デレが来たのかもしれぬ……。

「ほ、焔？　正気ですか？」

「フェイト様の計画で、私達が足を引っ張って失敗したでは済まされん。　力は有るに越した事はない。　そうだろう？」

デレではなかった。

焔はこれからを見据え、その為に必要な手段として認識しているようだ。

「私も……そう思うわ」

「……コクッ」

「琹に環まで……た、確かにそうかもしれないのかな……？」

「……成程、よくよく考えれば、それは確かに私達の為になりますね……力がなかったから、私達は此処に居る」

「「「「……」」」」

口に出しては絶対に言わないが、流石は戦災孤児と言ったところか。

幼少からそんな目に遭っていれば、自然とそんなシビアな考えを否が応でも持つものなのだろう。

何者にも例外はあるが、少なくとも目の前のこの娘達や俺の子供達はそうだった。

因みに例外はネギ。

「時間も惜しい。すぐにでも始めようか」

俺は思考を止め、五人に言う。

「む……」

瞬間、五人は一斉にバラけ、俺から距離を取り始めた。

この辺りも流石は魔法世界の孤児と言ったところだ、っと！

そんな思考をしている間に暦、環、調がアーティファクトを展開。

俺の周囲約1．5メートルの時間が遅延され、ほぼ停止状態に陥る。

更に周りの景色が塗り替わり、広大な空間に無数の柱が浮かぶ場所へと変わった。

時間制御と結界空間のコンボ。

暦と環の時間稼ぎパターン。

通常ならば、時間制御ならびに結界空間は決定的な攻撃力を持たない。

だが、今のこの面子では話が違う。

調の音による固有振動破砕。
俺の周囲が一瞬で破砕され微細な粒子となり、漂う。
そこから更に焔の着火。
通常ならば密閉した空間でなければ起こらないはずの粉塵爆破は、時間制御によって通常の広い空間でも拡散せずに可能とさせる。
ラカンが喰らったコンボを受けた俺は爆発に巻き込まれた。
今の彼女達が出来る必勝パターンなのだろう。

「やったか？」

「どうでしょうか？」

フェイトガールズは一旦集まり、此方を警戒する。

現時点でも十分に実戦経験を積んでいたようで、意外と暑かったな……さぁてと、反撃を開始しますかね……。

この空間は無風状態だった為に爆煙が散るのが遅かったが、それでも次第に晴れていく。
その場所には、捻じれた角と巨大な尻尾が生えた赤胴の肌を持つ男が立っていた。

「あ、あれは……竜族ッ？！」

フェイトガールズは俺の姿を見て驚きの声を上げる。

「何を驚いている……知っているだろう？　巷では無数の姿などというつまらぬ二つ名を持ってる事を。
さっきの粉塵爆発は悪くは無い戦法だが、この赤竜の身を焦がすには温すぎる！！

まずは揉んでやろう……環、貴様はよく見るがいい。　これが竜族の竜化だ……ル〝ォア〝ァァァァ――――――ッ！！」

俺は咆哮を上げ、赤竜化する。

メキメキと軋みを上げ、身体が骨格レベルで造りかえられていく感覚。

膨れ上がる体積。

その大きさは、環の竜化とは比べ物にならない。

本来、竜族の竜化は女よりも男の方が大きく、年齢を重ねる毎に大きくなってくる。

竜族は魔法世界でも、魔族と並ぶ長命種族だ。

生まれながらにしての竜や悪魔はそれこそ千年単位で生きるが、竜族や悪魔族ならば長くて約３５０年程。

それに加え、人間には最高の魔法触媒となる竜族の角などを狙うハンターが居る為に、狙われやすい。

それ故に個体数が少ないのだ。

しかし俺の年齢は、エヴァの吸血鬼化を請け負った為に６８１歳……つまり人間どころか竜族ですら、俺の年齢は魔法世界で最長クラスの永さだろう。

それとは別に俺の取り込んだ子供達の年齢も加算すれば、既に７００歳は超えている事になる。

そこには全長約８０メートルの赤熱の巨竜が居た。

その大きさは帝国の龍樹に今一歩及ばないが、それでも並び立てるほどの巨躯になるのは必然。

「嘘……」

「馬鹿な……ッ！？」

「大きい……」

その通常ではお目に掛からない大きさの竜に、彼女達は瞠目した。

俺はそんな彼女等を見降ろし、見せつけるように翼を広げる。

ただそれだけで強風が駆け抜けた。

上手く手加減はするが、直撃は避けろよ～。

そして俺は、巨躯に似つかわしい長い尾を振り上げ、薙ぎ払うように回転しながら振り抜いた。

圧倒的で、物理的な質量での純粋な攻撃。

彼女達は早急に回避する。

俺の尾は見事に空振りし、周りの柱をまとめて薙倒して粉砕した。

むぅ……この姿になると動きが鈍いな。

「グルルルル……」

つい喋ろうとして咽が鳴る。

竜化している為に会話は出来ない為に、咽からは唸り声しか出てこないのだ。

「た、環ッ！！　先程の彼の姿は竜族でしたが、あの大きさはどのくらいの強さかわかりますか？！」

「……た、多分、最低でも３００歳は確実に超えてる。
竜族は一人でも異常なほどの戦闘力を持ってるし、角を狙ったハンターが何人も襲ってくるから……。
それでも、あの大きさの年齢まで生きている竜族なんて聴いた事ない」

普段からの無口さからは想像もつかないほど、環は饒舌に栞に説明をする。

「ですが、目の前に居る以上は現実です！」

「あんなのにどうやって勝てって言うんですかぁ！？」

「訓練とはいえ、油断していると死ぬぞ！？」

焔は叫びつつ瞳に焔が瞬かせ、俺の周囲を焼きつくさんと燃え盛った！

だが――――

「魔法障壁！？」

「あの巨躯でさえ厄介なのに、魔法障壁まで使えるとは？！」

焔の焔は当たったとしても炎の龍である赤竜を焼く事は出来ないが、敢えて俺は障壁を張った。

それと同時に思い切り空気中に含まれる魔力をを肺に溜め込み、魔法により可能とする竜種のブレスを吐く！

超広範囲梵焼殲滅呪文である燃える天空のモデルとなった赤竜のブレスが吐き出される。

「きゃあぁぁぁぁぁ？！」

「うあぁぁぁぁぁ！？」

それぞれが悲鳴を上げつつ逃げ惑う。

この世界の竜種のブレスは、口内にブレスを吐く器官が有る訳ではない。

少し前に簡単に説明したが、竜種の角だけでなく爪や牙も魔法触媒に優れている。

特に牙は小さいが本数は多く、杖などの魔法発動体に利用できるが故に竜種が魔法を行使しやすい部位の一つなのだ。

つまり竜種は己の牙が魔法発動の杖のような役割を果たし、空気中に漂う魔力を肺に溜め、吐き出す段階で魔力を編み、口内で変換されてブレスとして吐き出している。

もっとも竜にも適性があるらしく、それぞれの特異なブレスを吐くようになるのだ。

時々、特異体質で通常のブレスとは違う属性のブレスを吐く者もいる。

それは当然、苦手な属性を持たない俺にも言える事。

俺が特に得意なのは水。

つまりは――――――

「今度は水のブレス？！」

高圧縮されたウォーターカッターを思わせると言うよりは放水のようなブレス。

手加減なしであれば、正しく水で物体を斬れるのだが、それをするつもりは無いので軽めに放射した。

「グルアァァァ――――――ッ！！」

俺は咆哮し、誰も殺さないように全力で手加減しつつ、フェイトガールズを気絶させた。

「はーい、早速の気絶、ご苦労様～」

俺は元の姿に戻り、敢えて明るい声で気絶し、衣服が焼け焦げたフェイトガールズを叩き起こした。

「しゃ、洒落にならなかったんですが……」

「朱然さんも十分過ぎるほどバグキャラですよぉ……」

「……ガクッ」

「環?!　しっかりしなさい！」

「お、お前は一体何歳なんだ……」

栞がへたり込み、他の三人は息も絶え絶え、焔が突っ伏しながら俺に問いかける。

「肉体年齢だけで言えば……７００歳超えてるかも？」

「「「「「ななひゃっ？！」」」」」

口をそろえて全員が絶句する。

「はいはい、年齢くらいで驚くな。　それだけ叫べれば次……逝けるよね？」

その日、フェイトガールズの気絶回数は二桁に届いたという……。

Ｓｉｄｅ巻物朱然

「さて、粘ってはいるけど、死亡回数が５８回……ようやく霧が晴れつつある」

俺は空中に浮かびつつ周囲を見回す。

前までは目視できるのは約１メートルにも満たなかったのに、今では５０メートルほどの距離が視認できる。

戦いは嫌でも余計な雑念を減らしていくからねぇ……。

ようやく目視できるようになった事で、ネギの周囲が判別できるようになってきた。

眼前に広がるのは無数の屍。

全てが同じ顔。

全てが同じ身体。
全てが同じ器。
どうやら、なまじ頭が良過ぎ、その所為で雑念も常人より数倍の規模が有ったようだ。

そこには、ネギ・スプリングフィールドという名の屍で埋め尽くされていた。

当初、百数体と予想していたのだが、ネギ・スプリングフィールドはどうやら予想以上の雑念の多さが有った為か、数百体規模の雑念体が現れたらしい。
自分の雑念の一つが自分と同程度の力量の形を持ち、自分一人に集中して襲い掛かって来る。
その圧倒的な数の暴力が死ぬまで続けられる。
打ち合えば打ち合う程、自らの醜い部分が自分自身を削り、砕き、殺そうとしてくる。
それをひたすらに繰り返す。
殴り殴られ、潰し潰され、殺し殺される。
そんな苦行を、ただひたすらにネギは繰り返す。
また一段と、霧が晴れ、物言わぬ骸が増え続ける。
果たして、ネギはコレを乗り越えられるのだろうか？

「それこそ、神のみぞ知るんだろうなぁ……信じないし、祈らないけど」

あれから既に、巻物の中で3週間。
現実世界で3日。
ネギは不眠不休で自分を殺し続けた。
その顔には覇気は無い。
常に自分と同程度の強さを保つ自分自身との戦いは、生身に反映されずとも、異常なほどに鋭敏に、自身の技を研ぎ澄ましていった。
既に残ったのは本人と、一人。
戦場の霧は既に晴れ、足元に敷き詰められたネギの残滓。

「君が僕の最初……？」

ネギは力なく問う。
それほどまでにネギは疲弊していた。
身体は言うに及ばず、心さえ疲れ果てている。

「僕は欲しかった……父さんも、母さんもちゃんといる幸せな日常が欲しかった。
誰かを守る力が欲しかった。　誰にも負けない強さが欲しかった。
誰にも馬鹿にされないものが欲しかった。
誰にも、何にも、どんなものにも負けない……そんな力が……僕は欲しいだけなのに……。
邪魔するな、邪魔するな、邪魔するな、邪魔するな、邪魔するな、邪魔するな、邪魔するな邪魔するな邪魔するな邪魔するな邪魔するな邪魔するな……ッ！！」

ネギの残骸は言う。
欲しかったのだと。
求める事、それがネギの起原にして始まり。

何所まで何かを求めるキモチ……即ち――――――渇望

「僕が欲していたモノ……僕の始まり……そうか……これが僕の……なら――――――」

――――――欲しい。

ネギはまた、自分自身を殺した。
そこには何の疑問も雑念もない。

「ようやく見つけたか」

「はい、僕の……僕だけの力です。　僕はずっと、欲してました。ずっと……ずっと……」

「渇望、ね……まあ、闇の魔法との相性が良い訳だよ」

「え？」

「いや、こっちの話。　この光の魔法は、絶対に自分自身に馴染ませるな。　馴染ませ過ぎると前世の自分達に塗り潰されて己を見失うからな」

「はい、気を付けます。　ありがとうございました」

そう言ってネギは背を向け、幻想空間から出ていった。

これにて俺はお役御免か……さぁて、次に開けられるのは明日か……１００年後か……下手をすれば今後開かれない事もあるかもしれないな……ま、テキトーに巻物の中で暇潰しでもするさ……。

本体は一体何を考えて俺にネギを鍛えさせたんだ？

メリット、デメリットでいうならデメリットの方が大きいだろうに。

巻物の精霊は、そんな事を思いながら霞となり、消えた。

第７７翼　光の試練、忙しい紫の麗人（後書き）

今回は割と筆が乗りましたので１万文字超えでお送りしました。
朱然さんは既に肉体年齢で言えば７００歳越えてるという……。
しかもまたオリジナル設定的な物をバンバン書いてしまった……自重すべきだろうか？

ネギは光の魔法・渇望を手に入れた終わり。

次回は朱然さんが何故始めからネギが嫌いだったのかと朱然さんの根源ってなんじゃろな？という話を書く予定です。
いつもの如くこじ付けに近いですけど……。

第　ＥＸ・７章　何となく書いてみたｂｌｅａｃｈ編（前書き）

何時だったか、活動報告だったかで話したブリーチ無双を少し空いた時間で書いてみました。
うん短い。
近い内に……早ければ明日のお昼ぐらいに本編の次話を投稿する予定。

第　EX・7章　何となく書いてみたｂｌｅａｃｈ編

柱が壊される前に着けたか。

「なんダ？　この禿頭の仲間カ？」

相対するは無駄にデカイ破面（アランカル）チーノン・ポウ。

ポゥは緩慢な動きで此方を向く。

四メートルはあるんじゃないか、コイツ？

「仲間か仲間でないかで言えば……一応は仲間かな？」

俺は無難に答えつつ、踏みつけられている一角を一瞥する。

あばらの骨が結構な本数折れてるな……命に別状は、死神だからまだ十分間に合う範囲か……。

しかし、卍解を隠しておきたいから死ぬ方を選ぶのはどうなんだ？

余所に迷惑かけない程度ならそれでも構わないが、今回は流石に許容できないぞ……。

「てめぇは……一護と居た……」

「朱然だ。　そこの破面（アランカル）、お前が踏んでるのは一応は知り合いなんでな。

俺が相手をしてやるから足を退けてくれないか？」

「次の相手がオマエなら、この禿頭を踏みツブした後にする」

「ガ……ッ！　あぁぁぁぁぁッ！」

ポゥが踏みつけている右足に力を込め、本格的に一角を潰そうとし始め、その重量によってゆっくりと潰されていく一角が声を上げる。

やれやれ、あんまり一護みたいに面倒事には巻き込まれないように地味に立ち回ってたんだけどなぁ……。

八卦八武装（せんてんはっけ）とか魔法を使わなければいいか。

俺は何所からともなく紫の鞘に、紫の柄巻きの刀を取り出す。

「オマエも死神カ？　何故そんなアリのような霊圧で俺と戦うつもりでいる？」

「まあ、取り敢えずその足を退けとけよ。　名乗れ……名前斬（なまえきり）」

納刀された刀を逆手で抜き放つと共に振り上げる。

「斬魄刀……死神だな、オマエ。　そんな刀の柄だけで何ができル」

だが、そこに刀身は存在していなかった。

俺はポウの問いに答えず、刀身の無い柄を普通に握り直す。

「目の前の破面（アランカル）の足」

事もなげに、それでいて軽く右から左へとゆっくり動かす。

ゆっくりと言っても、常人からすれば十分過ぎるほどに早いのだが。

それに合わせるように、ポゥの足に今斬られているかのようにゆ

っくりと紅い線が通っていく。
ポゥは痛覚と共に気付き、一角から飛び退く。
だがしかし、俺は手を止めず、ポゥの傷は止まらない。

「ナ……ッ？！　何だコレは！？」

ポウは悲鳴を上げ、俺から距離を取り続ける。
だが、そんな無駄な抵抗は実を結ばず、右足がぽろりと落ちた。

「何だって……決まってるだろ。　斬ってるんだよ、お前の足を」

続けて左足にもゆっくりとした赤い線が歩いていく。

名を斬る刀の刃。
昔、俺が作った宝具足る刀。
俺がこの世界に来て、浦原喜助に拾われ死神になった。
それと同時に此処はＢＬＥＡＣＨの世界だということも知る事になる。
何時しか浦原商店で働きつつ、いつの間にか死神と成っていた。
幽体になる事は、サーヴァントに成っていた事もあり慣れている。
その時に偶々引き抜いた名を斬る刀の刃は変質し、斬魄刀と成っていた。
この世界では魔力と気は一纏めに霊力として認識されている。
ならば、それを律する事はそう難しい事ではなかったからだ。
問題は始解を習得する所だった。
いや、問題と言う問題は無かったのだが、その名前が問題だった。
名前は名を斬る刀の刃から名前斬と変わり、驚きつつも俺は始解を手にし、造り手にして使い手でもあった俺は短期間で卍解まで至る事が出来た。
名前斬は能力も名を斬る刀の刃何所か似た効果。

しかし、確かに違う効果をもたらす。

「やっぱり指定が曖昧だとこの程度の速度でしか斬れないか……」

「よくも……俺の足を……ッ」

（なんだ、あの刀？　刀身がねぇのに斬れてやがる……朽木隊長の千本桜とか、松本の灰猫みたいな斬魄刀か？）

一角はうつ伏せに倒れたまま朱然の斬魄刀の特性を考える。

（距離を離しても斬られ続けてるって事は、効果範囲はデタラメに長いか、それとも限界はねぇのか……。

ならもっと早く振った方が隙がねぇはずなのにそうしねぇって事は、早く振れられねぇってのが弱点か？）

「オマエ、同じように両足を？いでからコロす。　覚えておけ、俺の名はノーチン・ポウだ」

「ああ、そう……」

ポウは袖から小さな斬魄刀を取り出し、抜きながら言う。

「気吹け『巨腕鯨（デカルロン）』」

これが帰刃（レスレクシオン）か……キモイな。

ポウの顔面が膨れ上がったと思ったところで身体も巨大化し始めた。

デカ……ッ！！

「なんじゃあ、こりゃあッ！？」

いきなり声がしたので振り返ると、いつの間にか狛村と射場が一角を介抱していた。

「斑目の代わりに戦っていたのは貴様か？」

「ああ、そうだ」

俺は狛村へ肯定を意を返した。

「さぁて、潰そう。　ああ、面倒ダ」

とても緩慢な動きで腕を振り上げ、振り下そうとしてくる。

それを見ていた狛村が刀に手をかけた。

「卍か（私の卍解の速度では間に合わんか！？）」

「卍解！」

（何？！）

俺は迷わず名前斬（なまえきり）を高く放りあげ、叫んだ。

瞬間、刀身の消えていた名前斬（なまえきり）は、その柄すらも溶けるように消えた。

「なんじゃと？！」

だが、確かにそこには何かの気配が感じられる。

「死ネ」

「お前がな」

――――――千変万化名前斬（せんぺんばんかなまえきり）

ポウの腕が振り下された。
その巨大な破壊力を持つ腕が迫る直前。

「ノーチン・ポウ」

名前を呼んだ瞬間、ノーチン・ポウは呆気なく白眼を剥き、何の外傷もなく倒れ伏した。
気絶ではない。
文字通り、死んだ。
触れられないその魂魄を直接斬り殺された、唯それだけの事。

「何をしたのだ貴様……？　そもそも卍解だと？」

狛村がこちらを警戒するように刀に手を置いたまま問う。

「俺は死神でもあるのでね……卍解は最近覚えた。　ああ、敵対の意は無いから……って言っても信用してくれないか……。
敵対しない事の証明に俺の卍解の効果を教えよう。
刀傷限定だった名前斬の効果が刀傷限定じゃなくなり、唱えた部

位へ様々な千変万化の名の通り、様々な要因で斬り殺す事。
刀傷は言うに及ばずで凍傷、火傷などの属性的なものから、さっきのように魂魄を直接斬って殺す事も出来る。
自分で言うのもなんだけど、中々に反則な斬魄刀だよ」
ニッと狛村に対して、俺は笑いかけた。

第　ＥＸ・７章　何となく書いてみたｂｌｅａｃｈ編（後書き）

やっぱり続かない！！

何となくやられキャラの破面、ノーチン・ポウさんに逝って頂きました。

書いている途中で何故か鼻血が……別に愛とか、忠誠心が吹き出した訳ではなく、意味もなく出て来た（笑）

暑いからか？

因みにブリーチを調べていて斬魄刀占いをなんとなくやってみた。

Ｖｉｅｒさんは、羽ばたけ「風華フウカ」！！！！

羽ばたけ「風華フウカ」タイプのあなたは、自分の個性を大切にしています。面倒見がよく、自然と人が集まってきますが、初対面では人見知りしやすいタイプです。気まぐれで飽きっぽいです。日頃は温厚ですが、いったん切れると手がつけられなくなります。無視されるのが嫌で、ついつい相手の目を引く行動をとってしまいます。ペットが好きです。

一旦キレると危ない……まあ、当たってるかなぁ～生涯で３回しか本気で怒ったこと無いけど……。

恋愛について：

とても慎重で、ある程度の手応えがなければ行動に移しません。いったん好きになると大胆な行動に出るタイプです。嫉妬心が強いです。気持ちが冷め始めると破局まで一気に進んでしまいます。

嫉妬が強いって言うのはヤンデレか？　恋愛のタイプがそんな感じで何気に当たっているのが……。

今日のラッキーカラー：黒

Ｖｉｅｒさんに贈る言葉だ！：笑うのと泣くのは、同じコトだよ。いろんな意味でね。

第７８翼　交渉と敵対、起原に沈む紫の麗人

フェイトガールズとの修行も何とか無事に終わり、俺はフェイト達と合流した。

既に市街地では調と宮崎、早乙女、長谷川が戦闘に入っていると念話が入っている。

因みにだが、調のアーティファクトである狂気の提琴（フィディクラ・ルナーティカ）の演奏があまりにも酷かったので、特化形態を習得した後に超スパルタでヴァイオリンのなんたるかを叩き込んだ。

中々のヴァイオリニストになったと自負している。

『枢さん、こちら暦です』

『ラカンと交戦に入った？』

『はいぃぃ、いきなりパンツ盗られましたぁぁ……』

声色から暦はスカートを抑え、顔を真っ赤にしているのが念話でも想像がつく。

『あぁ……それはご愁傷様……こっちも交渉に入った。　なるべく時間を稼いでおいてくれ』

『わかりました、って何私のパンツのニオイ嗅いでるんですかぁぁッ！？』

ブツンッ！！と、暦との念話が切れた。

どうやらラカンが暦のパンツのニオイを嗅ぎ始めたらしい……元

戦友としては、これ以上身内が変態になっていくのはご遠慮願いたいんだがなぁ……わかってたけど。
既にアル（ロリコン）だけで一杯一杯だよ……。

それはともかく今、俺の目の前にはネギ、明日菜、刹那が居る。
過程をすっ飛ばして説明させてもらえば、フェイトとネギの交渉の場に俺も同席させてもらっている訳だ。
元の姿にスーツ姿で、周囲にバレないように認識阻害付き眼鏡をかけているが、ネギはどうやら俺の事に気付いているようだ。
しかし、今までのような態度ではなく。
どうするかを決めたのだろう。
強い意志を秘めた瞳をしているし、魔法世界の住人か自分の生徒かを天秤にかけるところでは一瞬の従順はしたが、明日菜の根拠の無い力説ではなく、自分の意志でフェイトの交渉を蹴った。

「では、交渉は決裂だね」

フェイトはそう言って、無詠唱の石の槍（ドリュ・ペトラス）を発動させて刹那を狙った。
が、魔法門（ゲート）での一件を覚えていて警戒していた為に、脇腹に掠り傷を作った程度で済んだ。
そこから刹那のアーティファクト、匕首・十六串呂（シーカ・シシクシロ）がフェイトの持っていた鵬法璽（エンノモス・アトエスフラーギス）を弾き飛ばす。
それを俺は地面に落ちる前に回収。
ネギはフェイトへと殴りかかり、それをかわしつつネギの拳へと乗り回避。
そのまま空中へと場所を変え、フェイトは冥府の石柱（ホ・モノリートネウキホイドゥ）を唱えた。

さて、こっちはこっちで二人の相手をするとしようか……。

「無極而太極斬（トメー・アルケース・カイ・アナルキアース）！！」

明日菜が冥府の石柱（ホ・モノリートネゥキホイドゥ）を打ち消していくが、俺はそれを邪魔しない。
本来ならば此処で月詠が現れるのだが、月詠はラカンの方にいる。
なんでも前回の刀のリベンジだと息巻いていた。

「さて、君達の相手は俺だ……まあ、二人の相手をしていて万が一にも隙が出来てしまう事もあるかもしれないが、それは過程の話だし行っても仕方ないかもしれないな」

わざとらしく、それでいて聞きとりやすく、わかりやすいように言う。

上手く攫えよ……でないと俺の計画も頓挫してしまうからな……。

「明日菜さん……行ってください！！」

「でも……ッ！」

「何故かは知りませんが、彼は敢えて私のみを誘っています。ですから！！」

「わかった！　刹那さんも気を付けて！」

明日菜は刹那へと声援を送り、ネギの方へと跳躍した。

「行ったか」

俺は大牙を取り出しつつ、明日菜の方を確認してから視線を刹那へと向けた。

「貴方は何を考えている？　わざわざあんな小芝居をして……！」

刹那は右手に夕凪を持ち、服装がスーツから学園祭に着ていたメイド服に一瞬の内に入れ変わる。

そして、その周囲には匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）が滞空し、主人の命令を今か今かと待ちわびている。

「いやなに……唯の余興だ……どの程度の障害になったかの確認、と言っても良い。

それで納得できないんなら捻じ伏せて聞き出して見せろ」

「くっ……馬鹿にしてッ！！」

俺と刹那は飛ぶ。

刹那は背中から生えている純白の羽を羽ばたかせ、俺は腰から生えている漆黒の悪魔の羽を使って。

「……ッ、魔族の？！」

「驚いている余裕があるとなぁ……ッ！？」

隙の出来た刹那に、俺は左手に大牙の鎖を持ったまま大牙を回転させ投擲し、刹那は強引に身体を捻って錐揉みしながら大牙をかわす。

この悪魔の羽は部分的にルーデシアの羽を出しているに過ぎない。

今は昼なので、浮遊術に使う魔力も勿体ないからわざわざ羽を使っている。

投擲して落ちてゆく大牙の鎖を引っ張ったところで、刹那の匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）が後頭部、右目、左脇腹、左足に飛んでくる。

俺は肉薄する４本の匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）を気で正方形の板のような形に維持し、上中下段各八面ずつシェルターのように身体を包み、匕首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）を弾いて見せた。

それを見た刹那は声こそ上げなかったが目を見張る。

特殊な修練を積めば気を斬撃に乗せ、火を灯し、身体を強化できるが、気は飽くまでも身体の中のものであり、纏う事は出来ても気を一定の形……例えば刀のような形状にして長時間維持する事は不可能だとされているが、俺はそれをやってのけたのだ。

仙人は食料を殆ど摂らなくても死にはしない。

聞いた事は無いだろうか？

仙人は霞みを食べて生きている事を。

魔力に大源（マナ）と小源（オド）が有るように、気にも似たようなものがある。

自然から生み出される生命力。

それこそ外氣と呼ばれるモノだ。

俺は特殊な方法で仙人となったが、本来は永い時間を経て外氣を知覚し、己の呼吸と共に取り入れて限定的な不死となる。

そして、その限定的な不死以外にも、仙人には外氣を自在に操る術……氣功術が可能となった。

前に触れたが、この世界の仙道（タオ）術からこの目で盗んだからこそ使えた技術。

見聞を拡げる旅も、中々馬鹿に出来ないものだ……まあ、昔に太公望が呉に遊びに来ては仙人に出来るドキドキ☆まんつーまん講座などと言うふざけた催しを開いては強制参加させられた為に、仙人の術を使う下地が出来ていたのはとても不本意だが、感謝しておかなくてはならないと思っている。

ともかく刹那は気の修練を積んだからこそ、外氣の操作などという神鳴流ですら出来ない事を平然とやってのけている事に対しての衝撃を隠せないのだろう。

「貴方と幾度か手合わせをしましたが、貴方は一体?!」

刹那は唐突に、俺へと問う。

が、俺は答えずに外氣の障壁を維持したまま刹那へとぶつかって行く。

ぶつかる直前、刹那は夕凪を両手で持ち、俺の八卦交(はっけこう)を受け止める。

「貴方は何がしたいんですか?!　ネギ先生への復讐ですか?!」

叫ぶ刹那に対し、俺は淡々と答える事にする。

「当たり前だろう?　それ以外の何がある?」

「ネギ先生へ復讐して、それが終わった後に何が残るんですか!世界まで巻き込んで!?」

刹那は叫び続ける。

届かない声を届かせる為に。

「違うな……ネギが世界を巻き込んだんだ……予定調和なんだよ……ネギも、お前も、白き翼も、完全なる世界もな」

俺はネギが嫌いだ。

始めて会った時からずっとずっと嫌いだった。

頭では下らないと思っていても、嫌いな物は嫌いなのだから仕方がない。

俺の知っている本来のネギ・スプリングフィールドは、自分の能力をセーブせず行使している事が傲慢に見えた。

幼いが故に自覚などなく、素直に能力を行使する。

「なッ、どういう意味だ！　先生が世界を巻き込んだ!?　予定調和とはなんだ!?」

俺の言葉に困惑する刹那へと大牙を振りかぶる。

それだけならまだいい。

ネギは主人公だ。

主人公だからどんな困難も例外はあるとはいえ、乗り越えていく事が確定している。

俺はそれが気に喰わなかった。

何故ならネギ・スプリングフィールドという人間は天才だから。

何故ならネギ・スプリングフィールドという人間は主人公だから。

何故ならネギ・スプリングフィールドという人間は成功者だから。

１００と３０年、俺はもがいた。

確かに魔眼という能力はあったが、それを使っても俺には絶対の成功などは無く、失敗の危険が常にある。

リスクは消えない。

どんなに手を尽くしても、どんなに手札を揃えても、どんなに万策を尽くしても……物語に俺と言う存在は無い異端の存在。

運命は既に決まっている。

主人公は勝って、悪は滅びるという単純明快にして愉快痛快な絶対の摂理。

巻き添えになった人も悪は滅びた、死んだあの人もこれで報われるなどと言う。

勇者気取りの者達はハッピーエンド、めでたしめでたし。

でも――――――そんな事は、絶対とは言えないが有り得ない。

馬鹿馬鹿しくても、その感情は常に付き纏って来る。

「お前も見て、聞いただろう？　俺の記憶を……この世界もまた、物語の一つに過ぎないんだよ」

八卦爻（はっけこう）の上段と中段に隙間が開き――――

「確かにこの世界の生きとし生ける物は本物だ。　でも確実に、着実に、決められた未来へと進む。

変えようとすればそれ相応の大きな歪みを孕ませなければならない。　だが失敗すれば因果応報が待っている」

中段の刹那が受け止めている一面だけ押しだして夕凪を弾き出し――――

実際に会ったネギは確かに気に入らなかったが、同時に理性的な部分が冷静に思考する。

コイツは凄い才能を持っている、それで良いじゃないかと。

別にそんなの関係なく接すればいいのではないか？と。

でも出来なかった。

事有る毎に、ネギが起こす騒動が癪に障った。

「どんなに困難だろうが……今度は失敗する訳にはいかないんだよォッ！！」

上段と中段の隙間を大牙が通り抜け、刹那は大牙の刀身の腹に当たり、時計台の壁に激突した。

随分と呆気なかったな……この程度では潰し合いにならないか……。

これじゃ、計画も修正の必要があるかもしれんな。

どうして、どうして、どうして。
どうしてこんなにも世界はズルイ事で溢れている？
そう生まれたからか？
そう決められたからか？
そう行動するからか？
何故、何故、何故、何故？

この魔眼はその激情から零れ落ちた物。
満たされないから次々と溢れた物。
自分に無いものを補強する為に自分の物にする為の物。
気が付けば、今まで保ってきた感情は反転し、塗り潰される。
それが……俺の起原なのだから。
それを知った時、この力が……自分が嫌いになった。
人を妬み、恨み、嫉むような醜くも唯人には過ぎた起原。
七つの大罪に数えられる禁忌。
流見の魔眼の力の根本。
暴食、色欲、強欲、憂鬱、憤怒、怠惰、虚飾、傲慢。
後に虚飾は傲慢に含まれ、怠惰と憂鬱は一つの大罪となり、追加された後付けの大罪。
そしてもう一つ。
俺には起原が二つあった……そんな感情に並ぶとも言える起原。
見せかけはりっぱだが、中身のなく、思慮が浅い愚かな事。
真実でなく、外面と内心とが一致しない見せかけだけで中身のない意。
外装が内実を示さず、根拠のないもので内実のないモノ。
等身大を見せないのではなく、見せられない。
この起原もまた、愚かで、愚劣で、低俗な起原。

「今度こそ……間違ってたまるかよ……」

俺は言い聞かせるように呟き、翼をはためかせて宙を舞う。

だが、それらも力となるのなら受け入れよう。

俺には幾ら力が合っても足りない。

今まで、俺は満たされていたのだろう。

最愛の妻や仲間達に支えられ、今まで抑えられてきたのだろう。

そのタガが、外れかけているのだろうか？

或いはもう外れてしまっているのかもしれない。

初めて起原に触れたのは何時だっただろう？

ああ、そうだ……姉を助けられなかった時、確かに俺は世界を恨んだ。

何故、世界はこんなにも不公平なのかと。

こんなにも不幸が続くのならば分不相応だろうが世界すら謀り、変えてしまおうと身の程知らずにもそう思った。

その起原を自覚したのは何時だっただろう？

それははっきりと覚えている。

俺が繰り返し死を体験している内に、中身（こころ）が塗り潰されそうになっていた。

深く深く、恨んだ……それと同時にどうすればよいのかをずっと考えていたんだ。

この魔眼は、そんな二つの起原を元に発生した俺だけの力。

この魔眼が何故、俺に発生したのかを鑑みれば、遅かれ早かれ自身の起原に辿りつくのも当然だった。

物事の流れを見る魔眼。

自分には無い力を持つ相手を知って識って理解（し）って、強引に自分の物にする力。

自分の物ではないから、中身の伴わない張りぼてにして虚空の力。

この力で、今度こそ間違わないように戦おうと……そう、思った。

はじめに芽生えた、その感情は……その……感情の名前は――――
――嫉妬と虚仮

Ｓｉｄｅフェイト

なんだ？

心中に困惑が渦巻く。
目の前の敵は、本当にあのネギ・スプリングフィールドなのか、と。

敵？
僕は彼を敵足り得ると思っているのか？

「掌握（コンプレクシオー）！！」

奈落の業火（インケンディウム・ゲヘナエ）を取り込んだ？
ああ、確か聞いた事がある。
闇の魔法使い、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルが他の吸血鬼に比べ格段に賞金額が高かったのは真祖と言うだけではなく、その固有技能を用いた事も拍車をかけていたという。

「成程、闇の福音（ダークエヴァンジェル）の固有技能かい？」

ネギが顔面へと向けて放った拳の側面を払い、冥府の石柱へと投げた。

「闇の魔法（マギア・エレベア）……唯の出力アップ。
正直、さっきの交渉で僕の提案を一蹴した事には素直に称賛を贈るにしても、戦闘に関しては二流が良いところだね。
実に残念だ」

ネギの連撃を僕は確実に逸らし、払い、無詠唱の石の槍を左手で操り、頭部へと至近から投擲。
が――――

「！！？」

ネギは首を少し傾げ、ギリギリで石の槍をかわし、カウンターの肘を叩き込んできた。

「フェイト……君は少し喋り過ぎだ」

「今の一撃……ドーピングじゃない？」

「今此処で、君を倒し切る！　掌握（コンプレクシオー）！！」

――――術式兵装・偉大なる魔法使い（プロ・アルマティオーネマギステル・マギ）

「なに？」

何だ？
何かを掌握した筈なのに姿が全く変わっていない？

「兵装置換・疾風迅雷」

瞬間、ネギの姿を一瞬だけ見失った。

「く……ッ！！」

右側頭部に衝撃。

一瞬とはいえ……不意を突かれたとはいえ僕が見失った？

名称からして雷と風系……機動力重視か。

「残念だったね。　一度見せてしまえば、その早さも意味は無い。

機動力重視とはいえ軽過ぎる」

今一度突っ込んでくるネギへとカウンターのタイミングを合わせ、拳を穿つ。

これで終わりだ。

「兵装置換・鉄心石腸」

ネギの顔面を確かに捉えたと確信し、拳を打ち抜くが、その拳に伝わる感触は石壁を叩いたかのような硬質なもので、それと同時に腹に衝撃が走った。

「……ッ！！」

今度は地？

一体どうなっている？

次々と呪文詠唱無しに術式が入れ代わる？

困惑が困惑を呼び、思い当たる術式を思い出そうと頭を回すが、引っかかるものは何一つない。
そんな思考の空白に、侵入者が現れた。
「我、汝の真名（アナタノオナマエ　ナンデスカ）を問う！」
宮崎のどか?!
と、犬神小太郎?
あの魔法具は真名破りの……彼女は読心術師、この組み合わせは少しマズイかな。
気を乗せた一撃を見舞うも、影のゲートを使っての移動を始めた小太郎への攻撃は当たらなかった。
「案外、大間抜けやな！」
言ってくれるね、犬神小太郎。
宮崎のどか……彼女は危険だ、戦闘力こそ低いが脅威で言えばネギ・スプリングフィールドに並ぶほどか。
早めに舞台から退場させておこうかな?
「君は……追（ウェスティー）せ――――――」
「行かせない！！」
「邪魔をしないでもらおうか、ネギ・スプリングフィールド。　退いてくれ」
「退かない！」

「どうやら……少し本気を出した方がいいのかな？」

にわか仕込みの術程度で僕に勝てると思われるのは少し癪かな……。

瞬間、オスティアの街に砂が舞った。

Ｓｉｄｅ朱然

「私も行くよ……少し離れたところから彼の思考を……」

「何！？　アカンそら危険や！　成果はもう十分……」

――――あーあ、全くフェイトも詰めが甘い。

取り敢えず、二人の四肢の骨でも圧し折っておくか。

並ぶように立ちつつ――――

無造作に右手で小太郎の右腕を掴み――――――
右足の靴底を左足の膝裏にあてがい――――――

――――握り潰した。

――――踏み砕いた。

「く、そがぁぁ……ッ！！」

小太郎は残った左腕で反撃を試みてきたが、俺はその左腕も掴み握り潰す。

「あぁぁぁぁッ！！？」

その小太郎をのどかの隣へと投げ捨て、小太郎は地べたを這いずり俺を見上げるように睨みつけた。

「止めておけ、前回のように遊びの範疇なら見逃してやるが……今回は遊びじゃない。　今退くなら命だけは助けてやる」

「ざけんな……」

「さて、宮崎のどか……お前にも選択肢がある。　大人しくその指輪を壊すか、それとも此処で死ぬか」

俺は一歩、また一歩と１０メートルほどの距離をゆっくりと詰めてゆく。
が、のどかは大胆にもいどのえにっきを取り出し、俺の真名を呼ぶ。
「朱然さん、貴方達の目的は……ッ」
「交渉は決裂か……まあ、ネギ（あんなの）に関わった事が運の付きだったな。なに……痛いのは一瞬だ、死ね」
俺はのどかの首へ気で強化した手刀を薙ぐように振るい――――
――銃声が響いた。
１２時方向から銃撃?!
左後方へ瞬動による緊急回避、並びに対物理、魔法障壁展開!!
油断は無かったが……む、次弾かッ!!
俺は瞬動によって分身が出来るほどの速さで動く。
幾ら早い銃撃とはいえ、点での攻撃でしかないのならかわすのは容易い!
銃撃の弾道からスナイパーの場所をすぐさま探る。
瞬間――――――銃弾がジャイロ回転とは関係なく曲がる。

一分の殺気どころか、着弾する直前まで気付かなかった。
龍宮よりも腕前は上、それにこの曲がる弾……まさか、この銃撃は？
見つけた！
正面の１キロ先、闘技場最上階……やはり！！
スコープを覗き狙うその姿を見間違える筈がない。
殺気の殺し方も、狙うポジションも、撃ち方も、姿勢も、呼吸も全部俺が教えたもの。
「ブルバギ！！」
何故、俺を狙うブルバギ！！
俺はこの間も瞬動で移動しつつけ、銃弾を避ける。
よくよく見れば、銃弾の弾頭は拘束用の捕縛弾だ。
交差する視線。
「……」
不意に銃撃が止んだ。
お前は……白き翼に付いたのか？
スコープを覗く息子に変化は無い。
どうやら俺がこれ以上、２人に何もしなければ、撃つ気は無いらしい。
俺はブルバギに背を向け、へたり込んでいるのどかの脇に落ちて

いたいどのえにっきを火の矢で燃やす。

「運が良かったな……何故、ブルバギがお前達を守るのかは知らないが、次に会った時は警告無しで殺す」

俺はそう言ってその場を後にした。

第７８翼　交渉と敵対、起原に沈む紫の麗人（後書き）

と言う訳で、朱然さんの起原は嫉妬と虚仮でした～。
そしてそして、ネギが嫌いな理由は起原に引っ張られた為です。
主人公は主人公故に当たり前のように一部例外を除き、ハッピーエンドに辿りついてしまうという事を、原作知識を知っている朱然さんは嫉妬しているという、そんなお話でした。
今までは恋姫編一刀不在でしたので問題無し。
Ｆａｔｅ編衛宮士郎は最後の方で虐めてました。
ＡＢ編は音無が主人公でしたが、あまり目立ったような事がなかったので普通。
ネギま編ではモロにネギと関係していた為にとても嫌い。
と、こんな感じに。
虚仮は感想で狂気を内包する本喰い様の感想から、確かに有りかもと借用させて頂きました。
魔眼は起原覚醒の嫉妬の能力でした。
虚仮の能力も別に造ろうか悩み中。

因みにネギの術式兵装・偉大な魔法使いの名称は、ネギの皮肉です。

そして朱然さんの子供、ブルバギとの相対。
コレはまあ、以前に話していた通りにヒナギク、ラリーと共に最終決戦に参戦します。

次回からは活動報告に書きましたが、最終決戦までの簡単なプロット書いて、その通りに書く予定なのでいつもよりも少し時間が掛かるかもしれませんのでご了承ください。
と言う訳でまた次回ノシ

第７９翼　協力者、告白される紫の麗人（前書き）

どうしてこうなった？

第７９翼　協力者、告白される紫の麗人

小太郎とのどか、ブルバギとの敵対が終わった後、俺は転移魔法を使い旧オスティアのアーニャ、明日菜が捕まっている場所へと転移した。

「その子は人間だ。　無意味な殺生は控えるんだ……目的の為の不可避な犠牲に止めなければ大義を見失うよ」

焔が炎をアーニャへと徐々に近付けていたところをフェイトに窘められ、焔はフェイトへ謝罪する。

フェイトは栞と共に明日菜確保と入れ代わりの功績を褒め、焔は頬を染める。

「して、他の者の首尾は？」

焔はこちらに視線を向る。

「そうだね……君達の報告を聴かせてもらおうかな」

「も、申し訳ありません……読心術師に虚を突かれたばかりか、犬神小太郎が予想以上に……」

本来と同じく成果無しか……調不憫な娘……。

「環、暦は月詠さんの手を借り、何とかラカンを封じる事が出来ましたが、封じられた本人はどうやら遊んでいるようでしたので……撤収命令が無ければ、突破されていたかもしれません……」

パンツ取られた上に、匂いまで嗅ぐとか遊び過ぎだろラカン……。

「俺の方は桜咲刹那を気絶させた後、宮崎のどかと犬神小太郎に接触。　犬神小太郎の両腕と左足の骨を砕いた。
宮崎のどかにいどのえにっきを展開されたので、読まれる前に燃やしてきたが……」

まさかあそこでブルバギが出てくるなんて、予定外の予定外だ。

「？　何かあったのかい？」

「いや……厄介な協力者が加勢してきたので、これ以上の騒ぎは危険と判断して撤退した」

「協力者か……まあ、概ね予想以上の戦果を出せた、それで良しとしよう。　皆、ご苦労様。
僕の方も、ネギ・スプリングフィールドが予想以上に成長していてね……少し手こずったよ」

フェイトを手こずらせる、か……思った以上に成長したか。
手こずらせる程度じゃ、まだまだだな……やはり計画の修正が必要か？

「フェイト様がですか！？」

「ああ……認めたくは無いけれど、僕がだ」

おや、少し機嫌が悪い？
そこまでネギにやられたのが気に入らなかったのか？

「アンタ達……一体何が目的なのよ！　その子達も私達と同じで普通の女の子じゃない！
世界征服とか、滅亡とか、そんな事！」

俺達の方を黙って見ていた明日菜が鎖を揺らして、耳障りな音を鳴らしながら騒ぎ出した。

「そこまでだ神楽坂明日菜。　いや、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシア」

俺は敢えて、この場面で明日菜の本名で呼ぶ。

「それ！　私が夢で見た本当の名前！？」

「それってオスティアのお姫様の名前じゃない！！　アスナは一般人だったんじゃないの？！」

俺の言った明日菜の本名にアーニャが反応する。
ネギはどうだか知らないが、アーニャは魔法世界史も取っていたからか、その名前の意味を知っているのだろう。

「……一つ良い事を教えてやる。
ネギ・スプリングフィールドの父は、ナギ・スプリングフィールド……これはこの世界で嫌と言うほど聞いただろう？
ネギの母親の名前はアリカ・アナルキア・エンテオフュシア……どういう意味かわかるか？」

お前には、ネギへの精神的な打撃を与える為の布石となってもらうぞ、神楽坂明日菜。

「ちょっと待ちなさいよ……え？　つまり私は……」

「ネギの叔母だ」

「う、嘘!?　だってアスナはまだ中学生でしょ?!」

「そう……肉体年齢も精神年齢も中学生だが、それはお前のその希少価値故に国によって時間凍結空間に幽閉され、必要な時のみ連れ出され道具として利用されていた。

それを大戦時にも行ったが、お前の力を不出来な術式で御そうとして暴走し、強制封印され続けていたんだよ。

空間ごと封印されていたお前を、アリカがメガロメセンブリアに拘束される前に独断で解放し、俺達……いや赤き翼に託したんだ。

二度と黄昏の姫御子なんてふざけた事に……メガロメセンブリアや他の国の魔の手から逃す為にガトウが命を犠牲にしてお前を麻帆良学園に預けたのに、お前はネギにのこのこ付いてきて、こうしてお前は俺達に利用される事になった」

まあ、ガトウは死んでないけどな。

「そうそう、お前の記憶を消したのはタカミチだ。　お前には魔法完全無効化能力があるからな……特に念入りに記憶を忘却させたんだろう。

その弊害でお前の頭は悪くなった……お前は可笑しいと思わなかったか？

お前は人並み以上に努力しても身にならない。　それはタカミチの所為さ。　そんな相手に惚れていたなんて滑稽だな？」

「う、嘘よ!!」

明日菜は髪を振り乱し、否定する。

「フェイト、お前はコイツの記憶を解放するつもりでいたんだろう？」

俺は混乱し始めた明日菜を無視し、フェイトへと問う。

フェイトは明日菜の記憶を解放したが失敗する。

だが、俺が開放すれば……？

「……そうだよ」

フェイトは目を細め、俺を見る。

「俺にやらせてくれ……神楽坂明日菜は嫌いだが、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアなら昔のよしみだからな」

俺はフェイトを納得させる為に、もっともらしい理由を挙げた。

「……いいだろう」

俺は進み、明日菜の前に立つ。

「ちょっと！　アスナになにする気?!　アスナに変な事したら私が承知しないわよッ!?

アンタは赤き翼の……ネギのお父さんの友達だったんでしょ!?

あの紫の麗人なんでしょ?!

どうしてこんな奴らの仲間をやってるのよ!?」

強いて言うなら、それは運命だったんだろ。

心の中で皮肉げに笑う。

「うるさい、口を閉じていろ！」

騒いでいるアーニャに口チャックをする焔を余所に、俺は作業を進める。

明日菜の額へと指を向け、忘却術の解除呪文を開始した。

「あ……ああ、ぁあああぁあ……ッ！！」

明日菜の額に一筋の光が伸び、それを中心として何十もの魔法陣が展開される。

む、爺が手を貸したのか？

それに薬の類で強引に術式の強度を上げた所為で、所々破損してるか……術式自体は単純な物が多いが、如何せん数が多過ぎるな……まあ、俺の魔眼を以てすれば……！

「まあ、こんなもんだな。　さようならだ……神楽坂明日菜」

神楽坂明日菜の記憶人格は、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの記憶人格に塗り潰された。

これまでの神楽坂明日菜の記憶は継承されずに、な……。

六日後。

「あー、そいつな……ナギの実の息子だぜ？」

「「「何ィッ！？」」」

「ああ、それはそうと……今日はお前等がおったまげるスペシャルゲストを呼んでおいたぜ……おーい！！」

「あん？　誰だ？」

ラカンが大声で俺を呼び、リカードが首をひねる。

「おー、揃ってるな」

呼ばれたので普通に扉を開けて部屋の中へと入った。

「な？！」

「貴方は！？」

「スイセンではないか！？」

リカード、セラス、テオドラは三者三様に驚きを顕わにした。

そう、俺はこの三人に会う為に闘技場へ来ている。

三人にも俺の計画を聞いてもらい、協力してもらう為にな。

「待て待て！　何でお前さんが此処に居る?!　お前さんもセラスから行方不明って聞いたぞ?!」

「そうじゃ!!　妾もお主の子供達に行方不明だと聞いておったんじゃぞ!?」

リカードはともかく、テオドラには悪いことしたな……。

「驚くのは無理もない……が、これから言う事もかなり驚くと思うから、まずは聞いてくれ」

俺は有無を言わせず、驚く三人を宥め、一気にこれまでの事とこれからの事を話した。

日本でアルバイトをしながら東大を卒業した事から始まり、麻帆良学園へ潜入していた事。

ネギがルクレツィアを殺した事。

孤児院の襲撃にメガロメセンブリアの暗部が噛んでいる事。

完全なる世界に入った事。

メガロメセンブリアに報復した後、魔法世界の崩壊を救いつつネギに報復する事。

エヴァと恋人に成っていた事も勿論話した。

「今までの経緯はわかったわ。　貴方の子供達を襲ったのがメガロメセンブリアの暗部だった事は予想で来ていたけれど……義理とはいえ、娘を殺された貴方の気持ちもわからなくはない。

でも、仲間の息子にそんな事をするなんて……」

「妾も同感じゃ……スイセン、せめてネギへの復讐は待てんのか？

それにお主の計画ではその超とかいう奴の使った術式を反転させ

て、この世界からお主と闇の福音の記憶を消す事じゃが、妾達の記憶まで消すとはどういう事じゃ！？」

「オイオイ、俺はメガロメセンブリアの元老院議員だぜ？　クルトと既に段取りを済ませてるってのには驚いたが、認めると思ってんのか？」

三人は、やはり難色を示した。

セラスはアリアドネーで生徒を取る身……未来有る子供に、それも憧れだったナギの息子にそのような役割を押し付ける事に抵抗が有る。

テオドラも同様に、ネギは子供だからこそ抵抗を感じているようだ。

それと同時に俺が記憶から消える事が許せないらしい。

リカードはメガロメセンブリアの代表であるが故に、前段階でのメガロメセンブリアを潰す計画にも納得できていないといった風。

「ネギの事は、私怨と思ってくれて構わない……邪魔をするのなら……」

その先は敢えて言わない。

言わなくても伝わる。

その決意は間違いなく三人に本気だと言う事だけは思わせる事が、暗く沈んだ表情から感じ取れる。

俺は更に話を進める。

「強制忘却魔法に関しては、邪魔をしないでくれるのなら設定で除外する。

俺の計画の片棒を担いでくれるなら……それでもダメなら、静観

してくれるだけでもいい」

「ほんとか！？　じゃが……それではネギが……」

テオドラが喰い付いてきたが、やはり葛藤が有るようだ。

「俺に、詠春、アル、ガトウ、クルトは既にこの計画に関して、それぞれ協力、静観のどっちかで了承してるぜ？
因みに俺は協力の方な？」

ラカンはサムズアップしながら言う。

「ちょっと待て！　ガトウだと！？　アイツは死んだはずじゃ？！」

「メガロメセンブリア暗部の摘発の為に、自らの死を偽装してたんだとよ。　まったく、俺様もついつい騙されちまったぜ」

ラカンはエールを煽り、カラカラと笑った。

「あーッ、たくッ！　面倒事に巻き込みやがって！　俺はメガロメセンブリアの茶番だけは協力、お前の計画は静観させてもらう！
メガロメセンブリアの膿を一気に叩き出す良い機会だと思っとくよッ、その辺りは前々から俺の方も納得いかなかったからな……だが２つ条件が有る！！
ナギの息子……ネギを鍛えさせろ。　お前に……運命に抗うくらいの力がなけりゃ、フェアじゃねぇからだ！
もう一つは、記憶は残したままにしとけだ！」

リカードはガシガシと頭を掻き、ヤケクソ気味に言い切った。

「……私は全面的に静観させてもらうわ。　その代わりに、私も記憶の保持とネギ君へ協力させてほしい」

セラスは溜息と共に、悩んだ末の結論を出した。

そして――――

「妾はスイセンと二人で話をしたい。　皆、席を外してくれんか？」

テオドラは俺の前に立つ。

その表情は、影になって見えない。

セラス、リカードは言うまでもなく、ラカンまでも空気を呼んで、貴賓席の部屋から出て行った。

「妾は……妾は、お主を忘れたくないのじゃ……スイセン、妾はお主が好きじゃ。

異性として、初めて会ってからずっとずっとじゃ。　引き返せんのか？　戻れんのか？」

テオドラは突然、告白を始めた。

……やっぱり、好意を持たれてたか。

俺は内心、やはりという思いだった。

好きでもない男の孤児院にお忍びで足繁く何度も通うものではない。

「身体もようやく此処まで大きくなった。　帝国の皇女として、恥ずかしくない程に成長した。

のう、スイセン……今からでも帝国に――――――」

テオドラは意を決して顔を上げ、見上げてくる。

……ッ、こんなに至近距離で向き合ったのは初めてか？

至近から見上げるテオドラの顔は、子供から大人への風貌へと変わっていた。

寧ろ、丁度子供と大人の中間で、可憐さと妖艶さを兼ね備えていると言える。

その瞳は不安げで、俺の表情を窺うように探っている。

「ダメだ……それじゃダメなんだよテオ」

この感情は捨てられない。

止めずにはいられない。

それじゃ、ルクレツィアの仇を討てないんだ。

納得できないんだよ……。

俺の拒絶に、テオドラは俺を正面から抱締め、腕の力を込めつつ身体を押し付ける。

その幼い頃から知っている身体は成長していて、その胸が俺の胸板と腹筋の間に押しあてられ形を変え、十分過ぎるほど俺の理性を誘惑しようとしてくる。

「スイセン！　頼む！　妾はお主にそんな事をしてほしくない！

レティだって望んでいる筈がない！

それくらいの事、お主なら解る筈じゃろ！？　お主の計画もまだ始まっていないじゃ！

２０年前の功績を全て無くして、そして闇の福音などと、賞金首じゃった女などと隠れるように生きるなんて……それではお主は……ッ！

お主は戦い続けて来たのじゃろ！？　お主の過去も含めてもう報われても良い筈じゃッ！」

テオドラは泣きながら一気に捲し立てる。

それこそ、皇女だなんて事を忘れるほどに顔をくしゃくしゃにして、俺に縋り付くように。

「エヴァは賞金首だったけど、それはお前達も知っているだろ？今も昔も吸血鬼だって言うだけで追われてきた唯の女の子だよ……」

「聞きたくない！　他の女をそんな風に言わんでくれスイセン！妾はずっとずっと好きじゃったんじゃ！

そんな薄汚れた――――」

「テオ」

俺はテオドラの名前を呼んで、それ以上言わせないように黙らせる。

それ以上相手を貶めるような事をテオは言わせてはいけない。

起原が嫉妬だからこそ、テオドラがエヴァに嫉妬して、普段では考えられない言動を取らせている事を知る。

「……何故、妾じゃダメなのじゃ？　何故、妾を選んでくれんのじゃ？」

「確かに俺はテオドラは綺麗だし、好きだ。　でも、その好きは異性としてというよりは家族や兄妹としての好きなんだ」

初めて会った時から、俺は――――――そう思っていたんだと思う。

「……な、ならば、愛人でもよい！　お主が妾を好きになってくれるなら……愛していると言ってくれるなら帝国を捨てても良いのじゃ！

じゃから、じゃから……妾を置いて行くな」

テオドラは泣き続けながらも言う。

……尽くす女だなぁテオ。

でも――――――

「ダメだ。　そんな事しても、されても居心地が悪くなるだけだ。

今の俺が好きなのはエヴァ一人なんだ。

テオ、俺はお前が好きだし、愛せると思う。　でも、やっぱり友愛とか親愛なんだと思うんだ」

「……ッ、……ッ」

テオドラは顔を胸板に押し付け、泣いた。

ずっと泣いていた。

俺は抱きしめる事はせず、頭をポンポンと軽く叩いた。

あれからどれくらい時間が経ったのかは時計がないのでわからない。

でも、その間ずっと黙ってテオドラが泣き止むまで抱締め続けた。

落ち付いたテオドラは、ラカンの座っていたクッションの効いた椅子に座り、俺は少し離れてテオドラの後ろ姿をぼーっと眺めていた。

すると結論が出たのか、テオドラは不意に喋り出す。

「帝国第三皇女として、お主の計画には賛成できん……期待できる者の未来を私怨で潰す事はの……じゃが、唯のテオから言えば、お主の言う事もわからんでもない。

故に、ネギを鍛える事を条件に、他の二人と同じく記憶の保持と計画の不干渉を貫かせてもらう」

「……ありがとう……テオ」

俺は様々な意味を込めた、それだけの言葉を言って貴賓席の部屋を出た。

Ｓｉｄｅテオドラ

「……勝手にせい。　もう、お主など大嫌いじゃ……」

スイセンが出ていく直前に、聞こえるか聞こえないか程の声で、心にもない事を言ってしまう。

スイセンなど、もう嫌いじゃ……妾の初恋はこれでお終いかのう……？

初恋は実らぬものだと言うが、身を以て知るとは……いや……何となくじゃが、スイセンの気持ちは闇の福音などとは関係無しに、妾を振るとわかっておった。

それが今日この時だった。

スイセンめ……この恨みは忘れんぞ……もっともっと妾は綺麗になり、あの時に告白を受けなかった事を後悔させてみせる！

絶対に……後悔、させてやるんじゃからな……ッ！

涸れた筈の涙は、またテオドラの頬を伝う。

第７９翼　協力者、告白される紫の麗人（後書き）

書いていたらテオドラが暴走した……だが後悔はしていない。
今まで朱然さんがフラグを立てても放置してしまったりしていたので、この際フラグ回収はしておこうかな、と。
そうしたら思った以上に長くなってしまった。

世界の重役達に協力を仰いだのでした、というお話です。
交渉に情を利用して、その代わりにネギ強化みたいな流れですが、その辺りはご都合。

誤字脱字矛盾点がありましたら、すぐに修正したいと思いますので、指摘してやってください。
勿論、感想疑問も歓迎しますので、一言の欄にでも書いて頂ければ回答させて頂きます。

第８０翼　それぞれの思惑、密談する少女

Ｓｉｄｅリカード

やれやれ、まさかシュゼンがこんなところで現れるとはな……偽物は此処で最悪死ぬかもしれねぇが、もともと捨て駒にしてもいいと上から言われてるから教える必要もねぇな……が、シュゼンの計画を聞くに今回のこの場所に偽物を派遣したメガロメセンブリアは悪手を打ったって事なんだろう。

これぱっかりは目を瞑るしかねぇ。

「しかも、一時期広まったメガロメセンブリアの不祥事の混じった噂がシュゼンの……完全なる世界の動きやすさを確保する為の布石だったたぁ驚いたぜ……しかも指名手配の映像までもか……」

リカードとて、それを考えなかった訳ではないが、タカミチ・Ｔ・高畑個人の協力とクルト・ゲーテル直属の重装魔導装甲兵の連携によって、完全なる世界の一員はほぼ壊滅したと報告を受けてたのだから。

だが生き残りがいた、と。

ふふん、クルトの奴はシュゼンの茶番劇を足がかりに、ナギの息子を引き入れてアリカ王女を嵌めた奴らを一掃する算段か……メガロメセンブリアに来る前から抱いていた個人的な感情なんだろう。

まあ、前々からメガロメセンブリア元老院の所業にゃ、俺も不満がない訳でもねぇ……これを期に元老院を率いる準備が出来ると思えば儲けもんだな！

しかし、紅き翼の連中は個々の力が秀でてる分、ガトウのように小細工する能力もないと思ってたがシュゼンは違ったようだ……利

用し、利用されるのは慣れっこだが、シュゼンが何所まで出来んのか見極めさせてもらうぜ。

もっとも、話を聞くに俺が魔法開発部で人造魔法使い製造に携わってた件がバレてないのは僥倖だ……そして、クルトか……知らん仲でもねぇが、アイツも一癖あるからな……利害関係は一致してるから手を組むのは難しくはねぇか……。

「それはともかく、ナギの息子か……頭の回転は悪くないが、どうにも硬いらしいな……実力はすぐ見れる。

使えなけりゃ、俺が鍛えりゃ多少は使えるだろ。　拳闘大会は素人が決勝に来れるほど温くはねぇしな……」

ナギとアリカの息子……これだけでメガロメセンブリアにとって十分な脅威になるというのならば、取り込んでしまうに限る。

まだ十歳の餓鬼なら、正義の味方のような甘言は好きだろう。

ナギの息子なら尚更だ。

シュゼンの娘を殺した罪悪感があるってんなら、裁判である程度の罪状を……それこそメガロメセンブリアへの無償奉仕だとでも決めて使えばいい。

それからゆっくりと洗脳する。

幸いにもネタは事かかない。

まだ１０歳で使えるとなれば、じっくりと……だが入念に、気付かれないように事を進めればいいだけの事だしな。

クルトとのパイプを作り、老害共を潰してやるぜッ！

シュゼンに至っては既に知らぬ者のいない英雄だ、こんな逸材を忘れたままにして腐らせるなんざ、馬鹿のやる事だぜ！

こっちの方も手を回しておくか……これから忙しくなりそうだなッ！

リカードは、この渡りに船の状況に歓喜する。

Ｓｉｄｅセラス

少し面倒な事になったわね……あのナギが、ナギの実の息子だなんて……中立国であるアリアドネーには、学問・学術国家という体で、メセンブリーナ連合国とヘラス帝国に限らず、様々な場所から留学生を募り中立を保っているが、世界規模での発言力に決定的な力が足りない。
所詮は学園都市止まりの力しか持たないのだ。
卒業生はそれぞれ各国へと散ってしまう。
スカウトをして戦力にするにしても所詮、学園生程度なのだ。
カリキュラム以上の技術はアリアドネーの戦力となってから磨かねばならない。
だからこそ、中立のアリアドネーは軽んじられている。
そこでネギ・スプリングフィールドと厄災の王女アリカ姫の息子の存在が意味を持つ。

「使えるわね……でも……」

ヘラス帝国には過去に受けた傷跡が抑止力となり、メガロメセンブリアにはアリカ姫に弱みを持っている。
だが、現時点でのネギに決定的な効果は期待できないわ。
彼は言ってしまえば、出す場面を間違えると全くの無意味どころか、不利益をもたらす爆弾になり得る……こちらに引き込むべきか、それとも……文字通り、爆弾として使うか……実際に会って、確かめる価値はある。

それにシュゼンの計画で、ネギの価値は跳ね上がる可能性がなくはない。
過去の大戦で一騎当千の働きをした英雄を殺せるほどの力は戦力として……抑止力と成り得る。
まだ手段を選ばない、などという危機的状況にアリアドネーが陥っている訳ではないが、手札は多い方が良い。

「やはり、状況を見極めなくては始まらないわ」

シュゼンの記憶を残したのも、アリアドネーに身を寄せていて彼の急所である家族がこちらに居る事を利用できるからだ。
例えシュゼンの存在が世界から消えたとしても、その世界最高クラスの実力は十分に世界に対する脅威になるわ。
昔、憧れた人。
でも、アリアドネー騎士団総長に成ってから現実を思い知った。
中立と言えば聞こえがいいように思えるが、中立ということはどっち付かずだという事。
帝国にも、連合にも与せず、非常に危うい立ち位置なのだ。
ともあれ、シュゼンが動くのはこの拳闘大会の決勝戦後、現れる偽物倒し、本物だという証明をした後に世界にメガロメセンブリアの隠蔽してきた都合の悪い情報を公表する事。
世界が何所まで動くのか……。

今までの事も含め、セラスは期を窺う。

Ｓｉｄｅテオドラ

「わかっておるッ！！」

叩きつけるように消した長距離念話用の画面を消し、本国の父…
…ヘラス帝国皇帝から言われた言葉が脳内を反芻する。

「スイセンがダメだったからナギの息子をじゃとッ！！」

英雄の力。

帝国はその力を欲している。

大戦時、たった数人で戦線を瓦解させる異常者集団、紅き翼。

その一人でも帝国に正式に招き入れる事ができるならばと、大戦時に紅き翼と面識があり、王位継承権の低い妾に白羽の矢が立った。

幸いにして、シュゼンの事を憎からず思っていた為、積極的に孤児院へと足を運び、シュゼンとの交友を深めていった。

お忍びとはいえ孤児院での一時は、王宮での堅苦しさとは無縁で。

そこに暮らす子供達とスイセンは生き生きとしていた。

そんな風に妾も生きてみたいと憧れた。

どうしたらそこまで楽しそうに生きられるのかと。

そんな姿に何時しか惹かれてしまった。

もともと、救いだされた時に一目惚れしていたという事もある。

何せ、あの容姿じゃしな……じゃが、久しぶりに会ったスイセンは……。

久しくぶりに会ったスイセンは変わってしまっていた。

そして、今回の告白と共に振られ、その事を侍女が本国へと報告した。

侍女が妾の監視の意味も含んでいる事は知っておったが、まさか

父上にネギ・スプリングフィールドの事を報告されようとは……シュゼンがダメならば、他のメンバーとなどと言われたが、ナギはアリカとくっつき行方不明。
ゼクトは大戦で死に、ガトウもメガロメセンブリアの策で死んでおる。
アオヤマエイシュンは旧世界の要人で既婚、そもそも旧世界で亜人は目立ち過ぎる。
残ったラカンはそもそも結婚願望がほぼ無いし、アルはそもそも人間ですらない。
そこに今回現れたのがネギ・スプリングフィールド。
今回の拳闘大会で決勝までいとも簡単に昇り詰めた者。
つまり、ナギの息子を誘惑しろというのだ。

ふざけおって!!
１０歳じゃぞ!?
歳の差など関係ないなどというが、やはり妾はスイセンの事が好きじゃ。
振られたからと言って嫌いになる程、薄っぺらな気持ちではないのじゃから。
でも……それでも、父上には逆らえん……逆らえば、恐らく切り捨てられるのは目に見えているのじゃ。
切り捨てられる事それ自体は大した問題ではない……妾が野死ぬ程度じゃから。
幼い頃から畏怖の象徴だった父上。
そんな父に逆らう事を、本能的に忌避している自分がおる。
じゃが、それを振り切りたいと思えるようになった。
本当に好きな者が出来た事で……問題はそれ以上に世界の均衡が崩れつつあるという事……それならば一応の均衡が続くこの状況を……現状維持が好ましいのじゃが、そうも言っていられまい。
寧ろ、今までの外交や大戦時の人質紛いの扱いはまだ我慢できた

が、今回でもう呆れ果てたぞ父上！
付き合い切れんとはこの事じゃ！
妾を道具としてしか見ないというのも確かで皇族として仕様がないというのは理解しておる。
指導者としてこの様な選択は取るべきではないのかも知れん……が、もうこんな生活は嫌なのじゃ……とすれば今はネギへと協力し、スイセンの起こす計画の混乱に乗じ、妾自身が帝国を捨てるまでじゃ。
どうせ、兄上や姉上がおるのじゃからな！
帝国は妾が国を捨てて逃げたと知ったらどうするじゃろうか？
呆れて放置か、それとも連れ戻そうと追手が掛かるのか……追手が掛かるのなら、いっそのこと世界を旅するのも良いかも知れん。
いや、寧ろ断られたがスイセンの元へ押し掛けて無理矢理居候するのも……。

テオドラは己の自由の為に、思考を巡らせ始める。

朱然からの計画を聞き、それを己の思惑や事情で利用する者達。
それぞれの意志は錯綜する。
果たして、その意志は成就されるのだろうか……。

Ｓｉｄｅエヴァ

「そうか……朱然は捕まえられんかったか……当然と言えば当然か

……」

話くらいはしたかったのだがな……。

法衣?を着て、身長以上もあるトランクケースを常に肌身離さず背負っているスキンヘッドの男……ブルバギという男はとても無口だ。

水仙と会い、私の仲間として紹介された白き翼の犬神小太郎と宮崎のどかが襲われていた事から水仙と戦闘。

水仙は宮崎のどかのいどのえにっきを燃やし、姿を消した……という事をブルバギの一方的な筆談で伝えて来た。

「母さんは俺達が束になっても勝てるかどうかわからないからな」

「そうだな。　私達の師にして超えなければならない壁の一つで、憧れだ。

今の母上は、ヤケになっているようにしか思えん。　だからこそ家族である私達が母上を止めねばならない。

もし母上が闇に呑まれたとすれば刺し違えてでも……」

ヒナギクの瞳に迷いは無く、瞳を閉じて瞑想を始めてしまった。

「そうだな……俺達を地獄から救い出してくれた恩人であり、家族だからな……言っちまえば一緒に地獄に墜ちても悔いないぜ」

ラリーは壁に寄り掛かり、片手で被っているソフトフェルトハットを押さえて目元を隠しつつ言っている為、表情は窺えない。

ブルバギは相変わらず、伝える事を伝えた後は無言無表情だ。

水仙の孤児院の最初の5人……ヒナギク、ラリー、ブルバギ、コ

ザクラ、リリクスは、大戦が終わってから拾われた子供なのだという。

子供達を拾った場所は、辺境と呼ばれる場所だったらしい。

大戦に巻き込まれないように疎開した者達の集落や希少種族の隠里のある場所をそう呼んでいたという。

大戦が終わったばかりの辺境の治安も悪く、傭兵崩れの山賊などや密漁者などが闊歩する場所で、そういった者達によって襲われた子供達は、それは地獄のような毎日を過ごしたらしい。

それを救い上げたのが水仙だった。

生き残った身寄りの無い子供達を自分の孤児院で養うと言ったらしい。

それからは本当の家族のように接してくれたと教えてくれた。

水仙の足跡を追った子供達は、完全なる世界に与した水仙の行動を追っていく内に、そんな地獄を今度は水仙が引き起こそうとしているかもしれないという断片的な情報を知り、最後に水仙が言っていた闇の福音である私に接触を図ったのだという。

「……水仙、私はまだお前に言いたい事がたくさんある……してもらいたい事も、したい事もだ……早まった事をするなよ……？」

水仙の計画の全容を私も把握していない、それが私を不安にさせる。

幾ら自分が水仙を止めると言っても、やはり不確定な要素はそれだけで不安の元となるのだ。

例えどんな事があっても、私は水仙の味方であってみせる……私の居場所となってくれた事が私だけにしてくれた特別な事で無かったとしても……例え何者が立ちはだかろうと退けて見せよう。

第８０翼　それぞれの思惑、密談する少女（後書き）

感想で指摘して頂いた部分を解消する為に書いた回。
やはり凹むものは凹むのです……でも完結までは投げ出さないと書き始めた当初に決めた事の一つだったりするので、投げ出したりはしません。
イルア様の実は全ての陣営が黒いというアイディアを使わせていただきました。
流石に告白したテオドラが腹黒いのはどうかと思ったので、こんな設定にしました。
リカードは朱然さんが嫌っている人造魔法使いの製造に一枚噛んでいます。
ヘラスは今のアリアドネーの事を考えての行動ですかね～。
以前にも書きましたが、内政系は書いていて頭がこんがらがって来るのであまり触れたりしたくなかったりします。
書かなくてはいけない部分はやはり出てくるので、その辺りをもっと上手く書ければ良いのですが……。

誤字脱字矛盾点がありましたら、すぐに修正したいと思いますので、指摘してやってください。
勿論、感想疑問も歓迎しますので、一言の欄にでも書いて頂ければ回答させて頂きます。

第８１翼　ネギＶＳラカン前編、見下ろす紫の麗人（前書き）

こっそり更新。

第８１翼　ネギＶＳラカン前編、見下ろす紫の麗人

テオドラから告白されてから翌日。

「で、おめぇ……じゃじゃ馬とはどうなったんだよ？」

俺は昨日と同じ貴賓席のソファーに座り、下で丁度行われているネギ達の戦いを傍観している。

その挙動はしっかりとしたもので、対戦相手を翻弄しつつも隙を決して見せない。

正直、この程度では相手は手も足も出ないな……が、今一歩足りない。

それはラカンが乱入するのなら、是が非でも力を付ける事になるだろうが。

「振った」

俺はネギ達の戦いを見つつ、特に何の表情も見せずに言う。

「あぁん！？　マジでか？　天下のヘラス帝国第三皇女……王位継承権は低いとはいえ、逆玉だぜぇ？」

ラカンは驚き、昔ナギにしたようにムフフとウザい笑いをしながら俺を茶化しにかかる。

「逆玉とか、そんなんで相手を決めたりしないだけだ。　お前もいい加減、恋人でも作ってみれば良いだろ」

だが、そう簡単に茶化されはしない。
茶化してくるなら、その矛先をラカンの痛い部分へと返すのみだ。

「へっ、俺は今更過ぎて女作る気になんねー」

凄まじく適当な、ぼへーっとした顔で言いやがったコイツ……。

「まあ、お前が良いなら別に何も言わないが……」

「それに女は扱い方がメンドーだ」

お前は小学生のガキか！？
今時そんな理由とか……。

それはともかく俺はラカンに決勝戦が終わった後のある事を聞いた。

「まあ女性の扱い云々はさて置き、決勝戦が終わった後にメガロメセンブリアで慈善活動をしている俺に勝った方へ表彰されるんだろ？」

「ああ……昔のアリカ奪還の事を許してやるから八百長エキシビジョンしてくれみたいな事を言われたが……正直、乗り気じゃねーな」

本気でゲッソリとつまらなそうな顔をするラカン。
そんなラカンに、俺はある提案をする。

「いずれ捨てる物とはいえ、偽物が我が物顔で俺の名を語っているのは流石に面白くない。
だから……ちょっとオシオキしようかな、と……なぁに、殺しは

しないさ……無益な殺生は禁止されているからな」

「いいんじゃねーの？　俺はそれでいいと思うぜ？」

ラカンはニヤリと此方の意図に気付いたのか笑っている。

「さぁてと……ちょっくら行ってくるわ」

「ああ、ネギ達を脅かしてやれ……会った事は無いが、カゲタロウにもよろしくな？」

「おうよ！」

ガッツポーズをしてラカンは貴賓席を出ていった。

出会った当初は、ラカンを唯の馬鹿だと思っていたが、意外と人の心の機微がわかるし、意図してそんな馬鹿な態度を取っているのでは？と思ったりもした。

今でもそうなのかはわからないが、ラカンには今のままでいて欲しい……。

眼下ではカゲタロウと共に並び立つラカンの姿。

ラカンは何時ものように変なポーズと共に跳躍。

空中５回転捻りをした後に、右手に軽く気を凝縮し打ち下した。

その拳は対戦相手だった相手を一撃で気絶だけに抑えた手加減攻撃を放った。

訂正、もう少し大人しめに生きて欲しい。

五日後。

ついにネギ&小太郎は、ラカン&カゲタロウと決勝戦に辿りついた。

本来であれば引き分け……しかし、俺の巻物を開いたネギは一体何の力を得ているのか、それを使いこなして勝つのか、それとも負けるのか……。

「見極めさせてもらおうか……」

折った骨は治ったか……魔法に感謝しておくんだな犬神小太郎。

「試合開始!!」

始まった瞬間、ネギは千の雷を唱え始める。

ふむ……テオドラとのアーティファクトは存在していないようだな……。

呪文詠唱を見逃す程、甘くは無いカゲタロウが邪魔をする為に影槍を複数操り、ネギへと差し向けた。

まるで生き物のようにしなやかに、しかし迅速にネギへと迫る。

その数――――実に２６

到底避けられないそれを、小太郎は地面を這うように走る影刃を

走らせて迎撃。
影槍はバラけるが、カゲタロウが軽く腕で合図をすると弾かれ無事だった１０本の影槍が空中で収束。
影の大槍と成り、標的を小太郎へと変え迫る。
しかし、部分変化を習得していた小太郎に、大槍は右腕で弾かれてしまった。
その間にラカンは千の顔を持つ英雄で取り出したと思われる斧槍（ハルバート）に気を圧縮し、一気に投擲。

瞬間――――――とてつもない轟音と共に闘技場が鳴動した。

『こらー！！　ジャック！！　貴様という奴は後先考えず！　観客の事を考えんか！！』

『いやぁー、ハッハッハ！！　ヤル気のある若者には全力で答えてやりたいじゃんよぉ。　案外脆いな……この闘技場』

ラカンの声がマイクに拾われ、会場へと伝わる。

いや、お前の攻撃が非常識なんだよ。

見下ろせば、緊急障壁によって衝撃緩和されたにもかかわらず、地面は抉れ、砕け、そこが抜けなかった事が僥倖な程に粉砕されていた。

『アホか――――――ッ！！　なぁ～にが、案外脆いな……この闘技場、じゃ！！　馬鹿力にも程があろうがッ！！
観客まで巻き添えにするきかッ！？　一歩間違えれば大事故じゃぞッ！？』

『ひ、姫様口調！　全国ネット！！』

もがッ？！放すのじゃーッ！と闘技場中に響き渡るテオドラの怒声と侍女の揉み合いとドッタンバッタンという音が響き渡る中、ラカンはダラダラと汗を流していた。
その顔には、やっべー……跡形もなく消し飛ばしちまった……？と書いてある。
観客達はそんなラカンを余所に、対峙するのもアホらしくなるほどの攻撃を目の辺りにしてざわめく。
だが、ネギ達の居た場所にネギ達は立っていた。

流石に無傷……とはいかなかったようだな。

俺の言葉の通り、あちらこちらにかすり傷程度だがネギと小太郎は傷を作っている。
ラカンは先程とはうって変わり、ニヤリと笑みを浮かべた。

両者は動き出す。

観客達はその挙動を見逃すまいと固唾を呑んで闘技場を注視する。
先の動いたのはネギだ。
呪文詠唱もなく、千の雷を解いてネギは常人には見えない何かを掌握した。

「あれは概念だな……」

休眠状態と言える今の状態の魔眼ではその概念がなんの概念なのか知る事が出来ない。

だが魔眼を全開にすれば……。

俺の瞳が紫水晶のように輝き、ネギの纏う概念を理解させる。

渇望か……闇と相性が良過ぎるのはその所為か。

心から望むこと……実に主人公らしい概念じゃないかネギ。

望みを望むままに望む事、きっとそれは誰しもが持っている物。

「それを術式兵装として取り込んだか……闇の魔法を抑え込むだけしか時間的に実験できなかった。

その概念を魔法と同じように取り込んで一体どんな影響を受けるのか……気付いているのか、それとも……」

ラカンはスッと目を細め、構えた。

それ程までに警戒させるものなのだろう。

魔眼を爛々と輝かせ、どうなっているのかを理解しようとする。

瞬間――――――ネギの姿が追い切れないほどに掻き消えた。

「なに？」

俺はつい声を漏らす。
再び視界にとらえたネギの姿は、正しく先程説いた筈の雷天大壮の姿。
呪文詠唱無し……しかも掌握も無しにあの姿になる、だと？
一瞬、無詠唱で取り込んだだけかとも思ったが掌握した過程が存在しない。
だが闇の魔法による術式を取り込んでいる。
そこで俺の脳裏に先程のネギの起原が浮かんだ。
「渇望……望む力、そういう事か……随分と応用の利きそうな概念だな」
本来、この世界の魔法は呪文詠唱によって最下級の精霊とも、大源（マナ）ともつかないものを集め、術式によって収束、変換を経て放出される。
タカミチは呪文詠唱をしても最下級の精霊とも、大源（マナ）ともつかないものを集められない為に魔法が使う事が出来ない。
ネギの概念の術式兵装は、渇望それ自体が呪文詠唱の変わりのような役割を持っているようで簡単に言えば、パワーロスの無い無詠唱＋掌握の手間を省く効果を得ているようだ。
俺の考察が正しければ更なる独自運用が可能になるだろう。
眼下のネギは雷天大壮の姿で速さだけでは一時的に圧倒するかに見えた。
だが俺というイレギュラーによって、先行電流（ストリーマー）の無い光の精霊となった俺と戦っている。
故に今繰り広げられている光景は当然の帰結。
ラカンにとって初見の筈の雷速瞬動がカウンターの餌食となった。

最高の切り札の一枚を初見にして破られる衝撃は計り知れない。
現にネギは眼を見開き、絶好の隙を作ってしまうほどに。
たかが切り札の一つが破られたくらいで隙を見せるなよ。
その隙をラカンが逃すはずがなく――――――

――――――羅漢破裏剣掌ッ！！

ラカンの五指がネギの腹部にめり込み、超至近距離からの純粋物理攻撃によってネギの身体が人間手裏剣のように宙を舞った。
一度喰らった身としては、二度とは喰らいたくない攻撃の一つだ。
何せ直接触れている為に魔法障壁によるダメージの軽減が申し訳程度しか期待できず、モロに受ければ肋骨は折れ、内臓はぐちゃぐちゃになる。
ネギはそんな攻撃を受けつつも空中で態勢を整え、足から地面に着地した。
そこへラカンは追撃をかける。
ネギは最高の機動力を持つ雷天大壮で距離を放そうとするが、ラカンにとってわかりやす過ぎる先行電流（ストリーマー）によって超高機動力が潰されている事に気付きながらもそれを行使せざる負えない。
強過ぎる切り札は、切り札故に切るタイミングを見失えば御覧の通り――――――眼下には這いつくばり、大量の血反吐を口から吐くネギの姿。
観客達は、揃って呻き声。
ラカンはしきりにネギへと言葉を投げかけている。

肉体的な敗北を知らしめ、その心を折る為に。

「渇望……ネギの見つけた運用は掌握の為のタイムラグを無くすだけ……術式の置換も出来るとしてもお粗末だ。

その程度で俺やラカン、ナギに並ぶべくもない」

折角の力を、未だに与えられた力に頼り切るその姿勢は、過去の自分を見ているようだ。

宝具や概念武装の類とは違い。

人間的視点で言う根源概念は担う者の心象、視点、立場、精神的な立ち位置や在り方によって千差万別だ。

今のネギは、それを手段としてあの程度でしか使っていない。

ならネギは概念というものを使いこなしてはいないという事だ。

この世界にも概念結界などというモノが有るが、所詮は申し訳程度。

決められた物事を忠実に実行するだけの物だとでも思っているのだろう。（コンセプト）

俺に掛かれば、その程度の物なら全くの無意味な物だ。

ネギは抽象的でもあり、普遍的なものでもある概念を使いこなす事に気付かなければならない。

概念とは個々の物事の細かな相違点を無視して、それらが同一であるかのように扱うという意味で抽象的、個々の事物すべてに当てはまるという点で普遍的だという事を。

概念は意味の担い手なのだから、その意味を曲解させてしまえば……。

「所詮は屁理屈でどうにでも解釈できるものでもあるんだがな……もっとも己の根源は自由度的には少し制約があるが」

俺の嫉妬も、虚仮も、捉えようによってはマイナスからプラスへ

と意味を変える事も出来る。
ネギの渇望は俺のそれよりも広義的に活用できるというのに。

己の持つ唯一の起原的概念を経由し、別の概念すら操る業。
例えるならば俺の嫉妬。
類義、反義問わず、関係する単語として羨望、執着、許容、理解、称賛、同情、憐憫など様々なモノが思い付く。
その単語から更に関係のある単語をネズミ算式に増やしていけば、それはあらゆる概念を使う事も出来るだろう。
もっとも、あまりに自身の起源から遠い概念ほど効果は薄まっていくのだが。

おちゃらけていたラカンが、真面目な顔で2、3言葉をネギへと投げかけた。
するとネギは傷だらけになりながら立ち上がる。

さて……ラカンの千の顔を持つ英雄も、気弾も封じていない状態でお前は勝機を見いだせているのか？

ラカンは立ち上がったネギへ慈悲もなく、気弾の一撃を見舞った。
またしても衝撃、ネギを中心とした場所が砕け、粉塵が舞う。

それは命の危機に瀕すると新しい能力に目覚める主人公のように
――――――

ネギは立っていた。
最初のように避けた訳でも、防御した訳でもない。
その身に宿るは渇望の意味を対義語的な意味で捉えたのだろう。

渇望の効果を反転、その力は拒絶。
あらゆる事象を拒絶する概念。

「この力……ようやく及第点だが、やはり急造の付け焼刃か……」

無意識の潜在能力の発露か……。

それはともかく、まずは英雄としてメガロメセンブリアを混乱させる事が計画の第一段階だ。

「お前が得た、この世の理を変えるほどの力が通じなかった時、お前はどんな表情を浮かべるんだろうな……？」

絶望か、呆然か、失意か……必ずお前の心を折ってやる。

俺は魔眼でネギを捉えたままに、自分自身の介入の準備を始める。

第８１翼　ネギＶＳラカン前編、見下ろす紫の麗人（後書き）

という訳で、あまり原作と変わらない展開の８１翼でした。
一応、原作を知っている事を前提に書かせてもらっているので、かなり端折っているのはご勘弁を。
今回は原作との差異として――――――
テオドラとの仮契約無し。
雷速瞬動を初見で破られる。
概念によって何とかラカンと戦えない事もない。
――――――ですね～。
ネギＶＳラカンと書いていながら、次回はあまりその辺りを書かないかも。
ネギがラカンと相打ちする場面を朱然さんには目撃させません。
そして、ようやく名もなき偽物が登場します。

誤字脱字矛盾点がありましたら、すぐに修正したいと思いますので、指摘してやってください。
勿論、感想疑問も歓迎しますので、一言の欄にでも書いて頂ければ回答させて頂きます。

第８２翼　ネギＶＳラカン後編、手加減する紫の麗人（前書き）

暑いし、ダルいし、就活めんどいし、自動車学校もとか死ねる……。

第８２翼　ネギＶＳラカン後編、手加減する紫の麗人

Ｓｉｄｅラカン

「ム、俺の気弾が防がれただと？」

いや……防がれたにしては何の挙動も見せなかった……さっきの怪我も致命傷だが……。

気弾の当たる直前、ネギは防御の姿勢も見せなかった。

避ける動作、指の一本に至るまで動いていなかった。

目の前に立っているのは何だ？

ネギの筈だ……だが、最初に感じた不穏な気配……そうだ、この奇妙な気配はスイセンの武器や魔法巻物（マジックスクロール）から発せられてたな……てことはこれがガイネンって奴か……ッ！

なかなかどうして……覚えたてのネギでこれだけ異質なら、本気になったスイセンはもっとやべぇって事か……だがまずは目の前の敵か。

ラカンは認識を改める。

目の前のネギは、敵たり得る力を持っていると。

――――――羅漢爆裂拳ッ！！

膨大な量の気を本気で収束させた気弾を乱射する技。

単純故に威力がもっとも高い攻撃。

気弾の密度も去ることながら、その乱射数は数千発。
この技によって帝国最大級の空中戦闘母艦を砕き潰したのだ。
絶対の自信を持つ技で一気に勝負をかける。
次々と遠慮なく繰り出される気弾によって闘技場の緊急障壁が軋みを上げた。

だが――――それでもネギは倒れない。

寧ろ、ゆっくりと此方へと歩いてくる。

!?

まさか此処まで効かねぇとはな……ガイネンってのを甘く見てたらしいぜ……こりゃあ、アスナ譲ちゃんの魔法完全無効化能力と同じくらいに面倒臭ぇ。
だが……ッ、簡単にやられるつもりはねぇぜ、坊主!!

ラカンは更にピッチを上げる。
すると、ネギの歩みが徐々に遅くなってゆく。
それでも尚、ラカンへと進むネギ。
ネギとの距離が腕を伸ばせば触れられる程の距離に成った時、ラカンは気付く。

「む？　坊主……おめぇ意識が……」

ラカンは拳を止め、距離を取る。
そして、何も映していなかった虚ろな表情のネギはようやく意識を取り戻した。

「……ッ、気を失ってた！？」

それと同時にネギの纏っていた拒絶が解ける。

さっきのは火事場の底力って奴か……坊主、おめぇは良くやったよ……スイセンと戦ってなけりゃ、万が一にも俺は負けは無くとも相打ちくらいにはなったかもなッ！！

ラカンは改めて拳に気を込め、ネギへと肉薄する――――――！！

Ｓｉｄｅ朱然

鳴り響く轟音と震動、観客達の声が遠巻きに聞こえてくる。

俺はある程度のネギの力量を見た後に準備を進めていた。

この大会は俺にとって、誰が優勝しようがどうでも良い。

重要なのは、全世界に中継されるという一点のみ。

しかもご丁寧に、メガロメセンブリアは俺の偽物にラカンと八百長試合を設けている。

そこに俺が乱入し、本物だという証明……実力で圧倒した後、仮契約カードを移せば恐らく十分だろう……そんな事を思っていた時だった。

一際、大きな振動と共に、観客の狂ったような歓声が聞こえて来た。

「さて、そろそろか……少なくとも、ネギが概念を使えたからとい

っても相手がラカンである以上、勝つまではいかないだろ」

そうひとりごちて闘技場の上部へと移動した俺は、闘技場全体を見渡せるほどの場所からラカンとネギ、カゲタロウと小太郎を確認する。

丁度、戦いが終わり、やはり世界の修正力の所為か、相打ちと言う結果となったらしく。

ラカンとネギは満身創痍で仰向けに、カゲタロウは左腕が無く、小太郎は身体に幾つか風穴が空いて倒れ伏していた。

結果はやはり引き分け、この後に控えた偽物対ラカン戦はラカン本人の要望で３０分後に行うと司会の娘が宣言し、英雄対英雄の戦いが見れて観客達はラッキーなどと言っている。

「残念ながら偽物を倒すワンサイドゲームだが……」

俺はいつぞやに着ていた紫を基調にしたパオを着る。

準備に抜かりはない。

超には本拠地にてメガロメセンブリアの隠蔽してきた資料の公開を今か今かと待っているだろう。

完全なる世界……フェイトにこの件は了承済みで、派手に動いてメガロメセンブリアの動きを少しでも妨害してくれと言われている。

そしてなにより、ラカンにリライトを見せておく事もしておきたい。

精々派手に動かせてもらう……俺は英雄などではない……だが今、この時だけは……英雄で在ろう！！

「さて皆様、本日のもう一つのメインイベント!!　千の刃、ジャック・ラカンのエントリーで沸いた今大会!!
ナギ・スプリングフィールドと同姓同名という超大型新人の登場!!　そして、驚くなかれ!!
決勝戦に勝るとも劣らないであろうエキシビジョンマッチのカードが組まれています!!
そう!!　またしても行方不明となっている紅き翼の一人が、メガロメセンブリアで名を伏せて活動していたのです!!
その二つ名は紫の麗人、無数の姿、謎のアーティファクト使い、終戦に歌う紫姫の……シュゼ――――ンッ!!」

俺の名前が宣言された瞬間、観客が沸いた。
既にラカンは傷の治療を終え、万全の態勢で腕を組み目を閉じている。
その近くには先程から喋っている司会の魔族の娘がマイクを持って待機し、そこへ闘技場の入口から現れたのは確かに十人中九人が目を引く美貌の男。
偽朱然は手を上げながらにこやかに闘技場の中心へと歩き、ラカンへと握手を求めた。

だが――――――

「んん？　誰だオメェは？　俺はオメェと会った事なんて一度たりともねぇ」

カッ！！と目を開き、腕組みを解いたラカンはハッキリと闘技場の観客にわかるように言い切った。

それを拾ったマイクからスピーカーに伝わり、会場全体どころか世界中のテレビに中継された。

「な、なにを言ってるラカン！　姿が違うからわからないのか？そういうジョークは時と場所を選んで――――――」

偽朱然は顔を引き攣らせながらも平静を取り繕うかのように、人好きのしそうな笑みを浮かべる。

「オメェこそ、スイセンの名を語るならもちっとマシな実力を付けてからにしたらどうだ？」

ラカンの顔に笑みは無く、偽朱然の顔色が悪くなっているように見えた。

「――――――な……ッ！！」

偽朱然へ挑発するような笑みをラカンが向けると、当の偽朱然は取り繕っていた表情を微かに歪ませて歯噛みをする。

さて、もう少しこの茶番を見ていたかったが、あまり期を窺い過ぎると期を逃すからな……。

――――――あまり虐めてやるなよ、ラカン。

俺は声を張って、闘技場中に聞こえるように言う。

それと同時に闘技場の屋根から跳躍。

ラカンの隣に並び立つ。

「いやな……俺達に迫るくらいなら少し揉んでやっても良いと思ってたんだがよ」

「成程、コイツじゃ俺の変わりは名乗れないな……？」

偽朱然を俺達は見据え、ワザとニヤニヤと品定めしつつ貶す……

もっともラカンは本当にニヤニヤしているようだが。

いきなりの闖入者である俺の存在に、偽朱然は俺達の言動から俺が誰なのかを察したのか冷や汗を流している。

『あのぉ～、一体何がどうなってるんでしょうか？』

そこへ突然の事態に置いてけぼりを喰らった観客達の意志を代弁するかのように、司会の娘が俺達へと言葉を投げかけた。

「ああ、なに……単純にして明快な事だよ。　俺はメガロメセンブリアに所属なんてしていなかっただけの事だ。

俺の名は――――――」

俺こそが――――――

「待て……ッ！！」

偽朱然が俺の言葉を遮ろうとしてくるが、俺は構わず言い切る。

――――――俺が朱然だ！

魔法世界全土に俺の声が響き渡る。

メガロメセンブリアが中継を圧力をかけて中断させようとしても無駄だ。

何せ、俺と超が構築した情報網を使って逆に掌握し返しているはずだからな。

『で、ですがこちらの朱然さんはメガロメセンブリアのお墨付きが出ていますが……？』

俺は向けられたマイクに向かって尚も言う。

『何と言おうが俺が朱然だ。　証拠なら……今此処で俺とそこの偽物……ああ、お前が自称本物だったか？

ともかく戦って勝ち残った方が本物だという事を証明すればいい』

もっとも戦う気があるのならの話だがね、と皮肉と嘲笑を交えて偽物を挑発しつつ言う。

偽物はその美貌を憤怒の怒りに染めていた。

「良いだろう！！　私が本物のシュゼンだという事を証明してやろう！！」

よし！
乗ってきた！
思ったより馬鹿だなコイツ。

内心で笑みを浮かべながら、俺は真摯な表情を作る。

『え、え～っと、本人達の同意が取れましたので、ラカンＶＳシュゼンのエキシビジョンマッチを急遽変更！！
本物の英雄はどちらだ?！シュゼンＶＳシュゼンを行いたいと思います！！』

わぁッ！！と観客は声を上げた。

ノリの良い魔法世界の住人達にとって、これ程スキャンダラスな試合は存在しないのだろう。
メガロメセンブリアのお墨付き……つまりは政府が認めたはずの英雄。
対するは、本物の英雄ジャック・ラカンが認めた英雄。
どちらも普通の魔法世界人ならば信憑性を無条件に認めてしまえる動かぬ証拠。
しかし、それはどちらの意見も一致した時には強固な証拠となる反面、今回のように不一致したという事は、どちらかが嘘を吐いている事に他ならないと証明してしまう事になる。
メガロメセンブリアは絶対的な正義を更に強固なものとする為に英雄を取り込もうとした事が仇となるのだ。

ラカンと司会の魔族っ娘は下がり、俺と偽物は対峙する。

「これだけ離れれば聞こえない。　言いたい事は言っておけ、始まれば話をする間も与えない」

「良くも今更のこのこと……貴様がいなければ、俺が英雄で居られたのに……ッ！

俺がどれだけ苦労したかお前は知らないだろう！？

ゴミを漁り、変態共の相手をして、身体を改造され、血反吐を吐いてッ、ようやく俺は此処まで来たッ！

邪魔をするな！！　お前のように始めから恵まれているような奴が今更しゃしゃり出てくるな……！！」

始めから恵まれている、か……。

その立場を知らぬ者に、その立場の者の気持ちは理解できない。

理解できている。

そんな事は恋姫の戦いから当たり前のように感じていた事。

「言いたい事はそれだけか？」

俺は残酷な問いかけを臆せず問う――――――お前の苦悩と苦痛の日々はその程度なのか、と。

「何……？」

偽物は面食らう。

「言いたい事はそれだけかと言ったんだ」

大抵の者達は、唯生きたいという本能のままに泥を啜ってでも生

きる生い立ちを聴いただけであまり良い顔をしない。
酷い時には暴力と欲望の捌け口にされてしまう事が多々ある。
しかし、そんな反応をされてきた偽物は、真っ直ぐに射抜く俺の瞳に、その問いに恐怖を浮かべる。

「……何故だッ、何故、今更お前みたいな奴が……ッ」

偽物は理解したのだろう。
目の前の存在は、自分の生い立ちを聴いてなお、態度を変えず、在りのままで接してくるのだという事を。

俺と偽物はその言葉を最後に動き出す。

「クアブル　クアドル　クアトロン！！　光の精霊１９９柱（ウンデトゥオケンテルーネピリヨエ・ウンテイヌ）、集い来りて敵を射て！　連弾・光の１９９矢（ミクス・サギテント　サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス）！！」

１９９の光の矢が俺に降り注ぐ。

「……」

何だ、この力と数だけの雑多な術式は……俺ならもっとバリエーションのある術式をを組む。

だが、だからといって手加減をするほど甘くもない。
俺は標準がしっかりとされていない、雑多に連射される光の矢の側面を気で強化した右手で撫でるように払った。
傍から見れば、光の矢はまるで自分から逸れるように見えただろう。

「何！？」

その生い立ちには同情しよう……だがそれとこれとは話が別だ。

「何を驚いてる？　エグジグ　エグザグ　エグゼクト。
光の精霊１９９柱、集い来りて敵を射て！　連弾・光の１９９矢（ウンデトゥオケンデルー・来たりヨエクスンテイヌス・ミクス・サギテント　サギタ・マギカ・セリエス・ルーキス）」

先程、偽物が唱えたモノと同じ呪文を俺は詠唱する。

中身の術式は全くの別物だがな。

左手を偽物へと向け、連射される光の矢が放たれた。
効率化された術式によって減少している魔力量でも十分な魔力行使が出来るようになっている。
その術式によって弾速こそ遅い。

「ッ！！　この程度でッ！？」

偽物は無詠唱で戦いの旋律を発動し、自身を強化して俺の光の矢を次々と回避していく。

「！？」

声こそ出さないが、偽物は驚きの表情を浮かべる。

俺の光の矢は回避されても、弾かれても、込められた魔力が尽きない限り、異常な追尾性能を発揮し、偽物を射る為に追従していく。

「どうした？　この程度なんだろう？」

「魔法の矢程度ッ、威力もたかが知れている！」

逃げていた偽物は反転し、拳を握って追ってきた光の矢に対峙する。
俺の光の矢を潰す腹積もりらしい。
偽物の拳が光の矢を真正面から潰す為に触れた瞬間――――――
「ぐあぁぁぁぁッ！！？　何だッ、今のは……ッ！？」

――――――偽物の拳に光の矢が貫通した。

「速度を犠牲にして追尾性能に特化させた。
お前の拳を貫通したのは光の矢の速度に銃弾と同じような急激なジャイロ回転を加えた事よって貫通力を高めただけだよ」
動きの止まった敵（まと）に更なる風穴をあける為に光の矢が殺到する。
「……ッ！！？」

威力を恐れた偽物は再度反転しつつ呪文詠唱を開始した。

「クアブル　クアドル　クアトロン！！　来れ雷精、光の精　光よ集いて閃れ、黄昏の残光　輝の光芒！！」

大呪文が完成した瞬間に追って来る光の矢と俺へ向けて凄まじい閃光が場を満たし、俺の光の矢は輝の光芒の威力によって薙ぎ払われてしまう。
更にその輝の光芒が俺へと残光を残しながら向かってくる。

「は、はは……ッ！！　これなら……ッ！！」

偽物は右手の出血を気にせず、輝の光芒の後を追うように此方へと距離を詰めてくる。

多量のアドレナリンで痛みを忘れたか……。

俺は音叉ナイフ（小）を2本取り出し、2時と11時のすぐ前方へと投擲。

地面へと突き刺さった音叉ナイフ（小）が振動し、持ち手の音叉が振動。

共鳴によって、不可視の音壁を形成する。

偽物が音壁へと衝突。

「この壁は何だ？　風……？　いや、音か？！」

「……」

先程のようにわざわざ教えてやる義理は無いか。

偽物が音壁に阻まれている隙に、更なる音叉ナイフ（小）を未だ砕けている闘技場の地面へとバラ撒くように突き刺していく。

約100本ほどを投擲し終えたところで一旦距離を置いた偽物と対峙する。

「防壁を作るだけ……ではないようだなッ！！」

「ああ、その通りだよ」

俺は刃を仕舞ったままの天翼を取り出し、自分の足元の音叉ナイ

フ（小）の音叉部分へ軽く当てる。

――――――澄んだ音が闘技場内部全体へと鳴り響く。

他の音叉ナイフ（小）へ共鳴。

その音は共鳴効果によって増幅され、その音は偽物の三半規管に一時的な障害を引き起こ素と共に、全方位からの音による拘束をする。

三半規管に狂いの出ている偽物はうずくまり、音の拘束によって跪かされた。

「ぐッ、何を――――――」

そこへ一本の音叉ナイフ（小）を偽物の正面の地面へと刺し――

――――爆発。

音響爆弾によって偽物は吹き飛ばされる。

こちらも共鳴現象を利用した音響爆弾だ。

音叉ナイフ（小）を中心に自在に爆発範囲を設定でき、見えない分、回避は中々に至難な技で、その特性と音叉ナイフ（小）という媒体を通している為に魔力消費の燃費も安い。

魔力消費の点は音叉ナイフ（小）それ自体が、エヴァが封印の解ける前に使っていた媒体魔法薬の代わりを担っているようなものだと思ってもらえばいい。

俺は天翼を次々と地面の音叉ナイフ（小）へと打ち当てて音源を増やし、吹き飛んだ偽物の近くに音響爆弾を作り、爆発させる。

「――――――ッ！！？」

声にならない叫びが闘技場に響き渡り、偽物はまるでピンボールのボールのように何度も何度も宙を舞い、地面に転がる。

そのあまりにも一方的な光景に観客達は声を出す暇すらなかった。

「空気の密度、反響体の有無、距離……条件次第で威力は違うが、大気が在れば音は伝わる」

俺はボロ雑巾のようになりつつ鼓膜が破れ、聴こえていないであろう偽物へと近づき見降ろして、無意味だと解っていても敢えて言ってしまう。

「少々遊びが過ぎたな……」

さて、ラカンにリライトを見せておくか。

俺はグランドマスターキーを取り出し、偽物へと右手を向ける。

偽物は俺へと手を伸ばす。

それを見た俺は冷たい言葉を浴びせた。

「そんなに英雄に成りたかったのか……英雄ってのは、一番の殺戮者に押し付けられる重荷みたいなもんなんだよ。

自分からなんて名乗るもんじゃない。

それに俺は英雄なんてモノに未練も愛着もないが……それでも、お前さん程度に名乗らせられるほど、安いモノでもない」

俺の聴こえていないはずの言葉に、偽物は読唇をしたのか途切れ途切れに言う。

「そう……かい……なら、俺以外の奴を……助けて、くれよ……もう……戦争なんて終わったんだろ……？」

その言葉は、心からのものだったのだろうか？

他人を思いやれる、それを知っていた名も知らぬ偽物……そんな彼へと俺は無情にもその言葉を呟いた。

「リライト」

……すまない。

俺はお前の求める英雄じゃなかった。

全てを救う、弱きを助け、強きを挫く、最強無敵の完璧超人には成れない。

だから……今度は幸福な夢に抱かれて眠れ。

俺の心の呟きは、リライトで消してしまった偽物への客達の困惑の声に呑れても消える事は無かった。

第８２翼　ネギＶＳラカン後編、手加減する紫の麗人（後書き）

久しぶりの更新でした。
ラカンＶＳネギは良いところでカット。
結果はネギの切り札諸々によって引き分けに。

偽物朱然さん。
かなりの小物臭を醸し出し、本物にフルボッコ。
でも戦争の犠牲者っぽい。

＞――――俺が……ガンダｍ、朱然だ！
書いてから思ったネタその１。
来いッ、ガンッ○ァァムッ！！！

＞英雄なんてモノに未練も愛着もないが……それでも、お前さん程度に名乗らせられるほど、安いモノでもない。
書いてから思ったネタその２。
お前はどこの抜刀斎ござるか。
飛天御剣スタイル！！

久しぶりに書いたのでキャラの口調を忘れるという……その内修正しよう……。
活動報告にも書きましたが、第１９翼＆ａｍｐ;第６９翼にてルクレツィアと朱然さんのイラストを描いてみました。
下手ですけどねヘヘ；
興味のある方は見に行ってみると良いのではないでしょうか？

第８３翼　震撼する世界、公表する紫の麗人（前書き）

ストックなどとうに無いッ！！

第８３翼　震撼する世界、公表する紫の麗人

「俺が本物の朱然だという事はわかったかな？」

偽物が気絶した後、俺は魔族っ娘の司会に近づき確認を取ってみる。

『ハ、ハイです！！　ですが……』

まだ半信半疑か。

それもそうか……英雄としての力の差を見せつける事と偽物の排除を同時に出来ると思ったが、よくよく考えれば強い方が本物だ、なんてなぁ……始めから仮契約カードを見せていればよかっただけのことだ。

それに無数の姿の異名通りに変身してみても良かったかも知れん。

「まだ確信が持てないようなので、コレをカメラで拡大して見てみると良い」

俺はナギとの仮契約カードを取り出し掲げた。

その仮契約カードを闘技場のカメラが写しだし、闘技場中央上に設置されていた巨大スクリーンと中継先へとその内容を映し出した。

ナギ・スプリングフィールドの従者、朱然。

『ホホホ、ホンモノだぁぁぁぁ！！　仮契約カードに確かにナギ・スプリングフィールドの従者と書いてあります！！

ま、待ってください！？

死亡したと噂のナギ様ですが、カードの模様が消えていないという事はつまり未だ何所かで生きているという事に？！』

観客達も狂ったように叫ぶ者、失神する者、呆然自失する者などに溢れた。

む、ナギの生存バラしてしまった……ま、いっか、別にバレたからといって手出しできるはずないし。

「ようやく信じてもらえたようだな……そろそろ俺が此処に現れた本当の理由を聞いてほしい」

ようやくメガロメセンブリアに対して行動を起こす事が出来る――――

俺は話をするべく、滑らかに口を動かした。

「そうだな……誰もが知っている２０年前の大戦の……その裏話から話そうか……」

※第５６翼　黒い死神、暗躍する紫の麗人参照

俺は２０年前の大戦の事の起こりを語る。

「という訳だ。　メガロメセンブリアは確かに国の為に俺達紅き翼を利用していた……それは良い。

間違いなく国の困窮の為に、俺達を利用する事は必要だった。

その後の都合の悪い事を知ってしまった俺達に追手を消し掛けたのも正しい判断だっただろう。

その事について、紅き翼は今更どうこうする気はない。

ただ俺にとっての問題は孤児の子供達を使って、より強い……それでいて不完全な人造生命体を非人道的だと知っていてなお作りだ

した事だ。
無数の姿という異名は……メガロメセンブリアに造られた訳ではないとはいえ、俺自身がその人造生命体の一人だからだ。
俺の身体にはまだ紅き翼ではなかった頃に知り合った……俺を母と呼んだ子供達の血肉で造られ、魂が内包されている。
姿を変えた後の姿は俺の子供達の姿だ……そんな存在をメガロメセンブリアは多くの犠牲と共に作り出していた。
そんな事の為に、子供達が犠牲にするメガロメセンブリアを……俺は許す事が出来ない」

俺の淡々とした告白に会場は騒然となった。
英雄、朱然の正体は……自分自身の子供達を使った造られた存在だという事に。
メガロメセンブリアが非人道的な事を行っている事に。

「先程の偽物を消した魔法について話をしたいところだが、俺は彼は殺していないという事は私の真名に誓って保証する。
さて、もう一つ昔話をしよう……大戦の後の紅き翼が解散した後の旅の話をだ。
完全なる世界によって操られ、そして帝国と連合は己の利害の為に長引いた大戦は多くの爪痕を残した。
紅き翼はこの時からメガロメセンブリアの追手に追われていた。
理由はオスティアの王女アリカ姫が王殺しの汚名を着せた事、つまりは都合の悪い事の隠蔽と英雄としての力が自分達へ向かってくる恐れからだろう……紅き翼は散々に逃れ、ガトウ・カグラ・ヴァンテンバーグは死に、アルビレオ・イマは手傷を負う事になる。
ナギは完全なる世界にも追われていたようでもあったみたいだな」

ガトウは生きているし、アルの怪我は嘘なのだが、今は言うべき時ではないので言わない。

「メガロメセンブリアが俺達に追手を差し向けたその日から、俺達は公では象徴として名ばかりの英雄と持て囃されたが、実際は裏で反逆者となっていた訳だ。
数年、俺も姿を変えながら一人で旅をしたよ……各地を名もない逃亡者としてね。
いや……旅というより、彷徨っていたと言った方が正しいか……世界のどこに隠れても追手は諦める事は無くてね。
逃げて、逃げて、逃げ続けた末に辿りついたのは辺境にある瓦礫の並ぶ紛争地帯だったよ。
難民達がごった返し、様々な人間が入り乱れ、戦場を荒す傭兵や火事場泥棒が闊歩し、敵味方関係なく転がっている死体の山……そんな場所だからこそ、俺はそこに身を隠せた。
そんな場所で身寄りの無かった子供達を気休めに何人も助けては、昔の伝手や逃走の時に知って世話になった各地の孤児院へ送った。
そんなのは自己満足だと思っていても俺は子供達を放ってはおけなかったんだよ……なにぶん、俺は子供を作りにくい体質でね……人一倍、子供が好きなんだ。
それからようやく追手を差し向けた人間が全員何かしらで死んだのか、追手が来なくなって俺自身が孤児院を経営した。
そこには戦争で笑顔を失った子供達の笑顔が徐々に戻りつつあったんだ。
俺達が命を掛けて守った世界には、汚い事が溢れてるけど、それでも……自分のやってきた事は全て無駄だったのではなかったと思った事は何度もあったよ。
子供達のその笑顔が、その無邪気さが……俺にはとても救われた気がした……その平和だった日々は少なからず英雄としてではなく、一人の人間としての幸福を感じていた」
観客達は最後の最後に救われたのだと安堵の溜息を漏らす。

しかし、俺は、だが――――と話を続け、皮肉を込めた笑いを浮かべた。
それによって観客達の表情が引き締まる。
「なのに……俺には君達と同じように、一人の人間としての幸福を享受する事は許されないと言うか？」
それは全世界の人々に向けた、とても唐突な問いかけ。
「……だがそれすらも奪われた……滑稽だとは思わないか？」
その言葉は止まらない。
「それから大戦も過去の事になりつつある今、メガロメセンブリアは……数ヶ月前に俺の孤児院を襲撃してきたんだ。
その理由は１０年前にナギ・スプリングフィールドの故郷の村を襲撃するように命令された、生まれたての人造魔法使いの娘を俺が助けた事が原因だよ。
その娘を……ナギ・スプリングフィールドの故郷の村を、自分達が正義なのだという事を保つ為に、メガロメセンブリアは襲撃した事実と人造魔法使いを製造していたという証拠を消す為に襲撃をかけて来たんだ。
その所為で４人も孤児院の子供達が死んだよ……また俺は守れなかった……英雄なんて呼ばれながら、自分の子供達を救う事が出来なかった……結局、俺は……英雄などではなく、唯の人間だと思い知らされたよ」
皮肉の笑いは乾いた笑みへと変わる。
スクリーンに映し出された自分の表情は、時の止まったままの２０代前半のはずなのに……１０歳は老け込んだように見えた。

俺は目を閉じ、深呼吸をしてから改めて語り出す。

「メガロメセンブリアに襲撃された俺の孤児院の事は、襲撃したメガロメセンブリアに情報規制され、揉み消された。
愛すべき家族を殺されてそれが無かった事になる？
それこそふざけるなだ……孤児院の子供達は血は繋がっていなかったが確かに俺の娘、息子達だった！！
俺の子供達は一体何の為に生きていたんだ？！　何の価値もないのか！？　子供達が一体何をした！？
もしそれが……メガロメセンブリアのやってきた事が本当に正しいのなら、その理不尽をッ、このやり場のない怒りを何所にぶつければいい！？」

それは叫びだった。
奪われた者の叫び。
まるで血を吐くように紡ぎ出される、そんな言葉。

「さっき戦った俺の名を騙った偽物もまた戦争の被害者だった。
俺が消す前に言ったよ……他の誰かを助けてくれと……もう戦争は終わったんじゃないか、とな。
もうたくさんだ……もう、これ以上……下らない事の為に誰かを殺さないでくれ……ッ」

スラスラと出る偽りの言葉。
本当は私怨の為にネギを殺そうとしている癖に、よくもこんな事を躊躇いもなく喋られる、と何所か他人事のように冷静に見ている自分が居る。
今までの自分……それは同情や憐憫を引くものだった。
情けない事に、心の奥底で俺は助けを求めている。
一人は怖い、一人は恐ろしい、一人は嫌だと。

本来ならば、それは褒められた態度ではない。
それを気付かせてくれたエヴァには本当に感謝している。
だが今のこの状況で、敢えて使うならば、それもプラスへと変わるだろう。
自分達の雲の上の存在が……憧れの対象の弱さは、何も知らない一般人にとって同情と憐憫――――庇護欲をそそるのだ。
自分よりも可哀想だから何かをしたい。
自分よりも劣っているから助けてあげる。
自分よりも不幸だから救ってあげようと思うのも、また人なのだ。

「知ってもらいたい事はこれだけじゃない……この魔法世界は約１０年後に消滅する事を、メガロメセンブリアは隠している」

観客達はざわめく。

「勿論、信じられないのかもしれない……だが事実だ。　その事は各国も掴んでいるだろう……国としてそれは間違っていない。
しかし、メガロメセンブリアは魔法世界の住人……つまりは亜人を見捨て、メガロメセンブリアに住む住人、純正の人間だけを旧世界へと移住させる計画を立てている。
それを実行しようとしているのが一部ではなく、関与していない元老院議員の方が少ないくらいだ」

先程の弱い姿から一転、また英雄としての仮面を付け、水面に１つの石を投げ込む。
しかし、その石は人が抱えられないほど大きな岩だ……世界規模で波紋と暴動を引き起こすのに十分過ぎるほどの問題。
それを此処でバラした。
それと同時に待機していた超が手はず通りに、ガトウと俺が集めた元老院議員の今までの経歴が事細かに記されたリストと、メガロ

メセンブリアのやってきた事がバラまかれる。
恐らく、今現在メガロメセンブリアはてんてこ舞いしているだろう。
電子精霊群がこのリストを消そうとしようが、超の神秘の原文（アルカヌム・テクストゥス・レセプトゥス）によって、赤子の手を捻る様に制圧されているのだということが予想できる。
現時点で、超の電脳戦能力は世界屈指だ。
止められない。
止められるはずが無い。
世界へメガロメセンブリアの不満は、以前の根も葉も潜んでいた種が、植え付けられていた物が芽を出した。
その芽は今の動かぬ証拠という水によって急激に成長していくだろう。
俺の計画の第1段階はこれで終わり……計画を第2段階へとシフトしよう。

「本来ならば、俺も黙っていただろう。
余計な混乱は避けるべきなんからな……今回のこの暴露に付いては、孤児達の私怨が無い訳ではない。
魔法世界崩壊については、この世界の全ての人間が知るべき事だと思っただからこその決断だ。
本来ならテロとして処刑されても可笑しくない事を今してしまった……今の話を聞いた全ての人に問いたい。
俺は間違っているのだろうか？　真実を知る事が幸せだとは限らないし、知らない幸せがある事も重々承知している。
でも今のメガロメセンブリアのやり方は間違っていると思う。
疑問を聞き流さず、他人事だと決めつけずに、当事者として考えて欲しい……それが今の俺から言える最後の言葉だ」

俺は身を翻し、闘技場を後にする。

闘技場の観客席には元クラスメイトの姿も確認できるが今更、何の未練もない。

実力的にも危険度はさほどではないので放っておいても問題は無いだろう。

最終的には、対峙する事になるんだろうけどな……今はメガロメセンブリアの動きを止める事が最優先だ。

民衆を悲劇の英雄として偶像で操り、メガロメセンブリアの動きを鈍らせる。

その内、メガロメセンブリアにはデモが起こるかもしれないが、偉大な魔法使いを取り決めるられるほど公に正義という立場を使っているのだから怪我人は出ないにしても、死人は出さないだろう。

怪我人を出すか、はたまた暴徒鎮圧のために兵を動かせば、それだけで今まで築き上げてきたイメージが落ちるし、俺の言葉に真実味を帯びせる一因になる。

逆に知らぬ存ぜぬを通して居れば、それだけで今後の動きは鈍くなるだろう。

何所までこちらの思惑通りに進むかは神のみぞ知る、だが――――

「居るんだろう？」

混乱する街の裏路地を闊歩しながら、俺は彼女達に向けて言う。

「で、ようやく迎えにきたという事で良いのか？」

「ああ、随分と周りくどい事をしたが、ようやく迎えに来れた」

後ろから近づいてきたエヴァンジェリンを振り返り抱締めた。

「母上――――先程のアレはなんです？　悲観主義者（ペシミスト）気取りの真似事ですか？」

「ヒュ～、ようやく我等の母君に春が来たか？」

「……茶番」

そこには置いて来たはずのヒナギク、ラリー、ブルバギが……3人の子供達が姿が在った。

どうやら俺の嘘は此処に居る全員にはバレてしまっているようだ。当然と言えば当然か……そりゃ、何所の三流演劇だと言わんばかりの都合の良い不幸具合だったからな……というかブルバギが喋っただと？！

「お前達は、俺をどうするつもりだ？」

笑みを浮かべながらエヴァの腰に手を回し、寄り添いながら子供達に逆に問う。

家族とはいえ、一度は相対してしまったのだ。

その辺りはキッチリと詳細を聞いておかねばなるまい。

「私は私達と同じ孤児達を増やすのならば……例え返せない程、多くの恩義を仇で返す事があろうとも、私はッ！」

眼を伏せつつそうなってほしくないという気持ちが解るほどに感情が篭っている癖に抑えられた声が俺に向けられる。

ヒナギクは正義感が強い。

故に俺が世界を滅ぼすと言えば、敵対は必至だろう。

「俺は母さんについてくぜ？　ブルバギは？」

「……」

ラリーは当然のように俺の側に付く事を明言し、ラリーに促されたブルバギは無反応なので、恐らく決めかねているか中立なのだろう。

「ルクレツィアの仇を取る……生きるか死ぬかはその仇の選択次第だ。

そいつ以外は必要が無い限り誰も殺さない……それは約束しよう。

強いて言うならば俺の役割は分岐点だ……世界はもう英雄なんていらないし、生きるも死ぬも自分達で選択する場所へと導く」

第一段階が終了した今、残る仕事は大きくなり過ぎたイレギュラーである自分の存在の記憶消去、魔法世界の意識の確立による魔力生成と循環の改善、星と造物主との対話、間接的なルクレツィアの死の要因を作ったデュナミスへの鵬法璽（エンノモス・アエトスフラーギス）による制約成立、ネギを選択の岐路へと立たせる事だ。

それが終われば……俺は……。

「全てが終わった後は旧世界で隠居でもするさ……エヴァと一緒にな」

「で、俺は母さんと戦う事は決定事項だ……でも一つ訊いておきたい。

ヒナギクもこれを聴いてから決めても遅くはないんじゃないか？」

「何を聴きたいんだラリー？」

まあ、予想はつくが……。

「俺は母さんのその計画が正直、正しいとは思ってない」

「だろうな」

「な……ッ！！」

ラリーと俺は当然の事を淡々と言い、その事が意外だったのかヒナギクは驚きの声を漏らす。

ヒナギクが驚くのも無理はない、か……何せ間違っているかもしれないという事を肯定したうえで俺に付くという選択をするラリーに、その問を平然と肯定すればな。

「もっと安全で、全員がハッピーエンドってな具合の別の方法はないのか？」

「さあ？　俺はルクレツィアの死の原因を作った奴らに責任を負わせられればそれで良い。

もし……もし仮に本当にそんな選択が有ったとしても俺は……その選択を選ばないだろう」

「何故ですか……全てが幸福である事を何故、どうして選ばないのですか母上……ルクレツィアの事が許せないからですか……ッ？！」

ヒナギクは俺の答えに当惑し、どうしようもないほどの困惑を浮かべて問いかける。

「決まっている……それは――――――」

――――――お前達（かぞく）が俺の全てだからだ。

「！！　もし一歩間違えて最悪の結果になるかもしれないとしてもですか……？」

「ああ……だが、何もしなくてもそれはやはり罪だ……魔法世界の崩壊を知らせた者としてのな。

俺は魔法世界を崩壊させたい訳じゃない……俺はお前達がこれからも生きていけるこの世界を救う。

変えていくのは変えたいと願い、動く者達に任せればいい。　正しければ変わっていけるだろう……間違って居れば変わらず、滅びる。

それがただの摂理さ」

「フ……ッ」

俺の宣言に、エヴァは笑いを零す。

「わ、笑うなよエヴァ……」

「私もお前の家族の一員に成れるんだろうな？」

「当然だ！」

エヴァに対して俺は断言する。

「おいおい、母さんの家族って言葉に感動して泣いてんのか～？」

「な？！　泣いてなんかないッ！！」

抱締めたエヴァを至近から見降ろしていると、ラリーとコザクラの声が耳に届いた。

「嘘つけ～、目尻に涙が……って、うおッ？！　刀は反則だろ！！」

ヒナギクをからかったラリーは、照れたヒナギクに追い回されて逃げ回った。

それから落ち着いた後に俺の計画を伝え、エヴァだけでなく子供達も俺の計画に加わる事となった。

「こほんっ……ともかくわかりました。

しかし、先程の演説では、世界平和なんて綺麗事よりも好いた者の為に世界を～、の方が観客受けは良かったのではないですか？」

「だな……しかし、なんというか殺伐としてるかと思えば案外余裕

そうで安心したよ……あ、そうだ母さん聞いてくれよ～。
コイツ、今の母上はヤケになっているようにしか思えん、とか真顔で言ってたんだぜ？」

ヒナギクが冷静に俺のシナリオにケチを付けたかと思うと、ラリーがヒナギクをからかった。

「う、うるさい！　あんな事があったのだッ、そう思い込んでしまうのも仕様が無いではないかッ！！」

デレた。
もう少しこういう面を見せれば、男の一人くらい捕まえて普通に生きるくらいしそうなのにな、ヒナギクは。
ラリーは余計な事を言わなければ2枚目なんだがなぁ……。
俺はそんな親としての心配ごとを場違いにも思う。

「ともかく私達も母上と戦います……母上も……そして世界も、子供達だって私達が守って見せます」

うん、ありがとう。
でもマウントを取りながら言う事じゃないよねコザクラ？

「そ、そうそう……ぐはッ、ちょッ、殴るのやめ……ッ？！」

ああ……ラリーがボロ雑巾のように……。

「……」

ヒナギクがラリーを殴りながら共に戦う意志を示し、殴られなが

らもその意志に賛同するラリーと相変わらずの無言無表情無反応の超マイペースなブルバギ。

「さあ、始めようじゃないか……世界相手の喧嘩をな」

エヴァは寄り添いながら笑い――――――

「ああ！」

――――――俺もエヴァに対して笑ってみせる。

こうして俺は久しぶりに……本当に、心の底から笑う事が出来たんだと思う。

第８３翼　震撼する世界、公表する紫の麗人（後書き）

朱然さんの計画第一段階終了。
第二段階は墓守り人の宮殿にネギ達が突入してからになりますかね～。
でもって、エヴァと子供達が仲間に……最終決戦までエヴァと子供達はどちらサイドにするか悩みましたが、戦力のバランス的に朱然さんサイドへ。
だって、ラカンリライトされないし、アルとか来るし、他にも援軍来る予定なので。

一応、大まかな最後までの流れを描いてはみたものの……果たしてこの通りに書き進められるのか……。
何せ計画通りに物を進めない事に定評があるので。

本家ではやはり造物主は???でしたね～、予想通りでした。
しかし、これで魔法世界編が終われば、新章へ突入するのだろうか？
新章突入したら……う～ん。
因みにこの作品じゃ、造物主の中身違いますけどね（ボソッ

時間的余裕が殆ど無いので、更新速度ががが……その辺りは気長に待ってくださると助かります。
流石に一ヶ月以上は待たせないつもりです。

８／２４　第一部に注意書きと挿絵を追加しました。

第８４翼　終わりの始まり、狼煙を上げる紫の麗人

英雄の帰還、そして国家へと急成長したメガロメセンブリア告発、世界は波紋を呼び、様々な議論を醸し出し、一日で魔法世界全土へと瞬く間に広がった。

しかし、完全なる世界が事を起こすのは次の日……つまりは今日なのだ。

俺の投げかけた世界滅亡の情報はネットを通じて魔法世界中へと広がり、世界はそれはもう様々な意見が飛び交った。

大まかに分類するならば信じる派、信じない派、中立派、不干渉派、どうでも良い派等々。

他にもメガロメセンブリアの不正や汚職などが広まった事により、偉大な魔法使いの認定を受けた者などや、その不正を知らなかった職員達すらもメガロメセンブリアを離反する事となる。

正に（まさ）……いや、正しくはないので紛れもなくや確かに世界は大混乱、の方が合っているのかもしれない。

過激な者達はメガロメセンブリアへと殺到し、デモを始めた。

結局メガロメセンブリアはその巨大さ故に身動きが取れず、後手後手に回りながらも軍を出動させ、ただ耐えるのみだ。

そんな中でも、オスティア記念式典は続けられると発表された。

中止すれば各国の面子（メンツ）が丸潰れになるからだろう。

フェイトとフェイトガールズ、そしてデュナミスは式典に襲撃をかける為に、仕事を遂行した俺を多少は信用したのか墓守り人の宮殿へと待機するように言ってきた。

特に闇の福音と怪物という破格の戦力を連れてきた事が、デュナミスの内心でプラスとなったのだろう。

何せ闇の福音は魔法世界ではお尋ね者で、人間に恨みを持っているとでも言えば違和感もほぼ無い。

茶々丸もエヴァと共に付いてきたが、従者の一言で押し通した。

何より造ったのは超なので、特に怪しまれはしない。
怪物の3人は戦災孤児にして傭兵であり、義賊として名が通っている。
俺との関係も多少は話したが、境遇がフェイトガールズと似通っている事から殊更不審に思われなかったようだ。
デュナミス辺りは、世界救済の手伝いとでも言っておけば信じ込むのだろうとでも思っているのだろう。
やはり俺が連れてきた、という点に完全なる世界の幹部であるフェイトとデュナミスは多少の不安を感じていたものの、フェイトガールズよりは実戦経験もある5人は、完全なる世界にとっては貴重な主戦力になり得る、とか何とか。

「お主……」

何時の間にやら白ローブのチビッ娘――――――もとい墓守り人の宮殿の主が居た。

「ん？　誰かと思えば墓守りのローブの人」

「墓守り人の宮殿の主だ――――――」

墓守人の主は、ムッとした表情を浮かべ俺へ訂正した呼び名を言うが、俺は更に言葉を続ける。

「そして、ウェスペルタティアの始祖にして、魔法世界創造で造られた人間族最初の一人。
偉大なる魔法使い……アマテルさん」

亜人としてのヒトではなく、人間としての人でもなく、人間のヒトとして生み出された存在。

造物主の……星を守護する為の人形となったゼクトの血と肉を元に造られた最初のヒトの一人。
後に魔法世界を放浪し、人々を救済したとされた偉大なる魔法使いアマテル・ウェスペルタティア。
それがこの娘の名前。

「――――――お主……まさか……」

アマテルは驚愕するも否定しない。

否定しないという事は肯定したという事と同義だな……本来の物語がそうなのかは知らないが、今の麻帆良に封じられている造物主の中身がナギではない事からも解っていた。
が、やはりこの世界は本来と似て非なる理の世界なんだろう。

「俺は違う。　俺は始めの一人じゃない。　世界の気まぐれに巻き込まれて差し込まれた、理（イレギュラー）を乱す者だ。
この世界での役割が何なのかは見当もつかないがね」

アマテルが言わんとした事を否定して俺の存在を教えておく。

事前に俺への対応策を準備していたならともかく、計画が完遂まで一日もない時点で俺を倒せるのはバグキャラやそれに準ずる者達、そして俺と同じようにイレギュラーとして現れるかもしれない者だけだ。

「主に忠告しておく……もう、そんなにこの世界に時間は残されていない。
儀式が始まれば、すぐにでも魔法世界は崩壊していくだろう。
だが俺なら魔法世界を儀式の最中に集まる膨大な魔力溜まりを使

って、今後より先の崩壊を阻止する事が出来ると断言しよう」

「なんじゃと？　どうやってそんな事が……いや、そもそも何故じゃ？」

何故、今このタイミングでそんな事を言うのかとアマテルは問う。

「俺の計画は子供達に生きる権利を与えたいだけだ。　御大層な世界救済なんて掲げるつもりはない。

家族の為に、守りたい者の為に世界を救う……言ってしまえば、家族達が生きる為にはこの魔法世界という土台がなくてはならないからついでに救ってやろうという事だ」

俺は腕組みをして壁に寄り掛かって問いに答えた。

「その物言い、一度ならず挫折を味わったようだな」

「伊達に歳だけは取ってないんでね……まあ、それを言うなら貴女の方もか」

俺は皮肉を込めた言葉を、これまた皮肉を湛えた笑みを浮かべながら投げかけた。

「お主のその計画とやらと完全なる世界の行動理念の反りは合わないと思うのだが……つまりお主は完全なる世界を裏切る、という事で良いのかのう？」

「裏切る？　違うね……元より仲間となった訳じゃない。　アマテル、貴女と同じだよ」

「随分な良いようじゃな？」

俺の浮かべた笑みに笑みで答えるアマテル。

「ともあれ、私は私で動くのでな邪魔立てはしてくれるなよ？
もっとも私達の力を借りたいというのならば、完全なる世界よりは信用はできそうじゃし、手を貸すこと事も考慮しておこう」

ただ私の友人達はお主を認めるかはわからんがな？と言い残して去ってしまった。

ふむ？

ポヨだけで何かをするのか？

いや……友人達、という事はポヨ以外にも別のイレギュラーが現れるということだろう。

本来ではネギに加担するくらいしかしらないが……しかし、動くという事は何かしらの行動を起こすことには間違いはない……警戒しておくかね。

さぁて……長い長い夜が幕を開けるぞ……果たして明日の朝日をお前達は迎えられるかな？

一方その頃。

「答えを……迷う理由は何一つないと思うのですがね……私の仲間になるか否か」

クルトはネギに答えを迫る。
今までのメガロメセンブリアの所業、拳闘大会で朱然が暴露したところと何ら矛盾はなかった。
寧ろ、ネギにとってそれは確かに心揺さぶるものだ。
全てを引き換えにしてでも仲間となって仇を討つこと。
本来でそれはネギの根幹だった。
だがこの世界にはネギに少なからず影響を及ぼした存在が居る。

「僕は……今後を考えれば貴方の仲間になった方が良いんだと思います」

「ほう！　やはり君は大局を良く見ているようだ！　そうですよ…君の父君と母君に近づく近道は私と共に来る事です！
さあ！　後はネギ君……君が頷き、私のこの手を取ってください。
それで契約は完了する」

「だから……ッ」

果たしてネギの選択は――――――

また別のところでは。

「人形は人形師に逆らえない」

ラカンの表情は難しく、更に引き締まっていく。
瞬間、不可視の衝撃波がラカンの近くを越えて迫る。

だが――――

「な、に……？」

フェイトは驚愕する。

そこには無傷のラカンの姿。

バグやチートなどと揶揄されるほどでも、まさかこの世界の律する理からの攻撃を回避されるとは思いもしなかったのだ。

「いやぁ、そんなもんで良かったぜ……なにせスイセンの宝具とかいうのはもっとえげつなかったからな」

それは造物主との戦いの後に朱然が手にした伏羲六十四卦方位図と一度だけ戦った事があったというだけの事。

朱然とラカンが腕を鈍らせない為にそれなりに本気で戦った時、ラカンが伏羲八卦次序太極剣を撃つように挑発し、その挑発にワザと乗った朱然が偶然にも八卦八武装の正しい並びを揃え、本当の力を解放してしまい伏羲八卦次序太極剣ではなく伏羲六十四卦方位図が襲い掛かったのだ。

その時は朱然が何とかコントロールを取る事ができたお陰で助かったが、ラカンやナギ達だけが無事で、周囲の地形は著しく抉り尽くされていた。

それは破壊ではなく消滅。

魂魄すら一切残さない消滅だった。

それに比べれば、今の攻撃はなんと慈悲のある攻撃だっただろう。

朱然は、アーティファクトの効果みたいなもので特定の効力を発揮する物……名前は宝具だ、で誤魔化していた。

実際の所、宝具は概念武装とはまた少し違った物であるのだが、その違いを説明しても混乱させるだけだったので黙っていたのだ。

もっとも、ラカンはその時に鼻をほじりながら説明を聞き流していたので所々聴き逃していたのだが。

「へぇ……それはとても詳しく話を聴きたいところだ」

フェイトの周りに黒い杭――――――万象貫く黒杭（キルクルス　ピーロールム・ニグロールム）の円環が滞空する。

ラカンは獰猛な笑みを浮かべ、フェイトへと向かっていく。

フェイトの命令と共に撃ち出された石化の黒杭が絨毯爆撃のようにラカンへと迫り、ラカンはそれを弾き、砕き、掴み、避け、突破してゆく。

黒杭を絶やさず掃射してできたラカンの隙を逃さず――――――

――――――リライト

人形を完全なる世界へと封じる魔法を放つ。

フェイトはこの時、ラカンを封ずることに成功したと確信した。

だが――――――

「おっと！　喰らわねぇよ！」

今のラカンは規格外の力を持っているだけのヒトに過ぎない。

造物主の鍵と同等の力を持っている訳ではないのだ。

故に闘技場に朱然に見せられた事によって、致命的とも言える一撃（リライト）を紙一重で回避し、受けずに済む事に成功する。

「何故だ……どうしてそこまで貴方は……」

「決まってんだろーが、俺は俺が正しいと思った事をするだけだぜ

……他の誰でもねぇ……自分自身（テメェ）の思うがままにだ！
おめぇも言われたまま世界滅ぼすより、自分のやりてーことを見つけてみせろや！！」

本来とは違う流れ、それは結末に影響を及ぼすのだろうか――――

パーティー会場警護艦・オプタティオー

「むっ！？　艦長！！　人型熱源体約１０００！　悪魔型熱源体約７０００！　大型悪魔らしき影１！！
襲撃です！！」

雲に潜っていた願いという名を冠された警護艦の女オペレーターが異変に気付く。

「見間違いじゃないのか？！」

「間違いありません！！」

艦長がオペレーターに怒鳴るが、逆に怒鳴り返され少し怯む。

「全艦に通達！　襲撃を掛けてきた馬鹿共を精霊砲で迎撃しつつ防衛戦を張れとなッ！！」

流石は艦長というべきか、すぐにやるべき事を実行する。

「人型が何か喋っているようです！」

「音声拾えるか！？」

「やってみます！」

精霊を利用した集音器を人型の集団へと向けるとむさ苦しい声が聴こえて来た。

「「「「「ばぁばば、ばぁばば、ばぁばばばぁ～」」」」」

「何かの暗号か？」

「さ、さあ？」

困惑した艦長とオペレーターそして他の船員達。

しかし、その人型の姿がモニターに映し出された瞬間――――――

明らかに人型達は此方へと一斉に向いて叫んだ。

水色のウェーブした髪。

芸術とも言える肉体美。

担がれたバトルアックス。

その注がれる視線はただひたすらに――――――邪悪だった。

「「「「「ぶるぁあああ――――――ッ！！」」」」」

「「「「「ヒィィィッ？！」」」」」

クルー全員が悲鳴を上げた。

「「「「「今日の俺はちょっぴり狂戦士的だ。　運が悪かったなぁッ！！」」」」」

そしてこのセリフである。

因みに朱然と超の設定した人工知能の内部難易度はマニア。

解っている人は解るだろうが、一応念の為に教えておこう。

マニアは死ねる……それはもう死ねるのだ。

だがまあそこは朱然と超の最後の良心……肉体にダメージがいかないよう、何となく開発した非殺傷術式を搭載している。

この世界で初めて造った術式という事で術式容量が重く、若干ギャク口調になるが、死人が出ないのならば十分だろう、という方針に。

「ぜ、全力で倒せェェェ――――――！！　何か知らんがアレはこの世に居ちゃいかん！！　絶対にだッッッ！！」

艦長は唾を飛ばしながらも一瞬飛びかけた意識を繋ぎ止め、一喝した。

大戦時でもこれ程の結束を見せたクルーは居なかっただろう。

後々このクルー達が名を馳せる事になる――――――ようになったかどうかは定かではない。

寧ろ脱げ伝説が到来しそうであることは……とても安易に考えられるのだった。

第８４翼　終わりの始まり、狼煙を上げる紫の麗人（後書き）

ようやく次回より、最終決戦に突入？します＾＾

墓守り人の主＝アマテルはこの作品の独自設定なので悪しからず。
というかアマテルさんのフルネームこれで良かったかうろ覚え……
というかフルネーム出たっけ？

原作は最終決戦ぽかったくせにまだ続く？っぽいですね～。
この作品では完全なる世界で終わりにする予定ですけど。

次回もやはり今までよりも時間がかかりそうですが、その辺りはご容赦を。
活動報告は気が向けばそれなりに更新して行きたいと思います。
ではまた次回ノシ

第８５翼　八門遁甲、出向く紫の麗人（前書き）

なんとなく眠れなくなって一徹してようやく完成。
でも途中で意識が飛んだ。

第８５翼　八門遁甲、出向く紫の麗人

「ヒドイッ！　ヒドイよッ、そんなの！」

「ああ……まさか一人で行っちまうとは思わなかったぜ」

「ネギの奴、絶対に許さないんだからッ！！」

巻き込まれ組が嘆き、千雨は眉間に皺を寄せ、明日菜は激昂する。

悪魔群の襲撃。

クルトが語ったネギの過去、そしてそこから更に今日まで続く物語。

記憶を解かれた明日菜達にとって、エヴァンジェリンの別荘で見たネギの記憶と符合し、ある程度の疑問も解かれた後、クルトはネギへと問うた。

「答えを……迷う理由は何一つないと思うのですがね……私の仲間になるか否か」

「僕は……今後を考えれば貴方の仲間になった方が良いんだと思います」

「ほう！　やはり君は大局を良く見ているようだ！　そうですよ……君の父君と母君に近づく近道は私と共に来る事です！

さあ！　後はネギ君……君が頷き、私のこの手を取ってください。
それで契約は完了する」

「だから……ッ」

ネギはある条件を掲示して頷き、千雨、朝倉、のどか、さよは動揺するが声は出さなかった。
ネギの条件は、魔法世界に居る教え子全員の帰還だ。
クルトは頷く。
その程度ならば想定内、その程度なら容易い事だと。
ネギはクルトが取り出した強制証文（ギアスペーパー）に名前を書く段階で、筆を止めて核心を問う。

「この魔法世界が、火星に築かれた人造異界の崩壊の危機……ということですね？」

そこでまた、一つの出来事の顛末が変わった。

ネギの問いにクルトは言った。

「ああ、その事ですか……君が知っているという事も織り込み済みでの話ですよ」

「？！　何故、僕がその事を知る事が出来ると解っていたんですか？」

「簡単な事です、少し前に私は言いました魔法世界全てを救ってほしい、と。
私は彼と……そう、あの英雄シュゼンと繋がっているのですよ」

そう……クルトは、確かに全てを救うと言っていたのだ。
そして、朱然はクルトに協力を得る為に、己の秘密を教えた。
クルトはそれを認め、全てが決められていたという理不尽に憤怒し、それを変える為に朱然と情報の共有していた。
全ては本来の流れを変え、世界を救う為という建前で、アリカ王女の無実を晴らす為に。

「ク、クルトさん！　それは本当ですか？！」

のどかがいどのえにっきで確認を取ると、いどのえにっきに真偽が記されていく。

「ホントです。　クルトさんは……朱然さんの仲間の一人です……でも――――――」

「本当に便利なアーティファクトですね……ですが、それ故に信頼できるのではありませんか？」

「くっ！　だがアイツは完全なる世界だぞ！？　そう思っていても信用できるかよ！」

千雨はクルトに更なる疑いを抱く。

「その辺りもいどのえにっきで確かめてはいかがです？　彼の計画が此処まで進んだ以上、情報の秘匿は意味を為さない。
それに必要以上の事は私も知りません。　それもどうぞ、幾らでも質問して下さって結構ですよ？
もっとも、質問する時間がそう残っている訳でもありませんがね……そうそう、彼からの伝言です。
待っている、だそうですよ」

クルトは余裕を崩さずに微笑んだ。

「！！」

そして、冒頭の少女達の叫びに戻る。

ネギは更なる取引をクルト交わし、最終決戦の地、墓守り人の宮殿へと向かったのだ。

それも一人で。

それが冒頭での少女達の怒りの正体だった。

唯、誤算だったのは旧世界出身とはいえ、異常な戦闘力を持っていて、脱出艇までエスコートされていた面々、待機していた面々、途中乱入の面々が大人しくメガロメセンブリアの護衛達に有無を言わされぬままに脱出させられるどころか脱出艇を強奪し、追い付いてきたグレートパル様号と共に墓守り人の宮殿へと向かってしまった事だろう。

Ｓｉｄｅ朱然

「ふむ、予定通りだな……」

超と朱然が造ったステルス監視カメラで見張られているとも知らず、ネギと白き翼&その他組が合流し、ネギが怒っているが、逆に小太郎に殴られたのが見えた。

まず、本来の予定通りのネギとラカン。

次に小太郎、明日菜（偽）、木乃香、刹那、楓、古、ハルナ、のどか、夕映、朝倉、さよ、亜子、夏美、アキラ、祐奈、まき絵。

現れるかどうかは運次第だと思っていたのが真名、ベアトリクス、高音、愛衣、美空、ココネ。

完全に予定外なのは、トレジャーハンター４人組と旧世界に居るはずの桜子だ。

もっとも、ラカンは外で俺の人形を食い止めるのに大忙しのようで、デュナミスの影人形はラカンの攻撃が通るが、鍵持ちはやはり効果は薄い。

薄くとも攻撃の効果が少しあるだけでも十分に規格外なのだが。

それにラカンが何故、外で人形を喰い止めてもらっているのかというと、タカミチが居ないからだ。

この辺りは俺がタカミチの心を圧し折って救援どころの話ではなくしてしまったのが原因だし、造物主の掟でオスティアを蹂躙させる訳にはいかない為に、ラカンへ頼んでおいたので問題はない。

そして、この場所へネギを追ってきたクラスメイト達を通す為の道を作ってもらう事を頼んでおいたのも俺だ。

最終決戦へのお膳立て、世界の矛盾をなるべく小さくしていく事で、世界は予定調和へと進む。

つまり、ネギ達の行動を予測、修正していく事で本来に近くしていく事が計画第2段階の要とも言える。

学園長（ジジィ）はともかく、タカミチの守りという外の戦力を蔑にし過ぎるとオスティアは想像以上の世界的規模の被害を被る可能性がある以上、本来とは別の流れへと変わってしまう可能性もあるからだ。

そこでラカンを生存させ、且つ本来ラカンが復活する辺りまで時間が経たなければ、ラカンがこの最終決戦への参戦はないという微

妙なさじ加減をこなし、多少余計な者達もついて来てしまったが、ようやく白き翼と完全なる世界だけでの戦いを実現させるまでに至った。

その辺り、予定通り過ぎて、この状況を作った事こそが世界の修正力なのかもしれないと少し疑っているほどだ。

「ネギ君達が来たようだね？」

「ああ……で、手筈通りに俺達が足止めをすればいいんだろ？」

これは俺から提案した事だ。

儀式場へ陣取る事も考えたが、やはりちょこまかと動かれて計画を御破算にされるのは良くないと考え、邪魔者を減らす事にしたのだ。

「暦達も連れて行くがいいな？」

「それは構わない。　調さえサポートにいれば儀式は問題無い」

「じゃあ、行ってくるよ」

俺はエヴァ達と暦達と合流の後、ネギ達が突入してきた墓守り人の宮殿下層へと進んだ。

因みに超は、今回の戦いの一部始終をリアルタイムで配信するという重要事項があるのでお留守番だ。

そういえば、そろそろポヨが来るはずだが……やはり信用できない以上は警戒しておいた方が良いのだろう。

さあ、計画の第3段階までネギ達を足止めしつつ、本来とは違った世界の流れを作る為の分岐点までの時間を待つとしようか。

そう言葉に出さずに俺は、ネギ達の前に姿を現した。

「久しぶりだな、いや……よくぞここまで辿りついたな、とでも言っておこうか？」

最低限の光しか入らない墓守り人の宮殿の下層は、今や儀式の光によって明るく照らされ、両陣営の人間を余すことなく浮き彫りにする。

「シュ、シュゼン、さん……」

俺を視界に収めたネギは少し俯くが、すぐに視線を上げ、真っ直ぐに俺を見た。

魔力の流れを見るに、闇と光は丁度良く相殺されていると見える。何よりその視線、迷いがなくなっている訳ではないが、それでも随分と見違えたぞ。

よもや俺に対して負い目を持っていたお前が真っ直ぐに視線を返せるとは思いもしなかった。

「さて俺達はご覧の通り、お前達の邪魔をしに来た。　お前達は完全なる世界の儀式を止めに来た。

それが明確な以上、お互い譲れない――――――」

「シュゼンさんッ、僕は貴方も――――――ッ！」

ネギは俺の言葉に被せるように声を発するが、俺はそれを無視し話を進める。

「――――つまり、これ以上の問答は不要！！」

言い切った瞬間に俺達は武装し、それを見たネギ達も次々武装して緊張が走る。

正に臨戦体勢が整ったところで、闖入者が現れた。

「待つポヨ！！」

「あ、貴女は――――ザジさん！？　どうして貴女が！？」

「え？　ちょ？！　なんでザジさんがこんな所に？！」

「誰だ？」

「味方、という訳ではないようですね……」

白き翼サイドは困惑、此方側も当惑、といった体だ。

俺だけは事情を知っている為に、特に驚いては居ない。

「ふむ、この状態で話をするという雰囲気にはなれなさそうポヨ。彼等を借りるポヨよ？」

俺へとポヨは確認を取る。

「知っているのか？」

「シュゼンさんのお知り合いですか～？」

「母上……？」

「まあ、ちょっとな……」

エヴァ、月詠、ヒナギクの問いに言葉を濁しつつ答える。

チッ、確認されたからには関連がある事を確実にフェイト達に感づかれただろうがッ！

俺達も幻燈のサーカスで取り込む事を予想していたのに！

ネギ達へ姿を現す前に、予定通り過ぎて拍子抜けだ、と思った矢先に不確定（イレギュラー）とはな！

中途半端に空気読むなよ、ポヨ！！

内心そんな罵倒をしつつも、答えなくてはならないので完全なる世界の幹部の立場としての判断で仕方なく答える。

「良いだろう。　俺達は時間稼ぎが主だ……むしろ戦力消費せずに目標を達成できるのなら是非はない」

「それでは遠慮なく……」

そう言ったところで、ポヨとネギ達の姿が蜃気楼のように薄れて完全に消えてしまった。

どうやらポヨの麻帆良瞬間移動は限りなく造物主の技法に近い……アマテルが友人と言っていた事からも察しはつくが、恐らくポヨも始まりのヒトの一人……魔族の始祖と言っても良いのだろう。

しかし――――この微妙な状況の打開策を考えなくてはな……。

「「「で、説明してくれるのだろうな（のでしょうね）（るんです

か～）？」」」

いきなり敵対する者達が消えてしまい、手持無沙汰になってしまったのだ。

そして、俺といきなり怪しげな関係のポヨ。

こうなる事は当然の帰結であった。

エヴァ、ヒナギク、月詠が俺の肩を凄い握力で掴んでくる、が怖くて振り向けない。

な、納得いかねぇ……ッ！！

だ、誰か助けを――――――

３人の方を向かずに視線を巡らすという荒技を駆使しつつ、ラリーと目が合った。

「いやぁ～、モテるってのは辛いねぇ～」

サムズアップしながらとても良い笑顔で言ってくれた。

こういう時だけホントに敵だなラリー……後で覚えておけよ……。

次に視線があったのはブルバギと茶々丸。

しかし、ツイッと視線をすぐさま逸らされた。

ブルバギ、お前もか……茶々丸まで……。

最後にフェイトガールズ。

暦は冷や汗をかきつつ不器用に視線を逸らし、環は伏し目になり、焔はこんな時に何をしていると睨まれ、やはり救いの手は差し伸べ

てはくれないようだ。

「さて、助けは――――――」

「もう――――――」

「――――――居てへんようですなぁ？」

仲が良いのか悪いのか、この時の3人の意気は特に合っている。

この後、俺はネギ達が戻って来るまでに3人にボコボコにされたのだった。

まあ、吸血鬼化の影響で傷はすぐに治ったのだが、痛覚が無い訳でもないので無限地獄。

しばらくして、ネギ達の居た場所の空間に歪が発生した事を魔眼で感知した所で突風が吹き荒れた。

そのあまりの風の強さに瞼を一度閉じてしまう。

次に目を開いた時には両手の爪を伸ばしたポヨと断罪の剣と雷天大壮2を纏ったネギが鍔迫り合いを演じていた。

戻ってきたか……しかし、俺が御仕置きされた理不尽はキッチリ返さないと気が済まん！

と、言う訳で。

「おい」

俺はポヨに声をかける。

「何ポヨか？　今は忙しいポヨ。　後にしてほしいポヨ」

コ、コイツ……ッ、なんというかギルガメッシュに通じる反りの合わなさがあるぞ！

俺はこめかみに血管が浮くのに構いもせず、術を行使する事にした。

アマテルめ……そもそも明言しなかったとはいえ、もう少し何かしらの配慮をするように言っておけばいいものを……そうかいそうかい、そっちが此方の事情を鑑みないのなら此方にもその限りじゃないよなァ？

「天干・地干、八門、九星、八神を以て遁甲と成せ、失われた七つの景観と一の迷宮へと彼の者を誘え、八門遁甲の陣！！」

「今度は何よ？！」

「こ、これは結界？！」

「マ、マズイです！！　アレは奇門遁甲です！　脱出を――――――」

明日菜（偽）、ネギが驚き、夕映が注意を促したところで詠唱と共に術式を編み、右手を裏拳で振り切る。

その裏拳は空間を捕え、この世界の魔法陣とは違う八角形の陣が展開され、その場の人間全てを光と共に呑み込んだ。

八門遁甲――――奇門遁甲とも言うが、実際は中国発祥の占いの類である。

広義的には占術の一体系のことであるが、その思想から編み出されたこの術は、敵を誘い入れ、迷わせて惑わし封殺するという迷路化した結界を生成する。

八門の名の通り、開門、休門、生門、傷門、杜門、景門、死門、驚門の８つ。

出口はそれぞれあるが、その大半は通ると不幸な目に遭うようになっており、中には死門という通るだけで死んでしまう出口もある。

もっとも無用な殺しは計画を狂わせる為に今回は死門は外して、唯の面倒臭い迷路にしてあるし、残りの七門には俺のアレンジしたバトルフィールドに放り出されるだけだ。

こちらは元々設定どおりに足止めの戦力を分散して配置し、ネギ達はランダムに分配されるように設定されている。

今回の設定は、それぞれの門の番人となっている俺達を全員倒さなければ出られない。

因みにあの太公望も使っていた。

まあ、腐っても天才らしいからなぁ……あのなんちゃって軍師は……とても不本意だが……。

そんな訳でその場にいた全員は、俺の結界の中へと取り込まれたのだった。

Ｓｉｄｅフェイト

「奴は本当に信用できるのか？」

儀式場には４つの影。
フェイト、デュナミス、アマテル、調の４人だ。
４人が４人とも虚空を見上げている。
その中でデュナミスがフェイトへと向けて言う。
虚空には空ではなく、巨大なスクリーンが浮かんでいた。
そこには先程まで、ネギや朱然達が映し出されていたが、朱然の術によって８つの空間に隔離された状態の為に、既に姿はない。

「まさか、僕と彼は利害が一致しているから利用し合っているだけだよ」

フェイトはスクリーンを見上げたままでデュナミスに返す。

「ならば早々に処分した方が良い。　不確定要素は早急にだ」

「確かに裏切られる事も許容範囲内だけど、英雄としての力はとても有用さ。
それに例え裏切られるとしても、彼なら何かしらの状況の変化をもたらしてくれるさ……それはそれでやりようはある。
さて、主」

フェイトはやはりスクリーンから目を離さずにデュナミスからアマテルへと話を振った。

「何じゃ？」

「彼等は貴女の仲間だね？」

「そうじゃの」

アマテルは肯定する。
朱然とネギ達が消えた場所に、白いローブを着た2人組がいつの間にか現れていた。

「造物主に反逆するのか？」

「さての……」

「まさか、彼達が出てくるとはね……何故今になって……」

フェイトは苦々しげに2人組を睨みつけた。

「火、風、水を起こすが？」

デュナミスがフェイトに訊く。

「そうだね……彼等が邪魔をするのなら、不本意だけど必要になるかもしれない」

「では、準備は任せてもらおう」

デュナミスはそう言って儀式場から影に消えた。

さて、柩……いや、シュゼン……君はこの状況すら想定内なのかな？
僕は本当に、このままでいいのだろうか……人形に意志は必要ない……だがラカンは言っていた。

決まってんだろーが、俺は俺が正しいと思った事をするだけだぜ
……他の誰でもねぇ……自分自身（テメェ）の思うがままにだ！
おめぇも言われたまま世界滅ぼすより、自分のやりてーことを見
つけてみせろや！！

僕の、やりたい事……世界を無にする事？
造物主の人形として生きる事？
わからない、それに一体何の意味があるのだろう？
未完成な人形として起動した僕の役割は……。

目を閉じ、昔の記憶を思い起こす。
すると不意に、心にざわめきが生まれた。
彼女の事だ。
自分を助け、珈琲を振舞った彼女。
それから2番目に彼女が消されるまで過ごした日々。
何所か名残惜しいあの日々は、確かに人形だった自分の心にざわ
めきをもたらした。
そして、いつの間にか珈琲を呑むという思考がインストールして
いないのにも拘らず芽生えた。
僕は、彼女ともっと話したかったのかもしれない。
触れたかったのかもしれない。
一緒に、居たかったのかもしれない。

フェイトは目を開けると、そこには調しか居なかった。

第８５翼　八門遁甲、出向く紫の麗人（後書き）

とまあ、かなり原作のシーンを飛ばし飛ばして最終決戦の地に辿りつく事が出来ました。
ただ、見直しはしたつもりですが、今までよりも期間が空きつつチマチマ書いたので、矛盾点がある気がするので後で修正入れるかも？

蛇足、今回の朱然さんの術は主に氣を使った仙術です。
言うなれば修学旅行で天ヶ崎千草が造ったと思われる空間結界のようなものだと思って頂ければよろしいかと。

次回は第一門・開門の戦いを書いていきたいと思います、多分……。

そして、私生活での処々事情にて相変わらずの更新速度ですが、よろしくお願いしますｍ（＿＿）ｍ

第８６翼　剣劇、剣鬼と狂刃と翼剣（前書き）

こっそり更新。

第８６翼　剣劇、剣鬼と狂刃と翼剣

空間を歪め、捕えるというのは陰陽道の大本、中国から流れてきた術が元になっている。
朱然が用いたのは、その中でもとりわけ古い仙人が操る術――――仙術。
その術は不老不死の妙薬の生成から空間を操る結界術、現代風に言えば風水や占いなどにも応用されるモノだ。
いや、応用というよりも、劣化してしまったという方が正しいのかもしれない。
何せ、万人向けに効果が薄くなってしまったそれは既に術として成立する程の純度を保てないのだから。

「く……ッ」

桜咲刹那は呻き声を出し、身体を起こす。
取り敢えず、まず最初にしたのは自身の身体に異常が無いかの確認と、現状の確認だ。
その２つを周囲の警戒をしながら同時にする。
どうやら身体に異常はないらしく、刹那は身体を軽く動かした。
最後に聞こえたのは、夕映の発した鬼門遁甲という言葉。
本職は神鳴流の剣士だが、多少の陰陽術の心得は有る。
故に、鬼門遁甲というものも結界や占いの類だという事を知ってはいた。
といっても、やはり多少なので、自身は修学旅行中にネギ先生とアスナさんが囚われたという結界を思い浮かべただけに過ぎない。
結界――――――恐らくこれ程の規模の空間を作り出すのならば出口、もしくは術者が中に居るはず……そう思い、視線を巡らせて刹那の目に飛び込んできたのは、広くはなかったが、心に残るような

見事な庭園だった。
色とりどりの花が、瑞々しいその色彩を誇らしげに咲かせている。
そこは、有り得ないはずの幻想。
バビロンの空中庭園などと言われている場所を題材にして構築された場所だという事を、刹那は知る由もない。
刹那は警戒を緩めず、庭園の端へと足を向ける。
その境界へと達した時、刹那は立ち止まった。
立ち止まるおえなかった。
何故なら、それ以上進めば転落死してしまうからだ。
刹那は何所までも高い庭園の縁を覗き込みつつ、その高さに身震いをする。
すぐ上には雲一つない蒼天が広がっているが、よもや雲が眼下を流れているとは、一体どれほどの高さにこの庭園があるのだろうか？
そんな疑問を抱きながら、その透き通るような蒼を眺め、彼の事を思い浮かべる。
かつて自分を叱咤し、お嬢様――――――近衛木乃香との距離を取り持ってくれたはずの人物。
英雄・朱然。
あの悪魔襲撃の時から一時行方を眩ませ、すぐに再会する事となった。
敵から味方、そしてまた敵として。
もっとも、最初の敵は、私の一方的な敵意で、それを向けた事を申し訳ないと思っていた。
今回のこの騒動、完全なる世界の幹部として私達の前に立ちはだかった朱然を、果たして自分は敵として見れるのだろうか？と。
そして同時に思う。
大切な者を……お嬢様をネギ先生が奪ったとしたら、果たして自分はネギ先生と笑顔で話せるのだろうかと。
そんな事を思った瞬間、背筋に冷たい氷柱を差し込まれたかのような感覚がした。

思考は遅々としていたが、剣士として修練を積んでいた刹那の身体は、半ば反射的にその場から空中へと身を躍らせていた。
重力に従って、身体は重力を体感しながら墜ちてゆく。
目の前を先程まで自分が居た庭園を支える塔の壁面が高速で流れてゆく。
遥か眼下に在った雲を突き抜ける前に、刹那は己を縛りつけていた白き翼を顕わにして、一回転。
今度は重力に逆らって庭園へと舞い戻った。

「先程の一撃……邪念は感じなかったが、邪悪な気配を感じた……このような剣はッ！」

「あはぁ～、流石はセンパイやわぁ～」

不意の攻撃をかわした刹那は、一度は自分からお嬢様を取られた失態を思い出し、月詠を睨みつける。
だが月詠はその鋭い眼光を受けてなお笑みを絶やすどころか頬を染めた。

「やはり貴様かッ、月詠！！」

「ええ、月詠です～。　でも――――――」

――――――ウチばかり見とって、ええんですか？

刹那は何も感じなかった。

物音も、気配も、殺気も、殺意も、敵意も、害意すら。
敵の言葉を鵜呑みにするほど、刹那はお人好しではない。
しかし、月詠の送る視線に少なくとも嘘はなかった。
だから刹那は形振り構わず、一羽ばたいてから直ぐに翼をたたみ、庭園の茂みに飛び込んだ。
かわせたのは、月詠が警告したからこそだ。
月詠の忠告が無ければ、死んだと理解する前に首を落とされていた。

「月詠、邪魔をしないでください。　殺せなかったではないですか」

刹那は茂みから身を起こして恐るべき刀技を振るう、その姿を捕えた。
動きやすいように改造され、和服で有りながら洋服の要素を取り入れたような黒い着物を着た女が左の直刀を振り切った形のまま止まっている。
そして、その必殺をかわされた原因を作った月詠に右手の直刀の切っ先を向けていた。

「ウチはもっとセンパイを味わいたかっただけですえ。　一口で終わらせるのはとても勿体ないと思いまへんか～？
それに今のを見て――――――」

――――ウチ、是非貴女も味わってみたいと思いましたえ？

月詠は目の色を反転させ、背中に差された黒刀を抜き放ち――――

――

「来れ（アデアット）！」

瞬間、何も持っていなかった左手に、赤黒く染まった小太刀が握られていた。

「アーティファクトだと！？」

刹那とヒナギクへと刀身を向けた。

「ウチのアーティファクト……闇御津羽（クラミツハ）言います～。　その特性は……今ウチ流した血の多さで強さが変わる太刀ですえ？」

それは、自身を傷つければ傷つけるほどに強くなる両刃の魔剣。

それよりも、刹那は月詠の抜いた太刀の方に目が行ってしまう。

「クスクス……お目が高いわぁ、センパイ。　これは朱然はんがウチだけの為に打ってくれた大業物ですえ～、あげまへんよ？」

刀にしてはやたらと美しい黒い刀。

刹那は月詠の言うその刀に目を奪われた。

美しい……あんな刀があるとは……かなりの業物だ……って！！

何を見惚れているんだ私はッ！！

私には夕凪があるだろうッ！！

などという雑念が沸々と沸いてしまった。

それを刹那は頭を振って、雑念を払い今の状況を考える。

それよりもこの状況だ。

自分以外に、この場所に飛ばされた者はどうやら居ないようだが

……正直助かったという思いが大きい。
一般人の域から出ないクラスメイト達を庇いつつこの2人を相手にするのは無謀だった。
が、この2人の相性は悪いらしく……上手く立ち回れば付け入る隙はある、と自身を奮起させた。

「そもそも貴女は始めから気に入りませんでした。明らかに腹に一物ある事はどことなく感じていた」

「あはっ、バレてましたか～」

刹那がそんな事を考えている間、ヒナギクは鋭く、月詠は楽しげに会話をかわしていた。
が、やはり話に聴き耳を立ててみても、仲は良くはない事が窺える。

「その眼です……その狂気、母上には悪害にしかならない……ならば、ついでに刈り取るのも私の仕事でしょう？」

「ふふふ……嗚呼、今の視線、ゾクゾク来ましたえ～？
最後の最後に朱然はんの邪魔をすれば、きっと最高を味あわせてくれはると思ってましたぁ～。
でもまずは……前菜（オードブル）いうんも、ええかもしれへんね～？」

「良いでしょう……そこの母上の邪魔をする者もまとめて狩りましょう。この空間は我々を倒すか貴女を倒さねば開放されない。
面倒ですが、同時に掛かってきても良いですよ」

「……ッ、私も退く訳にはいきません。何より、時間が惜しい」

しかし、技で私はこの2人に及ばないし、劣っている。
勝っている部分を挙げられない。
だが負けるからと言って刀を置くほど、軟な意志は持ち合わせていない！

「ウチも全力でセンパイとお姉はんを殺しに行きますわ。　名前…
…もう一回、教えてくれへんかなぁ～？」

「ヒナギクです。　貴女の名は？」

「私は桜咲刹那です」

「その名、確かに覚えました」

ヒナギクは一瞬だけ瞼を閉じてから目を開いた。

「あはぁ～、さっきウチの事、狂気持ってる言ってましたけど、ヒナギクはんも……ウチと同じ匂いがするんよ？」

「それは当然です。　私は剣を振るう鬼……悪行によって一度地獄に墜ちかけた身、心など疾うに餓鬼に喰われた。
私は人の皮を被った悪鬼羅刹。　その私が生きる道は、悪を残らず私の手で狩り殺す事です。
穢れ、汚れ、腐臭を漂わせ続けるあの地獄のようなところを再現する悪害がいるのなら、私は首を落とされても喰らい殺す。
もうあんな場所を作ってはいけない……だから“悪”には“悪”を以て殺す。　それも相応の痛みを以て思い知らせる。
そして、いずれこの身もいつかは同じ悪に殺されるでしょう」

ヒナギクは一切の表情を動かさずに言い切った。
朱然がヒナギクを拾った腐臭漂う辺境。
そこは幼い姉妹が心を壊すには十分過ぎた。
姉は妹を守る為に何でもやって、妹は姉を守る為に何でもやった。
妹は何時しか喜怒哀楽の怒と哀の半分の感情を失って、姉は何時しか喜怒哀楽の喜と楽の半分の感情を失った。
姉妹は欠けた感情を補うようにいつも2人で1人だったのだ。
朱然は姉妹を引き取り、2人で1人は2人と2人に戻った。
ヒトとしての機能を多少は取り戻す事が出来た。
完全には取り戻す事ができなかった。
妹は怒を、姉は喜を取り戻したが、最後の一つの感情は埋められなかった。
妹は憐れみを理解できず、いつも楽しげで嬉しげで、時々思い出したように拗ねるという性格。
姉は楽しみを見出せず、未だ争いが絶えない事を憐れんで憤りつつも孤児院を喜んで手伝った。
そして、姉は傭兵となり、悪という敵と対峙する道を選んだ。
姉は異常な速度で戦闘技能を身に付け、弱き者には慈悲を抱き、弱きを杭ものとする悪にはこと如く震怒を叩きつけた。
それを続けると、どうだろう？
姉は無意識の内に、そこに悦びを見出し始めてしまった。
決して楽しくはないが礼を言われ、感謝をされ、そこには確かに悦びがあったのだ。
それから彼女は悪を殺す事は悦ばしいものだと無意識に刷り込まれた。
悪を殺すその顔は、返り血を浴びてなお、確かに悦びの笑みを浮かべていたのだ。
それが、彼女が剣鬼などと呼ばれる所以（ゆえん）。
やはり、人は何かしらの感情が欠けても歪むのだろう。
それをどこか本能で察した刹那は、最初の大事な者の為に守る事

に躊躇わない自分と似た女性だという人物像を否定した。

月詠とはまた違った意味で、このヒナギクという名の女性は狂っている！

刹那はそう叫びたかった。

月詠も、ヒナギクも、何故そんな場所に墜ちるまで止まれなかったのか。

いや……止まれなかったのではない。

今も尚、転がり落ちているのだ。

月詠は快楽として闘争を欲し、ヒナギクは感情の欠落からくる歪みで。

ヒナギクは大多数から善だと言われてきたのだろうが、その在り方は歪で正常ではない。

刹那と月詠には理解（わか）るのだ。

守る為に形振り構わないのではない……彼女は悪と認知すれば、全て皆殺しにしても良いという類の人間なのだろう。

そんなものは狂信や盲信の類だ。

だから、月詠と同じかそれ以上にヒナギクは正論を唱えながら、どこか可笑しい。

「流派京都神鳴流……月詠、行きます～」

月詠が二刀を持って構え、名乗りを上げる。

その瞳は一重に生死の刹那を楽しむ事にのみに生きてきた少女の何千回、何万回と繰り返してきた、これから自分に楽しみを与えてくれる者に刻む為の名乗りだ。

「流派無し――――――いえ」

2本の直刀を同時にどちらもヒュンッ！！という風切り音と共に逆手持ちに持ち直したヒナギクは何、時ものように流派を無しと言いかけて、自分からそれを否定しする。

「傭兵“怪物（フリークス）”が一人、ヒナギク……水仙流にて御相手しましょう」

己の最も慕う者の名。

己を救い上げ、何もかもを無くして、ようやく此処まで人間らしさを鍛えてきてくれた人の名。

その人が全てをかけて挑む戦場に、真に近しい者に送る真名を、己の流派としてこの場面で名乗った。

世界という名の絶対に、世という名の悪に敗北しない為に朱然の真名を流派として名乗る。

「神鳴流、桜咲刹那……参りますッ！！」

狂人と凶人を相手取る。

一歩間違えば、己も同類となっていたのかもしれない。

この世に生まれて、この白き翼は己に負の物しか与えはしなかった。

しかし、時が経ち、理解者と仲間に恵まれた事を今ほどに幸福に感じた事はない。

だからこそ負けられない――――――！！

刹那はその想いを胸に裂帛の気合を込めて名乗りを上げた。

三者はお互いに出方を窺う。

まず動いたのはヒナギクだ。

彼女の持ち味である速さ、それでまずは己の髪留めを髪を斬ることなく切断した。

瞬間、ヒナギクの長髪はそのまま流れるように垂れる。
それは月詠と刹那には理解できない行動だった。
普通ならば、前髪は後ろの髪よりも短い方が当たり前だ。
しかし、ヒナギクの髪は前髪すらも長い。
と言っても、それは半分だけで、右半分の髪だけが長かった。
それでは右側が明らかに死角となってしまう。
だが髪が完全に下りたところで、ヒナギクに変化が起きた。
肌の色が黒く染まっていくのだ。
龍宮真名のような褐色ではなく、本当に黒く染まっていく。

「な?!　貴女はまさか……」

「それがヒナギクはんの本気、ですかぁ～」

刹那は驚愕を、月詠はなお嬉しげに言う。

髪留めを取る事は、ヒナギクの半魔族（ハーフ）としての特性を引き出す引き金（リガー）だ。
それをしたヒナギクの身体は、人間の物とは比べられないほどに強靭な物となる。
それが、ヒナギクの速さをより一層の高みへと昇華させるのだ。

「ならウチも」

月詠は、月夜見に気を流し込み、それと同時に己の肩を闇御津羽で切り裂いた。
そこには痛みによる声は一切出ない。
それよりも目を惹いたのは刀だ。
月詠の持つ月夜見は沸の部分を瞬かせ、闇御津羽は血を吸って脈動する。

その月夜見は更に美しさを増し、闇御津羽は禍々しさを増してゆく。

「アデアット（来れ）！！」

刹那はたたんだ白翼を今一度、思い切り伸ばした。
そして、右手に夕凪、左手に建御雷（タケミカズチ）、宙空には七首（シーカ）・十六串呂（シシクシロ）が15本程滞空した。

三者三様、準備は万端。
こうして、三つ巴の剣劇が幕を開けた。

3人は一斉に虚空瞬動を行い、戦場は遥か上空へと移り変わる。
月詠はより強い快感を与えるであろうと思い、ヒナギクを狙った。
ヒナギクはまず始めに敵を狩る為に刹那を狙った。
刹那はヒナギクよりも技量的になんとか追いすがれると踏んで月詠を狙った。
3人はそれぞれの居た場所へ現れる事は出来なかった。
何故なら――――

「ぐッッ！？」

ヒナギクが刹那が月詠へと入りに入る瞬間、既に右手の逆手持ちされた直刀を刹那の首へ振るっていたからだ。
刹那はヒナギクの気配の無さに驚きながらもやはり反射的に、首へと迫る直刀を既に踏み出すだけで発動する虚空瞬動を使って、移

動ではなくバク宙のように回転。
その常人には視認すらできない程の移動手段を瞬間的に回避運動に利用した。
その目論見は成功し、刹那の視界は天地が逆転する。
刹那は天地が逆さまになっているところを見るよりも早く翼を大きく羽ばたかせて滑空し、ヒナギクの攻撃範囲から逃れようとする。
ヒナギクは振り切った右手に逆らわず回転。
残っている左の直刀を、逆手持ちから瞬時に普通に持ち替え振り抜こうとして邪魔が入る。
左の直刀は刹那の翼を切り裂く事を断念し目標を変えた。

「ウチを無視ですかぁ～？」

目標を変えた直刀は沸の輝く黒刃と激突し、火花を散らす。

「邪魔をするなと言った！！」

「くはッ！！」

ヒナギクの怒声に、月詠は嗤って鍔迫り合いをしていた月夜見で軽くヒナギクの直刀を押し退け、斬り上げるように闇御津羽（クラミツハ）を振るう。
押し退けられたヒナギクは、朱然から学んだ届かざる左の護剣（マンゴーシュ）で軌道を逸らす為に同じように既に握り直した右の直刀を合流させる為に斬り上げた。

だが――――――

「残念でしたぁ～」

楽しげに月詠は嗤い続ける。

刃は刃と合流し、その斬撃を書き変えるはずだった。

――――ドロリと闇御津羽の刀身が溶け、ヒナギクの刀身をすり抜けた。

闇御津羽の刃が粘度のある赤黒い液体――――血の刃のままヒナギクに襲い掛かる。

ヒナギクは直感する。

アレは驚くべき切断力を持っていて朱然も使った事のある水のカッターと同じものだと。

――――判断すると同時に数本の髪が舞った。

だがヒナギクの被害はその程度で済んだ。

ヒナギクは血液の凶刃を鼻先スレスレでかわした。

ヒナギクの鼻孔には幾度も嗅いだ血、独特の匂いが広がる。

次に、目に飛び込んできたのは己の切断された数本の髪の毛。

避けた時に髪が斬られたのだと理解したところでヒナギクは視界の端に純白を見た。
月詠の背後へとその純白は向かい、大上段から古刀（タケミカズチ）を渾身の斬岩剣として振り下す。
「はあぁぁぁッ！！」
月詠は月夜見に気を流して硬化させ、その斬岩するはずの太刀を受ける。
本来であれば、まともに受けたところで刀ごと斬られて終わりだ。
だが、それは敵わない。
金属と金属の硬質な音が響く。
気を流せば流す程、硬度を増す月夜見。
その硬度が、技を受け切った。
そこから月詠はヒナギクが飛んだ方向へ刹那を強引に斬り飛ばし、離れた瞬間――――――
「一瞬千撃・弐刀五月雨斬りぃッ！！」
妖刀ひなではない為に多少の違いが出るが、それでも一瞬で千の斬撃を叩き込むその技は刹那とヒナギクの両名に目掛けて飛んで行く。
無色の気刃と赤黒い血刃、2色の脅威が迫る2人。
ヒナギクは両手を広げ――――――
「恒河沙（ごうがしゃ）」
逆手持ちの直刀2本で、その脅威を正面から数十倍の密度の斬撃によって斬り伏せた。
その手の速さは、刹那と月詠に視認を許さない速度だ。

そして、未だ弾き飛ばされ態勢を崩したままの刹那は、滞空し続ける七首・十六串呂を一斉に全て現わし、一斉射を慣行して相殺する。

房飾りの無い１５本の七首は一斉に刹那の意を汲み、刹那を守る為に斬撃と衝突し、砕け散った。

斬撃を迎撃した隙に、刹那は態勢を立て直す。

――――――静寂。

「……ええわぁ。　こんなに激しいのは久しぶりやわぁ」

静寂を破ったのは月詠だ。

その身体は火照り、微熱に浮かされたように蕩けた口調。

戦場には似つかわしくないが、月詠にとっては当たり前のことだ。

その物言いに、刹那は苛立つ。

このようなところで時間を消耗している間にも、世界は無に帰している。

何より、今隣にいない木乃香は果たして無事なのかと。

その焦りが、口を開かせた。

「ヒナギクさん」

「なんですか？」

肌が黒く染まったヒナギクが、刹那へと視線と言葉だけを送る。

「まずは月詠を倒し、それから一対一で決着を付けませんか？」

刹那の取ろうとした選択は、敵との協力。

敵を裏切った敵を倒す為に、休戦を申し込んだのだ。

「メリットは？」

「無為な時間の消費です」

「良いでしょう」

ヒナギクは即座に合意し、両者は即席タッグを組んで月詠へと向き直った。

「一気に劣勢……でも、それも楽しそうや～。

ヒナギクはんの技量と手数はウチ以上……センパイは空中戦闘の自由度だけならウチを上回ってそうや……くふっ、ウチが勝ってるのはパワーと鋭敏さだけ……良いですわぁ、劣勢がウチを滾らせます～。

でも残念な事に、そろそろ良い時間ですね～。　そろそろ必殺をさせて頂きますよ？」

月詠はなお楽しそうに嗤う。

ただ刹那の快楽を求めて……。

「愚かな……」

ヒナギクは呟き、柄を握る手に力が入る。

「……」

刹那は何も話さない。
こちらもまた、柄の強く握る。

そして――――――3人は極大の奥義をぶつける。

「涅槃寂静(ねはんじゃくじょう)ッ！！」

ヒナギクの奥義。
ただひたすら速く多くの剣を閃らせる。
多重次元屈折現象(キシュアゼルレッチ)とは全くの真逆。
その圧倒的な数の斬線は一つに重なり、音も光をも置き去りにして敵は切り裂かれる。

「極大・雷鳴雷光剣ッ！！」

極大・雷鳴剣と真・雷光剣を融合させた決戦奥義。
巨大な球状にまとめられた光に最大級の稲妻を纏わりつかせ発する。

「闇？夜刀(くらおかみのやと)ッ！！」

闇御津羽の血刃が月夜見に纏わりつき、全てを切り裂く。
単純にして明快。
一刀の下に斬り捨てる業。

3つの奥義が交錯する――――――

闇?夜刀と涅槃寂静がぶつかり合い、均衡の後、相殺された。

「づあぁぁぁぁッ!!　闇?夜刀(くらおかみのやと)・弐ノ太刀ッ!!」

だがそこで、月詠は限界を越えてもう一つの闇?夜刀(くらおかみのやと)を放った。
またしても均衡するかに見えたが、出力と言う一点で押し負けた
極大・雷鳴雷光剣が縦に2つに割られ、爆散した。
衝撃と共に、雷が爆ぜる。

――――――閃光。

そして、最後に――――――刹那の七首・十六串呂の短刀が、月詠の胸を背後から貫いていた。
幸いにして、心臓は外している。
月詠は安堵する。
即死でなくて良かったと。

「は……あぁ……やっぱり――――――」

刹那が七首・十六串呂の刃を抜く前に、自重で月詠は庭園へと墜ちていく。

「でも、ウチはセンパイとヒナギクはんの刀で死ぬ訳にはいかないのが、残念でしたわ～」

月詠は墜ちながら一人呟く。

庭園に墜ちる前に、月詠は握り締めた月夜見の刀身を自らの心臓へと思い切り突き刺した。

迫る地面。

その地面に叩きつけられる寸前、月詠は絶命した。

だが、その周辺に月夜見の姿が無くなっていた事を、今度こそ一対一で戦い始めた刹那とヒナギクは知らない。

そしてまた、刹那とヒナギクの戦いの結末を月詠が知る由もなかった。

結局のところ、その戦い自体が外部からの干渉によって阻まれたのだという事を……。

第８６翼　剣劇、剣鬼と狂刃と翼剣（後書き）

と言う訳で久しぶり？の三人称で書いたつもりです。
果たして上手く書けたのやら……まだまだ時間的余裕がないです。
その辺りは、いつもの如く寛容な御心で許して下さい。
次回もやっぱり遅くなりそうです＾＾；

今回は剣士達の剣撃をテーマに書きました。
ついでにオリキャラのヒナギクの過去にちょっと触れてみました。
ツンデレだと思ったらヤンデレだったという……書いていたらそんな感じになった（笑）
そして、オリジナルな技の乱舞。
最後に月詠死亡。
月詠はこれ以降でないかも。
以上、第８６翼でした。

誤字脱字、感想など歓迎です。
ではノシ

第87翼　ぶつかり合う者達、躊躇わない紫の麗人（前書き）

ははっ、就職活動？絶賛全落ち中だよ！！
うわぁ――――――んッ！！

第８７翼　ぶつかり合う者達、躊躇わない紫の麗人

そこは小さな島。
あるのは巨大な巨像のみ。
ロードス島の巨像と呼ばれる場所をモデルに造られた場所だ。
環の無限抱擁（エンコンパンテンティア・インフィニータ）とはまた違った感覚を感じる空間に焔、環、暦は違和感を感じながらも、目の前の敵達の姿を目の当たりにする。
事前に柩、もとい朱然に聴かされていたのは、朱然の空間結界で敵を足止めする。
だが、此方側は設定として配置できるが、相手側はランダムで割り振られるのだという。
そして、８つの内一つは唯の迷宮になるのだとも。
３人の前に現れた敵は５人。
高音、愛衣、木乃香、夕映、ベアトリクス。
人数は向こうの方が上だが、実戦経験が１年未満が２人。
５年以上実戦経験を積んでいるのは皆無だろう。
しかも命懸けるほどのものなど、５人にはない。
全員が全員、何かしらきちんとしたバックアップを受けていた。
頼もしい援軍も居た。
だが戦災孤児として拾われ、フェイトに付いて行った自分達には援軍など無いに等しかった。
何せ、完全なる世界は一度、世界を滅ぼす程の危機に陥れた悪の組織だったという事が魔法世界全土に常識として広まっているのだ。
大戦時に壊滅、大戦後からの執拗な残党狩りを続けられたのでは、組織が大きくなるはずもない。
それでも戦ってきたのが自分達なのだと。
面白半分にこの戦いに首を突っ込んだ半端な覚悟しかない者に遅れは取らないと、そう思っていた。

「どこですの？　ここは？」

良く通る声で高音・D・グットマンは同じく飛ばされた者達に問う。

「お、恐らく空間系の結界の内部です。　鬼門遁甲、中国に伝わる結界術の一種ですよ」

「結界ならば、何かしらの脱出方法があるはずです」

夕映が世界絵図（オルビス・センスアリウム・ピクトゥス）を開き、打開の策を探しつつ、それを傍らから覗きながら言うベアトリクス。

「ですけど、向こうの人達は黙って私達を見逃すつもりはないようですよ？」

朱然の修行？の成果か、愛衣はニヤリと笑いガトリング火の矢の術式を構築し始める。

もはや本編での慌てぶりが嘘のようなトリガーハッピー振りだ。

両者は会話のできる距離まで近づき、刹那達と同じように完全なる世界、白き翼＋αが倒れれば結界が解除されるという事と、言いたい事を言い合う。

「となれば、うかうかしていられませんわね！　即刻、貴女方を倒しましょう」

「これだから能天気で御立派な魔法使い気取りはッ！！」

最後に高音の傍から見れば高慢と取られるような言動に気を悪くした暦が毒で以て返し、戦いの始まりの合図となった。

環は竜化を始め、高音は影を纏い、暦は獣化と時の回廊（ホーラリア・ポルティクス）を発動させて加速し、愛衣は温めていたガトリング火の矢の術式を開放し、焔は自らを炎へと変え、夕映とベアトリクスは戦乙女旅団に支給される杖剣に付与（エンチャント）を付与させた。

一方その頃。

夜のアレクサンドリアの大灯台をモデルとした場所。

大瀑布の上に立つ長大な灯台、その頂上から夜光を一瞬だけ打ち消すマズルフラッシュ。

そこからかなりの距離をおいて宙空に身を躍らせる姿が一つ。

「しかし……これは参ったね……っと！」

龍宮真名は滅多にしない虚空瞬動を使い、多角的に飛ぶ銃弾を回避した。

「見えてはいるが、狙撃手（スナイパー）が狙撃手（スナイパー）に狙われるなんてね」

既に半悪魔化した真名は発現した魔眼を使い、銃弾の放たれた数キロ先――――大灯台の頂上付近を視認する。

そこにはライフルのスコープを除き、感情すら排して必殺の一発を撃ち続けるブルバギの姿。

だが真名はブルバギの必殺をかわしながらもその手に持つ銃にこそ目を向けていた。

それの口径こそ既存の最大口径だが、その本体は明らかに巨大だ。

対しているのが誰かくらいは狙われて直ぐに解った。

スキンヘッドに襟の長い法衣の様な衣装に身長以上もあるトラン

クケースを背負っている裏では幽霊（ファントム）などと噂される人間。
その背負ったトランクケースには彼の銃が入っているのだとばかり思っていたが、よもやそれ自体が巨大な銃になり変わるとは思いもしなかった。
ブルバギの身長である１８０センチを越え、全長３メートルを越えているその怪銃（バケモノ）。

「まったく、朱然（かれ）も随分ととんでもない銃を造ってくれたものだッ！」

真名はスナイパーとして長年培った銃撃の瞬間に感じる事のできる呼吸や気配を文字通り感じ取り、その必殺を回避し、ハンドガンによる銃弾の相殺で潰し続けている。
銃弾が減速せず、曲がり、追尾してくるのは術者の技能ではなく、間違いなくその銃に内蔵された機能なのだろうと推察はできる。
制作者足る朱然の武器作成の技能を真名は身を以て知っているのだから。
しかも、ライフルで応戦しようにも、真名はそれが出来ない。
何故なら、真名の持っているライフルの有効射程距離の優に約３倍から狙い撃ってくる銃撃を可能とする銃を相手（ブルバギ）が持っているからだ。
本来、スナイパーライフルの最大射程というのは有効射程距離とは別物だ。
最大射程とは、その銃の弾が何所まで届くかの値。
有効射程とは、その銃撃の命中率が５０％を越える事が出来る値だ。
最大射程を持つスナイパーライフルならば、２～３キロまで届くが、当てるとなれば話は変わってくる。
魔族の魔眼で狙撃手（スナイパー）としての補正を以て、ようやく３キロをギリギリ狙えるのだ。

それの3倍。
つまり約6キロ、現時点の現在位置でいうならば5．5キロをブルバギは当ててくる。
絶望的な距離だ。
だがあの怪銃（バケモノ）には明らかに弱点がある、と真名は思う。
その巨大な姿から察するに、一度構えると動く事がほぼ不可能のように見える。
姿さえ見る事が出来ないという噂。
それは既存のどの銃にも不可能な、特殊な銃による超長距離射程を誇る銃撃。
周りには敵はおらず、逃走の為の距離もあり、銃弾を曲げる事が出来る事、追尾してくる事を考慮していれば動く必要もないという理由からの巨大さなのだろうと真名は推察した。
真名はその考察に行き当たったところで、打開の策を思い付き、実行のプランを立てる。
そして――――

「まさか、狙撃手（スナイパー）が自ら接近戦を挑む事になるとは……しかし、恨むよ？」

此処に居ない朱然への恨み言を漏らし、それでも手を休めずハンドガンを撃ち続け、りロードを真名は待つ。
銃という機構である以上、あの大きさで装弾数も桁が違うだろうが必ず弾をリロードする時が来るはずだ、と。

「チャンスは恐らく一度」

真名の待ち続けたその時は迫る――――

接近に対する防衛策が皆無というのは有り得ない。

かくして、真名は今から5．５キロという距離を一枚１０万円という値の付く転移符を乱用するという、倹約家の彼女からすれば考えうる全ての可能性を試して最後の最後に取るべき浪費を迷いなく撃ち出させるほどに、相対する相手と怪銃（ブルバギ）（バケモノ）は強敵だっただけの話なのだ。

――――――ブルバギの銃撃が止んだ瞬間、真名の反撃は始まった。

古代遺跡のエントランスとも言える巨大な空間。

そこには創造神であるゼウス像。

オリンピアのゼウス像を元に造ったその空間は、神の領域――――――神域と言って良いほどに神々しかった。

そこに居たのはアキラ、亜子、祐奈、さよ、朝倉、ハルナ。

傍から見れば、こんなラスボスと中ボス犇（ひし）めくラストダンジョンに居ること自体が間違っているような一般人で、ネギに巻き込まれた者達。

その全員が既にアーティファクトを呼び、彼女達はネギの為に戦うのだろう。

何も持たないが故に、唯一つの気持ちの為に、主人公を支える為に、彼女等は強敵に戦いを挑む。

だが――――――それを阻む者が居る。

「此処を出るなら、俺を倒せば出られる。　それどころか術者は俺自身だ……俺を倒せば全員が出られるかもな？」

「へぇ……良い事聴かせてもらっちゃったなぁ……ところで私達を

見逃してくれない？」

フレンドリーに接してきた朱然に対し、この中で比較的ノリの良い祐奈が俺に対して見上げるようにして問いかける。

「残念だけど、君達にはこのままこの世から退場してもらう予定なんだ」

朱然は笑顔で祐奈達に笑いかけ、物騒な事をのたまった。

朱然から見れば、彼女達は昔の自分と重なってしまう。

一般人から今まで意を決して上り続ける朱然は、どうしてもそう思ってしまう。

「だよねぇ……」

「わ、私達ってけっこうピンチ？」

「結構どころか、かなりピンチでしょ」

「まあ、安心してくれ。　取り敢えず、魔法で燃やしたり、斬り刻んだりはしないよ」

会話だけを聴けば、命の危機に対してのノリではないが朱然が空間から呼び出した物を見て緊張が走る。

取り出したのは二丁のＳ・カトラス。

あの特別顧問として過ごした場所で造られた架空武器を再現した品だ。

そう、朱然は一般人にも分かりやすい死の振り撒くものとしてわざわざ銃を取り出した。

「わざわざ銃を出すあたり、悪趣味ね」

「戦いには緊張感が欲しいだろう？　君達はもう少し自分の命と言う物がどれ程、大事なのかを実感するのも良いと思ってね」

朱然はそう言って敵へと銃口を向けた。

「場違いな一般人はさっさと消えてもらう！！」

「黙って消されるほど、私達はお人好しじゃないわよ！！」

「朝倉さん……私怖いですぅ……」

「ダイジョーブ、私も怖いわ」

「……ッ！」

「ネギ君、助けてぇ～！！」

「ウチまで怖くなってきたやんかぁ！！」

「バイバイ」

最後に呟いた朱然は引き金を引く。

躊躇いはない。

時間にして数分、引いた引き金は６回。

一発の無駄弾も無く、一切の無駄も無しに動いた結果、その場所に佇むのは朱然唯独りだった。

その影も相手を倒した為に結界外へと排出され、なお神聖な雰囲気のその場所には誰も居なくなった。

第87翼　ぶつかり合う者達、躊躇わない紫の麗人（後書き）

久しぶりにして短いですが何とか更新。
かなり待たせてしまいましたね……すみません。

今回は3つのステージをそれぞれ見せた感じです。
朱然さんは元クラスメイトを瞬殺です。
ネギ君ブチ切れエンドなのだろうか？

第８８翼　ぶつかり合う者達２、裏切る紫の麗人

照りつける灼熱、舞い散る砂、遠目には熱によって揺らぐ景色。
そこは過酷だった。
ジリジリと問答無用とばかりに肌を焼く太陽の下、延々と続く砂漠。
そんな中に、巨大な四角推が鎮座する。
よくよく見れば、それは古い手法で造られた建造物。
長方形に切り出した巨石を、途方もない人員と時間を使って積み上げた金字塔。
ギザのピラミッド、それがこの場所の造られた所以（ゆえん）の場所だ。
そこには大勢の姿があった。
否、大勢と言うのは語弊だ。
そこに居たのは手に持つ武器、構えこそ異なるものの全て同一人物。
和装……というよりも女性の忍び装束だった。
長髪をうなじ辺りで一括りにした長身の女性と見まがうプロポーションの持ち主、長瀬楓。
齢１５にして既に、甲賀中忍という位を手にしている。
その影分身は、既に本物と区別のつかない密度を誇る驚嘆すべき技。
だが、その彼女達は全員満身創痍だった。
その周囲を取り囲むモノの所為だ。
火、水、風、砂、闇、光、雷、氷、大凡（おおよそ）考えうる限りの全属性の魔法によって形作られた魔犬の軍団。
楓の影分身は１６分身が限界だが、魔犬の数は膨大。
魔物の胃の中の方が幾分かマシだと彼女は苦戦を強いられてながら歯噛みする。

「く……ッ！！」

本体の楓が声を漏らす。

幾ら実戦経験が両の手で数えられるものだとしても、自分の技量は少なくともそこらの物には負けないと思っていたのに、と。

格闘大会で英雄として名を馳せていた彼と戦い、体術のみならば十分と言えるほどに渡り合えたと楓は思っていた。

にもかかわらず、自分が押されている事に、それ以上に魔法世界崩壊までのタイムリミットが迫っている事に焦らされる。

「いやぁ、残念だ……普通に出逢っていたんなら、喫茶店へ招待したんだけどな」

魔犬の主、ラリーが軽薄な口調とは裏腹に鋭い視線を楓へ投げかける。

「こう広く、明るい場所では……」

「弱音かい？　俺が慰めてやろうか？」

「遠慮しておくでござるよ」

ラリーは基本的に、女性には甘い……というか、だらしない。

女性と見れば口説くのが礼儀だとラリーは思っている。

もっとも本命（ヒナギク）に気付いてもらえないのもその辺りが原因なのだが、敵となった者まで気遣えば、最早性分だろう。

「残念だねぇ……ホントにさ」

ラリーは煙草を取り出し、咥えて、人差指に火を灯す魔法の応用

で右手人差指を煙草へと押し付け吸い込み、一気に吐き出した。
その仕草は既に自然なもので、喫煙者として既に長い事を物語たっている。

「そもそもこの物量で勝てると思ってる？　悪い事は言わない、降参して大人しくしてて欲しいんだが」

「それはできないでござる……他の者達が戦っているのに、拙者だけが大人しくすることはできない」

「でもさ、命有っての物種っていうだろう？」

「命を賭してでも戦う事も必要だと拙者は思っているでござるよ」

ラリーの物言いに、楓も答える。
どちらも正しい。
どちらも正論だ。
だが、真逆。
正反対の意見は対立するしかない。
ラリーは目を瞑り、付けたばかりの煙草を一気に吸い、煙を吐き出すと共にフィルターまで火が来ていた煙草を砂しかない地面へと落とし、砂をかけてから踏みにじった。

「頑固者だなぁ……ニホン人はもっと気楽に生きりゃいいのに」

「生まれた時からの性分でござる。　変えようとも思ってはいないでござるよ」

ラリーは真剣な表情を崩し、呆れ、楓は細目を少し開き、苦笑する。

「ほんじゃ、ま……このまま殲滅させてもらうとしようか」
「ただでやられるほど、拙者は諦めは良くないでござるよ？」

極東の忍びと魔法世界の魔犬使いはお互いを潰し合う。
質ならば辛うじて楓、数ならば圧倒的にラリー。
地形はラリーにとって得意な見通しの良い開けた場所。
逆に楓には逃げも隠れもし難い場所で、地面が砂なので土遁で潜るのは容易い程度。
実戦経験の差は歴然。
ラリーは広範囲の索敵と殲滅に特化した言わば楓の天敵だ。
例え地形が楓の得意とする森であったとしても、やはり勝負の行方は……言わずもがなだった。

桜子、美空、ココネは迷うことなく広大な迷宮を歩いていた。
ある意味で敵の居ない当たりの門。
この門のモデルの場所は特にない。
即席で朱然が造った迷宮だ。

「ミソラ……？」

ココネは美空に肩車されながら当惑している。

「ダイジョーブだよココネ。　で、桜子ー、次はどっちー？」

「んーっとねぇ……こっち！！」

美空が気楽にまたしても現れた分かれ道に差し掛かった途端に桜子に道を聴く。

それに対して桜子は思うがままに道を示す。

本当にそれが合っているかどうかは本人にもわからないにも拘らず、桜子本人は自信を持って断言する。

「ところで美空ちゃんは何で学園祭でもないのにそんな恰好してるの？」

「な、何の事かわからないにゃー？　おっ、あの道はどっち？」

「左ー！！」

3人は順調に正解の道を進む。

果たしてこの3人による番狂わせはあるのだろうか――――――？

そこには既に何の建造物だったのかすら見当もつかないほどに破壊し尽くされていた。

近くの海は氷結、大理石で形作られていたアルテミスの神殿は基礎部分すら破壊されていた。

それでもなお、その呪文の対象にされている者達は死に物狂いで逃げていて、彼女は遊んでいて、その従者は余興に従っていただけの事。

この戦いは倒す事ではなく時間稼ぎ。

故に彼女は久しぶりの全力で獲物を嬲り、遊んでいる。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！！　死者の国、ニヴルヘイム　支配する氷女神ヘル　死者と罪人を樹氷へと誘え　雹の樹槍！！」

幾つもの雹が凝縮し、穂先が樹氷のような氷の槍が形成され目標へと降り注ぐ。

「オイオイオイオイ！！」

「どんだけの魔力量よッ！！」

「闇の福音の名は伊達じゃなかったって事だよねぇ！！」

「兎に角、逃げるッ」

トレジャーハンター４人組は赤き翼と対極的に伝説となっていた化物の強さをその身で感じながら逃げ惑う。

それに追随するように宮崎のどか、村上夏美が続き、殿に犬神小太郎が走る。

「氷槍の無差別絨毯爆撃です！！」

あの内気な宮崎のどかが声を張り上げる。

それ程に余裕がない。

相対している者達は圧倒的なのだから。

「全員、俺の後ろに隠れぇ！！　犬神ィ――――――ッ！！」

小太郎は急遽後を追っているエヴァの方へと向き直って地面に腕を突き刺し、犬神を顕現させて樹氷の槍へと突っ込ませる。
次々に槍に突き刺さり、地面へと突き立つ。
呪文通り、樹氷へと変わっていく。

「茶々丸、そろそろ良い時間だ」

「了解ですマスター。　目標確認、掃射します」

そんな必死の形相でエヴァの攻撃を凌ぎ続ける小太郎と後ろに控えている全員に向けて、いつの間にか後ろを取っていた茶々丸は感情の無い無機質な声と瞳で朱然の手製の三連ガトリング砲Ｇ・ＳＨＯＴを掃射した。
悲鳴を上げる間もなく、７人はこの世から消失した。

「目標殲滅しましたマスター」

「うむ、御苦労。　まあ、ハズレならばこんなものか……つまらんな。　ここから出るぞ茶々丸」

「はい」

実につまらなそうだと言ったはずの彼女の顔は何故か楽しげに、従者はただ粛々とその空間を後にした。

「！」

ふと、八門遁甲から抜け出る最中に、朱然の異空間倉庫とも言うべき場所に一振りの刀が戻ってきた感覚。
全てが黒一色の刀、月夜見を取り出し改めて眺める。

「そうか……」

その刀を鞘に納めたままに鞘を撫で――――

お疲れ様、ゆっくり休むと良い……。

――――仕舞った。

そして、現実の空間へと戻ってきたところで異変を感じ、身構える。

なんだ……何か空気が可笑しい？

ピリピリとうなじの辺りを刺激されるような、忙しなくさせる感覚。
不意に振動が起こる。

上？
儀式場か？

朱然は思い至ったところで駆け出す。
白き翼を封じ、敵対者は他に居ないはずなのに、先程から続く振動。

ラカン？

いや、違う……ラカンは膨大な量と綿密な気を感じない。
だがこの一挙手一投足の攻撃に、まるでコップにダムの水を放水するような馬鹿魔力……そんな奴、俺には1人しか思いつかない。
もう一人居るとも思えない。

そして――――

そこには奴が居た。
白いローブを着た英雄と女王。
英雄の手には、白い造物主の掟が握られている。

「ナギッ！！」

「んあ？　よお、スイセンじゃねーか」

懐かしい顔。
最後に在ったのは十年前、悪魔を退けた時だ。
あれからは一切の痕跡もなく音信不通。
一応、俺の方でも探したのだが、麻帆良の地下には居ない事はアルや詠春も知っていた。
だからこその不確定要素。
それが目前に、よりによって今現れたのだ。
フェイトと火、水、風のアーウェルンクス、デュナミスと互角どころかそれ以上に渡り合い、笑みを絶やさない圧倒的な強さ。

「何でお前が、今更此処に居る！」

朱然は地を離れ、空中で戦う者達の下へと飛ぶ。

「そんなん決まってんだろ？　昔のやり残しを息子に押し付けんな

ってアリカに言われてよ」

ナギが少し離れた場所に居るアマテルの横に並ぶ白ローブの女性に視線を送る。

その時、消失現象によって巻き上げられた突風によってフードが取れ、その顔が顕わになる。

その人物は、ナギの物言いを聴いて予想をしていたその人だった。

アリカ・アナルキア・エンテオフュシア。

朱然にとってはあまり話した記憶の薄い……それでいてこの物語のキーパーソンとなっているはずの人物。

ナギと共に未だ現れてはならないはずの人物達。

こんな時にこいつ等が不確定要素として現れるだと？

つくづく世界は俺が嫌いみたいだな！

だが此処は……それも利用させてもらう！

「手を貸そう」

「おお、マジでか！？」

「やはり裏切るか！」

協力を申し出るとナギは嬉しそうにデュナミスを殴り、壁にめり込んだ戦闘モードのデュナミスが吐き捨てるように叫ぶ。

ナギの隙を突くべく風のアーウェルンクス（クゥィントゥム）が雷を纏ってナギの背後から円状に圧縮された空気の塊を無数に作り出し射出。

ナギの背中に炸裂させる瞬間に朱然は割込みその空気の塊を流れを――――――

無境の型・奥義――――――無境。

以前のこの技の説明をするならば、自分から動く事をしない代わりに相手の全てを相手自身へと返す妙技。
相手が直接的な攻撃をする場合にのみ効果を発揮する限定的な技。
魔法や銃撃には全く効果の無いはずだった奥義。
そう、だった。
既に過去形。
進化し、さらに昇華した技へと成った。

――――――壊れぬように絶妙な加減で纏った柔の気で以て包み込み受け止めた。

そして、受け止めた全てを投げ返す！！

「馬……ッ！！？」

風のアーウェルンクス（クゥィントゥム）は最後まで言えず、自らの技を喰らって眼下の雲河へと墜ちて行った。
朱然とナギは空中で背中合わせになり、水と火のアーウェルンクスとフェイトに囲まれ、復帰して来たデュナミスと風のアーウェルンクスが加わり、5対2になる。

「フン、ならばこれならばどうだ」

デュナミスは造物主の掟を使い、1番目（プリームム）、2番目（セクンドゥム）を始め、火、水、風の男3人衆、8年前に妥当された火のアートゥル、水のアダドーが現れた。
これで12対2。
流石にこの数は分が悪いと朱然は微かに眉間に皺を寄せる。

「んじゃ、俺はあの影使いとフェイト達な！」

「なら、俺は火、水、風の有象無象か……まあ、人形だけなら――――」

だがそれでも負ける訳にはいかない朱然はその数さえ妥当する為に了承する。

「水仙！！」

「――――――エヴァか流石、丁度良い時間だ」

「フ、当然だ」

丁度、エヴァンジェリンと茶々丸が現れ、包囲網の内部へと入って来る。

それを見たナギが朱然達の方を向く。

「ん、あれお前等って……へぇ～？」

ナギはエヴァの事を覚えていたらしく、朱然の真名を呼んだエヴァンジェリンとエヴァンジェリンを愛称で呼ぶ朱然を交互に見てニヤニヤし始める。

それを見た朱然とエヴァンジェリンはナギの不躾な視線に不快な表情をナギに向ける。

「余所見とは随分と余裕だね」

フェイトのその一言で戦闘は再開された。

第８８翼　ぶつかり合う者達２、裏切る紫の麗人（後書き）

何とか書けました。
まあ、内容は予想通りの方も多かったのではないでしょうか？
もう少し書こうかとも思いましたが、５０００文字とちょっとで丁度良かったので切り上げ投稿です。

第８９翼　世界の差異、呑み干す紫の麗人

「茶々丸は？」

「超の手伝いに行った。　アレだ」

茶々丸の所在の確認をした朱然に、エヴァが視線のみで促す。
超の手伝い……それこそ朱然の計画の最終段階を始める上で欠かせない世界に放送する為の浮遊カメラが飛びまわっている。
それらは茶々丸によって並列制御され、既に膠着状態を破り戦っているナギ達の攻撃の余波を上手く避け、世界へとその戦いの記録を放映しているのだ。
全てを知らしめる為に……朱然の計画――――世界全体を巻き込む為に、世界中にこの戦いを知らせる為に。

「エヴァ……この数と質を２人ではジリ貧だ」

ナギの方を見れば、１番目（プリームム）、２番目（セクンドゥム）、３番目（フェイト・アーウェルンクス）、デュナミスの相手をしている。
３対１にも拘わらず、ナギは楽しそうに笑いながら相手をしているが、相手方は２番目以外はピクリとも笑ってはいない。

「ふむ、ならばアレ……やるのだな？」

示し合せたように朱然とエヴァは弾かれるように動き出す。
今まで２人いた場所に雷撃が撃ち込まれ、帯電が起こる。

「何時までベラベラと喋っているッ、時代遅れの吸血鬼に時代遅れの英雄がッ！！」

５番目（クゥィントゥム）が無表情に帯電していた腕を向けた恰好を見せているところで、４番目（クゥアルトゥム）両手に纏った巨大な炎の拳で殴りかかって来る。

「ほぅ？　人形風情が私達を時代遅れと言い放つか！！」

エヴァがクンッと右の手を返した。

「馬鹿めッ、我が身に纏う炎は触れるモノをこと如く溶かす！！
たかだか鋼の糸如きで動きを封じられるとでもッッ！？」

４番目が最後まで言えずにあらぬ方向へと縦に回転しながら飛んで行く。

「この鋼糸は朱然の宝具だ。　たかだか鉄を溶かす程度で溶けるとでも思ったかッ！」

宝具は持ち主が移譲しなければ真名解放などが出来ないだけであって、普通に使う分には問題無いのだ。
人形遣い（ドールマスター）であるエヴァにとって、糸繰りの技術は必須であり、ただの糸でも十分過ぎるほどに強い。
宝具として格の上がった無影を破壊するならば、微量でも良いので神秘を秘めた何かしらの力で壊すしかないのだ。
この世界の魔法は一応は隠されているが、既に巨大な国を造る程に普及している為に、神秘などは皆無だ。
朱然はそれを追うように、大上段に構えた大牙で斬りかかるが、６番目（セクストゥム）が右側面から水の矢で牽制して来たために追撃は成らず、虚空瞬動でエヴァの方へと戻りつつ無境を取り出し、技後硬直で隙が出来た６番目へとブーメランのように飛ばすも今度は水のアダドーの水楯に阻まれる。

「リク・ラク　ラ・ラック　ライラック！！　来たれ氷精、闇の精　闇を従え吹けよ常夜の氷雪　闇の吹雪ッ！！」
（ウェニアント・スピーリダ・ヲ・ネアーレス・オブスクランテース　クム・オブスクラティオーニ・フレット・テンペスタース・ウィス・テンペスタース・オブスクランス）

その水のアダドーに対して、エヴァが闇の吹雪を放つ。
その一撃が当たると思った瞬間、火のアートゥルが唱えていた呪文を開放した。

「メラルガ　メラザド　ナシゴレン！！　来れ火精、風の精ッ、罪を焦がせよ火途の火風！！　炎の息吹ィッ！！」

焼き吹く炎と極寒の嵐がぶつかり、少しの拮抗の後に魔法が解ける。

「千の雷ッ！！」

「燃える天空ッ！！」

「逆巻く絶海ッ！！」

「終わる世界ッ！！」

大戦時の男三人衆と女フェイトが最大呪文を叩き込んでくる。

だが――――――！！

「真なる力の一つを示せ――――――八卦八武装（せんてんはっけ）ッ！！」

瞬時に朱然の周りに八種の武装が滞空し、その身を溶かして内包された図の一部を顕わにさせた。

次序ノ四担巽為風（風より吹き抜けるもの）、次序ノ六担坎為水（水より流れ移るもの）

「風（風）は水を広め、散（と）らし、消し散らす（水よ）无悔と成す――――」

――――伏羲六十四卦方位図乃五十九（たいきよくずのごじゅうきゅう）・風水渙（ふうすいかん）

「なッ！？」

水の男の放った圧倒的な水量を叩きつける逆巻く絶海の術式を世界の理を介して根本から掌握し、燃える天空にぶつけ、火は水によって相殺される。

それによって気体と成った水が水蒸気と成り、熱を帯びた水蒸気を風によって終わる世界へとぶつけ、全てを凍らせ砕くはずの終わる世界を溶かし尽くし相殺。

それによって急激に冷やされた水蒸気は元の水と成る前に、風によって更に散らし、潤沢になった水霧によって千の雷は落ちる場所をこちらで指定し、受け流す。

本来ならば恐るべき最大呪文であるはずのそれらはこと如く無効化された。

４人とそれを見ていた者達は戦闘中にも拘らず、足を止める。

防御だけではない、朱然は続きの真名開放を行う！

次序ノ二担離為火（火より燃え上がるもの）、次序ノ三担震為雷（雷より迅く走るもの）

「火(火)は雷より生じ、焼(と)き、翔(雷よ)け貫く火雷と成す――――――」

――――――伏義六十四卦方位図乃二十一(たいきよくずのにじゅういち)・火雷噬嗑(からいぜいごう)？

深紅に煌めく火雷(ほのいかづち)が走り、空気を触れる先から燃焼させながら突き進む。

紅の雷は木の枝のように枝分かれし、その爆発の規模は燃える天空よりも膨れ上がる。

「何なんだこの魔法はッ！？」

「障壁が燃えるだとッ？！」

異常な朱然の攻撃によって敵の動きが逃げの一辺倒へと変わる。

その隙を見過ごす程、朱然とエヴァは甘くはない――――――！！

「朱然」

「ああッ！！」

２人は共に並び立つ。

「契約に従い、我に応えよ　闇と氷雪の女王――――――」
「契約に従い、我に答えよ　風と大海の大王――――――」
エヴァは闇と氷を、朱然は風と水。
冒頭の呪文からして広範囲にして最大の呪文。
「「冥府へ続く罪過の河　罪人の地獄――――――」」
しかし、次文を聞いた者達はそれが一体どんな呪文なのかを知ることはない。
同じ異なる呪文を唱えながらも、一文の韻を踏む呪文など、この世界には有り得ないのだから。
「来れ　永久の闇　永遠の氷河――――――」
「来れ　吹き荒ぶ風　暗礁の冥海――――――」
長くかかるその詠唱。
それはエヴァと朱然が作り出したこの世に一つだけの創作呪文（オリジナルスペル）。
「この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ」
「九圏へと招かれ、四円の裏切りを悔いよ」
詠唱と中なのに、既に効果は出始めている。
地獄だ。
そう、2人はは地獄の再現をしようとしている。
「「裏切者は氷に埋もれ、涙は凍る氷獄へ封ぜよ――――――」」

呪文は既に最終段階。
２人だけの共鳴呪文（ユニゾンスペル）――――――！！

直感的に悟った敵達は朱然達へと殺到しようとするが間に合わない――――――！

「かつて光輝はなはだしい天使　今はただ氷牢に沈む――――――」
「三罪人を噛みしめる三面の主　今はただ醜悪に笑う――――――」

「――――――罪深く凍る堕天ッ！！」

空気中の水分が風によって異常量を集め、それを氷結。
敵を捕え、闇の属性によって捕えた者達の魔力を強引に吸引する。
その吸った魔力はその術を発生させ続け、術者の魔力を枯渇させても止まらず、生命力を吸い出し、最終的には氷に囚われた醜き木乃伊（ミイラ）へと変えてしまう恐るべき呪文。

魔力全てを限界以上に吸い、殺すための醜悪極まりないモノだ。
言うなれば、広範囲精吸補殺呪文。
人形達は逃げ切れないと感じ、魔法障壁を張るも魔力によって維持されている障壁は瞬く間に吸収分解し、魔力は吸い尽くされ、ついには生命力が吸われて見る見る内に干乾び、骨と皮だけへとその身を変えてゆく。

そして――――――

「――――――罪無く散る天刑」

地獄の氷牢は吸い尽くすモノがなくなると同時に罅が入り、一気に固体だった氷から気体の水蒸気へと相転移し、出涸らしとなった木乃伊を一気に昇華し木乃伊は氷片として砕け、溶けて消えた。
朱然とエヴァが作り出した呪文は、広範囲精吸補殺呪文からの広範囲昇華呪文という二段構えの大呪文だったのだ。
欠点を上げるとするならば、朱然とエヴァしか術式を知らない事、2人の足した魔力量の約5割を持っていかれる事、後先考えないで使う事を前提としている事だろうが、避けることが困難な上に逃げられない必殺である以上、その欠点は気にならないだろう。
もっともこの場所は高密度の魔力溜まりなので、最後の点が問題となることはこの場所でのみないのだから。

「さて……核は回収しておかないとな……」

朱然は砕け散り、溶け消えたものから落ちていく人形達を造る為

の核を全てを回収する。
人形は核がある限り、何度でも復活するからだ。

「火が3つ、水が3つ、雷が2つ……人数分回収したな。後は……」

「ああ、あっちも決着はついたようだ……俺は……ナギも排除しないと、いけないからな」

ナギの方を見ればフェイト達は4人とも気絶し、倒れていた。
そして、アマテルとアリカの方へと降り立ち、ナギは楽しげに笑っている。
朱然は一度、隣に浮いているエヴァの方を向くと、エヴァは頷き、朱然も頷き返して、ナギ達の下へと降り立った。

「久しいな、シュゼン」

「そうだな女王様……だが、俺から言わせてもらえば何故今更、現れたと問いたい」

「我等はもう一つの造物主の巻族と成り、世界を守護する者となっていた。故に世界の危機に駈けつけるのは当然じゃろう？」

朱然の問いに対し、当然だという顔で返答するアリカ。

「そうか……アラヤの……なら――――」

――――間違いなく、俺はお前達の敵だ。

その手に現れる黒い鍵（グランドマスターキー）。

「それも已む無し、か――――――ナギ」

「……おう」

アリカに促され、先程まで浮かべていた笑みから一転、面白くなさげな表情を浮かべるナギ。

朱然は思う。

結局のところ、あの大戦から造物主を倒した時に敵となる事を感じていたのかもしれないな、と。

消息不明になっていたナギには話すべくもなかったが、この魔法世界から紅き翼という記憶を除去し、朱然という人物の記憶も全て消し去る事を詠春、アル、ラカンは同意した。

詠春は苦渋で、アルは苦笑で、ラカンは無関心で。

「だけど、その前にやる事がある」

朱然はそう言って、祭壇に捧げられている造物主の掟（コードオブライフメイカー）を手にする。

それを手にした瞬間、朱然の意識はガイアへと没入し、世界へと沈んでゆく。

ああ、やはりな……精神体となっている朱然が呟く。

麻帆良に封じられている造物主。

そこに囚われているゼクトがクリスタルの檻に囚われ、眠っている。

「ゼクト……今、お前を解放する。　もう休んでも良い」

朱然の指がクリスタルの檻に触れる。

「ガイア、今この時から俺がお前の契約者になる。　ゼクトを解放しろ」

ただ静かに響く朱然の声に呼応するかのように、クリスタルの檻が解かれ、ゼクトは消えた。

２６００年縛られ続けた青年は、此処にようやく本当の眠りに付いたのだ。

瞬間、止めどない圧倒される力の本流が、次の宿主（しゅぜん）へと殺到する。

「これが星の……なるほど、一個人が耐えられるものじゃないな……だがッ！！」

新しい餌に飛び付いた星の意識。

力の本流もだが、何よりも情報量が馬鹿げている。

かく言う朱然も、一度体験していなければ、脳がパンクしている間に自我を乗っ取られていただろう。

しかし、そうはならない。

朱然であったが故に。

それは昔に乗り越えた。

既に浮かぶ八卦八武装（せんてんはっけ）の真の姿、伏羲六十四卦方位図（たいきょくず）。

崩し文字となっている火、水、風、雷、天、地、山、沢の８文字がより一層に輝く。

「一個人が耐えられないのなら、世界を引っ張ってくればいいッ！

！」

絶え間ない頭痛に苛まれながらも叫び、全ての力を投げうつ。
その力は既に一個人を越え、世界最強を名乗っても良い程に蓄えられた力。
例え自身だけの力でなくとも、今の朱然はそれを名乗れるだろう。
伏羲六十四卦方位図によって、この世界とは別の世界を再現する。
異なる世界を知覚し、異なる摂理を操作し、異なる事象を演算し、異なる歴史を派生させる。
それを修正しようとするこの世界の修正力によって、仮想世界が一気に瓦解する前に星へと叩きつけるのだ。
朱然へと星が星の記憶を叩きつけるように、星へと朱然が朱然の見た別の世界を叩きつけた。
星は一瞬の混乱をする。
一瞬の隙を星が晒すのだ――――――！！

「呑まれるは俺じゃない……お前だガイアッ！！」

呑まれれば星の操り人形。
呑み干せば星の主人。
正にハイリスク、ハイリターン。

そうして朱然は――――――

星を呑み干した――――――

第８９翼　世界の差異、呑み干す紫の麗人（後書き）

ようやくここまで来た……朱然さんが正真正銘のチートにッ！！
因みにこの作品の魔法世界崩壊は、ある意味で世界の修正と同義なので、朱然さんが主人になっても止めようとしない限りは止まりません。
朱然さんは封印状態じゃ？という問いに関しては、魔力溜まりを利用しているので魔力消費が軽減されています。
独自設定ばかりで申し訳ないｍ（＿＿）ｍ

そして始まる大戦の焼き直し、果たしてナギＶＳ朱然の勝敗は！？
英雄の存在を消滅させられた魔法世界の行く末は！？
朱然さんの生死は？！

みたいな感じでしょうか＾＾；
いやはや、投稿まで長くなってしまってすみませぬ……様々な方が自分のペースで良いですよ～との事で、無理ないペースで何とかかけました。
ネギが蚊帳の外ですが、まあナギとの戦いが終わった後に出てくる予定ではありますので安心？して下さい。

第９０翼　白と黒、友と戦う紫の麗人

それは時間にして数秒の出来事だった。
ナギ・スプリングフィールドとアリカ・アナルキア・エンテオフュシアはアラヤの使途。
故に数秒で朱然が纏った身近で在ってはならない空気を、気配を知覚する。
朱然に影が纏わり付く。
その影は漆黒のローブとなって朱然を覆う。

「馬鹿野郎が……ッ、星の意識に乗っ取られやがったな！！」

ナギは白い造物主の掟を手に持ち、朱然を警戒する。

「これも役目だ……ナギ、シュゼンを解放する為に――――――」

「解ってるッ！！」

同じく白い造物主の掟を顕わにしたアリカがナギの心中にある迷いを消す為に敢えて言おうとするが、ナギはアリカの言葉を遮った。
かつての仲間にして、最後にナギと旅をした親友。
袂を分けてしまった友。
せめてその業から救い出す為に、ナギは魔力を込め始め――――――

「何を勘違いしてる？」

「スイ、セン……？　い、意識があるのか！！？」

姿こそ造物主そのものだが、聴こえてくる声は平然としている。

自我がハッキリとして、到底操られているようには見えない。

「当然だ」

危ない所だったと朱然は言わない。

例え危なかったとしても、元々の計画の内だったのだから。

エヴァは

「で、さっきから好き勝手に言ってくれたな？」

「お師匠がダメだったしよ……でも、スイセンが星の守護者になったんなら、この現象を止めてくれりゃあ――――」

「全て丸く収まるって？」

「――――ああ、俺達はただテキトーに隠居してりゃ世界は大体、平和だろ？」

ああ、ダメだ――――

朱然は思う。

やはり親子か、と。

大方、ネギをアラヤなどに関わらせたくなくて生まれ故郷に預けていたのだろうが、その所為でネギがあのような性格になったなど、露とも知らぬという顔。

大人の都合で振り回された子供の不条理をこいつ等は理解していないのか――――!?

「お前達は何故、自分の子供を自分達で育てようとしなかった？」

「――――――ッ」

朱然の問いに、怯んだのはナギではなくアリカだった。

一緒に暮らしたくともできなかった悔しさに唇を噛みしめている事から、朱然の予想は的を射ている事を裏付ける。

「スイセン」

今まで黙っていたエヴァが、そんなことどうでも良いだろう？と囁く。

エヴァの言うとおり、そんな事を訊いても戦い難くなるだけだ、と朱然は思い直し、それ以上は訊かずに八卦八武装（せんてんはっけ）を武装へと戻す。

星を掌握した以上、伏義六十四卦方位図（たいきょくず）でなくとも良く、今はナギとの直接的に打ち合う武装を必要としているからこそ八卦八武装にしたのだ。

その８の武装に加えて、造物主の掟も滞空する。

「……俺達だってッ、一緒に暮らしたかったぜッ！！　でもなスイセンッ、お前に俺達の気持ちはわかんねぇよッ！！」

朱然はナギの魔力を込めた左拳の側面を、右手に呼び出した無境（たて）の丸みを使って滑らせるようにして受け流し上空へと弾き飛ばし、朱然は後を追う。

「ああ、わからないッ！　お前達の前に立ち塞がる事になった俺の気持ちもッ！

子供が出来る可能性がほぼ皆無な俺の気持ちさえッ、お前達はわ

からないッ！！」

「――――――！？」

ナギは驚きながらも造物主の掟を握ったまま、右の拳を打ち振るう――――――！！

朱然は大渦（パイルバンカー）を左手に呼び、トリガーを引く――――――！！

空を翔ける2人の英雄。

白と黒。

対極の存在となった2人。

その2人を見上げる3人の内の2人の視線が交錯する。

「今の話は本当の事なのか……闇の福音（ダークエヴァンジェル）よ？」

「女王に名前を覚えられるとは、光栄だな……先程の話は全て本当の事だよ。

水仙は限りなく不可能に近い程に子供が出来ない身体だ」

「……なるほど、それで子供に並々ならぬ執着を持っていた訳か」

「それだけではないさ。　水仙はその生い立ちから既に子供を省みない大人の犠牲者でもある。

己を慕った子供達を殺されてもいる」

「……」

エヴァの話す朱然の生い立ちに、アリカは耳を澄ませる。

「しかし、誰しもが――――」

アリカは言う。

「む？」

「――――誰しもが平等ではないじゃろう？」

法律や宗教で人類は平等です、と謳っていても、平等なんてモノは存在しない。

生まれ、人種、才能、環境、親、学校、金銭、上司、交友関係、挙げれば幾らでも挙げられる。

「そんな事は水仙も……無論、私も十分過ぎるほどに痛感しているよ。　私達は普通の人間よりも長く生きているぞ小娘？」

触れれば即座に凍り砕かれてしまうような冷たい視線と殺気。

その気配にたじろぐアリカ。

「世界の為に人を殺すつもりなど毛頭ない……ただ親しい者達の為に世界を敵に回しただけのことだ。

そんなもの……私達にとって当然の行動だ」

「邪魔なものを全て破壊し、殺戮し、蹂躙してそれで一体何になる

のじゃ？」

「心にもない事を言うなよ小娘。　お前達がアラヤの眷族に堕ちたのならば、お前達が成すは人類を生かす為に大多数を殺す道だろうに」

「否定はせん。　しかし、この世界では寄り代が無くては干渉が出来ないのだ。　世界の為に」

「弱いな、人間は――――――」

大義の下に、殺戮の道を選ぶ。

そう決められた道を、生き方を決めてただ盲目的に従う生き方は楽だったろう。

ナギとアリカの2人は、疲れていたのかもしれない。

しがらみが嫌になったのかもしれない。

しかし、王族として生きてきたアリカにとって、平穏のままに外界を生きる事は死と同義だった。

自国の民の為に、尽くす為に、この身は在ったのではないかと考えてしまった。

一度でも考えてしまったが故に、思考の片隅には常にその考えがチラつく。

そして、見つけてしまったアラヤ。

その道を選ぶのは、自明の理だったのかもしれない。

「――――――いや、弱いからこその人間か……」

エヴァはこれからの人間として生きる人生に溜息を吐く。

見上げればお互いが惚れた2人の決着が決まったようだ。

アリカはナギの下へ、エヴァンジェリンは朱然の下へと歩いてい

くのをアマテルは見る。

「お互いに、難儀な相手に惚れたものだ」

その一言を残し、戦いは終わりの終わりへと進みゆく。

鈍い衝撃と共に撃ち出された魔力によって構成されたパイルバンカーの杭が、ナギの拳と真っ向からぶつかる。

通常ならば比べるべくもなく拳が砕け、腕が弾け、肩まで吹き飛ぶはずなのだ。

だが、それを覆し、拮抗する。

造物主の掟から供給される過剰魔力によって雑な術式でも異常量の魔力を纏った拳は、大方の物を二の太刀要らずの必殺へ至らせる硬度へと引き上げた。

パイルバンカーの杭の方に微細な罅が入っていく。

如何に緻密で頑丈に造った橋が在っても、その強度を上回る洪水の水量には成す術が無い――――――

――――――だからこそ、今までの大渦の実体のある杭を魔力構成

の杭へと変え、数で以て塗り潰す！！

如何に朱然が造物主の掟を持とうとも、如何に星の主となったとしても、朱然自身の魔力放出量がナギに敵わない以上、ナギを力で圧倒する事は難しい。

上に行けば行くほどに、微かな劣りが敗北へ繋がる。

だからこそ、奇策妙策を使ってその不利を覆す――――それが朱然本来のスタイル。

「く、ぉ……ッ！！」

ひたすらにトリガーを引く朱然に対し、ナギは杭を潰す事を止め、側面から弾く事に専念している。

朱然はその隙に、空いた右腕に造物主の掟を握り、溢れる魔力を編んで術を行使する。

「雷の暴風ッ！！」

「水の激流ッ！！」

お互いに詠唱破棄の魔法。

朱然の水に対し、ナギは雷。

この呪文同士がぶつかり合えば、当然のように人を感電死させるには十分な雷撃が水を伝ってくるが、その気配はなく拮抗を保っている。

何故なら、朱然が得意とする水には電気に対して明らかに劣勢を強いられることは予想に難しくはなかった。

だからこそ、あの朱然が工夫を凝らさないはずが無い。

電気が水を通すのは、不純物が多いからだ。
つまりは、その不純物を無くせば水であっても電気を通さない。
普通ならば、それ相応な機材を使って造られる不純物を可能な限り取り除いた純水よりも、更に不純物を排除した超純水。
魔法だからこそできた事。
必要だと思われていなかったから誰もやらなかった事を朱然は必要だったからやった。
ただそれだけの事。

しかし――――誤算があった。

徐々に……拮抗していたはずの水と雷の収束砲が均衡を崩し始める。
電気が微かに朱然へと届いたのだ。

「なんッ、で……ッ！？」

朱然は魔力をより一層込めながらも声を漏らす。
その思考は高速で脳裏を駆け巡る。

「そうか……ッ！！」

考える事数秒。
朱然は思い出す。
不純物を取り除く事で超純水という液体が生成される、それは間違いない。

だが、注目すべき点はこの不純物という部分だ。
ここはどこぞの病院の無菌室ではない。
外気が常に動く場所――――――つまりは空気中に漂う不純物が何所にでも存在する。
常に超純水は水へと戻っていく。
朱然が加えるべき術式は、純水の生成だけでなく純水の維持もだったのだ。
しかし、発動した魔法の術式は弄れない。
だから朱然は心の中でカウントを始める。

――――――5

術式が弄れない以上、均衡が崩れる瞬間に魔法を解くしかない。

――――――4ッ

既に微細な電流が水の激流を伝う。

――――――3ッ

電流のシビレが無視できなくなってくる。

――――――2ッッ

肉が電気で焼け爛れては吸血鬼の不死性によって回復される。

――――――1ッッ！！

繰り返される破壊と修復に、朱然は気が狂ってしまいそうだ――
――――ッ！！

「今ッ！！」

強引に術式を切ると同時に水の激流が霧散し、朱然の姿を覆い隠す。

その一瞬に虚空瞬動で、一気に上空へ。

「俺はここに誓おう……己が行いに後悔しないという事を――――――」

刻み込むように、ただ静かに宣言する。

取った形状は白と黒の絡まり合った柄が別れ、白と黒の二色の刃をもつ鎌。

かつての友を討つ為に……その鎌を振りかぶる。

「伏羲（ふっきの）八卦次序――――――」

家族の為にならば――――――撃てる。

そう自分へと言い聞かせ、一気に真名と共に振り切った。

「――――――太極鎌（たいけん）ッ！！」

「ッ！！　千の（キーリプル）――――――雷（アストラペー）エェッ！！」

下から上へ向かう千を束ねる雷の豪雨が、本来落ちるはずの法則を無視し、登り来る――――――！！

対するは対のブラックホールだ。

２つのブラックホールはそれぞれが渦を巻くように、対象を引き裂きつつ対象を分断して呑み込まんと下へ下へと落ちてゆく――――！！

千の雷すらも例外ではなく、半分づつブラックホールに呑み込まれ消えて行く。

その引き裂く双ブラックホールはナギへと向かう。

「オオォォォォ――――――ッ！！」

ナギは逃げられないと悟るや、白い造物主の掟を両手で突き出すように構え、ありったけの魔力を込め凌ぎきる腹積もりのようだ。

朱然の込めた魔力は黒い造物主の掟で引き出せて、かつ朱然の放出量を目一杯込めた量。

対してナギは朱然と同じ量の魔力を引き出し、朱然を越える放出量をもっているが、最初に放った千の雷分の魔力放出量を引いた分を朱然が上回っていれば、ナギは受け切れずに裂かれ呑み込まれるだろう。

ナギは叫んだまま迫り来るそれを耐え続ける――――――！！

激流と暴風の時とは真逆。
ナギは徐々にだが押され始める。
漆黒の重力場がその身を裂く為に刻一刻と迫っていく。

「ア〝ァァァァ――――――ッ！！」

最早絶叫。
過去の名声を省みない形振りの構わなさ。
諦めないという主人公必須の技能とでもいうスキルのお陰か、ナギは……耐えきった。

「ちっく、しょお……」

その左腕を代償にして……いや、左腕のみだった事は僥倖だったのだ。
それに加え、魔法を放つときなどの一時的なものならまだしも、

英霊エミヤと違って肉体という枷が在る以上、いつかは限界が来る。
過剰魔力を引き出し続けたナギは多量の血を左肩から滴らせながら人間の限界を越えた為に意識を失って祭壇へと墜ちて行った。

「父……さん……？」

そして、ついに――――――役者は揃った。

第９０翼　白と黒、友と戦う紫の麗人（後書き）

何というか、思いの外スイスイと書けてしまったので更新です。
いやぁ、Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏを見ていたらついついガリガリと書いていた（笑）

こんな訳で、ナギＶＳ朱然さんは、少し手こずりましたが、やはり朱然さんの方に軍配が上がりました。
そして、ようやくネギが現て朱然さんとのタイマンになります。
次話は朱然さんの造った宝具の大盤振る舞いでもしてみようかな？と思っています。
ではノシ

第９１翼　神殺しの必滅槍、激闘する紫の麗人

「父……さん……？」

儀式場に墜ちたナギを見たネギは呆然と呟いた。
１０年前の故郷をあっと言う間に悪魔達に焼かれ、その悪魔達を単身で滅した無敵の強さ。
淡い幻想は、その時に確固たる姿となって憧れへと変わり、何者にも負ける事の無いと思っていた。
その父が、左肩から先を失いボロ雑巾のようになって倒れている。

「ナギッ！！」

そこへ現れたのはアリカ。
ネギの母。
極東の日本で教師をするなどという魔法使い見習いの修行が無ければ、直ぐにでも探しに行きたかった両親が目の前に居たのだ。

「母……さん……？」

「ナギッ、しっかりしろッ、ナギッ！！」

目の前に居るはずなのに、自分に気付いてもらえない。
会いたかったはずなのに、自分は視界にも入っていない。

「……哀れだな」

ネギの背後から聞き覚えのある声がした為に、バッと振り返った。
そこにはラカンやクルトに見せられた２０年前の大戦の元凶がい

る。

そして、その圧倒的な気配と共に、ネギは戦慄を禁じ得なかった。

かつてナギ率いる紅き翼全員が味わった、勝てないという絶望感。

それがネギの身体を、本人の意思に反して硬直させてしまう。

「貴方、は……その、声は……ッ」

「ああ、朱然だよ」

朱然は自ら黒いローブのフードを後ろへと落とし、その顔を見せる。

自分を写している瞳から向けられるその感情。

ネギは同情しか感じることができない。

前に会った時は、明らかな敵意と殺意と害意を感じたのに、今はそれすらなく同情を向けられている。

「せっかく会いたかった両親と会えたのに、気付いてさえもらえないなんてな……嗚呼、本当に可哀想に」

その台詞は、朱然のその容姿と相まって、まるで慈愛を振り撒く聖女のようだ。

「……ッ、違いますッ！！　そんな事、絶対に――――――」

ネギはその朱然の言葉を否定する。

「何が違うものか、現に2人はお前に気付いてないだろう？」

「違うッ！　違う違う違うッ！！」

ネギは頭を抱え震えだす。
認める訳にはいかない。
朱然とその子供達だって、血の繋がりはなくともあれ程の強さが、絆が、愛情があったのに、自分にはそれが無いなどとは考えたくもない可能性だったのだ。

「良い事を教えてやろうか？」

――――お前は、世界と天秤に掛けられて、母親と父親に捨てられたんだよ。

「う、嘘だッ！」

朱然は最初に鎌をかけて確信したネギにとって受け入れがたい現実を突き付ける。

「自分から目を逸らすのは簡単だ……目の前に本人達が居るんだ。訊いてみれば良い」

「……ッ」

ゴクリとネギは固唾を呑んだ。
それは予感。
それを聴いてしまえば、ネギは本当の意味で打ちのめされる事を理解してしまっている。

「ナギ、王女……息子が来たぞ？」

「……ネ、ギ？」

朱然の声に逸早く反応したのは、傷つき倒れていたナギだ。

アリカに倒れたまま抱かれているナギが、ふと呟く。

「何？」

それに釣られ、アリカはようやくネギの存在に気付いた。

「教えてやればどうだ？　お前達はネギを捨てたんだろう？　世界の為に」

ネギにとっても、アリカにとっても、ナギにとっても残酷な問い。

「違、う……」

「……ッ、違う！」

今にも意識が消えそうになるナギに対して、アリカは即答できなかった。

それが、ネギに確信させるには十分な材料だったという事に気付き、直ぐに否定する。

だが手遅れだ。

そこには明確な壁が出来る。

それでも震えるネギは両親の前に立ち、背を向け、朱然に対峙する。

「やはりこうなったか……まあ、ナギとの戦いは想定外だったが、お前との戦いは織り込み済みだ。

掛かって来い……殺してやろう。　俺の娘を殺したお前をな」

ここに来て、ようやく朱然はルクレツィアの仇を討つ事が出来る。
その事に歓喜し、嗤う。

「ネギ……俺はな、お前と本当の意味で対峙した時、何を言い、何をするかをずっと考えていた……だが言葉じゃ何も伝わらない、行動だけでもだ……だから俺はこの戦いに全てを賭けた。
だって俺は知ってる……そんな事をしても誰も喜ばないだけだと。
すべてを終えた後、俺には1つ以外残らない事もな」

「どうして……」

「人を救うのは神じゃない……勿論、英雄でもない……人だけだ……それも当事者の人間だ。
なら一体何の為だって？　決まってる！　罪だ……それは決して償えないモノで、それを罪と言う。
ならどうする？　どう贖う？　それも決まってる！　俺達は……人間は生きていれば大なり小なり罪を背負う。
“どうしようもない”それが答えさ……復讐したって気分が少しマシになる程度で償えた訳じゃない。
その償えない罪を増やし続ける生き物だ俺達はッ、俺はルクレツィアを救えなかった自分自身がもっとも許せないッ！
子供達を守れなかった俺自身が許せない！　運命に負けようとしている俺自身が許せなかったから……」

「貴方は……ッ、貴方のやろうとしている事は……間違ってますッ！！」

ネギは朱然の考えを悟ったのだろう、歯を噛みしめる。
今更なのだ。

もう既に変えるべきものなど何もない。
朱然にとって残るは予定調和のみ。

「世界に全てを公表する事で全世界の人間を当事者にした。他人事なんて思わせない為に。
誰かが決めたんじゃなく、自分達で進めなければ、いつかまた同じ事を繰り返す……だから俺は全てを巻き込む事を選択した。
本来と同じ結末をそうして終わらせはしない。
強者も無ければ、敗者もいない……赤き翼と英雄の記憶の消失、それを百年後に情報を開示し、英雄を過去のものとする事こそが俺の書いた台本（シナリオ）だ。
例え、それで俺自身が悪と罵られ続けようと、大切な者達に忘れられ、死ぬ事になる事が決まっていたとしてもだ」

それは悲しい道にして選択。
自身を賭けて、得られる報酬は家族の安寧。
家族達が朱然と過ごしたその記憶さえ犠牲にして得られる平穏。
朱然の家族達は、朱然を忘れても世界の孤児達を救うだろう。
ただ変わらず続く残酷を生きて、それでも救いを与える。
突出した者が率いる平和ではなく、誰もが救う意志を持っていける世界。
それこそが朱然の目指す終着点。

「現在、魔法世界が寄り代である火星へと戻りつつある。
そして、今、造物主（コード・オブ・ライフメイカー）の掟は俺の手の中にあり、造物主の力……星からのバックアップを受けられる」

つまりは一個人では到底扱えないような容量の魔力を得た事になる。
だが、それだけでは宝の持ち腐れだ。

そこで伏羲八卦次序太極図という蛇口を取り付ける事で規格外の儀式を一個人で成し得る事が出来る。

「俺が魔法世界を救ってやる。　何も変わらない日常を続けさせてやる――――――」

「止めてください！！　貴方はもう、大切な物を持ってるじゃないですか！！　貴方の方法じゃ結局は何も――――――」

変わらないじゃないかと、ネギは朱然に寄り添っているエヴァンジェリンにも言う。

「俺の意志はもう変わらないッ！！　だからッ……全てッ、今日ッ！！」

「――――――ならッ、なら僕はッ！！」

――――――この世界を救うッ！！

――――――貴方をも救って見せるッ！！

「ハッ」

それを聞いて、朱然は咽返るような不快感が込み上げる。
何所までも甘くて、甘ったる過ぎて胸焼けしそうなほどの甘さ。
この局面で、倒すべき敵すらも救うなどと言えるその神経が、朱

然には理解できない。
全てを救うのならば、まずは敵を作ってはいけないのだ。
それなのに、敵まで救うなどとは片腹痛いと朱然は嗤う。

「ハハハハハハハハッ――――――やって見せろよ」

空気が凍る。
嘲笑から敵意へ。
本当の意味での、朱然の敵として認識したが故の殺意。
嗚呼、残念だ……朱然は心の中で思う。
目指すものは根本的に同じだ。
それがとても……とても残念でならないとも思う。
しかし、同じく根本的に道が交わらない。
否。
既に道の交差点は通過した。

「世界に俺とお前どちらが正しいのかを見せてみろ!!　ネギ、お前の計画は……お前の言葉はとても綺麗なものなんだろう。
美しくて、平和で、理想に満ち満ちている」

朱然はネギに囁くように言う。
今までの苛烈さが嘘のように、優しく慈愛すら感じれるような声色。
しかし、だからこそネギは恐怖し、身震いをする。

「旧世界から来たお前達の考えたその火星自体をテラフォーミングする計画は、それはそれで正解かもしれない。
模範解答と言ったところだろう。
今にも崩れそうな足元も、その土台となる土地自体を改造してしまえば埋立地のように平地にもなるだろう。

だがな、土台を救ってもフェイトの従者達や俺の子供達のような戦災孤児達は救えないッ！！
たかだか１０年足らずで造った急造の土台では脆弱過ぎて、その上に立つ虚栄が詰め込まれた城に潰され瓦解する！！
そのような上辺だけの救いではッ、無駄には成らなくとも、解決にも程遠いッ！！」

「それでもッ！！　僕は信じています！！　人は変われるッ、全てを救える道が有るはずだってッ！！」

「だがそれを裏切るのもまた人だ！！
その理想や想いは、果たしてこの世界の住人が全て肯定するのか？　例えば奴隷達……死ぬ事もない、餓えない、乱暴されない。
それはとても良い事だろうが、一生死ぬ気で働いても自由になれるのは一握り……自殺する事は首輪によってできない。
そこのお前の母親が世界に普及させた奴隷達を守る為の制度に一生を縛られるより、死んだ方がマシと思っている奴隷達がどれだけいると思う？
仮に奴隷から解放されたとして、そこからどう生きるか？なんて奴隷として生きて来た者にとってはわからないんだ。
全ての人を救うと言いつつ、お前は少数を犠牲に多数を殺すのを容認するのか？
切実に今を生きる人間の気持ちをお前は知っているのか？！」

「それは――――」

ネギは言葉に詰まる。
ネギにとって、生きる意味などという事を考えた事など無い。
誰もがそうだ。
生活に困った事の無い者が紛争地帯の孤児達の思いなど知る事な

ど、不可能に近い。
戦災孤児達と暮らしていた朱然ですら、未だに掴みかねている事なのだ。
たかだか１０歳のネギにはその苦労は理解できない。
「正義とは――――――」
そこから更に朱然は話題を変える。
「？」
「――――――正義とは悪辣非道の輩を討ち取る者が正義の味方と呼ばれるのではない。
正義とは主観的であり、己の理念と相対する者を悪と定義し、自分の道理にて相手を押し付け、言いくるめることこそ正義と呼ぶ。
ことそこにおいては耳を貸さず、そして自分を曲げてはいけない。
正義を立場として使った時点でメガロメセンブリアは道を誤った……故に正義とは……貫くものだと俺は思う」
以前にした正義と悪の禅問答。
「何を――――――」
「何時ぞやの禅問答に俺が出した答えだよ。　とどのつまり、唯の自己満足（エゴ）だよ。
選択は成され、後はお前が止めるか止めないかだけだというだけのことだ。
お前は何を以て自分が正しいと思っている？　俺は何時だって自分の行動を正しいと思った事はない。
でもな――――――」

――――――間違いを恐れて立ち止まったままでは何も出来ない、だからこそ俺は進む。

間違っていたとしても、それをまた覆す為に朱然は動く。
正しいと思える選択肢を選択し、本来の物語を歪めながらも生きて往く。
それこそが、朱然という者の在り方なのだから。

「――――――ッ」

自分勝手の我儘で世界を変える。
それに対して、ネギは息を呑む。
朱然のその考え方は人間らしい。
だがそれでいて、間違いだとネギは思う。
なのに、それなのにネギは言葉に詰まり、それでも声を絞り出した。

「もう、貴方に許しは請わない！　今逃げたら……2度とッ、僕は貴方と向き合えないからッ！！
僕は貴方の大切な人を奪った……ッ、殺される事で許されると思ったッ！　でも、僕の命は僕だけの物じゃない事を皆から教えてもらいましたッ！
殺される訳にはいかない！　でも貴方には生きてもらう！　僕はッ、貴方も救って見せるッ！！　貴方を倒してッ！！」

「良く言ったなッ、あの甘えしか無かったガキがッ！　だが、何所までその甘ったるい理想を追い続けられるかッ！？」

乗り越えようとする者、それを阻む者。（ネギ・スプリングフィールド）（朱然）
前哨戦とも言うべき舌戦は幕を閉じる。
次に待っているのは力と力のぶつかり合い。

出し惜しみ無しの潰し合いだ――――――！

「ラス・テル　マ・スキルッ！！？」

「この状況で悠長に呪文詠唱かッ！？　咸卦法！」

無影の型の奥義足る無影からの天翼の型・奥義、天翼。
瞬動や縮地を越える異常にして自在の歩法からの触れる物の一切を切り捨てる手刀をネギの首へと横薙ぎに振り切る。

「く……ッ！！」

辛うじて薄皮一枚を犠牲にしてかわしたネギは呻く。
下手な手を打てば、一撃の下に殺される事を理解する。
ネギの打つ手は決まっている。
完全な雷化をしなくては、速さすらも追い付けない……ならば、闇の魔法を使わなくてはならない状況なのだと。
それを知っている朱然は当然、そんな時間を与えはしない。
如何に神速の居合の剣士と言えども、刀を抜けなければ抜刀はできず、剣を抜けば万夫不当の豪傑ならば、そもそも剣を抜かせなければいいという当然の答え。

だからネギは、その拳のみで朱然から詠唱の隙を?ぎ取らねばならない。

「ならッ!!」

ネギは拳を握り、中国拳法の構えを取る。
対して朱然は構えない。
敢えて言うならば無構えが朱然の構え。

一瞬の静寂。

次の瞬間には、朱然へと駆けるネギ。
しかし、無境の型・奥義、無境により、八卦掌で朱然を掴みに来た柔の掌を、逆に人間の反射を利用し、自ら飛ぶよう仕向けて掴ませずに上方へと投げ飛ばす。
そのまま朱然は飛び、ネギ背後に回り込んで、守殻の型・奥義、守殻で身体を剛体法で硬質化させ、限界を越えた連撃を繰り出す大樹の型・奥義、大樹で奥義、大渦を乱打する。

「ぎぁ……ッ!?」

ネギはまるで無数の鉄塊に殴られたかのような衝撃で下へと墜ち、小さな浮き岩へと叩きつけられ、埋まる。

「所詮は口先だけなんだよ、お前は」

朱然のその台詞を聴いたネギの指がピクリと動く。

「その程度なら、殺す価値すらないな」

指に力が少しづつこもっていき、掌は拳へと変わる。

願うだけでも、祈るだけでも、力だけでも、理想だけでもダメで、英雄なんてモノになってまで……でも、それでも守りたい家族が救えなくて……だから守る為に俺は行動してようやく手が届く所まで漕ぎ着けた――――

そう心に秘めつつ、そこで朱然は顔を上げ、カメラを睨みつける。

まるで睨みつけるかのように、世界に見せる為に、鮮烈に刻む為に。

そこに映るのは世界へ相対する事を選んだ大馬鹿者。

その大馬鹿者は叫ぶ。

「これを見ている全員もだ。　自分でやっていて何だが……世界の命運をこんなガキにまで押し付けるな!!

力があるからそいつらに任せようなんて選択を俺は認めない!!」

俺は叫ぶ。

魔法世界の住民達へと力の限りに――――

「英雄なんて偶像を作り出して、祭り上げて、おんぶ抱っこされて、本当にお前達は満足なのか?

俺は嫌だね!　俺は英雄なんて特別でも、選ばれた訳なんかでもない!　同じ人間だ!

俺達、紅き翼の奴らだって、強い力を手に入れただけの人間だ!

何時までも英雄に頼ってないで、自分らで何とかするくらいの気概を見せてみろッ!!」

墓守り人の宮殿外。
悪魔軍と事を構える臨時旗艦の一室。
ジャン・ジャック・リカードはその映像を見て愉悦に浸っていた
――――――

ククク……もう少しだ……もう少しで……ッ！？

「ぐッ、づ……ッ！？」

――――――他の誰かが近づいていた事を気付けないほどに。

気が付けば、リカードは刺されていた。
正確には、直刀の刃が上向きに、背中から鳩尾へと突き込まれてる、といった具合に。

こ、の……刀は……！！

その直刀の刃は旧世界の極東で隠れるようにその技を伝える流派、この魔法世界で最も有名であろう英雄の一人が使った刀の形。
この刀をこの場所で使う人物は一人しか居ない。

「……クル、ト……貴様ァ、何の……つもりだ……？」

くそ、が……。

「シュゼンさんとの取引ですよ……メガロメセンブリアの邪魔な老害と膿を一掃する為の手伝いをする代わりに、メガロメセンブリアを本当の意味で改革する事……それとアリカ王女の無実の公表を証

明する事ですよ」

言い終わると同時にクルトが刀に力を込め、肉どころか骨さえも徐々に裂かれ、抉られる言いようの無い痛みが脳を支配する。

「まあ、まさかご本人が現れるとは思いもしませんでしたが、ねッ！！」

「がァ……ッ？！」

「闘技大会で貴方の情報が出て来なかったのは確実に消す為の機会を手に入れる為、手を組んだように見せかけて頂きました。

貴方自身、上手くシュゼンさんを欺けたと思っていたのでしょうが、残念ながらとっくにバレてましたよ？

まあ、貴方は公に隠していた持病が戦闘中に悪化して死亡……歴史には悪名を残さないというところは、嘗ての仲間としての慈悲として是非とも受け取ってください」

クルトは愛刀に更に力を込め、下から上に刃を抉り上げる。

「グッ、づぁぁ……ククッ、ああ……先に地獄で、待って――――――」

リカードは言い終える前に事切れ、目の光は鈍り、脱力する。

それと同時にクルトは一気に刀を引き抜き、血を飛ばして鞘に納め、リカードは床へと鈍い音と共に倒れた。

「ええ……その時まで、精々長生きさせて頂きますよ……」

クルトは倒れ伏し、血を垂れ流し続ける死体を一瞥してから背を

向けた。

「折角、舞台を整えても、役者がダメじゃあ、お話にならない……ネギ、お前が俺を落胆させたのは何度目だろうな？」

その言葉を言い終わると同時に、ネギが埋まっていた岩が爆発し、荒々しい放電が起こる。

蒼白く輝く身体、伸びた髪、身体を渦巻く放電。

ようやくネギはその姿へとなった。

朱然の慢心という隙に。

「勝てない敵に挑む蛮勇結構ッ！　だがこの世界の理に縛られ続ける限り、俺には勝てん！！」

目前のネギに朱然は言う。

朱然はネギの性格も、魔法も、限界も粗方の情報を知っている。

手札を晒してポーカーに勝てるはずが無いように、ネギを知る朱然に勝てる道理は無い。

「いいえッ、僕は貴方を必ず倒します！」

朱然の目前には既に雷化したネギ達が居る。

そう“達”だ。

時を同じくして俺の前後左右上下にネギ達は居た。

「ラ・ステル　マス・キル　マギステルッ！！」

「なお詠唱をするかッ！！」

ネギは始動キーを唱えたところで、ネギの姿が増えたのだ。
精霊による囮（デコイ）……　千躰雷囮結界……いや、違う！朱然の眼はそれの全容を伝える。
魔眼を通して見えるそれらは、全てネギ・スプリングフィールドだと俺に理解させる。

「これが、闇の魔法を光の魔法で制御できたお陰で使える僕のオリジナル最終魔法技法……偏在化です！
今の僕は、半径1キロ圏内すべてが自分自身です！！」

偏在化。
何所にでもありえるという事。
即ち、光と闇の魔法を応用し、完全な精霊化を越えたその形態。

「お前にそんな事が……ッ！　それが本当にできているのだとしたらそれは……ッ！？」

驚愕だ。
偶然とはいえ、根源へと到達した朱然が驚きを顕わにする程の異常。

「ええ……今の貴方とほぼ同じ存在です……ッ！！　僕は、全てを救う為なら人間である事さえ捨てて見せます！！」

「それがどういう事なのか理解しているのか？」

光の魔法を教えてしまった事。

見る必要すらないとネギとラカンの大会を見なかった事。
ネギとポヨの戦いを術式上、見れなかった事。
それが朱然にとって仇となる。
ネギ達が一斉にラカンとポヨに使ったそれを形作る。

「ええッ、ですが理論上人間に戻る方法も有ります！　行きますッ！！」

巨人を殺す槍が数百本も束ねられる。
こんなもの、実際には形作る事すら机上の空論と決めつけられるそれをネギはやってのける。

「「「「「雷神槍（ディオス・ロンケーイ・ティタトクトノン）・巨人殺し……術式圧縮統合ッ！！」」」」」

一発でも馬鹿らしいほどの威力を秘めた千の巨人殺し（ティタトクトノン）を圧縮し、それでもなお、巨人殺し（ティタトクトノン）よりも壮大な雷の槍が……そこには在った。
一斉にネギが殺到し、その必殺どころか滅殺は必至なその槍を穿つ為の隙を、残りの９９９人が殺到する事で作り出そうとしてくる。
その一撃をかわすのは容易くはない。
一体一体が雷速、その攻撃を朱然は物理を曲げ、歪め、殺していく――――――――!!

「行きますッ、雷神槍（ディオス・ロンケーイ・スリー）？……」

「真名一斉解放――――――ッ！！」

その号令に従って、朱然が今までに造ってきた武具が、宝具が王（ゲー）の財宝（ト・オブ・バビロン）の如く、真名を解放されて撃ち放たれる。
無数の無銘の剣、槍、斧、槌、刀、杭、針、鎌それに含まれないナニカが降り注ぎ、ネギ達を傷つける。

これだけならば可愛い方だ。
大神宣言（グングニル）が1人のネギの障壁をすり抜け殺す。
名を斬る刀（なまえきり）の刃がネギ全てを切り裂く。
軍神五兵（ゴットフォース）がネギを穿つ。
悲恋琴弦（フェイルノート）がネギを未来から射抜く。
破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）がネギの障壁すら打ち消し貫く。
解体聖母（マリア・ザ・リッパー）がそれぞれ飛来し、傷つける。
力屠る祝福の剣（アスカロン）が絶対の守護を反転させ、全てを貫く剣としてネギに刺さる。
それに限らず、朱然が再現してきた無数の宝具達がその真名を発揮し、その効力を如何なく発揮しネギを殺していくが、今のネギには焼け石に水だ。
ネギを本当に殺し尽くすにはまだ至らない。

ならば――――――ッ！！

朱然が最後に取り出したのはカルナが持っていたとされる対神宝具にして、雷光でできた必滅の槍。

「日輪よ（ヴァサヴィ）――――――」
「神殺しの（ディーシダ）――――――」

ネギがその存在となっているのなら、その存在を滅する槍を使うまでの事。

「死に随え（シャクティ）――――――！！」
「必滅槍（グングニール）――――――ッ！！」

朱然の腹にその一撃が喰らい付こうと、漏れ出す雷電を放射しながらも突き進む神殺し(ディーシダ・グングニール)の必滅槍。

逆に、ネギへと向かうは一撃のみの、同じ雷の必滅の槍――――――日輪よ、死(ヴァサヴィ・シャクティ)に随え。

「真なる、力の一つを……示せッ――――――八卦八武装(せんてんはっけ)！！」

現れるは朱然の最強にして絶大の信頼を寄せる最強の切り札、伏義六十四卦方位図(たいきょくず)

そのこの世を純粋な力技で超えるネギの魔槍を潰す為に、世界の理とも言える伏義六十四卦方位図(たいきょくず)でダメ押しとばかりに、無尽蔵に魔力を供給する造物主の掟(コードオブライフメイカー)の魔力を流し込む。

「ああァァァ――――――ッ！！」

「くぅァァァ――――――ッ！！」

俺は無限とも言うべき量の魔力を伏義六十四卦方位図(たいきょくず)に込め、世界の理でこの槍は砕かれないという理として上書きし続ける。

だがしかし、人間のまま人間の殻を越えた朱然の能力は、やはり人間に知覚できる程度までに縛られている。

逆に、この場全てがネギとも言える偏在化によって、この場の魔力の全てを使う事が出来る。

つまり、引き出せる魔力量に限界がある朱然に……人の殻(リミッタ)を捨てて掛(ーのない)かるネギを抑える事は　――――――

――――――出来ない。

「もうッ、もう2度と子供達が戦わないようになんて俺は願わないッ！！」

朱然の放った日輪よ（ヴァサヴィ・シャクティ）、死に随えは砕け散り、朱然の腹に突き刺さる神殺しの必滅槍（ディーシダ・グングニール）。

「だが……ッ、子供が生きていく事くらいは肯定される世界に……ッ」

そして――――――――――――

「万雷招来ッ、雷霆雷公鞭（らいていらいこうべん）――――――！！」

ネギの解放という呪文と共に、万雷の雷が朱然の身の内から荒れ狂う。

それは人間という存在でありながら人間の殻を越えた者……即ち、神とでも言うべき存在に、領域に踏み込みし者達の戦い。

人を越えながら人であった者と、人でありながら人を越えた者。

「が、は……ッ！！」

朱然は……血塗れになりながら打ち倒されて墜ちていく。

「ルクレツィアの死を……ッ、無駄にして堪（たま）――――――」

勝敗を決めた決定的な点。
それは己の限界を――――朱然自身が人間でありたいと願い、縛った事だった。

雷に焼かれ、意識が急速に遠退いていく。

朱然は、人として戦ったが故に……負けたのだ。

第９１翼　神殺しの必滅槍、激闘する紫の麗人（後書き）

次の投稿は午前零時……ネギま編は次話にて終わります。

「や……った……？　でも……」

ネギの呟きが聴こえる。

――――殺せよ……お前の大切な居場所を奪った奴を。

ああ、殺したい。

――――そうだ、それでいい。

「ぁぁ……ッ！！」

――――お前は温い……また奪われたんだ。

「……ッ！！」

――――奪われたら奪い返せ……邪魔者は全部、殺せばいい。

朱然は完全に意識を手放し、己を見失いながら反転した――――

「ようやく、か……随分と永い事封じられてた気がするな……」

そこに当然、ネギと朱然の2人だけだったはずなのに別の誰かが居た。

クツクツと嫌な笑いを響かせながら、そいつは居る。

「誰、ですか……貴方は……朱然さんは何所に……？」

そこそこに整った顔の中肉中背、典型的な日本人。

ただ一点。

日本人との違いを挙げるならば、そう――――その瞳は黄水晶（シトリン）に輝いていた。

「ん？　ああ、ネギ・スプリングフィールドね……実物を見るとまあ……ただのチビッ子か。

ま、これから殺す相手なんてどうでも良いか……ふんふん、造物主（ブライフメイカー）の鍵に伏羲六十四卦方位図（たいきょくず）ね。

でもまあ、俺はこっちのが慣れてるし……名前が中二病なのは仕様なので悪しからず、っとＦｒｅｅ　ｓｋｉｌ――――押さえ縛る貞節（？？Φ）」

その言葉を呟いた瞬間に、ネギは偏在化を強制解除されてしまう。

その場に居た者全てが朱然の言葉を理解できなかった。

何より、ネギは混乱していた。

絶対の力をもたらした術を強制的に解除されてしまうという不可解な事象。

「うん、やっぱりチート過ぎだな……使えるようになったのは俺が俺に統合されかけて、根源に行った時だし、そもそも朱然だって人間捨てりゃ、このくらい片手間なんだがなぁ……」

ブツブツと意味のわからない事を言う誰か。

しかし、ネギは直感する。

目の前に居る存在は、少なくとも朱然のような人物ではない。

気に入らないというだけで虐殺を行うような危険な存在であるという事を……コイツは絶対に朱然ではないという事を本能で理解する。

「雷神槍（ディオス・ロンケ・ティタノクトノン）・巨神ころし！！」

「Ｆｒｅｅ　ｓｋｉｌ――――――触れ得ぬ怠惰（？Ｕ工王ｃ）」

巨神ころし（ティタノクトノン）を穿ったのに――――――擦り抜けて行ってしまう。

「いきなりやってくれるな……前に言っただろーが、警告も無しにいきなり撃つなんて、俺じゃなかったら死んでたってな！」

その身体をすり抜けて、後方の墓守り人の宮殿の廃墟に刺ささり、無用の破壊をまき散らした。

よくよく見てみれば、ソイツの身体が透けている。

怠惰と貞節の２つの単語について、ネギは直ぐに聖書を思い出す。

お国柄、ネギは聖書を読む事は幾らでもあった。

そこから考えるなら、怠惰は七つの大罪。

貞節は七つの大罪の対極で、七つの美徳に含まれる。

「朱然さんは何所ですか！？　僕はあの人も救わなくちゃならないんです！」

「救う？　ハッ、無理だね……朱然は俺、俺は朱然。　言ってしまえば多重人格みたいなもんだ。

俺達の元の話は聞いていると思うが、本人格は俺と朱然に均等に分配された……でもな、朱然の奴は自分じゃない者をも自身の物として、自身の存在を見失い始めた。

つまり今の俺が本来の主人格に一番近い……でも肉体は俺の物じゃないから俺は良くて深層意識までしか登ってこられない。

だから他人なんて毒にしかならない要素で揺らいでる朱然（オレ）に更に揺らぐように地味～に影響を加えて……御覧の通り、俺はこうして出て来られた……」

「じゃ、じゃあ、貴方が■■■■なんですか！！？」

「言葉に気をつけろよ餓鬼……年長者だぞ俺は。

だが、まあ……俺もある意味でこの肉体に取り込まれた他人の影響を多少は受けてるしな……言うなれば……そうだなぁ……イド、とでも名乗っておこうか、皮肉が効いてる」

ククッとまたしても嫌な笑いを漏らすイド。

声の方へと意識を傾けた瞬間、景色が一変した。

草原だ……眩しくて、暖かくて、どこか懐かしさを感じる、そん

な場所。
ここは……何所なんだろう？
朱然は辺りを見渡す。

「もう……良いじゃない……」

後ろから懐かしい声がしたから、俺は振り返りながら鋭い声を浴びせる。

「誰だ……ッ！」

しかし、そこには誰も居ない。

「もう……十分よ……」

また後ろから声が聴こえ、振り返るがやはり誰も居ない。

「うるさいッ、やめろ……ッ、俺の心を掻き乱すな……ッ！！」

俺は両手で耳を塞ぐ。

「もう……許してあげて……」

耳を塞いでもその声は遮れない。
それどころか、先程よりも明確にその存在が、そこに居る事を感じてしまう。

「……水仙」

確かに、俺の後ろに蓮華の気配がする。

俺は今度は背中越しに見やると、視界の端に見慣れていた後ろ姿がチラつく。

「蓮華はもう死んだ……ッ、蓮華の声でッ、姿で俺を惑わすなッ！　蓮華は……もう、いない……ッ」

その後ろ姿に、俺は罵声を浴びせてしまう。

「偽物なんかじゃないわ……私の魂は、ずっと貴方と一緒だった」

俺の罵声に少し身を竦ませた蓮華が、聴き慣れたその声で心を揺さぶる。

思い出でもなく確かなものだという事が眼を通して理解（わか）ってしまう。

「嘘だ……ッ！　俺の眼なら、その事に気付かないはずが無い」

朱然は反射的に思った否定の理由を、そのまま蓮華に投げかけた。

「表層だけでなく、深層心理から意識を逸らす術……外的要因からでなければ気がつけないって太公望が言っていたわ」

また太公望か……ッ、なんでアイツはこう……ッ！！

朱然はそう心の中で叫び、ガリガリと頭を掻く。

でも――――アイツだからこそ、それが本当なのかもしれないと思ってしまう。

「それが本当だとして、どうして“今”だったんだ……蓮華が死んだ時、俺は半身を失ったと思った。

なのにどうしてそんなまどろっこしい真似をしたんだよ……？」

「もう私が傍に居なくても大丈夫だと思ったから……1人でも歩いていける人だと思ったからよ」

「だとしても……ッ、こうして蓮華は俺と一緒に居る事を望んだんだろう?!　なら始めから一緒に居てくれれば――――」

多分……俺は世界と何の関わりもなく、蓮華と2人だけで旅をしたりしたのかもしれない。

そんな情景が脳裏を過ぎる。

「貴方はとても愛情の深い人……でも情が深すぎるからこそ依存になってしまう。

それは私にとっても、貴方にとっても、ためにならないと思ったから……貴方もそれは理解できるでしょう?」

「……ッ」

否定できない。

言い返す事も出来ない。

家族というものを感じられなかったが故に、身内の者には甘く、身内以外には関心を持たない。

それもまた、自分の弱さなのだから。

それとは別に、蓮華がずっと傍に居た事に朱然は衝撃を受けずには居られない。

その衝撃が、朱然を……好きな人、愛した人に気付かれずにずっといる……それはとても幸福な事だけれど、同時にとても残酷な事だという事を理解したから。

朱然達は向かい合わず、背中合わせで会話を進める。

「でも蓮華……俺は家族の為に何かしたいという気持ちは間違ってない、と思う……」

「なら家族でもなかった時に、私に優しくしてくれたのはどうして？」

「それは……」

つい言葉に詰まってしまう。

だが理由ははっきりとしている。

目の前で死なれた姉のように近しい人の死を否定し、今度こそ守りたかったから。

「前に話してくれたでしょう？　貴方は許せるはずよ……許さない事は、とても悲しい事だもの……」

「でも……それでも蓮華だって許せない事はあるだろう？」

「ええ、許せない事もあるわ……浮気とか、二股とか、不倫もね？」

予期せぬ……訳ではなかったが、まさか今此処で引っ張ってこられるとは思わず、頭が真っ白になった。

それから数秒して――――

「いや……それはッ、ごめんなさい全面的に自分が悪いです許してください……」

――――つい反射的に平伏叩頭し、許しを乞うてしまった。

夫婦生活円満の秘訣は悪いと思った方がすぐ謝る事だと思う。

「冗談よ……私は貴方の中で、ずっと貴方を見ていたわ……貴方がとても寂しい思いをしていた事も良く知っていた。
貴方は誰よりも強い癖に、人一倍の寂しがり屋ですもの」

蓮華は“冗談よ”の部分だけ強調して、少し拗ねたように話す。

「ずっと一緒だったから筒抜けか……」

バツが悪くなった朱然はつい頭を掻きつつ背中合わせだったにも拘らず、つい視線を逸らしてしまう。

「情が深いのは決して良い事だけではないけれど、でも悪い事でもない。
だから無理をして笑わないで、1人で抱え込まないで……貴方の周りに居る人に頼ってもいいの。
もう貴方には支えてくれる人が居るじゃない」

「でも……それでも俺は許せないよ……ネギも、それ以上に自分自身を……」

蓮華の言葉に、俺は顔を伏せて言う。

「自分を受け入れて……貴方はきっと、許せる人だから……」

「……ルクレツィアの事を思い出すと、いつも笑ってる顔が浮かぶんだ」

「……そう」

「わかってるんだ……自分が許せないから、直接ルクレツィアを殺したネギを自分と重ねて恨んで、許せない事くらい……。

メガロメセンブリアの事も、世界の危機の事も、エヴァの事もたくさんの事がごちゃ混ぜになって、自分でも何が正しいのか、何が間違いなのか、それすらもわからなくなって……気が付けば後戻りできないところまで来てた。

振り返ればそこは思い出で一杯の場所で、そこに還りたくなってしまうから……そして何より、エヴァに言われるまで逃げて、ネギを恨む理由を自覚した時にはもう後戻りが出来ないから全てを利用して全部上手くやろうって……でもダメだった。

それどころかエヴァに、今までの俺が後戻り出来なかった理由――――自分自身の醜さを浮き彫りにされる事を忌避していたからだ。

その結果がコレだ……また失敗した。俺はまだ――――」

――――届かない。

その言葉を口にする前に、蓮華は口を開く。

「いいえ、無駄なんかじゃないわ……貴方は気が付いていた。貴方は今、迷っているだけ……迷って、苦しんで、貴方はこの場所でまだ戦ってる。

迷うことが出来るなら、後は解っている答えを出すだけでしょう？」

「解ってる答えを出すだけ……」

「そう……それが出来るって、私も、彼女も、貴方を慕っている子

達も信じてるわ。
“ここに誓おう。　己が行いに後悔しないという事を――――――”」

それは……自分自身の力を使う為の言葉。

「そうだよな……こんな終わり方じゃ、後悔だけしか残さないよな……ずっとずっと、たくさんの後悔をしてきたから……そうならない為に……そうだ……俺の誓いは――――――」

そんな後悔を断ち切る為に――――――戦い続ける事。

「俺はここに誓おう……己が行いに、後悔しないという事を――――」

その誓いを、その証を言葉に出して反芻する。

世界を否定せずに、でも肯定もせずに、何かを変えられる存在として居る事……それが……朱然の生きる証、己の存在意義、自身の根底定義。

朱然のもたらす混沌から……何かが生まれる事を願って、その気持ちで何かを残せる事を祈ったんだ。

朱然は……ようやく始まりを取り戻した――――――

「全く、貴方は頑固なんだから……」

背中には、確かに抱きしめられている感覚。

とても懐かしい感触。

泣いてしまいそうになるくらいに。

「……蓮華だって似たようなものだっただろ」

「ふふ、そうね」

「蓮華は馬鹿だよ……魂だけになってまで付いてくるなんて……」

「貴方だって似たようなものじゃない……それに私は貴方の妻ですもの……肉体が滅んでも、私はずっと貴方の傍に居る。

私は自分の勝手で貴方をこんな身体にしてしまった……その事がずっと怖かった。

けれど、こうして貴方の背中を押す事が出来た……それだけで付いてきた意味は十分よ……」

「蓮華……俺はこんな身体になった事は、気にしてないよ……たくさんの身近な死が通り過ぎていく事は悲しいけど……でも蓮華を恨んだり、煩わしく思ったりしてないから……」

「貴方はきっと強くなれるから……時間が掛かるかもしれない、とても辛いかもしれない、けど……自分を信じて……」

「そっか……今度こそ、ゆっくりと休むといい」

「……ええ、お休みなさい、水仙」

「……お休み、蓮華」

――――――ありがとう

消えてしまった蓮華に、心の中で感謝の言葉を送った。

「チッ！　蓮華め、余計な事を――――――だがまあいい……朱然、聴こえているな？　あまり根源を信用するな、アレは味方じゃない。アレはいずれ敵となる。　ついでに術式は発動した、やる事は早めにやっておけ」

そうして、イドは悪態を吐きながら消え、元の朱然へと戻った。

「……痛ぅ」

朱然はそう言って、ネギに負わされた腹の傷を擦り、目を開く。
そこにはイドとなっていた朱然の記憶が在った。
ネギを翻弄し、振り回した記憶が。

「イド……俺の取り込んだもう一人の俺、なのか……？」

朱然は眼を通して儀式場の術式を見ると、イドの言うとおり、大規模忘却魔法は動き出し、止める事は既に不可能。
後はエヴァを別世界へと送るという仕事が残っている。
本当の意味での最終確認をする為に、エヴァには悪いが意志確認の為のちょっとした演技をする。

「もう君は人間だ。　人として普通の平穏を生きる事も出来る。だから――――――やめないか？」

「ふざけるな、そんな問答なぞ無意味だ……」

「別の世界に行くと何時会えるかもわからない」

「それがなんだ！　だったら私がお前を見つけ出せばいいだけだろう！？　それがダメなら別の方法だ！　失敗し続けようが私は諦めん！　絶対にだ！」

「でも……」

「黙れ！　それ以上言えば私は死ぬまで孤独に生きる！　どうだ！　お前の所為で私は不幸な孤独死だぞ！　私の幸せはお前と共にある！　お前が隣に居るから私は幸せだと思える！！　それ以外に何が要る！！」

「エヴァ……」

「お前はまったく……今更この様な事を……私の為に世界を敵に回した気概はどうした！？　お前の力は！　お前の意志は！　その程度かスイセン！？　私を心から愛しているというのなら、もっと無様に生き足掻いて見せろ！！」

「それでいいのか？　エヴァが好きだから……愛しているからこそ、重荷に感じたりしないか？　それが原因で嫌われたとしても……俺に残された時間が一瞬だったとしても……その一瞬を本当にエヴァの為に使っても、良いのか？　そんな俺の独りよがりの我儘でエヴァを困らせないか？」

「フンッ、お前一人くらい……私が抱き止めてやるさ」

「そっか……エヴァの言う通り俺は女々しい奴で、こうやって確認しないと不安で仕方なくてさ」

ハハ、と力の無い笑いをしながら頬を掻く。

「む？　まさか……私を試したなッ？　そうなんだなッ！！？」

エヴァが激昂し、朱然に掴みかかる。

マウントを取ろうとする為に、押し倒そうとしてくるエヴァに朱然は言い、押し倒されるのを防ぐ。

「迷ってた……蓮華と過ごした思い出が無くなってしまうようで……自分が幸せになる資格なんてやっぱりないんじゃないかって……けど、今は誰を一番大切に思いたいかが、胸が痛いほどにはっきりとわかったんだ。

今までたくさんの迷惑をかけた……馬鹿な事もした……でも、それでも俺を思ってくれた……だからエヴァッ、お前が欲しいッ！！」

「ク……ッ、クハハハハハハハ！！　やっとか！！　ああッ、待っていろッ！　すぐにお前を捕まえに行くからな！」

「ああ、俺の方もエヴァと再会できるのを心待ちにしてる。　だから――――」

だから道標を残していくよ――――――

造物主の鍵を持っているなら、例え事なる世界でもその契約は繋

がって朱然を見つける為の手掛かりになるだろう。

――――――本契約

「「――――――また……会おう！！」」

その言葉を最後に、朱然によってエヴァは時空を越え、この世界から消え去った。

次に会えるのは数年後か、それとも数百年後か……それはわからない。

ただ言える事は、いつかきっと出会えるという事象のみを突き詰めた力が働いて、間違いなく何所かの世界で出会える事だけだ。

ならば、来たるべき日に会えるだろう。

憂う事は何もない。

そして、朱然はネギ達へと向き直る。

「シュゼン、お主は既に世界を支える支柱じゃ。　一度その柱となれば、死ぬまで抜け出せはせん。　もうやめよ」

「そうですよ……貴方は僕に負けたんです。

もう、諦めてください……これからの時間を、貴方への謝罪と全てを救う為に使わせてください。　お願いです……」

アリカとネギは言い、ネギはこちらに手を差し伸べる。

朱然は一度、自身の手を見てから、取れるはずが無いのにネギの

手を取る為に手を伸ばす。
それを見て、ネギは微笑む。
自分の思いがようやく朱然に受け入れられたのだと。

だが――――――その手は触れる事はなかった。

ネギと朱然の手は通り抜けた。

「えっ？」

呆けたネギの声。
先程のイドのように、クツクツと笑う朱然。

「残念だが術式はもう止まらないし、世界は紅き翼と英雄達の記憶は消える。　そして、お前は俺を一生救えない。
世界が……何より俺自身がそれを許さない」

朱然の輪廻移行。
それが、死して別の世界へ向かう流転の力。
死ななくては抜け出せないのなら、死ぬ事でそれを成す。

「な、何を言ってるんですか……ッ？　そんなッ、せっかく……ッ、せっかく謝れると思ったのにッッ！！
貴方をッ、■■さんを――――――ッ、ッ！！　名前がッ、名前が思い出せない――――――！？」

自害は造物主の掟で無意識の内に封じられるが、生憎と朱然にはもう一つの死ぬ方法がある。

全ての人間が朱然を忘れた時、朱然は尸解仙の特性として死ぬ。
つまり、朱然は自殺ではなく、世界自身が殺すのだ。

「お前達は俺を忘れ、俺は消える。
大規模忘却呪文によって俺という存在も忘れられるというのならば、俺はこの世界から消え去るしかないんだ」

星の主としての世界の支柱が無くなり、この世界はまたしても世界の危機を迎えるだろう。
だが、アマテルが居る限り、この世界の仕組みを知る者がいる限り、ネギに言うだろう。

「そんなッ!!?　なら、貴方を……救えないじゃないかッ!!
僕は貴方に――――――」

――――――ようやく謝れると思ったのに!!

ネギは星の支柱となる事を選ぶしかない。
魔法世界の住人は支柱には成れないが、そこに唯一の人間であるネギが居る。
ネギの取るべき選択は……全てを救うなどというネギの取る選択はそれで決まるだろう。
大規模忘却呪文が起動し、世界は忘却を始め、それと同時に朱然の身体は透ける。

「ほら……もう、身体の維持が難しくなってきた……結局、お前は救いようの無い人間は救えないんだ。
だからこそ言ってやる……俺に勝ったのなら、お前の救いたいと

いう人類を害する立場に在りながらも救って見せろ……。
そして、思い出せ……思い出して、悔いろ……お前はまず、俺さえ救えなかった事を悔い続けろ……。
世界を救い続け、１００年後に思い出し、俺を救えなかったという絶望にのた打ち回れ……」

――――――俺はお前を絶対に許しはしない。

始めから決められていた死。
手を差し伸べてくる事を考慮して、それを振り払う事を前提とした最後。
かくして戦いは終わる。
不意に、ネギの背後に白き翼の面々と朱然の子供達が現れた。
朱然が消えた事で、維持されていた八門遁甲も解かれたのだ。
そして、白き翼の彼女達は誰一人死んではいない。
ある者は超の造った時間跳躍弾によって未来へと飛ばされ、ある者は朱然の子供達に足止めをされていただけに過ぎない。
だが、ネギが星の使途とならねば、彼女達は今此処で死ぬ。
だからネギは迷うことなく星に挑むだろう。
勝っても負けても、それだけで彼女達をまずは救える。
それだけが、ネギにとっての救いとなり、絶望を始める一歩になる――――――

そうして、朱然は――――――世界から忘れ去られた。

世界は忘れた。
その世界には紅き翼という英雄がいた事を。
その世界には朱然という本来居なかった英雄がいた事を。
それを思い出すのは百年後。
覚えている者は戒めを、新たに聴く子供達はお伽噺として認識するだろう。
世界は続いていく。
日常は無慈悲に進む。
だが、争いは人間がいる限り途絶えない。
それを始める者が居るように、止める者達も現れる。
そこには英雄はいない。
それでいい。
それを望んだ者は、そうなる事を望んでいたのだから……。

最終翼　英雄・紫の麗人（後書き）

いやぁ、いい加減、教授が鬱陶しいので、研究室をサボって一気に書いてしまいました。
そして、ネギま編はこれにて完結でございます。
長かったでござる！
ハッピーエンドでもなくバットエンドでもない。
いや……バットエンドか？
一応、勝負に負けて試合に勝った、そしてただ次が始まるというの終わり方。
言ってしまえば、かなり釈然としない終わり方を、とそんな風に感じて頂ければ成功かな～と思ってみたり……という良い訳ですね、ハイ……。
色々と説明不足もあるかもしれませんが、その辺りはまあ、脳内補完なり、訊いて頂ければ可能な限り返答をしたいと思っています。
気に入らない、という方が居るのは仕方が無いと思いますが、その辺りはＶｉｅｒの諸々の力量不足の結果の問題だと信じたいです……。
新たな新キャラ（？）イドの「根源を信用するな」という意味深な言葉は、この「憑依とか転生とか召喚されるお話」の根幹の部分の伏線にしようと思っています。
まあ、そこまで書く事が出来れば、という問題がありますが＾＾；
ともかく、まだ続く予定の朱然さんが往く新たな世界に御期待下さいませ。
そして、ネギま編まで読んで下さった方、感想をくださった方々、本当にありがとうございます！！
次の世界はアンケートですが、お手数ながら感想の一言へ書いて下さいな～。

1、Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ、Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡのどちらか？
2、魔法少女リリカルなのは（無印）からできればフォースまで？
3、テイルズオブヴェスペリア、グレイセス、エクシリアどれか？
4、とある魔術の禁書目録とか、マジ恋とか、ＩＳとか適当な何かしら漫画、アニメ、ラノベ作品……つまりはその他？

と言ったところでしょうか？
その他に関しては、それなりに話数がある作品だと書きやすいかもです。
因みに、Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏはどんな立ち位置にするかなど書いてもらえると嬉しいかも。

締め切りは……以前投票できなかったと感想を頂いた事も考慮し、ちょっと長めにして今週の日曜日２３：５９分までにします。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ５・Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　忘我戦士（Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ）

という訳で、タイトルの通りＦａｔｅ／ｚｅｒｏに決定いたしました！！

まあ、今やっているアニメでトップレベルのクオリティーを叩き出していますから、ある意味で当然だったのかも？

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ５・Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　忘我戦士（Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ）

また、此処に来た。
また、来てしまった。
世界の果て、世界の始まり、世界の終わり。
朱然自身が根源と呼ぶ、その場所へ。
最後にイドが行った言葉……根源は味方ではなく、いずれ敵と成り得るモノ。
その意味が、朱然には解らない。

「世界はお前を逃がさない」

唐突に、名も無き者は言う。

世界？
何所の世界だ？

「一度赴きし世界」

一度行った世界？
恋姫の世界？
運命の世界？
楽園の世界は……崩壊したから無いはず。
英雄となった世界？

「運命は始まり（ゼロ）へ」

０、零、ゼロ、ｚｅｒｏ。
その単語に引っかかる物語。

俺に過去を変えろと言いたいのか！？

ルクレツィアの死を変えられたはずなのに変えなかった朱然に対する冒涜とも言える所業。

「数ある並列から別の並列の過去」

並列世界の運命の物語……だが――――

朱然は拒否しようとしたが、次に聴こえて来た願いは、朱然の言葉を留めるのには十分な願いだった。

――――あの娘をッ！！

若い男の声だ。

――――あの娘をどうかッ！！

その声は途方も無い苦痛を伴っている。

――――――助けてくれッ!!

「行くか否か？」

根源は言う。

以前は強引に送った癖によく言う……。

だが、この願いは朱然に決意をもたらすには十分過ぎた。

わかった……救おう……自分を犠牲にしてでも血も繋がらない子供の為にふざけた儀式に身を投じたお前こそを、俺は救いたい。

勿論、その娘もだ。

上等だ……始まり（ゼロ）という名の悲劇の物語を、俺が希望（ゼロ）に変えてやる――――――決定しているその流れを、理を覆して見せる。

だから――――――行くぞッ、その世界に！

「往くが良い――――――」

英霊召喚の魔法陣が現れ、朱然はその魔法陣の中心へと進み、紫の粒子となって消えた。

「――――――我等と元を同じくし、別の可能性に改変する異端の者よ」

ぞわり、と。

世界という名の総体は蠢く。

「――――――その異端は果たして希望となるか、それともまた失敗するか……」

そして、その最後の言葉が朱然へと届く事はない。

Ｐｒｏｌｏｇｕｅ５・Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　忘我戦士（Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ）

一応、アンケートの結果はこの通りになりました。
たくさんの投票、ありがとうございました！

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　２２
Ｆａｔｅ／ＥＸＴＲＡ　４
リリなの　１８
ヴェスペリア　６
グレイセス　２
エクシリア　３
とある魔術のインデックス　６
まどか☆マギカ　１
ＩＳ　６
緋弾のアリア　１
マジ恋　４
マヴラヴ　１
カンピオーネ！　２
ハイスクールオブザデッド　４
１１ｅｙｅｓ　１
デモンベイン　１
ジョジョの奇妙な冒険　１
ペルソナ４　１

こんな感じでした。
最初はなのはがトップでしたが、次第に追い付かれ、おいぬかれてしまいました。

タイトルを少し変更しました。

Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ（狂戦士）→忘我戦士（Ｂｅｒｓｅｒｋｅｒ）

ＡＣＴ．１　英霊召喚

薄暗い広大な地下。
日の日差しの届かない、そのジメジメとした腐臭漂う蟲蔵で聖杯を求めた戦い――――聖杯戦争を行う為の儀式が行われていた。
不気味さを漂わせる老人と若者は、本来、聖遺物を置く為に造られた簡易祭壇の前で儀式を始める。
だが、そこには本来、用意されるべき聖遺物は捧げられていなかった。
入手できなかったのか、はたまた別の理由なのか。
それは儀式が始まった以上、特に気にする事でもないだろう。
問題は、聖遺物が無い場合、召喚者と似た性質の英雄がランダムに選ばれ現界する事だ。

「告げる――――汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。　聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うのならば応えよ――――」

――――あの娘をッ！！

それは願い。
好きだった人と自分では敵わないと感じた奴に対し、身を引いた者が抱いた願い。

「誓いを此処に……我は常世総ての善と成る者、我はこの世総ての悪を敷く者――――――」

――――――あの娘をどうかッ！！

即席の魔術師と成る為に埋め込まれ、身体を内側から喰い潰す刻印蟲に喰い荒らされながらも、その激痛に意識が途切れ途切れに成りながらも詠唱を止めない者。

その顔の半分は引き攣れ、髪の色は抜け落ち、肌は蒼を更に通り越し土気色。

左腕と左足の感覚は既に正常とは程遠い。

寿命さえも、加速度的に衰えているだろう。

それでも好きだった人の娘を、自分の家に来てしまったが故の不幸から解放できるならばと間桐雁夜は己の全てを賭けて戦う決意をした。

「されど汝は……ッ、その眼を混沌に曇らせ、侍るべし……ッ！汝、狂乱の檻に囚われし者、我はその鎖を手繰る者――――――」

――――――助けてくれッ！！

爆発的な魔力が場に集中して行く。
それに感応するかのように更に激しく身の内をのたくり、噛み、削る刻印蟲を抑えつけながらその救いを得る為の手段を手繰り寄せる。

「汝三大の言霊を纏う七天、抑止の輪より来れッ、天秤の守り手よ――――――ッ！！」

半ば最後は叫ぶように、過去の英雄を現代へと現界せしめる事に成功する。
召喚の瞬間に吹き荒れた魔力によって起こった突風によって眼を開けられなかったが、閉じた瞼の先には確かに自分とパスの通じた英霊が居るのを感じる。

「おお、おお、良くやった雁夜よ……よもや本当に呼び出す事に成功するとは――――――」

煩わしい祖父の声は不意にそこで止まる事になる。
雁夜はそれを不審に思い、瞼を開こうとした。
だが雁夜はまだ自身の英霊を見る事はできなかった。
何故なら召喚とはまた別の突風が吹き抜けたからだ。
それから少し遅れて、背後の離れた壁へと、ぐちゃりという粘着質なモノを叩きつけたような音が聴こえ、振り返って雁夜はソレを見た。

「……あ？」

雁夜の間の抜けた声が漏れた。
なぜならば、間桐家の絶対……誰も逆らう事を許されない化物だった、あの間桐臓硯が壁に叩きつけられたカエルのように壁に張り

付いていたからだ。

「死ん、だ……？」

「ぬ、うぅ……よもやバーサーカーがこれ程、制御できぬものとは思いもせんかった……」

ギチギチと臓硯の身体を構成する虫達が集まり、元の身体へと戻っていく。

雁夜は平静に戻り、内心で落胆する。

どうせなら、今のでくたばってくれれば良かったのに――――――

「雁夜よ、一先ず令呪を使い、こ奴を縛れ……使えぬ駒で戦えるほど甘くはないぞ？」

人型に戻った臓硯は言う。

「令呪を持って命じる――――――」

雁夜は己の背後に居るであろう英霊に向かい、令呪へと意識を集中させ発動させようとしたところで予想外の事が起こる。

「それは困るな」

澄んだ良く通る声だった。

だが、性別は判別できない。

男よりは高く、女性よりは低い。

そんな中性的な声だったからだ。

「「？！」」

臓硯と雁夜は驚愕する。

確かに意図してバーサーカーのクラスを呼び出し、狂化で理性を奪われたはずの狂戦士が言葉を発する？

そんな事、有り得るはずがない。

「取り敢えず、お前には死んでもらう」

雁夜は自身に向けられた言葉だと思い、英霊に背を向けたまま硬直する。

英霊は背後の空間より長い柄に丸まった鎌のような金剛石の刃の付いた武器を取り出し、その名と共に臓硯の方へと恐るべき速さで接近し、2度切り裂いた。

その鎌剣の名前を雁夜は知らない。

魔術師の家系とはいえ、間桐は蟲使い。

更に雁夜は間桐の家を出て一般人として過ごしていた事と、魔術関連の話を避けていた為に殊更疎い。

「馬鹿、な――――――」

臓硯はその言葉を最後に、本当の意味で死ぬ事と成る。

その鎌剣の名は蛇の支配を刈る者。

屈折延命という不死系の特殊能力を無効化する神聖スキルを有し、この剣でつけられた傷は、自然ならざる回復・復元ができなくなる。

一撃目でその効力を発揮し、二撃目にその首を鎌で刈ったのだ。

何とも呆気ない幕切れ。

一年を通し、刻印蟲の苗床として耐え抜ぬき、更に厳しい勝率の戦いを勝ち抜いてようやく手に入れられると思っていたものに、呆気なくも今一歩で手が届く。

最大の障害が取り除かれた今、雁夜は考える。
このまま逃げてしまえばいいのではないか？と。
だが、自身の呼んだ英霊は願いがあるからこそ召喚に応じた。
つまり逃げだせば、殺されるかもしれない。

「おい……おい、お前」

雁夜は英霊の声で思考に没頭していた自分を呼び戻す。
それと同時に自分を殴りたくなった。
令呪２つを使って自分と桜を害さないように戒め、この場から一歩も動くなと命じれば良かったと。
それと同時に思う。
振り返った瞬間に、まずは令呪を使い動きを封じる――――――！

「お前が俺のマスターか？」

「令呪よ――――――」

振り返りざまに令呪を発動させようとして、ようやく直視した英霊の姿。
その姿はやけに神々しかった。
自信に満ちた目、首のすぐ後ろで束ねられた薄紫の美しい長髪、白い肌に瑞々しい唇。
背は雁夜と同じか、少し低いくらいで１７０より少し高いと見てとれる。
その身を包むのは黒のラインに白い蓮の刺繍が入り、動きやすくなるように改造された紫のパオ。
雁夜は中華風の服、としか解らなかった。
その風貌は明らかにヨーロッパ系なのに、その中華風の服はとてもミスマッチしていると雁夜は思う。

「お、女？」

令呪での命令を忘れ、つい口から出たのはそんな言葉だった。

「残念だが男だ……で、お前がマスターで良いんだな？」

英霊は言われ慣れているのか、雁夜の疑問に即答し、少し苛立った声で雁夜に詰め寄る。

本人の言を信じるのならば男のはずなのに、女という物を意識させる美貌。

よくよく見てみれば、確かに胸などは無いのだが、肩はなで肩。パオという衣装が身体のラインをわかりにくくさせてはいるものの、男にしては腰や足も細い。

雁夜はそっちの気が無いにも拘らず、つい胸の鼓動が高鳴るのを感じた。

「あ、ああ、間桐……雁夜だ……」

その天然の魅了の魔術を振り払い、雁夜は自分の名を名乗る。

「フン、間桐か……まあいい、１つ答えろ。お前は間桐桜を助けたい……それだけの為に俺を呼んだ、それで間違いないな？」

雁夜の体感温度が一気に下がった。

目の前の英霊は、何故自分の望みを知っているのか？

読心スキルでも持っているのか？と警戒をする。

「間違いない……俺は桜ちゃんを助けたい」

ならばと雁夜は本心を言う。

「ならいい……いきなり最大の障害だった臓硯を殺した事で目標達成だが、聖杯戦争はどうする？　マスター？」

「そんな事知るかッ！　参加者で潰し合ってればいい！」

雁夜は聖杯（そんなもの）には興味が無いと叫ぶ。

桜を救えた事で、聖杯戦争に参加するという理由が無くなった。

後は桜を葵と凛の下へと送り届けて終わりだ、と雁夜は考えていた。

「俺はお前の願いを辿ってここに来た。　だが既に目標は達せられた訳だ……自分で来てみたは良いものの、俺も聖杯には興味が無い。

だが3度目があるのも困るんでね……聖杯を破壊して帰らせてもらう」

自身の呼び出した英霊は忌々しげに聖杯を語る。

それを見て、雁夜は思う。

このまま聖杯戦争を逃げる事もいい。

だが……できるならば、桜をこんな目に遭わせた遠坂時臣の鼻を明かしたい。

自身が未だに未練を持っている事を否定はしないが、あまりにも葵と凛と桜が報われないから、その元凶である遠坂に勝って、その魔術師然とした考えが間違いだという事を思い知らせたいと思ってしまう。

「……できるなら、俺は遠坂時臣に勝ちたい」

「何故？」

「桜ちゃんは葵さんと凛ちゃんと一緒に居る事が本当の幸せだと、そう思うからだ。　遠坂時臣は彼女達を不幸にする。
思い知らせるんだ……彼女達を巻き込むなと！」

「ふむ……そんな理由じゃ、俺はお前に手を貸せないな」

腕を組み、右手を顎の下に沿え、右目を瞑って雁夜の新たな願いを否定する。

「何故だ！？　俺の願いを聞いてお前は来たんだろう！？　ぐぅッ！？」

己の願いを否定された為に激昂し、英霊へと詰めかかろうとしたが、雁夜の感情に刺激された刻印虫が身体を暴れ回り、思わず膝をついて蹲ってしまう。
それを見降ろしたまま、英霊は言う。

「恐らくだが……その遠坂時臣は俺の嫌いな魔術師然とした男なんだろう？」

「……ああ」

苦痛を押し込めたまま、雁夜は英霊の遠坂時臣像を肯定する。

「思い知らせるというのは、まあ賛成だが、まずその桜ちゃんとやらを返すのは止めた方が良い」

「な、何を言っている！？」

雁夜は英霊の言っている事が理解できなかった。
ようやく救えた桜を、何故母親である葵の下へ返してはいけないのかと。

「遠坂時臣は、恐らくこの聖杯戦争でお前に負けたとしても、魔術師として生きる事を変えない男なんだろう？
なら、その魔術師としての生き方を根本から変えなければ、聖杯戦争後にまた別の魔術師の家に養子に出されるだろうさ」

「！！」

英霊に示唆された通り、遠坂時臣は根っからの魔術師。
魔術師の中の魔術師を体現したような人物だ。
桜をそのまま返してしまえば、英霊の言うとおり今度は自分では手の出しようが本当にない魔術師の家に養子に出されてしまうかもしれない。
そうなっては自分の全てを賭けて助け出そうとした意味すら無意味だと思い知らされた。

「なら……なら一体どうすればいい！！？　どうすれば彼女達を救えるんだ？！」

雁夜には思いつかない。
だから英霊に……伝説に残るような、一般人の範疇に入らないような特別な者に雁夜は右手だけで縋る。
その願いに比例するように、雁夜に掴まれた英霊の服に皺がよる。

「……やれやれ。　前回とはまた違った意味で、今回のマスターは手が焼けるみたいだな……」

嘆息した英霊は、縋り付いた雁夜の右手の指をゆっくりと、一本づつほどきながら言う。

「俺が考え付くのは1つだけだ。　遠坂時臣を魔術師として生きられない状態にする事だ」

全ての指を解かれ、座りこんだ雁夜は英霊を見上げて問う。

「つまり……？」

「遠坂時臣を聖杯戦争の混乱に乗じて殺すか、魔術刻印を破壊する事だよ。

まあ、その手のタイプは自分がダメになっても子供に押し付けるタイプのようだけど。

大方、その凛という娘に遠坂を継がせ、桜という娘を今と同じように別の魔術師の家に養子に出させ、魔術師として大成させようとするだろうさ」

そもそも、魔道の加護を受けなかったほうには、その血に誘われた怪魔が災厄をもたらし、魔術協会がそれを発見すれば嬉々として保護の名の下にホルマリン漬けの標本にしただろうから、あながち間違いという訳ではないんだが、と朱然は補足する。

それに対する対策として、間桐のコネでも何でも使って、雁夜が信用できると思った魔術師なりを師としてきちんと身を守れる程度には魔術を覚えておかなくては解決はできない、とも更に補足説明する。

「……ッ」

だが、後の方の話は耳に入らなかった。

前半の時臣を殺すという選択肢ができたという事に、雁夜は思考を埋め尽くされる。
遠坂時臣を知り、その魔術師として完成された強さを知るからこそ考え付かなかった方法。

「殺す……俺が、時臣を殺す？」

反芻。
遠坂時臣を、自分が殺す。
敵わないと思い、身を引き、常に劣等感を刺激される事となったその元凶を……殺せる？
雁夜は目の前の英霊を見上げる。
先程は容姿にばかり目がいったが、よくよく見れば膨大で規格外な魔力を保有している事がパスを通じて思い知らされた。
英霊ならば、今に生きる魔術師程度、簡単に殺す事が出来るのかもしれない――――雁夜は少し考え、意を決した。

英霊は雁夜に手を差し伸べ――――

「俺は……俺は時臣を殺す」

――――雁夜は英霊の手を掴む。

「間桐雁夜だ……俺はお前を信じたい」

改めて、雁夜は英霊に名乗る。

「朱義封、お前の願いを叶え、聖杯を破壊しに来た」

聖杯を求めず、己の願いの為に、朱然と雁夜は不和を抱えたまま

動き出す――――

ＡＣＴ．１　英霊召喚（後書き）

という訳で、以前から考えていたバーサーカークラスに召喚と相成りました。
よくよく朱然さんはバーサーカーとのクラスに縁がありますな～。
次回、朱然さんの大まかなステータスを書きたいと思います。
きちんとしたステータスのみのものは、進行上少し話が進んでから書こうかと思います。
ではこれからもよろしくお願いいたしますノシ

ＡＣＴ．２　詳細確認

「俺はバーサーカー、お前の指示に従う……だから……時臣を……ッ」

蟲蔵を出て、間桐の屋敷の一室に入って、雁夜は意の一番に提案をする。

その鬼気迫る顔は、余程余裕が無い事を窺わせる。

「はいはい、その前にお前の身体と桜ちゃんとやらの身体を治療するからな」

「そんな事が出来るのか!?　だが……」

蟲を植え付けられたが最後、適応できなければ死ぬ。

適応できたとしても刻印蟲は肉体を喰らい続け、宿主を強引に生かすのだ……加速度的に寿命を消費させながら……。

当然、刻印虫を引き剥がすという事は、宿主の死を意味する。

それとは別に、雁夜の疑似魔力回路はその刻印虫自体の事を指す。

もしそれをできたとしても、雁夜はマスターとしての資格を失ってしまうのではないか？と、それがバーサーカーの策略ではないか？と、疑って掛かるのを何とか抑える。

元々は桜を救う事が目標であり、時臣を殺すというのは新たな生まれた目標なのだ。

感謝こそすれ、疑うのは間違っていると、そう雁夜は思う。

「ともかく、その娘と一緒にお前の蟲も滅する事は決定事項だ。

俺に関するあれこれと作戦会議はそれからだな」

「おじさん……この人誰？」

「この人は……」

雁夜に連れられてやってきた桜が、朱然を見て雁夜に尋ねる。

朱然は雁夜が何も考えていなかった事に溜息を吐き、桜の目の前でしゃがみ、同じ目線になったところで口を開く。

「こんにちわ、可愛いお嬢さん。　私は朱然、この雁夜おじさんの知り合いで、少しの間お世話になるつもりだよ。　よろしくね？」

孤児の子供達の親代わりとしての対子供の接し方を実践する朱然。

「お姉さん、綺麗だね……」

「ありがとう、でも私は男だからお姉さんじゃないんだよ？」

朱然は笑顔を浮かべたまま、柔らかく訂正すると桜は少し驚き、目を見開いた。

そんな桜の頭を朱然が優しく撫でると、桜はくすぐったそうに目を瞑る。

「それでバーサーカー、どうやって俺達を治療するつもりだ？」

雁夜は朱然に問う。

治療と言っても既に虫によって寄生され、同化されているような

状態の自分達をどうやって治療するのだろうか。

「普通に宝具とか魔法で……あ」

魔法と言って、朱然はこの世界で魔法という名称は御法度だった事を思い出し、失敗発言にマヌケな声出てしまった。

「魔法?!　そんな馬鹿な?!」

魔法――――――単純に言えば、この現代で再現できない、特殊な技術を指す。

幾ら雁夜が魔術に関する知識が乏しいとは言っても、それくらいは知っている。

つまり、目の前の英霊は五人しか居ない魔法使いだとでも言うのだろうか?

いや、そもそも目の前の英霊のクラスはバーサーカーであってキャスターですらない。

魔術を使えるという以前に、理性を持っていること自体が可笑しいのだ。

雁夜の事情を知っている事も読心が出来るにしては嫌に詳し過ぎる。

本当の意味で得体が知れない。

触媒無しでそこまで異常な英霊を呼び出せる確率など、果たしてどれ程の低確率だったのだろう?

「ああ、この世界だと魔術なんだっけ?　う~ん、天翼で“分断”した方が手っ取り早いかな……?」

そう言って取り出したのは、黒に銀の装飾が施された棒のようなものだった。

どうしてようなものと表現したかというと、柄の部分は棒のように長いのだが、その先から柄の三分の一まで同じく黒に銀の装飾が施された何かが付いているように見えるのだ。

「それは……宝具なのか？」

「ああ、そうだよ。　名前は天翼という」

そう言ってところでガチンッ！という音と共に、その形容できなかった部分が展開、両刃がまるでその名のように天に翼が羽ばたくように広がった。

鎌を見た雁夜は慌てだす。

臓硯を殺したのは鎌で、形こそ違えどとても治療できるようには見えない。

「待て！　本当にそんなもので桜ちゃんを治療できるのか？！」

雁夜は朱然の前に立ちはだかり、万が一に備える。

呼んだクラスはバーサーカーなのだから、狂っているようには見えなくても何所かオカシイのかもしれない、と思った為だ。

「それで、私を殺すの？　良いよ……そうすれば、もうあの部屋に行かなくて良いから」

「桜ちゃん……ッ」

雁夜は朱然に背を向け、桜を抱きしめる。

幼い桜が、凶器を見て平静に自分を殺す事を受け入れる……そんなのは有ってはならないと雁夜は思う。

子供はもっと無邪気で、我儘で良いはずなのに、自分の家の所為

でこんなにも歪になってしまっている。
願わくば、もっと外の世界を見せたかった。
願わくば、葵と凛にもう一度会わせたかった。
願わくば、些細な幸福を与えて欲しかった。

「まあ、まとめて一緒にやってしまうのは手間が省けるか……天翼ッ！！」

朱然のその一撃を察した雁夜は目を瞑り、桜をより強く抱きしめる。
せめて一秒でも桜を長生きさせられればと。
だが同時に雁夜は思ってしまう。
自分は男だし、生きられる時間もあと僅かだが、蟲に犯されたこの娘は、恋をする事すら難しいだろう。
例え、それを理解する者が現れたとして、果たして何所まで普通に生きられるのか。
この苦しみから死を以て解放されるのなら、それもまた救いだったのかもしれないと思ってしまう自分の情けなさに後悔しながら最後の時を待つ。
朱然はその真名を以て、真の力を解放し、雁夜と桜に鎌は振り下す。
しかし、その刃は傷を付けるどころか、血の一滴さえ流させなかった。
代わりに背後の壁に臓硯の時と同じく、無数のこの世には有り得ない形の異形の蟲が潰れ、体液とともにこびり付いていた。

「これ……は……」

雁夜は少しして、自分の身体に確かに居た刻印蟲の存在が消えた事を感じ、目を開いた。

そこで目に飛び込んできたのは壁にこびり付いた蟲。
それを見て、朱然の言っていた事は本当だったという事を理解し、桜から離れた。

「ま、一度やった事だし、失敗なんて万が一にもないからこれで大丈夫だろう」

雁夜から向けられている疑問疑惑を余所に、朱然は宝具で雁夜と桜に巣食う蟲達を本当に引き剥がしたのを確認すると、天翼を何所かに消して微笑んだ。
しかし、それまでに受けた傷――――――桜の純潔や間桐の魔術に適した身体に変える為に変質した髪と瞳の色、雁夜の身体の不全は時間が経ち過ぎて治す事はできなかった事だけが悔やまれた。
だが、確かに間桐という名の呪縛から解放された事は喜ぶべきものだったのだろう。

「さて、治療も済んで、桜ちゃんもお昼寝してる。そろそろ俺自身の事とこれからの事を話し合おうか……」

場所は変わらず間桐の屋敷の一室。
朱然を召喚した時間から既に1時間は経過している。
時間は15時。
窓の外からは傾いてはいるものの、日の光が窓の外から差し込んでくる。
雁夜はソファーに座り、その対面に朱然が腰を下ろし、2人は用意されていた紅茶を啜る。

この紅茶もだが、少し遅めの昼食も雁夜の目の前の英霊が作ったものだった。
冷蔵庫に備蓄されている食材をふんだんに使った一般家庭料理だったが、やけに美味い料理で、英霊が作ったなど未だに雁夜は信じられない。
それもバーサーカーが、だ。

「ああ……」

色々な意味で驚かされっぱなしの雁夜はソーサーに紅茶カップを戻し、半ば呆けたように相槌を打った。

「まず、雁夜。　俺のステータスは確認したか？」

「え？　あ、いや……まだだ」

「ならまずは確認してみてくれないか？」

雁夜は促されるままに、己の英霊のステータスを見て驚愕する。

「な、なんだこのステータスは！？」

そう、驚愕だ。
驚くべき程に……己の呼んだ英霊のステータスは低かった。

真名　朱然
属性　混沌・善
筋力　Ｄ
魔力　Ｄ
耐久　Ｄ

俊敏　Ｄ
幸運　Ｃ
宝具　ＥＸ

宝具、幸運以外のステータスが軒並みＤランクしかないのだ。
これでは他のサーヴァント……キャスターにですら簡単にやられてしまうではないか。
幸運はＤではないが、Ｃランクで焼け石に水のようなもの。
唯一ずば抜けているのは宝具の欄で、ＥＸランクという所のみが良い所だと言える。

「低過ぎる！　こんなんじゃ、アイツの……時臣の英霊どころか、他の英霊にさえ勝てないじゃないか！」

触媒も無く、この世界で無銘の英霊、しかもその格の低い英霊を狂化させてステータスを英霊本来の上限より引き上げるクラスなのに、狂化していなければその低いステータスも納得できる低さだろう。

そもそも、ステータスを変動させる要素には土地、知名度、マスターの魔力の３つがある。
朱然の召喚に適した土地は中国がベストだが、ここは日本なので若干と言ったところ。
知名度は中国ではそれなりに有名だが日本ではあまり有名ではない。
マスターの魔力は魔力回路の本数はそれなりだが、朱然の星を呑み込んだ最盛期とも言える時の性能に近づくには、如何せん雁夜の供給できる魔力自体かなり厳しい。
もっとも雁夜は急造の魔術師であるにも拘らず、魔力量は常人よりも十分過ぎるほどに魔力を生成する能力はあるのだ。
本来のバーサーカーを呼び出し、聖杯戦争終盤まで勝ち残れたの

も己の身体と精神の全てを犠牲にして絞り出した、ということ以外にも潜在的に魔力量が多かった事が挙げられるだろう。
が、如何せん朱然の本来の性能を出すためには雀の涙程度という他は無いのだ。
それとは別に、朱然自身が自らに吸血衝動を抑える為の封印を行い、昼に召喚した事もあった事もステータス低下の一因となっていたのだろうが、もし夜に召喚していたならば、大方の魔力は大聖杯が肩代わりするとして、朱然の今の魔力量を通常時８００と仮定し、約２．５倍以上……最低でも２０００。
朱然自身が封印を施さなければ、最悪3倍の２４００。
夜の封印状態の場合で8割を肩代わりされたと仮定しても、２００は魔力を持って行かれたことだろう。
因みに通常時でも雁夜の魔力量は刻印蟲があって５０、刻印蟲を取り除いた今となっては、魔力供給量は２５と言った所が良いところだろう。
通常の平均とした魔術師が２５ほどだと考えれば、雁夜は魔術師としては魔術回路さえ何とかなれば、マスターとしての機能は十分に果たせていると言えただろう。
因みに遠坂凛は５００、衛宮士郎は２０程。
以上の数値から換算すれば、召喚時期を昼にしたのは実に運が良く、やはり夜の朱然を呼んだところでは即座に雁夜の魔力が枯渇していただろう。
サーヴァントが呼ばれた時点でステータスは上限を決定され、後は保有スキルや宝具の特殊能力などで能力を補強でもしない限りは、ステータス変動はまず起きないのだから。

「雁夜、スキルの方はどうなってる？」

「スキル？」

「バーサーカーのクラススキルと俺自身が持っているスキルに決まってるだろ」

朱然はやれやれというジェスチャーをして、雁夜をせっつき、せっつかれた雁夜は直ぐにスキルの欄を確認する。

「なんだ、この馬鹿みたいに多いスキルは？」

マスターである雁夜のステータスを、朱然も雁夜の意識を介して確認する。

そこには以前から持っていたスキルが並んでいるのを確認するが、見慣れないスキルも幾つか存在しているのが見て取れる。

以前にあった体質改造：Ａのスキルが長い間取り込まれてしまった事で完全に馴染み、この世界に来た事で他種混合：Ａとして認識されてしまったようだ。

魔法：Ａはこの世界では魔術なので魔術：Ａに変わっている。

そして、もう一つ、この世界で追加されたスキルがある。

Ａｒｃｈｅｔｙｐｅ（アーキタイプ）：Ｅａｒｔｈ（アース）（偽）。

これは名前こそ違う物の吸血姫が持っていたスキルと同系の能力のはずだ。

恐らく、ガイアと繋がりを持った為に保有する事となったのだろう。

しかし、このスキルは発動していないようだ。

何かしら発動条件があるのだろう。

ただ、ギルガメッシュに対してこのスキルはあまり期待できない。

何故なら、相手より1ランク上のランクに自身のステータスを引き上げる物だが、菌糸類の神様が何所かで言っていたように、ギルガメッシュはその保有している武装が破格なので、相性が悪いのだ。

それに加え、他種混合という弱点に対する宝具を出されると明らかに後手に回らざる負えない。

「他種混合？　吸血鬼だと？」

この世界での吸血鬼は真祖と死徒の２種類があり、死徒と言えば、大方が大体が災害として刈られるような存在だ。

吸血鬼の在り方については、此処で語る意味を成さないので割愛する。

能力的にはピンキリだが、少なくとも人間の寿命では計り知れないほどの長い命を生きていれば、確かに多数のスキルを保有している事も納得できなくはない。

むしろステータスの低さが異常なのだ。

そして、朱然の宝具はＥＸ。

ステータスは他のスキルによって補える。

ならばむしろ、自分の魔力量でバーサーカーを完全に維持している事こそ僥倖だろう。

時臣がどんな英霊を召喚するかを雁夜は知らないが、宝具がＥＸの英霊など軽々しく呼べはしない事を幸運なのではないか？と前向きに思う事にした。

次に宝具の欄をみた雁夜は目を見張る。

本来、英雄の宝具は単一。

２つあれば例外。

３つであれば破格。

それ以上は異常だろう。

だが、朱然の持つ宝具は、３つという破格さ。

その宝具の効力を見聞きすれば、異常という言葉に尽きるだろう。

まず８つで１つの八卦八武装（はっけはちぶそう）。

一つ一つのランクは低いが、これだけで相手は朱然のクラスを当てる事は至難になるだろう。

次に星との接続端子にして、魔力供給を可能とさせる魔力炉心、造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）。

の宝具は間桐雁夜が魔力枯渇によって死ぬ事の無かった一因の最大の理由の一つだ。

元来、サーヴァントはマスターを介してでしか魔力を得られず、単独行動スキルがなければマスター不在で行動すらできないのに、朱然のこれは地球を滅ぼさない限り、魔力供給が無制限だと言う事を意味する。

コレを反則と言わずして何と言うのか？

そして最後が幻想工房（ミスティック・コレクション）。

これまでに朱然が造り、無造作に様々な物を突っ込んできたために宝具として格が上がった朱然が以前に使っていた工房や空間倉庫自体が宝具と化したもの。

英雄王、ギルガメッシュの王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）の劣化宝具だとでも思えば良いだろう。

この中には大神宣言（グングニル）や名を斬る刀（なまえきり）の刃などのその他宝具が一括収納されている事が感じられる。

正面から幻想工房（ミスティック・コレクション）と王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）を撃ち合えば、その質も量も幻想工房（ミスティック・コレクション）負ける事は間違いない。

この時点で雁夜は宝具を多数持つ朱然が負ける事はそうそう無いだろうと思うが、朱然はこれから現れるであろうギルガメッシュを知っているが故に、油断はできないと気を引き締める。

因みに朱然は英霊達の真名と宝具のみを知っていて、これからどうなるのかは一切解っていない。

その辺りの情報は雁夜に教えると要らぬ誤解や混乱を招くと判断した朱然は、雁夜に聞かれるか、必要な状況になるまで内緒にしておく事にした。

それが雁夜の疑心を招く事になろうとも、だ。

「正確には、吸血衝動を持つ吸血鬼の特性を持ってるというだけの人間だけどね」

朱然は何所か妖艶な笑みを浮かべ、雁夜はまたしてもドキリと鼓動を跳ね上げた。

「まあ、その辺りは吸血鬼みたいなもので覚えておく……それで、これからどう動くんだ、バーサーカー？」

「ともかく、今夜は様子見をしておこうか……といっても使い魔系の魔の魔術は知らないから、少し離れた場所から遠坂邸を見張ってみようかな、と。

アインツベルンはまだ日本には来ていないだろうし、まずは遠坂の屋敷だけで良いだろうさ」

「わかった、俺は桜ちゃんと此処で待ってる。令呪が必要になったらパスからの念話で言ってくれ。

直ぐに発動させる」

「よし、今夜の方針は決まった。時間まで夕食の買い出しと夕食でも作っておくかな……む、この格好は流石に浮くか……」

そう言って朱然は自分の服に手をかけ、服を脱ぎ出した。

「待て！　なんでいきなり脱ぐ！？」

「この目立つ格好で買い出しに行けと？　そんな羞恥プレイはお断りだよ、マスター」

そう言って、朱然はパオを脱ぎ捨てた。

否応無く雁夜の目に飛び込む朱然の裸体は、男にしては華奢に見えるが、無駄な贅肉の無く、筋肉も衣服の上からではわからなかったが、適度に絞られた見事な肉体美を体現している。

更には、英霊と言うだけあって、女性のように白く滑らかな肌には、よくよく見れば、うっすらと数多の傷がある事が見て取れる。
中国の三国志を戦い抜いた英霊だというのだからそれは当然の事なのだろう。
それとは別に、雁夜は思う。
男なのに何で一々仕草が女っぽいんだよ――――――!!

「ん？　どうした？」

そんな事を思っていると、何所からともなく取り出した黒のタートルネックとジーパンを着て、最後に眼鏡をかけた朱然に声をかけられ、雁夜は正気に戻る。

「……なんでもない」

少しムスッとした雁夜は、朱然へと少し間をおいて答える。

「ああ、なんだ――――――まさかとは思うが、俺に劣情を催し――――」

「する訳ないだろうがッッ!!」

朱然の勘繰りに対し、半ば反射的に怒鳴り返す雁夜。

「まあ……俺は気にしない。　その手の視線は何時も身に受けていたしな。
例えマスターがそっちの気があろうとなかろうと、俺は気にはしないさ……」

「だから……ッ！！」

雁夜が弁解をしようとした所で、朱然は黒いマフラーを首に巻き、先程までの何所か妖艶さとはうって変わって、真剣な表情で今夜の献立をブツブツと呟きつつ外へと向かった英霊を見送った雁夜はドッとソファーに身を沈め、目を瞑った。

なんだかんだで自身の召喚した英霊は当たりなのだろう。

だが思ったよりもフレンドリーで気さく、料理が上手く、何所か家庭的……いや、家庭的というよりも所帯染みていて、たった今、人をからかう悪癖がある事を知った。

英霊だって、昔は人だったのだし、人生があれば、性格もあるのだろう。

その辺りは解らなくはないが、今は確かに英霊なのだ、という事を忘れてしまいそうになる。

雁夜は先程のやり取りに疲れ、そのまま己の英霊が戻って来るまで眠りに落ちた。

「ふむ、前は碌に散策もせずにいたからな……」

朱然は白い息を吐きながら、商店街を悠々と歩く。

前に通った時は１０年後の真夜中だったので、シャーターが降りている場所だとしか思わなかったが、昼間に来てみると地方都市にしては活気があるように見受けられる。

「そこのお嬢ちゃん！　なんか買っていかないかい！？」

八百屋のおじさんが、朱然を見て声をかける。

朱然は丁度良いかと思い、八百屋に足を向けて、所狭しと並ぶ色とりどりの野菜を見て、どれが一番鮮度が良いのかを吟味し始める。

「お嬢ちゃんは外国の人かい？」

「ええ、昨日から友人の家にお世話になっています」

お嬢ちゃんという部分には触れずに、何となく会話をする。

「それにしても日本語上手いねぇ……俺は、さんきゅー、くらいしか喋れなくてなぁ……」

「外国なんて、挨拶とお礼と身ぶり手ぶりで何とかなるものですよ」

「そういうもんかねぇ？」

「そういうもんですよ？　ところでおじ様のお勧めの野菜はなんですか？」

「おう！　お嬢ちゃんみたいな美人におじ様なんて言われるのは嬉しいねぇ！　今日は出血大サービスだ！！　どんどんサービスしちまうぜ！」

その後、八百屋のみならず、精肉店や鮮魚店を荒し回った朱然は、それぞれの店主がその奥様方にシバかれるまで騒ぎの中心で悠々と夕食の献立に必要な材料を吟味していた。

なんだかんだで現代に何事も無く溶け込んでいく朱然だった。

ＡＣＴ．２　詳細確認（後書き）

ある程度は原作通りに沿っていく予定です。
まさかのＡｒｃｈｅｔｙｐｅ：Ｅａｒｔｈ（偽）スキル、でも発動はしていない。
発動条件は……つまり、わかるな？

次回は茶番劇とセイバーＶＳランサー介入直前までの話になりそうかも。

桜と雁夜の蟲駆除のシーンを加筆しました。
男にクビレは無理では？とのご意見を頂いたので、その周辺を修正しました。

ＡＣＴ．３　戦端開始

時は深夜を過ぎ、夜天に輝くのは満月。
他のサーヴァントとマスターが揃っているのかは知らないが、間桐の魔術結界は臓硯が仕掛けたものであり、引っかかった者は肉食蟲達に集られて骨さえ砕き喰われるらしい。
仮に逃れたとしても、その蟲達が生成する数十種の猛毒によって速やかに殺すとか。
もっとも臓硯が死んだ後に結界の維持が不安定になったようなので、朱然が新たに仙術によって八門遁甲を仕込んだ。
以前に白き翼を足止めした時とは違い、捕えたものを滅殺する為だけの空間だ。
獄炎渦巻く地獄、氷雪吹き荒れる荒野、雷鳴走る雷雲、風刃舞う嵐、光線降り注ぐ天界、闇に包まれし暗黒、激動する地脈、剣撃墜ちる錬鉄場。
どれも入ってしまえば、死ぬまで出てくる事はできないだろう殲滅空間。
固有結界に近い、位相空間を利用した攻勢結界とも言うべきモノ。
キャスターのクラスでも成し得るかどうかわからないが、朱然には造物主の掟という無尽蔵とも言うべき魔力炉と、仙人という空間操作に長けたスキルがあるからできる芸当だ。

「で、いきなり暗殺者（アサシン）のサーヴァントを見つけてしまった訳だが……」

どうしたものかと間桐の家の屋根から、少し離れた場所にある住宅の茂みの一角を見ないようにしながら腕を組んでいた。

「雁夜……アサシンを見つけたんだが、倒してしまっていいと思う

か？」

『気配遮断スキルを持つアサシンをあっさり見つけたのか？』

「なに……暗殺者としての適性も有っただけの事だよ」

朱然は隠密としての手解きを受けた事も有り、気配を断つという行為に関しても経験則から看破しただけの事だ。

朱然にしてみれば、アサシンの気配遮断は遮断なのだ。

英雄で暗殺などという生業を経験した事のある者などはごく一部だろうし、気配を断たれれば気付く事は難しいだろう。

だが暗殺や隠密などを理解し、極めた者であったならば、周囲にぽっかりとなんの気配も感じられない異常な部分を異常として感知する事が出来るのだ。

遮断ではなく、気配同化というスキルだったならば、運次第で騙し通せたかもしれない。

『……放っておけばいい、まだ聖杯戦争は始まってないからな』

雁夜はまたしても朱然の技能の豊富さに呆れながら、朱然に指示をする。

「了解、引き続き遠坂邸を見張る」

とはいえ、このまま監視され続ける、というのも気分が悪いと、朱然は更に空間を弄り、見続けたものを見失うという付加効果を追加する。

するともう一つの何もない空間が移動し、先程の場所に近づいてからそのまま遠ざかっていった。

「？　空白地帯が２つ……やはり群体となれるアサシンに間違いないみたいだな……」

恐らく、言峰綺麗に報告しに行ったのだろう。
そんな事を思いつつ、遠坂邸に動きがあった。
漆黒の肌、もしくはピッチリ黒タイツを着た髑髏の仮面の人物、これまたアサシンと思しきサーヴァントが結界を抜けるとはいえ、態々実体化して行く意味が朱然には負に落ちない。
スナイパーが何十時間も獲物が出てくるのを待つように、アサシンも痺れを切らして出てきたマスターを背後から刈るという行動指針とした方が勝率が高いはずだ。
例え、群体と成れるとしても、だ。
そうこう思案している内に、遠坂邸の結界の支柱となっている宝石に手を掛けたアサシンの手に宝槍が突き刺さり、台座に張り付けられた標本のようになってしまった。
屋根上には黄金の魔力を振り撒き、英雄王が現れる。
そして、背後には数十個の宝具の原典達。
アサシンは顔を上げようとして、ギルガメッシュの口が動く。

「地を這う虫けら風情が、誰の許しを得て面を上げる？か」

読唇術によって、ギルガメッシュの言葉を解読してみると、前に会った時と同じく、相変わらずの天上天下唯我独尊を奔走しているらしい。
思わず朱然は堪え笑いを漏らすが、その光景からは目を離さないところは当然と言えば当然だろう。
アサシンは目の前の圧倒的な存在を前にして呆然としたまま、宝具の掃射に身を置き続け、そして――――――顔面、左胸、右大腿部を貫かれて絶命し、黒い魔力を散らし、灰となって霧散した。

「貴様は我を見るにあたわぬ……虫けらは虫けららしく、地だけを眺めながら死ね、ね。　相変わらずだ」

またしても笑っていた朱然は、ギルガメッシュがまたしても黄金の魔力となって霊体化した事を見届けてその屋根から降りようとしたところで唐突に雁夜からパスを通して念話が届く。

『おい、アレはどういう事だ？』

「どうもこうもアサシンがアーチャーに殺されただけだろう？」

『あの宝具はまるで……！！』

雁夜の言いたい事は解る。

ギルガメッシュのアレと朱然の宝具となったアレを見て、類似性を感じない方が可笑しいだろう。

「俺の宝具と似ている、と言いたいんだろう？　あれなら大丈夫だ。お前が何もしなければ、恐らくは問題ない」

例え、ギルガメッシュが絶対の自信を以て振るわれる乖離剣も、朱然の伏羲六十四卦方位図ならば、単独で妥当しうる物と戻った。

１対１で当たり、邪魔が入らなければ問題は無いだろう。

そう朱然は知っているのだから。

『本当だろうな？』

「ああ、聖杯戦争の火蓋は切って落とされた事だし、次に事態が動くのは明日の夜だろう。　今日はもう休んだ方が良い」

『……わかった』

一瞬の空白の後、雁夜はそう言って念話を切った。

「ふう……さぁて、今度の聖杯戦争も最後まで勝ち抜けないとな…
…長居はしたくない世界だ……」

朱然は頭上に浮かぶ月を睨め付ける。

例えステータスが低くとも、始めから負けるとは思っていない。

その程度の逆境や不確定の要素とは、常に戦い続ける朱然にとっては問題にならないのだから。

英霊には食事どころか睡眠すら不要。

これは当然の特性だ。

だが……なのだが……目の前で楽しげにエプロンを装着し、料理の邪魔にならないようにアップに長髪を結い、鼻歌を歌いながら料理を作る英霊など、果たしてコイツ以外に居るのだろうか？

間桐雁夜が教えられた英霊という存在は、戦う為だけに特化した亡霊のようなものだ、と教えられていた為に、目の前のギャップを許容するには些か時間が掛かった。

何より――――

「次は何を手伝えばいいの？」

「じゃあ、戸棚から大皿を一枚出してくれ、桜」

「うん」

未だ、あの蟲蔵での体験を経てから桜は感情が乏しかったのだが、自ら問いかけを向けている。

これは一年間、桜を見てきた雁夜にとっては多大な驚きだった。

仮に自分が桜と過ごしたとして、そこまで桜を戻すのに何年掛かるかわからなかった。

その点を見れば、雁夜にとってはバーサーカーは本当の意味で当たりだったのかもしれない。

そうして何時しか完成した料理を囲み、３人で朝食を取り、３人で商店街で買い物をした。

そこで家族と商店街に店を構える店主達にからかわれた時は、少し朱然が不機嫌になりかけたが、言われ慣れている、と本人は言い、感情を押し込んでいた。

そして、買ってきた昼食を今度は3人で作り、談笑を交えながら食べる。

その合間に桜は少しづつだが笑顔を取り戻していく。

聖杯戦争をしている事を忘れるほどに雁夜にとって幸福な時間だった。

そんな時間はあっという間に過ぎ去り、戦いの時間へと時を移す。

気配を感じたのはやはり朱然。

離れていても気が付けるほどに魔力を垂れ流し、誘いをかけている。

雁夜達に夕食は店屋物を頼むように朱然は言い含め、その誘いを

かけてきたサーヴァントの偵察に向かう。
日は落ち、既に夜の帳が広がっていく。
そんな時だ。
その誘いに乗ったサーヴァントが現れ、港の倉庫街へと向かっていく。
それと同時に、別の魔力が空を翔け、冬木大橋の方へと向かっているのを感じた。

「誘いをかけていたサーヴァントは知らない奴だが、誘いを受けた方は騎士王っぽい。
そちらにサーヴァントやら使い魔が惹かれて行く、となれば、橋の方のサーヴァントは傍観に徹するのか？
そういう輩は一度見ておく方が良いかもな……」

そう決めた朱然は冬木大橋の上に陣取ったサーヴァントを確認する為、速やかに移動し、そのサーヴァントを確認した。
だが橋の上に居たのは豪放磊落という印象を持たせる巨漢のサーヴァントと喚き声を上げる小柄なマスターだった。

「征服王と確か……ウェイバー、だったか？」

敵を見つければ即座に突っ込んでいきそうな印象だったが、意外と計算高いのかもしれない、とイスカンダルを分析し、ならばと朱然は接触を試みる事にした。

「こんばんわ」

そんな当たり障りのない挨拶と共に、大橋の上まで跳躍し、少し離れた場所に朱然は立つ。

「サ、サーヴァント!?　なんで!?　どうして!?　おいライダー!　何で気付かないんだよ!?」

朱然を見た瞬間に反応し、すぐさまイスカンダルを楯に、ウェイバー・ベルベットは喚き立てる。

イスカンダルは、此方を上から下にじろじろと品定めするかのように朱然を見まわし、一言目を発する。

「ふぅむ、お主も余達と同じく、あ奴らの闘気に惹かれたか?」

「まあ、あそこまであからさまに誘われると、ね……このまま傍観に徹するつもりかライダー?」

ウェイバーが未だ警戒し、震える中、2人は並ぶように座り、ようやく始まったセイバーと2槍の英霊――――ランサーの闘いの観戦を始める。

「まさか!　これから始まる戦いに参加せぬなど、実につまらんとは思わんか?!」

「合理的ではないけど、武将として生きた事も有る身だ……わからないでもないな」

「ほぅ……さすが英霊ッ、坊主と違って話が解る!　おい坊主!　何時まで震えておる!　別にこ奴……あ～、なんと呼べばいいんかのぅ?」

「バーサーカーで」

朱然は、このまま名乗らなければ変な仇名を付けられそうな気が

した為に、クラスを名乗る。

「バーサーカーとな!?　よもや狂わぬ狂戦士が居ようとは……なかなかどうして、面白い奴だ。
良いのぅッ！　退屈せんのぅッ！　眼下で戦うセイバーにランサーの奴らも中々の技量を持つ騎士達と見える」

既に始まっているセイバーとランサーの剣撃は中々お目に掛かれない程に卓越した技量のぶつかり合いだ。
セイバーの見えない鞘に納められし剛剣。
その一撃は渾身の一撃という訳でもないのに地面を抉り、コンテナを粉砕する威力を軽々と叩き出す。
それに対し、ランサーは二槍を巧みに操って見せ、その異様さを際立たせる独特の槍捌きを以て、セイバーの剣を捌いている。

「お、ランサーが宝具を使うようだぞ」

「ホントかッ!?　さて……あの2槍捌きは、まっこと見事だったが、紅い長槍の方がランサーの宝具だったのか?」

「それはどうかな?」

「む?」

朱然のもったいぶった言い回しに、イスカンダルは眉をひそめる。
瞬間、セイバーの風の鞘に、封の解かれた紅い魔槍――――――破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）の切っ先が触れた。
轟風。
セイバーの宝具、風王結界（インビジブル・エア）に風穴を開けた。
即座にセイバーは破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）を払うも、ランサーが下がる理由

は無く、両手によってより強く、早く槍を操り、セイバーへと迫る。
先程と同じように、破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）が風王結界（インビジブル・エア）へと接触する度に、爆音と共に轟風が周囲の物を巻き込んで破壊されていく。
間合いを大きく離したところで、仕切り直し。

そして――――

セイバーは大上段からランサーを斬り伏せる構え、ランサーは両手で力を乗せて突く必殺の型。
セイバーの呼吸の隙に先んじて突き進むランサーにやや遅れ、セイバーは裂帛の気合と共に斬り伏せようとしたその時だった。

「魔力を打ち消す槍、かのう？」

「そうだね」

ライダーの意見に、同意しておく朱然。
視線の先ではセイバーは鎧越しに槍を受け、そこから態勢を崩しながらもランサーの追い打ちを凌ぎ、またしても間合いを離したところ。
２人とも目の前で行われる死合いに目を放す事はない。
それほどまでに目を見張り、胸を熱くさせるような闘いなのだ。
目を放すなど、勿体ないと言わずして何と言うのか？

「だが、今の一撃で仕留められなかったのは惜しかったな」

「いやいや、咄嗟に身体を捻り、必殺をかわしたセイバーにも称賛を送るべきだろう」

朱然とライダーはお互いに血沸き、肉躍るその戦いに笑みを浮か

べながら次の剣撃はどのようになるのかを期待する。
鎧を魔力で編んでいたセイバーは己の鎧の維持に使う魔力を断ち、速さで以てランサーを斬り伏せるべく鎧を散らす。

空白。

まず動いたのはランサー。
徐々に……そう、徐々にランサーが後退している。
だが、その足元は破魔の紅薔薇（ゲイ・ジャルグ）が風王結界（インビジブル・エア）とぶつかった余波によって砕かれており、ランサーは足を取られた。
誰もがそう思った。
瞬間、先程まで宝剣を隠す鞘となっていた風王結界（インビジブル・エア）をブースターとして解放し、大きく開いた間合いの距離を一気に詰め、隙のできたランサーを斬り伏せる間合いへと進む為に、猛然と突き進む。
だがランサーの口元に浮かぶは、危機によって結ばれた口ではなく、罠に掛かったという笑みだ。
その粉砕されたコンクリートに埋もれたもう一つの短槍を足先で弾き上げ、見事に左手に納まり、同時にその封を解かれた呪いを発する黄槍――――必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇のその穂先は向かってくるセイバーの顔面へと向けられる。
必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇が跳ね上がった時点で、セイバーの直感スキルが発動し、強引に身体を捻るもその呪いの一撃はセイバーの左腕の腱を傷つけるに至り、宝剣の切っ先は同じくランサーの左腕を傷つけた。
ランサーは必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇を落とすも、マスターの治癒によって回復したところで今一度足で跳ね上げ、元の二槍へと戻る。
だが、セイバーは未だ左腕から血を流し続けている。
必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇で傷つけられた者は、決して治癒できない。
何せ、ライフの上限を削るような呪いなのだから。

「いかん……いかんな」

唐突に、ライダーが言う。

「何がいけないんだ？　最優のサーヴァントが脱落するんだ！　喜ぶ所だろ！？」

ウェイバーが理に適った正論を言うも、ライダーは立ち上がり、思い切り足場を踏みならし、ウェイバーは落ちかけて悲鳴を上げた。

ライダーはそんな情けないマスターに溜息を吐いてから、ウェイバーの首根っこを掴み、隣に立たせた。

「世に名を轟かせた英雄だぞ？　全員配下にしたいとは思わぬか？」

確かに英霊が６人居れば、一国を落とすのも可能かもしれない。

だが、それを聞いたウェイバーは言葉を失い、朱然は昨日と同じく笑いを堪える。

「何が可笑しい、バーサーカー？」

「いや……あのアーチャーが従っている姿が全く想像できなくてね」

そう言って、堪えるのを止めた朱然は声を上げて笑う。

「ふむ……どうやらお主、色々と何か知っておるな？　と、此処で問答をしている時間はないようだ……」

ライダーは朱然から話を訊きたそうにするも、セイバーが脱落するのは不本意と見て、己の腰に下げた剣を抜き、空へ向け一刀を振るった。

すると空間が裂け、中から雷を纏った二頭の雄牛の引く戦車（チャリオット）が姿

を現した。
ライダーが保有し、自慢する宝具、神威の車輪（ゴルディアス・ホイール）だ。

「これが噂の……」

「どうだ！　中々のものだろう？　乗るか？」

「ちょ？！　敵を乗せるなんて何考えてるんだ馬鹿！！」

ウェイバーがライダーをポカポカと殴るが、ライダーは気にせず此方の返答を待つ。

「勿論！」

「うぇぇッ！？」

朱然はラッキー、とばかりに即答し、ウェイバーは肩身狭そうに蹲ってしまった。
そうしてライダーとバーサーカーは共に戦線へと介入をする事になる。
ウェイバーの胃を、一層痛めつけて……。

ＡＣＴ．３　戦端開始（後書き）

と、イスカンダルとエンカウントです。
まあ、こんな感じかなぁ……。
ＡＣＴ．４投稿時に、この世界の朱然さんのステータスを追加する予定です。

はぁ……まさかのフリーターになりそうで気が重い……あのイラスト書いたのが祟ったかなぁ……。

ＡＣＴ．４　狂獣咆哮

「ＡＡＡＡＡＬａＬａＬａＬａｅｉ！！」

「ひぃぃぃッ！！？」

神牛の引く戦車に乗り、空を翔ける。

魔術によって朱然は飛ぶ事が出来るが、それとはまた違った感覚を感じる。

地面を走っている訳ではないので、揺れる心配もないし、轟音は吹き抜ける風の爽快さに比べれば微々たる問題だ。

「おお～、これは中々良いな！」

「そうであろう、そうであろう！」

朱然は楽しげに笑い、その髪が風と戯れるようにはためき、それを見たライダーはそんな朱然の感想と表情に気を良くしたのか豪快に笑い自慢する。

＞ｉ３４９９４―２４７７＜

そして、あっと言う間に冬木大橋から港を走破した戦車は、セイバーとランサーの丁度中間へと着地し、戦いの期を逸っさせる。

「双方、剣を納めよ！　王の前であるぞ！　我が名は征服王イスカンダル！　此度の聖杯戦争においてはライダーのクラスを得て現界

した！」

戦車に乗ったまま両の掌でセイバーとランサーを制し、堂々と名乗りを上げるライダー。

隣に乗るウェイバーはその破天荒さに顔を引き攣らせ、朱然も口元を引き攣らせた。

朱然は逸早く正気に戻り、戦車を跳躍。

イスカンダルの対面に陣取り、四竦みの状態へとなった。

朱然を見たセイバーとランサーは、朱然も同じサーヴァントだという事を感じ、何故ライダーの戦車に乗ってきたのかを疑問に思いながらも警戒を始める。

「何を考えてやがりますかッ、こんの馬鹿はぁぁぁッ！！」

そんな中、朱然に遅れてようやく正気に戻ったウェイバーはライダーへと喰ってかかるが、デコピンを受け蹲り、黙らされてしまった。

流れる沈黙を破ったのはまたしてもライダーだ。

「うぬらとは聖杯を求めて相争う巡り合わせだが……矛を交える先に、まずは問うておく事がある。

我が軍門に下り、聖杯を世に譲る気はないか？　さすれば余は貴様らを朋友（ほうゆう）として遇し、世界を征する快悦を共に分かち合う所存でおる！」

非常識極まりない。

この場に居た全員がライダーに対して抱いた感想だ。

「その提案には承服しかねる……我が槍に賭けて忠誠を誓うのはただ一人、聖杯を手にし、我が主以外に渡す気など無いぞ、ライダー」

ライダーの名乗りに対しては好印象を抱いたランサーだったが、聖杯を譲れ、自分の部下になれ、というライダーの言には、ランサー――――――ディルムッド・オディナにとって、主を変えるという事は、今回の聖杯戦争に参加した意義に関わる重要な事だ。

ライダーに悪気が無い事は言動を見ても明らかだが、笑って流せる物ではなかった。

よくよく見れば、苦笑こそしているものの目が全く笑っていない。

「そもそも、そんな戯言を述べたてる為に私とランサーの決闘を邪魔だてしたのか？　だとしたら騎士として許しがたい侮辱だ！　加えて言うなら、私も一人の王。　ブリテンを預かる身として貴殿に下るなどという選択は有りはしない！」

「なんと！　ブリテンの王とな？！　よもや騎士王と称される者が小娘だったとは驚きだ！」

「信じられぬか？　ならば、その小娘の一太刀、その身に受けてみるか征服王？」

セイバーは風王結界（インビジブル・エア）を纏った剣を征服王へと向ける。

「ふぅむ、では貴様はどうだバーサーカー？」

この場に残り、返答を聞いていないのは朱然のみ。

ライダーは当然という顔で朱然に問いを投げかける。

「魅力的な提案だ……が、俺は聖杯に興味は無いし、欲しければ勝手に取っていけばいい。　俺の願いは自分で叶えると決めている。他人の手を借りて願いを叶えるなんて、怖気が走る」

「「！？」」

その場の者達が驚愕に止まる。

目の前の存在は正常。

決して狂戦士（バーサーカー）という風体ではない。

寧ろ、戦場に在っても理性を感じる麗人という佇まいを感じさせる。

更には賞品であるはずの聖杯を要らないと、そういったのだ。

ランサーのようにマスターに忠節を誓った訳ではなく、純粋に要らないと言う。

朱然は敢えて此処で聖杯を破壊するとは言わなかった。

それを言ってしまえば最悪、この場全ての勢力と敵対する事は免れないからだ。

「ほう？　では、我が軍門に下る事に相違は無いということで良いのかのう？」

ライダーは朱然に最終確認を取る。

だが――――

「残念だが、同盟ならまだしも……私が仕えるのは妻のみ、私は国の王だった者として、別の王の臣下に加わる事は裏切りに他ならない。

そして……主従としても既に先約がある。

私に臣下に加わるという選択肢は、私の真名（しんめい）ではなく、真名（まな）に賭けて有り得ないぞ？」

その辺り、朱然はきっぱりと断った。

それも今までの口調とは違った、王としての顔で。

朱然にとって対等の同盟ならば、魏と蜀の三国同盟をしていた朱然からしてみれば容認でき、迷うことなく同盟しただろうが、臣下として下るとなれば話は別だ。

元は現代の一般人だった朱然だが、恋姫の世界で武将として生きたのだ。

呉という国に仕える事を決め、蓮華と共に育てた国を捨てられるか？と問われたようなもの。

朱然にとって、いずれ滅ぶであろう事を知る国ではあったが、間違いなく呉という国は朱然と蓮華の子供と言っても過言ではないのだ。

そして、主従にしてもエヴァンジェリンとの約束がある以上、契約は有り得ない。

だからこその拒絶。

「はぁ……勿体ないなぁ、残念だなぁ……」

征服王は、勧誘に失敗した事に肩を落とし溜息を吐いた。

そんな中、朱然に興味を持った者がいた。

「よもや貴方も王だったとは……いずれの国の王か？」

セイバーだ。

「その問いには答えられないなセイバー。　今は聖杯戦争だ」

「……そうでした。　今の問いは忘れてください」

「だが一つだけ答えておこう……既に我が国は滅び、何所の国の王だとしても名乗る資格は無いと……俺はそう思うよセイバー」

「貴方は……それで良いのか？」

朱然の何かを含んだ返答に、セイバーは思うところがあった。
セイバーの願いは祖国ブリテンの救済。
朱然の今の物言いは、自分の願いと相反するモノなのかを問いたくなったから問うた、そんな問いだ。

「その答えはこの場では答えないでおくよセイバー」

静かな拒絶。
だが確かな拒絶を受けたセイバーは口を噤(つぐ)んだ。

「ライダぁぁぁッ、結局全員から断られてこっちの真名はバレて一気に不利だぞ！？　一体どうするつもりだ！？」

ウェイバーは、結局振られた征服王に対して不満の声を挙げたところで、新たな介入者が現れる。

「フ、ハハハハ！　まさか君自身が聖杯戦争に参加するとは、思いもしなかったよウェイバー・ベルベット君？
そのちっぽけなプライドの為に、私から盗み出した聖遺物で聖杯戦争に参加し、命を無駄に散らす程度の意地は有ったという事かな？
良いだろう……君は間違いなくこの私が引導を渡す事を約束しよう」

「う、あ……」

何所からともなく反響して聴こえてくる高圧的な声。
その声の主は、ライダーのマスターであるウェイバーの知り合いらしい。

ウェイバーの怯え具合から察するに、どうやら上下関係ははっきりとしているようだ。

しかし、両耳を塞いで膝をつき、恐怖に震えるウェイバーの肩に手を乗せたライダーは、自信に満ちた笑みを向け、声を上げる。

「黙って聞いておれば、つまらん奴め！
坊主に成り変わって余を召喚する腹積もりだったのだろうが、余と共に戦うには荷が重すぎるわ！」

「何？」

ライダーの言に、ランサーのマスター――――――ケイネス・エルメロイ・アーチボルトは眉間に皺を寄せる。

「余と共に肩を並べ、共に駆け、共に戦う、余のマスター足るのはそんな男よ！
坊主と違い、隠れているだけのお主とは、始めから比べるべくもないわ！！」

「ライダー……お前」

涙を溜めるウェイバーは、己のサーヴァントの頼もしさに顔を上げる。

気が付けば、あの畏怖も既に感じず、震えは止まっている事に気が付いた。

「おいこらッ！！　他にもおるだろうがッ、闇夜に紛れて覗き見している連中は！」

それを見たライダーは、冬木市に響き渡る程に叫ぶ。

「どういう事だ、ライダー？」

「セイバー、それにランサーよ。　うぬらの真っ向切っての競い合い、真に見事であった！

あれ程、清澄な剣撃を響かせれば、そこのバーサーカーや余のように惹かれて出てくるのは道理というものであろうよ！

聖杯に招かれし英霊はッ、今此処に集うが良い！　余の呼びかけに応じぬ者がおるならば、この征服王の侮蔑を免れぬとしれぃッ！」

セイバーの疑問をランサー共々の称賛で答え、更なる参加者を呼ぶ為に声を上げた。

称賛されたセイバーとランサーは誇らしげに微笑したところで、ソレは現れた。

黄金の魔力を惜しみなく撒き散らし、街灯の上に現れたのはアーチャー――――世界最古の英雄王、ギルガメッシュだ。

「フン、まさか我を差し置いて王を名乗る不埒者が3匹も沸くとはな……」

逆立てた金髪。

黄金の鎧に身を包んだ半神半人の魔神は、不機嫌そうに吐き捨てる。

「と難癖付けられてもなぁ……イスカンダル足る余は、世に知れ渡る征服王に他ならぬのだが……」

「「「……」」」

「戯け、真の王足る英雄は天上天下に我、唯一人。　後は有象無象

の雑種に過ぎん！」

睨まれたライダーは頭を掻き、セイバーとランサー、朱然は臨戦態勢を取る。

既に昨日の夜、幾ら戦闘能力が低いアサシンとはいえ、苦も無く殺したアーチャーは警戒すべき相手だという事を物語っているだろう。

そのアーチャーは相変わらずと言った所。

朱然はそんな中、雁夜に念話を繋ぐ。

令呪のブーストはやはり有った方が良いと判断したからだ。

『ようやく現れたか……まずは手始めに時臣のサーヴァントを殺す……それでいいな、バーサーカー？』

「……ああ、だがくれぐれも余計な事はするな」

朱然はそう言って、無構えのままアーチャーを観察する。

「その物言いは結構だが、まずは名乗りを上げたらどうだ？　貴様も王足るものならば、まさか己の異名を憚りはすまい？」

「問いを投げるか、雑種風情が……王足るこの我に向けてッ、我が拝謁の栄に浴してなお、この面貌を見知らぬと申すなら、そんな蒙昧は生かしておく価値すらないッ！」

そう断じたアーチャーは、背後の空間からアサシンを屠った抜き身の剣と槍の切っ先を顕わにした。

その２つの武器が内包する魔力は、間違いなく宝具クラスである事が窺える。

だが、それ以上の物が眠っている事を知る朱然は対峙する者達の

中でも余裕を窺わせている事が見て取れるだろう。
それに気付いたアーチャーは、朱然を見据え、目を細める。
「雑種、何故笑う？」
「ん？　ああ、なんだ……俺は笑っていたか？」
アーチャーに言われて、朱然は初めて笑ってた事に気付く。
「もう一度だけ問うぞ、雑種？　何故、我を見て笑う？」
「いや、別に……少しお前の真名に心当たりがあっただけだアーチャー」
アーチャーの問いに臆することなく、朱然は真っ向から答えを返す。
「ほう？　雑種風情が我を知っていると？　許す、申してみよ」
「いや、止しておく事にするよ……言ったらお前のマスターに狙われそうだ」
「王の我が申せと言ったのだ、臣下の事など捨て置けよ雑種。　よもや我を謀っただけと申すなら、我の宝物がお前を貫くぞ？」
背後の宝具が朱然へと照準するように向きを変える。
「謀ってなんてないよアーチャー。　お前の真名に心当たりは有る。
それが間違っていなければ、お前が王だという事を否定しない」

「ふむ？　雑種にしては少しは見所があるようだ」

口元を緩め、少し嬉しそうにするアーチャーに、更に言葉を紡ぐ朱然。

だが、次の言葉によって空気が凍る。

「だが正直、それを別にしても俺はお前が大嫌いだ。

そしてそんなお前だからこそ、この聖杯戦争に参加したことに落胆を禁じえないよ……ここの聖杯はお前に勿体ない物なのに」

「我の物である聖杯が、我に勿体ないだと？」

「違う、俺はお前にあの聖杯が見合わない、と言っている」

「フ、フハハハハハ！！　わかっているではないか！

我自身と同等に並ぶ物など、この世の何所にも有りはしない……

が、そこらを這う雑種の物差しで我を測るという不敬は許しがたい。

そして聖杯の真贋を見極め、我が蔵に納めるかどうかを決めるのも、また我。　貴様が決める事では……断じてないぞ、雑種！！」

瞬間、ギルガメッシュの背後に控えていた魔剣と魔槍が射出された。

その時、誰しもが成す術なく朱然の敗北を予想した。

だが――――――

「馬鹿、な――――――」

それは果たして誰の呟いた言葉だっただろうか？

朱然の背後から、アーチャーと同じように空間を歪め現れたのは

アーチャーとは違う何の変哲もない剣と槍だ。
その2つが同じく射出され、アーチャーの宝具とぶつかり、弾かれた。
似ているでは済まされない。
同質の攻撃だ。

「少しは見所のある雑種だと思っていたが、よもや我の蔵を真似るとはな。
我を遇し、我に焦がれそれを真似るのは雑種には仕方無き事、だがそんな詰まらぬ物程度で我の蔵と並んだと思うたかッ！！
本物の格の違いという物を思い知れ、雑種！！」

アーチャーの殺気が一気に膨れ上がり、背後の空間から無数の宝具達が現れ、標的を穿つ為に今か今かと号令を待ち望みにしている。
それに呼応するかのように、朱然の背後からも無数の武器達が一斉に射出の時を刻、一刻と待っている。
だが、傍目に見ても勝者は明らかだ。
如何せん、アーチャーと朱然のそれらは数は同じでも質が違い過ぎる。
片や古今東西の全てから集められた至宝。
片や無節操に造られただけの平凡な武器達。
朱然の武器達も、よくよく見れば一級品だが、アーチャーのソレと比べれば霞んでしまう。
そして、戦いは始まった。
ギルガメッシュは不動、対して朱然は直ぐに動いた。
他の者達も、その光景を固唾を呑んで見ている。
射出された武器達が、持ち手無しで剣撃の音を奏で、砕けた端から鉄片を撒き散らしていく。
そんな中、常時発動系の宝具が朱然の首を落とす為に様々な効果を発動させながら向かってくるも、朱然は周囲に滞空させた八卦八(はっけ)卦(せんてん)

武装で撃ち払っていく。
その一連の動作は流れるように淀みなく、刃の雨を紙一重で掻い潜り、薄皮一枚の被害の落ち留め、セイバーやランサー、ライダーも内心称賛する程の技量を発揮する。

『何をやってるんだバーサーカー！　問題無いと言っていただろう！？』

「うるさいッ、今は黙ってろッ！！」

以前に戦った記憶と魔眼の効果を最大限に使い、ギルガメッシュへと肉薄して行こうとする。
だが、唐突にアーチャーの攻撃が止んだ。

「貴様如きの諫言で、王足る我に引けだと……？　大きく出たな、時臣」

そう言ってアーチャーは宝具達を引っ込めて言う。

「命拾いしたな雑種。　雑種共、次までに有象無象を間引いておけ、我と戦うのは真の英雄のみでいい」

『く……アーチャーが逃げるぞッ！？』

「これ以上は邪魔が入る、雁夜――――――」

今は耐えろ、と朱然は続けようとして、パスを通じて魔力が流れ込んでくる。

「止めろ雁夜！！」

ハッした朱然は思い当たり、制止を呼び掛けるがもう遅い。
朱然の叫びは夜空に消え、その時はやって来る。

『狂えッ、バーサーカー！！』

雁夜は目の前のサーヴァントに、時臣の姿を重ね、冷静さを欠いていた。
だからこそ左手に刻まれた令呪に念じる。

『令呪を以て命じる……奴を逃がすなバーサーカー！！』

不意に、霊体化しようとしたギルガメッシュの直ぐ横に血の刃が通り過ぎた。

「今宵の宴は終わりだと言ったはずだぞ、狂犬？」

「バーサーカー？」

アーチャーとセイバーが朱然へと声をかけるが、反応は無い。
ポタリ、と朱然の足元に血が落ちる。
先程の血の刃は、朱然自身が負った傷によって流れた血を操った物だったのだ。

「血？」

「どうやら、アレが本来のバーサーカーのようだぞ、坊主」

ウェイバーは朱然の滴り続ける血に気付き、ライダー共々、目の前のバーサーカーの異常さを肌で感じ始めた。

「――――――ッ！！」

それは守りたかった者を守れなかった事に対する狂おしいまでの慟哭の叫び。

その叫びは聴いた者の胸を締め付けるような、そんな叫び。

叫びは闇夜に響き、消える。

瞳は紫水晶（アメジスト）に輝き、無数に負った傷が瞬時に塞がる。

だがそれ以上に、朱然の気配がオカシイ。

それは得体の知れなさの全てを注ぎ込んだような、そんな気配だ。

セイバー、アーチャー、ランサー、ライダー、アサシンの５騎はその強さ故に、目の前の化物に最大限の警戒を向けた。

しかし、バーサーカーの正体に逸早く気が付いたのは、衛宮切嗣とケイネス・エルメロイ・アーチボルト、アイリスフィール・フォン・アインツベルン、ウェイバー・ベルベットの魔術師達だった。

本来、朱然の姿はメドゥーサとほぼ同じ。

メドゥーサは女神としての面と、怪物としての面が存在する。

ならば、朱然にもそんな二面性が無いとは言い切れない。

朱然は自身を人間と自覚し、無意識に人間であったという事を定義している。

しかし、バーサーカーとしてのスキルである狂化によって、朱然は完全に理性を失わせ、自覚はなくなり、定義すら失わせるには十分だった。

「ちょっと待て！　マズイ！　とんでもないくらいに不味いぞライダー！」

「なんだ？！　どうした坊主？！」

「ランサー！　速やかに撤退せよ！」

「主!?　一体どうなされたのです!?」

「嘘……有り得ない!　セイバー!　バーサーカーを!」

「アイリスフィール、何なのですかアレは!?」

「フン、よもや奴隷だったか……とんだ英霊の面汚しよ」

バーサーカーとなった朱然に、ランサーは撤退し、残り3騎のサーヴァントが一斉に朱然へと対峙する。

それほどまでの異常。

魔術師達は、ソレに実際会った事が無い。

だが知っているのだ。

ソレは星そのものと称される物。

本来なら召喚などされるはずが無いのだ。

狂化したと同時に朱然のＡｒｃｈｅｔｙｐｅ：Ｅａｒｔｈ（偽）（アーキタイプ：アース）のスキルが解放された。

効果は対峙する相手の筋力、耐久、俊敏より1ランクまでステータスを引き上げるというものだ。

更に加えて、朱然の持つ狂化のスキルランクはＡ。

理性を完全に失い、ステータスを更に大幅に引き上げる。

代わりに肉体に依存しているスキルと常時発動している造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー：イカー）以外のスキルと宝具の全てを使う事が出来なくなる。

だがそのデメリットを差し引いても、造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）の恩恵によって、朱然の魔力は絶えず、より反則的な力を手にし、雁夜が魔力不足で死ぬ事は無い。

その力は、一時的にこの世界の吸血姫に匹敵するかもしれない力を発揮する。

それはつまり、サーヴァント2騎で互角の実力に、狂化と令呪に

よるブーストによって3騎を相手取れるようなモノと成り果てた。
そこには技も何もない。
純粋なスペック的な意味で単純に強いのだ。
セイバーの剛剣が腕を斬り落とし、ライダーの戦車が轢き潰し、アーチャーの剣群がその身を幾度となく穿とうと、バーサーカーは健在だ。
切り落とされた腕の骨でセイバーの首を狙い、轢き潰されながらもその身体を車輪に噛ませライダーの戦車を止めようとし、無数の剣や槍に貫かれてなお、アーチャーへと向かう。
振り切れた筋力は触れるだけで周囲の物を壊し、振り切れた耐久は並々ならない硬度をもたらし、振り切れた俊敏は目で追うのも一苦労だ。
如何せん壊されても、それを上回る治癒能力を頼りに突き進む、単純にして明快な獣――――魔獣のようなものだ。
だが、それでも英雄が3騎居れば、足止めするくらいは何とかなるが、魔力の供給量に制限のあるセイバー、アーチャー、ライダーは消耗を強いられる。
だが、今誰かが抜ければ、この均衡は崩れてしまう。
そもそもバーサーカーはアーチャーを狙っているのだから、セイバーとライダーはランサーのように即座に撤退すればいいのだが、セイバーの後ろにはアイリスフィールが、ライダーの隣にはウェイバーが居る為に、撤退の隙を見つけられずにいた。
アーチャーに至っては、標的の為に撤退はできない。
それから防戦に徹する内に、既に疲弊は限界に達しようとしていた。

「不味いですね……まさかバーサーカーがこれ程厄介な敵だとは思いもしませんでした」

「ええ、もう魔力も限界のはずよ……このまま続いたらどうしようもないわ」

「ラ、ライダぁぁぁ……」

「シャッキリせんか坊主ッ！　このままでは命に関わるのだぞ？」

相性の悪いはずのアーチャーの宝具群も、真名解放しない弱い効力しか発揮しない不死殺し系や運命干渉系の宝具を当てようとしても怪物として振り切れた流見の魔眼によって看破され、強引に打ち払われる。

「チィ……ッ、よもや星の分際で王足る我を手こずらせるか……雑多ッ」

第2戦にして、3騎が一斉に脱落かと思われたその時、夜明けの日が差し込みバーサーカーを照らす。

すると吸血鬼としての弱点を持つバーサーカーの動きが鈍り始めた。

それを見逃さず、3陣営は即座に撤退させたのだった。

残ったのは傷の修復を完了し、正気を戻した朱然のみ。

そこは港のコンテナ置き場ではなく、廃材置き場となっていた。

ＡＣＴ．４　狂獣咆哮（後書き）

という訳で――――――

しゅぜん　は　きょうきに　呑み込まれた！

つづけて　れいじゅ　はつどう！
きんりょく　が　上がった！
たいきゅう　が　上がった！
しゅんびん　が　上がった！

という感じに。

まさかの無双。
でもこれより後は、次回に朱然さんがおじさんにＯＨＡＮＡＳＨＩしたので、あそこまで無双にはならない予定。

直ぐに朱然さんのステータスを投稿しますので、今回の無双は何故成し得たのかはそちらを参照の事。

２０１１．１１．１４　イラスト追加。

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　ステータス（前書き）

という訳でステータスです。

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　ステータス

【ＣＬＡＳＳ】バーサーカー
【マスター】間桐雁夜
【真名】朱義封
【性別】男
【身長・体重】１７２センチ　５７キロ
【属性】混沌・善

【ステータス】
筋力　Ｄ
魔力　Ｄ
耐久　Ｄ
俊敏　Ｄ
幸運　Ｃ
宝具　ＥＸ

召喚された時間が昼だった事、マスターが急造だった事、己の吸血衝動を抑える為に自身を封印している為に、聖杯戦争に呼ばれた歴代の英霊の中でもかなりの下位に位置するステータスに。
クラススキルである狂化も封印によって封じられる結果となり、狂化によるステータス強化も受けられない。
ただし、豊富なスキルと宝具があるので戦えない事は無い。

【クラス別スキル】

狂化：－（Ａ）
理性は完全に失われ、スキルと宝具の大半を使用不可になる代わりに魔力、幸運以外のステータスを2ランク上昇させ、目に入る者

を壊す以外の行動が取れなくなる。
しかし、今は自らを戒め、封印する術を自らに課している為、狂化できない。
その封を解けば本当の意味で狂い、日の光に当るまで壊す存在になり果てる。
狂化を発動させた場合には、先天的なスキルである流見の魔眼と肉体的なスキルである他種混合のスキル以外は発動できなくなり、効力が打ち消されてしまう。

【固有スキル】

流見の魔眼：Ａ＋（ＥＸ）
あらゆる流れという物を見通す眼。
自身が己を人間として縛っている為に力もある程度まで下がっている。
朱然が真に怪物と己を定義するか、怪物に成り下がった場合、本当の意味でこの魔眼は完成する。

千里眼：Ｃ
心眼（真）：Ｂ
矢除けの加護：Ｂ
気：Ａ
変化：Ｃ～Ａ

Ａｒｃｈｅｔｙｐｅ（アーキタイプ）：Ｅａｒｔｈ（アース）（偽）：－（ＥＸ）
各惑星に在るとされる究極の一（アルテミット・ワン）の一つ。
星からのバックアップを受ける事で、敵対する相手より一段階上のスペックになるスキル。
並列世界のガイアの主となった朱然の新たに発現したスキル。
この世界のガイアの主ではないので（偽）が付く。

ある条件を満たせば、一時的にその力を解放する事が出来る。

魔法：Ａ　→　魔術：Ａ

この世界では現代の技術で再現できる物を魔術と呼ぶ為、朱然の習得した魔法は総じて魔術となる。

体質改造：Ａ　→　他種混合：Ａ＋

既に乖離不能なほどに魂レベルで同化し、この世界に来た為にスキルの一つとして認知されてしまった。

このスキルは取り込んだ種族の多さと神秘の度合いによってランクが変動する。

朱然は竜種、悪魔、精霊、獣人、吸血鬼、仙人という幻想種を宿している為にＡ＋ランク。

取り込んだ種が多いほど、その特性を得られるが、同時に弱点も増える事を意味する。

【宝具】

八卦八武装（せんてんはっけ）

ランク：Ｃ＋

種別：対人、対軍

レンジ：１～４０

最大補足：５０

朱然の最初の宝具にして、信頼する宝具。

決められた順序で束ねそこねると、不完全な形の形態、伏羲八卦次序太極剣（ふっきのたいけん）に変わり、きちんとした順序で束ねる事で、本来の姿である伏羲六十四卦方位図（ふっきたいきょくず）として使用が可能になる。

単純に言えば、宇宙の万物生成過程を示した図。

最大は六十四卦ではなく、更に細分化し、無限に広がり続けるモノ。
その効果は使用者の意のままであり、世界の修正力に大きく働きかけ、あらゆる事象を操作し、再現する。
しかし、世界の修正力に強く働きかける程、多くの魔力を消費する。

造物主の掟（コード・オブ・ライフメイカー）
ランク：ＥＸ
種別：対人
レンジ：１
最大補足：１

常に朱然へと魔力を供給する魔力炉心。
その正体はガイアと繋がる為の接続端子。
この世界では十全な機能を使えないながらも、ガイアからのバックアップはある程度可能。
ある程度ながら、その魔力供給量の規模は第１級の霊脈を遥かに凌ぐ。

幻想工房（ミスティック・コレクション）
ランク：Ｅ～Ａ＋＋
種別：―
レンジ：―
最大補足：―

朱然が今まで造った武装を保管する工房へ繋がる場所。
前の世界での工房が宝具化しただけの物。

基本的にはギルガメッシュの王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）と同質の物だが、朱然のそれは自分自身で造った物か、朱然にだけの所有物のみだけを入れる事が出来る。

他人の物を入れる事は、所有権の移譲をされなければ入れる事は出来ない。

Ｆａｔｅ／ｚｅｒｏ　ステータス（後書き）

原初の一ではなくアーキタイプ：アースでは？との意見を頂きましたので、修正しました。

原初の一（偽）→Ａｒｃｈｅｔｙｐｅ：Ｅａｒｔｈ（偽）

ＡＣＴ．５　敵性分析

「さて雁夜……俺が何を言いたいかわかるな？」

「ハイ、ソレハモウ……」

あれから数時間後。

場所はやはり間桐家の一室。

そこに居るのはバーサーカーこと朱然とその朱然の服を掴んで居る桜。

そんな２人に見降ろされているバーサーカーのマスターこと間桐雁夜だった。

本来、マスターに従わされているはずのサーヴァントが、今は立場を逆転させ、マスターがカーペットの直で正座させられてる。

サーヴァントが一堂に会したあの場所で、よもや強制的に狂化させられ、大事な令呪の一角を消費するなどという有り得ない判断をした雁夜に対し、朱然は朝食を終えてから雁夜に対し、Ｏ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩを慣行しいる。

もっとも肉体言語で語るにはやり過ぎてしまう為に、今朝の朝食は雁夜だけカップメン。

更には桜に冗談交じりに、このおじさんだれ？と言わせて、精神的に虐めたという訳だ。

朝食がカップメンなのは、雁夜にとってはまだ我慢のしようもあったが、桜にその言葉を言われた時には石像のように固まったのは言うまでもない。

「俺は余計な事はしない事、ときちんと言い含めたよね？」

「だが！　お前が問題無いと言ったんだろう？　あのままじゃ、ア

ーチャーを倒せなかっただろう？」

雁夜は一瞬、声を荒げるが、桜が居る為に声を抑えつつ朱然へと抗議する。

「ああ、確かに俺は問題ないと言った。
だが雁夜、逆に聴きたいんだが何故、あの時、あの場所でアーチャーとの決着を着けなくてはならなかったのかな？」

「そ、それは……」

バーサーカーの正論によって、雁夜は言葉に詰まる。

「ねえ、朱然さん」

唐突に朱然のパオの裾が引っ張られたのを感じ、振り返ると桜が朱然の名を呼んだ。

「どうしたんだい、桜？」

「おじさん、悪い事したの？」

「そうだよ～、このおじさんは嫌がる私を無理矢理言うことをきかせて、あんな事とかこんな事とかさせたヒドイ人なんだよ～」

「な！？　その説明は幾らなんでも――――――」

「もう一度言わされたいか？　んん？」

桜に対する柔らかい物腰から一変、雁夜に向けられるのは絶対零

度のブリザード状態だった。

「――――イエ、全面的に自分ガ悪カッタデス」

主語が抜けている為に、とても卑猥な感じに聞こえるのは、朱然の悪ノリだろうが、幼い桜は額面通りの意味に捕え、朱然の後ろに隠れジーッと雁夜を観察する。

「じーッ」

桜の無垢な瞳が雁夜を観察している事に、雁夜の精神的ライフは必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇で上限をガリガリと削られ、良心やら、男の沽券やら、様々なものが危険領域まで衰退していく。

「ゴメンナサイ、本当ニ勘弁シテ下サイ……」

ついには自ら土下座を披露し、雁夜はようやく朱然の許しを得る事が出来た。

「おのれ狂戦士風情が！！　我が麗しの乙女に、あのような無体をッ！！」

キャスター――――――ジル・ド・レェは龍之介の創作した作品を叩き潰し、壁に叩きつける。

「ああ！？　何するんだよ青髭の旦那ッ！　せっかく一晩かけて作

ったのに……」

散乱した肉塊を両手ですくい上げ、龍之介は落胆する。

「子供達は後、何人いますか？！」

「え？　えっと、１４人だけど……」

壊れてしまったモノはどうしようもないとポジティブに考え直した龍之介は、手に持った肉塊を地面へと捨て、キャスターへと向き直りつつ返答した。

「まずはそれで良いでしょう。　ですがまだまだ足りませんよリュウノスケ。　もっと補充しなくては聖処女の供物には足りない！　あの狂戦士……目に物見せてやりましょう！　聖処女は何人たりとも犯させてはならないのですからッ！」

殺す為の手段趣向などをキャスターに手解きしてもらっていたリュウノスケは、今までの質としての殺しの方が興味は有ったのだが、キャスターが質より量と方向転換するのならば、と気乗りしない思考を、新たな楽しみになるかも、という期待感で埋めキャスターへとついて行く。

「はぁ……なんだかよくわからないけど、最高にＨＩＧＨでＣＯＯＬな事するんだよな旦那！　わかった！　俺も協力するよ！　今すぐ行こう！　どんどん殺そう！」

「流石はリュウノスケ、話が解る！　聖処女の為ならば立ちはだかる試練など、どうと言う事はありません！　あらゆる物を乗り越えた時ッ、我々は真に選ばれ、聖処女の導き

が世界を救うのです！」

暗い闇の中、未だ姿を現さないキャスターとそのマスターは動き出す。

「主よ……何故、撤退を指示したのですか？　あれでは――――――」

退くと言う事は恥じるべき事は無い。

戦いは退く事も戦いの内であり、引き時を知る者こそ戦上手と言われる。

今回の決闘でセイバーに必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇で手傷を負わせたものの、決着を付けられなかった事はランサーにとって不本意であり、その手傷を負わせた所為でバーサーカーにやられ、敗退してしまったとあれば、それこそ騎士として悔いを残してしまう。

「ランサーよ……お前はバーサーカーを見て何とも思わなかったのか？」

理性のある狂戦士という変わり種が居た事に驚いたものの、あの立居振舞いは間違いないく武に通じた者。

是非とも手合わせを願いたい。

だが狂化される直前のやり取りを聞けば、バーサーカーのマスターがバーサーカーの意志を無視して強化させていたように思う。

その辺りは、ランサー自身が踏み込むべきところではないのだから、これ以上の詮索はしないが、狂った後のバーサーカーは正しく化物だと体感した。

だからこそ、セイバーを置き去りにしたマスターには、無礼を承知で言わねばなるまい。

「それを感じたからこそ、私はッ！！」

そう思ったランサーがケイネスに苦言を言おうとするも、ケイネスの罵声によって抑されてしまう。

「馬鹿者がッ！　アレはガイアの怪物だ！
お前のような戦う事しか能の無い者は知らんだろうから教えてやるが、本来サーヴァント全てが束になってようやく対等となるほどの化物なのだぞ！？」

英霊であり、武人として生きた自分は、それこそ主とはいえ、魔術師である者に呑まれるなどという事は一度も無いと思っていた。
だが初めて己の主である魔術師のその鬼気迫る形相と声に呑まれたのだ。
更にはバーサーカーの正体が、サーヴァントが束になって敵うかというモノらしい。
実際にはその戦いを見る事は無かったが、セイバー、ライダー、アーチャーは全員無事に逃げ遂せた事は確認済みだ。

「それは真ですか主！？　ですが理性があった時のバーサーカーは、それ程の脅威は感じませんでした」

そう、そこが問題だ。
ランサーが感じたバーサーカーの闘気はセイバーの物と比べると、どうしても今一歩足りないといった印象を持った。
元々、戦う者として戦場を駆け抜けた英霊達と違い、朱然は平和なご時世に生まれ、そこから戦場で戦ったものなのだ。

いざ戦う事になれば、朱然は躊躇いはしないものの、どうしても無意識的に闘争を嫌う日本人特有の気質という物は、覇気を鈍らせる。

それがランサーの言う今一歩足りない、という印象の原因なのだろう。

「バーサーカーのクラススキルに狂化があるだろう？　恐らく正気を保つ事で格を落とし、化物を英霊として召喚したのだろう。

その証拠に、バーサーカーのステータスは軒並みDランクだ。

つまりは、狂う前であれば十分に勝機がある、という訳だランサー」

それは正に正攻法とも言うべきものだ。

しかし、ステータスは英霊の筋力、耐久、魔力、俊敏、幸運しか看破出来ない。

宝具のランクは、実際に使われなければ見る事は出来ないのだ。

それをケイネスはステータスが低いのだから宝具もそれ相応のランクだろうと思ってしまったのだ。

そもそもガイアにきちんとした宝具があるのかすら疑わしいのだから。

「つまり、バーサーカーには正々堂々の勝負で以て倒せ、という事だよランサー」

「それでは……ッ！？」

「バーサーカーに限っては、邪魔する者がいなければ決闘にて決着させよ、と言っているのだ。

マスターが出てきた場合、私自らが引導を渡す。　決着を着けたくば、その最速と名高きランサーのクラスとして迅速に倒すが良い。

そして喜べランサー……お前の剣が明日に届く。　その二槍だけ

という先入観を今日の闘いで見せた。
アーチャーとバーサーカーの武器の数々は想定外だが、よもやお前にも更に二つの宝具があるなど、誰も思いはしないだろう」

あの化物と戦うよりも、まだ正気がある方が倒しやすいというだけの事、それはつまり、ランサーの望む一対一での決闘が出来ると言う事。
戦う事にあまり意欲的ではなさそうだったが、挑まれればバーサーカーは戦う事を望むだろう。
更に主から告げられた愛剣の存在。
主からの配慮、それこそ心震えずして何と言うのか。

「主よ……感謝します」

そうとなれば、ランサーの望むところ。
セイバーもバーサーカーも討ち果たし、今度こそ真の忠義を尽くすべく、ランサーは静かな微笑を浮かべたところで、興を削ぐように防災ベルが鳴る――――――

それから少し後、地上では宿泊客リストで非難者の確認をしているボーイの持っていたリストに書かれている名前は、ケイネス・エルメロイ・アーチボルト、唯一人だけだった。

「なあ、ライダー」

「……」

マッケンジー宅の自分の部屋で、ウェイバーとライダーは何とも言えない沈黙が満たされた部屋で数十分も過ごしていた。

それに耐えられなくなったウェイバーが、難しい顔のライダーに問いを投げたという次第だ。

「バーサーカーの事、訊かないのかよ？」

「……よしッ、決めた！！」

「うわぁぁッ！？　一体何なんだよ！？」

「うん？　なんだ坊主、ベットからひっくり返りおって？」

「お前のッ、所為だッ！！」

ウェイバーは身を起こしながらもライダーに怒鳴るが、ライダーは一向に気にしない。

「ところで一体、何を決めたんだよ？」

「おお！　そうであった！
坊主、あの金ピカはどうにも余の臣下に下るような奴ではなかったが、バーサーカーはまだ交渉の余地があると見た！
あの金ピカに競り負けたとはいえ、バーサーカーはあれ程の武器を抱え込んでおるのだ！

そして、王を名乗る3騎のサーヴァントに引けを取らん剛力無双ッ、戦力を充実させるには必要な人材とは思わんかッ?!」

まるで、蹂躙すべきモノを見つけたとばかりに目を爛々と輝かせるライダー。

「思うか馬鹿ぁぁぁッ!!?　あれは僕にだってわかったぞ!?　ロンドン塔の降霊科どころか、魔術師なら当たり前に知ってるガイアの怪物……本物の化物なんだぞ?!　そんなのがお前の臣下になる訳ないだろ!?」

確かにあれの異質さは、対峙した瞬間に身体を駆け抜けるように痛感させられた。

例えバーサーカーが、ガイアの怪物の関係者でも一番下に居るものだったとしても納得できるものだった。

本来の星の守護者としてならば、本当の意味で１００％のアルクェイド・ブリュンスタッドとタイマンを張れるなどと言えば、この世界の魔術師達はひっくり返るだろう。

今の朱然はこの世界で言えば、３０％の吸血姫に勝てはしないだろう。

だが、２０％くらいならば何とか届く範囲には居るのだ。

もっともそれはＡｒｃｈｅｔｙｐｅ：Ｅａｒｔｈ（偽）の能力に加え、バーサーカーのクラススキルによる狂化のステータス底上げ、令呪によるブーストによって可能としているに過ぎないので、狂化だけでは恐らく１５％程だろう。

通常時では更にその半分だが、少なくとも宝具は使えるので戦い方次第だろう。

「坊主こそ聴いておらんかったのか?　あ奴はどこぞの国の王であり、妻を娶り、既に主従の契約の先約があるとも言っておったのだ

ぞ？」

「だから？」

「はぁ～、わかっておらんなぁ坊主！　つまりは、だ……狂戦士だろうが、ガイアの怪獣だろうが、あ奴には余らと同じ欲があるという事ではないか！

ならば、それ以上の欲を用意してやれば、余の臣下になるとは思わんか？！」

「だ・か・ら……なんでお前はッ、そうッ、根拠も無い自信をッ、満足げにッ、言ってるんだぁぁ！！

それと怪獣じゃなくて、怪物だ、こんの大馬鹿ッ！！」

最初の沈黙とは正反対に、いつもの調子を取り戻したライダーとウェイバーは騒がしい。

「まさか、ガイアの怪物が聖杯戦争に参加しているなんて……」

「教えてくださいアイリスフィール。　アレは一体何だったのです？」

真剣な表情で運転をするアイルスフィールがふと、朝方まで戦ったアレに付いて呟いた。

「アレはね、セイバー。　英霊とは対極のような存在よ……星の触

覚とも言える者、到底人間が御しきれるはずが無い存在なの」

「ですがバーサーカーは、恐らくマスターに狂化させられるまでは普通でしたが？」

「多分、狂化する事がその怪物になるキーなんじゃないかしら？」

「とすれば――――」

「ええ、狂化する前に倒しきるしか……それかマスターを倒すしかないわ」

ケイネスと同じ攻略法を挙げるセイバーとアイリスフィール。

「ですが、あのアーチャーとの物量で競えるだけの戦力がある事は間違いありません。　そう易々とマスターには近づけさせないでしょう。

それよりも先にランサーを倒さねば……一度、狂化してしまうと、今の私では倒しきれないかもしれません」

「意外に弱気ね、セイバー？」

「まさか3人掛かりで圧されるとは思いもしませんでしたから……それに、感じるのです。

狂化とは別に、胸の奥からザワザワと……何とも言えない親近感のような感覚が」

「親近感？」

「飽くまでソレに近い感覚です……こう、上手い言葉が見つからな

い。
　それと、私に対して言った王としての在り方にも何所か私を意識させて止まないのです」
「そう……それは今度会った時に訊きましょう」
「ええ、問いはその時に……我が剣に賭けて」
「でも、おおよその敵を打倒できる最強の一撃とはいえ、あの状態のバーサーカーなら耐えてしまいそう……切嗣には私から言っておくわ。
　切り札は使える状態にしないと意味が無いから」
「切り札？」
「ええ、貴女の鞘よ」
「私の……鞘、ですか？」
　こうして、アーサー王の盗まれた聖剣の鞘が約１５００年もの間、一切の傷一つなく、また色褪せる事も無く在り続けた最高の幻想と対を成す最高の理想、その最強の守りたる鞘がその手に戻る事となるのは、まだ少し先。
「未だキャスターのみ補足出来ないとはな……」

時臣は座り慣れた椅子に身体を預け、コルクを抜いたばかりのワインを傾け、ワイングラスへと注いでいく。
そんな時だった。

「よくも我に向かい、あのような戯言を吐いたな時臣？」

遠坂邸の主人たる遠坂時臣の書斎に、アーチャーは姿を現してまず、意の一番にその口から出た言葉は怒気を孕んだ責め言だった。
それに対し、時臣は立ち上がって礼をしてから口を開く。

「恐れながら王よ、幾ら自らを王と称する者が沸こうとも、真の王は貴方一人を置いておりません。
ならばこそ、昨夜ような些事を経て、有象無象と戯れる無駄を省いたのですよ？」

「王は我一人で十分だという事が解らぬ訳ではないようだが、他の王などというものは俺の庭には無用の長物に過ぎぬ。
まあいい、今後あのような詰まらぬ事に我を煩わせるなよ時臣？」

そう言ってアーチャーは、またしても自由気ままに冬木のいずこかへと消えて行った。

「……本当に、御しづらいな」

そう呟き、ワイングラスを手に月を見上げ、ワインを楽しもうとワイングラスを傾ける。
だが舌へと触れるワインの味が、今の時臣には感じられなかった。
バーサーカーのサーヴァント。
それが原因だとわかっている。
自分が召喚したサーヴァントは間違いなく、あらゆる英霊の弱点

を突く事の出来る。
この第四次のみならず、今まで呼び出された中でも最強のサーヴァントだったはずなのだ。
だがあのバーサーカーはオカシイ。
あれ程の宝具を持つ英霊に面識がある事もオカシイが、何所をどう見ても、アレは――――――
「もう一つの王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）だと？」
いや、ギルガメッシュの宝物庫の原典が流れ出したのが英霊達の持つ宝具の大本だとするならば、アレは王の財宝（ゲート・オブ・バビロン）という宝具が劣化した宝具なのだろう。
そして、あの場で強引に狂化させてギルガメッシュを執拗に狙わせた……それはつまりバーサーカーのマスターが私を知っている者なのだという事も簡単に予想できる。
アサシンと言峰綺麗は自分の陣営だ。
まず裏切りも無いだろう。
アインツベルンのホムンクルスはセイバーのマスター、ライダーは隣に乗っていた魔術師、ランサーのマスターはケイネス・エルメロイ・アーチボルト。
残っているのは未だ正体不明のキャスター。
取捨選択をするのならば、残った間桐……確か雁夜とかいう男だったか？
ともかくバーサーカーを従えているのは間桐。
あの英霊は、狂化すれば手を付けられない。
残る手は狂化する前に、ギルガメッシュの一撃で殺すか、ソレよりも簡単な方法としてマスターを殺すのが一番手間もリスクも無いだろう。
そう決めた時臣は、言峰綺麗へと指令を下す――――――間桐雁夜を殺せ、と。

「遠坂時臣はなんと？」

「間桐雁夜の暗殺だそうだ。　監視は続けているな？」

「はい、抜かりなく……」

言峰教会の地下、蓄音器の前で時臣の指令を受けた言峰はアサシンへと確認する。

既にキャスター以外の勢力には監視を着け、随時情報を収集している。

未だ補足出来ないキャスターも、そろそろ網に掛かる事だろう。

脱落者として、勢力の一つとしての目を逸らされている以上、暗殺はやりやすくなっているはず。

少なくともバーサーカーは、アサシンが殺されたところを直接目にしている。

ならば、間桐のマスターを殺すタイミングは、バーサーカーが離れた時だろう。

「全てのアサシン達に伝えろ……間桐のバーサーカーが離れたところで5人を間桐の家に送り、誰にも気取られずに間桐雁夜を暗殺せよ、と」

「御意に……」

そう言って、アサシンが消えたところで、入れ違いに別のアサシ

ンが現れる。

「ランサーのマスターが泊まるホテルに何者かが小細工をしているようです」

「ほう？　それは何所かの勢力ではないのか？」

「少なくとも、監視している勢力との繋がりは未だ不明です。　男女の２人組です」

「それは……」

綺麗は直感的に感じる。

その男は、魔術殺しと呼ばれた男だと。

ギルガメッシュに言われ、聖杯戦争の参加者のどんな些細な情報も収集してきたものの、綺麗が引かれたのは衛宮切嗣という男だけだった。

紛争地帯へ赴き、殺し続けた男が唐突に戦う事を止め、アインツベルンへと招かれた。

いや、招かれたからこそ戦う事を止めたのか……。

自分にとって、“答え”を持っているのか否か。

「確かめさせてもらおうか……衛宮切嗣」

傅（かしず）くアサシンを引かせ、言峰綺麗は代行者としての装備を整え、早急にその場所へと向かうべく境界を後にした。

ＡＣＴ．５　敵性分析（後書き）

という訳で、全ての勢力から要注意されている朱然さん。
果たしてこれからどうなる?！

この作品と原作の相違点。
ソラウ・ヌァザレ・ソフィアリが居ない。
ランサーに更なる宝具が。
セイバーが鞘を手にするかも?
今の所、この三つが大きな違いかも。
今後の展開は未定なので、どんな方向へ向かうかは不明です。

ＡＣＴ．６　共通討伐

「単刀直入に言わせていただく――――――」

言峰教会地下。

日の明かりが微かに照らすその場所に、聖杯戦争の監査役にして老神父――――言峰璃正は立っていた。

その言葉の投げかけられた暗がりには、人は誰も居なかった。

しかし、人以外の物は存在した翡翠（とおさか）の鳥、鼠、針金細工（ウェイバーアイリスフィール）の小鳥、水銀（ケイネス）のフクロウ、狂戦士（しゅぜん）の英霊の５組。

既に脱落させたと思われている綺礼は含まれていない。

日のある内の招集だったにも拘らず、全員が招集に応じたのは監査役に疎まれるのは不味いと思っているからだろう。

だがその中で、意外にも間桐が参加して来た事が、この場に集まった者達にとっては驚きだった。

しかも、だ。

使い魔を送れば良いこの場に、わざわざ自身の守りを外してまで英霊を此処に送り込んだ真意が見えないのだ。

唯の馬鹿なのか、それとも何か理由が存在するのか、と。

「諸君らの聖杯戦争存続が危うい。　というのも、未だ姿を現さないキャスターが問題を起こしているのだ。

知っている者も居るだろうが、知らぬ者がいないとも限らぬので始めから説明させていただく」

曰く、キャスターを呼び出したのは、巷を騒がせている殺人鬼だと言う事。

曰く、聖杯戦争に参加せず、己の殺しの為に行動している事。

曰く、秘匿を一切せず、これ以上、大事になれば、この聖杯戦争

自体に他の者達が介入してくるであろう事。

「そこで、全ての陣営に対し、キャスター討伐を依頼したい。　勿論、それ相応の報酬は用意する。

過去に脱落したマスターが残した礼呪だ……個人で討伐すれば1つ、協力して討伐すればそれぞれに1つ贈与しよう。

各々、今は聖杯戦争を中断し、キャスター討伐に尽力を」

璃正のその言葉を最後に、使い魔達は闇へと消えた。

「話は終わったが、何か用があるのかね？」

未だ残った者がいた。

「いや？　おかしい事があったので報告にね」

朱然だ。

「ほぅ？　それはキャスターに関する事かね？　それとも他に何か気になる点でも？」

「何故、死んだはずのアサシンが生きているのかな？」

「――――――――――」

驚きそうになったものの、璃正も伊達に歳はとっていない。

表情には何とか出さなかった。

だが内心は穏やかではない。

何故、アサシンの存命を知っているのか？

「何かの間違いではないかね？」

何も知らないはずの立場としては、この返答が妥当だろうと思い、問いを返す。

「いや、間違いなくアサシンだったよ。　アサシンがアーチャーに倒された時に、何故か我々を監視する者が居た。

気配遮断をしていたから間違いなくアサシンだろう。　さて、此処で可笑しな疑問が出てくるな？

アサシンが複数居るのは、まあ、スキルや宝具の効果だろうが、お前の息子は脱落を宣言し、教会へと身を寄せ、お前はそれを受諾した。

まさか監査役が特定のマスターに肩入れしていると、そう理解していいのかな？」

「まさか！　例え親子だったとしても、そんな事は有り得んよ」

璃正は即座に否定する。

「つまりは、言峰綺礼自身の自作自演だった、と？」

「そうなのだろうな……よもや父である私を謀っていたとは思いもしなかった」

「君らの言う主に誓って？」

冗談交じりに朱然は言う。

「……ッ、もちろんだとも」

一瞬、従順したが、璃正は主と息子を天秤にかけ、息子を取った。
ただそれだけの事。
だが璃正にしてみれば、主を裏切るという事は大罪にも等しい。
が、それを朱然は知る由も無い。

「む？」

そんな時だった。
間桐の結界に異常が生じた。

「どうしたのかね？」

未だ葛藤止まない璃正は、平静を取り繕いながら様子の可笑しいバーサーカーに問いかける。

「どうやら、今俺が間桐の屋敷に居ないこのタイミングを知った誰かさんがちょっかいを掛けてきたようだ。
が、仲良く結界に掴まって死んだみたいだね。　まあ、護りはアレに任せているから間違いは無いだろう」

「――――――――――」

二回目の空白を璃正は挟んだ。
一体、アレとは何を指しているのだろうか？
いや、それ以前に――――

「しかも5人同時に、ということは、やはり可能性からしてアサシンだろう。　この測ったようなタイミングは偶然とは言い難い。
が、璃正神父は息子に騙されているようだし？　厳重に処罰を降してくださるようお願いしますよ、主の御使いにして、聖杯戦争の

監査役さん？」

そういって、朱然は姿を消した。

それから数秒の後、璃正はその場に座り込んで両手で顔を覆う。

アレは間違いなく警告だ。

今回の招集は、キャスターとバーサーカーを監査役としての権限によって討伐させる心積もりだったのだ。

だが、直接バーサーカーが乗り込んできた事で、その機を外された。

それればかりか、気配遮断のスキルを駆使していたにも拘わらず、アサシンが生きている事、妄想幻像（ザバーニーヤ）の効果をほぼ看破されている。

そして、昨晩に下された間桐のマスター暗殺の絶好の機会として放った5人のアサシンは、間桐程度の結界に討ち取られた？

いや、結界の効果を感知した事から、バーサーカーこそがその結界を張った本人と思っていいだろう。

幾ら分割によって戦闘力が低くなろうとも、サーヴァントを仕留める攻勢を持った結界などを扱う英雄など訊いた事が無い。

最後の言葉も警告だ。

先程の間桐の襲撃は、あまりにタイミングが良過ぎた。

十中八九、アサシンは反則をしている事は知られただろう。

それを先程の使い魔達に言わなかったのは、その反則を黙認する代わりに、キャスターのような手を出すなという無言の圧力だ。

あそこで自分が命を捨ててでも討伐させるのは良い。

監査役を殺したバーサーカーは全ての陣営から狙われるという事になるだろう。

だが、それではキャスターを討伐した後の景品である令呪が失われる。

だからこそ、苦しくとも否定を選んだのにも拘らず、主に対する誓いと天秤を掛けさせられ、苦しめてきた。

理性がある状態ならば頭が切れ、狂化すれば手がつけられない。

アーチャーこそ最強のサーヴァントだとも思ったが、今回はそれすら上回るサーヴァントなのではないだろうか？と思い知らされた。
だが果たしてバーサーカーの正体はいったい何者なのか？
容姿は明らかに白人系でヨーロッパ系。
しかし服装はアジアの装いをしている。
別にこれは白人がアジアへと旅し、流れてから英霊となったと思えば可笑しい所はない。
昔話の日本で言う鬼とは、外国人であったなどという仮説も蔓延しているのだから、むしろ人種の違いはその地域では違った異物であると同時に、神秘性を上げる事もでもある。
だがそれでもアーチャーと同種の攻撃方法に加え、狂化した時のガイアの怪物と類似した反応。
真っ当な英霊とは言い難い。
聖杯を否定する物言いといい、その目的が、行動原理が不明なのだ。
果たして奴は一体、何者なのだ――――――？

「はぁ……面倒臭い。　これだから策謀をする爺は嫌いなんだ……」

いつの間にか現代の服に着替えた朱然は、とぼとぼと新都を歩いていた。
やはり１０年後の世界から見て、未だに開発と中の場所がちらほらと見て取れる。

「地理把握がてら散策してみるか？」

そんな事を呟いた時だった。

「そこに居るのは雑多ではないか」

人の疎らなその場所で、そいつの声は良く響いた気がした。
燃え立つような金髪を降ろし、黒い服を見に纏ったアーチャーだ。

「……雑多呼ばわりか、慢心王？　ああ、慢心せずして何が王か！
とか言わなくていいからな。
俺は気分が悪い……帰らせてもらうぞギルガメッシュ？」

そう言って背を向けようとするも、アーチャーは何所か思案顔で
何を思ったか――――

「ふむ……そう急くなよ雑多。　我の名を存知しているとは感心に
値する。　今朝までの無礼を許す、案内せよ」

真名を言い当てられたにもかかわらず、満足げに笑いながら朱然
を引き止め、そんな事をのたまった。

「お前……昨日言った通り、俺はお前が大嫌いだ」

「ふむ？　雑多が我を嫌ったところで、そんなもの我には知らぬ。
臣民は須らく我に傅き、我の言う事をすればよい」

「だから、俺はお前と遊ぶほど暇じゃないと言って――――」

「なんなら今此処で今朝までの続きをしても良いのだぞ？」

「……ッ」

無関係の人間がどうなろうと知らないが、巻き込むなどというリスクは避けた方が無難だろう、と朱然は渋々と慢心王の後を歩く。

「そら、行くぞ雑多。　まずは我に相応しき装いを見繕うのだ」

「うぜぇ……そして兎に角、話が噛み合わねぇ……」

そして悪態を吐きながらも着いたのは、新都で一番の高級な店だった。

アーチャーは当然のように入り、朱然は少し躊躇しつつも後を追う。

「いらっしゃいませ。　本日はどのような物をお探しで？」

早速、客には店員が一人つくのが決まりだったようで、直ぐにアーチャーと朱然の下へと店員が現れる。

「うむ、我に見合う物を端から持て、ついでにそこの雑多にもだ」

「「は？」」

朱然と店員は、アーチャーに対して何言ってんだコイツ？という視線を向けた。

勿論、店員は今までの客でも居なかった慇懃無礼にして非常識さに。

朱然は、何故自分も買う事が決定しているのかに、だ。

するとそれを察したように、アーチャーは朱然へと振り返りつつ返答をする。

「そのような、みすぼらしい身なりは見るに耐えぬだけの事よ」

「かしこまりました」

そうしてアーチャーは店員に進められる端から似合わないと思った服はバッサリと斬り捨てるという、嫌なタイプの客で、朱然は店員の成すがままになっていた。

そして一時間後。

「ふむ、まあ及第点と言った所か……しかし――――」

描かれていた黒い服から、どこぞのモデルが着ているような服を着て、ニヤリと笑っている。

「こっち見んな慢心王」

そこには期待を裏切らず、女性ものの服を着せられた朱然が居た。

「存外、似合うものだな」

コノヤロウ！

声には出さないものの、朱然はアーチャーを睨め付けるが、その服だからかその視線に威力は無い。

因みにスカートとブーツになので生足がよく見える。

「わぁ～、あそこのカップルお似合いだね～。　でも女の子を泣かせる人はダメかなぁ～」

「なんか彼氏の方は俺様系みたいじゃん？　そして金のニオイがす

るからワタシは有り！」

「彼女さんはスレンダー美人のようだ、しかし……ふむ、絵になるカップルだな」

何所かで見た三人組の女性が通り過ぎて行きながら、朱然の心をブロークンファンタズムしていった。

「何をしている雑多？　次の店に行くぞ」

そんな朱然を尻目に、アーチャーは我が道を進む。

それから少し遅れて朱然が続き、お買い物は続くと思われたその時だった。

「ん？　おお？　アーチャーにバーサーカーではないか！」

アーチャーとはまた違った意味で良く通る声で朱然達を呼ぶ声がした。

そこには世界地図にアドミラブル大戦略？とプリントされてあるシャツを自慢の筋肉によってピッチピチにし、特大サイズのジーパンにサンダルを履いた征服王が居た。

というかどんな服のセンスだよ……と朱然が突っ込んだのは言うまでも無い。

「貴様は昨日の雑種か」

「昨日は共闘したのだから、もう少し何とかならんかのう？」

「断る。　何故、我が名も知らぬ貴様に便宜を図らねばならん？」

「ふぅ……全く、しかし――――――」

ライダーは嘆息し、朱然の姿をマジマジと見つめた。

「お主、昨日の騎士王に続いて、よもや女子（おなご）だったのか？」

「よし、アーチャー。　今だけお前の味方になる、コイツを今殺ろう」

「だが断る。　そのような些事に裂く時間などない」

相変わらずブレないアーチャーだった。

「確かに、時間は有限だ。　時にバーサーカー、余はお前が欲しい。余の臣下にとはもう言わぬが、盟友としてはどうだ？」

ライダーは唐突に断った筈の勧誘を再開し出した。

「雑種、雑多は今、我の従僕として案内させている。　身の程を弁えこの場より失せよ」

「なんだアーチャー。　なんだかんだでバーサーカーを気に入っているのではないか？」

「我の名を知るならば、昨日の有象無象よりはまだマシというだけの事」

何故か、朱然を巡り火花が散る。

「あ、さっきのカップルがいつの間にか三角関係みたいだよっ？」

「かぁ～ッ！　モテる女はこれだからッ！？　ワタシだって本気を出せば１００人くらいラクショーなはず！」

「普通に無理だろう。　ふむ、あの大男もよくよく見れば中々の偉丈夫、悪くない」

またしても先程の三人組が通り過ぎ、好き勝手言って通り過ぎて行った。

「あ～……そろそろ帰りますね～」

流石にいい加減周りから浮いてきたのを察知した朱然は、気配同化によってその気配を周囲に溶け込ませながらその場を後にしたのだった。

だが、朱然は言葉通りに間桐邸に帰る事は敵わなかった。

何故なら、子供達を連れてアインツベルンの森へと進むキャスターとそれを追うランサーの姿が在ったからだ。

「つくづく忙しないな、今回の聖杯戦争は……」

朱然は即座に英霊としての服を魔力で編み、紫のパオへと姿を変え、更に後を追う。

そして朱然は、前回出会わなかった破滅を未だ孕まぬ神父と冬の聖母との邂逅を果たす――――――

ＡＣＴ．６　共通討伐（後書き）

今回はちょっとした腹の探り合い＆ａｍｐ；ちょっと日常編。
ギルガメッシュと朱然さんの絡みを見たいとの事で書いてみました。
そして何故か既にズボンを穿いて、街を闊歩する征服王。
書いていたら暴走した、後悔はしていない。

ACT. 7　怪人襲撃

それは全くの偶然だった。
キャスターを追う内に、奴が向かっている場所に心当たりがあったからこそ、朱然は先周りをした。
森の結界の仕組みは眼によって熟知済み、結界の探査に引っかかる事は無い。
そんな中で、城から見慣れた風貌の女性と、何所か冷たい印象を持たせる女性が辺りを警戒しつつも離れて行くのを見た。
そして、それを追うように、常人ならざる速度で漆黒の僧衣をはためかせる人物の姿を捕えた。
キャスターへはセイバーが打って出て、それをランサーが監視している。
今は表面上は停戦中であるし、セイバーとランサーの騎士然とした気質を鑑みれば、共闘という手段を取るのは大凡考え付く。
だからこそ、朱然は世界が違うとはいえ、自分のマスターだったあの冬の少女も救う為に彼女達を守る事を選んだ。
だが予想以上に言峰綺礼は早く、護衛と見られる女性は既に血溜まりへと倒れている。

「何のつもりで邪魔をするバーサーカー？」

「何のつもり……？　そんなもの決まっている。　俺は個人的に救いたいから救う、それだけだ。　しかし、お前……本当にあの言峰綺礼か……？」

目の前のこの男からは、まるで人としての何かが欠落しているように見える。
人としての欲だとか、行動原理が酷く希薄だ。

そのくせ、その眼は全てを俯瞰しているようでいてただ一点だけを求めているような……そう、それこそ衛宮切嗣だけを求めているのだろうと窺わせる。

それ以外の物を求めていない、自分の命がそこで潰えるとしても構わず、“答え”を求め、渇望しているのだろう。

「あの、とはどの私を指しているかは知らないが、邪魔をしないでもらおうかバーサーカー」

「先程も言ったが、お前には殺させないよ……お前の求める“答え”なんて、俺には関係ないし、興味も無い」

「答、え……？」

「何故、私の求める物を知っている？」

綺礼は僧衣の中から黒鍵を指の間に挟み、魔力を通して刃を形成して構え、背後のアイリスフィールは、朱然の言う言峰綺礼の求める物に対して疑問を漏らした。

「お前の求める物は、衛宮切嗣が持っていると本当に思っているのか？」

「そうだ……私の求める物は、衛宮切嗣こそが持ち得るものだと、そう私の奥底から訴えるのだ。

だからこそ、私は問わなければならない。　衛宮切嗣は……お前の得た“答え”の意味はなんだったのか、と」

静かにして、何も映していないその無機質な瞳が、此処に居ない衛宮切嗣を求め、その四肢を、身体を突き動かしている事を窺わせ

る。

「貴方を切嗣には会わせてはいけない、それだけは解る……だから私は、貴方をこれ以上先には行かせない！」

綺麗の得体の知れない原動力を感じたアイリスフィールの袖から、細く長い柔軟な針金が伸び、鳥の形を成して綺礼へと襲い掛かる。

綺礼は一瞬だけ眼を細め、指に挟んだ４本の黒鍵を振るい、針金を刻んだ。

「……バーサーカー、貴方は今は私の味方と思って良いの？」

「ああ、約束しよう、アイリスフィール・フォン・アインツベルン。俺はまだ救いたい人が居る」

「？　意味は解らないけれど、一時休戦ね……ッ！」

綺礼が迎撃をしている隙に、お互いの意志を確認し、朱然は幻想工房（ミスティック・コレクション）を現わし、無銘の武器達を綺礼へと射出する。

本来であれば、唯の人間ならば数本穿てば肉塊になり果てるであろうその攻撃を、綺礼は代行者としての能力をフルに使い、時に避け、時に隠し持つ無数の黒鍵によって迎撃していく。

その合間に、アイリスフィールの針金が変幻自在に変形し、綺礼の死角を狙った一撃がその頭を貫くと思われたその時、突如現れた黒い影が逆手に持った短剣で針金を弾いた。

「アサシン？！　やっぱり、切嗣の言った通り脱落は嘘だったのね……」

「ふ、戦略の一つだよ、ホムンクルス。　アサシン、出てくるなと

言ったはずだが？」

「申し訳ありません」

その影は、細身の男のアサシンだった。

「折角、お前のお父上に取引したつもりだったんだが、戦うのなら容赦はしないぞ言峰綺礼？」

「まさか、サーヴァントすら補殺する結界が存在するとは思いもしなかったよ、バーサーカー。

しかもそれを突破した者も居たが、まさかあのような少女にサーヴァントが殺されるとは思ってもみなかった」

「アレは最近造った物でね……きちんと仕事したようで、アレの持ち主としては一安心だ。

しかし……お前の命令ではないとはいえ、セイバーの陣営にアサシンを目撃させたなら、総力戦でも始めて、アサシンの生存を知る俺と彼女を是が非でも殺しに来るか？」

「……いや、止めておこう。流石に素性も得体もわからぬサーヴァントと真っ向から戦おうとは思わんよ」

綺礼はそう言って、黒鍵を仕舞い背を向ける。

「簡単にこの森から逃がすと思う？」

アイリスフィールは、去ろうとする綺礼へと強がりと思われる笑みを向ける。

流石に一人では難しいが、バーサーカーが協力しているからこそ

可能な選択だ。

「その前に、そこの女が死ぬと思うが？」

綺礼の向ける視線の先には、未だ血に濡れる久宇舞弥の姿。
アイリスフィールもそちらに視線を向ける。
呼吸こそあるものの、酷く浅い呼吸。
早々に治療しなければ、手遅れになるだろう。

「……」

「此処は終わりだ。　さっさと教会にでも帰れ、腐れ神父」

「酷い言われようだが、まあいい。　いずれまた相見えるだろう」

朱然とアイリスフィールは、綺礼を見送り、今度は2人の間に緊張が走る。

「治療した方が良いと思うけど？」

「え、ええ」

アイリスフィールは、此方を警戒したまま舞弥の傍へと座り、血に濡れる事を厭わずに魔術による治療を試みる。
しかし――――

「……ッ、そんなッ、傷が深過ぎる……ッ！」

どうやら急所こそ外れていたようだが、完全に外れた訳ではないらしい事を朱然は魔眼によって知る。

このままでは、あと数分もしない内に出血多量によって舞弥という護衛は死ぬだろう。

「俺が治療しよう。　心臓さえ動いていれば、寿命は縮むが命は救える」

淡々とした朱然の説明に、アイリスフィールは治療の手を休めず、朱然の方へと顔を上げた。

「貴方が信用できる要素が無いわ……でも、お願い……彼女をッ、舞弥さんを助けて……ッ」

切実な願い。

冬の聖母の頬に涙が流れる。

それはまるで無垢な子供のようだった。

それが、以前のマスターであるイリヤスフィールの泣き顔を思い起こさせる。

見たくない。

それが彼女の知る人ならば尚更に。

だから朱然は舞弥を挟んで、アイリスフィールの対面にしゃがみ、呪文を唱える。

「エグジグ　エグザグ　エグゼクト――――」

「貴方は、一体……何故私を守ったの？」

この世界でいう大魔術に相当する完全治癒魔法によって、舞弥は一命を取り留めた。
それから朱然は舞弥を抱き上げ、アインツベルンの城へと向かう。

「俺は、前回のマスターも守りたいんでね……」

「それは、どういう……？　それに前回って……」

朱然はセイバーの方の戦況を見た。
見て、しまった。

「……ッッ！！」

「何が、あったの……？」

朱然が森の奥――――――キャスターとセイバーが戦っているであろう方角を見た瞬間、昨日の狂化の時程ではないが、今すぐにでも離れたい衝動に駆られるような……そんな感覚に、アイリスフィールは陥った。

「まずは話の前に、やる事が出来た――――――」

そう言って朱然が背後から取り出したのは、まるで水面に映った月のような白銀。
その装飾は見事な流麗を描き、そこに在るだけでどんな美術品を凌駕するであろう見事な細工。
本来は人を楽しませる為の竪琴のような弓を、朱然は仄暗い森へと向けた。
朱然の眼には見えている。
その先には、子供達に魔を植え付け、生きたまま身の内から喰い

殺すという、精神の正常な者ならば、考え付いてもやらない所業を、平然と嗤ってやっているキャスターの醜悪な姿だった。

朱然はそれを見て、躊躇わずに作業に入る。

あれ程の外道は、既に人とは思わないと。

朱然は静かな怒りを込めながら、その名を呼ぶ。

「悲恋（フェイル）――――――」

竪琴の物悲しくも美しい音が、場違いにも響き、朱然はただ射抜く的を見据えて、幻想工房（ミスティック・コレクション）に備蓄されている矢を番え、引き絞る。

番えられた普通の矢は、その時から弓の効果を受けてDランクの宝具となり、白銀の装飾を施された矢へと変わる。

「――――――琴弦（ノート）」

真名と共に、時を遡る矢は放たれた。

海魔に囲まれたセイバーとランサーを余所に、キャスターの魔導書目掛け、突き進む。

キャスターは武術の心得は有るのだろうが、今は既に発狂し、十全な技術は引き出せないだろう。

俊敏のステータスはDランク。

幸運のステータスもEランク。

その矢を避ける可能性は――――――

矢を放ったと同時に、キャスターの悲鳴が森に響いた。

「この数……俺の宝具は数に対して分が悪い」

「先程の策を凌がれてしまっては、流石に討つ手が無い……」

「さて、このまま消耗戦になるのは好ましいとは言えんな……こうなっては――――」

剣と槍の英霊が、海魔の包囲網に対し、一か八かの賭けに出た。

だが、それを凌がれ、更なる窮地に立たされた訳だ。

いよいよランサーは必滅（ゲイ・ボウ）の黄薔薇を圧し折るかを思案し始めた時だった。

物悲しい琴の音を聴いた――――

「む？」

「！？　この琴の音は？！」

その音を、セイバーは覚えている。

かつて自分に仕えた、憂いを秘めた白銀（トリスタン）の騎士が手にしていた琴弓の音。

それが何故――――？

セイバーの疑問を余所に、見覚えのある白銀の一矢が未来から飛

来し、キャスターの魔術書へと吸い込まれた。
キャスターは半狂乱になりながら憤怒の表情で消え失せ、ランサーは城へと顔を向けてから既にマスターの救援へと向かった。
そこには子供達の無残な肉片と、海魔達の肉塊、その中心に佇むセイバーだけが残された。

「……何故だ。　どうして貴方の矢が――――――」

キャスターの宝具である螺湮城教本（プレラーティーズ・スペルブック）を貫き、そのまま地面へと刺さった白銀の矢がサラサラと崩れてなくなってしまう。

「しかし――――――」

セイバーは腑に落ちない疑問を抱きながらも、己の守るべき者のいる場所へと向かうべく跳躍する――――――

「マスター、離れてッ！！」

「セイバー？！」

朱然が己の話を話そうとしたところで、キャスターを上手く撃退できたらしいセイバーが、アイリスフィールと朱然の間に割って入る。
そして、セイバーは朱然の握るソレを見た。

「キャスターは既に逃げたぞ。　もうここに用は無いだろうバーサ

ーカー？

それに、あの矢を私が見違えるはずがない……サー・トリスタンが持っていた悲恋琴弦（フェイルノート）を何故貴様が持っている？！

まさか、貴殿の真名は――――――」

彼の弓を用いる白銀の騎士は、変装によって物狂いの乞食に化け、王の前に立つが正体に気がついたのは愛犬ユダンだけだったという逸話を持つ。

ならば、今の姿はその変装なのではないのか？

セイバーはそう思い、問いを投げようとするも、アイリスフィールに遮られる。

「待って、セイバー。　私も彼に訊きたい事が有るの」

「……どういう事です、アイリスフィール？」

「ねえ、訊かせて？　前回とは第三次聖杯戦争の事を言っているの？　それに、私達を救う事で前回のマスターを救うというのはどういう事？」

もっともな理由をアイリスフィールが朱然に問う。

「俺が前回呼ばれたのは、異なる世界の１０年後に起こる聖杯戦争……第五次聖杯戦争だ」

「何を言っている？！　異なる未来？　第五次だと？！」

「いいえ、セイバー。　有り得ない話ではないわ……それなら幾つかのバーサーカーの不可解さを証明できるわ。

教えて……貴方の救いたい人の事」

恐らく、並列世界と未来という単語、更にアイリスフィール(じぶん)を守る事で救う事が出来る人物を、アイリスフィールは薄々気付いたのだろう。

後は、朱然が肯定すれば、それは確信となる。

「俺が救いたいのは、イリヤスフィール・フォン・アインツベルンだ」

「な！？」

アイリスフィールの娘が、聖杯戦争に参加する？

セイバーは、驚愕を顕わにする。

「やっぱり……でも、どうして？　聖杯戦争は６０年周期のはずでしょう？　どうしてイリヤが聖杯戦争に……」

「理由は簡単だ。

今回の聖杯戦争……第四次聖杯戦争で勝者は存在せず、聖杯の魔力は１０年で満たされる程度は残されていたからだ」

朱然は思い出すように、情報を渋ることなく教えて行く。

「待ってください！　勝者はいない！？　では、私は結局、国の救済すら果たせなかったというのか！？」

「その通りだ。　しかも、聖杯を破壊したのは他ならないお前自身だ、アルトリア・ペンドラゴン」

「！！　馬鹿な……ッ？！」

セイバーは眼を見開く。
何故、アルトリアの名を知っている？
臣下ですら知らなかった本当の意味の名を……しかし、それ以前に国の救済を真に願った自分が聖杯を破壊した？
それは一体何の冗談なのだ？
そんな事を自分がするはずが無い、バーサーカーの話に耳を貸す必要はない。
セイバーはそう断じ、目の前の英霊を睨みつける。

「だが、それを命じたのは衛宮切嗣。　令呪を2画消費させてまでセイバーに聖杯を破壊させた」

「！？」

「う、嘘？！　だって、誰よりも聖杯を求めた切嗣がそんな事をするはず――――――」

「聖杯は……もう聖杯とは呼べない物になっている。　だから、衛宮切嗣は聖杯を破壊した」

「――――――え？」

「何？」

悲鳴のようなアイリスフィールの否定の言葉を遮り、その理由を朱然は言う。

「聖杯の中身は、第三次聖杯戦争によって貴女の前のアインツベルンが強引に呼び出した復讐者（アヴェンジャー）の所為で穢れてしまった。

イレギュラーのクラスとして呼ばれたアヴェンジャーの真名は、この世全ての悪（アンリ・マユ）。
最弱の英霊であり、唯信仰されただけの青年だ。　だが、その信仰はこの世のありとあらゆる悪を統べた悪神としての呪いを得させた。
その呪いが、聖杯に吸収された瞬間に、透明な魔力は呪いに染まったという訳だ」

「そんな……信じられるはずが無い、そもそもバーサーカー。
信じるならば、お前の参加した聖杯戦争は未来では有ったのだろうが、異なる世界のものだろう？
この世界の聖杯が穢れている理由にはならないはずだ」

「だが穢れていない理由にもならない、なら俺は不確定なまま聖杯を破壊してこの世界とはおさらばさせてもらう。
だが救うと決めた者は全員救うッ、後の人間はどうなろうと知った事か！」

衛宮切嗣は、救う為に1を切り捨てて9を救う。
朱然は救いたいから9を捨て、1を取る。
対極に位置するその有り方。
決して目の前の英霊は、あの言峰綺麗とは別の意味で、衛宮切嗣という正義の味方になりたかった魔術殺しとは相成れない存在だという事を、アイリスフィールは直感した。

「教えてください、バーサーカー！　仮に聖杯が穢れていて不完全だとしても、聖杯には違いないはずだ！」

セイバーは、自身の願いを諦めきれない。
だからこそ、藁にも縋る思いで朱然に問う。

だが、朱然からもたらされたのは――――

「確かに願えば願いは叶う……でもそれは誰も望まない手段によって果たされる。
騎士王としての願い……ブリテンの救済なら、君の救いたい臣民全てが死ぬはめになるだろう」

「？！　どういう事です！？」

「簡単だよ……国とは王だけでは無い。　臣民も居るからこそ、国と成れる。
だから臣民全てを皆殺しにすれば、誰一人飢える事も、外敵の恐怖に晒される事もない。
その殺戮によって、お前の騎士達に裏切られるという悲劇すら殺すだろう。
聖杯は勝手にそう自己解釈して願いを叶える、此処の聖杯はそういうモノに成り下がったんだよ」

「そん、な……」

セイバーは膝から崩れ落ち、地面に両の手を着いた。
心から願い、世界と契約してまで求めた万能の願望器が、自らの願いを正しく叶えない欠陥品だったなど、信じたくも無い。
だが朱然の言うとおり、穢れている可能性も捨てきれない。
そんなことをするリスクは、臣民を危険に晒すという選択は、ブリテンの王として……犯せない――――
セイバーとアイリスフィールは、証明する材料がない朱然の、その戯言を信じてしまった。
その可能性は、間違いなく有り得てしまうからこそ、信じてしまう。

「ともかく、衛宮切嗣を交えて、俺の話の証明をさせてもらう」

そうして、朱然達はアインツベルンの城へと歩を進める。

世界は分岐する。

まるで血統樹のように無数に分裂し、統合し、行き止まりながら。

この世界は、本来から逸れ始めた。

この世界のこの聖杯戦争の行方は……行き止まり（zero）なのか、それとも――――――

ＡＣＴ．７　怪人襲撃（後書き）

王様の宴を期待した方々申し訳ない。
今回どころか次回でも宴になりませぬ……次々回には……ッ！

オリジナル展開がなかなか挟めんッ！！
だからそろそろ展開を変えて良いんじゃないかと思ったりしたんだ
……（遠い目

ACT. 8　行動原理

「止まれ！　バーサーカー、一体アイリ達に何をした？」

アインツベルンの城の前、草臥れたコートを着た男――――衛宮切嗣が、朱然達の前に立ちはだかった。

「別に何も……強いて言うなら、これから起こるかもしれない未来の話を教えただけだよ」

対する朱然は涼しげな表情で切嗣に返す。

「はっ……未来の話だって？　馬鹿な……そんな不確定な事を信じたというのかい、アイリ？」

「そうよ……彼の話には、矛盾が無いの……間違いが無いのよ……それに――――」

アイリスフィールが続けようとする言葉を遮り、朱然はその続きを話す。

幾ら魔術殺しと恐れられた衛宮切嗣で在ろうとも、自分自身ではなく、家族ならば少しは揺らぐだろうと言葉を紡ぐ。

「娘が聖杯戦争に参加するのは、お前も不本意だろう？」

「何？」

切嗣はイリヤスフィールの事を思い浮かべるも、よもや聖杯戦争に参加する歳までとなれば、それは既に相応の年齢となっている事

だと思い、疑問を浮かべる。
それ以前に、何故そんな妄言が飛び出したのか？という疑問が優先されると、直ぐに思考を切り変えた。

「俺は第五次聖杯戦争に参加し、お前の娘であるイリヤスフィールのサーヴァントとして召喚されたんだよ」

「……そんな妄言を信じる道理は無い」

切嗣の表情は変わらず、そんなものは考慮するつもりも無いと断じ、切り捨てる。
そこには躊躇いなどは無く、揺るぎの兆しすら無い。

「切嗣！！」

そんな耳を塞いだままのような切嗣に対し、アイリスフィールは叫ぶも、その声にすら耳を塞いでいる。

「もし……もしそれが本当だったとしても、僕の願いは変わらない」

淡々と切嗣は言う。
己の願いは、それらを犠牲にしてもする価値のあるモノとして。

「その聖杯すら手に入れられないとしてもか？」

「どういう意味だ？」

未来を知るというサーヴァント。
そして、得体の知れないこのサーヴァントの情報は、あればあるだけ集めたい。

そう思い、切嗣は問いを投げる。

「第五次聖杯戦争は、この第四次聖杯戦争の１０年後に催された。
つまり、この聖杯戦争に勝者はいないという事だよ。
しかも、お前は願いを叶えられず、妻を救えず、娘すら救えずに死ぬ」

朱然の口からは、これからの可能性の話を次々と並べたてられていく。
だがその話を聞いても、切嗣の表情が、心が変わる事は無い。

「……僕は間違えない。　未来は不確定なものだ……なら僕は、聖杯を求めて願いを叶える」

「その聖杯をお前自身が拒絶し、破壊した未来を変えると？」

セイバーの心を折ったその一言を朱然は言う。
未来の自分が聖杯を捨てた？
まさか、有り得ない。
言葉で此方を惑わせる気だろうか？
切嗣の思考は、既に情報収集のみに切り変えられ、朱然の言葉は響かない。

「同じ事を言わせるな……僕は、間違えない」

故に確固たる意志を以て決めた願いを止めると言う選択を、切嗣は認めない。

「……なら、同じお前の起こした事を体験しても平然とできるか？」

「やれるものならやってみるが良い、例えどんな事をされようとも僕は……僕の願いは邪魔させない」

「なら、お前達には直接見てもらう――――――」

――――――来れ（アデアット）

朱然は自分の描かれたカード取り出した。

良く見ると、ラテン語と数字が書かれているが、それが何の意味を成しているのかは朱然以外には解らない。

アレはバーサーカーの宝具なのだろうか？という疑問を余所に、効果は直ぐに現れた。

一瞬にして視界が奪われ闇に包まれた。

しかし、アイリスフィールの姿だけは見る事が出来る。

結界？

まさかこのまま僕を殺すつもりか？

そう思い、切嗣が身構えた時だった。

「始めまして、って言ったらいいのかな？」

聖杯戦争の記憶から構成された冬の妖精が、２人の前に現れる。

まだ８歳のはずのイリヤではない。

既に１２、３歳の姿だった。
見間違えない。
その銀髪と紅い瞳を、見間違えるはずが無い。
だが、罠だという可能性も有り得る。
切嗣は警戒を解こうとはしない。
必要とあらば、この手で殺す事も躊躇わないだろう。

「イリヤ……」

思わず、アイリスフィールはその名を呼ぶ。

「水仙……ああ、貴方達から見てバーサーカーのことね？　私の時はイレギュラーとして、勝手にバーサーカーに付いてきたんだけど。キリツグとお母さんに合わせて、バーサーカーって言っておくね？　えへへ、変な感じ……」

イリヤスフィールは困った笑顔を浮かべる。

「バーサーカーが言ってる事はホントだよ。
私は１０年前から身体を調整されて、寿命と引き換えに、最高の魔力を運用できるマスターになったの。
バーサーカーが大聖杯を壊しちゃったから、私の世界でこれ以上の聖杯戦争は起こらないし、この世界でもバーサーカーは聖杯を壊すつもり。
これはバーサーカーにとって聖杯戦争に参加する上で当たり前の事だから、倒されるまで止まらないよ」

数秒に圧縮された未来の聖杯戦争。
本来起こるべきではなかったはずの闘い。
本来のどの結末にも繋がらない終わり。

それを１０年後のイリヤスフィールに案内され、補足説明を受けながら衛宮切嗣、アイリスフィールは見せられた。

セイバーが見たのは朱然の国、臣民。
大陸は群雄割拠の混乱に見舞われ、血を血で洗う戦いの果てに収束し、王となった物語。
代わりに、朱然も見た。
魔術殺しと言われた魔術使いの生き様を。
アーサー・ペンドラゴンの生涯と後悔を。
親しい者達を犠牲にしてでも多数を取る衛宮切嗣という壊れ続ける男。
完璧であろうとしたが故に破綻し、裏切られ、己に仕えた騎士達と戦った王。

「「「「……ッ」」」」

そして、目を覚ます。
一瞬の空白は夢現の曖昧さから目を覚まさせる。
だが、それらを体験した者達の表情はそれぞれだ。

「あれが……第五次聖杯戦争……」

「あれが……貴方の国か……何故、何故貴方は国が滅びても、そうも平然としていられるのだ……」

打ちのめされる2人を余所に、切嗣は相変わらずの仏頂面。

対する朱然は、苛立った表情で切嗣を睨みつけていた。

「悲観する事は無いよアイリ。　あれは未来の……それも並列世界の事であって、僕達の事じゃない。
現に、バーサーカー自身が変えようとしていることがその証明だよ。　僕達が間違わ無ければ良いだけだ」

切嗣は、自らの素性を晒したも同然なバーサーカーを見据えながら言う。
鵜呑みにするには危険だが、それでも信憑性が無い訳ではない映像だった。
朱然という真名。
朱然の持つ宝具の特性。
朱然という名の英霊の人格など。
得られた物は大きい。
これからの戦略に大いに役立ってくれる事だろう。

「ああ、その通りだ。　俺は並列世界とはいえ、世界を変えてしまう存在だ。
俺は、俺が召喚されなかった第五次聖杯戦争の結末を3つ知っていて、そのどれとも違う終わりを迎えた。
だがそれは変えられると知っていた事だったからだ。　だが変えれば、本来とは違った状況や予想外の敵が現れた。
変えると言う事は、その本来よりも困難になって行くんだぞ……
それをお前は間違えないと言い切るのか？」

朱然の歩んだ道は、変化と共にあり、それと同じく困難の道でもあった。
変えれば知らない状況と敵が朱然を苦しめ、朱然は辛うじてそれを乗り越えた事もあれば敗北した事も有る。

それを衛宮切嗣は間違わないと言い切った。
それは朱然には無い強さだ。
それを羨ましく思う。
だがそれ以上に危う過ぎる。

「勿論だとも。　僕は願いを叶える……下らない争いばかりを続けるこの世界を、この戦いを最後にして見せる」

アインツベルンの城で、アイリスフィールに言った自分の理想を改めて告げる。
何を言われても、自分の願いは変わらない物だと示す為に。

「恒久的な世界平和、か……お前達が俺の記憶を見た様に、俺も見させてもらったぞ……衛宮切嗣と、アーサー王の生涯を。
そして確信した……衛宮切嗣、お前は家族の為だけに生きろ。
それがこの世界にとって最善だ」

「何を言い出すかと思えば……」

あの結界は、バーサーカー自身の体験、もしくは幻影を見せる物？
そして、取り込んだ者の記憶を見る事ができるのか？
ならば、此方の手札を晒したに等しい。
切嗣に少しの焦りが走ったが、得られた情報を考えれば、まだイーブンだと割り切る事にした。

「お前は言峰綺礼を忌避している事は見させてもらった。　お前は自分の諦めと後悔を正当化したいだけだろう？
自覚できないのか、目を逸らしているのかまでは知らないがな……ッ、最初の後悔からお前こそ何の進歩もしてないだけだろう！？」

最初の後悔。

衛宮切嗣が救えなかったシャーレイという少女。

■■■■が救えなかった■■■■という姉。

同じ道を歩んだんだと思わせる2人。

衛宮切嗣は最初に救えなかった事を後悔しない為に迷わず、親しい人すら殺した。

朱然となった■■■■も、今度こそ守りたいと見知らぬ人を殺し続けた。

だが、岐路で2人の道は分かたれた。

衛宮切嗣は救うという手段が目的にすり替わって1を切り捨てて9を救った。

朱然は本当に守りたい物の為に9を切り捨て1を取った。

「お前に何が解るッ！！　その人を殺し続けた返り血で染まった手で幸福を手に入れても、過去が無かった事にはならない！

奪ったのなら……それを貫き続けなければッ、今までの犠牲はッ、その卑劣な行いが報われるはずが無いのが解らないのかッ！」

初めて、セイバーは己のマスターの感情を見た。

あれ程までに此方に耳を貸そうとはしなかったあのマスターが、激情を剥き出しにしている。

アイリスフィールは思う。

言峰綺礼が合わせてはならない者だとしたら、バーサーカーは会わせなければならない者だったのかもしれないと。

「見知らぬ誰かが不幸になった事を悔いるな、知るなとは言わない！　間違っているとも言わない！
だが、知ったことで自分の幸福を見つけられない自分に慣れたら、それはもう人間として終わってる！
そんなのは既に死人だ！　死人に人は救えない……死人は新たな同胞を呼び込むだけの化物だ！
化物は人を救っても感謝などされない！
だからこそ人を救うのは人でなければならないのに、お前のその考えや在り方は既に死人のそれだ！
本気で人間を救いたいなら、まずは自分とその周りを救って見せろ！　それでようやくスタート地点だ！」

まるで衛宮切嗣という人間を理解したように語る朱然に対し、切嗣は反論しようとするも反論が出てこない。

「……ッ、よくもッ、そんな……わかったような事をッ！
僕は……僕はもう、戻る事は……」

切嗣はバーサーカーの言い分に歯を食いしばり、理性な反論を言えず、硬く拳を握りながら今までの行いを鑑み、否定を言おうとする。

それを言わせる前に朱然は更に言葉を続けた。

「確かにもう戻るのは無理だろう……だがお前は足踏みしてるだけだろう？　戻れないなら進めばいい。
世界の一部になった俺が言ってやるよ……ッ、世界は、お前の救いなんて望んでいないし、誰もお前に世界を救ってほしいなんて思ってない。
9を取って1を捨てた後、その救った中からまた9を取り1を捨てる。　それをお前は繰り返す。

最後の最後に残るのは1と1……お前はどちらを救う？　命を数と見なしたお前は何の基準を以て切り捨てる？」

その問いは当然の矛盾。
少し考えれば気付くはずの矛盾。
数で考えたとしても、いずれはその間違いに行き当たる。
それが今この時だった。
衛宮切嗣は葛藤する。
まるで0の概念を知らない機械のように脳がエラーを起こす。
切り捨てるべきものは既に同数の1と1。
数の次に斬り捨てるべき基準（モノ）は何だ……？
才能か？
性別か？
歳か？

ワカラナイ、ワカラナイ、ワカラナイ――――――

カンガエロ、カンガエロ、カンガエロ――――――

「迷ったな？　その迷いで残りの1と1は死ぬ。　だから俺は護りたい方を守る」

ビシリ、と。
衛宮切嗣は胸の奥で何かが砕ける音を聴いた。
そして、切嗣はガックリと糸の切れた人形のように膝を着き、眼を見開く。
そのエラーはやがて衛宮切嗣を強制シャットダウンさせ、致命的な問題を孕ませる事になる。

「切嗣……ねぇ、切嗣？　貴方は頑張ったわ。　貴方の言うとおり、

この世界とバーサーカーの言う世界は違う。
貴方が望むのなら私は貴方について行く……世界を救うという願いは間違ってないわ。
その犠牲になれるなら私は喜んで貴方の為に犠牲になる。　教えて切嗣？　貴方は……どうしたいの？」

アイリスフィールは、切嗣の頭を胸に抱き、あやすように言う。

「僕は……僕、は……――――――――――」

そして、切嗣の選択は――――――

「セイバー。　俺はお前達が望むのなら手を貸そう……そうマスターに言っておいてくれ」

あの後、アインツベルンの森の中程までを見送り……というよりも監視して来たセイバーに朱然は言う。

「解りました……その時がきたのなら共に戦いましょう。　ですが――――」

「解っている。　あれだけ俺が好き勝手に言って最後には反論もできなかった事は俺も意外だった。
が、それでも敵となる事になったならはお前達を倒させてもらう。
それだけだ」

朱然はそう言ってアインツベルンの森を後にした。
だが朱然は未だ間桐へは帰らない。
またやるべき事がある。
あの所業を目にしたのならば、朱然が放っておくはずが無い。
キャスターの討伐だ。
転移魔法で見覚えのある場所に出る。
征服王とそのマスターが座っていた冬木大橋の上だ。
そこから魔眼を通し、河にはあの忌々しい魔力の残滓が垂れ流されているのを見つけるのは当然だった。
朱然は冬木大橋から跳躍し、河のスレスレを飛ぶ。
眼下の水面は既に暗くなった夜空を写し、空と水面の境界を曖昧にしている。
そんな幻想的な景色を数十分眺めただろうか？
唐突に魔力残滓が濃い水が流れる貯水槽の入口が眼に飛び込んできた。

その時だ――――――

唐突に入口が爆発し、見覚えのある戦車（チャリオット）が放電をしながら爆音を響かせて夜空へと駆け上がった。
朱然はそれを見てライダーの方を追う事を選んだ。
ライダーが中に居て、そこを壊した事は想像だに難しくない。
そのまま頭上を翔ける戦車を全力で追い縋ってみるものの、如何せん追い付けない。
流石は機動力が高いライダーのクラス。
此方の最高速を以ても、追い付くのは至難だ。
このままでは気付かれないと思った朱然は高度を上げて、ライダーの戦車と同じ高度へと浮上する。

すると、ライダーがこちらに気付いた為に速度を落とした為に、ようやく追い付く事ができた。

「おう、バーサーカー！　空中遊泳か！？」

身一つで飛ぶ朱然に対し、ライダーは？を引きながら大声でこちらに声を投げかける。

「違うよ！　キャスターの居場所を見つけたと思ったらお前達が飛び出していったから追っかけてきただけだ！」

「まあいいわい！　降りるぞ坊主！」

そう言ってライダーは誰も居ない新都の一角に降り立った。
それに少し遅れ、朱然も地面に両足を付ける。
そこで、はたと気づいた。
ウェイバーが小さな女の子を抱きしめていた事を。

「あの娘は？」

「キャスターのところに唯一残っておった。　残りは、無残なもんだったわい。　既に手の施しようも無くてな……」

あの図々しさが嘘のようにライダーは首を振って言った。
あのキャスターがまともな思考ではなかった事は知っている。
眼を覆いたくなる惨状という物が有ったのだろう事は予想に難しくは無い。
ウェイバーは震え、その泣き続ける少女を抱締めている。
朱然はその少女に漆黒という印象を持った。
長い髪は当然一度も染めていない黒、褐色の黒い肌。

服は白いワンピースを一枚だけ。
その白さが少女の黒さを引き立てている。
そして――――――

「おい、ライダー。　あの娘は――――――」

朱然は気付く。
あの少女が何なのかを。
だがライダーは聴こえないとでも言うように朱然の言葉を掻き消した。

「やれやれ！　この鬱憤、今夜は飲み明かして晴らすとして、何所ぞに余を満足させる様な河岸（かし）は無いものか……おお、そうだ！」

ライダーは独り言を呟いたが、やがて大声を上げて朱然の方へと向き直った。
朱然は即座に嫌な予感を感じたがライダーの巨大な手が既に肩を掴み、脱出は不可能と思い知る。

「のうバーサーカー。　少しの間、坊主と娘っ子を見ていてはもらえんか？」

「は？　正気か？」

自分のマスターを敵のサーヴァントに任せるとは正気なのだろうか？
と朱然は思っている間にライダーはそそくさと戦車へと乗り込み、いずこかへと邁進して行ってしまった。
残されたのは女のような男が2人とロリッ娘が1人。

「はぁぁぁぁ～」

盛大な溜息を吐いた後、なんだかんだ言って面倒見の良い朱然はウェイバーを励まし、ロリッ娘が記憶喪失だという事を訊き出した。

そうしている内に酒樽を積んだライダーが現れ、先程後にしたアインツベルンの城へと2度目の侵入をする事になったのは言うまでもない。

ＡＣＴ．８　行動原理（後書き）

言峰綺礼と衛宮切嗣の性格云々が、どうにも自分は理解できていないような……だからこそ表現しようとすると何所か変な部分を感じるような……それこそが自分の二次創作の難関です。
取り敢えず、ソレっぽく繕ったと思うのですが、どうですかね？

因みに余談ですが、この小説の総合ＰＶ・ユニークアクセスが１００万ＰＶ＆ａｍｐ;８９万になりそうです。
そこで何かしらの特別編でも書こうと思うのですが、何か見てみたい話などがありましたらお気軽に書いて頂ければ、書けそうな案を２、３話程書いてみようかと思います。
後は見て見たい場面のイラストとか？
まあ、自分で思い付かないので募集という感じですね～。
それを世に言う丸投げというのですが、それはまあそれとして、お待ちしてまーす！

とある事情により微修正。

ＡＣＴ．９　王器優劣（前書き）

切嗣は引き籠った。ｂｙアイリ

ＡＣＴ．９　王器優劣

朱然はしばらく使っていないらしい古めの調理場で、簡単にできる酒に合うつまみを作っていた。

古めかしいその場所は、墓守り人の宮殿を思い出させる。

朱然の主観時間で言えば、未だ一月（ひとつき）も経っていないのだ。

戦いに次ぐ戦い。

傭兵みたいだな……はは……とヘタを取り、さっと茹でたオクラを斜め切りしつつ苦笑する。

皿に盛り、その上になめたけをかけてまずは一品。

次にサーモンの切り身の半分を、塩コショウを適量かけて魚焼きの網に乗せ、軽く両面を炙るように、しかし完全に焼けないように焼いてから少し冷まして薄くスライスし、ワサビ醤油をスタンバイ。

これで2品目。

次はカブの皮と葉を切り、薄くスライスしてから塩を振って軽く揉んで放置。

放置している間に、トマトを取り出し食べやすい大きさにカット。

フライパンに油をしき、おろしにんにく、トマトを入れ、塩・コショウ・オイスターソース少々・醤油で味付け。

皮がぐずぐずしてきたら3品目の出来上がりだ。

放置していたカブに砂糖と酢を合わせて、甘酢を作り、上からかけて混ぜ合わせ、七味唐辛子をふって４品目。

淀みの無い流れで、次々と酒に合い、簡単に作れる酒のつまみを調理していく。

「バーサーカー、どうですか？」

「貴方、本当にサーヴァントなの？」

そんな調理場に腹ペコ王、セイバーとアイリスフィールが現れる。
そこにはサーヴァントで、バーサーカーのはずの人物が、何所にでも売っているようなエプロンを身につけて料理をしていた。

「俺は間違いなくサーヴァントだよ。　サーヴァントだって生前は人間だったんだ。
料理が趣味のサーヴァントだっていると思うけど？　というか、手伝いに来たのか？」

「え、ええ、何かできる事は――――――」

セイバーが進み出る。

「なら宴会の席に出来上がったつまみを持って言ってくれ。　ああ、つまみ食いはダメだぞ？」

朱然は、腹ペコ王としてのセイバーを知っている為につい、そんな事を言ってからかう。

「――――――そんなことしません！」

「セイバー、口元口元」

セイバーの反論があったが、アイリスフィールに涎を指摘された。

「……ッ、私はそんな事はしません！」

口元を拭って、もう一度言い直すセイバー。
例え言い直したとしても、ダメだったところを見せた時点で既に色々と台無しである。

「じゃあ、こっちをお願いね、セイバー」

「了解です、アイリスフィール」

セイバーは両手に2皿持って、厨房を後にした。

残ったのは、良いとは言えない沈黙。

朱然は料理をして、その背中を眺めるアイリスフィール。

先に言葉を発したのは、朱然の方だった。

「衛宮切嗣はどうしてる？」

「自分の願いの葛藤に苦しんでいるわ……多分、あの人は……もう」

僕は……僕、は……進んでも、良いのか？

「あの言い方なら、まだ救いようはある。　手遅れなら理解さえできずに切り捨てるだけさ。

自分の理想に区切りを付けられるなら、これからはもう大丈夫だろうさ」

朱然は依然、料理を続けている。

料理をするサーヴァントの背中は、何所か衛宮切嗣と似ている気がする、とアイリスフィールは思う。

でも、何かが違うという事も感じるのだ。

「もしかして、貴方も――――――」

切嗣と同じ苦痛を、苦悩を持っていたんじゃないの？そう言おうとして、朱然は最後の料理を作り終え、言う。

「さて、これで最後だ。　運ぶのを手伝ってくれ」

「え、ええ……」

促されるままにアイリスフィールは料理の皿を持ち、既に料理を持った朱然の後を歩く。

「俺は愛している人に気付かせてもらえたからな……傷ついてこそ、傷つけてこそ、人は本当に人を好きになれるんだと思う。
その２つを恐れたら、それは唯の逃避とか馴れ合いだよ……多分ね」

「え？」

唐突に、朱然はそれだけを言った。
その表情は朱然の後ろを歩くアイリスフィールには解らない。
でも朱然の言った言葉の意味は確かに解る。
アイリスフィールは、その意味を汲み取って決意した。
どんなに傷ついても、傷つけても、衛宮切嗣は自分が支えて行こうと――――――

「おお！　ようやく酒の肴が出来たか！
しかし、ますます欲しいのぉ……実力は申し分なく、多くの武具

を持って料理も出来るッ！
　これ程の才を持つ者はそうは居まいて！　で、お主、そこのところはどうなのだ？　余の盟友にという問いの答えは？」

　征服王の賛辞と暑苦しい勧誘をしかけられる。

「はいはい、お断りお断り」

　征服王に勧誘される前には主に華琳――――――恋姫の世界の曹操に熱烈な勧誘をずっと受けていた朱然にしてみれば、勧誘をあしらうのは御手の物だ。
　朱然自身、かなりぞんざいに扱い始めているのはきっと訊き間違いだろう……多分。

「むぅ……駄目かのぅ？」

「ダメ」

　朱然はぴしゃりと勧誘を断った、そんな時。

「揃っているな、雑種」

　相変わらずの黒い私服アーチャーが現れた。

「な！？　何故アーチャーが？！」

「そこの雑種に呼ばれたまでの事。　王としての器を計る宴などというのだ、我が王としての格を見せるいい機会であろう？」

　腕を組んだままのアーチャーがライダーへと視線で示す。

「良く言った。　ならば私も王として戦うまで、その不遜な物言いが何時まで続けられるか、見届けてみせよう」

早くもアーチャーとセイバーの間で火花が散る。

「よし、では余の用意して来た酒を開封しよう！　むん！」

ライダーの戦車に積み込んであった樽にライダーは近づき、既に地面に置かれたそれを槌ではなく、己の剛腕で割った。

瞬間、まるで果物を思わせる香りが漂う。

それは日本酒の中でも特定の条件を満たした物だけが漂わせる事のできる吟醸香。

中には日本酒が満たされていて、その中には恐らくこの街に在る日本酒の中でも最高と評すべき酒なのだという事を酒を飲める者達は感じた。

流石は数多の略奪をしてきた征服王。

酒の目利きも伊達ではなかったという事だろう。

「では早速一杯目を呑もうではないか！」

そう言ってライダーは酒樽の前に胡坐をかいて取り出したのは何故か柄杓。

それで掬おうとするところに朱然は待ったをかけた。

「それは柄杓だ……酒器じゃない。　う～ん、確か何所かに在ったはず……お、有った」

そう言って、朱然は幻想工房（ミスティック・コレクション）に手を突っ込み、空間をまさぐって、目当ての物を掴み引き抜いた。

「ほら、これ」

そう言って取り出したのは升だった。

以前の世界で何となく突っ込んだもので、檜製の四角升。

それをライダーに手渡す。

「む？　丸くないのか？」

「升という日本ならではの酒器の一種だ。　ついでに俺の酒も出すかな……」

「ほう！　それはいい！　では改めて……余の酒から飲み干すとしよう！」

全員が酒樽からその透明な吟醸酒を掬い、飲み干す。

海外でも、ジャパニーズサケとして受けの良いその味にセイバー、ライダー、朱然は舌鼓を打った。

「――――なんだ？　この安酒は？」

しかし、そこで異を唱える者が居た。

そう、アーチャーだ。

眉間に皺を寄せたアーチャーが不快そうに言う。

朱然はもう一度、その酒を飲む。

銘柄は知らないが、味も果物のような日本酒はそうそうない。

十分に最高の酒の条件は満たしている。

だが、それを切り捨てるアーチャーはそれ以上の味を知っているのだろう。

ならばと朱然が幻想工房（ミスティック・コレクション）に手を突っ込んで取り出したのは、しっ

かりとした焼き物の瓶。
取り出したそれを各々の升に注ぎ、朱然は飲むように促した。
色は日本酒と同じく透き通り、先程の日本酒以上の甘い香りが鼻孔をくすぐる。

「これがバーサーカーの酒か？」

「そ、知り合いに……というか認めたくないけど、仙人としての師匠が居てね……そいつから貰った奴だ。
造り方も知ってるし、まだストックも有るけど、こんな機会でもないと俺は飲まないし」

中国で言うなら果酒と呼ばれる果物から造った醸造酒だ。
しかし、普通の果物ではなく、水に溶かせば酒と成り、仙人が食べるとされる仙人の桃、仙桃の最高の物――――仙桃大吟醸・豊満を原料とした高級品だ。
元は原始天尊の秘蔵の一品だったが、太公望がパクり、それを朱然がパクったという経緯があるが、自分からは酒をあまり飲まなかったために、飲む機会を逸し、今まで寝かされていたが、騎士王、征服王、英雄王がいるのなら、それこそ飲む時だと思い朱然は此処で取り出した。

「ふむ？　仙人の作った霊酒か、先程の安酒よりはマシだな……悪くない」

「仙人の霊酒とな？　どれ……むぅぅッ、美味いッ！！　これ程の喉越し、透き通るようで居て確かにそこに在る存在感！！
余の飲んだ酒でも最高と言わざる負えぬ！　このような味の酒は滅多にあるまい！！」

流石のアーチャーも割と満更ではない様子。
ライダーは唸り、既に2杯目を楽しんでいる。

「なるほど、これは確かに薦めるだけの事は有る。　これ程の酒で有りながら、毒性も依存性もない。　翌日も酔いを残す事は無いな。
しかし、バーサーカーが作った肴も美味い。
くっ……何故、私達の時代はあれ程雑だったのだ……バーサーカーが居れば、我々はまだ戦えたはず……いや、何を言っているのだ私は……」

思いの外の高評価で、朱然は満足げに頷く。
セイバーは酒よりもつまみの方を食べ、何やら葛藤している。

「気に入って頂けたようで何よりだね」

「フ、思いあがるなよ雑多。　確かに今の霊酒は悪くは無かった。
我も認めよう……だが、我の酒こそ至高の酒よ」

そう言ってアーチャーが取り出したのは黄金の杯と黄金の瓶酒。
嬉々として言うアーチャーは、その封を解いた瞬間、その場には言葉にし難い芳醇な香りが溢れた。
そこに居たアーチャー以外の者達は、例外無く先程まで飲み、潤っていた咽が乾くのを感じる。
アーチャーは、その酒を盃に注いで高らかに言う。

「これこそ、我の蔵に眠る王足る我のみが味わう事を許された『王の酒』よ。　貴様らの持つ酒は我の酒には届き得ぬ。
故の本物の味という物を味わってみるが良い」

自信の笑みを浮かべるアーチャーが、己の酒を飲み干し言った。

「言われるまでも無い！」

ライダーと朱然は迷わずその盃を空にする。

朱然は鼻孔をくすぐる香しい匂いで楽しみ、次に舌に滑らせたところで、幸福という物を感じた。

言葉に出来ない味。

そう形容するしかない味だったのだ。

酒をあまり嗜まなかった朱然でも、この酒ならば毎日でも飲みたいという衝動に駆られる程に。

「むほォ、美味い！！　凄ぇなオイッ！　バーサーカーの酒も人間の手による醸造じゃないと思ったが、コイツは正に別格だ！　こりゃ神代の代物じゃあないのか?！　ええッ、アーチャー?！」

この酒に魅せられたライダーは、興奮しながらこの酒の詳細を訊き出している。

「俺の酒も少しは届くかと思ったが、これにはダメだ……勝てる気がしない」

朱然は素直に、英雄王に白旗を上げた。

「流石は我の真名を唯一知っていただけの事はある。　物解りの良い者は、それ相応の褒美を取らすぞ？　我の臣下として下るならば、聖杯を分けてやらんでもないが？」

何を血迷ったか、アーチャーまでバーサーカーの勧誘をし始めてしまった。

アーチャーと朱然は、並列世界故にアーチャーは知らないが一度

と言わず、三度は殺し合った仲。
しかし、最後にアーチャーは朱然の名を覚えたのだ。
朱然はアーチャーを嫌っているが、意外と相性が良いのかもしれない。

「断る。　俺は誰の臣下にもならないと前にも言った。　まあ、この酒を飲めた事だけでも十分に良い経験だったよ」

「謙遜は時に美徳だが、過ぎれば無礼だぞ雑多？」

他人に忠告するというレアなアーチャー。

「面倒臭い奴め……」

そんなアーチャーに対し、地で返す朱然。

「まあ良い。　これで我の酒が最高だという事は知らしめた。　故に我こそ真の王で相違は無かろう？」

「ふざけるなよアーチャー。　酒だけで王の器を計ろうなどとは王としての名が泣くぞ？」

「宴席に自身の酒を供せぬ輩こそ、王に程遠いと思うが？」

先程のある程度は緩和されていた雰囲気が、一気に臨戦態勢の最悪なモノへと変わった。
そこに、ライダーが仲裁を買って出る。

「これこれ、止めんか！　折角の酒がマズくなるわい！　論点がズレておるぞ、セイバーにアーチャーよ？

確かにアーチャーの酒は誰の酒よりも至高の一品だったが、酒と聖杯は別物だ。
今回の宴の趣旨は、聖杯を掴み得る者としての大言を吐けるかどうかを計る聖杯問答だろう？」

「確かに……」

セイバーは、熱くなった頭を振るい、熱を下げて謝罪した。

「正論だな雑種。　だが前提が間違っている。　アレは元々我の所有物、それを勝手に争い巡るなどということ自体が間違いなのだ」

「ほう？　つまりあの聖杯をお前は持っていたということでいいんかのう？」

「知らぬ」

「何？」

「雑多よ。　我の真名を知っているのだから、お前が教えてやれ。
ついでに、我に見合わぬなどと言った理由もな」

会話に混ざらず、アーチャーの酒を楽しんでいた朱然に、いきなり話を振るアーチャー。
朱然は杯を置き、仕方なさそうに説明を始める。

「あー、コイツの言ってる事は間違いない。
何せ、一度は世界のあらゆる財を納めたとされる王だからな……で、コイツ自身はその膨大に貯蔵されている蔵の全容を知らないから知らないと言った訳だ。

まあ多分、蔵の中をひっくり返せば聖杯の一つや二つ転がってるんじゃないか？」

朱然がアーチャーに話を返す。

「然り。　雑多の言うとおりの理由で間違いは無い、続けよ」

新たな酒を取り出したアーチャーは言う。

「で、セイバーに話した説明が来る訳だが、それは少し後に話そうか……王様としての在り方を比べ、問う場なら、セイバー……お前の答えが見つかるかもしれないぞ？」

「私は……」

朱然の言葉に、セイバーは躊躇する。

朱然に揺らがされた、自分の願いの“正当性”とでも言うべき物を。

「……何やら、込み入った話になりそうだのう？　ならば余から聖杯を求める理由を明かそうか。

余の願い、それは……“受肉”する事だ」

「……お前、前は世界征服って言ってたじゃないかよ」

ライダーの傍らで、キャスターの工房から救い出した少女の面倒を見ていたウェイバーは、己のサーヴァントに力無く突っ込みを入れた。

いつものようにヒステリーとも取られかねない剣幕は、キャスターの工房の惨状を見せつけられたウェイバーには無かったのだろう

事が、ライダーから事情を聴いていた朱然には窺えた。

「いやなに、余の征服は与えられるものではなく、余自身が行ってこその征服なのだ！
ならば、肉体にすら難儀していては何も始まらぬ！　故にッ、余は受肉し、裸一貫からこの現世を征服しようと思うとる！
貴様はどうなのだ？　アーチャーにセイバーよ」

ライダーは豪快に笑い、セイバーとアーチャーに言う。
バーサーカーの朱然に話が振られなかったのは、既に聖杯は要らないと宣言していた為だろう。

「2度説明する気は無い。　聖杯は我の所有物、我の財を盗人猛々しく盗り合うなどということ自体がそもそも間違いなのだ。
貴様ら雑種は我の法に則り、我が裁く……それだけのこと」

「つまりはお主は、自分から聖杯を奪って見せろ、と、そういう解釈でいいんかのう？」

「それで良い。　お前が犯し、我が裁く。　もっとも、我が貴様を蹂躙するだけで事足りる事だろうよ」

絶対の自信。
それが双方から発せられる。
共に規格外の必殺を持ち得る英霊なのだ。
例えその情報を知らずとも、この2人は真っ向からの潰し合いこそ望むところなのだろう事はこの場の誰もが理解していた。
お互いに相容れぬ事も、だ。

「なるほど単純明快だ。　ならば後は剣によって決着を付けるだけ

か……で、セイバー、貴様が言い淀んだ懐の内はどうなのだ？」

「私は……私の願いは……祖国の救済だ。
だが、解らないのだ……今回の聖杯が、私の願いを聞き届けるのかが……運命を変えられる物なのかが……」

新都の公園。
そこには3人の影が有った。
1人は、漆黒よりも黒い刀を携えた間桐雁夜。
もう1人は、栗色の長髪の女性――――遠坂葵。
最後の1人には意識が無い小さな女の子――――遠坂凛。
凛は、ただベンチの上に寝かされているだけだ。
何所も可笑しなところは無い。

「雁夜、君……？」

「葵さん……凛ちゃんを追って来たんだね」

穏かな雁夜に対して、葵は困惑していた。
凛と雁夜は前から遊んでいた事もあり、仲が良かった。
御三家に数えられる間桐の家を嫌い、出奔した雁夜が何故、今この時期にこの街に居るのだろうか？
しかも、その容姿は最後に見た時とはかけ離れている。
葵から見れば、その引き攣れた顔は、悲鳴を上げてしまいそうになるくらいに酷かった。

「凛に何をしたの……？　もしかして、助けてくれたの？」

「流石に、今のこの街は危ないからね……凛ちゃんを見かけた時は驚いたよ。

バーサーカーには家を出るなと言われていたんだけど、キャスターが子供を攫ってるらしくて、放ってはおけなかったんだ……」

葵にとって、今の発言は致命的なものだった。

雁夜と葵は幼馴染で、昔から雁夜は関わりたくも無いと言っていたのに、サーヴァントのクラス名を2つも言葉に出した。

それの意味するところは1つ――――

「雁夜君、貴方……聖杯戦争に……？」

――――葵の主人である時臣と、殺し殺される間柄になってしまった事だ。

「ああ……間桐に養子に出された桜ちゃんを、僕は救いたかったんだ……。

結果的に俺のバーサーカーがあの爺を殺してくれたから、もう戦う意味も無いと思っていたんだけど、葵さんのところに……時臣のところに桜ちゃんを返したら、今度こそ俺は桜ちゃんを救えなくなる。

だから――――」

――――俺は時臣を殺す。

葵はふらつきそうになりながらも、両足に力を入れたことで倒れなかった。

「どうし、て……どうして?!」

そして、気が付けば叫んでいた。

「え?」

雁夜は疑問の声を上げた。

自分が正しいと思っている事に何故、意を唱えられているのだろうか?と。

「葵さんだって、桜ちゃんともう一度一緒に生活したいだろう?凛ちゃんだって、凄く寂しそうにしてた。

時臣が居るから、葵さんと凛ちゃんと桜ちゃんは不幸になってる」

それは、葵から見ればとても身勝手とも、決めつけとも取れる言い方だった。

「私は後悔してない! 後悔なんてしてないわ! だって、私は魔術師の妻として決心をしてあの人と結婚したのよ?!」

「ならッ、どうしてそんなに悲しそうな顔をしてるんだッ!

魔術師は一子相伝、2人以上の子供が居れば、1人は普通の娘として暮らせたのに、アイツは桜を、事もあろうに間桐(うち)に養子したんだぞッ!!

よりによって間桐(うち)にだ!

間桐は蟲使いの家で、桜ちゃんは養子に来て、俺が来るまで蟲に身体を犯し尽くされてッ、身体の属性を無理矢理変えられて、髪の色や瞳の色さえ変わってしまった!

しかも、俺が来なければ、間桐の子を産ませるだけの母胎にされて、用が済めば蟲の苗床になる所だったんだぞ?!」

「……ッ！？」

思わず、葵は口元を己の両手で塞いでしまった。

間桐は蟲使いの家系、そのくらいは時臣から少しは聴いていた。

だがそれは、上辺の部分だけだったという事に葵は衝撃を受けずにはいられない。

「俺は見ていられなかった……好きな人の娘が、使い捨てられるなんて……ッ、俺には見ていられなかったんだッ！！」

「好き……？」

雁夜は勢いで自分のひた隠しにし続けた気持ちも一緒に話してしまった事を話し終わってから気が付き、視線を逸らした。

「そうだよ……俺はずっと、葵さんが好きだった。　でも俺よりも時臣の方が葵さんが幸せになれると思って……俺は……」

それ以上を雁夜は言えなかった。

身を引いた、などとは男としてあまりにも格好が悪過ぎたからだ。

２つ目の衝撃に、葵は目を見開いた。

葵は幼馴染としてしか見ていなかった彼が自分の事を好きだったなど、微塵も考えていなかった。

雁夜は葵に背を向ける。

もう話す事は多分ないと、歩を進め、このまま時臣と殺し合いをするのだろう。

「待って……」

「大丈夫、俺は……」

葵の声は――――――

「待ってよ……」

「時臣から必ず……」

届くはずの無かった声は――――――

「雁夜君ッ！！」

蟲の狂気に囚われていなかったからこそ、在り得た分岐点。

――――――届いた。

ＡＣＴ．９　王器優劣（後書き）

番外編を書こうとはしたものの、うん、慣れん事は難しい。
中々に書いては消しを繰り返しているので、本編の方を更新する事にしました。
あんまり待たせてしまうのもアレですから。
今回は王の宴・序と雁夜君頑張るの二本立てでした。

さて、次回はようやくライダーの真の宝具が現れます。
そして、彼女も登場？します。
お楽しみにノシ

ＡＣＴ．１０　群体包囲

その時、そこには黒い３つの影が周りを包囲していた。

「暗殺者（アサシン）のサーヴァント――――」

雁夜は無言で刀に手を掛け、葵が呟いた言葉を内心で呟いた。

「バーサーカーのマスター、そこを動くな……我々は群であり個だが、皆サーヴァントである事に間違いない。

３人だけとはいえ、人間程度に負ける可能性は皆無……」

雁夜、葵、凛を取り囲む群団は、ただ不吉な髑髏の仮面を向けながら言う。

「今、なんと言ったセイバー？　世の聴き間違いでなければ、運命を変えると……そう言ったように聴こえたが？

己の成した事を、歴史を覆すと言う事で相違は無いのだな？」

セイバーの言う国の救済。

その願いに対して、場の空気は何とも言えないものとなった。

何故ならそれは、この場の王となった者の中で誰一人として同意をする者はいなかったからだ。

「そうだ……私は国を救う為に過去を変えたい、と……そう思って

いた……だがバーサーカーの話を聴き、この場所の聖杯では私の願いが叶う事は無いと言われたのだ。
ならば、私はこの聖杯を求める理由が無くなってしまった……しかし、必ずや別の聖杯であの運命を変えて見せる」

「ふむ……？　セイバーに言いたい事もあるが、それは一体どういうことだ？」

ライダーがセイバーに問いつつ、此方に視線を向ける。
恐らく、朱然の言う聖杯の情報の話を話せ、と案に言っている事を察し、朱然はやれやれと頭を振って口を開いた。
懇切丁寧に、余すことなくその聖杯の特異性を説明して行く。
願いは正しく叶わず、新しく造られた物だと言う事を。

「うぅむ……そりゃあ、それが本当なら確かに手に入れても普通の肉体が手に入る気がせんのう……」

「薄汚い魔術師共が作り、汚物を詰めた贋作か……確かに我が蔵に入れるには躊躇われるな。
が、それよりも雑多の言う事の真偽を確かめなくてはならん。
しかし、詰まらぬ奴だとは思っていたが、よもや全てサーヴァントを殺し、我を自害させ“魔法”へと至る事が時臣の願いだったとはな……実に度し難い。
そのような下らぬ願いの為に、この我を贄としようとした事には相応の罰を受けさせなくてはならぬ」

ライダーは落胆し、アーチャーの標的は己のマスターに切り替わった。

「まあ待て、アーチャーよ」

アーチャーが時臣のところへ向かおうと立ち上がろうとしたところで、ライダーはアーチャーを呼びとめた。

「なんだ？　我は用事が出来た。　それを邪魔立てするならば、まずは貴様から屍を晒すことになるぞ？」

殺気立つアーチャーの視線を真正面から受け止め、ライダーは言う。

「ほれ、まだバーサーカーの奴の器を計っていないではないか！　貴様のマスターなんぞよりも面白かろう？」

コイツは一体何を言い出すのか？と朱然が思い、それと同時に、朱然が作ったつまみを食べた時に口がベタベタになった黒い少女の口元を拭きつつ此方を窺うウェイバーは、黄金のサーヴァントがそんな事で己の意志を曲げるとは思っていなかった。

それはウェイバーだけではなかったはずだが、事もあろうに――

――――

「……一時だけだ。　確かに他の雑種よりも見所はある。　我の蔵の劣化品や、雑多の宝具にも興味はあった」

――――自分の考えを変え、止まった。

「だろう？　さあ！　バーサーカーよ、存分に語るが良い！」

ライダーは、ニッ！といい笑顔を向けた。

朱然は頭を抱えたかった。

何しろ此処で拒否すれば、うわぁ……空気読めねぇ奴、などと思

われるのは必至だからだ。
そう思った朱然は、渋々口を開く事に決めた。

「……俺はお前らと違って、王になりたくてなった訳じゃないし、聖杯に望む願いもない。　だから、少し昔話でもしてやるよ」

ナギとのアーティファクトでも良いのだろうが、それでは酒は飲めないということで、朱然は口頭での昔語りを始めた。

「む？」

「「……」」

ライダーは疑問、セイバーとアーチャーは沈黙をするが、朱然は構わず話を進める。

「当時、１つの大きな国が傾こうとしていた。　俺は見分を広める旅に出かけたのさ。　これから先、何所の誰に仕えればいいのかを探す為に」

「その行動だけは、まるで騎士のようでしたね」

「俺は騎士なんて柄じゃないよ」

セイバーの言に、朱然は否定をしてから話を進める。

「一応、予定が１人と候補が２人までは絞っていてね。
候補の１人を見定めている間に国は支柱どころか主柱まで腐っていて、国の皇帝が死んで国としての機能を成さなくなり始めた。
だから俺は最後に都でも見ておこうかと思って言ってみたんだけ

ど……そこで行き倒れて悪逆非道の圧政を敷いているとかいう領主に仕える武将に拾われた。
その恩を返す為に、その領主を討とうとする連合と戦った」

「うむ！　一宿一飯の恩義は返さんとな！」

「何を笑っているのです！　悪逆非道に手を貸すとは何事です！？」

セイバーが見た朱然の過去は、誰かが解説した訳ではないし、音の無い映画を見ていたようなものだった。
あの短い時間で伝えるには、音を無くして容量を軽くした、と言えば分ってもらえるだろう。
だからこそ、セイバーはあの少女が悪逆の限りを尽くしたとは信じられなかったし、仮に本当にそんなものだったのならという否定に声を上げてしまったのだ。

「まあ待たんか！　バーサーカーがそのような者に付くとは思えん、何か理由があるのだろう？」

激昂したセイバーを、ライダーは押し止め、朱然に説明を乞う。

「そ、理由があった。　その領主は少女だった……寧ろ善政を敷こうとしていた。
本当に悪かったのはその都の官僚共だよ。　その少女の両親を楯に利益を貪る害虫だった。
しかも、その少女を討とうとした連合を起こしたのが、その真偽をわかっていた利権に目が眩んだ奴でな。
中には真偽を知らずに、連合に参加した者達も居たんだが、ほっとく訳にもいかないだろう？」

「そ、それは……」

朱然はウィンクをセイバーにして、更に話を続ける。

「連合軍と都の官僚共の板挟みをどうにかする為に、俺は他の武将達と二月足止めする事にした」

そこで一旦話を止め、喉を潤す為にアーチャーの酒を煽る。

「最初の砦で約13万を2万5千で3週間守った。まあ奇策も使ったけど、それ以上は流石に無理があったなぁ。

で、俺は自分と他の武将2人を餌に、そこを守る俺と他の2人対連合の代表3人で対決して、俺達全員が勝ったら一月の猶予を寄こせと挑発して勝った」

「ほう！　やるではないか！　13万をその数でいなすとは中々肝っ玉の据わった奴！」

「確かに、籠城側が攻めての3倍優位と言うのは昔からの定石です。

5倍の相手を押し止めたあの手腕はとても素晴らしかった。

もっとも、常人が真似できるものではありませんでしたが」

「まあ、時間稼ぎも何とかなったんで、その砦を放棄して1つ後ろの砦に移動したんだけど、都の方をどうにかしようとしてた方がダメだった文を貰ったところで……連合の中に両親を殺した武将を目の敵にしてた武将が挑発に乗って門を開けちゃってねぇ……連合の知り合いの王に捕まって、その王様に仕えたんだ」

頬に朱の差し始めた朱然は懐かしそうに笑った。

「で、群雄割拠の時代は色々あって最終的に三つの勢力に残った。
俺の使えた王はその中の一つの勢力の王になった。
最後に最大の勢力を持った奴が天下統一とか言って、残った俺の勢力ともう一つに喧嘩を吹っかけて来たんで、同盟を結んでそいつを何とか撃退した。
そこでその国の外から１００万を越える敵が現れて、敵の敵は味方という事で三国で同盟して外敵を討ち果たし、三国は守られた。
そうしたら俺の実の父親が竜の成り損ないになったんで、俺は倒そうと思ったんだけど……死んだ。
そこに俺の仙人としての師匠とその仙人の仲間達が父親を殺して、俺は奇跡的に生き返ってめでたしめでたし、って言うのが俺の生前だ。
宝具はその仙人の師匠から貰った物ね。
そうして俺は仕えていた王と結婚して王様になった、と言う訳だ」

「ちょっと待って、つまりセイバーと同じように同姓と夫婦になったの？」

今まで黙って事の成り行きを傍観していたアイリスフィールが朱然に突っ込みを入れた。
当然だろう。
今の話を聴けば、当然朱然の相手は男と思われても仕方が無かっただろう。

「いや、その３つの国は全て女王が統べていたんで、セイバーのようにはならなかった。　俺は普通に男女で結婚したよ。
そんな訳で、俺は妻が好きだったから夫婦になって、その妻が女王だったから王様になっただけの事だよ。
だから俺は王の器なんて持ってない。　でも、王と成ろうとはした。

今でも王として振舞えたかは自信が無いけど、これだけは言える……王は臣民と共にあり、国こそは私の子達となり、その滅びすら越え脈々と歴史に名を残す。
その時、私が笑ったように、臣民も笑いあったのならば、私は後悔もしなければ、振り返りもしない。
それが私の国達(こども)だからだ」

朱然は言い切った。
自信が無いと言った朱然の顔は、既に王達から見れば1人の王の顔だった。
誰も異を唱えはしない。

「なるほどなるほど、そこまで言い切れるなら既にお主は立派な王よ！　さしずめ……三国王、と言ったところかのう？」

「下らぬ話だった。　が、良かろう雑多……底が浅く、歪な形、しかしながら、その広さは我らとはまた違った王の器だろうよ」

クツクツと面白いものを見つけたと深紅の双眸で朱然を見つめ、更にその底を見定める為に眼を凝らす。

「本来、王と成りえぬ器を砕き、歪に繋ぎ広げながら国を導いたと言う貴様の在り方は俺好みではあった。
そしてその身体……そのおぞましく溶け合ってまで強欲で生き汚い混沌こそは、珍種と言っても良いな？」

そして、朱然の身体の正体とでも言うべき物を見て、腹を抱えて笑いだしたではないか。
だが朱然は激怒するどころか嘆息し、諦めたような眼をしていた。
既に英雄王には何を言っても聴かないと諦めたと言うよりも、い

っそそこまで知っていながら平然と笑い飛ばす事に、不本意ながら好感を覚えた程だったからだ。

「そこのセイバーもまた俺好みだったが、如何せん雑多に比べ、迷っているようではその価値も薄れるというもの。
見果てぬ理想に苦悩し、葛藤し、自責に埋もれ続けたのならば、完璧だったのだが……そこまで貴様に望むのは酷というものだろう？」

「私を愚弄するのか、アーチャー！？」

「そうだが？」

「……ッ！！」

朱然が冷や汗を書いている間に、セイバーがアーチャーに喰ってかかろうとしたその時だった。
黒い群体が現れた。
１人や２人ではない。
それは７０以上は居た。
それに対し、その場の者達は全て臨戦態勢になる。

「アサシン！？　なんで？！　どうしてこんなに！？」

ウェイバーが少女を庇うように抱締め、周囲のアサシンを見まわす。

「おい、アーチャー。　これはお前のマスターの差し金か？」

朱然はアーチャーに単刀直入に問う。

「知らぬ。　雑種の考えなどに我は興味など持つはずなかろう？」

内心、アーチャーは時臣に対し、この宴を穢した事に対し、いよいよ自らのマスターを見限るかを見定める時かを真剣に考え始めた。

「バーサーカー、貴様は動くな」

「何？」

唐突に、アサシンの1人が朱然へと命令して来た。

流石にこれだけのアサシンを前にして、楽に勝てるとは朱然とて思っていないが、名指しで言われたのならば、何か朱然に対して切れるカードがある事を意味している事を朱然は察した。

「貴様のマスターは我々に包囲されている。　不審な動きをすれば貴様のマスターを殺す。　セイバーとライダーを殺せば無事に返そう」

その提案で、朱然どころかその場に居た者達は大きな情報を得た。

アーチャーとアサシンのマスターは繋がっていた、と言う事を。

それと同時にセイバーとライダーは朱然に対して警戒を始める。

朱然の人となりを知ったとはいえ、今は聖杯戦争の真っ最中なのだ。

マスターを人質に取られては、朱然も敵に回ることは必然となる。

「1つ質問だ、アサシン。　うちのマスターは剣を持っていたか？」

先程から念話を飛ばすも、忙しいのか念話が通じない為に朱然はアサシンへと問いかける。

「それがどうした？　たかが刀如きで我等アサシンのサーヴァントを倒せると、そう、本気で思い上がっているのか？」

「良く喋る暗殺者だな……」

皮肉で返す朱然は確信した。

アサシンは剣では無く刀だと言った。

現代の知識を手にしているからこそ犯した間違いだろう。

「その返答は“持っていた”と判断してもよさそうだ。　なら、お前達の命令には従わず、お前たち全員を鏖殺（みなごろ）させてもらうぞ？」

「待て、バーサーカー！　そのままでは貴方のマスターはッ！」

「勘違いするなよ、セイバー」

マスターを犠牲にする事に肯定したと思ったセイバーが朱然を止めようとするも、当の朱然は止まる気が無い。

既に朱然の周りには八卦八武装（せんてんはっけ）が滞空し、その武装達はアサシンへと振るわれる事を待っているかのようだ。

「お前とライダーを殺した後、アサシン達が俺のマスターを無事に返すと本気で思っているのか？

俺はそんな分の悪い賭けに乗るつもりはない。　どの道、消えるなら俺は敵を出来る限り道連れにして死ぬ。

それに俺のマスターは死なんよ。　間桐邸に侵入してきたアサシンが身を以て、アレの有用性を示してくれたからな」

「おい、バーサーカー。　お前さん、一体何を言っておる？」

「つまり……何の憂いも無く、こいつらまとめて叩き潰しても問題無いと言ったんだよ」

新都の公園に悲鳴が響いた。

「ギぁ……！？」

「雁夜、君……？」

それは間桐雁夜の悲鳴ではなく、アサシンの1人が叫んだものだった。

ミチミチと身体中の筋肉が限界まで引き延ばされ、筋肉を構成する繊維が一本、また一本と引き千切れる痛みを感じながらも、雁夜は動きを止められない。

そんな無茶な動きを、一般人の雁夜が出来るはずがないことは純然たる事実だった。

「く……ッ、流石にキツイ……もう少し何とかならないか？！」

『無理ですえ～』

雁夜の誰に行ったのかわからない泣き事は、虚空に消える前に返答される。

鈴を転がす、とでも言えるような可愛らしい少女の声。

そのイントネーションは、はっきりと関西圏の物だと言う事を思

わせる独特のものだ。
葵にはその声は聞こえず、雁夜は泣き事を漏らしただけと認識された。

『あのお家の中なら出られるんやけど、お外やと今はまだ雁夜はんを直接操って戦わんといけないんです～』

気の抜けそうな声ながらも、雁夜を操っているらしい少女はアサシンの投擲して来た短剣（ダーク）を鯉口の方を持った左手を瞬時に動かし、鯉口とは正反対の鐺という部分の鐺金具という金属部分で弾き飛ばした。
更にそこから右手に星を散りばめた黒刀を以て、雁夜は常人の動きを遥かに超えた動きでアサシンの一体をものの一閃で屠った。

「馬鹿な……？！」

「有り得ない……！」

ただの刀ではない、概念武装の類か？！と、アサシン達が手に波打った（クリス）短剣を持ち警戒を始めようとした直後、正面に居たアサシンの方へ、雁夜は届かないにも拘らず刀を振り上げて構わず振るった。

「馬鹿め……ッ！？」

それを好機と思った正面のアサシンと背後に居たアサシンが同時に雁夜へと肉薄しようと走り出す。
が、雁夜の方へ走りだそうとした瞬間、雁夜の刀から放たれた斬魔の剣圧が、正面のアサシンを空竹割りのように断ち斬った。
神鳴流に伝わる魔なるモノを断つ剣技。
サーヴァントは英霊などと言われてはいるが、実際のところは幽

霊の類。
先の間桐邸に侵入したアサシンに対して使用したところ、抜群の効果を発揮した。
相性的には十分な威力を叩き出す事に成功したのだ。
故に――――
「たかだか人間如きに我等が負けるだと……？！」
遅れて背後のアサシンが、波打（クリス）った短剣で雁夜の首を刈ろうとした。
「雁夜君！？」
雁夜の背中に覆いかぶさったように見えたアサシンの鳩尾から背中を、雁夜は黒刀に纏ったのと同じように、斬魔の気を纏った鞘で貫いていた。
ただの人間が暗殺者のサーヴァントを……人間を越えるサーヴァントを打倒したのだ。
だが――――
「ぐ、づ……ぅ……」
『あやぁ……やっぱり修練してない人に、ウチの流派の再現は無理があったみたいですわ～』
少女のクスクスという笑い声と共に、雁夜は地面に蹲る。
――――称賛される程の偉業を成したその代償は、決して小さなものではなかった。

刀を振る為に使われた筋肉は断裂し、動かないはずの部位を使用しての強引な戦いで、雁夜の身体はボロボロになってしまったのだ。
ステータスが低いアサシンと言えども、人間基準からすれば異常を通り越す。
その動きに攻撃を合わせるだけの速度を得るのならば、一般人の身体の限界値を損耗する程に凌駕させるしかない。
そんな満身創痍の勝利を収めた雁夜へと葵は駆け寄り、その身体を確かめようとして、雁夜に押しとどめられる。

「触らないでくれ……」

「強がらないで……ッ！！」

そう言って、葵は雁夜に叫んだ。

「葵さんこそ、時臣を選んだんなら俺に構わないでくれ……」

「勝手に決めないでよ……私は助けて欲しくなんてない。　私は、あの人にも……雁夜君にも死んでほしくない。
あの人が死んだら、私も……いいえ、凛も桜もきっと悲しむわ……」

それは雁夜にとって考え至らなかった事だった。
桜を救う為には時臣を殺す事が最善だと思ったのに、救う気でいた桜や葵、凛達の気持ちを、雁夜は考えても居なかったから。

「葵さん……ごめん」

雁夜は、ようやく間違った願いを懐いていた事を理解した――――

「ふぅむ……バーサーカーが良いというのなら遠慮なく。　さて、全ての王の器が出揃った。
　では貴様らにこの征服王が問う最後の問いだ！　王とは孤高か否か！？」

　アサシンに包囲され、そのアサシンすら宴の一員として迎えようとした度量の広さは称賛に値するが、アサシンにその気が無い以上意味は無かった。
　ライダーがアサシンへ向けた血と同じ酒を進めるも、アサシンは地面にその酒をぶちまける。
　かくして、アサシンはライダーの怒りを買った。
　そして、それを出す事を決めたのだ。

「是、王は孤高だからこその王よ」

「私は……私にはわからない……」

「否だ……王とは臣民と苦楽を共にする家族だ」

　孤高を貫いた英雄王（ギルガメッシュ）、完璧立った為に王足らんとした騎士王（アルトリア）、愛する者達の為に王と成った三国王（しゅぜん）。
　三者三様の答えに征服王（イスカンダル）は否を唱える。

「いかんな！　バーサーカーが惜しかったが、アーチャーとセイバー、貴様等には余が王の何足るかを見せつけてやろう！」

言葉を言い始めたところから、何所からともなく吹き抜ける熱風に砂塵が舞う。

「砂塵……？　世界が、揺らいで……」

「そんな……ッ！？　まさか、これは――――――」

ウェイバーとアイリスフィールは薄々その正体に気付き始める。
呆然と呟くウェイバーを余所に、一際熱い熱風に晒され、その場の全ての者達が思わず目を瞑り、目を開けた時には――――――

何所までも続く砂塵舞う砂漠の荒野の地平線。

何所までも高い蒼穹の彼方。

何所までも照りつける灼熱の太陽。

「さあ！　余の号令に集え！　共に駆け抜けし歴戦の勇志達よ！」

ライダーは両手を広げ、己の下へ世界を越えて集う勇志達を迎え入れた。
1人、また1人とライダーと共に駆け抜けた者達が、時空を越えてこの場所に集まったのだ。

「こいつら……一騎一騎がサーヴァントだ……」

そこに集う者達は唯進む方向を見定め、王の号令を待ち望んでいる。
ただ一言。

そう、ライダーの……征服王イスカンダルの唯の一言で、彼等は何所までも進むだろう。
邪魔する者は征服し、蹂躙するのみ。
先程まで包囲されていたアサシンは、一塊りになって王の軍団の目の前にまとめられ、王の軍団の後ろには朱然を始め、宴の参加者達が避難させられていた。

「魔術師でもないのに……固有結界だなんて……」

「勿論、余は魔術師ではない！　だが見よ！　この勇志達は余と共に肩を並べながらも対等に戦ってきた者なのだ！」

その軍勢を割って、一頭の体格の良い、この場に居る英霊に負けず劣らずの存在感を発する馬が進み出る。

「おお！　久しいな相棒！」

この馬こそは征服王イスカンダルの足として駆けた名馬、ブケファラス。
朱然が見た馬の中でも最高の名馬だと言う事は言うまでもない。
しかも、その名馬は微かだが神格すら帯びている。
いわゆるところの神馬なのだ。
その神馬にイスカンダルは跨った。

「肉体が滅び、その魂が“世界”に召し抱えられ、時という覆せぬ条理が立ちはだかろうとも余に忠義し、こうして永遠を誓った朋友達は駆けつけるのだ！
その朋友達全てが心に刻んだ心象だからこそ、この世界を現わせる！
これこそ征服王イスカンダルの最強にして、無類の宝具“王の軍（アイオニオン・ヘタイロイ）

勢”！

守るのではなく、守り合う信頼の絆を持つ者達こそ真の臣下だ！

そして、王は孤高に非ず！

王とはッ――――――誰よりも鮮烈に生き、諸人を常に魅了し続ける者を指す言葉！

全ての勇者を羨望させッ、民に道を示しッ、誰よりも高い頂きを常に見続けッ、その全てを体現する偉志を総算させる故にッ！！」

「「「然り！　然り！　然り！」」」

征服王は高らかに宣言し、その最強の軍勢達は声を揃えて肯定する。

正に圧巻という言葉が似合う切り札。

絶対の信頼という絆。

セイバーは手に入れられなかったそれに心を震わせずにはいられない。

バーサーカーは既に知った、己の王としての在り方を、今一度改めた。

「さあ！　今宵の宴に来た王達よ！　我等の姿をその目に焼きつけよ！　さあ、始めるとしようか、アサシン？」

ついに王の軍勢達は目の前の暗殺者達へと武器を向け、緊張した空気は重い沈黙を成す。

「蹂躙せよ！」

その沈黙を、征服王は己の剣をアサシンの集団へと向けて斬り払う。

「「「ＡＡＡＡＬａＬａＬａｅｉ！！」」」

征服王の号令の下、勇者達は進み往く。
その進路に立ち塞がるのは取るに足らない烏合の衆として。
アサシン達は呆然と立ち尽くし、逃げ惑い、自棄を起こして死を覚悟して迎え撃った。
しかし、王の軍勢はついぞ止まる事は無く、アサシンは黒い灰となって掻き消える事となる。
軍勢達は勝ち鬨の声を上げ、未だ先の見えぬ地平線の先へと１人、また１人と走り去っていった。
世界は色褪せ、砂塵のように散っていきながら、アーチャーは城を後にする前に朱然とライダーに向かって言い放つ。

「ライダー、貴様は全てを以て我を蹂躙しようとして見せよ。　我もまた真の格の違いを見せてやろう。
バーサーカー、貴様は未だ器の果てが見えぬ……故に戦場で相見える時、貴様の全てを見定めてやろう」

そう言って城を後にし、ライダーはセイバーに何も言わず、憐憫の視線を向けて去っていった。
そして朱然もまた、セイバーには何も言わず、襲われた雁夜を迎えに行く為に城を後にしたのだった。

ＡＣＴ．１０　群体包囲（後書き）

なんと９８００文字（笑）
そして、雁夜の見せ場がｗ
ともかく単行本３巻……つまり半分まで来まして、そろそろオリジナルにしたいのですが、この展開はいいのかなぁ……収拾付かなくなりそうだなぁ～と思って思いなおしたりしてちょっと遅くなっちゃいました。
未だ未定。

それと番外編が思ったよりも書けないｗ
気長に待って頂けると嬉しいです。

次回はいつも（Ｆａｔｅ編では平均６、７０００文字）よりも短いと思いますノシ

少し微修正しました。

ＡＣＴ．１１　一時休憩

あの宴の終わり……王の軍勢による蹂躙を見た綺礼はその力に圧倒された。
アーチャーの最高にして至高の宝具、乖離剣。
それを脅かす脅威。
ロード・エルメロイに呼ばれれば豪放磊落なライダーとは相性こそ悪いだろうが、パラメータ的な意味合いでは更に規格外となっただろう。

「それは確かなのか、綺礼？」

呼び出した魔術師は三流。
しかし、それでもアレを正面から叩くには些かの不安が残る。
その不確定を確定へと変える切り札を、時臣と綺礼は意図せずして手に入れた。
ウェイバー・ベルベットの抱きしめていた黒い少女――――少女として擬態し、弱々しく、本人格とは記憶を共有しない拷問尋問を耐え、やり過ごすだけという技能を請け負っていたアサシンの一つが獅子身中の虫として機能しているとは、なんという僥倖だろうか？
やはり私は根源へと至る為に選ばれた者なのだと思う。
時臣は幸運の女神が自分達を祝福している事を確信するも、それとは別に葵と凛が間桐へと攫われた事を危惧する。
魔術師ではないが、自分の考えを尊重する良妻。

「はい。　ライダーの宝具は評価規格外です……ですが、あの少女は恐らくアサシンの１人かと。
全滅したはずのアサシンのパスが繋がっている事がその証拠です」

資質に恵まれ、次期当主として自分よりも優れた偉業を成すであろう愛娘。
その2人が敵地に居るのだ。
取り返さずにはいられない。
否、取り返さなければならないのだ。
その為に必要なものは何なのか。
手段を模索するも、サーヴァントを滅する程の結界を敷かれている魔術工房への侵入は困難を極める。
ならば専門家を当てればいい。
そう、魔術殺しの衛宮切嗣を。
だがその状況へと持っていく為の材料が足りない。
時臣がどうやってその材料を得て行くかを考える。
この時、アーチャーとの視覚共有をしなかった時臣は知らない。
よもや自分のサーヴァントが自分自身を殺しに歩みを進めていようとは。

あれから……というのも昨日の王の宴とアサシンの軍団の侵攻、そしてライダーの固有結界・王の軍勢（アイオニオン・ヘタイロイ）での蹂躙の後。
朱然は辛うじて繋がっているパスを頼りに雁夜の居る場所を辿り、予想通りにボロボロになった雁夜と、そんな雁夜を看病をしていた見知らぬ女性と、その女性の娘だという女の子を連れて間桐邸へと移動した。
背負って帰ってきてソファーへと座らせると、雁夜は呻き声を漏らす。
当然だろう。
短時間の戦闘だったが、サーヴァントという人間に勝ち目の無い

決死の状況を覆したのだ。
勝手に抜け出してピンチを誘発させた事は厳罰を与えなくてはならなかったが、好きな女とその子供を守っての負傷なら、名誉の負傷として治療もしてらなくもない。
朱然はそう思うも日付は変わっているので、客人達の対応を優先させる。
だが雁夜は苦痛に呻いているので、勝手な判断で客室の一つに通して休んでもらった。
そうしてようやく雁夜の治療に取り掛かる。

「俺は……守れたのか？」

ソファーに身体の全てを委ね、動けずにいる雁夜は、再生させている身体の奇妙な感触に眉を寄せながら言う。

「全く、言う事を聴かないマスターだ。　だけど……褒めてやるよ雁夜。　好きな女を守っての負傷なら、それは誇っても良いぞ？
もし死んでたら魂呼び戻してもう一回、俺が殺してたところだったけど」

「そう……か……良かった」

雁夜はその言葉を最後に、満足げな表情で寝息を立て始める。
たった数分の死線を越えたというだけだが、身体の酷使とは別に、月詠の剣技を使う為の必須技能である、本来一般人が修練を積み重ねて使うはずの気を使わされた所為で、体力は限界だったのだろう。
ものの数秒で意識が堕ちた。
朱然は治癒魔法を宿して薄緑に光る右手を軽く雁夜の足へと滑らせながら、徐々に修復しているのを確認し、寝息をたてる雁夜へと柔らかな頬笑みを向ける。

「おい、月詠。　もうちょっとマシにはならなかったのか？」

それから一転、朱然は顔の筋肉を引き締めて言う。

すると朱然の倉庫から吐き出されるように、漆黒の黒刀が空中へと落ちた。

だが、刀は絨毯に落ちる前に黒い靄（もや）となって広がってから人型へと姿を変える。

「無理ですえ。　今のウチは朱然はんの持っとる宝具ゆうのになってます。

その効果は、ウチが“サーヴァントに成れる”ですし、マスターはんを操って戦う方が間違ってますから～。

朱然はんの近くか、この家の近くでないと、こうして人型になって自分では戦えまへんし……ちょっと欲求不満気味です～。

でも、この世界は予想以上に良いわぁ……暗殺者でもそれなりに楽しめましたし、セイバーはんと戦ってみたいですわ～」

月詠は楽しげに嗤う。

そもそも、だ。

何故、死んだ月詠が朱然の持ち物として生きているのか？

この問いには答えておこう。

本来ならば、刹那とヒナギクとの三つ巴での戦いの時、月詠は死んでそれっきりだった。

が、朱然は月詠と学園祭の時に、こう契約した。

――――――俺に出来る範囲で何でもしてやる……だから今は退け。

――――――ならウチを式にしてくれたら退きますえ？

月詠の願い。
それは――――人を式として使役する陰陽道に伝わる外道の禁呪で、朱然の武器の一つとして付いて行く事。
戦い続ける事を望むからこそ、戦いの場へと向かう朱然と共に、永遠の戦いに身を投じるという狂気。
月夜見の黒い刀身に浮かぶ星の瞬きを思わせる沸(にえ)を、陰陽道に伝えられる天文道を応用した呪法の要素として取り込んだ実戦仕様の儀式刀として鍛えたのだ。
最後に月夜見で自決する事で、刀と一体化して式と成す。
朱然の見立てでは式紙というよりも九十九神として馴染み、意識を取り戻すのが数年後。
それから数十年経って、ようやく表に出られ、百年後に完全な自立行動が出来るようになる。
そう思っていたのだが、この世界は月夜見を宝具として認め、朱然の魔力供給によって月詠を限定現界できるサーヴァントと成れる宝具とした。
言ってしまえば偶然か、奇跡以外の何物でもない。
これが、月詠がこの場に居る理由だ。

「マスターはんを守ったんやし、ウチ……御褒美が欲しいなぁ～って思うんです？」

目をキラキラと輝かせて、月詠は雁夜の治療が終わった朱然の後ろから首に腕を回して抱締めた。
月詠のマスターを守ったという事に対しての報酬。
これはまあ、正当な報酬と言っても良いだろう。
月詠が居なくては、雁夜は間違いなくアサシンの攻撃を防げず、避せず、物言わぬ屍となっていたのだから。

「やれやれ……お前みたいな無機物に何をしろと……」

「朱然はんがウチをこんな身体にしはったんやないですかぁ……それにやる事なんて、そんなん決まってますえ」

朱然は月詠が抱きついたまま空き部屋へと移動する。

そこには間桐の家に所狭しと並ぶ調度品の類も見当たらないし、家具も備え付けのベットがあるだけで、カーテンすら付けられていない。

未だ月明かりだけが、カーテンのない窓を透して差し込んでいる。

朱然の長い長い夜は、まだ明けない。

「……朝、か？」

雁夜は身体の痛みで目を覚ました。

痛みと言っても見動きする限りは問題は無く……いや、元より動けなくなっている場所意外の部分は問題無い。

ソファーという寝るのには些か適さない場所で寝たことによる痛みだろうという事で片づけ、立ち上がる。

そこで、葵と凛がどうなったのかを思い出し、朱然をパスを利用した念話で呼ぶも返事が無い。

仕方なく雁夜は、朱然用に割り当てた空き家へと向かった。

足を引き摺るようにしてようやく辿りついた部屋の扉を開ける。

「……」

扉を雁夜は開いた。

間違いなくベッドで眠っているのは自分のサーヴァントのはずだ。
パスは繋がっているし、ステータスにも朱然だという事は間違いない。
ベッドの脇には、朱然の衣服のみが脱ぎ散らかされている。
それは、どう見ても男物だ。
だがそこに居たのは裸体を薄いシーツに隠された少女が2人のみ
――――――

「……」

なおも言葉を発せず、確かめるように視線を動かす。
片方は見た事がある。
朱然によって貸された月夜見という刀に宿る少女だ。
長い白髪に、柔らかな寝顔、未成熟と成熟の丁度中間あたりの肢体。
とても刀を振り回すようには見えないが、ワザと結界を突破させたアサシンのサーヴァントを斬り殺した驚くべき少女。
もう片方は、朱然であるべき少女。
ウェーブ掛かった銀髪、白い肌、可憐というよりも妖艶という雰囲気が漂う完成され過ぎているプロポーション。
そんな朱然?の豊満な胸元に顔をうずめ、今、幸福の全てを感じています、といった風に月詠の鼻から赤い幸福が流れているように見える。
ああ、なるほど……つまりはそういう世間一般からは掛け離れた関係なのか……。
雁夜は強引に現実逃避しつつ、その部屋の扉を閉めようとしたその時だった。

「雁・夜・君?」

凛と桜は未だ寝ている時間なのだろうが、魔術師の妻とはいえ主婦の朝は早い。
雁夜の背後にはとても尋常ではない表情の葵がいた。

「ピチピチの女の子の裸は、さ・ぞ・眼福でしょうね？　ええ、私はどうせ人妻でしょうし、中古品でしょうね。
ええ、気にしていないわそんな事。　雁夜君は私の事を気の迷いで助けたんでしょう？
助けてくれた雁夜君は幼馴染だし、お節介くらいはしても良いと思うの、でも！　でもね！
でも幼馴染としてそういう事をする人じゃないって、私は思ってたのに……ッ！！」

「ち、違ッ？！　葵さん！　この２人は俺の！！」

「俺の、何？」

葵の目のハイライトが消え、しかも目が据わっている。
それはもう、某管理局の白い悪魔の記念すべきＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ回のようなありさまだ。
ここで選択肢を間違えば、間違いなく雁夜はＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされてしまう。
第１の選択肢、俺の物？
いやいや、待て待て、間違いなくこれは地雷だろう。
却下だ却下。
第２の選択肢、俺の魔力補充の為の奴隷？
ちょっと待て、これを選んだら間違いなく死ぬ。
ちょっと頭を冷やそうか程度では済まなくなる。
第３の選択肢、俺のサーヴァント？
うん、これだ。

これこそ間違いない。
死亡フラグなぞ建ててたまるか！
雁夜は瞬時に選択肢を選び、言葉を紡ぐ。

「お、俺のサーヴァントで――――」

「んぅ……？　あら？　何で裸に……ああ……」

雁夜が言い終わる前に朱然が目を覚ます。
ルーデシアの格好なのは昨日の事なので覚えているのだが、裸になった覚えは無い。
十中八九、幸福を鼻から放出している月詠の所為だろう事は予想が付いた。
そもそも月詠は朱然からの魔力の供給を受けている。
それはサーヴァントと同じ仕組みだ。
昨日の戦闘では、持ち主の人間を操るという本来とは違った方法で戦ったが故に月詠は内包魔力を消費した。
刀としての月夜見に触れたままでも魔力の充填は出来るが、体液を与える方が効率が遥かに良い。
なのでディープなキスで魔力を渡し、起きていても暇なだけだったので、そのまま久しぶりに寝るという嗜好を行ったに過ぎない。
そして、起きてみれば、この部屋の入り口に立っているマスターと昨日の客人。
明らかに面白い事になりそうだ。
そう思って朱然が起き上がると、抱きついていた月詠も一緒にへばり付いてきた。
そのお陰でシーツが落ちるも、その淫靡に形を歪める胸の形だけしか雁夜からは見えなかった。

「ま、また、私達に……あんなことやこんなことをするつもりなん

ですね……？！」

「バーサーカー？！　何を言って！？」

グスッとワザとらしく鼻を鳴らし、手の甲で目元を隠しつつ、泣いているように見せかけて、取り合えず見ていて面白い方へと朱然は爆弾を投げ込んでみた。

それに対して雁夜は冷水を浴びせられたかのように体温が一気に下がったように感じ、ゆっくりと振り返った。

「幼馴染として、少しお話があります――――」

夜叉が居た。

口元は笑っているが、目が全く笑っていないのがまた怖い。

雁夜は、パーカーのフード部分を片手で掴んだ葵に引き摺られていった。

どうやらこれから雁夜はＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩされるのだろう。

南無。

合掌しつつ、朱然は月詠を引き剥がしてから脱がされた服を着て元の姿に戻った。

お遊びは此処までだとして、朱然は連れて行かれた雁夜の方へと向かう。

冬木市某所の廃工場跡。

廃棄されて数年と思われる廃工場に、ランサーとケイネスは居た。

勿論、持ち得る技術を使って、即席ながら廃工場の周囲は簡易的な魔術工房として機能している。

以前のホテルの工房よりかなり見劣りするレベルだが、手持ちの物を使っての結界ではなく、簡易魔術工房と呼べるほどまでになった手腕は流石だと言わざる負えない。

この結界ならば人間とサーヴァントに対して即座に警報がケイネスに伝わり、ランサーにも伝わる。

しかもこの廃工場をうろついていた自縛霊を利用した地雷、浮遊霊による浮遊機雷、怨霊による特攻。

人間ならば瀕死の重傷、サーヴァントにも多少なりとも傷を追わせる事が出来るはずだ。

月霊髄液（ウォールメン・ハイドラグラム）で凌ぎつつ、ランサーが戻って来るまで十分に機能するだろう。

「ふん、キャスターを仕留め損なうとはな……」

「申し訳ありません、マスター」

ケイネスは衛宮切嗣との戦いで致命的な攻撃を受けるはずだった。

単身敵地に乗り込んだケイネスだったが、より冷静に、油断なく、月霊髄液（ウォールメン・ハイドラグラム）の索敵で魔術殺しを追い詰めているかに見えた。

しかし、ケイネスは微かな違和感を感じたのだ。

ホテルの1フロア全てを貸し切って作り上げた渾身の魔術工房を、よもやビル自体の爆破で破壊した発破師が、何故わざわざ姿を晒す？

至る所に仕掛けられたクレイモア地雷とワイヤーを用いた地雷。

魔術師らしからぬ現代の科学という唾棄すべき技術による罠。

あの発破師は魔術師殺しに慣れているという噂ぐらいは聴いた事がある。

このロード・エルメロイの名を、魔術師としての力量を知らぬはずが無い。

だからこそ正面からではなく、ビル爆破という間接的かつ搦め手としての襲撃を行った。

ならば直接的に姿を見せ、仕留めきる何かを隠しているかもしれない。

そう思った時だった。

ランサーからのキャスター逃走の知らせ。

ケイネスは即座に思考を走らせる。

魔術を使う発破師程度どうとでもなるが、キャスターが撤退した今、セイバーもマスターの方へと向かったとも念話が届いた。

サーヴァントさえ自分自身でも倒す自信も有ったが、何かしらの策を持っている事を窺わせるセイバーの協力者であろう発破師と、最優のサーヴァントを同時に相手取る事の勝率を考えればこそ、ケイネスは撤退する事を決定したのだ。

「まあいい、お前の宝具の神髄は一対一にこそあるのだ。ならば今度こそ、その真価を発揮してみせよ」

「御意に」

ランサーは新たな獲物を釣るために姿を消したその時だ。

ズルリと廃工場の天井から一匹の蟲が肩へと落ちた。

「何!?」

即座にケイネスはその蟲が魔術に関係したナニカだという事を察し、振り落とそうと手で払おうとしたのだが、蟲はケイネスの肩から跳躍してケイネス口内へと侵入した。

「ご!?　あ、あああああああああああ!!?」

廃工場にケイネスの叫びが木霊する。

しかし、やがてその声は掻き消え、そこには表面上は何の違和感

もないケイネス・エルメロイ・アーチボルトの姿があるのみだった。

ＡＣＴ．１１　一時休憩（後書き）

記憶喪失少女はロリアサシン。
憑いてきた九十九神・月詠。
百合百合しい朝、そしてＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩへ。
やっぱり不幸なケイネス先生（笑）
の４本立てでお送りしました。

ちょっとギャグ入れたかっただけです。
ケイネス先生は不幸だから引き立つんだと思うんだっ、存在がっ！
（笑）

結末を決めよう決めよう言ってるのに未だに結末を考えてません。
プロットも書いていないので、何所かに迷走するかもしれませんが
ご容赦を。
強引にでも完結は目指す予定です。
ご意見ご感想はお気軽にどうぞ～＾＾

ロリアサシンの資料をＣＡＮＣＥＲ様より頂いたので修正しました。

第　ＥＸ・８章　初めてのお買い物・ラブひな編（前書き）

第ＥＸ章は特に読まなくでもいい時系列を無視した話やｉｆのお話です。

間が空いた割に本編ではない事にガッカリした方々には申し訳ないです。

第　EX・8章　初めてのお買い物・ラブひな編

俺がまだ麻帆良に行っていない……ひなた荘で俺が旧世界で大学生、魔法世界で暗殺者をしていた時期。

１９９９年６月某日。

浦島景太郎のアルバイトが決まり、その雇い主で成瀬川なるの初恋の相手である瀬田紀康がひなた荘に現れた時。

瀬田が来訪した事を知らなかった俺は、大学から転移魔法で直接部屋に戻っていた。

気まぐれに入ったのは映画研究サークルだったのだが、女性役が足りないとかで幽霊部員として入っていた俺は、顔すら見せない事を盾に鬱陶しいくらいに泣き付かれて、仕方なくクルスになって俺の知り合いとして撮影に参加し、撮影をやっと終えて着替えていたのだが、何と言うか……当時の俺は未だに女性用下着を着る事に抵抗を覚えており、まあ所謂、ノーブラノーパンだった。

詳しく記すのならば、クルスの時は胸もそんなに無いのでアニメとか漫画で良く在るサラシ、下はスパッツ履いてその上に男物の服を着ていたから……よくよく考えれば色が付いていて透けないとはいえ、ほぼＹシャツ&直接素肌にスパッツはかなりマニアックな格好だっと後悔している。

恥ずかしがってないでさっさと着てしまえばいいものを、とか、散々女装してきたんだから、と思うかもしれないが服だけならまだ良い。

いや、良くはないが半ば諦めた。

だが下着はダメだ。

アレは自分的に女性が着ていて尚且つ眺めている物であって自分自身で着る物じゃない！

って、俺はどんな変態だ……と、まあ、とにかく精神が未だに割り切れない男の俺には女性用下着を着る程の勇気は無かった……当時は本当の本当に葛藤していたのだ。

女性用下着を着たら男としての矜持が失われてしまうと思っていたし。

というか今現在、その男の矜持は0を振り切って、マイナスに突入しているのだが。

話題が逸れたので話を戻すが、撮影を終えた俺は着替えをしていた。

丁度、撮影用の服を脱ぎ終わった所だ。

そして、瀬田と成瀬川を会わせまいと紺野みつね、青山素子、カオラ・スゥ、前原しのぶがお節介を焼いていて、しばらく留守にしていた俺の部屋に緊急事態&帰って来て居ないと思われていた為に瀬田とばったりと会う羽目になったと言う訳だ。

この時の俺の格好は下が生スパッツ、上はサラシを巻いた状態だった。

で。

「！！　き、君は……マリア！？」

瀬田が知らない女の名前を言って驚いた。

後から聞いたが、瀬田の養子、サラ・マクドゥガルの母の名前らしい。

因みにこの時、俺は瀬田の事は大学の特別講義で知っている、くらいしか覚えていなかった。

「取り敢えず……出口そっちだから……さようならッ」

「ろも　。ッ！！」

俺は反射的に瀬田を殴り飛ばし、2階から外へと吹っ飛ばした。
瀬田は窓を突き破り、庭へと落ちたが瀬田は何かしらの武術の心得がある事を身のこなしから感じ取った為に遠慮なく割と本気で殴っていた。
これも跡から聞いたのだが、ジークンドーの達人だったらしい。

「なんやなんや？！」

「知らん人が居るでー？！」

「朱然さんの恋人？！」

「何者だ貴様！！」

瀬田を俺の部屋に勝手にブチ込んで来た四人娘が俺の部屋にドタドタと騒がしく雪崩れ込んできた。

「……私は朱然の友人」

瀬田に半裸を見られた所為で、凄まじくローテンションで侵入者達を睨みつけながら言い、俺は適当に箪笥から自分の着替えを当然のように着込んだ。
いきなり何所からともなく服を取り出すにはいかなかったので、しかたなく箪笥に入れてある男物の服を着たのは言うまでも無い。
簡素なTシャツに、ジーパンという当たり障りのない服装だが、如何せん男物の為にだぶつく。

「貴様……師匠の服を当然のように！！」

最初の邂逅後、何かと武芸の手解きをして親交を深めていた素子が愛刀の止水に手を掛けて抜刀の構えを取りつつ激昂する。

どうしたものか……いっその事、変装でしたで押し通すべきか？

そんな事を思っていると、砕いた窓へと跳躍してきた瀬田が現れ、俺を何の脈絡も無しに抱きしめて来た。

「マリア！」

やはりその名を呼びながら、何所か泣きそうなくらいに極まった声なので一瞬だけ呆けたが、直ぐに俺は正気を取り戻して反撃をする。

「……ッ、いきなりセクハラするな、このド変態教授」

相変わらず、クルスになっているとダウナーな口調になるが、それでも解るほどに苛立った声が出た。

「くペッ？！　たわらばッ！！」

俺は引っついてきた瀬田の鳩尾に一撃を加え、更に気を纏った蹴りを見舞ってもう一度、二階からダイブさせた。

ドチャリ、という生々しい音と共が響く。

どうやら今度こそ沈黙したようだ。

「なんや自分、瀬田と知り合いなんか？」

キツネ――――先程のお節介した四人の内、歳が一番上でフリーター名前がみつねでキツネ顔なのでキツネと皆から呼ばれている女性が俺に問う。

「キツネさん……私は瀬田教授とは大学で知っている程度の付き合いよ」

ヤレヤレと疲れた溜息を吐きつつ言う。

「ウチの名前も知っとるんか？
って、自然と朱の服を着れるっちゅーことはそういう仲という訳やし、当然か……朱の趣味はこういうのか……ほうほう？」

ジロジロと爪先から頭の天辺までキツネさんに見られた。
あまり女の姿になってから凝視された事はほぼ無かったので、つい視線を逸らしてしまった。

「で？　キツネさんの問いと私の問いに答えてもらおうか？」

しらばっくれるのが面倒臭くなってきた……女の格好で此処に住んでたならともかく、元々男だったし、もう説明した方がいっそ隠さなくていいだろ。
いい加減に面倒になった俺は、半ば投げやりになりながら語り出した。

「……私の名前は、この姿の時はクルスと言うの。
間違っても瀬田教授の言うマリアという人間ではないし、私は朱然の彼女でもなければ、友人でもないし、家族でも……兄妹でもない……さっきは友人と言ったけど、私自身が朱然よ」

普通に聴けば意味不明な説明に、予想通りひなた荘の住人達は首を傾げる。
やっぱりトンデモ属性が付属しているこの寮でも、俺は余程可笑しな事を言っていると思われているようだ。

「何言っとるんやー？」

「朱然さん……には見えないですよ？　クルス、さん？」

褐色無邪気天才カオラは、ニパッと笑い、しのぶは恐る恐るという感じで言う。

「戯言を！」

素子は昔の刹那のように、初対面の俺に対して噛みついてきた。
だから俺は目の前で変身する事にした。
ベッドへと向かい、シーツを引っ張ってから身体を隠すように頭からシーツを被って元の朱然としての身体になる。

「おぉーッ！！」

変身が終わってからシーツを取り払ったところで、先程のクルスとしての姿ではなく、朱然としての姿に変わった。
それを目の当たりにしたカオラが感嘆の声を上げた。
恐らくカオラにとってはイリュージョンの類に見えているのかもしれない。
他のキツネ、素子、忍の3人は言葉を失っていた。
因みに俺のこの変身。
別の容姿への変化時は、徐々に変身完了後の姿へと変わっていく。
珈琲に徐々にミルクを混ぜ、有り得ない事だが最後に、ミルクに

なってしまうような感じだ。
近いのは真庭の忍の蝙蝠辺りだろうか？
あそこまでグロくて骨の軋むような凄い音はしないが微かな胸は胸板へ、身長は伸び、筋肉が発達する。
更に金髪は紫髪へ、金眼は紫水晶に、そうしてやっと元通りになった。

「こんな感じだ」

その言葉を俺が言ったところで沈黙は破られた。

「な、なななななッ！？」

「人間吃驚ショーやー！！」

「きゅうッ？！」

「ブッ？！」

キツネは絶句、カオラははしゃぎ、しのぶは気絶、素子は吹き出した。
つまりは阿鼻叫喚。

「つまりは俺の変装術のようなモノの一種だとでも思ってくれ」

「まあ、妖怪変化などとでも思っておきます……」

「ああ、それが一番近いかもしれないな」

素子の指摘が何気に心中を射ていたので肯定しておく。

「目の前で見せられたら、まあ……信じざる負えないっちゅー話やな」

「なあなあシュゼンの身体って、どうなってるん？」

「企業秘密と言う事で」

ふむ、此処は女子寮だし、女の方が違和感は無いか？
まあ元々の容姿が女性の物だ。
それでもいいが、ある意味で問題があるからな……。
俺は床に落ちた、シーツを今一度頭から纏って今度はルーデシアへと変わった。

「こんな感じよ。　こんな風に別の姿にもなれるわ」

どう？と別の姿になって見る。

「しっかし、なんや……ひなたばーさんからの紹介で、ケータロよりも先に男がこの寮に来るっちゅうのはビックリしたけど、まさか女になれるなんて思ってもみなかったわ」

驚きを顕わにするキツネ。

「師匠は人間なのですか？」

間髪置かず、素子が俺に質問をする。

「身体は人間とは言い難いけれど、でも心は完璧に人間だと思うわよ？　なんなら耳と尻尾も生やしましょうか？」

冗談交じりに俺は言う。

「見たい！！」

するとその提案にカオラが飛び付く。

なので、俺は白い虎耳と虎尻尾を生やしてみた。

人間の耳が引っ込み、灰銀の髪の間から白い獣耳がにゅっと生え、尾てい骨が伸びるような感覚と共に、尻尾がギュウギュウと窮屈そうに生えて来た。

ジーパンが少し下がって耳と同じく白い毛の尻尾が垂れさがる。

「獣人……白虎、でしょうか？」

「ええ、そうよ。　他にも角とか羽も生やせるわよ？」

「見せて見せてー！」

カオラがキラキラとした目で強請ったのが、孤児院の子供達と重なったので、竜角や悪魔羽を生やしたら大好評だった。

孤児院の子供達は元気だろうか？

「むぅ……」

そんな俺を見て、キツネは顎に手をやりながら俺のある部分を注視する。

そう、俺の……というか、ルーデシアの胸を。

異性は言うまでも無く、同性でも見惚れるほどに自己主張しているし、サラシもアレコレと変身している内に緩んでいた。

なので、ある程度の大きさくらいに見えたのだろう。

数秒後、キツネはニヤリと笑って俺の背後へと回り、Tシャツの下から両腕を差し込んでがっちりと胸を鷲掴みしてきた。

「ひ?!　ちょっと待ちなさい。　今触られたら!?」

そこでサラシがTシャツの隙間からパサリと解けて落ちた。
ある程度の大きさに抑えられていたルーデシアの胸が、圧巻のサイズへと変貌した。
キツネは今日何度目かの驚きを覚えつつ、その胸を揉んできた。

「〜〜〜〜!!」

初めて女性と成れる事を知ってから、興味本位で触った事はある。
男の時に蓮華に胸板を触られた事もある。
孤児院のヤンチャ共にふざけてタッチとかもされた事もある。
だが、こうしてじっくり、ねちっこく揉まれた事がなかった。

「なんちゅーか……ドンデモな胸やなぁ……」

しみじみと言いながらも、やはり揉む手を休ませずに言うキツネ。

「〜〜〜〜……いきなり何するのよ?　胸の大きさは別にどうでもいいでしょう?」

上気した顔になっている事を自覚しつつ、俺はキツネを押し止めるもその手の動きを留める程度しか動けなかった。
言いたくはないが、少し敏感になってしまったからだろう。

「何してるのよキツネ!?　って、アレ?　お客さん?」

何時の間にやら成瀬川が帰って来たようで、見慣れない姿の俺に視線を向ける。

そこでつい、抑え込んでいたキツネの手を放してしまったところで、更に俺の胸をいよいよ本気で、危ない方面の意味で揉み始めた。

そこで思わず声が出そうになったところで、力の抜けた両手でキツネを突き飛ばした。

「いやぁ……女同士ならこういう事しても許されるかなぁ～と。というかノーブラやけど、ブラ持ってないんか朱(あか)？」

「へ？　ノーブラ？　朱って、朱然さん？　どういう事よキツネ？」

成瀬川はさっきまで事情を一切知らなかった為に困惑していたので、俺は何となく事情説明を始めた。

「私は元々男だったんだけど、紆余曲折の末に女にもなれるようになってしまったの。

妖怪変化とか、変装の類だとでも思ってくれればいいわ。

こんな所に住んでる男としては、女性用の下着を持っている時点で濡れ衣を着せられそうだったから持っていないし、そんな物は身につける訳にもいかないでしょう？

今までどうしても女性の姿にならなくてはならない状況の時は、スパッツとサラシで我慢していたわ」

当然という風に言ってみた。

「ブ？！　ホントに朱然さん？！　しかも女になってて下着無しってどういう状況よコレ！？」

成瀬川は一応、常識的一般人なので頭を押さえて目を回し始めた。

「女としてどうなんやそれ？　しかもノーパンノーブラってどこのマニアックな店や……」

「ですね……この寮には浦島が居ますし……女の姿の時に突撃してきそうですよね」

「「下着を買いに行きましょう！！」」

そうこうしている内に、変身という常識外のショックでいつの間にか倒れたしのぶの介抱をカオラに任せて、瀬田と景太郎はキツネさんと素子がする事になり、成瀬川と女性用下着を買うという奇妙な構図になってしまった。

「朱然さん……なんですよね？」

「間違いなく、ね。　なんなら後で他の姿にもなって見せましょうか？」

電車に揺られながら、俺は成瀬川と話をする。

ルーデシアの性格をそのままにしたように、今の俺はお嬢様然とした口調だ。

「何でそんな……って、訊かない方が良いですか？」

「いいえ、訊きたいんなら色々と教えるわよ。　言えない事もある

けれど」

「……じゃあ、性別が変わるってどんな気分？」

家族とか、そういう身体になった経緯とか、そういうのを避けて来たか……まあ、成瀬川は空気は読めるから妥当な質問なんだろうな。

そう思いつつ、質問に答えるべく口を開いた。

「基本的にはあまり変わらないとわね。　口調は意図して変えてる訳じゃないし。

身体が変化しても、劇的に何かが違うって思うほどじゃないくらいよ。　男女の身体の明確な部位の違いとかは違うのは当然よ？

男女の意識というか、価値観的な物にちょっとした差異を感じるくらい。

女性になった時は男の視線が普通に気になるし、羞恥もあるわね」

「へぇ～」

興味を持っているが、その程度というような当たり障りのない感想。

そんな視線を向ける成瀬川に、少し好感を持った。

そうこうしている内に目的の駅へと着いた俺と成瀬川は駅を降りる。

そこから徒歩１５分くらいのアーケード街の角に大きく場所をとっている店。

男の俺としては、というよりは男という生き物が躊躇い無く入るには中々に勇気のいる場所。

ランジェリー専門店。

その前でつい固まってしまった。

「ホントに入らないとダメ？」

「はいはい、今は女なんでしょ？　だったらさっさと入る！」

そう言って成瀬川に引っ張られ、店内へと押し込まれた。

「いらっしゃいませ」

マニュアル通りの笑顔と挨拶と共に丁度、手の空いていた店員が来た。

「どのような物をお求めですか？」

マニュアルを忠実に守りながら、次の質問を受けた俺はどうすればいいのか困惑していると、クイクイと袖を軽く引っ張られる感触。

「何？」

「そう言えば訊いてなかったけど、予算は？」

「……まあ、２、３０万くらいで良いかしらね？」

完全なる世界に繋がりを持っていた組織の金を拝借していた為に、俺の個人的な資産からすれば何気に雀の涙ほどの金額なのだが。

「２、３０ま……ッ！？　……まあ良いわ」

俺の掲示した額があまりにも常識より多かった為に、成瀬川はこめかみを押さえながら、店員の方へと成瀬川が言う。

「この娘の下着が全部ダメになっちゃったんで、ついでにサイズも測ってからそれなりに気に入ったのをお願いします」

「はい、では試着室の方でまずサイズを測りますね？」

そう言って店員の後を着いて行った成瀬川の後を追う。

戦争の戦闘で先陣を切っていたのがまるで嘘のように、それこそ借りてきた猫のように、俺は先に進む事を躊躇いながら進んだ。

何所かのデパートにある1人が入るには狭い試着室とは違って、3人入っても十分なスペースがある大きな試着室だな、という感想を抱きつつ、そのままその試着室に入り、店員に言われるがままに服やらサラシを脱いで、生まれて初めてスリーサイズとやらを測られた。

胸のサイズを測られるのは何となく知っていたが、下の方もサイズがあり、測る事を俺はこの日、初めて知った。

今まで興味が無かったと言えば嘘にはなるが、女の子の身体は男と違って凹凸が出る。

なので、きちんと計って正しい物を付けなくてはならないと説明された。

「本当に女なのね……」

計測を終えた定員は、取って来る物があるとかで試着室から出ていった。

そのままで待っていてくれと言われた俺は、そのまま待っていたのだが、俺の裸体をマジマジと見ながら成瀬川は呟かれた。

少し泣きたくなった。

「って測ってもらったけど、ある程度の成長度合いは操れるからサ

イズを測った意味がないじゃない……」

今気付いたとばかりに、久しぶりにｏｒｚとなった。

「あー、そうだったんだ……まあ、今回は良い経験になったって事で……」

「そうね……そう思っておくわ……」

何とも言えない沈黙が漂った後、店員が何かを持って試着室に入った。

これは……紙？

そんな俺の疑問を余所に、店員はその紙を俺に手渡して言った。

「これを着て下さい」

「こ、これを？」

手渡されたそれを広げてみた。

今、俺の顔は見事に引き攣っている事だろう。

「はい」

戸惑う俺に、満面の笑みを浮かべたままの店員が肯定をする。

また一つ、俺の知らない知識を手に入れた。

手渡されたソレは、紙でできた下着だったのだ。

衛生面を考慮して下着の試着時に、下に紙でできたそれを穿くのだという。

もっとも後で知ったが、下着は主に上だけを着る物だったらしい。
俺の知識不足と、店員の悪ふざけが原因だ。
だが、その時の俺は、それはもう内心かなり緊張しっぱなしだった。
こんな風に。

今の俺は女今の俺は女今の俺は女

は厳しい。
しかも穿いているのは俺自身と言うのがもう……蓮華ゴメン……
とうとう俺、変態さんの仲間入りになっちゃったよ……。
そんな感じで俺は、男としてのアレとか、コレとか、色々な何かをそれはもう物凄い勢いで振り切り、一回転して錯乱一歩手前といった体(てい)になり、今は亡き妻に心中で謝った。

この日の出費は下着だけで１０万を越えた。
途中でマニュアル通りだった店員が、あまりの俺の初心さを見せた俺に暴走し、あれやこれやという間に弄ばれ、気付けば色とりどりの布の山が築かれ、成瀬川がその中から似合いそうなのを適当に見繕った結果だそうだ。
少ないよりは多い方が困らないし、との事で俺は地味で動きやすそうなスポーツタイプを中心に選び、成瀬川は自分が着る物ではないので、片っ端から似合いそうな物をチョイスした。
中には、普通じゃ着ないような……それこそ、シースルーやカットが大胆過ぎる物、紐?!や用途などがエロ方面なデザイン下着もあったが、絶対に着る事は無いだろうとそういう方面の下着は封印した。
こうして俺は女性の下着を、脱がすという用途以外に、下着の正しい着け方の仕方を知った。
女性の苦労を身どころか、骨身に染みて知ったそんな一日だった。

第　ＥＸ・８章　初めてのお買い物・ラブひな編（後書き）

今回の話はネギま編の大戦と本編の間……ラブひな＆パルフェ編の一部とでも思って頂ければ良い話です。
今回はラブひな日常編の一部ですけど（笑）

初めて女性用下着購入＆着用の葛藤を味わう主人公。
そう言えば、何時の間にやら女性姿に違和感が無いけど、いきなり女性に成れる事を受け入れられる程のメンタルを朱然さんが持っているか……？うん、ないなｗ
という訳で書いてみた話です。
これまではレディースの服などは許容していましたが、今までは女性用の下着類は一切着てなかったという変態ぶり。
もう……いろいろダメかも知れんな……朱然さん。
あとＶｉｅｒもか……。
ではまた次回にノシ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5117k/

憑依とか転生とか召喚されるお話

2011年12月13日01時46分発行